

池
内
遺
跡

(第2分冊)

二〇一〇年三月

財団法人
大阪府文化財センター

松原市

池 内 遺 跡

都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(第2分冊)

2010年 3 月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第198集

松原市

池 内 遺 跡

都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(第2分冊)

財団法人 大阪府文化財センター

本文目次

第2分冊

(05-2・08-1・09-1の調査・自然科学分析・総括・三宅西遺跡08-1・09-1の調査)

第V章 05-2 調査の成果（森屋・平田・永田・新海）

第1節 1・2区の成果	1
1. 基本層序 2. 第1面 3. 第2面 4. 第4面 5. 第5面 6. 第9面	
7. 第9面以下 8. 小結	
第2節 3区の成果	13
1. 基本層序 2. 第1面 3. 第2面 4. 第4面 5. 第6面 6. 第10面	
第3節 4区の成果	45
1. 基本層序 2. 第1面 3. 第2面 4. 第4面 5. 第6面 6. 第8面	
7. 第9面	
第4節 5区の成果	83
1. 基本層序 2. 第2面 3. 第3面 4. 第4面 5. 第5面 6. 第7面	
7. 第8面 8. 第9面 9. 第11面 10. 小結	
第5節 05-2 調査区出土 石製品	234
1. 第2面遺構出土石器 2. 第3c・3d層・第3～4層出土石器 3. 第3面遺構出土石器	
4. 第4a層出土石器 5. 第4面遺構出土石器 6. 第4b層出土石器	
7. 第4c層出土石器 8. 第5面遺構・第5層以下・側溝出土石器	
石器観察表	267

第VI章 08-1 調査の成果（正岡）

第1節 1区の成果	274
1. 基本層序 2. 第1面 3. 第2面 4. 第3面 5. 第4面	
第2節 2区の成果	289
1. 基本層序 2. 第1面 3. 第2・3面 4. 第4面	
第3節 3区の成果	335
1. 基本層序 2. 第1面 3. 第2面 4. 第3面	
第4節 小結	343

第VII章 自然科学的分析（趙・小倉・渡辺・正岡・パリノ・サーヴェイ株式会社）

第1節 分析の目的と概要	344
第2節 大和川下流域における遺跡形成過程の総合調査	345
第3節 池内遺跡（その2）発掘調査に伴う花粉・珪藻・植物珪酸体分析	387

第Ⅷ章 総括（正岡）

第1節 遺跡の構造変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 402

付編 三宅西遺跡 08-1・09-1 調査の成果（正岡）

第1節 調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 411

第2節 三宅西 08－1 調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 411

1. 基本層序 2. 第1面 3. 第2面 4. 第3面

第3節 池内・三宅西 09－1 調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 428

1. 基本層序 2. 第1面 3. 第2面 4. 第3面

第4節 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 436

報告書抄録

插图目次

- 図222 2区 南壁 断面図
図223 1・2区 第1面 平面図
図224 1区 第1面 3442・2856井戸
平・断面図
図225 1区 第1面 2856井戸 出土遺物
図226 1・2区 第2面 平面図
図227 第4a層 出土遺物
図228 1・2区 第4面 平面図
図229 1区 第4面 各遺構断面図
図230 1区 第4面 2876・3529土坑
出土遺物
図231 1区 第6面 平面図 2872流路
断面図
図232 1区 第9面 平面図
図233 3区 南壁 断面図
図234 3区 第1面 平面図
図235 3区 第3d層 第1・2面 出土遺物
図236 3区 第2面 平面図
図237 3区 第4a層 出土遺物
図238 3区 第4面 平面図
図239 3-2区 第4面 平面図
図240 3-2区 第4面 3516溝 平・断面図
出土遺物
図241 3-1区 第4面 平面図
図242 3-2区 第4面 平面図
図243 3-2区 第4面 3504・3505溝
断面図
図244 3-2区 第4面 3504溝 出土遺物(1)
図245 3-2区 第4面 3504溝 出土遺物(2)
図246 3-2区 第4面 3505溝 出土遺物
図247 3-2区 第4面 掘立柱建物33
平・断面図
図248 3-2区 第4面 平地建物1
柱列1・2 平・断面図
図249 3区 第4面 2659・2660・3597・
3676溝 断面図
図250 3-2区 第4面 3553溝・3569溝
平・断面図 出土遺物
図251 3-1区 第4面 2673・2675井戸
平・断面図 2675井戸 出土遺物
図252 3-1区 第4面 2669・2674土坑
平・断面図 2674土坑 出土遺物
図253 3-2区 3474・3554・3555土坑
平・断面図 3554・3555土坑
出土遺物
図254 3-2区 第4面 3665・3590・3598・
3614土坑 平・断面図 3598土坑
出土遺物
図255 3-2区 第4面 3599・3603土坑
平・断面図 3599・3603・3631土坑
出土遺物
図256 3-2区 第4面 各土坑 平・断面図
図257 3-2区 第4面 各土坑 出土遺物
図258 3-2区 第4面 3835土坑
平・断面図 出土遺物
図259 3-2区 第4面 各ピット 平・断面図
3632・3649ピット 出土遺物
第4面 出土遺物
図260 3区 第6面 平面図
図261 3-1区 第9面 2800～2802流路
断面図
図262 3区 第10面 平面図
図263 3区 第10面 出土遺物
図264 4区 南壁・東壁 断面図
図265 4区 第1面 平面図
図266 4区 第3d層 出土遺物
図267 4区 第2面 平面図
図268 第4a層 出土遺物
図269 4区 第4面 平面図

- 図270 4-1区 第4面 平面図
 図271 4-2区 第4面 平面図
 図272 4-1区 第4面 掘立柱建物34
 図273 4-1区 第4面 2416・2420溝
 断面図 出土遺物
 図274 4-1区 第4面 各溝 断面図
 2599溝 出土遺物
 図275 4-1区 第4面 2460・2486溝
 断面図 2486溝 出土遺物
 図276 4-1区 第4面 2460溝出土遺物
 図277 4-2区 第4面 各溝 断面図
 出土遺物
 図278 4-2区 第4面 各溝 断面図
 出土遺物
 図279 4-1区 第4面 2444井戸
 平・断面図 出土遺物
 図280 4-1区 第4面 各土坑
 平・断面図(1)
 図281 4-1区 第4面 各土坑
 平・断面図(2)
 図282 4-1区 第4面 各土坑 出土遺物(1)
 図283 4-1区 第4面 各土坑
 平・断面図(3)
 図284 4-1区 第4面 各土坑
 平・断面図(4)
 図285 4-1区 第4面 2528土坑 出土遺物
 図286 4-1区 第4面 各土坑 出土遺物(2)
 図287 4-1区 第4面 各土坑
 平・断面図(5) 2547土坑 出土遺物
 図288 4-2区 第4面 1469・1491・
 1559土坑 平・断面図
 図289 4-2区 第4面 1469・1491・
 1559土坑 出土遺物
 図290 4-2区 第4面 1577土坑
 平・断面図 出土遺物
 図291 4-2区 第4面 1708・1717土坑
 平・断面図
 図292 4-2区 第4面 1717土坑
 出土遺物(1)
 図293 4-2区 第4面 1708・1717土坑
 出土遺物(2)
 図294 4-2区 第4面 各土坑 平・断面図
 図295 4-2区 第4面 1455土坑 出土遺物
 図296 4-2区 第4面 各土坑 出土遺物
 図297 4区 第4面 2541・1560・
 1518ピット 平・断面図 出土遺物
 図298 4-2区 第6面 平面図
 図299 4-2区 第8面 平面図(上) 第9面
 平面図(下)
 図300 5区 南壁 断面図
 図301 5区 第3層 出土遺物
 図302 5区 第2面 平面図
 図303 5-3区 第2面 608溝 断面図 各溝
 出土遺物
 図304 5区 第4a層 出土遺物(1)
 図305 5区 第4a層 出土遺物(2)
 図306 5区 第3面 平面図
 図307 5-3・4区 西半部 第3面 平面図
 図308 5-3・4区 東半部 第3面 平面図
 図309 5-1区 第3面 平面図
 図310 5-2区 第3面 平面図
 図311 5区 第3面 掘立柱建物 平面図
 図312 5-4区 第3面 掘立縦柱建物35
 平・断面図 出土遺物
 図313 5-4区 第3面 掘立柱建物36
 平・断面図
 図314 5-4区 第3面 掘立柱建物37
 平・断面図
 図315 5-3区 第3面 掘立柱建物38・39
 平・断面図
 図316 5-3区 第3面 掘立柱建物38・39
 出土遺物
 図317 5-3区 第3面 掘立柱建物40
 平・断面図

- 図318 5-3区 第3面 掘立柱建物41
平・断面図 出土遺物
- 図319 5-3区 第3面 掘立柱建物42
平・断面図 出土遺物
- 図320 5-3区 第3面 掘立柱建物43
平・断面図
- 図321 5-3・4区 第3面 掘立柱建物44
平・断面図
- 図322 5-4区 第3面 掘立柱建物45
平・断面図(1)
- 図323 5-4区 第3面 掘立柱建物45
平・断面図(2)
- 図324 5-4区 第3面 掘立柱建物46
平・断面図(1)
- 図325 5-4区 第3面 掘立柱建物46
平・断面図(2)
- 図326 5-4区 第3面 掘立柱建物45~47
出土遺物
- 図327 5-4区 第3面 掘立柱建物47
平・断面図
- 図328 5-4区 第3面 掘立柱建物47
出土遺物
- 図329 5-4区 第3面 掘立柱建物48
平・断面図
- 図330 5-4区 第3面 掘立柱建物49
平・断面図 出土遺物
- 図331 5-4区 第3面 掘立柱建物50
平・断面図 出土遺物
- 図332 5-4区 第3面 掘立柱建物51・52
平・断面図(1)
- 図333 5-4区 第3面 掘立柱建物51・52
平・断面図(2)
- 図334 5-4区 第3面 掘立柱建物51・52
出土遺物
- 図335 5-4区 第3面 掘立柱建物53
平・断面図 出土遺物
- 図336 5-1区 第3面 掘立柱建物54
平・断面図
- 図337 5-1区 第3面 掘立柱建物55
平・断面図 出土遺物
- 図338 5-1区 第3面 掘立柱建物56
平・断面図
- 図339 5-1区 第3面 掘立柱建物57
平・断面図
- 図340 5-1区 第3面 掘立柱建物58
平・断面図 2889柱穴 出土遺物
- 図341 5-1・2区 第3面 掘立柱建物59
平・断面図 出土遺物
- 図342 5-2区 第3面 掘立柱建物60
平・断面図 出土遺物
- 図343 5-2区 第3面 掘立柱建物61
平・断面図(1)
- 図344 5-2区 第3面 掘立柱建物61
断面図(2) 出土遺物
- 図345 5-2区 第3面 掘立柱建物62
平・断面図
- 図346 5-2区 第3面 掘立柱建物62
出土遺物
- 図347 5-2区 第3面 掘立柱建物63
平・断面図 出土遺物
- 図348 5-2区 第3面 掘立柱建物64
平・断面図
- 図349 5-2区 第3面 掘立柱建物64
出土遺物
- 図350 5-2区 第3面 掘立柱建物65
平・断面図
- 図351 5-2区 第3面 掘立柱建物65
出土遺物
- 図352 5-2区 第3面 掘立柱建物66
平・断面図
- 図353 5-2区 第3面 掘立柱建物66
出土遺物
- 図354 5-4区 第3面 柱列3・4 平・断面図
- 図355 5-4区 第3面 柱列3・4 出土遺物
- 図356 5-2・4区 第3面 柱列5・6
平・断面図 出土遺物

- 図357 5-2・4区 第3面 柱列7~9
平・断面図
- 図358 5-2区 第3面 柱列8・9 出土遺物
- 図359 5-3・4区 第3面 117溝 断面図
- 図360 5-3・4区 第3面 117溝 上層
出土遺物(1)
- 図361 5-3・4区 第3面 117溝 上層
出土遺物(2)
- 図362 5-3・4区 第3面 117溝 上層
出土遺物(3)
- 図363 5-3・4区 第3面 117溝 上層
出土遺物(4)
- 図364 5-3・4区 第3面 117溝 上層
出土遺物(5)
- 図365 5-3・4区 第3面 117溝 中層
出土遺物(6)
- 図366 5-3・4区 第3面 117溝 中層
出土遺物(7)
- 図367 5-3・4区 第3面 117溝
出土遺物(8)
- 図368 5-3・4区 第3面 117溝
出土遺物(9)
- 図369 5-3・4区 第3面 各溝 断面図
- 図370 5-3・4区 第3面 各溝 出土遺物
- 図371 5-2区 第3面 1020溝 断面図
出土遺物
- 図372 5-1・2区 第3面 各溝 出土遺物
- 図373 5-1・2区 第3面 2819溝・
2829溝・736溝 断面図
- 図374 5-1・2区 第3面 各溝 出土遺物
- 図375 5-1・2区 第3面 各溝 断面図
出土遺物
- 図376 5-4区 第3面 242井戸 平・断面図
2126・242・561井戸 出土遺物
- 図377 5-4区 第3面 1218井戸
平・断面図
- 図378 5-4区 第3面 1218井戸 出土遺物
- 図379 5-2区 第3面 726井戸 平・断面図
- 図380 5-2区 第3面 726井戸 出土遺物
- 図381 5-2区 第3面 805井戸 平・断面図
- 図382 5-2区 第3面 805井戸 出土遺物
- 図383 5-1区 第3面 3834井戸 断面図
出土遺物
- 図384 5-3区 第3面 2129・2208土坑
平・断面図 出土遺物
- 図385 5-6区 第3面 501・506土坑
平・断面図 405・502・506土坑
出土遺物
- 図386 5-4区 第3面 421・448・449土坑
平・断面図
- 図387 5-3区 第3面 各土坑 平・断面図
- 図388 5-3区 第3面 各土坑 出土遺物
- 図389 5-4区 第3面 各土坑 平・断面図
171土坑 出土遺物
- 図390 5-4区 第3面 49土坑 平・断面図
- 図391 5-1区 第3面 各土坑 平・断面図
2866土坑 出土遺物
- 図392 5-2区 第3面 各土坑 平・断面図
出土遺物
- 図393 5-2区 第3面 687・899・900土坑
平・断面図
- 図394 5-2区 第3面 899・900土坑
出土遺物
- 図395 5-2区 第3面 1015土坑
平・断面図 出土遺物
- 図396 5-2区 第3面 各土坑 出土遺物
- 図397 5-2区 第3面 1092・1094・1095・
1097土坑 平・断面図 出土遺物
- 図398 5区 第3面 各ピット 平・断面図
- 図399 5-1・3・4区 第3面 各ピット
出土遺物
- 図400 5-2区 第3面 各ピット
出土遺物(1)
- 図401 5-2区 第3面 各ピット
出土遺物(2)

- 図402 5-4区 第3面 2047落込み
出土遺物
- 図403 5-2区西端部 第3面 平面図
1747・1748溝 断面図
- 図404 5-2区 第3面 1747・1748・1230溝
出土遺物
- 図405 5区 第4b層 出土遺物(1)
- 図406 5区 第4b層 出土遺物(2)
- 図407 5区 第4面 平面図
- 図408 5-2区 第4面 掘立柱建物67
柱列10・11 平・断面図
- 図409 5-1区 第4面 方形周溝墓1
平・断面図
- 図410 5-1区 第4面 方形周溝墓1
出土遺物
- 図411 5-1・2区 第4面 1765・1766溝
断面図
- 図412 5-1・2区 第4面 1765溝
出土遺物(1)
- 図413 5-1・2区 第4面 1765溝
出土遺物(2)
- 図414 5-1・2区 第4面 1766溝 出土遺物
- 図415 5-1区 第4面 3147・3149溝
断面図 3147溝 出土遺物
- 図416 5-2区 第4面 3151溝 断面図
出土遺物
- 図417 5区 第4面 各溝 断面図 出土遺物
- 図418 5-3区 第4面 3180・3247溝
断面図 3180溝 出土遺物
- 図419 5-1区 第4面 3224井戸
平・断面図
- 図420 5-1区 第4面 3224井戸 出土遺物
- 図421 5-3区 第4面 3257土坑
平・断面図
- 図422 5-4区 第4面 2120・2121・
2128土坑 平・断面図
2128土坑 出土遺物
- 図423 5-1区 第4面 3201・3202土坑
平・断面図
- 図424 5-1区 第4面 3202土坑 出土遺物
- 図425 5-2区 第4面 2023土坑
平・断面図 出土遺物
- 図426 5区 第5層 出土遺物
- 図427 5区 第5面 平面図
- 図428 5-3・4区 第5面 水田面
- 図429 5-4区 第5面 大畦畔 断面図
- 図430 5-1・2区 第5面 2035流路 断面図
堰 平面図
- 図431 5-1・2区 第5面 2035流路
出土遺物(1)
- 図432 5-1・2区 第5面 2035流路
出土遺物(2)
- 図433 5-1・2区 第5面 2035流路
出土遺物(3)
- 図434 5-1・2区 第5面 2035流路
出土遺物(4)
- 図435 5-1・2区 第5面 各溝 断面図
- 図436 5-1・3区 第5面 3374・3379溝
出土遺物
- 図437 5-1区 第5面 3377土坑
平・断面図
- 図438 5-1区 第5面 3448土坑
平・断面図
- 図439 5-1区 第5面 3448土坑 出土遺物
- 図440 5-1・2区 第5面 3449土坑
平・断面図
- 図441 5-1・2区 第5面 3449土坑
出土遺物
- 図442 5-2区 第5面 2050土坑
平・断面図 出土遺物
- 図443 5区 第5面 上面 出土遺物
- 図444 5-3区 第7面 平面図
- 図445 5-2・3区 第8面 平面図
- 図446 5-2区 第8面 2414・2415流路
断面図

- 図447 5-3・4区 第9面 平面図
 図448 5-3・4区 第9面 風倒木痕 断面図
 図449 5区 第11面 平面図
 図450 5区 第11面 流路 断面図
 図451 第2面 各遺構 出土遺物
 図452 第3層・第3c層・第3d層 出土遺物
 図453 第3~4層 出土遺物
 図454 第3面 各遺構 出土遺物(1)
 図455 第3面 各遺構 出土遺物(2)
 図456 第4a層 出土遺物(1)
 図457 第4a層 出土遺物(2)
 図458 第4面 各遺構 出土遺物(1)
 図459 第4面 各遺構 出土遺物(2)
 図460 第4面 各遺構 出土遺物(3)
 図461 第4面 各遺構 出土遺物(4)
 図462 第4面 各遺構 出土遺物(5)
 図463 第4面 各遺構 出土遺物(6)
 図464 第4面 各遺構 出土遺物(7)
 図465 第4面 各遺構 出土遺物(8)
 図466 第4面 各遺構 出土遺物(9)
 図467 第4面 各遺構 出土遺物(10)
 図468 第4面 各遺構 出土遺物(11)
 図469 第4面 各遺構 出土遺物(12)
 図470 第4面 各遺構 出土遺物(13)
 図471 第4面 各遺構 出土遺物(14)
 図472 第4面 各遺構 出土遺物(15)
 図473 第4b層 出土遺物
 図474 第4c層 出土遺物(1)
 図475 第4c層 出土遺物(2)
 図476 第5面・第5~12層 側溝 出土遺物
 図477 1区 南壁面 断面図
 図478 1区 東壁面 断面図
 図479 1区 第1面 平面図
 図480 1区 第2面 平面図
 図481 1区 第2面 各遺構 平・断面図
 図482 1区 第3面 平面図
 図483 1区 第3面 各遺構 平・断面図
 図484 1区 第4面 平面図
 図485 1区 第4面 63周溝
 遺物検出状況図
 図486 1区 第4面 63周溝 出土遺物
 図487 1区 第4b層下面 各遺構
 断面図(1)
 図488 1区 第4b層下面 各遺構
 断面図(2)
 図489 1区 第3・4a層 出土遺物
 図490 2区 東半南壁 断面図
 図491 2区 西半南壁 断面図
 図492 2区 中央部南北 断面図
 図493 2区 第1面 平面図
 図494 2区 第1面 各遺構 出土遺物
 図495 2区 第2面 平面図
 図496 2区 第3面 平面図
 図497 2区 第2面 区画溝 断面図
 図498 2区 第2面 区画溝 出土遺物
 図499 2区 第2面 165溝 出土遺物(1)
 図500 2区 第2面 165溝 出土遺物(2)
 図501 2区 第2面 掘立柱建物68
 平・断面図
 図502 2区 第2面 掘立柱建物69
 平・断面図
 図503 2区 第2面 掘立柱建物70
 平・断面図
 図504 2区 第2面 掘立柱建物68・70
 出土遺物
 図505 2区 第2面 掘立柱建物71
 平・断面図
 図506 2区 第2面 掘立柱建物72
 平・断面図
 図507 2区 第2面 330土坑墓 平・断面図
 図508 2区 第2・3面 各遺構 断面図(1)
 図509 2区 第2・3面 各遺構
 出土遺物(1)
 図510 2区 第2・3面 各遺構 断面図(2)
 図511 2区 第2・3面 各遺構
 出土遺物(2)

- 図512 2区 第2面 169土坑 平・断面図
- 図513 2区 第2面 347土坑 平・断面図
- 図514 2区 第2面 169土坑 出土遺物(1)
- 図515 2区 第2面 169土坑 出土遺物(2)
- 図516 2区 第2面 169土坑 出土遺物(3)
- 図517 2区 第2面 347土坑 出土遺物
- 図518 2区 第3面 194土坑 平・断面図
- 図519 2区 第3面 194土坑 出土遺物
- 図520 2区 第2・3面 各遺構 断面図(3)
- 図521 2区 第2・3面 各遺構 断面図(4)
- 図522 2区 第2・3面 各遺構 断面図(5)
- 図523 2区 第2・3面 各遺構
出土遺物(3)
- 図524 2区 第2・3面 各遺構
出土遺物(4)
- 図525 2区 第3面 233・234溝 平面図
- 図526 2区 第3面 233・234溝
遺物検出状況平面図
- 図527 2区 第3面 233溝 出土遺物
- 図528 2区 第3面 234・250溝 出土遺物
- 図529 2区 第4面 平面図
- 図530 2区 第4面 362流路 出土遺物
- 図531 2区 第4面 各遺構 断面図
- 図532 2区 第4面 各遺構 出土遺物
- 図533 2区 第3～4a層 出土遺物
- 図534 2区 第4b～6層 出土遺物
- 図535 3区 北壁 断面図
- 図536 3区 第1面 平面図
- 図537 3区 第2面 平面図
- 図538 3区 第2面 10土坑 平・断面図
- 図539 3区 第2面 10土坑 出土遺物
- 図540 3区 第2面 各遺構 断面図
- 図541 3区 第2面 8土坑 出土遺物
- 図542 3区 第3面 平面図
- 図543 3区 各層 出土遺物
- 図544 瓜破台地西部の東西地質断面図
- 図545 調査区東西地質断面図
- 図546 池内遺跡(その1)3-1区・6-1区
試料採取 柱状図
- 図547 池内遺跡(その1) 8-1区
(IK(1)8-1) 試料柱状図
- 図548 池内遺跡(その2) 5-3区西
(IK(2)5-3W) 試料柱状図
- 図549 粒度分析の手順
- 図550 IK(1)3-1 礫砂泥の割合・粒度分布
の評価
- 図551 IK(1)3-1 粒度分布のヒスト
グラム・累計曲線
- 図552 IK(1) 6-1 礫砂泥の割合・粒度
分布の評価
- 図553 IK(1) 6-1 粒度分布のヒスト
グラム・累計曲線
- 図554 IK(1) 8-1 礫砂泥の割合・粒度
分布の評価 粒度分布のヒストグラム・
累計曲線
- 図555 IK(1) 5-3W 礫砂泥の割合・粒度
分布の評価
- 図556 IK(1) 5-3W 粒度分布の
ヒストグラム・累計曲線
- 図557 IK(1) 3-1 鉍物組成・火山ガラス
の形態・重組成鉍物・火山ガラスの
屈折率
- 図558 IK(1) 6-1 鉍物組成・火山ガラス
の形態・重鉍物組成・火山ガラスの
屈折率
- 図559 IK(1) 8-1 鉍物組成・火山ガラス
の形態・重鉍物組成・火山ガラスの
屈折率
- 図560 IK(2) 5-3W 鉍物組成・火山ガラ
スの形態・重鉍物組成・火山ガラスの
屈折率
- 図561 花粉分析処理フロー
- 図562 イネ科花粉の粒径比較図
- 図563 IK(1) 3-1 花粉ダイアグラム
- 図564 IK(2) 5-3W 花粉ダイアグラム

図565 大阪平野中央部の上部更新統～完新統における主要5火山灰層の標準的な岩石記載的性質	図582 3区 第1面 8溝 断面図
図566 主要珪藻化石群集の層位分布	図583 3区 第1面 8溝 遺物出土状況図
図567 花粉化石群集の層位分布	図584 3区 第1面 8溝 出土遺物(1)
図568 植物珪酸体含量の層位的変化	図585 3区 第1面 8溝 出土遺物(2)
図569 縄文時代～弥生時代前期の池内遺跡	図586 3区 第1面 各遺構 断面図(1)
図570 平安時代前期の池内遺跡	図587 3区 第1面 各遺構 断面図(2)
図571 中～近世の池内遺跡	図588 3区 第2面 平面図
図572 平安時代屋敷地の構成	図589 3区 第2面 各遺構 断面図
図573 屋敷地内特殊遺物の分布	図590 3区 第3面 平面図
図574 近隣検出弥生前期環濠集落との規模比較	図591 3区 第3面 46流路 断面図
図575 三宅西遺跡08-1 遺物取り上げ区画	図592 3区 第3面 46流路 出土遺物
図576 池内遺跡09-1・三宅西遺跡09-1 遺物取り上げ区画	図593 3区 第3面 各層 出土遺物
図577 西壁 断面図	図594 西壁 断面図
図578 南壁 断面図	図595 第1面 平面図
図579 第1面 平面図	図596 第1面 各遺構 断面図
図580 第1面 1溝 断面図	図597 第2面 平面図
図581 3区 第1面 1溝 出土遺物	図598 第2面 各遺構 断面図
	図599 第3面 平面図
	図600 第3面 39流路 断面図
	図601 各層・遺構 出土遺物

表 目 次

表1 石器観察表(1)	表9 池内遺跡05-1-3-1区 花粉化石組成表
表2 石器観察表(2)	表10 池内遺跡05-2-5-3区 花粉化石組成表
表3 石器観察表(3)	表11 分析試料表
表4 石器観察表(4)	表12 珪藻化石の生態性区分と環境指標種群
表5 石器観察表(5)	表13 各調査区遺構面対応表
表6 石器観察表(6)	表14 平安時代掘立柱建物一覧表
表7 石器観察表(7)	
表8 池内遺跡の火砕物組成	

写 真 目 次

写真1 碎屑物・火山碎屑物の実体顕微鏡写真・ 偏光顕微鏡写真	写真4 珪藻化石
写真2 火山碎屑物の偏光顕微鏡写真	写真5 花粉化石
写真3 花粉の生物顕微鏡写真	写真6 植物珪酸体

第IV章 05－2 調査区の調査の成果

第1節 1・2 区の成果

1. 基本層序

1・2区は、池内遺跡の05－2調査区の西端に位置する。このうち1区は西の1－1区、東の1－2区に二分して調査を行った。2区は、1－1区の南側に位置する。

2区の南壁断面(図222)で観ると、最上部に盛土が約0.8m堆積していた。

第1層 現代耕土層である。層厚は、約0.1～0.2m測る。

第2層 耕作土層である。層厚は、約0.2mを測る。包含遺物に、近世陶磁器があることから、近世に形成された地層と考えられる。

第3層 さらに、a～d層に細分できる。第3a・b層は、灰色シルトやオリーブ灰色シルトからなり、約0.4mを測る。約0.4mの水成層である3c層を挟んで、褐灰色の細砂混シルトの第3d層が約0.1～0.2m堆積している。12～15世紀代の土器などを含むことから、中世に属すると思われる。

この3d層上面が第1面となり、水田や流路を検出している。

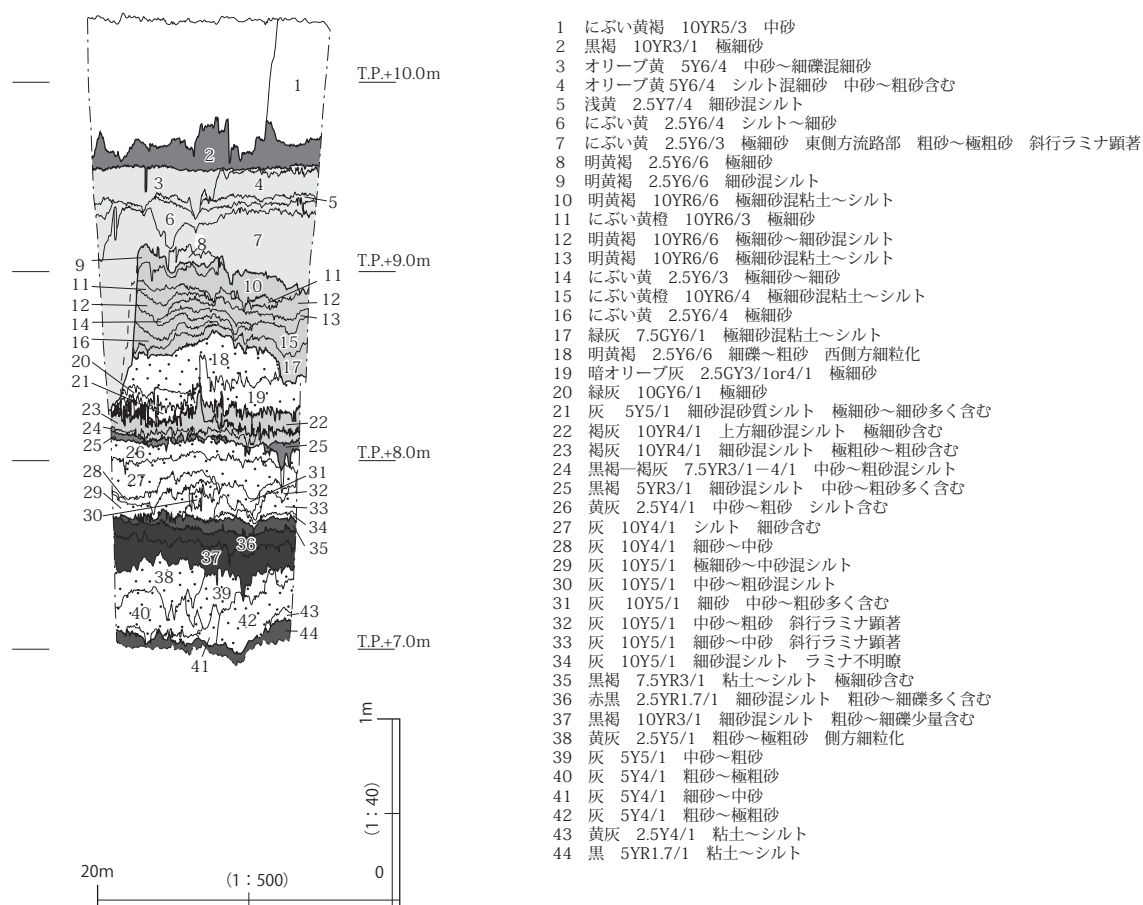


図222 2区 南壁 断面図

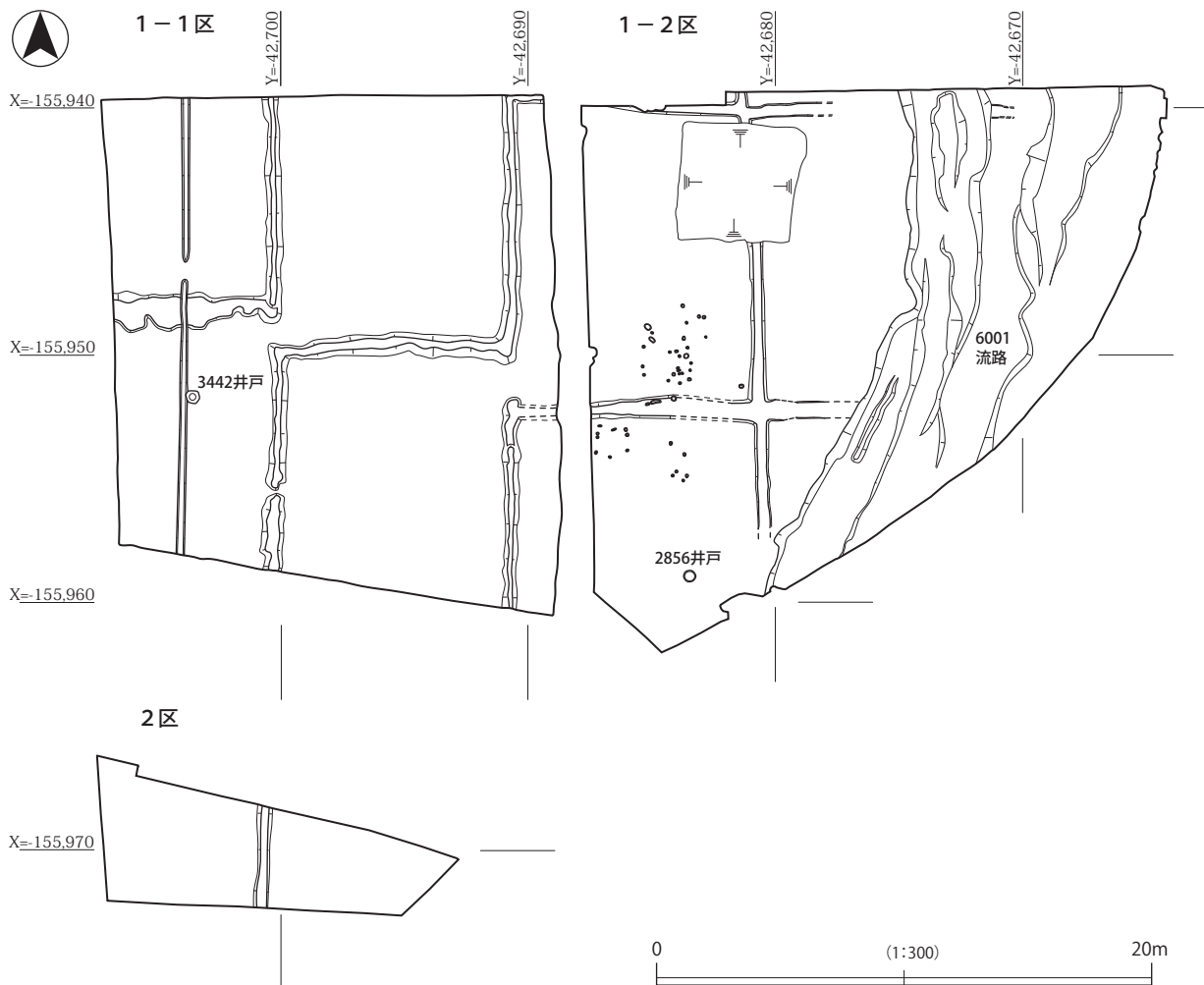


図223 1・2区 第1面 平面図

第4 a層 黄灰色や明褐色のシルトを約 0.02～0.1 m測り、東半部では、特に数cmと薄くなる。この層からは、9～11世紀代の古代の遺物が出土している。

第3 d層下面および、この第4 a層の上面が第2面となり、南北方向の小溝群が検出されている。

第5層 灰色および黄灰色の細砂～シルト混中砂などからなり、約 0.4 mを測る。

第4 a層下面および第5層上面が第4面となり、流路や溝などの遺構が検出され、古墳時代前期～古代の遺物が出土している。

なお、この遺構面では、中世の井戸が同時に検出されている。

7層 黒褐色のシルトが、西半部では約 0.1 m、東半部では約 0.05 cmを測り、東端部では堆積していない。遺物は、出土していない。

この第7層上面が第5面になり、流路を検出している。

9層 黒褐色の中砂混シルトを約 0.2m～0.4 m測る。両端部に行くほど層厚が増す。この層の下面で第8面が検出され、倒木痕を検出している。

10層 赤灰色および灰色の細砂混シルトが約0.2～0.4m堆積している。

11層 黒褐色の粘土からなり、2区の南壁断面では、その一部のみを検出している。1区の北壁断面で、下層確認をした結果、0.3～0.4 mの層厚を測る。

12層 1区北側の下層確認で検出している。オリーブ灰色シルト～粘土からなり、層厚は 0.8 m以上

を測る。

7層以下は遺物が出土していない。

地層の特徴としては、第3d層を覆う水成層が厚いこと、東側では第7～9層が収斂して区分しがたいことがあげられる。

以下、主な調査成果について記す。

2. 第1面

厚い水成層によって覆われた第3d層上面で検出した遺構である。ただし、これより上位の遺構も同一面での検出となっている。

主な遺構としては、水田面を、より上位からの遺構として井戸を検出した。他に、流路がある。

〔6001流路〕（図223）

1-2区東端で検出した流路である。断面の観察から、第2層の段階から削り込まれていることがわかった。検出長約20m・最大幅約10m、調査地内での最も深い部分で1.8mである。この流路は3-1区西端部でも部分的に検出されており、1-2区と3区との間を北流する。土師器・須恵器・瓦器片などが出土したが、時期を決する遺物はない。現在この位置には水路があり、また、地図上ではこの部分に河川の痕跡が窺えることから、旧西除川から派生する流路の一部と考えられる。

〔3442井戸〕（図223・224）

1-1区の西端部で検出した井戸である。検出面での直径は0.5～0.6mで、検出面からの深さは0.25mであった。水溜として直径35cmの曲物が使用されていた。掘形埋土に3b層以上の砂を含むこと、および遺存状況から考えて、後述の2856井戸同様、より上位に掘り込み面があったと考えられる。

土師器・須恵器細片が出土したのみである。

〔2856井戸〕（図223～225 図版100）

1-2区南端部で検出した井戸である。検出面での直径は0.7m、深さは0.5mであった。土師器羽釜を井戸枠として使用している。2段分が遺存していたが、内側に落込んだ破片が検出され、より段数があったことがわかる。

土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器が出土した。857は土師器小皿、858は瓦器小皿、859は瓦器椀、860は瓦質土器三足、861～866は土師器羽釜である。瓦器椀は口径13.2cm・器高3.3cmを測り、内面の暗文が粗く、高台は矮小化している。土師器羽釜は、口径約26cm～32cmを測り、口縁部が内傾し、端部が短く外方に曲げられ、肥厚した玉縁状となるものが多い。

これらの遺物から13世紀後半～14世紀初頭の井戸と考えられる。

〔水田〕（図223）

東端を先述の6001流路によって失われているものの、1-2区で、概ね良好に水田面を検出することができた。畦畔は下端で幅0.4～0.8m、高さ0.1～0.2mが遺存している。東側の3区で検出した水田同様、南北方向の畦畔は連続的であるが、東西方向の畦畔は西へ向かうほど北へとずれ、水口は水田の北東（南西）にあるものが多い。各水田面の傾斜は東から西へおよび南から北へと下がる。一筆の水田の大きさがわかるものは、南北11.4m、東西9.4mと3区に比べて南北方向に細長い。水田面にはヒトおよびウシと思われる偶蹄目の足跡が多く残されていた。また、西端付近では畦畔を切って浅い溝が掘られている。

水田の年代は、作土である第3d層に瓦器が含まれることと、2856井戸の年代観より、13世紀代と推

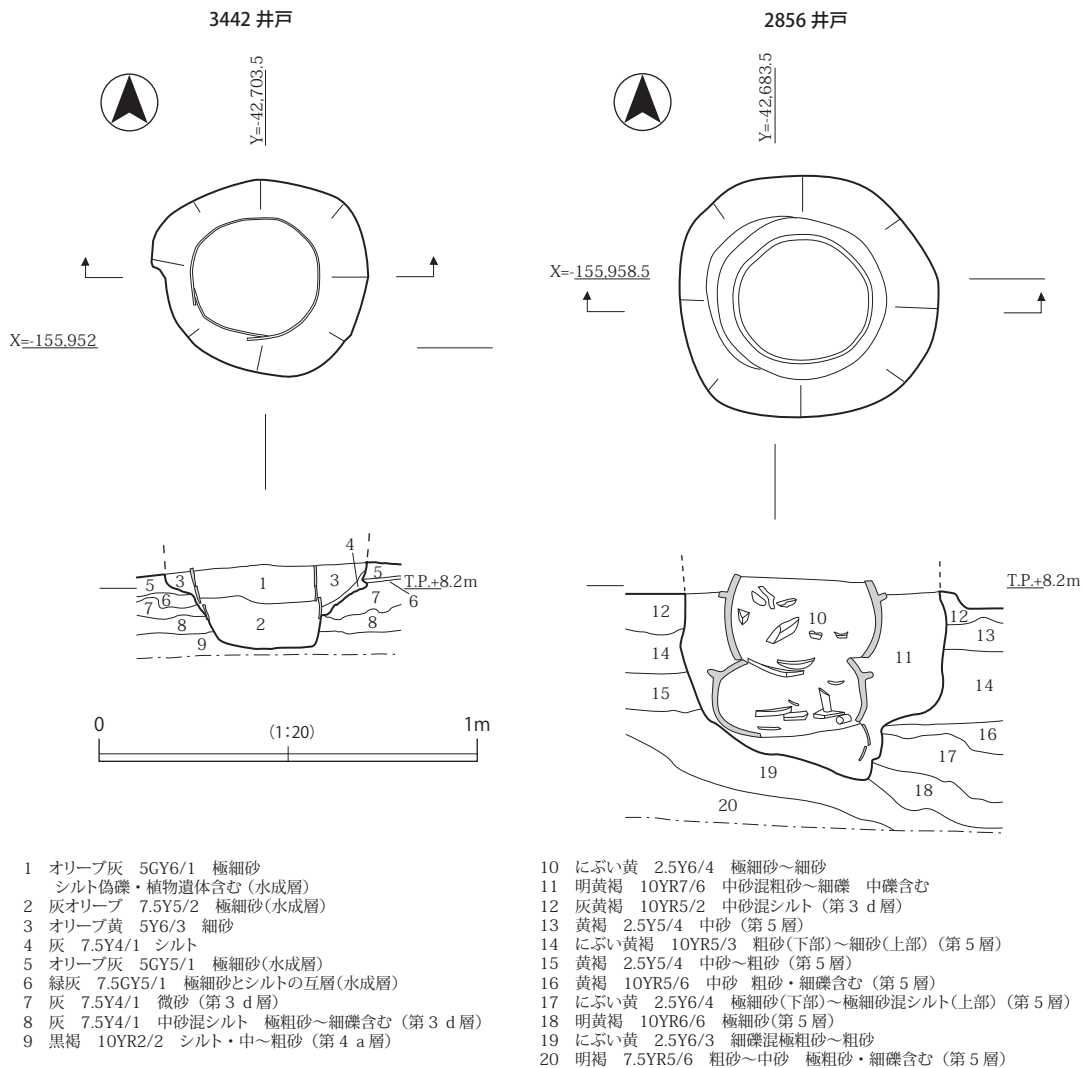


図224 1区 第1面 3442・2856井戸 平・断面図

定できよう。

3. 第2面

作土層である第3 d層下面の遺構が相当する。小溝群を検出した。

〔小溝群〕(図226)

幅0.1～0.3 m、深さ0.05 m程度の小溝群である。南北方向のことが多い。

埋土は、第3 d層と同じ作土であることから、第1面の水田耕作に伴う耕作痕跡と考えられる。

遺物は、少量の土師器・須恵器・瓦器細片のみである。

〔第4 a層出土遺物〕(図227)

上記の遺構を覆う第4 a層からは、平安時代を下限とする土師器・須恵器・黒色土器が出土したが、細片が多く、図化できるものは少ない。また、第5層上面の遺構には、古墳時代前期に遡る遺構もあり、第4 a層出土遺物も古墳時代前期～平安時代と幅がある。ここでは、この間の遺物をあげることで、すでに失われた遺構も多くあることを示唆しておきたい。

867は土師器甕の口縁部破片で、庄内期に位置づけられる、角閃石を含む生駒西麓産である。868は土師器壺でわずかな平底を有する。庄内期のものであろう。869は須恵器杯蓋でTK 208型式である。870は須恵器杯身で口縁部を欠損するが、受部は短く飛鳥I～IIに位置づけられよう。

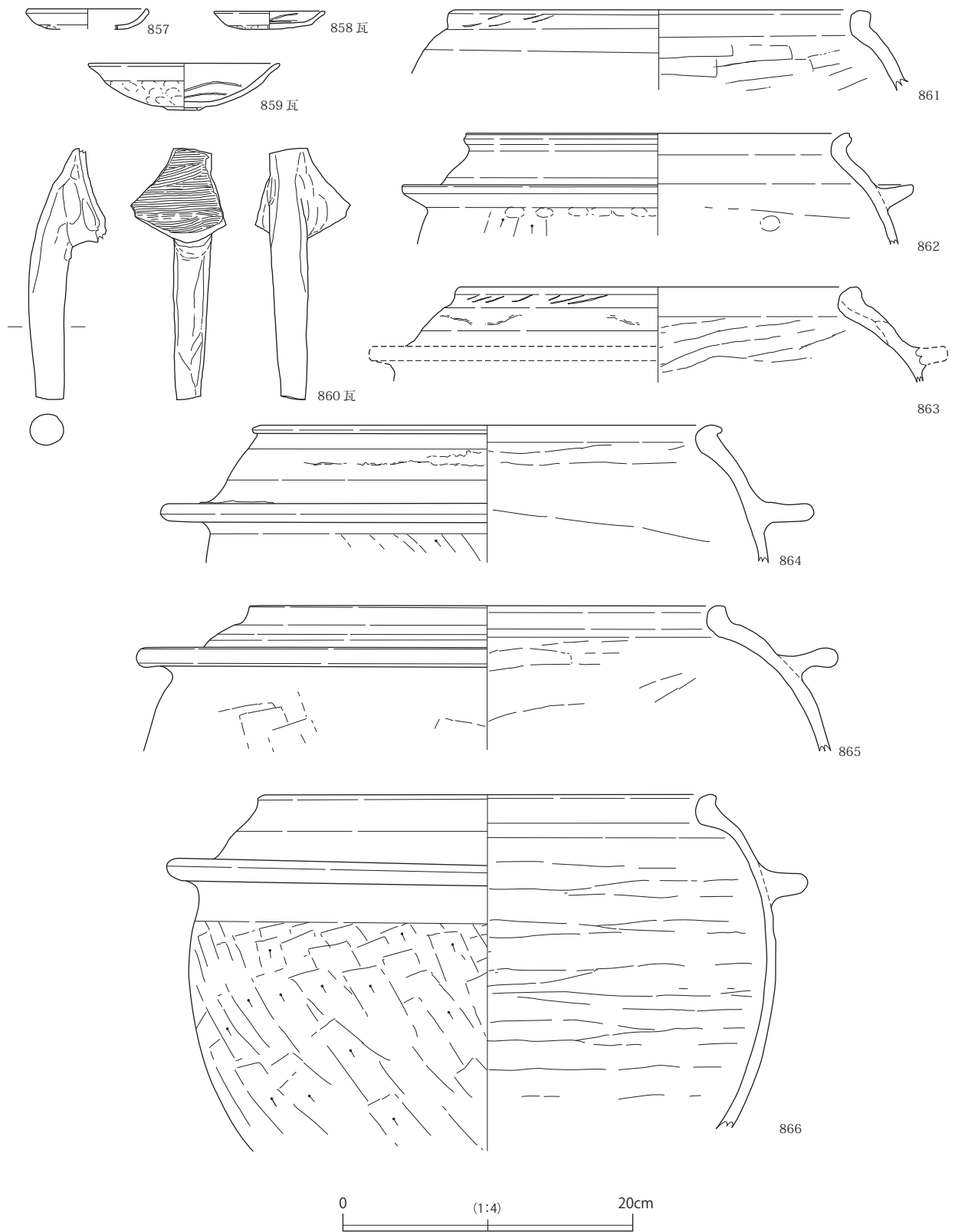


図225 1区 第1面 2856井戸 出土遺物

4. 第4面

部分的に遺存する作土層である第4 a層を除去し、第5層上面で調査した。1・2区では第4 b層が存在しないことから、第4面とする。第4 a層段階の遺構および第5層上面の遺構があり、古墳～平安時代と年代幅がある。轆状遺構・溝・井戸・土坑・小穴・踏み込みなどを検出した。

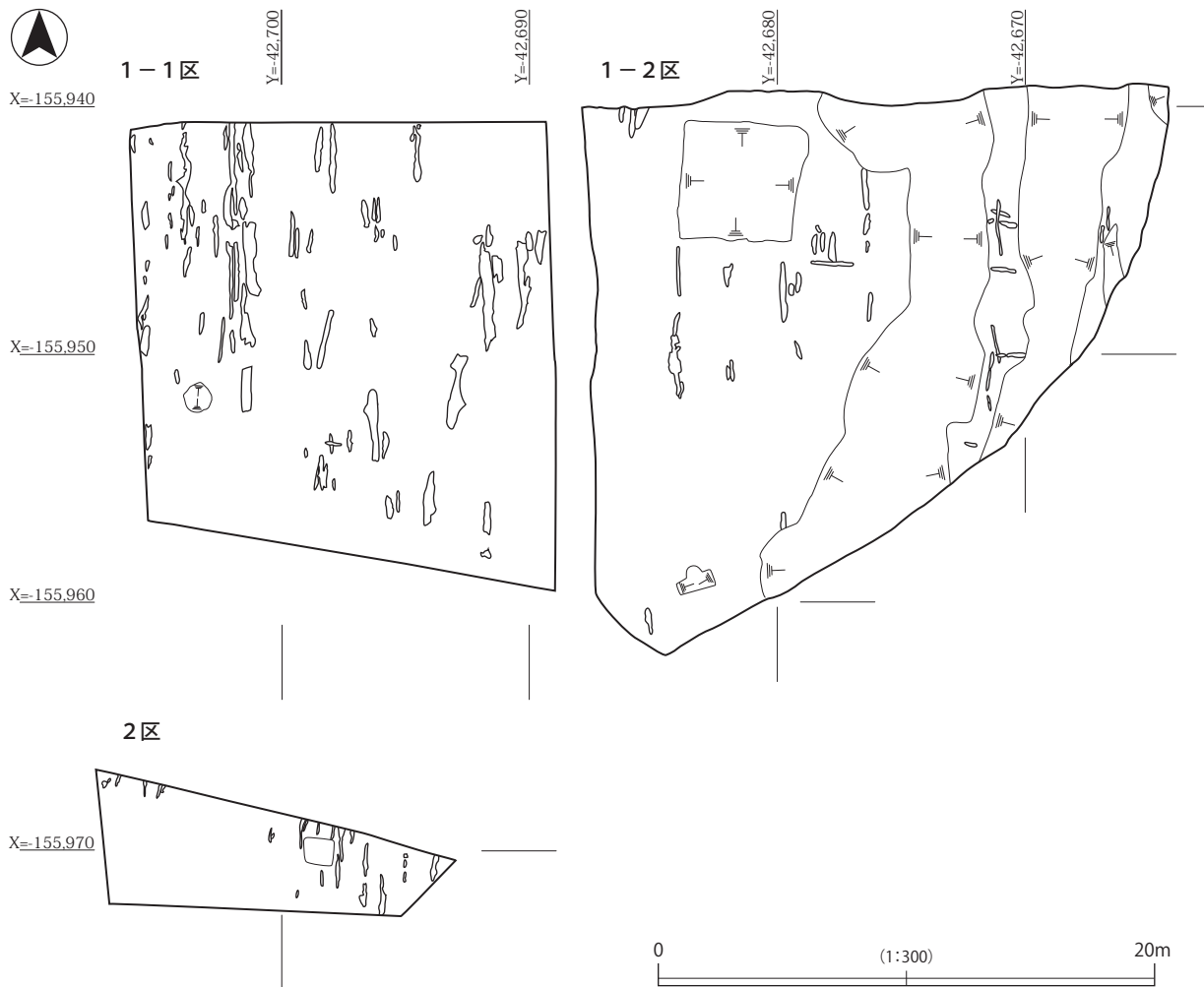


図226 1・2区 第2面 平面図

〔轍跡〕 (図228)

1.5～1.6 mの幅で並行する2条一組を基本とする溝である。それぞれの溝は幅 0.1 m未満であるが、深さがあるのが特徴である。同様のものは池内遺跡の全域で確認され、ベースに顕著な荷重痕は確認できなかったが、幅は一定で2条一組となるものが多いことから轍の痕跡と推定できる。1条しか検出できなかったものは、片側のみが遺存したものであろう。1・2区においては北で西に振る方位を持つものが多い。時期を決する遺物は出土していないが、3・4区では第4 a層を除去した段階で検出できることから、瓦器出現以前の平安時代後半と考えられる。

〔2873溝〕 (図228・229)

1区の南西から北東方向の溝である。幅0.7～1.3 m、深さ 0.2 mである。切り合い関係から他の溝群に後出する。

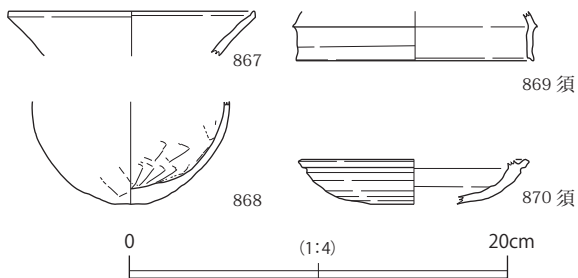


図227 第4 a層 出土遺物

土師器・須恵器片が出土した。小片ではあるが平安時代と考えられる。

〔3519溝〕 (図228・229)

1-1区の南西から北東方向の幅0.25～0.40 m、深さ0.10 mの溝である。

遺物は出土しなかったが、2873溝と同方位である

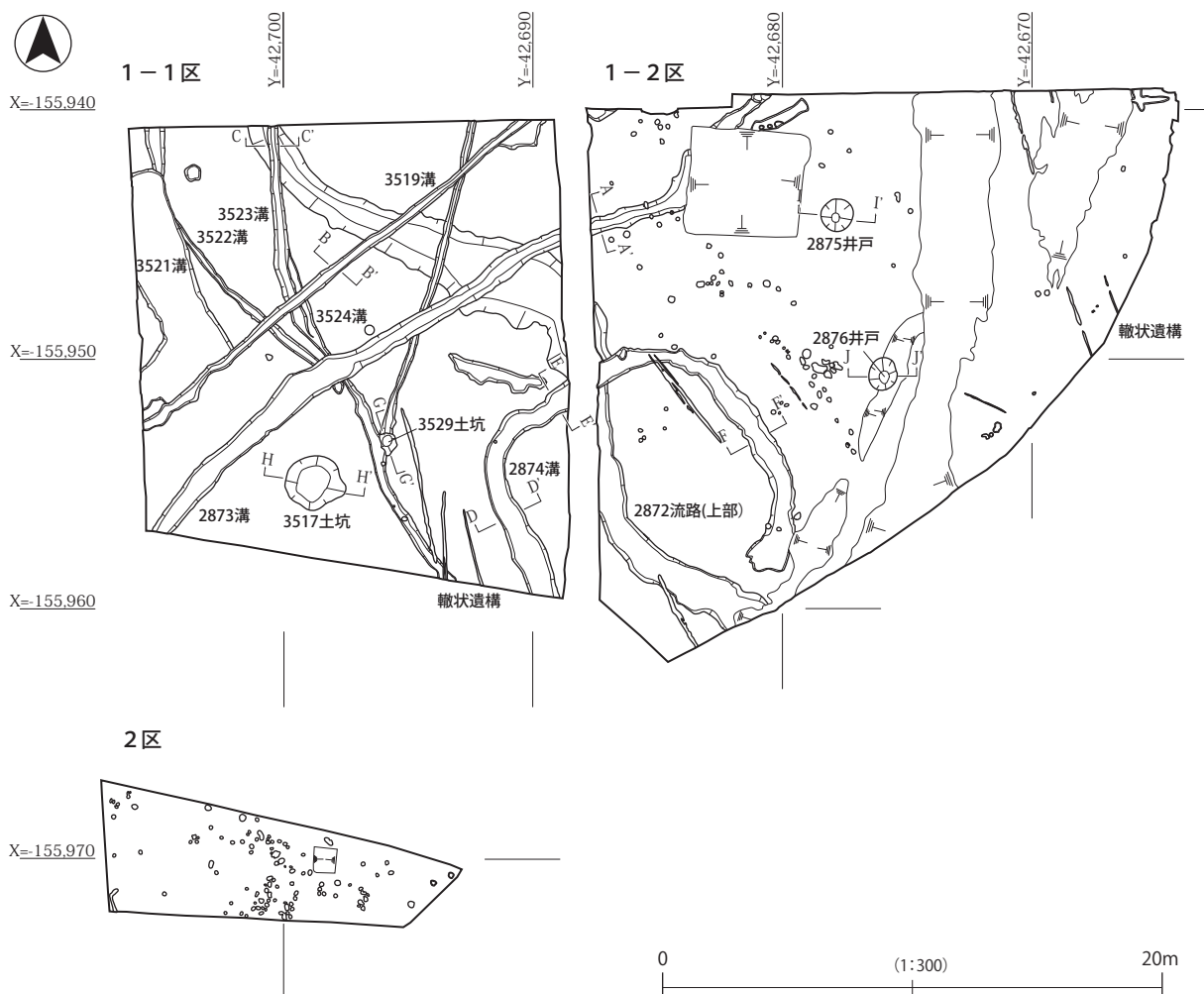


図228 1・2区 第4面 平面図

ことと、他の溝群に後出することから、同様に平安時代の溝であろう。

〔3522～3524溝〕（図228・229）

1-1区の南南東から北上する方向の溝群である。南では1条であるが、見掛け上、途中で3条に分岐する。中央の3523溝には掘直しが認められ、3524溝を切ることから、本来は1条の溝を途中から方向を変えて幾度か掘り直したものと考えられる。埋土から平安時代と考えられる。

須恵器・土師器片が出土した。

〔2874溝〕（図228・229）

1-1区東端部および1-2区西端部で検出され、幅0.3～1.3m、深さ0.05～0.1mの方形に巡る溝である。囲まれる部分は一辺約9.0mである。形状からは方形周溝墓に類似するが、肩が緩やかであること、埋土に踏込みが顕著に認められるなど差違が多く認められる。

遺物は土師器片のみで、時期のわかるものは庄内～布留期に属するものがほとんどであるが、わずかながら古代に下るものも含む。周囲の溝の方位とも合うことから、古代に下る可能性もある。

〔3521溝〕（図228）

1-1区の西端で一部を検出したのみであるが、幅1.4～2.3m、深さ0.05～0.1mの溝である。形状から2874溝と同様、方形に巡る可能性がある。底部に踏込みが多く認められる点も共通する。

遺物は出土しなかった。

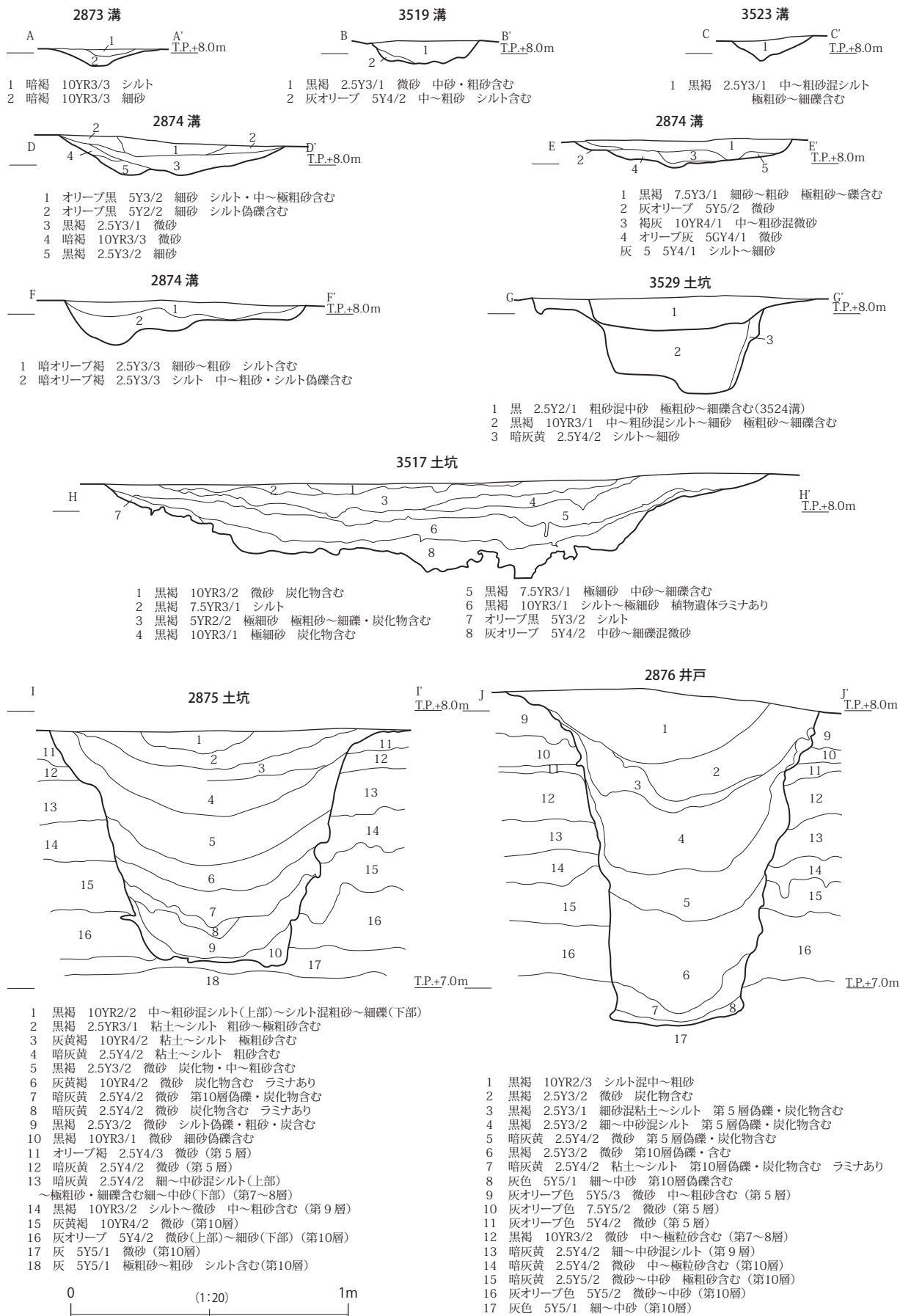


図229 1区 第4面 各遺構断面図

〔2875井戸〕 (図228・229)

1-2区の北半部で検出し、直径 1.1 m、深さ 1.2 mの平面円形の井戸である。埋土下部は水漬きの堆積層であることから井戸と判断した。中位付近は人為的に埋戻されている。

古墳時代前期の土師器片が出土した。なお、埋土最上部からは須恵器片が1点出土したが、混入の可能性が高い。

〔2876井戸〕 (図228~230 図版100)

1-2区の中央部で検出され、直径 1.2 m、深さ 0.85 mの平面円形の井戸である。湧水の痕跡が認められなかった。埋土下部付近に人為的な埋戻し土が認められるほかは自然に埋没する。埋土中位以上は水漬きの堆積となり、雨水などを溜めた水溜めとして機能した可能性がある。

遺物は、土師器片が出土した。871は埋土最下部付近から出土した小型丸底壺である。口縁端部を欠損するが、体部はやや扁平

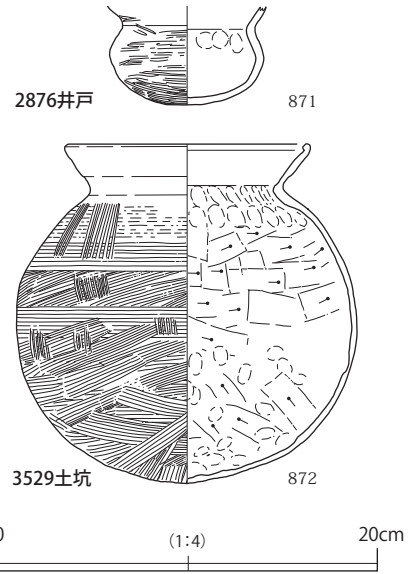


図230 1区 第4面

2876・3529土坑 出土遺物

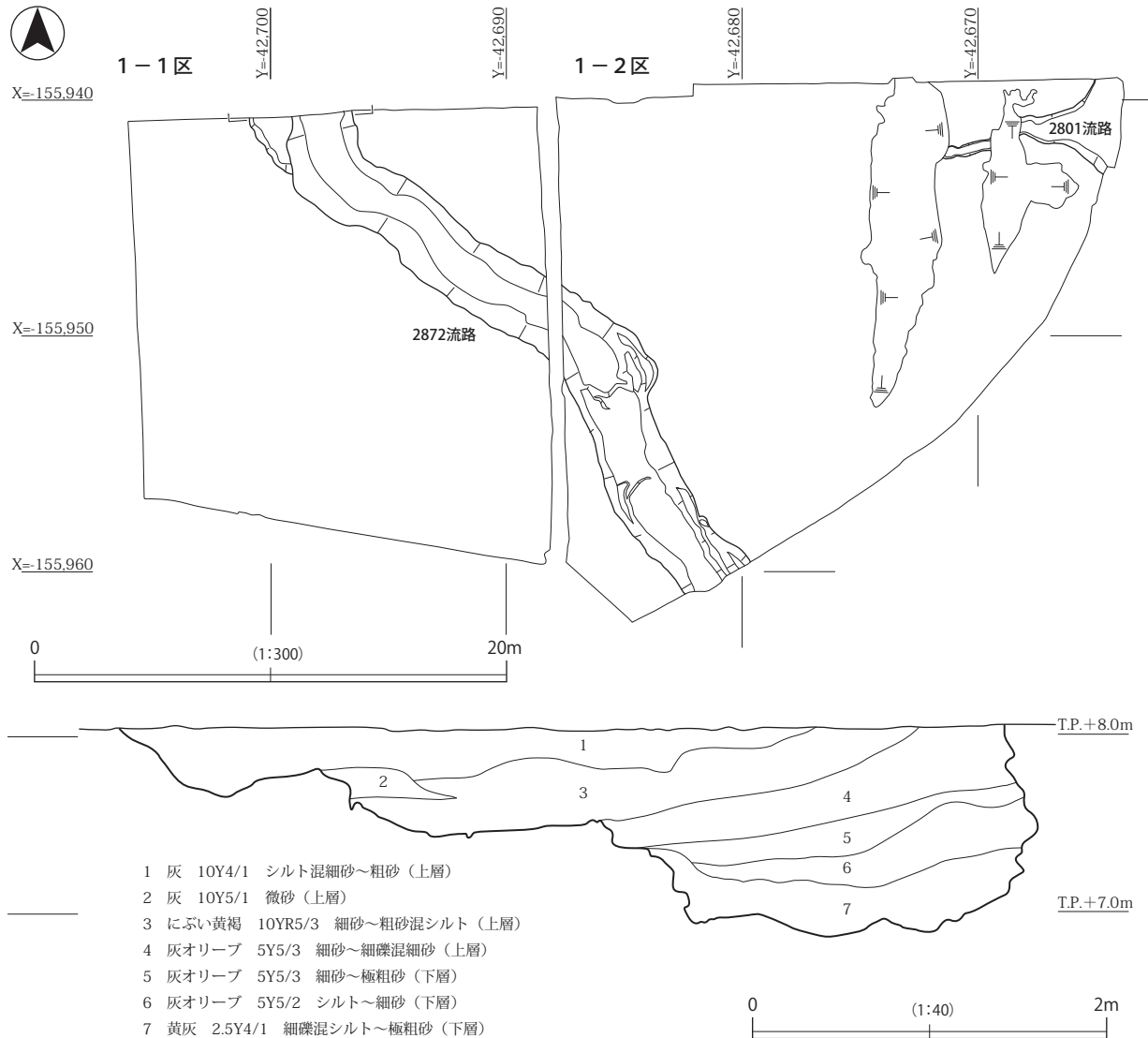


図231 1区 第6面 平面図 2872流路 断面図

- 1 灰 10Y4/1 シルト混細砂~粗砂 (上層)
- 2 灰 10Y5/1 微砂 (上層)
- 3 にぶい黄褐 10YR5/3 細砂~粗砂混シルト (上層)
- 4 灰オリーブ 5Y5/3 細砂~細礫混細砂 (上層)
- 5 灰オリーブ 5Y5/3 細砂~極粗砂 (下層)
- 6 灰オリーブ 5Y5/2 シルト~細砂 (下層)
- 7 黄灰 2.5Y4/1 細礫混シルト~極粗砂 (下層)

で上位に最大径がある。外面には横方向の丁寧なヘラミガキが施される。布留式の前半期に位置づけられ、遺構の時期も同様であろう。

〔3517土坑〕（図228・229）

1-1区の南端部で検出し、直径4.8m、深さ0.3mの不正平面円形の土坑である。埋土は大きく2層に分かれ、下層にはシルトや微砂が、上層は炭化物を含む黒褐色の粗砂が主である。4層には、炭化物や植物遺体を含むラミナが認められ、水漬きの状態で埋没したと推測される。

土師器片が出土し、古墳時代と考えられる。

〔3529土坑〕（図228～230）

1-1区の南半部で検出され、直径0.7m・深さ0.6mの土坑である。3523・3524溝に先行する。壁面は、西にオーバーハングしている。埋土中位から甕ほか土師器片が出土した。

872は、ほぼ完形に復元できる布留式甕である。口径12.8cm・器高18.0cmを測る。このことから土坑の時期は、古墳時代前期初頭に位置づけられる。

〔小穴群〕

全域で小穴・踏み込みを確認した。小穴はいずれも深さ0.1m未満と浅く、柱痕跡は確認できなかった。第4a層下面に相当するものと第5層上面のもの両者があるが、多くのものが第4a層下面のものであり、耕作に伴うものと考えられる。

〔2872流路（上部）〕（図231）

1区の中央部を南東から北西に伸びる流路である。両端は、調査区外に伸びる。第5層で埋没する、第6面（第7層上面）段階の同流路上に位置する。第5層を新たに削り込むことから、第5層上面の第4面の遺構として報告するが、第5層堆積中の削り込みの可能性もある。幅1.2～3.0mで、1-2区では0.4mと浅いが、1-1区北部では、1.2mと深くなり、第5層と完全に入れ替わっている。

遺物は出土しなかった。

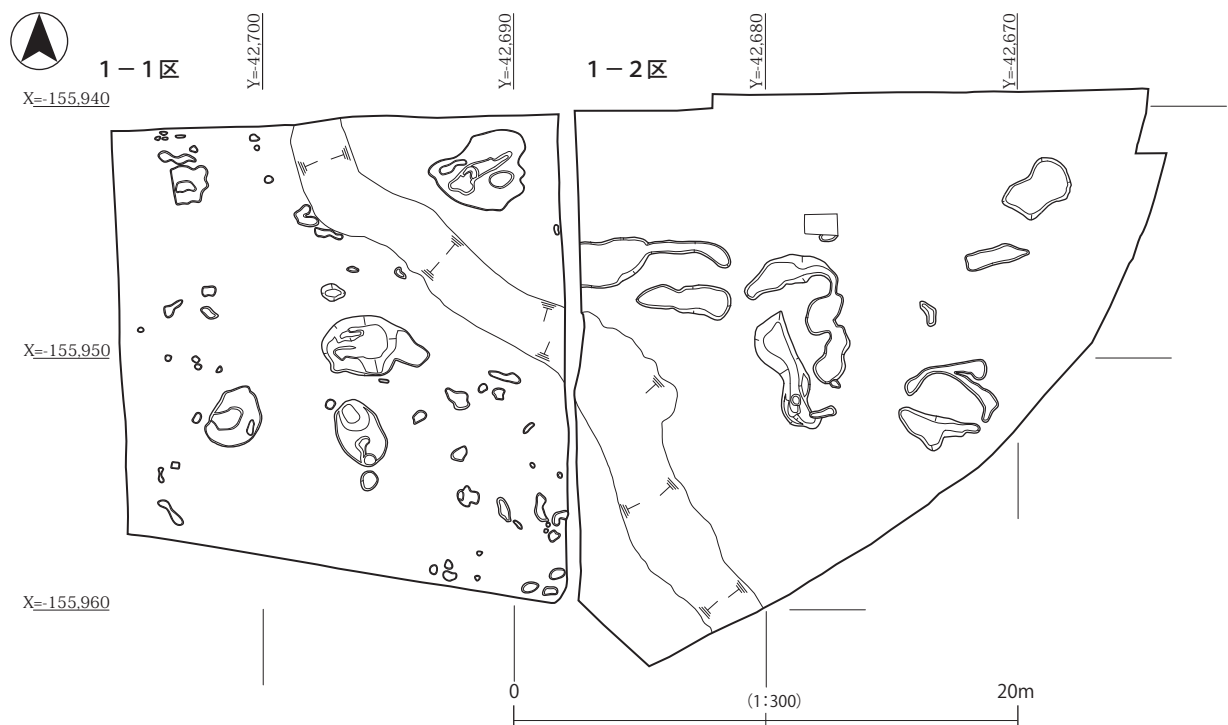


図232 1区 第9面 平面図

第4面の遺構は出土遺物から、上記のように古墳時代前期から平安時代までの年代幅があり、出土遺物の少ないものについては、明確に時期を確定することは困難である。

検出した轍状遺構・溝の多くについては平安時代、土坑・井戸は古墳時代、流路は弥生時代前期の可能性が高い。

5. 第6面

第7層上面の遺構が相当する。2条の自然流路を確認した。遺物は出土しなかったが、層序関係からこれらの遺構の時期は、縄文時代晩期～弥生時代前期に相当する。

〔2872流路（下部）〕（図231・232）

1区中央部を南東から北西方向に流下する自然流路で3-1区でも検出されている。幅約3.2mで、深さ0.8～1.2mである。

〔2801流路〕（図231）

1-2区の北東端部で検出した東西方向の小規模な流れである。東に行くに従い幅が増す。この流路の深さは0.3mである。3-1区へと続く。

6. 第9面

第9層下面の遺構が相当する。倒木痕を確認した。遺物は出土しなかったが、層序関係から縄文時代後期と考えられる。

〔倒木痕〕（図232）

全域で倒木痕もしくは根痕と考えられる大小さまざまな不整形な落込みを検出した。深さはもっとも深いもので0.5mである。

7. 第9面以下

1・2区は面的な調査は第9面までであるが、1-2区北部については下層確認を行い、第12層までを検出した。

人為に関係する遺構・遺物は確認できなかった。

8. 小結

1・2区の調査結果を概略すると、以下のようになる。

江戸時代には現水路の前進となる北流する自然流路がある。形成年代は不明であるが、鎌倉時代の水田畦畔が正方位であったことを考えると、それ以降の可能性が考えられる。

鎌倉時代には、水田を検出した。旧西除川に程近い場所ではあるが、畦畔は正方位であり、条里制に基づくものと考えられる。また、水田が埋没したのちには、井戸が掘られている。

平安時代には、耕作に関係すると考えられる溝があり、またその後には轍跡が認められる。耕作痕跡から轍跡という先後関係は、他の調査区でも共通して認められる。

古墳時代前期の遺構には、土坑・井戸などがあり、集落の一部と考えられる。古墳時代中期の遺物も確認されることから、近隣で同時期の遺構が確認される可能性もあろう。

縄文時代後期には多数の倒木痕が、縄文晩期～弥生時代前期には、北西もしくは北方向に流下する自然流路が認められるが、人為の痕跡は確認できなかった。

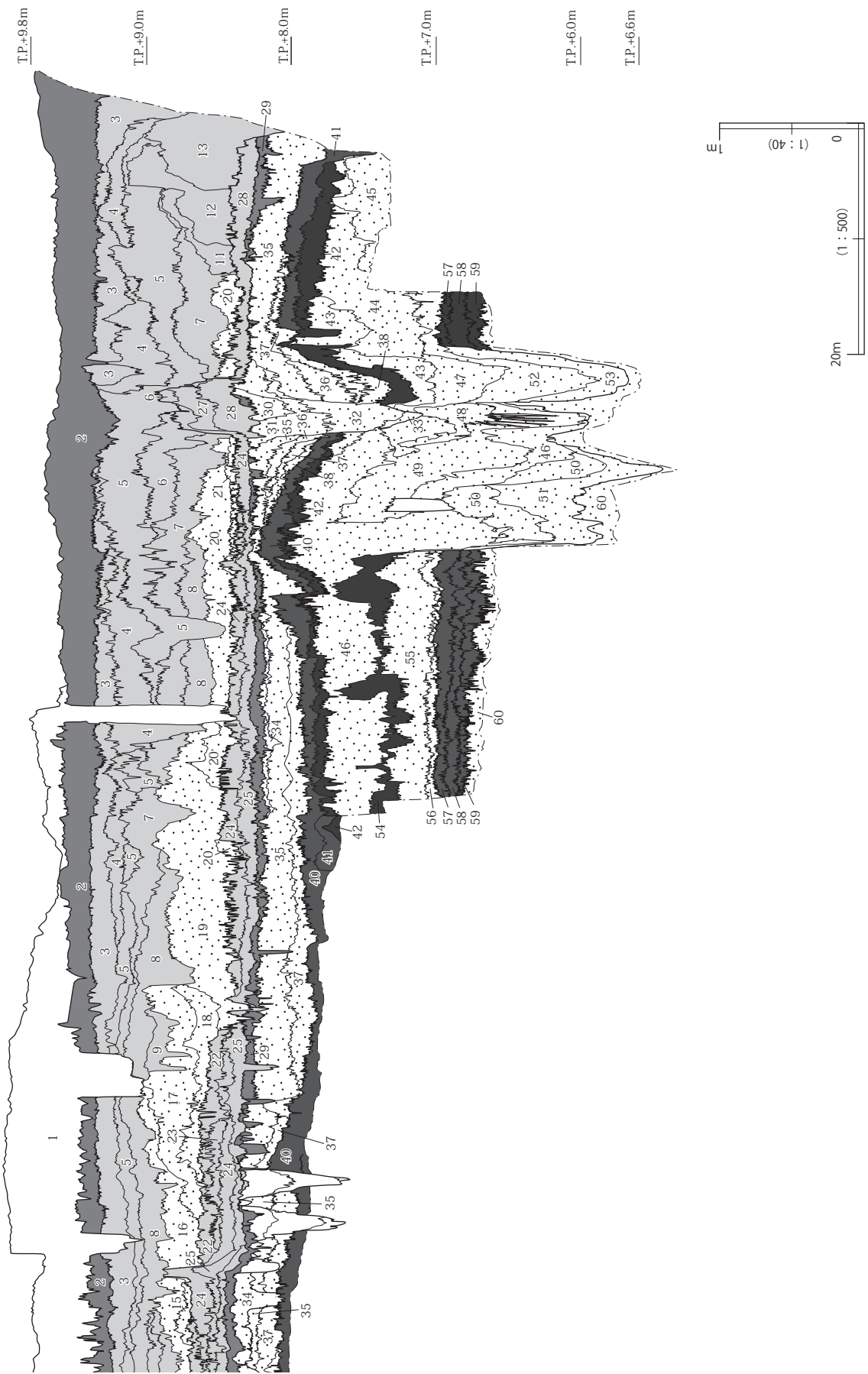


图233 3区 南壁 断面图

3区 南壁 断面図 土色

1 盛土	31 黄褐 2.5Y5/3 細砂～中砂 側方粗粒化 ラミナ顕著
2 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト混細砂	32 灰黄 2.5Y6/2 中砂～極粗砂 平行ラミナ顕著
3 黄褐 2.5Y5/4 シルト混極細砂 極粗砂少量含む	33 黄灰 2.5Y4/1 細砂～中砂 第5～7層のブロック多く含む
4 浅黄 2.5Y7/4 細砂～中砂	34 オリーブ灰 2.5GY5/1 中砂～粗砂 極粗砂～細礫多く含む
5 浅黄 5Y7/3 細砂～中砂 極粗砂含む	35 オリーブ灰 5GY5/1 細砂混シルト 細砂～中砂多く含む
6 オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂～粗砂 極粗砂多く含む	36 オリーブ灰 5GY5/1 極細砂 粘性強い
7 にぶい黄 2.5Y6/4 シルト混細砂 極粗砂含む	37 緑灰 10GY5/1 細砂混シルト
8 オリーブ黄 5Y6/3 細砂～中砂 粗砂～極粗砂多く含む	38 灰オリーブ 5Y5/2 細砂混シルト
9 にぶい黄 2.5Y6/4 細砂 極粗砂多く含む	39 灰 10Y5/1 極細砂～細砂
10 にぶい黄褐 10YR6/3 中砂～粗砂 細礫含む マンガン多く沈着	40 黒褐 2.5Y3/1 細砂混シルト
11 明黄褐 2.5Y6/6 中砂～極粗砂 ラミナ顕著	41 黒褐 10YR2/2 シルト混細砂～中砂 粗砂～細礫含む
12 にぶい黄 2.5Y6/3 シルト混細砂～極細砂	42 黒 10YR2/1 中砂～粗砂
13 明黄褐 10YR6/8 中砂～粗砂 斜行ラミナ顕著	43 灰黄褐 10YR4/2 細砂混シルト
14 にぶい黄褐 10YR5/4 細砂～中砂 ラミナ顕著	44 灰オリーブ 5Y4/2 細砂～極粗砂 細礫含む ラミナ顕著
15 黄褐 10YR5/8 粗砂～極粗砂 細礫含む	45 灰 7.5Y5/1 細礫
16 にぶい黄橙 10YR6/3 細礫～中砂 粗砂～極粗砂多く含む ラミナ顕著	46 灰白 7.5Y7/1 粘土～シルト 中砂～粗砂少量含む
17 灰黄褐 10YR6/2 粗砂～極粗砂 上方細粒化 ラミナ顕著	47 灰 5Y5/1 中砂～極粗砂 上方細粒化
18 明黄褐 10YR6/6 極細砂	48 灰オリーブ 7.5Y6/2 極細砂
19 明黄褐 10YR6/6 細砂混シルト 淘汰良い	49 灰オリーブ 5Y6/2 細砂混シルト
20 灰オリーブ 7.5Y6/2 細砂混シルト 粗砂～極細砂含む	50 灰オリーブ 5Y5/3 中砂
21 明褐 7.5YR5/8 細砂混シルト	51 灰オリーブ 5Y5/2 細礫
22 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混中～細砂	52 黄褐 2.5Y5/3 中砂～粗砂
23 黄褐 2.5Y5/4 細砂混シルト 淘汰やや悪い	53 黄褐 2.5Y5/3 中砂～粗砂 極粗砂含む 斜行ラミナ顕著
24 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂混シルト	54 灰オリーブ 7.5Y5/2 細砂～中砂 極粗砂少量含む
25 灰黄褐 10YR5/2 細砂混シルト 中砂～粗砂多く含む	55 暗灰黄 2.5Y4/2 極細砂～中砂 上方細粒化
26 灰黄 2.5Y6/2 シルト 細砂～中砂多く含む	56 オリーブ灰 2.5GY5/1 細砂混シルト
27 灰黄褐 10YR4/2 細砂混シルト 粗砂含む	57 灰黄褐 10YR4/2 粘土～シルト 極細砂含む
28 にぶい黄褐 10YR4/3 細砂混シルト 粗砂多く含む	58 黒 10YR2/1 細砂混シルト

第2節 3区の成果

3区は、東西に細長い調査区であることから、西の3-1区、東の3-2区の東西に2分割して調査を行った。

1. 基本層序

3区の基本層序は、南壁断面の観察(図233)から1・2区同様に、以下のようになる。

盛土は、3-2区東半部のみに、0.4～0.5 m認められた。

第1層 現代耕作土で、約0.1～0.2 mを測る。1-1区の西半部では検出されなかった。

第2層 にぶい黄色および灰オリーブ色の細砂混シルトが約0.2～0.3 mを測り、3-1区の西端部では数cmと薄くなり、場所によっては、上層の現代厚作土により削平されて、検出されなかった。

第3層 さらに、4層に細分される。第3 a～c層は、灰色～黄褐色の細砂～粗砂で、部分的にシルトを含む水成堆積である。約0.4～1.0 mが堆積し、西に行くほど層厚を増す。

以下、第3 d層は、オリーブ灰色から灰色の粘土～シルトで、約0.05～0.4mを測り、3-1区の西端部では、検出されていない。3-1区の東半部から3-2区の大畦畔にかけては、平均約0.2 mの層厚を保持し、大畦畔より東側では、層厚0.4 mと厚くなり、数枚の耕作土層が残存していた。

この3 d層上面が第1面となり、水田をほぼ全域で検出している。

第4 a層 黒褐色および暗灰黄色の中砂混シルトで、約0.05～0.2mを測る。3-2区では、ほぼ均質に堆積をしているが、3-1区では、西に行くにつれ薄くなり、西端部では堆積が認められない部分もあった。第4 a層からは、土師器・須恵器・黒色土器などが出土した。

先述の3 d層下面および第4 a層上面が、第2面となり、南北方向の小溝を検出している。

第5層 灰色および灰黄色のシルト～シルト混細砂からなり、層厚約 0.2～0.4 mを測る。

第5層上面が第4面となり、轍跡、掘立柱建物、平地建物、溝、土坑など、多数の遺構を検出している。

第7～9層 3-1区では、灰色シルト混細砂、暗灰黄色極細砂～細砂混シルト、黒褐色シルト混極細砂などが層厚 0.2～0.4 mを測る。部分的に第7～9層を分離できるところもあるが、第8層の堆積は西半部の一部に限られ、第7・9層の分離も明瞭にはできなかった。

第7・9層下面で、第6面を検出し、流路および倒木痕を検出した。

3-2区では、弥生時代前期の集落を区画する溝が検出されたため、第4面までの調査を行い、それ以下の遺構面の検出は行っていない。よって、第5層以下は、側溝の断面のみの観察になり、およそ、第7層上面で調査は終了している。

第10層 緑灰色の極細砂混シルトで、約 0.2～0.7 mを測る。この下層が第10面に相当し、流路を検出している。遺物は、縄文時代晩期の土器が出土している。

第11層 灰白色から灰オリーブ色の細砂～粗砂が 0.6 mを測る。この下面が、第11面に当たるが、遺構・遺物は検出していない。

第12層 灰黄褐色シルト混極細砂やシルト、黄灰色極細砂で構成され、約 0.2～0.3 mを測る。遺物は出土していない。

平面的な調査は、上述したとおり、第3 d層上面の第1面から開始した。3-1区では、第11層上面である第10面までを全域で行い、それ以下は、南部に設定したトレンチ内にて第12層上面である第11面までの調査を行った。さらに、部分的に深掘りを行い、以深の地層堆積状況を確認した。

3-2区では、第5層上面である第4面までの調査を行った。第4面では、後述の弥生時代前期の環濠集落が見つかったことから、それ以下の調査は行わず、保存の対象とした。

3区における地層の特徴としては、第3 d層を覆う水成層が西で厚く、東で薄く堆積すること、4 b層が1・2区同様に存在しないこと、また、第7層が3層に細分できることがあげられる。

以下、主な調査成果について記す。

2. 第1面

第3 d層上面で検出した遺構である。ただし、これより上位から掘り込まれた遺構も同一面での検出となっている。第3 d層上面の遺構としては水田が、より上位からの遺構としては自然流路のほか土坑を確認した。

〔6001流路〕(図234)

3区西端で一部を検出した。東肩のみで、ほとんどが調査区外に位置する。1区東端で検出したものと同一の流路である可能性が高い。1・2区と3区間に現在もある旧西除川から派生する小流路の前身であると思われる。

〔水田〕(図234 図版43)

先述の6001流路がある西端部や、部分的に洪水の水流により削剥を受け、失われた箇所もあるが、洪水によって運ばれた厚い水成層に覆われていたため、全域でほぼ良好な形で検出することができた。この水成層は西で厚く、東では薄い。旧西除川の洪水に関係するものであろう。

なお、検出した水田面は、後述の東側の大畦畔より東については1段階新しいものである。これは、東側で3 d層がさらに3層に細分できることから、再度耕起されたことが窺われる。東側の大畦畔は同

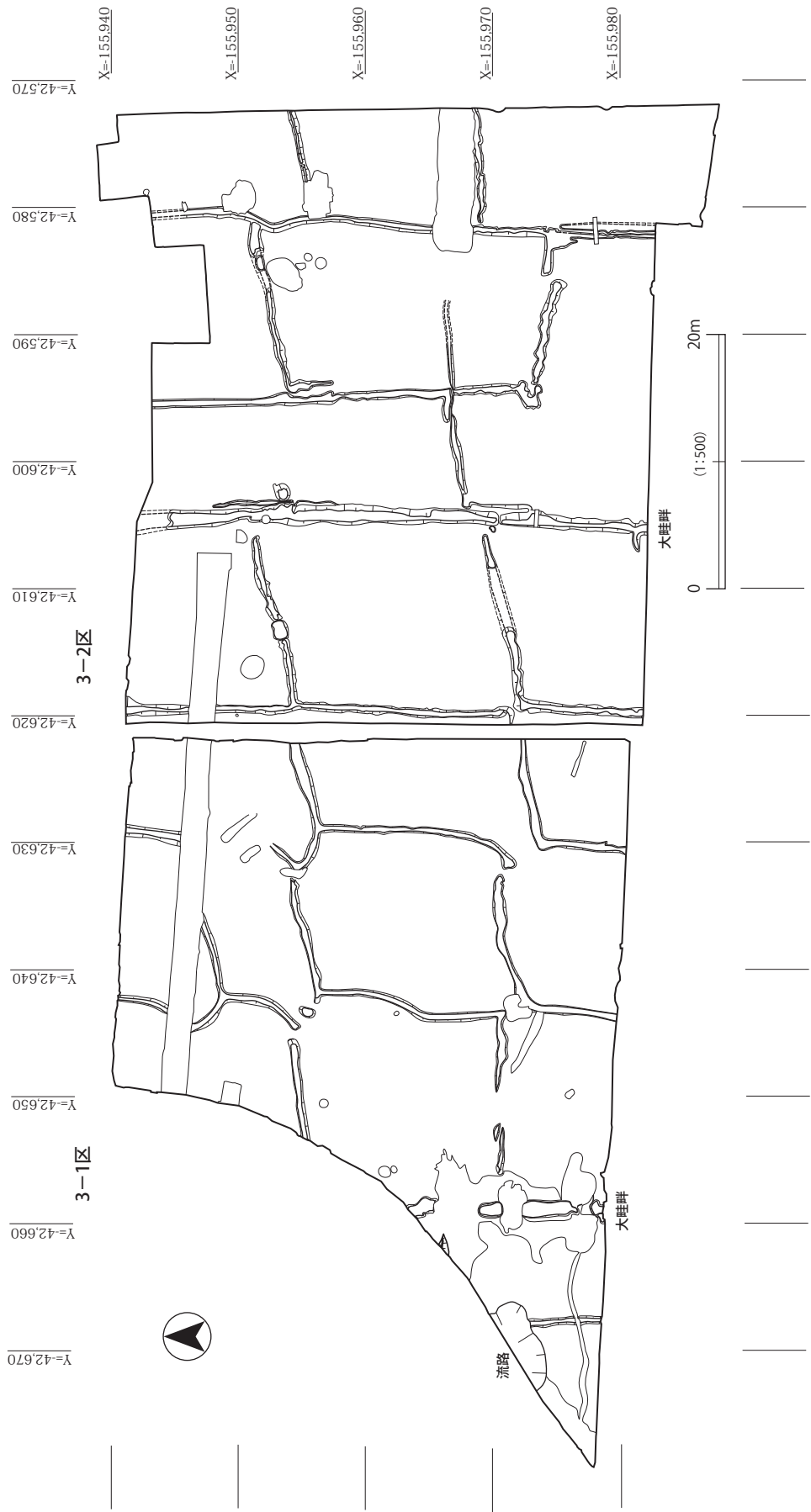


图234 3区第1面平面图

じ場所で再利用されている。

畦畔には大畦畔と考えられる下幅で 1.0~1.8 m、高さ 0.2~0.3 m 程度の規模の大きなものと、下幅で幅 0.3~0.8 m、高さは 0.1~0.2 m のものがある。大畦畔は、南北方向のものを 3-1 区・3-2 区で各 1 条、計 2 条を確認した。西側のものは削平により遺存状況はよくない。

なお、その畦畔間の距離は 54.0~54.6 m で、1 町 109 m とするとそれを 2 分したものとなる。大畦畔間には、3 条の南北方向の畦畔が配されている。後述する 4 区で検出した大畦畔との間においても同様であることから、一筆の幅は異なるものの、大畦畔間は 4 分割されていた可能性がある。東西方向の大畦畔は検出できなかった。

畦畔は、南北方向の畦畔が直線的に通るものが多いのに対し、南北方向の畦畔はいずれも東で北に振れる方位となる。これは自然地形による水回しの工夫のためであろう。また、3-2 区の大畦畔より西側では南北方向の畦畔の乱れも大きいですが、東では整っている。水口は、同大畦畔より西では、一筆の北西を除いた 3 方向に設けられている。なお、各水田面ではヒトのほか、ウシとみられる偶蹄類の足跡が多数認められた。

水田面上面からは、土師器碗 873・874 が出土した。いずれも 10 世紀末葉~11 世紀初頭に位置づけられるが、下位層からの混入と考えられる。

〔第 3 d 層出土遺物〕 (図 235-875~882)

水田の作土である第 3 d 層からは、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器などが多く出土した。

875・879 は弥生土器で、前者が小型の壺蓋、後者が器台の脚台部である。弥生時代前期および後期のもので、下位層からの混入である。

876・878・882 は土師器で、876 は皿、878・882 は碗である。10 世紀後半~11 世紀代に位置づけられるが、下位層からの混入であろう。

877 は、緑釉陶器の皿の口縁部破片である。

880 は土師質の有溝土錘、881 は須恵器の飯蛸壺である。

第 1 面の時期であるが、直接時期を決定するだけの遺物の出土はないが、瓦器片をわずかに含むことから、1 区同様、13 世紀代の鎌倉時代と考えられる。

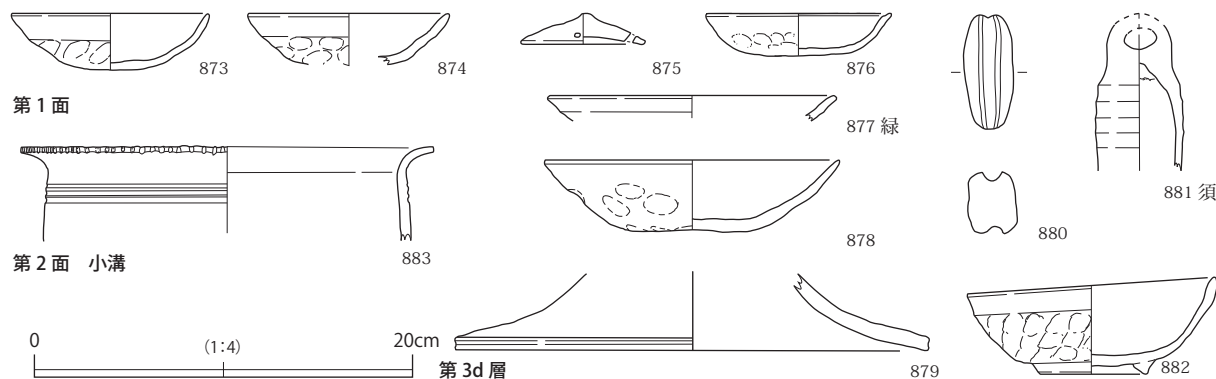


図 235 3 区 第 3 d 層 第 1・2 面 出土遺物

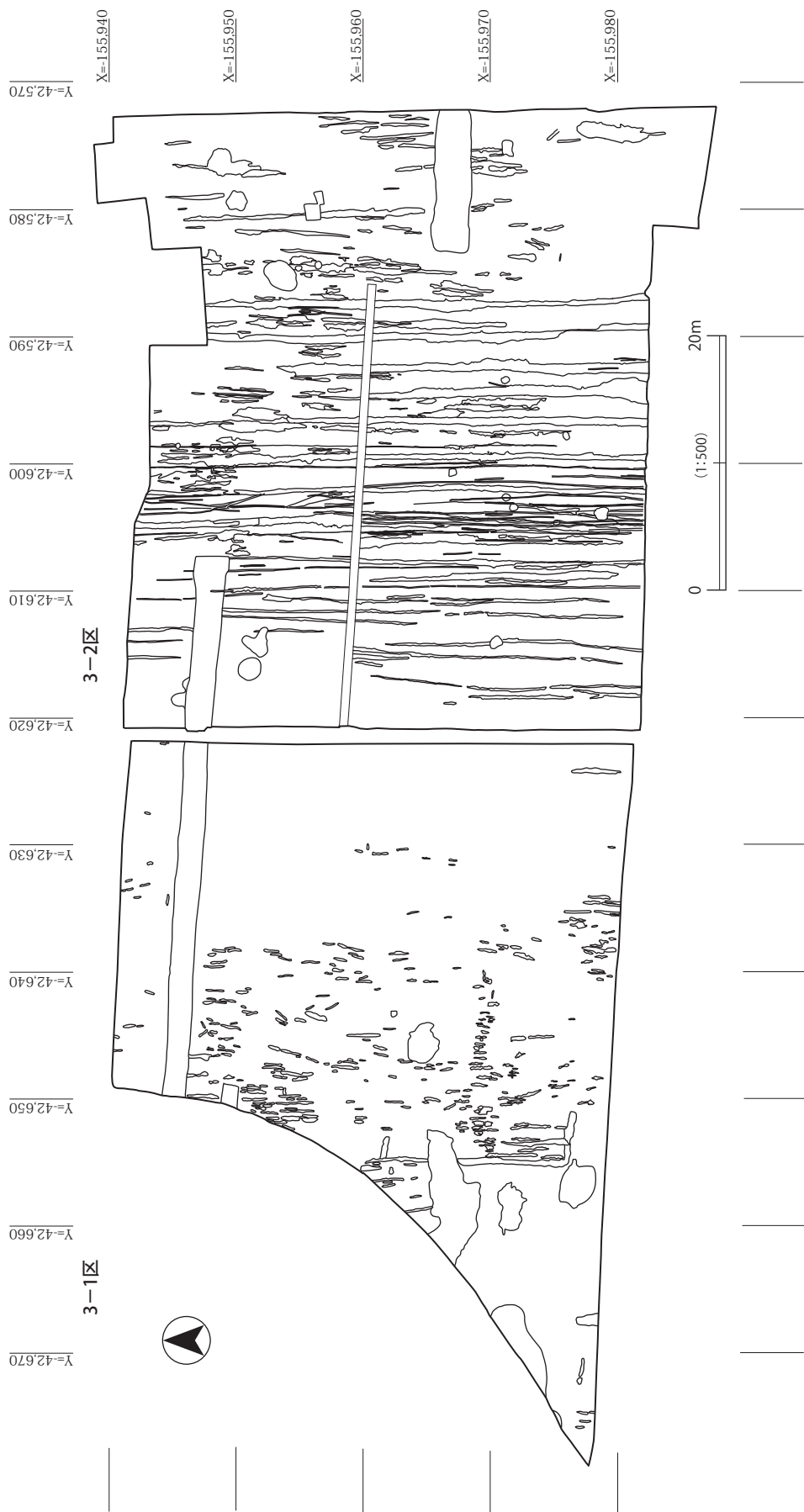


图236 3区第2面平面图

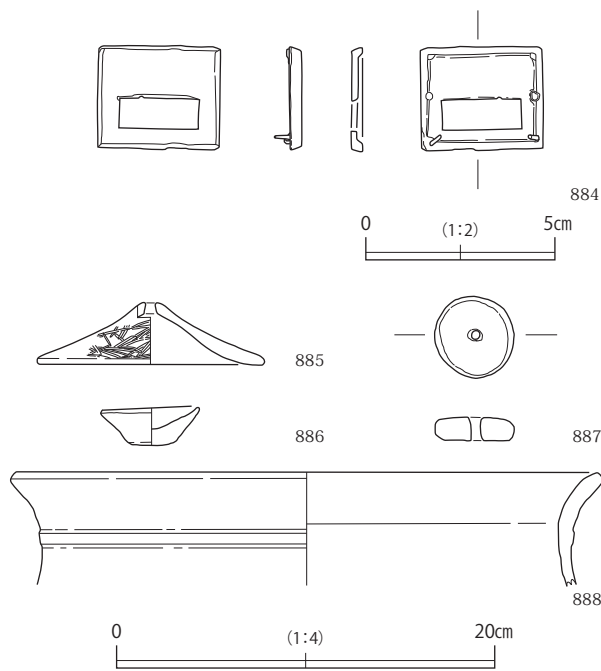


図237 3区 第4 a層 出土遺物

のものである。

第2面の時期は、第1面の耕作に伴うものであるため、第1面と同様、鎌倉時代と考えられる。

〔第4 a層出土遺物〕 (図237)

作土層である第4 a層からは多くの弥生土器とともに土師器・須恵器・黒色土器が出土している。瓦器は出土していない。出土遺物は3-2区の東半に集中しており、下位層の遺構の分布状況と同様であることから、耕起によって下位層から混入したものであろう。

884は銅製^{註1)}の巡方で、縦2.7 cm、横3.2 cm、厚さ側縁で2.5 mm・中央部で1.2 mmを測り、裏面には取付けのための突起が6箇所あり、その内の2箇所に、3.5 mm・5.5 mmの長さが残存していた。

885~888は、弥生時代前期のもので、885は壺蓋、886はミニチュアの鉢、887は土製紡錘車、888は大型壺である。いずれも、下層からの混入品と考えられる。

4. 第4面 (図版45・47)

本調査区では、第4 b層が遺存していないことから、第4 a層下面の遺構(図239のトーン掛け部分)および第5層上面(基底面)の遺構が同一面で検出されている。

3-1区では遺構が希薄で、3-2区の東半部では緻密になる。これは、南南東から北北西に流れる溝を境に顕著に認められる。

〔轍跡〕 (図238・239 図版45-3)

轍跡は、3-2区東端部で、南西-北東方向を示す小溝が多数検出された。幅0.1 m・深さ0.1~0.2 mの小溝が2条平行しており、その間隔はおよそ1.4 mを測る。

埋土は、3 d層であるにぶい黄褐色の粗砂混シルトが1層である。

溝は、3-2区で数条検出された。

〔3516溝〕 (図238~240)

この溝は、やや西に振る南北方向の溝で、両端は調査区外に延びる。西側に、同様な溝が1条平行している。幅1.0 m~1.6 m・深さ0.1 mを測る。埋土は、上下2層で、先述した轍跡に切られている。

3. 第2面 (図版44)

第3 d層下面・第4 a層上面に相当する。第3 d層下面の遺構として、全域で南北方向の小溝が検出された。幅0.1~0.6 m、深さ0.1 m未満のものが多い。特に、3-2区では、調査区を縦断する長いものが多数検出された。それ以上の幅のものもあるが、これらはいくつかの小溝が重複したものである。埋土は、第3 d層と同一である。また、自然堆積を示すラミナが認められないことから、これらの小溝は、第3 d層の耕起に係る鋤溝と考えられる。

小溝からは、多くの弥生土器や、土師器・須恵器・黒色土器などが出土した。

883は弥生土器甕である。口縁端部に刻み目、頸部に3条のヘラ描き沈線が施されている。前期



图238 3区第4面平面图



図239 3-2区 第4面 平面図

遺物は、図化できたのが弥生時代前期の高杯が1点のみである。

他に、弥生時代前期土器の破片が出土している。下層からの混入と考えられる。

3区の第4面の基底面から検出された遺構には、溝、掘立柱建物・平地建物・柱列、井戸、土坑、ピットなどがある。

3-2区の中央部で、やや西に振る南北方向の直線的な溝が2条平行して検出された。この2条の溝

から以西は遺構が希薄で、以東で掘立柱建物や平地建物が検出されることから、これらの溝が集落を区画する溝と考えられる。

[3504溝] (図238・242～245・

464・467・472

図版48-1・3・5・101)

3504溝は、3505溝の約 1.0～1.6 m

東側に当たり、幅 2.4～2.6 m・深さ 0.8～1.0 mを測る。

埋土は、大きく上下 2 層に区分できる。下層は、第 5 層の偽礫を含む灰色系の中砂を含むシルトが主で、上層は、炭化物を含む細砂～中砂が主である。

出土した遺物は、弥生時代前期土器および石器がある。コンテナにして約 5 コンテナ出土している。石器については、後述する。

1 層から出土した土器には、壺・甕蓋・甕がある。

891 は、口縁部から体部上半を残し、短く外反する口縁部の端部は丸みをもち、短い筒状の頸部下端に段を設ける。体部外面に縦方向のヘラミガキ、口頸部内面に横方向のヘラミガキを施す。口縁部外面に指押さえを残す。乳白色の泉州域のものである。892 は、同様の形態と思われ、頸部に削り出し突帯を 1 帯施している。内外面伴に表面摩滅のため、調整は不明である。890・894 は、いずれも、口頸部破片である。頸部に沈線を 2 条もしくはそれ以上施すものである。895 は無紋のもので、口縁端部が面をもつ。893 は口頸部を欠損するもので、体部に被熱痕跡がある。

896 は、甕蓋の口縁部端部を欠損し、つまみ部の中央部が窪む。表面剥離が著しい。

897～900 は、甕である。897 は、口径約 25 cm を測る大型のもので、短く外反する口縁部端部に刻み目を施す。体部外面に縦方向のハケメ、内面に横方向の指ナデを施す。898 も大型で、口縁部端部に部分的に刻み目を施し、体部上端に沈線 2 条を施す。899 は、口径 18.0 cm を測る中型のもので、口縁部端部に刻み目・体部上端に沈線 3 条を施す。900 は、体部下半および底部を残すもので、平底の底部中央部に、径 1.2 cm の焼成前の穿孔がある。

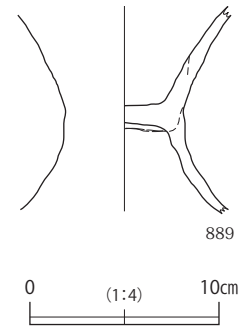
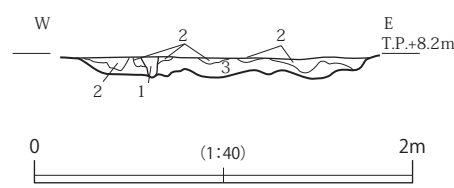
2 層から出土した土器には、壺・甕蓋・甕・鉢がある。

907 は口径 26.4 cm を測る大型のもので、口縁部から体部上端を残す小破片である。短く外反する口縁部の端部は丸みをもち、短い筒状の頸部に、わずかに膨らむ体部をもつと思われる。頸部に削り出し突帯を 1 帯施す。内外面伴に表面剥離のため、調整は不明である。胎土が赤色化し被熱痕跡がある。

902・903 は、両者伴に頸部から体部上端を残すもので、前者は頸部に削り出し突帯 1 帯、後者は頸部に段・体部に削り出し突帯 1 帯を施している。いずれも、表面剥離が著しく、調整は不明である。910 は大型の壺で平底の底部を残す。内外面にヘラミガキを施す。胎土が赤色化し被熱痕跡がある。911 は中型の平底の壺の底部である。内外面伴に表面摩滅著しく、調整は不明である。

901 は甕蓋の口縁部端部を欠損する。内外面伴にヘラミガキを施す。口縁部内面に煤が付着する。

904～906 は甕で、904 は口縁部端部に刻み目・体部に沈線を 1 条施す。表面剥離のため、調整は不明である。被熱痕跡がある。905 は、口縁部を含む小破片で、体部に沈線 1 条を施す。内外面ともにナデを施す。



1 にぶい黄褐 10YR5/3 粗砂混シルト (軟)
2 にぶい黄褐 10YR4/3 柱砂混シルト
3 にぶい黄褐 10YR5/4 シルト混粗砂

図240 3-2区 第4面 3516溝 平・断面図 出土遺物



图241 3-1区 第4面 平面图

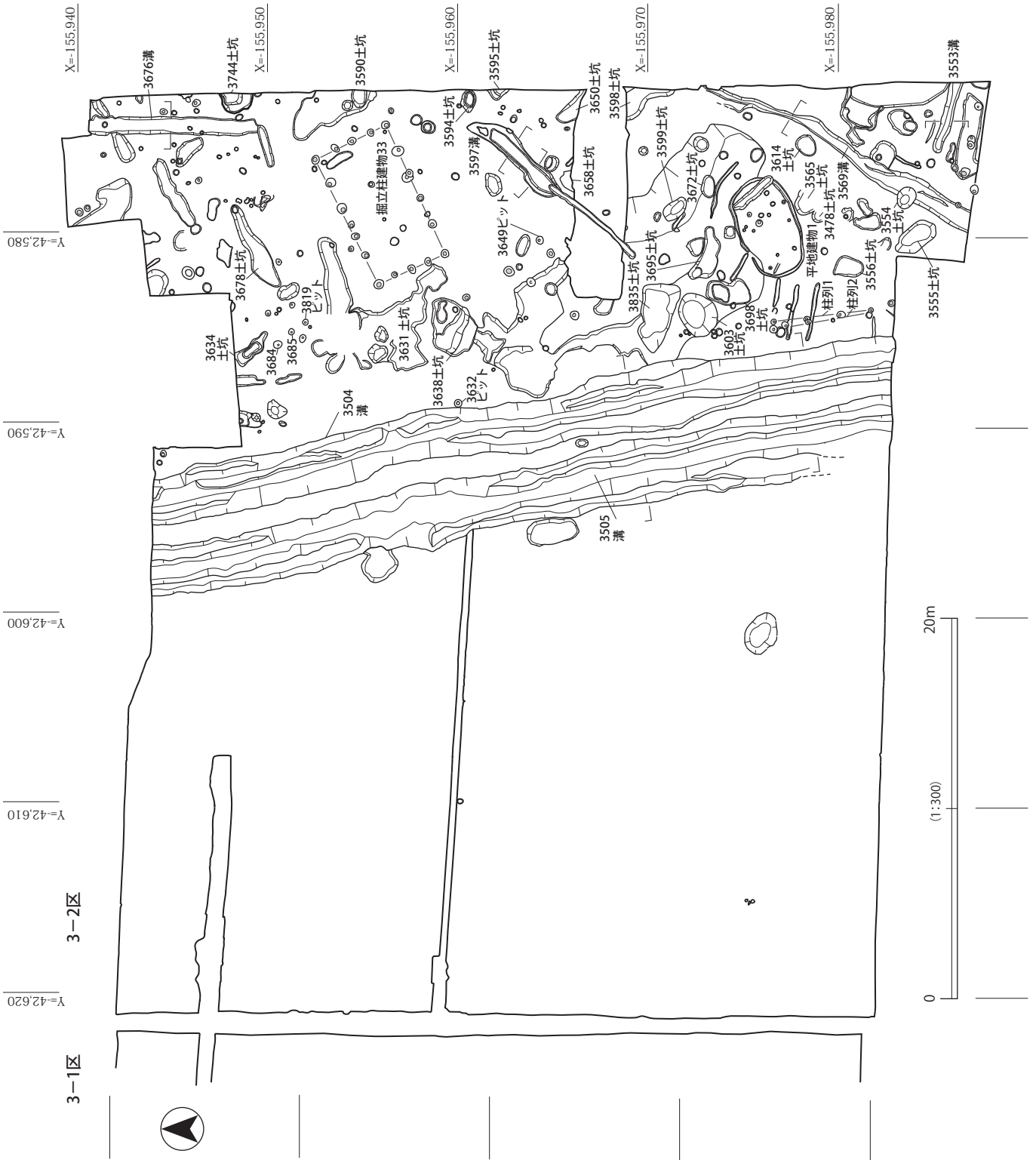
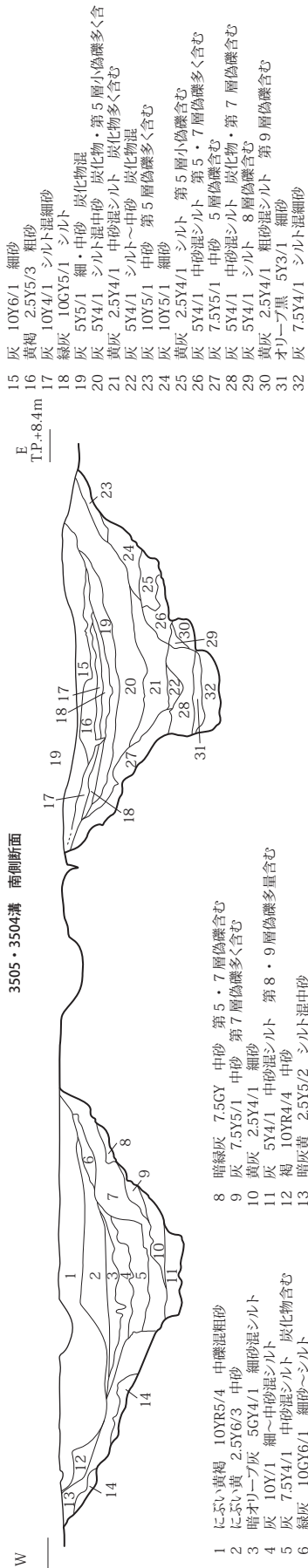


図242 3-2区 第4面 平面図

906・908・909は鉢である。906は、小型の完形で口縁部の約1/2を欠損する。口径が11.2cm・器高が8.0cmを測る。頸部外面と底側部に指押さえを残す。内外面共に表面剥離のため、調整は不明である。908・909は、口径30cm以上と大型のもので、短く外反する口縁部をもち、いずれも、小片である。908の体部外面に、ハケメを施す。外面に煤が付着する。

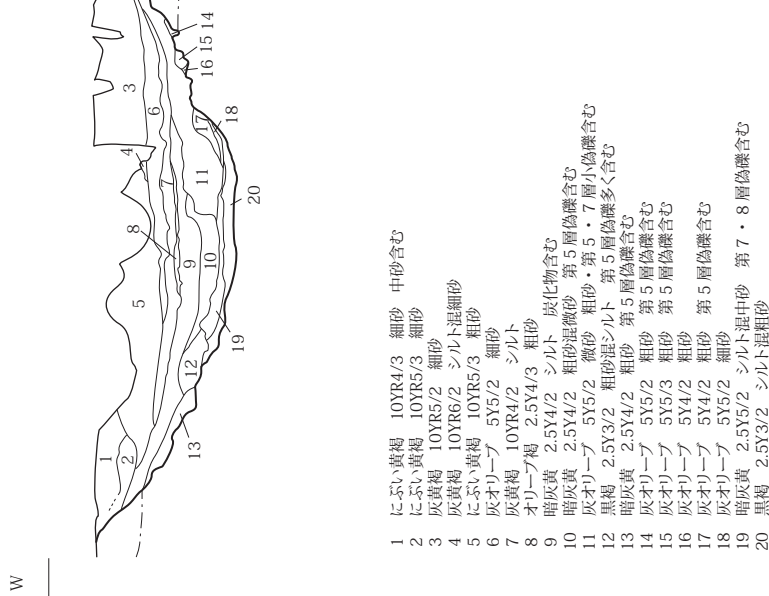
3504溝から出土した土器は、コンテナにして、6コンテナある。上下2層に分割して取り上げられて

3505・3504溝 南側断面



E
T.P.+8.5m

3505・3504溝 中央断面



W

図243 3-2区 第4面 3504・3505溝 断面図

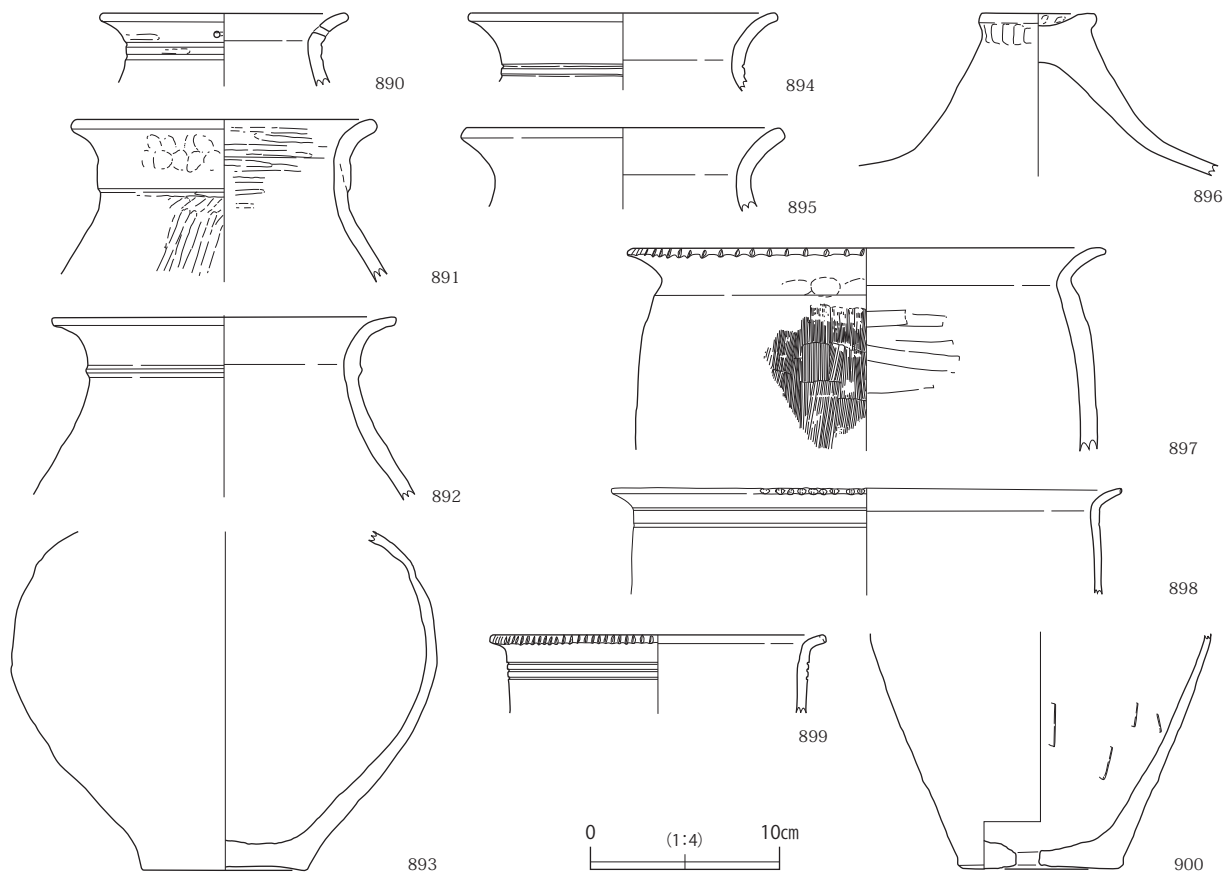


図244 3-2区 第4面 3504溝 出土遺物(1)

いるが、土器からは、時期差は抽出できなかった。いずれも、表面摩滅が著しく、残存状態が悪く、完形のものは出土していない。また、数点のものに、被熱痕跡が認められた。

壺の頸部に、段や削り出し突帯、数条の沈線を施すことから、弥生時代前期中段階に属すと考えられる。

[3505溝] (図238・242・243・245 図版48-1・2・4・101)

3505溝は、3504溝の西側にあたり、幅 2.6~3.0 m・深さ約 0.7 mを測る。3504溝と同規模である。

埋土は、大きく2層に分層でき、上層にはにぶい黄褐色の細砂が、下層には第5層~第7層の偽礫を含む暗灰黄色や灰オリーブ色の粗砂が主に堆積している。

出土した遺物には、土器がある。

1層から出土した土器には、壺蓋・壺・鉢がある。

912は小型の壺蓋で、口径 9.4 cm・器高 3.3 cmを測る。約 1/2を残存し、2個1対の紐孔を穿つ。表面摩滅のため、調整は不明である。

914は口径30cmを測る大型の壺の小破片で、短く外反する口縁部の端部が面をもつ。頸部に沈線1条を施す。915・916は、中型壺の口頸部を残すもので、前者は頸部に削り出し突帯を1帯、後者は沈線2条を施す。前者は表面剥離著しく、調整は不明である。後者は内外面に、横方向のヘラミガキを施す。

913は、口縁部を欠損する中型の壺で、球形の体部に突出する平底である。頸部に沈線2条以上を、体部に段・沈線1条を施す。内外面共に、表面剥離が著しいが、ヘラミガキがわずかに残る。

917は、外反する口縁部をもつ無紋の鉢で、内外面ともに摩滅しており、調整は不明である。

2層からは、壺・甕が出土している。

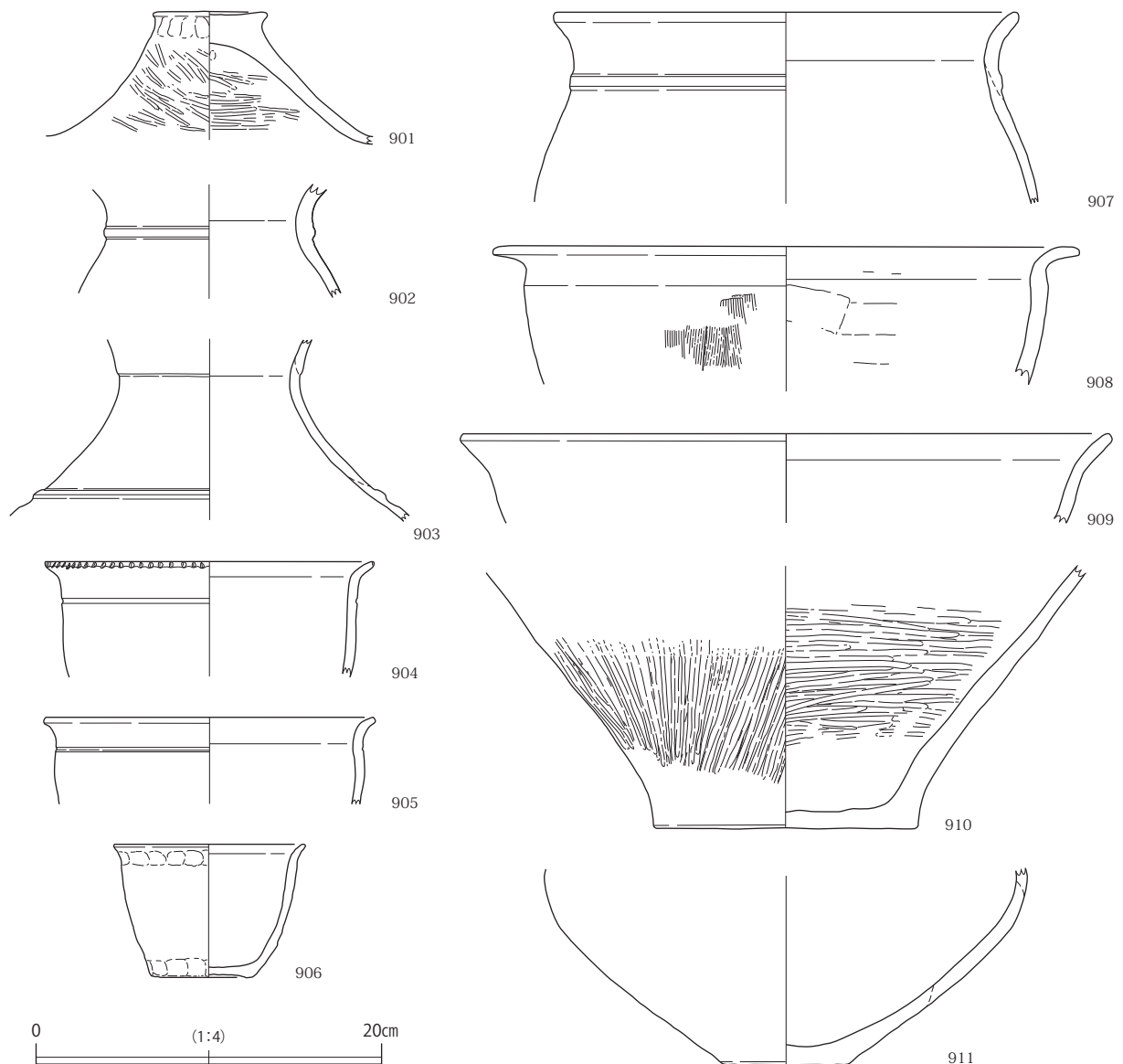


図245 3-2区 第4面 3504溝 出土遺物(2)

918は口頸部破片で、無紋のものである。内外面ともに表面摩滅のため、調整不明である。口縁部端部に煤が付着する。919はやや大型で、口頸部および体部上半を残存し、外反する口縁部の端部が面をもち、短い筒状の頸部である。頸部に沈線3条を施す。口縁部に2個1対の紐孔を穿つ。器壁が、他の土器に比較して薄い。表面剥離のため、調整は不明である。920は小型の壺で、口径6.5cm・器高8.9cmを測る。短く外反する口縁部の端部は尖り気味に終わり、短い筒状の頸部にやや扁平な体部に、平底である。内外面共にナデを施す。頸部および体部に段を施す。921・922は中型のもので、前者は頸部および体部に段を、後者は頸部に貼付突帯を1帯施す。いずれも、表面摩滅のため、調整は不明である。

923は唯一実測できた甕である。外反する口縁部の端部が面をもつ。体部に沈線3条を施す。内外面共に、剥離のため調整は不明である。

1・2層から出土した土器に差意は認められなかった。いずれも、弥生時代前期中段階に属するものである。

3504溝と3505溝の遺物を比較すると、壺の口縁部の外反度が若干後者の方が強い傾向を示す。遺物が少なく、確とはし難いが同時並存か、若干、3405溝が後出する可能性がある。

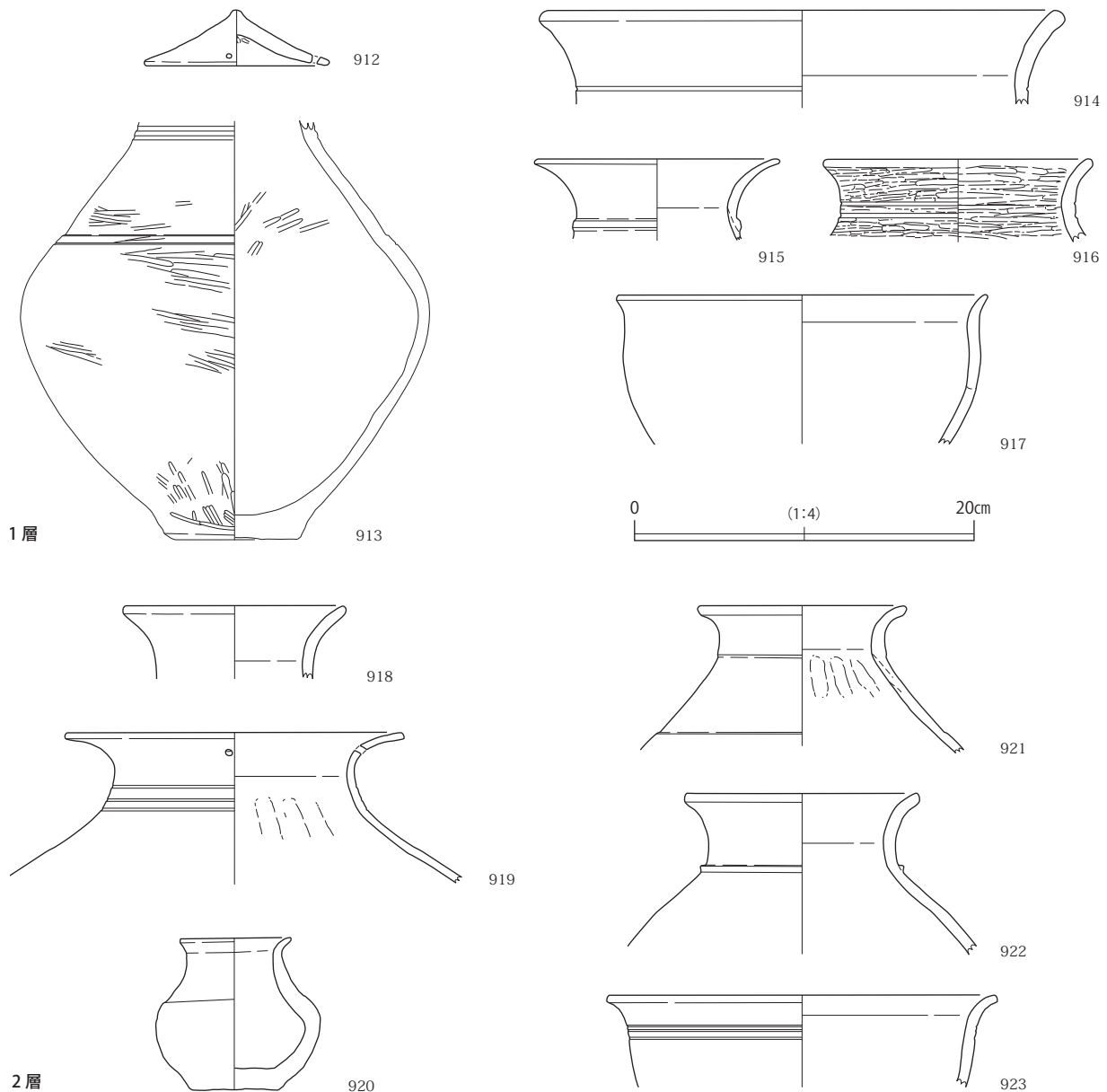


図246 3-2区 第4面 3505溝 出土遺物

掘立柱建物は、3-2区の北東部で1棟のみ検出された。

〔掘立柱建物33〕(図238・242・247 図版50)

この建物は、N-24°-W振った東西方向で、4間×5間の側柱建物である。規模は、4.8×9.3m・44.6㎡を測る。柱間は、南北方向が0.95mで、東西が1.35~1.75mを測り、南北方向の柱間が狭い。

東西方向の東から2間目および西から1間目の南北方向の中心位置に3781柱穴・3818柱穴があり、これらの柱穴もこの建物を構成する柱穴と考えられる。

柱穴の掘形は、円形ないしは不正円形で、約0.3~0.6m・深さ約0.15~0.4mを測る。柱痕は、3734柱穴・3813柱穴以外を除いて残存していた。柱痕の径は0.15~0.2mを測る。柱痕埋土に炭化物や焼土塊が含まれていることから、焼失した可能性が窺われる。

出土遺物は、各柱穴からわずかな土器が出土するが、実測可能なものはなかった。時期が確定できるものとしては、3732柱穴から、弥生時代前期の壺底部が出土している。

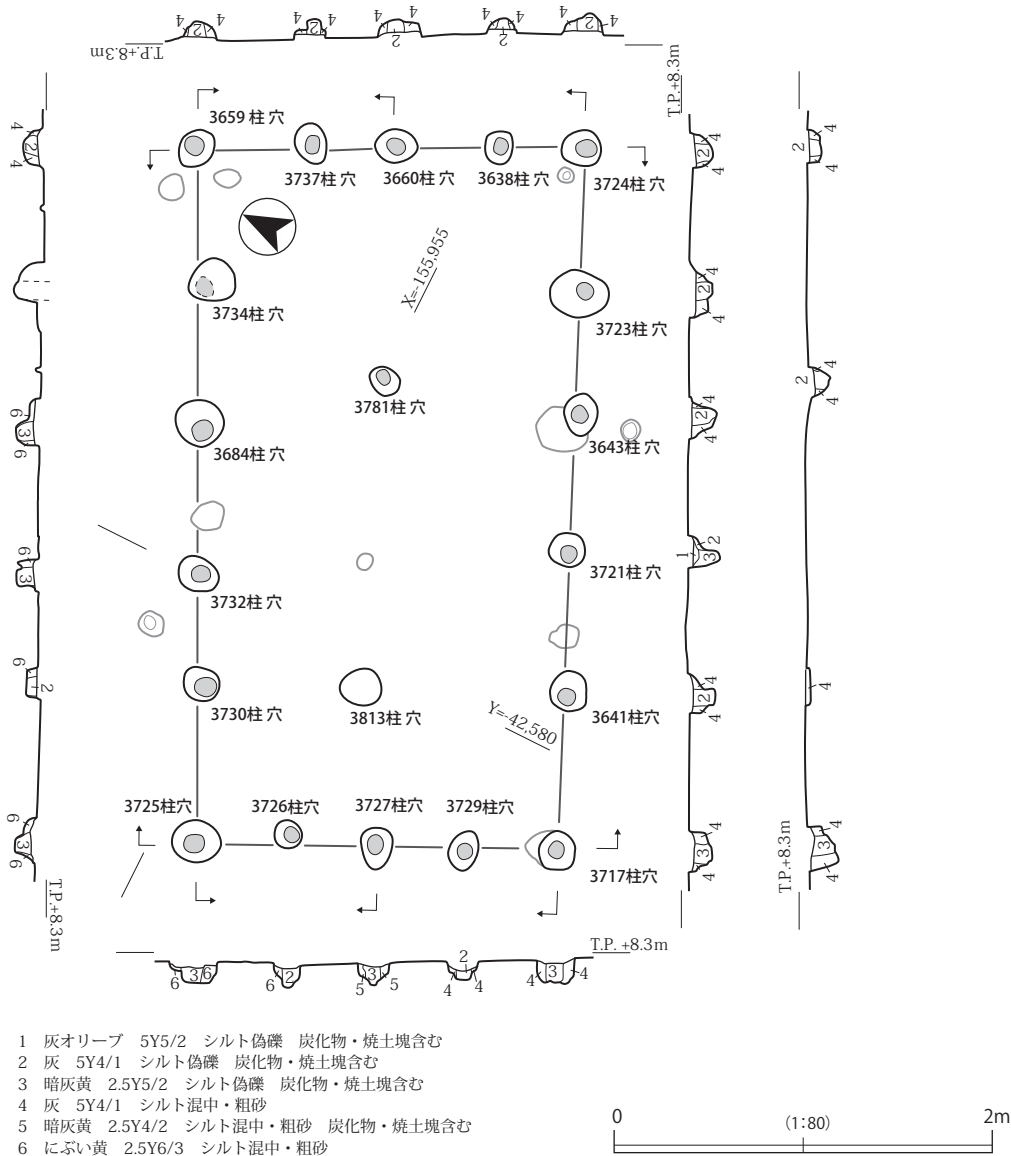


図247 3-2区 第4面 掘立柱建物33 平・断面図

〔平地建物1〕 (図238・242・248 図版49-1)

平地建物は、3-2区の東南部で検出され、東西に長い楕円形の壁溝が巡る。主軸方向が、掘立柱建物33とほぼ同じである。幅0.1~0.15m・深さ0.1~0.2m、短径3.0m・長径5.4mを測る。北西部で1箇所途切れている。周溝内に数基のピットが検出されるが、この建物に付属するものか不明である。

北東部の約1m外側に円弧状に平地建物と平行して3673溝が位置する。溝の規模や埋土が壁溝と同様なことから、この溝はこの建物に付属すると思われる。遺物は出土しなかった。

柱列は、3-2区の南東部の3504溝の東側約1.2mの位置で南北方向に2列検出された。

〔柱列1〕 (図238・242・248 図版49-2)

柱列1は、N-9°-Wの方向で、5基の柱穴が並ぶ。平面形は、円形および不正円形で、径0.15~0.4m、深さは0.15~0.4mを測る。柱間寸法は、一定せず、北から1.7・1.3・1.2・0.65mを測る。総ての柱穴に柱痕が残存しており、径約0.1mを測る。埋土は、掘形に第5・7層の偽礫を含む黄灰色の粗砂混シルトや灰オリーブ色のシルトである。遺物は3717柱穴から、小破片が1点のみ出土しており、時期は不明である。

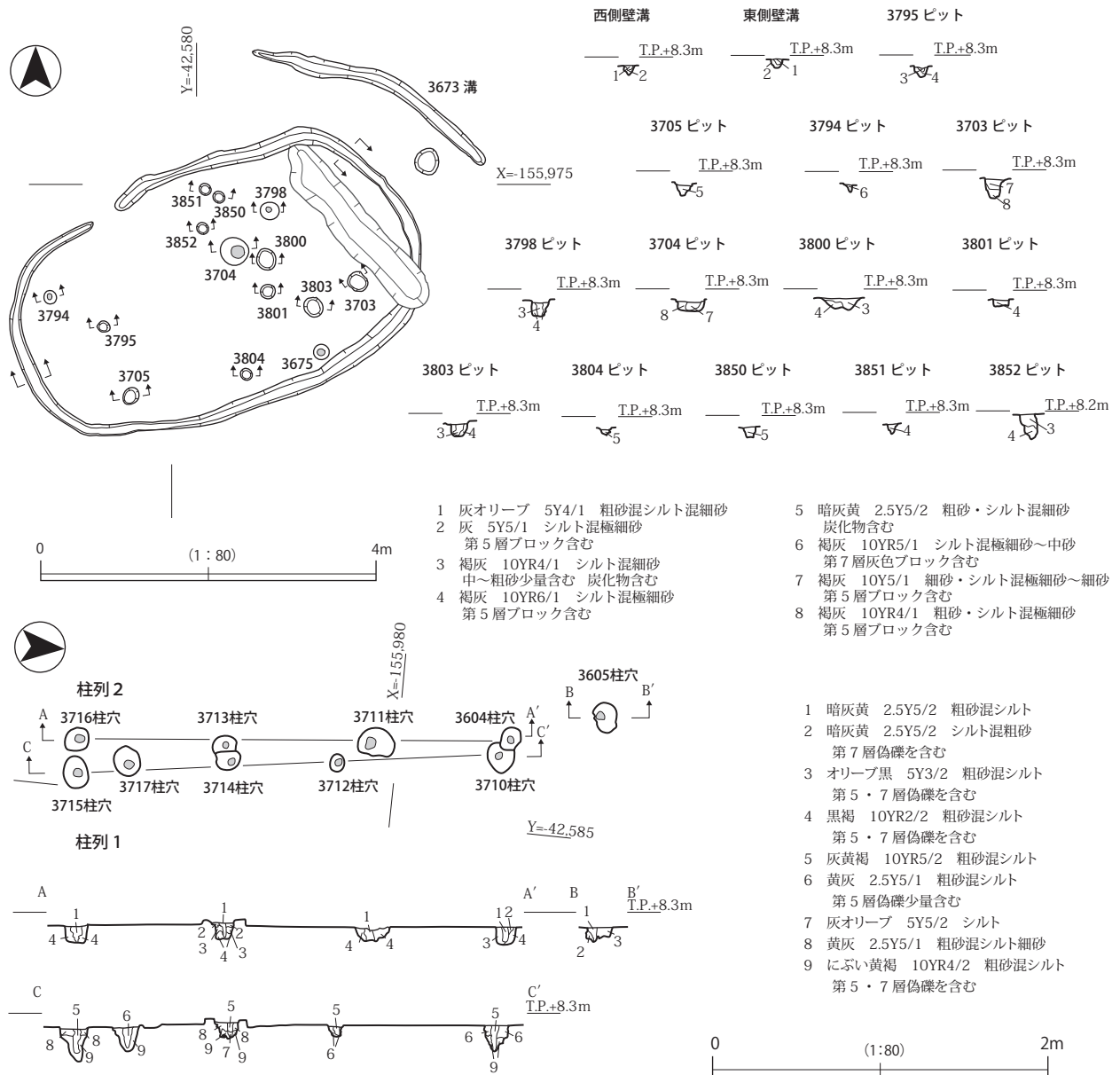


図248 3-2区 第4面 平地建物1 柱列1・2 平・断面図

〔柱列2〕(図238・242・248 図版49-2)

柱列2は、柱列1の西側に位置し、柱列1を切っている。N-7°-Wの方向で、4基の柱穴で構成される。柱穴の平面形は不正円形で、径0.3~0.6m、深さ0.15~0.2mを測る。柱間寸法は、ほぼ等間隔で1.75mを測る。総ての柱穴に柱痕が残存しており、径約0.1mである。掘形埋土は、第5・7層の偽礫を含む暗灰黄色やオリーブ黒色の粗砂混シルトである。遺物は出土していない。

これらの柱列は、遺物からは時期は確定できないが、3504・3505溝とほぼ並んでいることから、同時並存していたと考えられる。

先述の溝以外の溝は、3-1区の全域および3-2区の中央部以東で数条検出される。

〔2659溝〕(図238・241・249)

2659溝は、3-1区の中央部をやや西に振る南北方向の溝で、途中で2方向に枝分かれし、その一方が北端で、2660溝に連結している。南端部で調査区外に延びる。幅0.6~0.8m・深さ0.1mを測る。

埋土は、にぶい黄褐色のシルト混中～極粗砂1層である。遺物は古墳時代前期の土器片が、わずかに

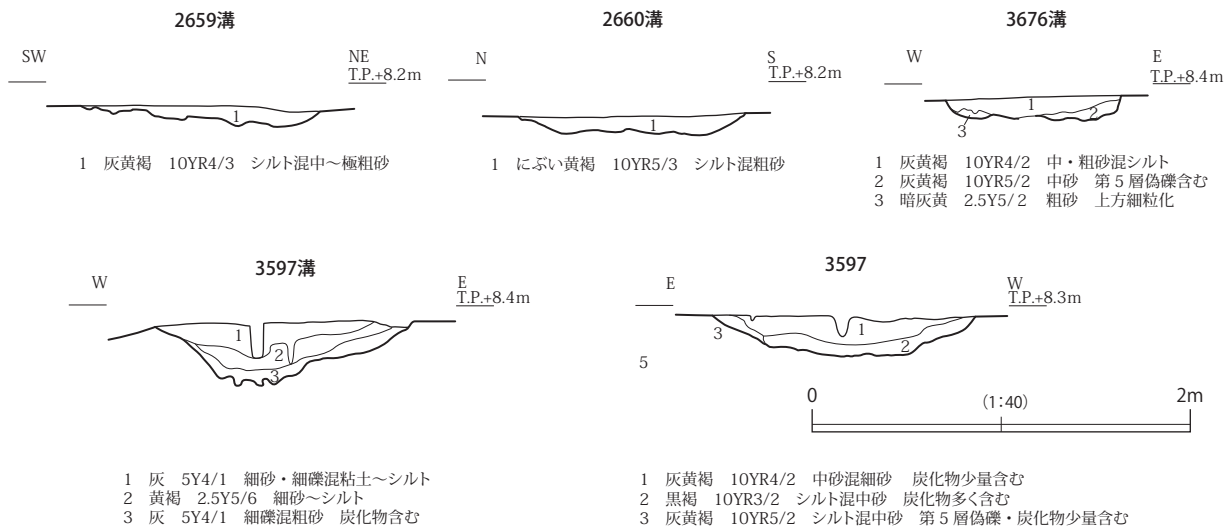


図249 3区 第4面 2659・2660・3597・3676溝 断面図

出土しているが、図示できるものはなかった。

〔2660溝〕 (図238・241・249)

2660溝は、3-1区の北側を東西方向に蛇行する溝で、西端部で先述の2659溝に合流する。幅 0.9 ～ 2.4 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は、にぶい黄褐色のシルト混粗砂が1層である。遺物は、古墳時代前期と思われる土器の小片がコンテナ半杯出土しているが、図示できるものはない。

〔3597溝〕 (図238・242・249 図版46-3)

3597溝は、3-2区の東端部の中央で検出された土坑状の溝で、長さ約 6.0 m・幅 1.35 m・深さ 0.2 ～ 0.35 mを測る。埋土は、3層に細分され、炭化物を含む灰黄褐色シルト～細砂層が主である。

遺物は、弥生時代前期の土器片が出土している。

〔3676溝〕 (図238・242・249)

3676溝は、3-2区の北東端部で検出された南北方向の溝で、北端が調査区外へ延びる。検出長 9.0 m・幅 0.9 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は3層で、灰黄褐色の中砂～粗砂混シルトが主である。

遺物は、土器の小片が出土するが、時期不明である。

〔3553溝〕 (図238・242・250)

3553溝は、3-2区の南端部で検出された、やや北に振る東西方向の溝である。東端は調査区外へ延びる。検出長 3.3 m・幅 0.5 m・深さ 0.3 mを測る。埋土は、6層に細分されるが、主に黒褐色のシルト混細砂～中砂である。3層に偽礫が混じることから、掘り直された可能性がある。

出土遺物には、ミニチュア土器と土製紡錘車がある。924は、径 6.0 cm・厚み 2.2 cmの円盤の中心に焼成前の径 2 mmの穿孔がある。925は、台付無頸壺で、径 2.4 cm・器高 4.0 cmを測る。外面に指押さえを残す。弥生時代前期に属すと考えられる。

〔3569溝〕 (図238・242・250)

3569溝は、3-2区南東端部で検出された北東-南西方向の溝で、両端部が調査区外に延びる。検出長約 15 m・幅 0.3～1.2 m・深さ 0.05～0.4 mを測る。埋土は、部分的に1層から4層に細分される。炭化物を含む灰黄褐色のシルト混粗砂が主体である。

遺物は、土器がわずかに出土している。図示できたのは、壺の口頸部が2点である。926は、中型の壺で頸部に沈線2条を施す。927は大型の壺で、口縁部端部が面をもち、沈線1条を施す。いずれも、

表面剥離著しく調整は不明である。遺物から、この遺構は、弥生時代前期に属すと考えられる。

井戸は、3-1区で、2基検出されている。

〔2673井戸〕(図238・241・251 図版46-2)

2673井戸は3-1区の南西部で検出された。平面形は不正楕円形で、短径 1.7 m・長径 2.0 m、深さ 0.9 mを測る。断面は逆台形状で、上部でラッパ状に開く。埋土は9層に細分でき、黒褐色粗砂混シルトが主体で3~7層に下層ブロックを含む。

遺物は、古墳時代前期初頭の土師器小片がわずかに出土した。

〔2675井戸〕(図238・241・251)

2675井戸は、3-1区南端部中央で検出された井戸である。平面が不正円形で、径 1.2 m・深さ 1.2 mを測る。断面U字状で、2段掘りである。埋土は6層に細分されるが、4層以上に下層の偽礫が含まれることから、埋め戻されたと考えられる。主に、黒褐色の極細砂混シルトが堆積している。

出土遺物は、古墳時代前期初頭の土器片がわずかにあるが、図示しえなかった。

土坑は、3-1区では数基が散在し、3-2区では、3504溝以東で、密に検出されている。

〔2669土坑〕(図238・241・252)

2669土坑は、3-1区の西端部で検出され、南半部を後世の攪乱で消失している。検出長 0.95 m・幅 0.85 m・深さ 0.2 mを測る。

埋土は2層で下層に下層ブロックを含む。遺物は出土していない。

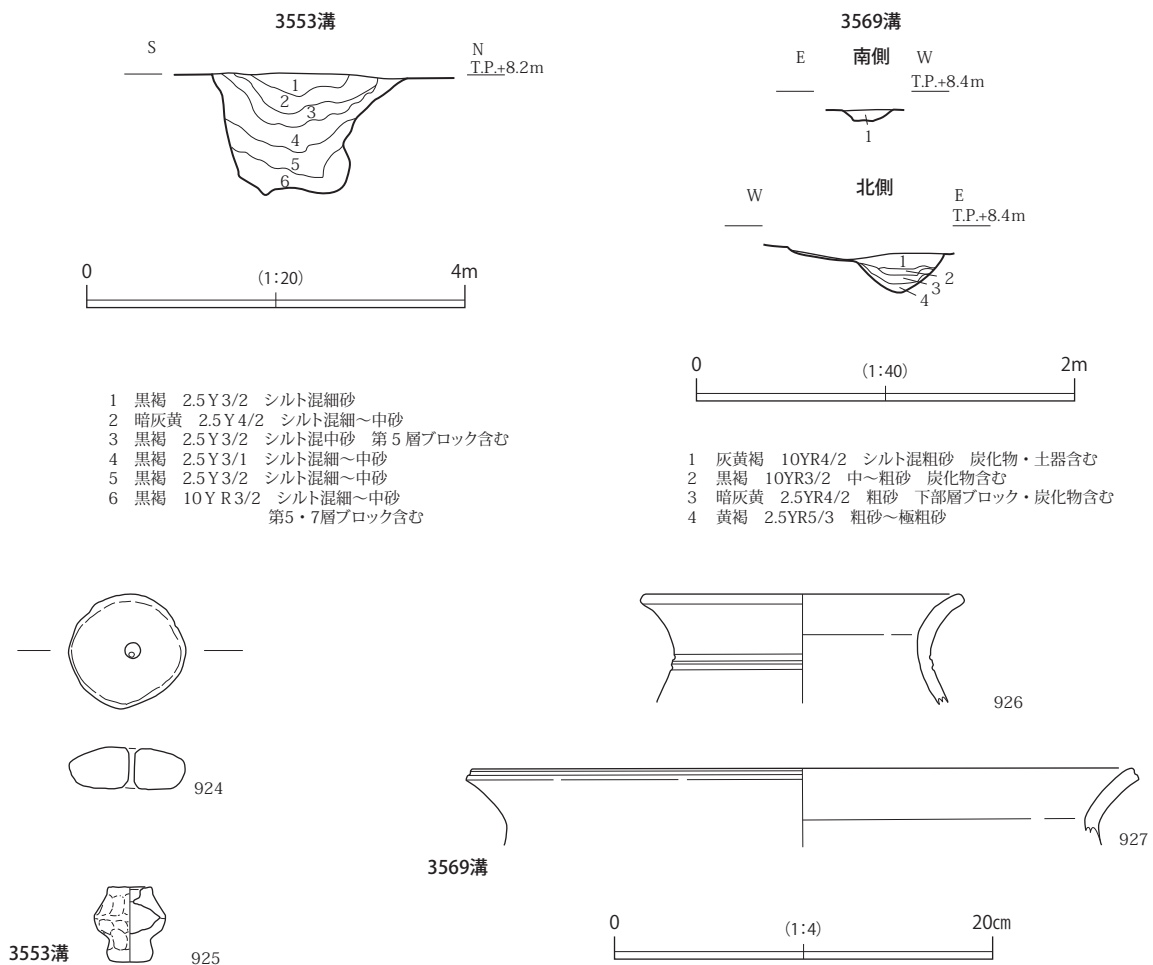


図250 3-2区 第4面 3553溝・3569溝 平・断面図 出土遺物

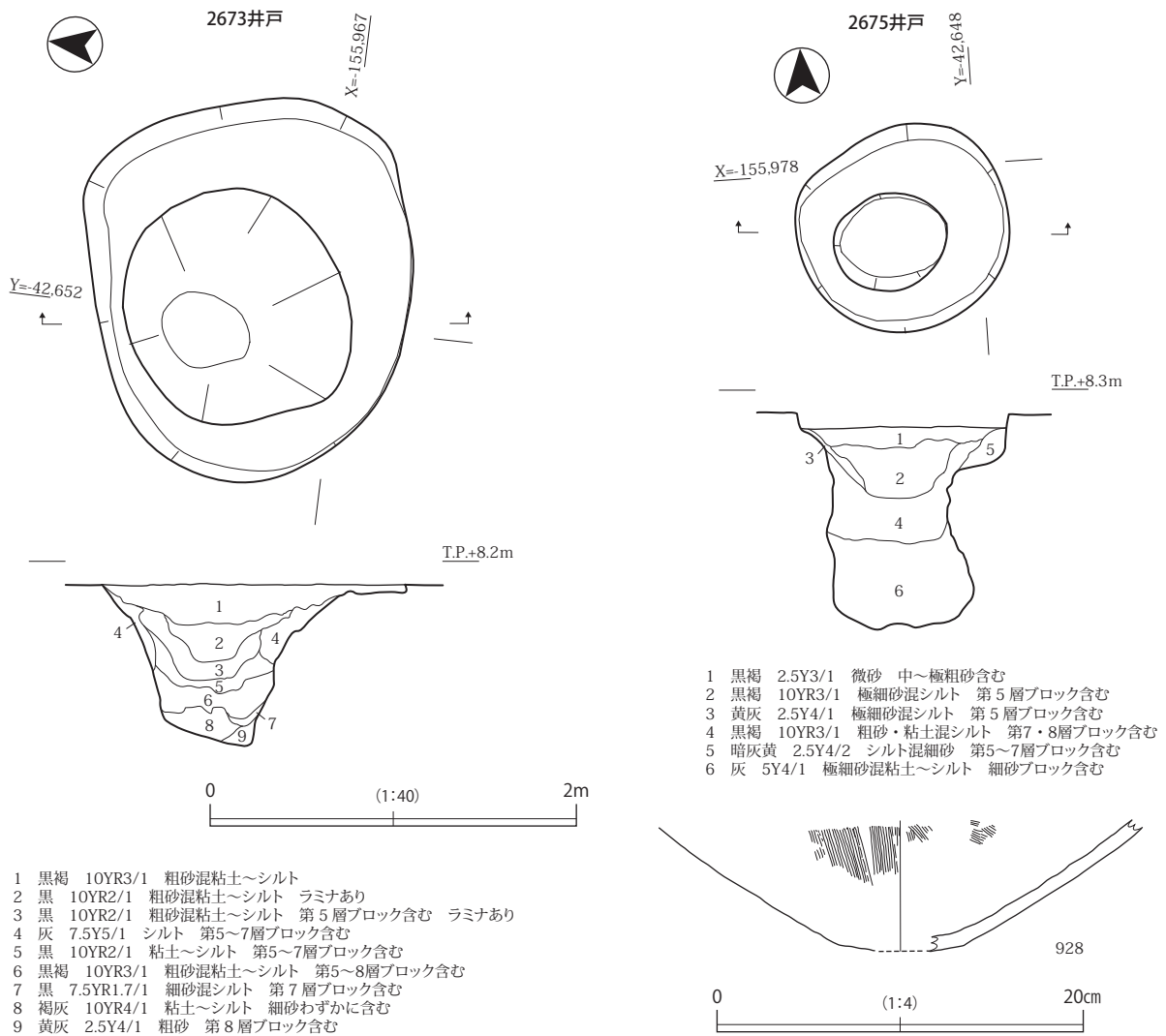


図251 3-1区 第4面 2673・2675井戸 平・断面図 2675井戸 出土遺物

[2674土坑] (図238・241・252 図版46-1)

2674土坑は、3-1区の2673井戸の南約4mに位置する不正円形の土坑である。径0.8m・深さ0.7mを測る。埋土は5層に細分され、黒褐色の細砂～粗砂が混じるシルトである。

出土した遺物で図示できたのは、土師器高杯が1点のみである。929の高杯は、脚台端部を欠損し、杯部に段をもつもので、脚部は挿入式のものである。

遺物から、古墳時代前期初頭に属すると考えられる。

[3478土坑] (図238・242・252)

3478土坑は、3-2区の南半部の平地建物1の約1m南側で検出された。円形の土坑と思われるが、南半部を攪乱で消失している。径0.7m・深さ0.2mを測る。埋土は、暗灰黄色の炭化物を含むシルト混極細砂が1層である。遺物は、弥生時代前期の土器片がわずかに出土している。

[3554土坑] (図238・242・254 図版101)

3554土坑は、3-2区の東南部で検出された土坑で、3569溝を切っている。平面は不正楕円形で、短径0.9m・長径1.1m・深さ0.3mを測る。埋土は3層で黄灰色や褐色のシルト混じりの細砂が主体である。遺物は、図化できたものに弥生時代前期の壺が1点ある。930はやや大型の壺で、頸部に沈線3条を施す。煤が付着し、体部に被熱痕がある。内外面共に表面摩滅のため、調整は不明である。

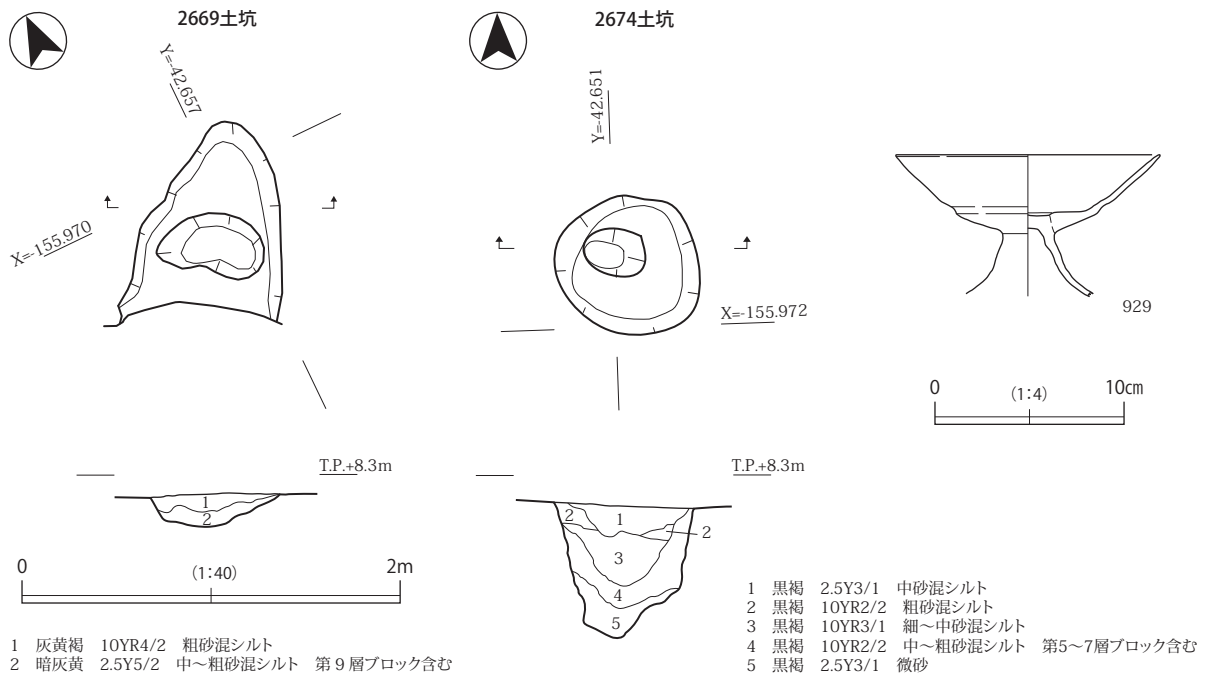


図252 3-1区 第4面 2669・2674土坑 平・断面図 2674土坑 出土遺物

〔3555土坑〕 (図238・242・254)

3555土坑は3-2区の3554土坑の西側で、径1.2m・長径2.45m・深さ0.2mを測る。埋土は3層だが、上層に暗灰黄色の粗砂・シルトが混じる細砂、下層に灰黄色のシルトが混じる極細砂が堆積する。遺物は、弥生時代前期の壺2点と甕1点の計3点を図化している。931は中型壺の口頸部から体部上端のもので無紋である。933は口径52cmを測る大型壺の口頸部破片で、頸部に段を施す。いずれも、内外面伴に、ナデを施す。932は中型甕の底部を欠損するもので、口縁部端部に刻み目を、体部に沈線2条を施す。内外面伴に表面摩滅のため、調整は不明である。二次焼成を受ける。

〔3565土坑〕 (図238・242・255)

3565土坑は3-2区の南半部の平地建物1の南側に接して検出された。南半部は上位の溝に切られている。検出長0.8m・幅1.35m・深さ0.1mである。

埋土は炭化物を含む暗灰黄色の粗砂およびシルトが混じる極細砂～細砂1層である。

〔3590土坑〕 (図238・242・255)

3590土坑は、3-2区の東端部中央付近で検出され、東半部は調査区外へ延びる。検出長0.9m・幅0.8m・深さ0.35mを測る。埋土は、3層に分層できるが、炭化物や焼土、偽礫などを多量に含む灰色の粘土～シルトが主である。

遺物は、弥生時代前期の土器片が出土しているが、図示できなかった。

〔3598土坑〕 (図238・242・254)

3598土坑は、3-2区の東端部中央付近で検出され、確認トレンチで北側を消失し、東側は調査区外へ延びる。北側の3650土坑に続く可能性がある。さらに、形態から溝の可能性もあり、詳細は不明である。深さ0.15mを測る。埋土は2層に分れ、上層に炭化物を含むにぶい黄色のシルトが混じる中砂、下層に炭化物を多量に含む黒褐色の中砂が堆積していた。

遺物は、弥生時代前期の甕を1点のみ図示できた。934は甕の口縁部破片で口縁部端部に刻み目、体部に沈線2条を施す。内外面伴に表面摩滅のため、調整不明である。

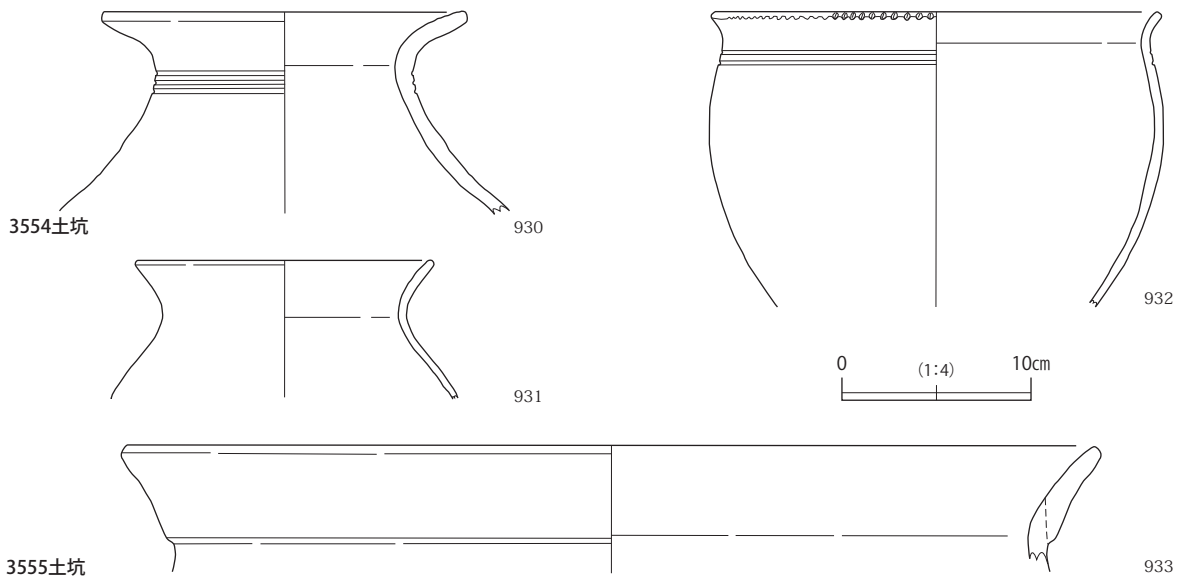
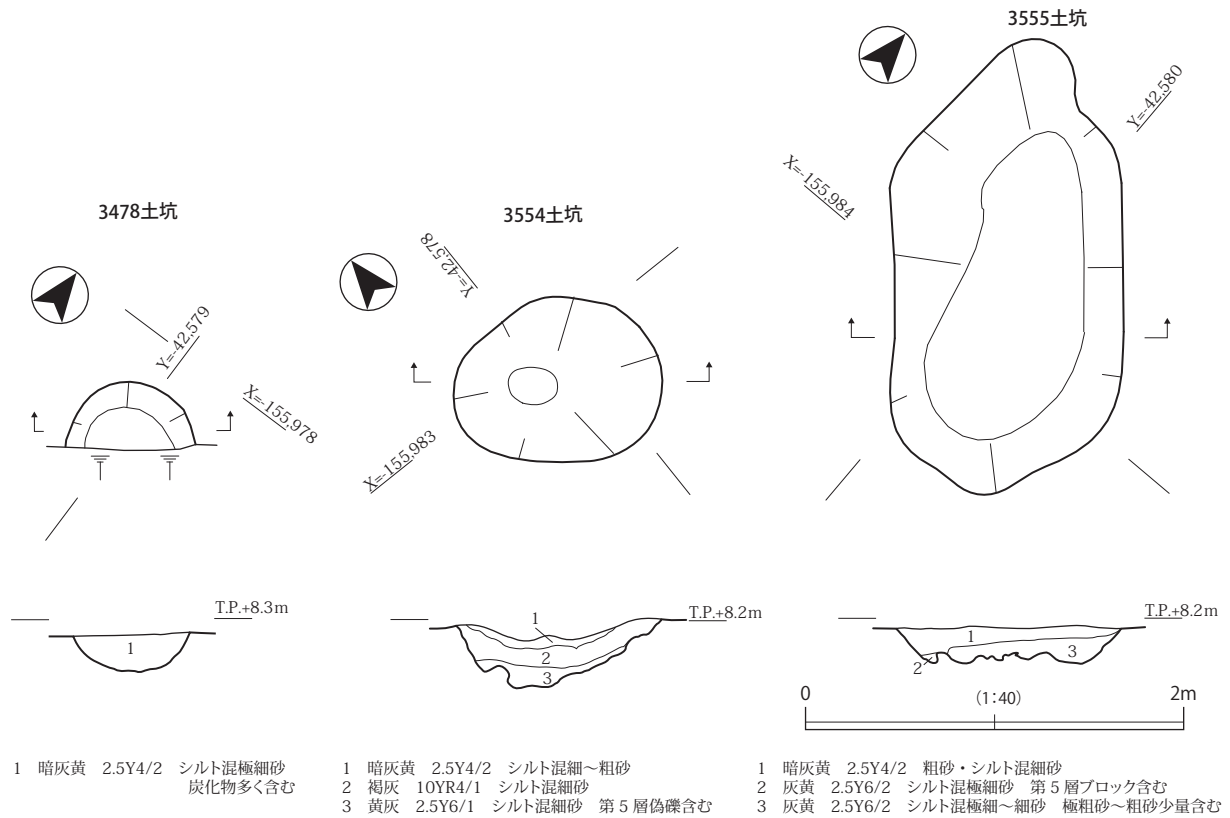


図253 3-2区 3474・3554・3555土坑 平・断面図 3554・3555土坑 出土遺物

[3614土坑] (図238・242・254)

3614土坑は、3-2区南半部の平地建物1の南東約3.5mに位置し、不正楕円形の土坑である。短径0.95m・長径1.15m・深さ0.1mを測る。

埋土は、灰オリーブ色のシルトが混じる細砂～中砂が1層である。

遺物は、土器片が1点のみ出土した。時期は不明である。

[3599土坑] (図238・242・255)

3599土坑は、3-2区の南半部の平地建物1の北側約4mの位置で検出された不正楕円形の土坑であ

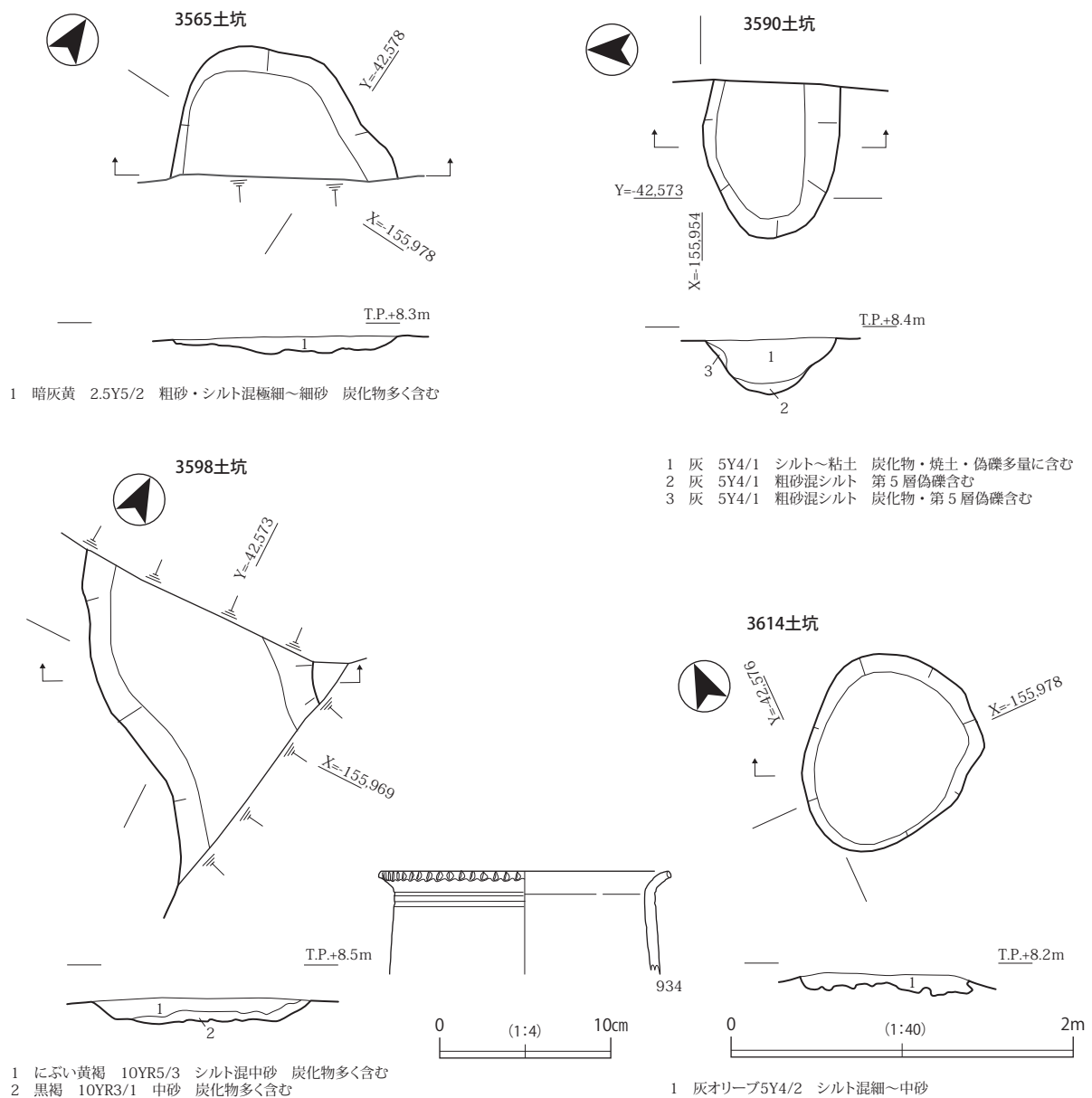


図254 3-2区 第4面 3665・3590・3598・3614土坑 平・断面図 3598土坑 出土遺物

る。短径 0.5 m・長径 1.5 m・深さ 0.4 mを測る。埋土は 4層に区分され、最下層に黒褐色の細砂および中砂、その上層の 3層に炭化物を含む下層ブロックが混じる灰色の微砂が堆積し、薄い間層を挟んで上層に灰黄褐色の粗砂およびシルトが混じる極細砂である。

遺物は、直口の甕が 1点のみ出土している。935 は小型の口縁部から体部上半を残す破片で、口縁部上端に面をもつ。外面に煤が付着する。弥生時代前期かと考えられるが、口縁部外面に強いヨコナデを施すことと、器壁が薄いことから、弥生時代中期前半の鉢の可能性もある。

〔3603土坑〕 (図238・242・255)

3-2区の南半部の3504溝の東側約 1 mの位置で検出された楕円形の土坑である。短径 1.9 m・長径 2.4 m・深さ 0.15 mを測る。

埋土は 3層で、下層の 2層には下層の偽礫が含まれる。上層は炭化物を含む灰色のシルトが混じる中砂～粗砂である。

遺物は、土錘およびサヌカイト片が出土した。石器に関しては、第 5 節に譲る。

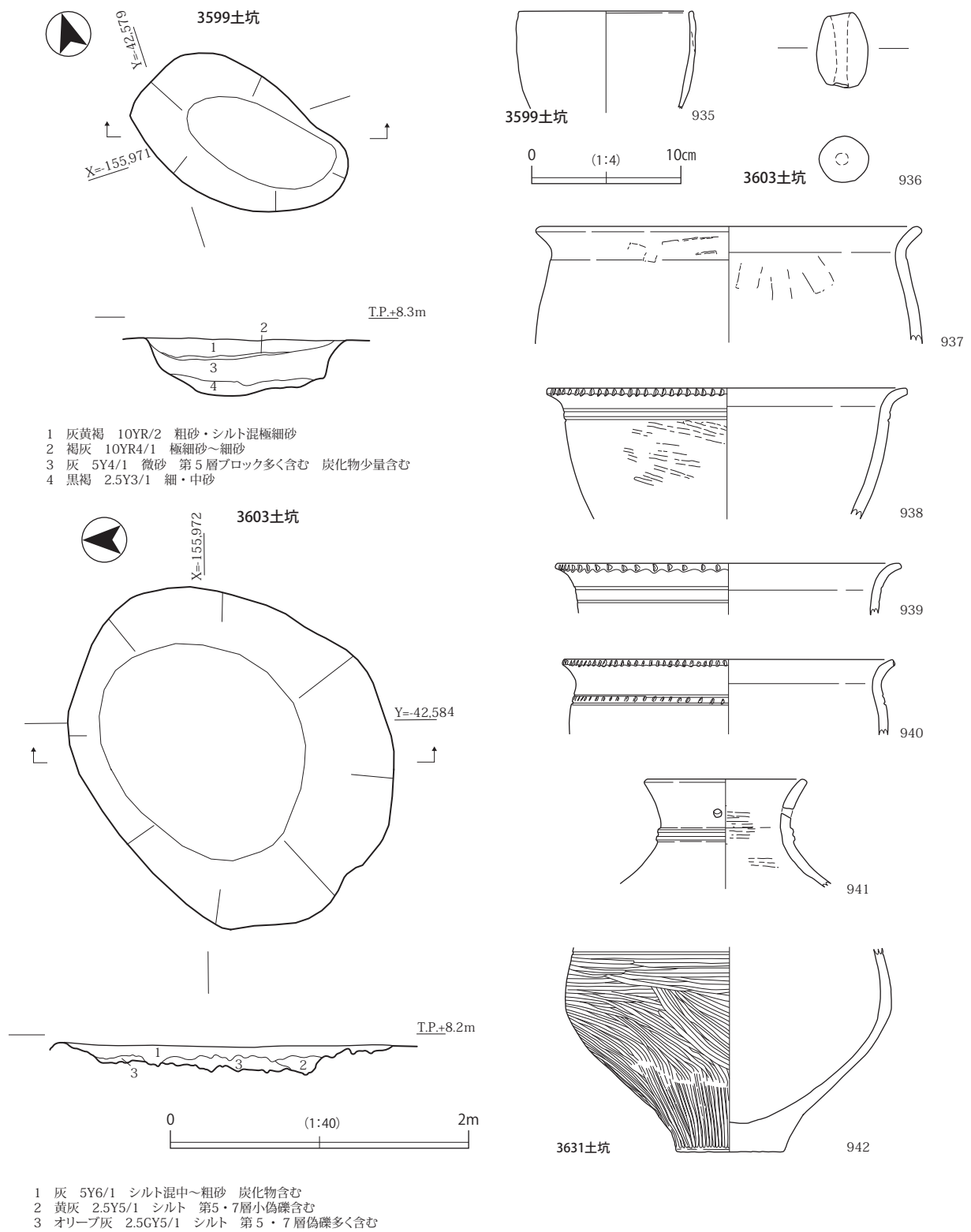


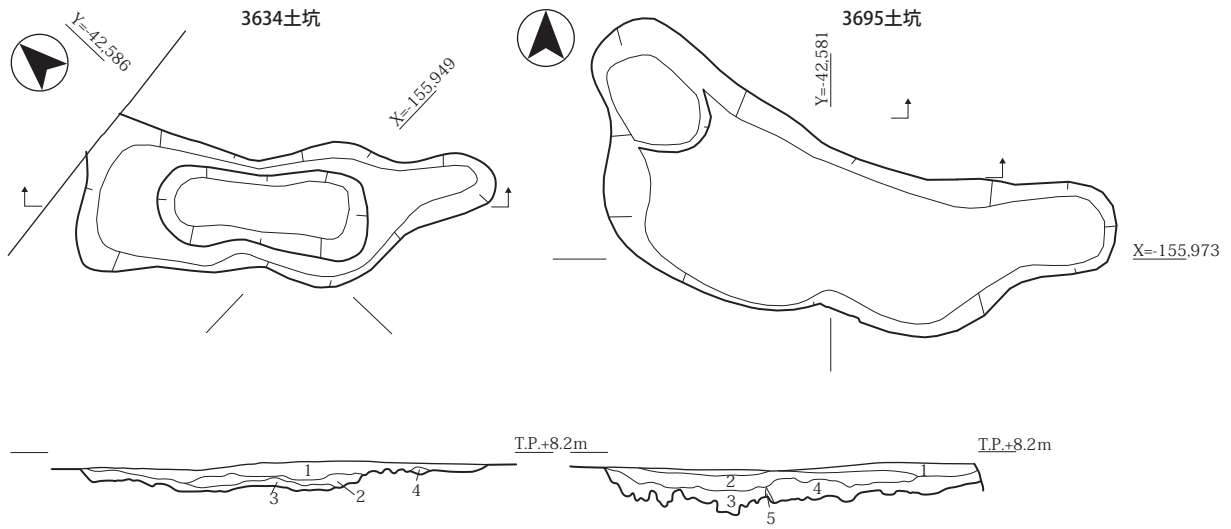
図255 3-2区 第4面 3599・3603土坑 平・断面図 3599・3603・3631土坑 出土遺物

[3631土坑] (図238・255 図版102)

3631土坑は、3-2区の北東部で検出された不定形の土坑である。出土遺物には、弥生時代前期の壺941・942、甕937～940がある。

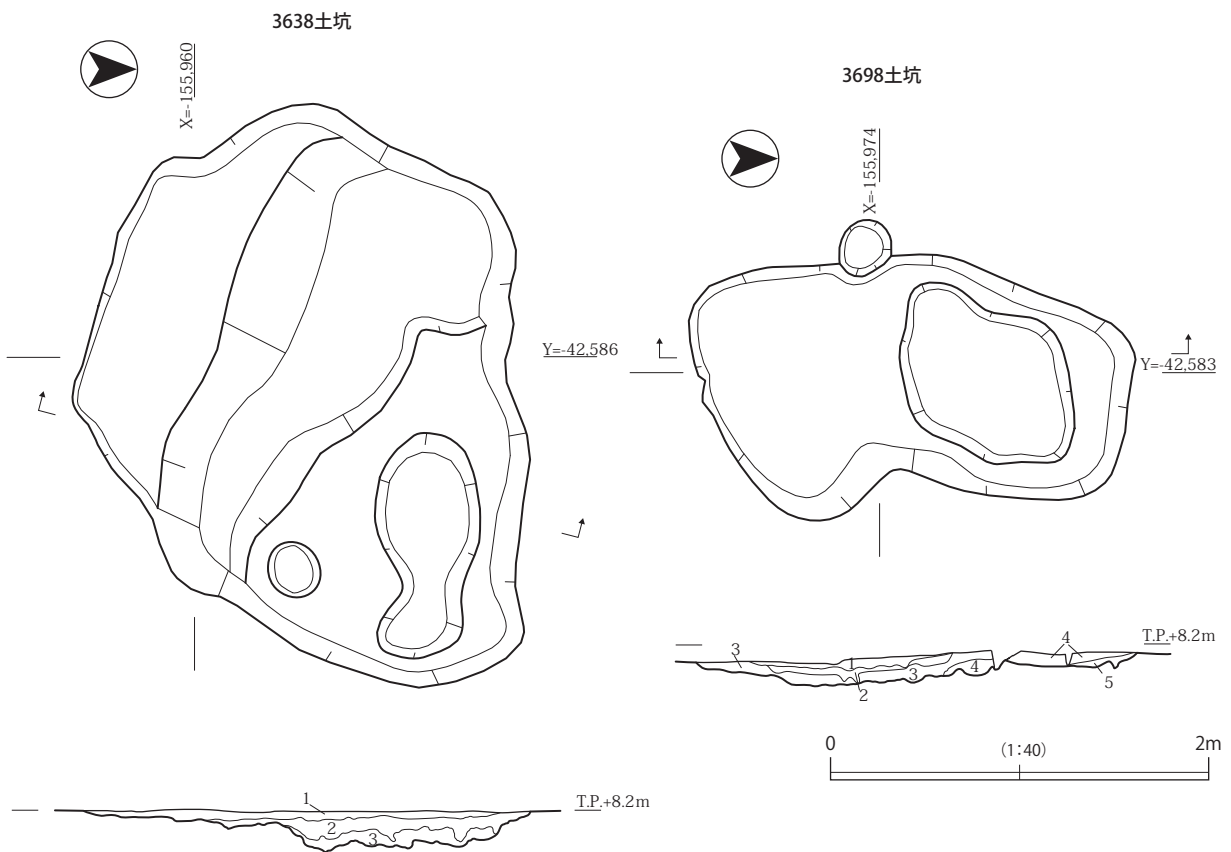
[3634土坑] (図238・242・256・257)

3634土坑は、3-2区の北東部で検出された不定形の土坑である。長さ2.15m・幅0.55～0.8m・深さ



- 1 オリーブ黒 5Y3/1 シルト混細～中砂
粗砂～極粗砂少量・炭化物多く含む
- 2 灰色 5Y4/1 シルト混細砂 第5層偽礫含む 中～粗砂・炭化物少量含む
- 3 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂混シルト 第5・7層偽礫含む
- 4 灰オリーブ 5Y5/2 粗砂混細砂

- 1 黄灰 2.5Y6/1 中～粗砂
- 2 黄灰 2.5Y5/1 シルト混粗砂 土器多量含む
- 3 黄灰 2.5Y4/1 中砂混シルト
- 4 黒褐 10YR3/1 中砂混シルト 第7層偽礫多量含む
- 5 灰黄褐 10YR4/2 中砂混シルト



- 1 にぶい黄 2.5Y6/3 シルト混中砂～粗砂
- 2 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混中砂 炭化物多く含む
- 3 灰オリーブ 5Y5/3 シルト混中砂 第5層偽礫多く含む

- 1 灰黄 2.5Y6/2 中砂
- 2 灰 5Y4/1 粗砂混シルト
- 3 褐灰 10YR4/1 中砂混シルト 炭化物・土器多く含む
- 4 黄灰 2.5Y6/1 中砂混シルト 第5層偽礫含む
- 5 灰オリーブ 5Y5/2 中砂混シルト 炭化物多く含む

図256 3-2区 第4面 各土坑 平・断面図

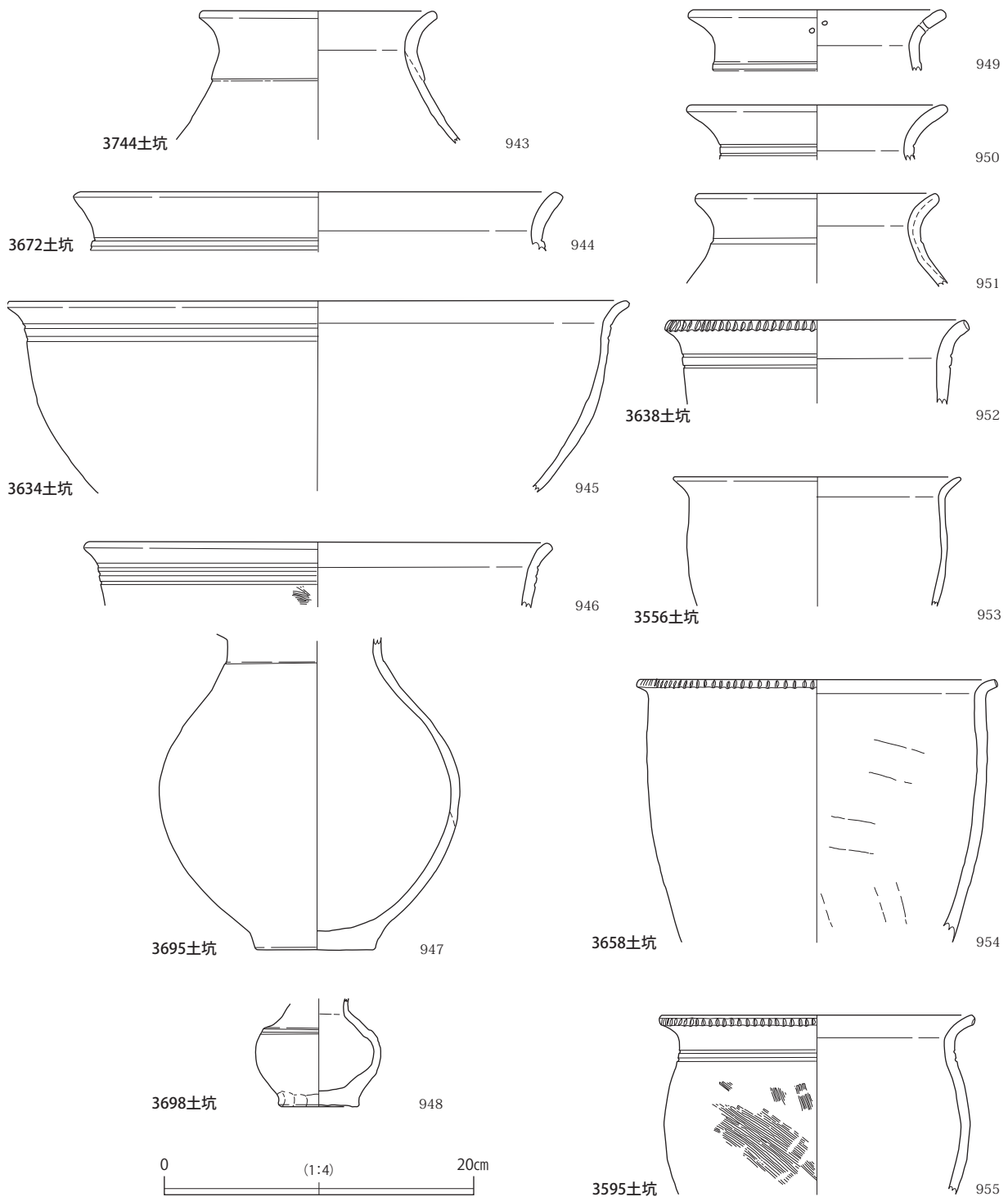


図257 3-2区 第4面 各土坑 出土遺物

0.15mを測る。埋土は、4層に細分されるが、おおよそ、下層に偽礫や炭化物を含む。

遺物は、弥生時代前期の鉢が図化できた。他に石器が数点出土している（第5節 参照）。

945は、口径40cmの大型のもので、底部を欠損する。口縁部が短く外反し、端部が面をもつ。体部に沈線2条を施す。内外面共に表面摩滅のため、調整は不明である。

〔3638土坑〕（図238・242・256・257）

3638土坑は、3-2区の東半部の掘立柱建物33の約2m西側で検出された不定形の土坑である。規模は2.5×2.7m・深さ0.2mを測る。南側に段差が2段あり、北側がわずかに深くなる。埋土は3層で、

最下層に偽礫を含む灰オリーブ色のシルト混じりの中砂、中層に炭化物を含む暗灰黄色のシルト混じりの中砂、上層ににぶい黄色のシルト混じりの中砂～粗砂が堆積していた。

遺物には、弥生時代前期の壺・甕が出土した。949 は壺の口頸部破片で、頸部に削り出し突帯 1 帯を施す。口縁部に 1 個の紐孔を穿つ。頸部外面にわずかにヘラミガキを残す。950 も同様の小片で、頸部に 2 条以上の沈線を施す。951 は、体部外面にわずかにヘラミガキを残す。頸部に沈線 1 条を施す。952 は、甕の口縁部片で、体部内外面にナデを施す。口縁部端部に刻み目、体部に沈線 2 条を施す。

〔3695土坑〕（図238・242・256・257 図版51－3・4）

3695土坑は、3－2区の東半部の平地建物1の北側 1.5 mに位置し、溝状の不定形の土坑である。規模は、長さ約 3 m・幅0.5～0.85 m・深さ0.25 mを測る。埋土は5層に細分できるが、概ね、下層に中砂が混じるシルト、上層に粗砂が堆積している。2層から土器が出土している。

土器には、壺・鉢が各 1 点ある。946 は大型の鉢の外反する口縁部の小片で、体部外面にハケメ・内面にナデを施す。体部に 3 条の沈線を施す。947 は口縁部を欠く壺で、球形の体部に突出する平底である。内外面伴に表面剥離のため、調整は不明である。体部外面に煤が付着する。二次焼成を受ける。

〔3698土坑〕（図238・242・256・257 図版102）

3698土坑は、3－2区の東半部の平地建物1の北東部で検出された不定形の土坑で、3603土坑・3695土坑と隣接する。規模は、長さ 2.4 m・幅 1.2～1.3 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は5層に細分されるが炭化物を含む中砂が混じるシルト層が主である。3層から、土器が出土している。遺物には、弥生時代前期の壺がある。他は小片で図化できなかった。948 は小型で口縁部を欠損する。やや扁平な体部に突出する平底をもつ。体部に段・沈線 1 条を施す。表面剥離のため調整は不明である。

〔3835土坑〕（図238・242・258 図版51－1・2・102）

3835土坑は、3－2区の東半部の3504溝の東側および、3603土坑の北側で検出された不定形の土坑である。長さ 3.7 m・最大幅 2.0 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は4層で、暗灰黄色の炭化物を多く含む中砂混じりのシルト層が主である。遺物は2層から出土している。

遺物は、弥生時代前期の大型の壺が 1 点のみ図化できた。956 は、口径 34.4 cm・器高 54.4 cmを測る。体部中央部で接合資料が無かったため、図上復原である。短く外反する口縁部の端部は面をもち、短い筒状の頸部に球形の体部に突出する平底である。表面剥離のため調整は不明である。頸部外面に、指押さえを残す。口縁部端部に沈線 1 条を施す。

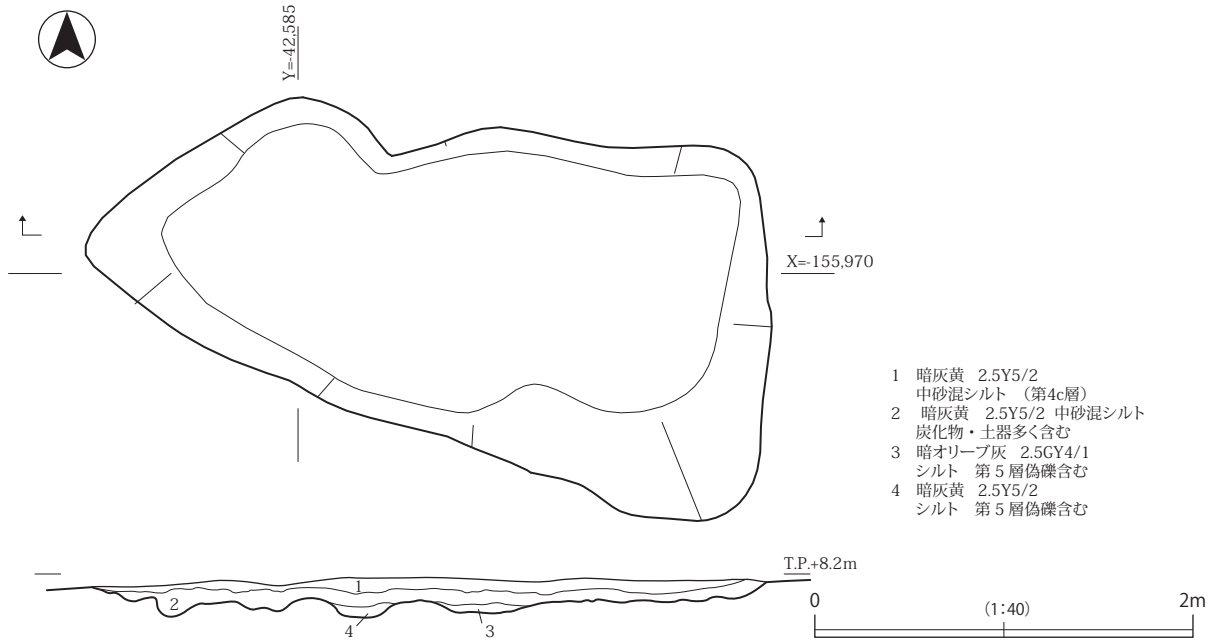
他に、土坑から出土した遺物には、図 257・図版 102 に示すものがある。

943 は、3－2区の北東端部で検出した3744土坑から出土した弥生時代前期の壺である。口頸部から体部上半を残すもので、頸部に段を施す。

944 は、3－2区の南半部の平地建物1の北側で検出された3672土坑から出土した。弥生時代前期の大型壺の口頸部破片で、外反する口縁部の端部が面をもつ。頸部に削り出し突帯を 1 帯施す。内外面伴にナデを施す。

953 は、3－2区の南半部平地建物1の南西部で検出された3556土坑から出土した。弥生時代前期の甕の口縁部破片で、無紋のものである。内外面伴に表面剥離のため調整は不明である。口縁部内外面に煤が付着する。二次焼成を受ける。

955 は、3－2区の東端部中央で検出された3595土坑から出土した。弥生時代前期の甕で、体部が膨らみ、体部外面にヘラミガキを、内面にナデを施す。口縁部端部に刻み目・体部に沈線 2 条を施す。



- 1 暗灰黄 2.5Y5/2
中砂混シルト (第4層)
- 2 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂混シルト
炭化物・土器多く含む
- 3 暗オリーブ灰 2.5GY4/1
シルト 第5層偽礫含む
- 4 暗灰黄 2.5Y5/2
シルト 第5層偽礫含む

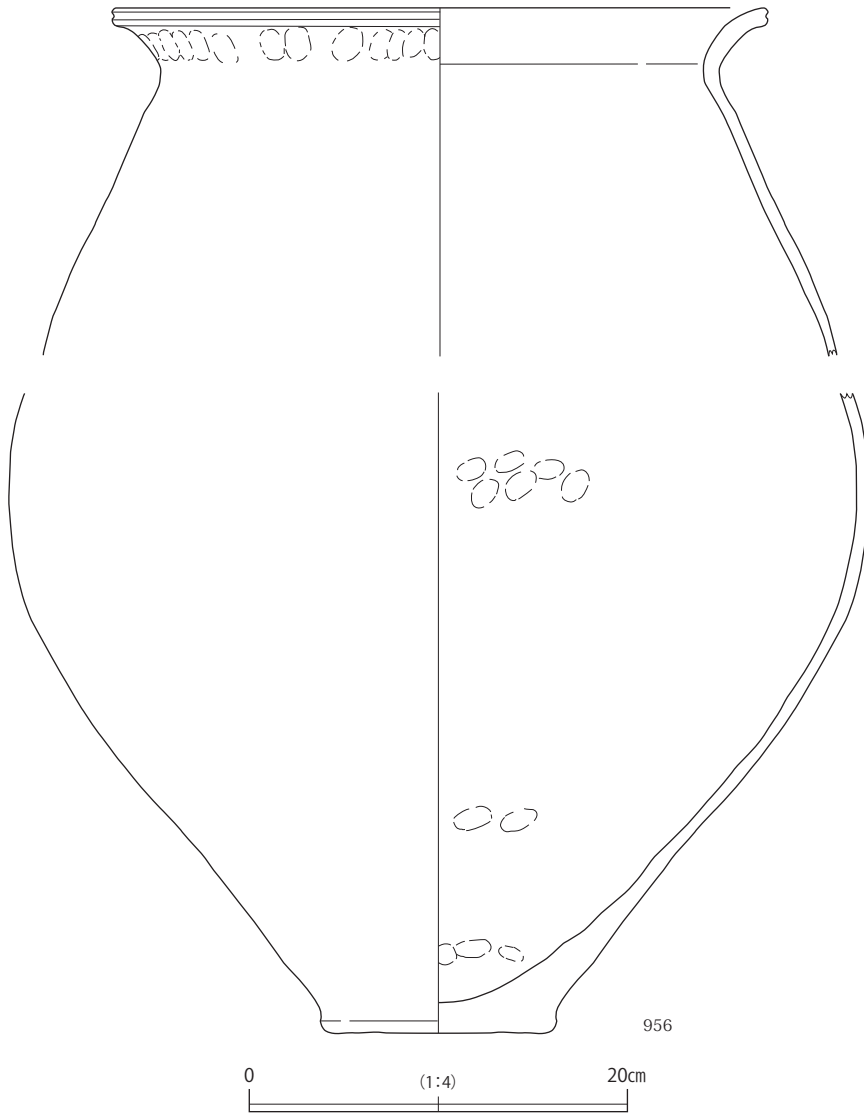


図258 3-2区 第4面 3835土坑 平・断面図 出土遺物

ピットは3区全域に散在するが、3-2区東半部のピットには、柱痕の残るものもあるが、建物に復原できるものはない。

[3784・3785・3819ピット] (図238・242・259)

3-2区東半部の北側で、北西-南東方向に並んで検出されたピットで、平面が不正円形で、径0.3~0.4m・深さ約0.4mを測る。柱痕は総てにあり、径0.1mを測る。

他に構成できるピットがないことから、建物に復原できなかった。

[3632ピット] (図238・242・259)

3-2区の3504溝の東肩部で検出したピットで、土師器杯が1点のみ出土した。958は約2/3を残す。飛鳥時代のものである。

[3640ピット] (図238・242・259)

3-2区の掘立柱建物33の南側約6mに位置する。円形の径0.35m・深さ0.2mを測り、径0.15mの柱痕が残る。

遺物は、弥生時代前期壺の口頸部から体部上半の破片が出土した。頸部に沈線2条を施す。

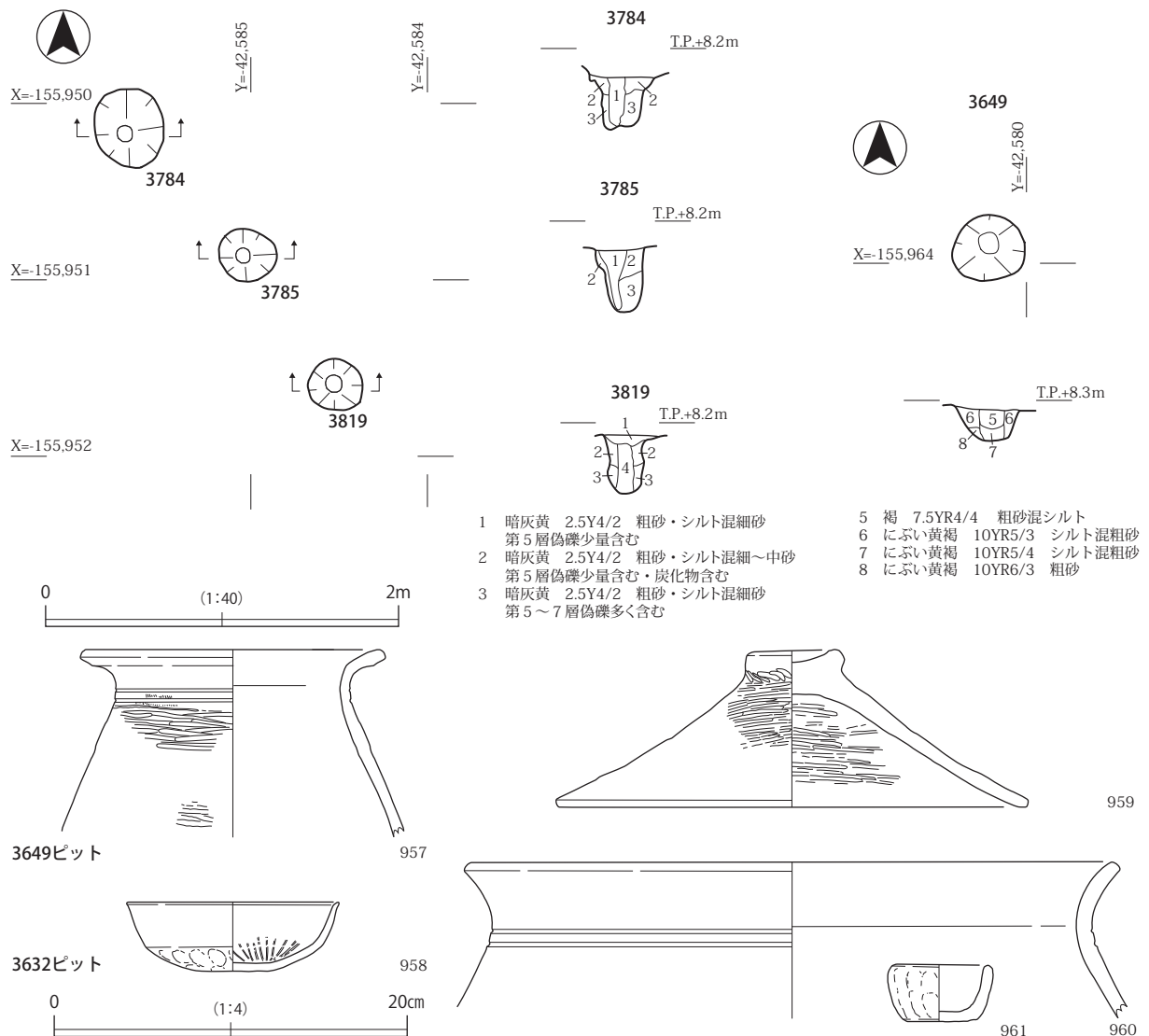


図259 3-2区 第4面 各ピット 平・断面図 3632・3649ピット 出土遺物 第4面 出土遺物

5. 第6面 (図版52-1)

第6面は、第7層上面で検出された遺構面で、先述したとおり、3-2区の第4面の保存のため、3-1区のみで検出している。主な遺構としては、流路を3条検出している。他に、倒木痕を検出してい



図260 3区 第6面 平面図

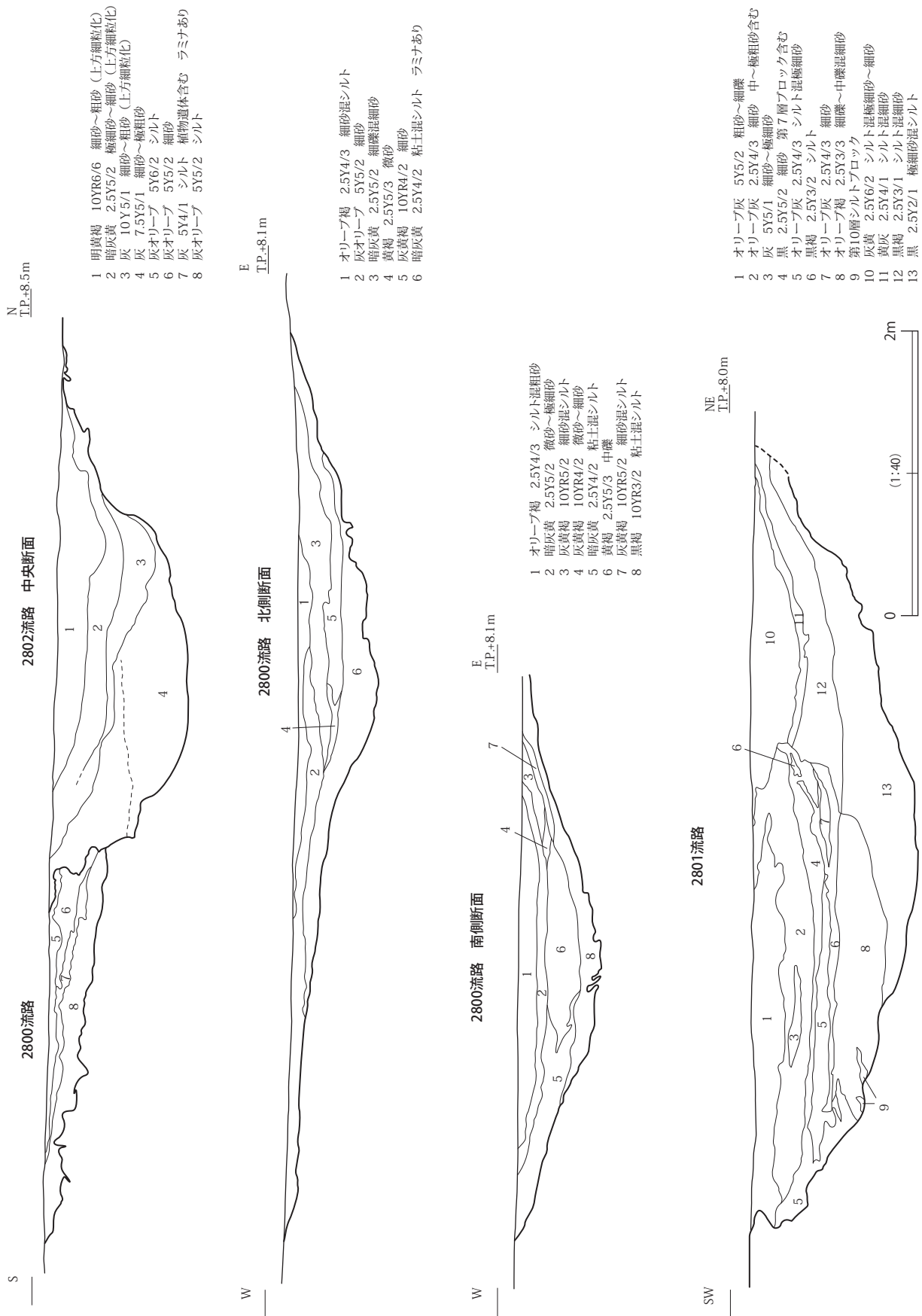


図261 3-1区 第9面 2800~2802流路 断面図

る。

〔2800～2802流路〕（図260・261 図版52－2・3）

2880流路は、3－1区の西端部を南西から北東に向け弧状に伸び、北端で2801流路と南端で2082流路と合流する。幅 2.4～5.4 m・深さ 0.6 mを測る。埋土は、下層にシルト層が、上層に微砂～粗砂が堆積している。

遺物は、弥生時代前期の土器片がわずかに出土している。図化できるものは無い。

2801流路は、3－1区北側を東西方向に蛇行して流れる。幅 5.1～6.0 m・深さ 1.1 mを測る。2800流路同様に下層にシルト層が、上層に細砂～細礫が堆積していた。

遺物は出土していない。

2802流路は、3－1区の南西端で検出された南東から西へ屈曲して流れ、2800流路を切っている。幅 2.4～5.8 m・深さ 0.9 mを測る。埋土は、細砂～粗砂が堆積していた。

遺物は、弥生時代以降の叩き目のある甕の体部破片と古墳時代前期初頭と思われる高杯の脚台部破片が出土したのみである。これらの遺物は、混入とみられる。

この流路は、1区の2872流路に繋がると考えられる。

6. 第10面（図版53－2・3）

第10面は、第11層上面で検出された遺構面で、3－1区の南側部分で、下層確認のために、掘り下げたトレンチである。

遺構は、流路を1条検出している。

6002流路は、断面観察から第9c層から層から切り込まれていることが確認できた（図233 参照）。

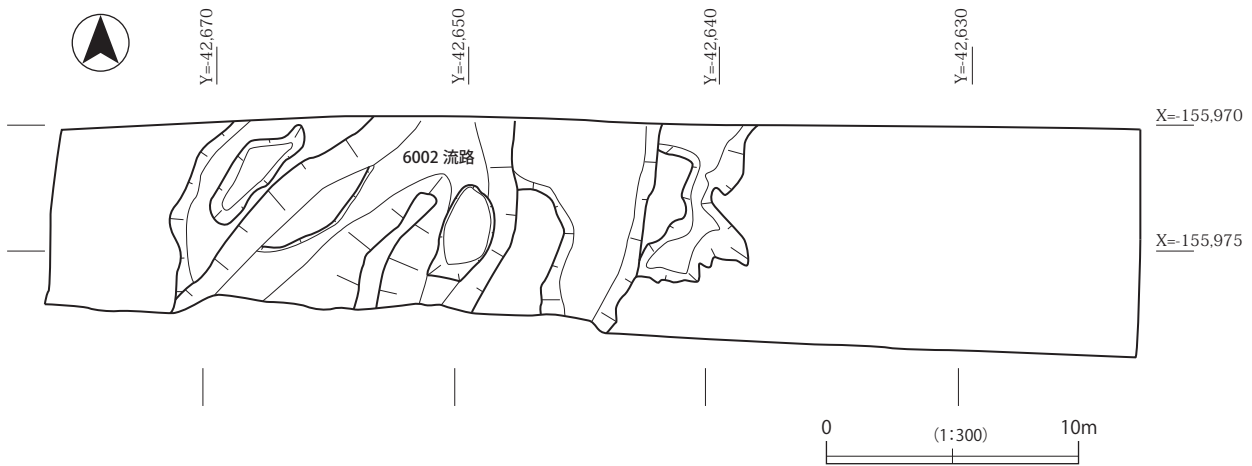


図262 3区 第10面 平面図

幅 18.4 m・深さ約 2 mを測る。遺物は出土していない。

〔第10面 出土遺物〕（図263）

第10面から、縄文時代晩期の深鉢が1点のみ出土している。962は、底部破片で突出する平底である。内外面伴に、ヘラケズリを施す。角閃石を含む南河内産のものである。

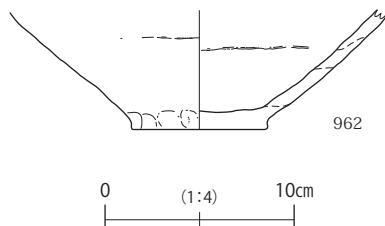


図263 3区 第10面
出土遺物

註1) 銅の成分分析は、永田由香氏に協力を得た。

第4節 4区の成果

4区の調査は、南側に4-1区、北側に4-2区と2分される。

1. 基本層序

4区の基本層序は、南壁断面の観察（図264）から、以下ようになる。

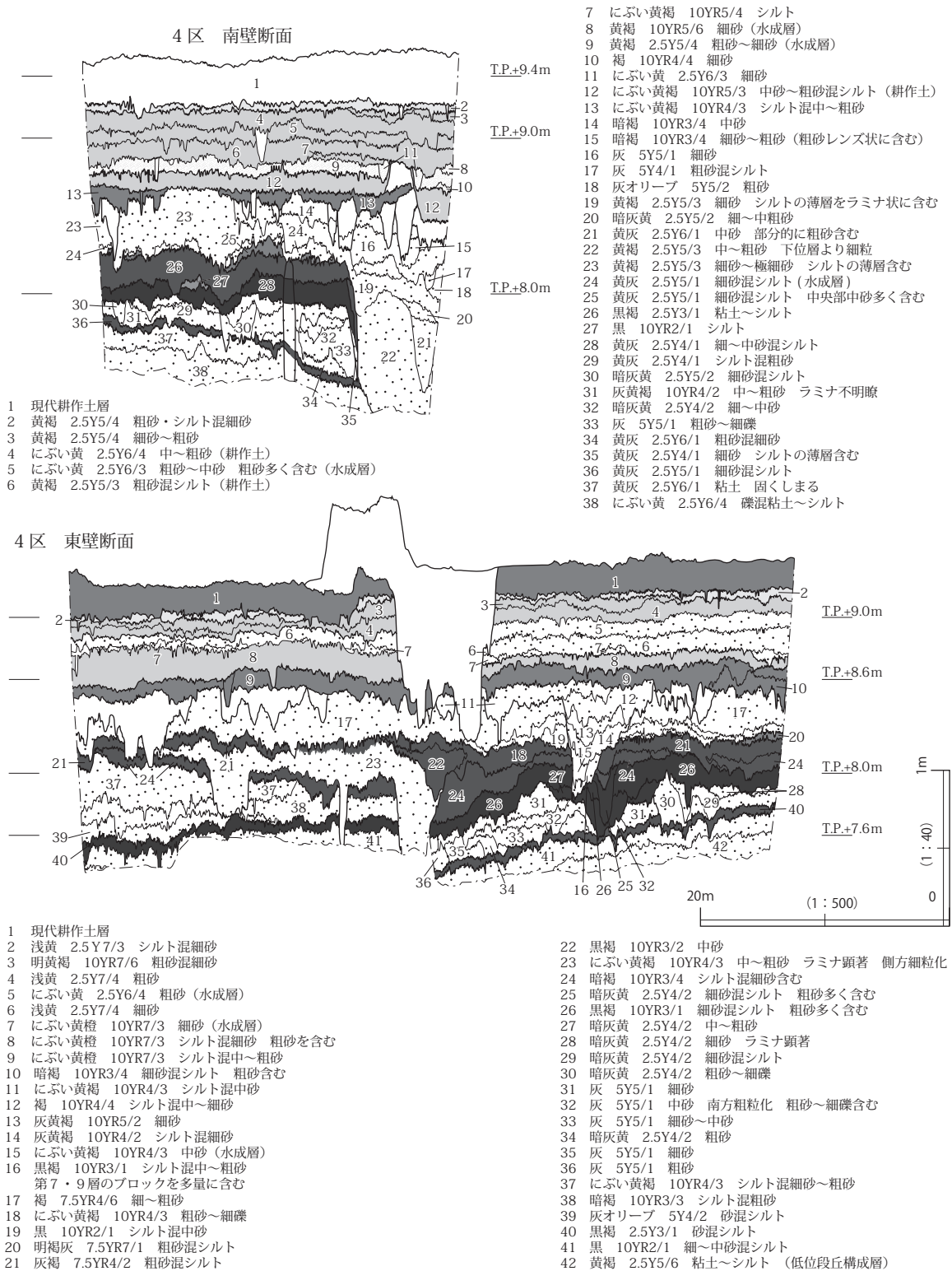


図264 4区 南壁・東壁 断面図

第1層 現代耕作土で、約 0.3～0.4 mを測る。

第2層 にぶい黄褐色の耕作土層で約 0.05～0.1mを測る。

第3層 さらに、4層に細分される。第3 a～c層は、灰色～黄褐色の細砂～粗砂で、部分的にシルトを含む水成堆積である。約 0.4～0.5 mが堆積し、ほぼ水平に堆積している。

以下、第3 d層は、オリーブ灰色から灰色の粘土～シルトで、約 0.1～0.2 mを測り、東に行くにつれ厚くなる。

この3 d層上面が第1面となり、水田をほぼ全域で検出している。

第4 a層 黒褐色および暗灰黄色の中砂混シルトで、約0.05～0.2mを測る。東半部の一部では堆積が認められない部分もあった。第4 a層からは、土師器・須恵器・黒色土器などが出土した。

先述の3 d層下面および第4 a層上面が、第2面となり、南北方向の小溝を検出している。

第5層 灰色および灰黄色の粘土～シルト混細砂からなり、層厚約 0.3～0.4 mを測る。

第5層上面が第4面となり、掘立柱建物、溝、土坑など、多数の遺構を検出している。

第6層 中央部および東端部で部分的にあり、第7層偽礫を含む黄灰色シルトで、0.05～0.15 mを測る。

第7層 黒色粘土～シルトが層厚 0.1～0.2 mを測る。東に向かってやや層厚を増す。

第7層上面の第6面で、流路を検出している。第7層下面の第7面でも、流路を検出している。

第8層 東半部で、一部分のみ残存していた。黄灰色の粘土～シルトで、層厚は数cmから 0.05 mである。

第9層 黄灰色および暗褐色の粘土～細砂混シルトで、0.1～0.15 mである。やや東に向かって薄くなる。

第8層が検出されていない部分では、第9層上面で、上述の第7面となる。第9層下面で、第9面を検出し、風倒木痕を検出している。

第10層 にぶい黄灰色の粗砂混シルトやシルト混中砂～粗砂が、東側で暗灰黄色の極細砂混シルトとなり、約 0.1～0.5 mを測る。西側へ層厚が増し、粗砂へと粒度も粗くなる。

第11層 黄灰色の細砂～中砂が約 0.05 mを測る。西に向かって低くなる。

この下面が、第11面に当たるが、遺構・遺物は検出していない。

第12層 黄色粘土や暗灰黄色の細砂混シルトで構成され、約 0.15～0.2 mを測る。遺物は出土していない。

平面的な調査は、上述したとおり、第3 d層上面の第1面から開始した。4-2区では、第11層下面である第11面の検出とその下層の第12層までの調査を行った。

4-1区では、第5層上面である第4面までの調査を行った。それ以下の調査は、遺構が希薄なことから、断面観察をするに留めた。

4区における地層の特徴としては、第3 d層を覆う水成層がほぼ均一で、4 b層が1～3区同様に存在しないこと、また、第7層が3層に細分できることがあげられる。さらに、第11層が西側に向かって下がる様子が窺われた。

以下、主な調査成果について記す。

2. 第1面

第3 d層上面で検出した遺構である。第3 d層上面の遺構としては水田があり、それに伴う溝が検出

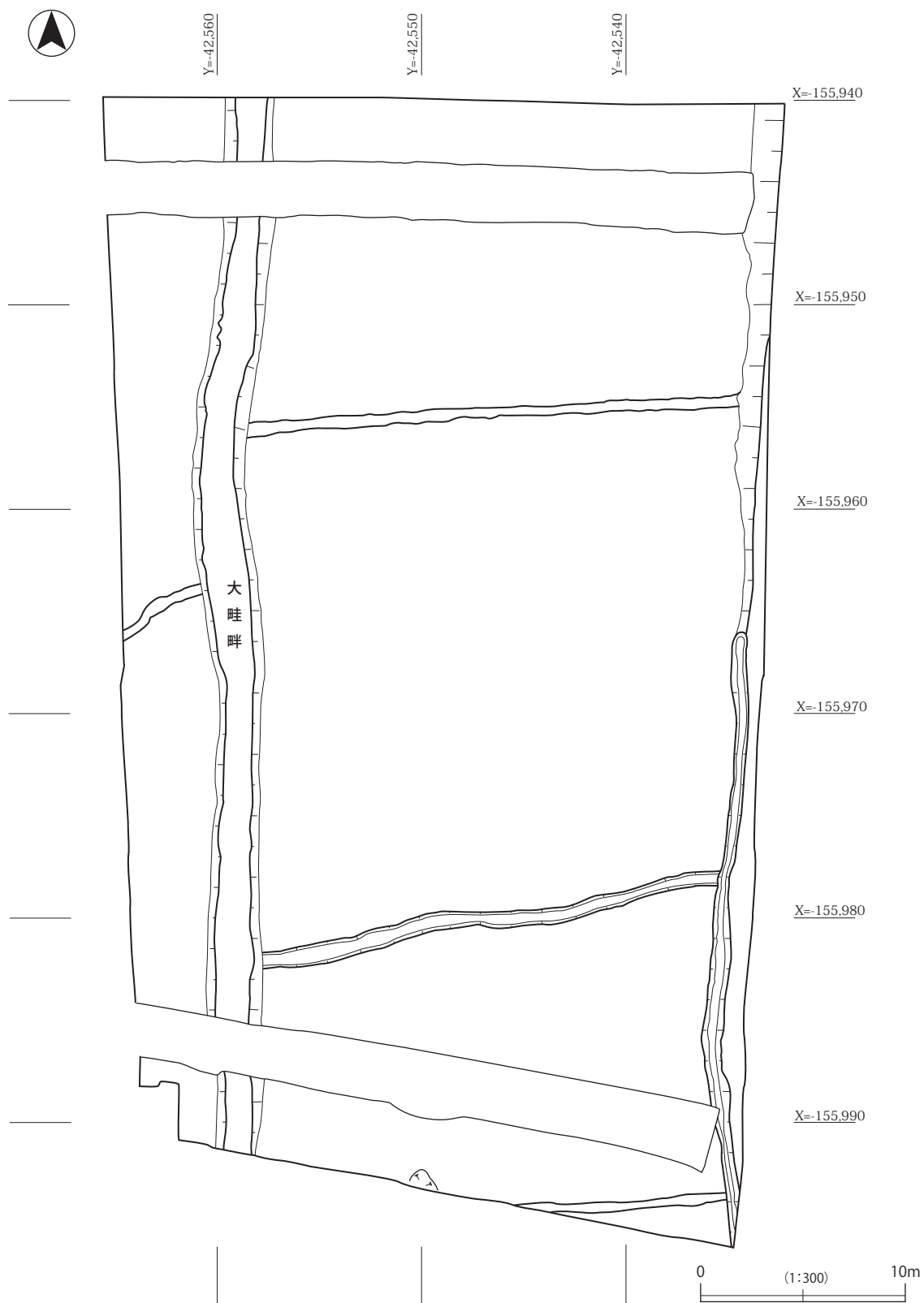


図265 4区 第1面 平面図

されている。

〔水田〕(図265)

水田面は全域で検出され、西端部で南北方向の大畦畔が検出されている(図265 参照)。下幅 1.8 m~ 2.4 m、高さ0.1~0.15mを測る。

なお、東端部でも、南北方向の大畦畔と思われる高まりと溝を検出している。

その畦畔間の距離は約27mで、1町109mとするとそれを4分したものとなる。大畦畔間には、3条の東西方向の畦畔が配されている。その畦畔は、下幅で幅0.3~0.8m、高さは0.1mのものがある。

東西方向の大畦畔は検出できなかった。

畦畔は、南北方向の畦畔が直線的に通るものが多いのに対し、東西方向の畦畔はいずれも、東で北に振れる方位となる。これは自然地形による水回しの工夫のためであろう。水口は、4区では検出されていない。

なお、各水田面ではヒトのほか、ウシとみられる偶蹄類の足跡が多数認められた。

1区から4区の水田を見ると、東へ向かって1筆の面積が大きくなっているのが解る。

〔第3d層出土遺物〕(図266-963~970)

水田の作土である第3d層からは、土師器・須恵器・黒色土器などが多く出土した。

土師器には、椀・鉢・甕がある。

963は椀の小破片で外面に指押さえを残す。964は鉢の口縁部破片で、わずかに内傾する口縁部の端部が凹面をもち、外方へ摘み上げられる。968・969は甕の口縁部破片で、前者はやや大型で、後者が小型である。両者共に、体部外面に指押さえを残す。前者には、煤が付着する。

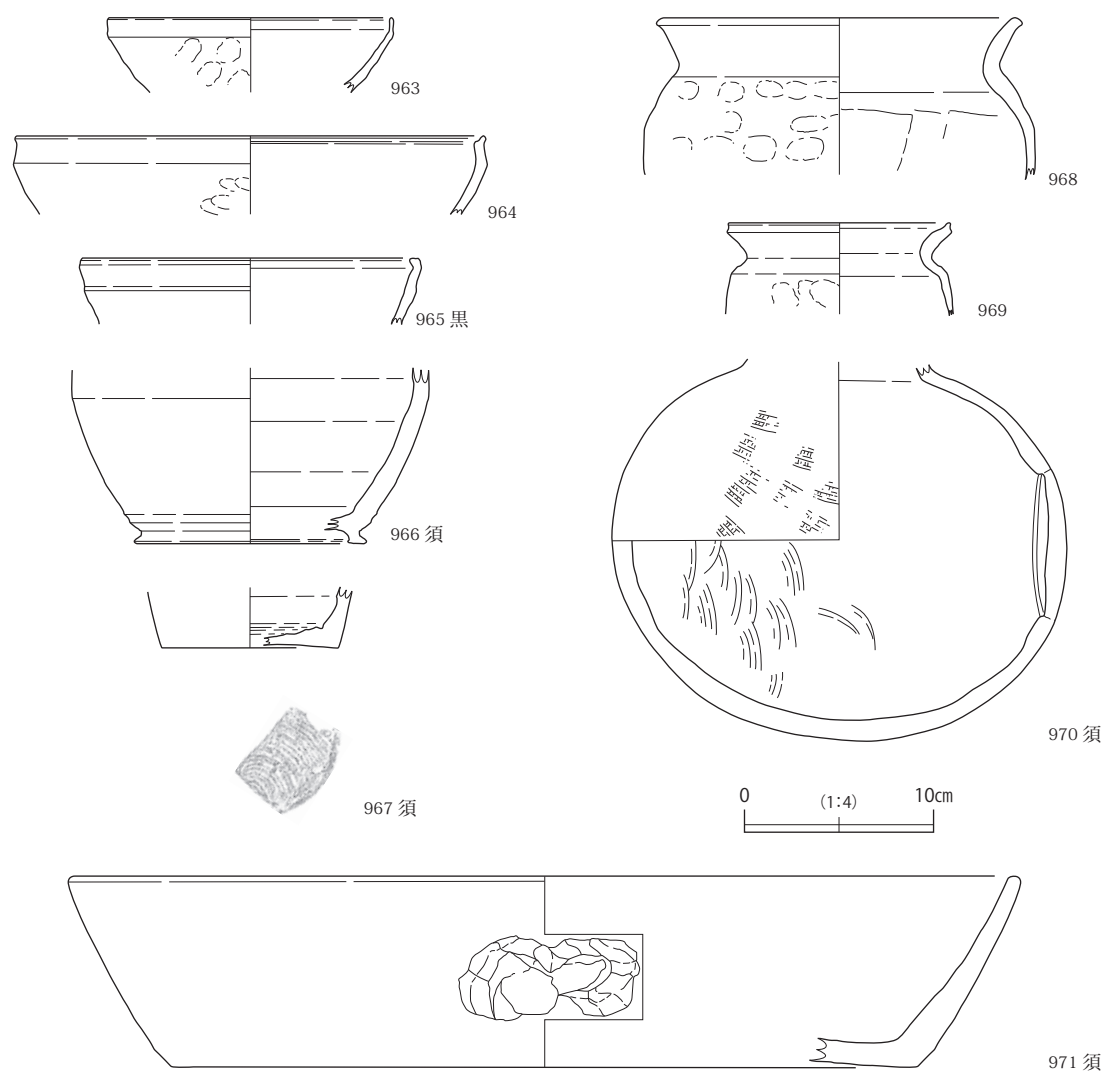


図266 4区 第3d層 出土遺物

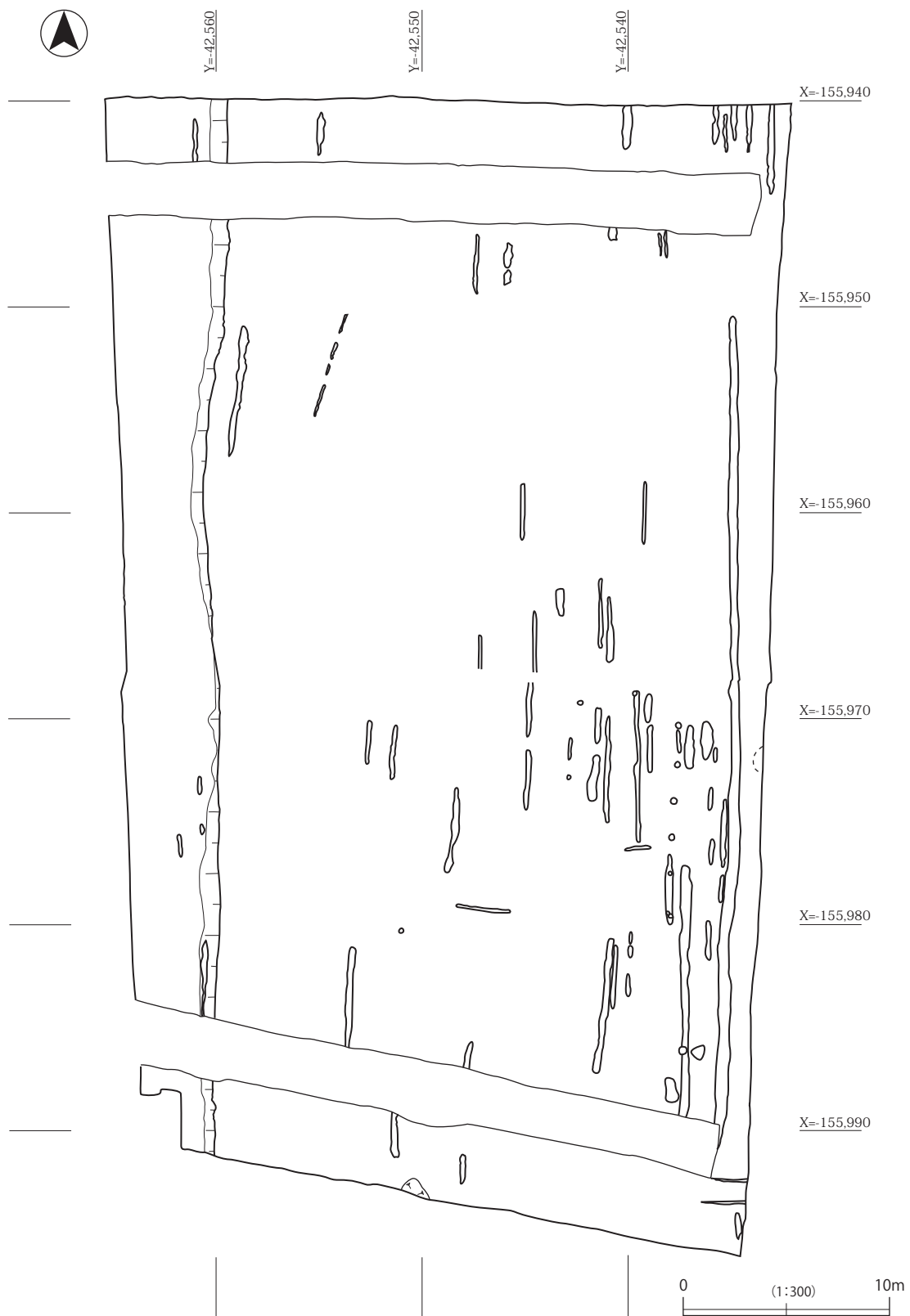


図267 4区 第2面 平面図

965 は、両黒の黒色土器鉢の口縁部破片で、口縁部端部は内方へ肥厚し、上端面をもつ。

966・967・970・971は須恵器で、966 は壺の高台をもつ底部、967 は小型鉢の平底の糸きりの底部である。970は横瓶の口頸部を欠くもので、外面に平行叩き目・内面に同心円紋当て具痕を残す。生焼けのものである。971 は大型の鉢で、口径49.6 cm・器高12.2 cmを測る。わずかな上げ底で、把手の痕跡が

ある。

3. 第2面

第3 d層下面・第4 a層上面に相当する。第3 d層下面の遺構として、全域で南北方向の小溝が検出された。幅 0.1~0.6 m、深さ 0.1 m未満のものが多い。

埋土は第3 d層と同一である。また、自然堆積を示すラミナが認められないことから、これらの小溝は、1から3区と同様に第3 d層の耕起に関する鋤溝と考えられる。

小溝からは、土師器・須恵器・黒色土器などの小片が出土した。

〔第4 a層出土遺物〕(図268)

第4 a層から出土した遺物には、土師器・須恵器の他に、土錘・土製紡錘車などがある。

土師器には、甕・皿・椀がある。972・973は甕で、小型の口縁部破片で、体部外面に前者がハケメ、後者が指押さえを残す。974・975は皿の小破片で、口縁部は前者が外反し、後者が内弯ぎみに伸びる。976は、高台部のみを残す。982・983は大型の羽釜の口縁部破片で、いずれも、角閃石を含む生駒西麓産のものである。

須恵器には、蓋杯・壺・甕などがある。977は杯B蓋の口縁部破片で、つまみ部を欠損する。978・979は杯Bで、978は口径 15.6 cm・器高 4.3 cmを測る。981は小型壺の体部以下を残す糸切底のものである。984は大型の甕の口縁部から体部上端を残すもので、短く外反する口縁部の端部が上方につまみあげられ上端面をもつ。体部外面に平行タタキ目後回転カキメ・内面に同心円紋当て具痕を残す。

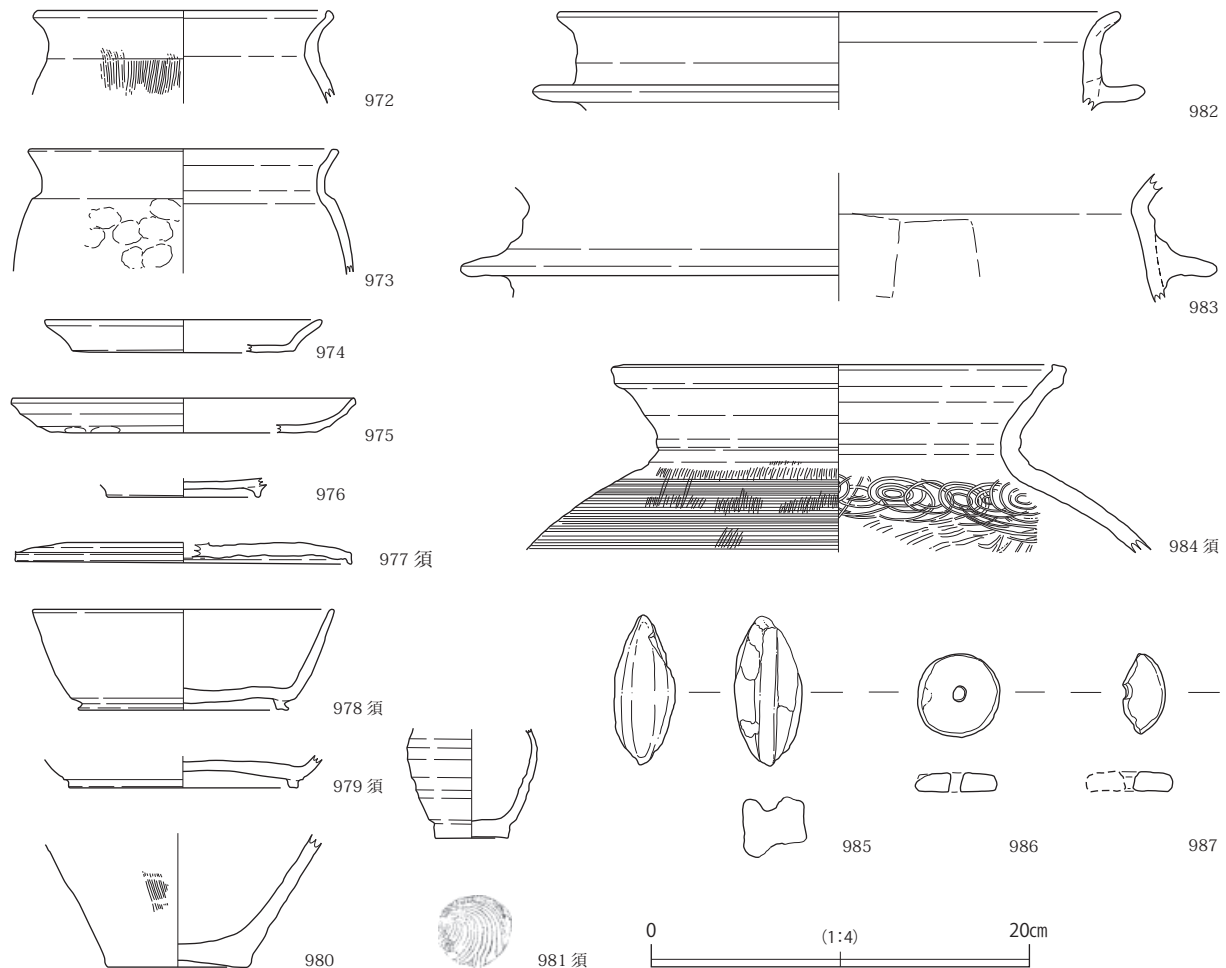


図268 第4 a層 出土遺物

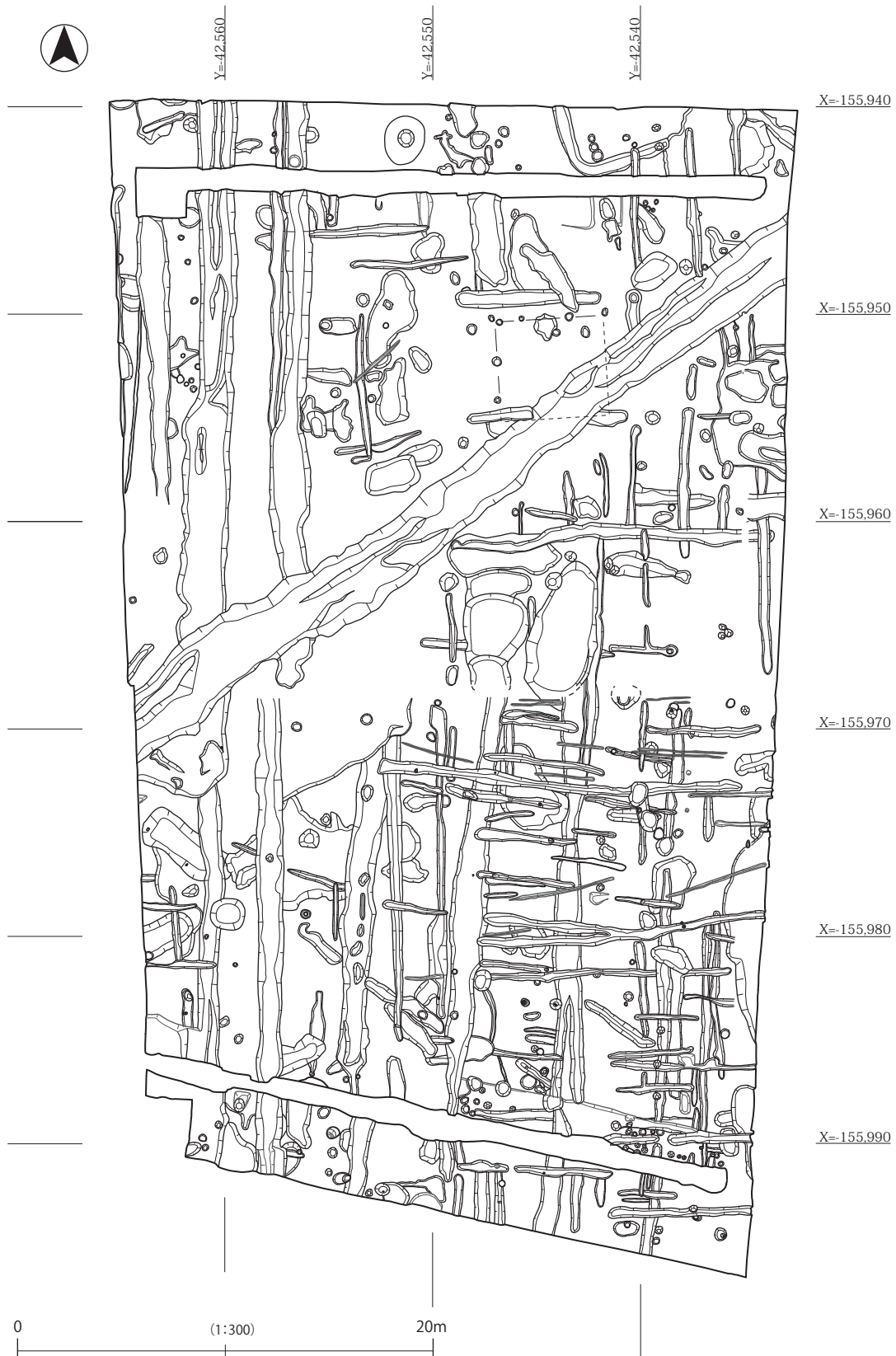


図269 4区 第4面 平面図

980 は弥生時代前期の甕の底部破片で、下層からの混入である。

985 はほぼ完形で有溝の土錘で、長さ 7.6 cmを測る。

986・987は土製の紡錘車で、弥生時代前期のものである。

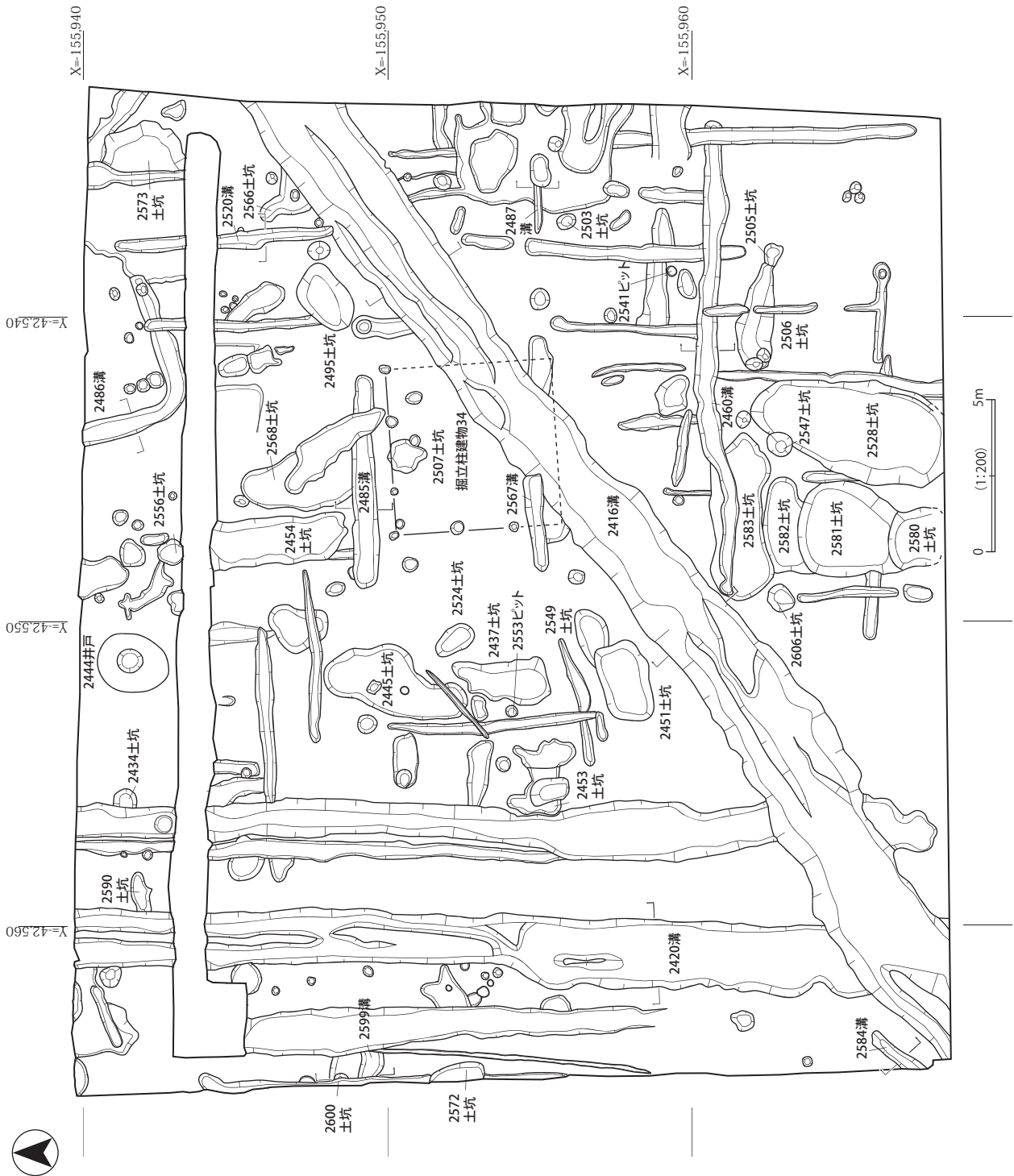


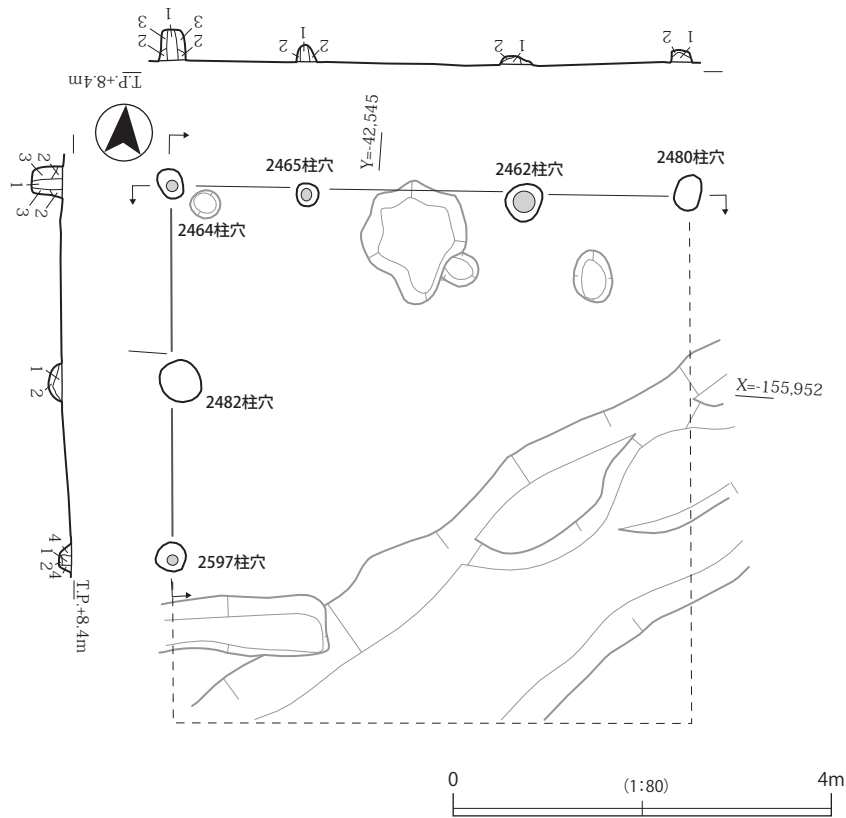
図270 4-1区 第4面 平面図

4. 第4面 (図版56)

第4 a層下面・第5層上面で検出された遺構面で、北半部で掘立柱建物1棟が、全域から溝・井戸・土坑などが検出されている。

〔掘立柱建物34〕(図269・270・272 図版58-1)

掘立柱建物34は、北辺および西辺を検出している。方位は、 $N-3^{\circ}-W$ を示す。東西3間×南北3間の側柱建物である。規模は、東西5.4m・南北4m以上を測り、ほぼ正方形をなすと考えられる。2416溝に切られているため、南東部を消失している。



- 1 黒褐 10YR3/1 シルト 上部は第5層シルト多く含む
焼土粒多く含む 炭化物少量含む
- 2 にぶい黄橙 10YR4/3 細砂混シルト 第5層偽礫含む
- 3 褐灰 10YR4/1 シルト 偽礫・炭化物多く含む
- 4 暗褐 10YR3/4 シルト混 粗砂

図272 4-1区 第4面 掘立柱建物34

[2416溝] (図269・270・273 図版57-1・104)

2416溝は、4-1区の南西-北東方向に検出され、両端が調査区外へ延びる。検出長約39m・幅約2~3.4m・深さ0.35mを測る。埋土は、6層~8層に細分されるが、主ににぶい黄褐色の粗砂である。遺物は、古代の須恵器・土師器・灰釉陶器、弥生時代前期の土器や、石器が出土している。

988は、小型の壺の口縁部を欠く弥生時代前期のもので、体部に段を施す。内外面伴に表面剥離のため、調整は不明である。下層からの混入と思われる。他に、図示できるものはない。

[2420溝] (図269・270・273)

2420溝は、4区西端部で検出された南北方向の溝で、両端部が調査区外へ延びる。検出長約23m・幅0.8~2.4m・深さ0.25mを測る。北半部で2条の溝に分かれる。埋土は5層に細分されるが、主に、にぶい黄褐色のシルトが混じる粗砂である。4-2区の1485溝と同一溝と思われる。2416溝に切られる。

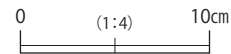
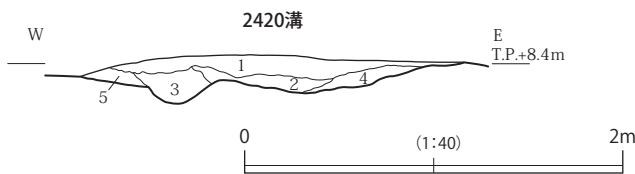
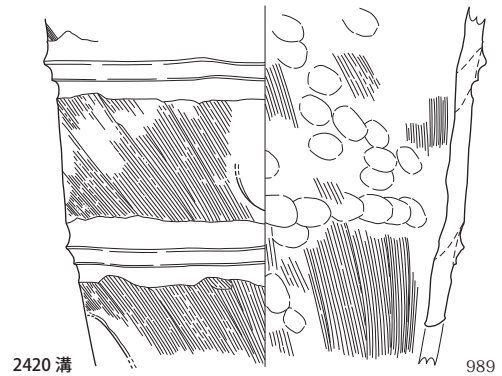
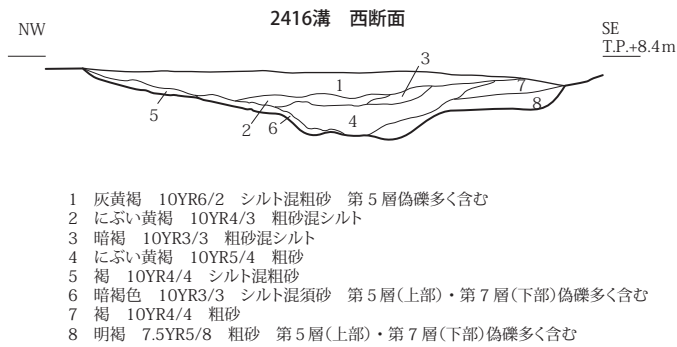
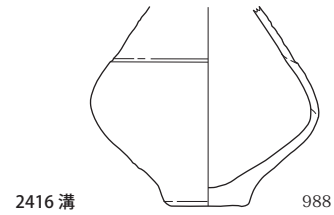
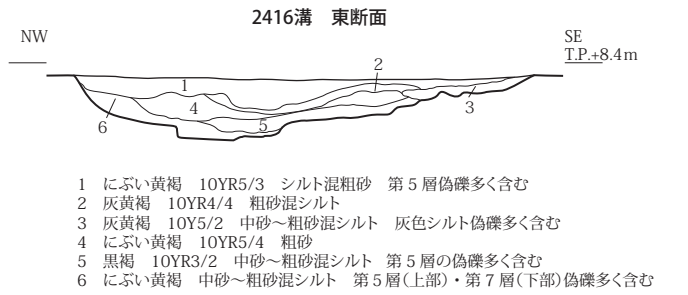
遺物は、古代の須恵器・土師器・灰釉陶器、古墳時代中期の埴輪、弥生時代前期の土器・石器などが出土している。

989は小型の円筒埴輪で、体部3段・突帯2帯を残すもので、内外面にタテハケを施し、内面に指押さえを残す。突帯はM字状の低いものが付く。円形の透かしを2個交互に穿つ。

他に、図示し得なかった。

[2460溝] (図269・270・275・276 図版104)

2460溝は4-1区の南東部で検出され、わずかに蛇行する東西方向の溝である。長さ15.6m・幅0.5



- 1 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混中砂 シルト偽礫多く含む
 2 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト混中砂
 3 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混粗砂 シルト偽礫含む
 4 にぶい黄 2.5Y6/3 シルト混粗砂 第5層偽礫含む
 5 灰黄褐 10YR5/2 シルト混粗砂

図273 4-1区 第4面
 2416・2420溝 断面図
 出土遺物

～0.9 m・深さ0.15 mを測る。埋土は、5層に細分されるが、大きくは上下2層に区分される。上層に褐灰色シルトが混じる細砂、下層に灰黄褐色の細砂である。

遺物は、弥生時代前期の土器が多量に出土した。他に、土製紡錘車がある。なお、同時代の石器が出土している（第5節 参照）。

土器には、壺・甕蓋・甕がある。

1006は壺の体部下半を残すもので、わずかな上げ底である。1000は甕蓋で約1/4を残す。口径22.2 cm・器高8.2 cmを測る。口縁部内面に煤が付着する。1001～1005・1007・1008は甕である。1008は復原完形で、口径23.6 cm・器高19.8 cmを測る。外反する口縁部端部が面をもち、わずかに膨らむ体部に平底である。体部外面にハケメ、内面にナデを施す。口縁部端部に刻み目、体部に沈線1条を施す。外面に煤が付着する。1003は大型のもので、口縁部に刻み目、体部に沈線2条、1005は特大型で、口径44 cmを測る。体部に沈線1条を施す。いずれも、内外面が表面摩擦のため、調整は不明である。1004はやや大型のもので、体部内外面伴に指ナデを施す。口縁部端部に刻み目、体部に沈線3条間押捺紋を施す。淡桃褐色をしており、二次焼成を受ける。1009は、約3/4を残す紡錘車で、径5.0 cm・厚み8.5 mmを測る。

〔2485溝〕（図269・270・274 図版59-2）

2485溝は、4-1区の北東部で検出された東西方向の溝である。長さ7.0 m・幅0.7 m・深さ0.1 m

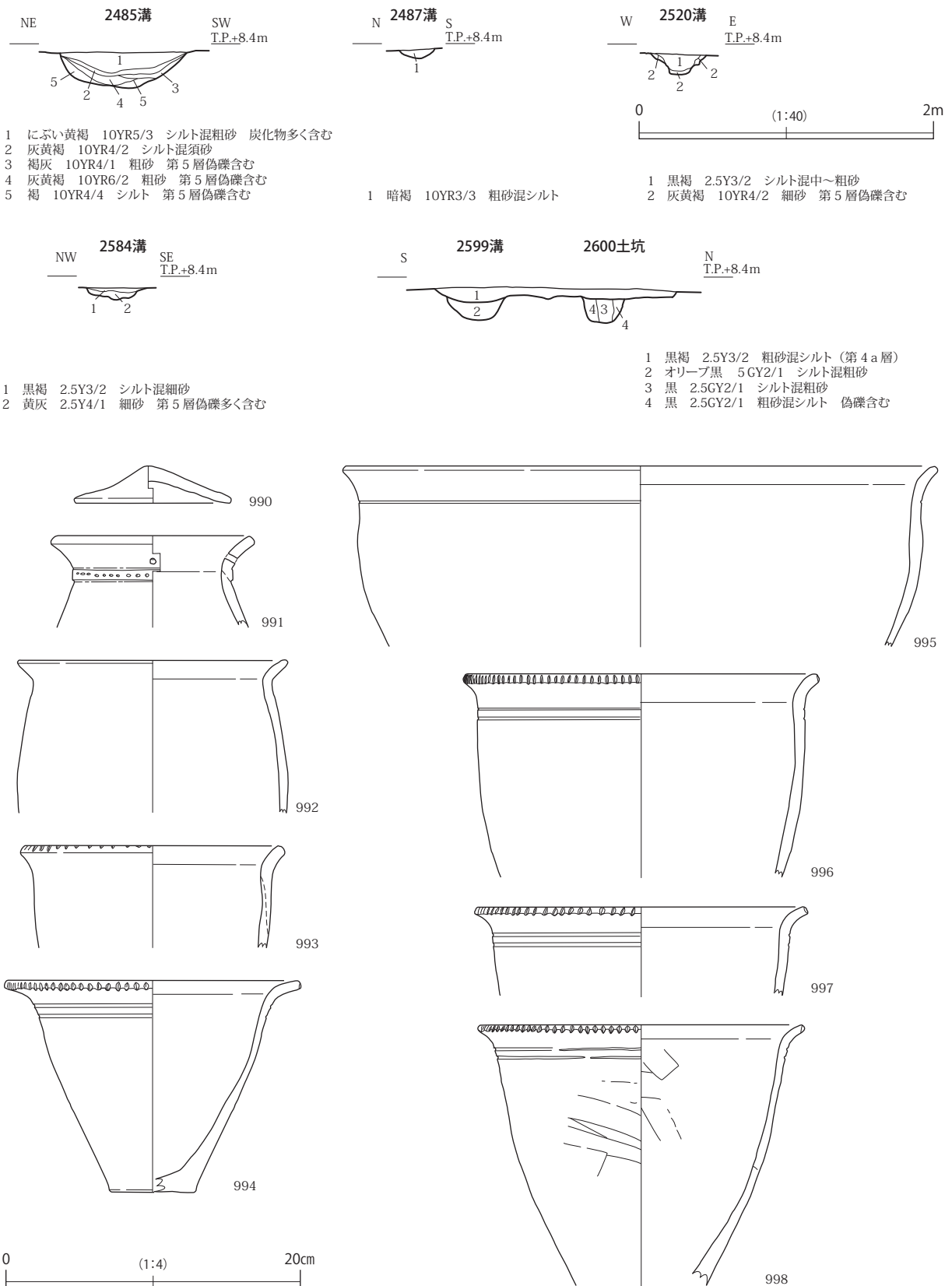


図274 4-1区 第4面 各溝 断面図 2599溝 出土遺物

を測る。埋土は暗褐色の粗砂が混じるシルトが1層である。遺物は出土していない。

[2486溝] (図269・270・275)

2486溝は4-1区の北東端で検出され、屈曲する溝である。北端部は調査区外へ延びる。検出長7.4

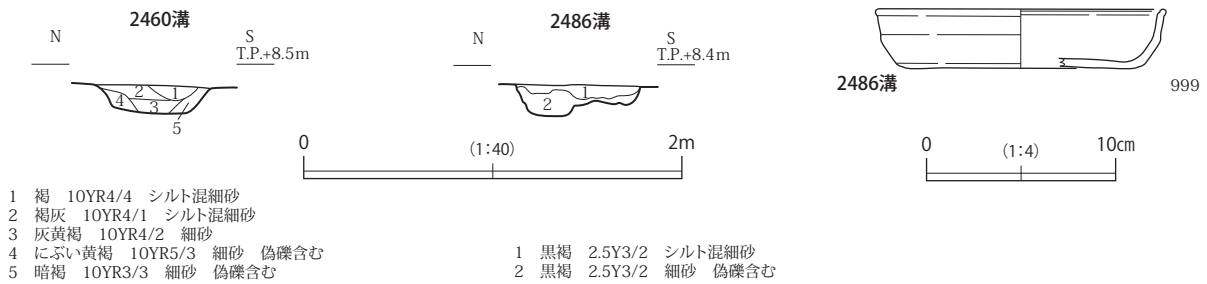


図275 4-1区 第4面 2460・2486溝 断面図 2486溝 出土遺物

m・幅 0.7 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は2層で、上層に黒褐色のシルト混じりの細砂が、下層に黒褐色の細砂である。

遺物は、古代の土師器杯の他に、弥生時代の土器片が出土している。

999 は、約 1 / 2 を残す土師器杯で、口径 15.2 cm・器高 3.2 cmを測る。

[2487溝] (図269・270・274)

2487溝は、4-1区の東端の中央部付近で検出された東西方向の小溝で、東端を土坑に切られる。検出長 1.5 m・幅 0.25 m・深さ 0.05 mを測る。埋土は、暗褐色の粗砂が混じるシルト1層である。

遺物は出土していない。

[2520溝] (図269・270・274)

2520溝は、4-1区の北東部で検出された南北方向の溝である。検出長 7.2 m・幅 0.3~0.6 m・深さ 0.15 mを測る。埋土は2層で、主に黒褐色のシルト混じりの中砂から粗砂である。

遺物は、土器片がわずかに出土している。

[2584溝] (図269・270・274)

2584溝は、4-1区の南西端部で検出された。検出長約 2 m・幅 0.5 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は2層で上層に黒褐色のシルトが混じる細砂で、下層が黄灰色の第5層の偽礫を含む細砂である。

遺物は、土器片がわずかに出土している。

[2599溝] (図269・270・274 図版60-1・103)

2599溝は、4-1区の北西端部で検出され、東端を他の遺構で切れ、西端が調査区外に延びる。検出長 0.8 m・幅 0.8 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は1層でオリーブ黒色のシルトが混じる粗砂である。土坑の可能性はある。

遺物は、弥生時代前期の壺蓋・壺・鉢・甕などが出土した。

990 は小型の無紋の壺蓋で、約 2 / 3 を残す。口径 10.6 cm・器高 1.6 cmを測る。991 は小型壺の口縁部破片で、頸部に削り出し突帯上刺突紋を施す。口縁部に紐孔を穿つ。995 は大型の口縁部が外反する鉢で、頸部に沈線1条を施す。破損後煤が付着する。992~994・996~998は甕である。992 が無紋で、他は、口縁部端部に刻み目、体部に沈線を2条施す。いずれも、内外面にナデを施す。外面に煤が付着する。

[1456溝] (図269・271・277)

1456溝は4-2区の北東部で検出された、わずかに弯曲する東西方向の溝である。長さが 17.6 m・幅が 0.4~0.7 m・深さが 0.15 mを測る。埋土は2層で、にぶい黄褐色の中砂~粗砂である。上層にシルトが混じり、炭化物が含まれる。

遺物は、弥生時代前期の鉢の底部1点のみ図化できた。1015は、底部は突出し外方へわずかに開く。

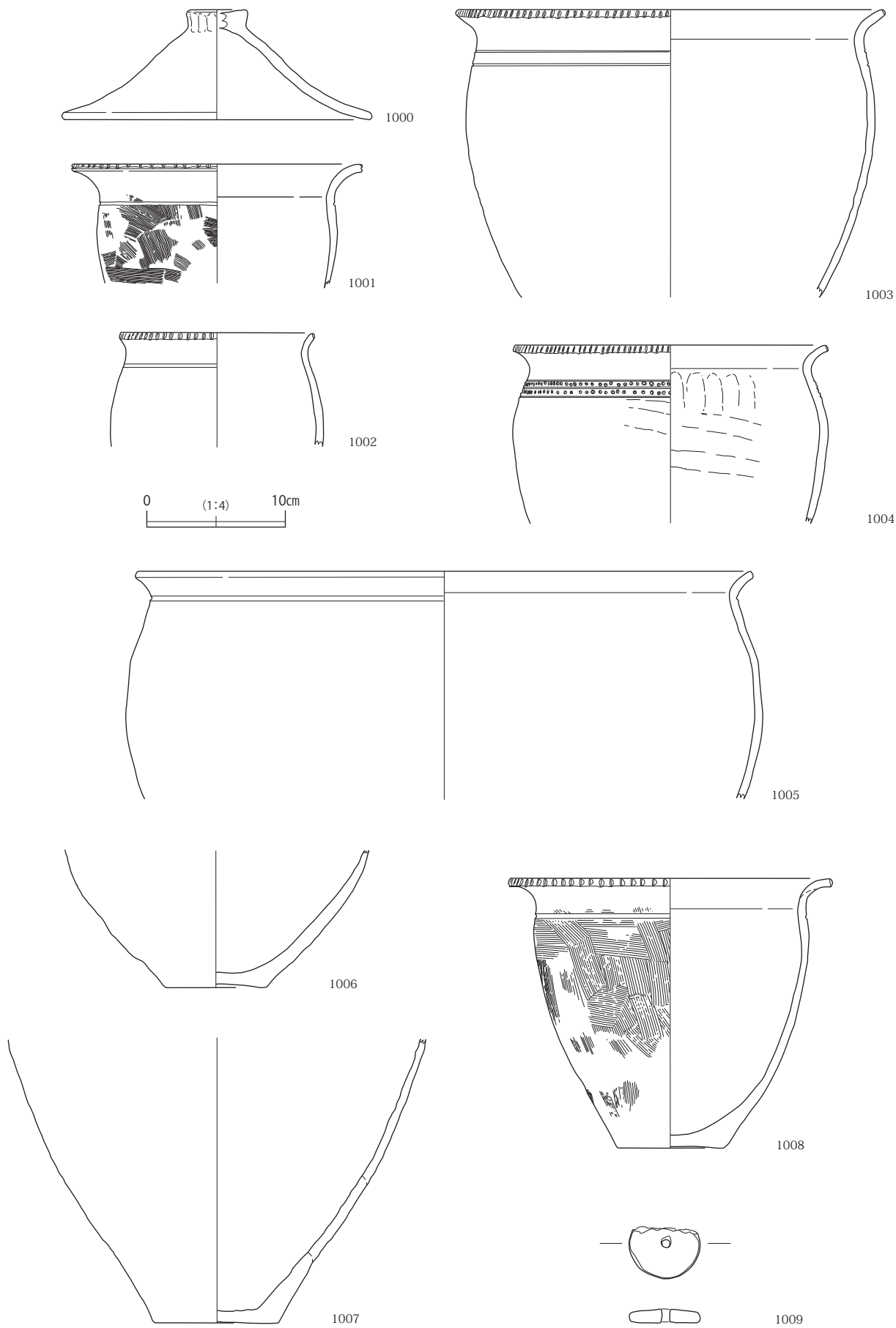


图276 4-1区 第4面 2460溝 出土遺物

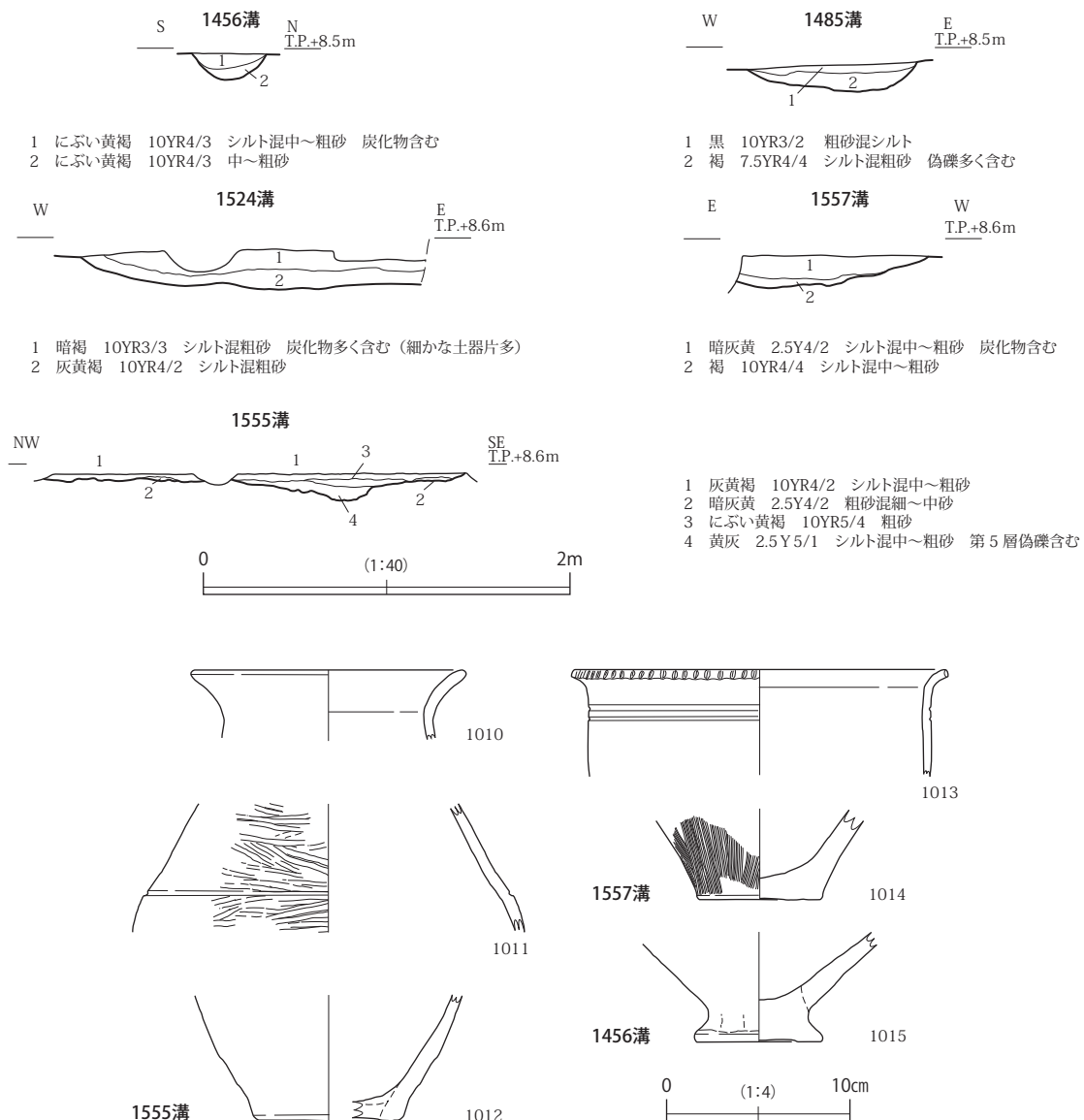


図277 4-2区 第4面 各溝 断面図 出土遺物

内外面にナデを施す。遺物は古いが、古代の1472溝を切っているため、それより新しくなる。

〔1485溝〕 (図269・271・277)

1485溝は、4-2区の西端部で検出された南北方向の溝で、北端で2416溝に切られ、南端で調査区外へ延びる。検出長18.3m・幅0.6~1.2m・深さ0.15mを測る。埋土は2層で、上層に黒色の粗砂が混じるシルトで、下層に褐色のシルトが混じる粗砂である。4-1区の2420溝と同一溝か。

遺物は、古代の須恵器、弥生時代前期の土器片などが出土している。

〔1524溝〕 (図269・271・277)

1524溝は、4-2区の北東端部で検出された東西方向の溝で、東側は調査区外へ延びる。検出長1.8m・幅0.7~1.5m・深さ0.2mを測る。埋土は2層で、上層に炭化物を含む暗褐色のシルトが混じる粗砂が、下層に灰黄褐色のシルトが混じる粗砂である。

遺物は、弥生時代前期の土器片や石器が出土している。

〔1555溝〕 (図269・271・277)

1555溝は、4-2区の西半部の中央部付近で検出された北西-南東方向の溝である。長さ8.6m・幅

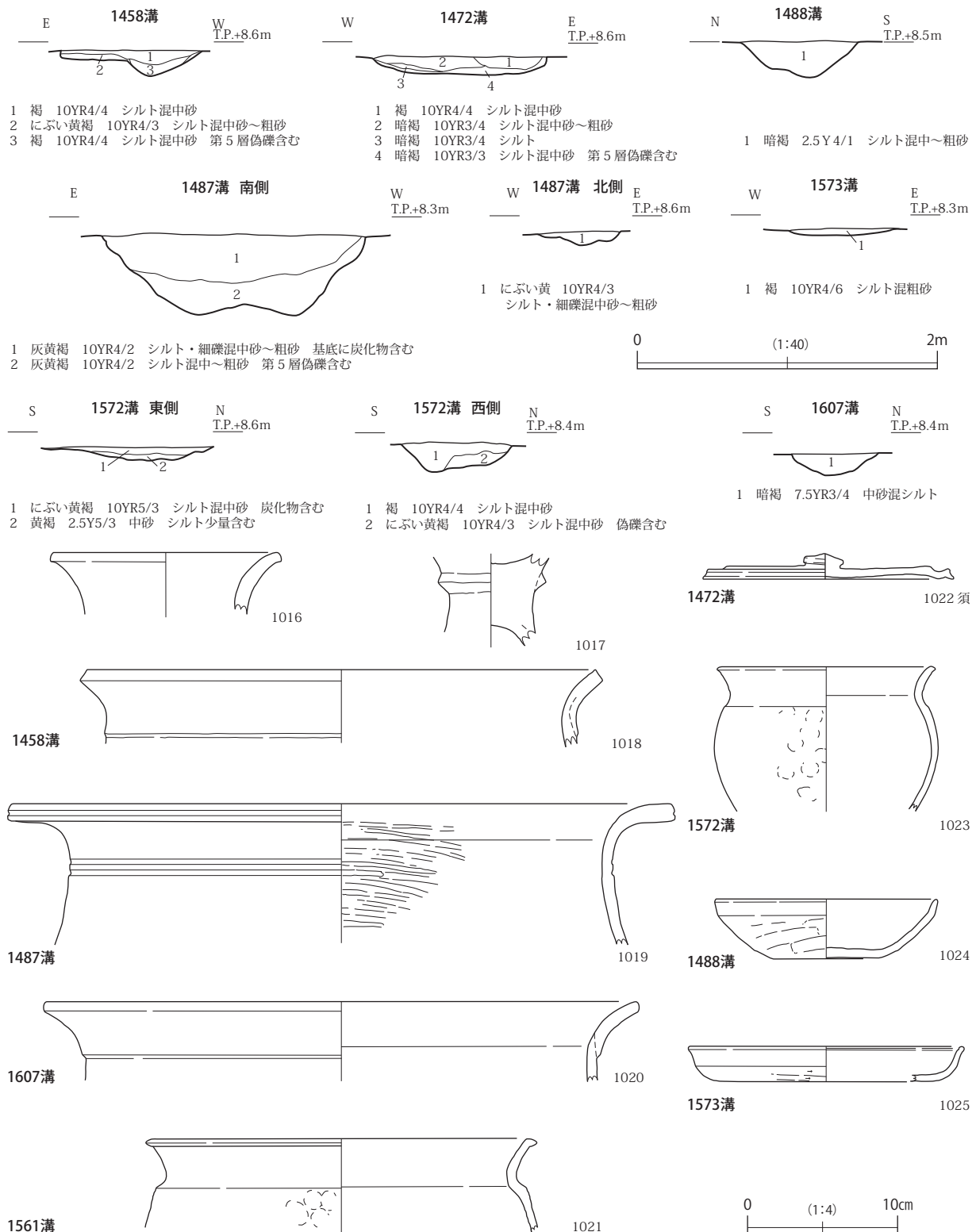


図278 4-2区 第4面 各溝 断面図 出土遺物

0.4～0.8 m・深さ 0.15 mを測る。埋土は、4層で主に黄灰色のシルトが混じる中砂～粗砂である。

遺物は、弥生時代前期の土器が出土した。1010は壺の口縁部破片で無紋のものである。1011は壺の体部破片で、外面にヘラミガキ・内面にナデを施す。体部に段を施す。1012は甕の底部破片である。

[1557溝] (図269・271・277)

1557溝は4-2区の南半の中央部付近で検出された東西方向の溝である。東側を他の遺構に切られて

いる。検出長 1 m・幅 0.3 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は 2 層で、上層に炭化物を含む暗灰黄色のシルト混じりの中砂～粗砂、下層に褐色のシルト混じりの中砂～粗砂である。

遺物は、弥生時代前期の甕が出土している。1013は甕の口縁部破片で、内外面共に表面剥離のため、調整不明である。口縁部端部に刻み目、体部に沈線 2 条を施す。1014は甕の底部破片で、外面にハケメを施す。外面に煤が付着する。

〔1458溝〕（図269・271・278 図版104）

1458溝は、4－2 区の東半部で検出された南北方向の溝である。東西方向の数条の溝に切られる。検出長 12.2 m・幅 0.3～0.8 m・深さ 0.15 mを測る。埋土は 3 層で、主に第 5 層の偽礫を含む褐色のシルトが混じる中砂である。

遺物は、弥生時代前期の土器が出土している。1016・1018は壺の口縁部破片で、後者は大型で頸部に段を施す。1017は高杯の脚柱部破片で、杯部との境目に貼付突帯を 1 帯施す。いずれのものも、表面剥離が著しく、調整は不明である。

〔1472溝〕（図269・271・278）

1472溝は 4－2 区の東半部で検出された南北方向の溝で、南半部と北側で 2 条に別れる。この溝も東西方向の溝に切られている。南端で調査区外へ延び、北側で 2528 土坑に一部が切られる。検出長 34 m・幅 0.3～1.3 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は 4 層で、暗褐色のシルトが混ざる中砂～粗砂である。数度の掘直しが観察される。

遺物は、古代の須恵器や弥生時代前期の土器・石器が出土している。1022は須恵器杯 B の蓋である。約 1 / 4 を残す。口径 16.8 cm・器高 1.6 cmを測る。

〔1487溝〕（図269・271・278）

1487溝は 4－2 区の中央で検出された南北方向の溝である。東西方向の溝に切られる。長さ 15.1 m・幅 0.3～0.9 m・深さ 0.1～0.5 mを測る。埋土は 2 層で、シルトや細礫が混じるにぶい黄色の中砂～粗砂である。遺物は、弥生時代前期の土器片が出土している。

〔1488溝〕（図269・271・278）

1488溝は 4－2 区の南半部中央付近で検出された東西方向の溝で、西側を 1554 土坑に切られ、1487溝を切る。埋土はシルトが混じる黄灰色の中砂～粗砂である。

遺物は、古代の土師器が出土している。1024は土師器杯で、約 3 / 4 を残す。口径 14.4 cm・器高 4.1 cmを測る。

〔1572溝〕（図269・271・278）

1572溝は 4－2 区の南端部で検出された東西方向の溝で、南北方向の 1472・1573 溝を切る。長さ 7.6 m・幅 0.7～1.1 m・深さ 0.1～0.2 mを測る。埋土は 2 層でにぶい黄褐色のシルトが混じる中砂が主である。

遺物は、古代の土師器が出土している。1023は、土師器小型甕の口縁部破片である。体部外面に指押さえを残す。

〔1573溝〕（図269・271・278）

4－2 区南端中央付近で検出された南北方向の溝である。北端を 1572 溝に切られ、南端は調査区外に延びる。検出長 2.5 m・幅 0.7 m・深さ 0.05 mを測る。埋土は褐色のシルト混じり粗砂である。

遺物は、古代の須恵器・土師器がある。1025は土師器皿の口縁部破片である。

〔1607溝〕 (図269・271・278)

4-2区の南西端で検出された東西方向の溝で、1717土坑を切り、南北溝に西端を切られている。検出長 0.8 m・幅 0.6 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は、中砂が混じる暗褐色シルト1層である。

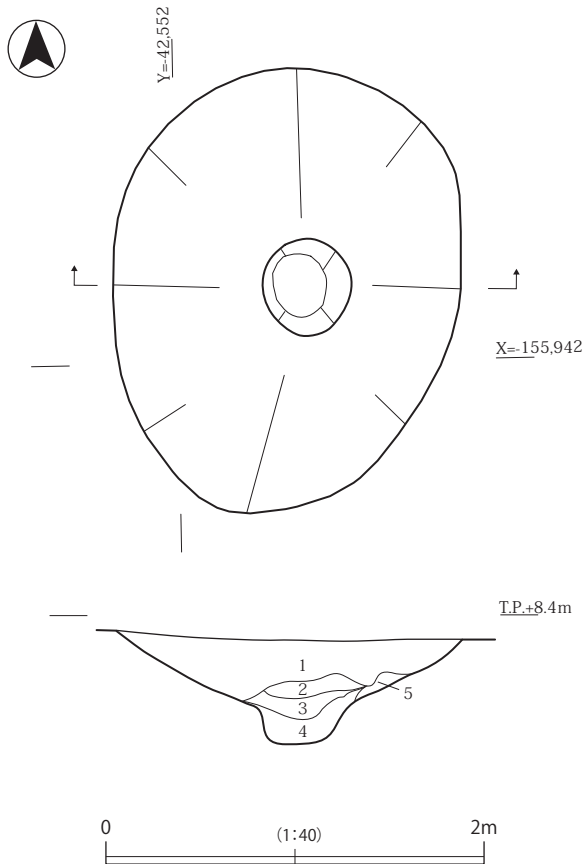
遺物は、弥生時代前期の壺がある。1020は大型壺の口縁部破片で、頸部に段を施す。

他に図示できるもので、4-2区の南東部の1561溝から土師器甕(1021)が出土している。

井戸は、4-1区の北端部の中央で1基のみ検出した。

〔2444井戸〕 (図269・270・279 図版57-2)

平面形が楕円形で、2段掘りの井戸である。長径 2.35 m・短径 1.85 m・深さ 0.55 mを測る。埋土は5層に細分されるが、上層に偽礫を含み粗砂が混じる黒褐色のシルトが、中層に中砂が混じる黒色のシルト、下層に偽礫を含むにぶい黄褐色のシルトが堆積している。



- 1 黒褐 10YR3/2 粗砂混シルト 偽礫多く含む
- 2 黒 10YR2/1 中砂混シルト やや粗砂含む
- 3 黒 10YR2/1 中砂混シルト
- 4 黒 10YR2/1 粘土〜シルト
- 5 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト 偽礫含む

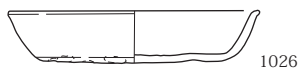


図279 4-1区 第4面

2444井戸 平・断面図 出土遺物

遺物は、古代の土師器、弥生時代前期の土器片などが出土した。1026は土師器皿で、ほぼ完形で、口径 13.2 cm・器高 3.0 cmを測る。

土坑は、4区の全域で検出しており、不定形な大型のものが多い。

〔2495土坑〕 (図269・270・280・282)

4-1区の北東部に位置し、不正な楕円形で、長径 2.3 m・短径 1.4 m・深さ 0.3 mを測る。埋土は3層で主に細砂が混じる黒褐色のシルトである。

遺物は、古墳時代前期初頭の土器、弥生時代後期の土器および前期の土器・石器が出土している。

1035はほぼ完形の鉢である。口径 13.6 cm・器高 7.2 cmを測る。角閃石を含む生駒西麓産のものである。

遺物からこの遺構は、古墳時代前期初頭に属す。

〔2566土坑〕 (図269・270・280・282)

4-1区の北東部で検出された不定形の土坑で、2416溝に切られる。埋土は3層で、主に粗砂およびシルトが混じる灰褐色の細砂である。

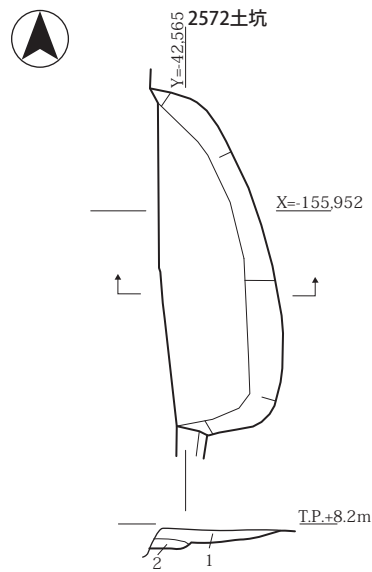
遺物は、弥生時代前期の土器が出土している。

1028は甕の口縁部破片で、口縁端部に刻み目・体部に沈線2条を施す。

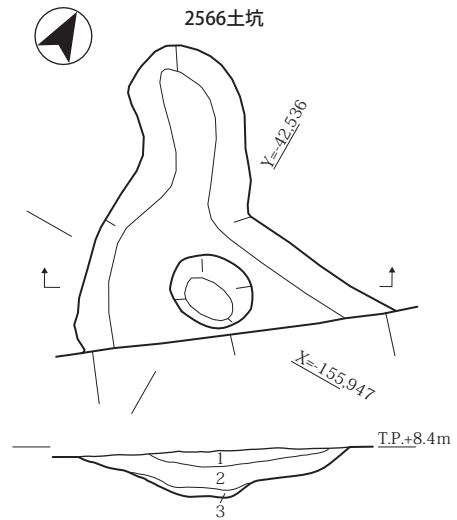
〔2568土坑〕 (図269・270・280・282)

4-1区の北東部で検出された不定形の土坑で、2485溝に切られている。検出長 3.6 m・1.8 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は3層で、主に、炭化物を含み、シルトが混じるにぶい黄褐色の粗砂である。

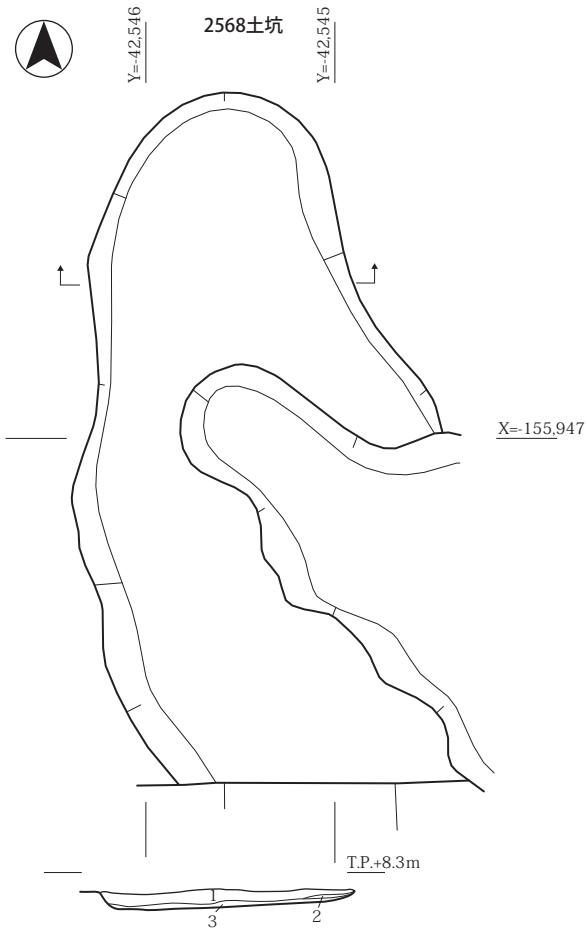
遺物は弥生時代前期の土器が出土している。1029は甕の口縁部破片で、体部に沈線2条を施す。



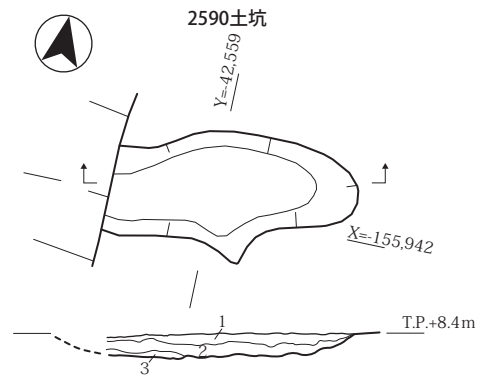
- 1 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混粗砂
- 2 灰黄褐 10YR5/2 シルト



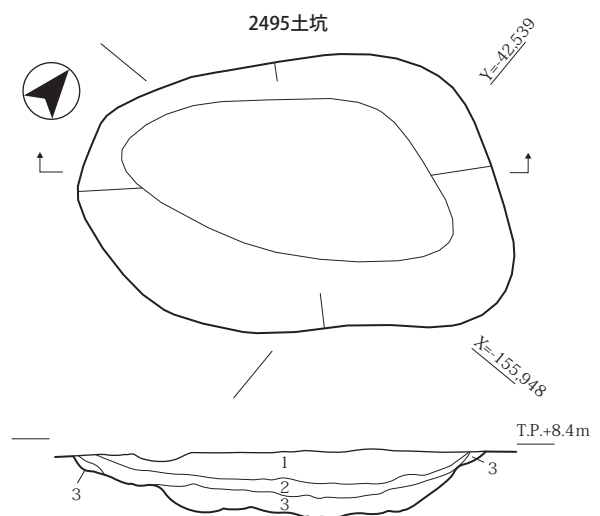
- 1 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混粗砂 炭化物・土器含む
- 2 灰黄褐 10YR5/2 粗砂・シルト混細砂
- 3 にぶい黄褐 10YR4/3 中～粗砂 第7層再堆積



- 1 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混粗砂 炭化物少量含む
- 2 灰黄褐 10YR5/2 粗砂 (第5層再堆積)
- 3 褐 7.5YR4/3 粗砂 (第5層再堆積)



- 1 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト粗砂 炭化物多く含む
- 2 にぶい黄褐 10YR6/4 シルト混中～粗砂
- 3 黄褐 10YR5/6 シルト混中砂



- 1 黄灰 2.5Y4/1 シルト混中砂 粗砂多く含む
- 2 黒褐 10YR3/1 細砂混シルト
- 3 黒褐 10YR3/1 シルト混細砂 第5層偽礫多く含む

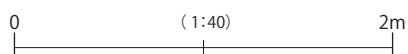


図280 4-1区 第4面 各土坑 平・断面図(1)

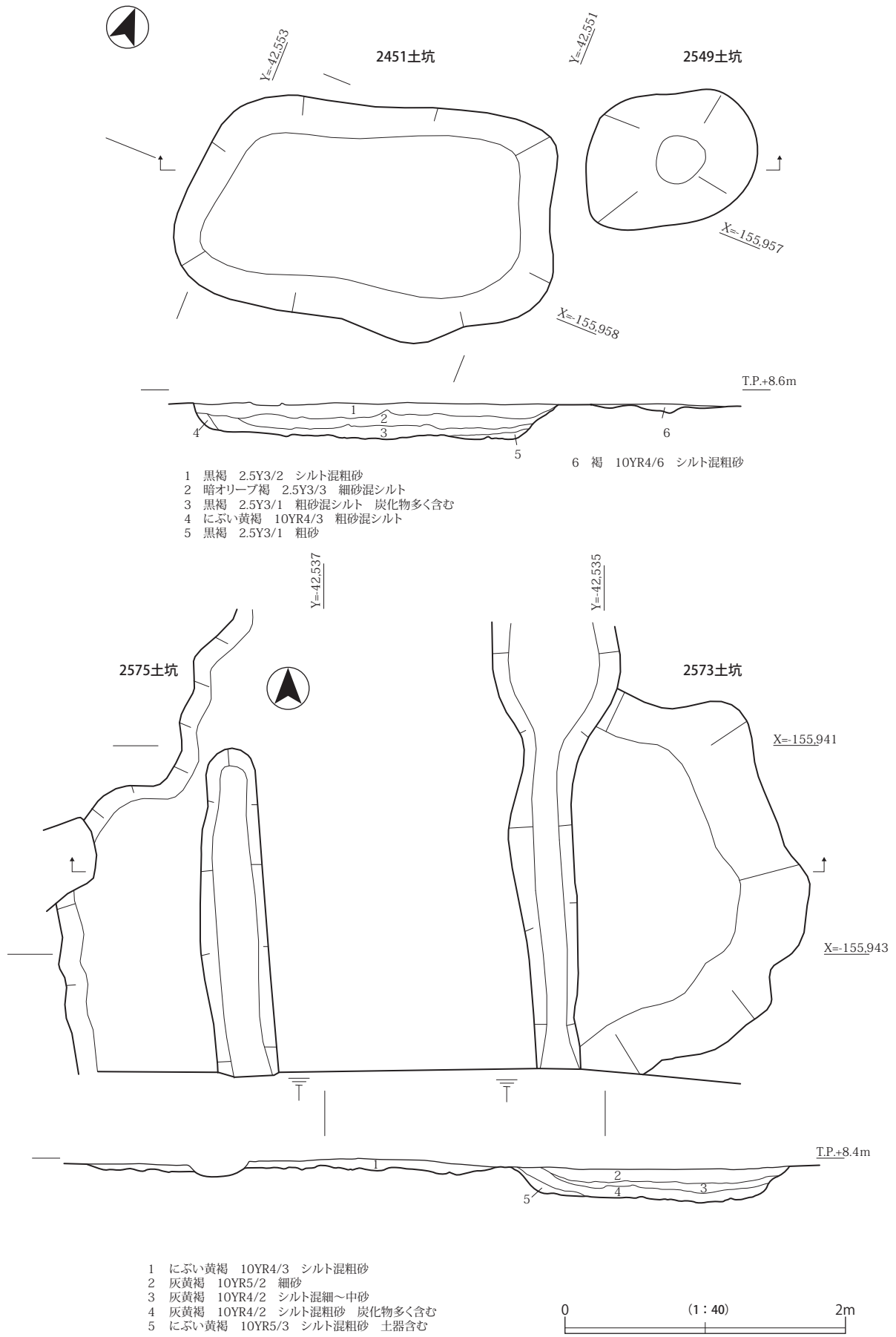


図281 4-1区 第4面 各土坑 平・断面図(2)

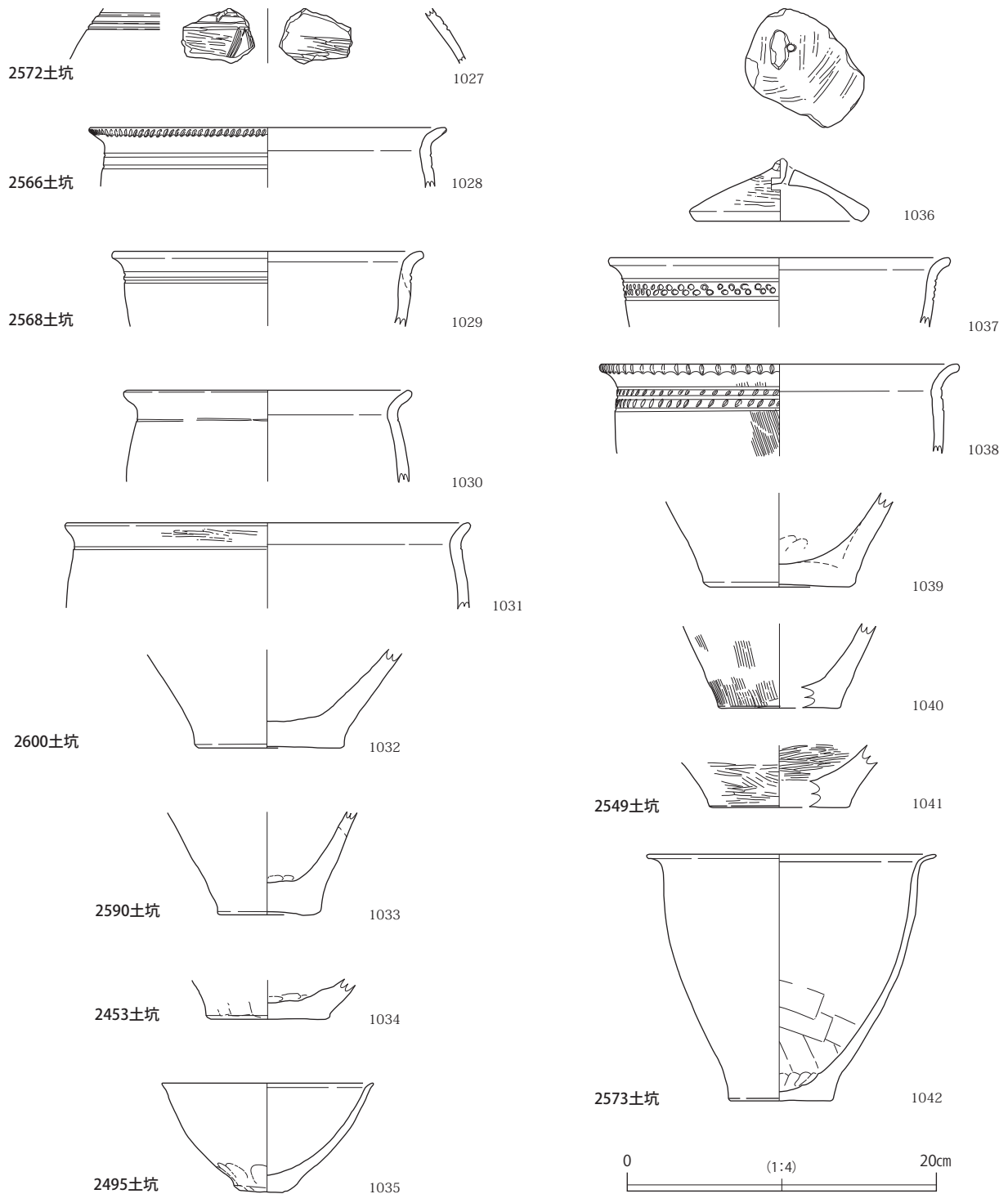


図282 4-1区 第4面 各土坑 出土遺物(1)

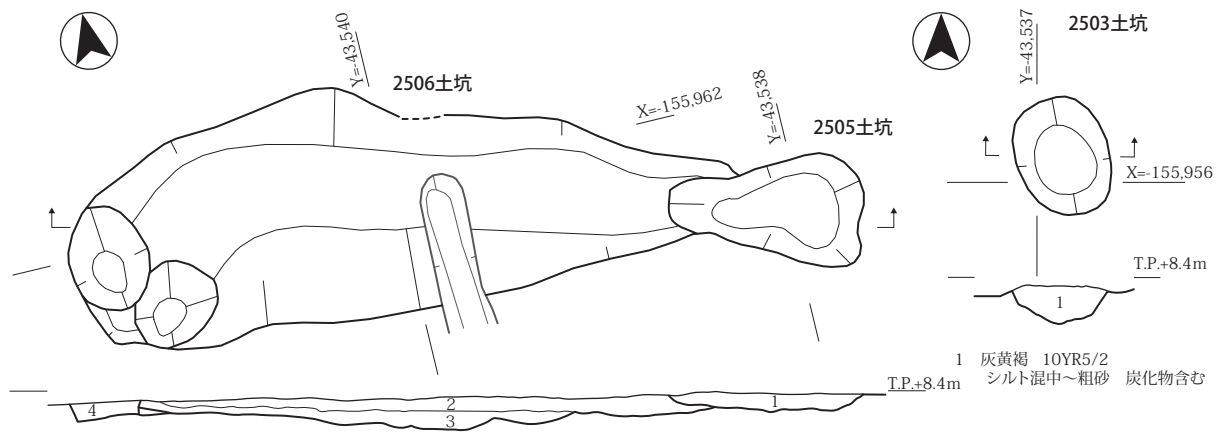
[2572土坑] (図269・270・280・282)

4-1区の西端部で検出した楕円形と思われるもので、検出長 1.85 m・検出幅 0.6 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は2層で、主に灰黄褐色のシルトである。

遺物は、弥生時代前期の土器・石器などが出土している。2572は壺の体部破片で、内外面伴にヘラミガキを施す。段・沈線2条・斜線・縦線の紋様を施す。

[2590土坑] (図269・270・280・282)

4-1区の北西端部で検出された不定形な溝状の土坑で、2420溝に切られる。検出長 1.3 m・幅 0.6



- 1 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混粗砂
- 2 灰黄褐 10YR5/2 シルト混粗砂 第5層・炭化物少量含む
- 3 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混中砂～粗砂
- 4 黄褐 10YR5/3 シルト混粗砂 灰色シルト偽礫含む (ピット)

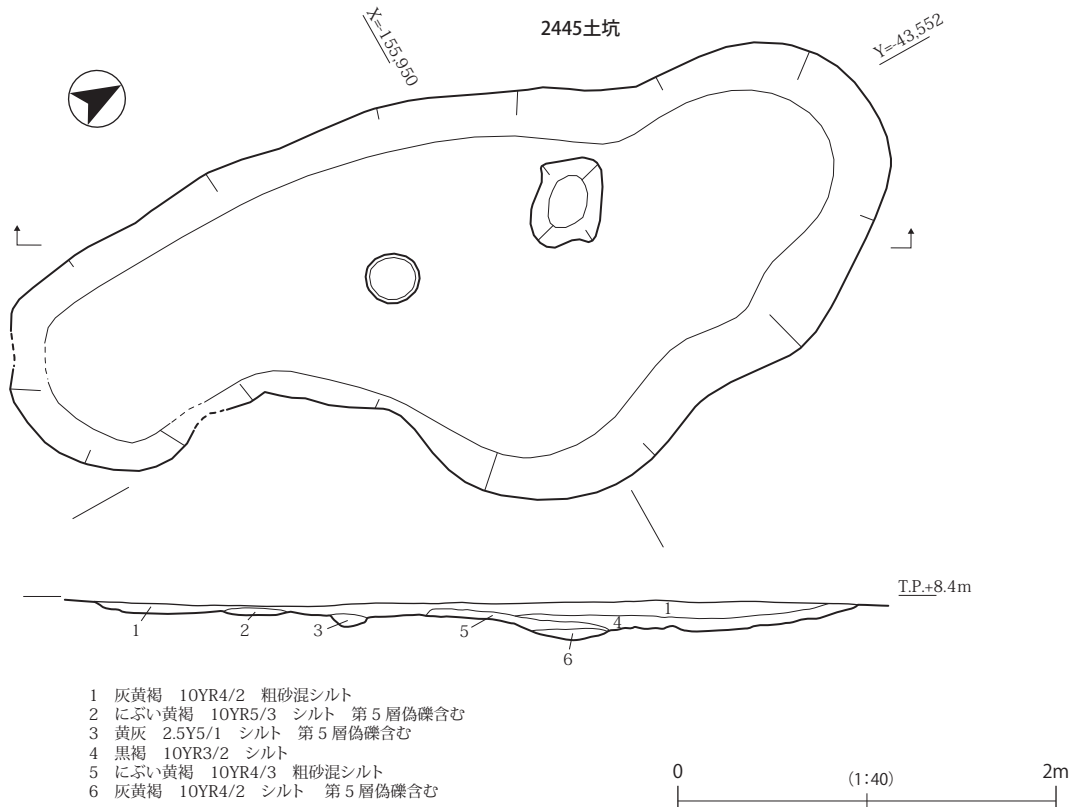


図283 4-1区 第4面 各土坑 平・断面図(3)

m・深さ 0.1 mを測る。埋土は3層で、主にシルトが混じるにぶい黄褐色の中砂～粗砂である。

遺物は、弥生時代前期の土器が出土している。2590は甕の平底の底部破片である。

[2549土坑] (図269・270・280・282)

4-1区の中央部付近で検出された不正形の土坑で、長径 1.3 m・短径 0.95 m・深さ 0.05 mを測る。埋土はシルトが混じる褐色の粗砂である。遺物は弥生時代前期の土器が出土し、1036は小型の壺蓋、1041は壺の底部破片、1037～1040は甕である。

[2451土坑] (図269・270・280・282)

4-1区の2549土坑の西隣で検出された隅丸方形の土坑である。長辺 2.65 m・短辺 1.6 m・深さ 0.3

mを測る。埋土は5層で、主に炭化物を多く含む粗砂混じりの黒褐色のシルトである。

遺物は、弥生時代前期の土器片が出土した。

〔2573・2575土坑〕（図269・270・280・282）

4-1区の北東端部で検出された土坑で隣接する。いずれも、不定形で、2573土坑は深さ0.25mを測り、埋土が4層で、主にシルトが混じるにぶい黄褐色の粗砂である。2575土坑は深さ0.1m弱で、シルトが混じるにぶい黄褐色が1層である。

遺物は、いずれの土坑からも弥生時代前期の土器・石器が出土した。1042は約9割を残存する無紋の甕である。体部内面下半に板状ナデを施す。

〔2600土坑〕（図269・270・274・282）

4-1区の西端で一部のみ検出されたため、全容は不明である。深さ0.15mを測り、埋土の状況から、柱穴の可能性はある。

遺物は弥生時代前期の土器・石器が出土している。

1032は壺底部破片、1030・1031の無紋の甕の口縁部破片である。

〔2503土坑〕（図269・270・283）

4-1区の東端部で検出された楕円形の土坑で、径0.5×0.6m・深さ0.2mを測る。埋土は、炭化物を含みシルトが混ざる灰黄褐色の中砂～粗砂である。

遺物は、弥生時代前期の土器・石器や焼土塊が出土している。

〔2505・2506土坑〕（図269・270・283）

4-1区の東南部で東西に隣接して検出された土坑で、2505土坑が切る。

遺物はわずかに弥生時代前期の土器片が出土している。

〔2445土坑〕（図269・270・283）

4-1区の中央付近で検出された不定形の土坑で、長さ4.8m・幅2.2m・深さ0.2mを測る。

弥生時代前期の土器がわずかに出土している。

〔2434土坑〕（図269・270・284）

4-1の区北西部で検出され、他の溝に切られる。検出長0.65m・幅0.8m・深さ0.2mを測る。埋土は2層で、遺物は出土していない。

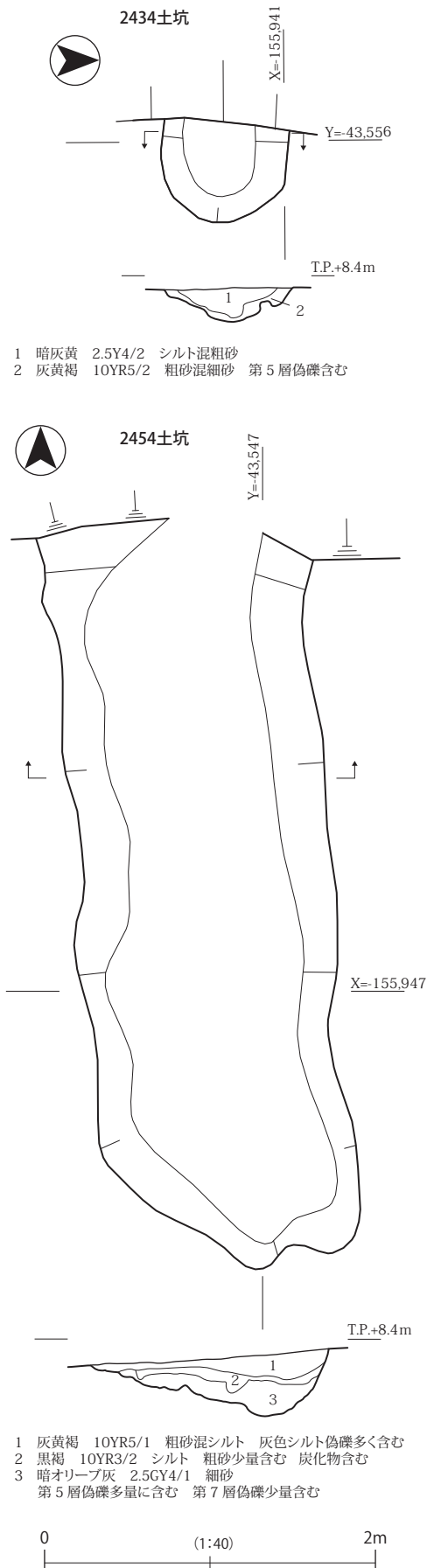


図284 4-1区 第4面 各土坑 平・断面図(4)

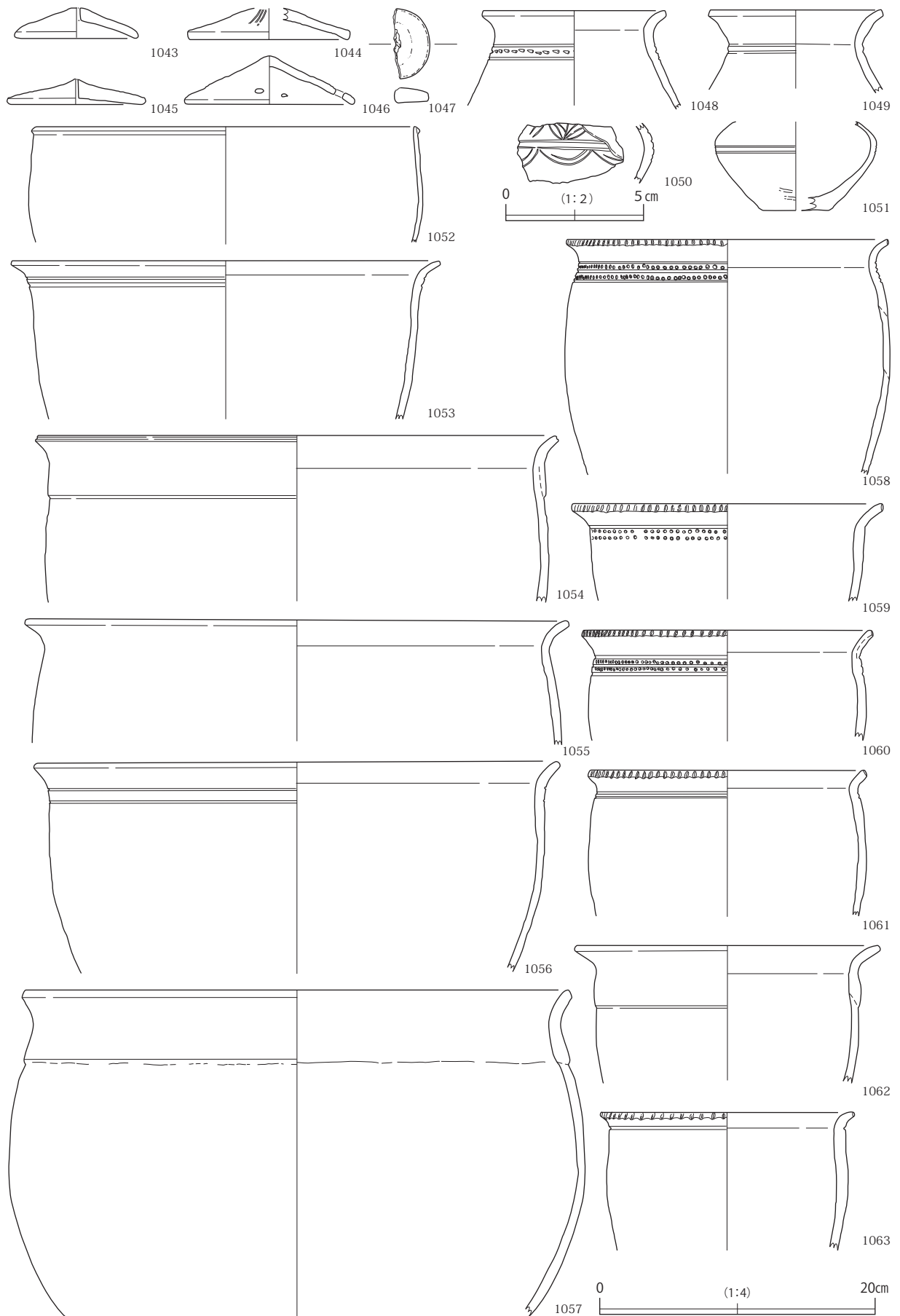


图285 4-1区 第4面 2528土坑 出土遗物

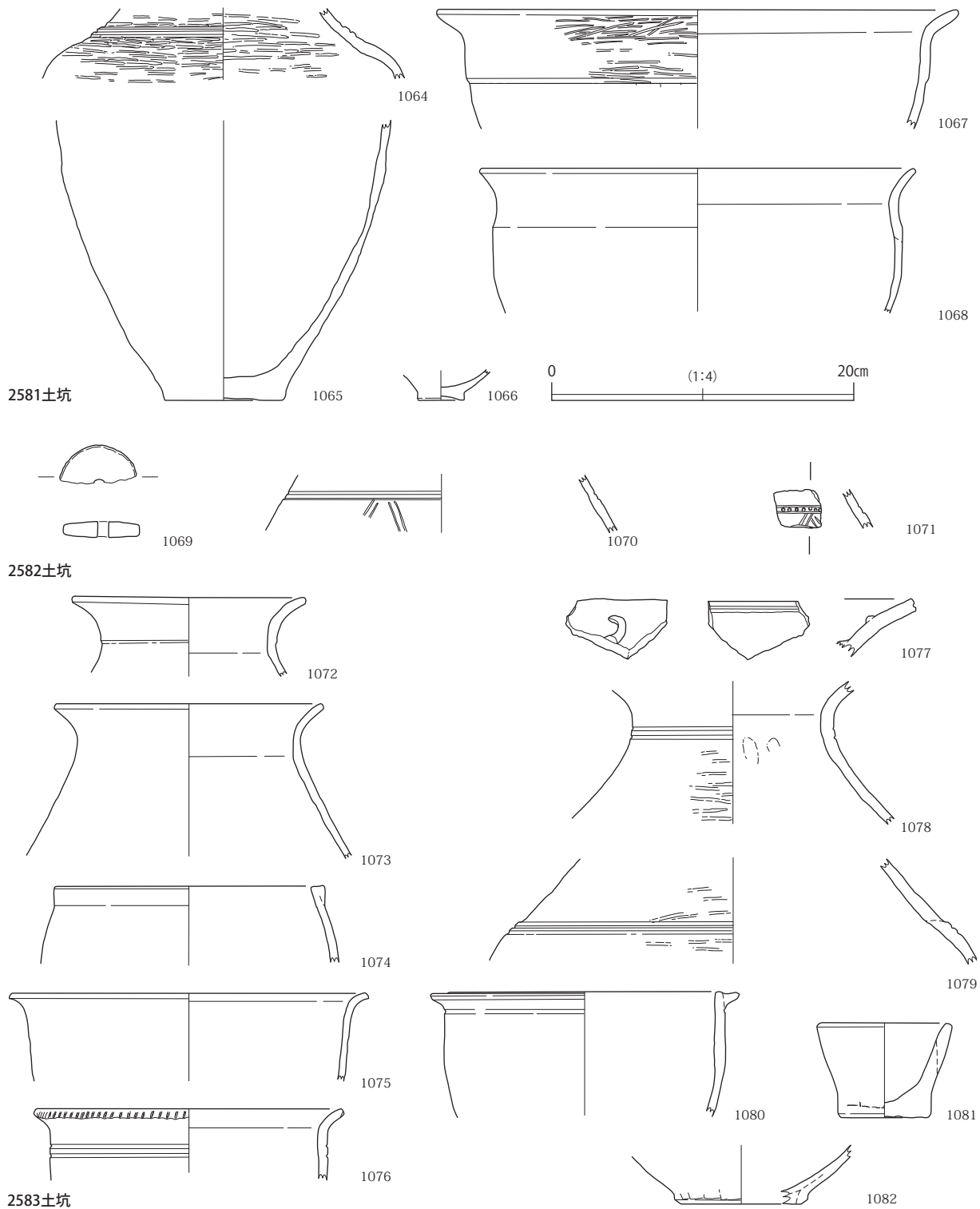


図286 4-1区 第4面 各土坑 出土遺物(2)

[2454土坑] (図269・270・284)

4-1区の北半部の中央で検出された不定形の土坑である。検出長 4.5 m・幅 1.6 m・深さ 0.4 mを測る。埋土は3層で、主に偽礫を多量に含む暗オリーブ灰色の細砂である。

遺物は、古代の軒平瓦片1点と弥生時代前期の土器片が数点出土している。

[2528土坑] (図269・270・285 図版59-1・103)

4-1区の南端部の東よりで検出された不正形の土坑で、1472溝に東側を切られる。長さ約 8 m・幅

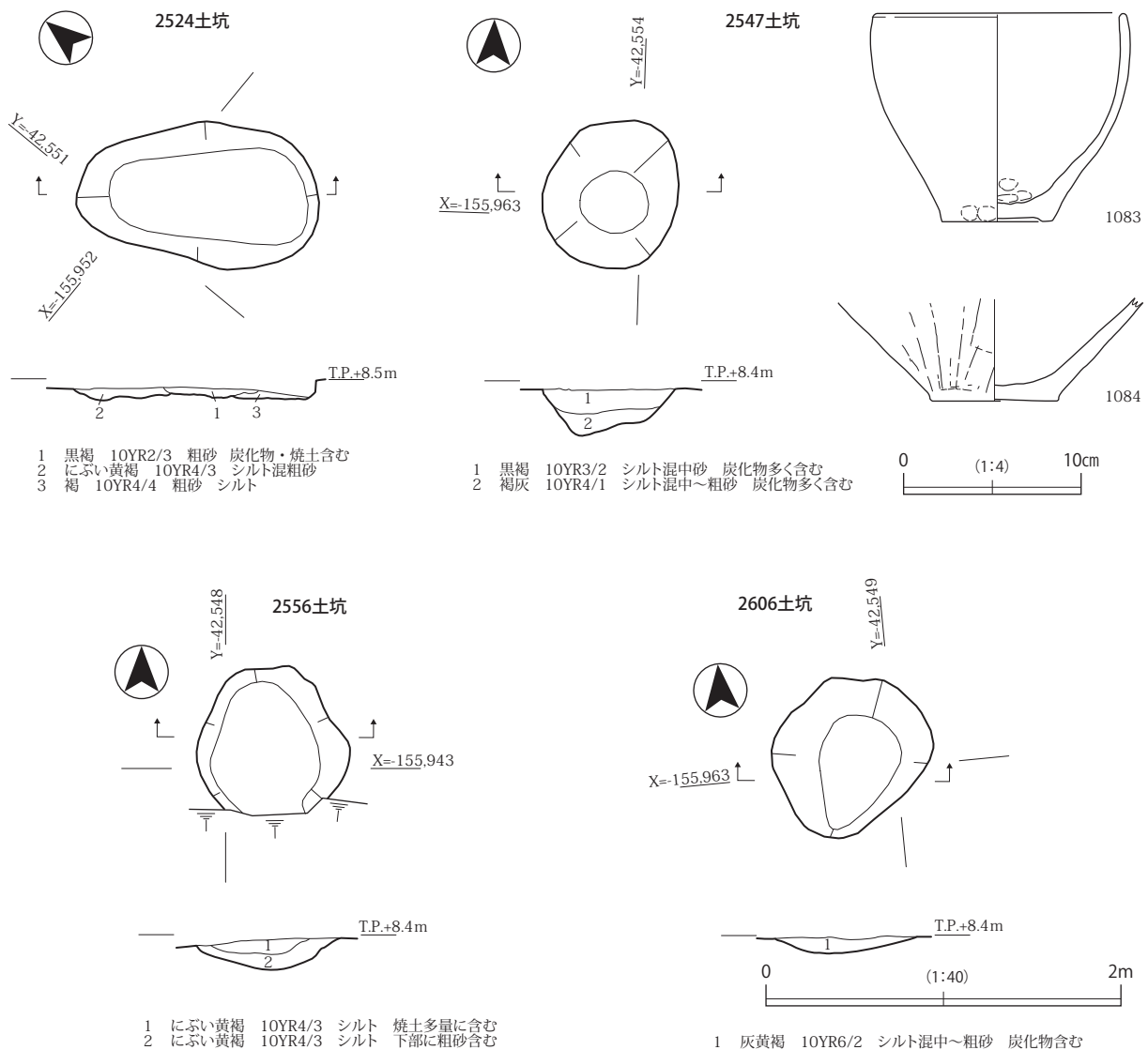


図287 4-1区 第4面 各土坑平・断面図(5) 2547土坑 出土遺物

3.2 mを測る。

遺物は、弥生時代前期の土器・石器が出土した。石器については後述する（第5節 参照）。

1043～1046は壺蓋で、1043・1045は中心に紐孔が1個穿たれ、無紋である。1046は2個1対の紐孔を穿つ。1044は、へら描きの文様が施されるが、小片のため詳細は不明である。

1048～1051は壺で、1048・1049は口縁部破片である。前者には頸部に沈線2条間押捺を施し、後者は削り出し突帯1帯を施す。1050は体部破片で、へら描き木の葉・沈線2条・連弧の文様を施している。1051は小型壺の口頸部を破損するもので、体部に沈線2条を施す。

1056・1057は大型の鉢で、前者が体部に沈線2条、後者が段を施す。

1053～1055・1058～1063は甕で、1053～1055・1058が大型で、それ以外が中型である。1054は口縁部端部に沈線1条を施し、中型のものに口縁部端部に刻み目を施すものが多い。1058～1060は体部に沈線3条間に刺突を施す。1059と1060は、同一個体の可能性がある。いずれのものも、表面剥離著しく、調整は不明である。1047は土製紡錘車で、約1/2を残す。

1052は縄文時代晩期の長原式の口縁部破片で、口縁部直下に突帯を1帯施す。

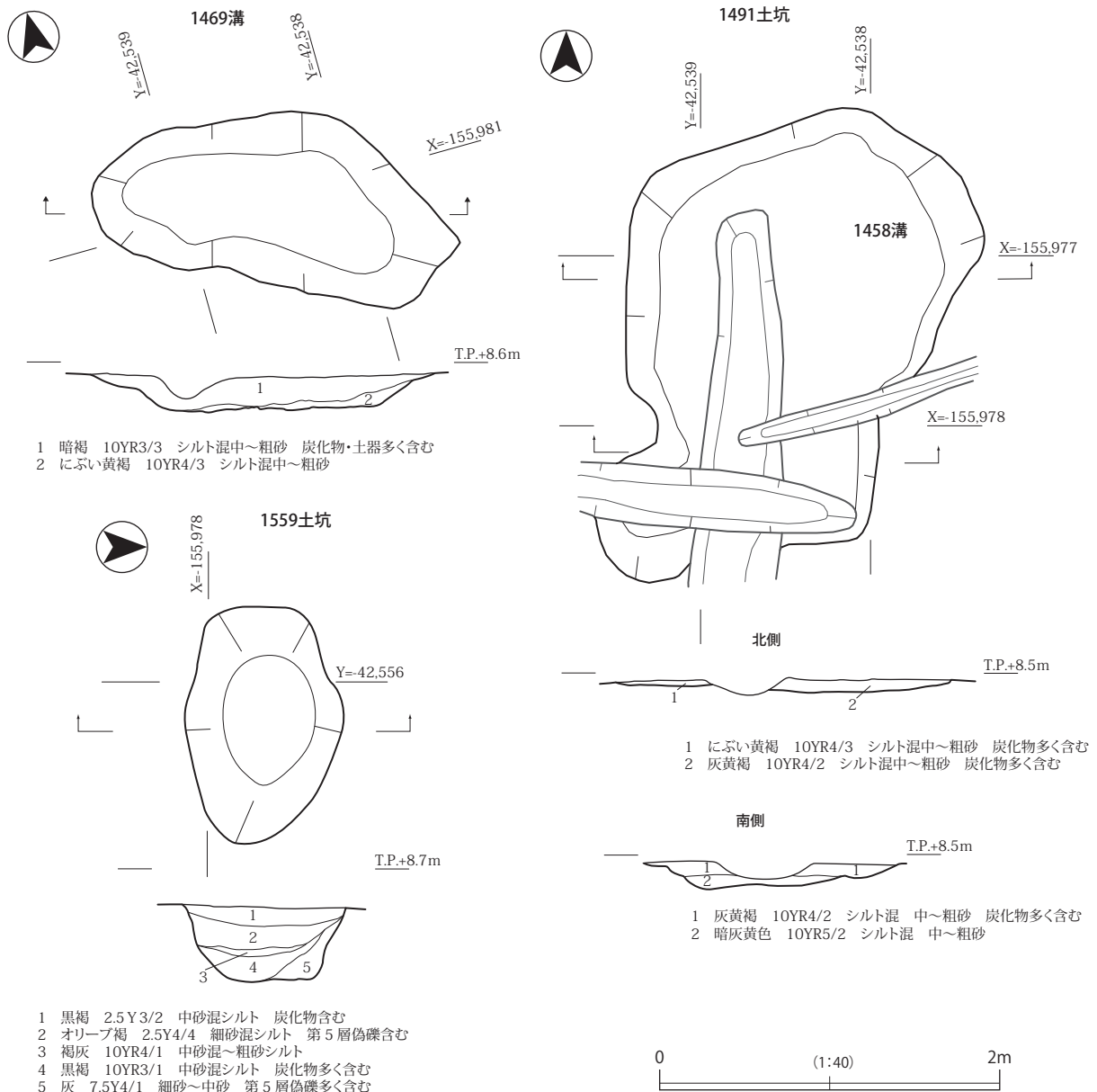


図288 4-2区 第4面 1469・1491・1559土坑 平・断面図

[2580～2583土坑] (図269・270・286 図版59-2)

4-1区の2528土坑の西側に隣接し、4基の土坑が重複している。2583土坑は2460土坑に切られる。遺物は、各土坑から弥生時代前期～中期の土器・石器が出土した。

2581土坑からは、壺・鉢・甕が出土している。1064は壺の体部破片で、体部の内外面にヘラミガキを施す。削り出し突帯上沈線1条を施す。1067・1068は大型の外反する鉢の口縁部破片で、体部に前者は段を施し、後者は無紋である。1065は甕の口縁部を欠損するもので、体部外面に煤が付着する。以上の土器は、弥生時代前期に属す。1066は小型壺の底部で、突出する底部が窪むもので、形態・器壁の薄さなどから、弥生時代中期に属すと考えられる。

2582土坑からは、壺・土製紡錘車が出土している。1070・1071は、いずれも体部小片で、沈線2条・斜線および沈線2条間押捺・斜線の文様を施す。1069の紡錘車は、約1/2を残す。

2582土坑からは、壺・鉢・甕が出土している。1072・1073・1077～1079は壺で、1072は頸部に段を施し、1073は無紋である。1077は口縁部の小破片で、口縁部端部に沈線1条・内面に貼付突帯を弧状に施

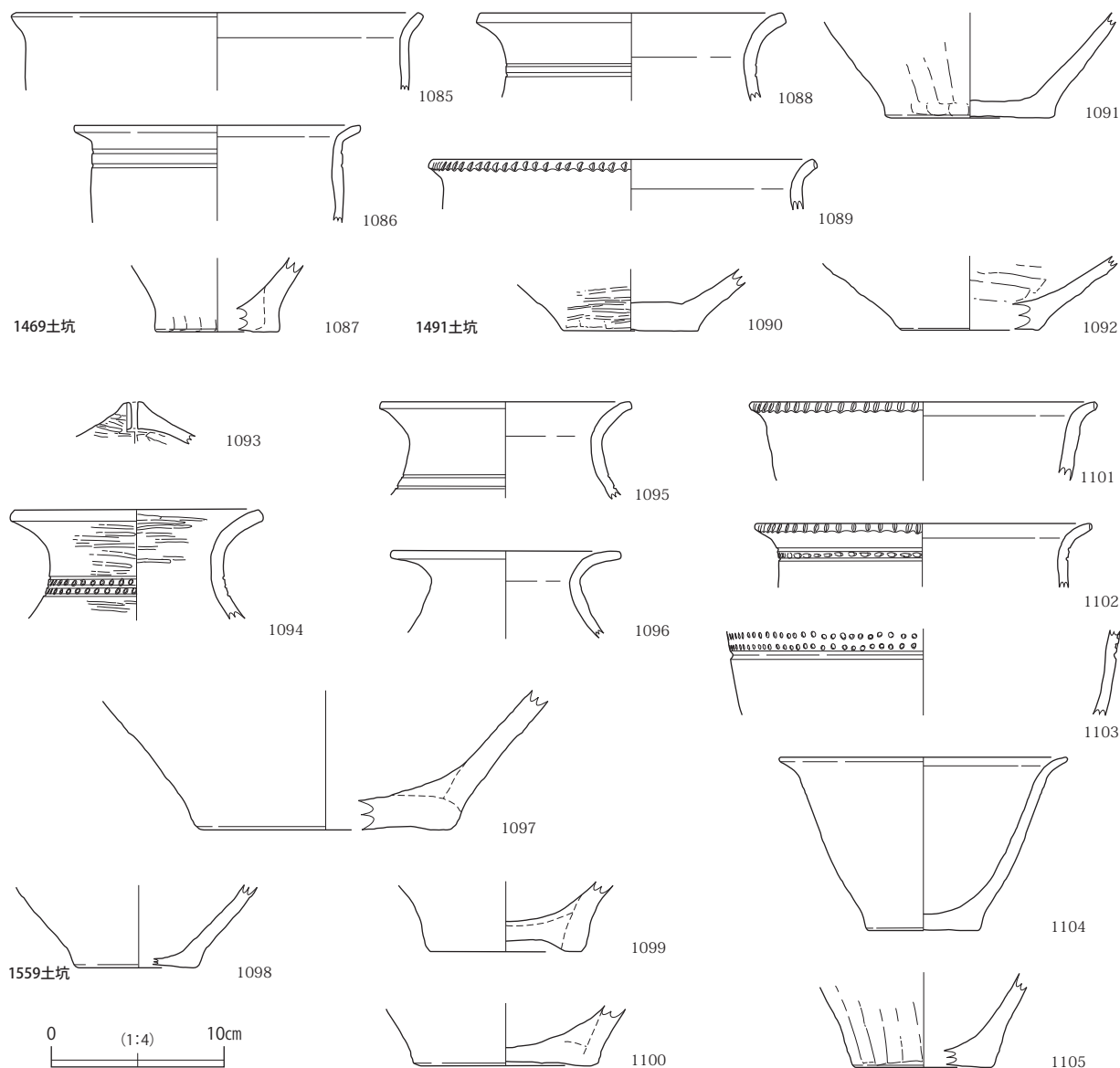


図289 4-2区 第4面 1469・1491・1559土坑 出土遺物

す。1078・1079は頸部および体部破片で、前者は沈線2条、後者は削り出し突帯上沈線1条を施す。いずれも、外面にヘラミガキを施す。この2者は、同一個体の可能性がある。1081は約1/3を残す小型の直口鉢である。1075・1076は外反する口縁部を持つもので、前者は無紋で、後者は口縁部端部に刻み目・体部に沈線2条を施す。1080は直口の甕で、口縁部端部下に貼付突帯を施す。

以上が弥生時代前期に属す。

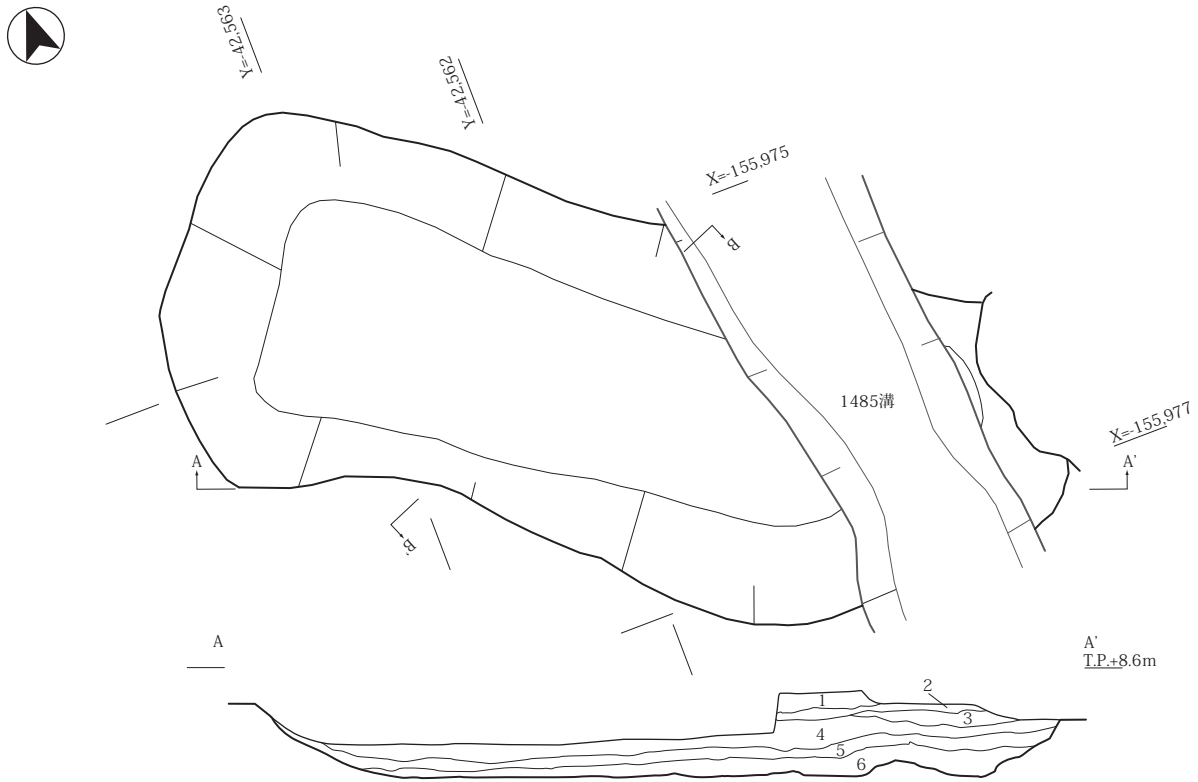
1074は鉢の口縁部破片で、内傾する口縁部上端部が面をもち、外方へ肥厚する。形態から弥生時代中期後半に属すと思われる。

[2524土坑] (図269・270・287)

4-1区の中央部付近で検出された土坑で、不正楕円形である。長径1.35m・短径0.8m・深さ0.05mを測る。埋土は3層である。遺物は土器の小片が出土している。

[2547土坑] (図269・270・287)

4-1区の南東の2528土坑の北西肩部で検出された不正楕円形の土坑で、長径0.8m・短径0.7m・深さ0.2mを測る。埋土は2層で、炭化物を多く含むシルトが混じる中砂から粗砂である。



- 1 黒褐 10YR2/2 シルト・粗砂混細砂
- 2 黒褐 2.5Y3/1 シルト混粗砂
- 3 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂
- 4 黒褐 2.5Y3/1 シルト混中～粗砂 第5層偽礫含む
- 5 黒褐 2.5Y 3/1 シルト混粗砂 炭化物多く含む
- 6 黄灰色 2.5Y4/1 粗砂 第5層偽礫含む

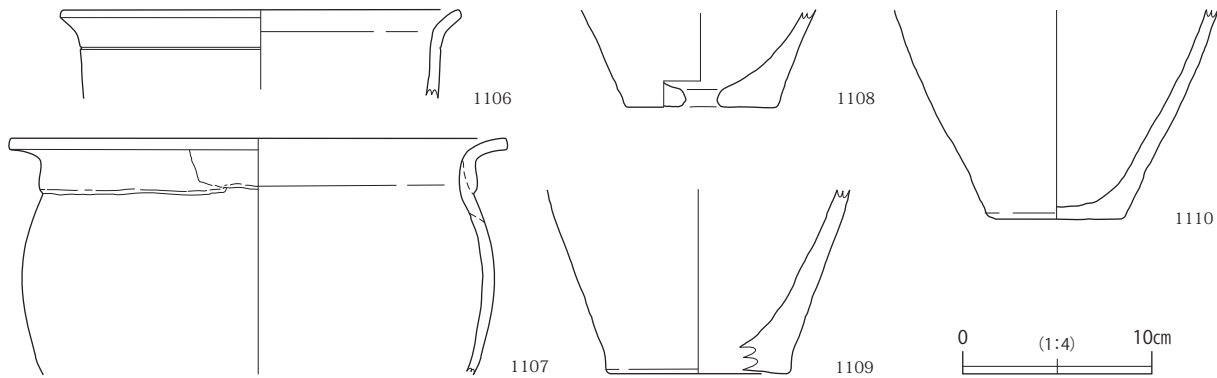
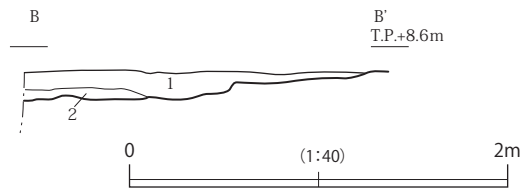


図290 4-2区 第4面 1577土坑 平・断面図 出土遺物

遺物は、土器片がわずかに出土している。1083は直口の鉢で、約1/2を残す。1084は壺の底部破片である。形態から、これらは弥生時代中期初頭に属すと考えられる。

[2556土坑] (図269・270・287)

4-1区の北端部で検出され、南端部は攪乱で消失する。不正形で、径0.8m・深さ0.15mを測る。埋土は2層である。

遺物は土器片が1片のみ出土した。

[2606土坑] (図269・270・287)

4-1区の南端部で、2582土坑の西側で検出された不正形の土坑である。径0.9m・深さ0.05mを測

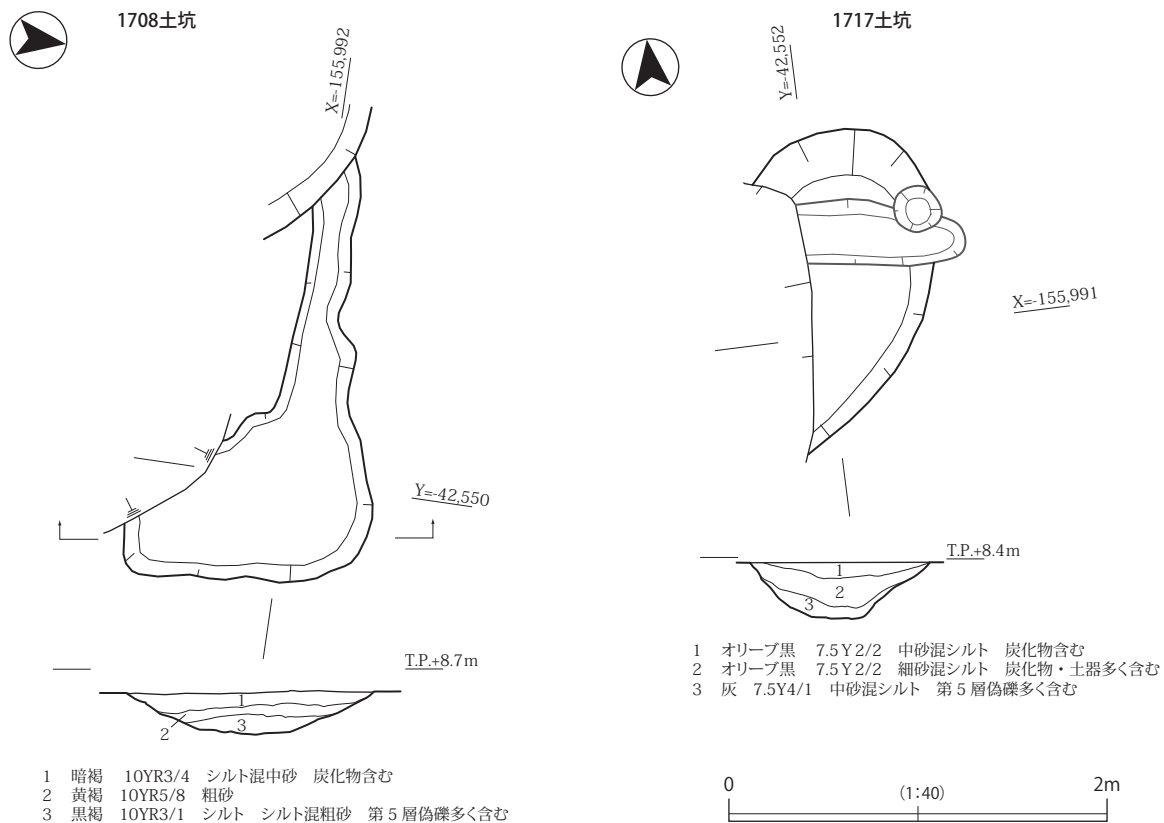


図291 4-2区 第4面 1708・1717土坑 平・断面図

る。埋土は1層である。

遺物は、古墳時代前期初頭の小片がわずかに出土する。

〔1469土坑〕（図269・271・288・289）

4-2区の東端部の中央付近で検出された不正形の土坑である。長径 2.0 m・短径 1.0 m・深さ 0.2 mを測る。

埋土は2層で、主に炭化物を含むシルトが混じる、にぶい黄褐色の中砂から粗砂である。1458溝を切る。

遺物は、弥生時代前期の土器が出土し、1085・1086は甕の口縁部破片で、1087は底部破片である。

〔1491土坑〕（図269・271・288・289）

4-2区の東端部の1469土坑の北側で検出された不定形の土坑で、長さ 2.4 m・幅 1.9 m・深さ 0.1 ~ 0.2 mを測る。埋土は2層である。1458溝に切られる。

遺物は、弥生時代前期の土器・石器が出土している。1088は壺の口縁部破片で、頸部に沈線2条を施す。1090・1092は、壺の底部破片である。1089は甕の口縁部破片で、端部に刻み目を施す。1091は甕の底部破片である。

〔1559土坑〕（図269・271・288・289）

4-2区の南西部で検出された不正楕円形の土坑で、長径 1.4 m・短径 1.0 m・深さ 0.4 mを測る。埋土は5層で、主に炭化物を含み中砂が混じる、黒褐色のシルトである。

遺物は、弥生時代前期の土器・石器が出土している。

1093は壺蓋の天井部破片で、内外面にヘラミガキを施す。1094~1096は壺の口縁部破片で、1094は内外面にヘラミガキを施し、頸部に沈線3条間押捺を施す。1095は頸部に沈線2条を施し、1096は無紋で

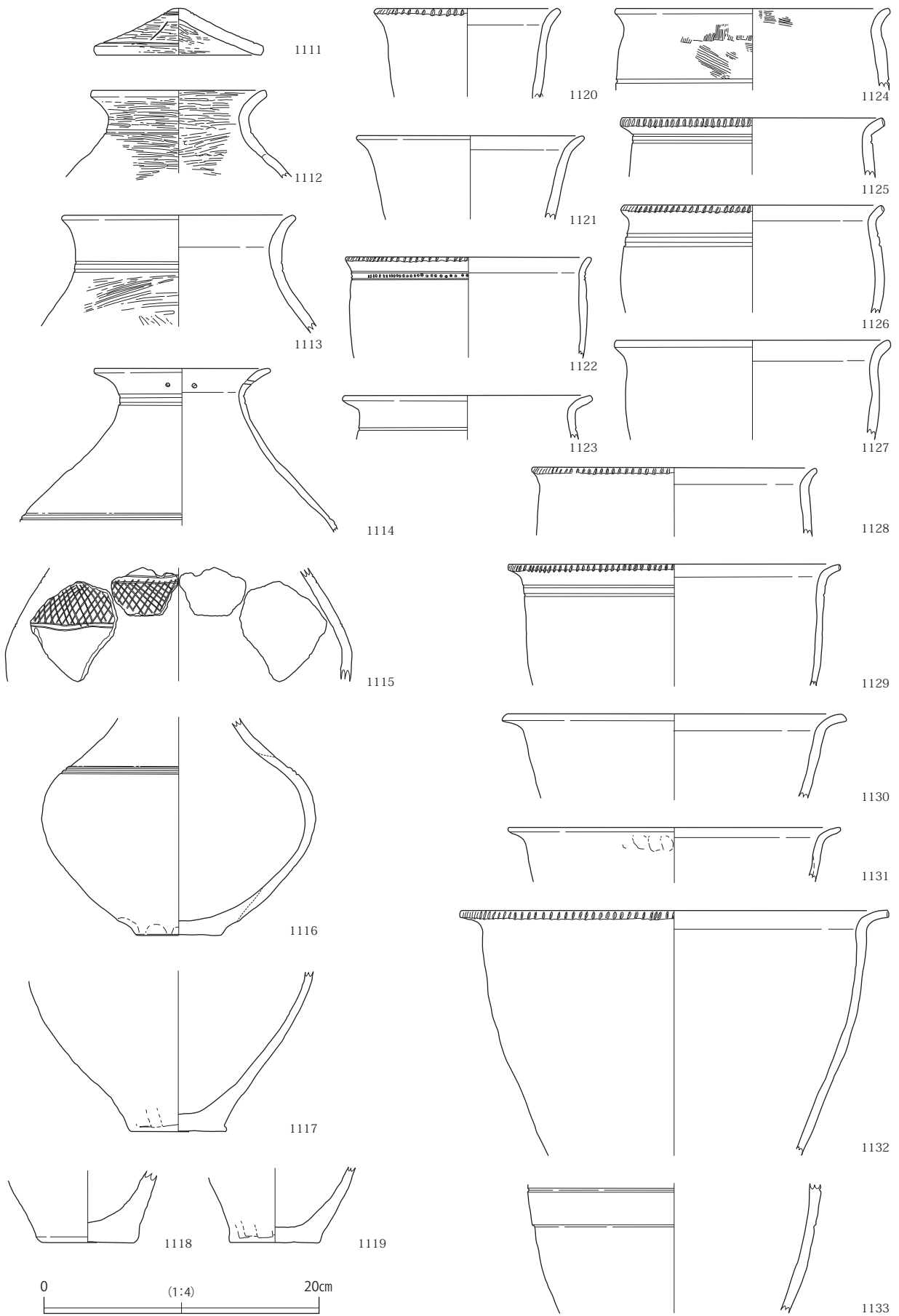


图292 4-2区 第4面 1717土坑 出土遗物(1)

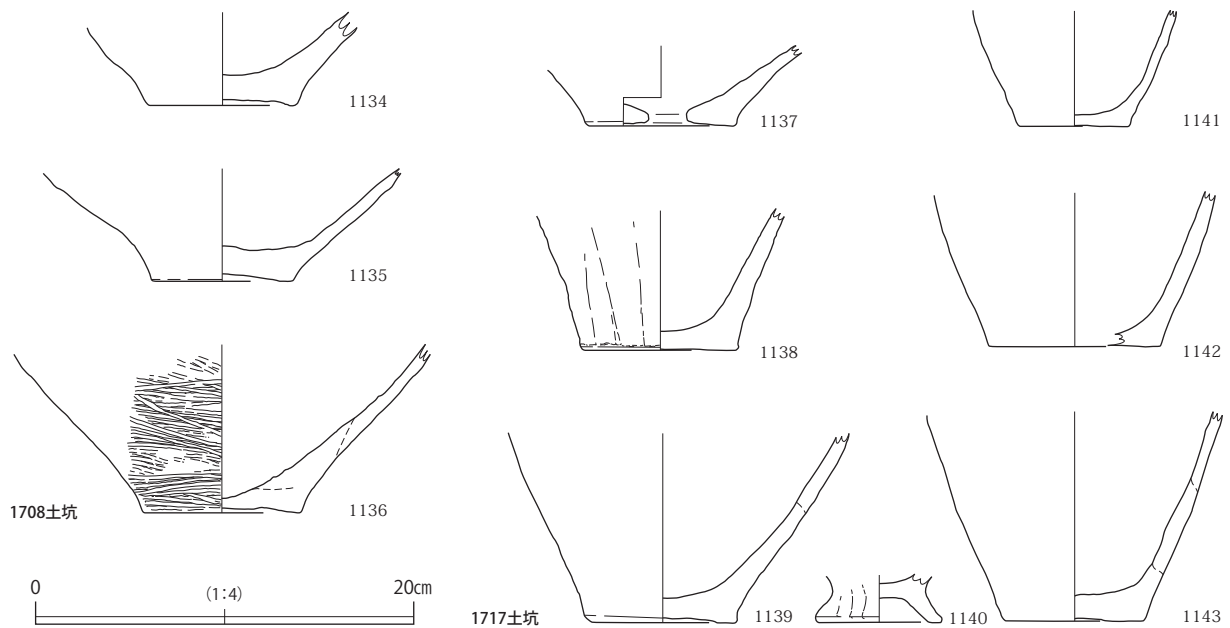


図293 4-2区 第4面 1708・1717土坑 出土遺物(2)

ある。1097～1100は、壺の底部破片である。1101～1105は甕である。1101・1102は口縁部破片で、いずれも、口縁部端部に刻み目を施し、後者は体部に沈線2条間押捺を施す。1103は体部の小片で、刺突2列・沈線を施す。1104は小型のもので、口径16.4cm・器高10.0cmを測る。無紋のもので、口縁部に煤が付着し、二次焼成を受ける。1105は甕の底部破片で、外面に板状ナデを施す。

〔1577土坑〕(図269・271・290)

4-2区の西端部で検出された隅丸長方形の土坑である。1485溝に切られる。長辺4.8m・短辺1.8m・深さ0.5mを測る。

埋土は6層に細分され、主に黄褐色の粗砂や黒褐色のシルトが混じる粗砂が堆積している。

遺物は、弥生時代前期の土器・石器が出土している。

土器には、甕がある。1106・1107は口縁部破片で、いずれも内外面にナデを施す。前者には体部に沈線1条を、後者には段を施す。1108～1110は甕の底部破片で、1108は底部に焼成後穿孔している。1110は内外面に煤が付着する。

〔1708土坑〕(図269・271・291・293)

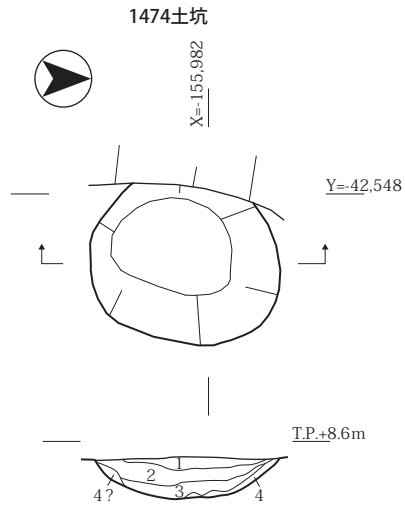
4-2区の南端部で検出された土坑で、他の土坑数基に切られているため、詳細は不明である。検出長2.3m・幅1.2m・深さ0.15mを測る。埋土は3層で、粗砂が主である。

遺物は、弥生時代前期の土器が出土している。1134～1136は壺の底部破片である。

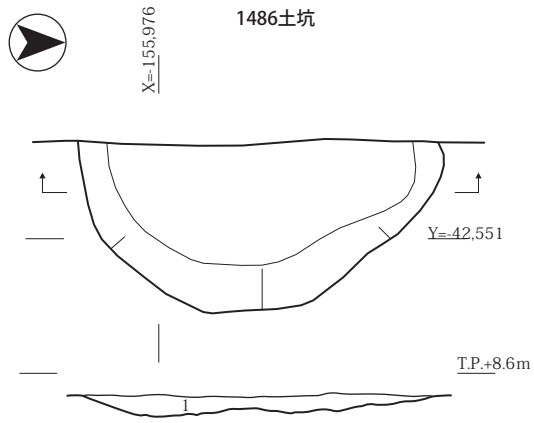
〔1717土坑〕(図269・271・291～293 図版105)

4-2区の南西端で検出された楕円形土坑で、1607溝に切られる。検出長1.6m・検出幅1.1m・深さ0.3mを測る。埋土は3層で、主に炭化物を含む細砂や中砂が混じるオリーブ黒色のシルトである。

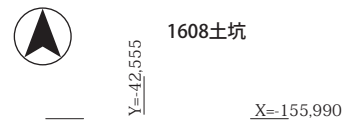
遺物は、弥生時代前期の土器が出土した。1111は、壺蓋で約2/3を残す。内外面にヘラミガキを施す。沈線2条・縦線・沈線1条を施す。1112～1114は壺の口頸部から体部上半のもので、1112・1113は内外面にヘラミガキを施す。沈線を1・2条施す。1114は、頸部に2条の沈線・体部に段・沈線1条以上を施す。1115は壺の体部文様破片で、沈線各2条間ヘラ描き斜格子を施す。1116は口頸部を欠損するもので、体部に段・沈線2条を施す。角閃石を含む生駒西麓産のものである。1117は壺の体部下半から



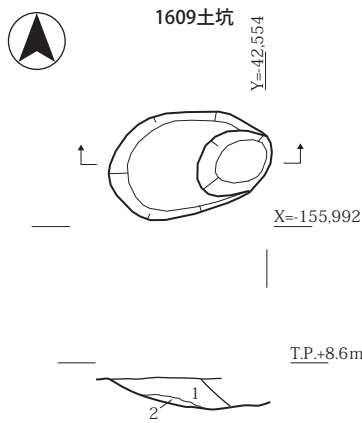
- 1 黒褐 2.5Y3/2 シルト混中砂
- 2 黒褐 2.5Y3/2 シルト混細砂 炭化物多く含む
- 3 オリーブ黒 5Y2/2 細砂混シルト 炭化物含む
- 4 褐 10YR4/4 細砂 第5層偽礫含む



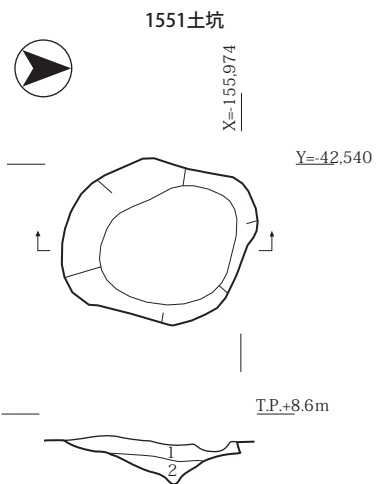
- 1 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混中砂



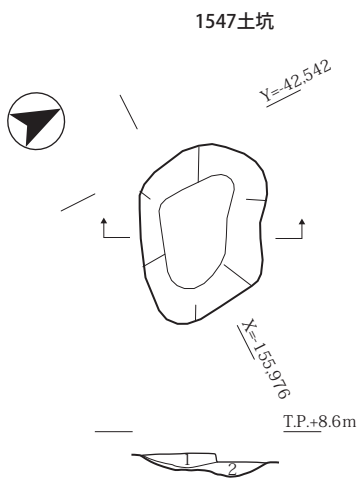
- 1 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混中～粗砂 炭化物含む
- 2 にぶい黄褐 10YR4/3 中～粗砂 第5層偽礫含む



- 1 にぶい黄橙 10YR4/3 シルト混中砂
- 2 暗褐 10YR3/4 粗砂 第5層偽礫含む



- 1 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混中砂 土器・炭化物多く含む
- 2 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混中砂



- 1 灰黄褐 10YR5/2 シルト混中～粗砂 炭化物含む
- 2 にぶい黄橙 10YR6/3 シルト混中～粗砂

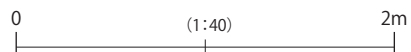


図294 4-2区 第4面 各土坑 平・断面図

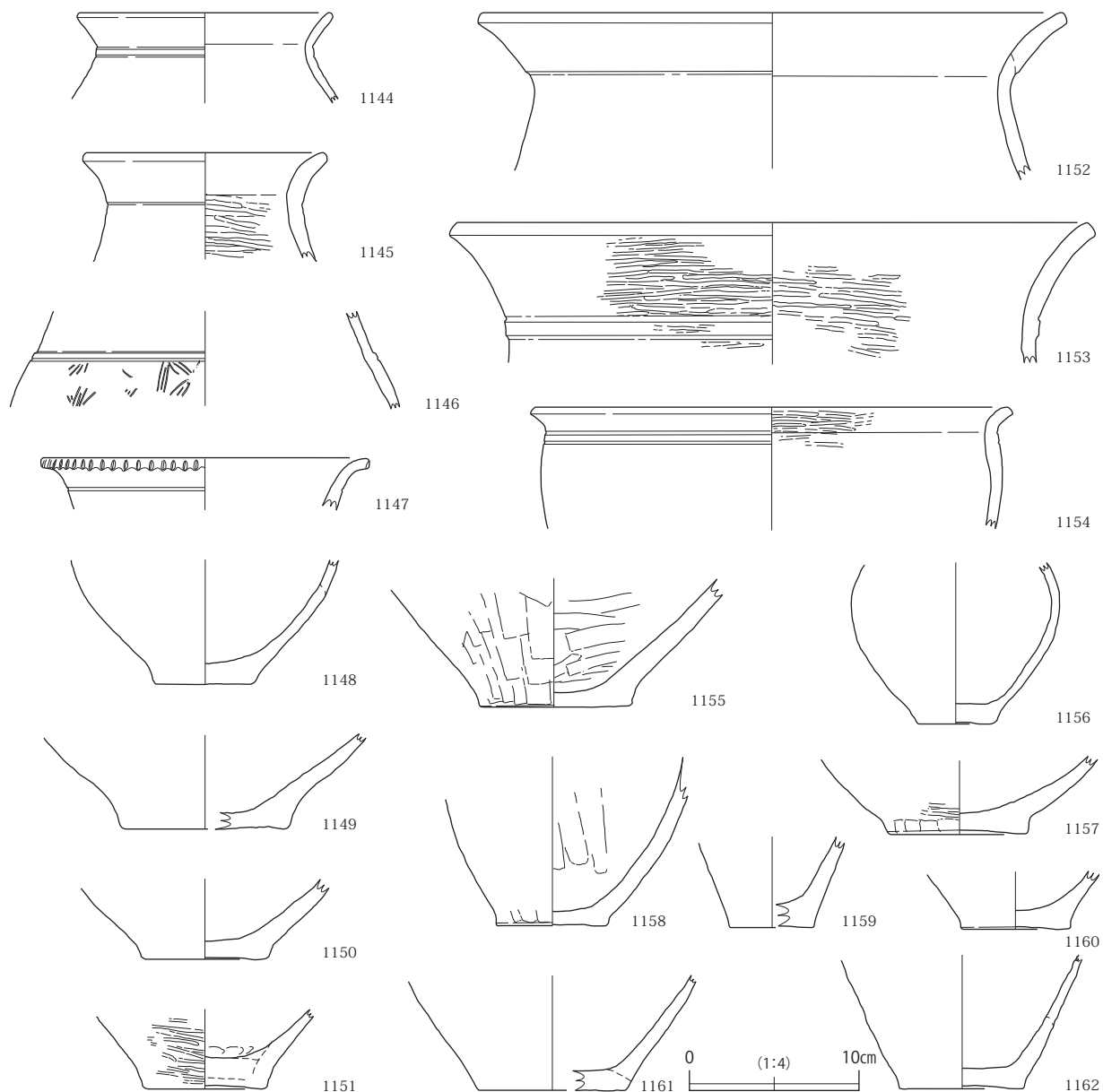


図295 4-2区 第4面 1455土坑 出土遺物

底部を残す。1118～1133は甕で、1120が小型で、1121が中型、それ以外が大型である。1124は体部外面にハケメを施す以外は、表面摩滅のため、調整不明である。口縁端部に刻み目を施すものがやや多い。紋様は、無紋ないしは沈線1・2条を施すもので、1121は沈線間に刺突を施す。1133は沈線1条以上・段を施す。1132は外面に煤が付着する。1118・1119・1137～1143は甕の底部破片である。1137は焼成後の穿孔がある。1140は突出する上げ底のものである。1130は鉢の可能性はある。

〔1455土坑〕（図269・271・295）

4-2区の東端部北寄りで見出された不定形の落込み状の土坑で、東側は調査区外へ延びる。検出長10.6m・検出幅2.0mを測る。

遺物は、弥生時代前期から後期の土器・石器が出土した。

1144・1145は壺の口縁部破片で、沈線2条および段を施す。1152・1153は大型壺の口縁部破片で、段および削り出し突帯を施す。1146は壺の体部破片で、段・沈線1条・木の葉を施す。

1148～1155・1156・1157は壺の底部破片で、1148・1157は弥生時代中期初頭に属し、1156は弥生時代

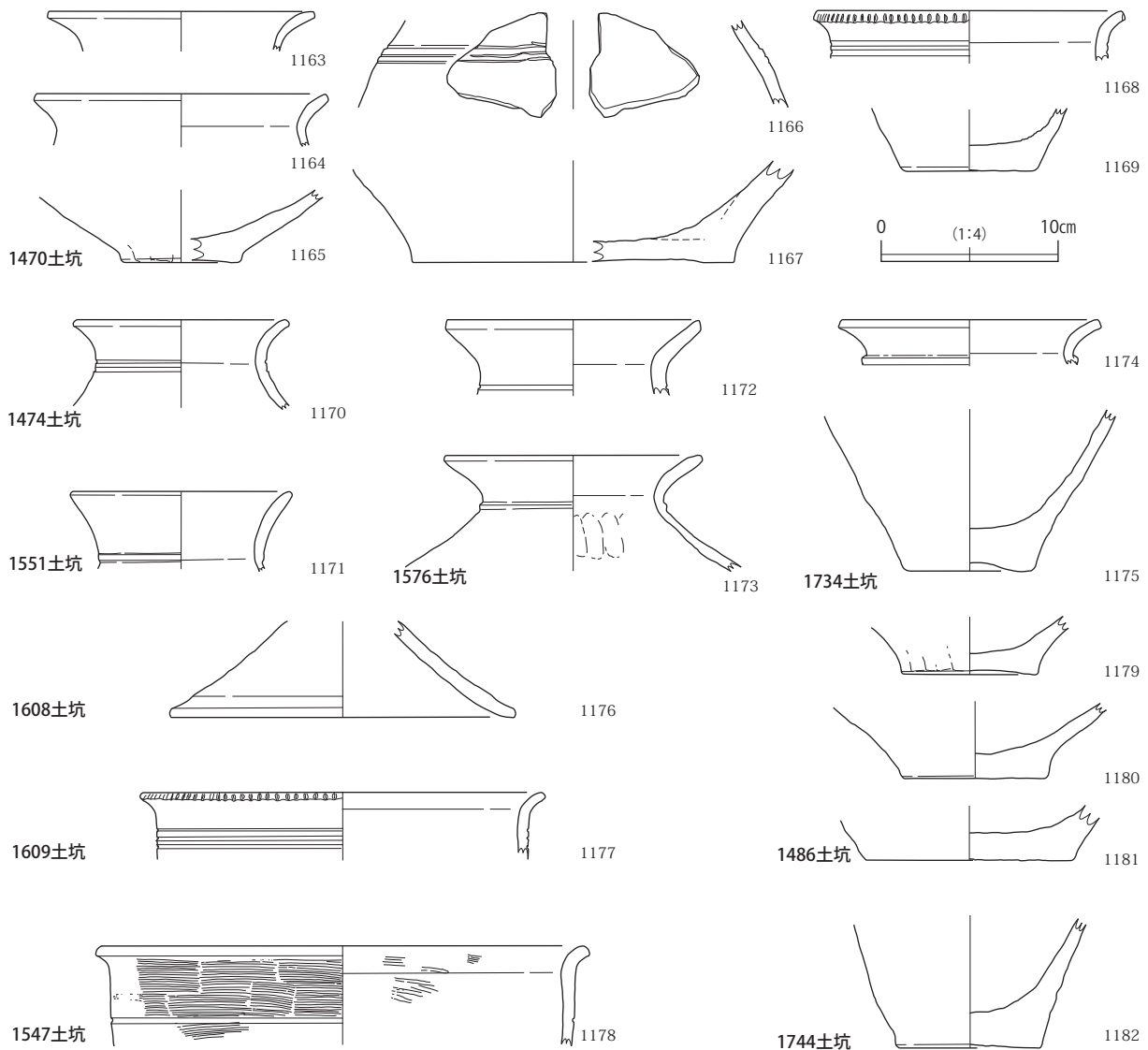


図296 4-2区 第4面 各土坑 出土遺物

後期の長頸壺の体部以下のものである。他は、前期に属す。1147は甕口縁部の小片で、口縁端部に刻み目・体部に沈線1条を施す。1158~1162は甕の底部破片である。

〔1474土坑〕(図269・271・294・296)

4-2区の中央部付近で検出された不正円形の土坑で、西側を溝に切られる。径1.0m・深さ0.25mを測る。埋土は4層で、主に炭化物を含む黒褐色やオリーブ黒色のシルトや細砂である。

遺物は、弥生時代前期の壺が1点のみ図化できた。1170は頸部に沈線2条を施す。

〔1486土坑〕(図269・271・294・296)

4-2区の中央部の北西寄りで検出された不正楕円形の土坑で、西側は溝に切られる。長さ1.9m・検出幅0.9m・深さ0.1mを測る。埋土は、シルト混じりのにぶい黄褐色中砂が1層である。

遺物は、弥生時代前期の壺の底部破片(1180・1181)や甕の底部破片(1179)が出土した。

〔1547土坑〕(図269・271・294・296)

4-2区の北東部で検出された不定形の土坑で、長さ0.9m・幅0.65m・深さ0.1mを測る。埋土は2層で、シルトが混じる粗砂が主である。

遺物は、甕の口縁部破片を1点のみ図化できた(1178)。

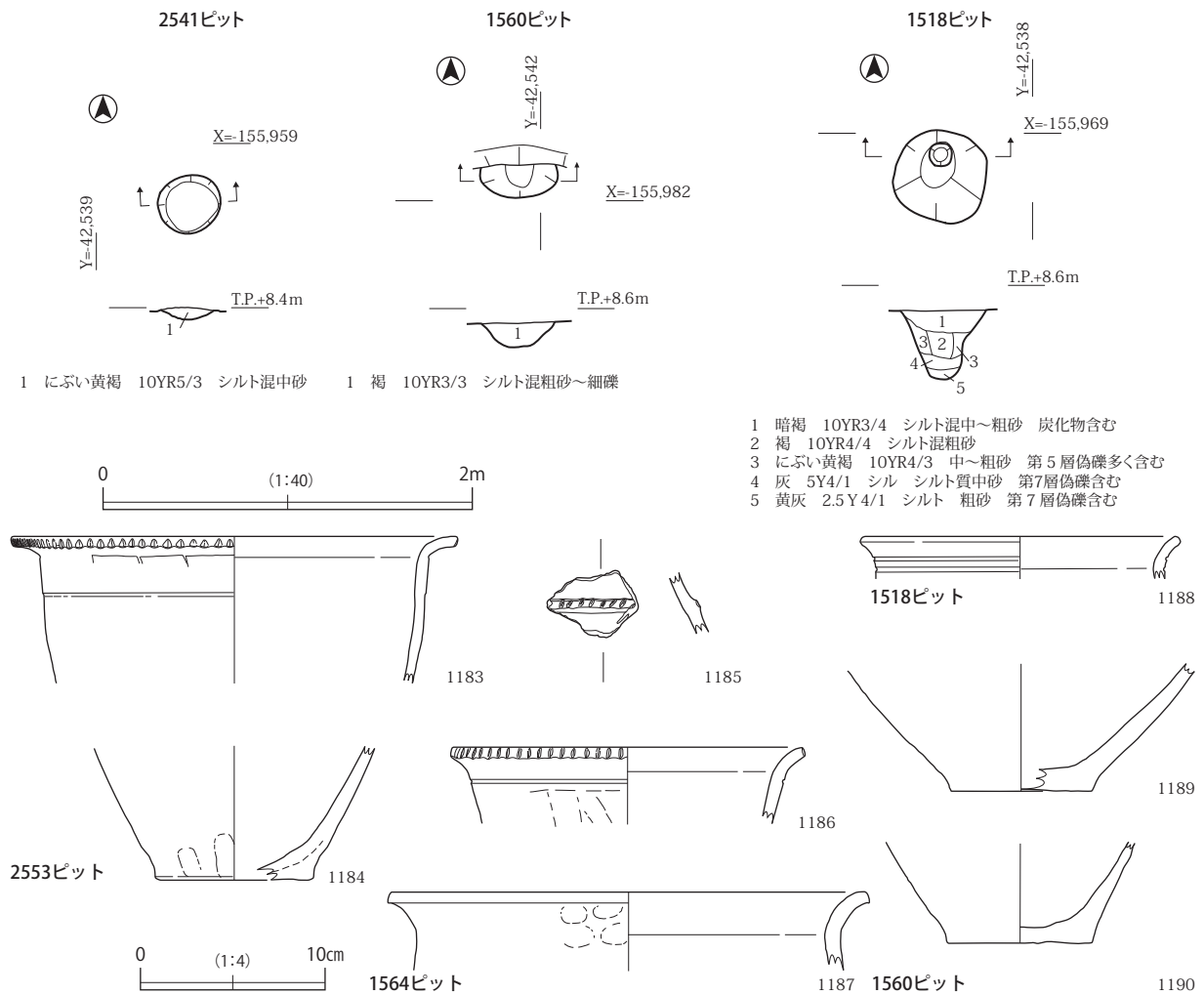


図297 4区 第4面 2541・1560・1518ピット 平・断面図 出土遺物

〔1551土坑〕(図269・271・294・296)

4-2区の北東部で検出された不定形の土坑で、長径 1.05 m・短径 0.9 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は2層で、シルト混じりのにぶい黄褐色の中砂で、上層に炭化物を含む。

遺物は、弥生時代前期の壺の口縁部破片を1点のみ図化できた。1171は頸部に削り出し突帯を施す。

〔1608土坑〕(図269・271・294・296)

4-2区の南西部で検出された小土坑で、径 0.3 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は2層で、にぶい黄褐色の中砂から粗砂で、上層に炭化物およびシルトが混じる。

遺物は、弥生時代前期の甕蓋が1点のみ図化できた(1176)。

〔1609土坑〕(図269・271・294・296)

4-2区の南西部で検出された楕円形の土坑で、長径 0.8 m・短径 0.5 mを測る。

遺物は、甕の口縁部破片が1点図化できた。外反する口縁部の端部に刻み目を施し、体部に沈線3条を施す。

他に、1470・1576土坑や1734土坑から、弥生時代前期の土器が出土している(図296)。

ピットは、4区で散在して検出されている。柱穴になるようなピットは検出されていない。

4-1区では、南東部で検出された2541ピットや、中央部西よりの弥生時代前期の甕(1183・1184)が出土した2553ピットがある。

4-2区では、石器の剥片が数点土器と伴に出土した北東端部の1518ピットや、中央部東寄りの1560ピット、南東端の1564ピットなどから、弥生時代前期の土器が出土している(図297)。

以上、4区の第4面の遺構は、弥生時代前期から古代までが同一面で検出されている。3区の3504・3506溝以東と合わせてみると、掘立柱建物2棟・平地建物1棟と少ないながらも、集落を形成していた様子が窺われた。また、不定形土坑からは、多数の弥生時代前期の土器・石器が出土していることから、追認できる資料である。

しかしながら、若干の土坑からは、弥生時代中期初頭や後半と思われる遺物や後期や古墳時代前期初頭の遺物が出土することは、注意を要すると思われる。

5. 第6面 (図版61-1・2)

第6面以下は、4-2区のみを調査している。第7層上面に相当し、2条の溝および1条の流路を検出しているが、遺物は出土していない。

6. 第8面 (図版62-1)

第8面は、第9層上面で検出された遺構面で、第7層から切り込まれた流路を検出している。遺物は出土していない。

7. 第9面 (図版62-2)

第9層下面で検出された遺構面で、倒木痕を検出している。遺物は出土していない。

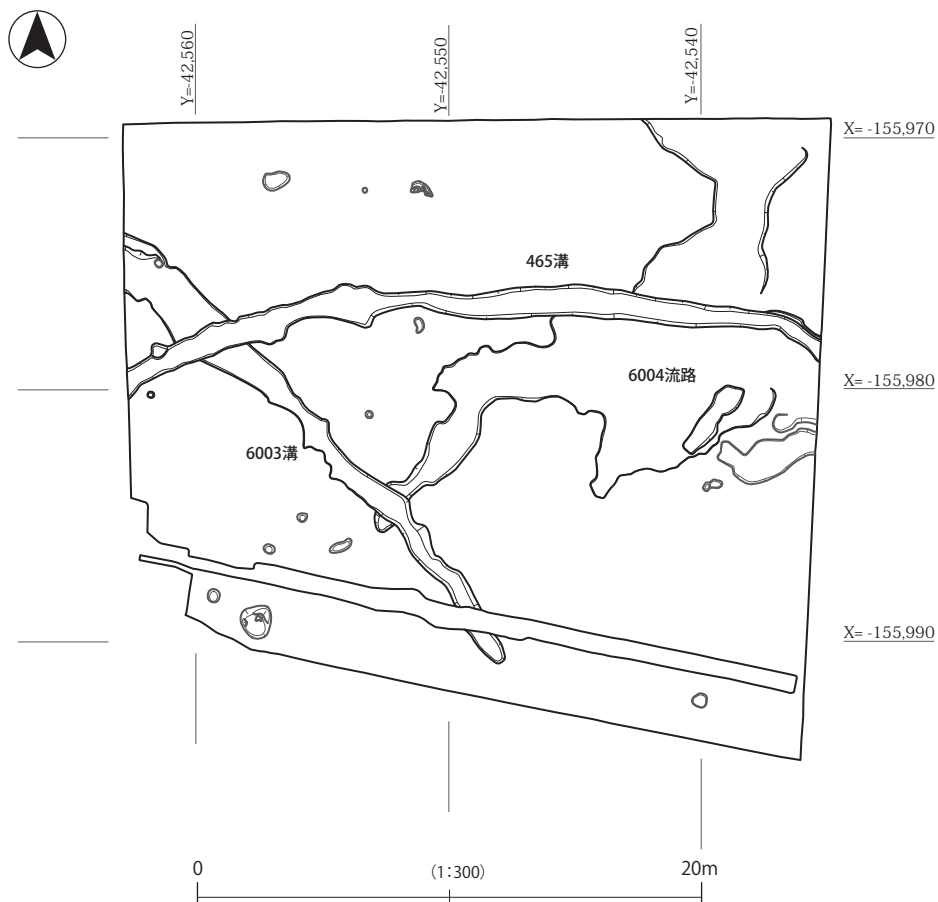


図298 4-2区 第6面 平面図

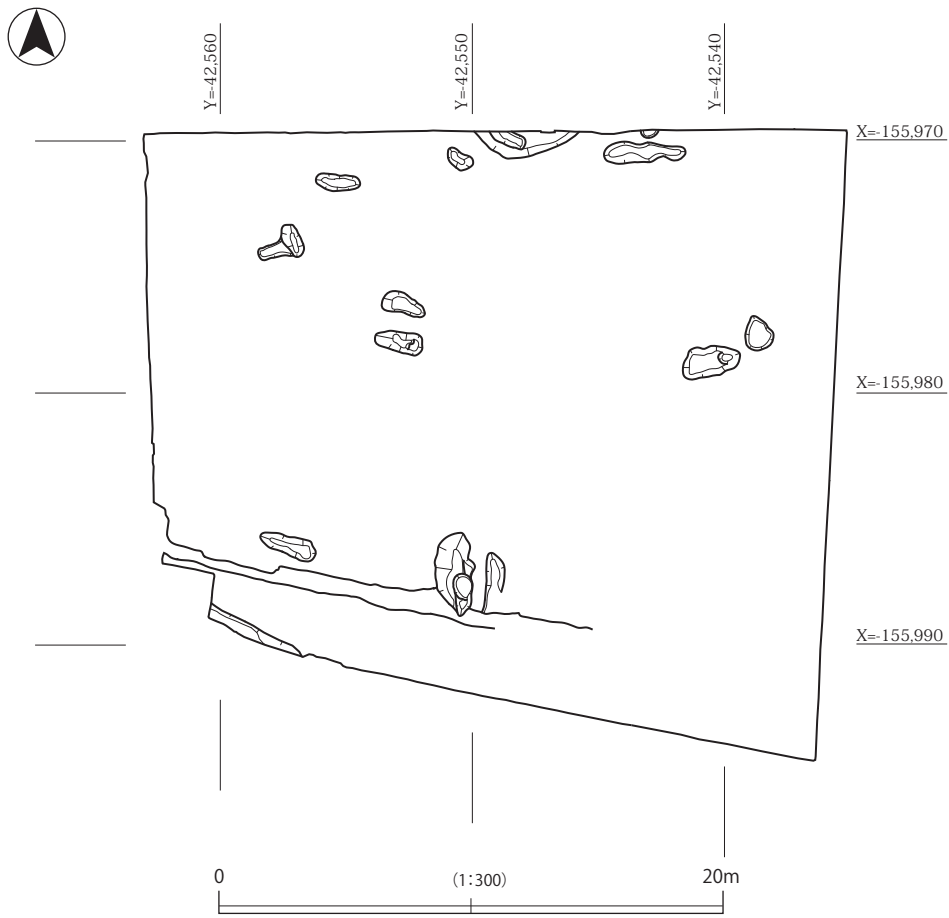
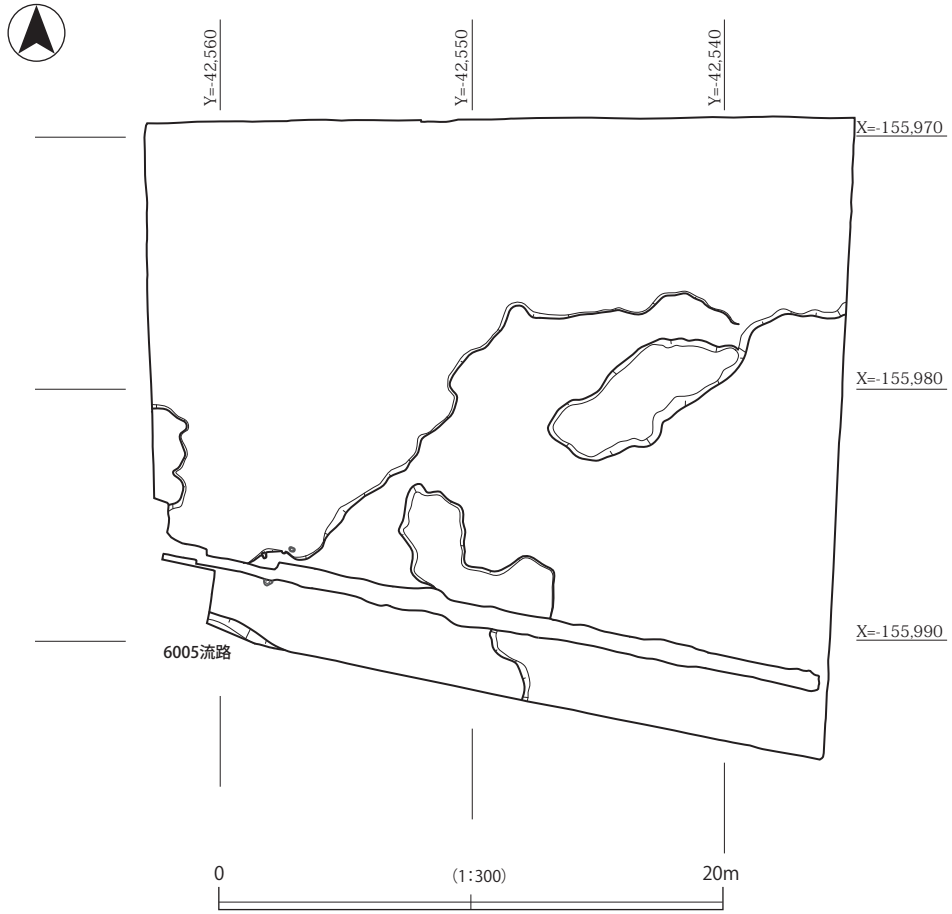


图299 4-2区 第8面 平面图(上) 第9面 平面图(下)

第4節 5区の成果

5区の調査は、北西側に5-1区、南西側に5-2区、北東側に5-3区、南東側に5-4区と4分割される。

1. 基本層序

5区の基本層序は、南壁断面の観察(図300)から、以下のようになる。

第0層 現代盛土で、約0.7~1.0mを測る。現況では、西側でT.P. 10.0m、東側でT.P. 10.4mと東に向かってわずかに高くなる。

第1層 現代耕作土で、約0.1~0.2mを測る。

第2層 にぶい黄褐色の耕作土層で約0.05~0.1mを測る。

第3層 さらに、4層に細分される。第3a~c層は、灰色~黄褐色の細砂~粗砂で、部分的にシルトを含む水成堆積である。約0.2~0.5mが堆積し、ほぼ水平に堆積している。

以下、第3d層は、オリーブ灰色から灰色の粘土~シルトである。5-2区では、西端部でのみ検出され、5-4区の東半部では検出されない。5-4区の西半部では、約0.1~0.2mを測り、東に行くにつれやや薄くなる。

第3層からは、瓦器椀や瓦器小皿、青白磁など中世の遺物が出土している。

この3d層上面が第1面となるが、5区では検出されていない。

第4層 さらに第4a層および第4b層の2層に細分される。

第4a層 黒褐色および暗灰黄色の中砂混シルトで、約0.05~0.4mを測る。5-2区では、西側で層厚が厚くなり、5-4区では層厚が薄くなる。第4層からは、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

先述の3d層下面および第4a層上面が、第2面となり、南北方向の小溝を検出している。5-2区では、この面をほとんど検出していない。

第4b層 シルト混じりの灰黄褐色細砂で、約0.05~0.4mを測る。この地区のみで検出された層で、5-2区では、東側が薄く、西側が分厚くなる。5-4区では、西端部のみで検出されている。

第4b層からは、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土している。

第4a層下面および第4b層上面が第3面で、古代の掘立柱建物、溝、土坑など、多数の遺構を検出している。なお、5-2区の西端部では、部分的に遺構面を2面検出している。

第5層 粘土~シルトが混じる灰色および灰黄色の細砂からなり、層厚約0.1~1.0mを測る。5-2区では、西側で層厚が厚く、東に向かって薄くなる。5-4区では、東端部では検出されず、それより西側では数cmから0.1m程度の堆積で、西端部で0.6mと層厚を増している。

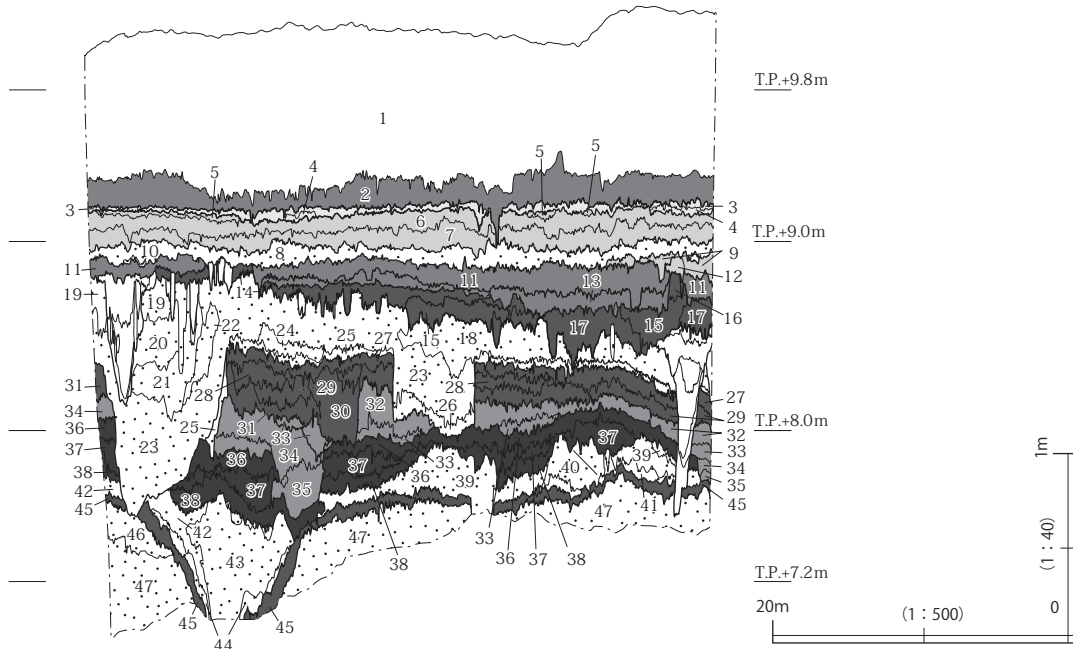
第5層からは、弥生時代後期や古墳時代前期初頭の土器が出土している。

第4b層下面および第5層上面が第4面となり、古墳時代初頭の方形周溝墓や弥生時代前期の溝を検出している。

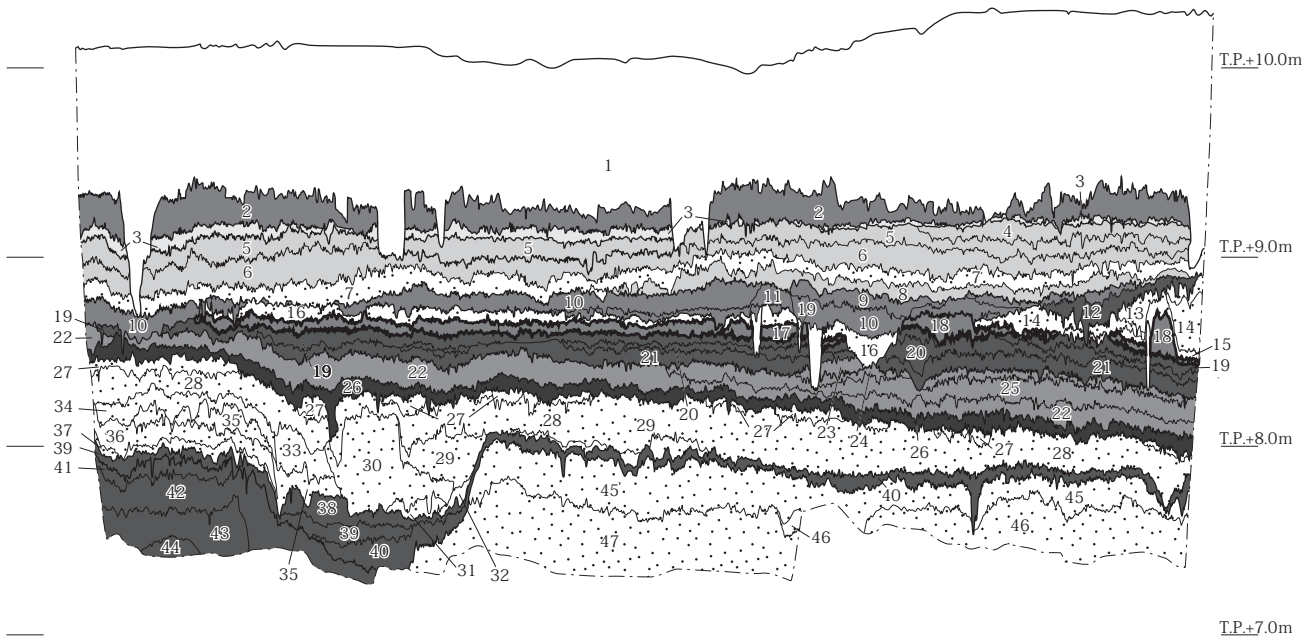
第6層 第7層偽礫を含む黄灰色シルトで、0.05~0.15mを測る。5-2区では検出されていない。5-4区では、両端部を除き、ほぼ水平に堆積していた。

第5層下面および第6層上面で第5面を検出している。第5面では、5-2区で弥生時代前期の溝や土坑を、5-4区全域で水田を検出している。

5-2区・南壁断面



5-4区東 南壁断面



5-2区 南壁断面土色

- | | |
|-------------------------------|------------------------------------|
| 1 盛土 | 11 灰黄褐 10YR6/2 細砂混シルト 粗砂含む |
| 2 黒褐 2.5Y3/2 細砂 粗砂含む | 12 にぶい黄褐 10YR5/4 細砂混シルト 粗砂含む |
| 3 暗褐 10YR3/3 細砂 粗砂含む | 13 にぶい黄褐 10YR4/3 細砂混シルト 粗砂含む |
| 4 にぶい黄褐 10YR5/3 細砂 粗砂含む | 14 にぶい黄褐 10YR4/3 細砂混シルト 中砂～粗砂多く含む |
| 5 黄褐 2.5Y5/3 細砂 粗砂含む | 15 にぶい黄褐 10YR5/3 細砂混シルト 中砂～粗砂含む |
| 6 黄褐 2.5Y5/4 細砂 粗砂含む | 16 にぶい褐 7.5YR5/3 細砂混シルト |
| 7 オリーブ黄 5Y6/3 細砂 粗砂含む | 17 灰黄褐 10YR5/2 細砂混シルト 粗砂～極粗砂含む |
| 8 オリーブ黄 5Y6/3 細砂 粗砂含む | 18 黄褐 2.5Y5/4 細砂混シルト 東側方細粒化 中砂多く含む |
| 9 にぶい黄 2.5Y6/3 細砂混シルト 中砂含む | 19 暗褐 10YR3/3 中砂～粗砂 |
| 10 灰オリーブ 5Y6/2 細砂混シルト 中砂～粗砂含む | 20 明褐 7.5Y5/8 中砂～粗砂 |

図300 5区 南壁 断面図

5-2区 南壁断面土色

21 褐 10YR4/4 極細砂～細砂	35 灰 7.5Y4/1 極細砂混シルト
22 褐 7.5YR4/3 細砂	36 黒褐 2.5Y3/2 極細砂混シルト 細～中砂少量含む
23 灰黄褐 10YR4/2 中砂～粗砂 西側方細粒化	37 暗灰黄 2.5Y5/2 極細砂混シルト
24 にぶい黄褐 10YR5/4 粗砂	38 灰黄褐 10YR4/2 細砂混シルト 中砂少量含む
25 灰黄褐 10YR5/2 シルト混極細砂～極粗砂	39 暗灰黄 2.5Y4/2 極細砂混シルト
26 灰黄褐 10YR4/2 極細砂混シルト	40 暗灰黄 2.5Y4/2 極細砂
27 褐 10YR4/4 シルト混細～極細砂 中～粗砂多く含む	41 暗灰黄 2.5Y5/2 極細砂混シルト 中砂少量含む
28 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混細～極細砂 中～粗砂多く含む	42 灰 7.5Y5/1 細～中砂混シルト
29 にぶい黄褐 10YR4/3 細砂混シルト	43 暗灰黄 2.5Y4/2 極粗砂～細礫
30 褐 10YR4/4 シルト混細～極粗砂	44 オリーブ灰 5GY5/1 シルト
31 黒 10YR2/1 シルト	45 灰 7.5Y5/1 極細砂混シルト
32 にぶい黄褐 10YR4/3 極細砂混シルト	46 灰 7.5Y6/1 中～粗砂混粘土～シルト
33 灰黄褐 10YR4/2 シルト混細～極細砂	47 明緑灰 7.5GY7/1 粗砂混粘土～シルト
34 灰オリーブ 5Y4/2 シルト混極細砂	

5-4区 南壁断面土色

1 盛土	25 にぶい黄褐 2.5Y6/4 細砂混シルト
2 暗灰黄 2.5Y4/2	26 灰褐 7.5YR5/2 中砂～粗砂混シルト
3 オリーブ褐 2.5Y4/6 細砂	27 黄橙 10YR8/8 中砂～粗砂 シルト含む
4 にぶい黄 2.5Y6/4 シルト混細砂 粗砂含む	28 明黄褐 10YR7/6 細砂
5 黄褐 2.5Y5/4 細砂 中砂～粗砂多く含む	29 黄橙 10YR7/8 粗砂混中砂
6 にぶい黄 2.5Y6/4 細砂 中砂～粗砂多く含む	30 灰白 10YR7/1 粗砂
7 灰白 10YR7/1 細砂 中砂～粗砂多く含む	31 灰白 10YR7/1 細砂～中砂
8 灰黄褐 10YR5/2 粗砂・シルト混細砂	32 灰白 10YR7/1 細砂
9 灰 5Y5/1 シルト混細砂 粗砂多く含む	33 黄橙 10YR7/8 シルト～細砂
10 にぶい黄褐 10YR7/3 粗砂混シルト	34 黄橙 7.5YR8/8 シルト混細砂
11 黄褐 2.5Y5/4 細砂混シルト	35 にぶい黄橙 10YR6/4 中～粗砂
12 灰黄褐 10YR4/2 シルト混細砂	36 灰白 5Y8/1 シルト 粗砂含む
13 黄 2.5Y7/8 細砂	37 灰白 10YR7/1 細砂混シルト
14 褐灰 7.5YR5/1 シルト混細砂	38 明緑灰 10GY7/1 粘土
15 明黄褐 2.5Y6/8 シルト混細砂	39 明緑灰 10GY7/1 シルト
16 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂混シルト 粗砂含む	40 橙 7.5YR6/8 シルト
17 明褐灰 7.5YR7/1 シルト	41 明緑灰 10GY7/1 細砂混シルト
18 にぶい黄褐 10YR5/3 細砂混シルト 弥生大畦畔盛土 第6・7層偽礫多く含む	42 明緑灰 10GY7/1 細砂混シルト
19 橙 7.5YR7/6 細砂混シルト	43 明青灰 10BG7/1 細砂混シルト
20 灰 5Y4/1 シルト	44 明青灰 10BG7/1 粗砂混粘土
21 灰 5Y4/1 細砂混シルト	45 灰白 10YR8/2 細砂混シルト
22 橙 7.5YR7/6 細砂混シルト	46 暗褐 10YR3/3 粘土～シルト
23 黒 5Y2/1 細砂混シルト	47 明青灰 10BG7/1 細砂混粘土

第7層 黒色粘土～シルトが層厚 0.1～0.4 mを測る。5-2区では、東に向かってやや層厚を増す。

5-4区では、両端部で検出されず、0.2～0.3 mの堆積を示す。

平面的な調査は、5-2区のみで行われ、第7層下面で第7面を検出し、流路や倒木痕を検出している。

第8層 黄灰色の粘土～シルトで、層厚は数cm～0.5 mである。5-2区では、東側で流路の影響で分厚くなり、5-4区では、東に向けて徐々に層厚を減じる。

第9層 粘土～細砂が混じる黄灰色および暗褐色のシルトで、0.05～0.4 mである。5-2区では、第8層と同様に東側で層厚が最も厚くなり、5-4区では、概して薄い堆積である。

第8層下面および第9層上面で、第8面となる。第9層下面で、第9面となる。遺構・遺物は検出されていない。

第10層 粗砂が混じるにぶい黄灰色シルトやシルトが混じる中砂～粗砂が、約 0.1～0.7 mを測る。5-2区では、第8・9層と同様に東側で流路による堆積が厚くなる。5-4区では、西半部で 0.3～0.4 mとほぼ均質な厚みであるが、東半部で 0.7～0.6 mと層厚を増している。

第11層 黄灰色の細砂～中砂が約0.05～0.6mを測る。5-2区および5-4区の西側の約2/3では0.1 m未満の薄い堆積を示すが、5-4区の東端部では東に向かって層厚を増し、0.5～0.6 mを測る。この下面が、第11面に当たるが、遺構・遺物は検出していない。

第12層 細砂が混じる黄色粘土や暗灰黄色のシルトで構成され、約 0.6 m以上を測る。全容を把握し

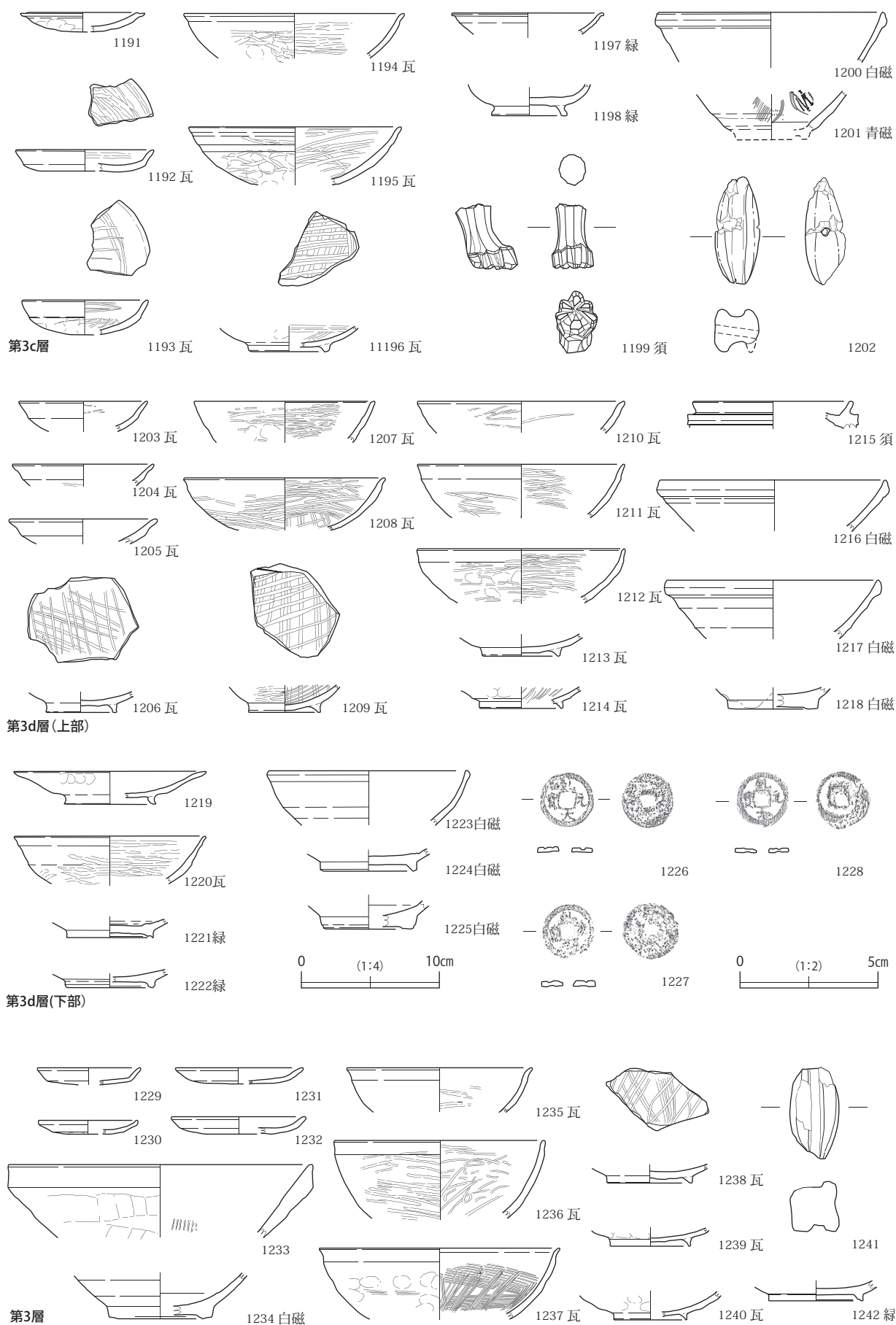


图301 5区 第3層 出土遺物

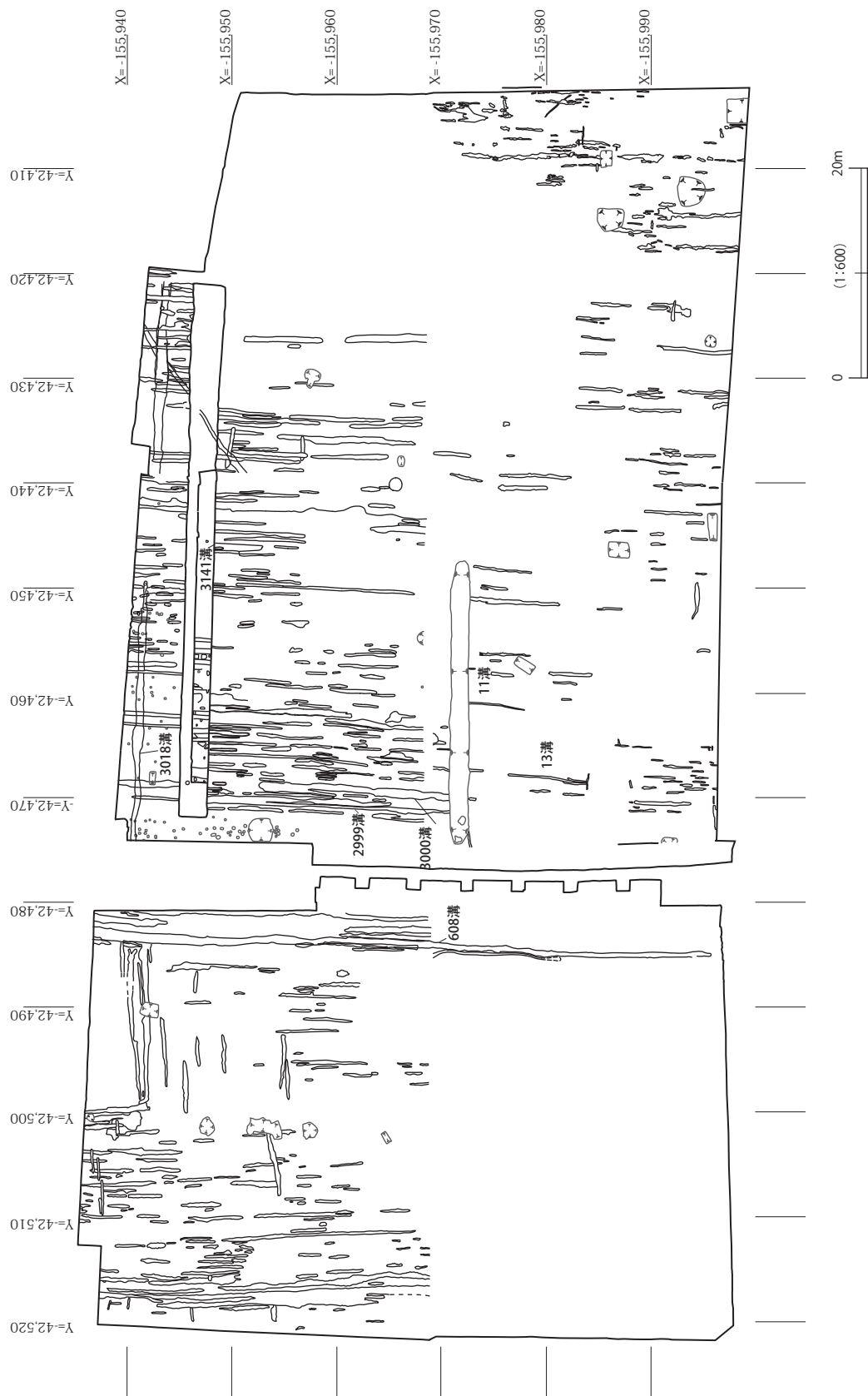


图302 5区第2面平面图

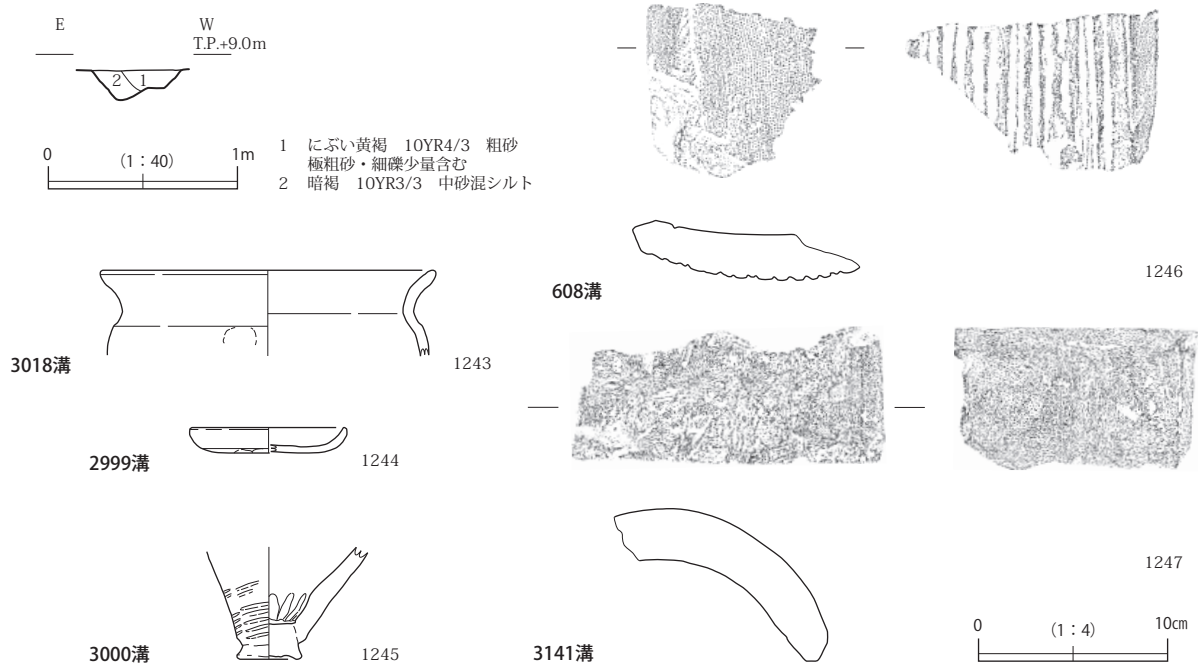


図303 5-3区 第2面 608溝 断面図 各溝 出土遺物

ていない。遺物は出土していない。

平面的な調査は、上述したとおり、第3 d層下面の第2面から開始した。5-2区では、第11層下面である第11面の検出を行い、その下層の第12層までの断面観察を行った。

5区における地層の特徴としては、第4 b層が5区のみ存在すること、また、第5面で溝・土坑などの遺構や遺物、第6面で水田などが弥生時代前期の土器と伴に検出されたことがあげられる。

以下、主な調査成果について記す。

〔第3層出土遺物〕(図301 図版125)

第3層から出土した遺物には、土師器・須恵器・瓦器・白磁などがあり、他に、土錘や銭貨がある。

第3 c層から出土した遺物は、図301-1191~1202で、瓦器小皿(1192・1193)・椀(1194~1196)、白磁碗(1200)、青磁碗(1201)、土師器皿(1191)、須恵器獣足硯(1199)、緑釉陶器(1197・1198)、有溝の土錘(1202)などがある。

第3 d層から出土した遺物は同図-1203~1227で、瓦器小皿(1203~1205)・椀(1206~1114・1220)、白磁碗(1216~1218・1223~1225)、土師器皿(1219)、須恵器円面硯(1215)、緑釉陶器(1221・1222)、皇朝十二銭の乾元通宝(1226~1228)などがある。

2. 第2面 (図版65)

第3 d層下面および第4 a層上面に相当する。第2面の遺構として、5-2区および5-3区東端部を除く部分で、南北方向の多数の小溝が検出された。幅 0.1~0.6 m・深さ 0.1 m未満のものが多い。

埋土は第3 d層と同一である。

また、自然堆積を示すラミナが認められないことから、これらの小溝は、1区から4区と同様に第3 d層の耕起に関する鋤溝と考えられる。

小溝からは、土師器・須恵器・黒色土器などの小片が出土した。

〔608溝〕(図302・303-1246)

608溝は5-1・2区の東側で南北方向に検出された溝で、北側は調査区外へ延びる。幅 0.5 m・深

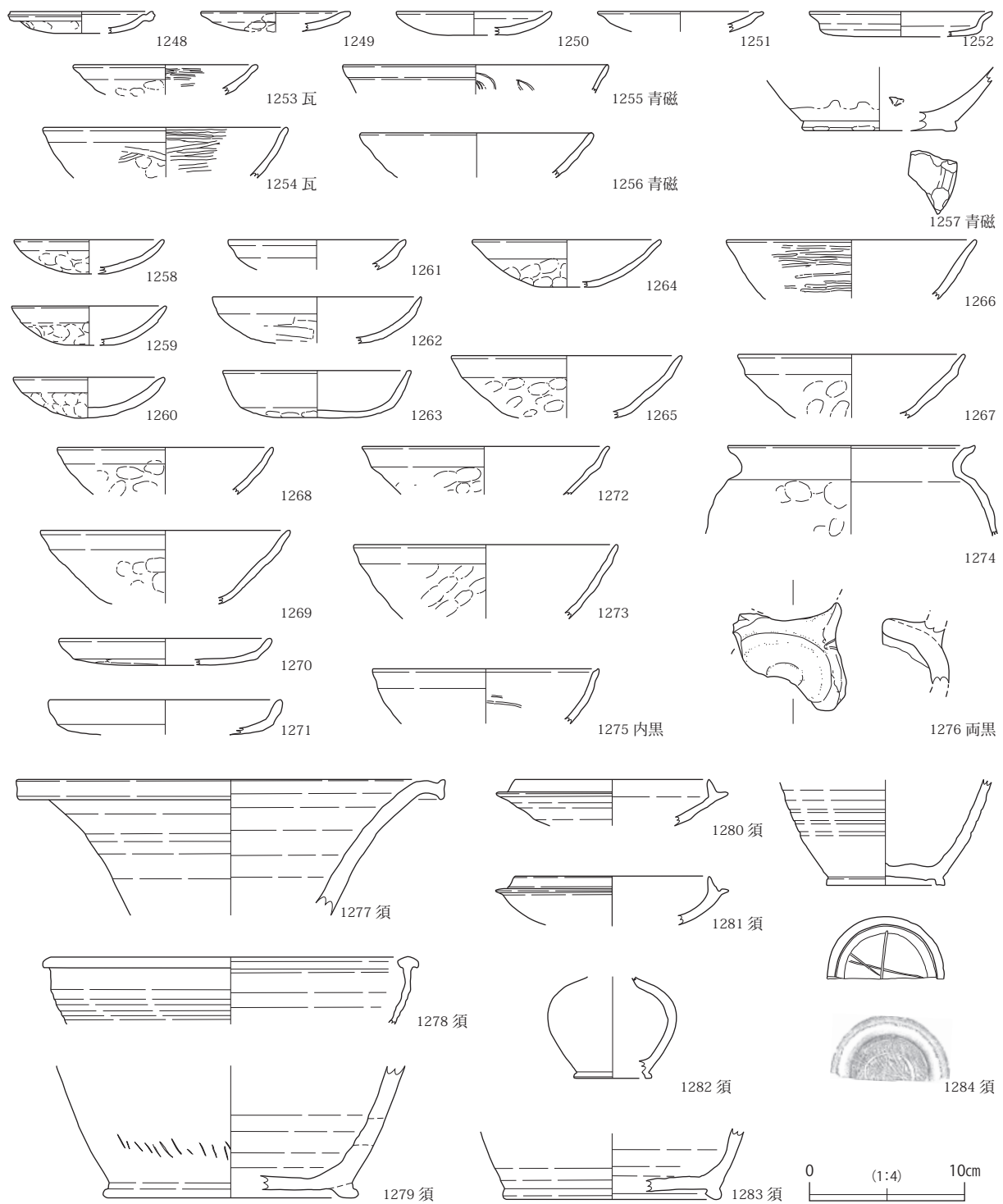


図304 5区 第4 a層 出土遺物(1)

さ0.15mを測る。埋土は2層である。

遺物は、瓦器碗や土師器・須恵器・黒色土器・平瓦などがわずかに出土している。

他に、小溝からは、図303に示す遺物が出土している。

1243は3018溝からの土師器甕の口縁部破片である。1244は2999溝からの土師器小皿である。3000溝からは1245の製塩土器の下半部を残すものがある。1247は3141溝から出土した丸瓦の破片である。

〔第4 a層出土遺物〕(図304・305)

第4 a層から出土した遺物には、中世前半の土師器小皿、瓦器碗、青磁碗がある。

1248～1251は土師器小皿で、口縁部の小破片である。1253は瓦器小皿で、1254は瓦器碗である。1255～1257は青磁碗で、3点共に越州窯のものである。

古代のものには、土師器皿・杯・碗・甕、黒色土器碗・ミニチュア竈、須恵器杯身・壺、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。土製品には、有溝土錘・丸瓦、金属製品には銅製品および鉄製品などがある。

1252は口縁部が外反する土師器小皿で、口径11.6cmを測る。1258～1261は浅い碗形の皿で、1258～1260は外面に指押さえを残す。1262～1263は杯で、1262は口縁部端部が尖り気味に終わる。1263は底部が平坦である。1264は外面に指押さえを残す。1270・1271は土師器皿で、後者は2段ナデである。

1265～1269・1272・1273は土師器碗で、1266は外面にヘラミガキを施し、他は、外面の杯部に指押さえを残す。1274は土師器甕の口縁部破片で、短く外反する口縁部の端部がわずかに外方へつまみ出され外端面をもち、内面に凹面をもつ。短い筒状の頸部に大きく膨らむ体部をもつと思われる。体部の外面に指押さえを残す。

1275は内黒の黒色土器碗の口縁部破片で、口縁部端部内面に沈線が1条巡る。表面摩滅のため、調整は不明であるが、内面にわずかにヘラミガキが残る。1276は両黒のミニチュア竈の焚口付近を残す。

1280・1281は須恵器杯身で、いずれも小破片でTK10形式のものである。1277・1279・1282～1284は須恵器壺である。1277は口縁部破片で、大きく外反する口縁部の端部が上下にわずかに拡張し、面をもつ。1282は小型壺の口頸部を欠損し、高台をもつ。1279・1283・1284は高台をもつ底部破片で、1284の底部外面には篋記号が施されている。

1278は鉢の口縁部破片で、口縁部端部が内外面にわずかに拡張する。

1287～1295は緑釉陶器で、1287・1290・1293が皿で、1295が耳皿で、他は碗である。1292の焼きは軟質であり、他は須恵質の硬質のものである。1289は、第4b層の2255と同一個体の可能性がある。

1296～1300は灰釉陶器で、口縁部のあるものは碗である。

1301～1304は有溝土錘で、高さ約7cm・幅約3cm程度の大きさで、断面隅丸方形で紡錘形のもので、縦方向の相対する2方に深さ5mm程度の溝を刻んでいる。1301にはスタンプが押されている。1304には溝と直交する3mmの小孔が貫通する。

1305は丸瓦の破片で、土師質のもので、外面に縄目タタキ目後ナデ、内面に布目圧痕が残る。

1307は銅製の金具で、土圧により変形している。平面D字形で、長さ4.2cm・幅1.9cm・厚さ0.2cmを測る。せめ金具の可能性はある。

1306は鉄製の刀装具の縁の部分を残す。長さ4.7cm・幅2.4cmを測り、側面は台形である。1308は鍛造の鏝である。長さ10.7cmで、中心部は断面正方形で、一辺0.6cmを測る。両端の一部を欠損している。1309は鑄造の工具の一部を残存し、長さ11.6cm・幅7.0cm・厚さ1.3cmを測る。表面の周縁に幅の違う段があり、裏面は平らである。器種の特定はできない。

他に、古墳時代前期初頭の土器がある。

1285は、二重口縁壺の口頸部を残すもので、頸部から屈曲して開く口縁部がさらに外反し、口縁部端部がわずかに立ち上がる。外面にナデ、口縁部内面にヘラミガキを施す。1286は小型丸底壺で、約9割を残す。口径9.0cm・器高5.7cmを測る。内面の屈曲部に明瞭な稜を残す。内外面共にナデを施す。

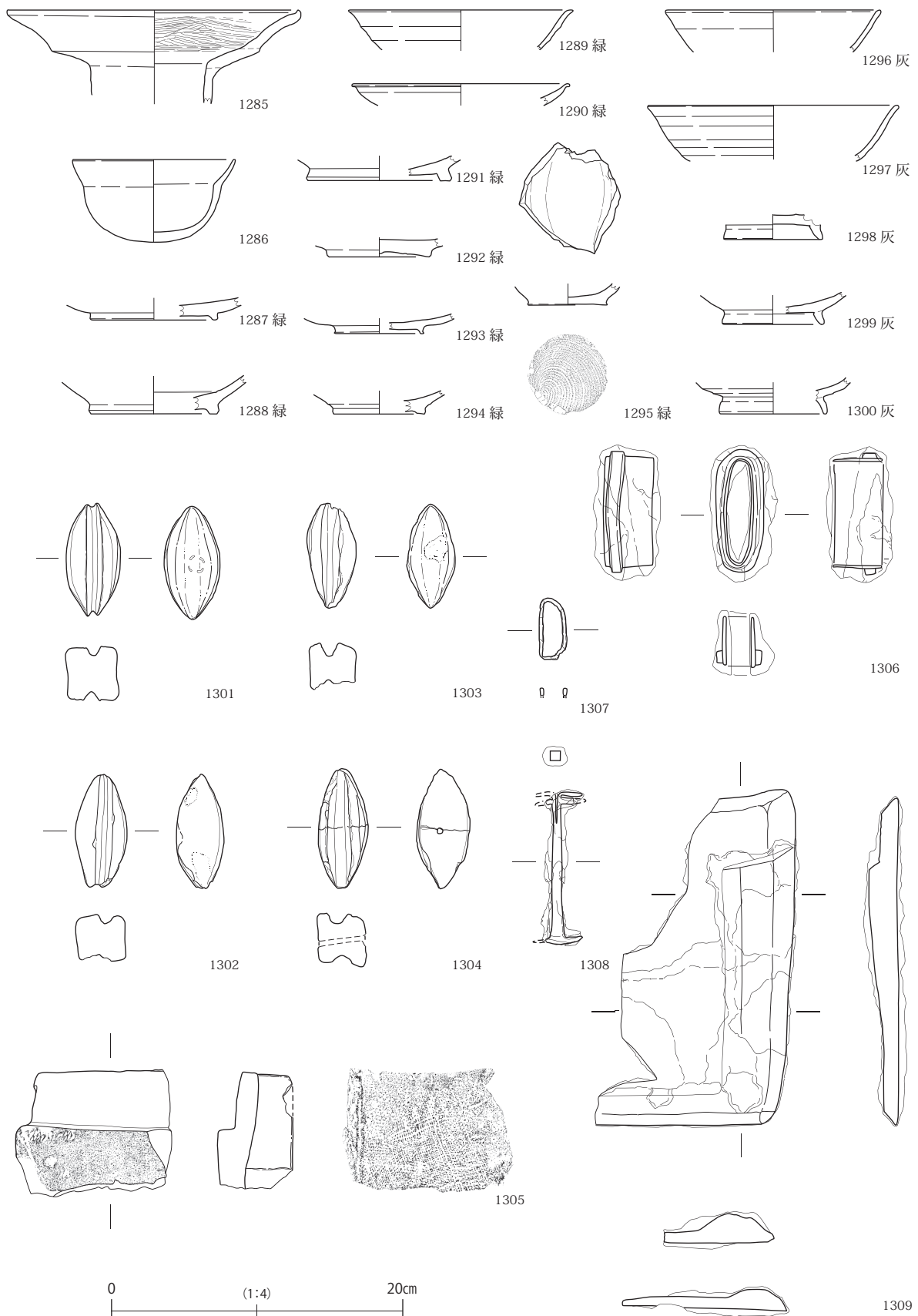


图305 5区 第4 a層 出土遺物(2)

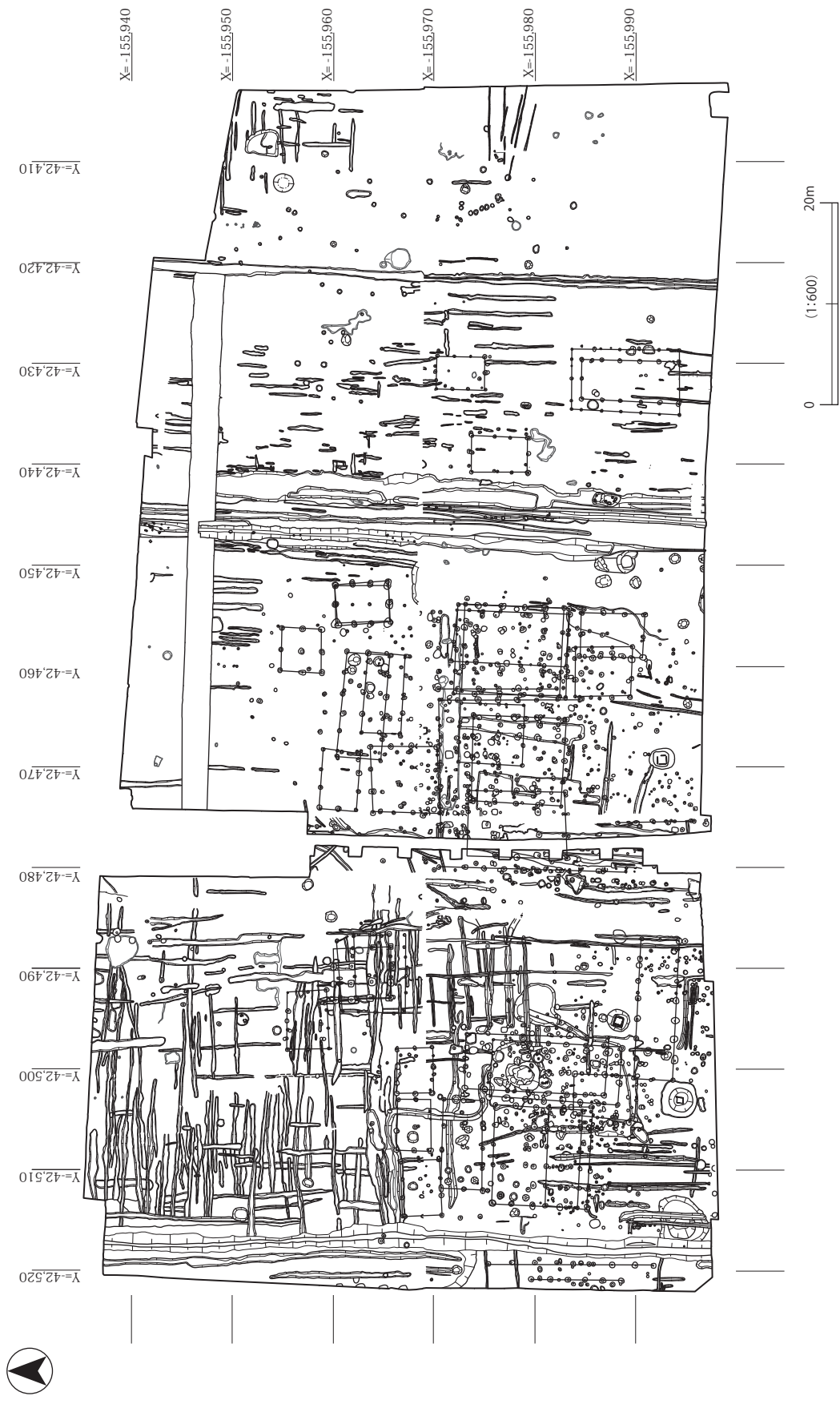


图306 5区 第3面 平面图

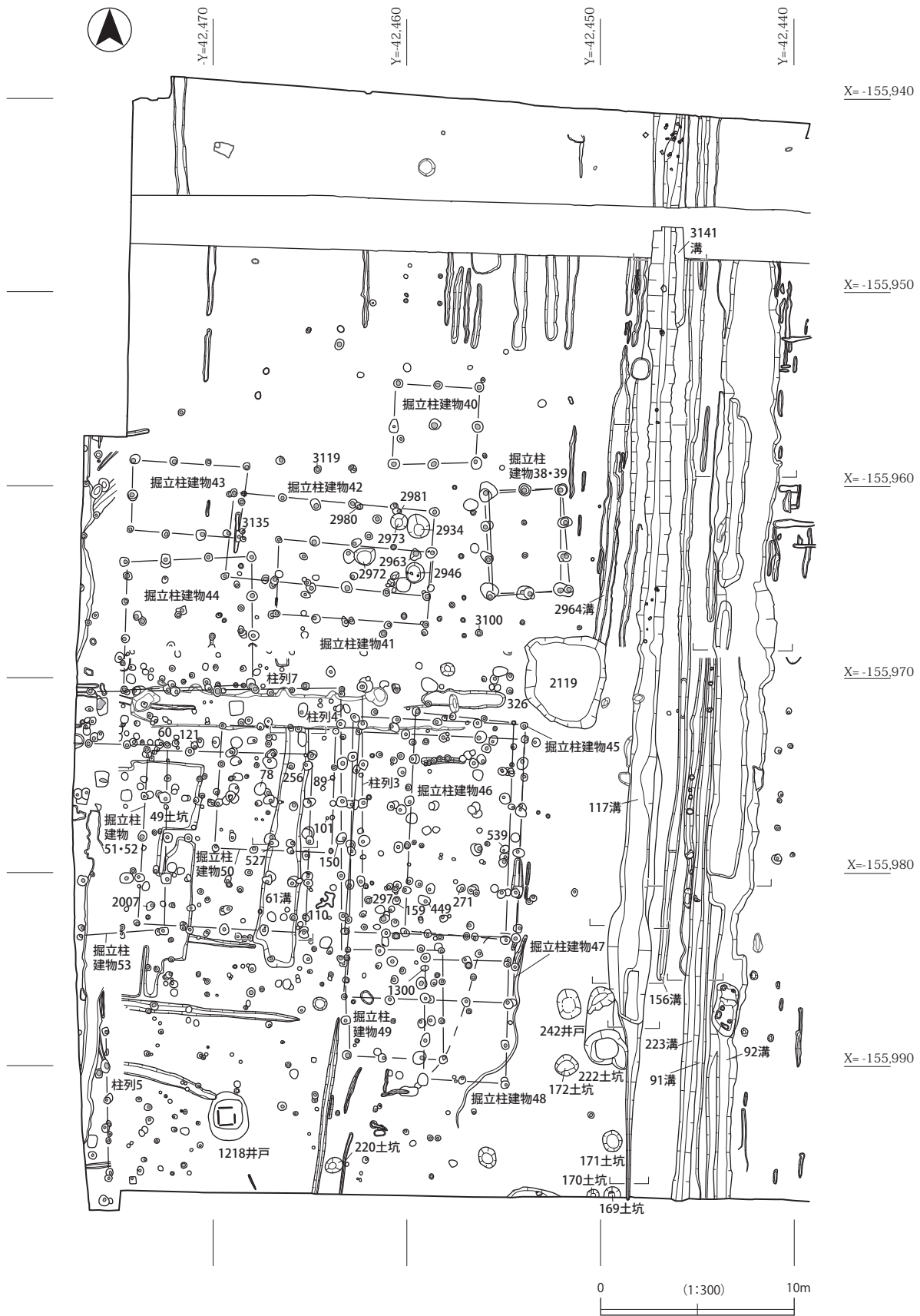


图307 5-3-4区 西半部 第3面 平面图



图308 5-3-4区 東半部 第3面 平面図

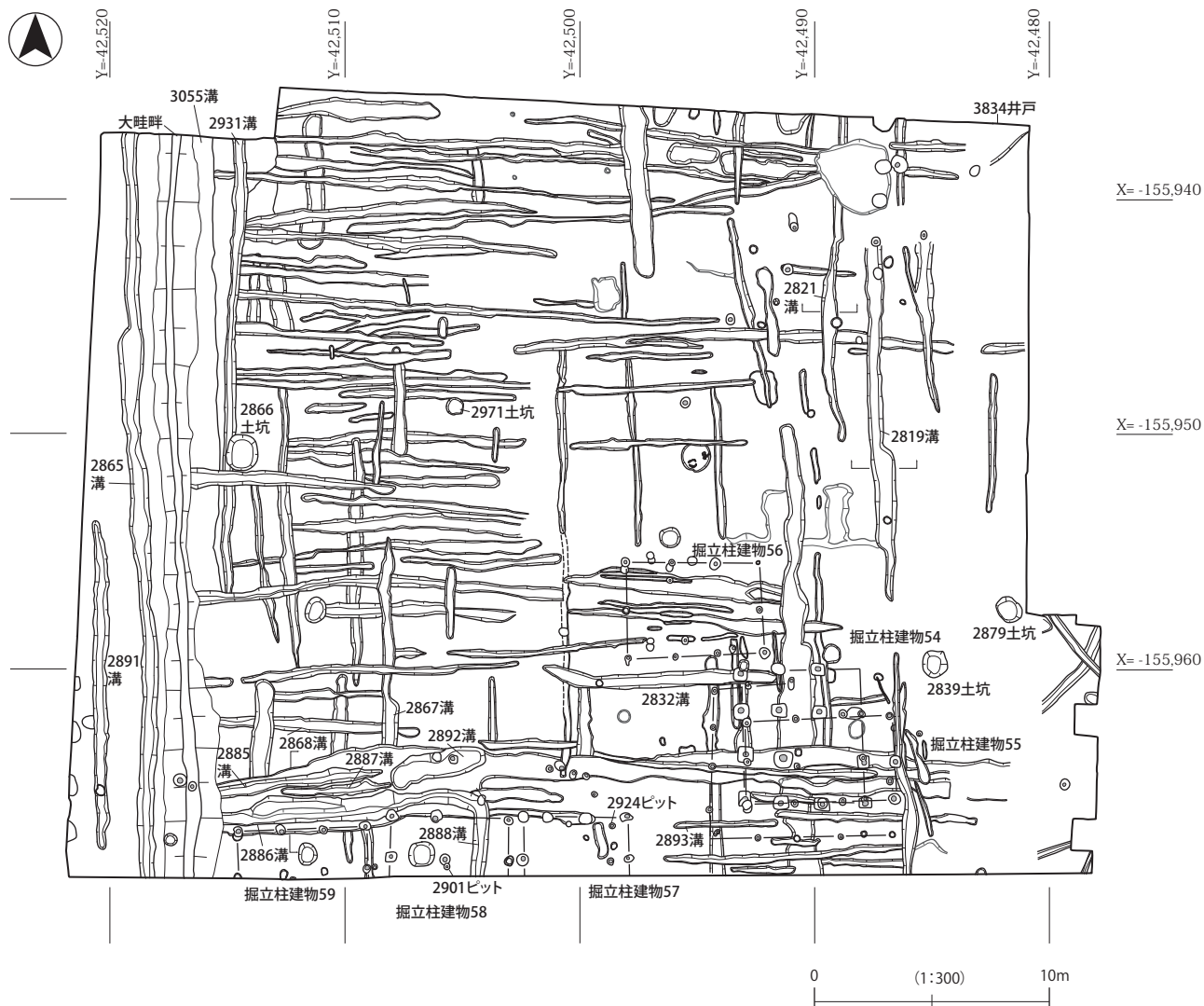


図309 5-1区 第3面 平面図

3. 第3面 (図版66~70・85・86)

5区では、第4 a層下面および第4 b層上面の第3面の遺構として、掘立柱建物32棟・柱列7列、集落を区画する溝・大畦畔や井戸・土坑など、最も多数の遺構を検出している。5-3・4区東端部では遺構が希薄になる。

なお、5-2区では、第4面との間に部分的に遺構を検出している。

掘立柱建物は、5-3・4区の中央部西寄りで、集落を区画する南北方向に検出された117溝より東側で、3棟が検出された。

また、その溝と5-1・2区の西端側で検出された大畦畔との間で、29棟が検出されている。東西約70m、南北約45mの範囲に建物群が密集している。

〔掘立柱建物35〕(図306・308・311・312 図版81-3)

5-4区の南東部、117溝の東側へ約12mのところ検出された、3方に廂をもつ南北棟の側柱建物である。

規模は、4.0×9.55m・2間×5間である。面積は38.2㎡で、廂部分を入れると65.8㎡を測る。

主軸方向はN-2°-Eを示す。やや北側辺が狭く、平面が台形になる。

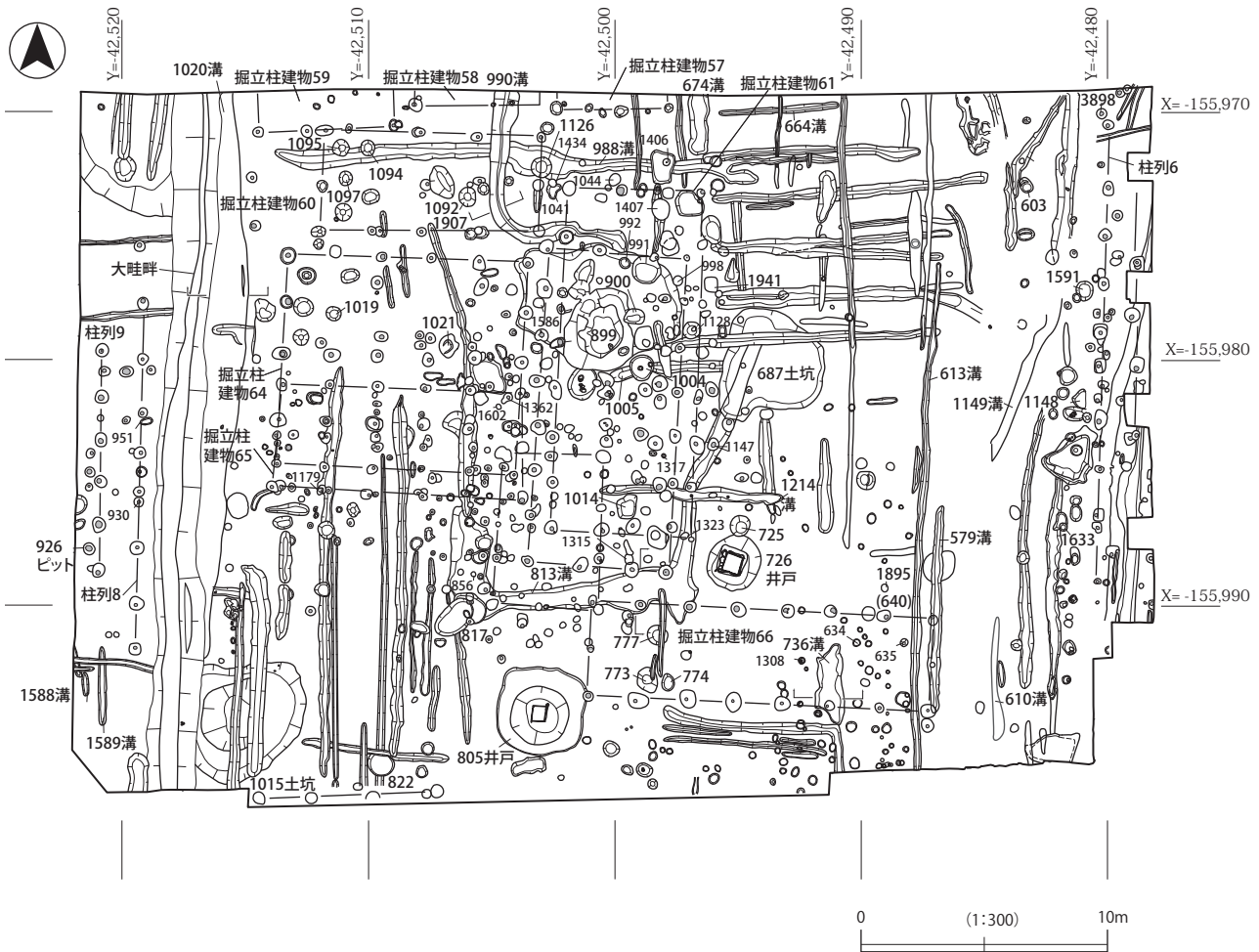


図310 5-2区 第3面 平面図

柱穴の平面形は不正円形で、0.3~0.4m・深さ 0.3~0.5 mを測る。東側辺より西側辺の方が、相対的に深くなる。南辺の中心柱穴は検出されていない。

柱間寸法は、北側辺で 2.0 m、東西側辺で1.85~2.0mを測る。

柱痕は総ての柱穴に残存しており、径約0.1~0.15mを測る。

掘形の埋土は、下層の偽礫を含むシルト混じりの黒褐色および灰黄褐色の粗砂である。

廂部は南側を除き3方で検出されている。その規模は、6×4間で、西側辺で10.7m・北側辺で5.9m・南側辺で6.4mを測る。主屋との間隔は、北側が0.9~1.05m・西側が1.05mと平行であるが、北側辺の西側の409柱穴と410柱穴間が狭く0.9mを測る。東側は1.1m間隔で、同様に413柱穴と414柱穴間が0.95mと狭い。

柱穴の位置は、主屋とほぼ平行しており柱筋型であり、419柱穴のみがやや外側にずれる。

廂の柱穴の平面形は不正円形が主で、径0.15~0.2m・深さ0.1~0.3m測り、主屋と比較して、規模が小さく浅い。

遺物は、414柱穴から土師器小皿が1点と、441柱穴から両黒の黒色土器碗が1点出土している。

1310はほぼ完形で、口径8.4cm・器高1.5cmを測る。1311は口縁部破片で、内外面にヘラミガキを施す器壁のやや厚いものである。

他に、409・415・418・431~434・439柱穴などから、少量の土器片が出土しているが、図示できるも



图311 5区第3面 掘立柱建物 平面图

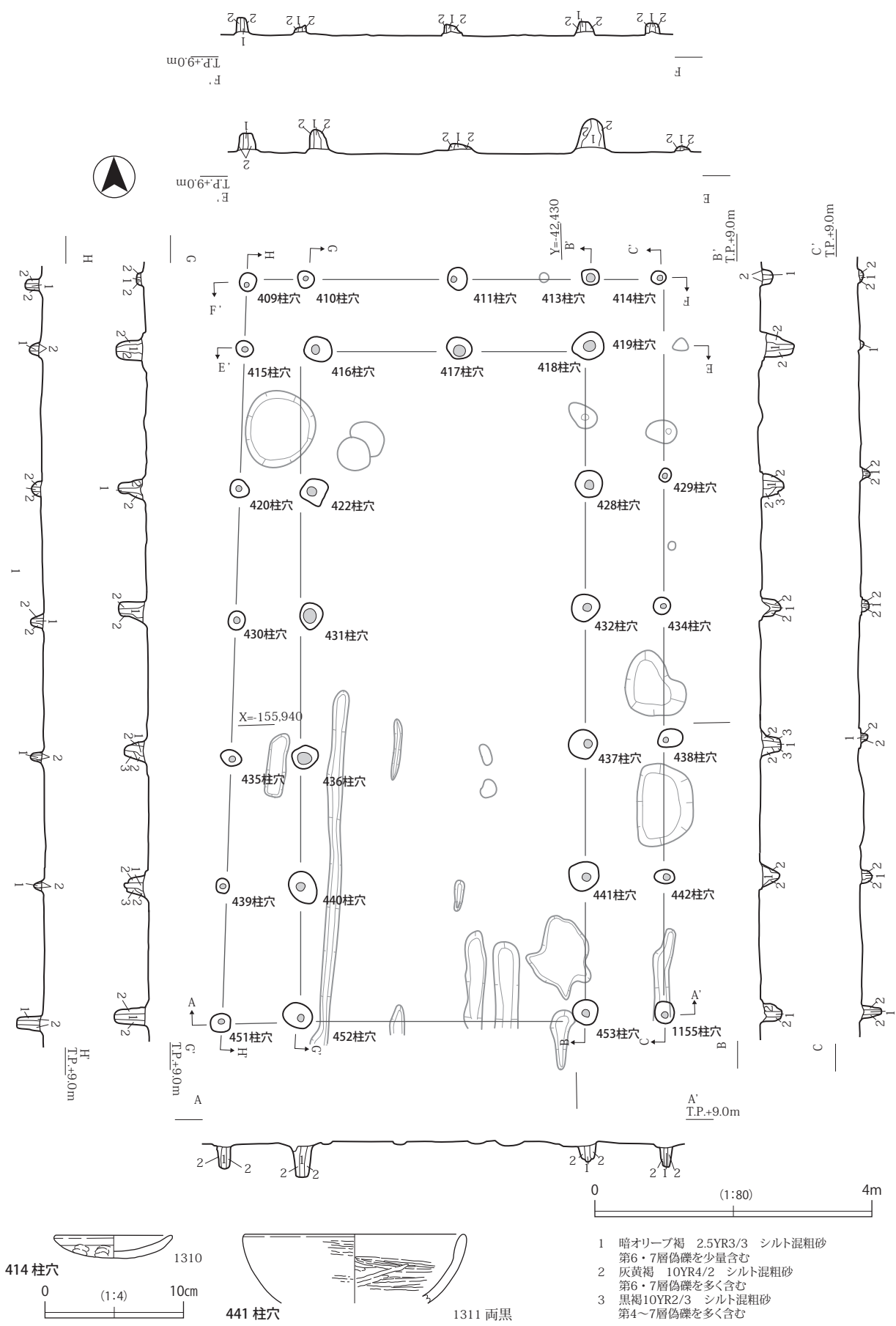


図312 5-4区 第3面 掘立縦柱建物35 平・断面図 出土遺物

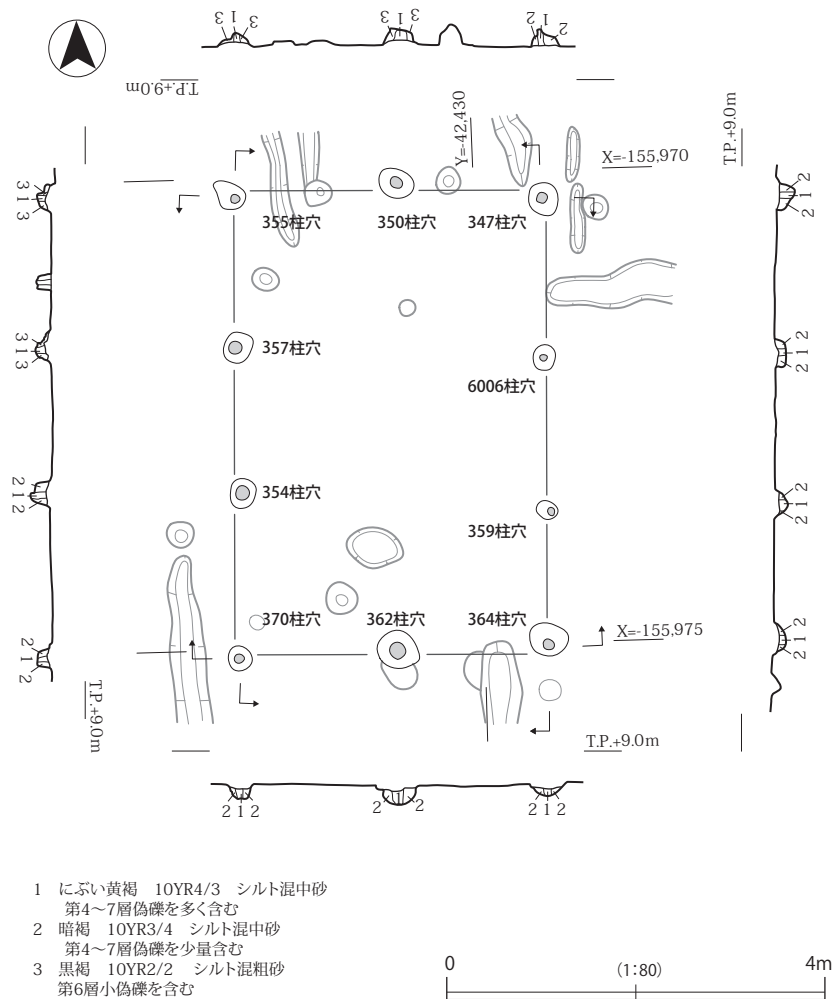


図313 5-4区 第3面 掘立柱建物36 平・断面図

のではない。

〔掘立柱建物36〕(図306・308・312)

5-4区の掘立柱建物35の北側約7mに位置し、南北棟の側柱建物である。

規模は、3.2×4.85m・2間×3間で、その面積は15.5㎡を測る。

主軸方向はN-2°-Eを示す。東側辺を掘立柱建物35の主屋の東側辺と揃えている。

柱穴の平面形は不正円形で、径0.2～0.4m・深さ約0.2mを測る。

柱痕は総てに残存しており、その径は0.1～0.15mである。

柱間寸法は、南北両辺の西側が2.15m・東側が2.05m、西側辺が北から1.6m・1.55m・1.7mで、東側辺が同じく1.7m・1.65m・1.45mを測る。東西の中間側柱が平行に設定されていない。

掘形埋土は、下層の偽礫を含み、シルトが混じる暗褐色および黒褐色の中砂および粗砂である。

遺物は、359・362柱穴から土師器の破片が少量出土した以外は、検出されていない。図化できるものはない。

〔掘立柱建物37〕(図306・308・311 図版81-1)

5-4区の117溝・92溝の東側で、掘立柱建物35の北西約5m・掘立柱建物36の南南西約4mに位置する、南北棟の側柱建物である。規模は、3.4m×5.55m・2間×3間である。面積は、19.0㎡を測る。

主軸方向は、N-2°-Eを示す。

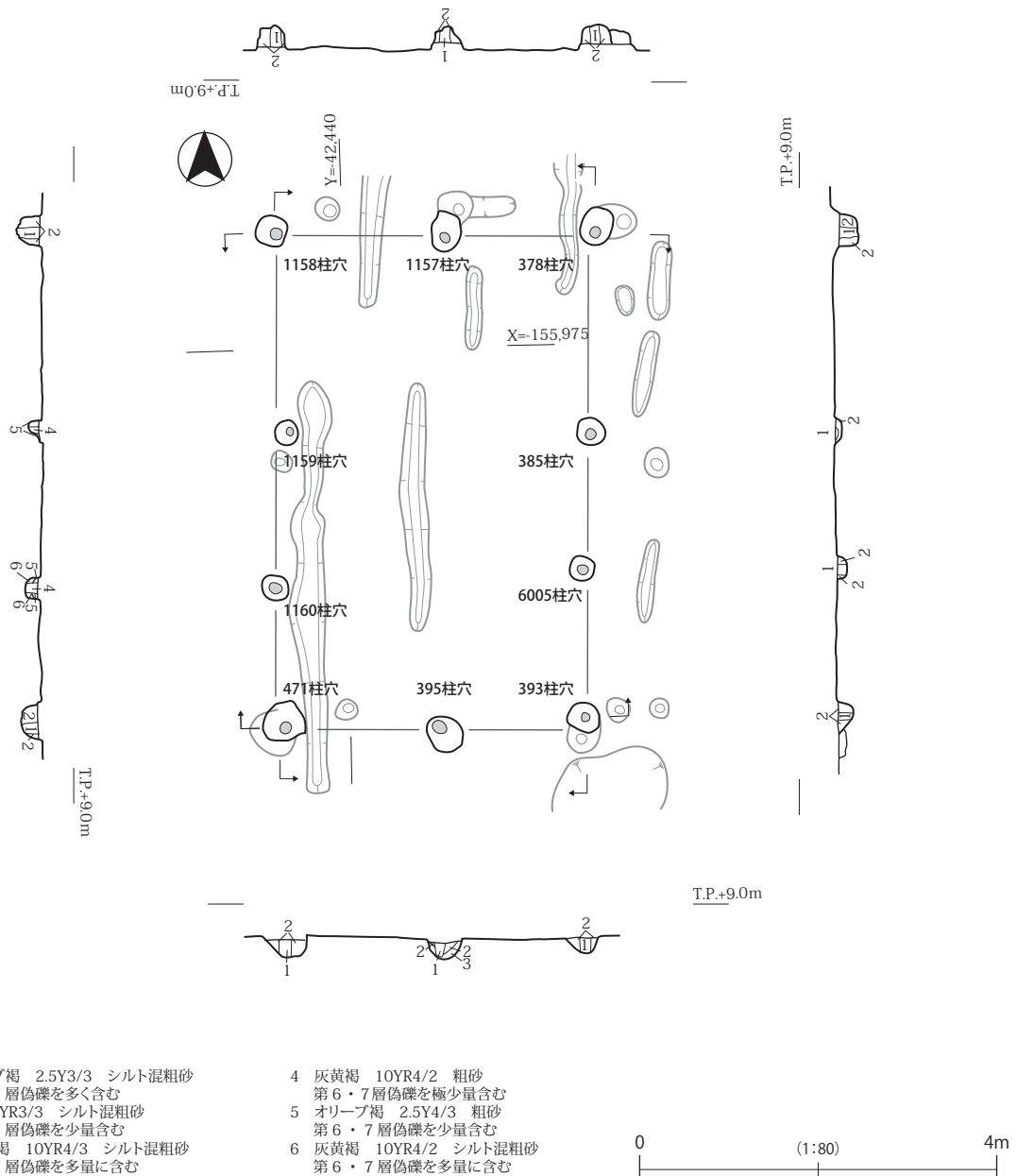


図314 5-4区 第3面 掘立柱建物37 平・断面図

柱穴の平面形は不正円形で、径 0.3~0.4 m・深さ 0.1~0.3 mを測る。

柱痕は総てに残存しており、径は 0.05~0.15 mである。

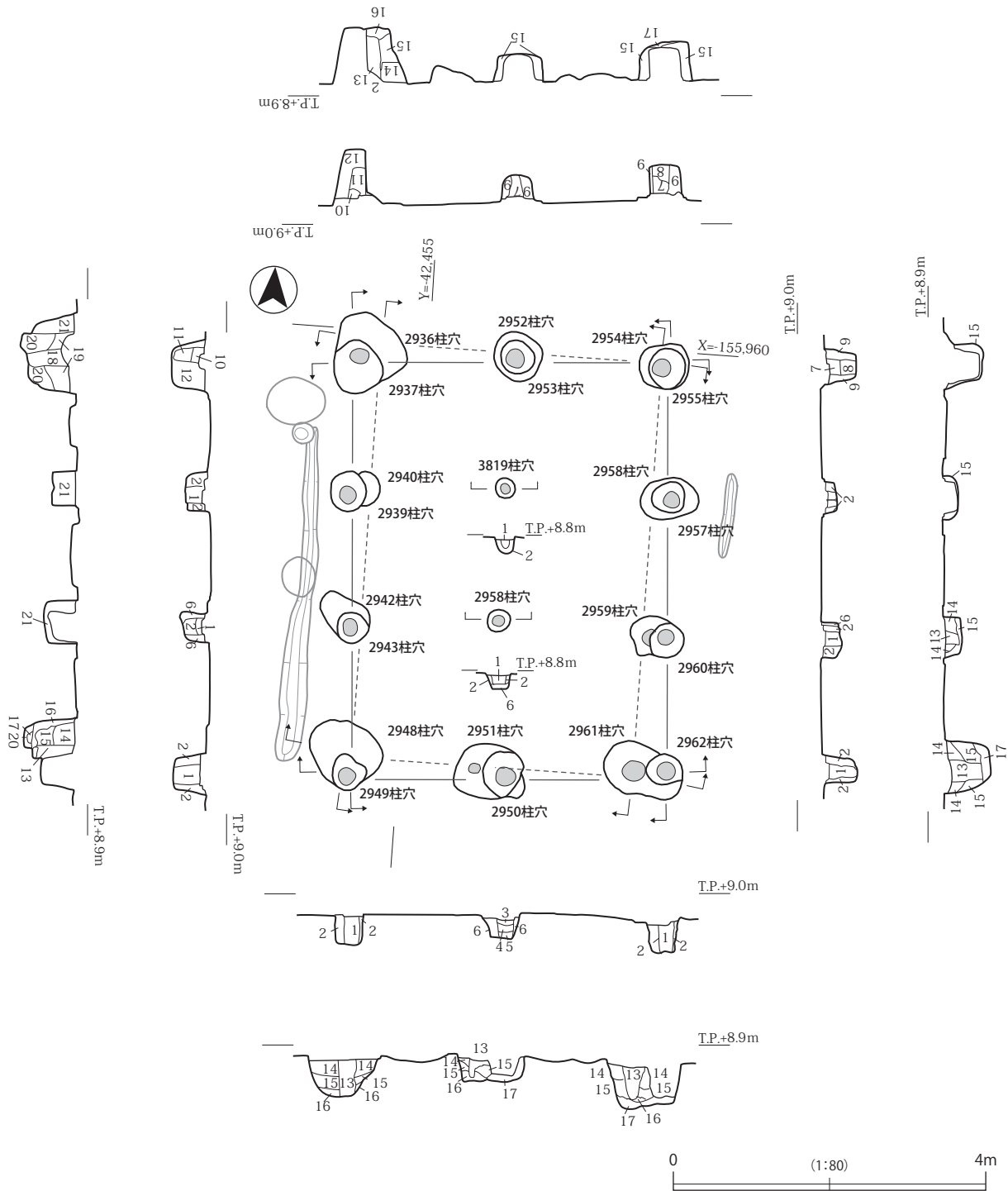
柱間寸法は、北側辺の西側が 1.9 m・東側が 1.6 m、南側辺の西側が 1.75 m・東側が 1.6 mを測る。西側辺が北から 2.3 m・1.7 m・1.6 mで、東側辺が同じく 2.3 m・1.5 m・1.7 mを測る。この建物も東西辺の中間側柱の位置がずれている。

掘形の埋土は、第6・7層の偽礫を含む、シルト混じりの暗褐色や灰黄褐色の粗砂が主である。

遺物は、395・471柱穴から土師器小片がわずかに出土している。図示できるものはない。

以上の3棟の掘立柱建物は、主軸方向が同一である。

掘立柱建物38・39は、5-3区の南西部の117溝の西側で検出された南北棟の建物で、ほぼ同一場所で建替えが行われている。



掘立柱建物39

- 1 黒 2.5Y2/1 シルト 炭多く含む
- 2 灰黄褐 10YR5/2 シルト 炭多く含む
- 3 灰黄褐 10YR4/2 中砂混シルト 炭含む
- 4 黒褐 10YR2/2 中砂混シルト 炭含む
- 5 黒褐 2.5Y3/2 シルト 第5層偽礫を含む シルト
- 6 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト 第4b層偽礫を多量含む
- 7 黒褐 10YR3/2 シルト 第4b層偽礫を含む
- 8 灰黄褐 10YR4/2 シルト 第5・7層偽礫を多く含む
- 9 灰黄褐 10YR5/2 シルト
- 10 暗褐 10YR3/3 シルト混中砂 炭多く含む
- 11 灰黄褐 10YR4/2 シルト 炭、第4b層偽礫を多く含む
- 12 灰黄褐 10YR4/2 シルト混中砂 第4b・7層偽礫を含む シルト混中砂

掘立柱建物38

- 13 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト 第4b・5層小偽礫を含む
- 14 灰黄褐 10YR5/2 シルト混粗砂 第4b層偽礫を多く含む
- 15 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混粗砂 第4b・7層偽礫を多く含む
- 16 灰黄褐 10YR4/2 シルト 第7層偽礫を含む
- 17 黒褐 2.5Y3/2 シルト 第5・7層偽礫を多く含む
- 18 灰黄褐 10YR4/2 シルト 第4b・5層小偽礫を多く含む
- 19 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト 第4b・5層偽礫を多く含む
- 20 黒褐 10YR3/2 シルト 第4b・7層偽礫を多量含む
- 21 にぶい黄褐 10YR4/3 粗砂混シルト 第4b・7層偽礫を多量含む

図315 5-3区 第3面 掘立柱建物38・39 平・断面図

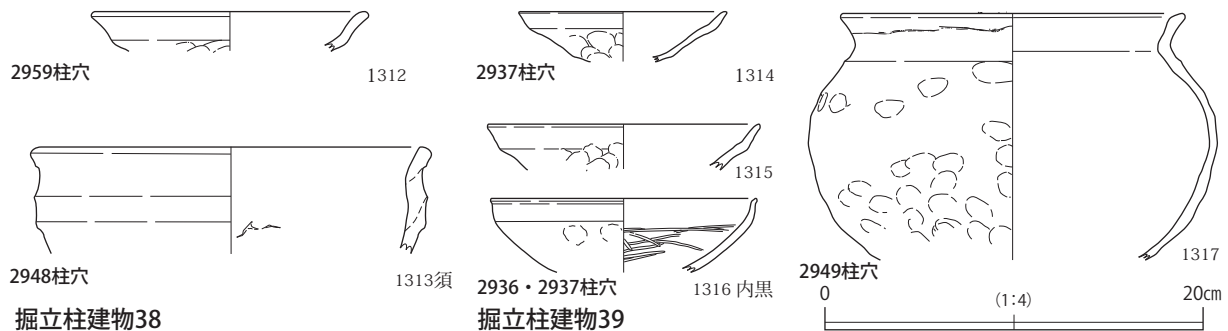


図316 5-3区 第3面 掘立柱建物38・39 出土遺物

〔掘立柱建物38〕（図306・307・315・316 図版80-3）

規模は、3.8×5.2 m・2間×3間で、面積が19.75 m²を測る。主軸方向は、ほぼ座標北を示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形である。2940柱穴が最も小さく径0.45 m、2936柱穴が最も大きく径1.2×1.0 mを測る。深さは、0.25～0.7 mを測る。4隅の柱穴の規模が、他と比較して、大きく深い。

柱痕は柱穴が重複しているため、不明なものが多く、2459・2461・2951・2948柱穴に残存していた。その径は0.1～0.3 mである。

柱間寸法は、北側辺の東側が1.9 m、南側辺の西側が1.9 m・東側が1.95 mを測り、西側辺・東側辺伴に不明である。

掘形の埋土は、偽礫や粗砂が混じる黒褐色のシルトが主である。

遺物は、柱穴の掘形から、土師器・須恵器・黒色土器などの小片が出土している。2954・2957柱穴からは、遺物は出土していない。

図示できたものには、2959柱穴から出土した1312の土師器皿の口縁部破片と、2948柱穴から出土した1313のやや焼きの甘く、口縁部が短く外反する須恵器鉢の小破片がある。

〔掘立柱建物39〕（図306・307・315・316 図版80-3）

規模は、4.0×5.25 m・2間×3間で、面積が21.0 m²を測る。主軸方向はN-4°-Wを示す。

柱穴の平面形は不正円形で、径0.45～0.7 m・深さ0.2～0.5 mを測る。南西隅を除いて、隅の柱穴が比較的深い。柱痕は、総ての柱穴に残存していた。その径は0.1～0.15 mである。

柱間寸法は、北側辺の西側が2.0 m・東側が1.9 m、南側辺が2.0 mの等間隔を測り、西側辺が北から1.8 m・1.7 m・1.9 mで、東側辺が同じく1.7 m・1.75 m・1.7 mである。

3819・2958柱穴は、径0.25 m・0.3 mと、他の柱穴と比較して小規模で、深さも0.05 m・0.2 mと浅い。

これらの柱穴は重複関係が無く、建物38・39のどちらに属すか不明であったが、建物39の柱通りと合致するため、この建物の東柱と考えられる。

掘形の埋土は、偽礫や粗砂が混じる黒褐色のシルトが主である。柱痕埋土に炭化物を多く含む。

遺物は柱穴の掘形から、土師器・須恵器・黒色土器の小片が出土している。2939・2955・2957・2958柱穴からは、遺物が出土していない。

図示できるものとして、2936・2937柱穴から出土した1314・1315の土師器碗の口縁部破片、2937柱穴の1316の内黒の黒色土器碗の口縁部破片や、2949柱穴から出土した約2/3を残す1317の土師器甕がある。1317は、短く外方へ伸びる口縁部の上端部が面をもつもので、体部外面に指押さえを残す。

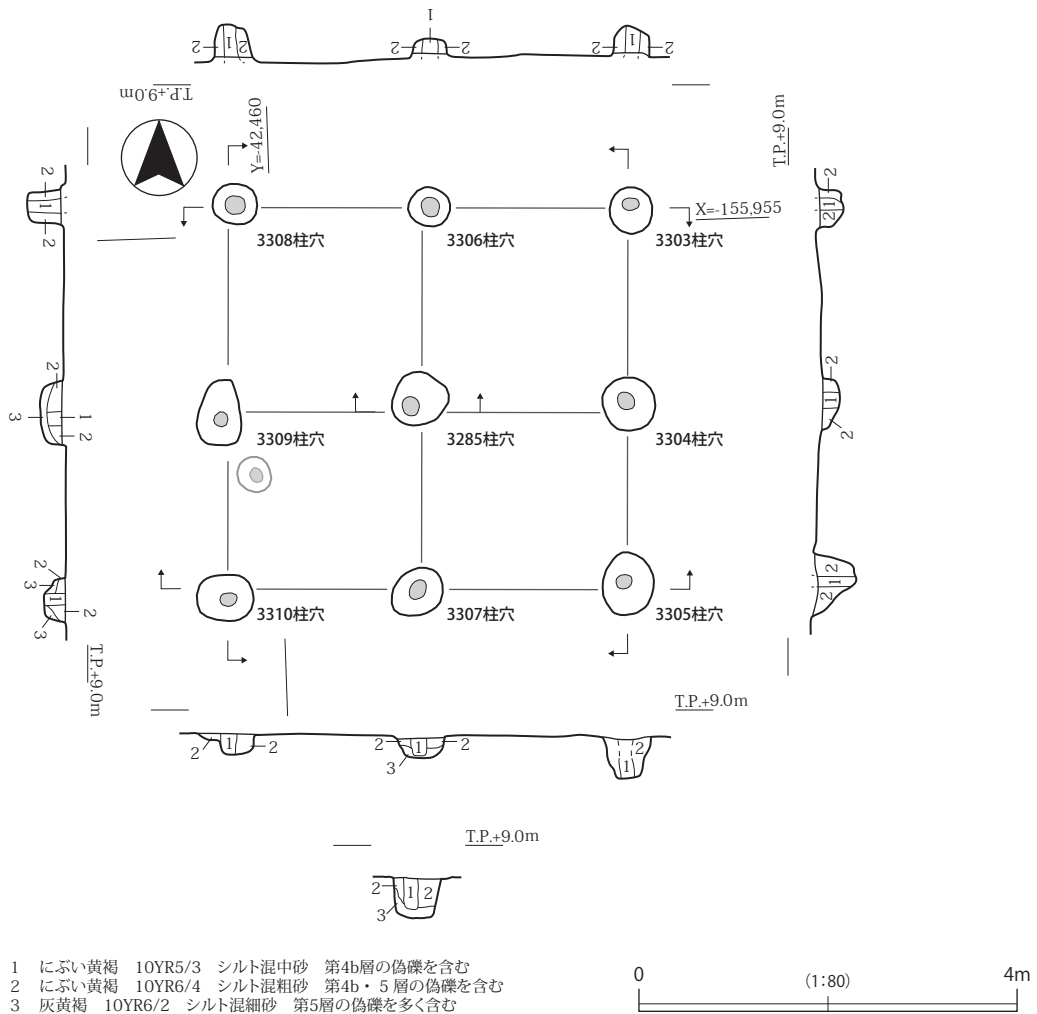


図317 5-3区 第3面 掘立柱建物40 平・断面図

〔掘立柱建物40〕(図306・307・317)

5-3区の西部の掘立柱建物38の北西約1m弱に位置する2×2間の総柱建物である。北辺4.15m・南辺4.2m・西辺4.2m・東辺3.9mを測り、やや歪な方形になる。面積は、16.9㎡である。

主軸方向はN-3°-Eを示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.4~0.7m・深さ0.2~0.45mを測る。3310柱穴の南西隅を除いて、隅柱および中心柱穴が深く掘られている。

柱痕は、総ての柱穴に残存していた。その径は0.1~0.15mである。

柱間寸法は、北側辺の西側が2.1m・東側が2.05m、南側辺はいずれも2.1mを測り、西側辺が北から2.2m・2.0mで、東側辺が同じく2.0m・1.9mである。

掘形の埋土は、第4b層や第5層の偽礫を含む、シルト混じりのにぶい黄褐色粗砂が主である。

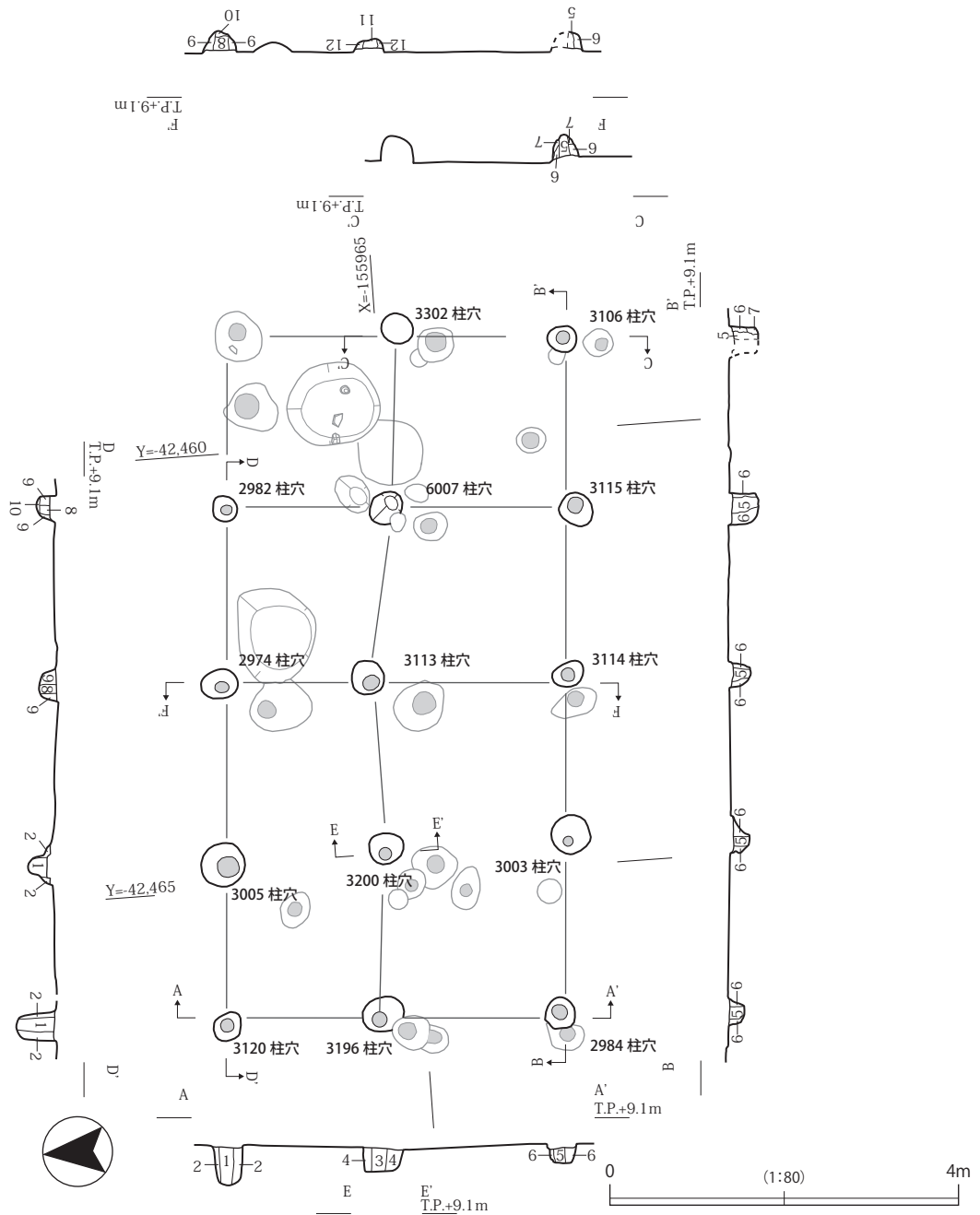
遺物は、どの柱穴からも出土していない。

〔掘立柱建物41〕(図306・307・318 図版80-2)

5-4区の西部の掘立柱建物38の南西約3m弱に位置する、2×4間の東西棟の総柱建物である。北側辺約8m・南側辺7.7m、東西両辺3.8mを測る。面積は、29.8㎡である。

主軸方向はN-4°-Eを示す。

柱穴の平面形は、不正円形ないしは不正楕円形で、径0.3~0.5m・深さ0.05~0.5mを測る。北東隅柱



- 1 黄灰 2.5Y4/1 細砂混シルト 炭含む
- 2 褐灰 10YR4/1 中砂混シルト 第4b・5層偽礫を含む
- 3 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混中砂 第4b層の偽礫を含む
- 4 暗褐 10YR3/3 シルト混中砂 第4b・5層の偽礫を含む
- 5 灰黄褐 10YR4/2 細砂 第5層の偽礫を多く含む
- 6 暗黄褐 2.5Y5/2 シルト混細砂 第4b層の偽礫を多く含む

- 7 灰黄褐 10YR4/2 シルト混細砂 第4b層の偽礫を多く含む
- 8 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂・シルト混中砂 炭含む
- 9 灰黄褐 10YR4/2 粗砂混シルト
- 10 灰黄褐 2.5Y4/2 中砂～粗砂 第4b層偽礫を含む

- 11 灰黄褐 2.5Y5/2 シルト混中砂 第4b層偽礫・炭化物を多く含む
- 12 にぶい黄 2.5Y6/3 中砂～粗砂 第4b・5層偽礫を含む
- 13 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混中砂 第4b層の偽礫を含む
- 14 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混中砂 第4b層の偽礫を少し含む
- 15 にぶい黄褐 10YR5/4 シルト 第5層の偽礫を少し含む

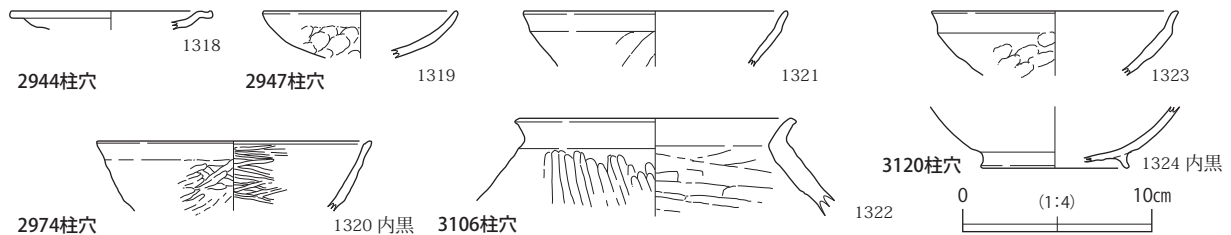


図318 5-3区 第3面 掘立柱建物41 平・断面図 出土遺物

は、掘立柱建物42の2944柱穴に切られているため、検出されていない。また、3302・6005柱穴は、建物の柱穴と認識されていなかったため、図化されていない。

柱痕は、先述の3302・6007柱穴を除き存在しており、その径は0.1～0.15mである。

柱間寸法は、北側辺の西側から1.8m・2.0m・2.0m、南側辺はいずれも1.9mを測り、西側辺が北から1.7m・2.1mを測る。3113柱穴の位置がやや北に位置することから、東西方向の真中の柱通りが悪い。

掘形の埋土は、第4b層や第5層の偽礫を含むシルト混じりの灰黄褐色の粗砂が主である。

遺物は、ほとんどの柱穴から土師器・須恵器・黒色土器などの小片が出土している。

図化できたものには、以下の土器がある。

2944柱穴からは1318のての字状口縁の土師器小皿の口縁部小破片が、2947柱穴からは1319の椀形小皿の口縁部小破片が出土している。2974柱穴からは1320の内黒の黒色土器椀の口縁部破片があり、口縁部端部に内傾する凹面をもつ。内外面伴にヘラミガキを施す。

3106柱穴からは1321の土師器椀と1322の甕の口縁部破片がある。この甕は器壁が分厚く、羽釜の可能性を残す。3120柱穴からは1323の土師器椀の口縁部破片・1324の内黒の黒色土器椀の底部破片がある。

〔掘立柱建物42〕（図306・307・319 図版80-2・126）

5-3区の南半部の西寄りの掘立柱建物41と大部分が重複して検出され、この建物が後出する。2×5間の東西棟の側柱建物である。南北側辺10.4m、東西側辺4.35mを測る。面積は、45.2㎡である。

主軸方向はN-5°-Eを示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.25～0.6m・深さ0.25～0.5mを測る。2976柱穴および2938柱穴がわずかに南側に位置し、南北両辺の柱通りが悪い。

柱痕は、3112柱穴を除き残存しており、その径0.1～0.25mを測る。

柱間寸法は、北側辺が西から2.5m・1.8m・1.9m・2.2m・2.1mで、南側辺が同2.6m・1.9m・1.8m・2.0m・2.1mである。西側辺は北から2.1m・2.25mで、東側辺は同2.05m・2.3mを測る。

柱穴間の間隔も等分されていない。

掘形の埋土は、灰黄褐色や褐色の中砂が混じるシルトが主である。

掘立柱建物41を切り、掘立柱建物43・44と重複している。

遺物は、ほとんどの柱穴から、土師器・黒色土器などの小片が出土している。

図示できたものに、以下のものがある。

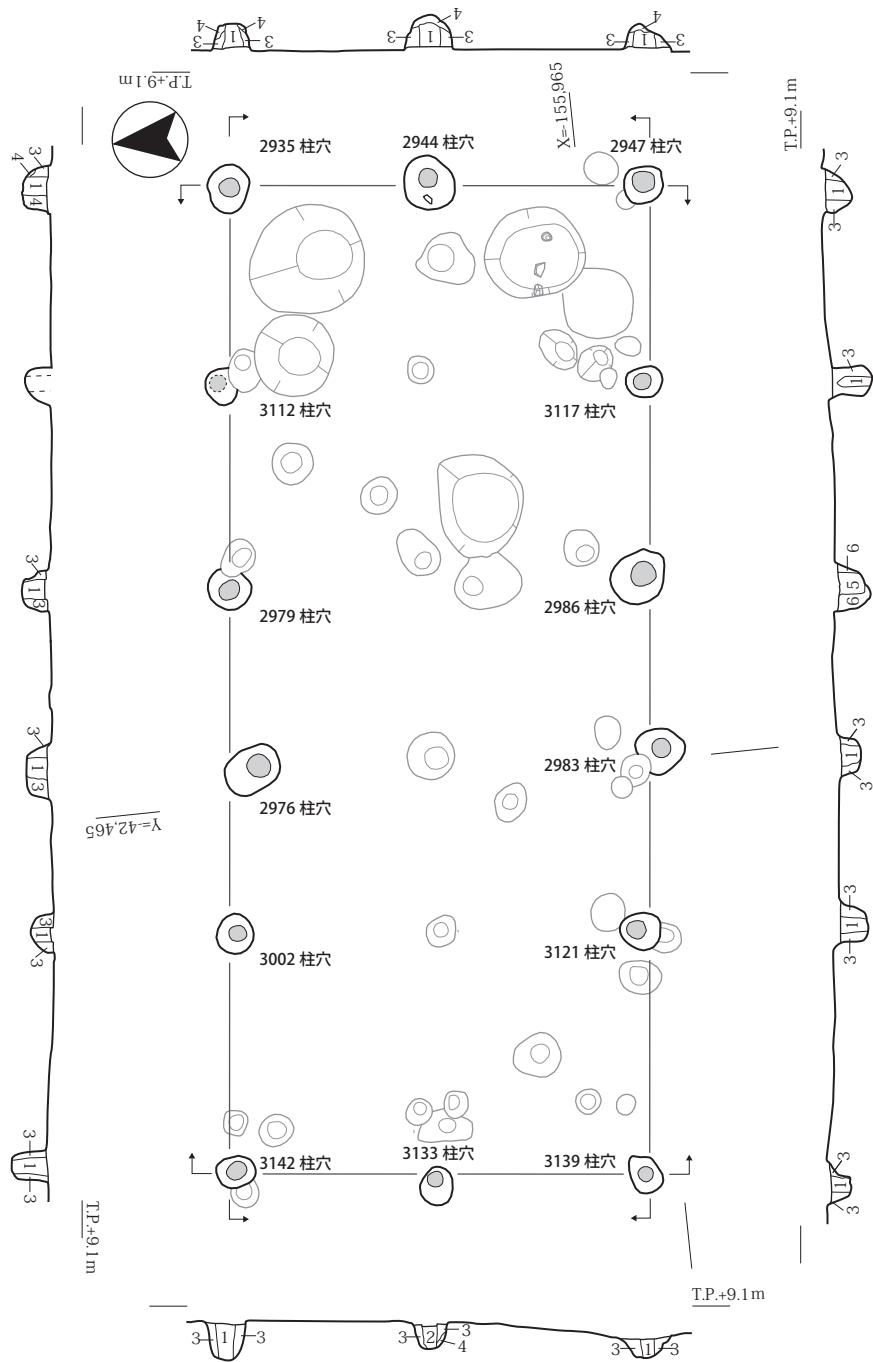
3953柱穴から1325の土師器小皿の小破片と1326の椀の口縁部小破片、1327の両黒の黒色土器椀の口縁部小破片が出土している。2976柱穴からは1328の青磁の合子蓋がある。口径10.0cmを測る。

2979柱穴からは、1331～1333の土師器小皿各種の小破片がある。2983柱穴からは1329の土師器小皿のての字形口縁の小破片が、2986柱穴からは1330の土師器椀、3112柱穴からは1334のての字口縁の土師器小皿・1335のやや小型の椀の小破片、1336・1337の内黒の黒色土器椀の底部破片などがある。

〔掘立柱建物43〕（図306・307・311・320 図版80-2）

5-3区の西端部の南寄りで検出された、東西棟の側柱建物である。

規模は2×3間で、北側辺が5.85m・南側辺が5.7m、西側辺が3.65m・東側辺3.75mを測る。面積は、21.35㎡である。主軸方向はN-4°-Eを示す。



- 1 灰黄褐 10YR4/2 中砂混シルト 第4b層小偽礫・炭含む
- 2 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混細砂 第4b・5層の小偽礫含む
- 3 灰黄褐 10YR4/2 細砂～中砂混シルト 第4b層小偽礫多く含む
- 4 褐 7.5YR4/4 中砂混シルト 第5層偽礫含む
- 5 黄灰 2.5Y4/1 シルト混 中砂 炭少量含む
- 6 暗オリーブ灰 5GY4/1 中砂～粗砂

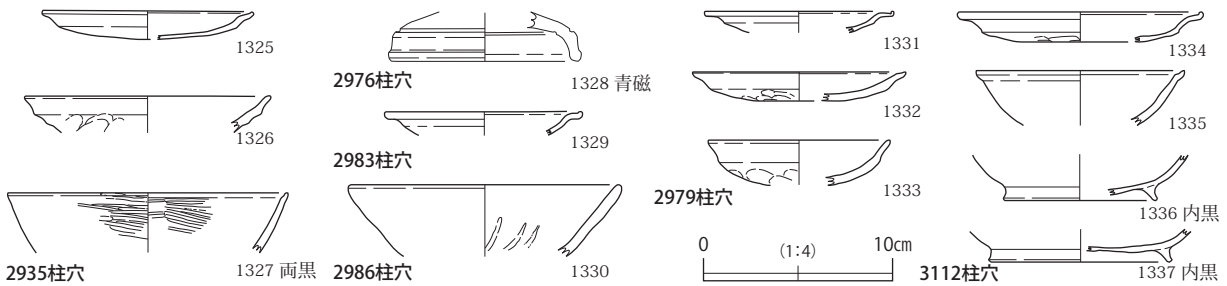


図319 5-3区 第3面 掘立柱建物42 平・断面図 出土遺物

柱穴の平面形は、不正円形ないしは不正楕円形で、径0.25～0.5m・深さ0.15～0.5mを測る。東側辺の2997柱穴が浅いのに比して、西側辺の3128柱穴が最も深く掘られている。

柱痕は総ての柱穴に残存しており、その径0.1～0.25mを測る。

柱間寸法は、北側辺が西から2.1m・1.85m・1.9m、南側辺が等間隔の1.9mで、西側辺が北から1.8m・1.85m、東側辺が同1.85m・1.9mを測る。

掘形の埋土は、シルトが混じる暗灰黄色の中砂が主で、第5層の偽礫を含んでいる。

掘立柱建物42と重複している。

遺物は、各柱穴から土師器・須恵器・黒色土器の小片がわずかに出土しているが、図示できるものはない。

〔掘立柱建物44〕（図306・307・311・321）

5-3区の南西端および5-4区の北西端で検出された側柱建物である。

規模は3×3間で、南北側辺が6.65m、東西側辺が6.8mを測り、面積は、43.0㎡である。

主軸方向は、N-2°-Wを示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.25～0.55m・深さ0.1～0.4mを測る。

柱痕は総ての柱穴に残存しており、その径は0.1m～0.15mを測る。

柱間寸法は、北側辺の西から2.0m・2.2m・2.2m、南側辺の同1.85m・2.15m・2.4mを測り、柱穴の配置がやや不揃いで、柱通りが悪い。西側辺の北から2.0m・2.0m・2.65m、東側辺が同2.0m・2.05m・2.75mを測り、南側の1間の間隔が広がっている。

掘形の埋土は、第4b・5層の偽礫を含む、にぶい黄褐色ないしは灰黄褐色の中砂から粗砂が主である。

掘立柱建物42と重複し、柱列6に切られている。

遺物は、2353・2389・3139柱穴を除き、土師器小片や黒色土器小片がわずかに出土している。図示できるものはない。

〔掘立柱建物45〕（図306・307・311・322・323・326）

5-4区の西半部の117溝の西側約5mのところ検出された南北棟の建物である。東西の各1間内側に、南北方向の柱穴が並ぶ。二面廂の建物と考えられる。

規模は、2×5間で南北辺が3.8m、東西辺が10.3mを測り、面積は39.1㎡である。廂部を入れると4×5間の南北辺が8.7m、東西辺が10.3mを測り、面積は89.6㎡である。

主軸方向は、N-3°-Eを示す。

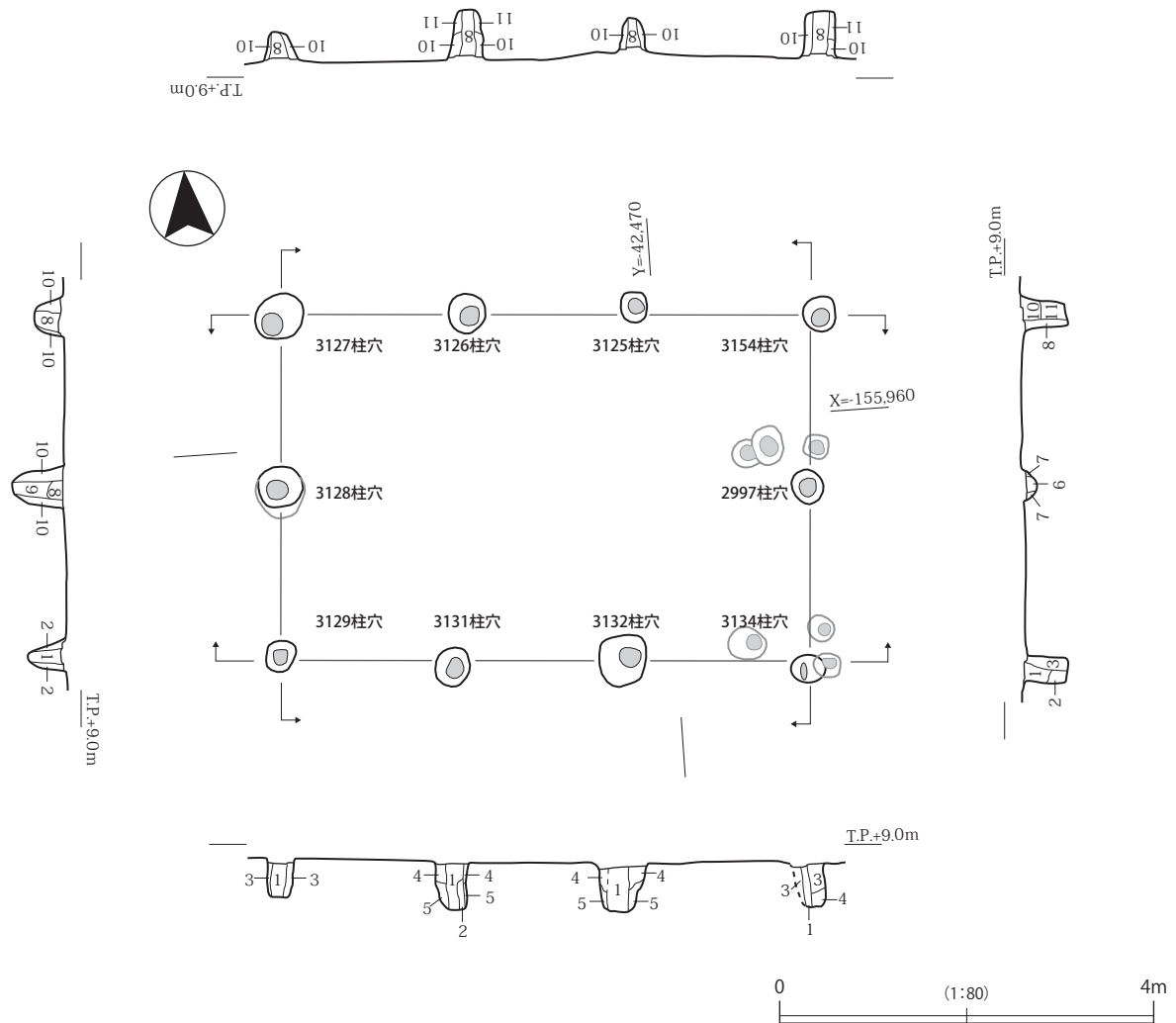
柱穴は、西側廂辺の北から5基目と、東側同じく4基目のものを検出していない。柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.3～0.6m・深さ0.3～0.5mを測る。主屋と廂部の柱穴規模は、同様の規模を示す。

柱痕は、98・265・1265・285柱穴を除き残存し、その径は0.1m～0.15mを測る。

柱間寸法は、主屋の北側辺は伴に1.9m、南側辺の西から1.6m・2.0mを測る。西側辺の北から3間が等間隔で2.0m・2.15m・2.4mを測る。

東側辺の1264・285柱穴がやや東側に位置することから、柱通りが悪い。

廂部の柱穴は、ほぼ平行で柱筋型である。主屋との距離は、北側が2.4m・南側が2.55mを測り、わずかに南側に開く。東辺の南から3基目の柱穴と西辺の同2基目の柱穴は他の建物の柱穴と同位置に当



- | | |
|--------------------------------------|---|
| 1 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混中砂 第4b層偽礫を多く含む | 6 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂・シルト混中砂 炭少量含む 第4b層偽礫を少量含む |
| 2 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂混シルト 第4b層小偽礫を含む | 7 灰黄褐 10YR5/2 粗砂 |
| 3 灰オリーブ 5YR5/2 シルト混細砂 粗砂・第5層偽礫を多く含む | 8 黒褐 10YR3/2 シルト混中砂 炭少量含む |
| 4 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混細砂 第4b層・第5層の偽礫を多く含む | 9 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混細砂 第4b層・第5層偽礫を含む |
| 5 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混細砂 第4b層・第5層偽礫を多く含む | 10 灰黄褐 10YR4/2 シルト混中砂 炭少量含む |
| | 11 灰黄褐色 10YR5/2 シルト混細砂 第5層偽礫を多く含む |

図320 5-3区 第3面 掘立柱建物43 平・断面図

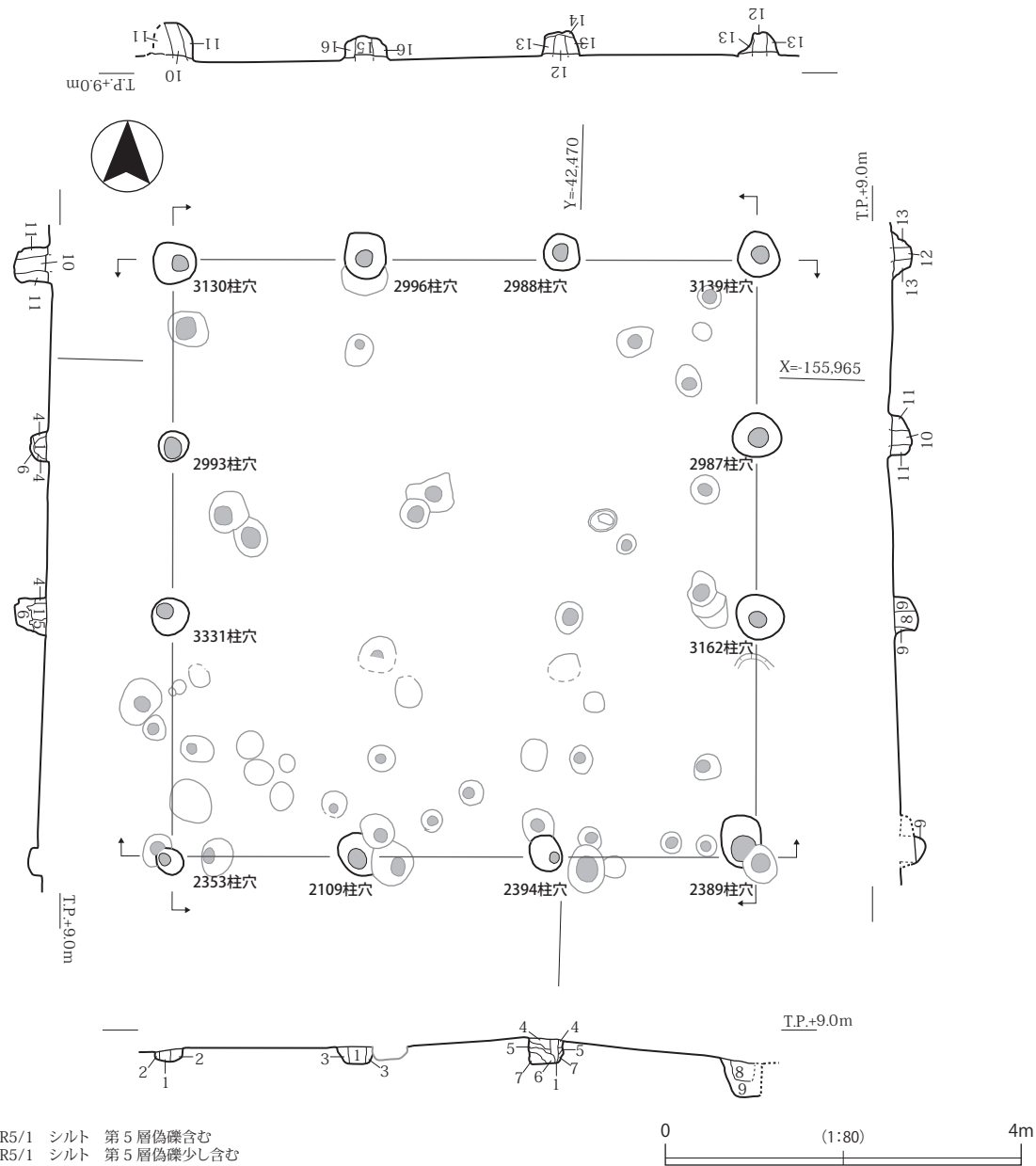
たるため、検出されていない。廂部の四隅の柱穴がやや規模が小さく、それ以外の柱穴は主屋の柱穴と同様の規模を示す。

掘形の埋土は、黒褐色の粘土からシルトや黄褐色のシルトから微砂が主である。

掘立柱建物47・49と重複し、掘立柱建物46・柱列3・4に切られている。

遺物は、各柱穴から土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。特に大きな柱穴からは、多量に出土しているが図示できたものは、少量である。

98柱穴からは、1338の灰釉陶器の皿の口縁部破片と1339の内黒土器の浅い椀の口縁部破片が出土している。161柱穴からは1340の黒色土器の底部破片が、144柱穴からは1341の土師器小皿および1342の椀がある。265柱穴からは1343の杯の口縁部破片と1344の皿がある。106柱穴からは1345の土師器の大型鉢の口縁部破片がある。143柱穴からは土師器の1346の杯と、1347の大型鉢の高台をもつ底部破片が出土している。



- | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 褐灰 10YR5/1 シルト 第5層偽礫含む | 12 灰黄褐 10YR5/2 細砂混シルト 第4b・5層小偽礫を含む |
| 2 褐灰 10YR5/1 シルト 第5層偽礫少し含む | 13 灰黄褐 10YR5/2 細砂混シルト 第4b・5層偽礫を多く含む |
| 3 黄灰 2.5Y6/1 微砂 | 14 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混細砂 第5層偽礫多く含む |
| 4 灰黄褐 10YR5/2 細砂混シルト | 15 灰黄褐 10YR4/2 シルト混中砂～粗砂 第4b・5層小偽礫含む |
| 5 灰黄褐 10YR4/2 シルト 第5層偽礫含む | 16 にぶい黄褐 10YR4/3 中砂～細砂 第4b・5層偽礫多く含む |
| 6 灰黄褐 10YR4/2 中砂混シルト 第5層偽礫含む | |
| 7 黄灰 2.5Y7/1 細砂混シルト 部分的に第5層偽礫含む | |
| 8 黄灰 2.5Y5/1 細砂～中砂混シルト | |
| 9 黄灰 2.5Y4/1 細砂混シルト | |
| 10 暗褐 10YR3/3 シルト混中砂 第4b・5層小偽礫含む | |
| 11 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混中砂 第4b・5層偽礫含む | |

図321 5-3・4区 第3面 掘立柱建物44 平・断面図

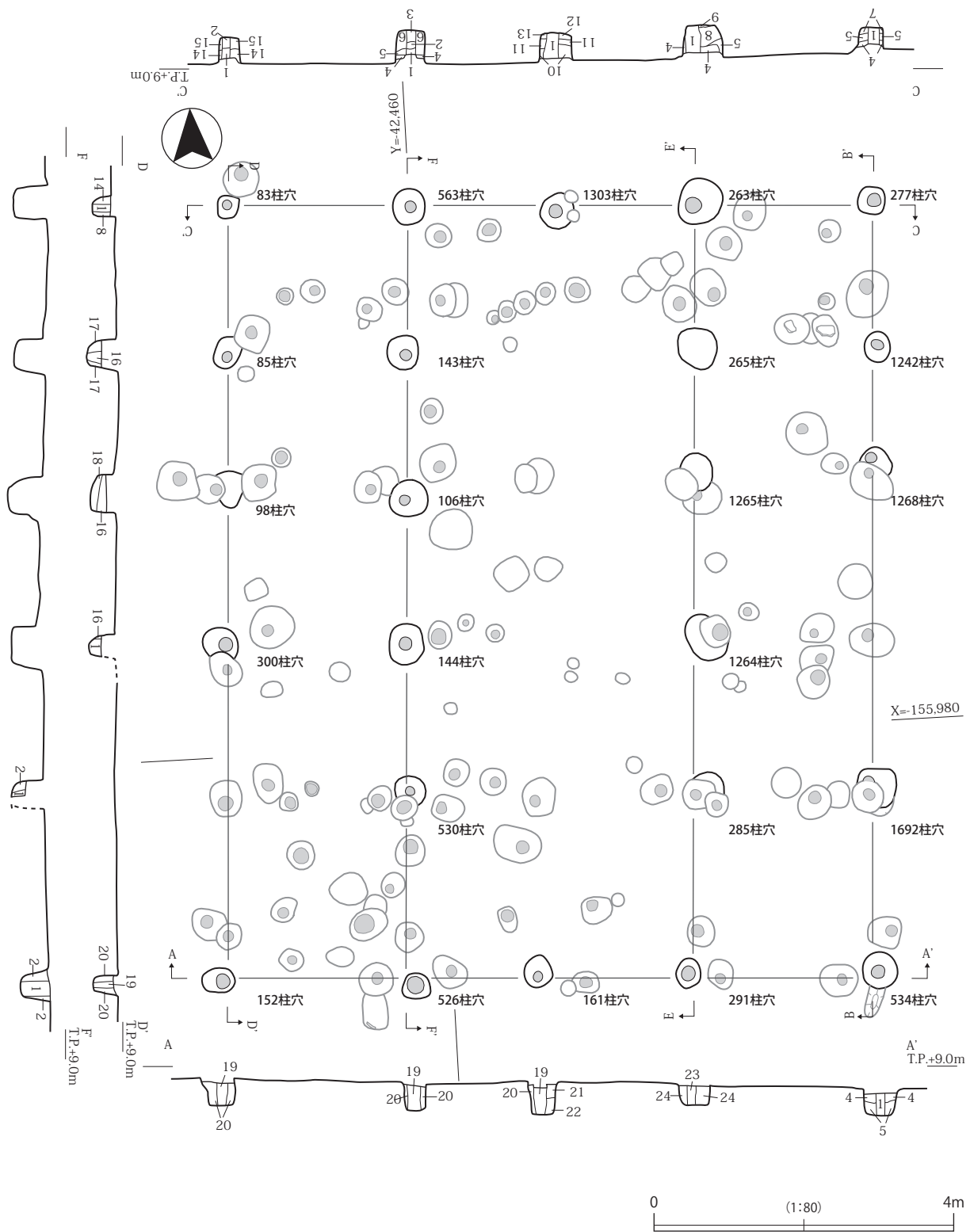
〔掘立柱建物46〕(図306・307・311・324～326 図版77-1)

5-4区の西半部117溝の西側約5mのところ検出された南北棟の建物で、東西に二面廂をもつものである。

規模は主屋が2×7間で、北側辺が4.15m・南側辺が3.95mで、東西辺が14.4mを測り、面積は58.3㎡である。廂部を入れると、4×7間で、北側辺で8.7mで、面積は125.3㎡となる。

主屋は、南側3間分のところで、東西方向の中間に160柱穴を検出しており、東西に柱筋が通ることと南北両辺の中心柱穴にも並ぶことから、間仕切りのための柱穴と考えられる。

また、南側2間分の西側辺の155・551・167・1261柱穴がやや東にずれることから、西側辺は柱通り



- | | | |
|------------------------------|----------------------------------|-------------------------------|
| 1 暗褐 10YR3/3 粘土～シルト
小偽礫含む | 9 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト～微砂 粘性あり | 16 黄灰 2.5Y5/1 シルト～微砂 炭化物・偽礫含む |
| 2 黒褐 2.5Y3/2 粘土～シルト | 10 黒褐 2.5Y3/2 粗砂混粘土～シルト | 17 灰黄褐 10YR5/2 シルト～微砂 偽礫含む |
| 3 黒褐 10YR2/2 粘土～シルト | 11 黒褐 2.5Y3/1 粘土～シルト | 18 黄灰 2.5Y4/1 シルト～微砂 |
| 4 暗灰黄 2.5Y4/2 粘土～シルト | 12 黒褐 2.5Y3/2 粘土～シルト | 19 黄灰 2.5Y6/1 粗砂混シルト～微砂 |
| 5 黒褐 10YR3/2 粘土～シルト | 13 黄灰 2.5Y4/1 粘土～シルト | 20 灰白 2.5Y7/1 シルト～微砂 |
| 6 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト | 14 灰黄褐 10YR4/2 粗砂混粘土～シルト | 21 明黄褐 2.5Y7/1 シルト～微砂 |
| 7 黒褐 10YR2/3 粘土～シルト | 15 黒褐 10YR3/2 粗砂混粘土～シルト
偽礫を含む | 22 明黄褐 2.5Y5/1 シルト～微砂 偽礫含む |
| 8 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混粘土～シルト | | 23 褐灰 7.5YR5/1 粘土～シルト |
| | | 24 褐灰 5YR5/1 粘土～シルト 炭化物・小偽礫含む |

図322 5-4区 第3面 掘立柱建物45 平・断面図(1)

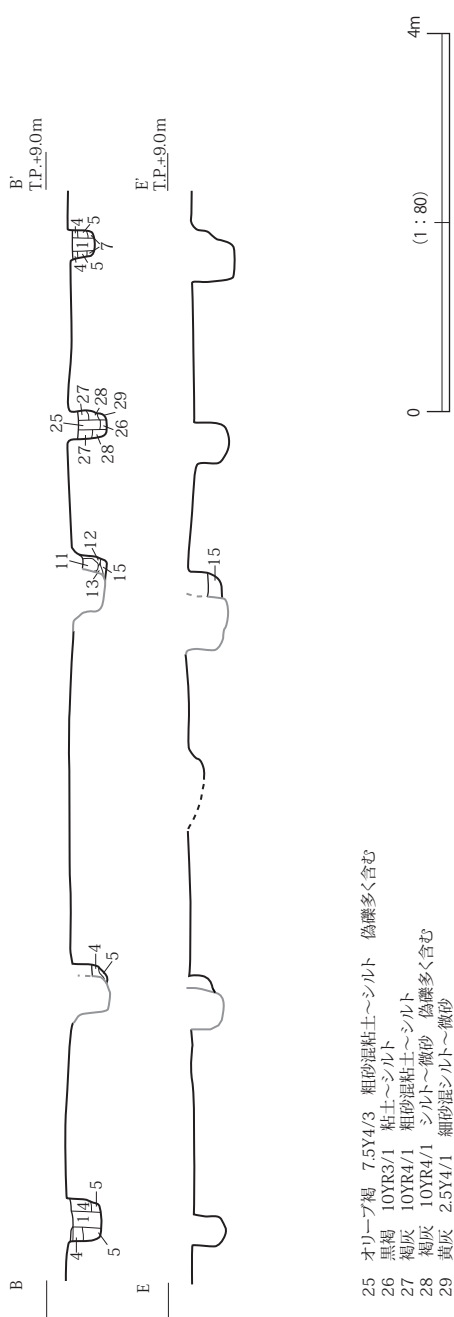


図323 5-4区 第3面

掘立柱建物45 平・断面図(2)

282 柱穴からは、1359のての字口縁の土師器小皿・1358の片口鉢、1360の内黒・1361の両黒の黒色土器碗がある。320 柱穴からは1362のやや小型の土師器碗があり、ほぼ完形で浅く、口径 13.2cm・器高 3.8 cmを測る。262 柱穴からは1363の土師器碗・1364の皿がある。301 柱穴からは、1366のての字口縁の土師器小皿がある。275・1260柱穴からは、1367・1368の土師器碗がある。290 柱穴からは1369の内黒の黒色土器碗がある。468 柱穴からは1370のての字口縁の土師器小皿・1371の碗、1372・1373の内黒の黒色土器碗がある。1373は口径 15.2cm・器高 5.0 cmを測る。1371は口径 12.8cm・器高 4.5 cm、1373は口径 15.2cm・器高 6.0 cmを測る。125 柱穴からは、1374の土師器羽釜の口縁部破片がある。

が悪い。

北側 4 × 4 間、南側 2 × 4 間の 2 棟の建物と捕らえることも可能であるが、主屋の東側辺の柱通りが揃うことと、両廂の柱通りが揃うことから、1 棟の建物とここでは捕らえておくこととする。主軸方向は N - 2° - E を示す。主屋の西側辺の南から 5 間目の柱穴を検出していない。

柱痕は、6007・6008・6009 柱穴を除き残存し、柱穴の平面形は、不正円形ないしは不正楕円形で、径 0.3~0.65m・深さ 0.3~0.55 m を測る。四隅の柱穴がやや深い。

主屋の柱間寸法は、北側辺の西から 2.0 m・2.1 m、南側辺の同 1.85 m・2.1 m を測る。西側辺の北から 2.0 m・2.4 m・2 間分 4.1 m・1.75 m・2.05 m・2.0 m、東側辺が同 2.1 m・3 間分が 6.55 m・1.8 m・2.05 m・1.9 m を測る。東西辺の南側 3 間分の間隔が北側 4 間分と比較して狭くなっている。

廂部の柱穴は、ほぼ主屋と並び筋柱型である。主屋との柱間距離は、北西側で 2.25 m、北東側で 2.4 m、南西側で 2.4 m を測る。掘立柱建物 45 同様に、廂部の四隅の柱穴の規模がわずかに小さく、他は主屋と同様の規模を示している。

掘形の埋土は、灰黄褐色のシルトから微砂が主である。部分的に第 4 b・5 層の偽礫を含む。

掘立柱建物 45 を切り、掘立柱建物 47・柱列 3・4 に切られ、掘立柱建物 48・49 と重複している。

遺物は総ての柱穴から、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

86 柱穴からは、1348・1349 のての字口縁の土師器小皿および 1350 の皿がある。105 柱穴からは 1351 のての字口縁の土師器小皿がある。107 柱穴からは 1352 のての字口縁の土師器皿・1353 の杯および、1354~1356 の内黒・1357 の両黒の黒色土器碗がある。1353 は約 1 / 2 を残し、口径 13.8cm・器高 3.4 cm を測る。

282 柱穴からは、1359 のての字口縁の土師器小皿・1358 の片口鉢、1360 の内黒・1361 の両黒の黒色土器碗がある。320 柱穴からは 1362 のやや小型の土師器碗があり、ほぼ完形で浅く、口径 13.2cm・器高 3.8 cm を測る。262 柱穴からは 1363 の土師器碗・1364 の皿がある。301 柱穴からは、1366 のての字口縁の土師器小皿がある。275・1260 柱穴からは、1367・1368 の土師器碗がある。290 柱穴からは 1369 の内黒の黒色土器碗がある。468 柱穴からは 1370 のての字口縁の土師器小皿・1371 の碗、1372・1373 の内黒の黒色土器碗がある。1373 は口径 15.2cm・器高 5.0 cm を測る。1371 は口径 12.8cm・器高 4.5 cm、1373 は口径 15.2cm・器高 6.0 cm を測る。125 柱穴からは、1374 の土師器羽釜の口縁部破片がある。

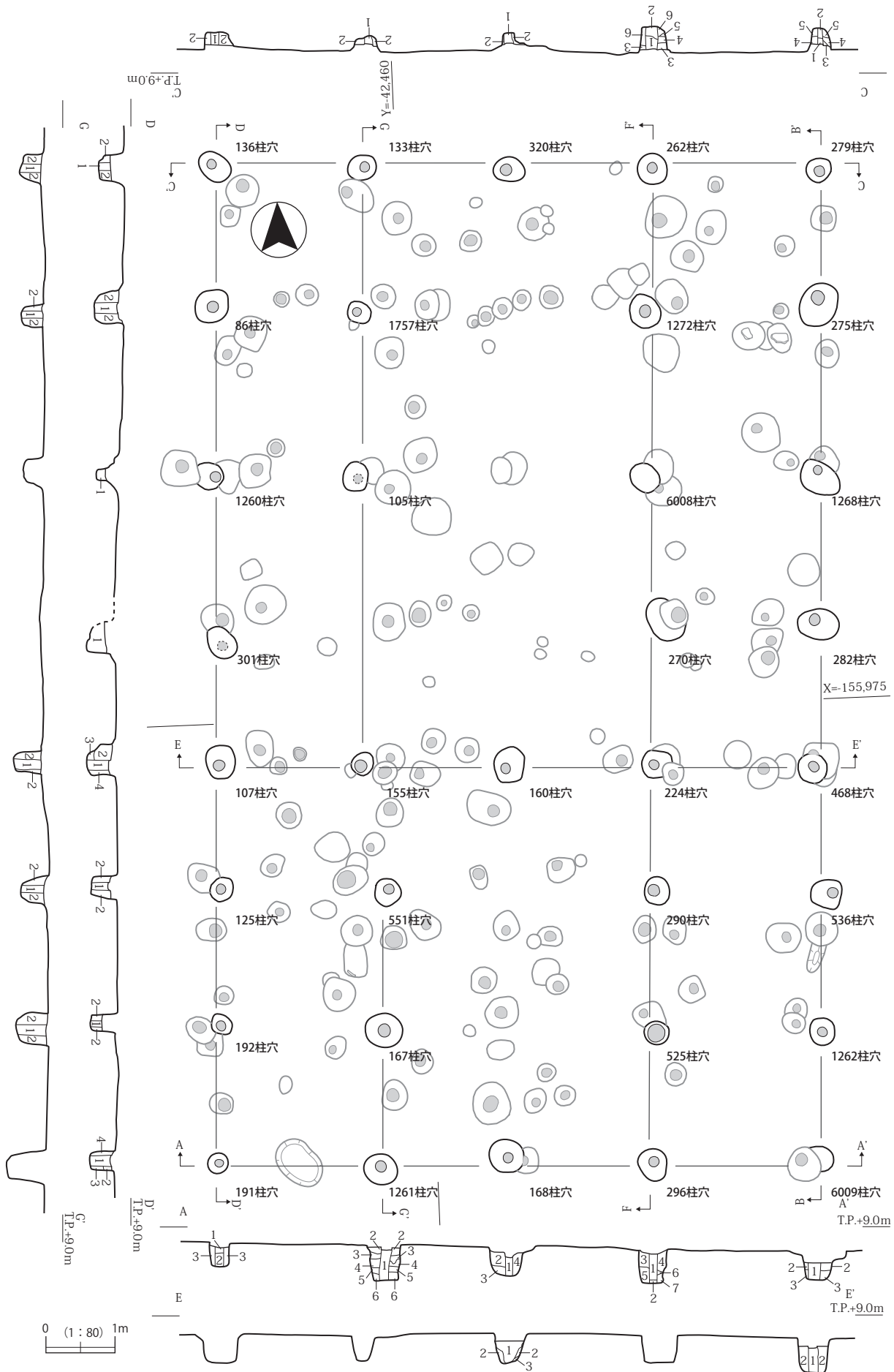


图324 5-4区 第3面 掘立柱建物46 平·断面图(1)

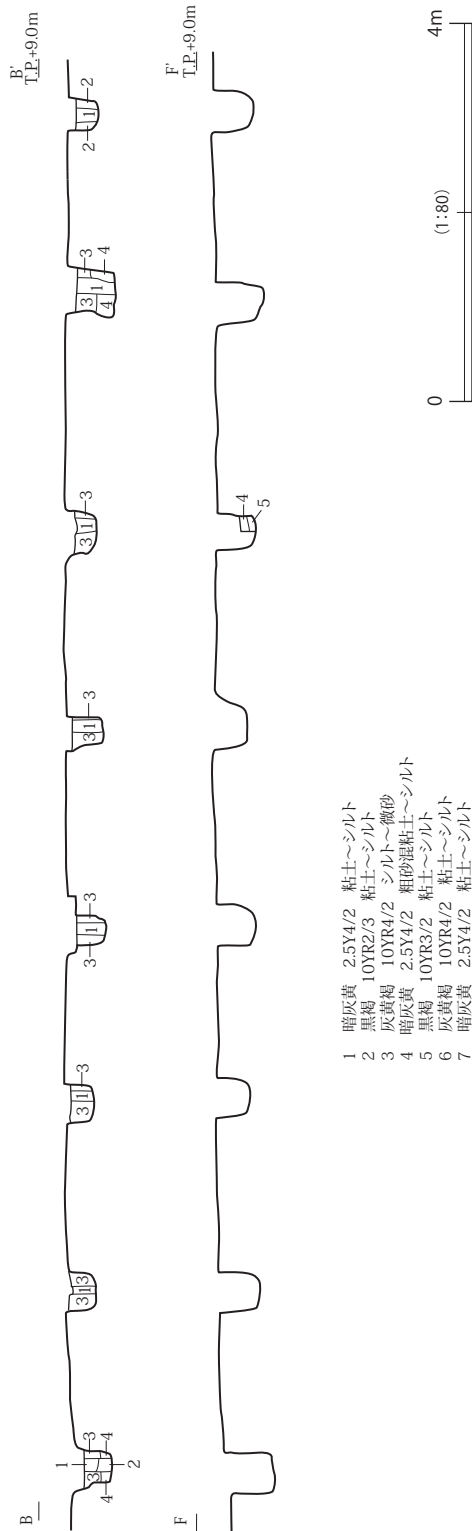


図325 5-4区 第3面 掘立柱建物46
平・断面図(2)

〔掘立柱建物47〕(図306・307・311・327・328 図版77-2)

5-4区の西半部 117 溝の西側約 5 m のところで検出された南北棟の建物である。南北に廂が付属する。

主屋の規模は 3 × 4 間で、南北辺が 5.2 m、東西辺が 8.95 m を測り、面積は 46.5 m² である。廂部を入れると、規模は 3 × 6 間で、南北辺が 5.2 m、東西辺が 13.35 m を測り、面積は 69.4 m² である。

主軸方向は N - 2° - E を示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径 0.2 ~ 0.5 m ・ 深さ 0.25 ~ 0.55 m を測る。西側辺の柱穴がの規模が揃っているのに対して、東側辺の柱穴にやや小さく浅いものがある。北東隅の 541 柱穴を除き、隅柱が他と比較して、深く掘られている。

柱痕は、1267・281 柱穴を除き残存し、その径は 0.1 ~ 0.15 m を測る。

柱間寸法は、北辺の西から 1.85 m ・ 1.8 m ・ 1.55 m、南辺の同 1.8 m ・ 1.75 m ・ 1.65 m、西辺北から 2.25 m ・ 2.25 m ・ 2.3 m ・ 2.15 m を測る。

廂の柱穴は主屋の柱穴と並び柱筋型であるが、北辺では、西側が 2.5 m ・ 東側が 2.1 m と距離に差異があり、南辺では約 2.0 m の等間隔である。

南東隅の柱穴は、検出されていない。

掘形の埋土は、第 4 b ・ 5 層の偽礫を含むにぶい褐灰色ないしは灰黄褐色の粘土からシルトが主である。

廂部の柱穴の規模は、主屋と比較してやや小規模の傾向を示す。

遺物は、1267・1953・2127・2251 柱穴を除き、各柱穴から土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。小破片のため、図示できるものは無かった。

〔掘立柱建物48〕(図306・307・311・329)

5-4区の西半部 117 溝の西側約 5 m のところで検出された南北棟の側柱建物である。

規模は 2 × 3 間で、南北辺が約 4.3 m、東西辺が約 6.2 m を測り、面積は約 26.7 m² である。

主軸方向は N - 1° - E を示す。

柱穴の平面形は、不正円形ないしは不正楕円形で、径 0.3 ~ 0.65 m ・ 深さ 0.25 ~ 0.4 m を測る。

柱痕は、2037・328・332・6011 柱穴を除き残存し、その径

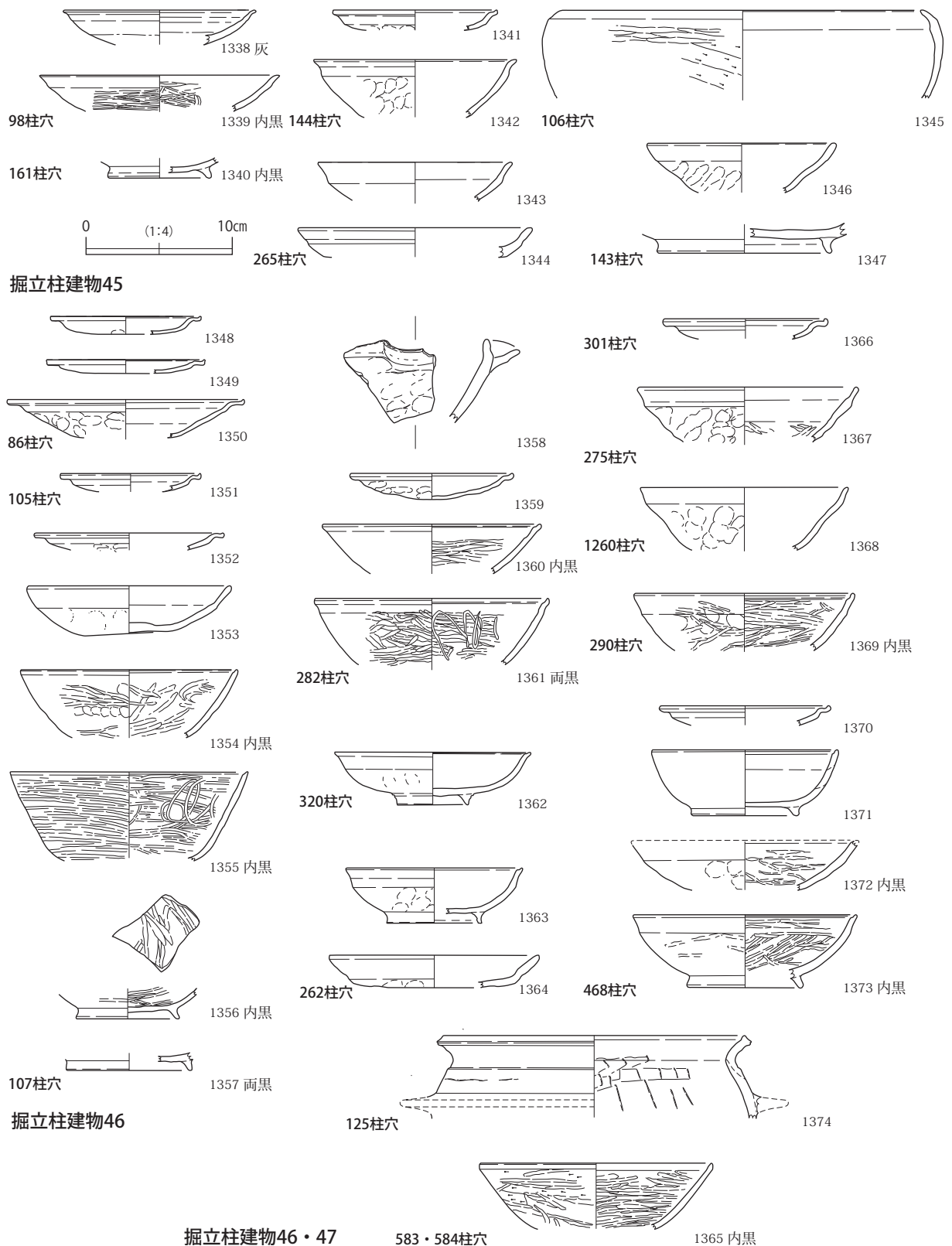


図326 5-4区 第3面 掘立柱建物45~47 出土遺物

は0.1m~0.15mを測る。

柱間寸法は、北辺の西が 2.0 m、西辺の北から 2.1 m・2.05 m、東辺の 306・2123 柱穴間が 2.15 mを測る。

掘形の埋土は、第 4 b・5 層の偽礫を含むに褐灰色ないしは黒褐色の粘土から微砂が主である。

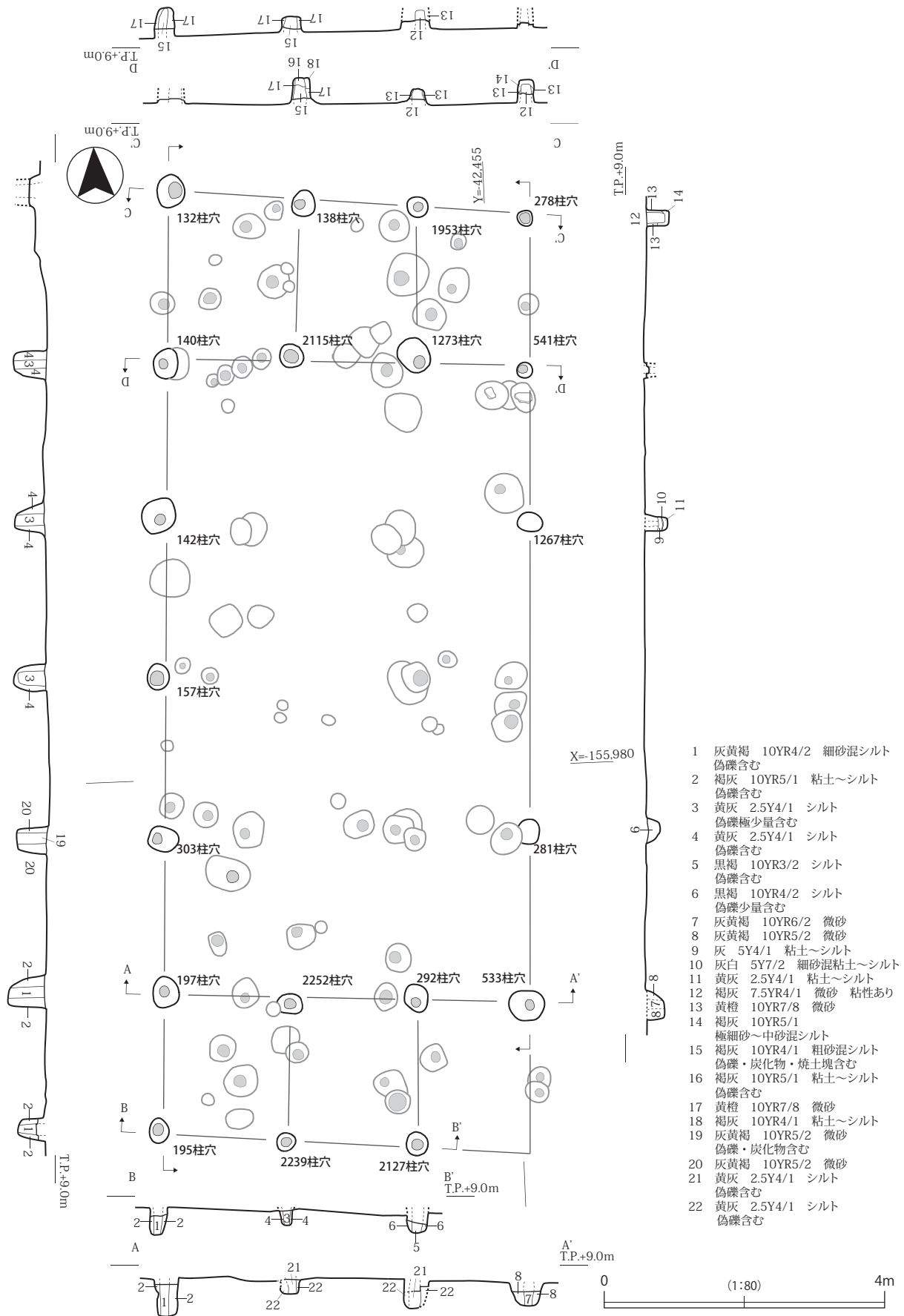


図327 5-4区 第3面 掘立柱建物47 平・断面図

掘立柱建物47・49と重複している。

遺物は、各柱穴から土師器・須恵器・黒色土器などがわずかに出土している。

〔掘立柱建物49〕（図306・307・311・330）

5－4区の西半部117溝の西側約12mのところ検出された南北棟の建物である。東側に廂が付属している。

主屋の規模は2×3間で、南北辺が3.8m、東西辺が5.45mを測り、面積は20.7㎡である。廂部を入れると規模は3×3間で、南北辺が4.9m、東西辺が5.45mを測り、面積は26.7㎡である。

主軸方向は、座標北を示す。

主屋の柱穴は平面形が不正円形ないしは不正楕円形で、径0.3～0.75m・深さ0.25～0.55mを測る。

柱痕は、2248・190・198柱穴を除き残存し、その径は0.1～0.2mを測る。

柱間寸法は、北辺の西側が1.65m、南辺の西から1.85m・1.95m、西辺の北から1.55m・2間分3.9m、東辺が同2125・201柱穴間の3.85mを測る。

廂部の柱穴は、母屋の柱穴と並び、柱筋型である。東辺から1.1mを測り、母屋に比して、やや小規模である。

掘形の埋土は、褐灰色ないしは黄灰色の粘土からシルトが主である。

掘立柱建物47・48と、柱列4と重複している。

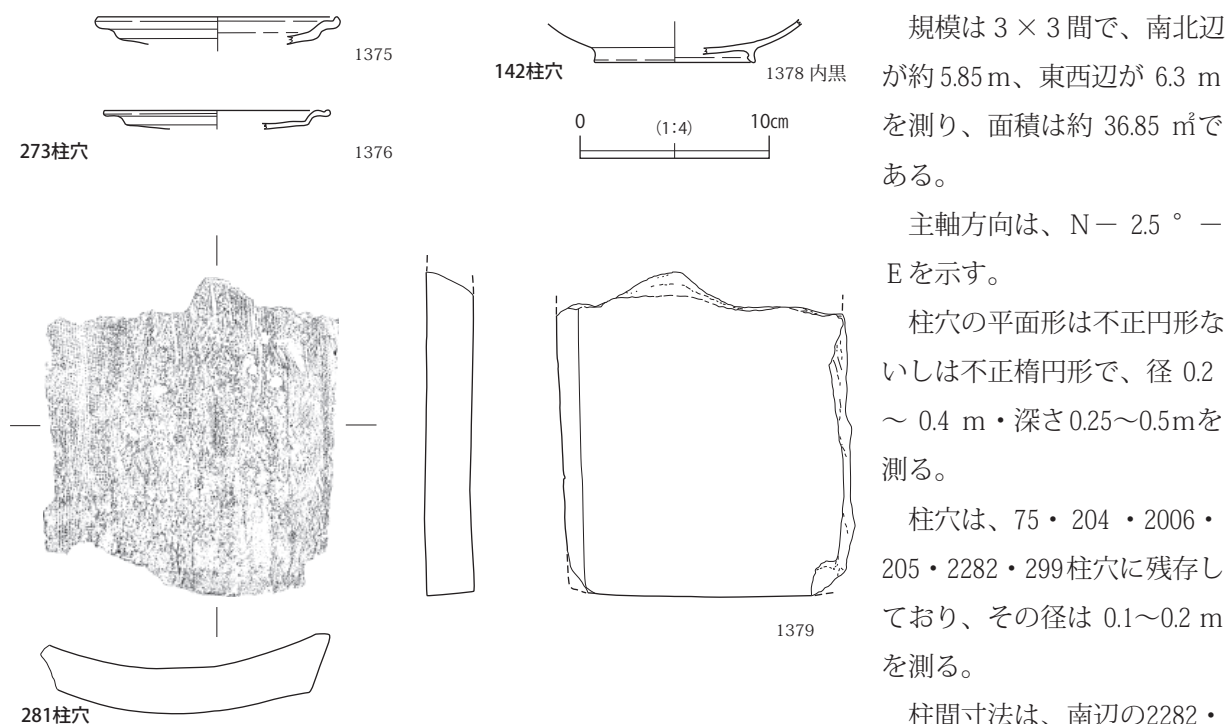
遺物は、2212・2235・2248・2250柱穴を除き、各柱穴から土師器・須恵器・黒色土器の小破片が出土している。

190柱穴からは、灰釉陶器の壺の破片が出土している。

図示できたものは、218柱穴の1380・1381・1383の土師器皿と1382の杯である。

〔掘立柱建物50〕（図306・307・311・331）

5－4区の西半部の掘立柱建物45～47の西側に隣接して検出された総柱建物である。



規模は3×3間で、南北辺が約5.85m、東西辺が6.3mを測り、面積は約36.85㎡である。

主軸方向は、N－2.5°－Eを示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.2～0.4m・深さ0.25～0.5mを測る。

柱穴は、75・204・2006・205・2282・299柱穴に残存しており、その径は0.1～0.2mを測る。

柱間寸法は、南辺の2282・299柱穴の2間分が3.95m、

図328 5－4区 第3面 掘立柱建物47 出土遺物

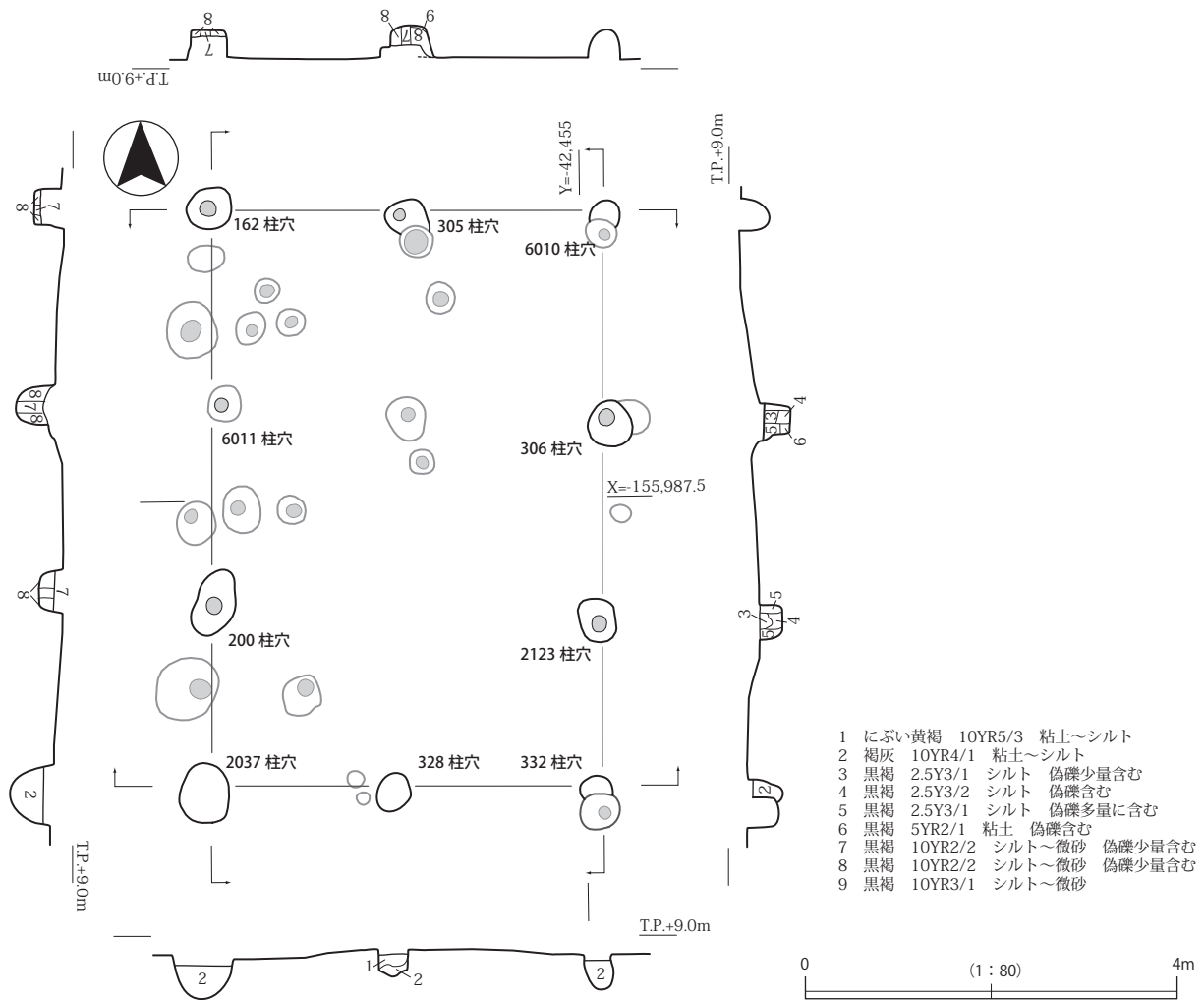


図329 5-4区 第3面 掘立柱建物48 平・断面図

東側から2列目の204・205柱穴間が2.0 m、205・299柱穴間が2.4 m、南側から2列目の2006・205柱穴間が1.9 mを測る。

東西辺の南側1間分の距離が2.4 mとわずかに幅がある以外は、ほぼ等分に柱穴が配されている。

204柱穴が西側に、1333柱穴がやや北側に配され、柱通りが悪い。

掘形の埋土は、黒褐色ないしは褐灰色のシルトが主である。

遺物は、2331柱穴を除き、各柱穴から土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

104・299柱穴からは、1384・1385の土師器小皿の口縁部破片が出土し、75柱穴からは土師器1386の皿の口縁部小片が、96柱穴からは1387の内黒の黒色土器碗の口縁部破片がある。

〔掘立柱建物51・52〕(図306・307・311・332～334)

5-4区の西端部の掘立柱建物45～47の西側に隣接して検出された総柱建物である。建物51と52の柱穴がほぼ同一で検出されている。

掘立柱建物51の規模は3×4間の南北棟で、南北辺が6.3 m、東西辺が8.95 mを測り、面積は56.4 m²である。主軸方向はN-2.5°-Eを示す。

柱穴は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.25～0.55 m・深さ0.2～0.6 mを測る。

柱痕は、掘立柱建物52に切られているため、確としないが、227・211・184柱穴に残存し、その径は0.1～0.15 mを測る。

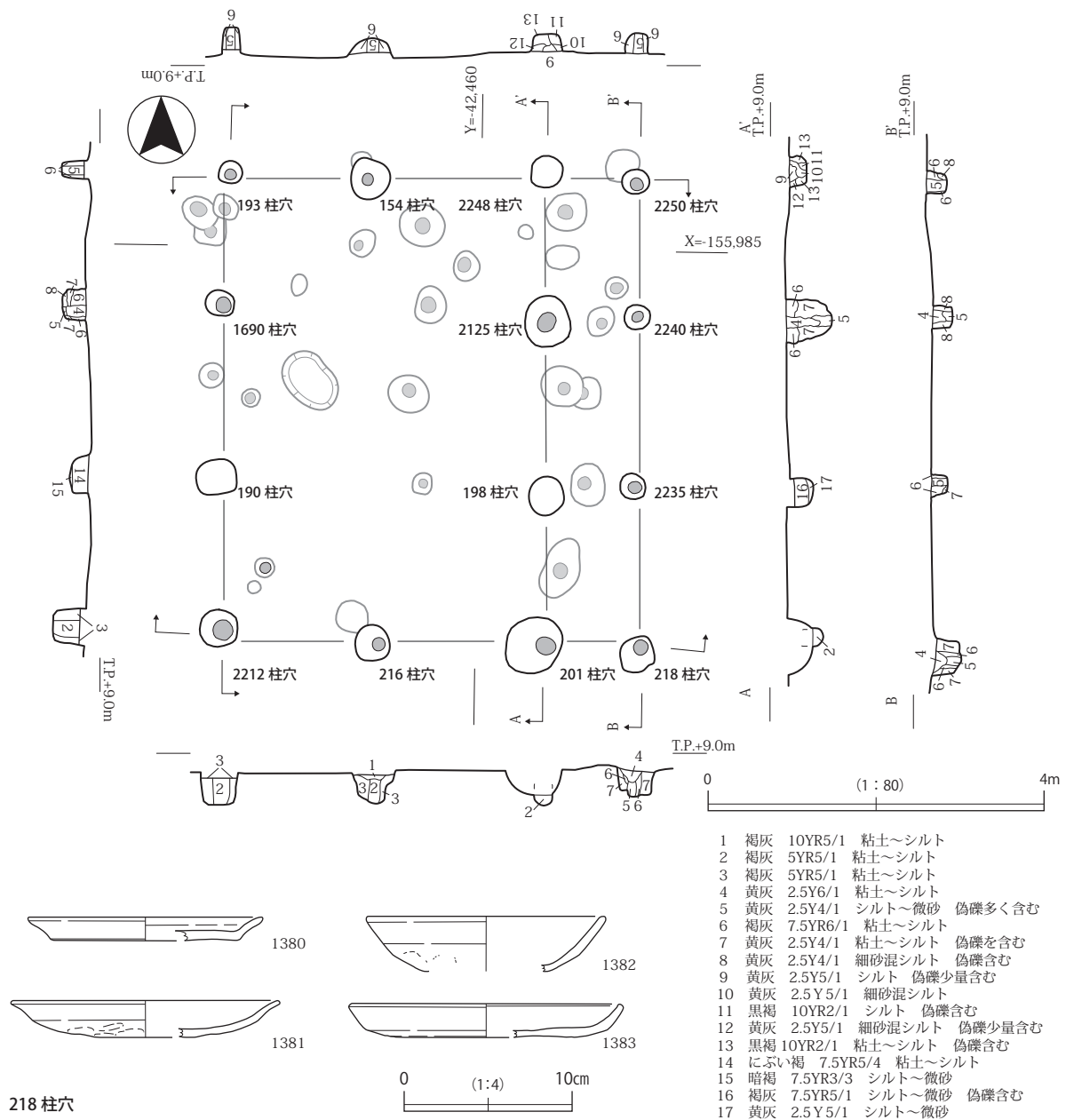


図330 5-4区 第3面 掘立柱建物49 平・断面図 出土遺物

柱間寸法は、先述の理由から計測できるものが無く、東西辺では、およそ南北両端の1間が2.4～2.65 mで、中心の2間が2.1～2.2 mを測る。南北辺では、西側の1間が2.3 m、東側2間が2.1～2.1 mを測る。

東西辺の南から2・3列目の柱通りがやや北東に振っている。

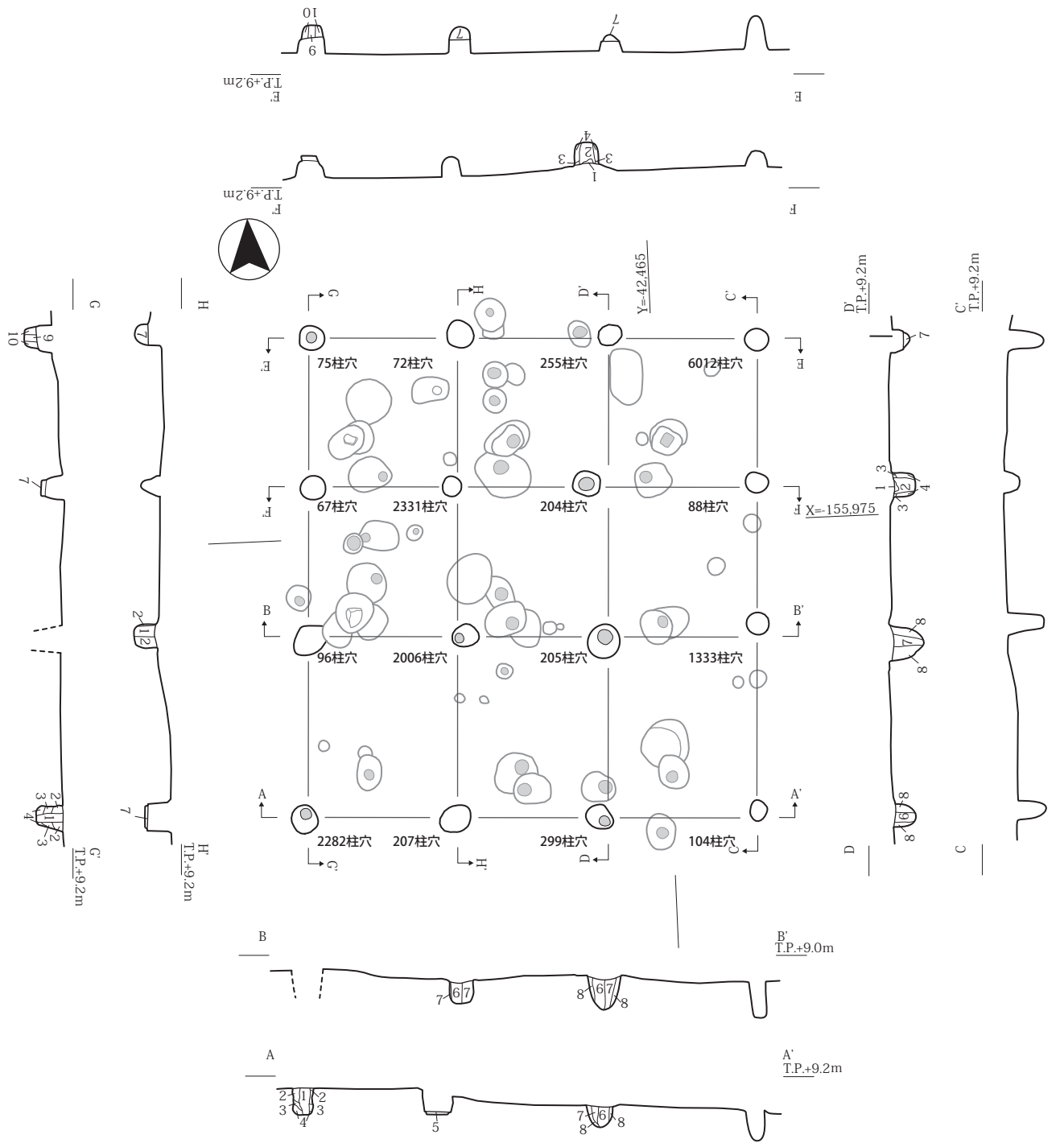
掘形の埋土は、第4 b・5層の偽礫を含む黒褐色ないしは褐灰色のシルトが主である。

遺物は、わずかに土師器・黒色土器などが柱穴から出土している。

図示できたものとして、211 柱穴から1388・1389の土師器碗が、81柱穴から1393の内黒の黒色土器碗がある。

掘立柱建物52の規模は4×4間の総柱建物で、南北辺が8.55 m、東西辺が9.1 mを測り、面積は77.8 m²である。主軸方向は、N-2°-Wを示す。

柱穴は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.3～0.55 m・深さ0.15～0.55 mを測る。



- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐 2.5Y3/2 中砂混シルト | 8 にぶい黄橙 10YR7/4 シルト |
| 2 黒褐 2.5Y3/2 シルト 偽礫多量に含む | 9 褐灰 10YR4/1 シルト~粘土 |
| 3 黒褐 2.5Y3/1 シルト 小偽礫含む | 10 褐灰 10YR6/1 シルト 偽礫多量に含む |
| 4 黒褐 2.5Y3/1 微砂 | 11 褐灰 10YR6/1 シルト |
| 5 黒褐 10YR2/2 シルト 粘性有 | 12 褐灰 10YR5/1 シルト |
| 6 褐灰 10YR7/4 細~粗砂混シルト 偽礫含む | 13 褐灰 10YR4/1 シルト |
| 7 褐灰 10YR5/ 細~粗砂混シルト 炭化物・偽礫含む | 14 黄橙 10YR8/8 粘土~シルト |

0 (1:80) 4m



図331 5-4区 第3面 掘立柱建物50 平・断面図 出土遺物

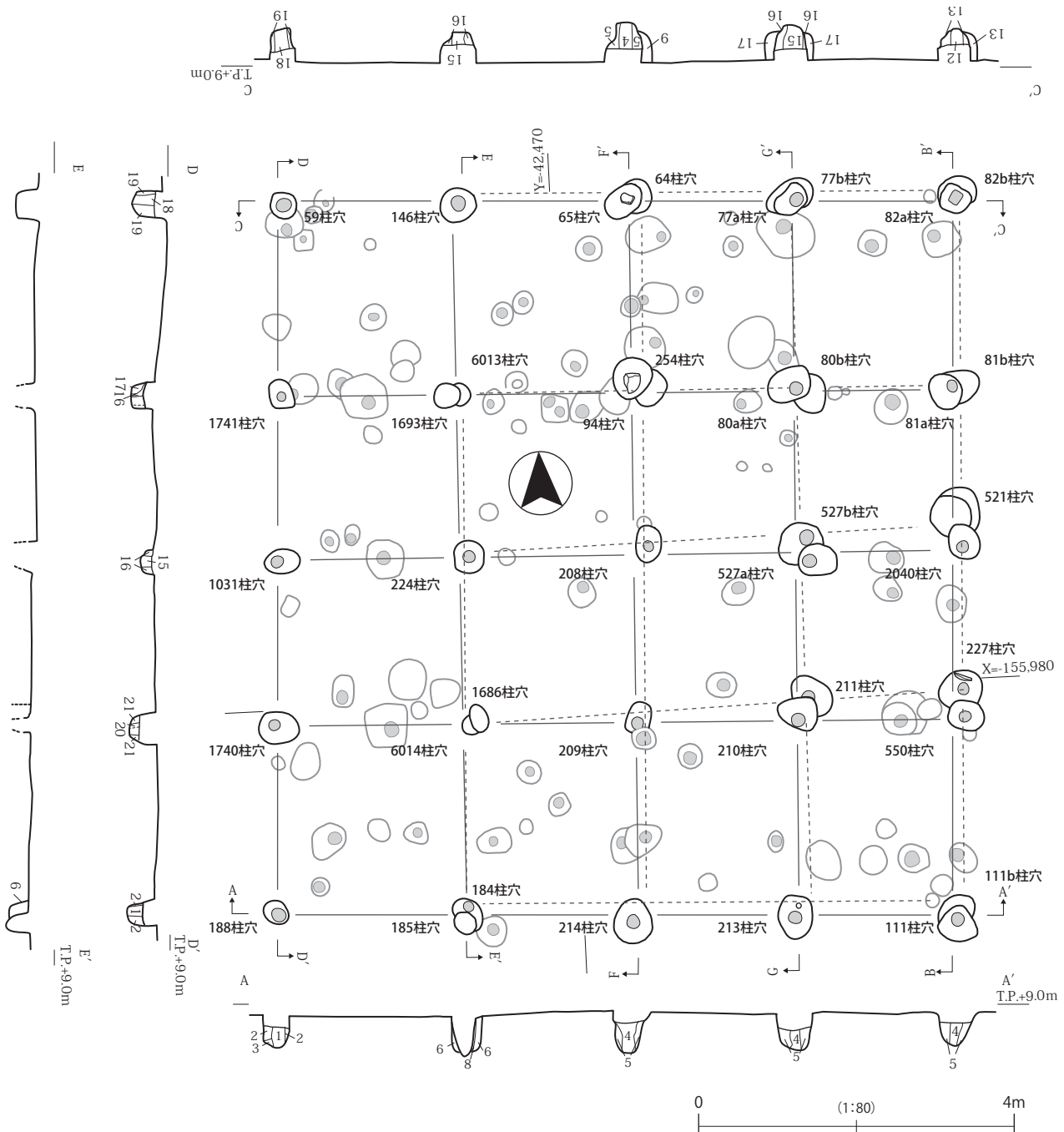


図332 5-4区 第3面 掘立柱建物51・52 平・断面図(1)

柱痕は、1693・1686柱穴を除き残存し、その径は0.1m~0.15mを測る。82柱穴のみ方形の柱痕であった。

柱間寸法は、北辺の西から 2.2m・2.15m・2.2m・1.95m、南辺の同 2.4m・2.1m・2.0m・2.05 m、西辺の北から 2.4m・2.1m・2.05m・2.4 m、東辺が同 2.4m・2.0m・2.1m・2.65 mを測る。

掘形の埋土は、第4 b・5層の偽礫を含む黒褐色ないしは灰黄色のシルトや細砂が主である。

遺物は、柱穴の重なりが大きいので、どちらの建物から出土したか不明なものが多い。1741・1693・2020柱穴を除き、各柱穴からは、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

図示できたものには、80柱穴からは1390土師器椀、209柱穴からは1391の土師器椀および1392の緑釉陶器の皿の口縁部破片がある。1392は、第4 b層から出土したものと接合する。210柱穴からは1394の

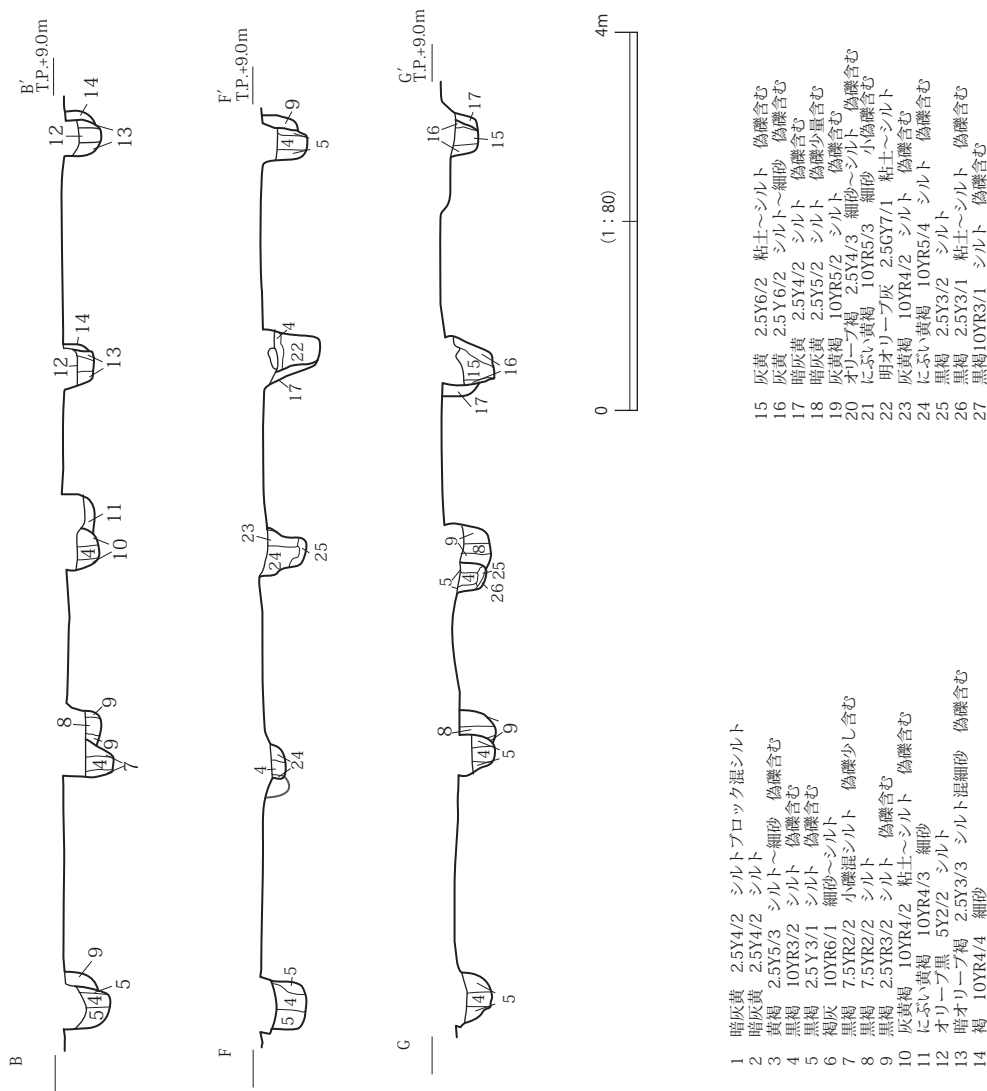


図333 5-4区 第3面 掘立柱建物51・52 平・断面図(2)

土師器皿、1395の土師器杯・1396の椀がある。208柱穴からは1397の土師器杯・1399の小型甕、1398の内黒の黒色土器椀がある。214柱穴からは土師器墨書土器がある。文字の詳細は、小片のため不明である。

〔掘立柱建物53〕 (図306・307・311・335)

5-4区の西端部で検出された東西棟の建物で南北側に廂をもつ両面廂の建物である。

主屋の規模は2×3間で、南北辺が6.3m、東西辺が4.2mを測り、面積は26.5㎡である。廂部を入れると、規模は4×3間で、南北辺が6.3m、東西辺が8.7mを測り、面積は54.8㎡である。

主軸方向は座標北を示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは隅丸方形で、径0.5~0.7m・深さ0.3~0.55mを測る。

柱痕は、2275・1738柱穴を除き残存し、その径は0.1~0.15mを測る。

主屋の柱間寸法は、南辺の西側から2.1m・2.25m・2.1m、西辺の北から2.1m・2.1m、東辺が同2.0m・2.2mを測る。

掘形の埋土は、第4b・5層の偽礫を含む灰オリーブ色ないしは暗褐色のシルトおよびシルトが混じる細砂が主である。

廂部の柱穴は、母屋の柱穴と並び柱筋型である。主屋と比較して小規模で、径0.3~0.5m、深さ0.25mを測る。主屋との距離は、北側で2.8m、南側で2.8m・2.65mを測り、南辺がやや北東に振っている。北西隅の柱穴は検出されていない。

遺物は、1695・2617・2640柱穴を除き、各柱穴から土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。1233柱穴からは、1401の土師器の皿と1402の椀の口縁部破片が出土している。

〔掘立柱建物54〕(図306・309・311・336 図版80-1)

5-1区の東南部で検出された総柱建物である。掘立柱建物55に切られ、北側で掘立柱建物56と接する。

規模は3×3間で、南辺が6.2m、西辺が5.3mを測り、面積は32.85㎡である。

主軸方向はN-3°-Wを示す。

柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺0.45~0.8m・深さ0.35~0.55mを測る。北東隅の柱穴と東側から2列目の南から2基目の柱穴を欠く。

柱痕は、6014・6015柱穴を除き残存し、その径は0.15~0.3mを測る。

柱間寸法は、南辺の西から1.55m・1.5m・1.7m、西辺の北から1.6m・1.5m・1.9mを測る。

2910柱穴がやや東に位置することと、東西方向の2・3列目がやや北西に振ることから、歪な柱穴配置を示す。

掘形の埋土は、第4b・5層の偽礫を含む灰黄褐色ないしはにぶい黄褐色のシルトが混じる中砂が主である。

遺物は、3163・3169・2919・2922柱穴から、わずかに土師器・黒色土器の小片が出土している。図示できるものはない。

〔掘立柱建物55〕(図306・309・311・337 図版79-3)

5-1区の東南部で検出された東西棟の建物で、東側を除いた3方向に廂がある。掘立柱54を切っている。

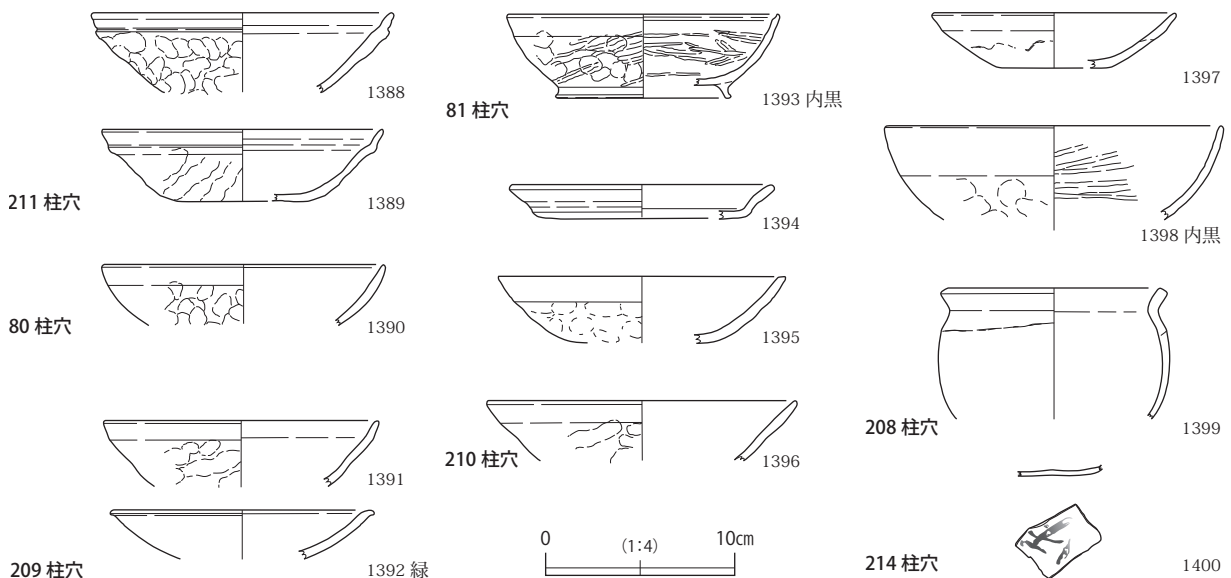


図334 5-4区 第3面 掘立柱建物51・52 出土遺物

母屋の規模は2×4間で、南北辺が6.1 m、東西辺が3.55 mを測り、面積は21.65 m²である。廂部を入ると4×5間で、南辺で約7.7 m、西辺で約6.3 mを測り、面積は48.5 m²である。

主軸方向はN-4°-Eを示す。

母屋の柱穴の平面形は、不正円形ないしは不正楕円形で、径0.2~0.5 m・深さ0.1~0.5 mを測る。

柱痕は6016~6019柱穴を除き残存し、その径は0.1~0.15 mを測る。

柱間寸法は、北辺の西から2.1 m・2.0 m・0.8 m・1.1 m、南辺の同1.95 m・2.05 m・1.0 m・1.2 m、西辺の北から1.6 m・1.9 mを測る。

南北辺の東半部の中間が狭く、6017・6019柱穴が別の建物の柱穴とも考えられるが、南側の廂部にも同じ並びの柱穴が存在することから、この建物に付随する柱穴と思われる。北辺および中央辺の柱通りが悪い。

東西辺の各2列目に2909・6018柱穴が配されていることから、この2基は束柱と考えられる。

掘形の埋土は、第4 b・5層の偽礫を含むにぶい黄褐色ないしは褐色のシルトが混じる中砂が主である。

廂部は、主屋に比して規模がやや小さく、径0.25~0.3 m・深さ0.1~0.4 mを測る。母屋の柱穴とほぼ並ぶ柱筋型である。廂の南西隅の2913柱穴はどちらの辺からも位置がずれている。なお、北辺の東側3基を検出していない。

廂の主屋との距離は、西辺では3058・3061柱穴間で1.45 m、3044・2917柱穴間では1.6 mを測り、北辺では3042・3041柱穴間が1.6 m、3058・3059柱穴間で1.6 mで、南辺で2917・2911柱穴間が1.35 m、3089・2904柱穴間で1.6 mと、台形状になる。

遺物は、3078・2981柱穴を除き、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

3174柱穴からは、1403・1404の土師器碗の口縁部および高台部破片・1405の甕と1406の内黒の黒色土器碗が出土した。3075柱穴からは、1408の内黒の黒色土器碗の底部片がある。

また、廂の2911柱穴からは、1407の土師器小皿の小片がある。

〔掘立柱建物56〕（図306・309・311・338）

5-1区の東半部で検出された東西棟の側柱建物である。掘立柱建物54・55の北側に位置する。

規模は2×3間で、南北側辺が5.75 m、東西側辺が約3.75 mを測り、面積は約21.6 m²である。

主軸方向はN-4°-Wを示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.25~0.5 m・深さ0.1~0.4 mを測る。

柱痕は、3347・3343・3071柱穴を除き残存し、その径は0.1~0.15 mを測る。3085柱穴の底部には、長さ24 cm・幅20 cm・厚さ8 cmの石が出土している。

柱間寸法は、南側辺の西から2.0 m・1.75 m・2.0 m、西側辺の南側が2.0 m、東側辺が同じく1.85 mを測る。東西の中心柱穴の位置が並行に配置されていない。

掘形の埋土は、第4 b・5層の偽礫を含む灰黄褐色ないしは黄褐色のシルトが混じる中砂から粗砂が主である。

遺物は、3039・3080・3085柱穴からのみ、土師器の小片が出土している。

〔掘立柱建物57〕（図306・309・339 図版84-4）

5-1区の南端部の中央付近で検出された東西棟の側柱建物である。掘立柱建物58の東側に隣接し、南西約5 mに位置する。

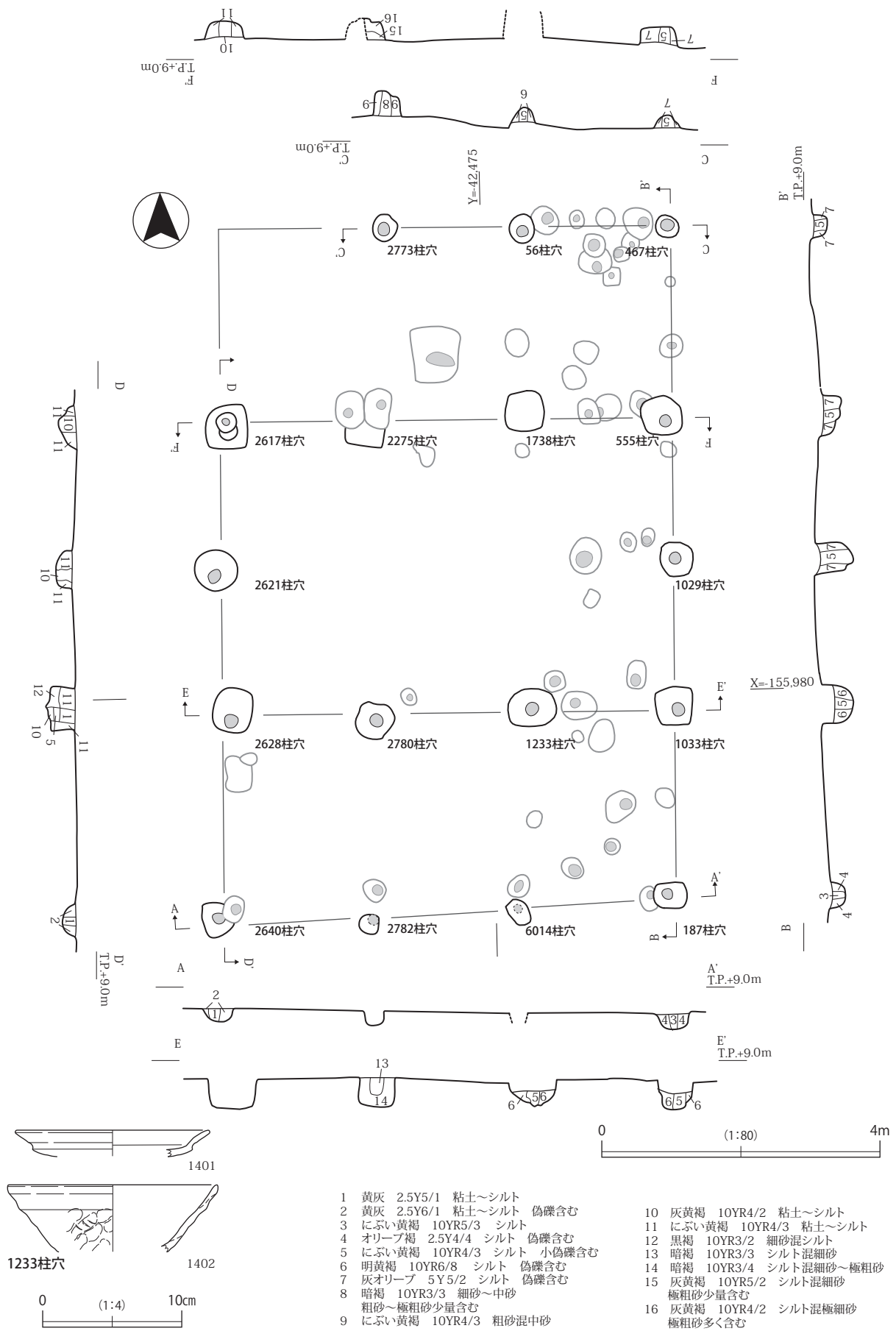
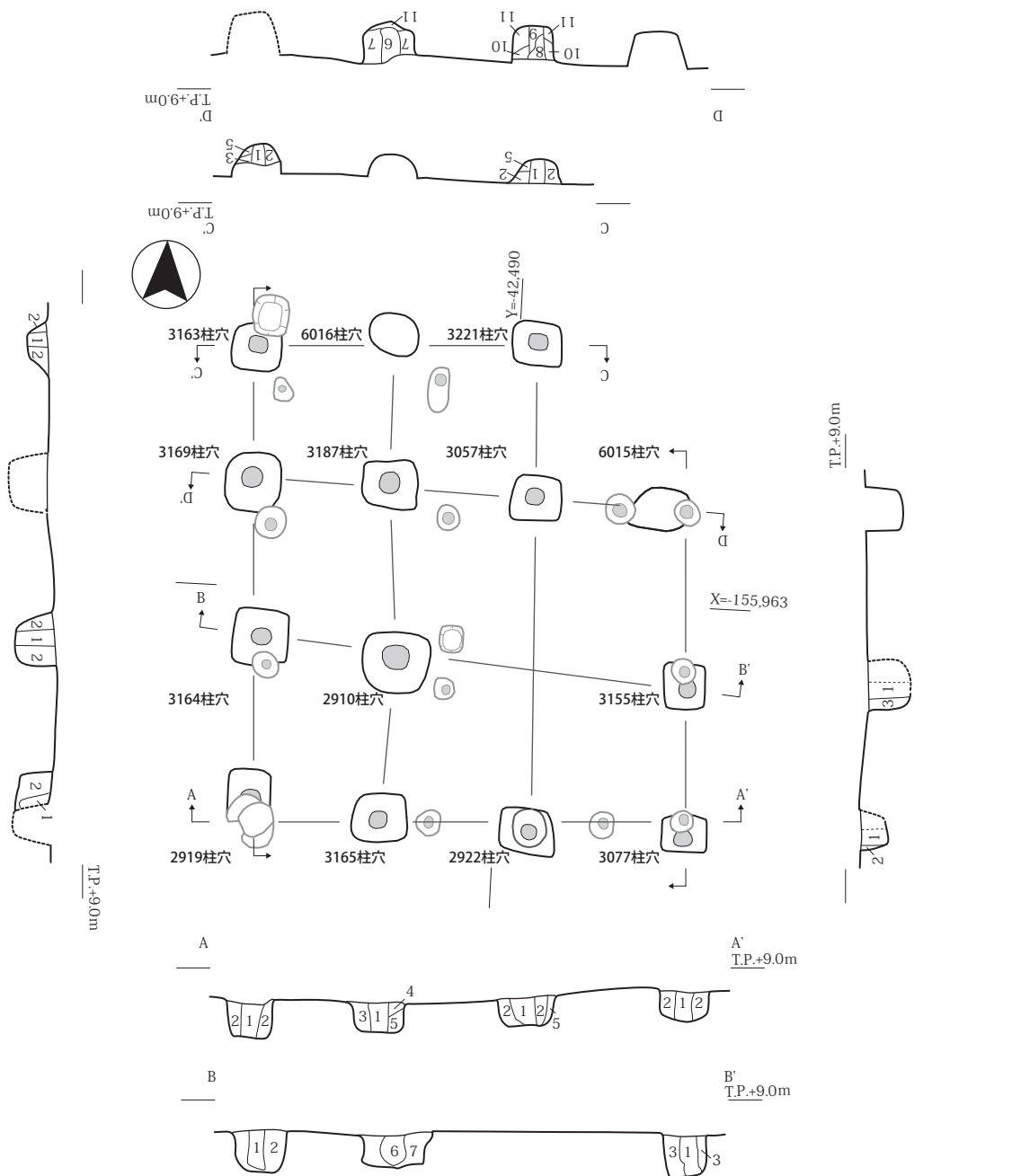


図335 5-4区 第3面 掘立柱建物53 平・断面図 出土遺物



- 1 灰黄褐 10YR4/2 シルト混中砂 第4b・5層偽礫含む
- 2 灰黄褐 10YR4/2 シルト混中砂 第4b・5層偽礫多く含む
- 3 にぶい黄褐 10YR5/4 シルト混細砂 第4b～7層偽礫多く含む
- 4 にぶい黄褐 10YR5/3 粗砂 第4b～7層偽礫多く含む
- 5 灰黄褐 10YR5/2 シルト混細砂
- 6 にぶい黄橙 10YR6/3 粗砂混シルト 第4b・5層小偽礫含む
- 7 にぶい黄橙 10YR6/4 粗砂混シルト 第4b・5層大偽礫多量含む
- 8 暗褐 10YR3/3 シルト混細砂
- 9 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト 第4b層小偽礫含む
- 10 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混細砂
- 11 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト 第5～7層偽礫含む

図336 5-1区 第3面 掘立柱建物54 平・断面図

規模は2×3間で、南北辺が約4.55m、東西辺が約3.55mを測り、面積は16.15㎡である。

主軸方向は、N-1°-Wを示す。

柱穴の平面形は、不正円形ないしは不正楕円形で、径0.3～0.55m・深さ0.1～0.45mを測る。

柱痕は、3057・2923・3097柱穴のみ残存し、その径は、0.1～0.25mを測る。

柱間寸法は、東側辺の北側が2.15mを測る。南北側辺の柱通りがやや悪い。

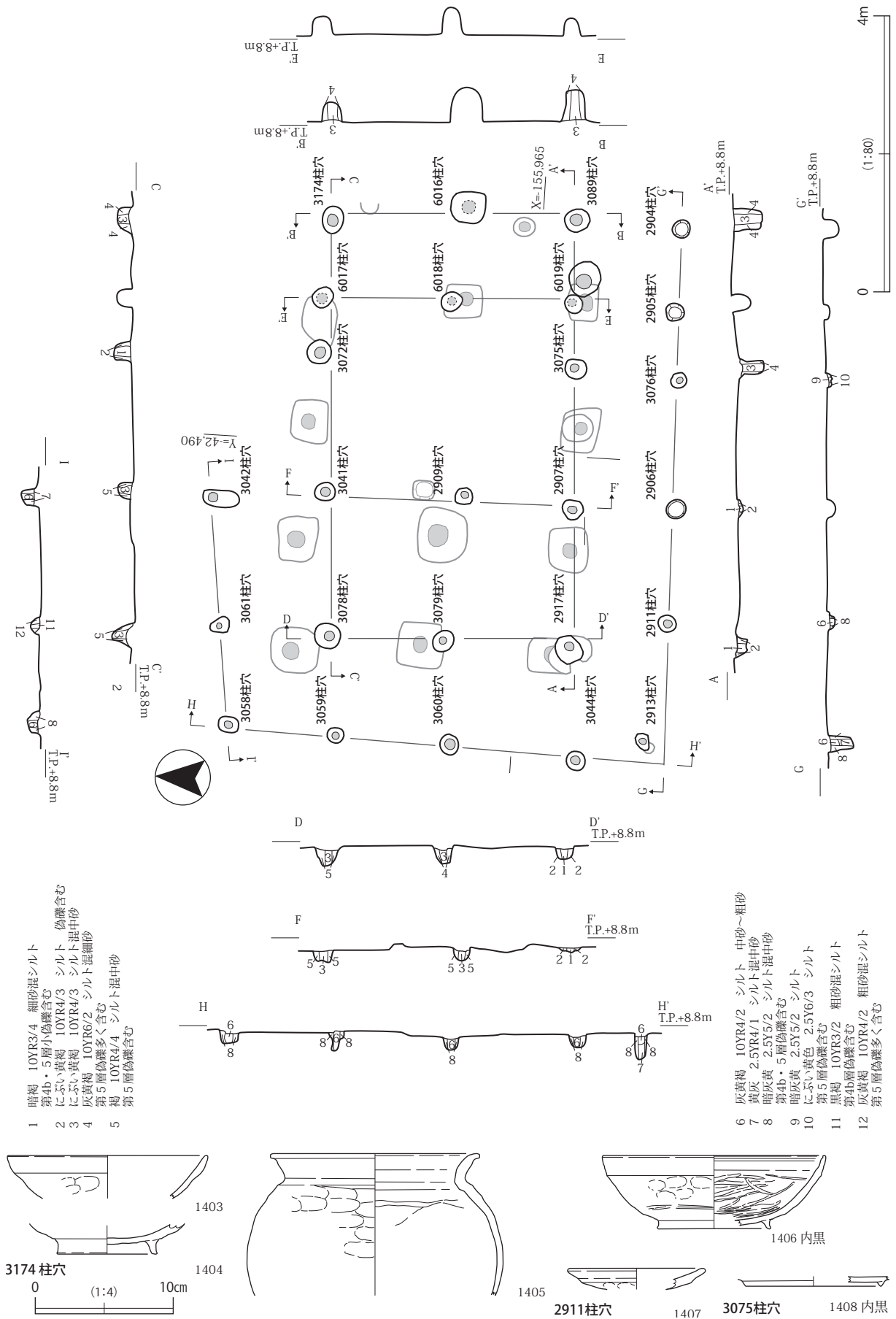


図337 5-1区 第3面 掘立柱建物55 平・断面図 出土遺物

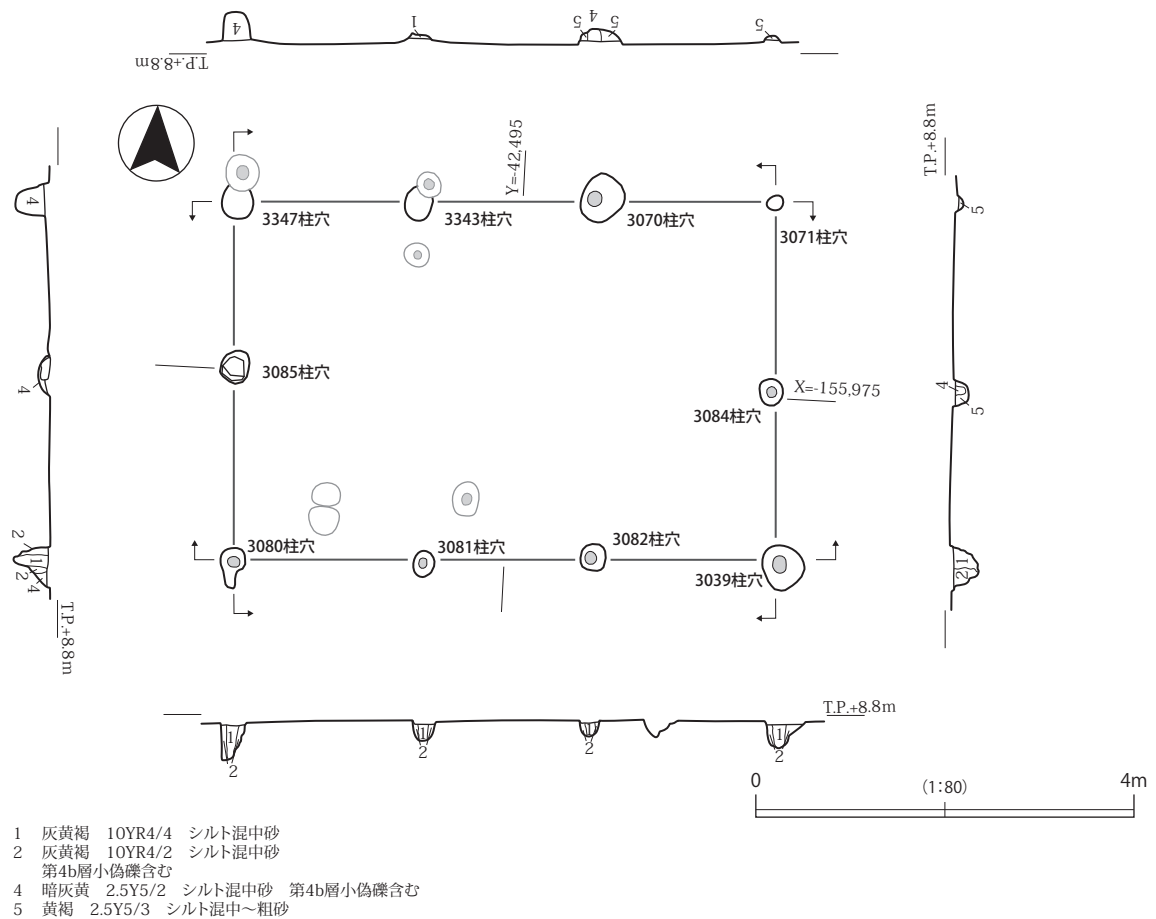


図338 5-1区 第3面 掘立柱建物56 平・断面図

掘形の埋土は、第4 b・5層の偽礫を含む、にぶい黄褐色ないしは灰黄褐色のシルトが主である。遺物は、1108～1110・2923柱穴から、土師器・須恵器などが出土している。

〔掘立柱建物58〕(図306・309・340)

5-1区の西南部で検出された東西棟の側柱建物である。掘立柱建物57・59に挟まれ、掘立柱建物60の北側に位置する。

規模は2×3間と思われ、北側辺が5.0m、西側辺が3.35mを測り、面積は16.75㎡である。

主軸方向は、N-1°-Wを示す。

柱穴の平面形は、不正円形ないしは不正楕円形で、径0.3～0.6m・深さ0.2～0.4mを測る。

柱痕は、3046柱穴を除き残存し、その径は0.1～0.2mを測る。

柱間寸法は、北側辺の西から1.9m・2間分3.1m、西側辺の北から1.7m・1.65mを測る。

掘形の埋土は、第4 b・5層の偽礫を含む、にぶい黄褐色の細砂ないしは灰黄褐色のシルトが主である。

遺物は、2890柱穴を除き、土師器などが出土している。

2889柱穴からは、1409・1410の土師器碗・1411の皿・1413の甕や1412の内黒の黒色土器碗が出土している。

〔掘立柱建物59〕(図306・309～311・341)

5-1区の西南端部で検出された東西棟の側柱建物である。

規模は2×3間で、南北辺が5.45m、東西辺が3.9mを測り、面積は21.3㎡である。

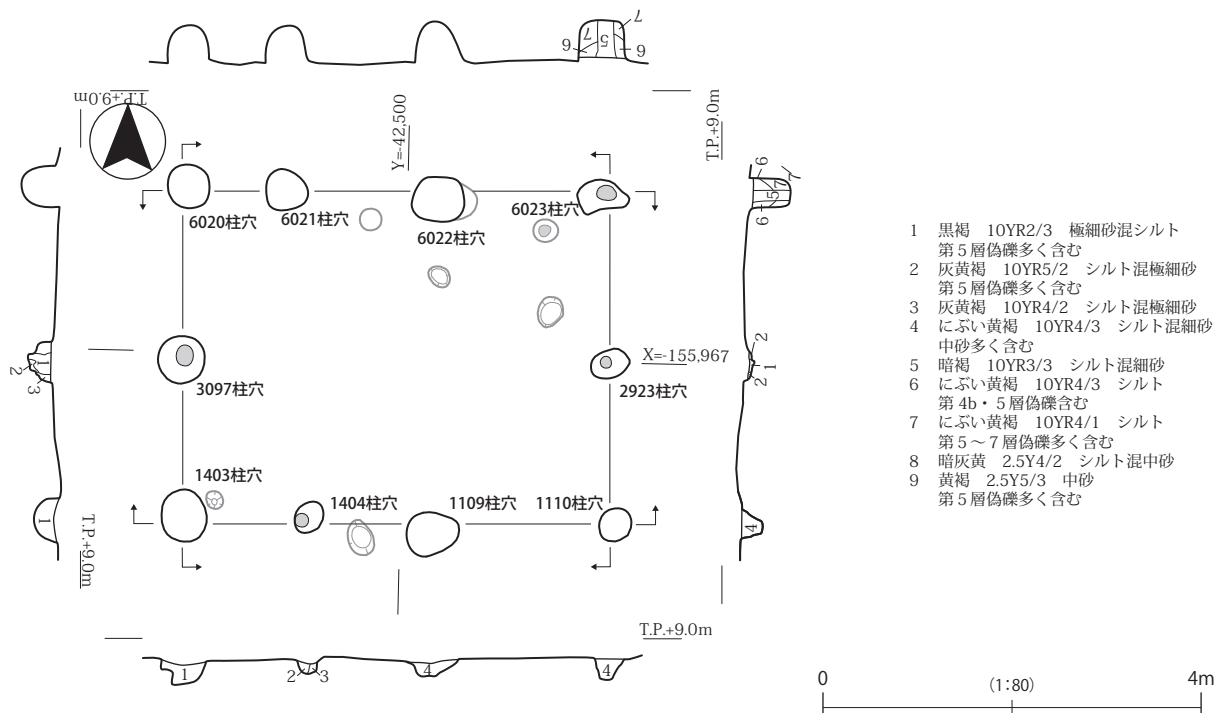


図339 5-1区 第3面 掘立柱建物57 平・断面図

主軸方向はN-3°-Wを示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.25~0.5m・深さ0.15~0.4mを測る。北辺の西から2基目を検出していない。

柱痕は、3086・2897・3088柱穴を除き残存し、その径は0.1~0.2mを測る。

柱間寸法は、北辺の西から1.75m・1.85m・1.85m、南辺の同2.0m・1.7m・1.75m、東辺の北から1.75m・2.15mを測る。

掘形の埋土は、第4b・5層の偽礫を含むシルトが混じる黒褐色の細砂から中砂ないしは灰黄褐色の細砂が主である。

掘立柱建物58の西側に当り、掘立柱建物60と重複する。

遺物は、3088柱穴を除き、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

2987柱穴からは、1414の須恵器杯H蓋がある。3006柱穴からは、1415の土師器椀と1416の土師器ミニチュア鉢がある。3067柱穴からは、1417の土師器椀がある。

〔掘立柱建物60〕(図306・310・311・342)

5-2区の西北部で検出された東西棟の建物である。

規模は2×4間で、北辺が8.75m、東西辺が約4.1mを測り、面積は35.9㎡である。

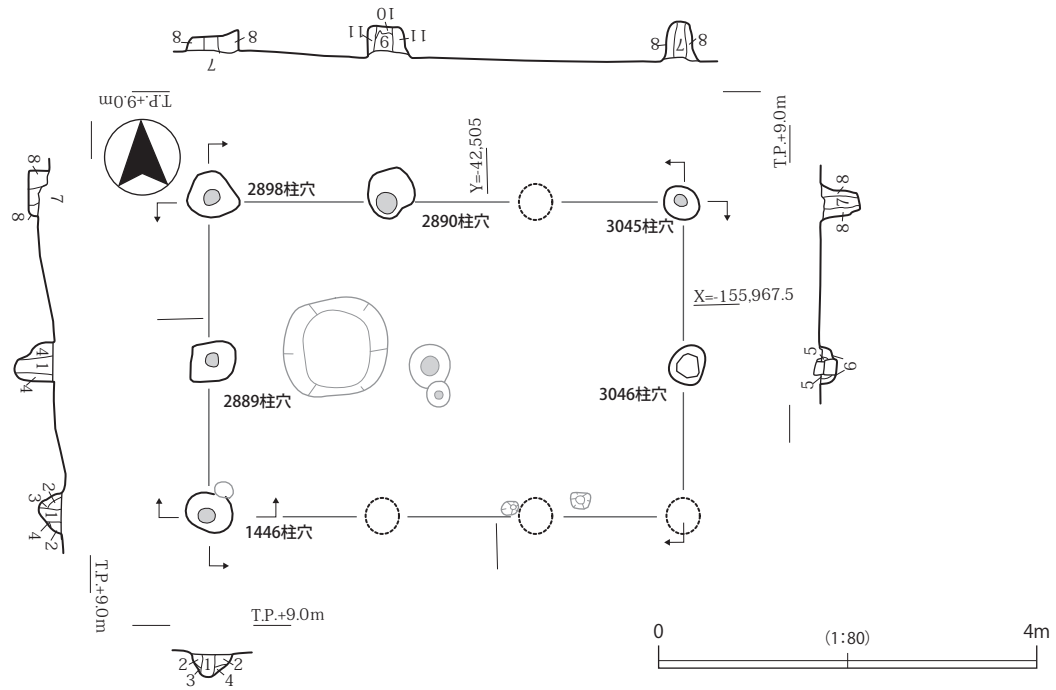
主軸方向は、座標北を示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.3~0.55m・深さ0.3~0.5mを測る。

柱痕は、6024・1028・3930柱穴を除き残存し、その径は0.1~0.15mを測る。

柱間寸法は、北辺の西から2間分3.85m・2.3m・2.55m、南辺の1783・1785柱穴間が2.0mを測り、東半部の中間寸法が若干広い。

東側2列目と3列目の中心に6026・6025柱穴が位置する。この2基の柱穴は、束柱として配されたと考えられる。



- | | | |
|--------------------------------------|------------------------------------|---|
| 1 黒褐 10YR3/2 シルト混細～中砂
第4b層偽礫含む | 5 褐灰 10YR4/1 シルト混中砂 | 9 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混中砂
第4b・5層小偽礫多く含む |
| 2 黒褐 7.5YR3/1 シルト混細～中砂
第4b層偽礫多く含む | 6 にぶい黄橙 10YR6/3 細砂 | 10 にぶい黄褐 10YR5/4 |
| 3 黒褐 2.5Y3/2 シルト混細～中砂
第4b層偽礫多く含む | 7 灰黄褐 10YR5/2 細砂混シルト | 11 にぶい黄橙 10YR6/4 シルト
第4b・5層偽礫多量に含む |
| 4 にぶい黄褐 10YR4/3 第5層偽礫含む | 8 にぶい黄橙 10YR7/3 シルト
第4b層偽礫多量に含む | |

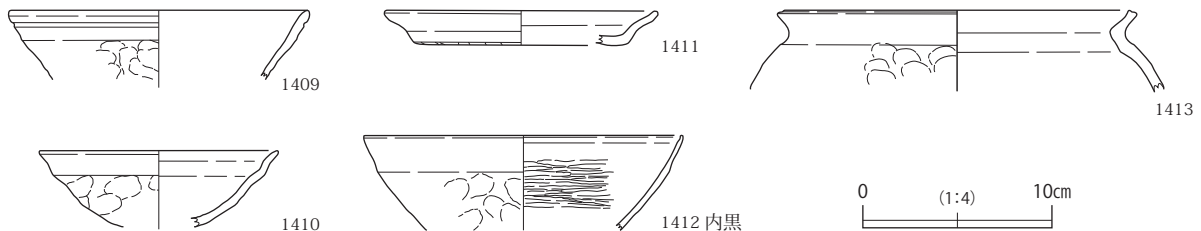


図340 5-1区 第3面 掘立柱建物58 平・断面図 2889柱穴 出土遺物

掘形の埋土は、第4b・5層の偽礫を含む黒褐色ないしはにぶい黄褐色のシルトが混じる、細砂から中砂が主である。

遺物は、1437・1783柱穴を除き、土師器・黒色土器などが出土している。

1825柱穴からは、1420の土師器皿・1419の甕と1418の黒色土器椀底部破片がある。この土器は、底部外面に窠記号を残す。1098・1788柱穴からは1421・1422の土師器杯がある。

〔掘立柱建物61〕(図306・310・311・343・344 図版78-2)

5-2区の中央部のやや北寄りで見出された南北棟の建物である。東側に廂が設けられている。

主屋の規模は2×7間で、南北辺が13.95m、東西辺が4.4mを測り、面積は61.4㎡である。廂部を入れた規模は3×7間で、南北辺が5.85m、東西辺が13.95mを測り、面積は81.6㎡である。

主軸方向はN-3°-Eを示す。

主屋の柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.5~0.9m・深さ0.2~0.6mを測る。

柱痕は、1039・1123・1369・1204・1205柱穴を除き残存し、その径は0.1~0.25mを測る。

柱間寸法は、南辺の西から2.1m・2.1m、西辺の1043・1049柱穴間が4.25m・1.85m・2.0m・1.8m・

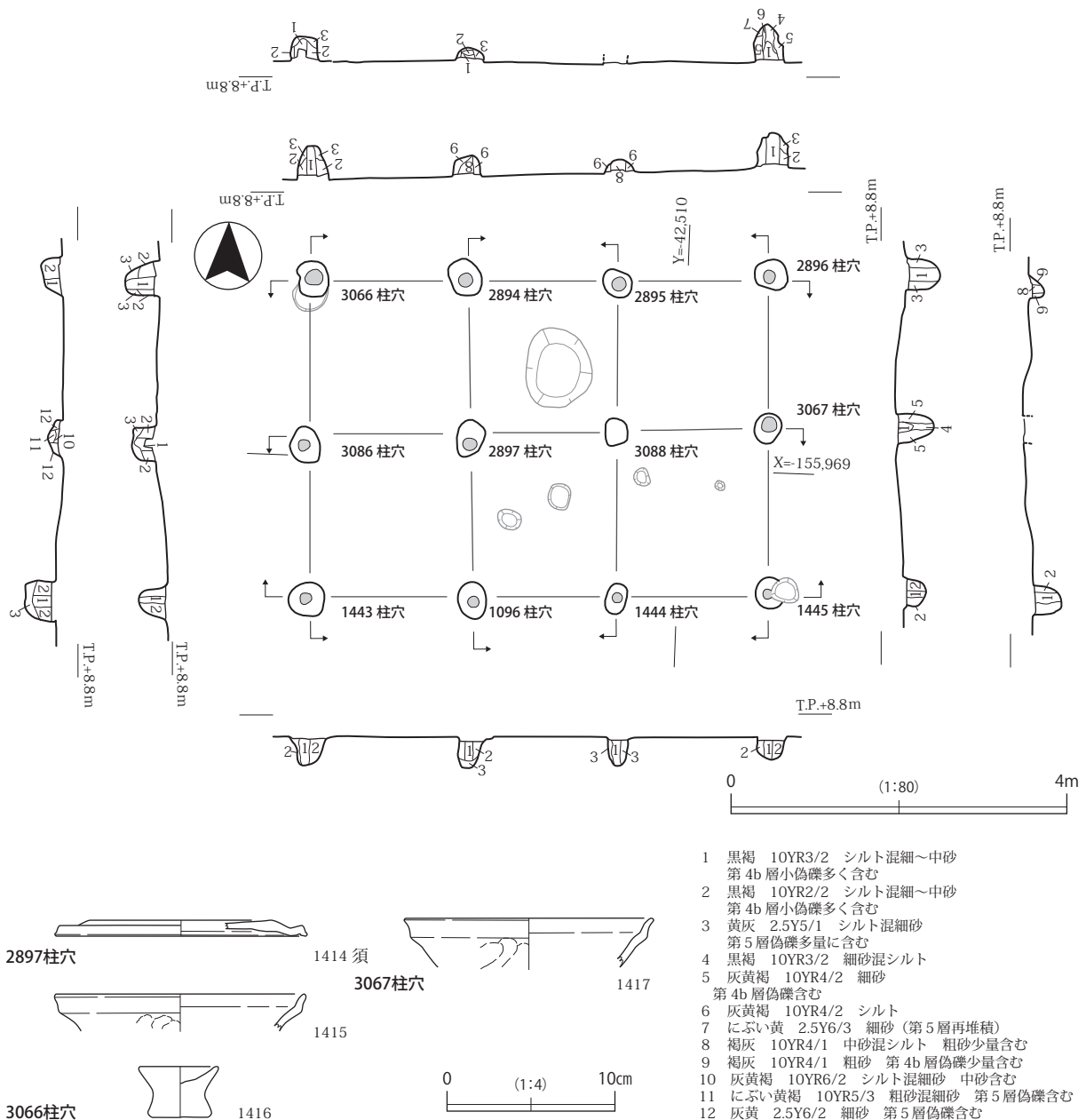


図341 5-1・2区 第3面 掘立柱建物59 平・断面図 出土遺物

1.9 m、東辺の1206・1200柱穴間が4.0m・1.85 m・1.75m・2.0 mを測る。

主屋の南側辺から、2間目と3間目の中心に1069・1372柱穴が検出されており、それらが中心柱穴と並ぶところから、東柱の柱穴と考えられる。

掘形の埋土は、第4b・5層の偽礫を含む、黒褐色ないしはにぶい黄褐色のシルトが混じる細砂や極細砂が主である。

廂部の柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径 0.3～0.7 m・深さ0.25～0.5 mを測る。

廂部の柱痕は、1202・1197・1222柱穴が残存し、その径は0.1～0.15mを測る。

主屋の柱穴と並びを同一にすることから、柱筋型の廂である。898柱穴のみ、やや西にずれる。主屋との距離は、1.6 mを測る。

掘立柱建物62・63と重複し、掘立柱建物60・64・65と隣接している。

遺物は、廂部の1222・1425柱穴以外の柱穴から、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

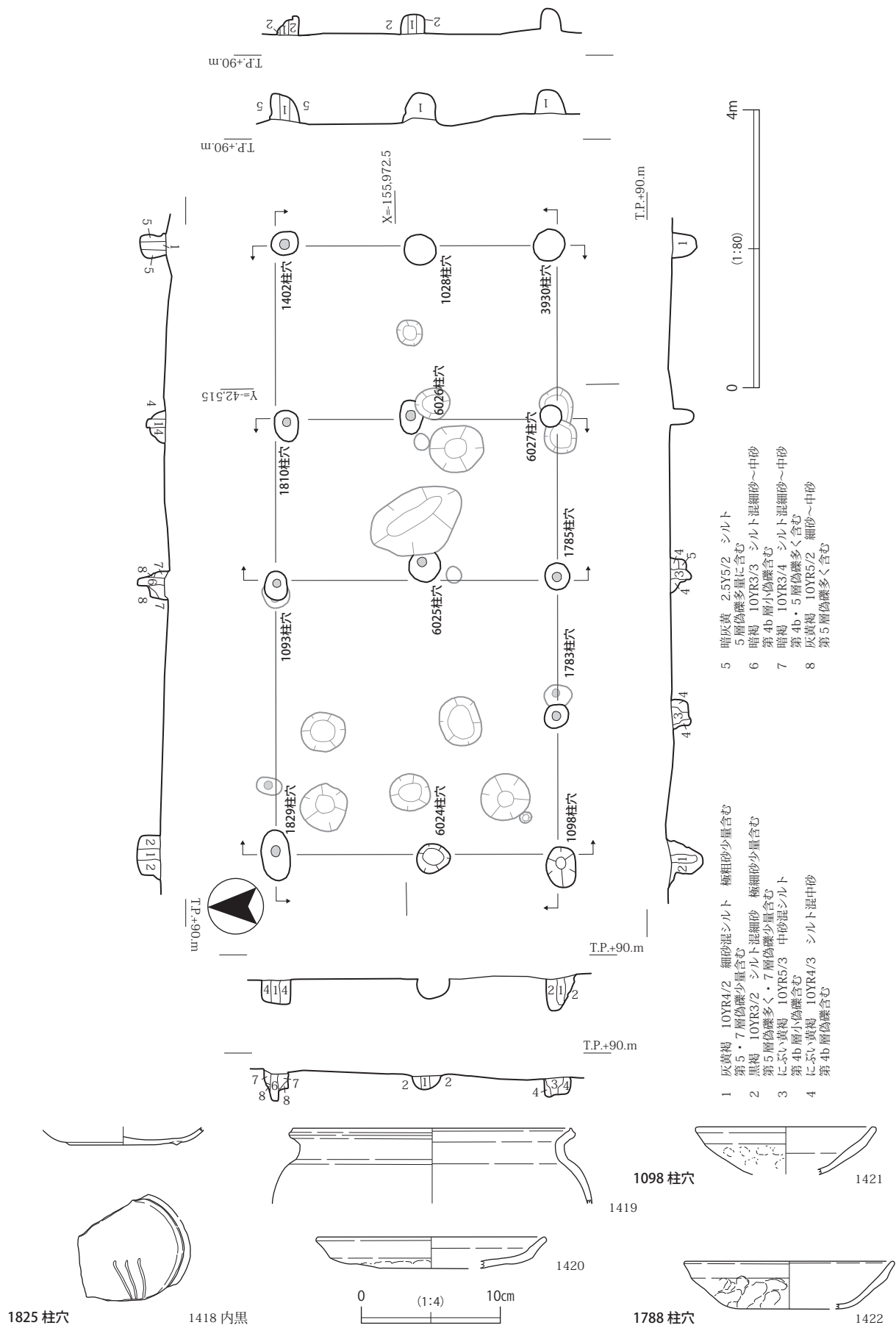


図342 5-2区 第3面 掘立柱建物60 平・断面図 出土遺物

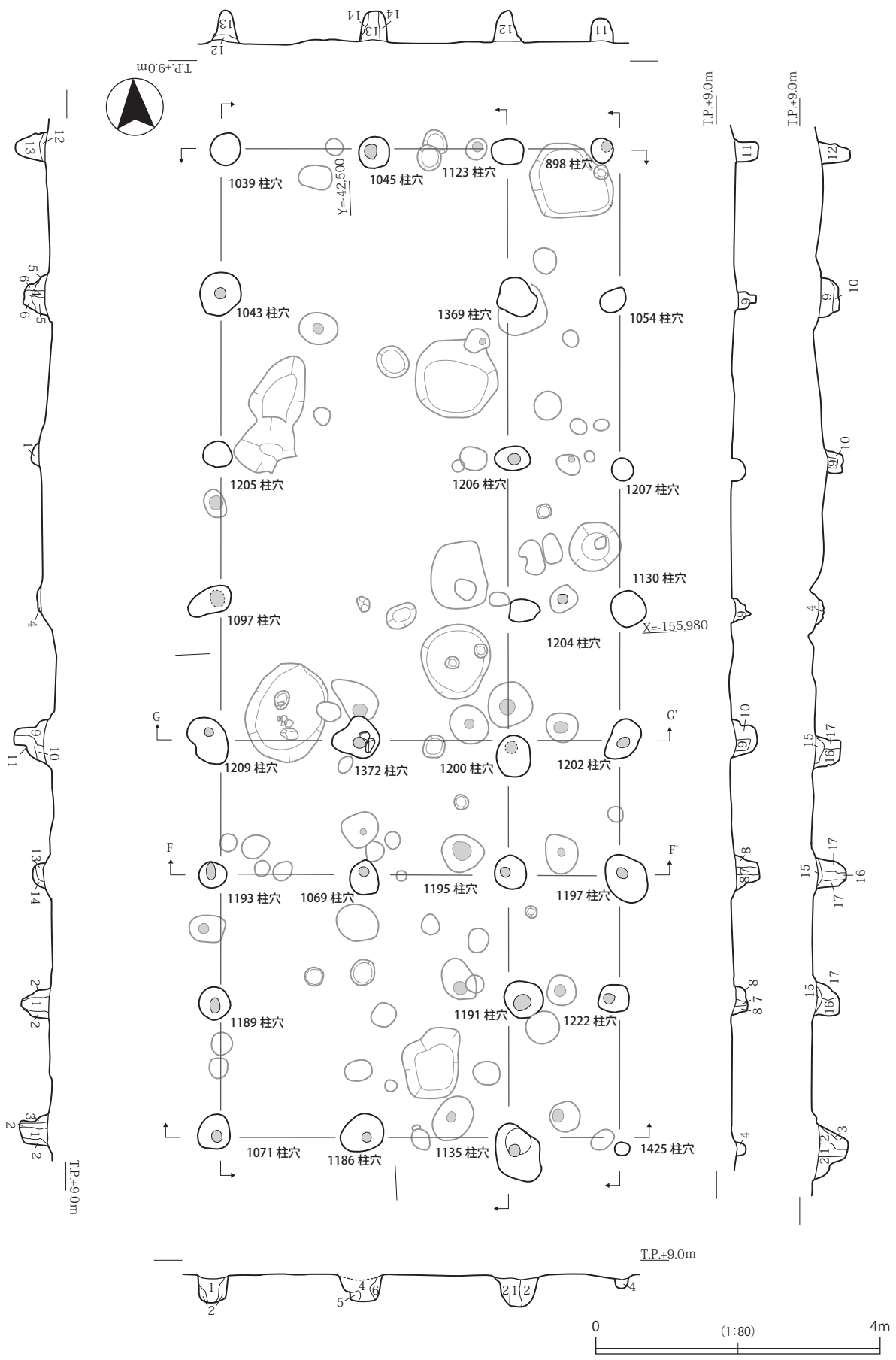


图343 5-2区 第3面 掘立柱建物61 平·断面图(1)

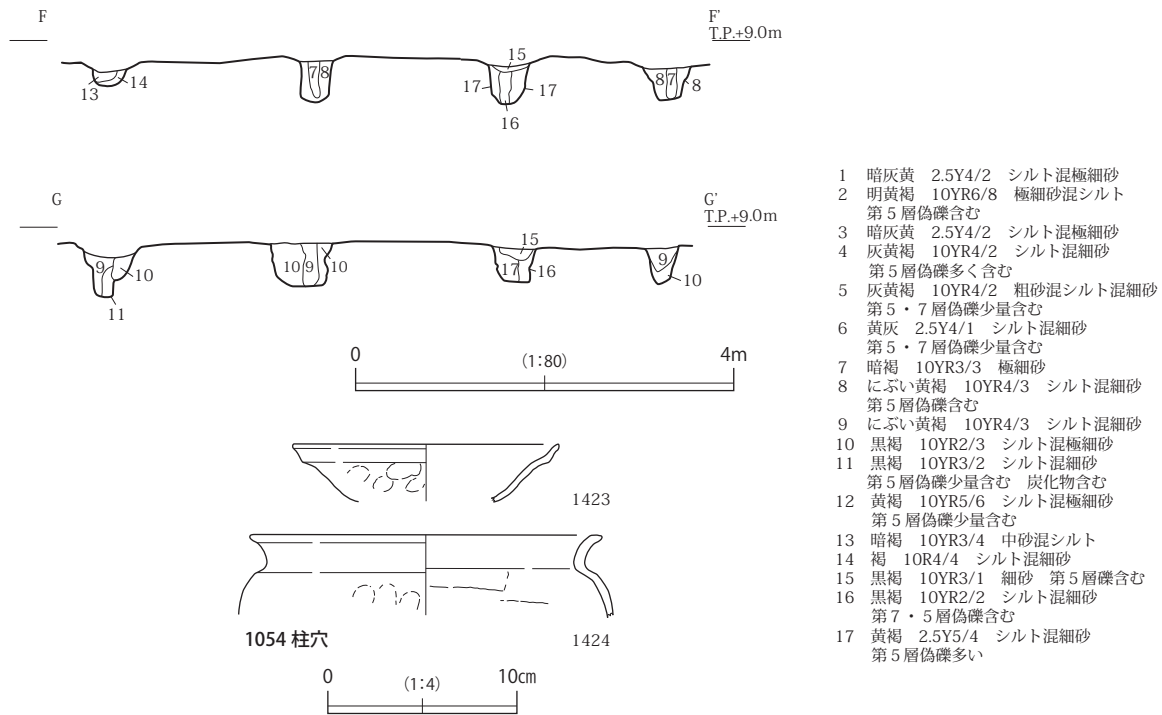


図344 5-2区 第3面 掘立柱建物61 断面図(2) 出土遺物

1054柱穴からは、土師器の1423の椀および1424の甕が出土した。いずれも小破片である。

〔掘立柱建物62〕(図306・310・311・345・346)

5-2区の中央部やや北寄りのところで検出された、南北棟の建物である。東側に廂を設けている。

主屋の規模は2×7間で、南北辺が4.35m、東西辺が12.7mを測り、面積は55.25㎡である。廂部を入れると、規模は3×7間で、南北辺が7.0m、東西辺が12.7mを測り、面積は88.9㎡である。

主軸方向はN-4°-Eを示す。

主屋の柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.4~0.75m・深さ0.3~0.5mを測る。

柱痕は、1370柱穴を除き残存し、その径は0.1~0.15mを測る。1370柱穴には、柱根が残存していた。

柱間寸法は、北辺の西から2.1m・2.25m、南辺の同2.05m・2.3m、西辺の北から1.55m・1.9m・1.9m・1.8m・1.85m・1.9m・2.05m、東辺が同3間分が5.45m・1.85m・1.85m・1.85m・1.75mを測る。

廂部の柱穴の平面形は、不正円形ないしは不正楕円形で、径0.2~0.55m・深さ0.3~0.5mを測る。

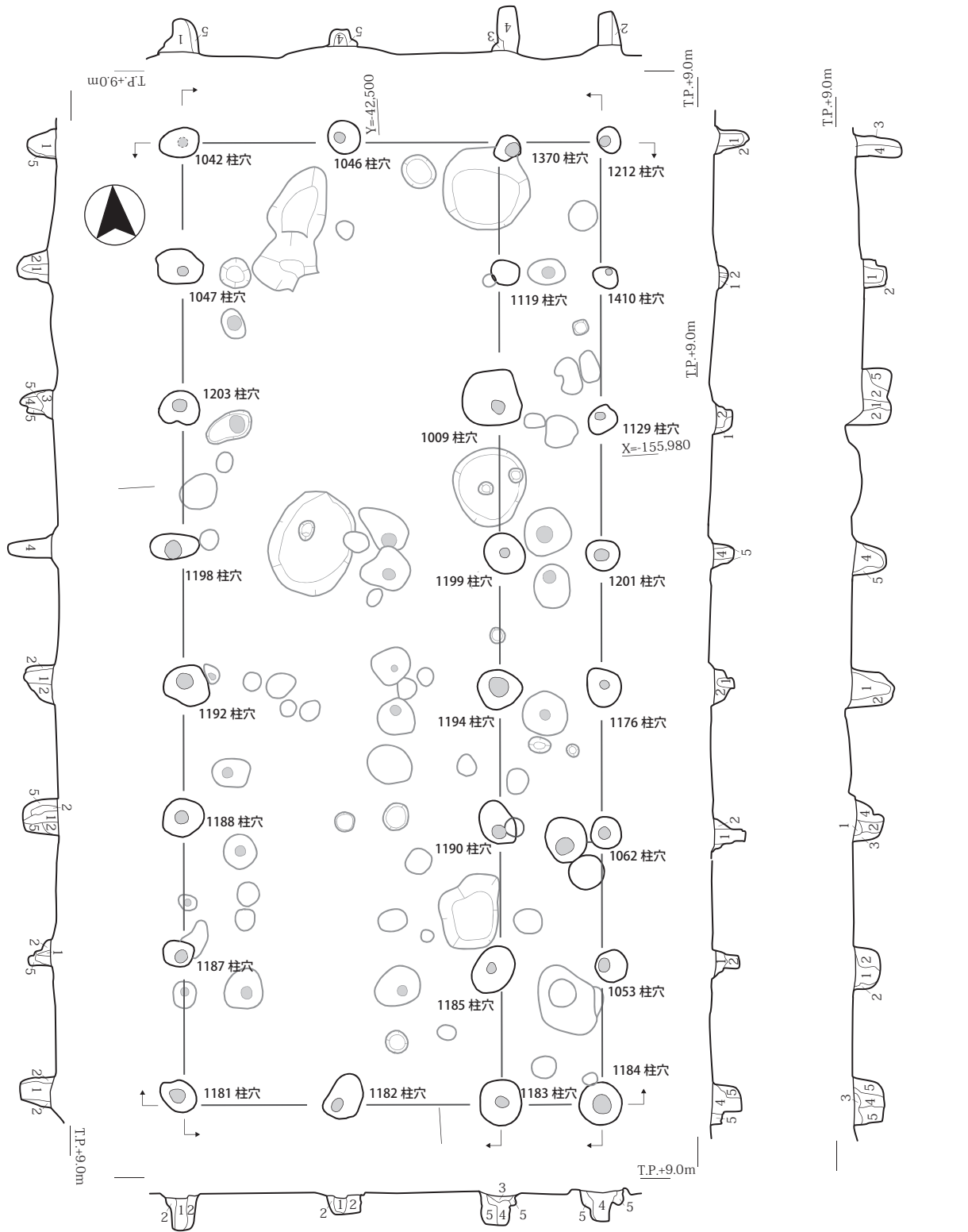
廂部の柱痕は、1212柱穴を除き残存しており、その径は0.1~0.15mを測る。主屋に比して、わずかに小規模のものがある。

掘形の埋土は、第4b・5層の偽礫を含む暗褐色ないしは灰黄褐色のシルトが混じる細砂から中砂が主である。

掘立柱建物61・63と重複し、掘立柱建物65・66と隣接する。

遺物は、1203・1192・1187・1188・1181柱穴以外から、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

1042・1021・1184柱穴からは1425・1426の土師器椀がある。1183柱穴からは1427の土師器皿・1428の椀と1429の内黒の黒色土器椀がある。1009柱穴からは1436の土師器皿と1437の椀がある。1053柱穴からは1430~1433の土師器椀と1434の内黒の黒色土器椀がある。1062柱穴からは、1438の内黒の黒色土器皿がある。1318・1046柱穴からは、内黒の黒色土器椀がある。1440は、口径15.4cm・器高4.8cmを測る。



- 1 褐灰 10YR4/1 シルト混極細砂 中砂多く含む
- 2 黒褐 10YR2/2 シルト混中砂、粗砂多く含む
- 3 暗オリーブ褐 2.5YR3/3 細砂
- 4 黒褐 10YR2/3 シルト混極細砂 第5層偽礫含む
- 5 暗褐 10YR3/3 シルト混極細砂 第5層偽礫含む

0 (1:80) 4m

図345 5-2区 第3面 掘立柱建物62 平・断面図

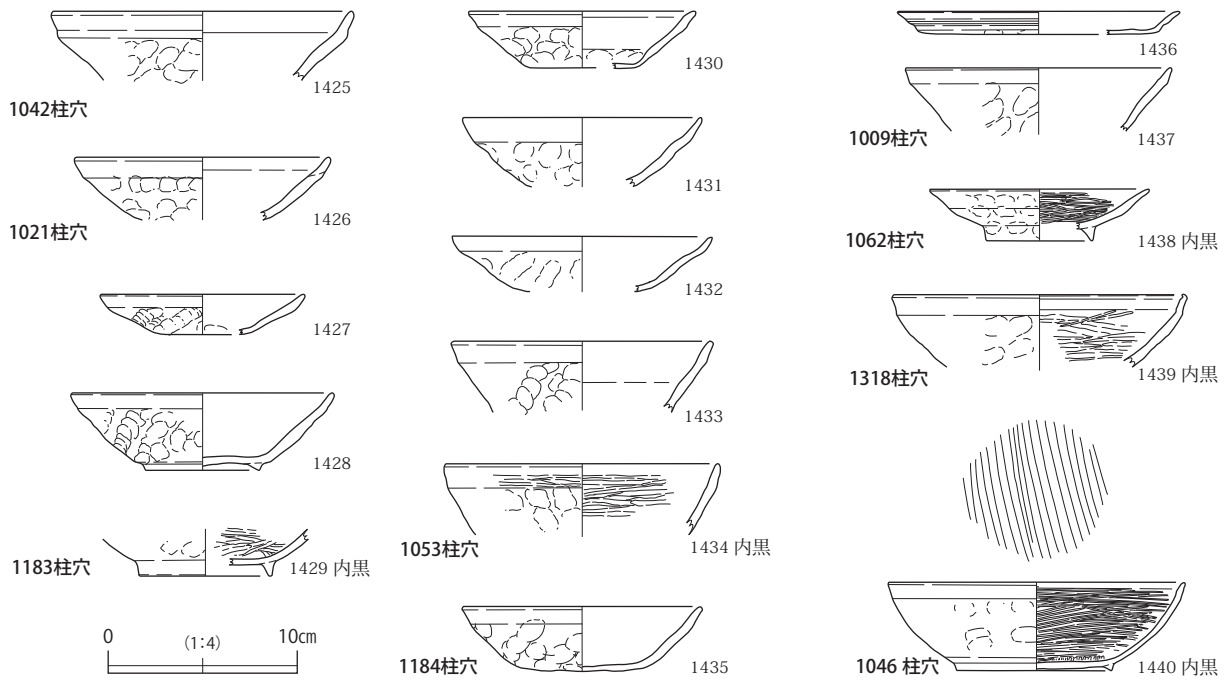


図346 5-2区 第3面 掘立柱建物62 出土遺物

〔掘立柱建物63〕(図306・310・311・347)

5-2区の中央部の南寄りのところで検出された南北棟の側柱建物である。

規模は2×3間で、南北辺が約4.2m、東西辺が約6.1mを測り、面積は25.6㎡である。

主軸方向はN-3°-Eを示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.25~0.65m・深さ0.15~0.5mを測る。

柱痕は、1073・797・1081柱穴に残存し、その径は0.1~0.2mを測る。

掘形の埋土は、第4b・5層の偽礫を含む黒褐色のシルトから中砂が主である。

掘立柱建物61・62・64・65と重複する。

遺物は、1384・1426・1427柱穴を除き、各柱穴から土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

797柱穴からは、1441の土師器碗と1442の両黒の黒色土器碗があり、他に、灰釉陶器壺の体部片が出土している。853柱穴からは1443の土師器碗と1444の甕がある。

〔掘立柱建物64〕(図306・310・311・348・349 図版78-3)

5-2区の北西部で検出された東西棟の建物である。南側に廂が設けられる。

主屋の規模は3×5間で、南北辺が9.7m、東西辺が6.75mを測り、面積は65.5㎡である。廂部を入れると、その規模は4×5間で、南北辺が9.7m、東西辺が8.5mを測り、面積は82.45㎡である。

主軸方向は、N-3°-Eを示す。

主屋の柱穴平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.35~0.65m・深さ0.25~0.5mを測る。

主屋の柱痕は、1099・1349・1355柱穴を除き残存し、その径は0.1~0.15mを測る。

主屋の柱間寸法は、北辺の西から2間分3.85m・2.0m・1.9m・2.0m、南辺の西から1.9m・2.0m・1.9m、西辺の北から1.9m・2.1m・2.65m、東辺が同2.0m・2.0mを測る。南側の1間が間隔がやや広く、東西方向に1106・1162・1101・1163・1023柱穴が配され、南側辺と平行して柱穴が検出されることから、東柱の柱列と考えられる。

廂の柱穴の規模は、径0.2~0.3m・深さ0.25~0.4mを測り、主屋に比して小さく浅い。主屋の柱穴と

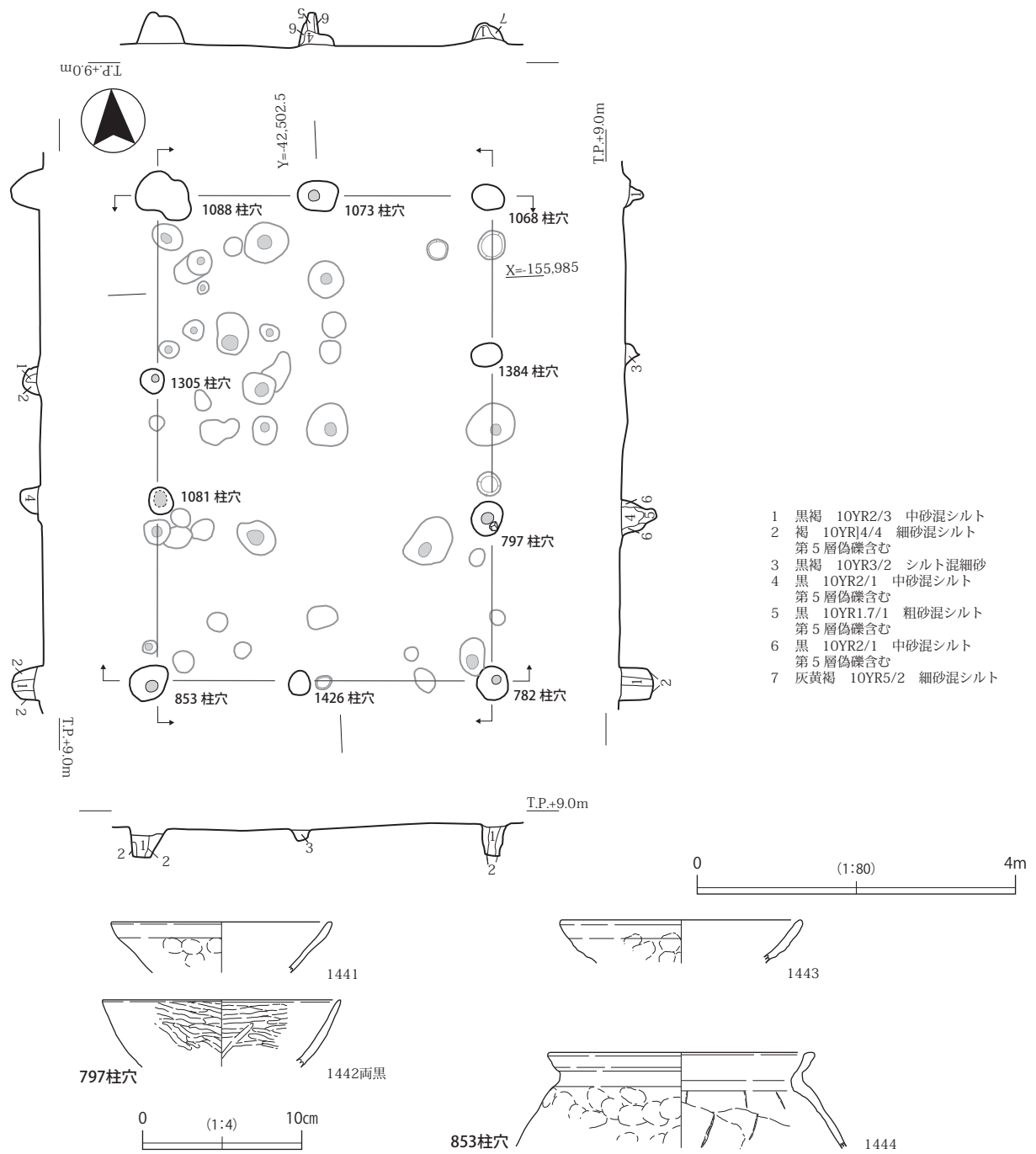


図347 5-2区 第3面 掘立柱建物63 平・断面図 出土遺物

並び、筋柱型である。

また、主屋の南側1間と廂の1間を足すと、北側2間分とほぼ同様の長さになる。

掘形の埋土は、第4b・5層の偽礫を含む黒褐色ないしは暗褐色のシルトが混じる中砂が主である。

西隣に掘立柱建物61・62、北側に掘立柱建物60が位置し、掘立柱建物63・65と重複している。

遺物は、主屋の柱穴では、1161・1170・1440柱穴を除き、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。廂の柱穴は、1174・1298・1313柱穴から、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

1023柱穴からは1445の土師器皿・1446・1448の土師器椀、1447の内黒の黒色土器椀・1449の同鉢がある。1168柱穴からは、1150の須恵器飯蛸壺がある。1101・1163柱穴からは、1451・1454の土師器椀がある。1454は完形で、口径13.0cm・器高4.0cmを測る。1393柱穴からは、1452の土師器椀と1453の内黒の

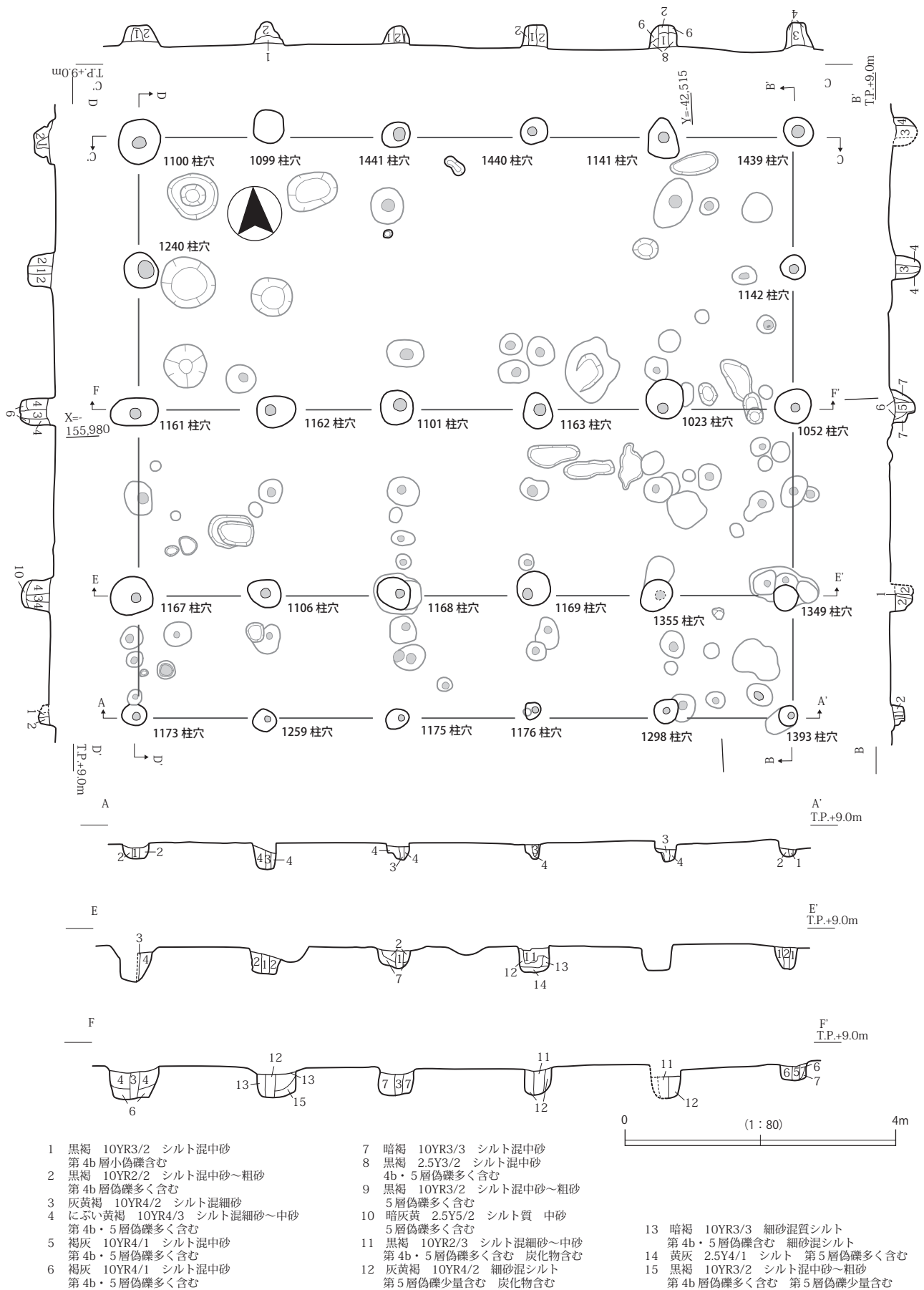


図348 5-2区 第3面 掘立柱建物64 平・断面図

黒色土器碗がある。1052柱穴からは、1455の緑釉陶器皿と1456の内黒の黒色土器碗がある。

〔掘立柱建物65〕(図306・310・311・350・351 図版78-3)

5-2区の西半部の北寄りのところで検出された東西棟の総柱建物である。

規模は2×5間で、南北辺が9.6m、東西辺が4.2mを測り、面積は40.3㎡である。

主軸方向は、N-3°-Eを示す。

柱穴の平面形は、不正円形ないしは不正楕円形で、径0.15~0.5m・深さ0.15~0.5mを測る。

柱痕は、1394柱穴を除き残存し、その径は0.1~0.15mを測る。

柱間寸法は、北辺の西から1.9m・2.0m・1.9m・1.85m・2.05m、南辺の同2.05m・2.15m・1.9m・1.75m・1.85m、西辺の北から2.1m・2.1mを測る。

掘形の埋土は、第4b・5層の偽礫を含む、灰黄褐色ないしは黒褐色のシルトが混じる中砂が主である。

掘立柱建物61・62の西隣に位置し、掘立柱建物63・64と重複する。

遺物は、1166・1351・1353・1182・1254柱穴を除き、土師器・須恵器などが出土している。

1104柱穴からは、1457の土師器碗と1458の須恵器横瓶がある。1179柱穴からは、1459の土師器壺がある。1363柱穴からは、1460の土師器碗がある。

〔掘立柱建物66〕(図306・310・311・352・353 図版78-1)

5-2区の南東部で検出された、東西棟の側柱建物である。

規模は2×7間で、南北側辺が15.3m、東西側辺が3.75mを測り、面積は57.4㎡である。

主軸方向はN-2°-Eを示す。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.15~0.8m・深さ0.25~0.6mを測る。

柱痕は、1236柱穴を除き残存し、その径は0.1~0.15mを測る。

柱間寸法は、北辺の西から2.0m・1.9m・2.05m・1.95m・1.75m・2.3m・1.9m、南辺の同1.9m・2.1m・1.9m・1.95m・2.0m・2.1m、西辺の北から2.0m・1.75mを測る。

掘形の埋土は、第4b・5層の偽礫を含む黒褐色の混じる中砂が混じるシルトや、黄灰色のシルトが混じる粗砂などが主である。

掘立柱建物63に切られる。

遺物は、総ての柱穴から出土しており、土師器・須恵器・黒色土器などがある。

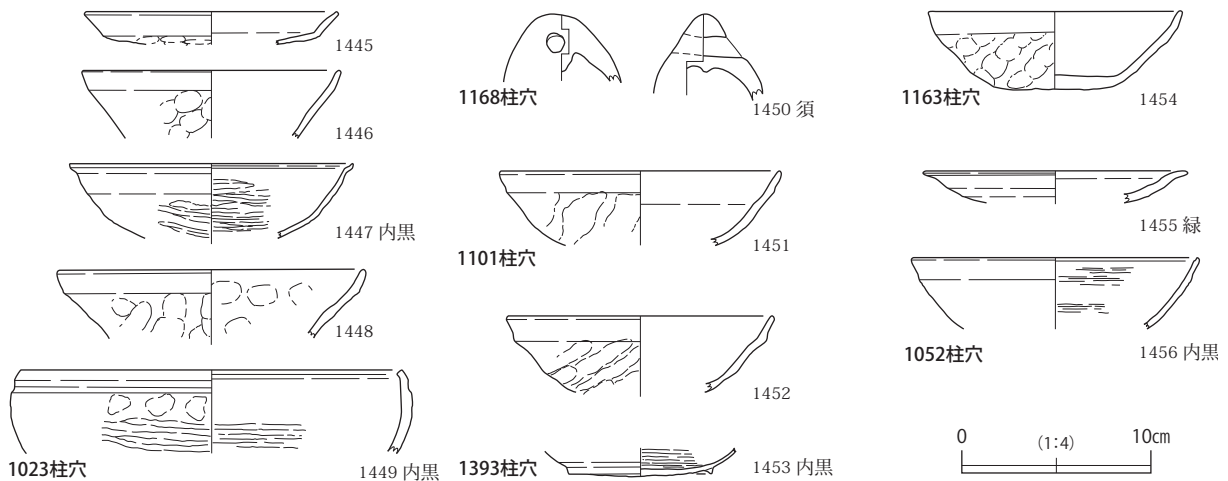
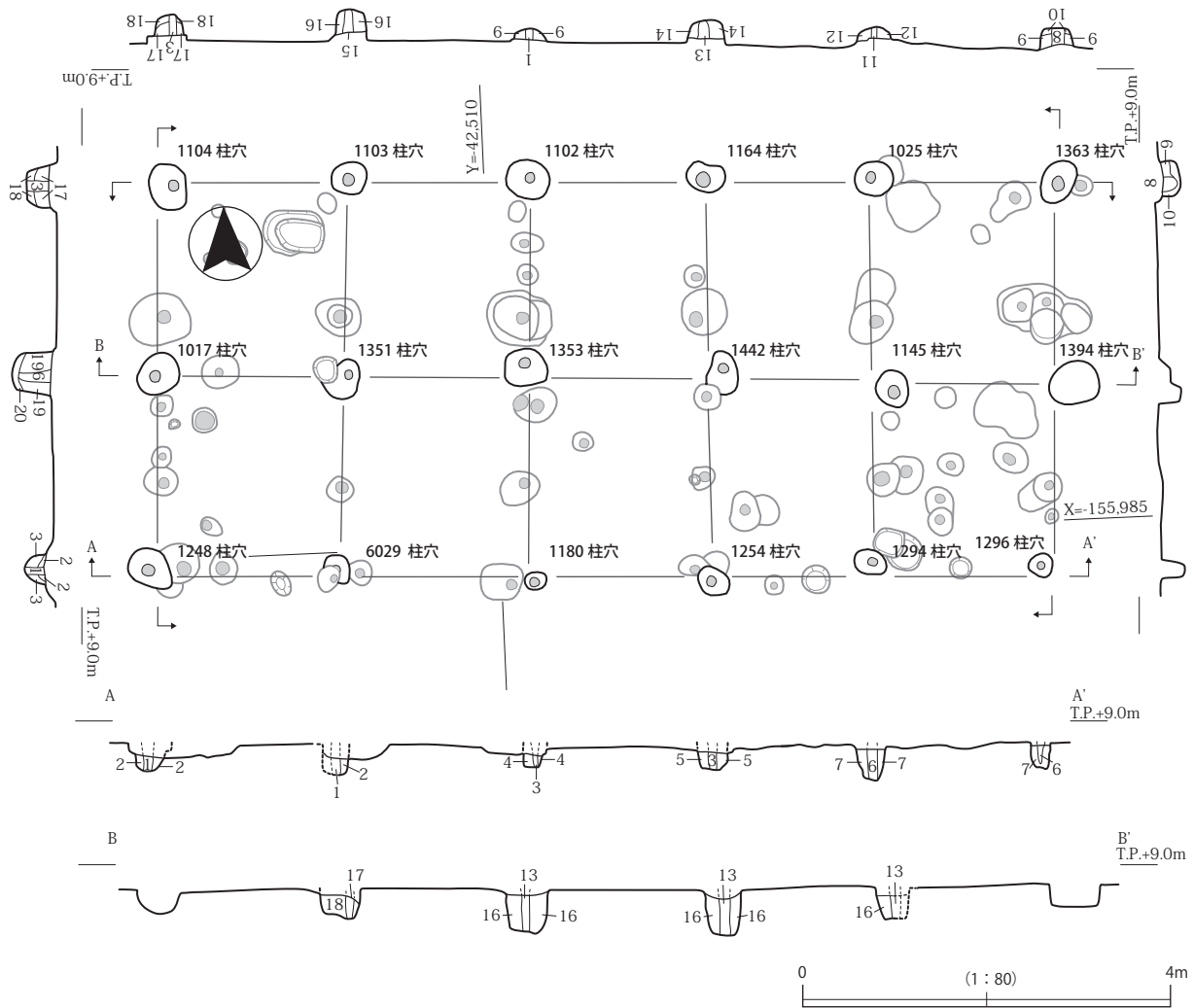


図349 5-2区 第3面 掘立柱建物64 出土遺物



- | | | |
|--|---|--|
| <p>1 にぶい黄褐 10Y5/3 シルト混中砂
第4b層小偽礫含む</p> <p>2 灰黄褐 10YR4/2 シルト混中砂
第4b・5層偽礫含む</p> <p>3 黒褐 10YR2/3 シルト混細砂～中砂
第4b・5層偽礫少量含む</p> <p>4 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト混細砂～中砂
炭化物含む 第4b・5層偽礫少量含む</p> <p>5 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混細砂～中砂
炭化物含む 4b・5層偽礫少量含む</p> <p>6 暗褐 10YR3/3 シルト混中砂
第4b・5層偽礫含む少量含む</p> <p>7 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混中砂
炭化物含む 第4b層偽礫多量・第5層偽礫少量含む</p> | <p>8 黒褐 2.5Y3/2 シルト混中砂
第4b層小偽礫含む</p> <p>9 灰黄褐 10YR4/2 シルト混細砂
第4b・5層偽礫多く含む</p> <p>10 黒褐 10YR3/2 シルト
第5層偽礫多く含む</p> <p>11 灰黄褐 10YR4/2 シルト混中砂</p> <p>12 褐灰 10YR4/1/1 シルト混中砂
第4b・5層偽礫多く含む</p> <p>13 灰黄褐 10YR4/2 シルト混中砂
第4b・5層小偽礫多く含む</p> <p>14 灰黄褐 10YR5/2 シルト混中砂
第4b・5層偽礫多く含む</p> | <p>15 暗褐 10YR3/3 シルト混中砂
炭化物含む</p> <p>16 黒褐 10YR3/2 シルト混中砂
第4b・5層偽礫多く含む</p> <p>17 黒褐 10YR3/2 シルト混中砂
炭化物・第4b層偽礫多く含む</p> <p>18 灰黄褐 10YR4/2 細砂～中砂
第5層偽礫多く含む</p> <p>19 黒褐 2.5Y3/2 シルト混中砂</p> <p>20 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混中砂
第5層偽礫多く含む</p> |
|--|---|--|

図350 5-2区 第3面 掘立柱建物65 平・断面図

780 柱穴からは1461の土師器皿がある。739 柱穴からは、1462の土師器杯と1463の須恵器鉢、1464・1465の内黒の黒色土器碗の底部がある。775 柱穴からは、1466・1467の土師器小皿・1469の碗と1468の両黒の黒色土器碗がある。772 柱穴からは、1470の内黒の黒色土器碗の底部がある。1235柱穴からは、1471の土師器小皿と1472の内黒の黒色土器碗がある。1237柱穴からは、1473・1474の内黒の黒色土器碗がある。

柱列は、5-4区と5-2区で、掘立柱建物群と共に7列検出されている。

〔柱列3〕(図306・307・311・354・355)

5-4区の西半部の北寄りで検出された南北方向の柱列で、掘立柱建物45・46を切っている。

主軸方向は、ほぼ座標北を示す。8基の柱穴から構成されており、長さ13.7mを測る。

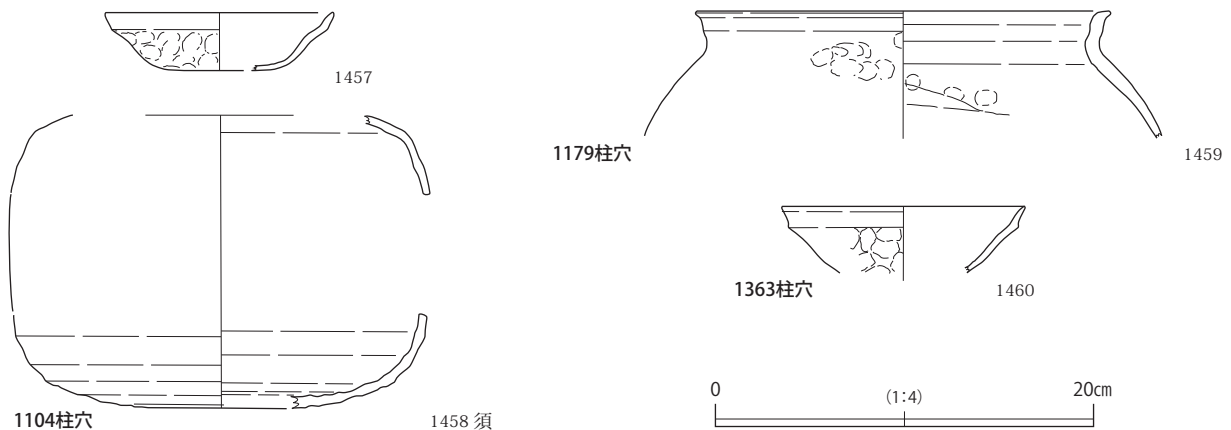


図351 5-2区 第3面 掘立柱建物65 出土遺物

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.25～0.55 m・深さ0.25～0.4 mを測る。埋土は、黒褐色のシルトや褐色の粘土が主である。柱間寸法は、2.2～2.5 mを測り、柱痕は2459柱穴を除き残存しており、その径は0.1～0.2 mを測る。

遺物は、2495柱穴を除き、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

84柱穴からは、1476の土師器甕と1475の須恵器壺がある。259柱穴からは、1477の土師器杯と1478の内黒の黒色土器碗がある。103柱穴からは、1479・1480の土師器碗と1481～1483の内黒の黒色土器碗がある。

〔柱列4〕(図306・307・311・354・355)

5-4区の西半部の北寄りで検出された南北方向の柱列で、柱列3の西側1.1 mに位置する。掘立柱建物45・46を切り、掘立柱建物47と重複する。

主軸方向は、ほぼ座標北を示す。7基の柱穴から構成されており、長さ12.2 mを測る。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.4～0.5 m・深さ0.4～0.55 mを測る。柱間寸法は約2.0 mを測る。埋土は、黒褐色の細砂が混じるシルトが主である。柱痕は、総ての柱穴に残存しており、その径は0.15～0.2 mである。

遺物は、総ての柱穴から出土しており、土師器・須恵器・黒色土器などがある。

87柱穴からは、1484の土師器皿と1485の碗がある。99柱穴からは、1486の土師器皿と1487の杯、1488の碗があり、1489の内黒の黒色土器碗がある。108柱穴からは、1491の土師器碗と1493の鉢の高台部を残すものと1490の大型の内黒の黒色土器碗がある。

〔柱列5〕(図306・307・311・356)

5-4区の南西部で検出された柱列で、南北方向に5基の柱穴が並ぶ。長さ7.6 mを測る。主軸方向は、N-1°-Eを示す。柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.35～0.7 m・深さ0.15～0.5 mを測る。柱間寸法は、1.45～2.3 mと間隔が均一でない。埋土は、灰黄褐色や黄褐色のシルトから微砂が主である。

遺物は、総ての柱穴から出土していない。

〔柱列6〕(図306・310・311・356)

5-2区の東端で検出された南北方向の柱列で、掘立柱建物53の西側に隣接する。

主軸方向はN-2°-Eを示す。9基の柱穴から構成されており、長さ15.45 mを測る。柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.25～0.8 m・深さ0.25～0.3 mを測る。柱間寸法は、約2.0 mで

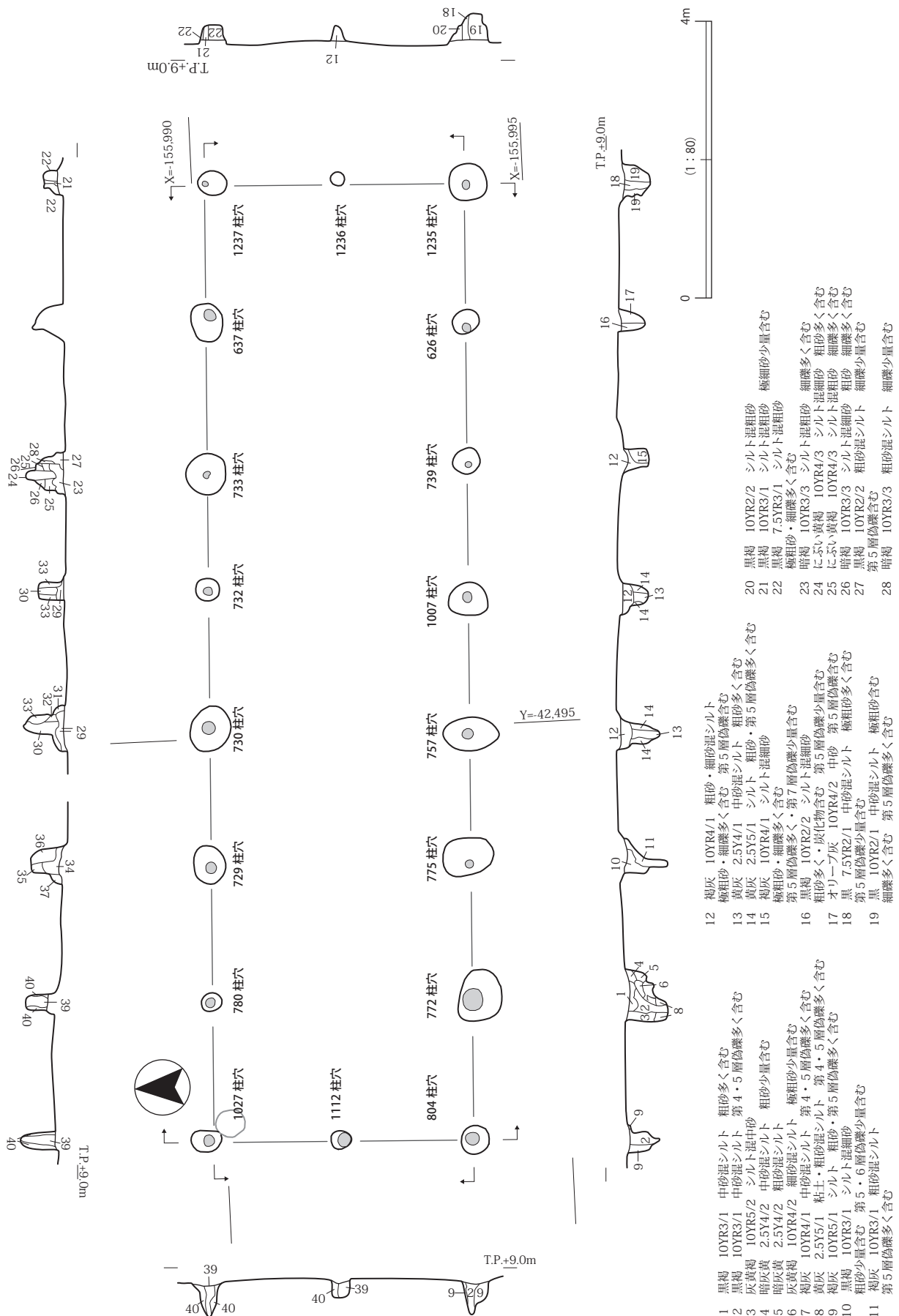


図352 5-2区 第3面 掘立柱建物66 平・断面図

- | | |
|---------------------------------|--------------------------------------|
| 29 黒褐 10YR2/2 シルト混中砂 第5層偽礫少量含む | 33 灰黄褐 10YR4/2 細砂シルト 第5・7層偽礫多く含む |
| 30 黒褐 10YR2/3 シルト混中砂 粗砂・炭化物少量含む | 34 黒 10YR2/1 細砂 第5層偽礫少量含む |
| 33 灰黄褐 10YR5/2 シルト混中砂 粗砂少量含む | 35 黒 10YR2/1 細砂混シルト 粗砂少量含む 第5層偽礫多く含む |
| 第5層偽礫多く含む 第7層偽礫少量含む | 36 褐灰 5YR4/1 細砂混シルト 第5層偽礫多く含む |
| 29 黒褐 10YR3/2 中砂 極粗砂・第5層偽礫多く含む | 37 暗褐 10YR3/3 細砂 粗砂少量含む 第5層偽礫多く含む |
| 30 黒褐 10YR2/2 シルト混中砂 第5層偽礫少量含む | 39 黒褐 10YR2/2 シルト 第5層偽礫多く含む |
| 31 黒褐 10YR3/2 中砂 極粗砂多く含む | 40 黒褐 10YR2/3 シルト 第5層偽礫少量含む |
| 32 暗褐 10YR3/3 シルト混細砂 第5層偽礫多く含む | |

ある。柱痕は総ての柱穴に残存しており、その径は 0.1~0.2 mを測る。埋土は、灰オリーブ色のシルトが混じる細砂や極細砂が主である。

遺物は、2644・2648・2657柱穴を除き、土師器の小破片が出土している。

2638柱穴からは、1494の土師器の小皿が、2620柱穴からは、1495の土師器の皿が出土している。

〔柱列7〕(図306・310・311・357)

5-4区の北西端部で検出された東西方向の柱列で、柱列3・4と直交し、掘立柱建物44を切る。

主軸方向はN-1°-Wを示す。7基の柱穴から構成されており、長さ12.8mを測る。柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.25~0.5m・深さ0.1~0.25mを測る。柱間寸法は0.2~2.3mで、柱痕は2090柱穴を除き残存していた。埋土は、にぶい黄褐色のシルトが混じる細砂が主である。

遺物は、2340・2385柱穴を除き、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

〔柱列8〕(図306・310・311・357・358)

5-2区の西端で検出された南北方向の柱列で大畦畔の西側に隣接する。

主軸方向はN-2°-Wを示す。8基の柱穴から構成されており、長さ14.1mを測る。柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径0.4~0.55m・深さ0.3~0.55mを測る。柱間寸法は1.6~2.0mで、柱痕は954柱穴を除き残存していた。その径は0.15~0.2mを測る。埋土は、黒褐色のシルトが混じる中砂から粗砂が主である。

遺物は、954柱穴を除き、土師器・黒色土器などが出土している。

923柱穴からは1496の白色土器碗の小破片が、931柱穴からは1497の土師器碗が出土している。

〔柱列9〕(図306・310・311・357・358 図版79-2)

5-2区の西端で検出された南北方向の柱列で柱列8に平行する。掘立柱建物かとも思われるが、1辺のみの検出のため、ここでは柱列としておく。主軸方向はN-2°Wを示す。8基の柱穴から構成さ

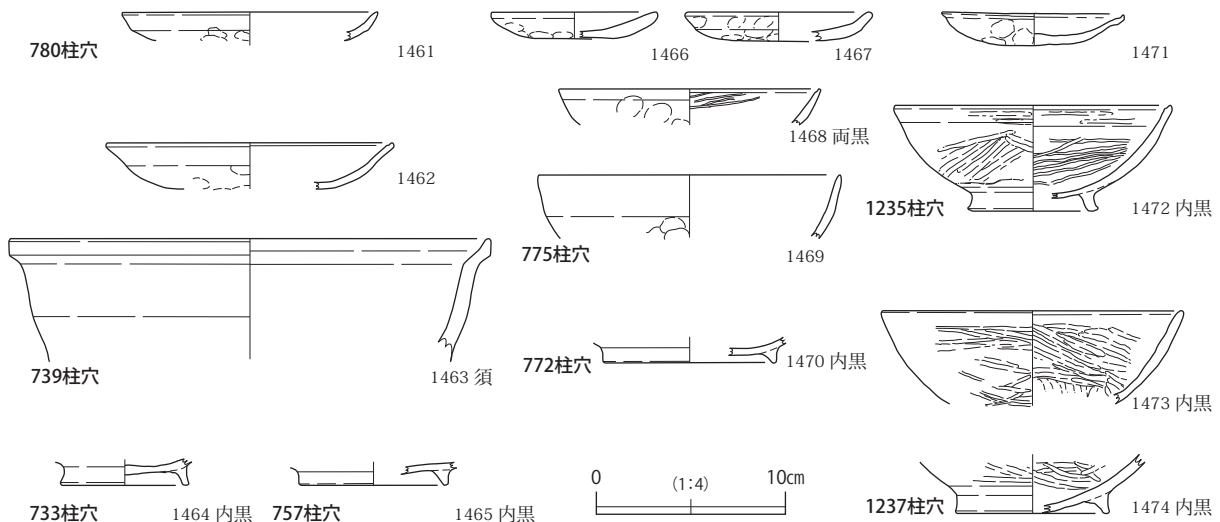


図353 5-2区 第3面 掘立柱建物66 出土遺物

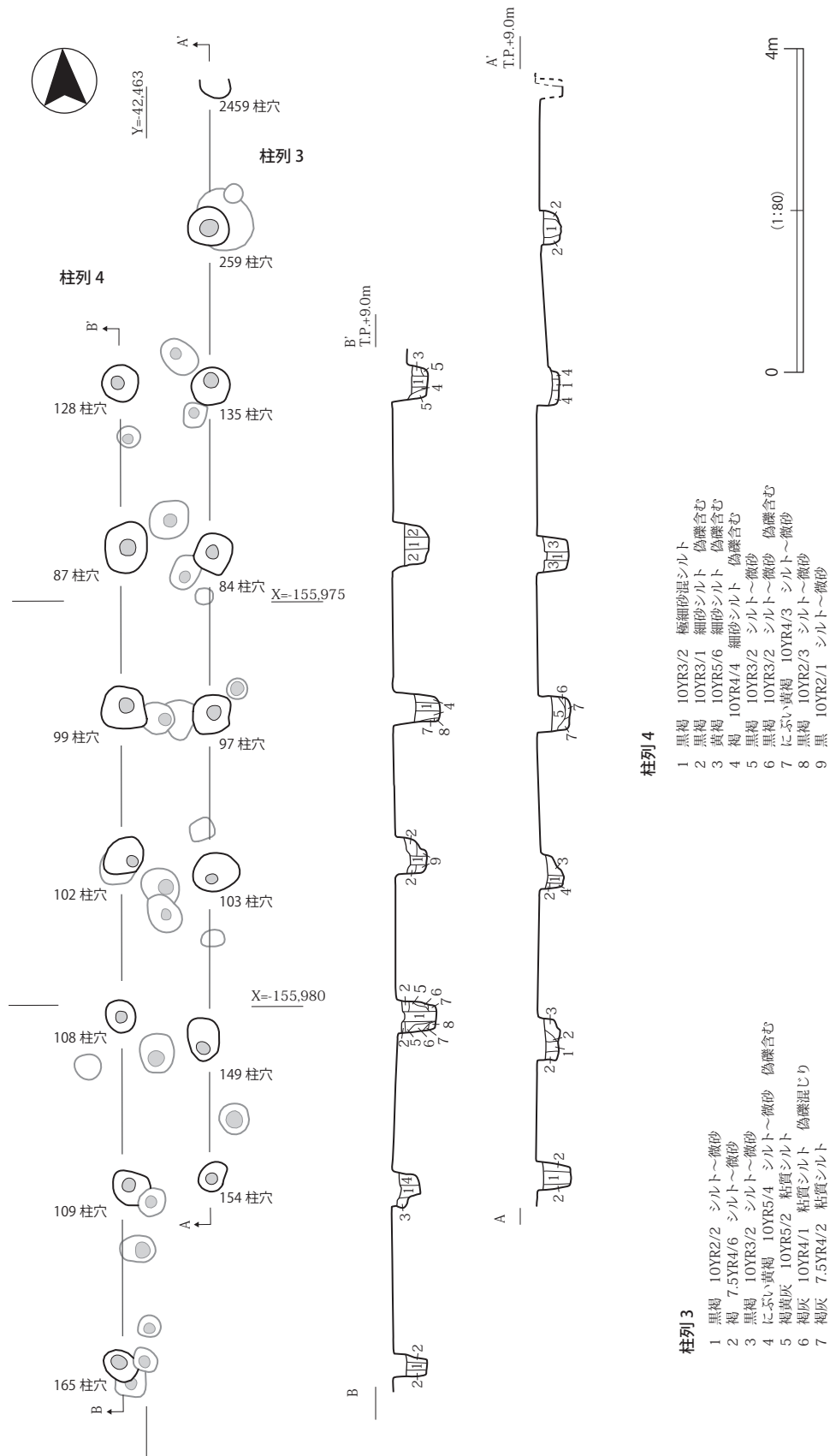


図354 5-4区 第3面 柱列3・4 平・断面図

れており、長さ 9.05 m を測る。

柱穴の平面形は不正円形ないしは不正楕円形で、径 0.45～0.65 m・深さ 0.35～0.55 m を測る。柱間寸法は 1.75～1.85 m で、総ての柱穴に柱痕が残存していた。埋土は、褐灰色および灰黄褐色のシルトが混じる中砂から粗砂が主である。

遺物は、941 柱穴を除く柱穴から土師器・黒色土器などが出土している。

928・849・959 柱穴からは、1498～1501 の土師器碗が出土している。

溝は、集落を区画する溝と南北および東西方向に検出される耕作溝などが検出されている。

〔117 溝〕（図 306・307・311・359～368 図版 77～73・117～121）

5-3・4 区中央部のやや西寄り、南北方向に検出された溝で、両端は調査区外へ延びる。検出長 56.1 m・幅 0.15～2.1 m・深さ 0.15～0.5 m を測る。調査区の南端部で、細く、浅くなる。

埋土は、部分的に差異があり、1

～7 層に細分されるが、大きくは 3 層に区分される。上層には、シルトが混じる褐色の中砂が堆積しており、中層には褐灰色のシルトで、下層には偽礫を含む灰黄褐色のシルトが主に堆積している。

北側で、1341 溝を切り、91・92・156・223 溝などと並行している。

遺物は、当遺跡で、最も多量に出土しており、コンテナにして約 50 杯ある。主に 3 層に細分されて、取り上げられており、上層からの出土が最も多く、下層からは、少量の出土である。

上層から出土した遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器などがある。

土師器には、皿・杯・椀・鉢・甕・羽釜などがある。

小皿には、1502～1505・1507・1543・1564 のように、口縁部がわずかに外反するもの、1506・1513～1542・1545～1563・1565～1573 のての字口縁をもつものと、1582～1607・1608・1609・1611 の浅い椀形のものがある。前二者は、口径 10.2～12.0 cm・器高 1.2～1.8 cm を測る。後者は、口径 9.2～10.0 cm・器高 2.0～2.5 cm を測る。いずれのものも、内面にナデ、底部外面に指押さえを残す。前二者は、胎土が白色系のものであり、後者は淡茶褐色をするものである。

皿には、1545～1578 があり、いずれも、ての字口縁のものである。口径 13.8～14.4 cm・器高 2.2～2.6

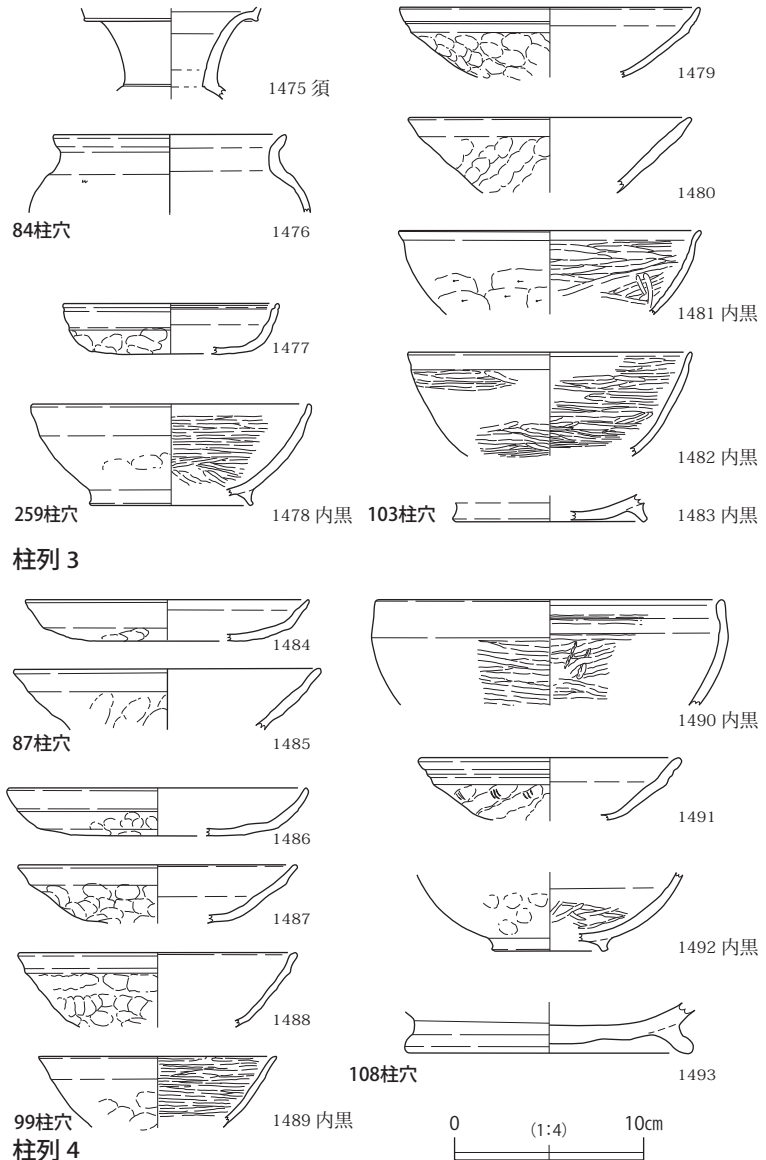


図 355 5-4 区 第 3 面 柱列 3・4 出土遺物

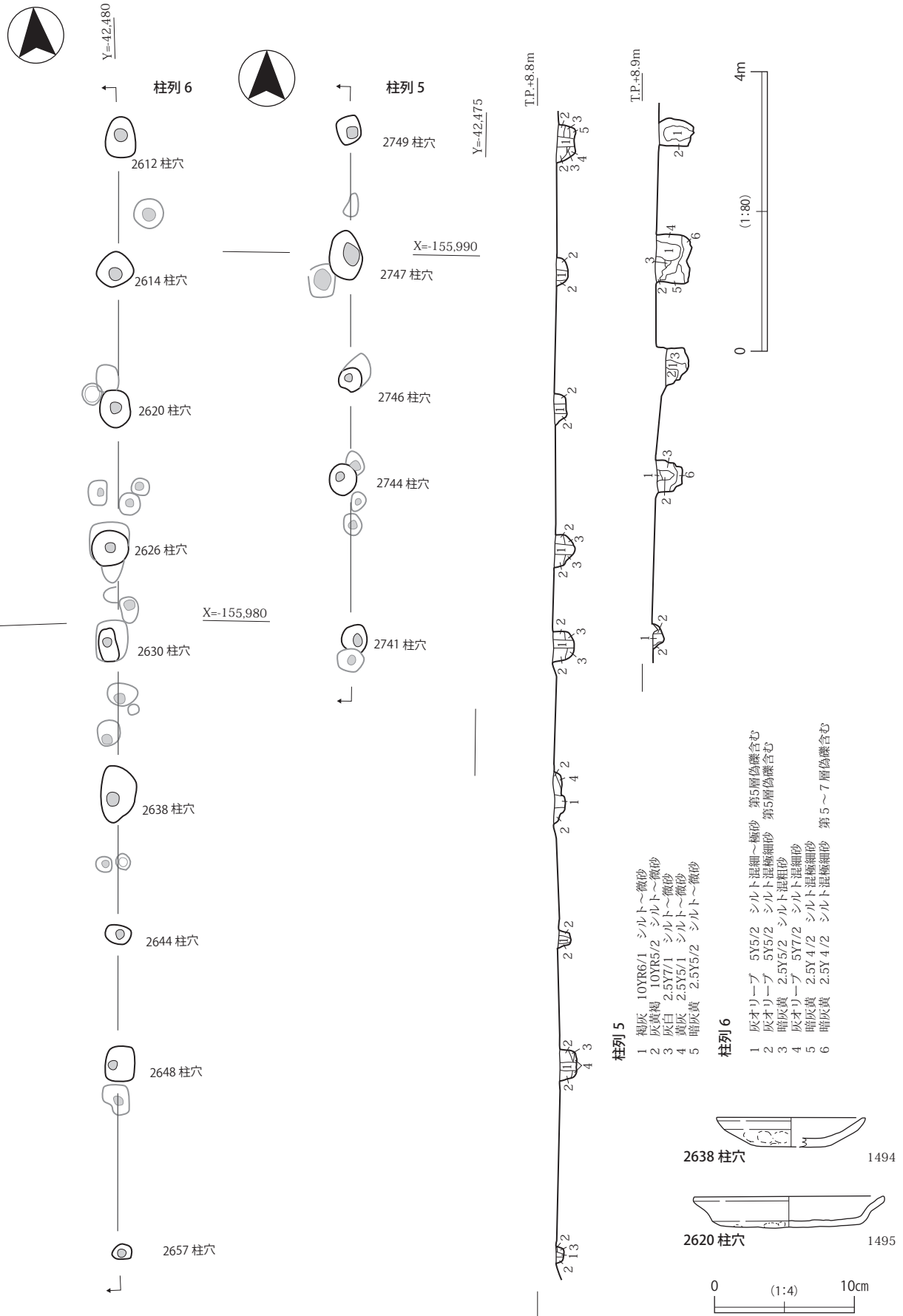
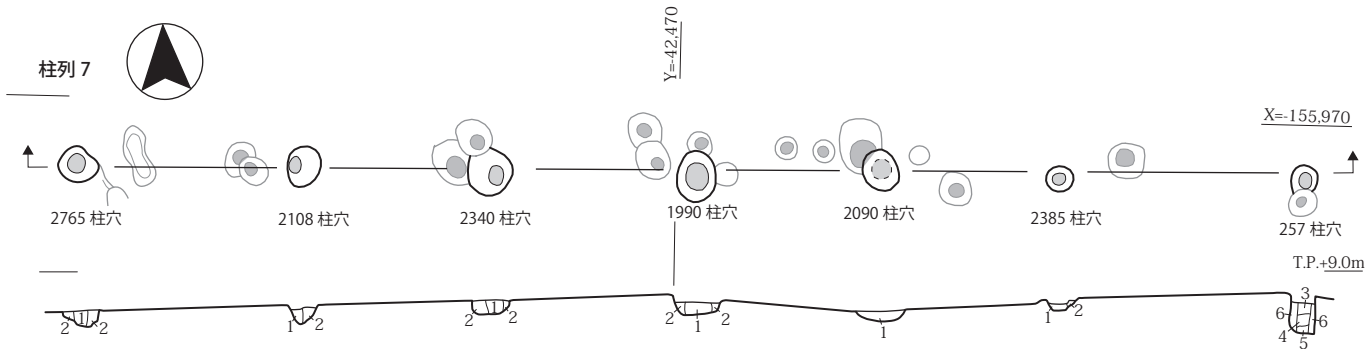
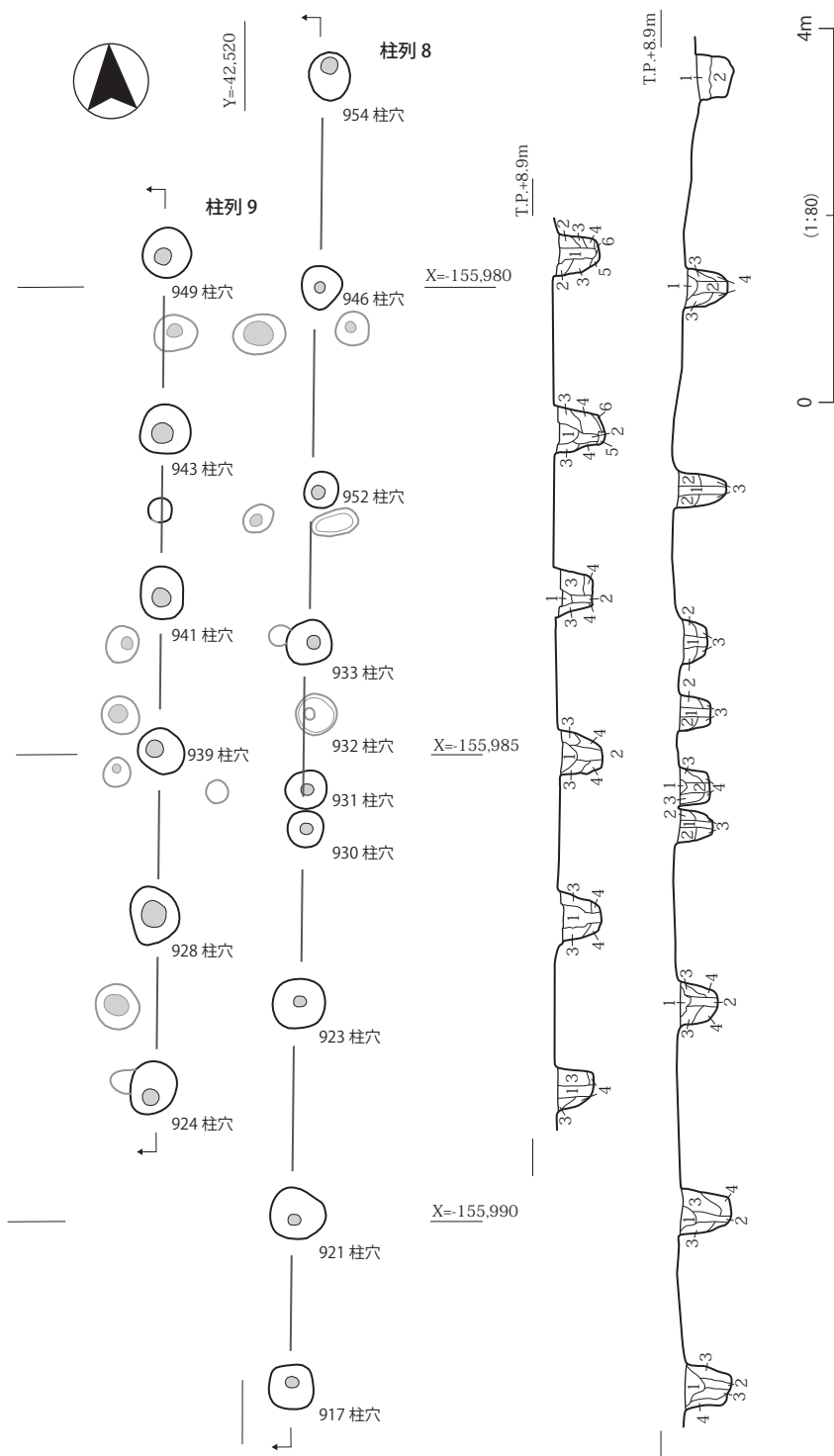


図356 5-2・4区 第3面 柱列5・6 平・断面図 出土遺物



柱列 7

- | | | | | |
|---|-------|----------|------------|------------|
| 1 | にぶい黄褐 | 10YR4/3 | シルト混細砂 | 粗砂～極粗砂少量含む |
| 2 | にぶい黄褐 | 10YR5/3 | シルト混細砂～中砂 | 粗砂～極粗砂多く含む |
| 3 | 黄褐 | 10YR5/6 | シルト～微砂 | |
| 4 | 黒褐 | 10YR3/2 | 細砂～中砂砂混シルト | |
| 5 | 黒褐 | 7.5YR3/1 | 粘土～シルト | |
| 6 | 褐灰 | 10YR4/1 | シルト～微砂シルト | |



柱列 9

- | | | | | |
|---|----|----------|--------|------------|
| 1 | 黒褐 | 2.5YR3/2 | シルト混中砂 | 第4b層小偽礫含む |
| 2 | 黒褐 | 2.5YR3/2 | シルト混中砂 | 第4b層偽礫多く含む |
| 3 | 暗赤 | 10YR3/3 | シルト混粗砂 | 第4b層偽礫多く含む |
| 4 | 暗赤 | 10YR2/2 | シルト | |
| 5 | 暗赤 | 10YR3/3 | シルト混中砂 | |
| 6 | 暗赤 | 10YR3/3 | シルト混粗砂 | |

柱列 8

- | | | | | |
|---|-----|---------|----------|-------------|
| 1 | 黄灰 | 2.5Y4/1 | シルト混中～粗砂 | 炭化物含む |
| 2 | 粗灰 | 10YR4/1 | シルト混中砂 | 第5層偽礫含む |
| 3 | 灰黄褐 | 10YR4/2 | シルト混中～粗砂 | 第4・5層偽礫多く含む |
| 4 | 粗灰 | 10YR5/1 | シルト混中～粗砂 | 第4・5層偽礫多く含む |

図357 5-2・4区 第3面 柱列7～9 平・断面図

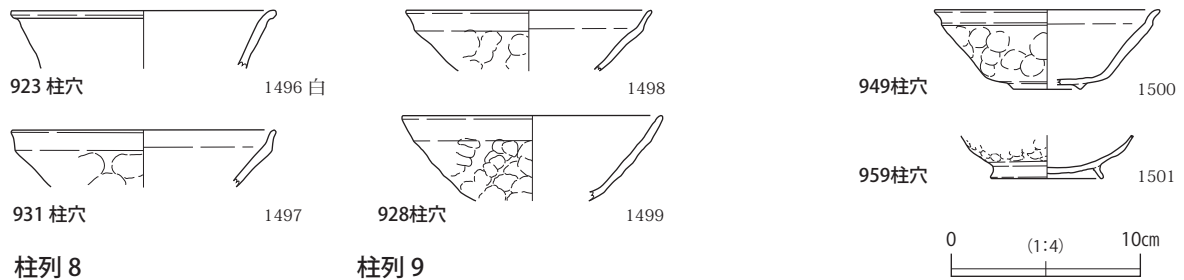


図358 5-2区 第3面 柱列8・9 出土遺物

cmを測る。底部内面にナデを施し、外面に指押さえを残す。いずれも、白色系の胎土をもつ。

杯には、1610・1612～1623があり、口径 10.0～11.5 cm・器高 3.0～3.4 cmを測る。底部内面にナデを施し、外面に指押さえを残す。胎土は淡茶褐色を示す。

椀には、高台を持つもので、1624～1647・1648～1650がある。口径 11.4～13.6 cm・器高 3.7～4.7 cmを測る。1624・1626・1644のように口縁部端部の内面に沈線 1 条を廻らすものと、1628・1640のように口縁部端部が丸みをもつものがある。1631・1649・1650の高台は低く施される。

1648は、高台部のみを残し、皿の可能性はある。

鉢には、1714～1717の大型のものがあり、口径 24.5～38.6 cmを測る。1715は、直線的に外方へ口縁部が伸び、口縁部端部は丸みをもつ。1714・1716・1717は口縁部が外反し、1717のみ端部が尖り気味に終わり、他は面をもつ。体部外面に指押さえを残し、内面にナデを施す。

甕には1730～1734があり、いずれも、口縁部破片である。短く外反する口縁部の上端部が面をもち、屈曲する頸部に球形の体部をもつもので、体部外面に指押さえを残し、内面にナデを施す。1733・1734の外面に煤が付着している。

1735は、片方に把手が付くもので、外面に煤が付着する。

羽釜には、1736～1738があり、いずれも、口縁部破片である。内面に指ナデを施す。

黒色土器には、椀・鉢がある。

椀には、1651～1699の内黒のものと1700～1709の両黒のものがある。内黒の椀には、口径 12.2～15.4 cm・器高 3.8～6.4 cmを測るものがある。1652・1690のように口縁部端部が丸く終わるものと、1653・1664・1687のように内面に沈線 1 条を施すものがある。いずれも、内外面にはヘラミガキを施すが、表面の摩滅が著しいものは、不明瞭である。1699は、内面のヘラミガキ後に螺旋状にミガキを追加している。

両黒のものには、1700・1701のように口径 11.4cm・12.4 cm、器高 4.4 cmとやや小型のものと、口径が 15.4～15.6cm・器高が 5.4～6.2 cmのものがある。内外面に丁寧なヘラミガキを施す。1704の底部内面のヘラミガキは、放射状に 2 段ヘラミガキを施している。なお、1705・1708・1709の内面に、ヘラミガキ後螺旋状のミガキが施されている。

鉢には内黒のものがあり、口縁部が直線的に外方へ開く 1723と、内傾する口縁部をもつ 1718・1719・1724・1725がある。1725は片口である。いずれも、内面にヘラミガキ、外面に指押さえを残し、1718・1719・1725は粗いヘラミガキを施している。1720・1721は高台を持つ底部破片である。

須恵器には、鉢と用途不明のものがある。

鉢には、1276のように、内弯気味の口縁部端部が外方へわずかに伸び上端面をもつ、焼きの硬いものと、口縁部端部が内外に肥厚し玉縁状になる、焼きの甘い 1277・1278・1279・1272がある。1272・1279

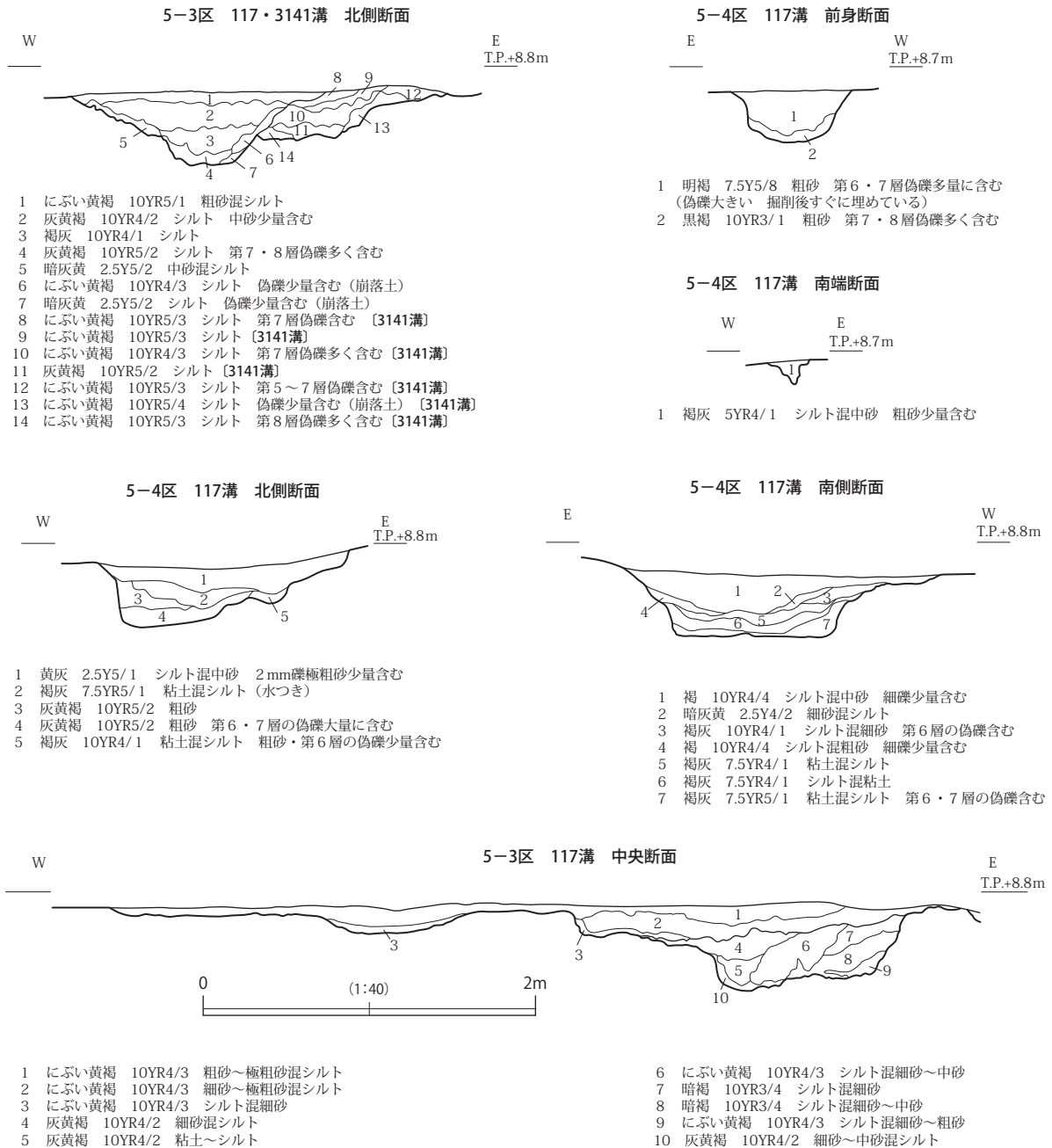


図359 5-3・4区 第3面 117溝 断面図

は、糸切底である。

1742は、体部に突帯を2帯貼付、さらに棒状浮紋を施したもので、図化できなかったが、同様の破片が他に、1点出土している。

緑釉陶器には、1710・1711の皿があり、1712は高台部のみを残す。

灰釉陶器には、1713の高台部のみを残すものがある。

他に、1739～1741の有溝の土師質の土鍾がある。高さ8cm・幅2.8cmを測り、紡錘形の断面隅丸方形で、相対する2方に幅1cm・深さ6mmの溝を穿つ。1740には、スタンプ紋が、1741には溝と直交する径3mmの孔が穿たれている。

中層から出土した土器には、土師器・須恵器・黒色土器がある。

土師器には、皿・杯・椀・鉢・甕・羽釜などがある。

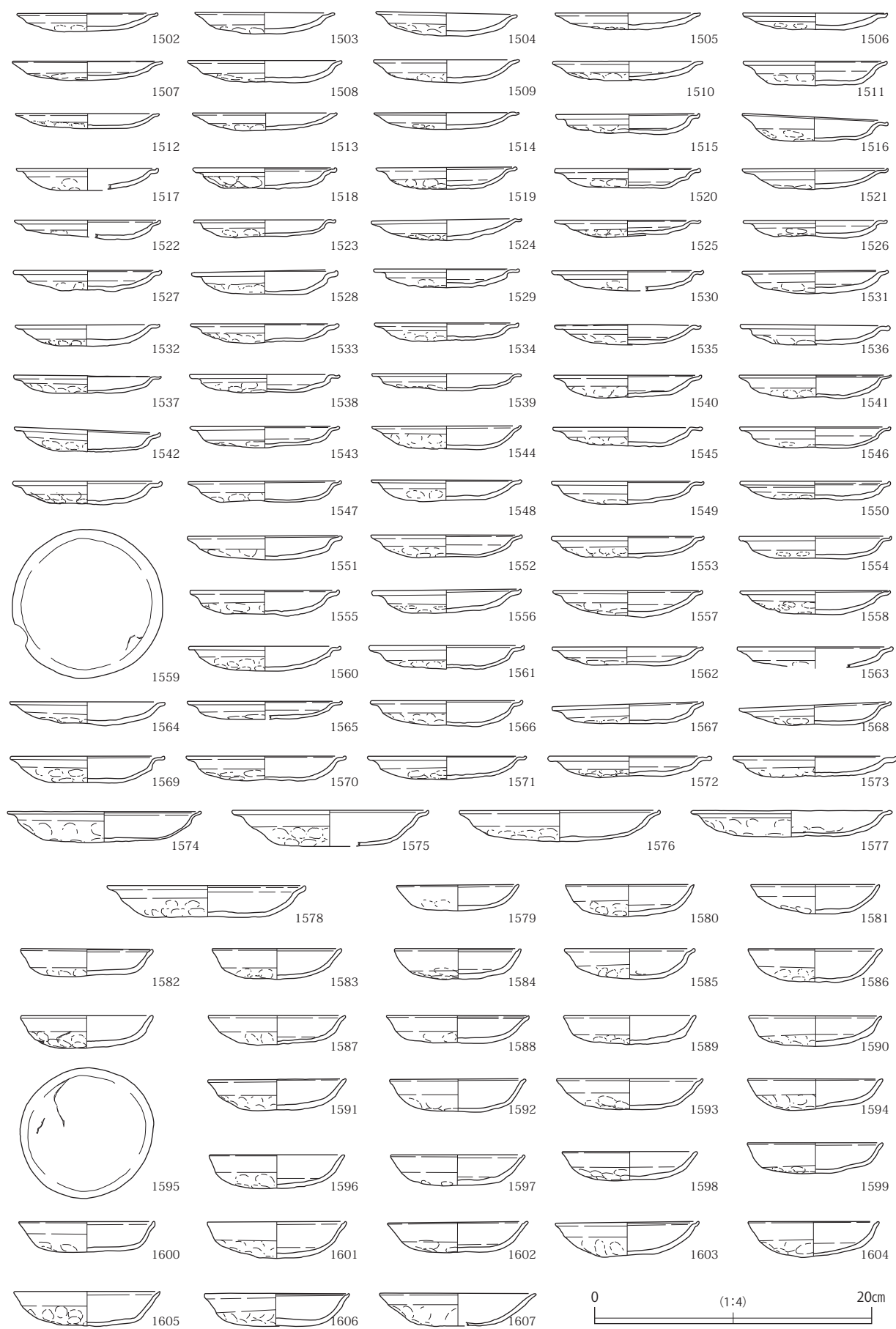


图360 5-3·4区 第3面 117沟 上層 出土遺物(1)

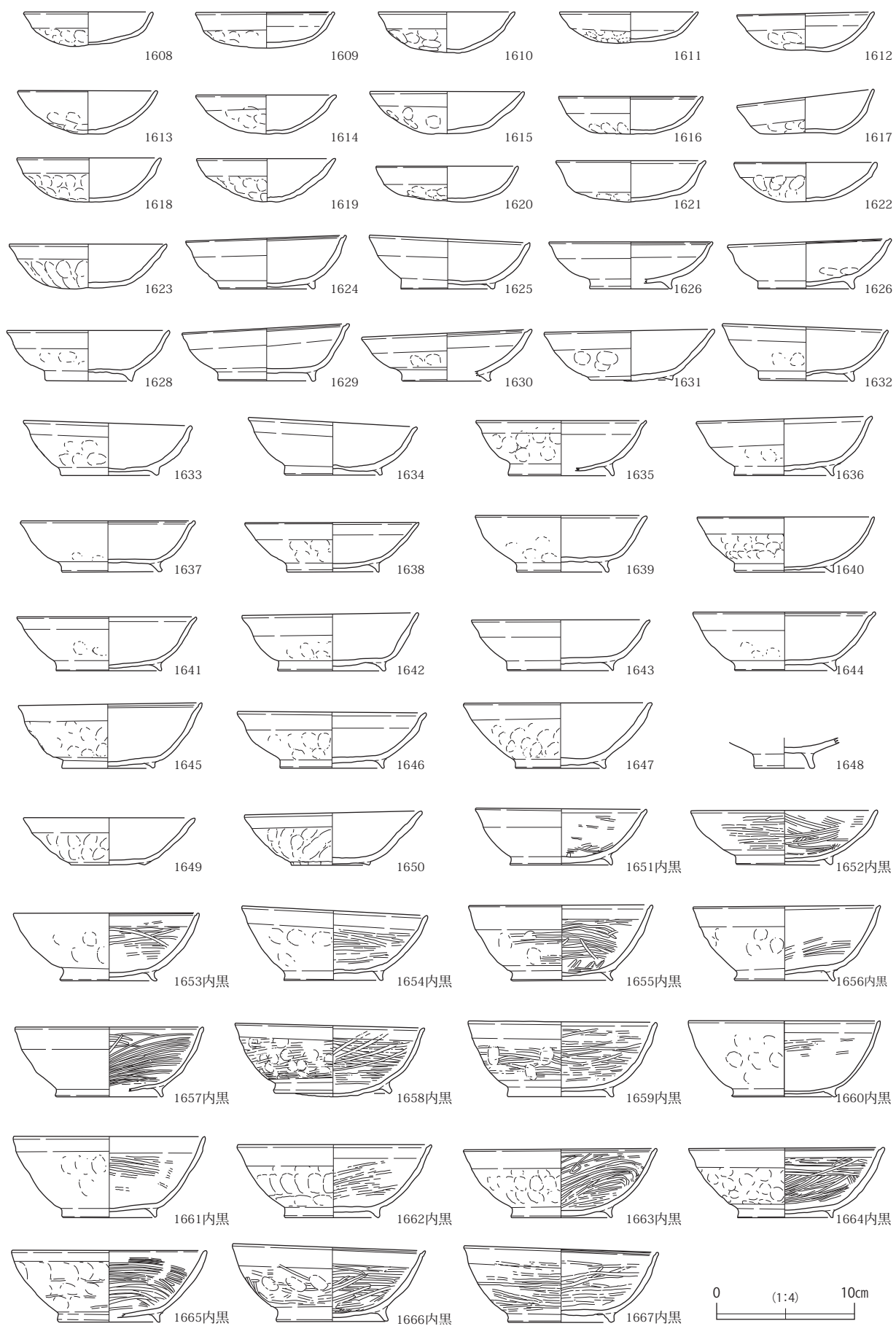


图361 5-3·4区 第3面 117沟 上层 出土遗物(2)

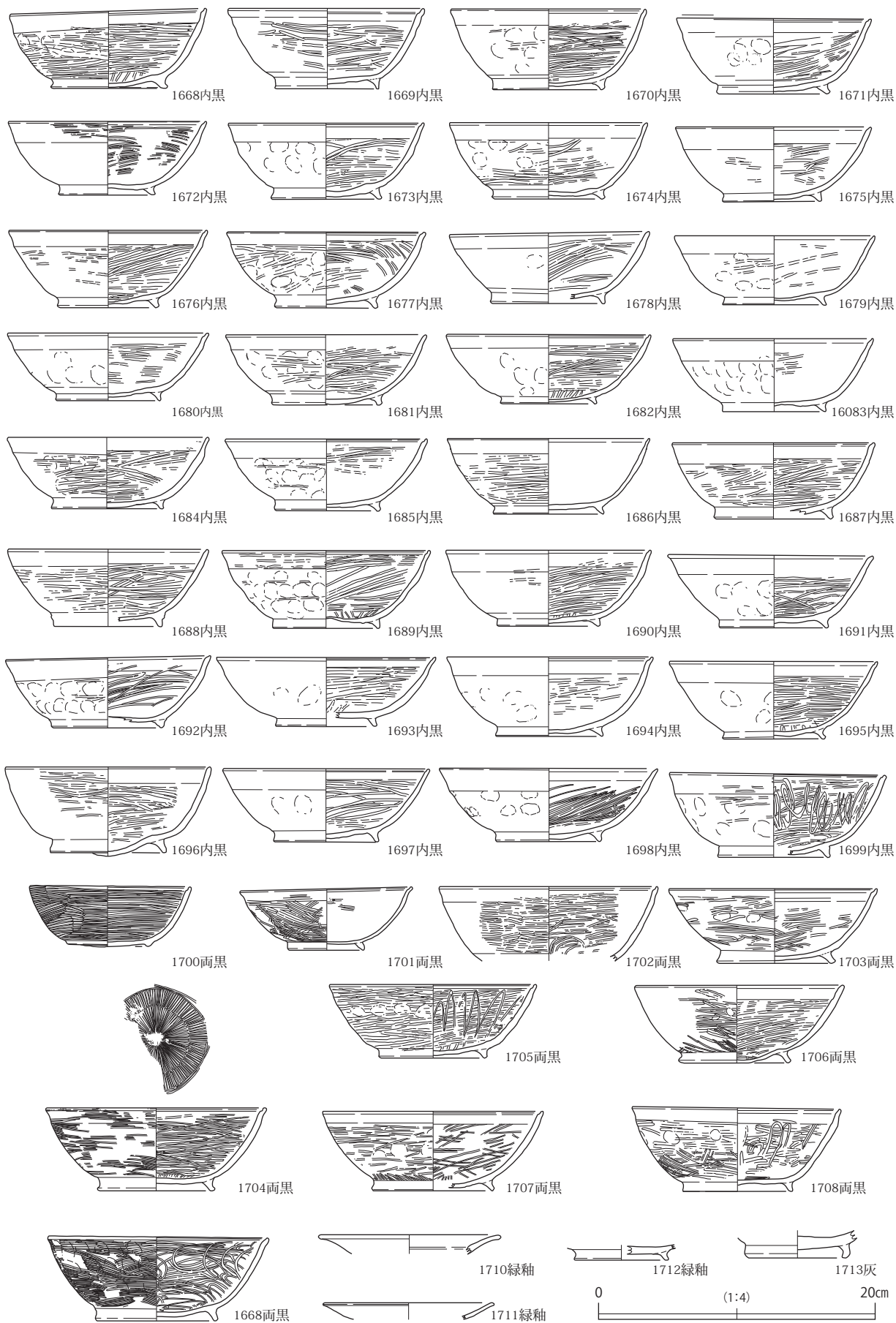


图362 5-3·4区 第3面 117溝 上層 出土遺物(3)

皿には、口径9.6～11.6cm・器高1.4～1.8cmのての字状口縁を持つ1743～1769と、口径9.2～10.2cm・器高2.2～2.6cmの浅い椀形の1771～1782がある。胎土は、前者が白色系のもので、後者が淡茶褐色のものである。

1770は口径14.0cm・器高2.8cmを測り、ての字状の口縁をもつ杯である。1783・1784は小型で、口径約10cm・器高3.0cmを測る浅い椀形の杯である。

椀には、丸底のものと同高台をもつものがある。1785は口径12.2cm・器高3.6cmを測る。体部外面に指押さえを残し、内面にナデを施す。高台を持つものには、口径11.0～14.8cm・器高3.5～6.0cmを測る。外面に指押さえを残し、内面にナデを施す。

鉢は1点のみあり、1817は外反する口縁部をもつ。体部外面に指押さえを残し、内面にナデを施す。

甕には、小型で片口で、把手が付く1819と、口径16cm以上のやや大型の1822～1824がある。1819は、口径12.8cm・器高12.8cmを測る。いずれのものも、体部外面に指押さえを残し、内面にナデを施す。外面に煤が付着する。

羽釜の1820・1821は、口径20cm以上の大型のもので、内傾する口縁部が短く外反する。内外面ともにナデを施す。鏝以下に煤が付着する。

須恵器には、1816の軟質の鉢の口縁部破片がある。

黒色土器には、椀・鉢がある。

椀には、内黒と両黒がある。内黒のものには、1796～1810があり、口径14.0～15.8cm・器高5.2～6.2cmを測る。内外面にヘラミガキを施す。両黒のものには、1811・1812があり、口径15.4～15.6cm・器高6.2cmを測る。内外面共にヘラミガキを施す。前者の底部内面のヘラミガキは放射状に施され、後者の体部内面にはヘラミガキ後波状のミガキが付加されている。やや小型の1813・1814は、口径12.0・11.2cm、器高4.2cmを測る。

鉢は、内黒のもので、1818は口径15.6cm・器高11.4cmを測る。口縁部が内弯し、内外面共にヘラミガキを施す。片口の高台をもつものである。

下層から出土した土器は、少量で、図化できたのは2点のみである。

1863は土師器小皿で、口径9.6cm・器高2.6cmを測る。1864は内黒の黒色土器椀で、口径14.0cm・器高5.2cmを測る。

分層されずに取り上げられた遺物には、土師器・須恵器・白色土器・黒色土器・灰釉陶器があり、他には、轆の羽口・瓦・土錘などがある。

土師器には、皿・杯・椀・鉢がある。

皿には小型で、ての字口縁の1825、外反する口縁の1826～1828、浅い椀形の1830・1831がある。杯には、1832が1点のみ図化されている。椀には、1833～1837の高台が付くものがある。鉢は大型のもので1850は、外方へ開く口縁部の端部がわずかに外方へつまみ出され上端面をもつ。

須恵器には、軟質の鉢がある。1356は復原完形で、口径24.0cm・器高8.6cmを測る。1853と共に、糸切底である。

白色土器には、椀がある。1844～1848は、口径14.6～16.0cm・器高5.2～6.0cmを測る。轆轤整形のもので、乳白色である。

黒色土器には、椀・鉢がある。椀には、内黒のものと同高台のものがある。1839～1842は内黒の椀で、口径14.4～15.6cm・器高5.4～6.5cmを測る。内外面共にヘラミガキを施すが、残存状況が悪いため、外

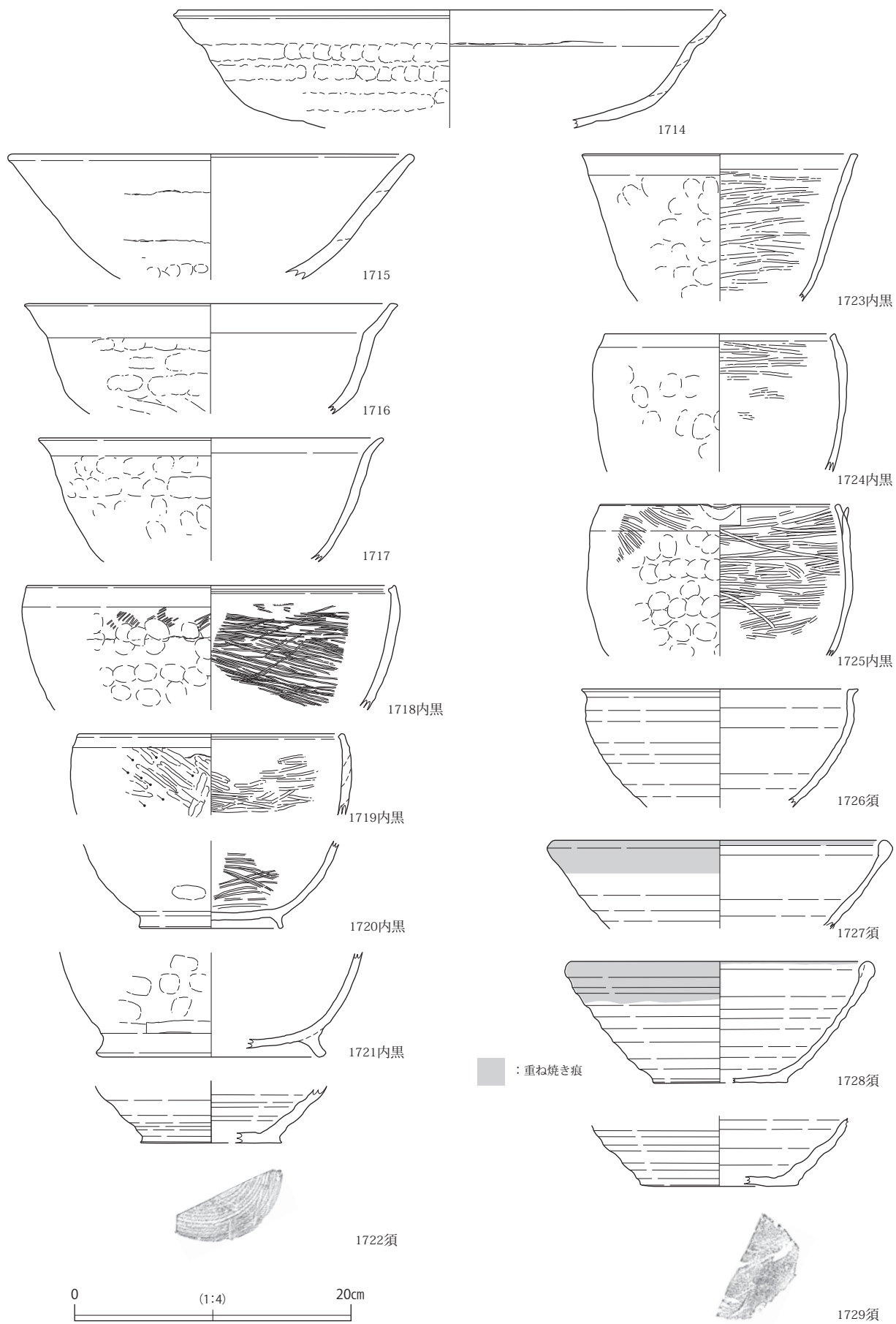


图363 5-3·4区 第3面 117溝 上層 出土遺物(4)

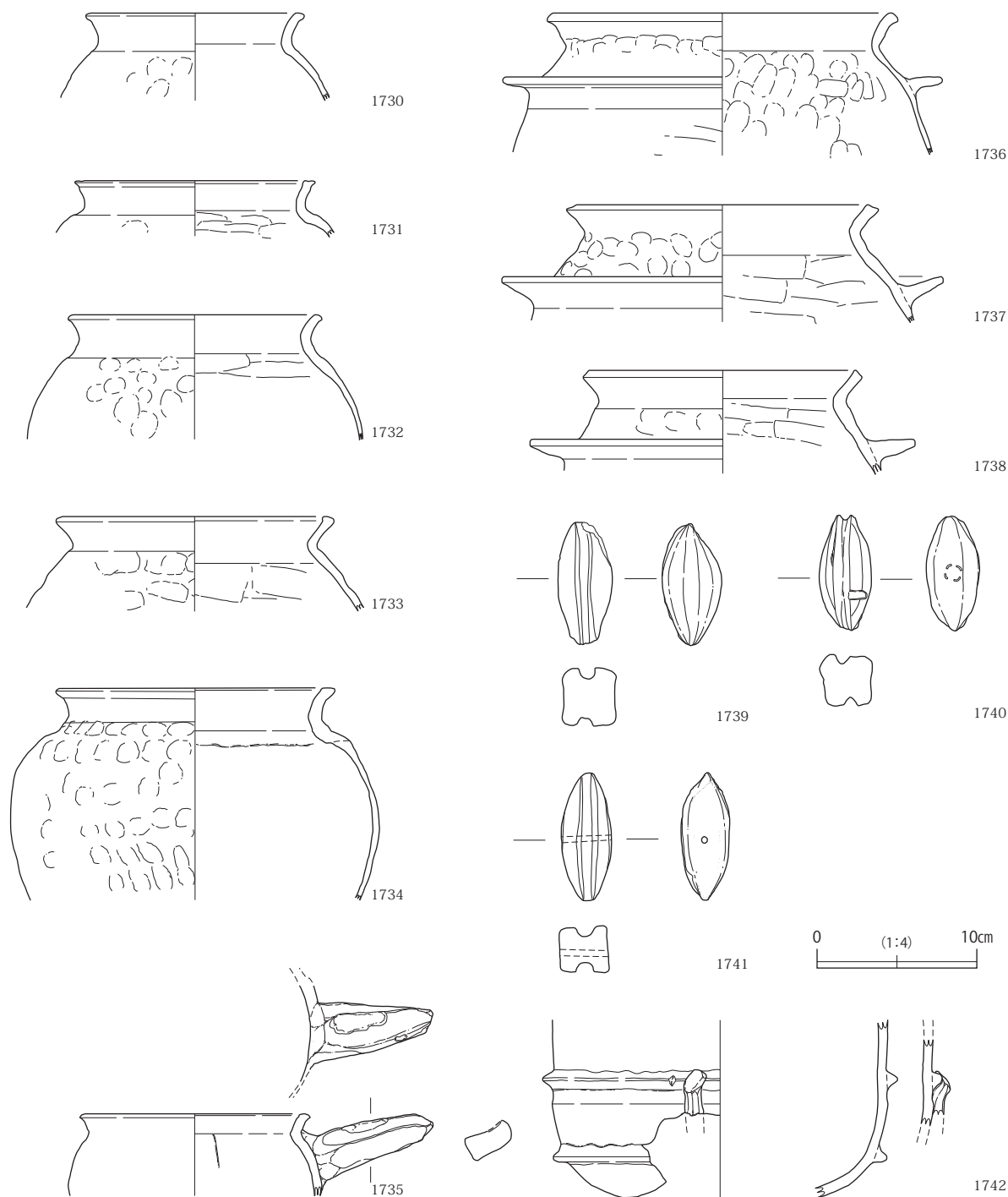


図364 5-3・4区 第3面 117溝 上層 出土遺物(5)

面のミガキは不明瞭である。両黒のものには、1838のやや小型で、口径15.2cm・器高6.0cmを測るものと、口径11.6cm・器高4.2cmを測るものがある。いずれも、内外面にヘラミガキを施す。鉢には、大型でやや内弯ぎみに開く片口の1851と、内弯する口縁部をもつ1852がある。いずれも、内外面にヘラミガキを施し、内黒のものである。

灰釉陶器には、壺と椀がある。壺には、1854の体部上半破片と、1855の口頸部破片がある。椀には、1857の底部破片がある。底部内面に黒漆が付着する。

1862の鞆の羽口は、先端部のみを残し、径6.2cmを測り、径1.6cmの孔が開く。先端部は溶解し、黒色のガラス滓が付着している。挿入角度は、16.5°である。

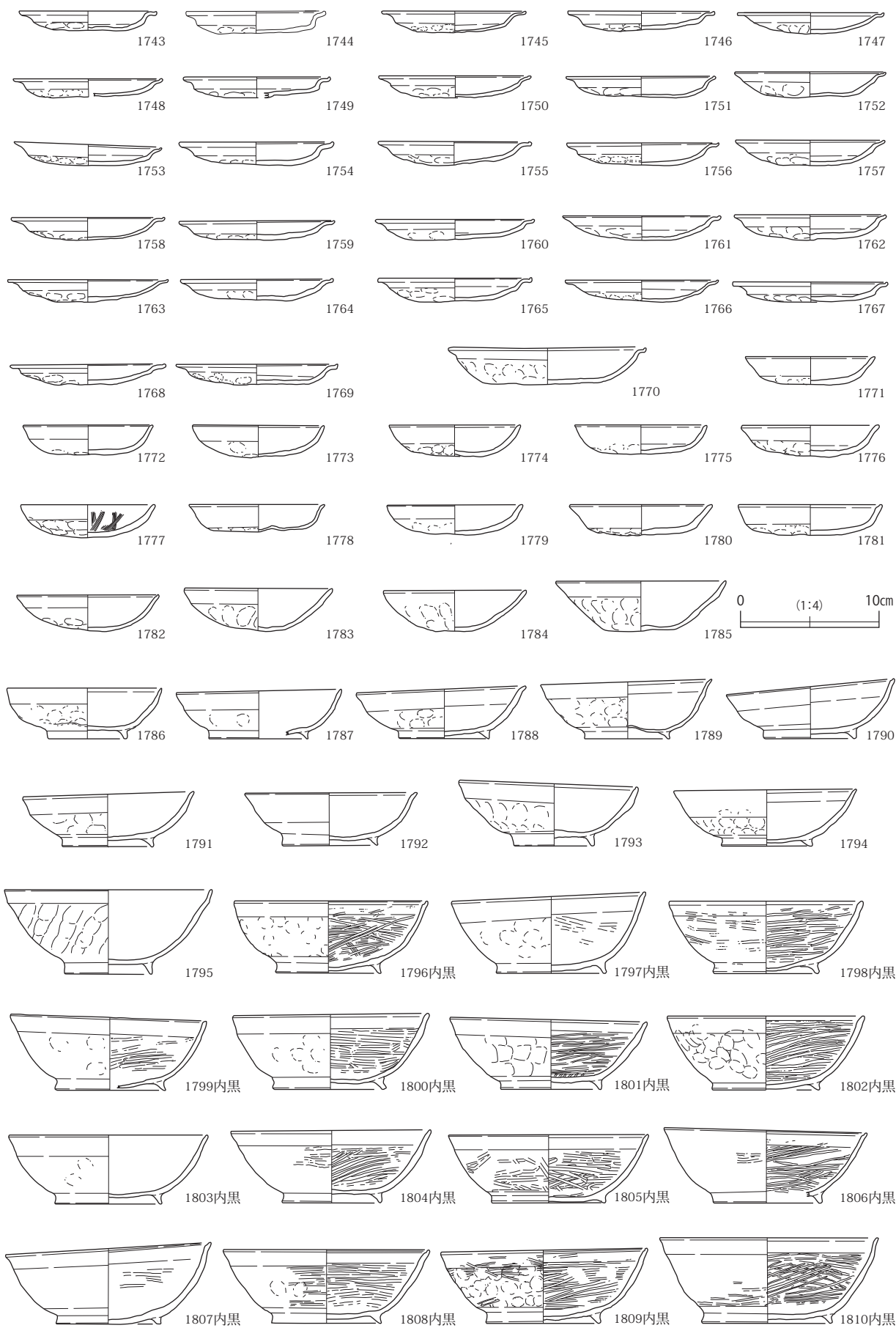


图365 5-3·4区 第3面 117溝 中層 出土遺物(6)

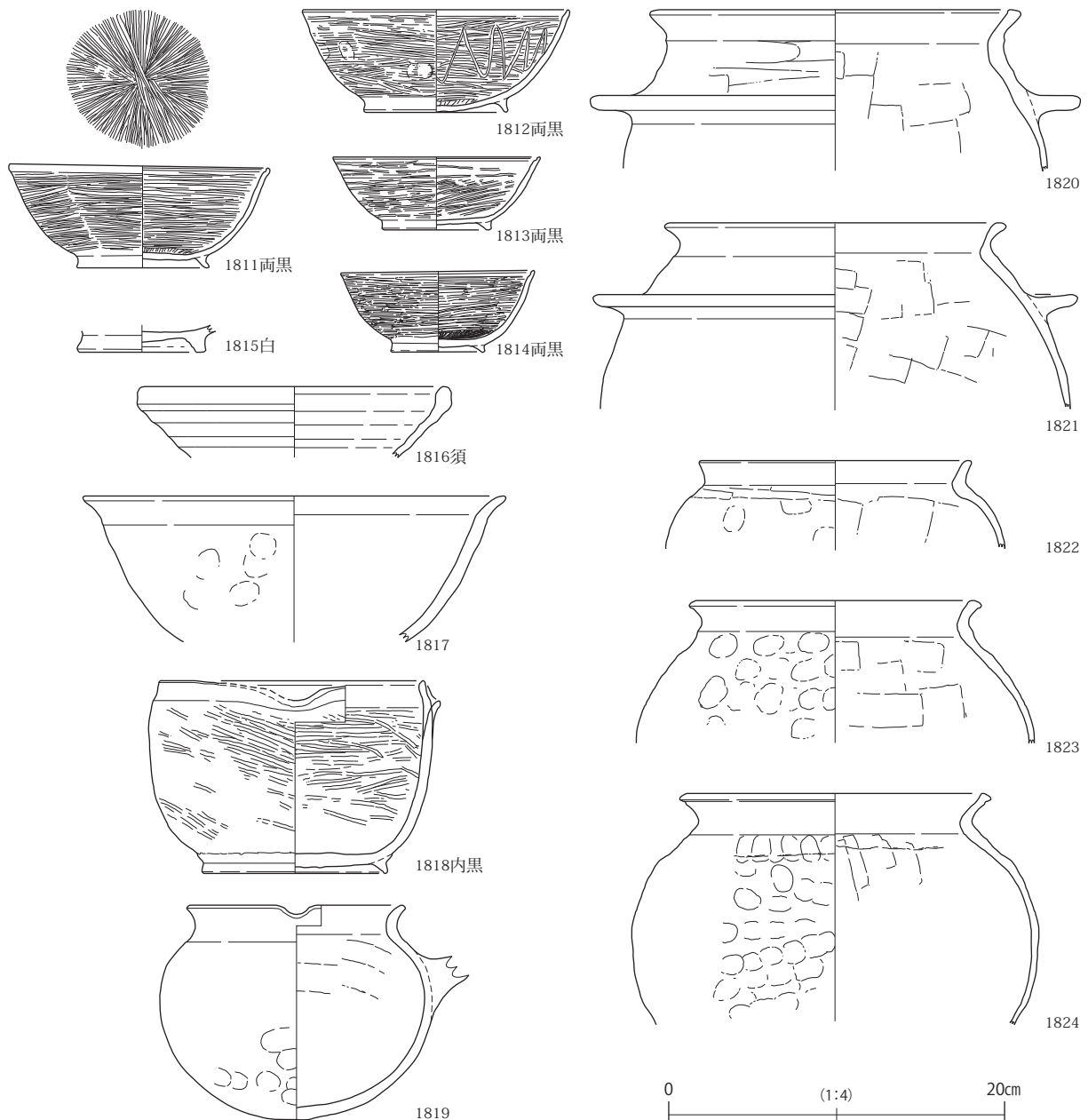


図366 5-3・4区 第3面 117溝 中層 出土遺物(7)

瓦は土師質の軒平瓦で、約3/4を残す。下辺が25.4cm・上辺が(28.8)cm、長さ34.2cm、厚さ2.0cmを測る。外面に叩き目を施し、内面に布目痕を残す。

土錘には有溝のものがあり、1857~1861は紡錘形の断面が隅丸方形で、相対する2方に幅1cm・深さ0.6~0.8cmの溝を穿つ。1858・1859には直交する円孔が穿たれる。

[91・92溝] (図306・307・369・370 図版74-1・2)

91・92溝は、5-3・4区の西半部の117溝の東側で検出された南北方向の溝である。

91溝は、5-4区の北半から5-3区にかけて検出されるが、5-3区では、部分的に途切れる。検出長24.6m・幅1.0m・深さ0.2mを測る。埋土は2層に細分され、シルト混じりの褐灰色の細砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などがわずかに出土している。

92溝は、91溝に切られる。両端は調査外へ延びる。検出長49.2m・幅0.9~3.0m・深さ0.1~0.25

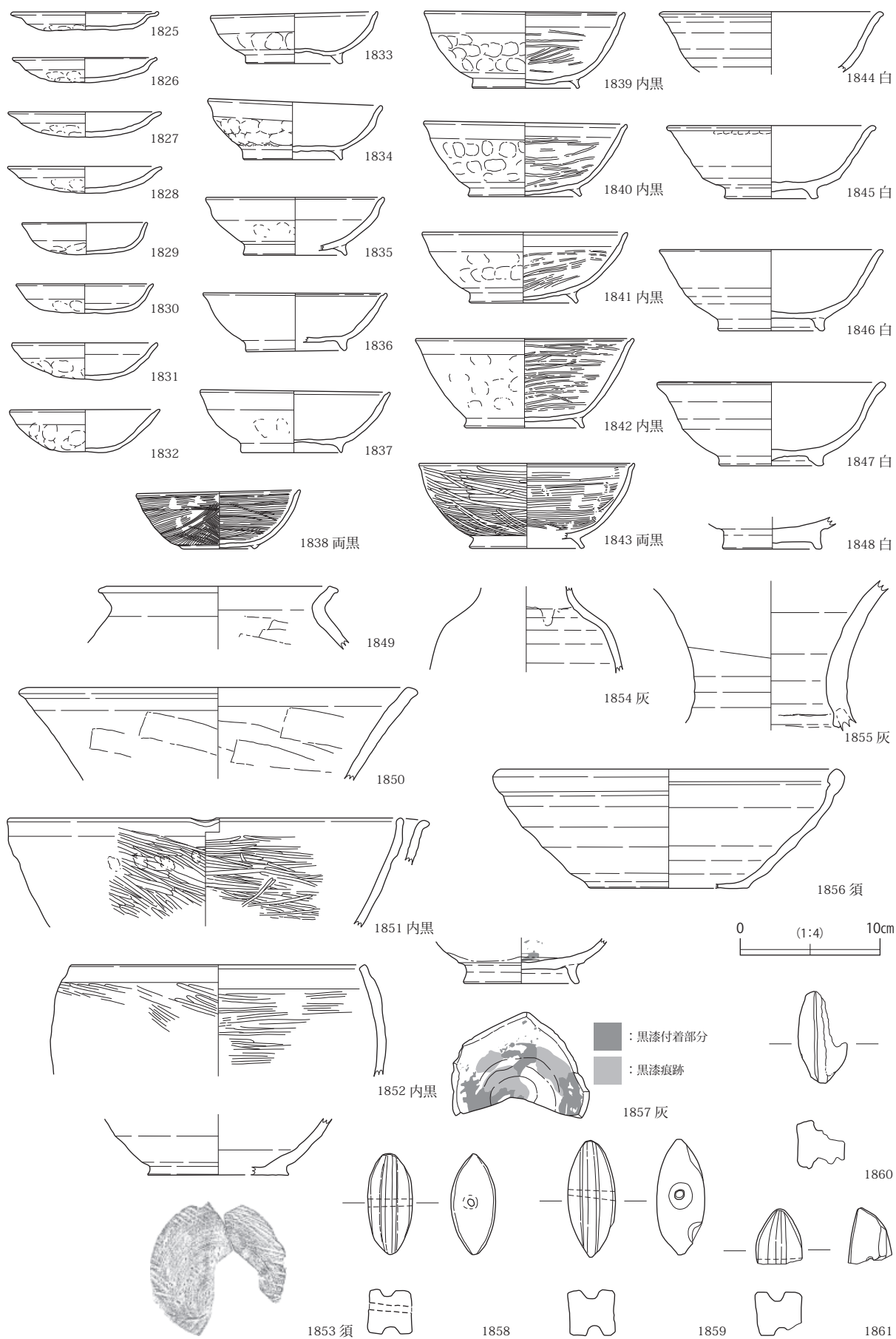


图367 5-3·4区 第3面 117溝 出土遺物(8)

mを測る。埋土は4層に細分され、シルト混じりの灰黄褐色の粗砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などがわずかに出土している。1866は、土師器羽釜の口縁部破片である。

〔156溝〕（図306・307・369・370 図版74-3）

5-3・4区の117溝の東側に隣接して検出された南北方向の溝である。北端は調査区外に延びる。検出長44.8m・幅0.3~0.6m・深さ0.15mを測る。埋土は2層に細分され、細砂が混じるにぶい黄褐色のシルトが主である。

遺物は、土師器・瓦器などがわずかに出土している。1875は瓦器碗で、口径16.0cm・器高6.0cmを測る。外面に粗いヘラミガキを、内面にヘラミガキを施している。外面に指押さえを残す。

〔223溝〕（図306・307・369・370）

5-3・4区で検出された南北方向の溝である。5-3区では、続きがわずかな痕跡としてある。検

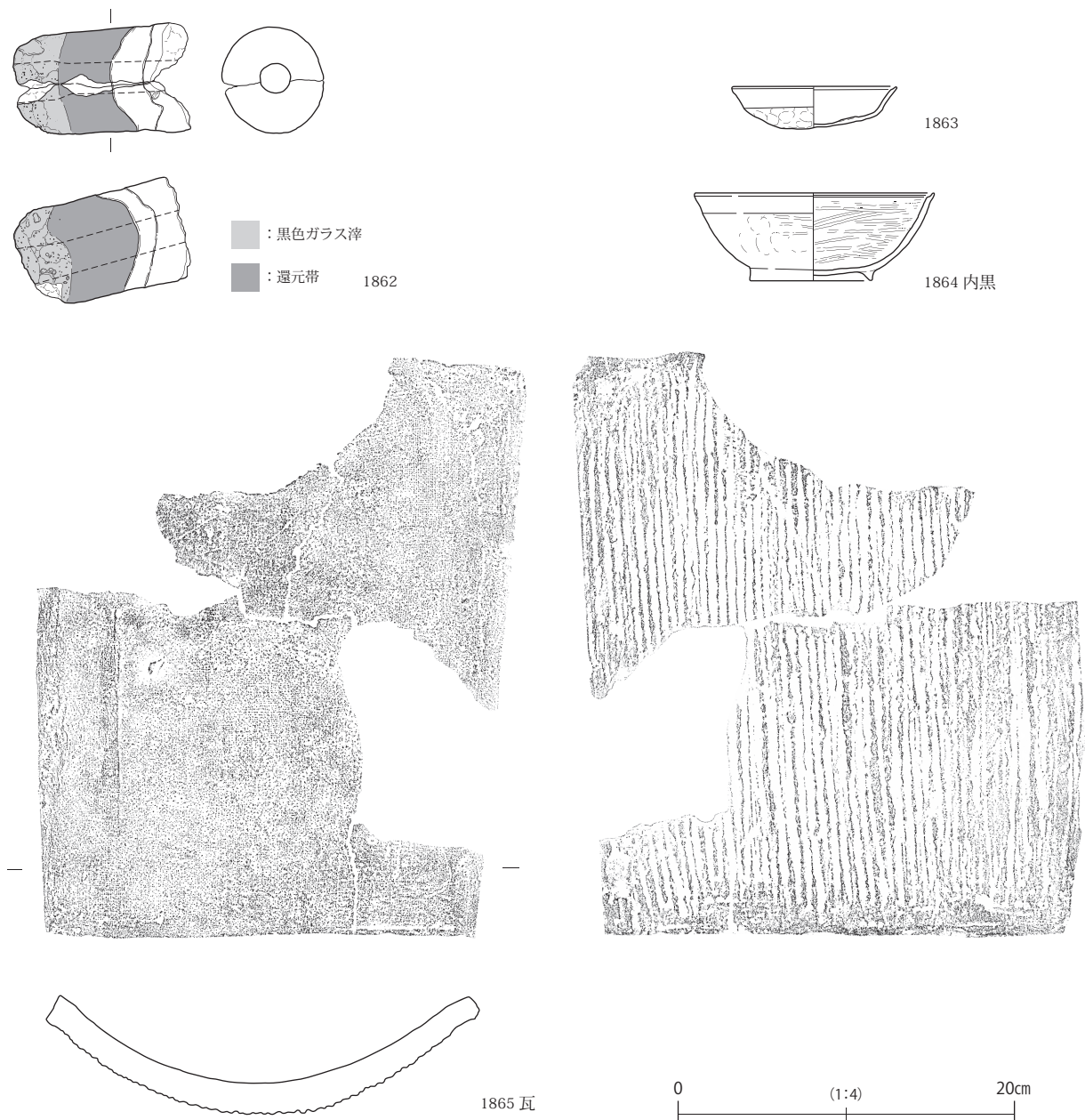


図368 5-3・4区 第3面 117溝 出土遺物(9)

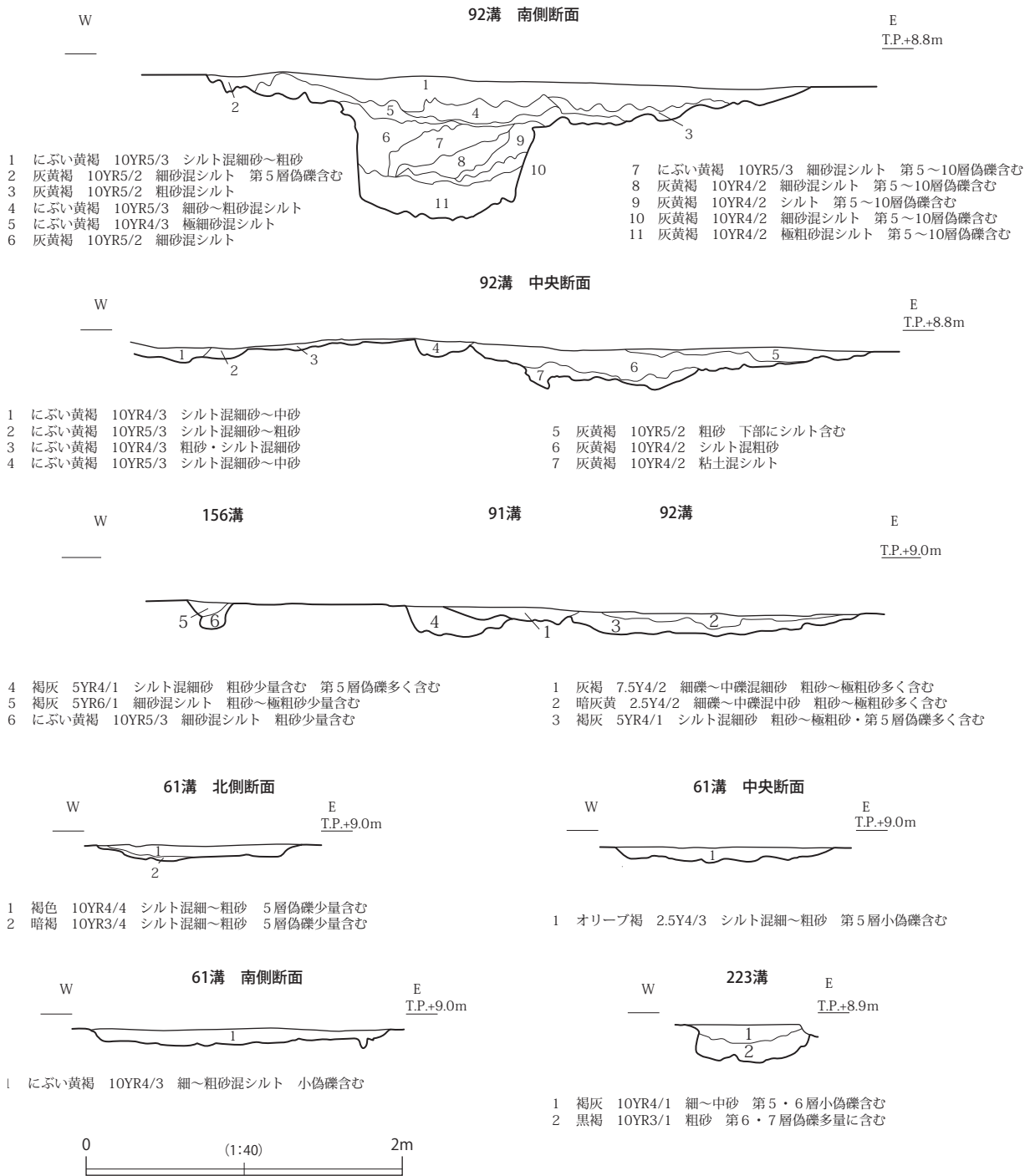


図369 5-3・4区 第3面 各溝 断面図

出長約48m・幅0.45～0.8m・深さ0.25mを測る。埋土は2層で、黒褐色の粗砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などがわずかに出土している。1866は、土師器羽釜の口縁部破片で、外面の鏝部以下に煤が付着する。

以上の溝は、同様な位置に何度も繰り返される溝である。

〔61溝〕(図306・307・369・370)

5-4区の西端部で検出された、わずかに北北東に振る南北方向の溝である。北端部は攪乱に切られる。検出長13.2m・幅1.2～3.6m・深さ0.1mを測る。埋土は1～3層で、細砂から粗砂が混じるシルトが主である。

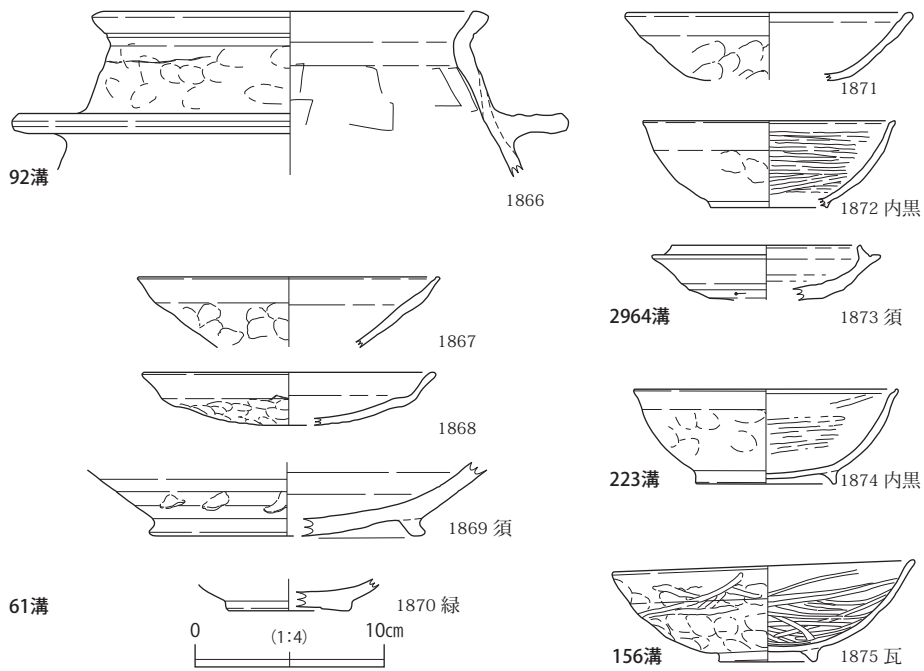
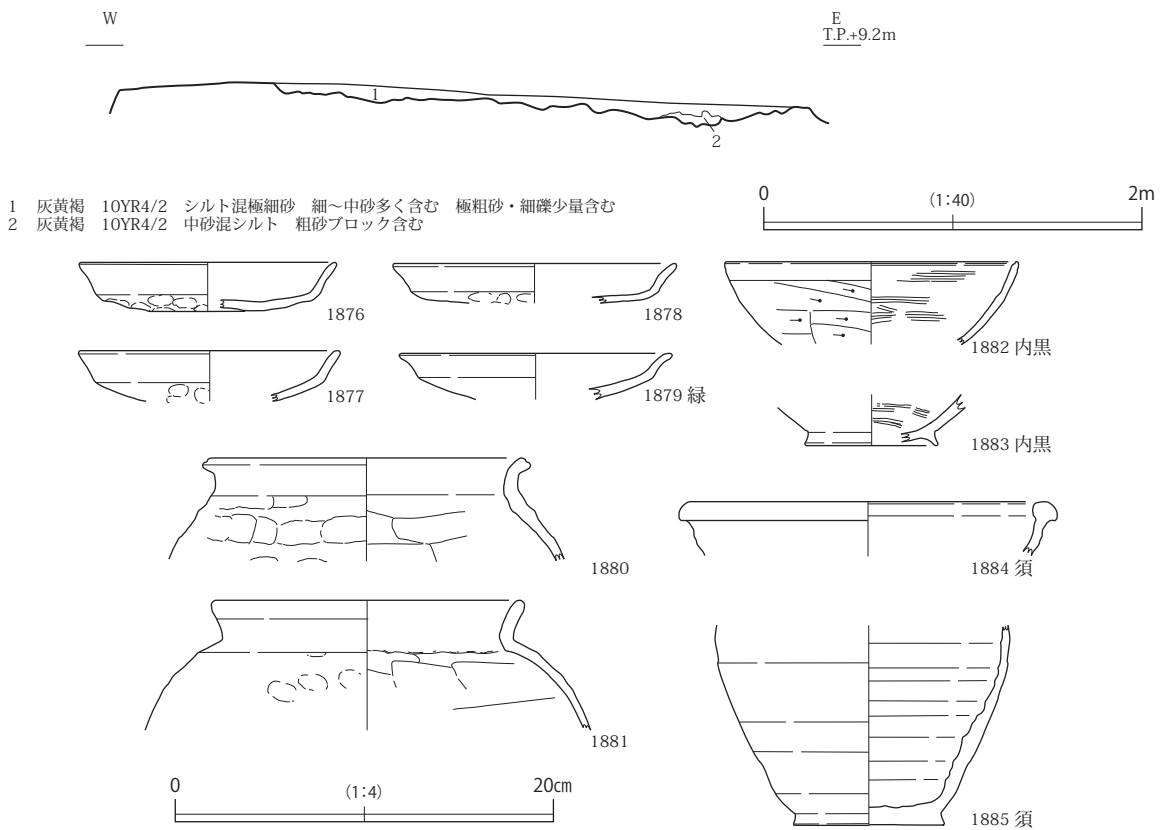


図370 5-3・4区 第3面 各溝 出土遺物

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などがある。1868は土師器皿で、1867は椀である。1869は須恵器鉢の高台をもつ底部である。1870は緑釉陶器の椀の底部を残すものである。

[2964溝] (図306・307・370)

5-3区の117溝の西側で検出された南北方向の溝で、南端部は2119土坑に切られる。検出長15.3m・幅0.3~1.0mを測る。



- 1 灰黄褐 10YR4/2 シルト混極細砂 細~中砂多く含む 極粗砂・細礫少量含む
- 2 灰黄褐 10YR4/2 中砂混シルト 粗砂ブロック含む

図371 5-2区 第3面 1020溝 断面図 出土遺物

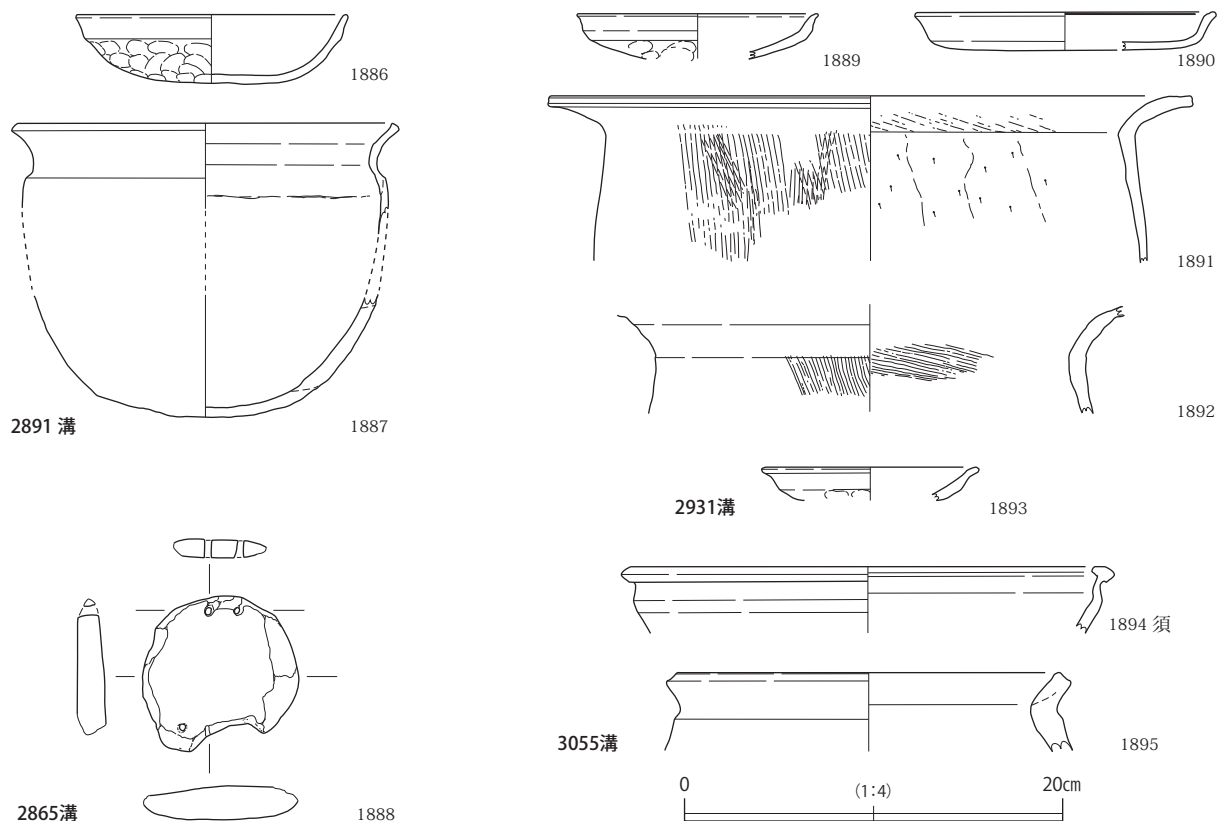


図372 5-1・2区 第3面 各溝 出土遺物

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などがわずかに出土している。1871は土師器椀で、1873は須恵器杯身、1872は内黒の黒色土器椀である。

〔1020溝〕（図306・310・370）

5-2区の西半部で検出された南北方向の溝で、大畦畔に切られ1015土坑を切っている。幅 2.5 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は2層で、シルトが混じる灰黄褐色の細砂が主である。

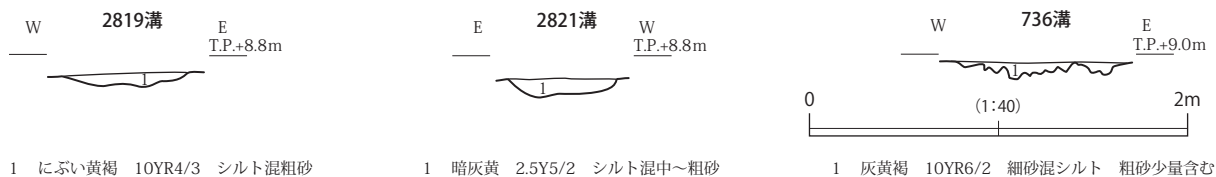
遺物は、土師器・須恵器・黒色土器が出土している。1876~1878は土師器皿で、1880・1881は甕である。1884は軟質の鉢の口縁部破片で、1885は壺の体部下半から底部を残すものである。1882・1883は内黒の黒色土器椀である。1879は緑釉陶器の皿である。

〔2865・2891・2931・3055溝〕（図306・309・372）

5-1区の西端部の大畦畔の西側および東側に位置し、南北方向の溝である。遺物は、土師器・須恵器・黒色土器がわずかに出土している。2865溝から出土した1888は弥生時代前期の壺蓋で、円盤状のもので、相対する2方に2個1対の紐孔を穿つ。下層からの混入とみられる。

2891溝から出土した1886は土師器杯で、約3/4を残す。口径14.0cm・器高3.8cmを測る。1887は土師器甕で図上復元である。口径20.0cm・推定器高15.6cmを測る。

2931溝からは、1889・1890の土師器皿、1893の小皿、1891・1892の甕がある。



1 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混粗砂

1 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混中〜粗砂

1 灰黄褐 10YR6/2 細砂混シルト 粗砂少量含む

図373 5-1・2区 第3面 2819溝・2829溝・736溝 断面図

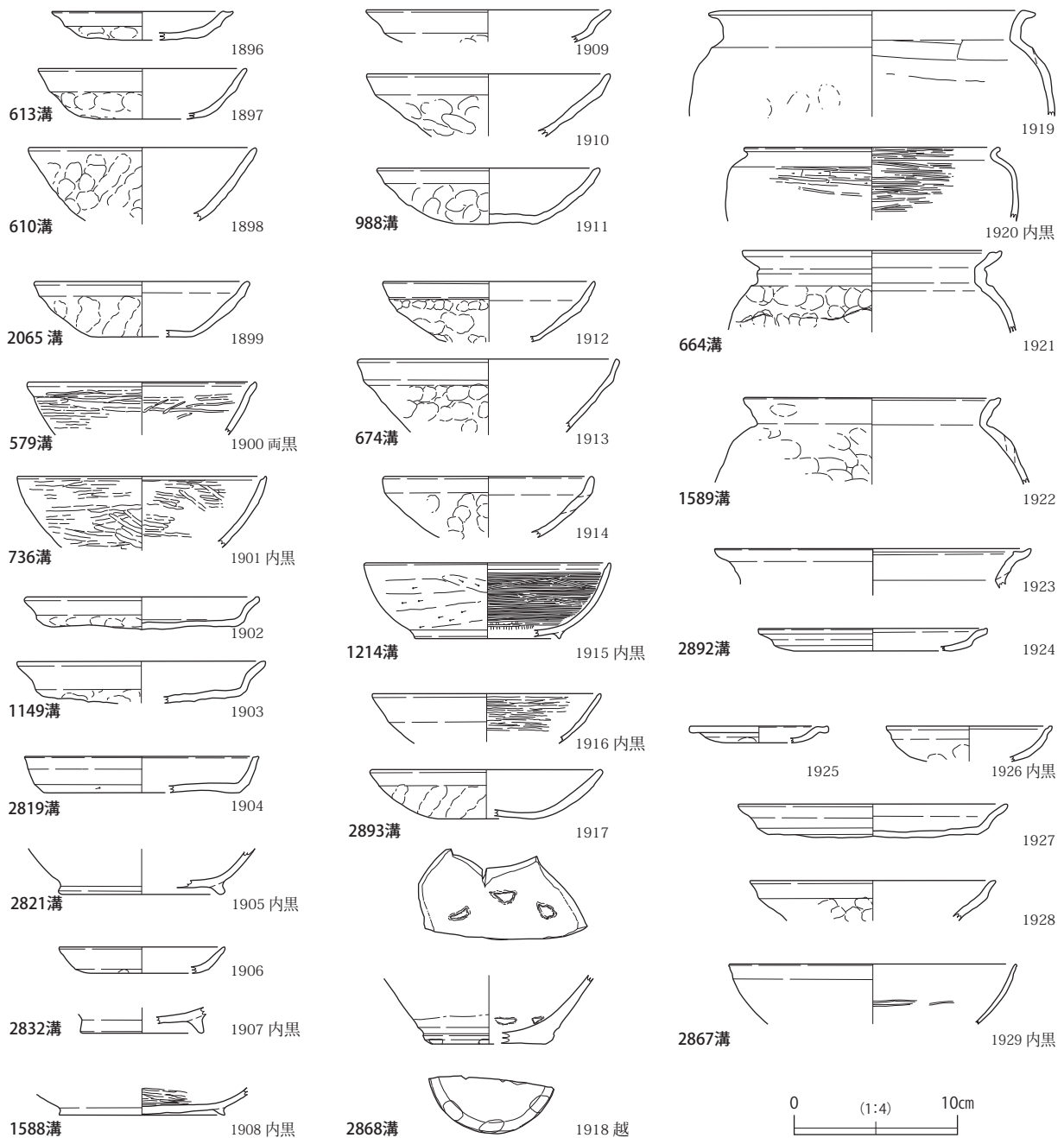


図374 5-1・2区 第3面 各溝 出土遺物

3055溝からは、1895の土師器甕、1894の須恵器軟質の鉢がある。

[2819・2821溝] (図306・309・373)

5-1区の東端部で検出された南北方向の溝である。

2819溝は、検出長15m・幅0.45~1.2m・深さ0.1mを測る。埋土は1層で、シルトが混じるにぶい黄褐色の粗砂である。遺物は、土師器・須恵器・黒色土器がわずかに出土している。1904は土師器皿である。

2821溝は、検出長10.5m・幅0.2~0.6m・深さ0.1mを測る。埋土は1層で、シルトが混じる暗灰黄色の中砂から粗砂である。遺物は、土師器・須恵器・黒色土器がわずかに出土している。1905は内黒の黒色土器碗の底部破片である。

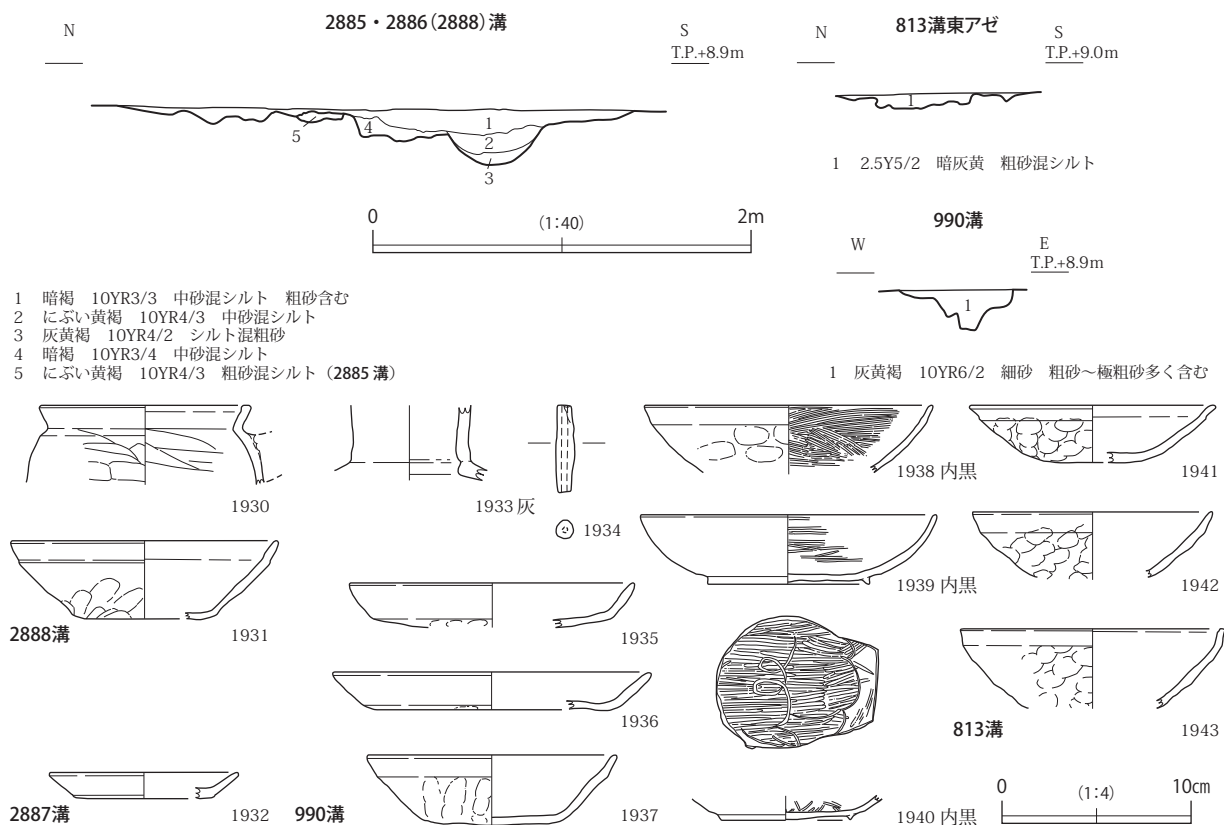


図375 5-1・2区 第3面 各溝 断面図 出土遺物

〔736溝〕 (図306・310・373・374)

5-2区の南東部の南北方向の土坑状の溝である。長さ 3.0 m・幅 1.2 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は1層で、細砂が混じる灰黄褐色のシルトである。遺物は、土師器・須恵器・黒色土器がわずかに出土している。1901は内黒の黒色土器碗の口縁部片である。

〔2885～2888溝〕 (図306・309・310・375)

5-1区の南西部で検出された溝群で、2885～2888溝は東西方向に重複している。2888溝は屈曲し、南北方向に延び、5-2区の990溝に接続し、さらに屈曲し東西方向に延びる。

遺物は、各溝から、土師器・須恵器・黒色土器が出土している。2887溝からは1932の土師器小皿がある。2888溝からは、1931の土師器碗、1930の把手付き甕がある。990溝からは、1935・1936の土師器皿と1937の碗、1938～1940の内黒の黒色土器碗、1933の灰釉陶器の壺の頸部破片、1934の土錘がある。

〔813溝〕 (図306・310・375)

5-2区の中央部付近を、コの字状に延びる溝で、総延長33m以上、幅 0.4～1.5 m・深さ 0.1 mを測る。掘立柱建物61～64に切られる。埋土は1層で、粗砂が混じる暗灰黄色のシルトである。

遺物は、土師器・須恵器が出土している。1941の土師器杯と1942・1943の碗が出土している。

〔その他の溝 出土遺物〕 (図374)

その他の溝から出土した遺物には、土師器・黒色土器などがある。2868溝からは、1918の越州窯の碗がある。

土師器には皿・杯・碗・甕があり、黒色土器には内黒・両黒の碗、内黒の鉢などがある。

井戸は、5区で6基検出されている。

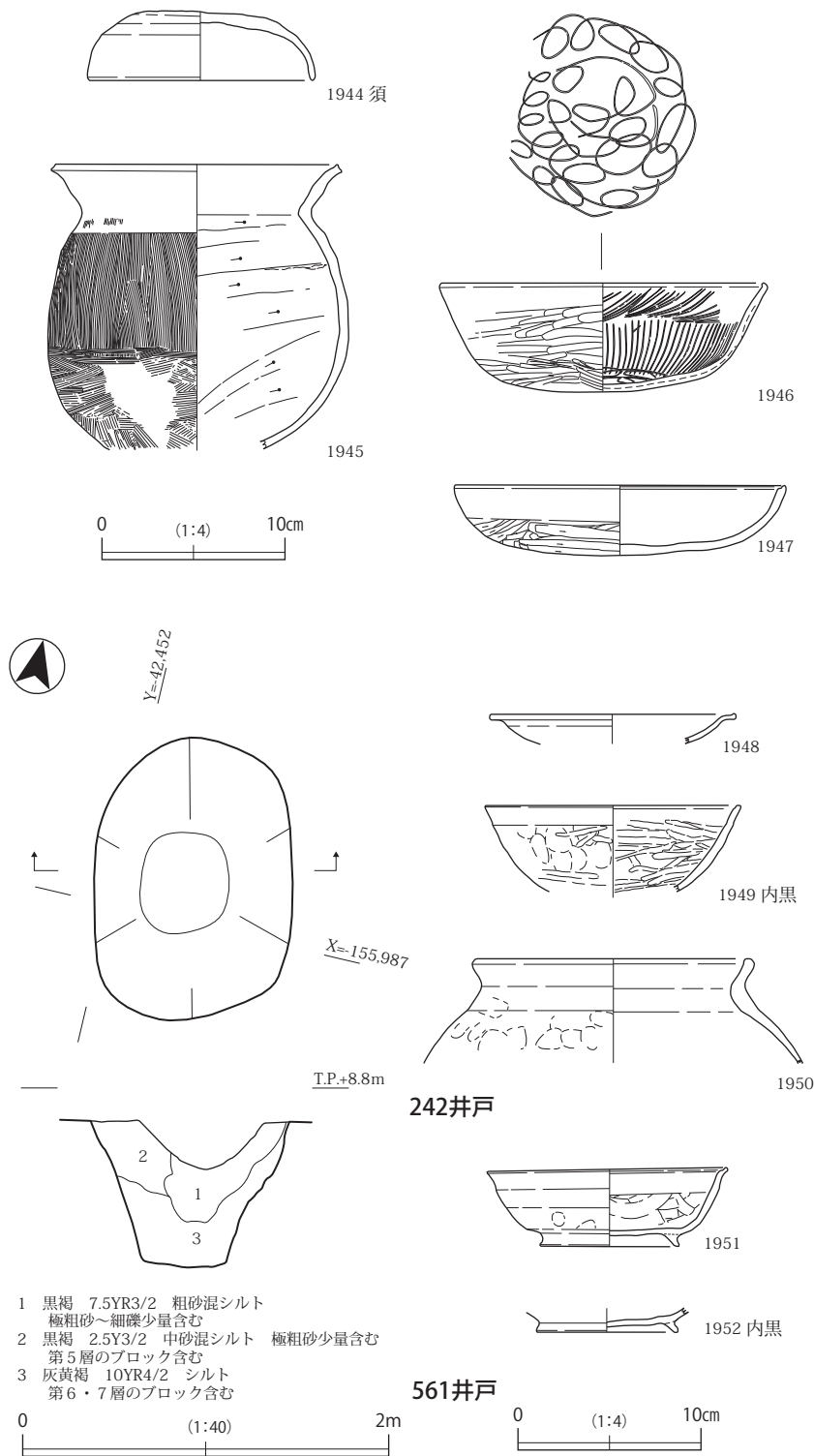


図376 5-4区 第3面 242井戸 平・断面図

2126・242・561井戸出土遺物

の西側、掘立柱建物48の東側に位置する。

平面が不正の楕円形で、長径 15.5 m・短径 1.05 m・深さ 0.85 mを測る。埋土は 3層に細分され、最下層はブロックを含む灰黄褐色のシルトで、埋め戻されたと考えられる。

遺物は、土師器・黒色土器が出土している。1948は土師器皿で、1950は甕である。1949は内黒の黒色土器椀である。

[2126井戸] (図306・308・376 図版115)

5-3区の北東部で検出された、楕円形の井戸である。長径 2.1 m・短径 1.8 mを測る。

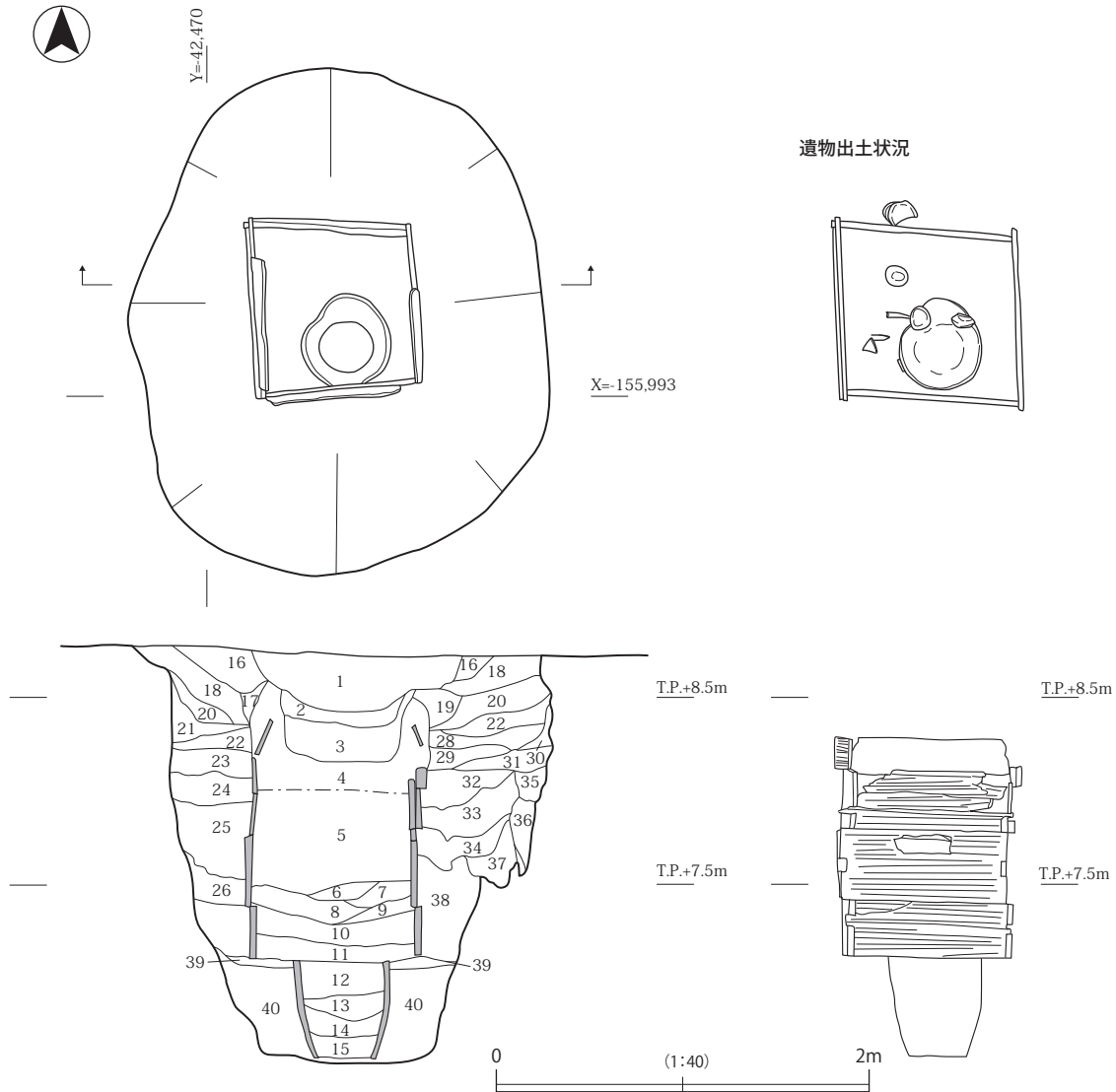
遺物は、土師器・須恵器が出土している。1947は土師器皿で、18.0 cm・器高 3.8 cmを測る。口縁部端部に内傾する段をもつ。外面にヘラケズリ状ナデを施す。内面は、表面摩滅のため、不明である。

1946は杯で、口径 17.6 cm・器高 5.9 cmを測る。口縁部端部が内方へわずかにつまみだされる。外面にヘラミガキ、内面に 2段放射状ミガキを、底部内面に螺旋状ミガキを施す。1945は底部を欠損する甕で、短く外反する口縁部の端部はわずかに立ち上がり、凹面をもつ。屈曲する頸部に球形の体部をもつ。体部の外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。1944は須恵器の杯蓋で、口径 12.4 cm・器高 3.8 cmを測る。

遺物から、飛鳥時代Ⅱに該当すると思われる。

[242井戸] (図306・307・376 図版83-1)

5-4区の南西部の 117 溝



- 1 褐灰 10YR5/1 粘土～シルト
- 2 黄灰 2.5Y6/1 粘土～シルト
- 3 褐灰 10YR5/1 粘土～シルト 細礫含む
- 4 灰 N5/0 粘土～シルト
- 5 褐灰 10YR4/1 シルト～微砂
- 6 褐灰 10YR5/1 粘土シルト
- 7 黄灰 2.5Y5/1 粘土～シルト
- 8 褐灰 10YR4/1 粘土～シルト
- 9 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混じり粘土～シルト
- 10 褐灰 10YR 4/1 シルトブロック混粗砂
- 11 黄灰 2.5Y 4/1 粘土～シルト
- 12 灰 7.5Y4/1 粘土～シルト
- 13 黄灰 2.5Y 4/1 粘土～シルト
- 14 灰 7.5Y 4/1 粘土～シルト
- 15 灰 7.5Y 5/1 粘土～シルト 16 2.5Y6/1 黄灰 粘土～シルト
- 17 褐灰 10YR5/1 粘土～シルト シルトブロック含む
- 18 にぶい黄橙 10YR6/3 粘土～微砂
- 19 暗灰黄 2.5Y5/2 粘土～シルト

- 20 灰 5Y6/1 シルト～微砂
- 22 明緑灰 7.5GY7/1 シルトブロック混シルト～微砂
- 23 暗灰黄 2.5Y5/2 粘土～シルト
- 24 黒褐 2.5Y3/1 粘土～シルト シルトブロックを含む
- 25 黒褐 10YR3/1 灰オリーブ シルトブロックを含む
- 26 褐灰 10YR4/1 粘土～シルト 粘土ブロックを含む
- 27 黒 10YR2/1 粘土～シルト ブロックを含む
- 28 にぶい黄橙 2.5Y6/4 粘土 シルトブロック含む
- 29 褐灰 10YR5/1 粘土～シルト シルトブロック含む
- 30 黄褐 2.5Y4/1 粘土～シルト シルトブロック含む
- 31 灰 7.5Y5/1 シルトブロック混微砂
- 32 黄灰 2.5Y4/1 粘土～シルト シルトブロック少し含む
- 33 黒 10YR1.7/1 細礫・シルトブロック混微砂
- 34 黒褐 2.5Y3/1 シルトブロック混微砂
- 37 灰オリーブ 5Y5/2 シルト～微砂
- 35 黄灰 2.5Y5/1 シルト～微砂
- 36 黒褐 10YR3/1 シルト～微砂 杭痕
- 38 青灰 5BG6/1 シルトブロック混粘土～シルト
- 39 青灰 5BG6/1 シルト 第5層以下の偽礫多く含む
- 40 明青灰 5BG7/1 シルト 第8～10層偽礫多く含む

図377 5-4区 第3面 1218井戸 平・断面図

[561井戸] (図306・307・376 図版124)

5-4区の西半部の南側で検出された井戸で、92溝に切られているため、詳細は不明である。

遺物は、土師器・黒色土器が出土している。1951は土師器碗で、口径13.0cm・器高4.3cmを測る。口縁部端部はわずかに外反し、内面に段をもつ。内外面にナデを施す。1952は、内黒の黒色土器碗の底部破片である。

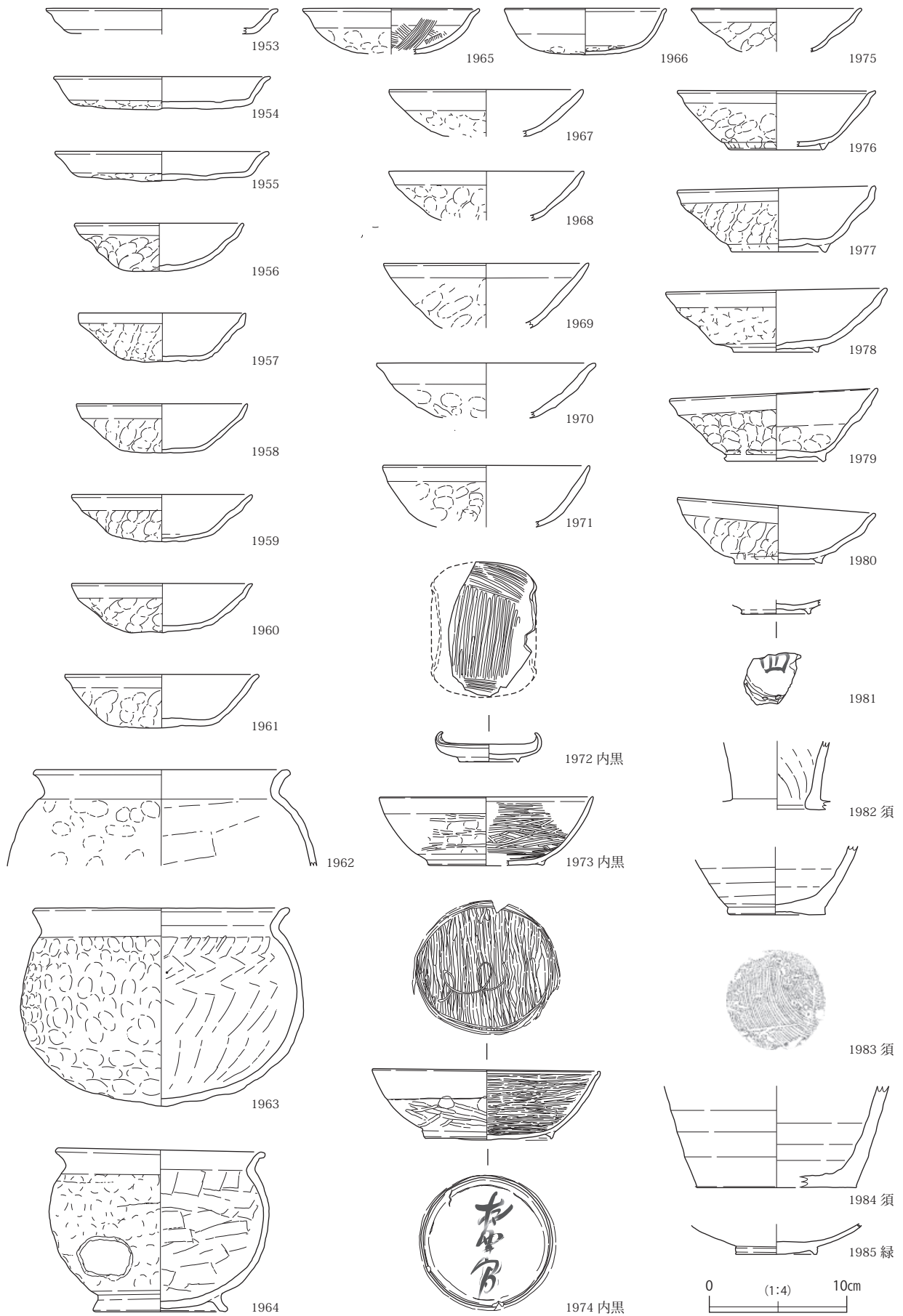


图378 5-4区 第3面 1218井戸 出土遺物

[1218井戸] (図306・307・377・378)

図版82・122・123)

5-4区の南西で検出された不正楕円形の井戸で、長径 2.7 m・短径 2.2 m・深さ 2.2 mを測る。井筒は最下段は一木を削り貫いたもので、下端径が 0.3 m・上端径が 0.5 m・高さ 0.5 mを測り、それから上は、四方に長さ 0.9 m・幅 0.2~0.5 m・厚さ 4 cmの板材を 5 段以上を組み合わせている。

掘形の埋土は、25層に細分されるが、シルトブロックを含む黒褐色の粘土からシルトが主である。井筒の埋土は、15層に細分されるが、褐色の粘土~シルトが主である。

遺物は、掘形から1978の土師器椀が、井筒の最下段からは1956の土師器椀、1962の甕、1982・1983の須恵器の壺があり、下段からは1964の土師器甕があり、それ以外が井筒からの出土である。

土師器には、皿・杯・椀・甕がある。1953~1955は皿で、1954・1955は、口径 15.6 cm・器高 2.4 cm・2.2 cmを測る。1965・1966は杯で、前者は口縁部端部がわずかに外反し、内面にハケメを施す。

1956~1961・1967~1971・1975~1981は椀で、1976~1981は高台が付くものである。

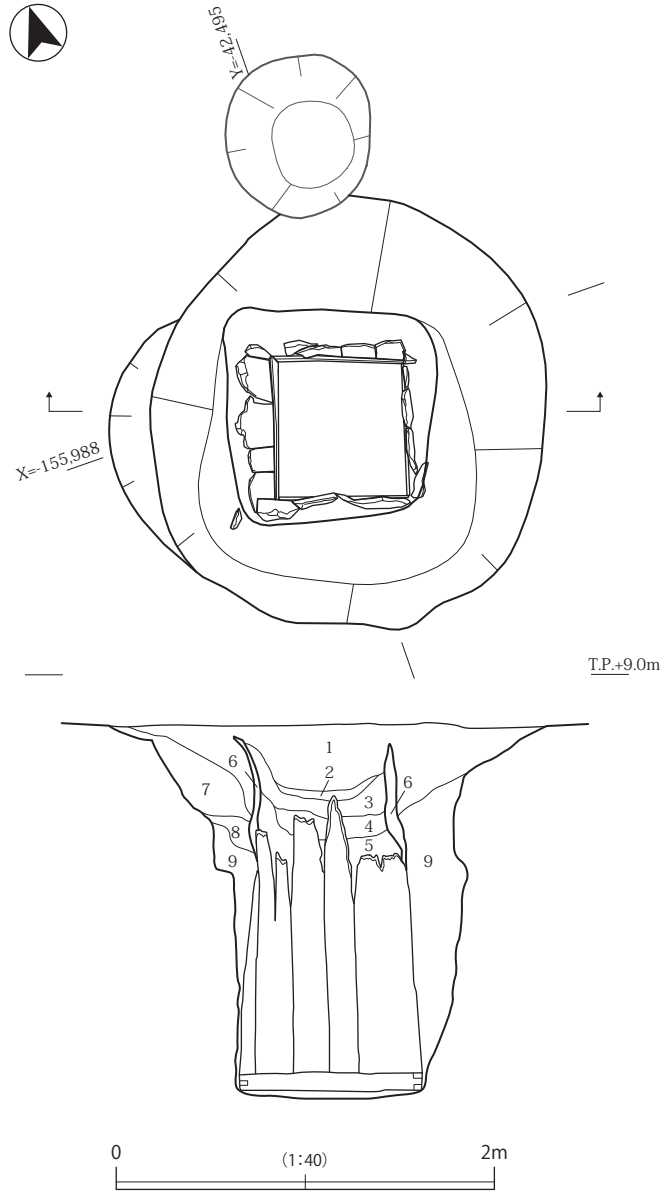
1981は底部外面に墨書が施されるが小破片のため、詳細は不明である。

1962~1964は甕で、1963は口径 18.4 cm・器高 14.6 cmを測る。やや扁平な体部に丸底のものである。体部外面に指押さえを残す、内面に指ナデを施す。1964はやや小型で口径 15.2 cm・11.8 cmを測る。やや扁平な体部に、高台をち、調整は前述の甕と同様である。体部下半に焼成後の穿孔がある。

須恵器には壺がある。1982は頸部破片で、1983・1984は底部破片である。

黒色土器には、耳皿と椀がある。1972は小型の耳皿で、底部内面に平行のヘラミガキを施す。

1973・1974は内黒の椀で、いずれも、内外面にヘラミガキを施す。後者は、底部内面に螺旋状のヘラミガキを追加しており、底部外面に墨書がある。墨書は『相野宮』と記載されており、近所に宮があった可能性がある。1985は、緑釉陶器の皿の口縁部を欠くものである。



- 1 黒褐 10YR3/2 シルト混細砂
粗砂~極粗砂多く含む
- 2 黒褐 2.5Y3/1 細砂混シルト 粗砂少量含む
- 3 黒褐 2.5Y3/2 粘土・細砂混シルト
粗砂~極粗砂少量含む
- 4 黒褐 2.5Y3/2 粘土・中砂混シルト 粗砂多く含む
- 5 黒褐 2.5Y3/2 粘土混シルト 粗砂少量含む
- 6 褐灰 10YR4/1 細砂混シルト 粗砂少量含む 井戸枠痕跡
- 7 褐灰 10YR4/1 中砂混シルト 粗砂多く含む
- 8 黄灰色 2.5Y4/1 粗砂混シルト 偽礫含む
- 9 灰 5Y4/1 シルト混細砂~中砂 第5~11層偽礫含む

図379 5-2区 第3面 726井戸 平・断面図

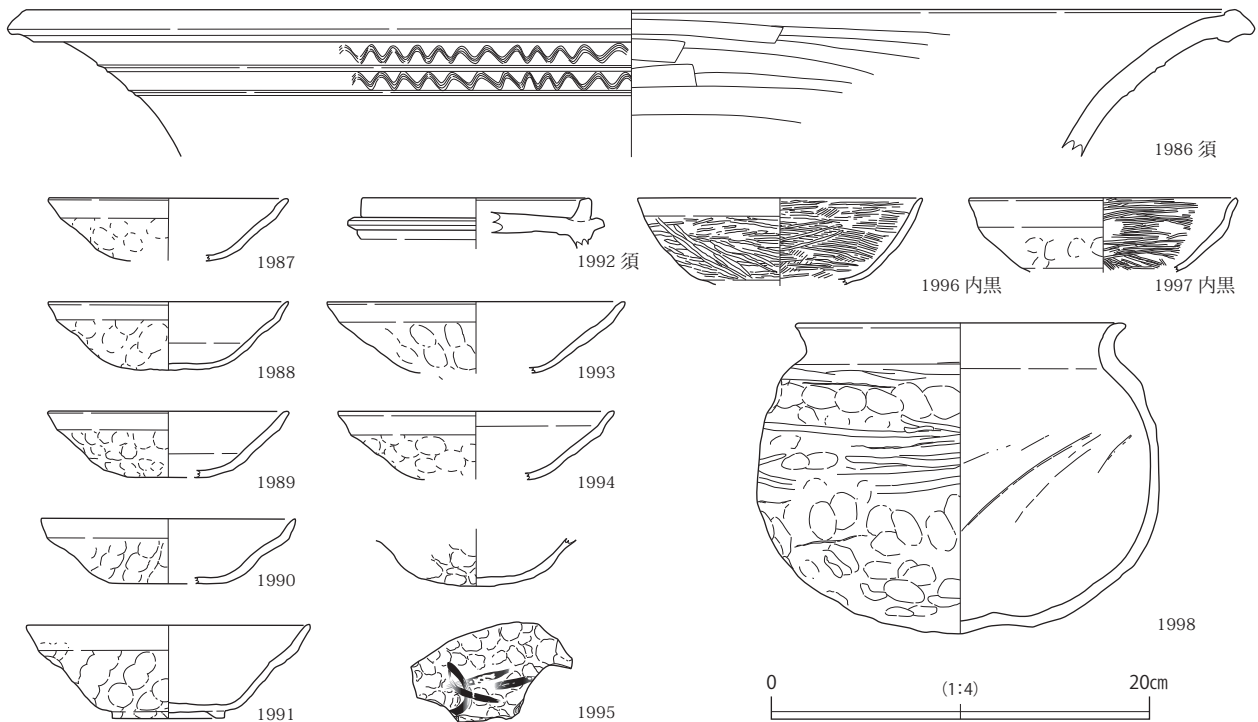


図380 5-2区 第3面 726井戸 出土遺物

〔726井戸〕(図306・310・379・380 図版83-2・111)

5-2区の中央部の南半に出検出された不正楕円形の井戸で、掘立柱建物61~63の東側、掘立柱建物66の北側に位置する。長径2.25m・短径2.1m・深さ2.0mを測る。井筒は長さ1.0mで1辺8cmの方形の棒材を方形に組み合わせた上に、長さ1.8m以上・幅14~35cm・厚さ5cmの板材を数枚組み合わせている。

掘形埋土は3層あり、シルトが混じる灰色の細砂から中砂が主である。井筒埋土は5層で、粘土が混じる黒褐色のシルトが主である。

遺物は、1992・1117が掘形から、1998が井戸底から出土する以外は、井筒内からの出土である。

土師器には、椀・甕が出土している。

1987~1991・1993・1995は椀で、1991は高台が付き、口径14.8cm・器高4.9cmを測る。1995は底部外面に墨書が施されるが小破片のため、詳細は不明である。甕は完形のもので、口径16.9cm・器高16.4cmを測る。体部外面に指ナデ、内面にヘラケズリ状ナデを施す。体部外面に指押さえを残し、煤が多量に付着する。

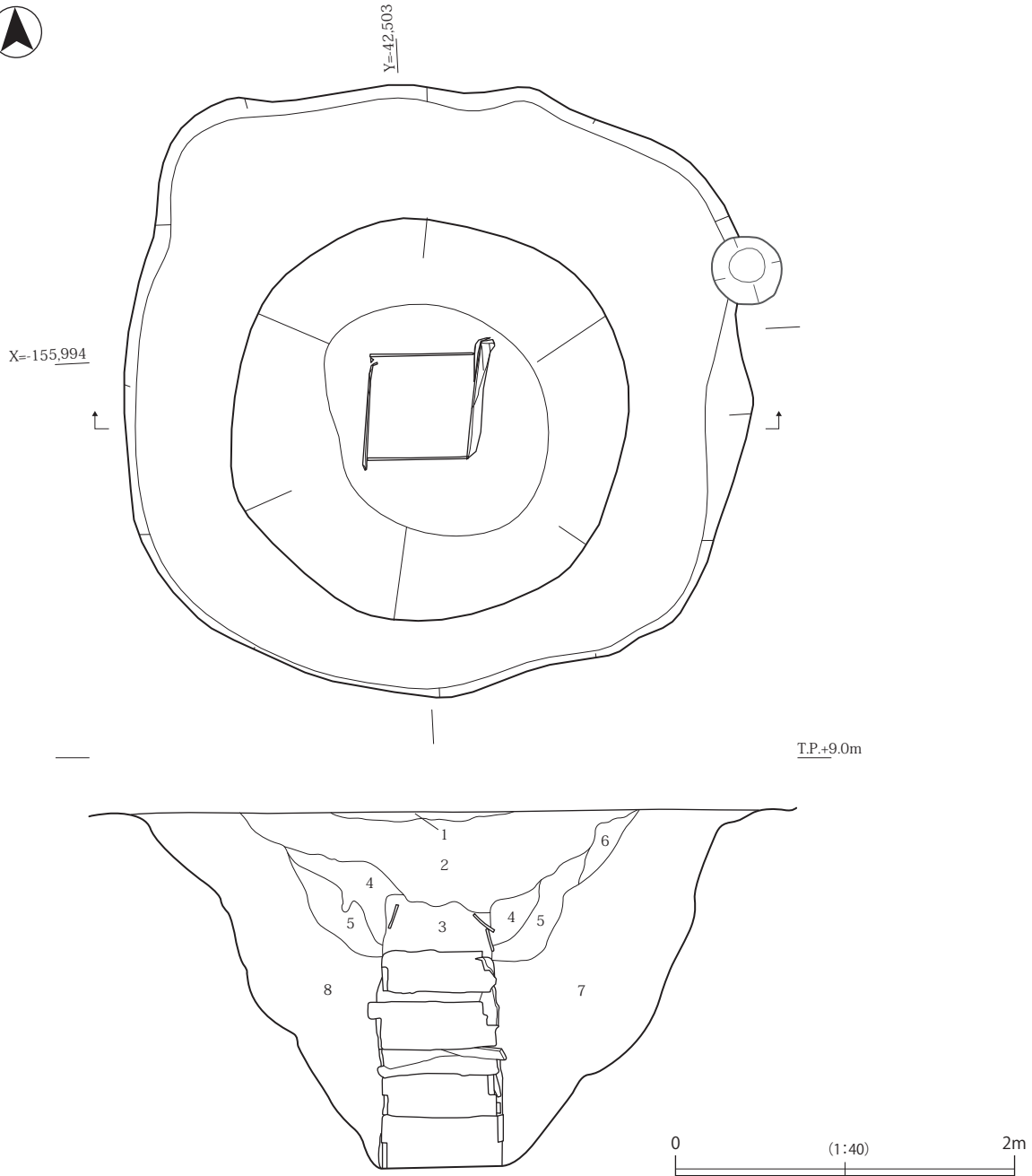
須恵器には、甕・円面硯がある。1986は大型の口縁部を残すもので、大きく開く口縁部端部がわずかに上下に肥厚し、面をもつ。波状紋2帯と凹線2条を交互に施す。1992は、円面硯の上半部を残す。口径11.6cmを測る。

黒色土器には、1996・1997の内黒の椀がある。

〔805井戸〕(図306・310・381・382 図版83-3)

5-2区の南端中央部で検出された不正円形の井戸で、掘立柱建物61~63の南側にあたり、掘立柱建物66に切られている。径3.6m・深さ2.1mを測る。井筒は、長さ0.7m・幅0.3mの板材を四方に組み合わせ5段以上積み重ねたものである。

掘形埋土は5層に細分され、極細砂が混じる暗灰黄色のシルトないしは、細砂が混じる黒褐色のシル



- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混シルト～細砂 | 5 黒褐 10YR3/1 中砂～粗砂混シルト 第5層偽礫含む |
| 2 暗灰黄 2.5Y4/2 中砂～粗砂混シルト 第5層偽礫含む | 6 暗灰黄 2.5Y5/2 極細砂混シルト 第5～7層偽礫多く含む |
| 3 黒褐 2.5Y3/1 シルト(水つき) | 7 黒褐色 2.5Y3/1 細砂混シルト 第5～11層偽礫多く含む |
| 4 褐灰 10YR4/1 シルト混中砂 第5層偽礫多量に含む
(下部に大きな偽礫多い 上部は偽礫少ない) | 8 灰黄褐 10YR5/2 シルト混中砂
第5～7層偽礫多量に含む |

図381 5-2区 第3面 805井戸 平・断面図

トである。

遺物は、土器と木製品が出土している。

1999・2000は土師器小皿で、口径 8.9 cm・器高 1.8 cmを測る。2002～2004は椀で、いずれも、小破片である。2005は羽釜の口縁部破片で、内傾してわずかに外反する口縁部の端部が、わずかに外方へつまみ出され上端面をもつ。外面にナデ、口縁部内面にハケメ、体部内面に指押さえを残す。外面に破損後煤が多量に付着する。2001は内黒の黒色土器椀である。

2006は下駄の3 / 4を残し、長さ 20.4 cm・推定幅 8 cm・厚み 2.8 cmを測る。2枚の歯は削り出されて

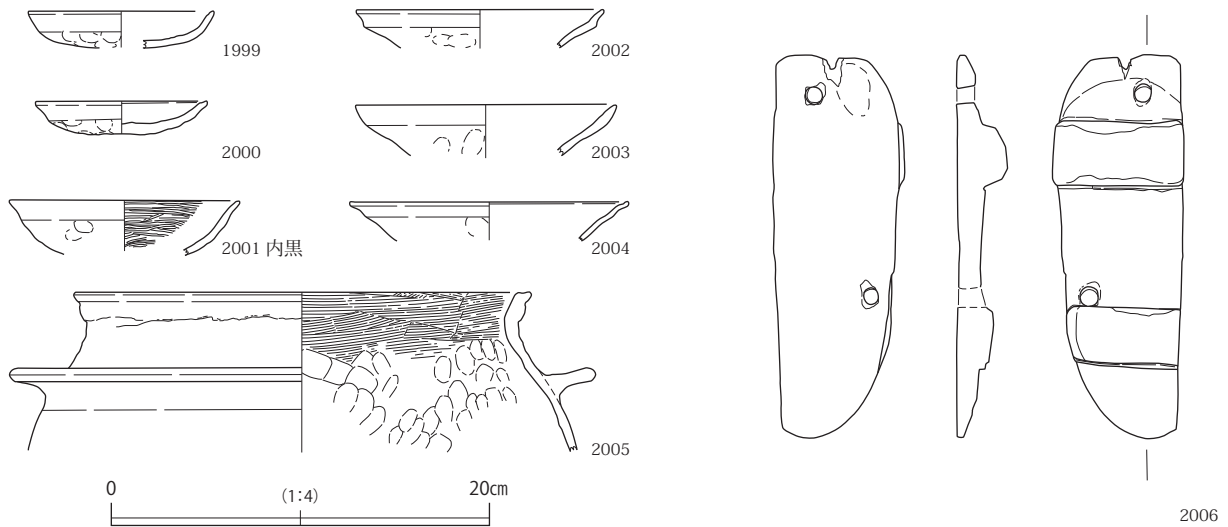


図382 5-2区 第3面 805井戸 出土遺物

いる。

〔3834井戸〕 (図383)

5-1区の北東端、北壁断面で検出された井戸で、平面形は不明である。深さ 1.0 mを測る。埋土は3層で、粗砂が混じるにぶい黄褐色のシルトが主である。

遺物は、土師器・黒色土器などがわずかに出土した。

2007・2008は土師器小皿で、口径 9.2 cm・器高 1.6 cmを測る。2009は内黒の、2010は両黒の黒色土器碗である。

土坑は、大小様々なものが散在する。

〔2129土坑〕 (図306・307・384 図版84-2・115)

5-3区の北東端で検出された不定形の土坑である。長さ 3.2 m・幅 2.2 m・深さ 0.35 mを測る。

埋土は、5層に細分されるが、シルトが混じる暗灰黄色の中砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器が出土している。2018は土師器皿で、2019は碗である。2020は須恵器杯Hで、2021は口縁部を欠く、甌である。

〔2119土坑〕 (図306・308・384 図版84-6)

5-3・4区の西半部で検出された不定形の土坑で、長さ 4.8 m・幅 4.2 mを測る。

遺物は、土師器・黒色土器などがわずかに出土している。2022は、須恵器壺の底部破片である。

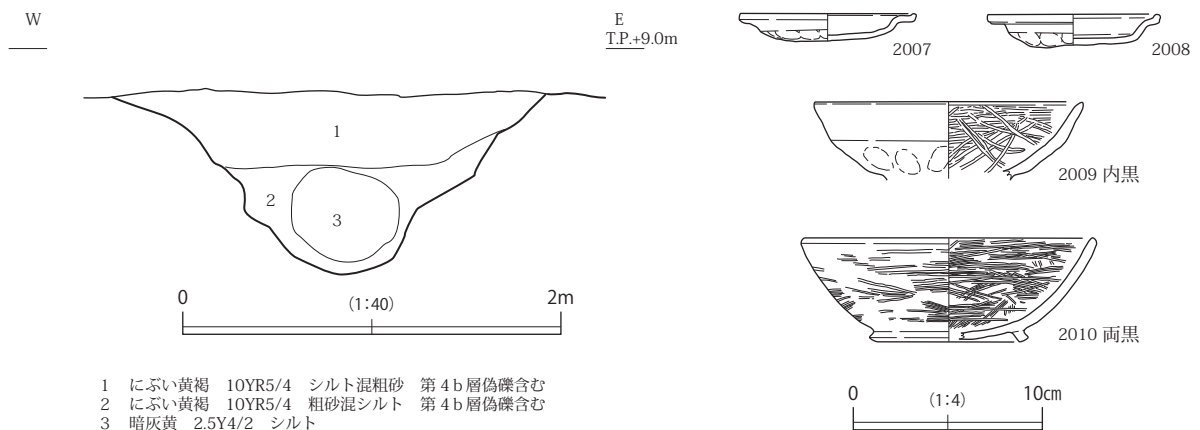
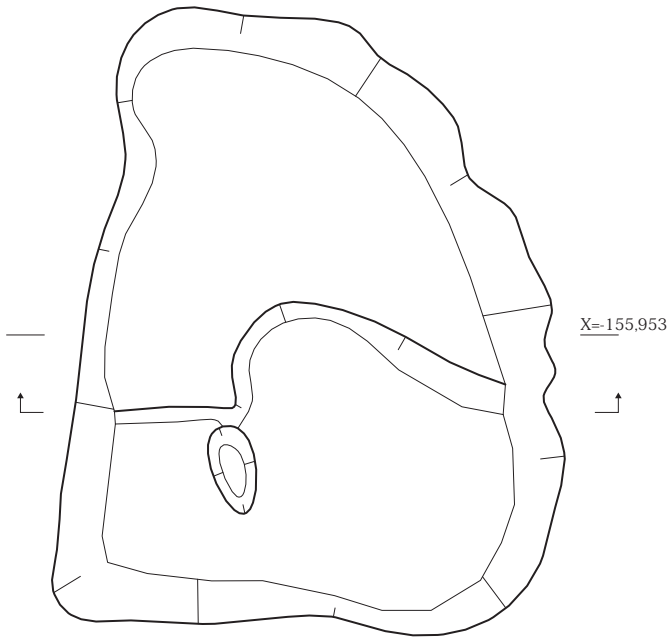


図383 5-1区 第3面 3834井戸 断面図 出土遺物

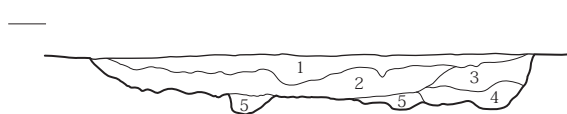


2129土坑

Y=42,408



X=155,953

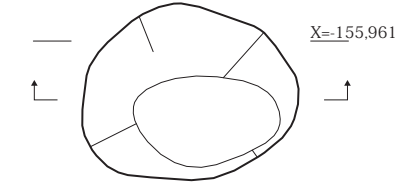


T.P.+8.8m

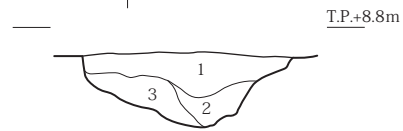


2208土坑

Y=42,428

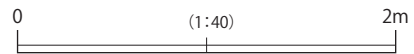


X=155,961

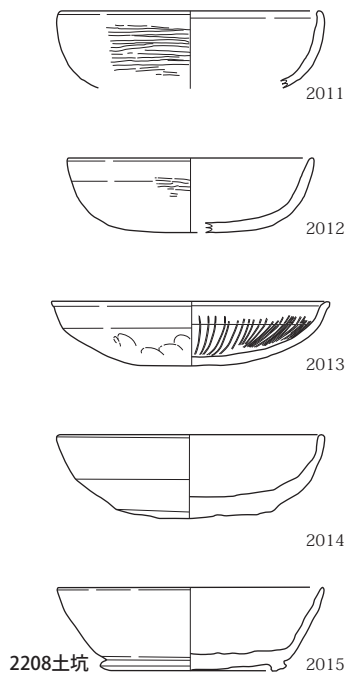


T.P.+8.8m

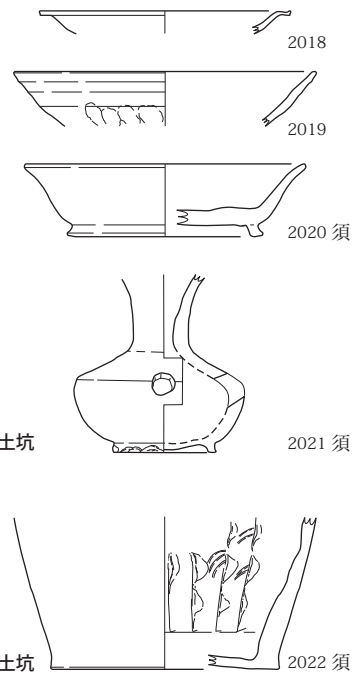
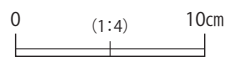
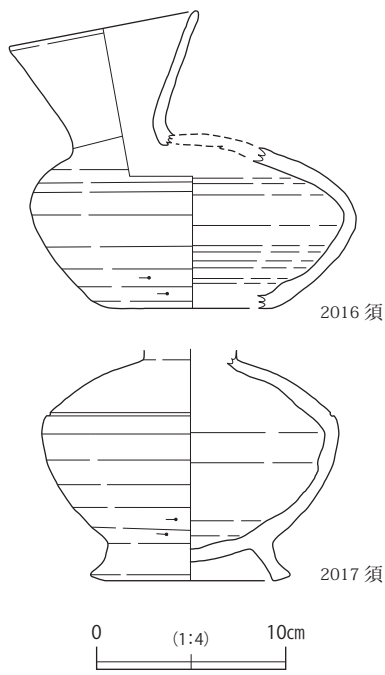
- 1 黒褐 10YR3/2 シルト混粗砂
- 2 黒褐 10YR3/2 シルト混細砂 第7層偽礫多く含む
- 3 黒褐 10YR2/3 シルト混細砂 第7層小偽礫多く含む



- 1 にぶい黄褐 10YR4/3 シルト混中砂 粗砂多く含む
- 2 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト混中砂 第8層偽礫多く含む
- 3 オリーブ褐 2.5Y4/3 シルト~細砂 第8層偽礫含む
- 4 黒褐 2.5Y3/2 細砂 第9層偽礫含む
- 5 にぶい黄褐 10YR4/3 細砂 第10層偽礫含む



2208土坑



2129土坑

2119土坑

図384 5-3区 第3面 2129・2208土坑 平・断面図 出土遺物

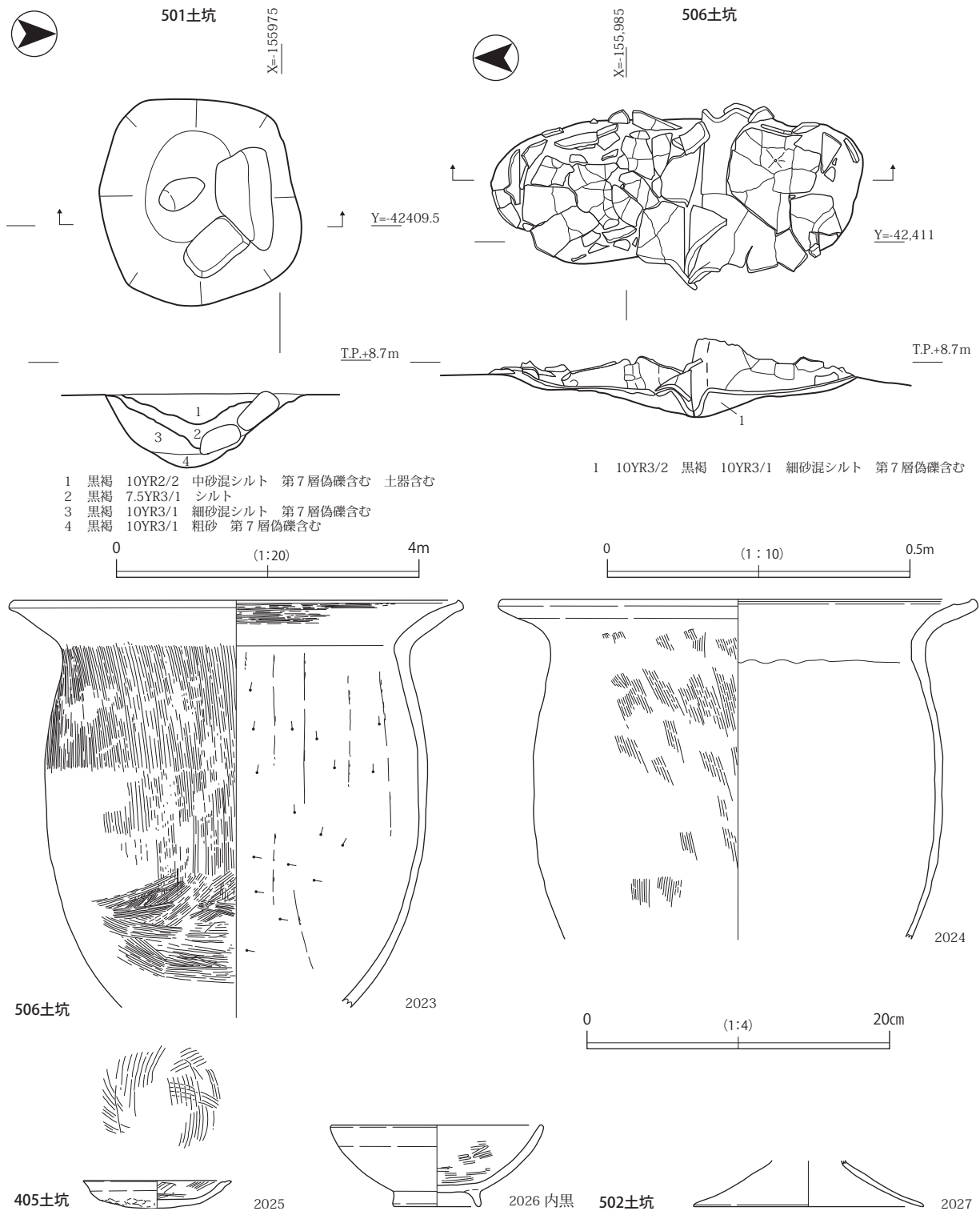


図385 5-6区 第3面 501・506土坑 平・断面図 405・502・506土坑 出土遺物

[2208土坑] (図306・308・384 図版115)

5-3区の東半部で検出された不正楕円形の土坑である。長径1.15m・短径0.95m・深さ0.3mを測る。埋土は3層で、シルトが混じる黒褐色の細砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器が出土している。

2011~2013は土師器杯である。2013は、口径14.4cm・器高3.4cmを測る。内面に放射状のヘラミガキを施す。2014は須恵器杯で、口径13.8cm・器高4.6cmを測る。2015は杯Hで、口径13.8cm・器高4.6cm

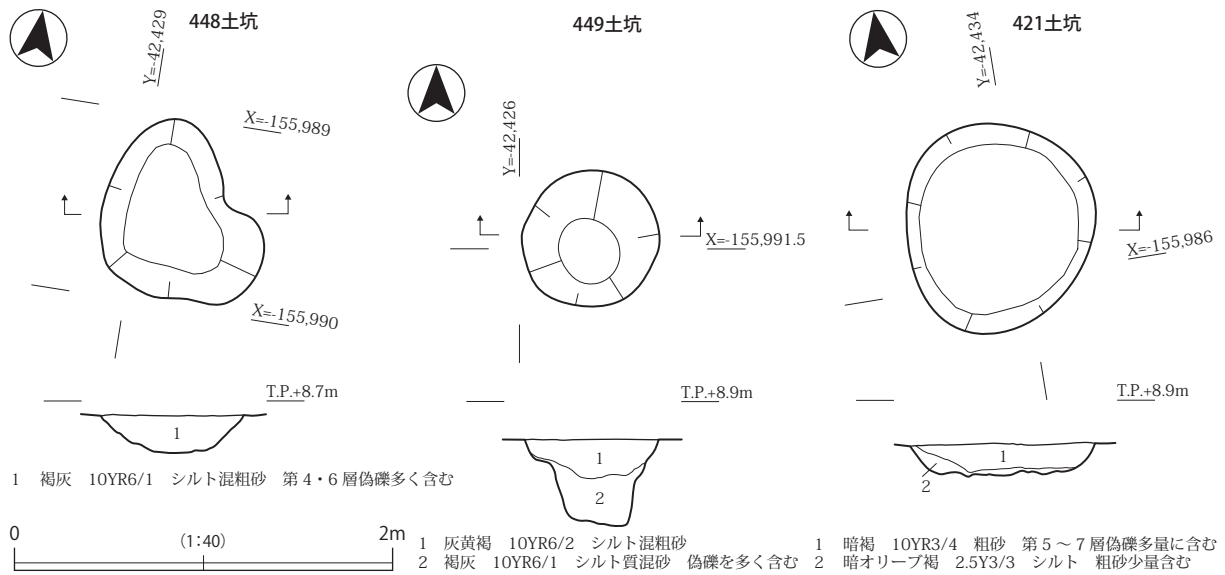


図386 5-4区 第3面 421・448・449土坑 平・断面図

を測る。2016は平瓶で、口径 8.0 cm・器高 16.2 cmを測る。2017は壺の口頸部を欠損するもので、高台が付く。

〔501土坑〕(図306・308・385 図版87-5)

5-4区の北東部で検出された不正楕円形である。長径 0.7 m・短径 0.6 m・深さ 0.25 mを測る。埋土は4層で、黒褐色の粗砂が主である。遺物は、自然石が2個出土している。

〔506土坑〕(図306・308・385 図版87-1・125)

5-4区の北東部で検出された土坑で、検出された時点で、土器が露出していたため、平面形は不明である。埋土は1層で、細砂が混じる黒褐色のシルトが1層である。

遺物は、2個体の甕が口縁部を合わせて出土している。2023・2024は土師器甕で、いずれも、体部外面にハケメを施し、前者は内面にヘラケズリを、後者はナデを施す。

〔405・502土坑〕(図385)

405土坑からは、2025の土師器小皿と2026の内黒の黒色土器が出土し、502土坑からは、2027の古墳時代前期の土師器高杯の脚台部が出土している。

〔421土坑〕(図306・308・386)

5-4区の東半部で検出された不正楕円形の土坑で、掘立柱建物35と重複している。長径 1.1 m・短径 1.0 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は2層で、暗褐色の粗砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器・瓦などがわずかに出土している。

〔448土坑〕(図306・308・386)

5-4区の東半部で検出された不定形の土坑で、掘立柱建物35と重複している。長さ 0.95 m・幅 0.9 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は1層で、シルトが混じる灰褐色の細砂である。

遺物は、土師器・黒色土器などの小破片が出土している。

〔449土坑〕(図306・308・386)

5-4区の東半部の掘立柱建物35の東側で検出された円形の土坑で、径 0.75 m・深さ 0.5 mを測る。埋土は2層で、黒褐色のシルトが主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

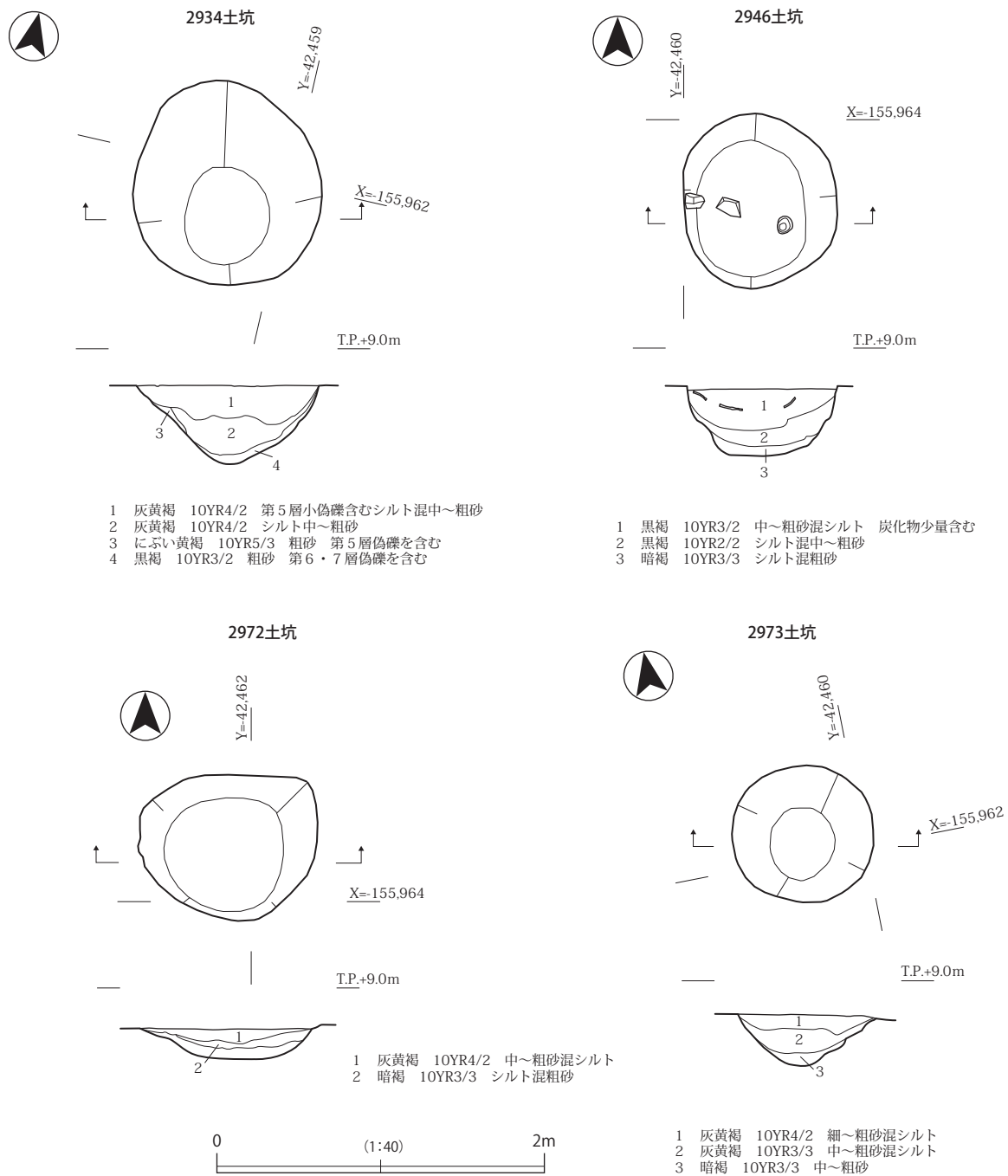


図387 5-3区 第3面 各土坑 平・断面図

〔2934土坑〕（図306・307・387・388 図版84-3）

5-3区の南西部で検出された不正楕円形の土坑で、掘立柱建物42と重複している。長径1.25m・短径1.1m・深さ0.5mを測る。埋土は4層で、シルトが混じる灰黄褐色の中砂から粗砂が主である。

遺物は、土師器・黒色土器がわずかに出土している。2028は土師器小皿で、2029は内黒の黒色土器碗である。

〔2946土坑〕（図306・307・387・388）

5-3区の南西部で検出した不正楕円形の土坑で、掘立柱建物41・42と重複している。長径1.05m・短径0.9m・深さ0.4mを測る。埋土は3層に細分され、シルトが混じる黒褐色の中砂から粗砂が主である。

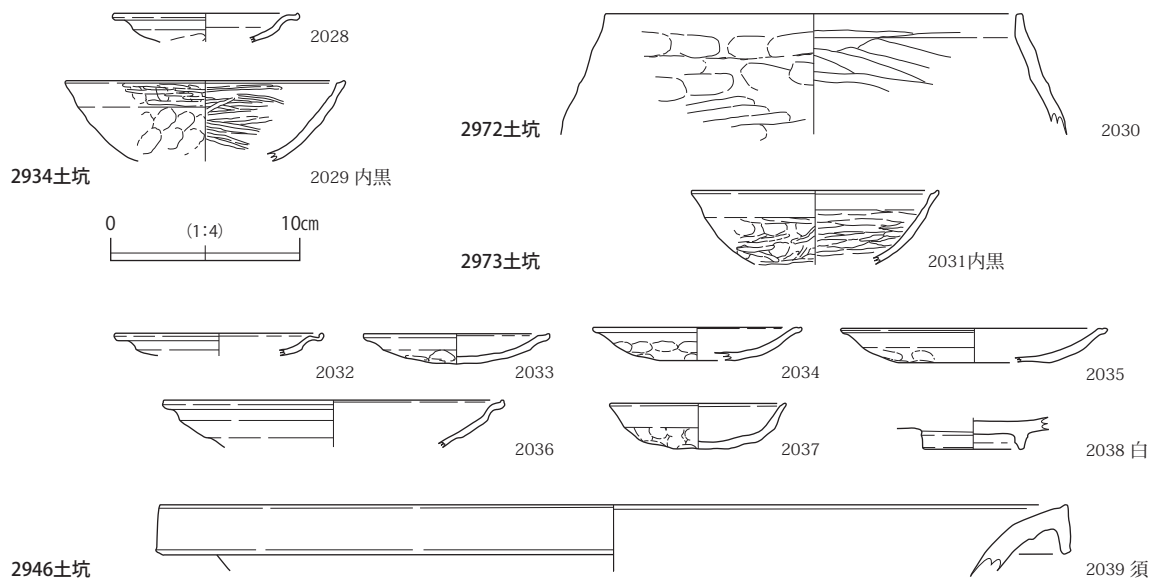


図388 5-3区 第3面 各土坑 出土遺物

遺物は、土師器・須恵器などが出土している。2032～2034・2037は土師器小皿で、2035は皿、2036は杯である。2037はほぼ完形で、口径 9.4 cm・器高 2.4 cmを測る。2039は須恵器の大型の甕の口縁部で、2038は白色土器の底部破片である。

〔2972土坑〕(図306・307・387・388)

5-3区の南西部で検出した不正楕円形の土坑で、掘立柱建物41・42と重複している。長径 1.1 m・短径 1.0 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は2層に細分され、シルトが混じる暗褐色の粗砂が主である。

遺物は、土師器がわずかに出土している。2030は土師器の甕の口縁部破片である。

〔2973土坑〕(図306・307・387・388)

5-3区の南西部で検出された不正円形の土坑で、2934土坑の西側に隣接し、掘立柱建物42と重複している。径 0.8 m・深さ 0.3 mを測る。埋土は3層で、シルトが混じる黒褐色の中砂が主である。

遺物は、土師器・黒色土器などが出土している。2031は内黒の黒色土器碗である。

〔169・170土坑〕(図306・307・389)

5-4区の南西端で検出された土坑で、いずれも、南半部は調査区外へ延びる。径 0.6 m・0.85 m、深さ 0.1 m・0.15 mを測る。埋土は、169土坑が2層で、細砂が混じる暗褐色のシルトで、170土坑が4層で、細砂と粗砂が混じる暗灰黄色のシルトが主である。

遺物は、169土坑から須恵器の小破片が1点のみ、170土坑から、土師器・須恵器・黒色土器などの小破片が出土している。

〔171土坑〕(図306・307・389)

5-4区の南西部で検出された不正楕円形の土坑で、長径 1.1 m・短径 1.0 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は2層で、暗灰黄色のシルトが主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。2040は内黒の黒色土器碗である。

〔172土坑〕(図306・307・389)

5-4区の南西部の掘立柱建物48の南東部に位置する、不正楕円形の土坑である。長径 1.2 m・短径 1.1 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は2層で、黒褐色の粘土からシルトが主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

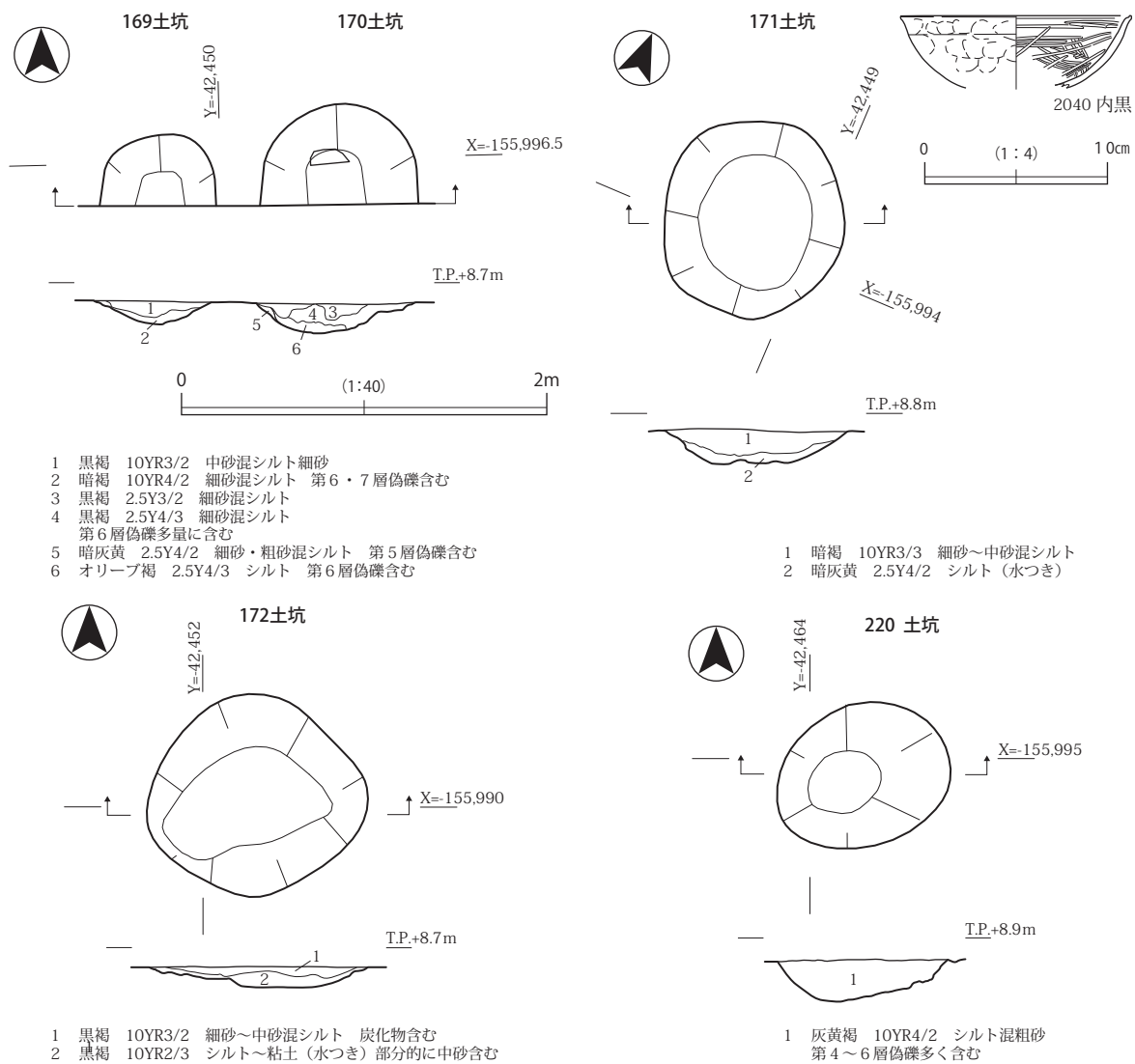


図389 5-4区 第3面 各土坑 平・断面図 171土坑 出土遺物

[220土坑] (図306・307・389)

5-4区の南西部で検出された楕円形の土坑である。長径 1.0 m・短径 0.8 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は、シルトが混じる灰黄褐色の粗砂が1層である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

[49土坑] (図306・307・390)

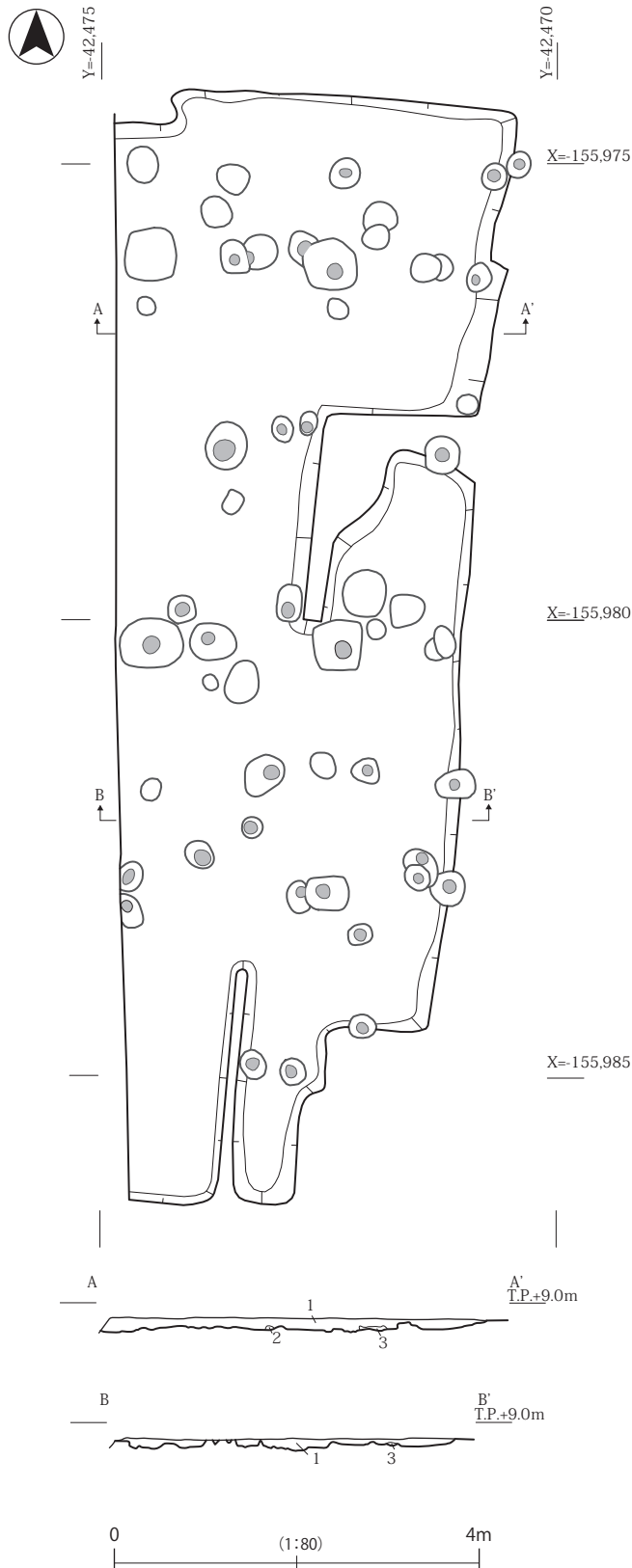
5-4区の西端部で検出された不定形の落込み状の土坑で、西側は調査区外へ延びる。長さ 6.0 m・検出幅 2.2 m・深さ 0.05 mを測る。埋土は3層で、細砂から粗砂が混じるにぶい黄褐色のシルトが主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

[2839土坑] (図306・309・391)

5-1区の東南部で検出された不正楕円形の土坑である。長径 0.95 m・短径 0.85 m・深さ 0.3 mを測る。埋土は3層で、中砂から粗砂が混じる暗褐色のシルトが主である。

遺物は、土師器・黒色土器の小破片が各1点出土している。



- 1 にぶい黄褐 10YR5/4 細砂～粗砂混シルト 偽礫少量含む
- 2 灰黄 2.5Y7/2 シルト混細砂 小偽礫含む
- 3 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混細砂 偽礫含む

図390 5-4区 第3面 49土坑 平・断面図

[2866土坑] (図306・309・391)

5-1区の西端部で検出された、不正楕円形の土坑で、長径 1.5 m・短径 1.3 m・深さ 0.3 mを測る。埋土は 4層で、暗褐色の粗砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。2041は内黒の黒色土器鉢である。

[2879土坑] (図306・309・391)

5-1区の東端部で検出された不定形の土坑である。東側の一部を側溝に切られる。長径 1.15 m・短径 0.95 m・深さ 0.25 mを測る。埋土は 3層で、暗褐色の粗砂が主である。

[2971土坑] (図306・309・391)

5-1区の北西部で検出された不正円形の土坑である。径 0.75 m・深さ 0.05 mを測る。埋土は、シルトが混じるにぶい黄褐色の中砂が 1層である。

遺物は出土していない。

[725土坑] (図306・310・392)

5-2区の東半部の 726 井戸の北側に隣接して検出された不正楕円形の土坑で、井戸を切っている。長径 0.9 m・短径 0.75 m・深さ 0.25 mを測る。埋土は 2層でシルトが混じる黒褐色の細砂が主である。

遺物は、土師器・黒色土器などが出土している。

2048～2053は土師器小皿で、2050と2053はほぼ完形である。口径 9.3 cm・9.6 cm、器高 1.8 cm・2.7 cmを測る。

2054は内黒の黒色土器椀で、ほぼ完形である。口径 16.0 cm・器高 6.6 cmを測る。内外面にヘラミガキを施す。

[773土坑] (図306・310・392)

5-2区中央部の南側で検出された不正楕円形で、掘立柱建物66と重複する。長径 1.0 m・短径 0.9 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は 2層で、黒褐色の細砂が主である。

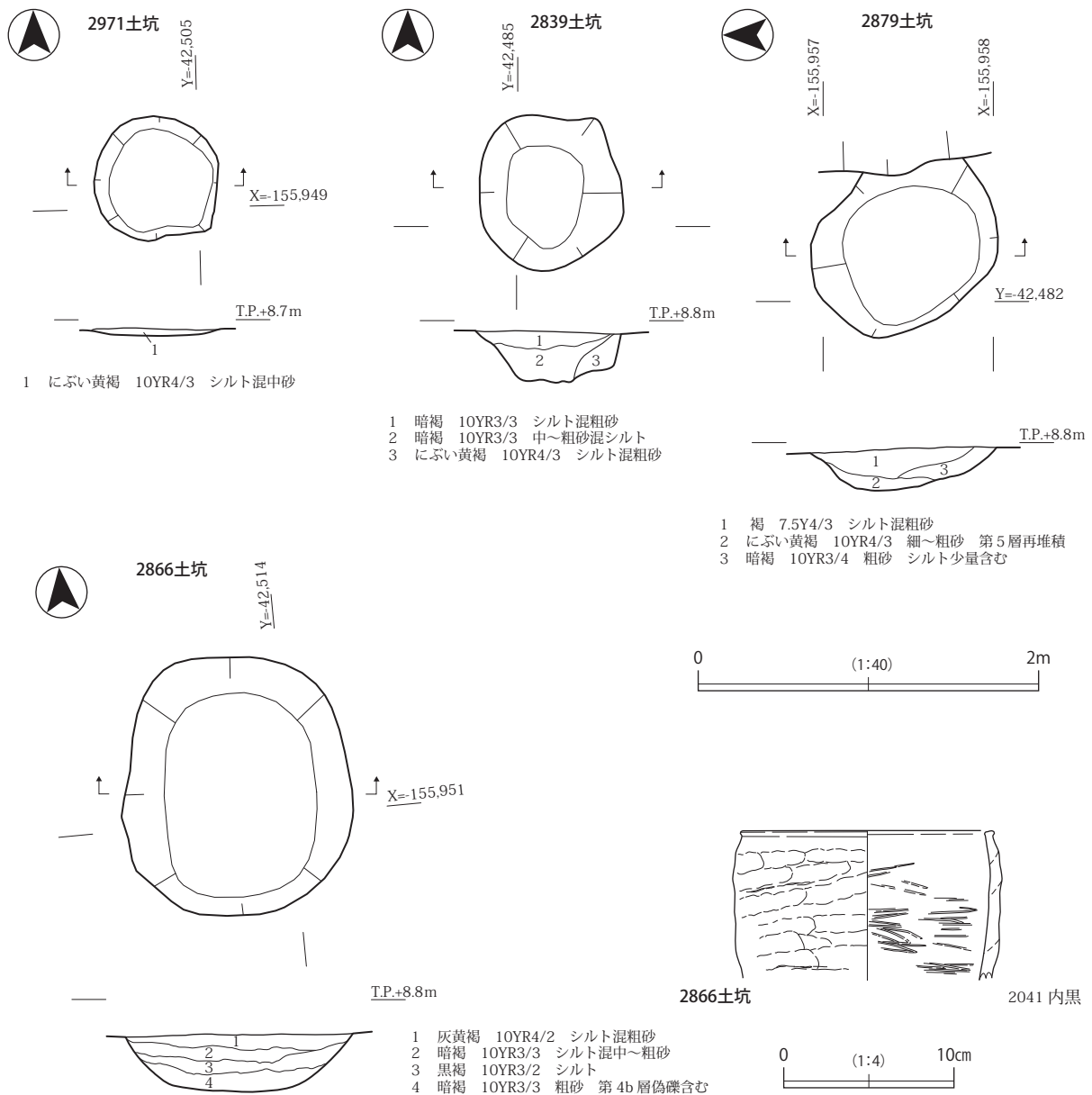


図391 5-1区 第3面 各土坑 平・断面図 2866土坑 出土遺物

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。2057・2058は土師器甕の口縁部破片で、体部外面に指押さえを残し、内面に指ナデを施す。後者は外面に煤が付着する。2056は内黒の黒色土器鉢である。

〔777土坑〕(図306・310・392)

5-2区の中央南半で検出された不正楕円形の土坑で、掘立柱建物66と重複する。長径 0.8 m・短径 0.75 m・深さ 0.15 mを測る。埋土は2層で、暗灰黄色のシルトが主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器がわずかに出土している。2046は土師器杯である。

〔817土坑〕(図306・310・392)

5-2区の南西部で検出された楕円形の土坑で、813溝を切っている。長径 1.8 m・短径 1.1 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は黒褐色の細砂が1層である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器がわずかに出土している。2047は、土師器碗の底部破片である。

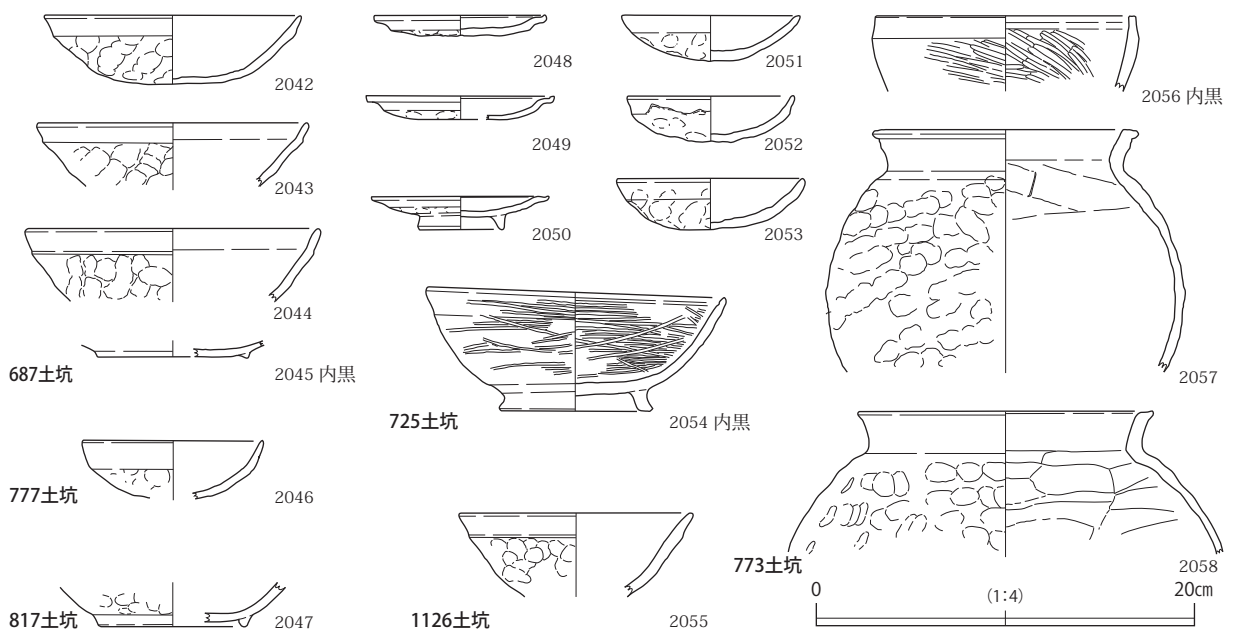
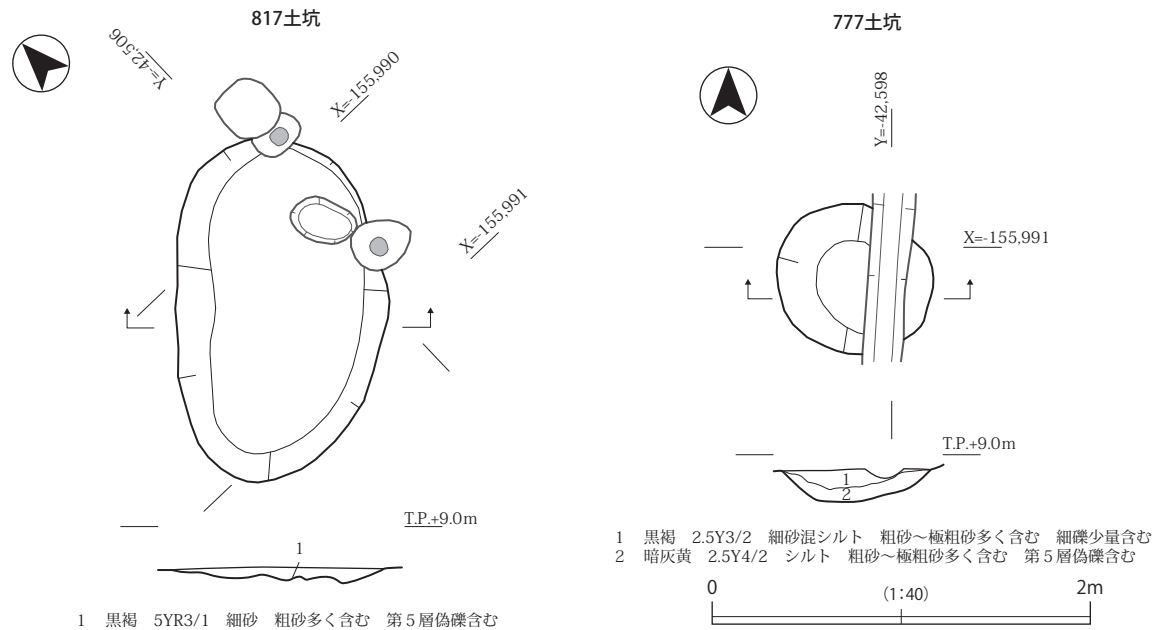
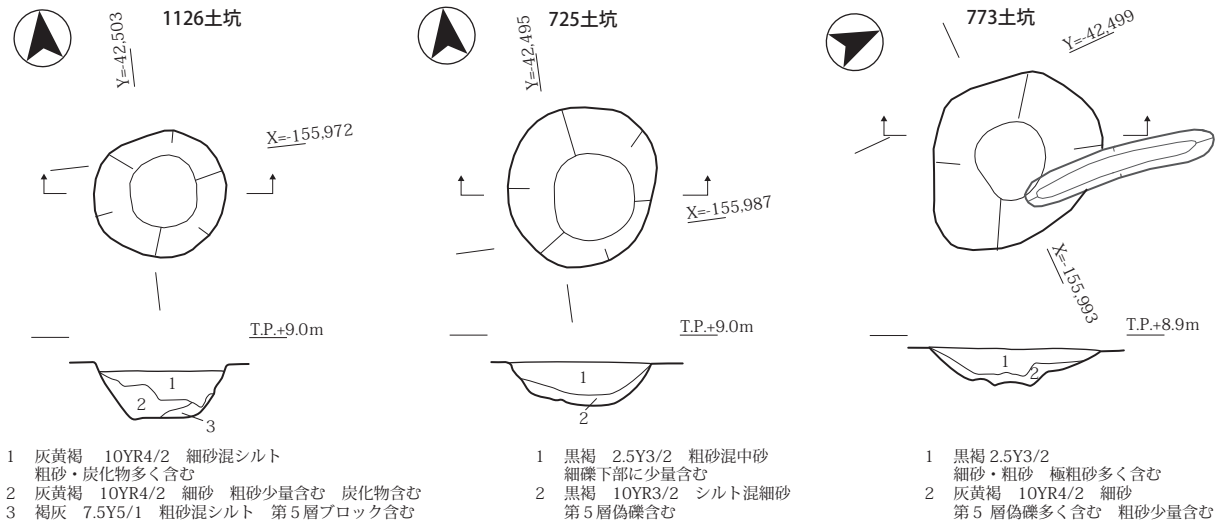


図392 5-2区 第3面 各土坑 平・断面図 出土遺物

〔1126土坑〕（図306・310・392）

5－2区の西北部で検出された不正円形の土坑で、988溝を切り、掘立柱建物60と重複している。径0.65m・深さ0.25mを測る。埋土は3層で、炭化物を含む灰黄褐色の細砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器がわずかに出土している。2055は土師器碗である。

〔687土坑〕（図306・310・392・393）

5－2区の東半部で検出された不定形な土坑である。長さ2.4m・幅2.0m・深さ0.1mを測る。埋土は、シルトが混じる灰黄褐色の極細砂が1層である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。2042～2044は、土師器碗で、2045は内黒の黒色土器碗の底部を残すものである。

〔899・900土坑〕（図306・310・393・394 図版84－5）

5－2区の中央部の北半で検出された不定形の土坑で、899土坑が900土坑を切っており、また、掘立柱建物61・62を切る。

899土坑は、長さ1.75m・幅1.5m・深さ0.3mを測る。埋土は4層で、黒褐色の細砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

2060・2064は土師器小皿で、2065は杯、2061～2063は碗で、2059は甕である。2066は須恵器の小型壺の口頸部を欠損するものである。2067は両黒の黒色土器皿で、2068・2069は、内黒の碗である。2070は鍛造の小型の有肩袋状鉄斧で、刃部を欠損するものである。長さ6.0cm・幅3.7cmを測る。

900土坑は、長さ3.6m・幅2.4m・深さ0.1mを測る。埋土は2層で、炭化物を含み、シルトが混じる灰黄褐色の細砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。2071・2072は土師器皿で、2075は碗、2073は甕、2074は大型の鉢である。2076・2077は内黒の黒色土器碗である。

〔1015土坑〕（図306・310・395 図版111・126）

5－2区の南西端部で検出された不定形の土坑で、大畦畔や1020溝に切られている。長さ2.8m・幅2.1m・深さ0.25mを測る。2段掘りで、中央部がさらに窪む。

埋土は11層に細分されるが、褐灰色の粗砂やシルトが主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。2080は土師器皿で、2079は杯である。2081～2085は土師器碗で、高台が付くものと付かないものがある。2078は甕で、2086は鉢の底部破片、2088は竈の小破片である。

須恵器には、2092の小型壺の口頸部を残すものと、2087の大型の甕の口頸部破片がある。

2089・2090は、内黒の黒色土器碗である。

2091は越州窯の青磁碗である。

〔1092土坑〕（図306・310・397）

5－2区の北西部で検出された不正楕円形の土坑で、掘立柱建物60と重複する。

長径0.8m・短径0.7m・深さ0.4mを測る。埋土は3層で、シルトが混じる暗灰黄色の中砂が主である。遺物は、土師器・黒色土器などが出土している。2119は土師器小皿で、2120は内黒の黒色土器鉢である。

〔1094土坑〕（図306・310・397 図版111）

5－2区の北西部で検出された不正楕円形の土坑で、掘立柱建物60と重複する。

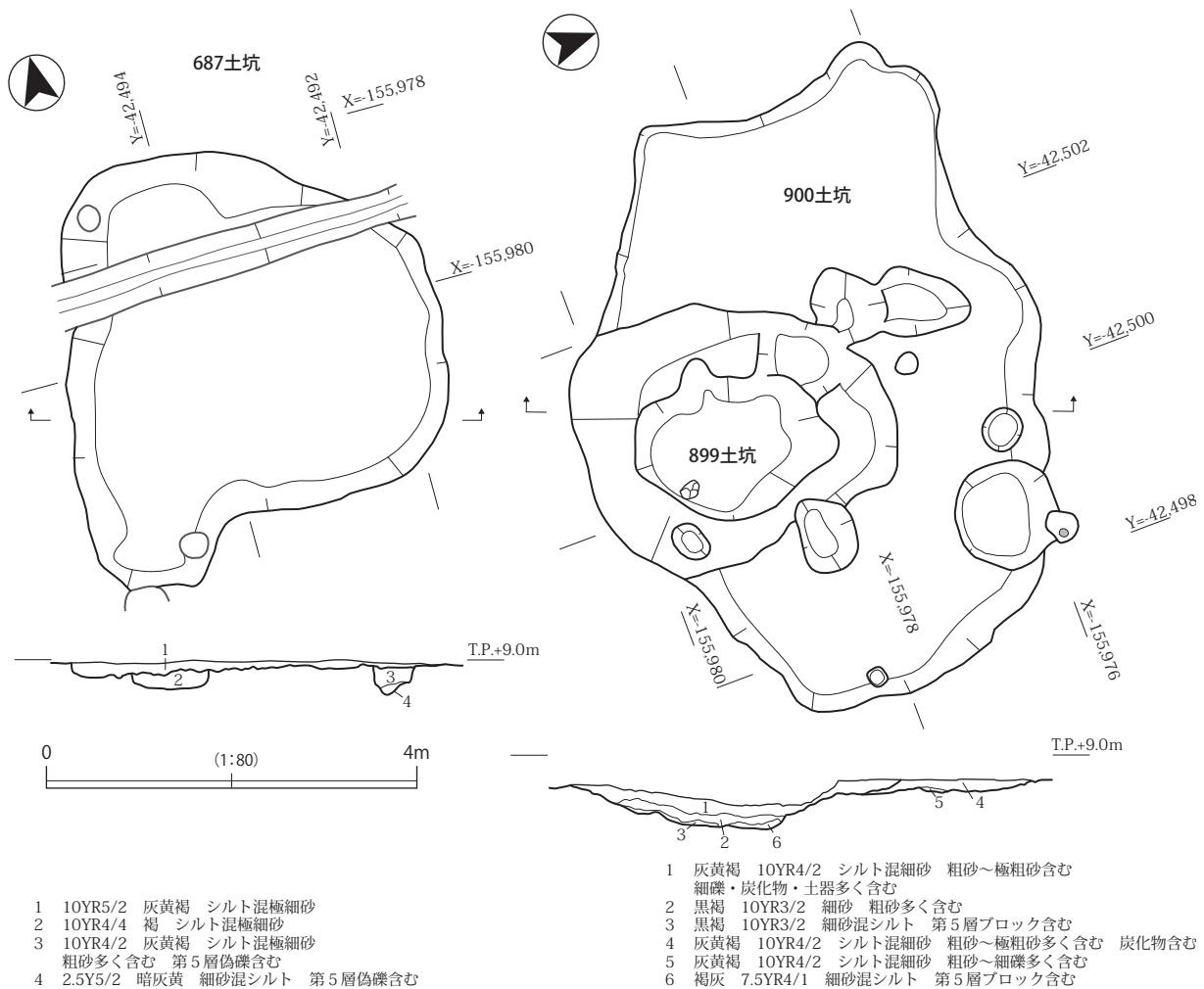


図393 5-2区 第3面 687・899・900土坑 平・断面図

長径 0.6 m・短径 0.55 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は中砂が混じる黄灰色のシルトが1層である。遺物は、土師器・黒色土器などが出土している。2113は、ほぼ完形の土師器皿で、口径 14.4 cm・器高 2.6 cmを測る。2114は高台が付く椀である。

〔1095土坑〕 (図306・310・397)

5-2区の北西部で検出された不正円形の土坑で、掘立柱建物60と重複する。径 0.7 m・深さ 0.2 mを測る。埋土は2層で、中砂が混じる黄灰色の粗砂が主である。

遺物は、土師器・黒色土器などが出土している。2115・2116は土師器の椀である。

〔1097土坑〕 (図306・310・397)

5-2区の北西部で検出された不正楕円形の土坑で、掘立柱建物60と重複している。長径 0.7 m・短径 0.6 m・深さ 0.1 mを測る。埋土はシルトが混じる灰色の細砂が1層である。

遺物は、土師器・須恵器などが出土している。2118は完形の土師器皿で、口径 14.4 cm・器高 2.3 cmを測る。2117は椀の小破片である。

〔5-2区 各土坑出土遺物〕 (図396)

5-2区のおの他の土坑から、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

774土坑からは、2104の土師器小皿と2105・2106の内黒の黒色土器椀が、822土坑からは、2102の土

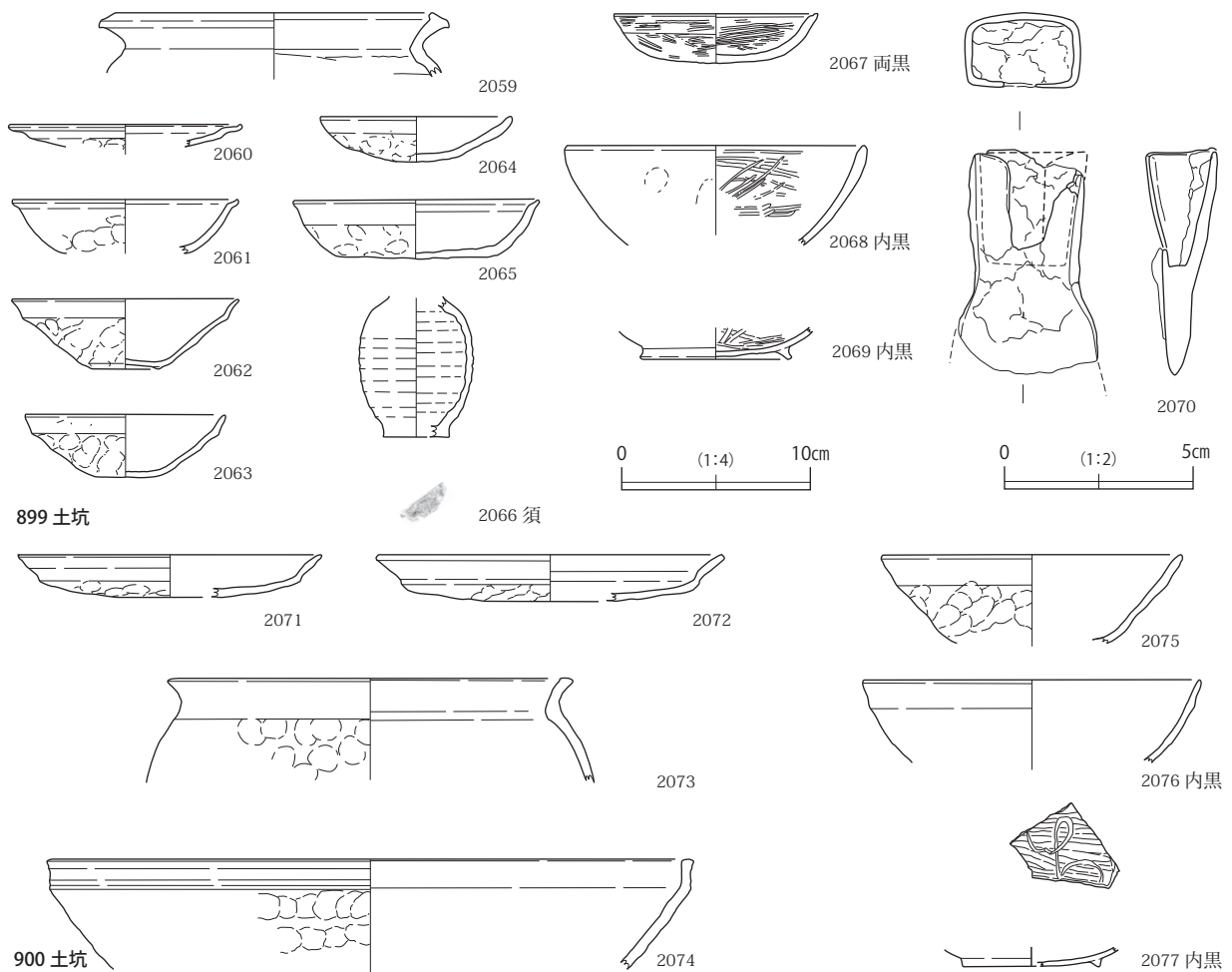


図394 5-2区 第3面 899・900土坑 出土遺物

師器碗が、991土坑からは、2093・2094の土師器碗が、出土している。1004土坑からは、2095・2096の両黒の黒色土器碗が、1005土坑からは、2103の土師器甕がある。

1014土坑からは、2109の土師器杯と2107の甕、2108の内黒の黒色土器耳皿、2110の緑釉陶器碗などが出土している。

1019土坑からは、2100・2101の土師器碗の口縁部の小破片が、1041土坑からは、2111の土師器碗および2112の内黒の黒色土器碗が出土している。

1403土坑からは、2097のほぼ完形の皿が出土している。口径 14.6cm・器高 2.6cmを測る。

1407土坑からは、2098の土師器碗、2099の緑釉陶器皿が出土している。

ピットは5区において掘立柱建物周辺で多数検出している。その中には、柱痕を残すものもあるが、建物として復原できなかったものであり、ここでは、それらも含めて掲載している。

[3119ピット] (図306・307・398・399)

5-3区の西半部の掘立柱建物42の北側に当たる。径 0.4m・深さ 0.3mを測る。径 0.15mの柱痕を残す。掘形埋土は、にぶい黄褐色のシルトである。

遺物は、土師器・須恵器がわずかに出土している。2128は土師器碗である。

[2007ピット] (図306・307・398・399)

5-4区の西端部で検出されたピットで、掘立柱建物52・53と重複している。平面が不正楕円形で、長径 0.5m・短径 0.35m・深さ 0.3mを測る。径 0.1mの柱痕が残る。掘形の埋土は、褐灰色のシルト

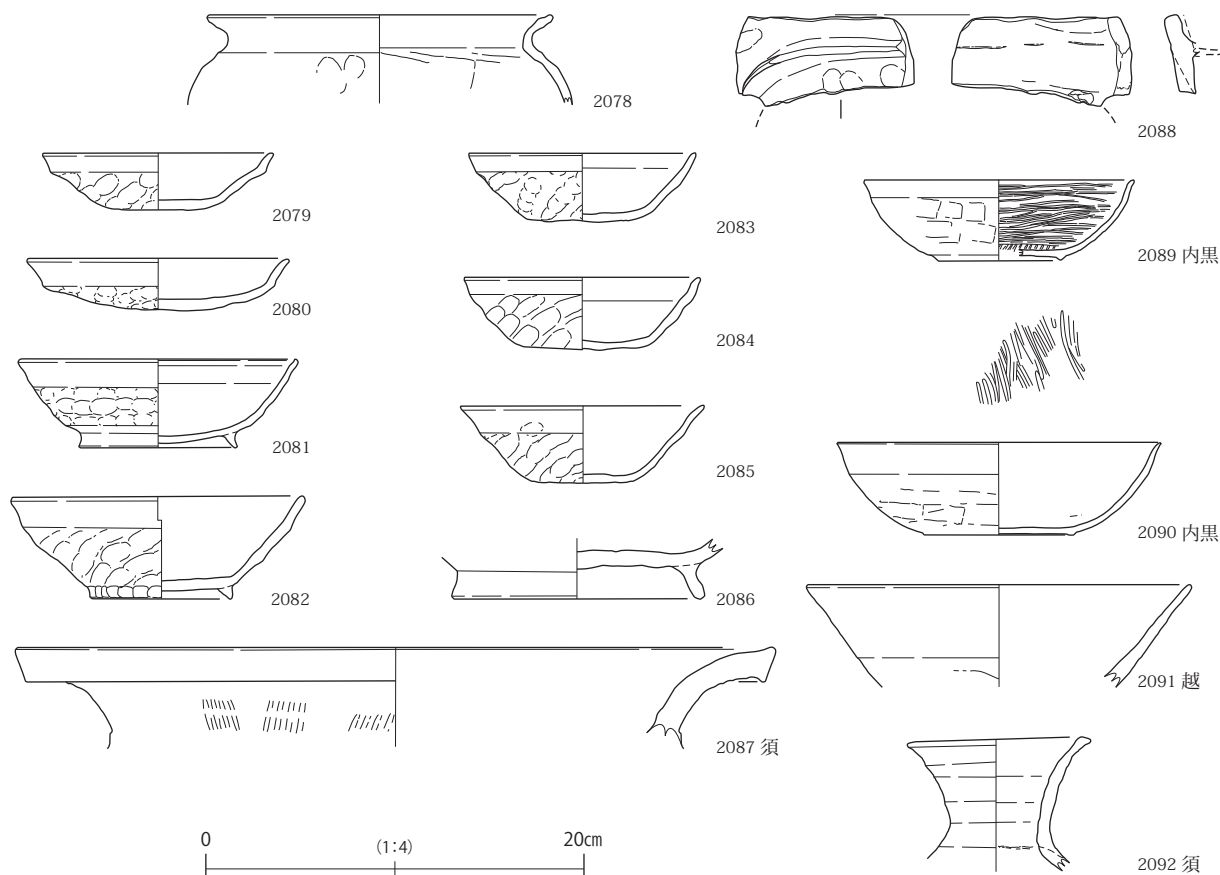
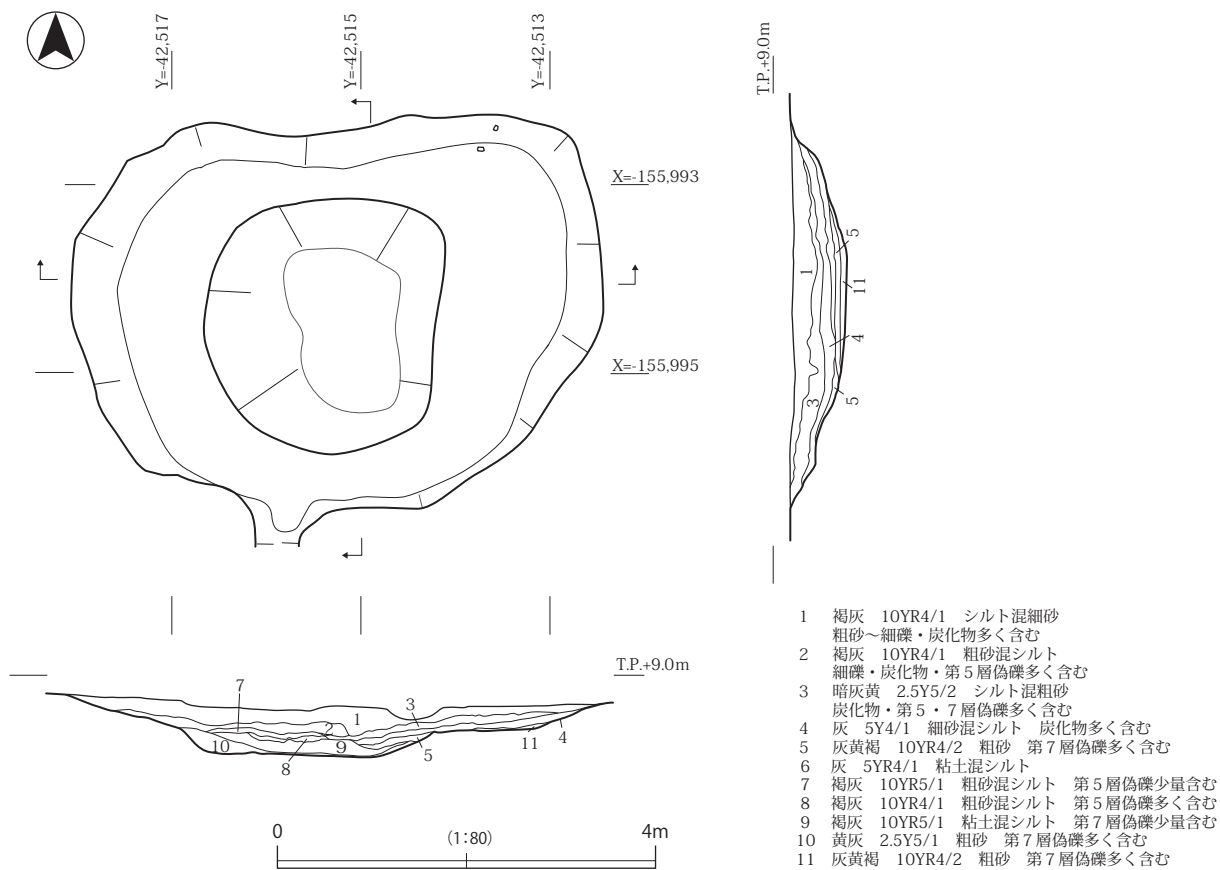


図395 5-2区 第3面 1015土坑 平・断面図 出土遺物

である。

遺物は、出土していない。

〔121ピット〕（図306・307・398・399）

5-4区の西端部で検出されたピットで、掘立柱建物52と重複している。平面形が不正楕円形で、長径0.35m・短径0.3m・深さ0.1mを測る。径0.15mの柱痕を残す。掘形の埋土は、明黄褐色のシルトである。

遺物は、土師器・黒色土器が出土している。2133は、土師器皿である。

〔486ピット〕（図306・308・398・399）

5-4区の北東部で検出されたピットである。平面形が円形で、径0.2m・深さ0.05mを測る。埋土は、シルトが混じる黒褐色の粗砂が1層である。

遺物は、土師器皿が1枚出土している。2147は接合完形で、口径22.0cm・器高2.6cmを測る。

〔2924ピット〕（図306・309・398・399）

5-1区の中央部の南半で検出されたピットで、掘立柱建物57と重複する。径0.1mの柱痕を残す。掘形埋土は、シルトが混じるにぶい黄褐色の細砂である。

遺物は、土師器・須恵器が出土している。2155は、土師器椀である。

〔1633ピット〕（図306・310・398・400）

5-2区の東端部で検出されたピットで、長径0.3m・短径0.25m・深さ0.2mを測る。埋土は、極細砂が混じるにぶい黄褐色のシルトが1層である。

遺物は、土師器が出土している。2180は土師器椀で、2181は甕である。

〔1934ピット〕（図306・310・398・401）

5-2区の南半部中央付近で検出されたピットで、掘立柱建物61と重複する。埋土は3層で、シルト

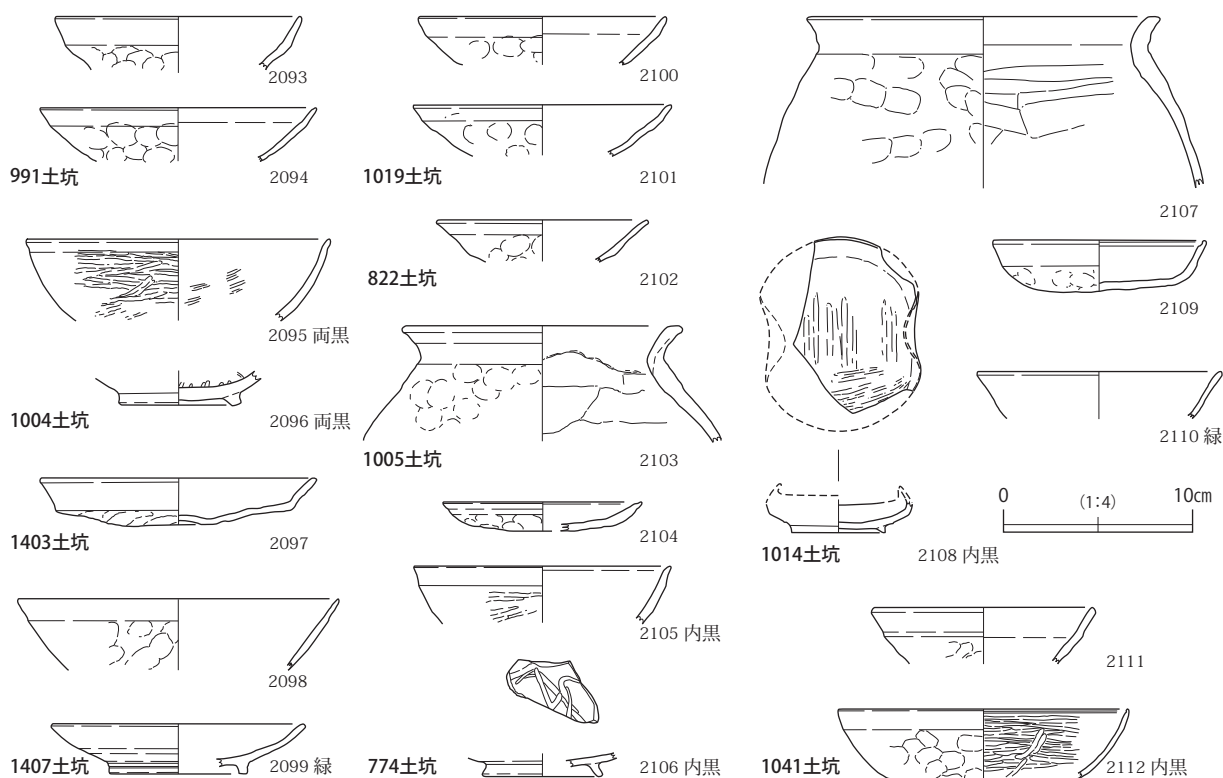


図396 5-2区 第3面 各土坑 出土遺物

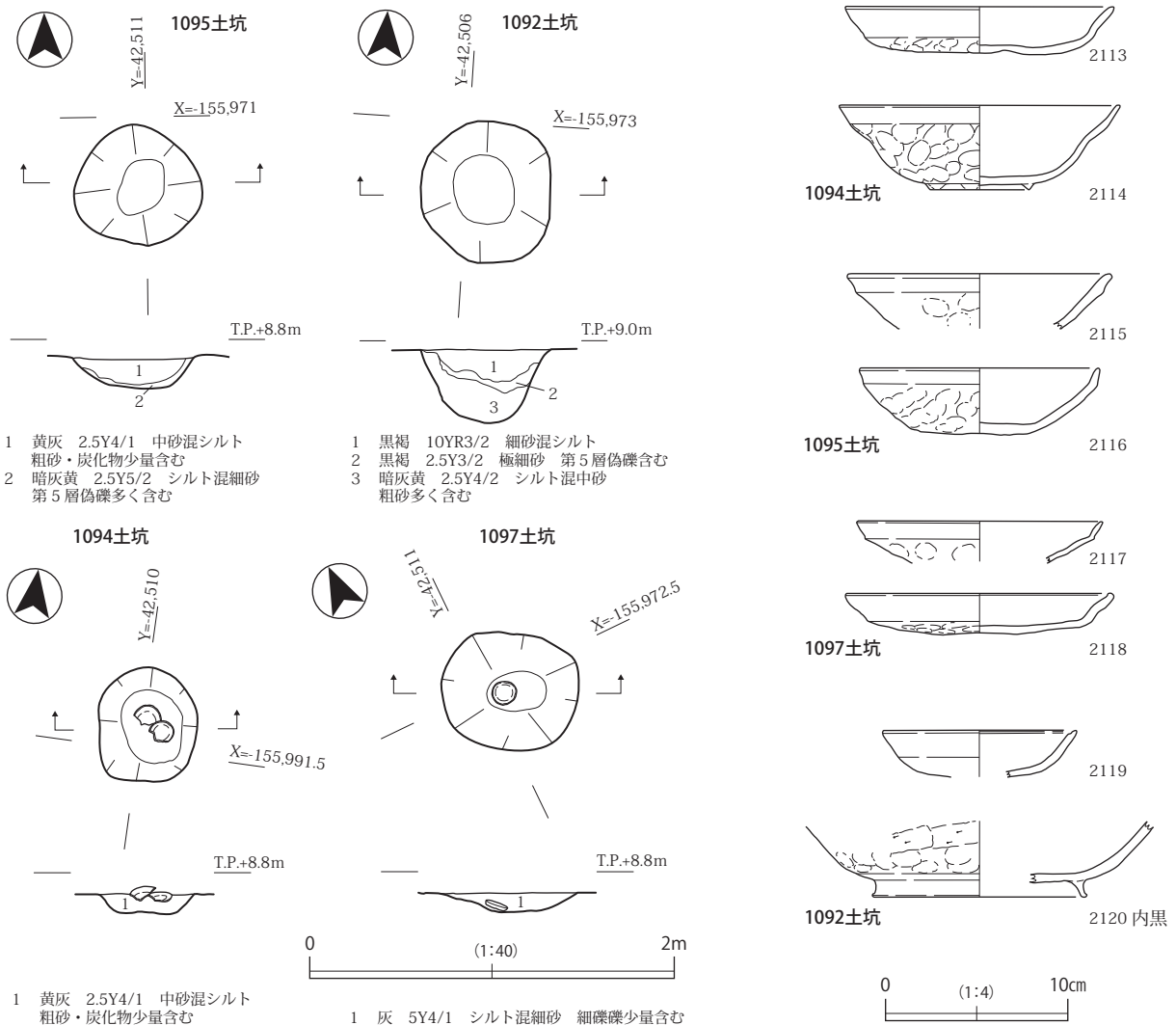


図397 5-2区 第3面 1092・1094・1095・1097土坑 平・断面図 出土遺物

が混じるにぶい黄褐色の極細砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器が出土している。2203は須恵器椀で、高台が付くと思われる。

〔603ピット〕(図306・310・398・400)

5-2区の北東部で検出されたピットで、北側が浅く南側が2段掘りになる。平面が楕円形で、長径0.65m・短径0.5m・深さ0.1mを測る。埋土は、粗砂が混じる褐色のシルトが1層である。

遺物は、土師器が出土している。2167は、土師器椀である。

〔926ピット〕(図306・310・398・400)

5-2区の西端部で検出されたピットで、径0.5m・深さ0.5mを測る。径0.15mの柱痕を残す。掘形の埋土は、褐灰色や黒色のシルトである。

遺物は、土師器が出土している。2171は土師器椀で、ほぼ完形である。口径14.4cm・器高4.7cmを測る。低い高台が付く。

〔5-3区 各ピット出土遺物〕(図399)

5-3区のピットから出土した遺物には、土師器・須恵器などがある。

2963ピットからは、2125の内黒の黒色土器椀の口縁部破片が出土している。

2980ピットからは、2121の土師器の小皿と2122の椀の小破片および、2123の内黒の黒色土器椀の高台

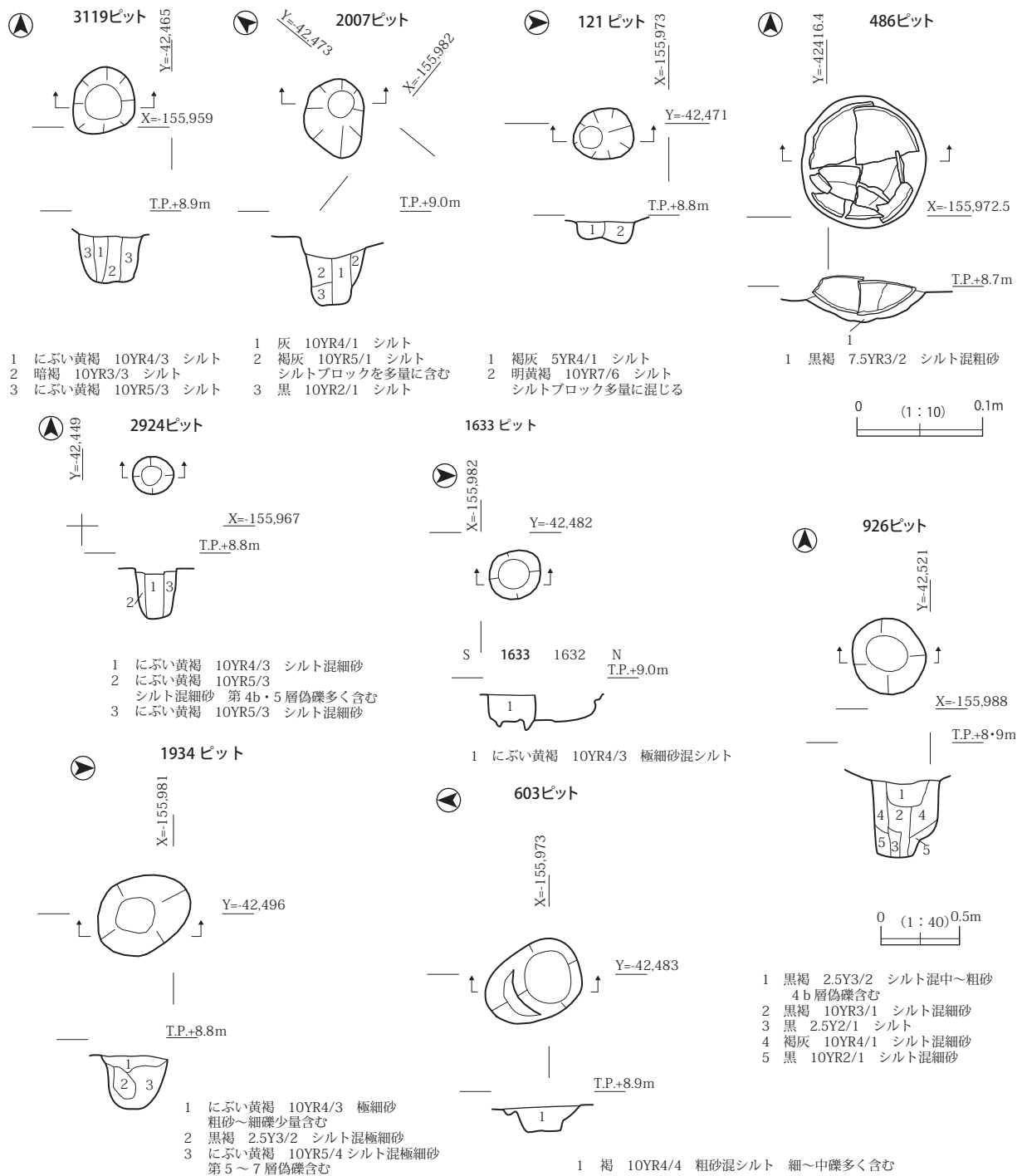


図398 5区 第3面 各ピット 平・断面図

部破片が出土している。

2981ピットからは、2124のての字形の土師器小皿の小破片が出土している。

3100ピットからは、2127の土師器碗の口縁部破片が出土している。

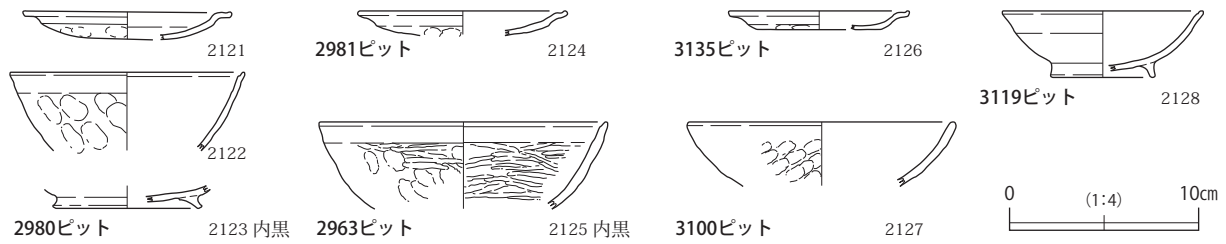
3135ピットからは、2126のての字形の土師器小皿の口縁部小破片が出土している。

〔5-4区 各ピット出土遺物〕(図399)

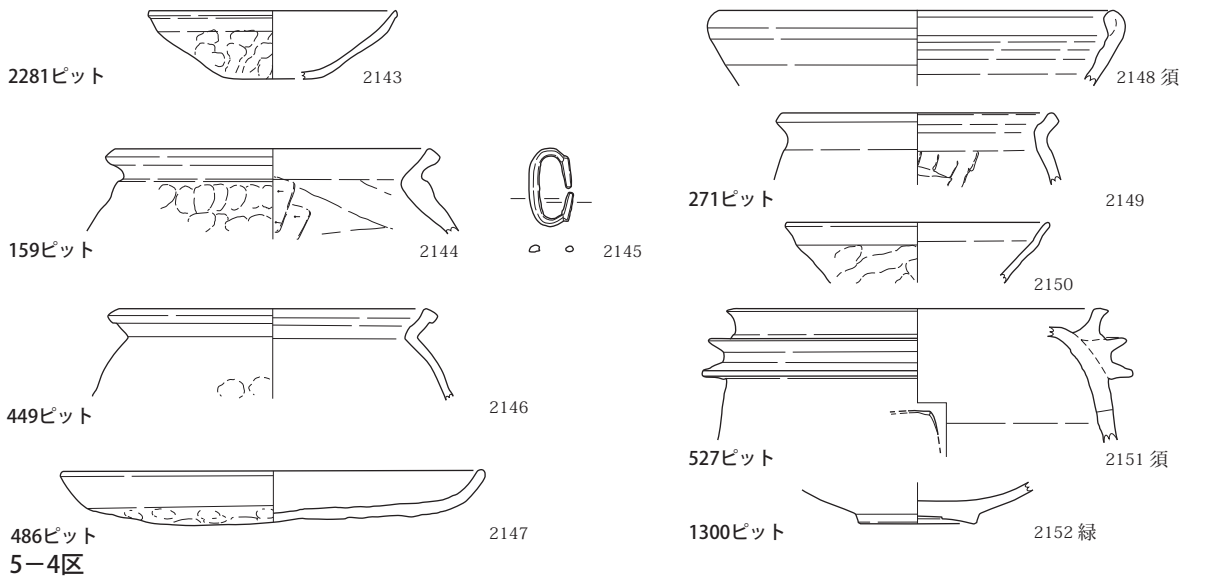
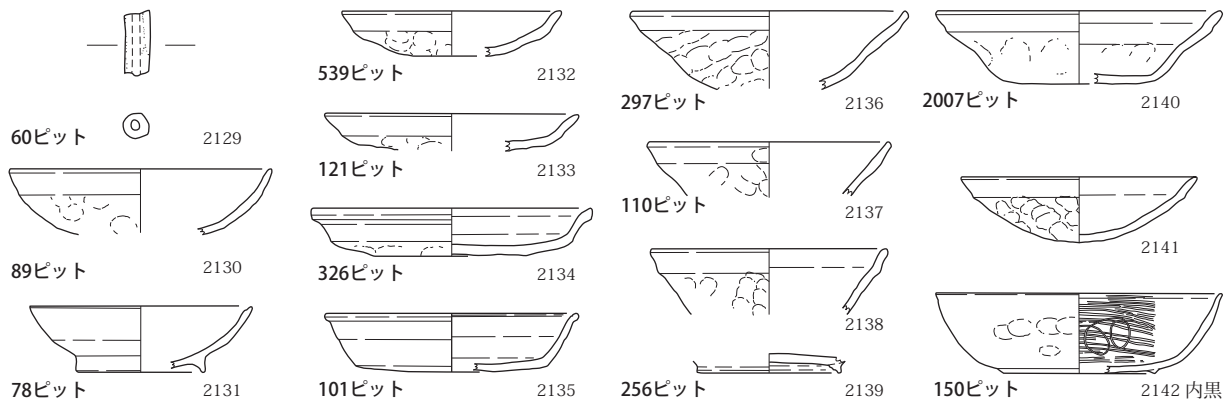
5-4区のピットからは、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

60ピットからは、2129の管状の土錘が出土している。両端が破損し、径 1.4 cmを測る。

78ピットからは、2131の土師器碗の約 1 / 5 を残存するものが出土している。



5-3区



は口径 12.3cm・器高 3.5 cm、2142は口径 15.2cm・器高 4.3 cmを測る。後者は高台がわずかに付き、高台径 8.0 cmを測る。内面にヘラミガキを施した後、螺旋状にヘラミガキを追加している。

159 ピットからは、2144の土師器甕と2145の銅製の絞金具が出土している。

256 ピットからは、2138の口縁部破片・2139の高台部破片の土師器椀が出土している。

271 ピットからは、2149の小型の土師器甕の口縁部破片と2148の須恵器軟質の鉢の口縁部破片が出土している。

297 ピットからは、2136の約 1 / 3を残す土師器椀が出土している。

326 ピットからは、2134の約 1 / 2を残す土師器皿が出土している。口径 13.7cm・器高 2.4 cmで、わずかに外反する口縁部の端部が面をもつ。

449 ピットからは、2146の土師器甕の口縁部破片が出土している。

527 ピットからは、2151の須恵器の円面硯が出土している。このピットは、掘立柱建物51・52の柱穴に該当する。口径 19.2cm・残存高 7.9 cmを測る。体部上端に突帯 2 帯を施し、台形の透かしを穿つ。第 4 a 層出土のものと接合した。

1300ピットからは、2152の緑釉陶器皿の底部破片が出土している。

2281ピットからは、2143の土師器椀の口縁部破片が出土している。

〔5-1区 2901ピット出土遺物〕(図399)

5-1区のピットからは、土師器が出土している。

2901ピットからは、2153の土師器皿の口縁部小片と2154の鉢の口縁部破片が出土している。

〔5-2区 各ピット出土遺物〕(図400・401)

5-2区のピットからは、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

634 ピットからは、2156の土師器小皿が出土している。口径 9.6 cm・器高 2.3 cmを測る。

635 ピットからは、2162の土師器小皿の口縁部破片が出土している。

856 ピットからは、2156の土師器皿が出土している。

929 ピットからは、2171(図版 111)の土師器椀が出土している。口径 14.0cm・器高 4.8 cmを測る。

930 ピットからは、2172・2173の土師器椀の口縁部破片が出土している。

951 ピットからは、2164の土師器椀の口縁部破片が出土している。

992 ピットからは、2177の土師器皿と2178の内黒の黒色土器椀、2179の須恵器円面硯が出土している。皿は完形で、口径 15.7cm・器高 2.0 cmを測る。硯は、3脚ないしは4脚の断面六角形の脚が付き、底部外面に篋描きの木の葉の葉脈状の文様が施されている。

998 ピットからは、2185の土師器甕の口縁部破片と2184のやや大型の内黒の黒色土器椀が出土している。

1021ピットからは、2190の側縁の一部を残す須恵質の平瓦が出土している。厚さ 2.8 cmを測り、外面に縄目叩き目を施し、内面に布目圧痕を残す。

1144ピットからは、2163の約 1 / 3を残す土師器皿が出土している。

1128ピットからは、2158~2160の土師器小皿が出土している。2160は完形で、口径 9.4 cm・器高 2.8 cmを測る。

1147ピットからは、2168の土師器椀の口縁部破片が出土している。

1315ピットからは、2166の土師器椀が出土している。口径 12.1cm・器高 4.3 cmを測り、高台をもつ。

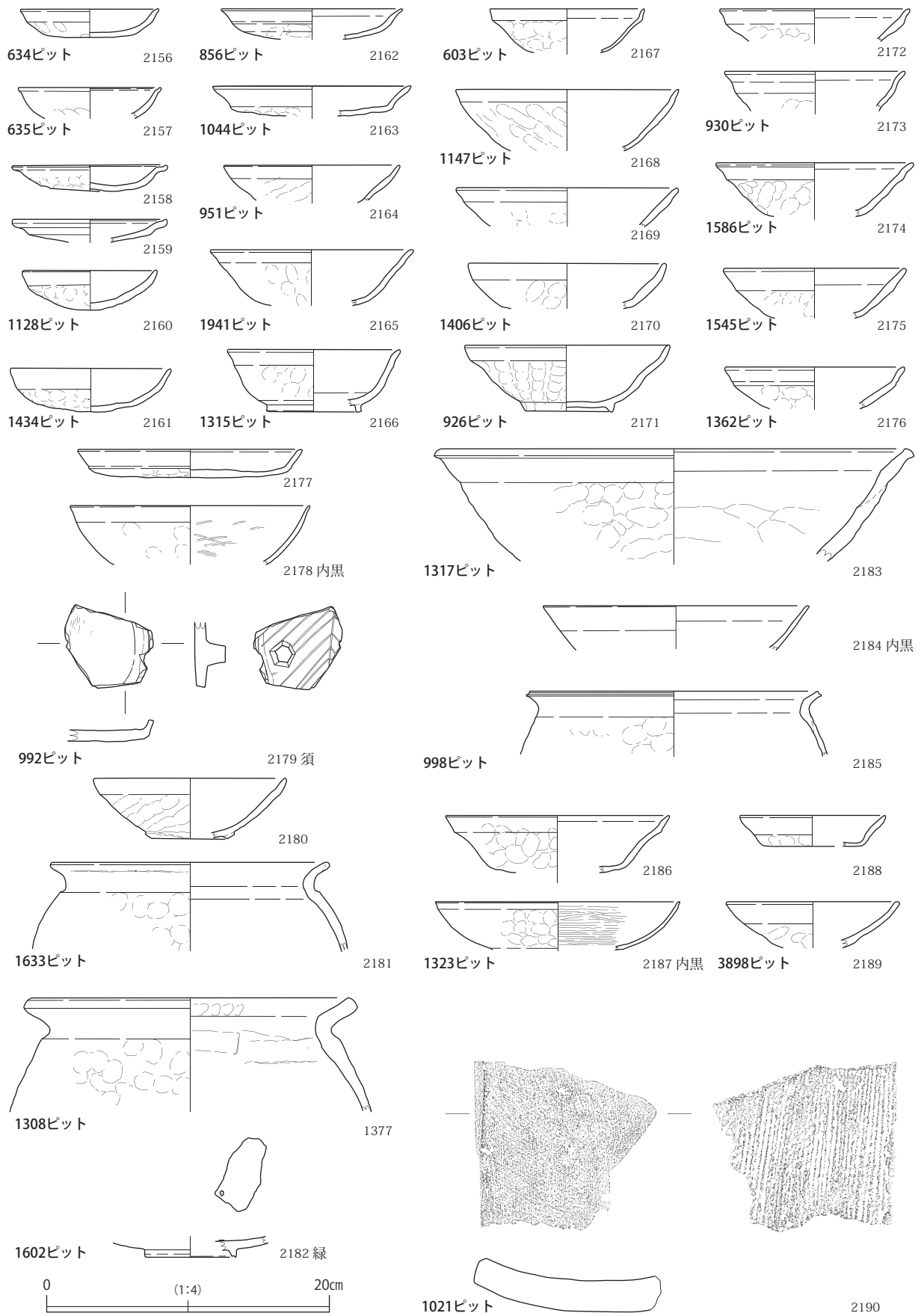


図400 5-2区 第3面 各ピット 出土遺物(1)

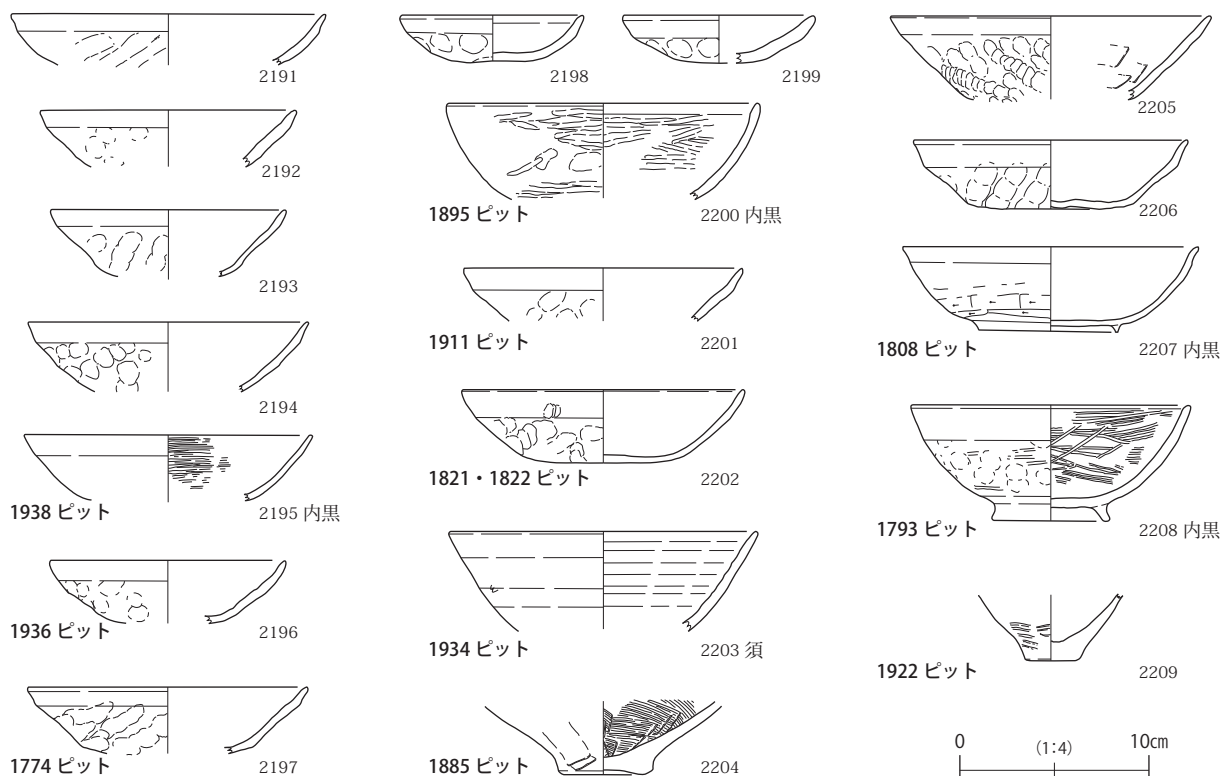


図401 5-2区 第3面 各ピット 出土遺物(2)

1317ピットからは、2183の土師器鉢の口縁部破片が出土している。外方へ開く口縁部の端部が内外へわずかに肥厚し、面をもち、頸部内面にわずかに稜をもつ。

1323ピットからは、2186の土師器椀と2187の内黒の黒色土器椀の口縁部破片が出土している。

1362ピットからは、2176の土師器椀の口縁部破片が出土している。

1406ピットからは、2169・2170の土師器椀の口縁部破片が出土している。

1434ピットからは、2161の完形の土師器杯が出土している。口径 11.2cm・器高 5.2 cmを測る。

1545ピットからは、2175の土師器椀の口縁部破片が出土している。

1586ピットからは、2174の土師器椀の口縁部破片が出土している。

1602ピットからは、2182の緑釉陶器皿の底部破片が出土している。

1774ピットからは、2197の土師器椀の口縁部破片が出土している。

1793ピットからは、2208の内黒の黒色土器椀が出土している。口径 14.8cm・器高 5.2 cmを測る。

1808ピットからは、2205・2206の土師器椀および2207の内黒の黒色土器椀が出土している。2206は約 1 / 2を残し、口径 13.6cm・器高 3.8 cmを測る。2207は口径 15.4cm・4.6 cmを測り、外面にヘラケズリ状ナデを残す。内面は表面摩滅のため調整不明である(図版 111)。

1821・1822ピットからは、2202の土師器椀が出土している。口径 14.6cm・器高 4.0 cmを測る。

1885ピットからは、2204の弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土師器甕底部が出土している。

1895ピットからは、2198・2199の土師器小皿および2200の内黒の黒色土器椀の口縁部破片が出土している。2198は口径 9.6 cm・器高 2.5 cmを測る。

1911ピットからは、2201の土師器椀の口縁部破片が出土している。

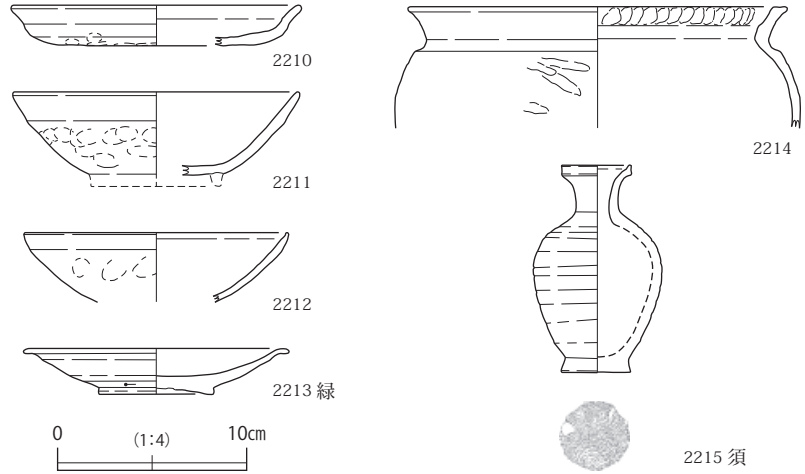
1922ピットからは、2209の弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土師器甕底部が出土している。

1936ピットからは、2196の土師器椀の口縁部破片が出土している。

1938ピットからは、2191～2194の土師器碗と、2195の内黒の黒色土器碗の口縁部破片が出土している。

1941ピットからは、2165の土師器碗の口縁部の破片が出土している。

3898ピットからは、2188の土師器小皿と2189の碗の口縁部破片が出土している。



〔2047落込み〕（図306・307・402 図版125・127）

図402 5-4区 第3面 2047落込み 出土遺物

5-4区の西半部の南側で検出された不定形な浅い窪み状の落込みで、掘立柱建物45～47と重複している。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

2210は2段ナデを施す土師器皿で、2211・2212が碗、2214が甕である。2211は約1/3を残し、口径15.0cmを測り、高台の接合痕跡を残す。2214の甕は口縁部破片で、わずかに外反する口縁部の上端部がわずかな凹面をもつ。口縁部の内面に指押さえを連続し1周させる。

2215は完形の須恵器小型壺で、口径3.6cm・器高10.6cmを測る。短く外反する口縁部の端部がわずかにつまみあげられ面をもち、短い筒状の頸部に長胴の体部、突出した平底である。底部外面に糸切の痕跡を残す。

2213は緑釉陶器皿で、口径14.4cm・器高2.4cmを測る。

5-2区の西端部において、第3面下層および第4面上層に一部分のみ遺構が検出されている。大畦畔の下層に、1230溝が検出されている。なお、1747・1748溝は、第4面で検出されているが、1747溝が1766溝を切っていることと、両溝伴に古代の遺物を含むことから、この面とした。

〔1747溝〕（図403・404 図版112）

南北方向の溝で、長さ14.3m・幅0.3～0.5m・深さ0.2mを測る。埋土は、シルトが混じる暗褐色の細砂が1層である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器が出土している。

2216は約2/3を残す土師器皿で、口径13.6cm・器高2.8cmを測る。2217は約1/2を残す碗で、口径13.4cm・器高3.4cmを測る。

2218は、ほぼ完形の高台をもつ須恵器小型壺で、口径3.6cm・器高9.4cmを測る。2219は大型の直口壺で、斜め上方に開く口縁部の上端部が面をもつ。体部外面に平行叩き目を施し、内面に同心円紋当具痕を残す。

〔1748溝〕（図403・404）

1747溝の北側に位置し、長さ4.5m・幅0.2～0.4m・深さ0.15mを測る。埋土は、シルトが混じる暗褐色の細砂が1層である。

遺物は、土師器・須恵器などが出土している。

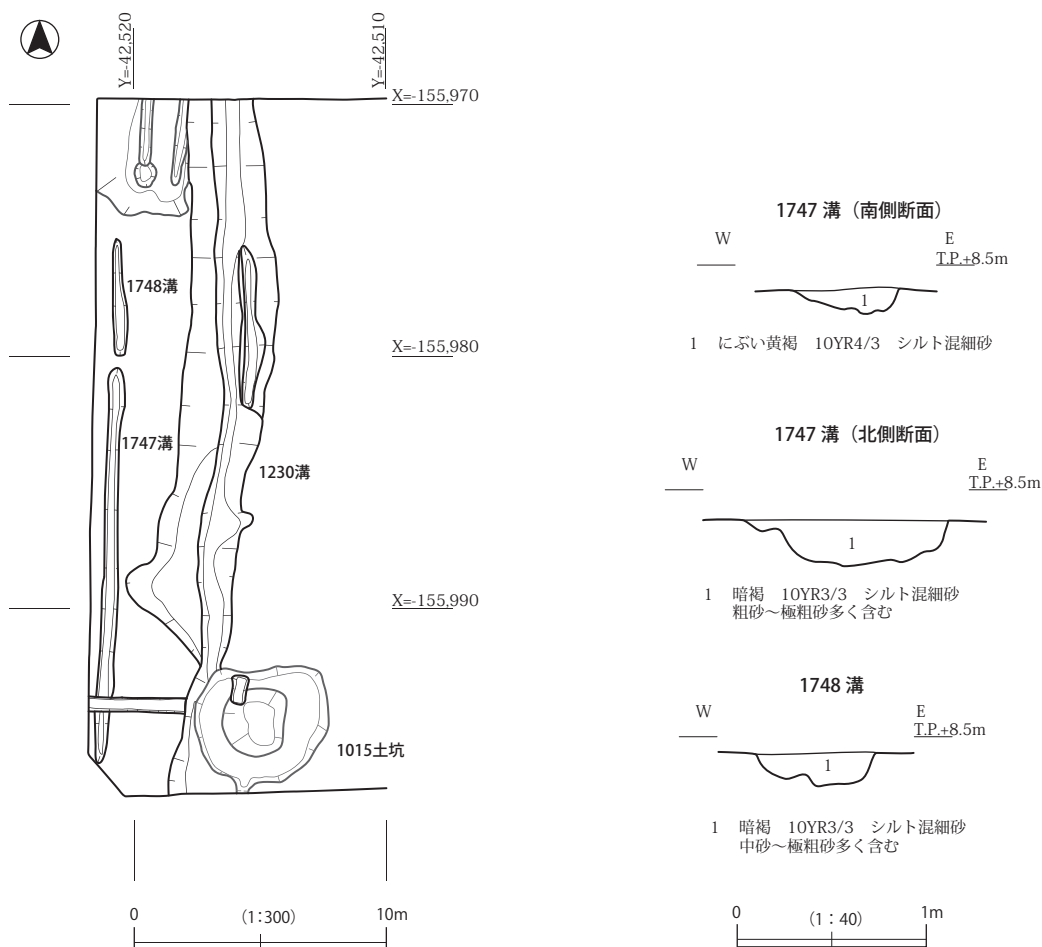


図403 5-2区西端部 第3面 平面図 1747・1748溝 断面図

2221は須恵器杯Hの底部破片で、2220は甕の口頸部破片で、体部外面に平行叩き目を施し、内面に同心円紋当具痕を残す。

2222は、やや軟質の須恵質の平瓦の破片で、外面に縄目叩き目を施し、内面に布目圧痕を残す。

1747・1748溝は、本来、同一の溝であった可能性がある。

〔1230溝〕 (図403・404 図版75-3)

南北方向の溝で、検出長 28.0m・幅 0.9~3.5 m・深さ 0.15 mを測る。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などが出土している。

2223は土師器碗の口縁部破片で、2225は鉢の高台部破片である。2228は土師器甕の口縁部破片で、短い筒状の頸部に、屈曲して外方にわずかに伸びる口縁部の上端が面をもつ。2226は高台をもつ須恵器小型壺の底部破片で、2227は軟質の玉縁状口縁部をもつ鉢である。2224は内黒の黒色土器碗の底部破片である。2229は須恵質の平瓦破片で、一角を残す。厚さ 2.3 cmを測り、外面に縄目叩き目を施し、内面に布目圧痕を残す。

〔第4b層出土遺物〕 (図405・406 図版107・125)

第4b層から出土した遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器などが出土している。他に、瓦や土製品、金属製品・貨銭などが出土している。

土師器には、皿・杯・碗・鉢などがある。

2230~2234は小皿で、2230は口径が 8.0 cmと小さく中世に入る可能性がある。2232は口径 10.5cm・器

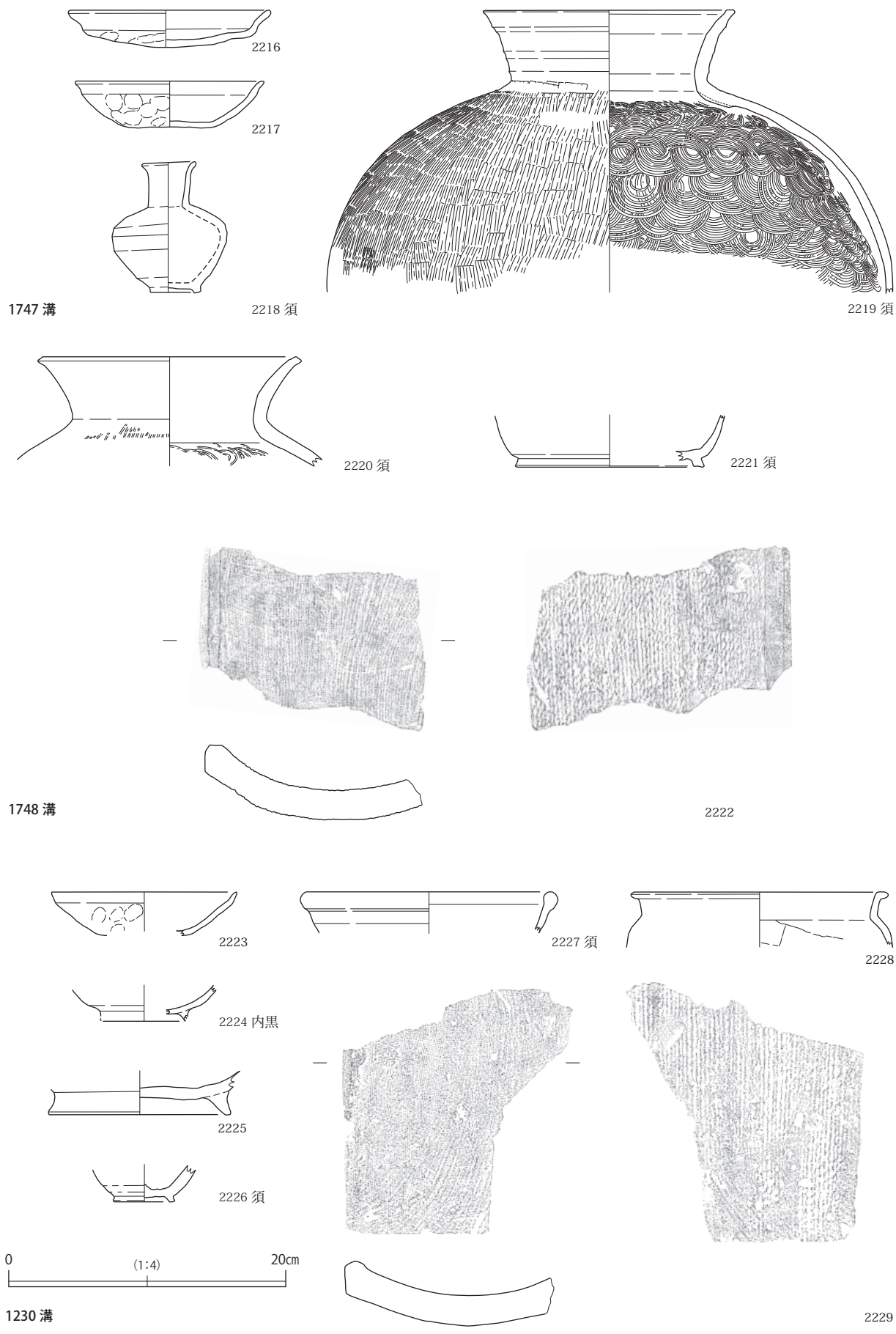


图404 5-2区 第3面 1747·1748·1230溝 出土遺物

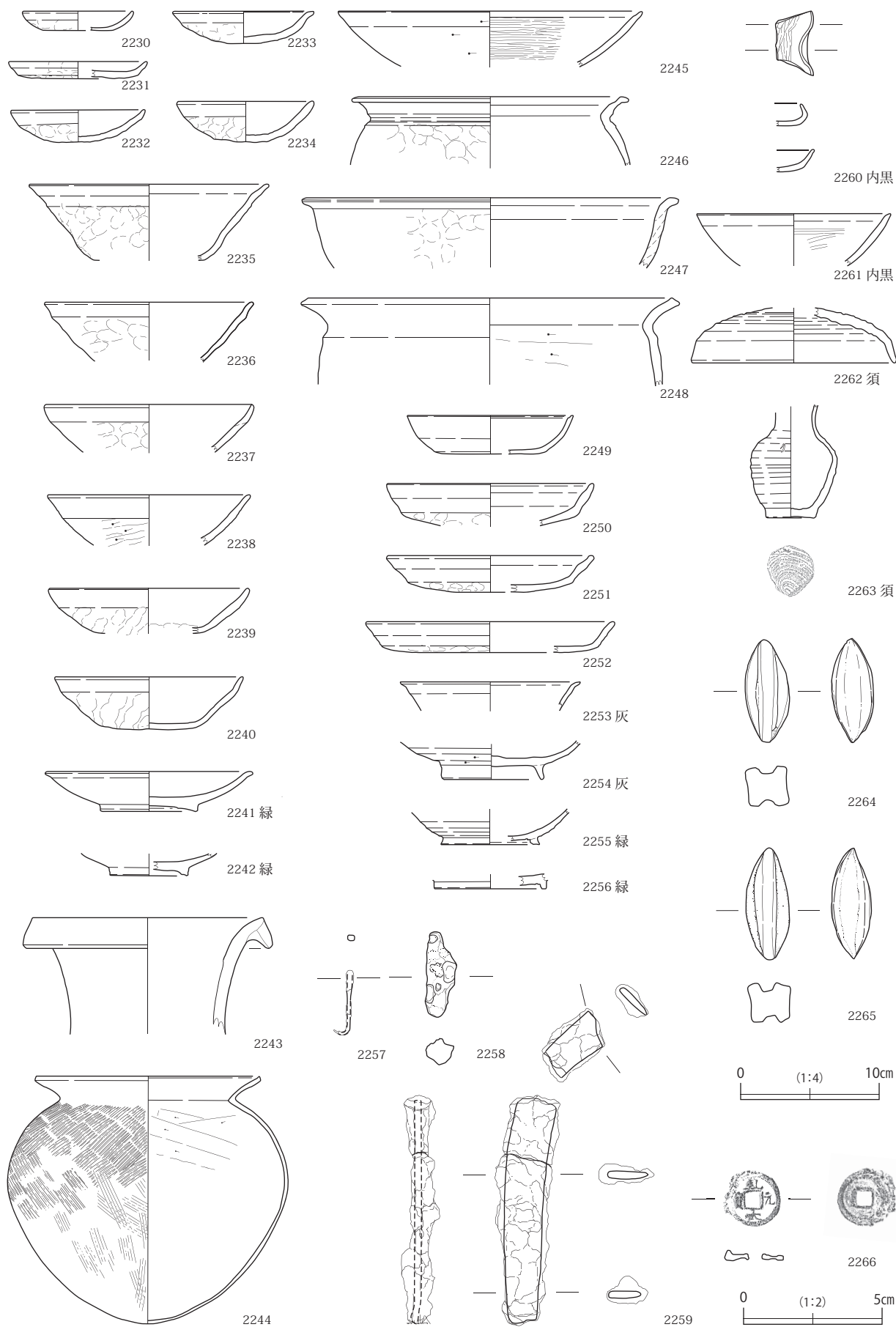


图405 5区 第4b層 出土遺物(1)

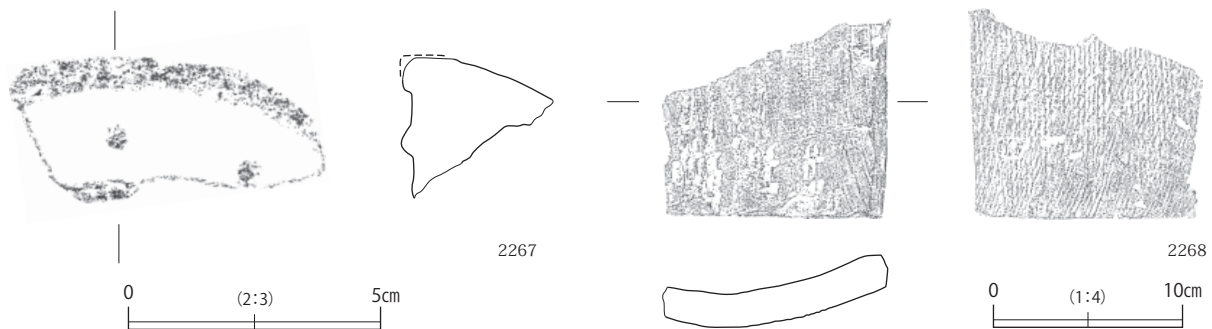


図406 5区 第4b層 出土遺物(2)

高 1.6 cmと浅いもので、口縁部外面に2段ナデを施す。2232～2234は椀形のもので、口径10cm前後・器高 2.4～2.8 cmのものである。2252は皿で、口径 18.0cmを測り口縁部外面に2段ナデを施す。2249～2251は杯で、2249は口径 12.0cmで、口縁部端部の内面が内傾する段をもつ。口縁部外面に1段ナデを施す。2250・2251は、口径 14.8cmを測り、前者は口縁部端部が丸く終わり、後者が内方へわずかに肥厚する。いずれも、口縁部外面に2段ナデを施す。2245はやや大型の椀で、口径 21.6 cmを測り、口縁部端部内面がわずかな凹面をもつ。内面にヘラミガキ、外面にヘラケズリ状ナデを施す。2235～2240は椀で、体部外面に、指押さえを残すものが多い。2238は、体部外面にヘラケズリ状のナデを施す。2247は大型の鉢で、短く外反する口縁部をもつ。体部外面に指押さえを残す。2246・2248は甕で、前者は口縁部上端に面をもち、体部外面に指押さえを残す。後者は口縁部端部がわずかに立ち上がり面をもつもので、体部内面にヘラケズリ状のナデを施す。

須恵器には、杯蓋と壺が出土している。2262は口径 14.8cmを測り、口縁部と天井部の境目が不明瞭になることから、TK 10に属すと考えられる。2263は口縁部を欠く小型壺で、底部外面に糸切を残す。

黒色土器には、皿と椀がある。2260は口縁部の小破片で内黒の耳皿である。2261は内黒の椀である。

2241・2242は緑釉陶器皿で、前者は硬質で、後者は軟質である。2255・2256は椀で、いずれも硬質のものである。

2253・2254は灰釉陶器の椀で、前者はやや焼きの甘いものである。

2243・2244は弥生時代後期から古墳時代前期初頭に属すもので、2243は大型壺の口頸部破片で、2244は生駒西麓産の甕で、復元完形である。口径 16.0cm・器高 18.0cmを測り、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。屈曲する頸部内面は明瞭な稜をもち、やや肩の張る体部に尖り気味の底部をもつ。体部外面に叩き目後ハケメ、内面にヘラケズリを施す。

2264・2265は有溝の土錘で、紡錘形で断面隅丸方形の相対する2辺に溝を穿つ。

2267・2268は瓦で、前者は軒丸瓦の連子紋の一部を残し、後者は平瓦の1角を残す。平瓦は厚さ 1.6 cmを測り、外面に縄目叩き目を施し、内面に布目圧痕を残す。いずれも、土師質のものである。

金属製品には、鉄製品・銭貨などがある。2257は鉄製の釘で先端部が弯曲し、尖っている。頭部は隅丸方形である。長さ 4.7 cmを測る。層状剥離が見られることから、鍛造品である。2259は鉄鎌で、柄部を残す。残存長 22.0 cm・厚み 0.4 cmを測る。錆化著しく、柄の末端部の左側に折り返し部がある。

2266は乾元大宝で、径 21.17 mm・厚さ 1.8 mm・孔径 5.27 mmを測り、2.82 gである。端部の一部が溶損している。2258は鉛の棒状のもので、長さ 3.1 cm・幅 1.1 cm・厚み 1.0 cmを測り、11.06 gである。用途不明であるが、製品というよりは素材の可能性が大である。

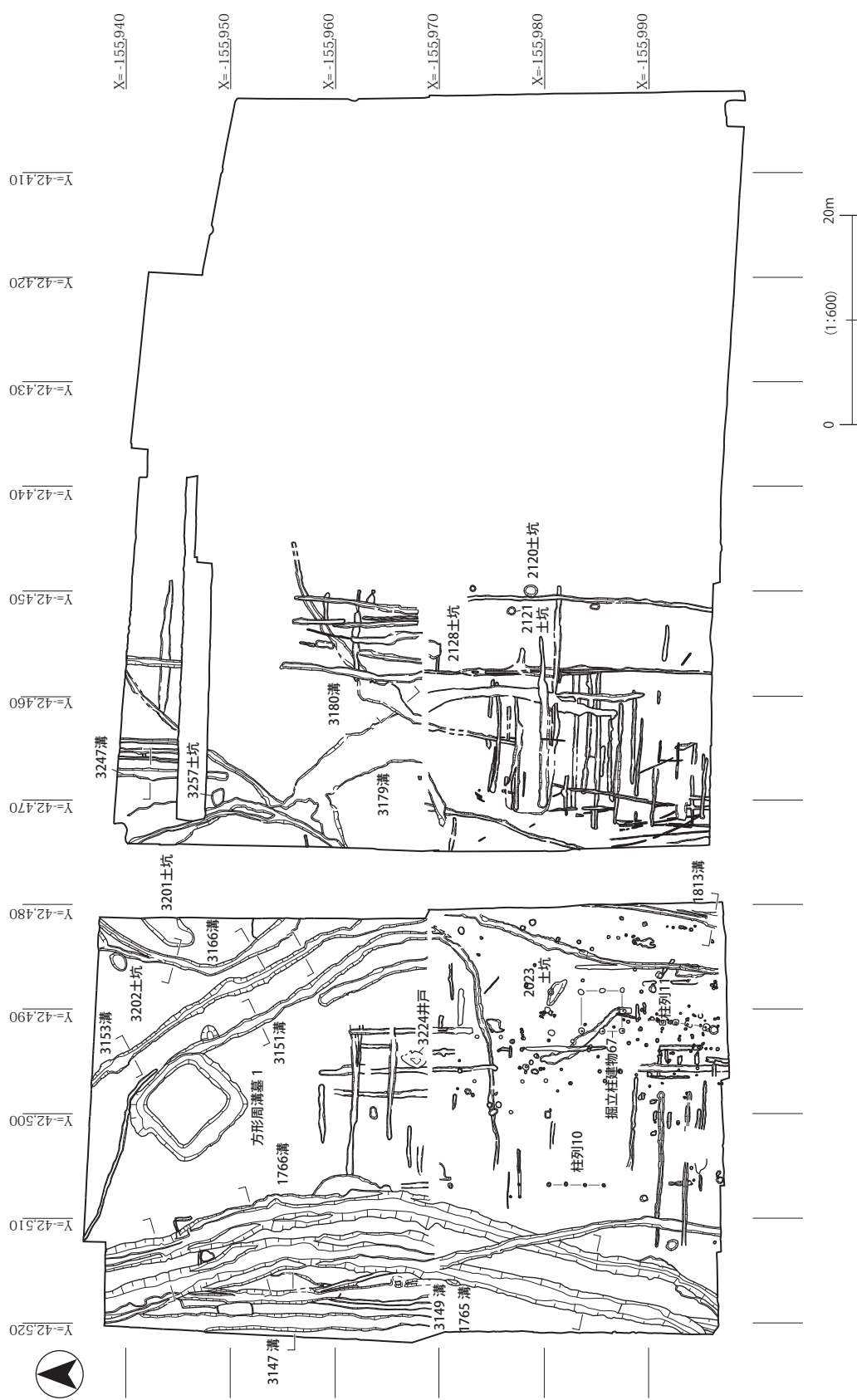


图407 5区第4面平面图

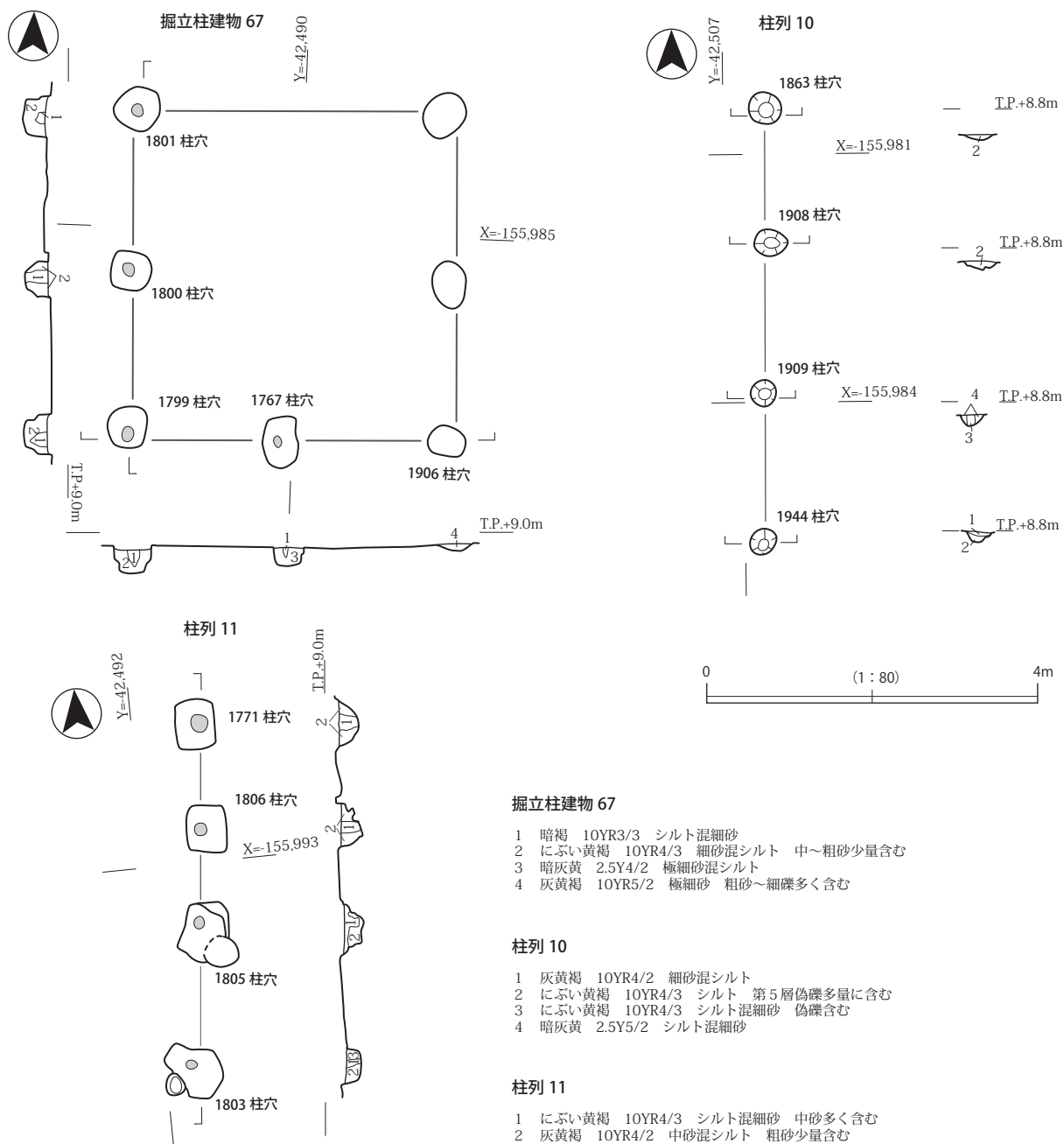


図408 5-2区 第4面 掘立柱建物67 柱列10・11 平・断面図

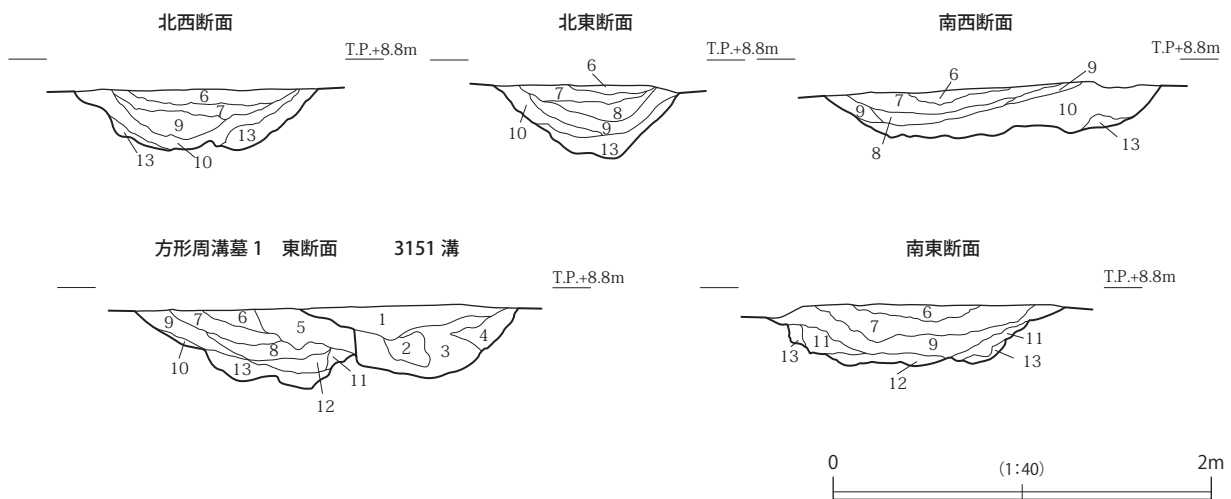
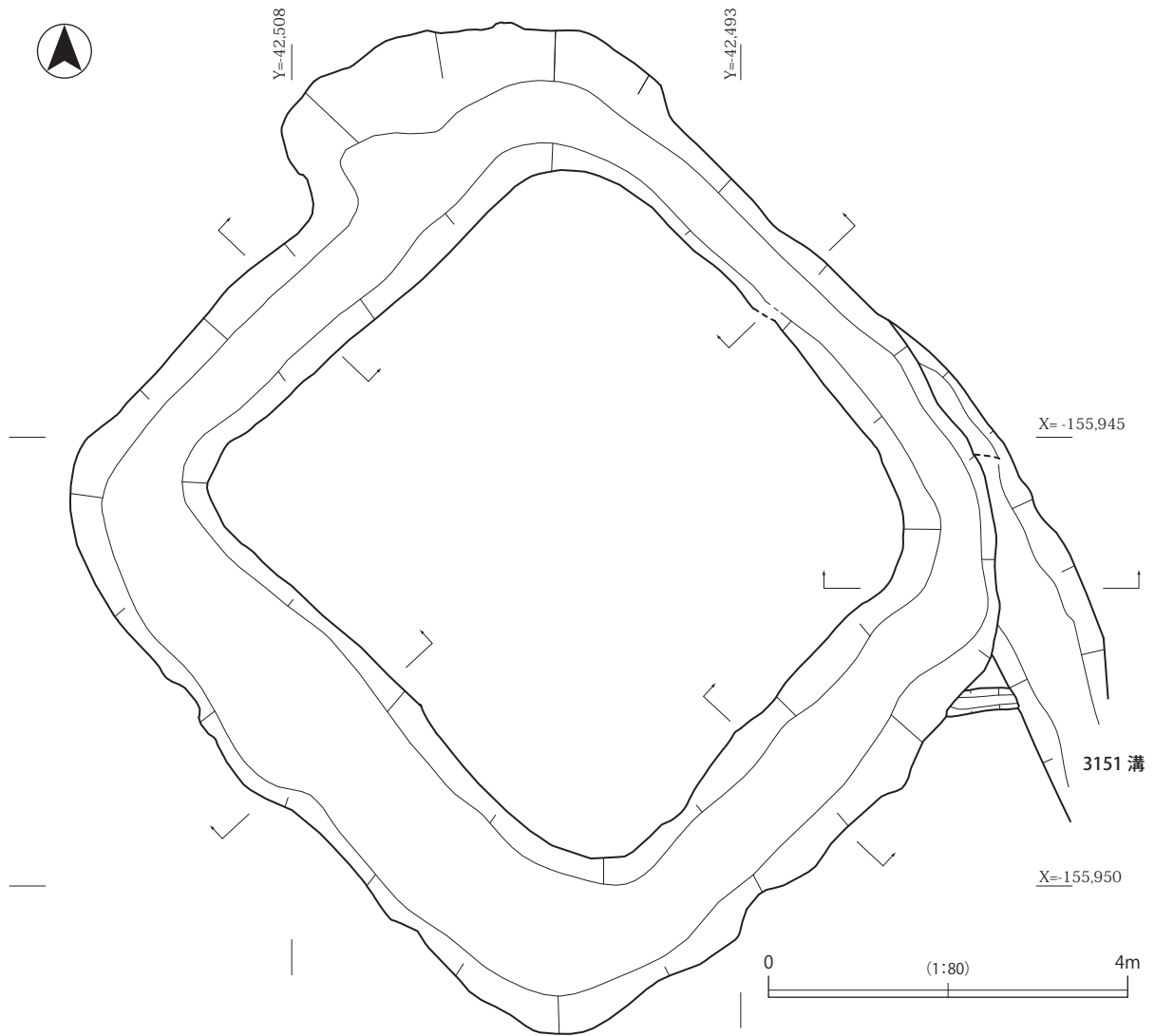
4. 第4面

第4面は、第4b層下面および第5層上面に該当する面で、第4b層が5区の東半部で希薄になることから、遺構が希薄になる。

この面では、掘立柱建物1棟、柱列2基、方形周溝墓1基、溝・井戸・土坑などを検出している。

〔掘立柱建物67〕(図407・408)

5-2区の南東部で検出された正方形の側柱建物である。規模は、2×2間で、一辺約4.1mであるが、北辺の中心の柱穴を検出していない。また、東辺の柱穴は、雨水による流失で断面を記録する事ができなかった。主軸方向はN-1°-Eを示す。柱穴は隅丸方形を志向し一辺が約0.5m・深さ0.3mを測る。柱痕は、4基の柱穴に残存しており、その径は0.1~0.15mである。柱間寸法は、西辺のみ計測でき、約2mである。



- | | |
|------------------------------|---------------------------------|
| 1 灰黄褐 10YR5/2 中砂混シルト | 8 黒褐 10YR3/2 シルト |
| 2 灰黄 2.5Y6/2 シルト混細砂 偽礫少量含む | 9 灰黄褐 10YR5/2 シルト混中砂 偽礫含む |
| 3 にぶい黄 2.5Y6/3 粗砂 | 10 灰黄褐 10YR4/2 シルト混中砂 第5層偽礫含む |
| 4 灰 2.5Y6/2 11に同じ(崩落時) | 11 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混中砂 第5層偽礫含む |
| 5 灰黄褐 10YR6/2 シルト混細砂 偽礫多く含む | 12 灰黄褐 10YR5/2 シルト混中砂 第5層偽礫含む |
| 6 にぶい黄褐 10YR4/3 粗砂混シルト 小偽礫含む | 13 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混粗砂 第5層偽礫多く含む |
| 7 灰黄 2.5Y6/2 シルト混細砂 粗砂多く含む | |

図409 5-1区 第4面 方形周溝墓1 平・断面図

掘形の埋土は、細砂が混じるにぶい黄褐色のシルトが、主である。

遺物は、1767・1800・1801・1906柱穴からわずかな土器が出土している。いずれも、小片で図示できなかった。

この建物は、第5層上面で検出されているが、柱穴から古代の土師器片が出土することから、上面の掘り残しとも考えられる。

〔柱列10〕(図407・408)

5-2区の西側中央部で検出された。4基の柱穴が南北に並んでおり、主軸方向はN-1°-Eを示す。長さ4.9mを測る。対になる柱穴がないことから、柱列とした。柱穴は不正円形で、径0.3~0.4m・深さ0.1~0.15mである。柱痕は1909柱穴にのみ残存していた。その径0.1mである。

掘形の埋土は、にぶい黄褐色のシルトが主である。遺物は出土していない。

〔柱列11〕(図407・408)

5-2区南東部の掘立柱建物67の南側で、南北方向に4基並んで検出された。主軸方向はN-8°-Eを示す。長さ4.1mを測る。柱穴は方形を指向し、一辺が0.5~0.6m・深さ0.15~0.25mを測る。柱痕は総てに残存しており、径0.1~0.15mである。対になる柱穴がないことから、柱列とした。

掘形の埋土は、中砂が混じる灰黄褐色のシルトが主である。

遺物は、1771・1806柱穴から土器の小片が出土した。図示できるものはない。

以上の掘立柱建物67および柱列10・11は、第4b層下面および第5層上面の第4面で検出された遺構であるが、掘形に古代の土師器破片などを含むことから、本来、第3面に帰属される遺構とも考えられる。

方形周溝墓は、05-2調査区内および池内遺跡の調査でも、1基のみの検出である。

〔方形周溝墓1〕(図407・409・410 図版87-4)

5-1区の北側中央部で検出された方形周溝墓で、1基のみである。規模は8.7×9.0mを測り、隅丸方形で、溝が全周する。盛土は削平され残存していない。主体部も検出されていない。周溝は、幅0.95~1.75m・深さ0.3~0.45mを測る。

周溝の埋土は、第5層の偽礫を多量に含み、シルトが混じる中砂が主である。

遺物は周溝からわずかに、古墳時代前期初頭の土器が検出されている。

2269は、角閃石が混じる生駒西麓産の甕の口縁部破片で、2270は在地の甕の口縁部破片である。

2271・2272は、小型の底部を残すもので、壺ないしは鉢のものと思われる。

遺物から、古墳時代前期初頭に属すと考えられる。北東辺を3151溝に切られる。

溝は、5-1・2区および5-3・4区西側で、多数検出されている。それらのなかで、第2・3面と同様な小規模の南北方向ないしは東西方向の溝に関しては、耕作痕と考えられる。

それ以外の蛇行する溝に関して、以下に記述する。

〔1765溝〕(図407・411~413 図版89・90-1・2・4、113・114)

5-1・2区の西端で検出された、ゆるやかな弧状の南北方向の溝である。東側に同様の1766溝が並走する。両端は調査区外へ延びる。検出長約60m・幅3.0~3.2m・深さ0.7~0.9mを測る。溝底のレベ

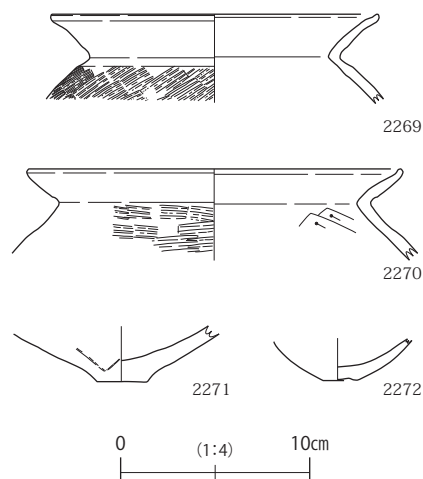


図410 5-1区 第4面
方形周溝墓1 出土遺物

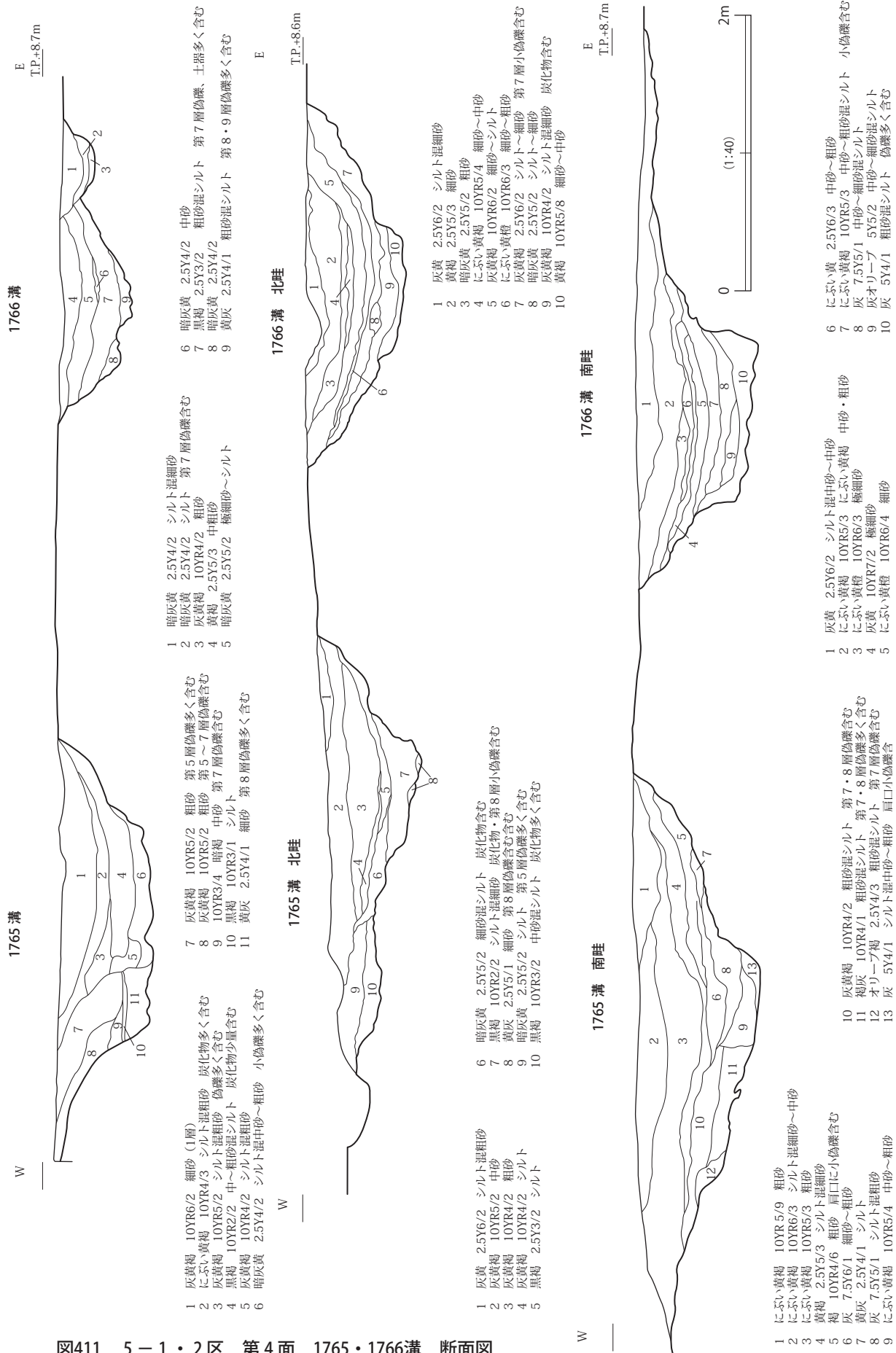


図411 5-1・2区 第4面 1765・1766溝 断面図

ルで観ると、2区の断面でT.P. 7.88 m、1区の北側断面でT.P. 7.72 mと北に向かって深くなることが判る。

埋土は10～13層に細分されるが、シルトが混じる灰黄褐色から黒褐色の粗砂が主である。数度の掘り直しが観察される。

遺物は、弥生時代前期の土器・石器などが多量に出土している。石器は後節で詳述する。

土器は、大きく4分割された層から出土するが、上層の1・2層出土の土器は区分されていない。

4層から出土した土器には、壺・甕があり、口縁部破片や底部破片のことが多い。

壺は、頸部に沈線1条を施す2304・2305があり、2303は、削り出し突帯上に沈線1条を施している。いずれのものも、内外面にヘラミガキを施しているが、残りが悪く、鮮明なものは少ない。

甕には、口縁部端部に刻み目を施す2308や頸部に沈線1条を施す2309・2313がある。2312は無紋である。2315・2316の底部は甕で、他は壺の底部である。

3層から出土した土器には、壺・甕がある。口頸部を残す壺には、頸部に段を施す2291、口縁部端部に沈線1条・頸部に削り出し突帯1帯を施す2292がある。後者には口縁部に紐孔を穿つ。2293は体部の一部を欠くため、器高が不明である。体部がやや扁平で、平底である。頸部に沈線1条を施す。体部の文様は不明である。2296は口縁部破片で、外面に段を、内面に突帯を施すものである。2297は壺の体部破片で、段・沈線2条・4条間綾杉および縦線を施し、黒色物質を塗布している。2298は体部破片で、体部に沈線2条を施す。2299は大型壺の体部下半および底部を残すもので、突出する底部がわずかな上げ底である。体部外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。底部内面に指押さえを残す。2300は小型壺の体部以下を残すもので、体部下半の外面にヘラミガキを施す。体部に段・沈線1条を施している。外面に黒色物質を塗布している。2301・2302は、壺の底部破片である。2294の甕は口縁部破片で、端部に刻み目、頸部に段ないしは沈線と思われる痕跡がある。2295は甕の底部を欠損するもので、口縁部端部が面をもつ。体部外面に板状のナデを施す。体部のやや下がった位置に沈線を1条施す。外面に煤が付着する。

その他の層から出土した土器には、壺蓋・壺・鉢・甕蓋・甕などがある。

壺蓋には、2282・2283のように中心に紐孔を設け口縁部が裾広がり伸びるものと、2280のように円弧状で口縁部に2個1対の紐孔を穿つものがあり、いずれも小型である。2280はほぼ完形で、口径9.4 cm・器高2.5 cmを測る。内外面にヘラミガキを施す。2282は約95%を残し、口径11.4 cm・器高2.4 cmを測る。2283は約1/3を残し、口径14.8 cm・器高3.6 cmを測る。前者は、表面摩滅のため調整は不明である。後者は、内外面にヘラミガキを施す。

壺は、口縁部破片と復原完形のものがある。2273は口頸部を残し、頸部に沈線3条を施す。2274は口縁部の小破片で、口縁部端部が面をもちわずかに垂下する。2275は体部下半を欠失するもので、口縁部の端部が面をもち、わずかに垂下する。頸部にやや間隔が開いた沈線2条・体部に削り出し突帯上沈線1条を施す。外面の調整は表面摩滅のため不明である。内面に指押さえを残す。口縁部に紐孔を穿つ。2276は図上復原で、口径15.4 cm・器高34.4 cmを測る。体部下端を欠損する。口縁部内外面および体部外面にヘラミガキを施す。体部内面に粘土紐の継ぎ目を残す。口縁部に紐孔を穿つ。頸部にやや間隔の開いた沈線2条・体部に沈線3条を施す。2281は体部破片で、沈線2条以上・ヘラ描きの綾杉を施している。

鉢は直口のもので約2/3を残す。口径11.8 cm・器高9.0 cmの小型のもので、わずかに内弯する口縁

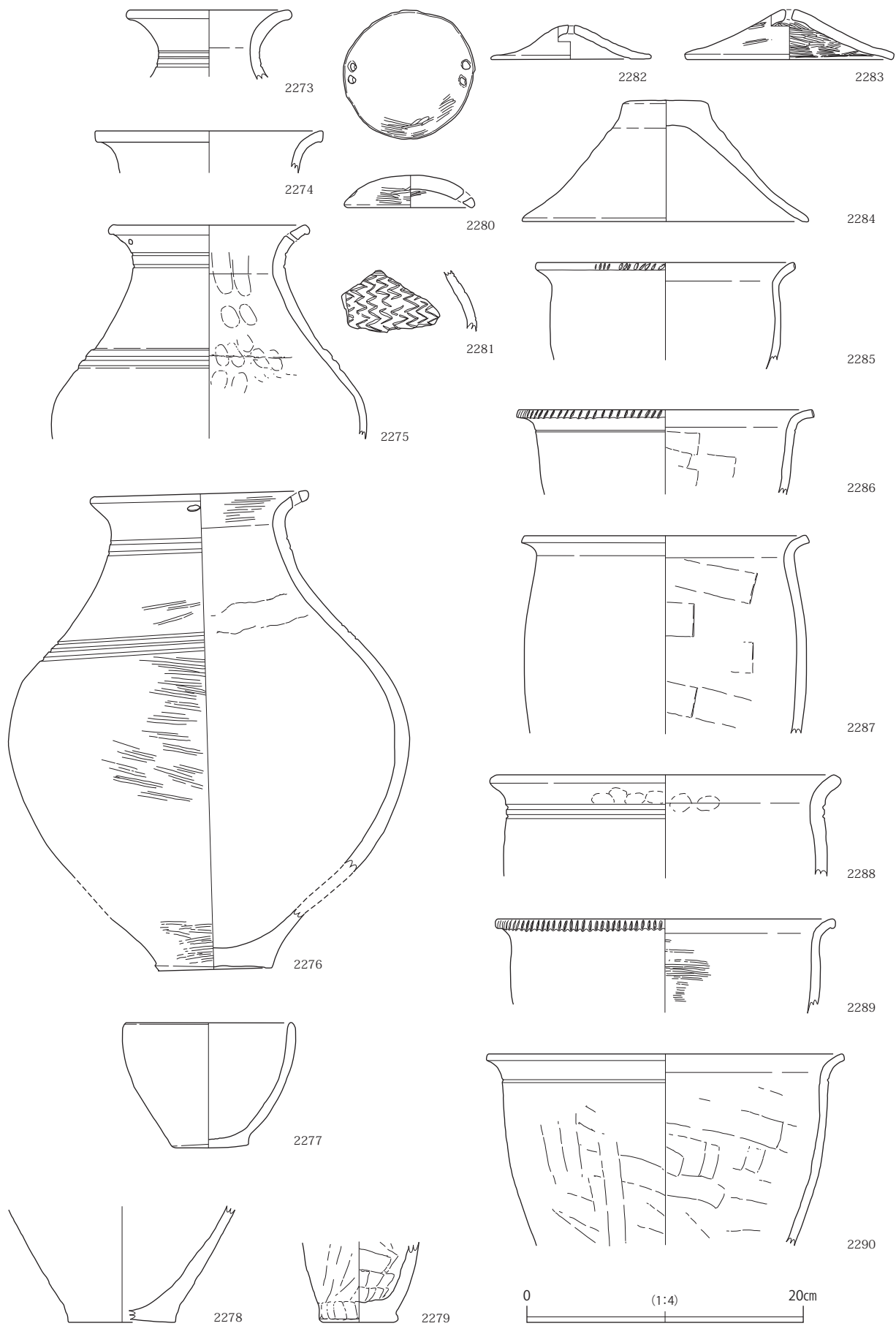


图412 5-1·2区 第4面 1765沟 出土遗物(1)

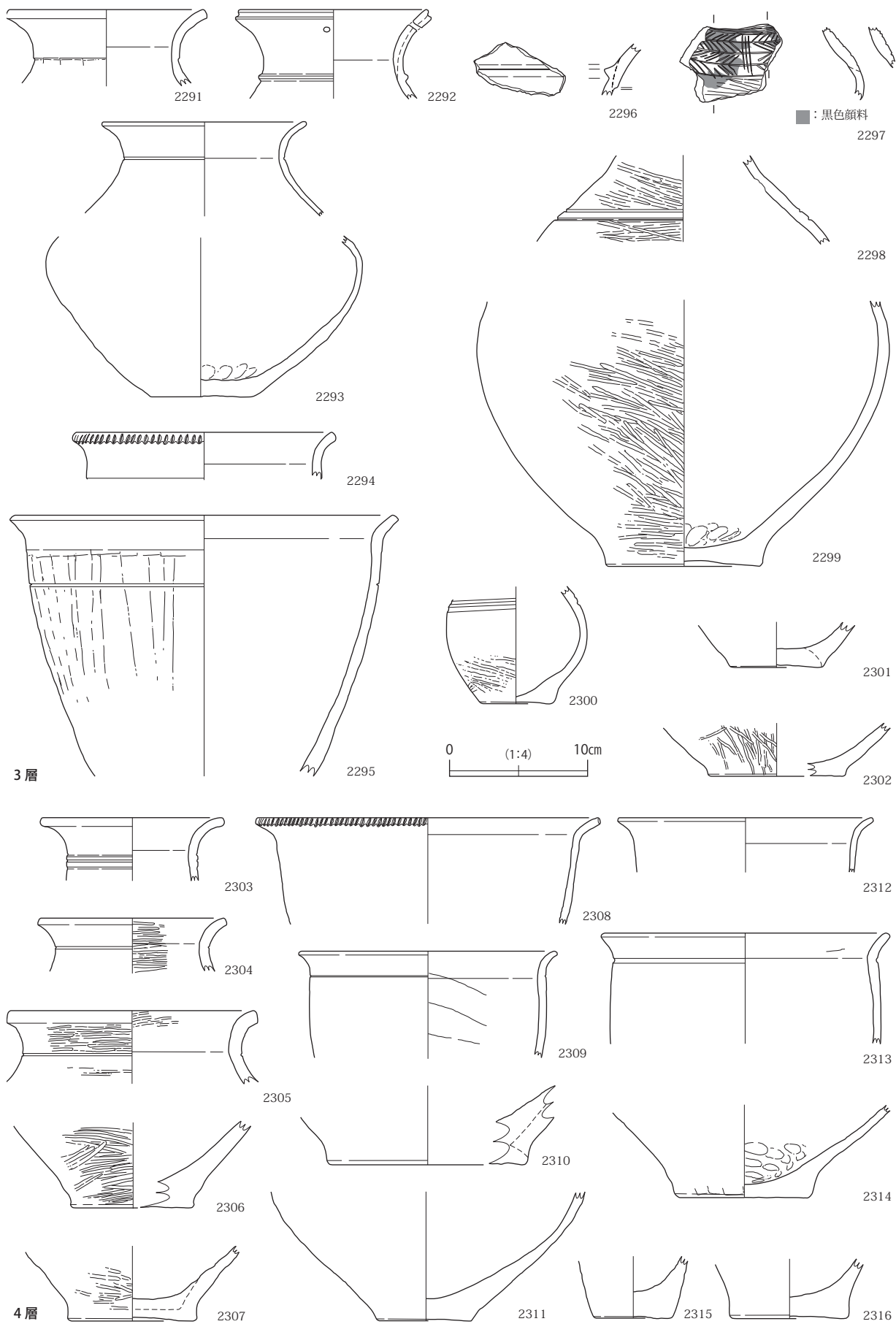
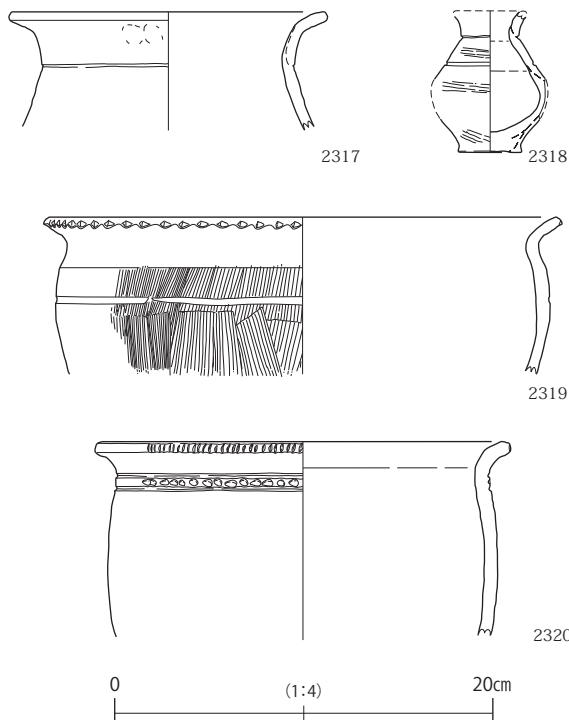


图413 5-1·2区 第4面 1765溝 出土遺物(2)



部に突出する平底である。2279は口縁部を欠くもので、内外面に板状ナデを施す。

2284の甕蓋は約1/3を残し、口径20.8cm・器高8.7cmを測る。内外面の調整は、表面摩滅のため不明である。

甕は図示できたもの総てが口縁部破片で、口縁部端部が面をもつもので、2286・2289が端部に刻み目を施し、2285は部分的に刻み目を施す。2286・2290が頸部に沈線1条・2286が2条を施す。2290は内外面に板状のナデを施し、2286・2287は体部内面に板状ナデを施す。2289は体部の外面にナデ、内面にヘラミガキを施す。その他のものは、ナデである。

[1766溝] (図407・411・414

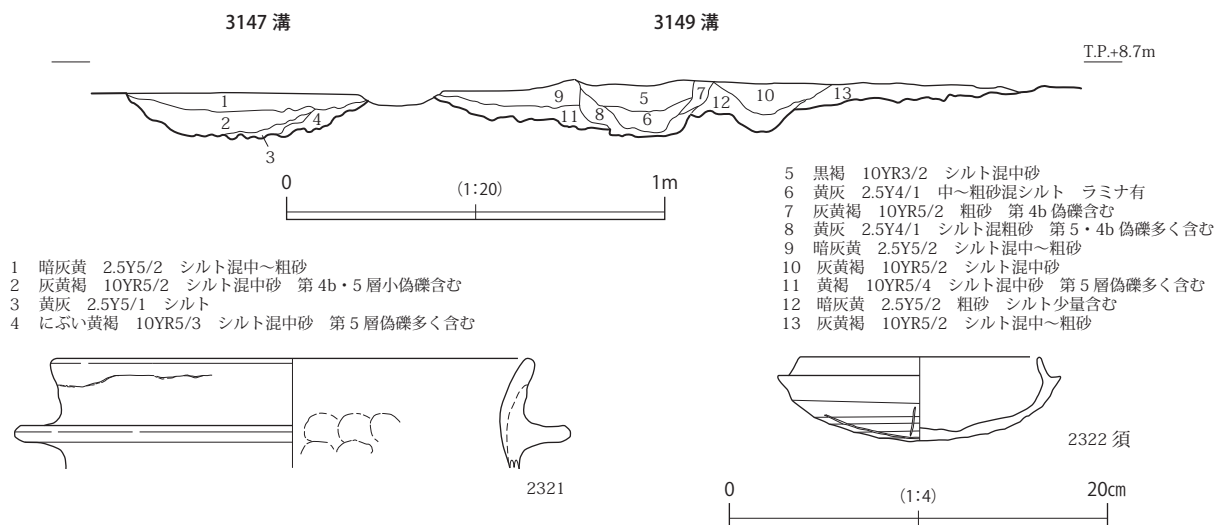
図版89・90-3・5、114)

5-1・2区の西端部で1765溝の東側で検出され

た緩やかな弧状の南北方向の溝である。両端は調査区外へ延びる。検出長約60m・幅2.2~4.0m・深さ0.5~0.9mを測る。1765溝と比較してわずかに規模が小さい。

溝の埋土は、細砂から粗砂が混じる灰黄褐色や黒褐色のシルトが主である。この溝も数度に渡る掘り直しが認められる。1765溝同様に南から北へ溝底が傾斜している。

遺物は、弥生時代前期の土器・石器が約7コンテナ出土している。出土量の割りに図化できるものが少なかった。2317は壺の口頸部破片で、頸部に段を施す。内外面は表面摩滅のため、調整不明である。2318はミニチュアの壺で、口縁部端部を欠損する。頸部に段・体部に沈線1条を施す。外面にヘラミガキを施す。2319・2320は甕の口縁部破片で、体部外面に前者がハケメを、後者がナデを施す。両者共に口縁部端部に刻み目を施す。前者が体部に沈線1条、後者が沈線2条間に押捺を施す。2319は、大型の鉢の可能性を残す。



- 1 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混中~粗砂
- 2 灰黄褐 10YR5/2 シルト混中砂 第4b・5層小偽礫含む
- 3 黄灰 2.5Y5/1 シルト
- 4 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混中砂 第5層偽礫多く含む

- 5 黒褐 10YR3/2 シルト混中砂
- 6 黄灰 2.5Y4/1 中~粗砂混シルト ラミナ有
- 7 灰黄褐 10YR5/2 粗砂 第4b偽礫含む
- 8 黄灰 2.5Y4/1 シルト混粗砂 第5・4b偽礫多く含む
- 9 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混中~粗砂
- 10 灰黄褐 10YR5/2 シルト混中砂
- 11 黄褐 10YR5/4 シルト混中砂 第5層偽礫多く含む
- 12 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂 シルト少量含む
- 13 灰黄褐 10YR5/2 シルト混中~粗砂

図415 5-1区 第4面 3147・3149溝 断面図 3147溝 出土遺物

[3147溝] (図407・415 図版106)

5-1区西端部で検出された南北方向の溝で、幅 0.7 m・深さ 0.1 mを測る。埋土は4層に細分されるが、シルトが混じる灰黄褐色の中砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器などがわずかに出土している。

2321は土師器羽釜の口縁部破片で、角閃石を含む生駒西麓産のものである。2322は須恵器の杯身で約9割を残す。口径 12.8cm・器高 4.3 cmを測る。TK 10形式に相当する。底部外面に篋記号を施す。これらの遺物は、古墳時代後期のものである。

[3149溝] (図404・415)

5-1区の西端部で検出された、南北方向の溝である。3147溝の東側に当たる。幅 1.2 ~ 1.5 m・深さ 0.15 mを測る。埋土は13層に細分されるが、シルトが混じる黄灰色の粗砂や、暗灰黄色の粗砂が主である。数度に渡り堀直しが認められる。

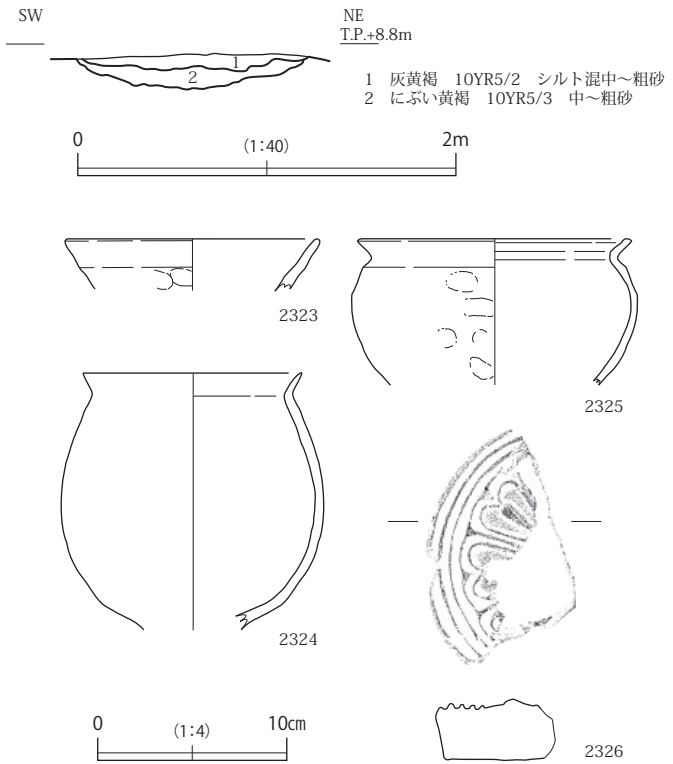


図416 5-2区 第4面 3151溝 断面図 出土遺物

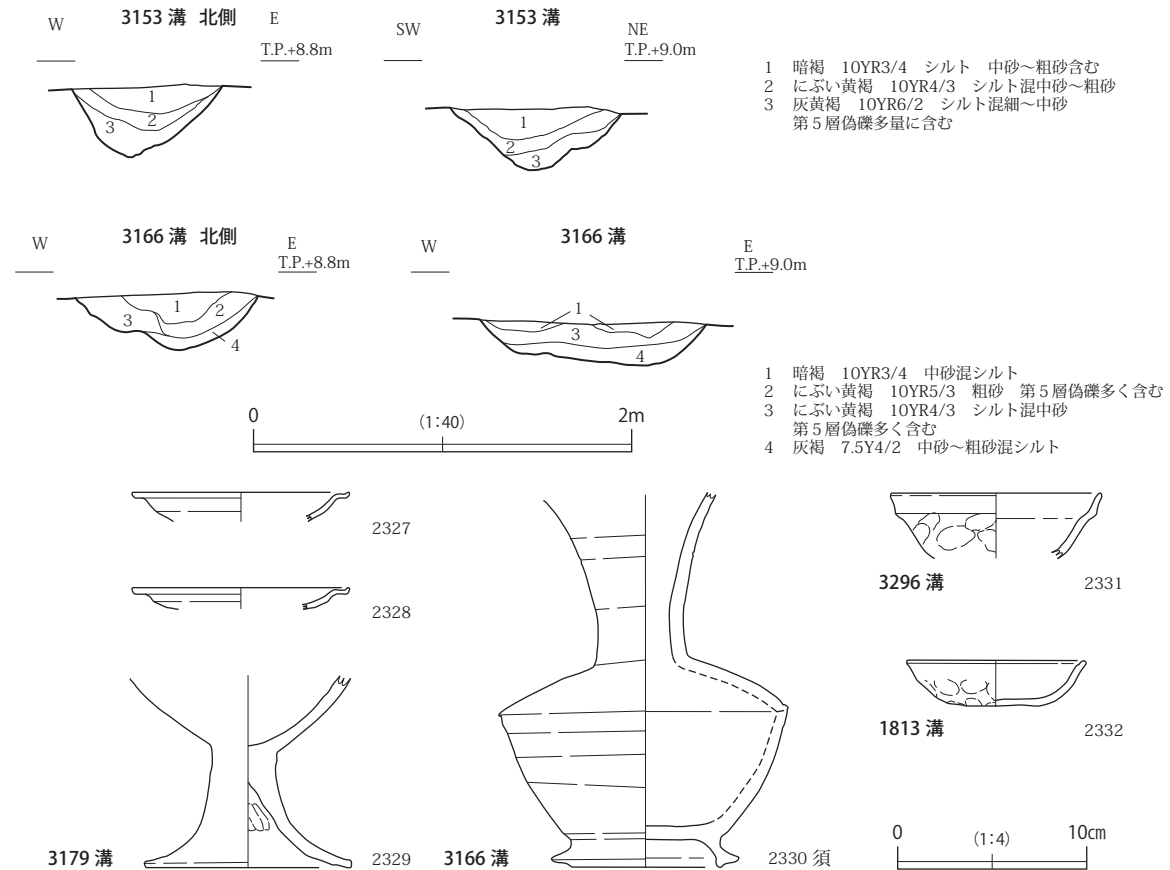


図417 5区 第4面 各溝 断面図 出土遺物

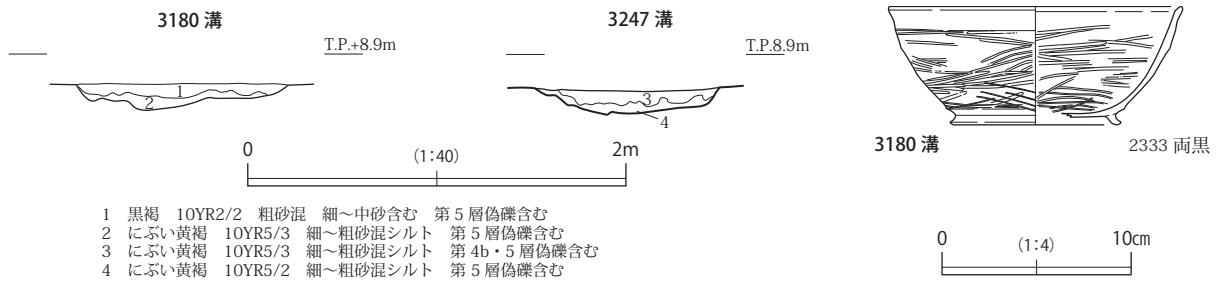


図418 5-3区 第4面 3180・3247溝 断面図 3180溝 出土遺物

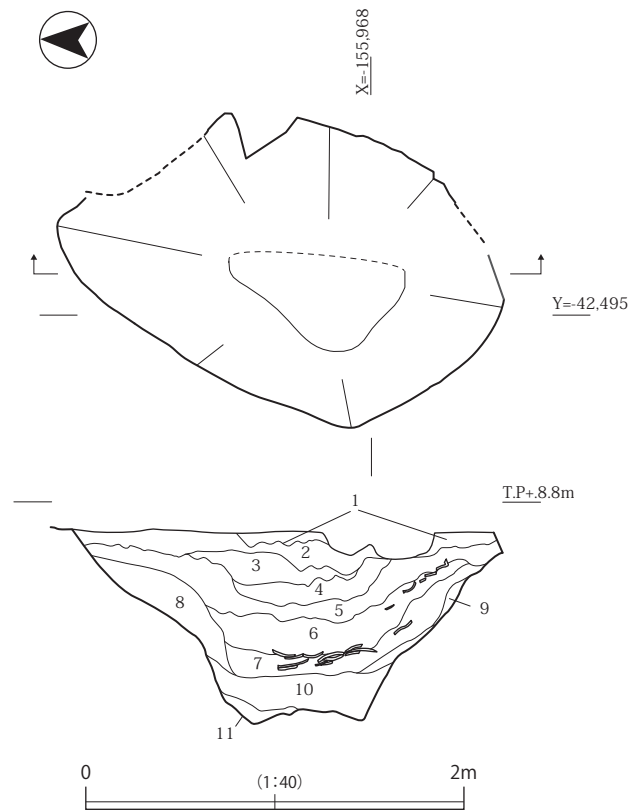
遺物は、古代の須恵器や弥生時代前期の土器が出土しているが、図示できるものは無かった。

この溝は、第4面で検出された溝であるが、断面観察により、第3面の大畦畔下層から切り込まれていることが判り、このことから、第3面と第4面の間に位置する。

また、5-2区の2130溝と同一溝と考えられる。なお、3147溝と合わせて、古墳時代後期以降の遺物が出土していることから、第3面に帰属すると思われる。

[3151溝] (図407・416)

5-1・2区で検出された小溝で、5-2区の北側を東西方向に弧状に流れ、1区との境目で大きく屈曲し北北西に延び、方形周溝墓1の北東辺を切り、さらに、西北西に延びる。北端では、調査区外に延びる。検出長約49.5m・幅1.2m・深さ0.2mを測る。



- | | | | | | |
|----|-------|----------|--------|--------|--------------|
| 1 | 灰黄褐 | 10YR4/2 | シルト混 | 細砂 | |
| 2 | 灰黄褐 | 10YR4/2 | シルト混 | 細砂 | |
| 3 | 灰黄褐 | 10YR5/2 | シルト混 | 中砂 | |
| 4 | 灰黄褐 | 10YR4/2 | 細～粗砂混 | シルト | |
| 5 | 灰黄褐 | 10YR4/2 | 細～極粗砂混 | シルト | 炭化物少量含む |
| 6 | 黒褐 | 10YR3/1 | 細～極粗砂混 | シルト | 炭化物含む |
| 7 | 黒褐 | 10YR3/1 | シルト混 | 中～粗砂 | 第9・10層ブロック含む |
| 8 | 暗灰黄 | 2.5Y4/2 | シルト混 | 中～粗砂 | |
| 9 | 褐灰 | 10YR4/1 | シルト混 | 中～粗砂 | |
| 10 | 灰 | 5Y5/1 | 細砂混 | 粘土～シルト | |
| 11 | オリープ灰 | 2.5GY5/1 | 細砂混 | 粘土～シルト | |

図419 5-1区 第4面 3224井戸 平・断面図

埋土は2層に区分され、にぶい黄褐色の中砂から粗砂が主である。

遺物は、古代の土師器・須恵器などがわずかに出土している。

2323は土師器杯の口縁部破片で、体部外面に指押さえを残す。

2324・2325は土師器甕で、前者は、突出する底部が付くと思われ、古墳時代前期に属すると考えられる。後者は、短く外反する口縁部の端部が内方へわずかに肥厚し、上端面をもつ。扁平な体部に丸底をもつと思われる。体部外面に指押さえを残す。

2326は、複弁蓮華紋軒丸瓦の瓦頭を約1/3を残存している。

[3153溝] (図407・417)

5-1・2区の東側で、弓状に屈曲した南北方向の溝である。検出長42.8m・幅0.8～0.9m・深さ0.4mを測る。

埋土は、3層に分層でき、シルトが混じる灰黄褐色の細砂から中砂が主である。

遺物は、土師器の小片がわずかに出土したが

図示できるものはない。

〔3166溝〕（図407・417）

5－1区の北東側で弧状に屈曲した南北方向の溝で、両端伴に調査区外へ延びる。検出長15.2m・幅0.9～1.15m・深さ0.25～0.3mを測る。

埋土は、4層に区分される。中砂から粗砂が混じる、灰褐色のシルトが主である。

遺物は、土師器・須恵器がわずかに出土している。2330は須恵器の口縁部を欠損し、高台が付く長頸壺である。

他に、5－2区の南東端部の1813溝からは2332の古代の土師器皿が、5－3区の北西部の3296溝からは2331の古代の土師器杯が出土している。同南西部に位置する3179溝からは2327・2328の古代の「ての字」状口縁の土師器小皿と2329の古墳時代前期初頭の土師器高杯が出土している。高杯は口縁部を欠損する。

〔3180溝〕（図407・418）

5－3区の南西部の3179溝を切り、南西－北東方向の溝である。検出長約21m・幅1.1～2.4m・深さ0.1mを測る。

埋土は2層で、細砂から粗砂が混じるにぶい黄褐色のシルトが主である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などがわずかに出土している。2333は、両黒の黒色土器碗で、約1/4を残すものである。口径14.8cm・器高10.5cmを測る。内外面に丁寧なヘラミガキを施す。

〔3247溝〕（図407・418）

5－3区の北西部で検出された南北方向の溝で、幅0.2～0.3m・深さ0.1mを測る。

埋土は2層で、細砂から粗砂が混じるにぶい黄褐色のシルトが主である。

遺物は出土していない。

井戸は、5－1区の南端部の中央で1基のみを検出している。

〔3224井戸〕（図407・419・420 図版88・107）

平面不正楕円形で、断面が逆台形状である。長径2.4m・短径1.5m・深さ1.0mを測る。

埋土は11層に細分され、シルトが混じる灰黄褐色や黒褐色の細砂から粗砂が主である。5・6層に炭化物が含まれる。

遺物は、6・7層から出土している。

2334は大型の広口壺の口頸部のみを完残すもので、口縁部は短く外反し、さらに垂下する。口縁部端部に櫛描波状紋を1帯施し、頸部に刺突紋・貼付突帯1帯を付す。2336は小型壺で、約2/3を残し、口径9.2cm・器高12.5cmを測る。外反する口縁部に短い筒状の頸部、肩の張る体部に平底である。体部外面に2分割で叩き目を、内面に板状ナデを施す。体部下半から底部にかけて煤が付着する。

2335・2338～2343は甕である。いずれも、口縁部破片で、2338・2339・2341は弥生時代後期の第V様式系甕で、体部外面に叩き目、内面にナデを施す。2335は球形の体部で、叩き目後ハケメおよびナデ、2340はやや下膨れの体部で、体部内外面にナデを施す。2343は口縁部端部がわずかに立ち上がり、器壁がやや薄く上田町Ⅱ式の甕を模した在地のものである。2342・2343は、体部外面にハケメおよびナデ、内面にヘラケズリを施す。いずれのものも、外面に薄く煤が付着する。

2337は約1/4を残す高杯で、外方へ開く口縁部に段をもつ杯底部、中空の脚柱部に裾広がり脚台部をもつ。調整は、表面摩滅のため不明である。脚柱部との境目の4方に円形の透かしを穿つ。

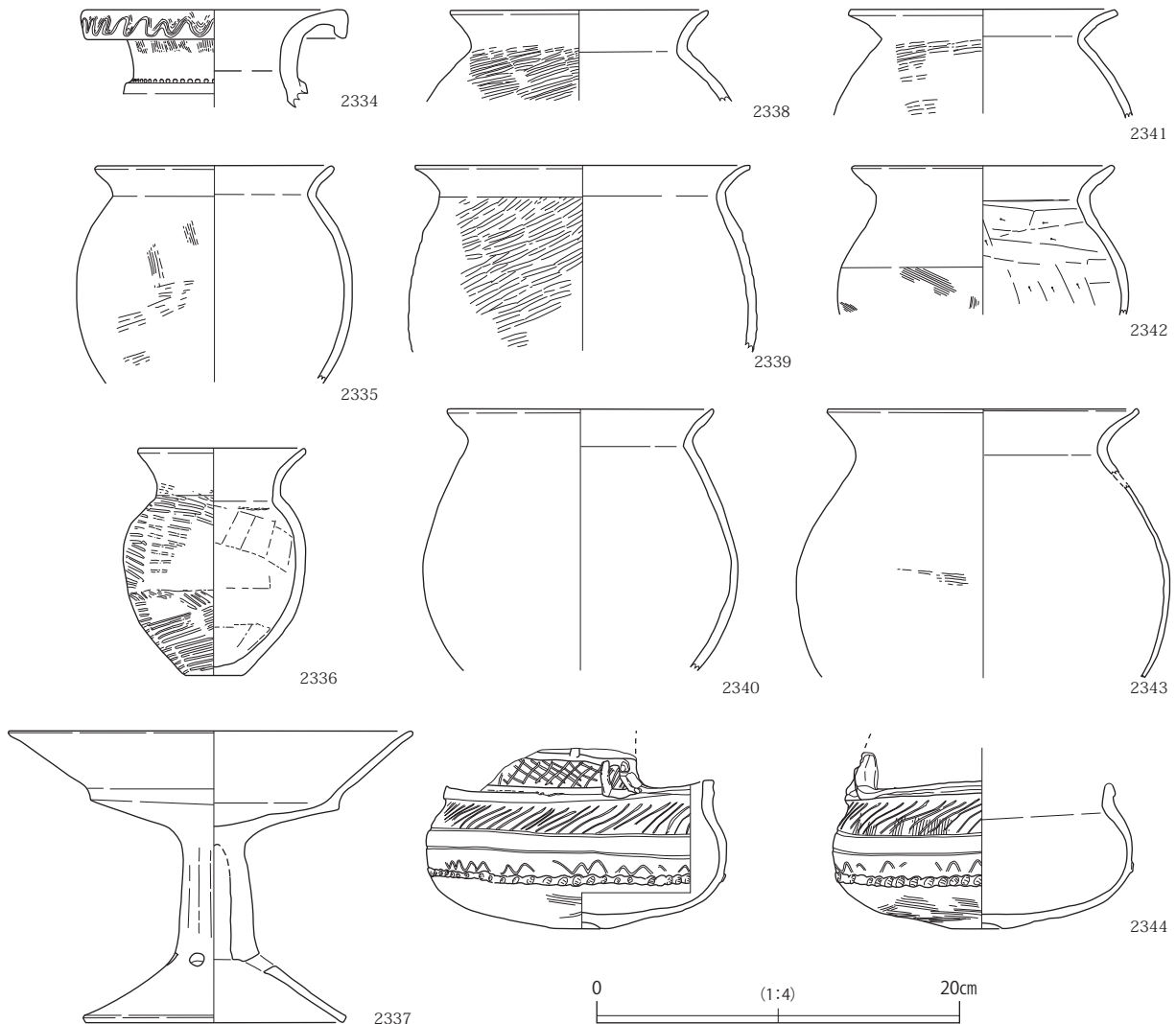
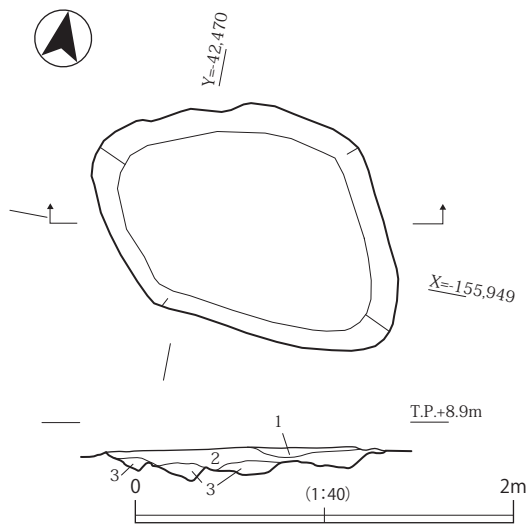


図420 5-1区 第4面 3224井戸 出土遺物



- 1 オリーブ黒 5Y2/2 シルト混細砂～極細砂
第4b・5層ブロック含む
- 2 灰オリーブ 5Y4/2 シルト混極細砂
- 3 オリーブ黄 5Y6/3 極細砂

図421 5-3区 第4面 3257土坑 平・断面図

2344は手焙りで、覆部の大部分を欠損する。覆部は口縁部の内側に接合され、直口の口縁部の上端が面をもち、扁平な鉢部にわずかに突出する上げ底のものである。鉢部外面にヘラミガキを、内面にナデを施す。覆部外面に、横位の突帯と縦位の棒状浮紋を配し、その間に篋描きの斜格子を施す。鉢部の口縁部から体部上半外面に斜線・やや間隔が開いた沈線2条・篋描きの波状紋・刻み目突帯1帯を施す。

以上の遺物から、この遺構は、古墳時代前期初頭に属すと考えられる。

〔3257土坑〕(図407・421)

5-3区の北西端部で検出された不正楕円形の土坑で、長径1.8m・短径1.2m・深さ0.15mを測る。

埋土は3層で、オリーブ黄色の極細砂が主である。

遺物は出土していない。

[2120・2121土坑]

(図407・422)

5－4区の西半部で検出された不正楕円形の土坑で、近接して検出された。

2120土坑は、長径 1.3 m・短径 1.1 m・深さ 0.25 mを測り、埋土は6層に細分され、主に黒褐色の粗砂である。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器などの小片がわずかに出土している。

2121土坑は、長径 0.85 m・短径 0.7 m・深さ 0.2 mを測り、埋土は4層に細分され、主に黒褐色のシルトである。

遺物は、土師器の小片がわずかに出土している。

[2128土坑] (図407・422)

5－4区の西半の北端で検出された不定形の土坑で、北端部が側溝に切られる。検出長 1.15 m・幅 1.7 m・深さ 0.2 mを測る。

埋土は3層に細分でき、細礫の混じるにぶい黄褐色の粗砂が主である。

遺物は、土師器・須恵器の小片がわずかに出土している。

2345は土師器椀で、高台の痕跡を残す。外面に指押さえを残す。内外面に煤が付着する。

[3201・3202土坑] (図407・423・424 図版87－3・106)

5－1区の北東部で検出された土坑である。

3201土坑は、東端が調査区外へ延びる不定形の土坑である。検出長 5.5 m・幅 2.6 m・深さ 0.15 mを測る。

埋土は3層に細分されるが、炭化物を含みシルトが混じる、暗灰黄褐色の中砂から粗砂が主である。

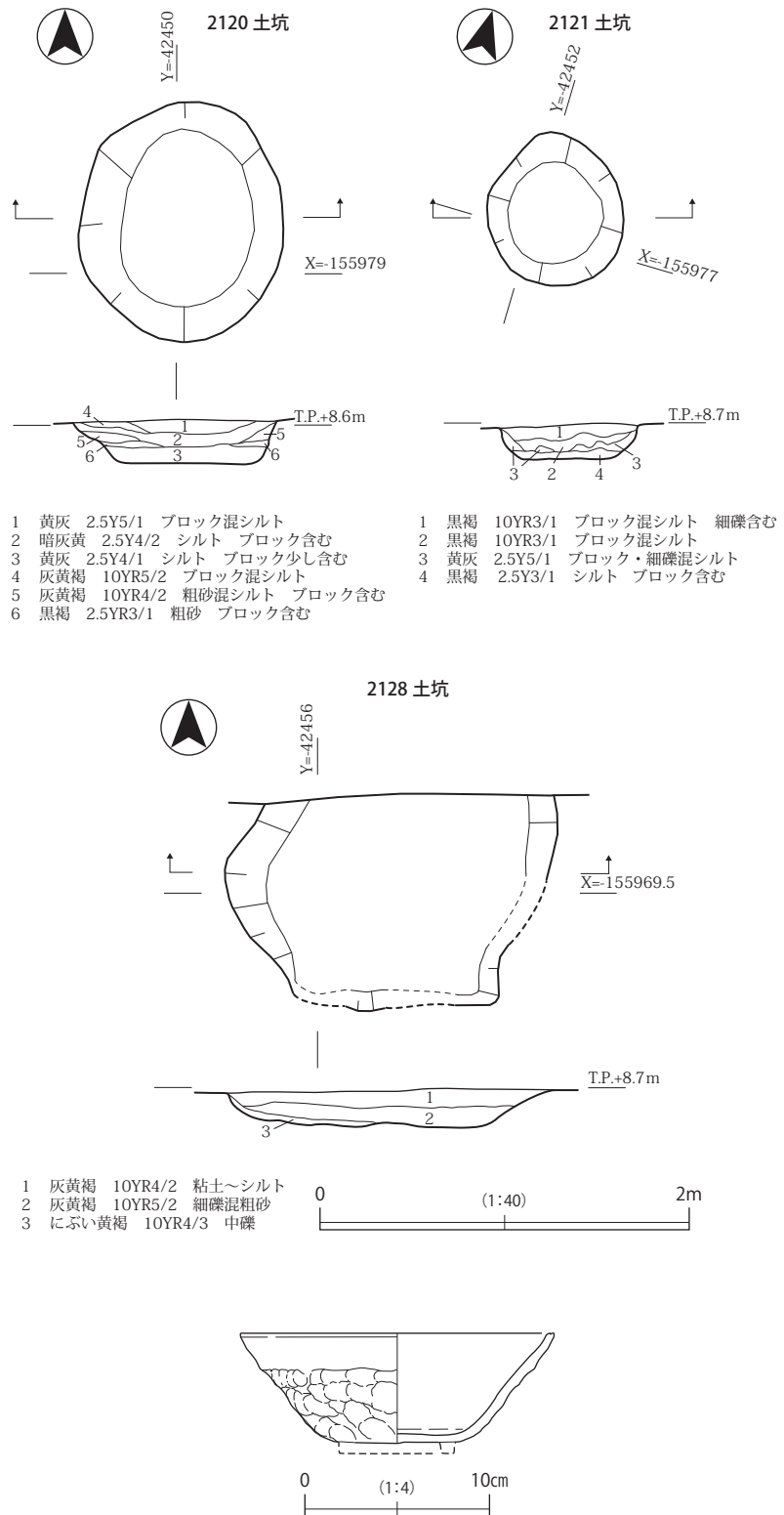


図422 5－4区 第4面 2120・2121・2128土坑 平・断面図

2128土坑 出土遺物

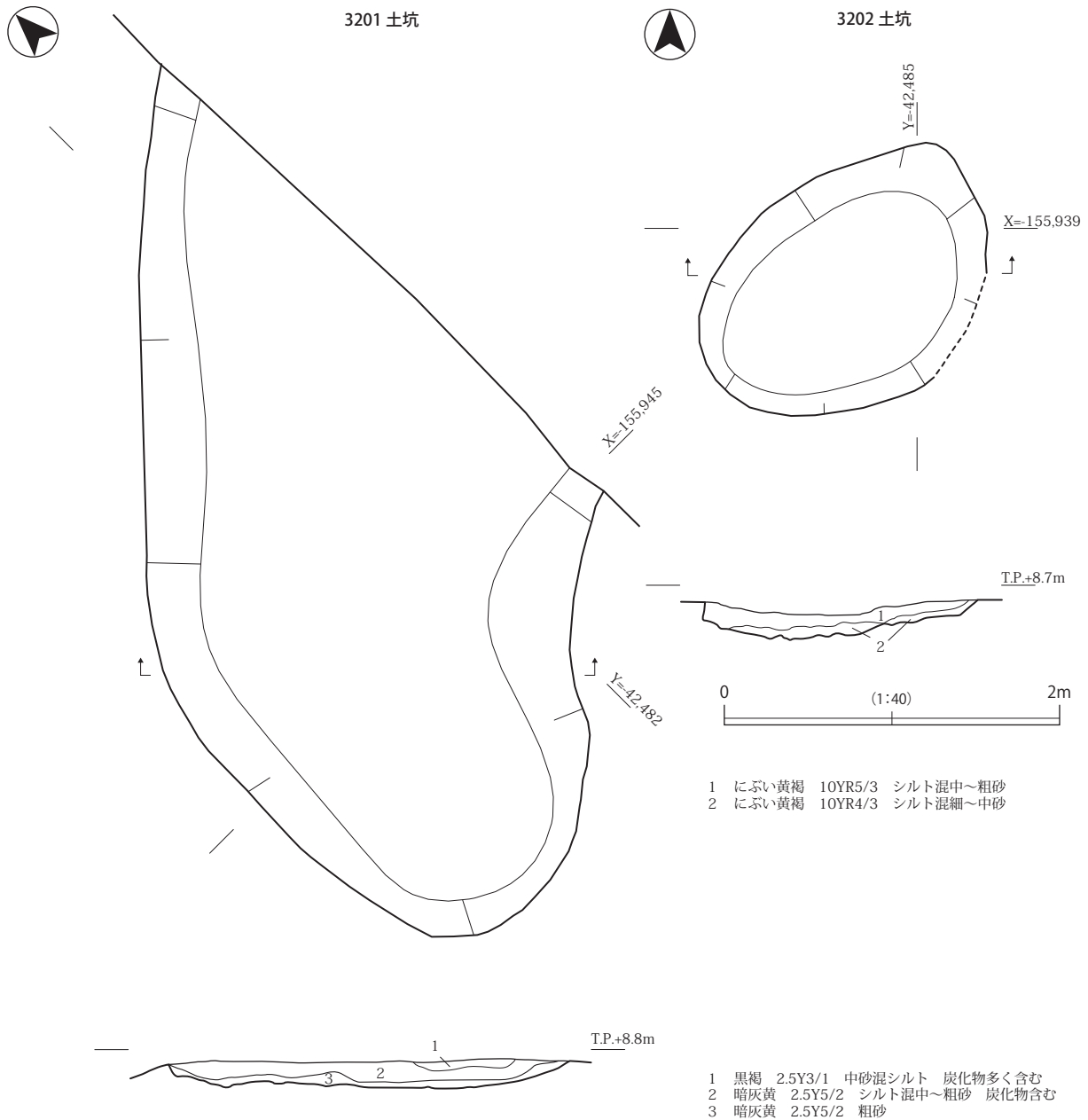


図423 5-1区 第4面 3201・3202土坑 平・断面図

遺物は出土していない。

3202土坑は楕円形で、長径 1.95 m・短径 1.4 m・深さ 0.1 mを測る。

埋土は 2 層に細分され、シルトが混じるにぶい黄褐色の細砂から中砂が主である。

遺物は、古墳時代前期初頭の土器が出土している。

2346・2347は、二重口縁壺の口頸部破片で、いずれも無紋である。後者は、角閃石を含む暗褐色の土器で、形態・胎土などから瀬戸内系のもと思われる。2348は直口のもので、口頸部から体部上半を残す。内外面伴にナデを施す。

2349は小型の甕で約 1 / 3を残す。口径 12.8 cm・器高 12.6 cmを測る。外反する口縁部に、屈曲する頸部で、内面に明瞭な稜をもつ。球形の体部にわずかな尖り底である。体部外面に叩き目を施す。外面に煤が付着する。2350～2352は弥生時代後期の第V様式系甕である。2350は口頸部から体部上半を残し、体部外面に叩き目、内面にナデを施す。体部外面に煤が付着する。2351は口縁部端部および底部を欠損

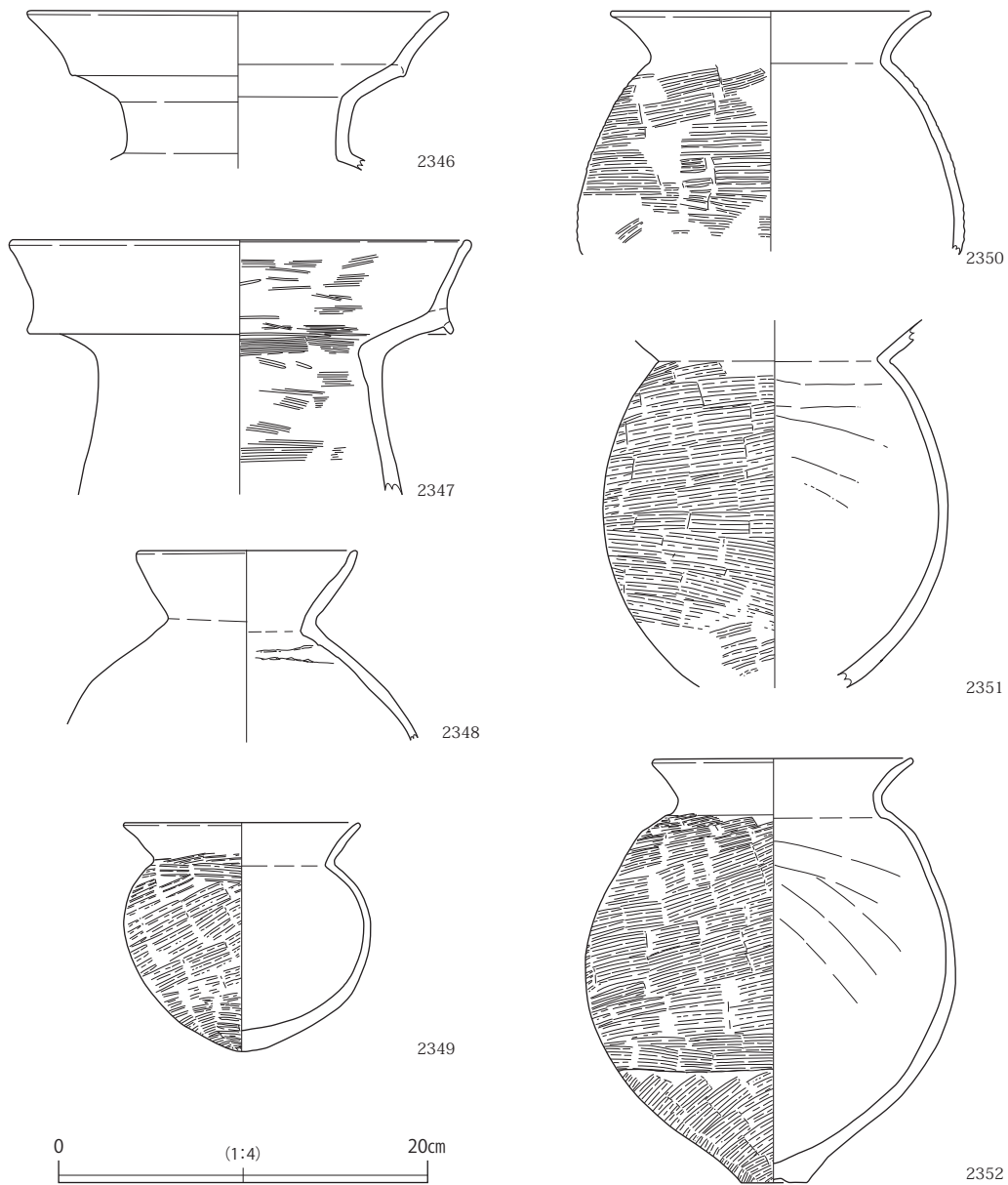


図424 5-1区 第4面 3202土坑 出土遺物

する。頸部内面に明瞭な稜をもつ。体部外面に叩き目、内面に板状ナデを施す。体部外面に煤が付着する。2352は約3/4を残す。口径13.8cm・器高23.0cmを測る。外反する口縁部に球形の体部に突出する底部の中心部がわずかに窪む。体部外面に叩き目、内面に板状ナデを施す。体部外面に煤が付着する。

〔2023土坑〕(図407・425 図版112)

5-2区の東北部で検出された不定形の土坑である。長さ2.9m・幅1.1m・深さ0.15mを測る。

埋土は、シルトが混じる黄灰色の中砂から粗砂が1層である。

遺物は、古墳時代前期初頭の土器や飯蛸壺が出土している。

2353は口縁部破片で、外方へ開く口縁部の端部がさらにわずかに摘み上げられ面をもち、くの字状に屈曲する頸部の内面に明瞭な稜をもつ。体部外面に細かい叩き目後部分的にハケメ、内面の口縁部にハケメ、体部にヘラケズリを施す。角閃石を含む生駒西麓産の土器である。2354はほぼ完形で、口径4.0cm・器高10.0cmを測る。直口で、丸底のもので、口縁部近くに、円形の紐孔を穿つ。

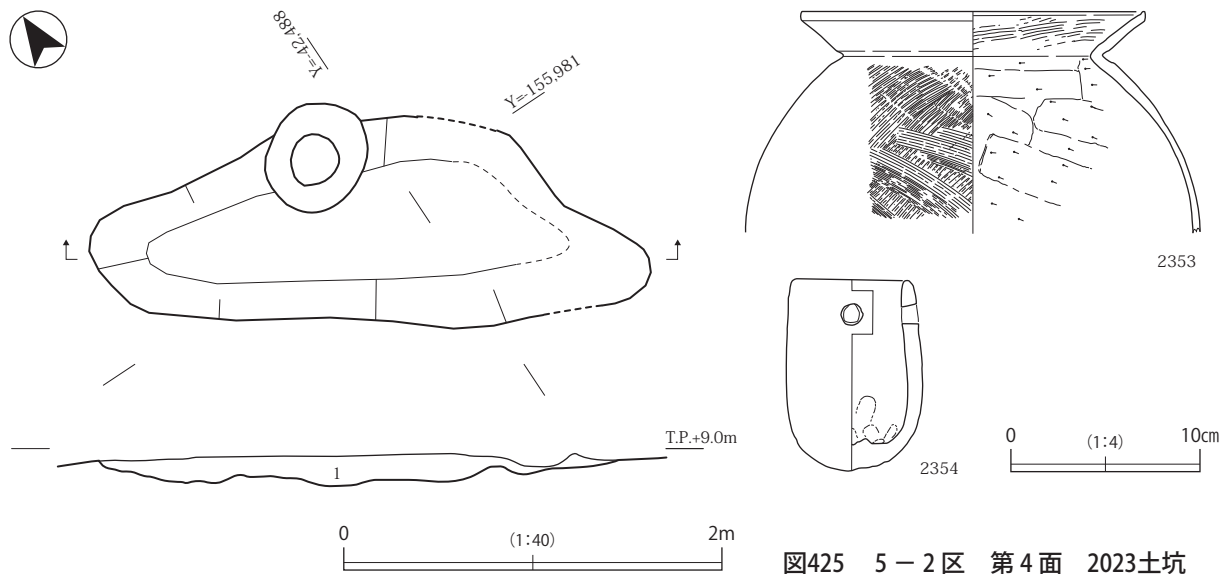


図425 5-2区 第4面 2023土坑
平・断面図 出土遺物

1 黄灰 2.5Y5/1 シルト混中～粗砂 極粗砂多く含む 細礫少し含む

〔第5層出土遺物〕(図426 図版107・112)

第5層から出土した遺物は、弥生時代前期～古墳時代前期初頭の土器などがある。

2356は弥生時代前期の小型壺で、口径 3.6 cm・器高 7.6 cmを測る。2359は弥生時代後期の大型器台の口縁部破片で、口縁部が上下に拡張し、上・下端に面をもつ。外面にハケメ後粗いヘラミガキ、内面にナデを施す。口縁部内面に列点紋・上端に沈線1条・綾杉刻み目・端部に篋描きの鋸歯紋を施す。

2355・2357は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の直口壺および小型鉢である。

2358は、古墳時代前期初頭の二重口縁壺の口頸部から体部上半のものである。屈曲する口縁部端部は欠損する。口縁部に円形浮紋・体部に櫛描きの波状紋5帯を施す。

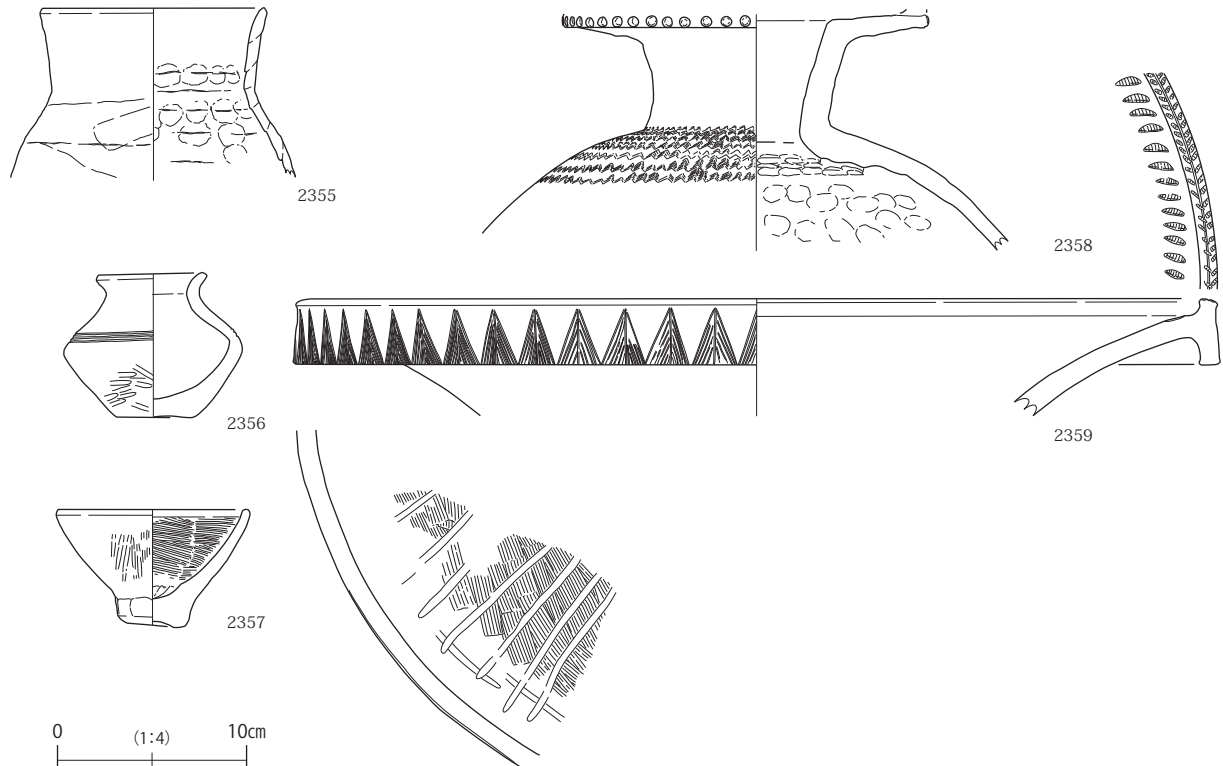


図426 5区 第5層 出土遺物



图427 5区 第5面 平面图



図428 5-3-4区 第5面 水田面

5. 第5面 (図版91・92・93-1・94-1・2)

第5面は、1区で流路を検出した以外は、明確な遺構が検出されていないが、5区において、水田や大型の土坑・溝・流路などを検出している。

〔水田〕 (図427～429)

5-3-4区で検出された水田面は、5-3区の北端部および北東部を除きほぼ全面に広がる。水田面の標高は、5-4区の東南部が一番高くT.P. 8.56 mを測り、5-3区の南西部がT.P. 8.31 mと南東から西北西に向けて緩く下っている。また、3379溝を挟んで北側では、南側がT.P. 8.45 m、北に行くにつれT.P. 8.54 mとわずかに高くなっている。

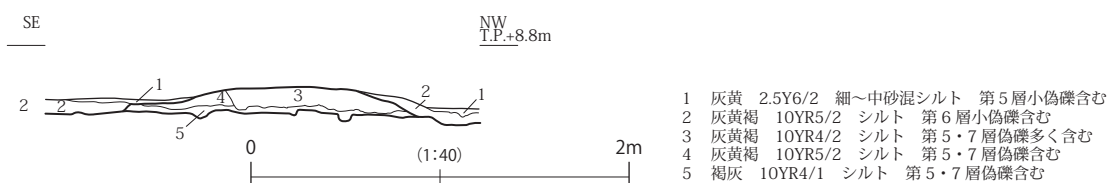


図429 5-4区 第5面 大畦畔 断面図

1枚の水田面の広さは、5-4区の大畦畔を挟んで両側が最も狭く、東に行くにつれ、長く大きくなる傾向が窺われる。

さらに、南側に拡がりを見せると考えられる。

小畦畔は、幅0.2m前後・高さ数cmのもので、大畦畔は幅1.4~2.0m・高さ0.15mを測る。盛土は3層に細分されるが、第5・7層の偽礫を含む灰黄褐色や褐灰色のシルトである。

〔2035流路〕（図427・430~434 図版93-2・94-3・95・108~110）

5-1・2区の東端を南北方向に蛇行しながら流れる流路である。両端は調査区外へ延びる。北端部では、堰を検出している。検出長約60m・検出幅6.2~24.0m・深さ0.9~1.8mを測る。

埋土は、にぶい黄褐色の細砂~粗砂が主である。

堰は、流路に直交する形で検出された。この部分は、下層の第7面の東西方向の2414流路と直交する位置に当たり、水流の削り込みによって深さが増す部分である。堰の前面に北東方向に流れる3375溝が検出されていることから、調査地の北東側に水を供給するために設置されたと考えられる。

遺物は、この堰の周辺で完形の土器が多数出土している。

土器は、コンテナにして17コンテナ出土しており、弥生時代前期の壺蓋・壺・鉢・甕がある。

壺蓋は、図示できるものが4点ある。2360は完形の小型の壺蓋で、わずかに天井部が膨らみ、口縁部端部が面をもつ。口径11.2cm・器高2.0cmを測る。口縁部付近に紐孔を1個穿つ。2363も、同様の形態をしているが、紐孔は中心部に1個穿たれる。約1/2を残す。2361・2362はやや山形になり、口縁部端部が丸く終わる。約1/2弱を残す。壺蓋のいずれのものも、内外面伴に丁寧なヘラミガキを施し、黒色物質を塗布している。

壺は、完形に近いものも多くある。2368は約4/5を残し、口径15.0cm・器高26.8cmを測る。体部が余り張らず、器高の1/2位よりやや下がった位置に最大径をもち、平底のものである。外面はヘラミガキ、内面の上半は丁寧なヘラミガキで、下半が粗いヘラミガキを施す。頸部に段・体部に削り出し突帯上沈線1条を施す。黒色物質を塗布する。2369は完形で、口径13.6cm・器高24.0cmを測る。短く外反する口縁部の端部は丸みをもち、短い筒状の頸部にやや張る体部、わずかに突出しわずかな上げ底である。内外面伴にヘラミガキを施す。口縁部内面に沈線1条・頸部に沈線1条・体部に沈線2条を施す。体部の沈線は太さが不揃いで、紋様を施した後にヘラミガキをしていることが判る。黒色物質を塗布している。2370は約2/3を残す。口縁部がわずかに残存しているが直接接合しない。口径13.0cm・復原器高22.6cmを測る。外面にヘラミガキ・内面にナデを施す。体部に段を施す。残存状況から、頸部にも段が施されていた可能性が高い。黒色物質を塗布している。2371は約2/3を残し、口径11.8cm・器高23.6cmを測る。内外面にヘラミガキを施す。頸部に段、体部に段・沈線2条・篋描き綾杉紋・沈線1条を施す。黒色物質を塗布する。2372は約2/3を残し、口径13.8cm・器高23.2cmを測る。外面にヘラミガキ、内面の口頸部および底部にヘラミガキ、体部にナデを施す。内面体部上半に指押さえを残す。頸部に沈線2条・頸体部間に篋描きの3本縦線紋を10箇所配置し、体部に削り出し突帯上沈線1条を施す。ただし、体部の削り出し突帯は、作り出そうと意識しているものの、部分的には沈線3条で終わっている所がある。内外面に、黒色物質を塗布する。2380は約90%を残し、口径11.8cm・器高22.6cmを測る。やや体部が張るもので、外面および口縁部にヘラミガキ、内面にナデを施す。頸部に削り出し突帯1帯・体部に段・底側部に篋描きの連弧紋を施す。黒色物質を塗布する。2382は約3/4を残し、口径16.0cm・器高32.6cmを測る。内外面にヘラミガキを施す。頸部および体部に沈線各3条を施す。黒色物

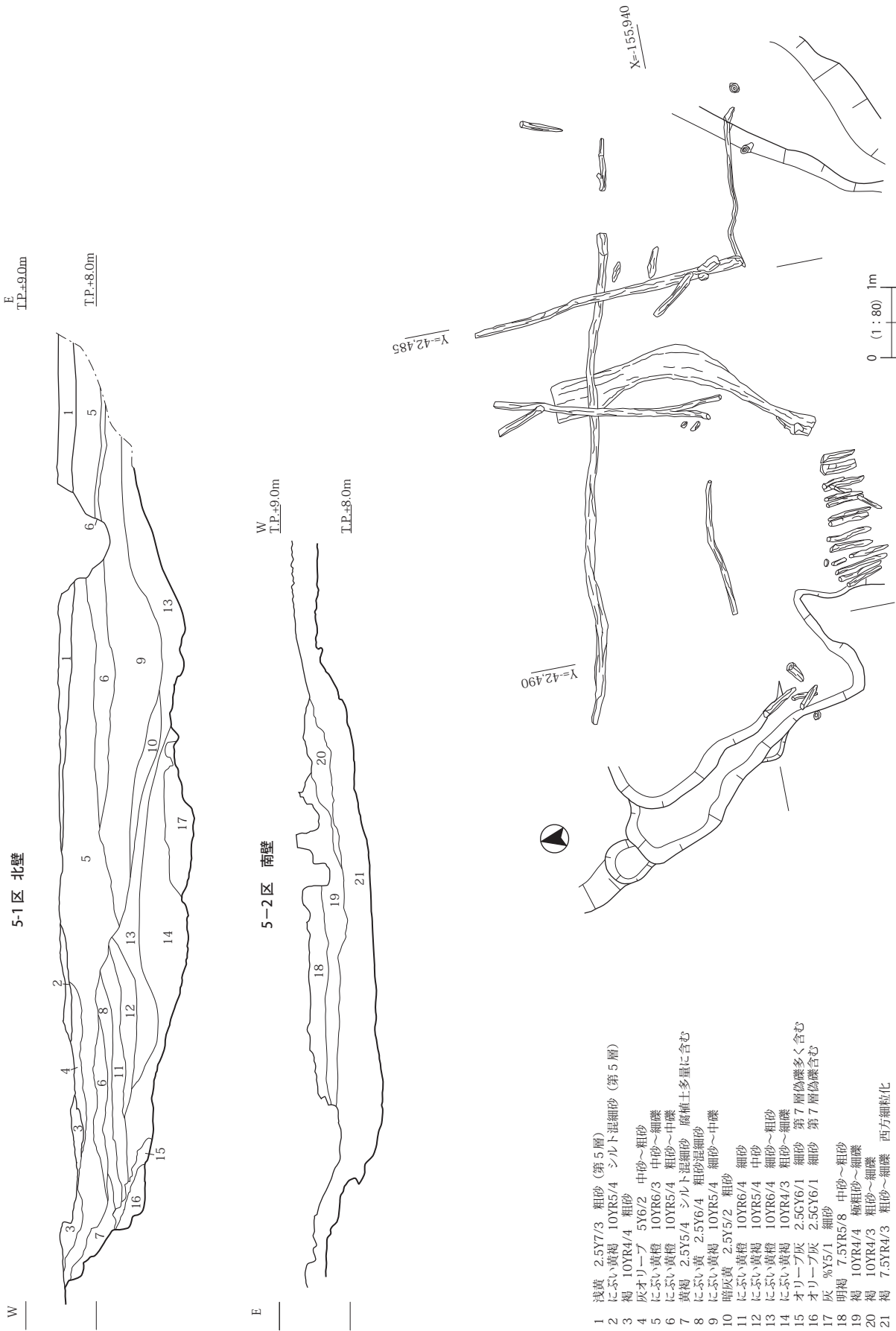


図430 5-1・2区 第5面 2035流路 断面図 堰 平面図



图431 5-1·2区 第5面 2035流路 出土遗物(1)

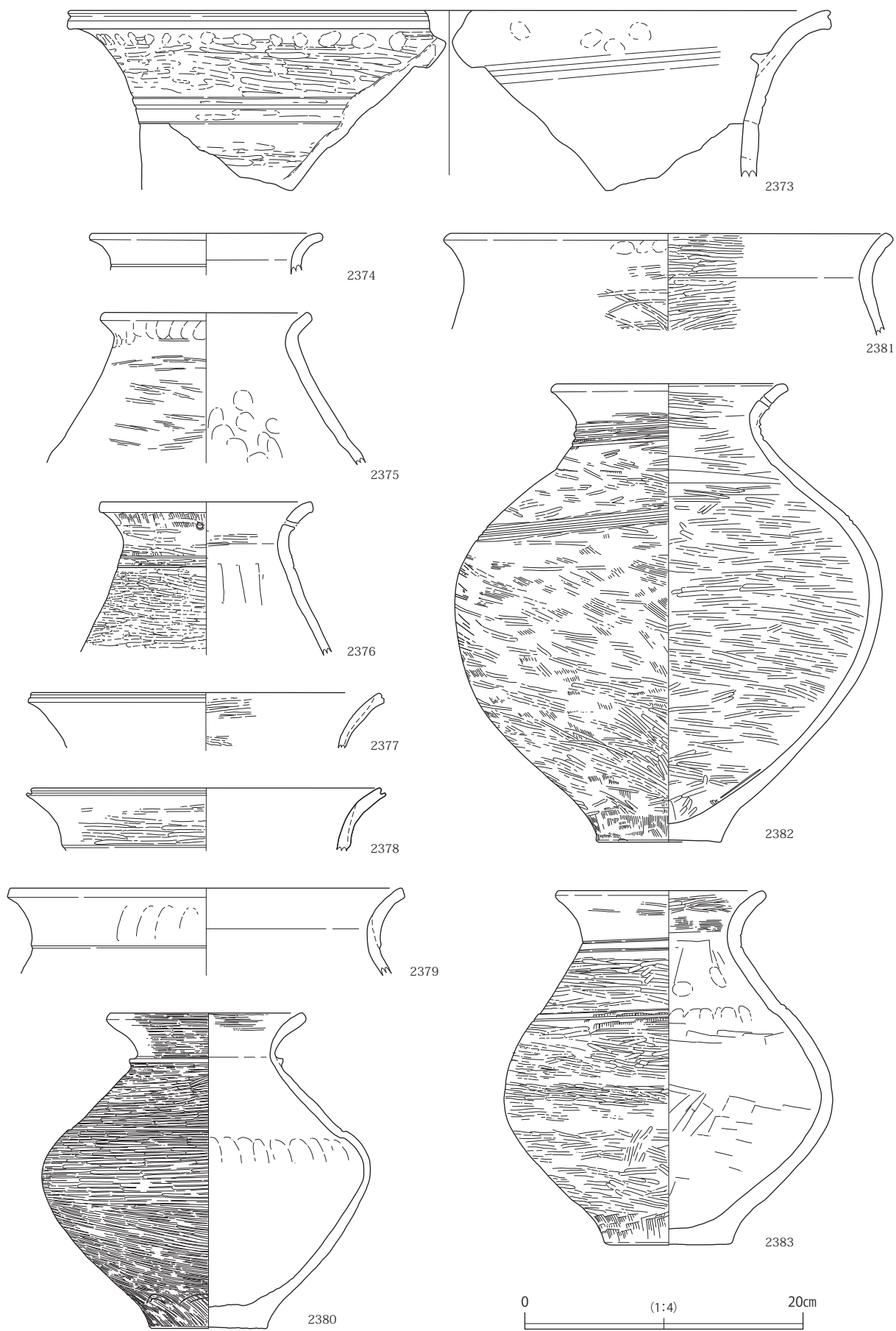


图432 5-1·2区 第5面 2035流路 出土遗物(2)

質を塗布する。2383は口縁部の一部を欠く。口径 14.6cm・器高 25.4cmを測る。外面にハケメ後ヘラミガキ、内面の口縁部にヘラミガキ、頸部にハケメ、体部にナデを施す。頸部に沈線 2 条、体部に段・沈線 1 条を施す。

口頸部を残すものには、中型のものと大型のものがあり、中型のものには、2364～2367・2374～2367があり、2364・2374・2376は、頸部に沈線を 1 条ないしは 2 条施す。2365は頸部に削り出し突帯上沈線 1 条を施し、他は無紋である。いずれのものも、外面にヘラミガキを施すが残存状況が悪いものも含まれている。2365は、内外面に黒色物質を塗布している。2364・2365・2376の土器は、口縁部に 1 個の紐孔を穿つ。大型のものには、口縁部端部に沈線 1 条を施す2377・2378があり、2378・2379は頸部に段を施す。2381は無紋で、内外面にヘラミガキを施す。2373は口径約55cmと特大型のもので、外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。口縁部内面に貼付突帯 1 帯・端部に沈線 1 条・頸部に削り出し突帯上沈線 1 条を施す。また、この土器は口縁部が破損したため、内外面に粘土を貼り足した補修痕が認められた。

2388は口縁部を欠損するもので、外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。器形に歪があるため、本来もう少し体部が張ると思われる。頸部に段、体部に沈線 1 条・段・沈線 1 条・連弧紋 2 帯・沈線 2 条を施す。黒色物質を塗布している。2392は口縁部を欠損するもので、体部外面にヘラミガキ、内面にナデ後粗いヘラミガキを施す。頸部に沈線 2 条以上・体部に沈線 2 条・連弧紋、その下の 1 箇所連弧紋を施し、底側部に連弧紋を施している。底側部の紋様は、施紋後、ヘラミガキを行っているために部分的に消されている。外面に黒色物質を塗布している。2393は口頸部から体部上端を欠損する大型の壺で、体部にヘラミガキ、内面にナデ後粗いヘラミガキを施す。体部に段を施す。黒色物質を塗布している。2389は体部下半から底部を残すもので、内外面をヘラミガキする。低側部に篋描きの弧紋を 2 箇所に施す。黒色物質を塗布する。

体部破片は、紋様を残すものを掲載している。2384は、段・沈線 2 条に赤彩でその間を塗り、以下に流水を施している。この遺跡で唯一の赤彩土器である。体部にヘラミガキ後黒色物質を塗布している。2385・2386は篋描きの斜格子を施すもので、前者は段・沈線 2 条間に斜格子を、後者は斜格子・沈線 2 条を施す。2387は、段・連弧紋を施す。2390は、段・沈線 3 条間に縦管紋を施す。2391は、頸部に削り出し突帯 1 帯・体部に段を施す。2394・2395は、体部に削り出し突帯上沈線 1 条を施す。接合はしないものの、同一個体の可能性がある。2396は、篋描き木の葉紋・沈線 1 条を施す。2397は大型の体部破片で、体部に段を施す。いずれのものも、黒色物質を塗布している。

鉢は図示できたものが 1 点のみである。2401は大型の外反する口縁部をもつもので、内外面にハケメ後ヘラミガキを施す。黒色物質を塗布する。

甕は図示できたものが 3 点である。2398は底部を欠損するもので、体部が直線的に窄まる。口縁部端部に刻み目を施す。体部内外面にハケメ状ナデを施す。体部下半に赤変が認められ、二次焼成を受けている。2399は小型で約 2 / 3 を残す。口径 16.8cm・器高 18.0cmを測る。外反する口縁部にわずかに膨らむ体部に、突出する平底である。体部外面にハケメ、内面にナデを施す。底部に二次焼成を受けた亀裂が認められる。外面の体部上半に煤が付着し、破損後内面下半に多量の煤が付着している。2400は口縁部破片で、体部外面は表面摩滅のため、調整は不明である。内面に指ナデを施す。内外面に煤が付着する。

2402は、体部の刻み目突帯を残す縄文時代晩期の深鉢である。摩滅が著しく調整は不鮮明である。角閃石を含む生駒西麓産のものである。

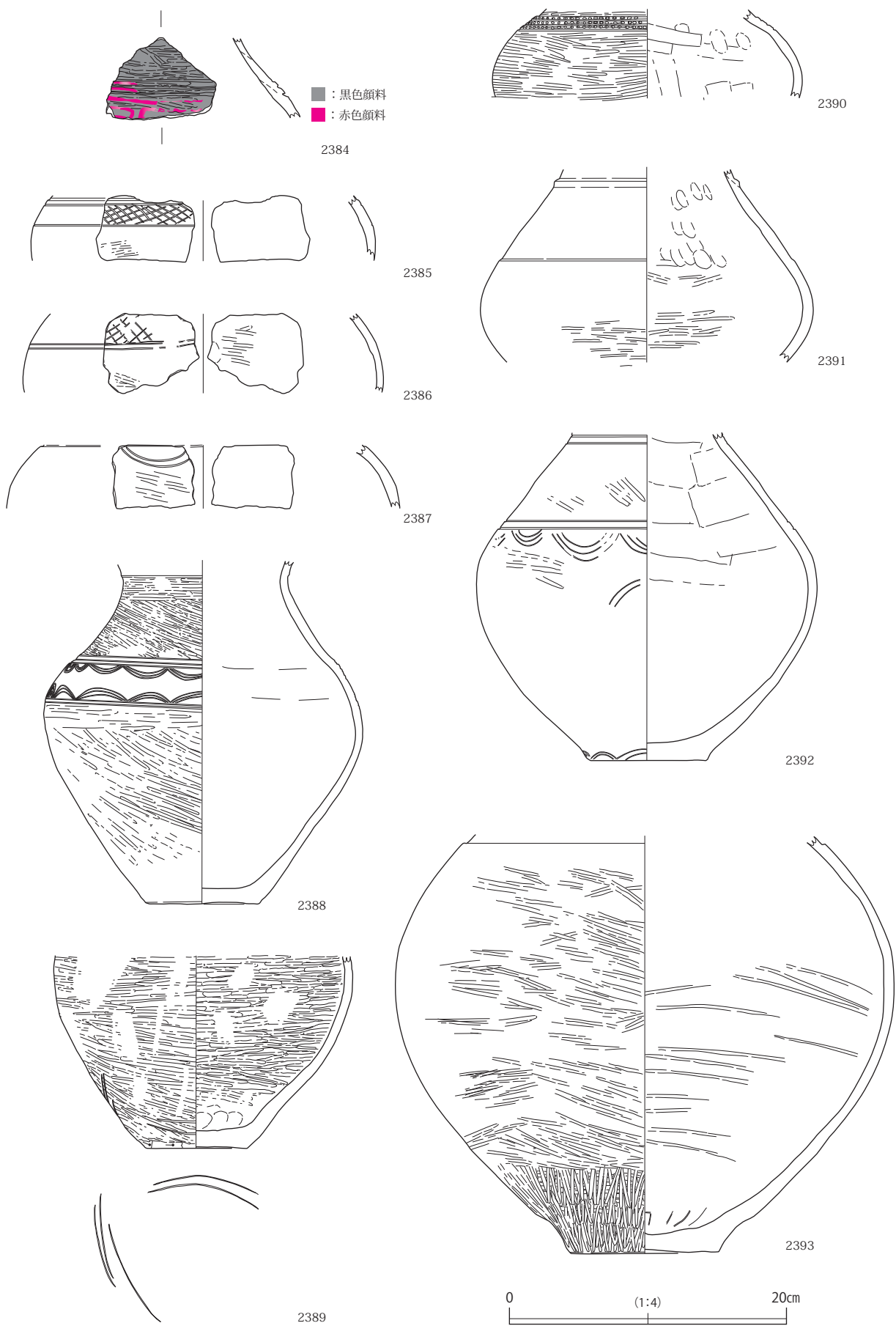


图433 5-1·2区 第5面 2035流路 出土遺物(3)

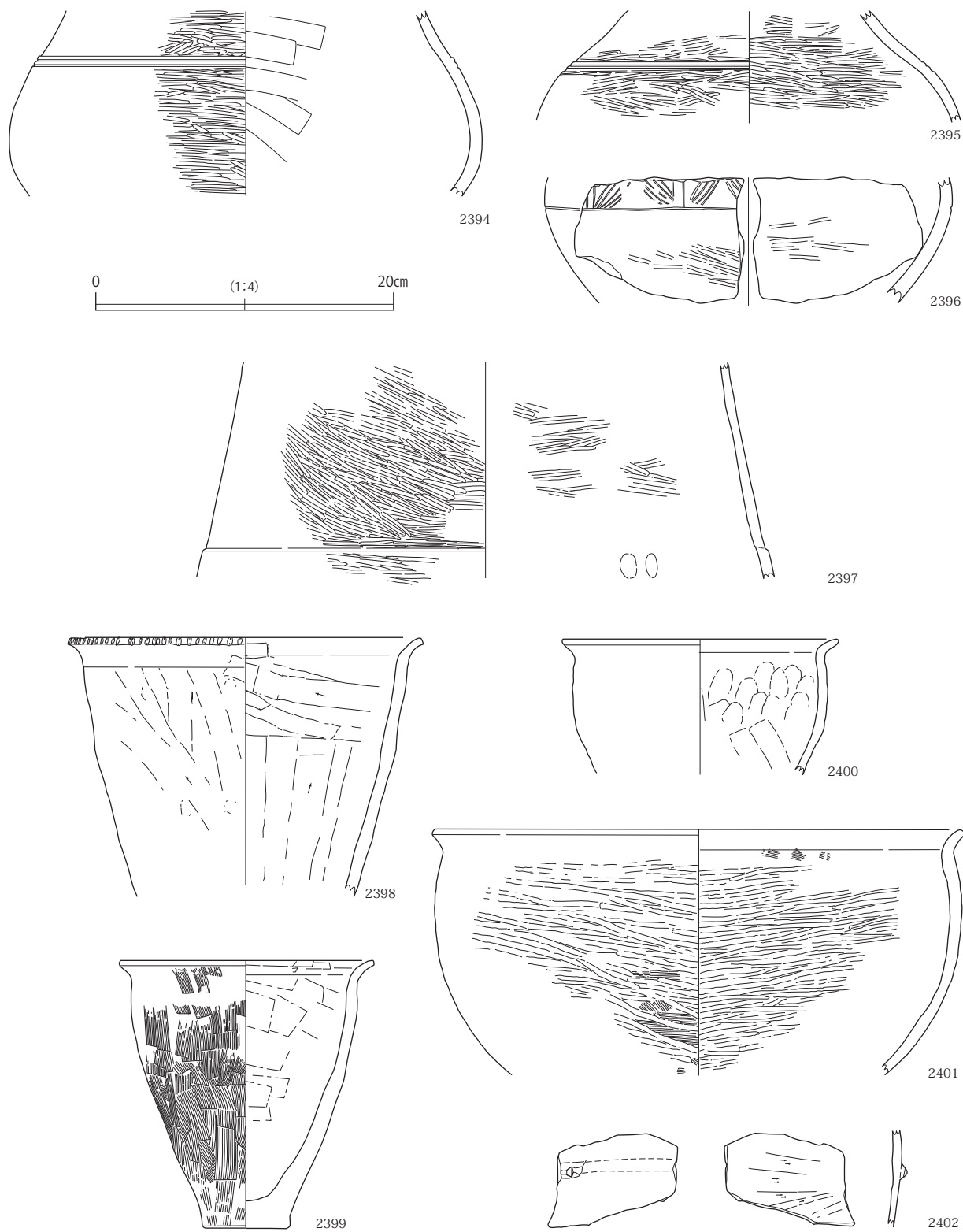


图434 5-1·2区 第5面 2035流路 出土遗物(4)

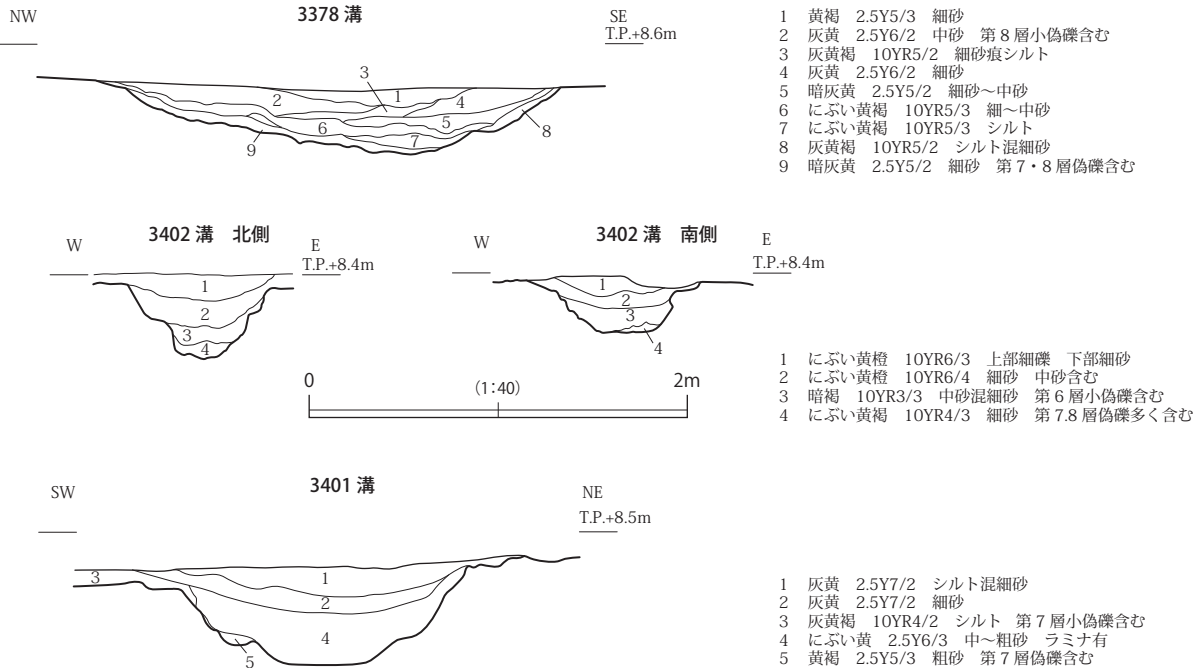


図435 5-1・2区 第5面 各溝 断面図

[3374溝] (図427・435・436)

5-1区の北西部で検出されたやや東に振る南北方向の溝で、南側は第4面の溝に切られ、北側は調査区外へ延びる。検出長 10.2mを測る。

遺物は、わずかに弥生時代前期の土器が出土している。2403・2404は壺の口頸部破片で、前者は頸部に削り出し突帯を、後者は沈線1条を施す。いずれも、外面にヘラミガキを施す。2405は壺の体部破片で、削り出し突帯上沈線1条を施す。

[3378溝] (図427・435)

5-1区北側で検出されたやや西に振る南北方向の溝で、北側を3374溝に、東側を南側を3449土坑に切られる。検出長 13.2m・幅 2.45m・深さ 0.35mを測る。

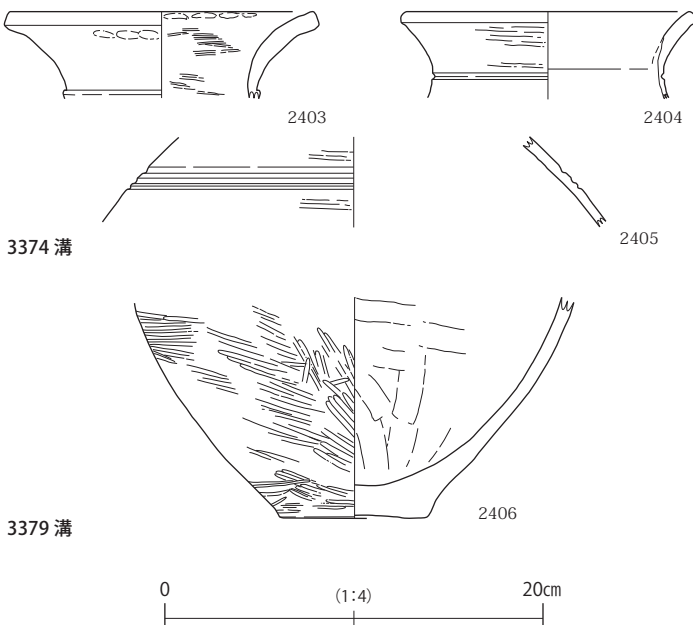


図436 5-1・3区 第5面 3374・3379溝 出土遺物

埋土は9層に細分されるが、にぶい黄褐色の細砂から中砂や、同色のシルトが主である。

遺物は、弥生時代前期の土器がわずかに出土している。

[3401溝] (図407・435)

5-1区の北側で検出された2035流路から北西方向に派生する溝である。北端は調査区外へ延びる。検出長 13.2m・幅 1.45m・深さ 5.4mを測る。埋土は5層に細分されるが、にぶい黄色の中砂から粗砂が主である。

遺物は、弥生時代前期の土器がわずかに出土しているが、図示できるものはな

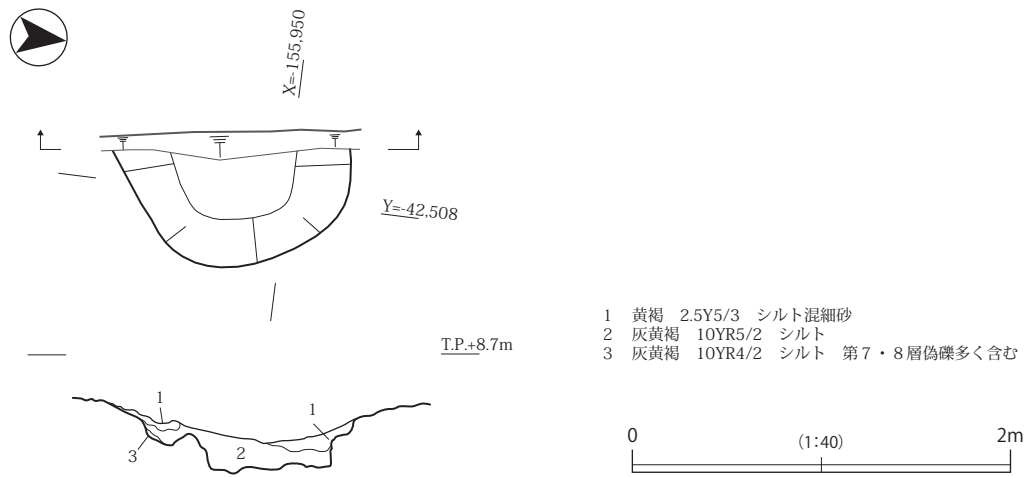


図437 5-1区 第5面 3377土坑 平・断面図

い。

[3402溝] (図407・435)

5-1・2区で検出されたやや西に振る南北方向の溝で、南側は2035流路に切られ、北側で3401溝に合流する。途中で、3448・3449土坑に切られている。検出長45m・幅 0.8~1.0 m・深さ 0.5 mを測る。

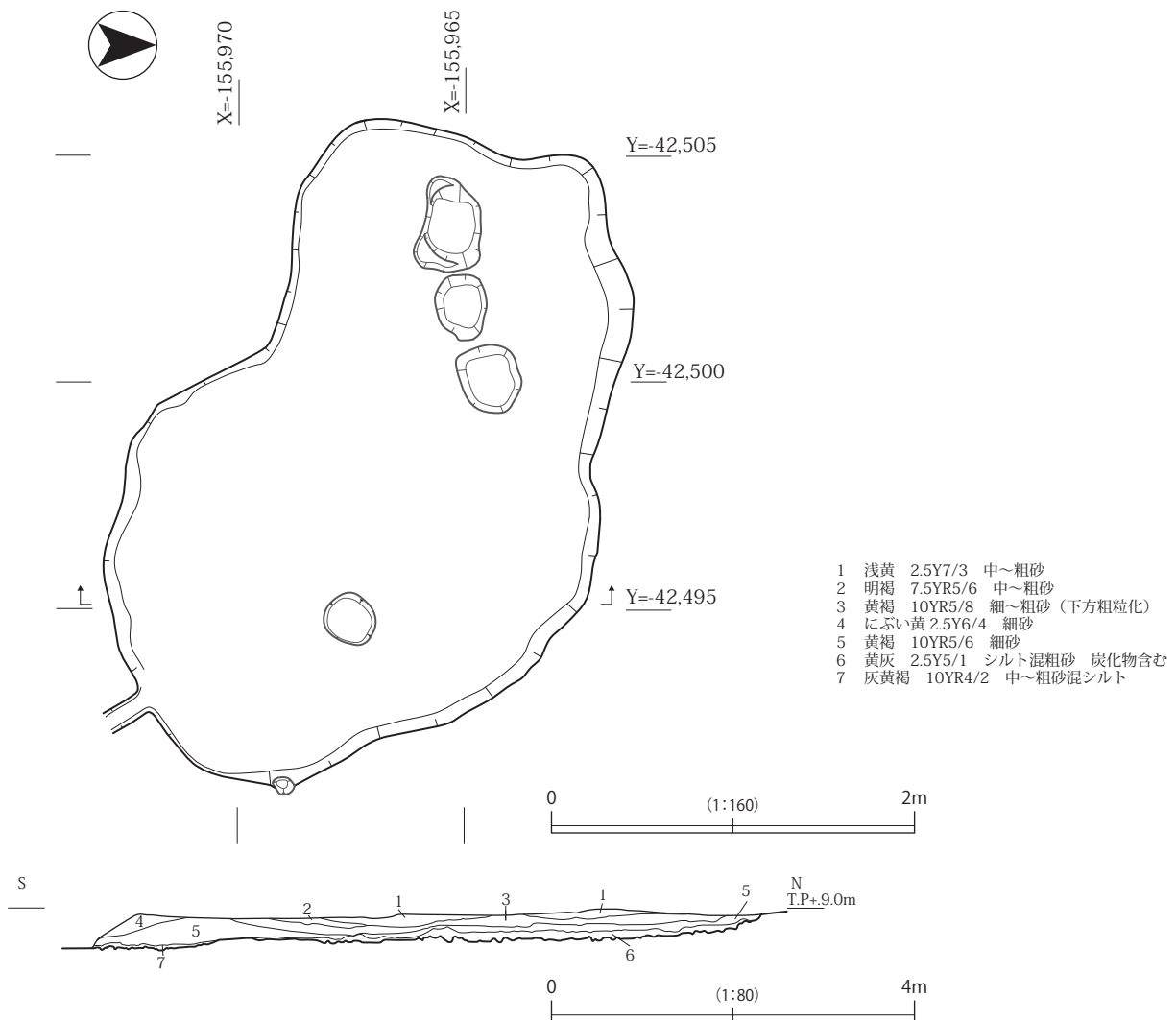


図438 5-1区 第5面 3448土坑 平・断面図

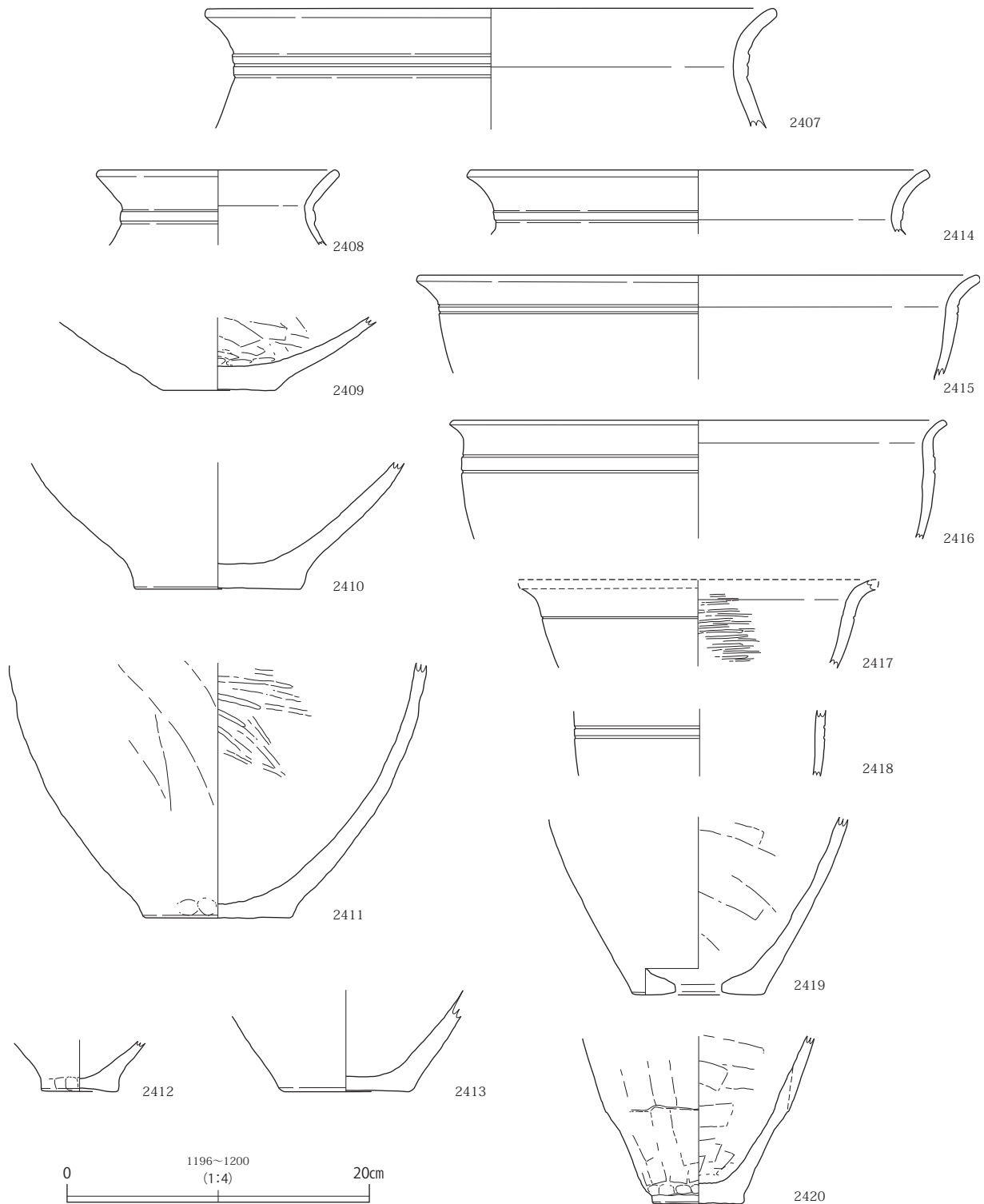


図439 5-1区 第5面 3448土坑 出土遺物

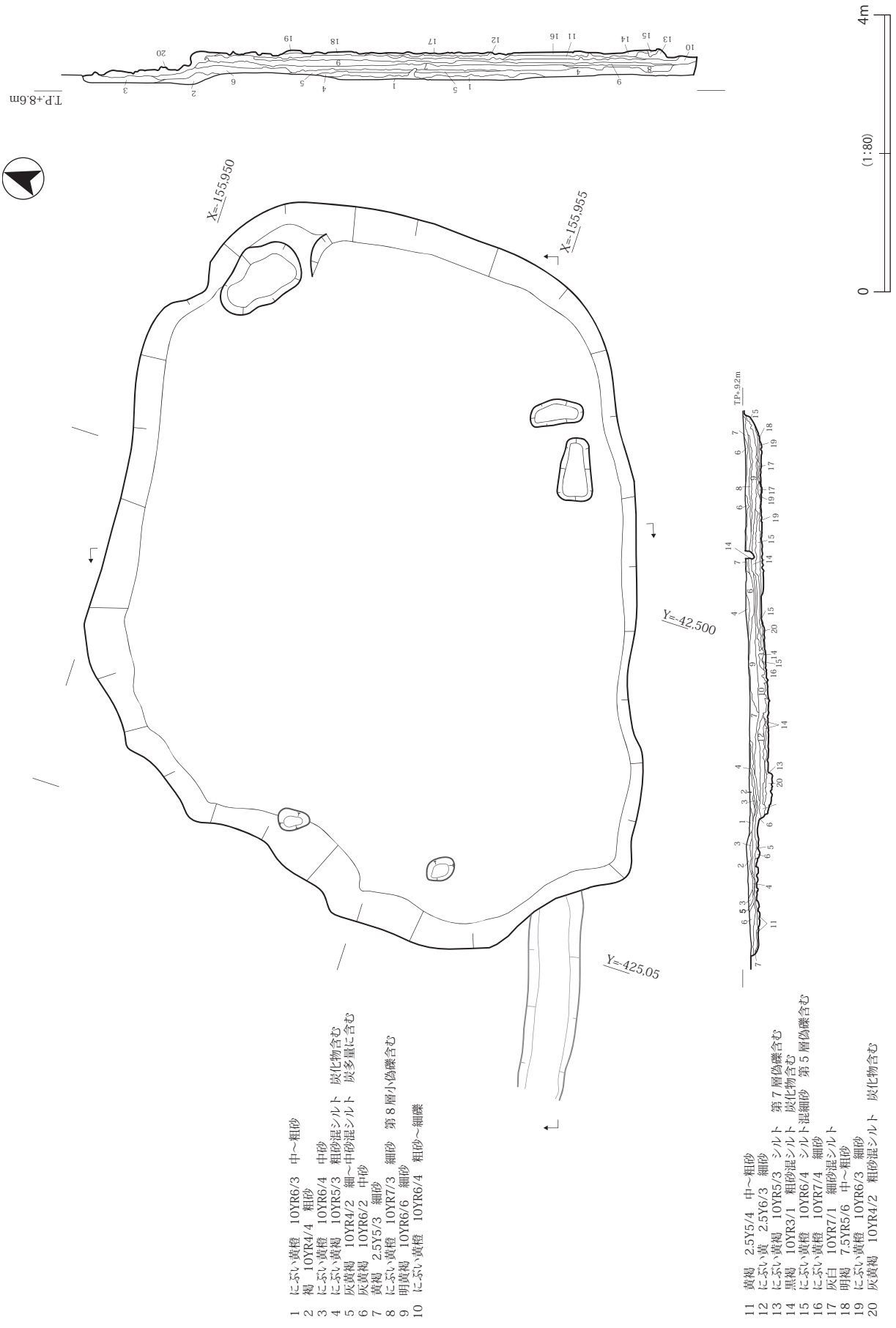
埋土は4層に細分されるが、にぶい黄褐色の細砂や暗褐色の細砂が主である。

遺物は、弥生時代前期の土器がわずかに出土している。

5-3区では、2035流路から派生する北西端部で検出された3375溝や、水田の谷地形を2035流路に向けて流れる3379溝、北東部の高まりの縁辺を流れる3380溝などを検出している。

3375溝からは、わずかな弥生時代前期の土器が出土し、3380溝からは、遺物は出土していない。

3379溝からは、わずかな土器が出土し、壺を1点のみ図化している。2406は壺の底部破片で、外面に



- 1 にぶい黄橙 10YR6/3 中～粗砂
- 2 褐 10YR4/4 粗砂
- 3 にぶい黄橙 10YR6/4 中砂
- 4 にぶい黄褐 10YR5/3 粗砂混シルト 炭化物含む
- 5 灰黄褐 10YR4/2 細～中砂混シルト 炭多量を含む
- 6 灰黄褐 10YR6/2 中砂
- 7 黄褐 2.5Y5/3 細砂
- 8 にぶい黄橙 10YR7/3 細砂 第8層小偽礫含む
- 9 明黄褐 10YR6/6 細砂
- 10 にぶい黄橙 10YR6/4 粗砂～細礫

- 11 黄褐 2.5Y5/4 中～粗砂
- 12 にぶい黄 2.5Y6/3 細砂
- 13 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト 第7層偽礫含む
- 14 黒褐 10YR3/1 粗砂混シルト 炭化物含む
- 15 にぶい黄橙 10YR6/4 シルト混細砂 第5層偽礫含む
- 16 にぶい黄橙 10YR7/4 細砂
- 17 灰白 10YR7/1 細砂混シルト
- 18 明褐 7.5YR5/6 中～粗砂
- 19 にぶい黄橙 10YR6/3 細砂
- 20 灰黄褐 10YR4/2 粗砂混シルト 炭化物含む

図440 5-1・2区 第5面 3449土坑 平・断面図

ヘラミガキ、内面にナデを施している。黒色物質を塗布した痕跡が残る。

土坑は、5-1・2区で大型の土坑を4基と小型の1基の計5基を検出している。

〔3377土坑〕（図407・437）

5-1区の北西部で検出した土坑で、第4面の1766溝に西側を切られる。検出長1.3m・検出幅0.4m・深さ0.15mを測る。埋土は3層に細分されるが、灰黄褐色のシルトが主である。

遺物は、弥生時代前期の土器がわずかに出土している。

〔3448土坑〕（図407・438・439）

5-1・2区の中央部2035流路の西側で検出された不定形の土坑で、最大長16.2m・最大幅9.0m・深さ0.15mを測る落込み状のものである。埋土は、7層に細分されるが、炭化物を含み、シルトが混じる黄灰色の粗砂が主である。

遺物は、コンテナにして約4杯分を出土している。出土した土器は、壺・甕・鉢がある。2408は中型壺の口頸部破片で、頸部に削り出し突帯1帯を施す。2407・2414は大型の壺の口頸部破片で、前者は頸部に削り出し突帯上沈線1条を、後者は沈線1条・段を施す。2409～2413は壺の底部破片である。

2415～2417は外反する口縁部をもつ鉢の口縁部破片で、大型のものは頸部に沈線2条を、中型のものは沈線1条を施している。2416は外面に煤が多量に付着している。

2418は甕の体部破片で、体部に沈線2条を施す。2419・2420は甕の底部破片で、前者は底部中央に焼成前の穿孔がある。

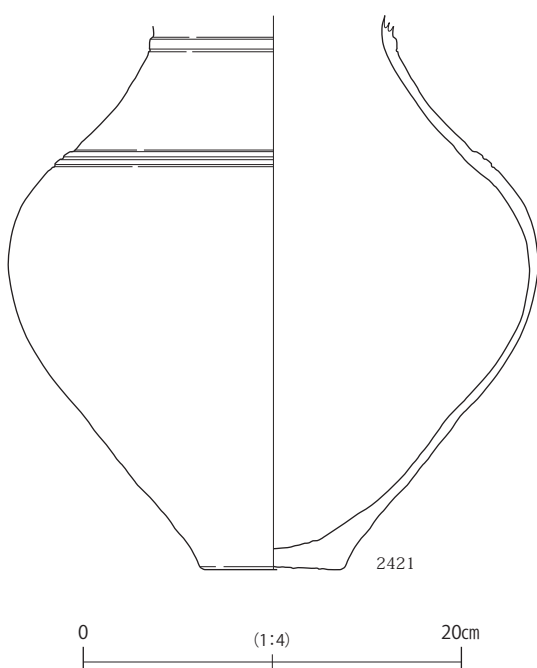
いずれのものも、表面摩滅が著しく、調整が不明なものが多い。弥生時代前期の土器である。

〔3449土坑〕（図407・440・441）

5-1区の中央付近で検出した不定形の土坑で、2035流路の西側、3448土坑の北側に当たる。最大長10.65m・最大幅7.7m・深さ0.35mを測る。

埋土は20層に細分されるが、にぶい黄褐色の細砂から粗砂が主である。

遺物は、コンテナにして3杯分が出土している。図化できたものは、弥生時代前期の壺が1点のみで



ある。2421は口縁部を欠損し、器高が40cm以上になる大型の壺である。表面摩滅が著しく、調整は不明である。頸部に削り出し突帯1帯・体部に削り出し突帯上沈線1条を施している。

〔2050土坑〕（図407・442）

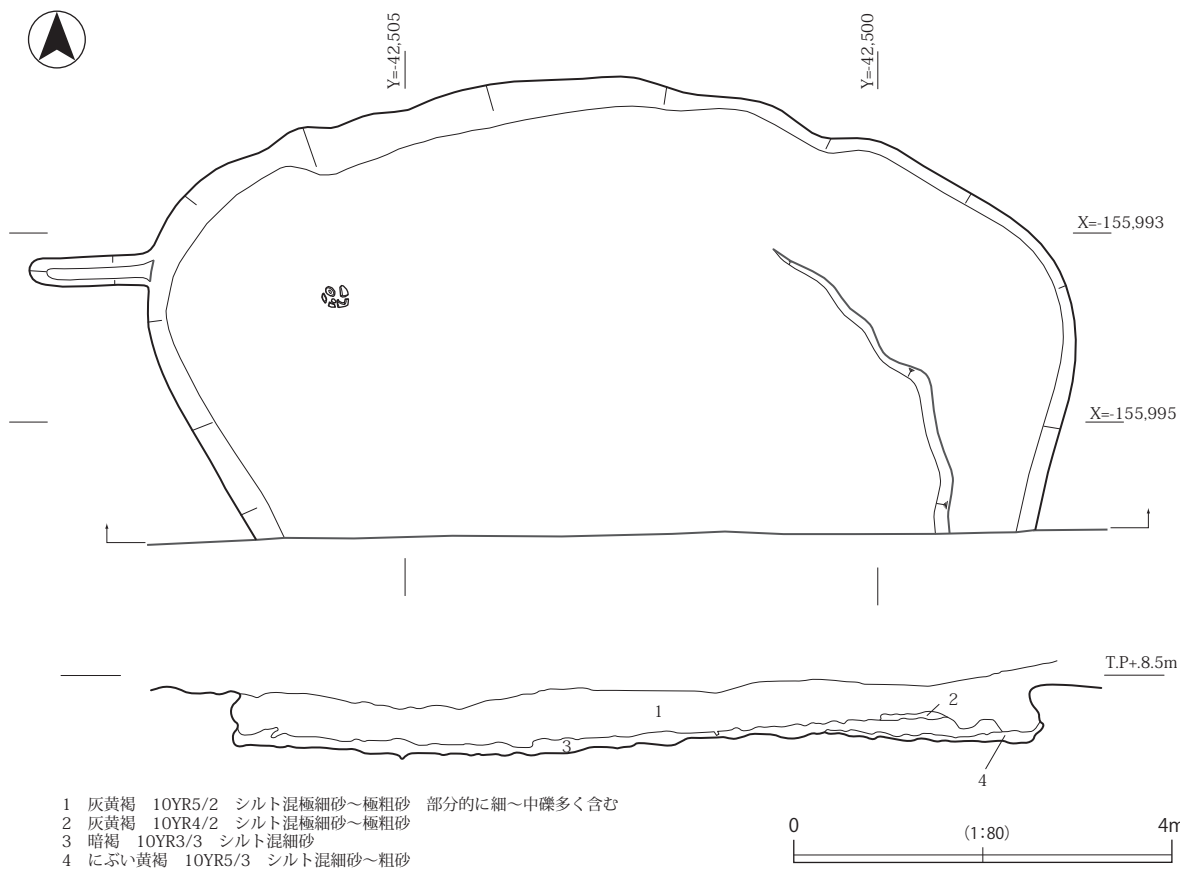
5-2区の南端部の中央で検出された不定形の土坑で、南側は調査区外に延びる。最大長9.6m・検出幅4.8m・深さ0.5mを測る。落込み状の土坑である。

埋土は4層に細分されるが、シルトが混じるにぶい黄褐色の細砂から粗砂が主である。

遺物は、コンテナにして約1杯分出土している。図示できたのは、壺と鉢である。

2423～2425は壺の底部破片で、いずれも、内外面にヘラミガキを施す。

図441 5-1・2区 第5面 3449土坑 出土遺物 2422は約1/2を残存し、外反する口縁部をもつも



- 1 灰黄褐 10YR5/2 シルト混極細砂～極粗砂 部分的に細～中礫多く含む
- 2 灰黄褐 10YR4/2 シルト混極細砂～極粗砂
- 3 暗褐 10YR3/3 シルト混細砂
- 4 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混細砂～粗砂

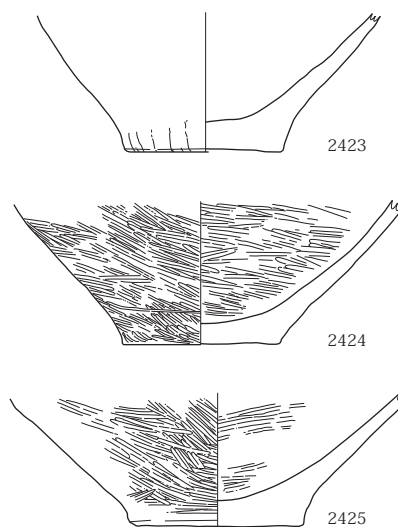
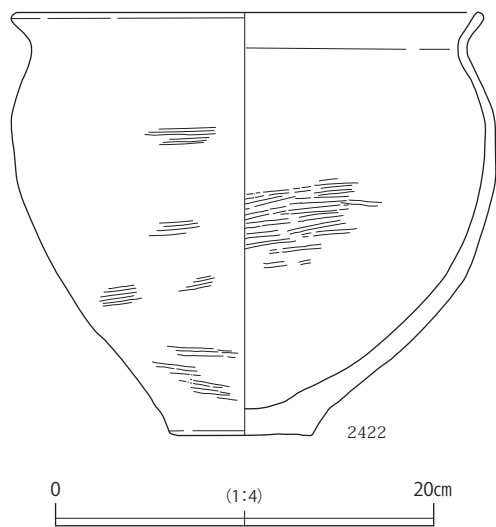


図442 5-2区 第5面 2050土坑 平・断面図 出土遺物

のである。口径 24.5cm・器高 22.5cmを測る。わずかに膨らむ体部に突出する平底をもつ。内外面にヘラミガキを施す。

以上の大型の不定形土坑は、埋土の堆積が水成堆積を示していることと、2035流路の西側の低湿地部分に当たることから、落込み状の窪地に2035流路から越流した砂礫が堆積したものと思われる。

〔第5面 出土遺物〕(図443)

第5面を検出するための精査で、遺構面直上で出土した土器である。

2426は小型の壺蓋で、口径 10.8cm・器高 4.0cmを測る。山形の器形に中心部に

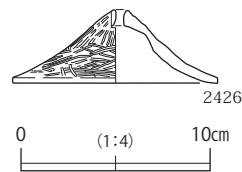


図443 5区
第5面 上面
出土遺物

紐孔を穿つ。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。黒色物質を塗布している。

第6面は、第6層下面および第7層上面に相当するが、顕著な遺構を検出しておらず、面の精査のみを行っている。

6. 第7面

第7面は、第7層下面および第8層上面で検出された遺構面で、5-1区の北半部のみで検出している。北端で、東西方向の流路を1条検出し、その他では、倒木痕を検出している。人為的な遺構・遺物は出土していない。

7. 第8面 (図版96-1)

第8面は、第8層下面および第9層上面に該当し、5-2区で流路を2条、5-3区で流路を1条検出している。5-3区では、倒木痕を多数検出している。

[2414・2415流路] (図445・446 図版97-1・3)

5-2区で検出された流路で、2414流路が2415流路を切っている。

2414流路は、南東から北西方向に蛇行して流れる流路で、両端は調査区外へ延びる。検出長約34m・幅 3.0~3.5 m・深さ 0.3~0.7 mを測る。

埋土は、5~7層に細分されるが、褐灰色の極細砂から中砂が主に堆積している。西側に向け深度が増している。

遺物は出土していない。

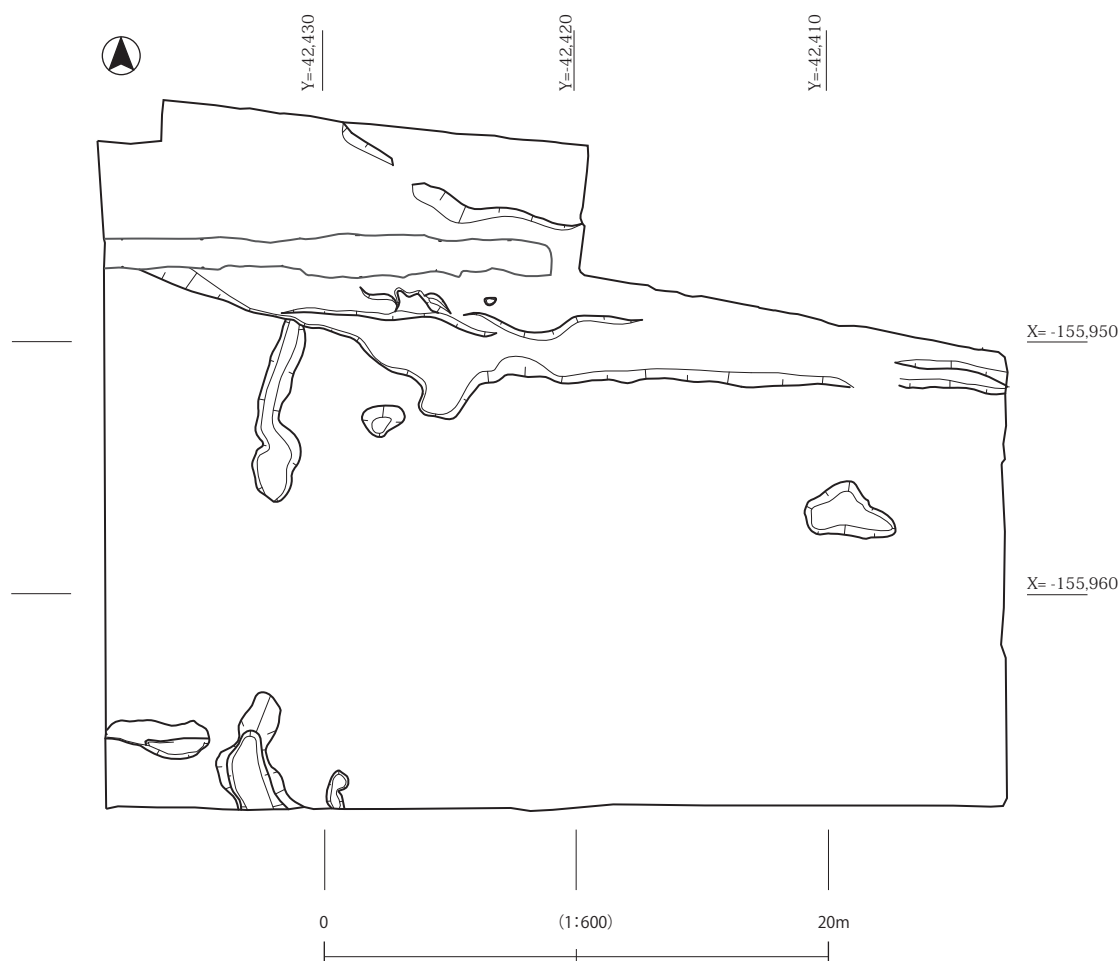


図444 5-3区 第7面 平面図



Y=42,510

Y=42,500

Y=42,490

Y=42,480

Y=42,470

Y=42,460

Y=42,450

Y=42,440

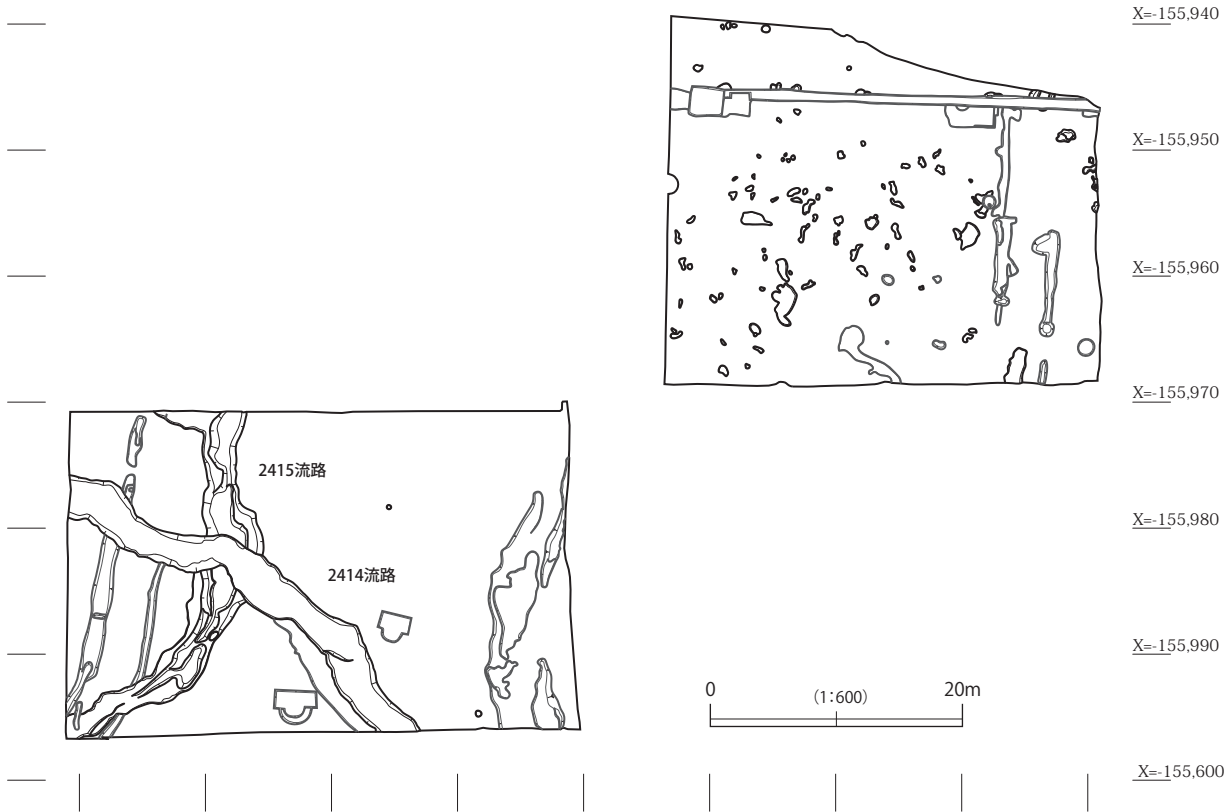


図445 5-2・3区 第8面 平面図

2415流路は、西側を南北方向に蛇行して流れており、両端部は調査区外へ延びる。検出長約36m・幅2.4~4.8m・深さ約1mを測る。

埋土は、13層に細分されるが、上層に黒褐色の粘土混じりのシルトが、下層ににぶい黄褐色の中砂が堆積していた。

遺物は出土していない。

8. 第9面 (図版97-2)

第9面は、第9層下面および第10層上面に相当し、5-3区で流路を1条検出している。さらに、5-2・3・4区で倒木痕を検出している。

倒木痕は、立ち木の根が腐って空洞化した部分に、上位の包含層が落ち込んだもので、一見土坑のように見えるが、図448のように断面観察によって、認識されるものが多い。

〔4003流路〕(図447・449 図版96-2・3)

5-3区の北東端で検出された流路で、南南東から北北西方向に流れる。南側の肩部を検出し、大部分は調査区外に延びる。検出長8.6m・深さ0.5mを測る。

遺物は出土していない。この流路は、第9面で検出しているが、第8面からの切り込みであることが確認できた。

第10面は、第10層下面および第11層上面で検出されているが、面の精査は行っているが、顕著な遺構が検出されておらず、ここでは割愛した。

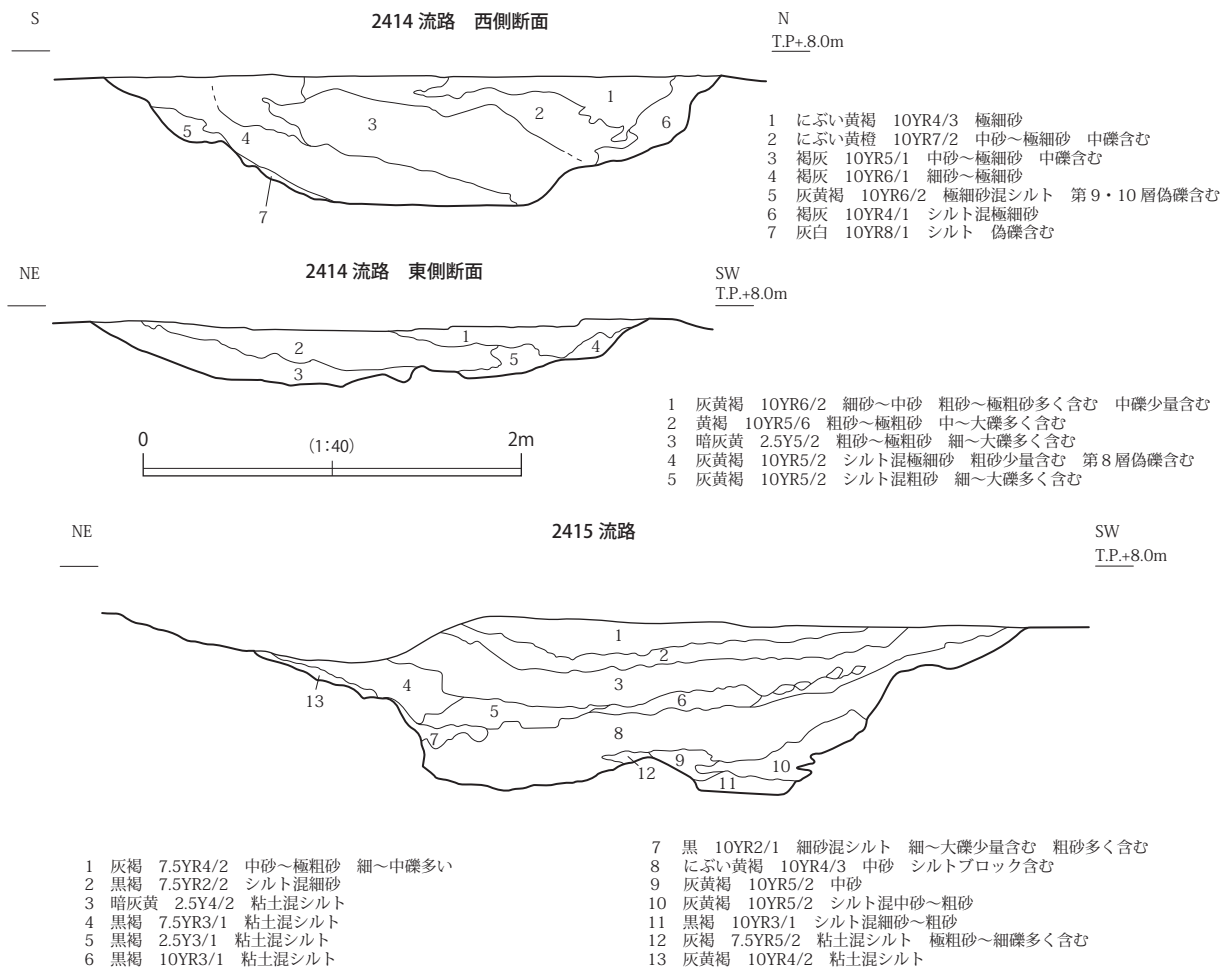


図446 5-2区 第8面 2414・2415流路 断面図

9. 第11面 (図版98-2・3・99)

第11面は第11層下面および第12層上面に相当する遺構面で、5-2・3・4区の一部で検出を行っている。各調査区で流路を検出している。

〔6030流路〕 (図449・450)

5-4区を蛇行している流路で、深さ 3.5 mを測る。埋土は、灰黄褐色やオリーブ灰色の細砂から粗砂が主である。

遺物は出土していない。

10. 小結

5区では、第2面～第11面の調査を行っているが、特に、第3面の溝に区画された古代の掘立柱建物群は、32棟検出されており、集落の東側を区画する117溝からは、大量の古代の土器が出土している。また、西側を区画するものとして、大畦畔が検出されているが、この畦畔は掘立柱建物群に伴うというよりは、むしろその下層から検出された1230溝が区画溝として機能していたと考えられる。その溝間の距離は、約70mを測り、建物群の広がりから、南北約45mの範囲がひとつの集落と思われる。

この集落の特徴としては、50㎡を越す大型建物が32棟中11棟あり、その中でも、建物46は、125.3㎡と、この地区で最大の大きさである。次いで、建物45・62が約90㎡を示し、建物64・61・52が約80㎡、47・35・66建物が約70㎡を測る。

注目すべき点は、建物群の配置の中で、5-2区の東半部の建物61以东から5-4区の建物53の間お

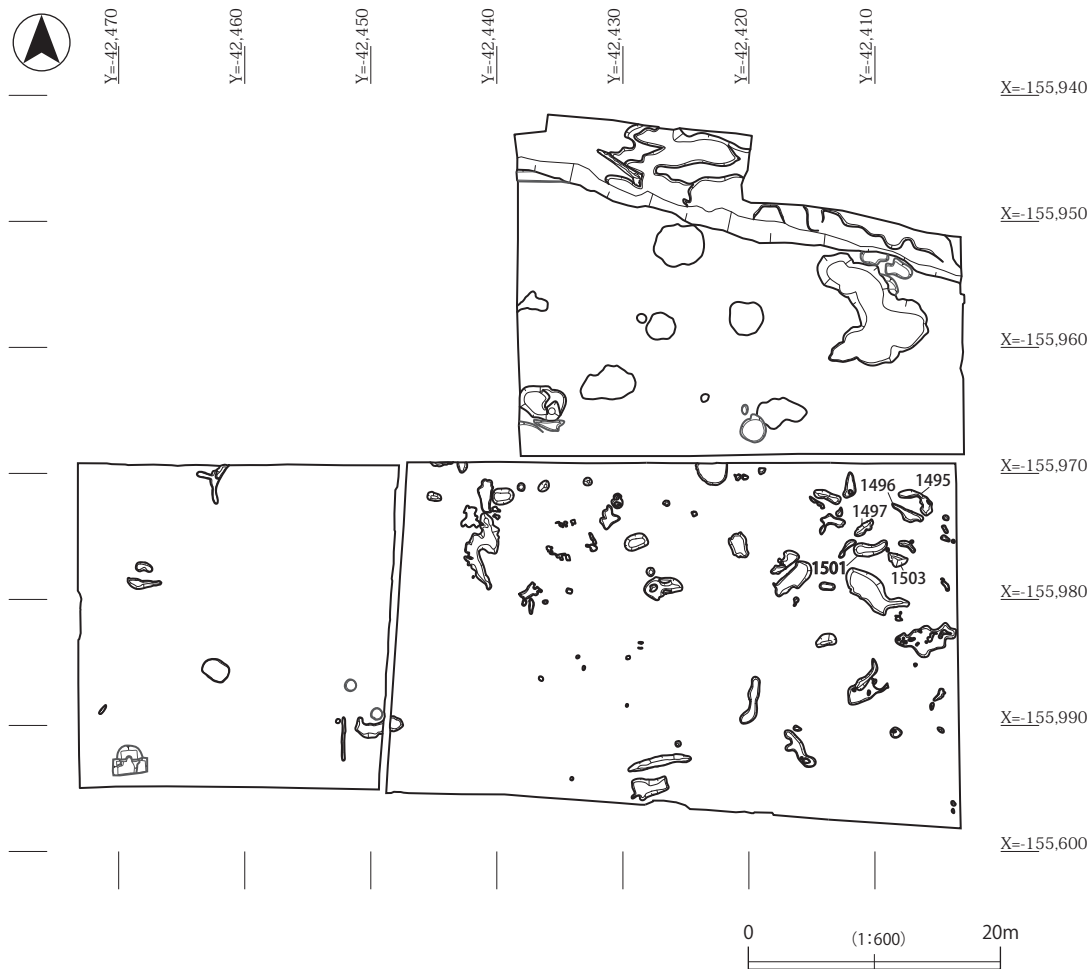


図447 5-3・4区 第9面 平面図

よび、5-1区の建物55と5-2区の建物66の間、すなわち、東西約18m・南北約23mの範囲が空白地である。その空白地を挟んで、大きくは2群の建物群に区分できる。東側では、二面廂の建物46を中心にして建替えが数度に渡り行われ、西側でも、同様に一面廂の建物62を中心に變遷している様子が窺われる。

また、区画溝の外側では、東側に建物35~37の一連の建物群があり、西側では、確實ではないが、柱

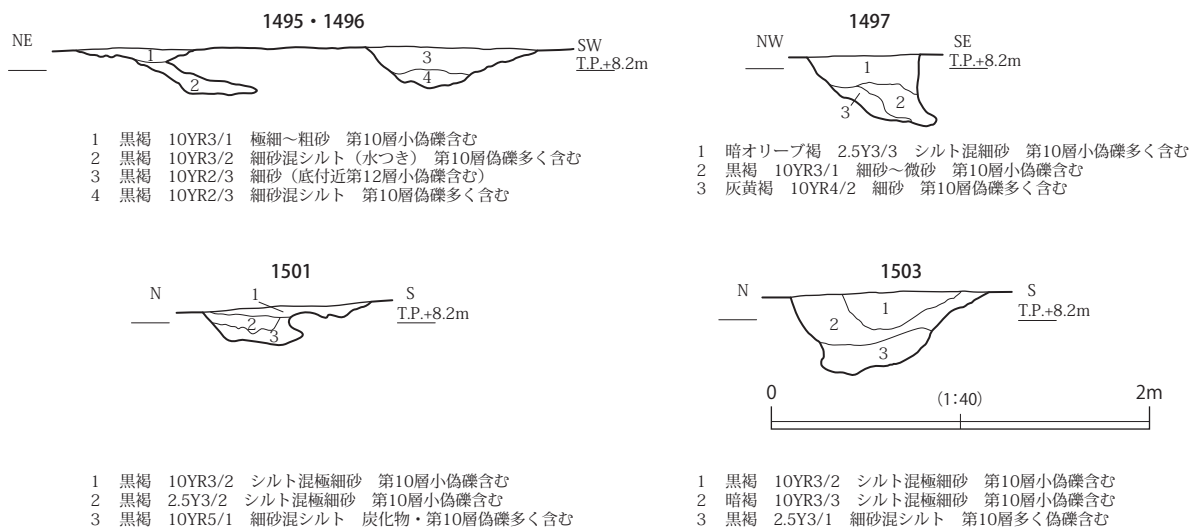


図448 5-3・4区 第9面 風倒木痕 断面図

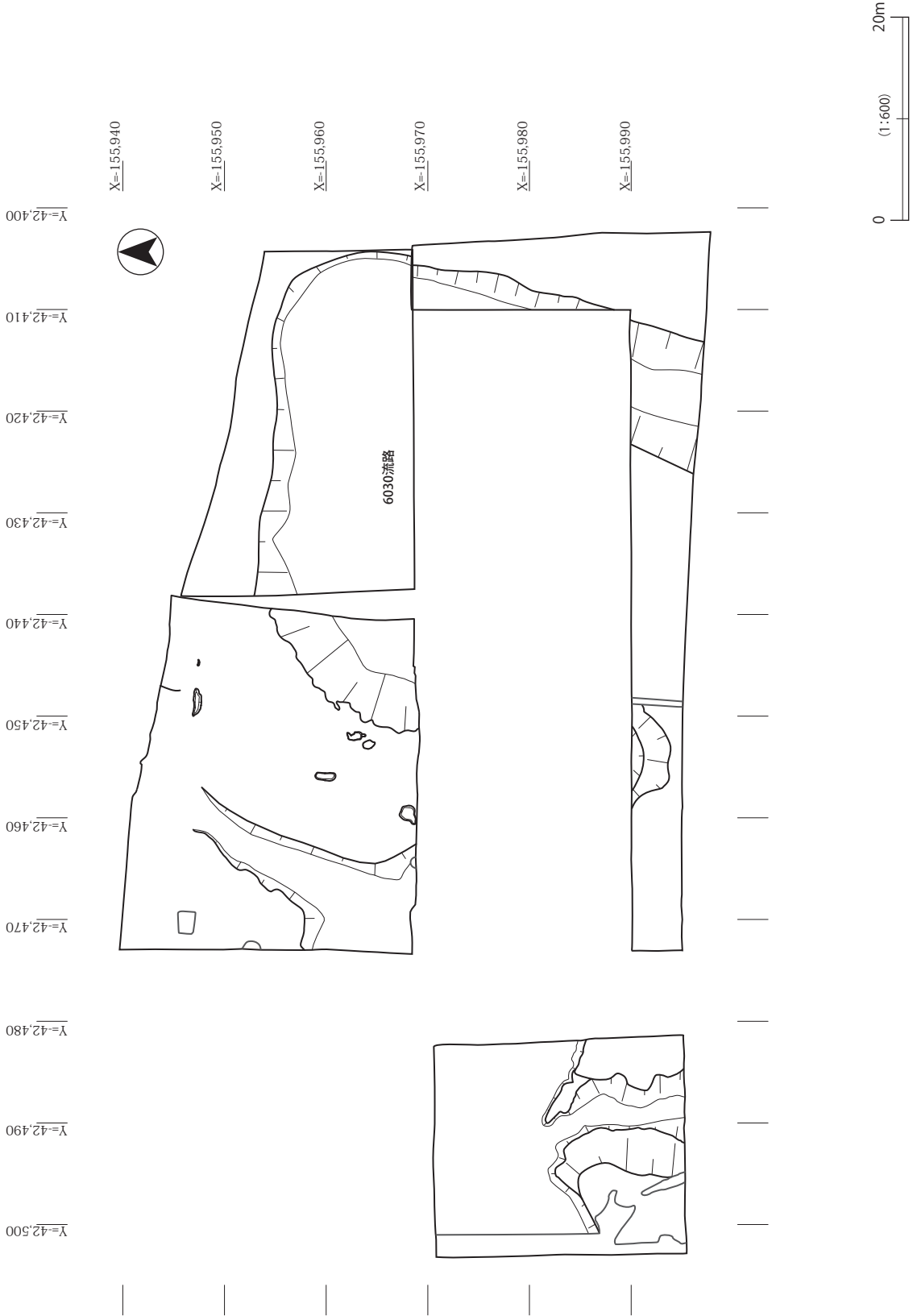


图449 5区 第11面 平面图

列9を建物として捕らえるならば、そこにも、数棟あった可能性がある。

なお、建物に付随すると思われる井戸は、建物の南側に配置されている。

遺物から観ると、117溝の大量の遺物の中には、圧倒的な土師器に対して、黒色土器が次に多く、須恵器が少量含まれている。その須恵器のなかには、円面硯や篠窯の鉢がある。同時に、灰釉陶器や緑釉陶器、越州窯の青磁碗などが散見される。

また、この地域では今までに検出されていない、主に平安京で使用される白色土器が出土していることは、この集落の位置付けに興味深い資料となろう。

さらに、第4面で検出された3区から5区にかけての弥生時代前期の2条ずつが並行して流れる溝は、集落を区画する溝としての役割を担っていたと考えられる。その幅は約80mを測る。如何せん、その溝群の内側の集落地と考えられる区域からは、西端部で平地式住居1棟および掘立柱建物1棟、さらに中心部の北側で1棟を検出するものの、その時期を確定できる遺物が出土していない。弥生時代前期中葉の遺物が出土した大型廃棄土坑が散見されるが、井戸なども検出されておらず、集落的な要素が希薄な上に、全体的な出土遺物の量から推測すると、小規模なものと思えざるをえない。然るに、この溝群は、環濠として捉えられるのではなく、大阪府八尾市の『山賀遺跡』のように、地形に沿って掘られた防水・防湿的な機能を持ったものと考えられる。

なお、第4面は、同一面で古墳時代前期初頭の方形周溝墓を1基検出しているが、この時期において、単独で検出されるのは珍しく、墓域が北側に広がっている可能性が考えられる。

下層の第5面からは、5-3・4区において水田面が広がっていることから、この時期の集落は、南東側の高まりに位置するか、上流に位置する北東側の調査区外にある可能性が高い。

いずれにしても、弥生時代前期以降、古墳時代にかけての遺構および遺物は散見されるものの、その実態を把握するには、さらなる周辺の発掘調査例を待たねばならない。

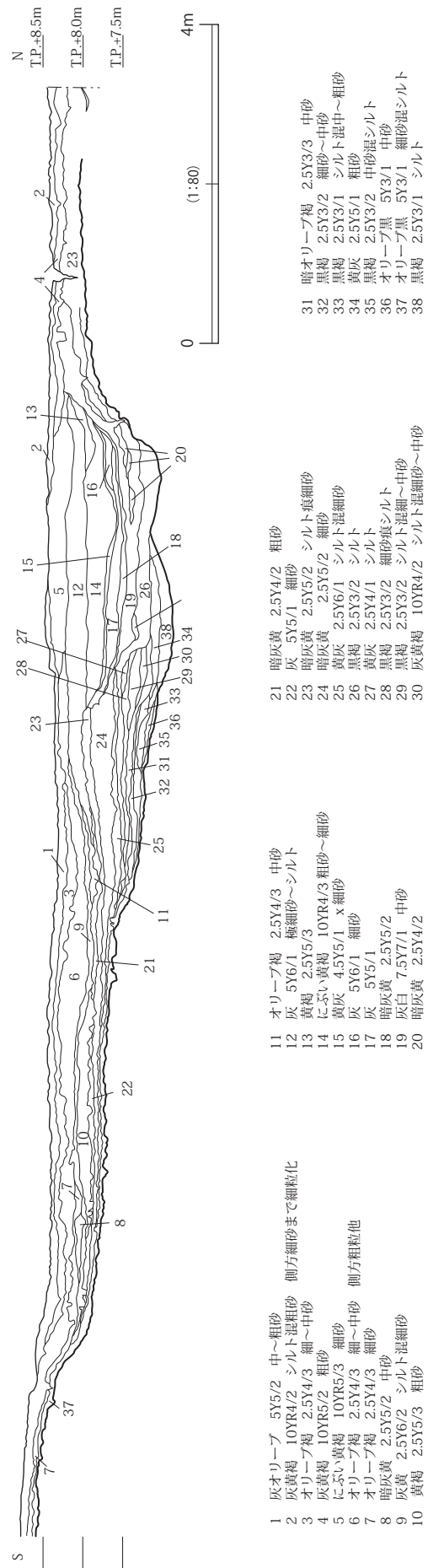


図450 5区 第11面 6030流路 断面図

第5節 05-2 調査区出土 石製遺物

池内遺跡05-2 出土の石製遺物は総計1128点出土しており、そのうち、162点を図化した。サヌカイト製打製石器は、コンテナ数にして5箱・約15kg、磨製石器・礫石器などを含むその他の石製遺物が、コンテナ数にして3箱・約34kgに及んだ。サヌカイト製打製石器は全調査区の中でも、弥生時代前期の集落が確認された範囲にあたる、3-2区・4-1区・4-2区の弥生時代前期の包含層(第5層)及び第5層上面遺構を中心に出土している。

また、前述の調査区の上位層出土資料にしても、分布範囲や出土状況から、その多くが弥生時代前期に所属するものである可能性が高い。

図化の対象としたのは、主に3-2区・4-1区・4-2区出土の弥生時代前期に属する遺構及び包含層出土資料、5区(5-1~4区)出土の平安時代後期に属する遺構及び包含層出土資料である。石器計測値はセクションペーパー上に実測図と同じように据え、四角形を想定して計測したものである。ただし、スクレイパーの計測値に関しては、実測図上の方向ではなく剥片剥離軸を基準に計測した。その他の剥片石器は全て打点を上に、礫石器は長軸を基準に据えた。また、剥片・破片の分類については、2cm以上のものを剥片に、それ未満のものは破片として分類した。

なお、礫石器の石材同定に関しては(財)大阪市文化財協会の小倉徹也氏の御教示を受けた。

以下、出土遺構面・層位ごとに概要を述べる。

1. 第2面〔第3d層下面・第4a層上面〕遺構出土石器(図451)

第2面からはサヌカイト製打製石器が22点出土している。内訳は石匙1点、石鏃1点、石錐1点、スクレイパー1点、二次加工ある剥片6点、両極打法の剥片1点、剥片4点、破片2点、楔形石器4点、石核1点である。この内、金山産サヌカイトは8点で全体の36%を占めている。その他、磨製石器・礫石器が3点出土。内訳は磨製石庖丁1点、磨・敲石類1点、二次加工ある剥片1点である。

2427は石匙である。両面共に丁寧に加工されており、素材は不明である。

2429は平基式の石鏃である。剥片素材であると思われるが加工の進行により、詳細は不明である。

2431は石核である。拳大サイズのサヌカイト原礫を素材としている。表・裏面の剥離方向は石理走行から半順目で剥片剥離作業が進行している。表面下端部には剥片剥離作業によるツブレと微細剥離痕が見られる。上面においては、打面調整した後に剥片を剥離している。

2428は凝灰岩製の二次加工ある剥片である。厚さ0.75cm程の剥片を剥離した後、実測図上の上端部を両面調整している。調整の際に二次的に生じたものであろうか、上端部にはツブレがみられ、丸みを帯びている。

2430は凝灰岩製の磨製石庖丁である。直線刃半月形を呈する。全体的に摩滅が著しく刃部の様相は不明であるが、断面形態から両刃であると推定できる。残存状態が悪く使用痕跡は不明である。残存率は約35%であり、現況で紐孔1個が確認できる。

2. 第3c・3d層・第3~4層出土石器(図452・453)

第3c・3d層及び第3~4層として取り上げたサヌカイト製打製石器は145点ある。内訳はスクレイパー11点、石鏃3点、石錐1点、尖頭器1点、二次加工ある剥片35点、両極打法の剥片5点、剥片54点、破片3点、石核5点、楔形石器24点、不明3点である。この内、金山産のサヌカイトは44点出土しており、全体の約30%を占める。磨製石器・礫石器は10点出土している。内訳は石製紡錘車1点、丸鞆

1点、砥石2点、磨・敲石類5点、不明1点となっている。

2432は、尖頭器である。下端部は裏面側からの折損により不明であるが、形状から尖頭器と判断できる。表・裏面共に側方から中央に向かって加工を施し、中央はわずかではあるが鐮状の稜が形成されている。尖端部には摩滅痕があり、下端部の折損後は錐に転用されている。

2433は有茎式石鏃である。裏面中央に残る剥離面が主要剥離面の剥片素材である可能性が高いが、加工の進行により打面形態は不明である。

2434・2435はスクレイパーである。2434は主要剥離面・背面共に石理に順目で平坦な剥片を素材としている。素材剥片の打面側は両面から粗く二次加工が施されており、末端側は丁寧に両面加工され、外湾状に仕上げられている。

2435は主要剥離面・背面共に平坦な剥片を素材としている。主要剥離面は背面と対向方向に半順目で剥離されており、末端形状は階段状を呈している。刃部は主要剥離面と背面が形成する鋭角な縁辺を利用し、両面から調整している。使用により刃先は摩滅している。

2436は石核である。両極打法により、礫の一端から剥片を剥離した後、その剥離面を作業面に、自然

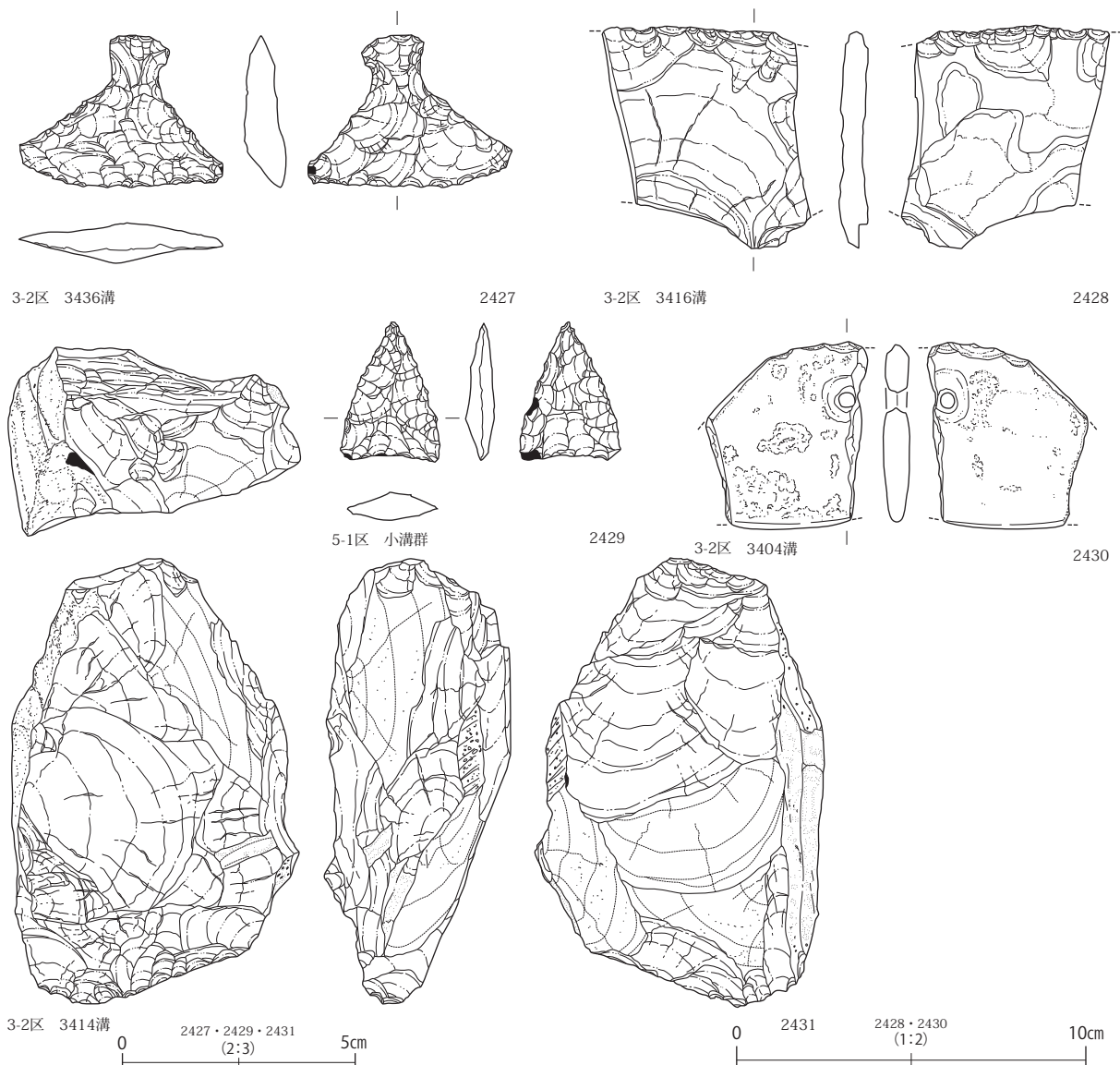


図451 第2面 各遺構 出土遺物

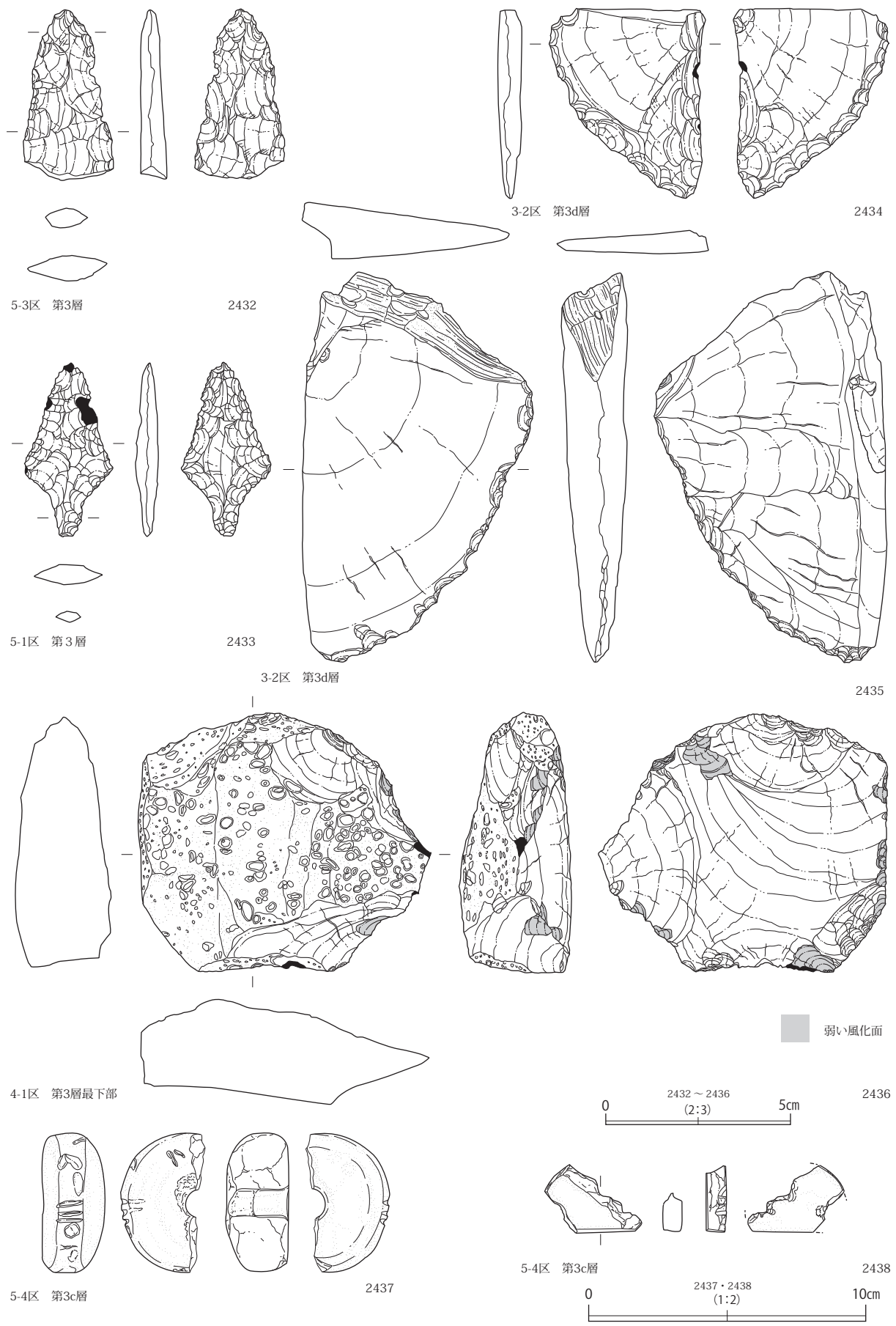


図452 第3層・第3c層・第3d層 出土遺物

面を打面として縁辺部から器面中央に向けて剥片を剥離している。

2437は角閃石黒雲母花崗岩製の紡錘車である。右側面中央には、紐状のものを巻きつけた痕跡の様な器面に沿った線状痕が三ヶ所認められる。

2438は瑪瑙製の丸軋である。色調は淡い赤茶色と淡いクリーム色のマーブル模様を呈する。欠損部分以外は全面面取り加工され、研磨される。特に表面・側面は丁寧に磨かれ、光沢面を持つ。垂孔が無いタイプである。裏面には2対1組の潜り穴が三ヶ所認められる。

2439は石核である。大型で板状の剥片を素材としている。表・裏面ともに剥離面は平坦をなす。作業面を表面・裏面と交互に入れ替えながら、縁辺部から器面中央に向けて求心状に平坦な剥片を剥離している。縁辺部は上面の折れ面を除き、打撃を何度も行った際のツブレと微細剥離がほぼ全周に認められる。なお、表面上端中央には折れ面を打面として剥片を剥離しようとした際のツブレが見られる。

2440は、礫岩の円礫を使用した磨・敲石類である。表・裏面の器面中央及び下面、両側面中央には円形・楕円形状の敲打痕や擦痕、敲打によるツブレが見られる。上面中央には平らな磨り面が形成されている。

3. 第3面〔第4b層上面〕遺構出土石器(図454・455)

第3面からはサヌカイト製打製石器が70点出土している。内訳はスクレイパー3点、石鏃1点、石錐1点、石匙1点、二次加工ある剥片13点、剥片26点、破片8点、石核3点、楔形石器14点である。この内、金山産サヌカイトは16点出土しており、全体の約23%を占める。磨製石器・礫石器は18点出土しており、内訳は丸軋1点、玉類2点、太型蛤刃石斧1点、砥石8点、磨・敲石類4点、台石類1点、剥片1点である。

2441は石匙である。剥片素材であるが、打面形態は二次加工により不明である。素材剥片は表面・裏面共に平坦な一枚の剥離面からなる。刃部は両面調整である。右辺は器体中央裏面側から力が加わり折れている。

2442は凹基式の石鏃である。全面二次加工に覆われており、素材は不明である。

2443は石錐である。頭部と錐部の境は明瞭である。錐部は両側縁部とも両面から丁寧に調整されている。素材は不明である。

2444・2445は楔形石器の接合資料であり、剪断面で接合する。上面は平らな自然面であり、これに直交または斜め方向の両極打撃がいくらか繰り返された後、最終的にはこれに直交する両極打撃により、剪断面が形成されている。なお、これ以後の剥離が見られないことから、これが最終剥離面であることがわかる。

2446は太型蛤刃石斧の基部である。器面中央(実測図の下端部)で基軸に直交して折損した後、敲石に転用している。上端部には敲打痕が見られ、表・裏面には擦痕が認められる。石材は閃緑岩か。

2447は瑪瑙製の丸軋である。色調は白色に淡い灰黒色が僅かに混じる。欠損部分以外は全面面取り加工され、研磨される。特に表面・側面は丁寧に磨かれ、光沢面を持つ。裏面の欠損が著しく、潜り穴の有無は不明である。また、表面の下端も著しく欠失しており、垂孔の有無が不明である。

2448・2449は石英製の平玉である。2449は直径1.7cmの円形で全面研磨されており、特に表面は丁寧に磨かれている。2448は直径1.4cmの円形を呈し、全面研磨されている。

2450～2454は砥石である。2450は上下端部の剥落部分以外は全面使用しており、擦痕が見られる。表面の研ぎ面の窪みが他より顕著であり、主作業面であったことがわかる。右側面の窪みの中には鉄錆が

陥入し、その周辺及び表面は火を受けた為か、黒変部分が存在する。裏面の剥落は右側面からの打撃によるものである。砥石として使用後に金床石に再利用したのであろうか。石材は長石質砂岩である。

2451は上面に砥石製作時の擦痕が見られる。四面を使用しており、特に表面及び右側面中央は著しく擦り減り、窪んでいる。

2452は剥落している部分は不明であるが、三面に使用の痕跡が窺える。いずれも肌理が細かい良質の仕上げ砥石である。

2453は本来断面が六角形を呈するものであろう。石材自体は肌理が細かいが、表面はやや多孔質である。中砥であろう。

2454は大型の砥石である。上端部と下端部の一部の剥落部分、及び裏面の中央付近を除く剥落部分の他は全て研ぎ面として使用されている。表面の窪みが著しく、主な作業面であったことがわかる。

石材は2451が流紋岩質凝灰岩、2452が流紋岩、2453が細粒黒雲母花崗岩、2454が砂岩である。

4. 第4 a層出土石器(図456・457)

平安時代の耕作土層である第4 a層からは下位層のものを多く含むと思われるサヌカイト製打製石器が140点出土している。内訳はスクレイパー10点、石鏃2点、石錐1点、石匙1点、両面調整石器1点、二次加工ある剥片28点、熱破碎片1点、両極打法の剥片12点、微細剥離痕ある剥片1点、剥片42点、碎片8点、石核4点、楔形石器29点である。この内、金山産サヌカイトは43点出土し、全体の約

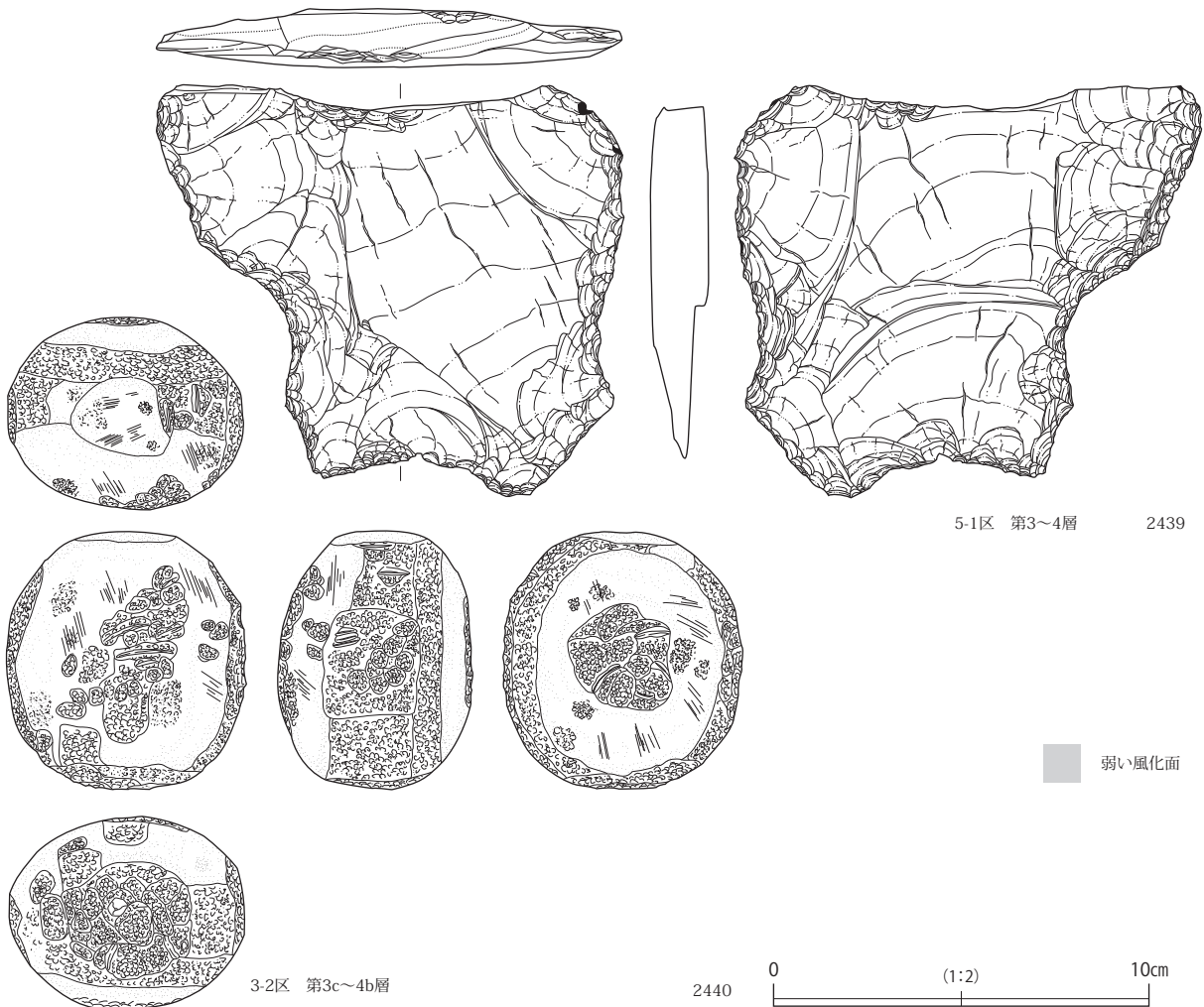


図453 第3～4層 出土遺物

31%を占める。磨製石器・礫石器は17点出土している。内訳は磨製石庖丁1点、太型蛤刃石斧1点、不明石器2点、砥石2点、磨・敲石類8点、台石類1点、石鍋1点、投弾が1点である。

なお、第3面(第4b層上面)精査時に出土した石器もここに含めて報告する。

2455・2456は石鏃である。2455は基部が折れており、一見平基式に見えるが凸基式石鏃であろう。裏面中央に残る剥離面が主要剥離面の剥片素材である可能性が高いが、加工の進行により打面形態は不明である。2456は平基式石鏃である。全面二次加工に覆われており、素材は不明である。

2457は石匙である。礫端片を利用した剥片素材である。打面形態は二次加工により不明であるが、自然面打面の可能性が高い。刃部及びつまみ部は両面調整である。

2458～2460はスクレイパーである。2458の打面形態は不明であるが剥片素材である。素材剥片を作出した後、主要剥離面の末端側と打点側の左方に二次加工を施し現存の台形状に仕上げている。素材剥片の片側縁に両面加工を連続的に施し、刃部としている。

2459は礫端片を利用した縦長剥片素材である。打面部には幾度か打撃を試みた際のツブレが認められる。素材剥片の主要剥離面は、石理走行から半順目に剥離されている。また、ハードハンマーの直接打法であろうか、バルブが大きく発達し、器面は大きく波打っている。両側面のうち主要剥離面と自然面のなす角度の鋭い側を選択し、両面調整が施され刃部を作出している。

2460は礫端片を利用した石核素材のスクレイパーである。

2461は楔形石器である。末端がヒンジフラクチャーを呈した剥離面(裏面左側三分の一程の範囲に残存)が、素材面である可能性がある。この剥離面の打撃軸と直交する方向に連続した両極打法を施しており、縁辺には階段状剥離とツブレが認められる。

2462は三重風化の両面調整石器である。剥離の様相が旧石器時代所産の可能性が高い石核を素材とする。風化の様子から時期はやや下るが、これに表面左側縁部下方には片面調整、上部部には両面調整を施した痕跡がある。しかしながら、この二次調整は刃部の形成を意図したものではない為、両面調整石器と分類した。この二次加工よりさらに新しい剥離面も認められるが、後世の攪乱によるものだろう。

2463は熱破碎片である。全面、被熱によりポット・リッド状破面をなす。上・下面は平坦面をなし、このうち上面には亀甲状の亀裂が認められる。

2464は泥質片岩製の外湾刃半月形の磨製石庖丁である。残存率は約60%であり、紐孔2個が穿孔されている。表・裏面共に縦・斜め方向の研磨痕がみられる。刃部は刃と平行あるいは斜交して研磨されている。刃部は、表面左端から左側の紐孔までの部分と裏面左端から右側の紐孔までの部分において刃の稜線がより鋭く仕上げられている。裏面紐孔付近には穿孔時の敲打痕が認められる。又、右側の紐孔は背部方向へ伸びる紐孔隅がわずかではあるが摩滅している。

2465は用途不明の磨製石器である。実測図上の下端部より三分の一程の位置には横方向の擦痕が顕著にみられ、擦り減りにより窪んでいる。石材は凝灰岩である。

2466は太型蛤刃石斧の刃部である。製作時の敲打・研磨痕が見られ、刃部には使用痕も認められる。石材は花崗岩である。

5. 第4面〔第4b層下面・第5層上面〕遺構出土石器(図458～472)

第4面からはサヌカイト製打製石器が542点出土しており、内訳はスクレイパー15点、石鏃23点、石錐11点、二次加工ある剥片80点、両極打法の剥片35点、微細剥離痕ある剥片1点、剥片201点、破片88点、石核6点、楔形石器79点、原石3点である。この内、金山産サヌカイトは171点出土し、全体の約

32%を占める。磨製石器・礫石器は73点出土しており、内訳は石庖丁2点、太型蛤刃石斧2点、紡錘車2点、砥石5点、磨・敲石類36点、台石類8点、二次加工ある剥片3点、凹み石1点、投弾11点、不明3点である。

2467～2481は石鏃及び石鏃製作途上品である。2467は凸基式石鏃であり、大部分が折損しているが、形状から基部であると判断した。

2468・2469は凹基式石鏃であり、平面五角形を呈する。2470～2478は凹基式石鏃であり、平面三角形を呈する。この内、2477と2478には側縁に抉りが施されている。また、2473は側縁が鋸歯状を呈してい

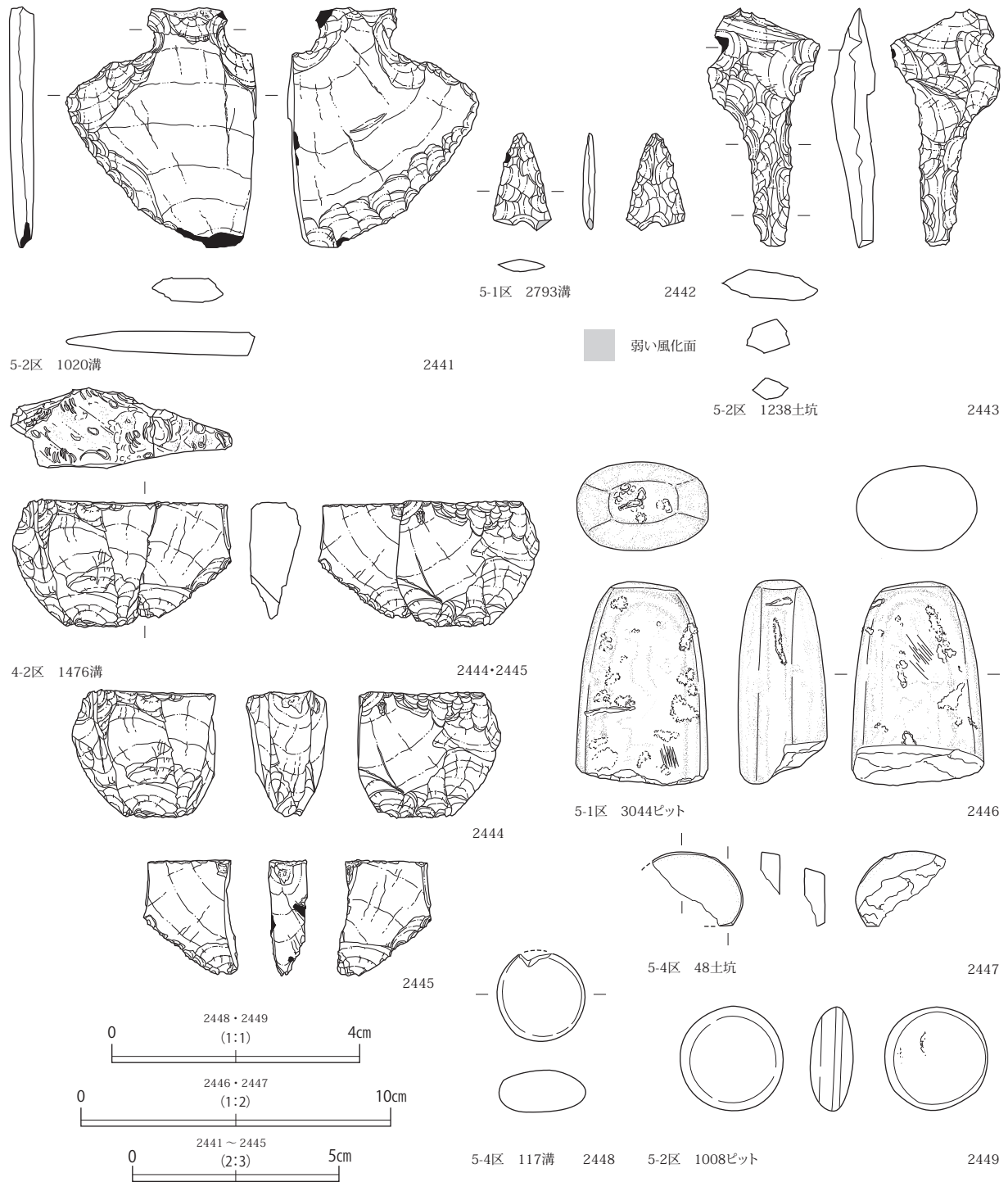
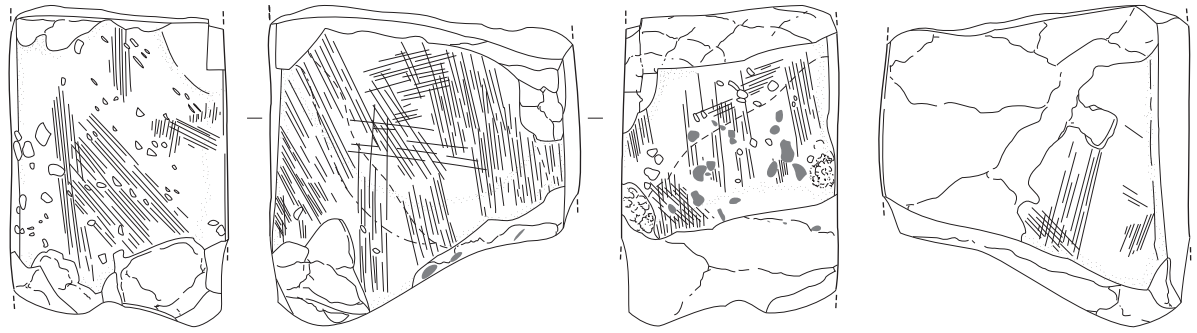
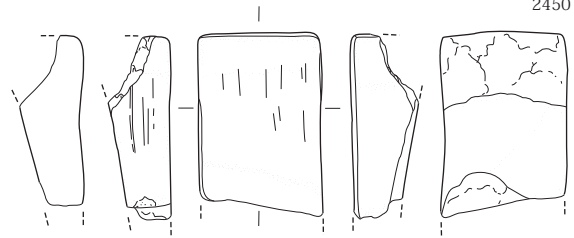
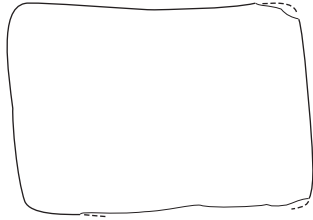


図454 第3面 各遺構 出土遺物(1)

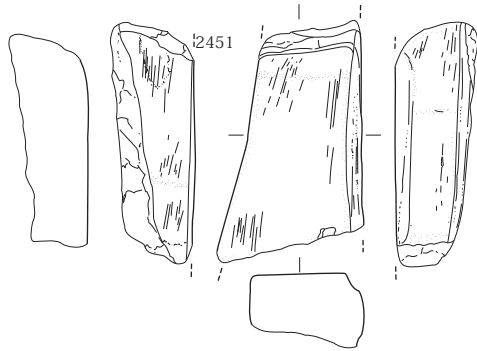


5-2区 1088ピット

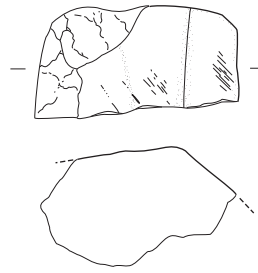
■ 鉄錆
 - - - - 強い被熱の範囲
 - · - · 弱い被熱の範囲



2450



5-4区 142ピット



2451

0 2450 ~ 2453 (1:2) 10cm

5-4区 117溝

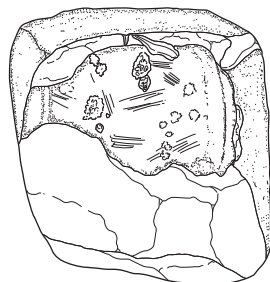
2452

5-4区 117溝

2453



5-2区 1015土坑



2454

0 2454 (1:3) 10cm

図455 第3面 各遺構 出土遺物(2)

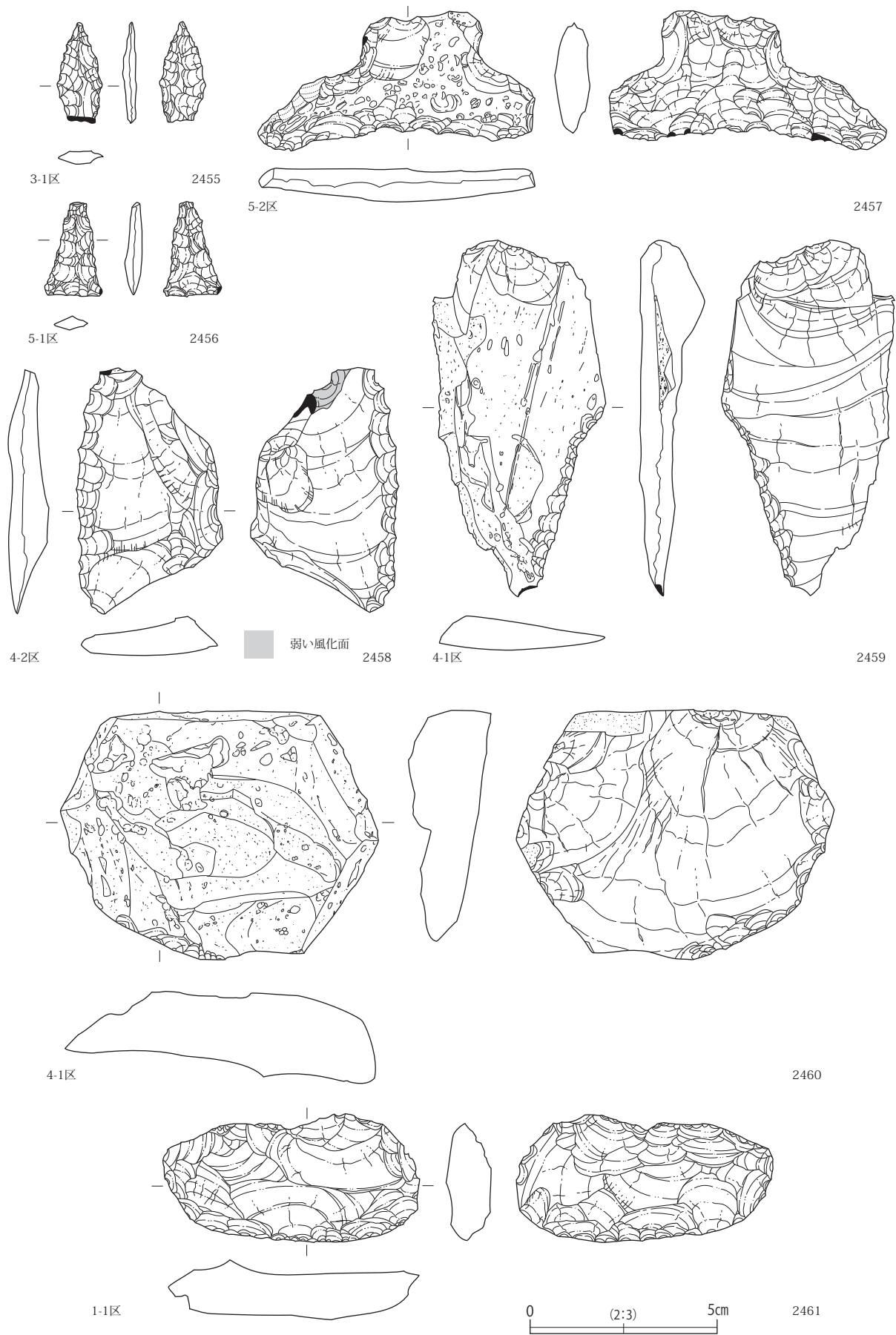


图456 第4a層 出土遺物(1)

る。2479～2481は最大長が4 cmを超える比較的大きなサイズのもので本遺跡の石鏃出土点数に占める割合は少ない。

2480は凹基式の石鏃である。裏面中央に残る剥離面が主要剥離面の剥片素材である可能性が高いが加工の進行により打面形態は不明である。先端部は折損しており、使用によるものと思われる。

2481は石鏃の製作途上品である。加工の進行により素材は不明である。側縁部上半分は両面加工が丁寧になされているが、下半部にはあまり加工が及んでいない。表面右下方の欠損後、表面から裏面にかけて器面を調整するが、途中で放棄したものと考えられる。

2479は裏面下半に多く残る剥離面が素材剥片の主要剥離面である可能性が高いが、加工の進行により不明である。表面基部左側は新欠により不明であるが、右側の形態から平基式の石鏃であったと判断した。

2482～2487は石鏃である。2482は裏面上部に平坦な剥離面が確認できる。詳細は不明であるが、素材面の可能性がある。鏃部には回転痕が見られる。

2483は剥片素材であるが、二次加工により打面形態は不明である。右辺は両面調整、左辺は下方が両面調整・上方は表面のみ調整している。また、裏面上部にも加工痕がある。

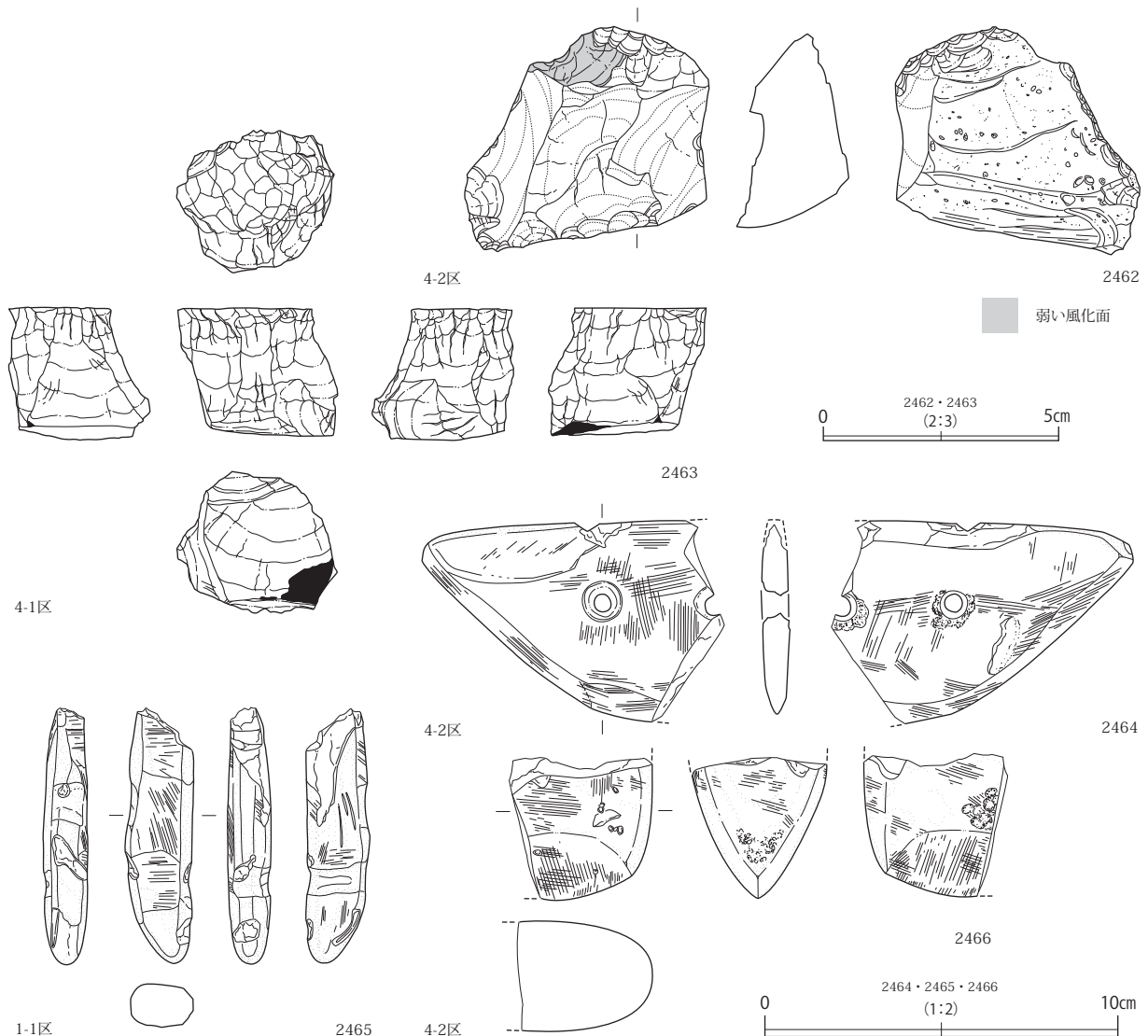


図457 第4a層 出土遺物(2)

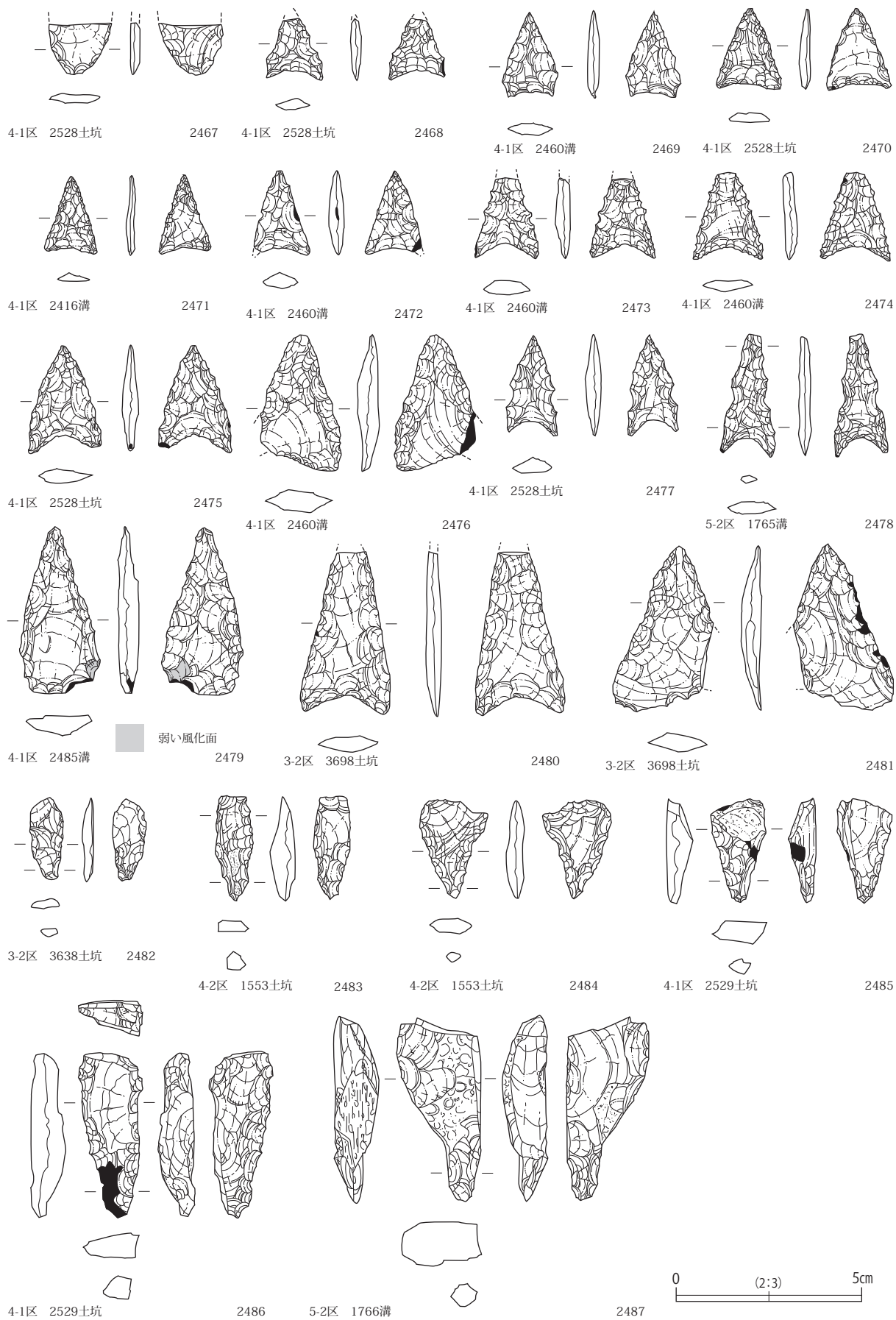


图458 第4面 各遺構 出土遺物(1)

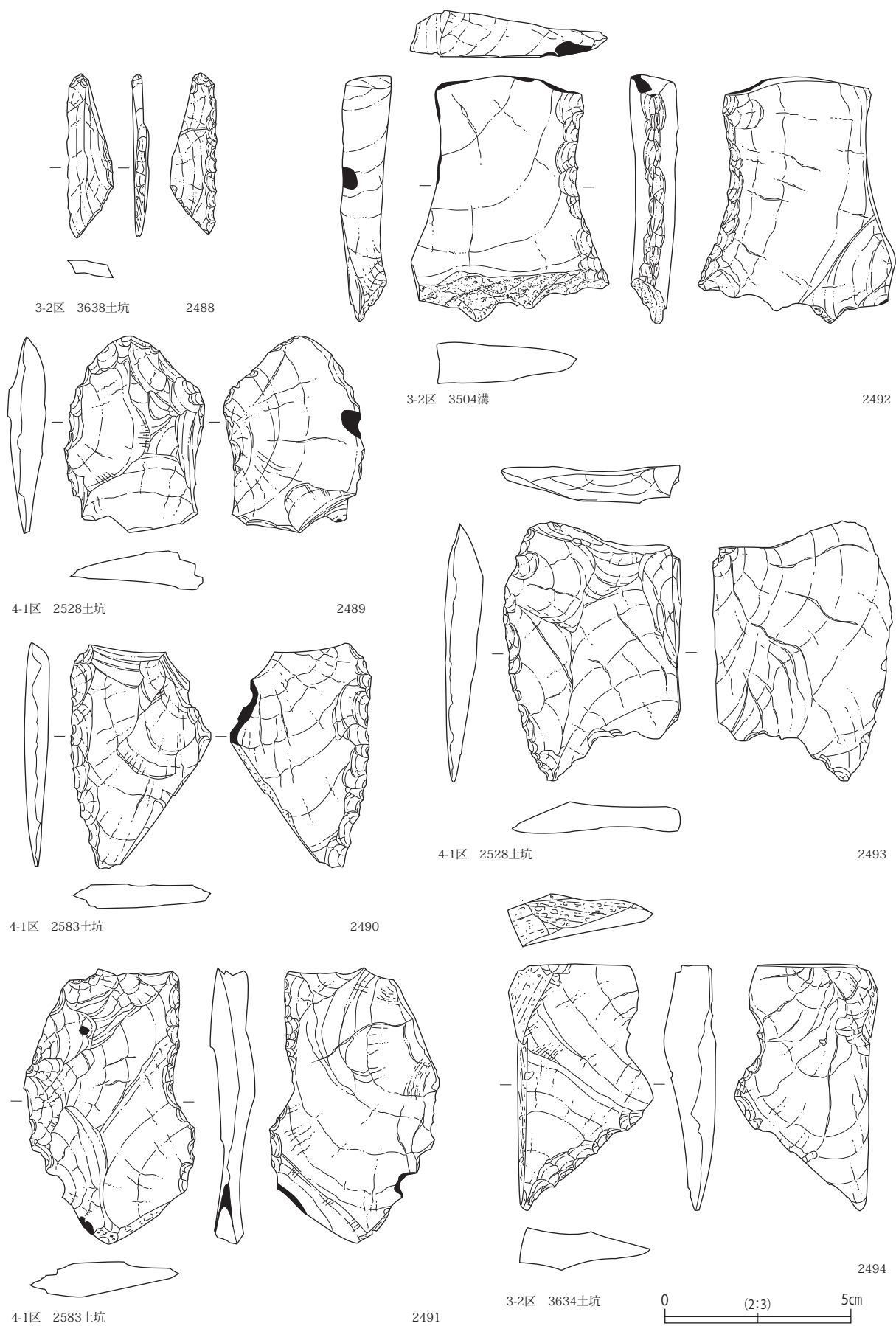


图459 第4面 各遺構 出土遺物(2)

2484は錐部を2ヶ所持つ形態のものであり、本遺跡ではこれ1点のみである。

2485は剥片素材である。右側面の剥離痕は素材剥片作出後に、主要剥離面にはほぼ直交して剥離し現存の形状に整え、その後下方に細かな加工を施し錐部としている。左辺は丁寧に両面調整がなされる。なお、表面上方には風化の進んだ剥離面があり、古い時代の石器を利用している可能性がある。

2486は両極打法によってできた角柱状剥片を加工したものである。右側面は素材の形状ほぼそのままであり、左側面を両面調整して錐部に仕上げている。

2487は原礫素材である。3面に自然面が確認でき、素材の形状をほぼそのまま利用し、錐部のみ丁寧な両面調整が施されている。頭部と錐部の境界は明瞭である。

2488～2496はスクレイパーである。2488はかなり風化が進み、白色化したスクレイパーである。剥片素材であり、ポジ面とネガ面は同時に形成された可能性がある。また、素材剥片作出の際、同時に剥片の打面が失われている。素材剥片の末端側表面には浅くて連続した調整、打面側には部分的な調整が施されている。風化の度合い、さらに錯向する剥離調整から旧石器の可能性が極めて高い。

2492は剥片素材であるが、打面は二次加工により不明である。主要剥離面は平坦をなす。背面と主要剥離面がなす鋭角な縁辺を利用して両面調整を施し、刃部を作出している。上面及び左側面は、熱破碎によりポット・リッド状破面をなす。

2489は線状打面であり、腹面側には、何度か打撃を試みた際にできたツブレがみられる。背面はネガティブ面のみで構成され、刃部は主に腹面から背面への連続的な剥離によって形成されている。

2493は剥片剥離時に同時に横折れが生じた末端側の剥片を利用したもので、打面形態は折れの為不明である。刃部は背面側に連続的な加工を施すことで形成されている。腹面側には使用によるものか微細な剥離痕があるのみである。

2490は折れにより打面形態が不明である。刃部は両面調整である。背面はネガティブな面のみで構成されている。

2491は自然面打面である。背面はネガティブな剥離面のみで構成される。刃部は腹面から背面への連続的な加工及び背面から腹面への部分的な加工によって形成されている。

2494は隣り合う2辺の自然面のうち一方を打面とし、打角は鋭角に石理に沿って縦長の素材剥片を剥離している。鋭角な右側縁部を利用して刃部としている。刃部上方は背面側から、下方は腹面側から二次加工を施している。刃部下方の腹面側は刃先から1～2mmの範囲で擦り減りが見られ、使用によるものと思われる。

2495は礫端部を利用した横長剥片素材のスクレイパーである。腹面の右辺上方には円錐体が見られ、打点を転移した後、横長の剥片を作出している。素材剥片の末端部には腹面側から連続的に二次加工を施している。

2496は主要剥離面が平坦面をなす剥片を素材としている。両側面は、被熱によりポット・リッド状破面をなし、表・裏面には亀裂が見られる。特に裏面の亀甲状亀裂は顕著である。刃部は主に腹面側を連続的に剥離しているが、背面側の剥離はランダムであり、使用による可能性も考えられる。

2497～2517は楔形石器である。2497は剥片素材の楔形石器である。上面は自然面であり、裏面右側面は風化の程度が異なる古い時代の剥離面である。

2499は剪断面がある楔形石器である。折損により打面形態は不明であるが、主要剥離面が平坦な剥片を素材とする。

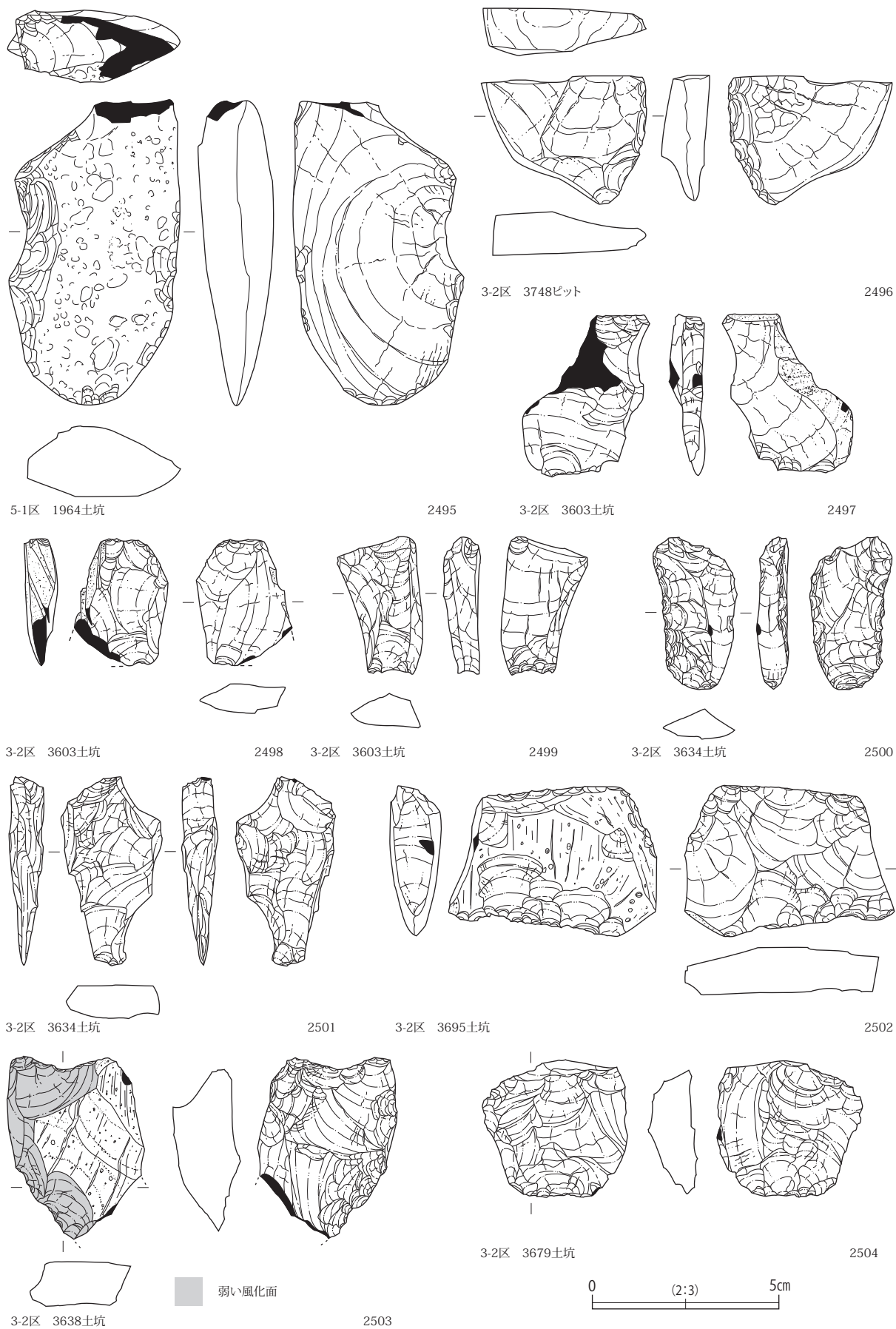


図460 第4面 各遺構 出土遺物(3)

2500は剪断面がある楔形石器である。剪断面を打面として、裏面左辺に連続的に押圧剥離を施している。

2502は礫端片を利用した剪断面ある楔形石器である。縁辺部には密集した階段状剥離とツブレが連続して認められる。

2504は剥片素材である。

2506は剪断面ある楔形石器である。

2507は両極打法で剥離した剥片にさらに両極打法を連続的に施している。形態から石鏃の製作途上品

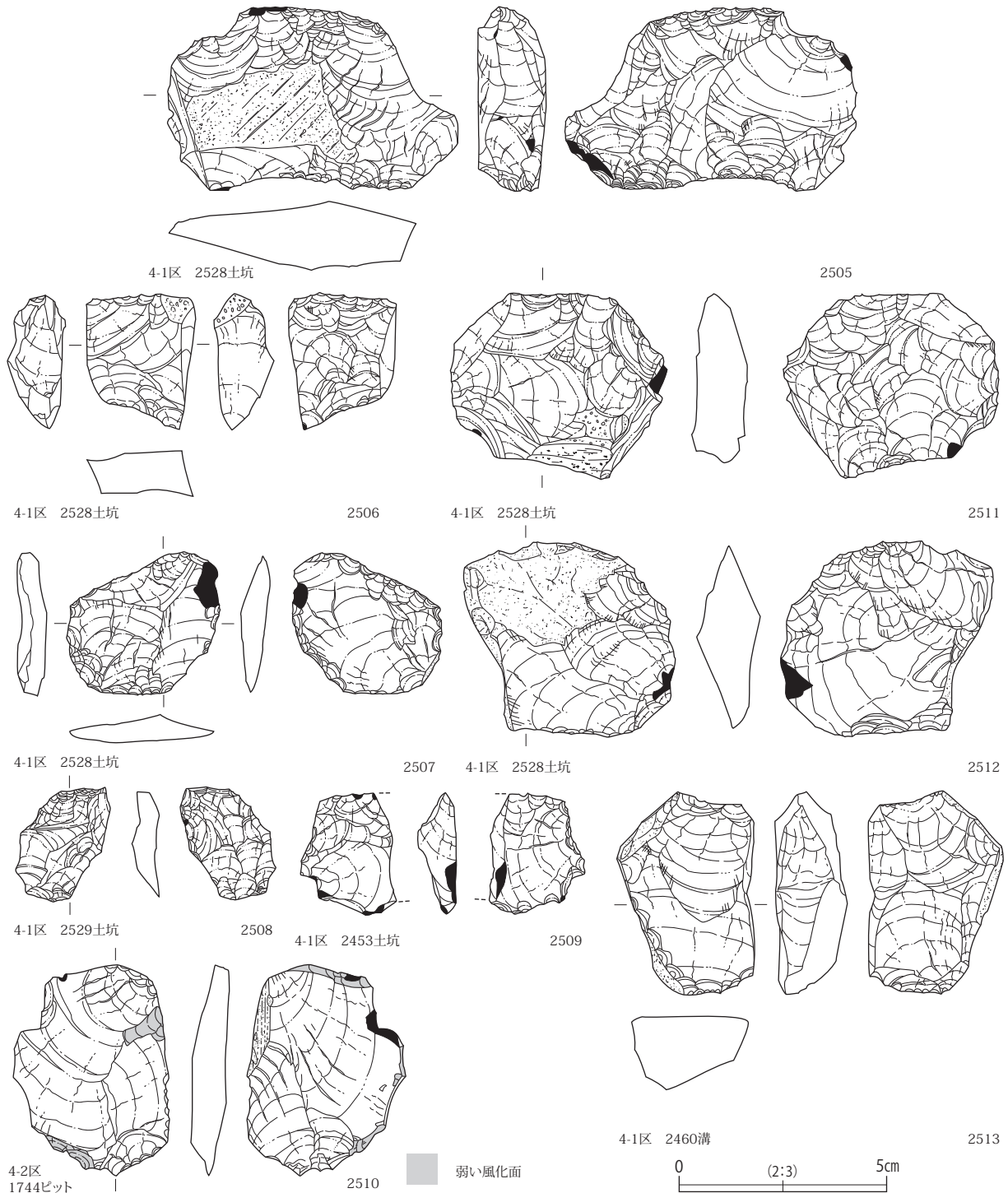


図461 第4面 各遺構 出土遺物(4)

の可能性もある。

2509は剪断面ある楔形石器である。剥片を素材としている。

2513は剥片素材である。上面の一部と側面は自然面である。2510の表裏両面に認められる剥離痕は石理に順目、及び半順目で剥離されており、これらは両極打法による同時形成である。表面右辺には連続

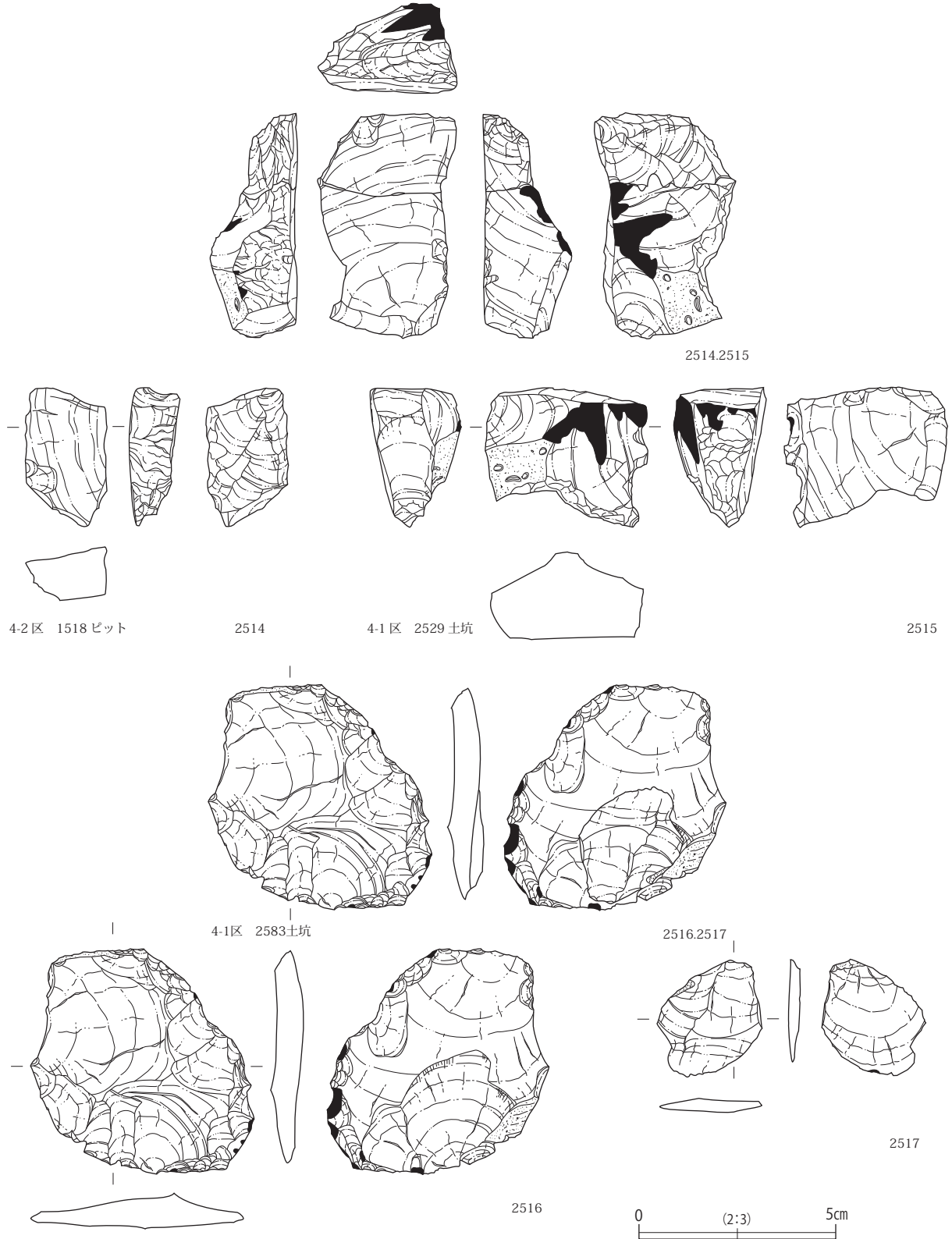


図462 第4面 各遺構 出土遺物(5)

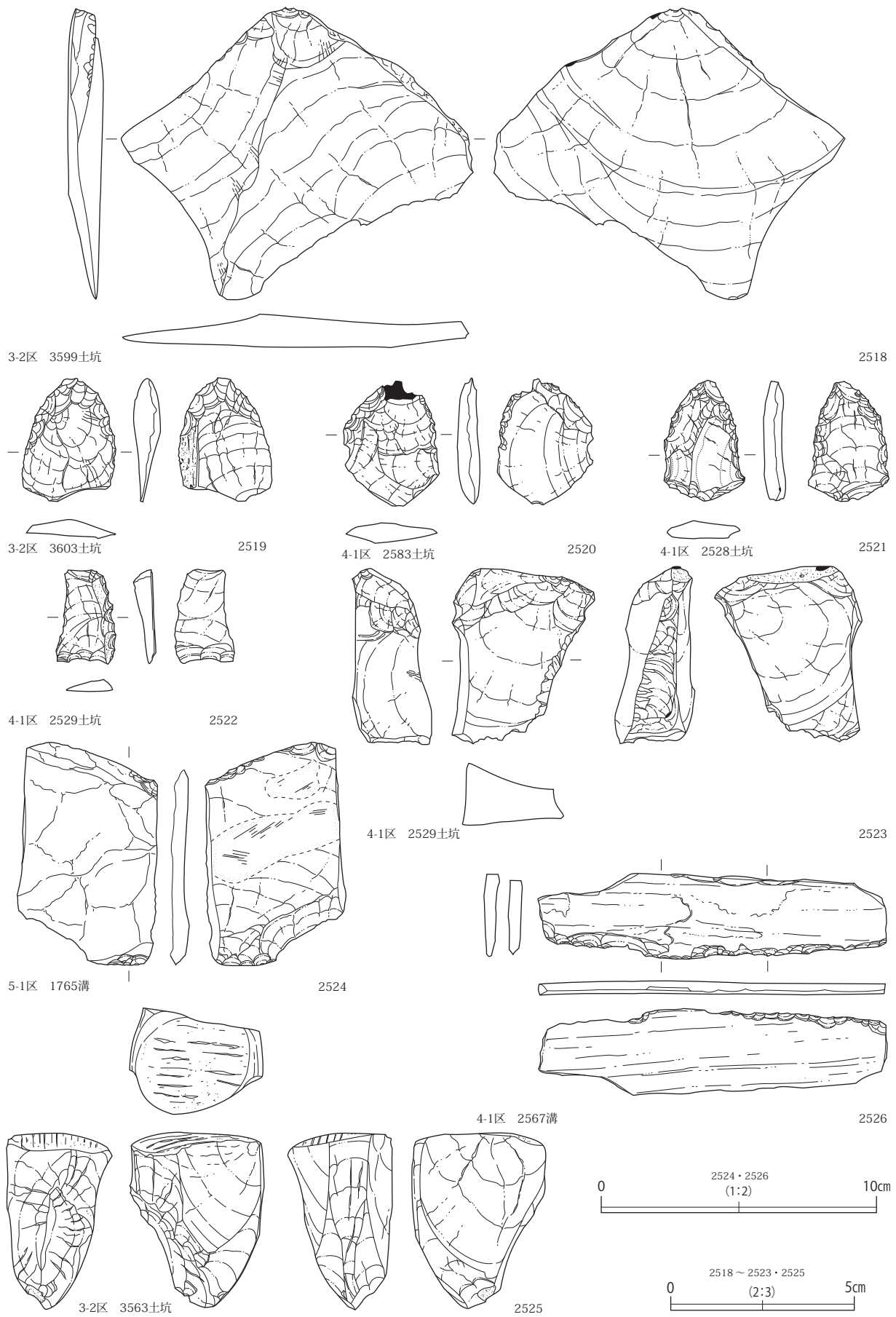


图463 第4面 各遺構 出土遺物(6)

した微細剥離が見られる。

2514・2515および2516・2517は楔形石器の接合資料である。2514と2515は被熱により破碎した面で接合する。接合状態では楔形石器であり、剪断面を持つ。それぞれ、近接する異なる遺構から出土しており、出土地点周辺で火を受けたものと推察される。

2516と2517の接合資料は、2516が楔形石器で、2517は両極打法による剥片である。2516の裏面下方の大きな剥離痕跡のうち、2517と接合する右側部分の割れ面は黒色を呈し、最近剥がれたことを示すが、リングの様相から力が加わったのは遺構が示す年代の弥生時代前期であり、両極打法により剥片剥離作業が行われていたことを示している。

2518～2526は二次加工ある剥片である。2518は線打面であり、石理に沿って剥離された平坦な主要剥

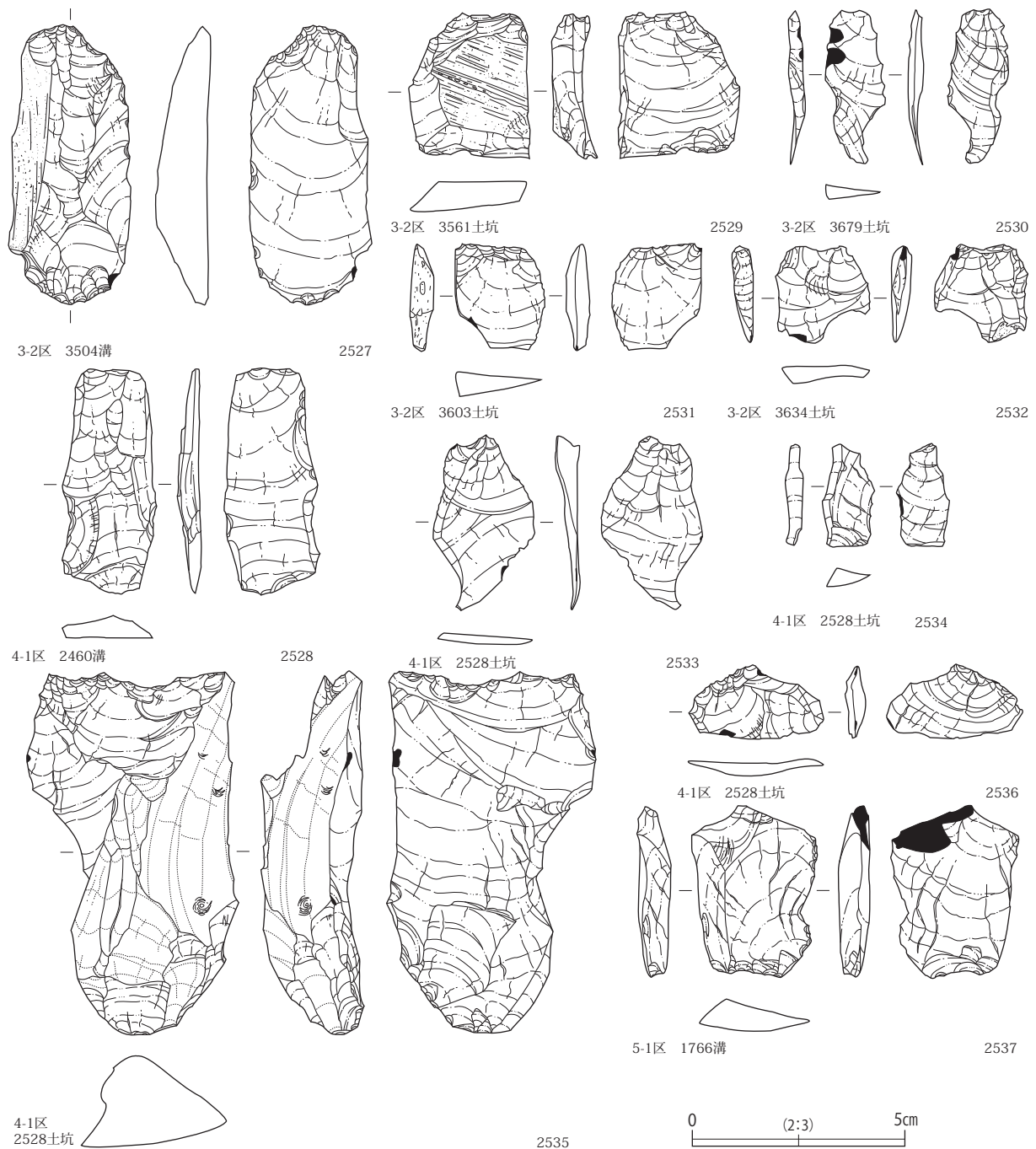


図464 第4面 各遺構 出土遺物(7)

離面をもつ。背面はネガティブな剥離痕のみで構成されている。左側面の折れ面には鋭い縁辺部を潰すかのように背面側から二次加工を連続的に施している。剥片末端部には微細な剥離痕があり、刃部としての使用を想定できる。

2519は両極打法で剥離された剥片を素材としている。表面に認められる素材面はポジティブな剥離面であり、剥片をさらに両極打法により厚みを減じたものに、二次加工を施している。形態から、石鏃の製作途上品である可能性が高い。

2520は剥片素材である。打面形態は不明であり、背面はネガティブな剥離痕のみである。両面調整が連続的に認められる箇所があり、石鏃などの製作途上品の可能性が高い。

2521は、石鏃あるいは石錐の製作途上品である。表面下部には風化した古い時期の剥離面が認められる。

2522は両極打法の剥片素材である。2519と同様に、剥片を両極打法によりさらに厚みを減じ、それを

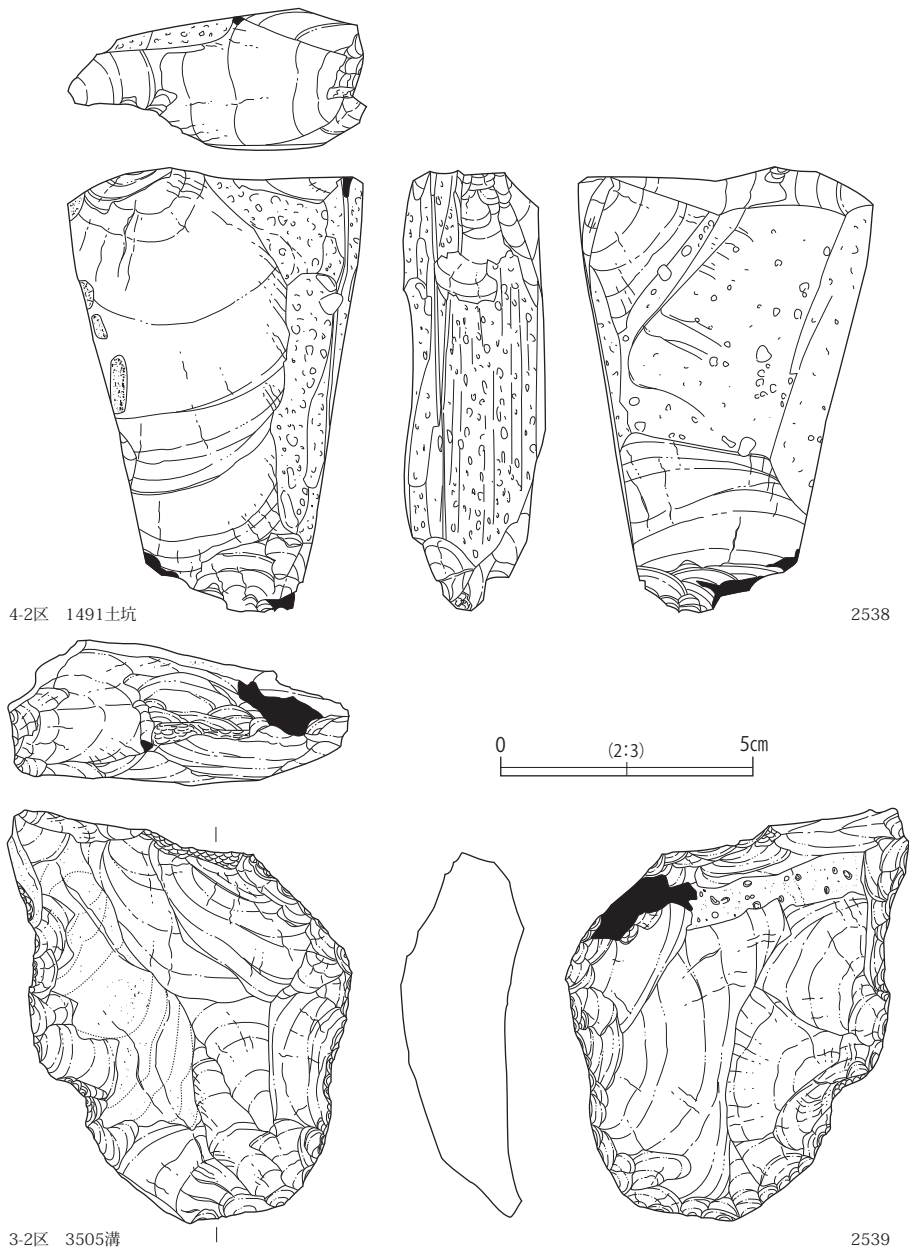


図465 第4面 各遺構 出土遺物(8)

素材として下端と表面右辺を連続的に片面調整している。表面上方の厚みを取りきれずに放棄したものか。形態から石鏃の製作途上品の可能性がある。

2523は熱破碎片に二次加工を加えたものである。表面には亀裂があり、若干白色化している。上面は自然面である。二次加工は裏面上端の2ヶ所のみである。

2524・2526はサヌカイト以外の石材を使用したものである。2524は凝灰岩製である。表面は剥落している。下端部には両面調整が施されているが、右側面が折れていることにより、この調整が連続して刃

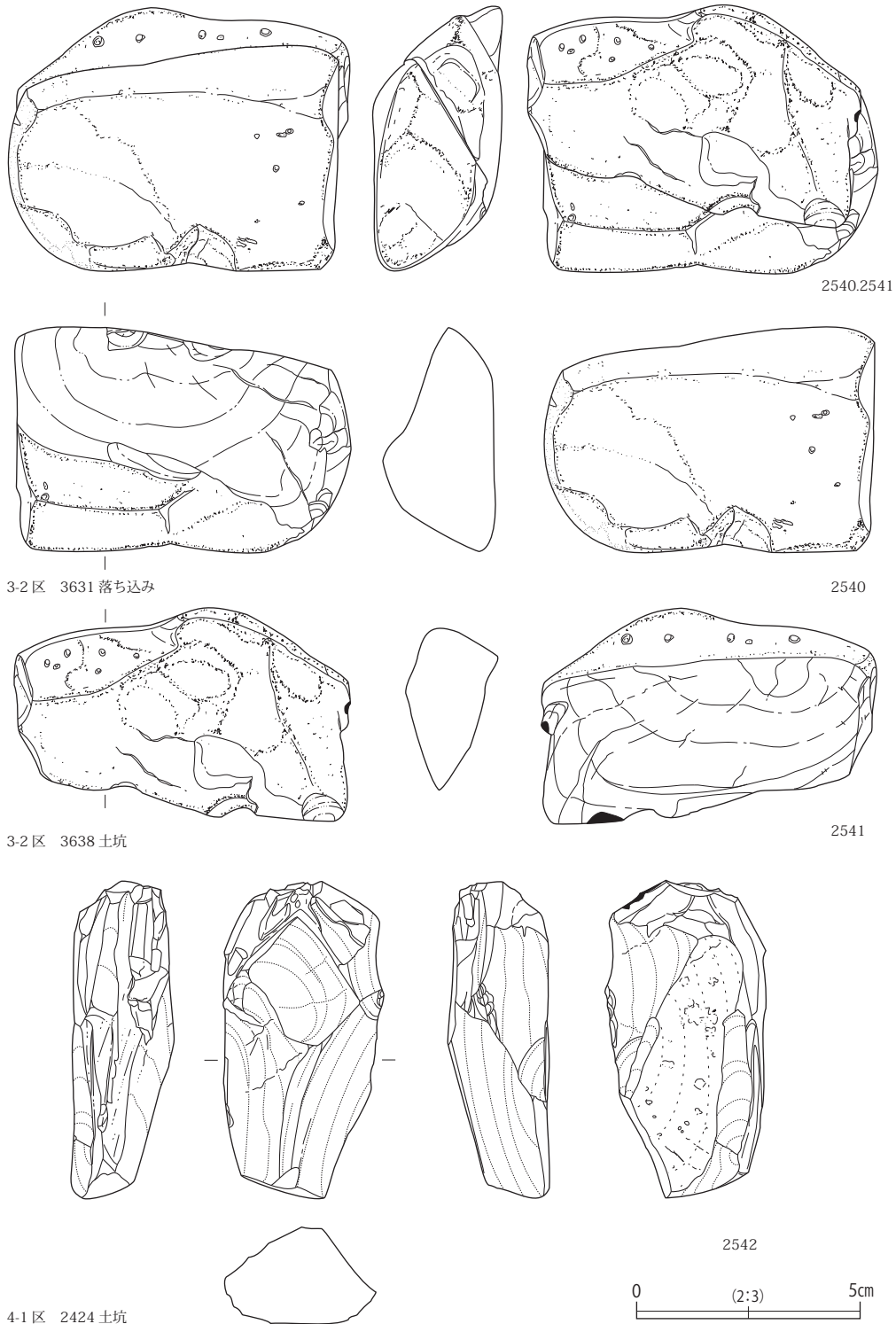


図466 第4面 各遺構 出土遺物(9)

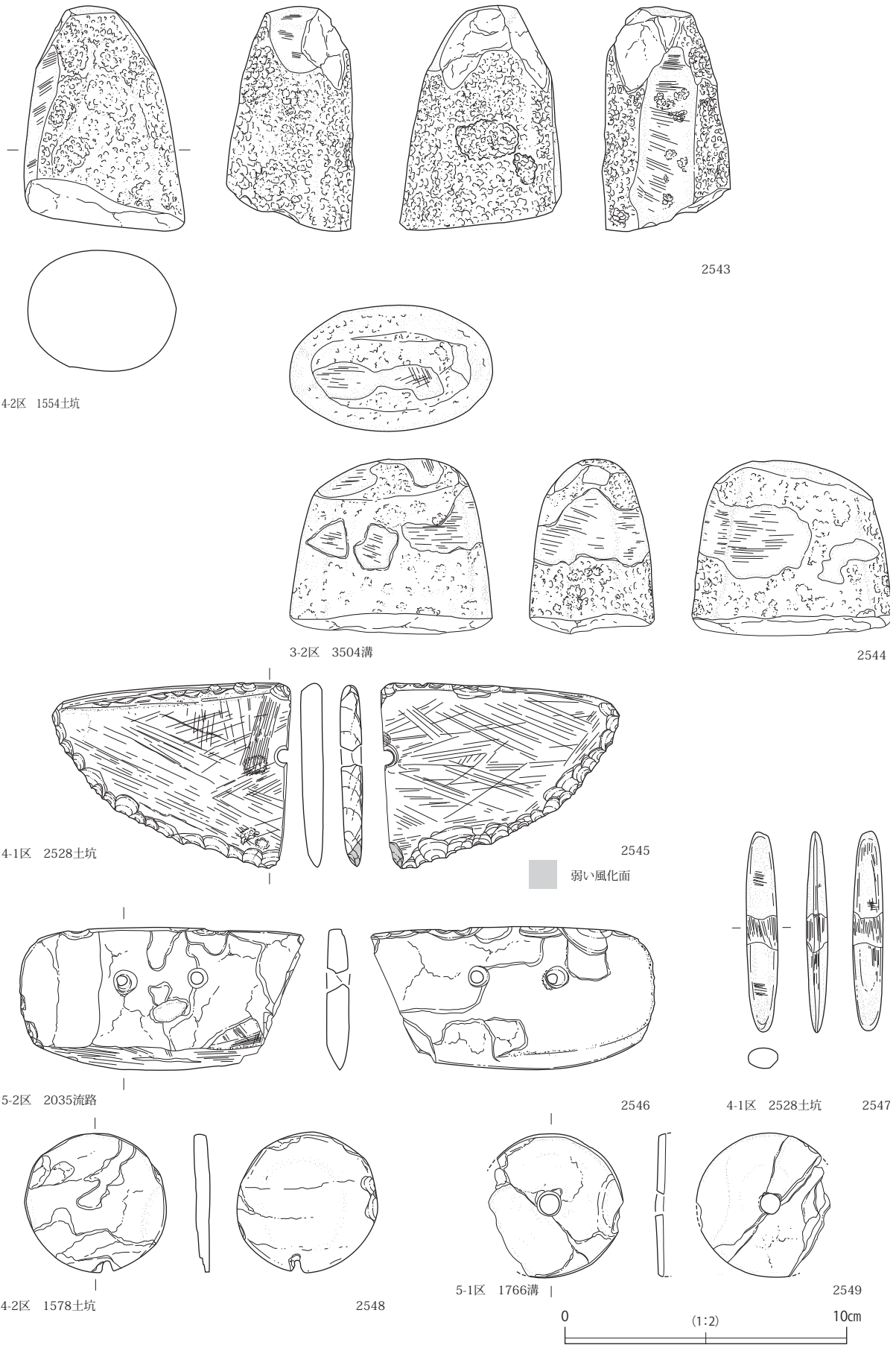


図467 第4面 各遺構 出土遺物(10)

部を成していたか否かは不明である。上面には若干のツブレと加工痕が認められる。磨製石器の製作途
上品であろうか、裏面中央(図の点線内)は磨かれ平滑面を成している。

2526は結晶片岩の板材の一辺に両面から連続的に二次加工を施し、刃を作り出している。

2525は熱破砕片である。全面が被熱により破砕したものであり、上面は著しく白色化している。

2527～2537は両極打法による剥片である。2527の主要剥離面は平坦であり、主要剥離面及び背面には
上下両端に微細な階段状剥離とツブレがみられる。背面は自然面と複数のネガティブな剥離痕、平坦な
剥離面から構成されている。剥離痕の幾つかは数回の打撃の際に同時に形成されたものであり、連続し
た両極打法の痕跡が窺える。表面右側縁部には連続した微細剥離痕が見られることから、鋭い一側縁を
利用した刃器であったと考えられる。

2528は素材剥片の主要剥離面側右側縁上方に二次加工を施している。右側縁下方の折れはこの際の同
時割れであり、この折れ面を打面として更に背面左側縁下方にも加工を施している。

2535は背面に古い段階の剥離面を多く残し、数枚の剥片を剥離した後、両極打法によって現存の大き



図468 第4面 各遺構 出土遺物(11)

さの剥片を作出している。主要剥離面下方の階段状剥離痕は、主要剥離面形成時と同時のものである。

2538・2539は石核である。2538は、扁平な板状の礫を素材としている。両極打法により礫を分割した後、分割面を打面として石理走行に沿って縦長剥片を剥離している。

2539は表面を縁辺部から器面中央に向けて剥片を剥離、裏面は実測図上の左右から中央に向けてほぼ

同じ大きさの横長剥片を剥離している。表・裏面共に大きめの剥片を剥離した後、更に剥片を得ようと縁辺部から中央に向けて打撃するがうまく剥離されず放棄されたと考えられる。

2540～2542はサヌカイト原石である。2540・2541は接合資料である。この接合資料は、割れ面のうねり方が人為的な剥離というよりむしろ、自然の営力で斜めにスライドして剥離したような様相を呈していることから原石とした。両者ともエッジは丸みを帯び、全面白色風化している。風化度合いと出土位置から2488の削器と同じく旧石器時代の所産である可能性が高い。

2542は水流によるものか全面摩滅しており、エッジは丸みを帯びている。

2543・2544は大型蛤刃石斧である。2543は凝灰岩製大型蛤刃石斧の基部である。部分的に磨きが施されているが、多くは自然面を残す。

2544も基部であるが、器軸と直交する方向に折損し、刃部を失った後、敲石に転用している。石材は変朽安山岩である。

2545・2546は磨製石庖丁である。2545は凝灰岩製である。平面形は外湾刃半月形で、両刃である。両面共に粗い研磨が肩部

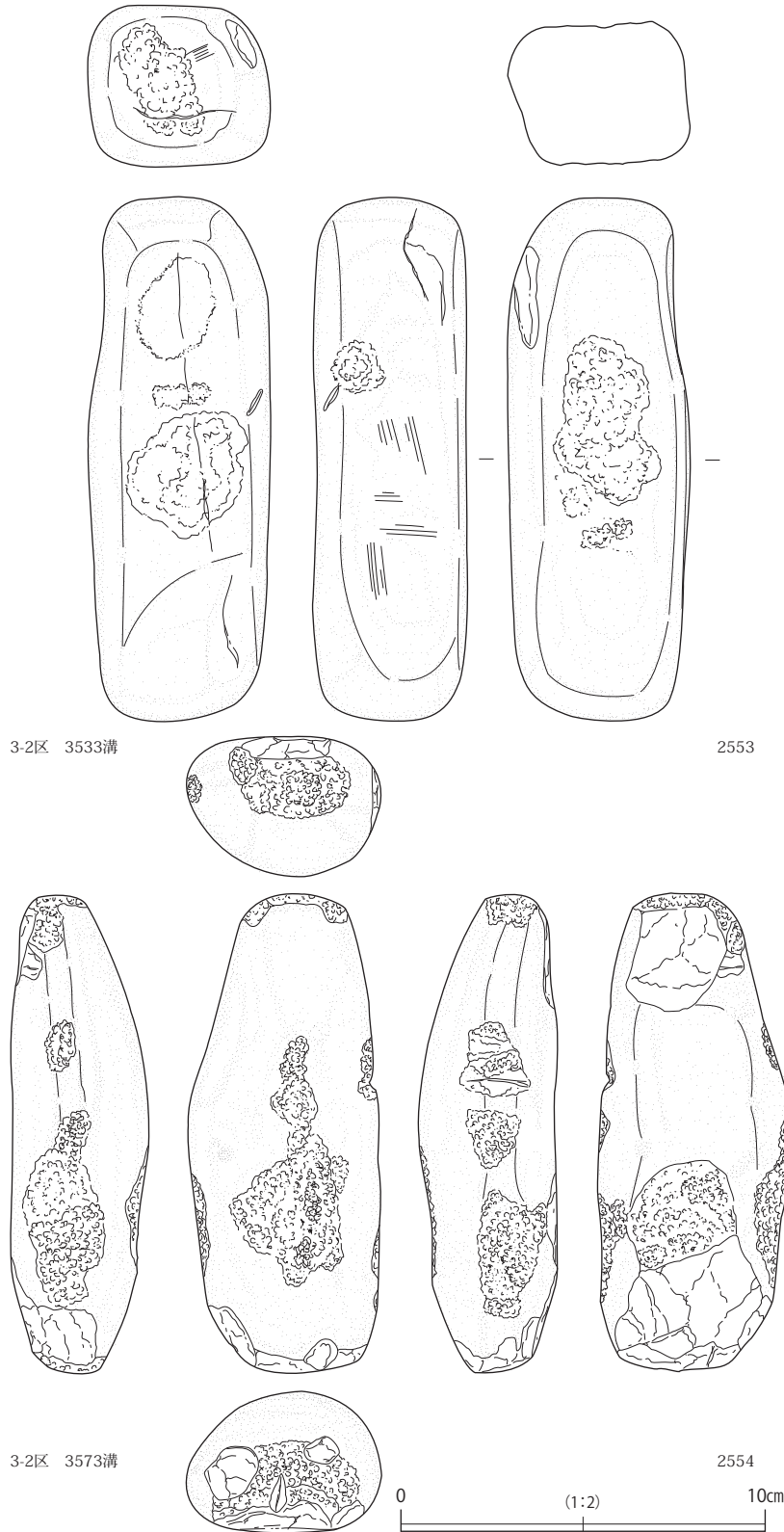
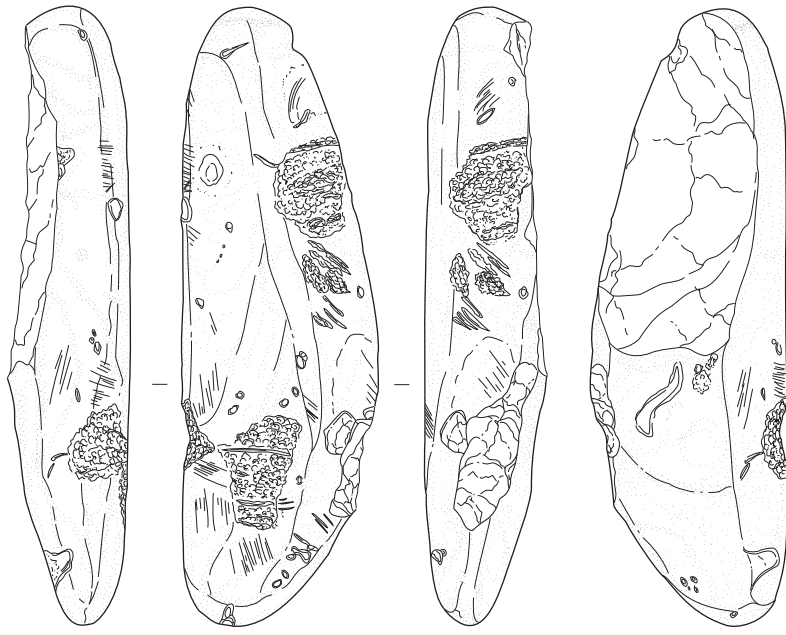
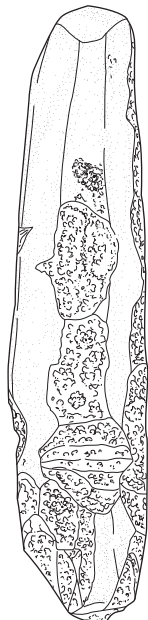
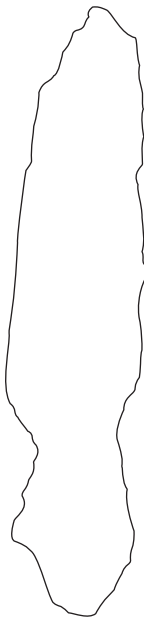
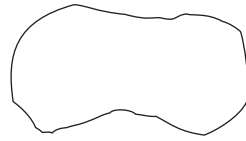
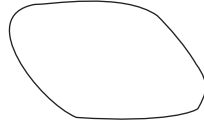


図469 第4面 各遺構 出土遺物(12)



5-2区 1765溝

2555



5-2区 2035流路

0 (1:2) 10cm

2556

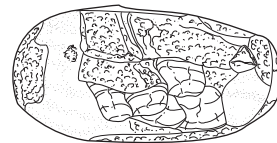


图470 第4面 各遺構 出土遺物(13)

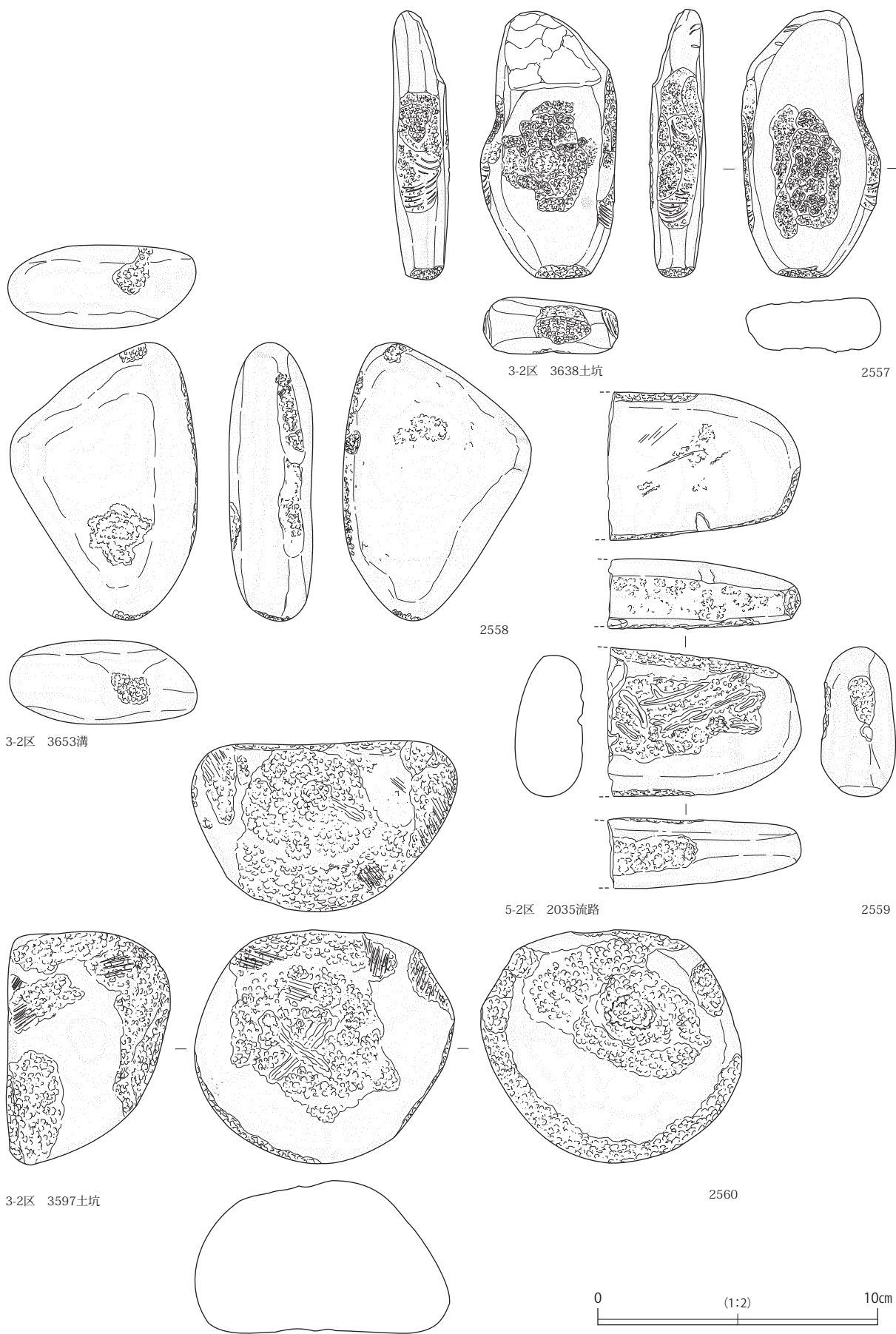


图471 第4面 各遺構 出土遺物(14)

まで施されているが刃部のみ打製である。使用後に刃部を再生したと考えられ、研磨が施された後、刃部を両面調整で作出している。紐孔は現況で1孔確認できる。表面の紐孔左側には楕円形を呈する敲打痕がみられる。これは現紐孔を穿孔する以前に計画された紐孔の位置を示すものと理解出来る。残存率は約45%である。

2546は紐孔2孔の紡錘形を呈する頁岩製石庖丁であり、実測図上で表面側に刃のついた明瞭な片刃である。両面と肩部に研磨が施されている。刃部には刃先と平行な研磨痕が見られる。表面・裏面共に剥落部分が多い。残存率は約80%である。

2547は用途不明の磨製石器である。結晶片岩製。全面研磨されている。中央部の幅約1cmは粗い研磨が施され、その両側は丁寧な細かい研磨が行われているために、結果として中央部が研ぎ出されたかのように微かに高くなっている。

2548は石製紡錘車の製作途上品である。表面及び縁辺部は丁寧に磨かれている。表面中央に直径0.8cm程の円形状で穿孔途中の痕跡が認められる。

2549は石製紡錘車である。表面と縁辺部は研磨されており、裏面は剥落しており詳細は不明である。中央には、直径0.8cmの軸孔が穿たれている。2548・2549ともに結晶片岩製である。

2550～2552は砥石である。

2550は上端の欠損面を除く全面に使用による研磨痕が認められ、平らな面を持つ。下端部は欠損後にも使用痕が確認できる。また頻繁な使用により、下部は斜めに擦り減っている。肌理が細かいので仕上げ砥であろう。流紋岩質凝灰岩製である。

2551は欠損部分以外ほぼ全面に擦痕がみられ、表面の研ぎ面は浅く窪んでいる。裏面には断面V字状を呈する線状痕が見られ、敲打されたものと推察される。石材は凝灰岩であろうか。

2552は表・裏面が主な使用面で、著しく窪む。右側面には研磨による平滑面が見られ、左側面には使用による溝状の窪みが顕著である。砂岩製である。

2553～2556は礫器である。

2553は棒状を呈する。頭部と表裏面・側面に敲打痕が、側面の中央部付近には擦痕がみられることから磨・敲石類として使用されたと思われる。

2554～2556は敲石である。いずれも形態が共通しており、実測図上で下方の器面が最大になる部分の表・裏面と側面に顕著な敲打痕がみられる。これは、上方の細くなっている部分を手に持ち、敲打痕が顕著な部分を主な作業面として使用していたものと想定できる。これらの敲打痕は円形、楕円形の他に断面V字状の線状痕が確認でき、両極打法にも使用された可能性が高い。

また、これらの敲石には強い敲打の衝撃による剥落部分も認められる。

なお、2556は磨製石斧の転用品であろう。石材は2555が凝灰岩で、その他は砂岩である。

2557～2561は台石類である。2557～2559は側面に敲打痕が見られ、敲石としての使用痕跡も認められるが、表・裏面には円形や楕円形状の敲打痕が見られ、台石としても使用されていたことが窺える。また2559には両極打法の痕跡と思われる断面V字状の深い線状痕が認められる。

2560は楕円形や円形の敲打痕の他、側面2ヶ所と表面に断面V字状の深い線状痕があり、両極打法の台石として使用されていたことを示している。

2561は左側面の使用痕が他に比べて希薄だが、その他全面に円形や楕円形状の敲打痕とツブレ及び線状痕がみられ、使用の痕跡が顕著に認められる。また上下端部には敲打の強い衝撃による剥離痕もみら

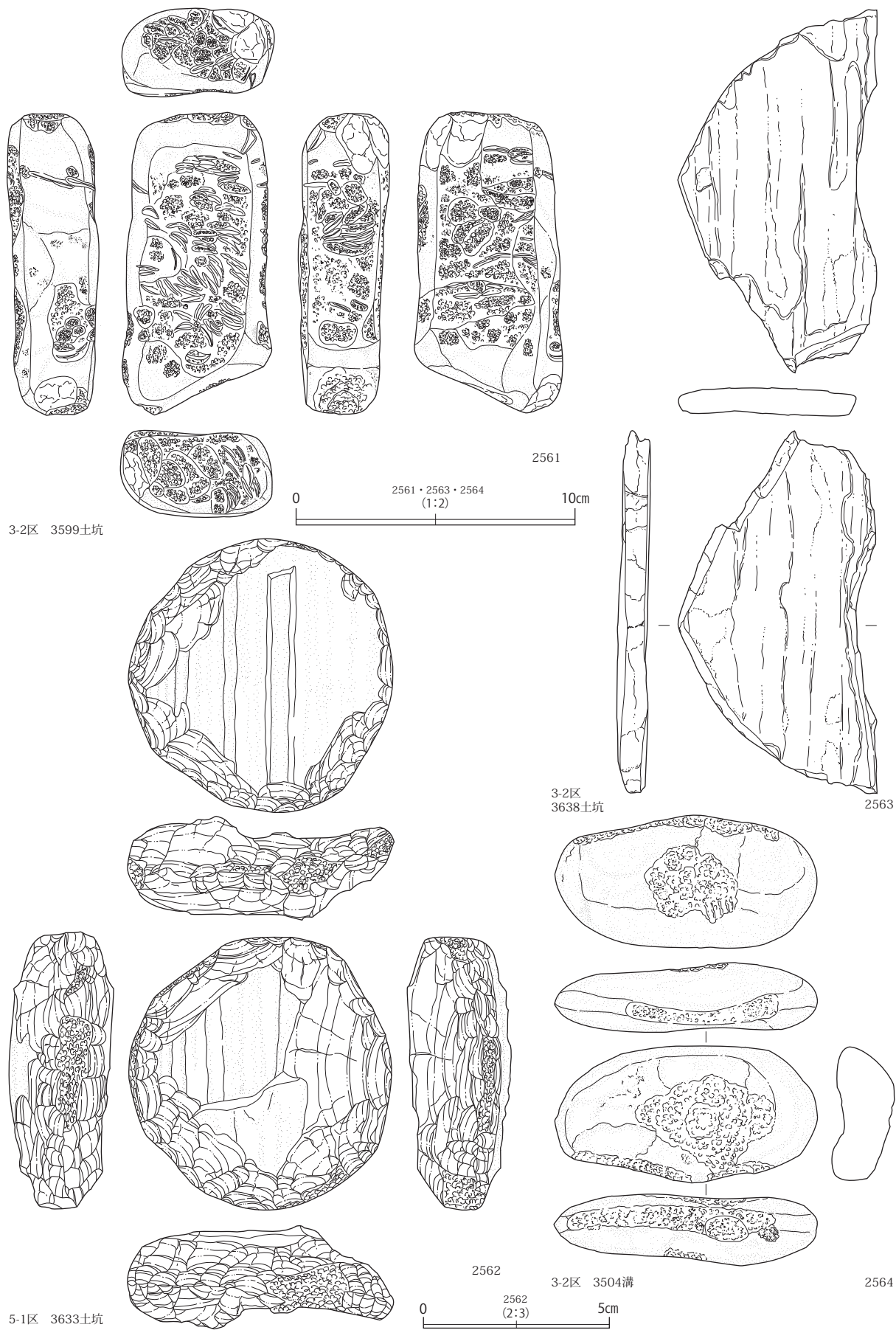


图472 第4面 各遺構 出土遺物(15)

れる。

石材は2560が花崗岩で、その他は砂岩である。

2564は敲石・台石類の中でも表面中央の窪みが顕著である為、他と区別して凹み石と分類した。側面には敲打による擦痕とツブレにより、磨り減りが顕著である。砂岩製である。

2562・2563は結晶片岩製の打製石器である。2563は板材を実測図上の左側面を加工して現存の形に切り出すが、その後の加工はなされておらず、用途は不明である。

2562は用途不明の打製石器である。扁平な礫の縁辺部を両面から整形剥離し、円形に仕上げている。縁辺部は剥離の際、何度も打撃を繰り返した為か、あるいは使用による為か、著しく潰れている。敲石としての使用も想定できるが不明である。

なお、当面で検出した弥生時代前期の3650土坑から円礫が11点(砂岩9点・礫岩1点・花崗岩1点)ままとって出土した。大きさは比較的斉一的で長軸3.8~5.4(平均4.41)cm・短軸2.95~3.9(平均3.5)cm・厚さ1.4~2.16(平均1.78)cm・重量23.8~50.25(平均37.61)gを測る。形態・大きさが揃っている点や所属時期を考慮すると石製投弾である可能性があろう。

6. 第4b層出土石器(図473)

第4b層及び第4面(第5層上面)精査時からはサヌカイト製打製石器が29点出土しており、内訳はスクレイパー1点、石鏃2点、石小刀1点、二次加工ある剥片5点、剥片7点、破片4点、石核4点、楔形石器4点、不明1点である。この内金山産サヌカイトは10点出土し、全体の約34%を占める。磨製石器・礫石器は3点出土しており、内訳は磨・敲石類2点、台石類1点である。

2565・2566は石鏃である。2565は凹基式石鏃である。加工の進行により素材は不明である。両側縁部は鋸歯状を呈する。縄文時代の所産であろう。2566は有茎式の石鏃である。全面二次加工に覆われており、素材は不明である。

2567は石小刀である。剥片素材であり、自然面打面である。刃部は両面調整である。

2568は楔形石器である。左右両端に自然面が認められる。表面上端右半分の剥離痕は打点を同じくするこれと直交する両極打撃の際の同時割れである。

2569は石核である。時期の異なる古い時期の剥片を素材としている。素材剥片の側面には平坦な剥離面が最終剥離面に下方を切られた形で残存する。また素材剥片の最終剥離面である裏面と表面の剥離面は同時形成である。時期を下り、表面の古い時期の主要剥離面を作業面としてその縁辺部を反時計回りに剥片剥離作業が進行している。

2570は敲石である。器面中央に敲打による浅い窪みがあり、縁辺は敲打によるツブレや断面V字状を呈する線状痕などが顕著である。砂岩製である。

7. 第4c層出土石器(図474・475)

第5層の最上部で出土したもので、ここでは便宜的に第4c層と呼称する。本層からはサヌカイト製打製石器が26点出土している。内訳はスクレイパー2点、石錐1点、二次加工ある剥片8点、両極打法の剥片3点、剥片4点、破片1点、石核1点、楔形石器5点、原石1点である。この内金山産サヌカイトは13点出土しており、全体の約50%を占める。磨製石器・礫石器は4点出土しており、内訳は磨・敲石類1点、砥石1点、二次加工ある剥片1点、不明1点である。2572は薄く扁平な剥片を素材とした石錐の製作途上品である。折れ面と二次加工により、打面形状は不明である。左辺は両面から調整を施し刃部を形成している。右辺は折れ面であるが、中央から下方にかけて加工痕が見られる。

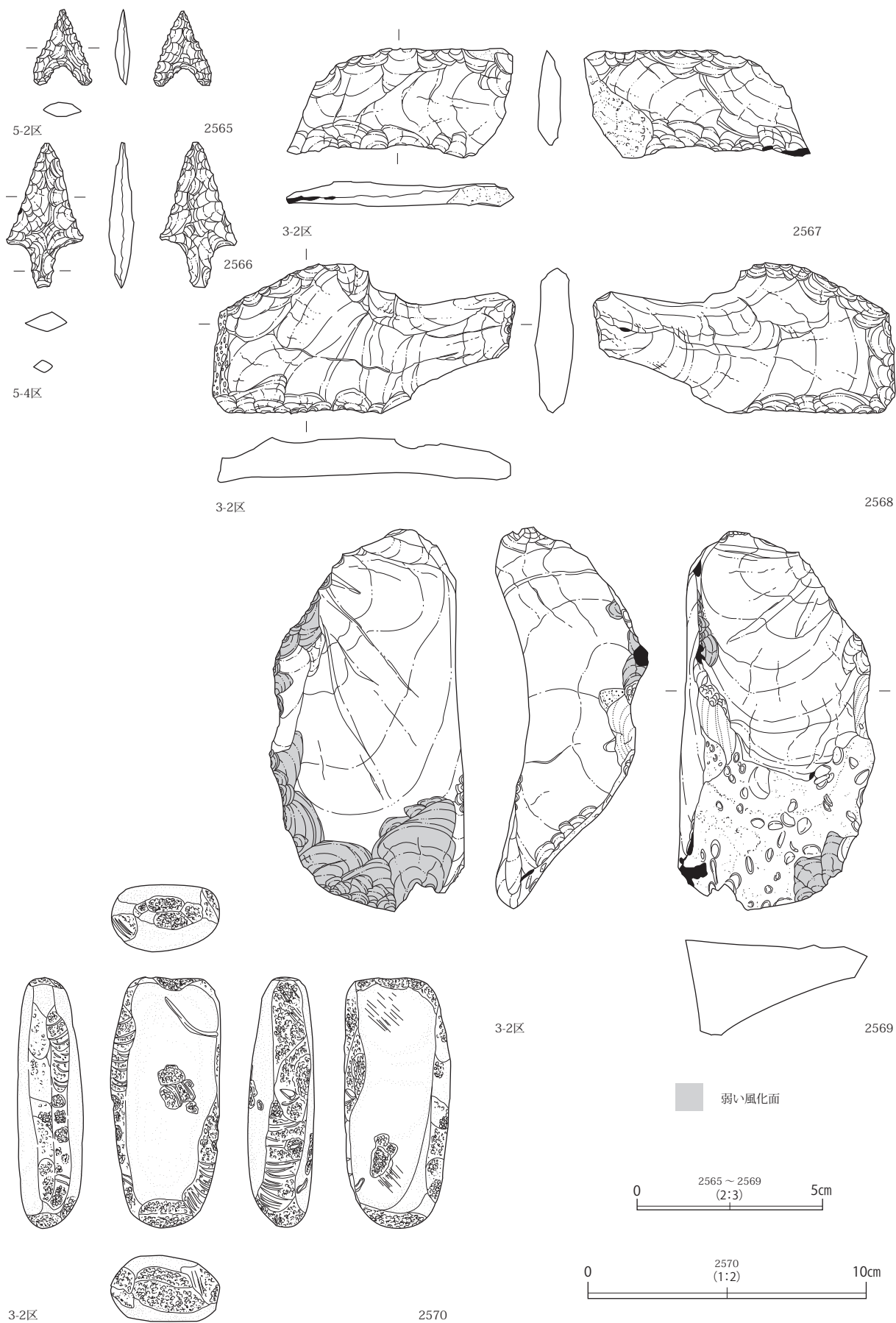


図473 第4b層 出土遺物

2571はスクレイパーで、石理に沿って平坦な横長の剥片を作出した後、打面側を連続的に加工し、刃部を形成しており、打面は完全に除去されている。素材剥片の末端は未調整であるがエッジが鋭く、微細剥離痕が見られることから、これも含めた両側縁を刃部として利用した可能性がある。

2573・2574は二次加工ある剥片である。2573は凝灰岩製である。右側面には折れ面形成後に敲打による剥離痕跡が認められるが意図的な二次加工ではない。表面下端部に数回の連続した二次加工があり、鋭い縁辺を作り出している。表面上端左側にはツブレがみられる。

2574は古い時代のサヌカイト剥片を利用して二次加工を施している。素材の打面形態は二次加工により不明である。背面は複数のネガティブな剥離痕で構成されている。剥片の打面側に連続的な二次加工を施しており、また末端には微細な剥離痕が連続的に認められることから末端側を刃部として使用していたものと思われる。

2575は礫端片を利用した剪断面ある楔形石器である。表面に複数の剥離痕が見られるが、裏面は素材面である自然面がほぼ残っている。表・裏面共に縁辺部はツブレと階段状剥離が全周に連続して見られるが、剪断面形成以後の剥離痕は認められない。

2576は扁平な原礫を素材としている。打撃の方向は全て石理に沿って進行している。また縁辺部は、両極打撃の際のツブレと階段状剥離がほぼ全周にみられる。

2577は石核である。表・裏面共に実測上の上から下へ石理に順目、および半順目で剥片を剥離している。さらに90°打点を移動させ、それに直交する向きで両側面から器面中央に向けて剥片を剥離している。ただし、後者の剥離は器面中央を越えない。

2578はサヌカイトの原石であろう。全面摩擦しており、エッジは丸みを帯びている。

2579は用途不明の粘板岩製の磨製石器である。欠損部分が多く全体像が不明であるが、残存している面は丁寧に研磨されている。右側面にも研磨は及んでおり、側面は丸みを帯びている。石棒の可能性もあるが不明である。

2580は砂岩製の敲石である。器面中央に敲打による浅い窪みがあり、縁辺は敲打によるツブレや断面V字状を呈する線状痕などが顕著である。

2581は砥石である。全面擦痕がみられる。表・裏面共に基軸と平行する方向に研磨による窪みが顕著に認められる。表裏面・両側面共に使用による擦り減りが著しい。上面には敲打痕が認められる。肌理は粗いので粗砥であろう。砂岩製である。

8. 第5面〔第6層上面〕遺構・第5層以下・側溝出土石器(図476)

第5面からはサヌカイト製打製石器が3点出土しており、内訳は石鏃1点、剥片1点、楔形石器1点である。全てが金山産サヌカイトと思われる。

また、第5～12層からはサヌカイト製打製石器が11点出土している。内訳は石鏃2点、二次加工ある剥片1点、剥片7点、楔形石器1点である。この内金山産サヌカイトは2点、全体の19%を占める。

2582～2584は石鏃である。2582は裏面中央に残る剥離面が主要剥離面の剥片素材である可能性が高いが、加工の進行により打面形態は不明である。先端部は折損しており、使用によるものと思われる。

2583は凸基式の石鏃である。剥片素材であり、表・裏面ともに縁辺部以外の器面調整はあまりなされておらず、素材面を多く残している。

2584は凹基式の石鏃で平面形態は五角形を呈している。剥片素材であり、表・裏面ともに縁辺部以外の器面調整はあまりなされておらず、素材面を多く残している。

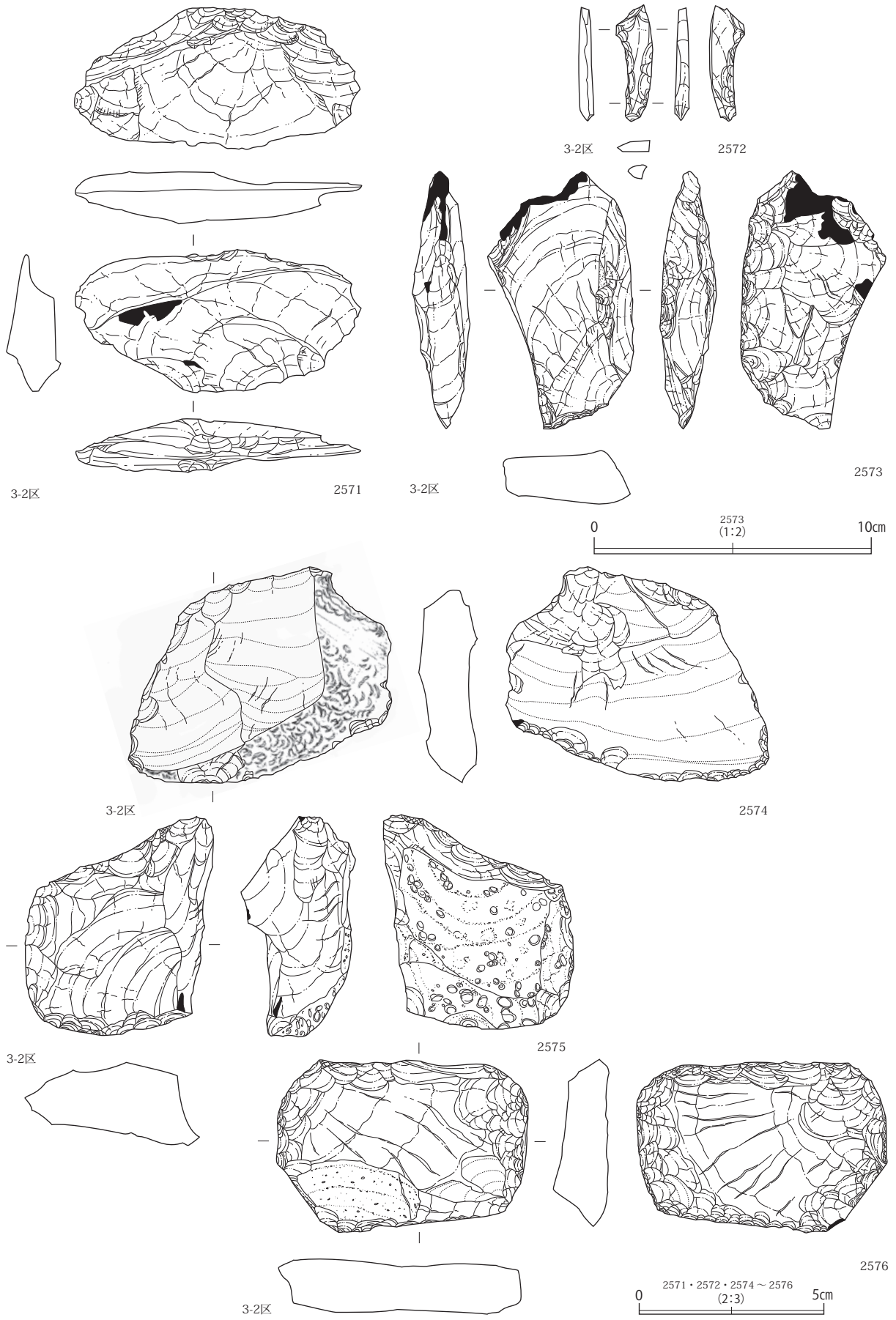


图474 第4c層 出土遺物(1)

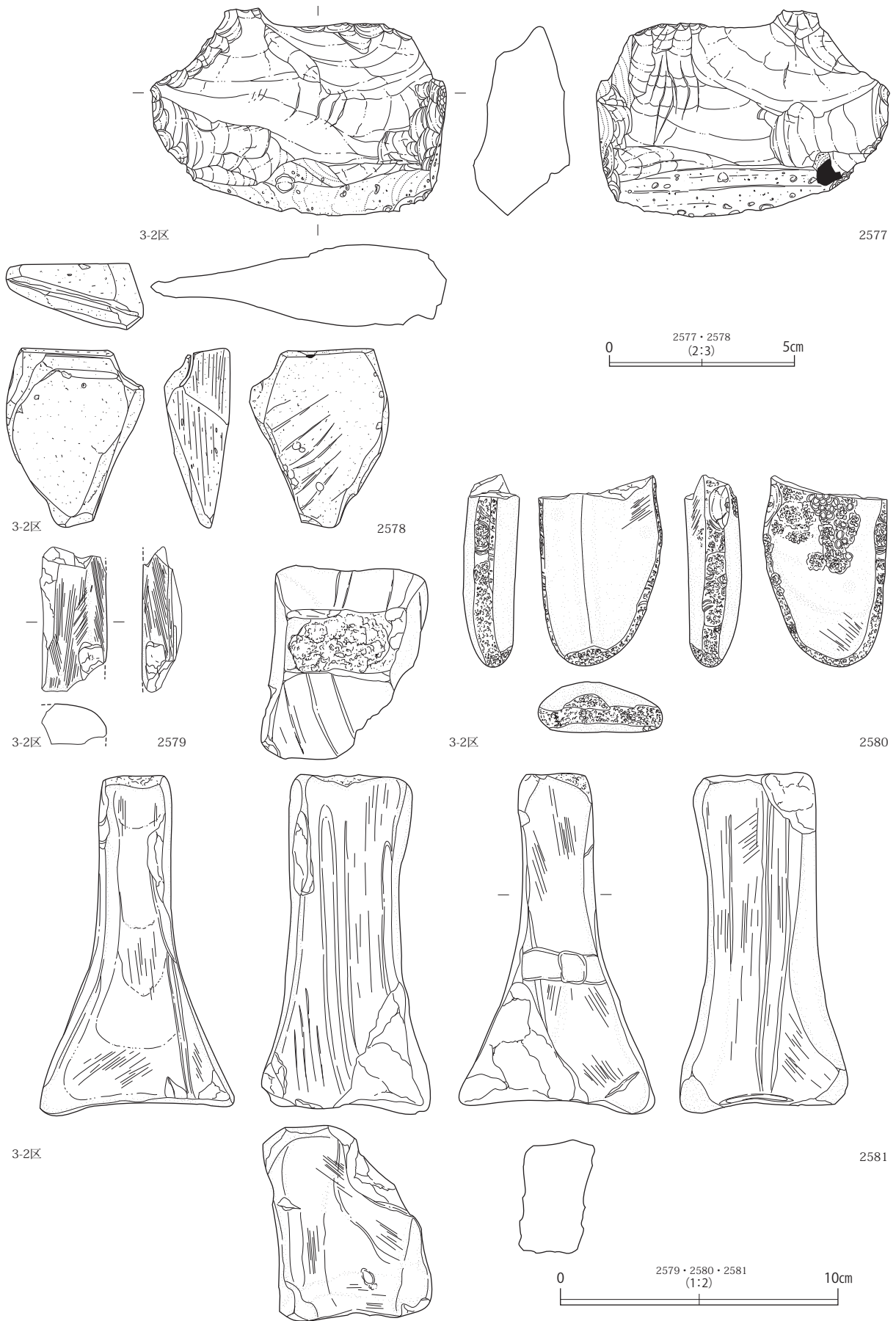


图475 第4c层 出土遗物(2)

2585・2586は風化の進んだ剥片である。

2586は順目で剥離された縦長剥片である。末端形状は著しいヒンジを呈している。

その他、時期不明のものとして側溝及び攪乱からサヌカイト製打製石器が10点(二次加工ある剥片1点、楔形石器1点、石核2点・剥片6点)出土している。この内、金山産サヌカイトは3点である。また、磨製中型尖頭器1点が出土している。

2588は石核である。大型の礫端片を利用し、石理に半順目で縦長の剥片を剥離している。その後、打点を半時計回りに約160°移動させ、剥離痕の末端側から石理に順目で剥片を剥離するも、力が末端まで及ばず、器面中央でステップ状の末端形状を持つ剥片が剥離されている。表面上方の剥離面は最初の縦長剥片剥離の際に同時に剥離したもので、その後打面が二次加工により除去されている。

2587は結晶片岩製の磨製中型尖頭器である。ほぼ全面に製作時の擦痕が見られる。有茎式であり、茎部は横方向に丁寧に研磨されており、刃部は刃と平行か、それより少し斜め方向に研磨されている。鑄はあまり鋭くなく若干丸みを帯びている。所属時期は不明である。(永田)

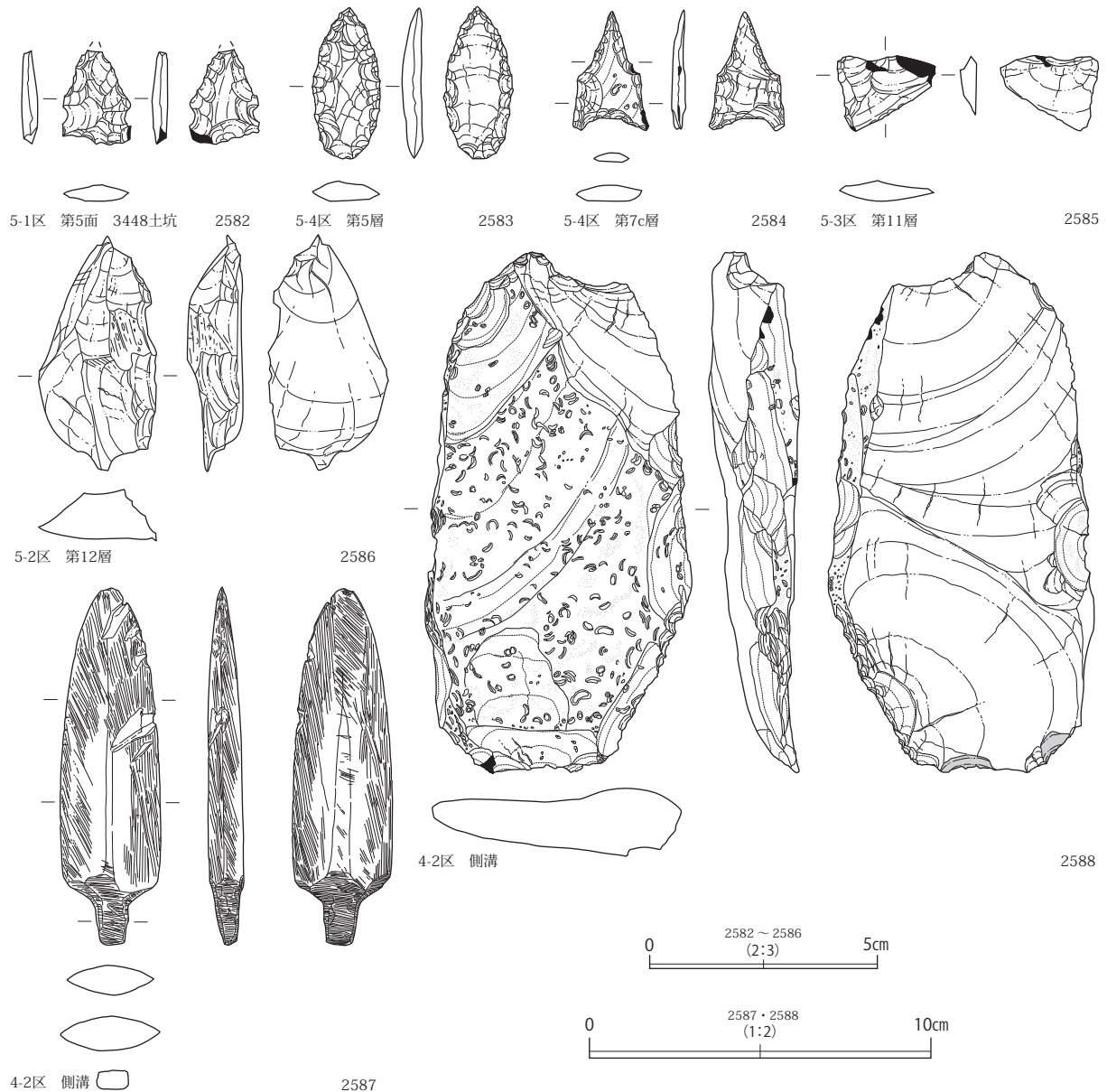


図476 第5面・第5～12層 側溝 出土遺物

表1 石器観察表(1)

番号	調査区	地区	遺構面 / 層位	遺構	器種	石材	法量				打面	背面	ハテナ	折損	備考
							長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)					
2427	3-2	60-9f	第2面	3436 溝	石匙	サヌカイト	3.24	4.28	0.77	7.11	ネガ・複		無	素材不明	
2428	3-2	60-9i	第2面	3416 溝	二次加工ある剥片	凝灰岩	6.30	(5.95)	0.85	35.14			有		
2429	5-1	50-9g	第2面	小溝群	石鏃	サヌカイト	2.91	2.12	0.57	2.75			無	無茎平基式 剥片素材か	
2430	3-2	60-9f	第2面	3404 溝	磨製石槍丁	凝灰岩か	5.35	(4.60)	0.75	25.74			有	直線刃半月形 刃部は面刃か 紐孔は1孔遺存	
2431	3-2	60-9f	第2面	3414 溝	石核	サヌカイト	9.50	6.31	3.90	244.93	ネガ・複	C	無	こぶし大サイズの礫 原礫素材	
2432	5-3	50-6f	第3層		石槍 (欠損品)	サヌカイト	(4.55)	2.40	0.71	7.36	ネガ・複		有	素材不明 折損後に鏃に転用	
2433	5-1	50-9f	第3層		石鏃	サヌカイト	4.65	2.38	0.57	4.64			無	有茎式 剥片素材か 側縁微細剥離により鋸歯縁状	
2434	3-2	60-8h	第3d層		スクレイパー	サヌカイト (金山)	4.40	5.90	0.61	15.19	平・複		無	剥片素材	
2435	3-2	70-2f	第3d層		スクレイパー	サヌカイト (金山)	6.71	10.44	1.65	96.86	平・単	A	無	剥片素材 礫端片利用	
2436	4-1	60-7e	第3層最下部		石核	サヌカイト	7.00	7.90	2.70	179.11	自	A	無		
2437	5-4	50-6i	第3c層		紡錘車か	角閃石黒雲母 花崗岩	5.00	(2.95)	2.20	41.01			有		
2438	5-4	50-5i	第3c層		丸槌	瑪瑙	(2.40)	(3.35)	0.70	6.68			有	垂孔が無いタイプ 裏面には2対1孔の溝り穴が3箇所あり	
2439	5-1	60-3f	第3層 ~4層		石核	サヌカイト (金山)	10.97	12.50	1.55	221.21	不明	A	有	剥片素材	
2440	3-2	60-3・4h	第3c層 ~4b層	北側溝	磨・蔽石	礫岩	6.90	6.40	5.15	339.44			無		
2441	5-2	60-2h	第3面	1020 溝	石匙	サヌカイト (金山)	5.77	(4.50)	0.55	18.67	平・単		有	剥片素材	
2442	5-1	60-1e	第3面	2793 溝	石鏃	サヌカイト	(2.37)	(1.37)	0.28	0.81	不明	A	有	無茎凹基式 欠損 素材不明	
2443	5-2	60-3・4h	第3面	1238 土坑	石鏃	サヌカイト	5.75	2.71	1.06	9.27	不明		有	素材不明	
2444	4-2	60-5h	第3面	1476 溝	楔形石器	サヌカイト	3.01	(3.45)	1.85	24.22	自	ネガ・複	有	1112と接合 素材不明 剪断面あり	
2445	4-2	60-5h	第3面	1476 溝	楔形石器	サヌカイト	2.75	(2.39)	0.90	4.80	自	平・単	有	1111と接合 素材不明 剪断面あり	
2446	5-1	50-10g	第3面	3044 ビット	大型蛤刃石斧基部か	閃緑岩か	(6.60)	4.25	2.90	126.63			有	折損後、蔽石に転用	
2447	5-4	50-8i	第3面	48 土坑	丸槌	瑪瑙	(2.40)	(3.00)	0.67	5.02			有	折損が著しく垂孔・溝り穴の有無不明	
2448	5-4	50-5h	第3面	117 溝	玉	石英	(1.40)	1.40	0.65	2.02			有	一部欠損するがほぼ完形	
2449	5-2	60-1i	第3面	1008 ビット	玉	石英	1.70	1.70	0.70	2.63			無		
2450	5-2	60-1i	第3面	1088 ビット	砥石 (金床石に転用か)	長石質砂岩	(8.50)	8.25	5.75	649.46			有	右側面の窪み及び割れ面に鉄鏃が陥入 表面及び右側面に被熱痕あり	

表2 石器観察表(2)

番号	調査区	地区	遺構面 / 層位	遺構	器種	石材	法量				打面	背面	ハテナ	折損	備考
							長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)					
2451	5-4		第3面	142ピット	砥石(仕上げ砥)	流紋岩質 凝灰岩	4.70	3.20	1.70	37.99			有	表裏面・両側面の4面使用 木口側には製作時の擦痕あり	
2452	5-4	50-5h	第3面	117溝	砥石(仕上げ砥)	流紋岩	5.80	3.90	(2.10)	57.07			有	表面・両側面の3面使用 裏面は剥落のため不明	
2453	5-4	50-5h	第3面	117溝	砥石(中砥か)	細粒黒雲母花 崗岩	2.90	(5.30)	(3.10)	58.82			有	石材の表面やや多孔質 本来は六角形を呈していたと思われる	
2454	5-2	60-2j	第3面	1015土坑	砥石(台石)	砂岩	(18.6)	10.50	10.90	2629.45			有	割れ面は被熱か(黒灰~淡赤紫色を呈する)	
2455	3-1	70-6g	第4a層		石鏃	サヌカイト	2.62	1.17	0.35	0.96			有	無茎凸基式 基部欠損 剥片素材か	
2456	5-1	60-1e	第4a層		石鏃	サヌカイト	(2.48)	(1.51)	0.41	1.17			有	無茎平基式 先端部欠損 素材不明	
2457	5-2	50-10h	第4a層		石匙	サヌカイト	3.45	(7.39)	0.90	21.14	自	自・単	有	礫端片利用 素材不明	
2458	4-2	60-4h	第4a層		スクレイパー	サヌカイト	6.50	3.90	1.00	22.69	不明	ネガ・複	無	剥片素材	
2459	4-1	60-4f	第4a層		スクレイパー	サヌカイト	9.56	(4.64)	1.67	49.68	点	自・単	無	剥片素材 礫端片利用 ハルプ発達	
2460	4-1	60-5f	第4a層		スクレイパー	サヌカイト	6.67	8.50	2.50	161.97	自	自・単	無	剥片素材 礫端片利用	
2461	1-1	70-10f	第4a層		稜形石器	サヌカイト	3.40	6.79	1.56	41.15	不明	ネガ・複	無	剥片素材	
2462	4-2	60-6j	第4a層		両面調整石器	サヌカイト	4.75	5.20	2.41	57.71		D	無	石核素材 礫端片利用 古い時代の石器利用	
2463	4-1	60-5g	第4a層		熱破砕片(石核)	サヌカイト	2.80	3.39	2.62	31.48			無	素材不明 上面亀裂あり 被熱 ポットリッド状破面	
2464	4-2	60-5i	第4a層		磨製石砲丁	泥質片岩か	(5.70)	(8.60)	0.75	42.17			有	外湾刃半月形 組は2孔	
2465	1-1	70-10f	第4a層		不明	凝灰岩	(7.20)	1.85	1.20	21.42			有	斜位・横位の擦痕あり	
2466	4-2	60-6h	第4a層		大型輪刃石斧	花崗岩	(4.00)	(4.10)	3.80	62.89			有	刃部のみ	
2467	4-1	60-5g	第4面	2528土坑	石鏃	サヌカイト(金山)	(1.39)	1.66	0.22	0.68	不明	ネガ	有	無茎凸基式か 基部のみ残存 素材不明	
2468	4-1	60-5g	第4面	2528土坑	石鏃	サヌカイト	(1.58)	(1.52)	0.28	0.55	不明		有	無茎凹基式 挟りあり 先端部折損 (使用時のものか) 素材不明	
2469	4-1	60-4g	第4面	2460溝	石鏃	サヌカイト	2.27	1.42	0.31	0.94	不明	平・単	無	無茎凹基式 剥片素材か	
2470	4-1	60-5g	第4面	2528土坑	石鏃	サヌカイト	2.18	1.72	0.27	0.91	不明	平・単?	無	無茎凹基式 剥片素材	
2471	4-1	60-5g	第4面	2416溝	石鏃	サヌカイト	2.09	1.36	0.23	0.51	不明		無	無茎凹基式 素材不明	
2472	4-1	60-5g	第4面	2460溝	石鏃	サヌカイト	2.29	(1.50)	0.42	1.01	不明		無	無茎凹基式 基部欠損 素材不明 白色風化	
2473	4-1	60-5g	第4面	2460溝	石鏃(欠損品)	サヌカイト	(2.15)	1.72	0.38	1.10	不明		有	無茎凹基式 先端部折損 素材不明 側縁歯状を呈する	
2474	4-1	60-5g	第4面	2460溝	石鏃	サヌカイト(金山)	(2.33)	1.86	0.30	1.17	不明	ネガ・単	有	無茎凹基式 先端部折損 素材不明	
2475	4-1	60-5g	第4面	2528土坑	石鏃	サヌカイト(金山)	2.85	1.95	0.42	1.50	不明		無	無茎凹基式 基部若干欠ける(新欠) 素材不明	
2476	4-1	60-5g	第4面	2460溝	石鏃	サヌカイト	(3.70)	(2.19)	0.61	3.95	不明	ネガ・単	有	無茎凹基式 剥片素材 先端部若干折損	

表3 石器観察表(3)

番号	調査区	地区	遺構面 / 層位	遺構	器種	石材	法量				打面	背面	ハテナ	折損	備考
							長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)					
2477	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	石鏃	サヌカイト	2.63	1.36	0.40	1.05	不明	平・単?		無	無茎凹基式 扶りあり 素材不明
2478	5-2	60-2j	第4面	1765 溝	石鏃	サヌカイト(金山)	(3.22)	1.42	0.31	1.17	不明			有	無茎凹基式 扶りあり 先端部折損 素材不明
2479	4-1	60-5e	第4面	2485 溝	石鏃	サヌカイト(金山)	4.50	2.13	0.54	4.42	不明	ネガ・複?	A	無	無茎平基式 素材不明
2480	3-2	60-9h	第4面	3698 土坑	石鏃	サヌカイト(金山)	(4.35)	2.36	0.40	4.06	不明	平・単		有	無茎凹基式 素材不明(剥片素材か) 先端部折損(使用時のものか)
2481	3-2	60-9h	第4面	3698 土坑	石鏃	サヌカイト(金山)	4.42	(2.41)	0.55	5.36	不明	ネガ・複		有	未成品 素材不明(剥片素材か)
2482	3-2	60-9f	第4面	3638 土坑	石鏃	サヌカイト(金山)	2.21	0.89	0.35	0.73	不明			無	素材不明 回転痕あり
2483	4-2	60-5h	第4面	1553 土坑	石鏃	サヌカイト	2.79	0.95	0.65	1.69	不明	自・複			剥片素材
2484	4-2	60-5h	第4面	1553 土坑	石鏃	サヌカイト	2.63	1.83	0.43	1.78	不明	ネガ・単		無	素材不明(剥片素材か) 錐部2箇所あり
2485	4-1	60-5g	第4面	2529 土坑	石鏃	サヌカイト	2.78	1.51	0.70	2.40	不明	自・複		無	剥片素材
2486	4-1	60-5g	第4面	2529 土坑	石鏃	サヌカイト	(4.41)	1.68	0.84	6.44	不明	平・単?		無	剥片素材 光沢面あり 被熱か
2487	5-2	60-2j	第4面	1766 溝	石鏃	サヌカイト	4.93	2.23	1.15	12.23	不明	自		無	礫端片利用 垂直割れ 原礫素材か 剥片素材 側面自然面あり 著しい白色風化 鋸向剥離
2488	3-2	60-9f	第4面	3638 土坑	削器	サヌカイト	1.29	4.35	0.40	2.46	不明	平・複		無	
2489	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	スクレイパー	サヌカイト(金山)	3.77	5.20	1.05	15.92	線	ネガ・複		無	
2490	4-1	60-5g	第4面	2583 土坑	スクレイパー	サヌカイト(金山)	(5.86)	4.27	0.63	15.66	不明	ネガ・複		有	
2491	4-1	60-5g	第4面	2583 土坑	スクレイパー	サヌカイト	6.30	6.39	1.05	29.09	自	ネガ・複		無	2側面自然面あり
2492	3-2	60-10g	第4面	3504 溝	スクレイパー	サヌカイト(金山)	5.19	6.54	1.27	46.57	不明	自・複		無	欠損 剥片素材 被熱 ポットリット状破面
2493	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	スクレイパー	サヌカイト(金山)	4.80	6.99	0.86	31.13	不明	ネガ・複		無	剥片素材 被熱 ポットリット状破面
2494	3-2	60-9e	第4面	3634 土坑	スクレイパー	サヌカイト	4.53	3.83	1.40	25.57	自	ネガ・複		無	剥片素材 2側面自然面
2495	5-1	60-1g	第4面	1964 土坑	スクレイパー	サヌカイト	5.24	8.50	1.82	76.44	不明	自・単		無	剥片素材 礫端片利用
2496	3-2	60-8e	第4面	3748 ビット	スクレイパー	サヌカイト(金山)	4.12	4.49	1.18	19.58	不明	平・複		無	剥片素材 表・裏面亀裂あり 被熱 ポットリット状破面
2497	3-2	60-9h	第4面	3603 土坑	楔形石器	サヌカイト	4.27	(3.45)	0.87	10.96	不明	ネガ・複	C	有	剥片素材 剪断面あり 2側面自然面 古い時代の石器利用
2498	3-2	60-9h	第4面	3603 土坑	楔形石器	サヌカイト	3.41	(2.55)	0.84	7.67	不明	ネガ・複		無	素材不明 側面自然面
2499	3-2	60-9h	第4面	3603 土坑	楔形石器	サヌカイト	3.71	2.33	1.08	7.91	不明	ネガ・複	C	有	剥片素材 剪断面あり 古い剥離面あり
2500	3-2	60-9e	第4面	3634 土坑	楔形石器	サヌカイト	4.09	2.21	0.79	7.68	不明	ネガ・複		無	裏面左辺に押圧剥離 素材不明 剪断面あり
2501	3-2	60-9e	第4面	3634 土坑	楔形石器	サヌカイト	5.04	2.65	0.92	12.28	不明			無	素材不明

表4 石器観察表(4)

番号	調査区	地区	遺構面 / 層位	遺構	器種	石材	法量				打面	背面	ハテナ	折損	備考
							長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)					
2502	3-2	60-9h	第4面	3695 土坑	楔形石器	サヌカイト	4.00	5.61	1.34	37.31	不明			素材不明(原礫素材か) 礫端片利用 剪断面あり	
2503	3-2	60-9f	第4面	3638 土坑	楔形石器	サヌカイト	4.60	3.52	1.71	36.80	不明	自		素材不明	
2504	3-2	60-8e	第4面	3679 土坑	楔形石器	サヌカイト	3.63	3.84	1.43	20.48	不明	ネガ・複		剥片素材	
2505	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	楔形石器	サヌカイト	4.41	7.01	1.61	53.16	線か	自		素材不明	
2506	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	楔形石器	サヌカイト	3.28	2.61	1.31	11.26	線か	ネガ・複		素材不明 剪断面あり	
2507	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	楔形石器	サヌカイト	3.39	3.60	0.60	8.42	自	ネガ・複		剥片素材	
2508	4-1	60-5g	第4面	2529 土坑	楔形石器	サヌカイト	2.73	2.31	0.58	3.90	線	ネガ・複		素材不明	
2509	4-1	60-6f	第4面	2453 土坑	楔形石器	サヌカイト	2.91	(2.35)	1.05	4.95	線	ネガ・複		剥片素材(おそらく両極) 主要剥離面平坦 剪断面あり	
2510	4-2	60-6h	第4面	1744 ビット	楔形石器	サヌカイト	(5.08)	3.79	0.85	15.75	不明		A	素材不明 側面自然面	
2511	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	楔形石器	サヌカイト	4.45	5.21	1.68	36.50	自か	自		素材不明	
2512	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	楔形石器	サヌカイト(金 山か)	4.73	5.12	1.53	31.82	自			素材不明	
2513	4-1	60-5g	第4面	2460 溝	楔形石器	サヌカイト	4.90	3.28	1.63	31.33	線	ネガ・複		剥片素材 側面自然面	
2514	4-2	60-4g	第4面	1518 ビット	剥片	サヌカイト	3.50	2.05	1.19	9.73				無 1113 と接合 被熱 ポットリット状破面	
2515	4-1	60-5g	第4面	2529 土坑	楔形石器	サヌカイト	3.55	4.07	2.10	34.33				無 1114 と接合 被熱 ポットリット状破面 自然面あり	
2516	4-1	60-5g	第4面	2583 土坑	楔形石器	サヌカイト	5.71	5.40	0.83	29.00	自	ネガ・複		無 1110 と接合 剥片素材	
2517	4-1	60-5g	第4面	2583 土坑	剥片(両極)	サヌカイト	2.96	2.60	0.33	2.12	線	自・複		無 1109 接合	
2518	3-2	60-8h	第4面	3599 土坑	二次加工ある剥片	サヌカイト(金 山)	7.98	9.57	0.92	53.93	線	ネガ・複		無 背面・腹面つぶれあり 側面自然面 微細剥離あり	
2519	3-2	60-9h	第4面	3603 土坑	二次加工ある剥片 (右礫未製品か)	サヌカイト	(3.28)	2.53	0.65	4.80	線	ボジ・単		有 両極の剥片素材 自然面あり	
2520	4-1	60-5g	第4面	2583 土坑	二次加工ある剥片	サヌカイト	(3.36)	2.53	0.59	5.15	不明	ネガ・複		有 剥片素材 石礫未成品か 欠損品	
2521	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	二次加工ある剥片 (石礫未製品か)	サヌカイト	3.23	2.17	0.55	3.91	不明	自・複	B	無 石礫未成品 古い時期の石器利用	
2522	4-1	60-5g	第4面	2529 土坑	二次加工ある剥片	サヌカイト	2.53	1.52	0.48	1.77	不明	ボジ・単		無 剥片素材 側面自然面あり	
2523	4-1	60-5g	第4面	2529 土坑	二次加工ある剥片	サヌカイト	4.79	3.93	1.90	33.02				無 被熱 ポットリット状破面あり 表面亀裂あり	
2524	5-1	60-2g	第4面	1765 溝	二次加工ある剥片	凝灰岩	8.10	(5.10)	0.65	28.30				有 裏面中央部に平滑面あり	
2525	3-2	60-8i	第4面	3563 土坑	熱破砕片	サヌカイト	4.77	3.67	2.64	47.46			Cか	無 全面被熱による剥離 上面白色風化 ポットリット状破面あり	
2526	4-1	60-5f	第4面	2567 溝	二次加工ある剥片	紅礫石片岩	(3.10)	(12.7)	0.50	27.48					
2527	3-2	60-9g	第4面	3504 溝	剥片(両極)	サヌカイト	6.57	2.98	1.31	23.93	線	自・平・複		無 微細剥離あり	

表5 石器観察表(5)

番号	調査区	地区	遺構面 / 層位	遺構	器種	石材	法量				打面	背面	ハテ イナ	折損	備考
							長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)					
2528	4-1	60-5g	第4面	2460 溝	剥片 (両極)	サヌカイト(金山)	5.29	2.21	0.53	6.89	ネガ・複		無		
2529	3-2	60-8i	第4面	3561 土坑	剥片 (両極)	サヌカイト	3.38	2.85	0.79	9.98	自・複		無	剪断面あり	
2530	3-2	60-8e	第4面	3679 土坑	剥片 (両極)	サヌカイト	3.61	1.42	0.30	1.23	ネガ・単		無	側面同時割れ	
2531	3-2	60-9h	第4面	3603 土坑	剥片 (両極)	サヌカイト	(2.49)	2.12	0.50	2.64	平・単		有	側面自然面	
2532	3-2	60-9e	第4面	3634 土坑	剥片 (両極)	サヌカイト	2.26	(2.23)	0.43	2.08	ネガ・単		有		
2533	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	剥片 (両極)	サヌカイト	4.10	2.41	0.46	2.61	ネガ・複		無	側面同時割れ	
2534	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	剥片 (両極)	サヌカイト	2.45	1.23	0.45	1.03	ネガ・複		無		
2535	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	剥片 (両極)	サヌカイト	8.49	5.01	2.41	83.84	ネガ・複	C	無	古い剥離面あり	
2536	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	剥片 (両極)	サヌカイト	1.75	3.21	0.33	1.78	ネガ・複		無	バルブ発達 円錐体2箇所あり	
2537	5-1	60-2e	第4面	1766 溝	剥片 (両極)	サヌカイト	(4.05)	2.94	0.65	8.30	平・複		無	被熱	
2538	4-2	60-4h	第4面	1491 土坑	石核	サヌカイト	8.79	5.88	2.64	138.30			無	礫端片利用 原礫素材 自然面あり	
2539	3-2	60-10g	第4面	3505 溝	石核	サヌカイト	7.48	6.31	2.70	143.04		C	無	両極か 素材不明 原礫素材か? 古い剥離面あり	
2540	3-2	60-9f	第4面	3631 落ち込み	原石	サヌカイト	5.09	7.50	2.47	109.19			無	1116 と接合 礫端片素材 白色風化 自然割れか	
2541	3-2	60-9f	第4面	3638 土坑	原石	サヌカイト	4.75	7.50	2.11	76.41	自・単		無	風化激しい 1115 と接合 礫端片素材 白色風化 自然割れか	
2542	4-1	60-7e	第4面	2424 土坑	原石	サヌカイト	7.12	3.63	2.26	72.67			無	全面風化面	
2543	4-2	60-6i	第4面	1554 土坑	大型輪刃石斧	凝灰岩	(8.00)	5.80	4.50	258.73			有		
2544	3-2	60-9h	第4面	3504 溝	大型輪刃石斧	凝灰岩	(6.20)	7.15	4.40	303.25			有	折損後、磨・敲石に転用か	
2545	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	石苞丁	凝灰岩	6.60	(8.50)	0.80	54.12			有	外湾刃半月形 刃部打製 紐孔は1孔遺存	
2546	5-2	50-9h	第4面	2035 流路	石苞丁	頁岩	5.00	(9.40)	0.80	51.06			有	紡錘形 片刃 紐孔は2孔 剥落著しい	
2547	4-1	60-5g	第4面	2528 土坑	不明	結晶片岩	7.05	1.05	0.70	7.56			無	中央部は粗い研磨のままで、周辺は丁寧に研磨する。	
2548	4-2	60-7h	第4面	1578 土坑	紡錘車未成品	緑色片岩	4.90	5.00	0.45	21.77			有		
2549	5-1	60-1e	第4面	1766 溝	紡錘車	結晶片岩	5.20	(4.75)	-0.35	9.79			有	中央にφ0.8cmの軸孔あり 剥落著しい	
2550	5-4	50-6i	第4面	2087 溝	砥石(仕上げ砥)	流紋岩質 凝灰岩	(5.50)	3.30	1.75	49.46			有	表裏面・両側面の4面使用	
2551	4-2	60-7i	第4面	1720 土坑	砥石	凝灰岩か	12.40	(5.25)	1.80	133.84			有		
2552	5-2	60-2h	第4面	1765 溝	砥石	砂岩	10.00	9.40	4.95	573.50			無	表裏面及び左右両側面を使用 若干欠損	
2553	3-2	60-8i	第4面	3533 溝	磨・敲石類	砂岩	14.40	5.00	4.20	546.64			無		
2554	3-2	60-8i	第4面	3573 溝	敲石	砂岩	13.15	5.30	3.70	368.15			無		
2555	5-2	60-2j	第4面	1765 溝	敲石	凝灰岩か	16.40	(5.20)	3.20	328.00			有		
2556	5-2	50-9j	第4面	2035 流路	敲石	砂岩	16.30	7.00	3.80	598.42			無	磨製石斧の転用品か	

表6 石器観察表(6)

番号	調査区	地区	遺構面 / 層位	遺構	器種	石材	法量				打面	背面	パテナ	折損	備考
							長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)					
2557	3-2	60-9f	第4面	3638 土坑	台石類	砂岩	9.40	4.75	1.90	136.41			無		
2558	3-2	60-8f	第4面	3653 溝	台石兼蔽石	砂岩	10.00	6.70	3.00	251.28			無		
2559	5-2	50-9j	第4面	2035 流路	台石類	砂岩	(6.90)	5.35	2.50	142.76			有		
2560	3-2	60-8g	第4面	3597 土坑	蔽石・台石	花崗岩	8.35	9.30	5.80	606.72			無		
2561	3-2	60-8h	第4面	3599 土坑	台石類	砂岩	10.90	5.40	3.05	324.49			無		
2562	5-1	60-2g	第4面	3633 土坑	不明	結晶片岩	7.10	7.30	2.65	172.22			無	用途不明	
2563	3-2	60-9f	第4面	3638 土坑	不明	結晶片岩	7.10	13.05	0.90	119.09			有		
2564	3-2	60-10e	第4面	3504 溝	凹み石	砂岩	9.35	4.80	2.30	132.81			無	周縁部は著しいツブシ	
2565	5-2	50-9i	第4b層		石鏃	サヌカイト	2.01	1.55	0.32	0.62			無	無茎凹基式 素材不明 両側縁は鋸歯状を呈する	
2566	5-4	50-6i	第4b層		石鏃	サヌカイト	3.87	2.04	0.66	2.89			有	有茎式 素材不明 先端部若干欠ける	
2567	3-2	60-8e	第4b層		石小刀	サヌカイト(金山)	(5.10)	2.98	0.63	13.08		ネガ・複	有	欠損 剥片素材 上面自然面	
2568	3-2	60-8g	第4b層		楔形石器	サヌカイト	4.00	8.10	1.05	39.15		ネガ・複	無	剥片素材 2側面自然面あり	
2569	3-2	60-8e	第4b層		石核	サヌカイト	9.28	7.50	3.42	185.61		ネガ・単	無	両極か 剥片素材 自然面あり 古い時期の石器を利用	
2570	3-2	60-8g	第4b層		蔽石	砂岩	9.95	3.85	2.40	130.28			無		
2571	3-2	60-9g	第4c層		スクレイパー	サヌカイト(金山)	6.40	5.69	1.36	28.75		平・複	無	剥片素材 微細剥離あり	
2572	3-2	60-9g	第4c層		石錐	サヌカイト(金山)	(3.09)	0.99	0.34	0.95		平・単	有	剥片素材 腹面は平・単 上面折損	
2573	3-2	60-8e	第4c層		二次加工ある剥片	凝灰岩か	9.30	5.25	1.90	72.22			有	石包丁の原材か	
2574	3-2	60-8i	第4c層		二次加工ある剥片	サヌカイト	5.80	7.10	1.83	72.49		自・複	無	古い時代の石器利用	
2575	3-2	60-9g	第4c層		楔形石器	サヌカイト	5.26	4.75	2.30	71.60		ネガ・複	有	素材不明 剪断面あり 礫端片利用	
2576	3-2	60-8e	第4c層		楔形石器	サヌカイト	4.57	6.77	1.70	73.20		自・ネガ・単	無	原礫素材 自然面あり	
2577	3-2	60-8h	第4c層		石核	サヌカイト	5.31	7.95	2.95	128.65		自・ネガ・単	無	両極か 素材不明(原礫素材?) 自然面あり	
2578	3-2	60-9g	第4c層		蔽石	サヌカイト	4.83	3.74	0.67	29.72			無	全面風化	
2579	3-2	60-8h	第4c層		不明	結晶片岩	(5.20)	(2.40)	(1.45)	21.91			有	磨製	
2580	3-2	60-8f	第4c層		蔽石	砂岩	(6.80)	4.35	1.85	76.82			有	上部欠損	
2581	3-2	60-8h	第4c層		蔽石	砂岩 (凝灰質)	12.25	6.05	7.00	338.76			有	4面使用 木口側の折れ面には蔽打痕あり	
2582	5-1	60-1g	第5面	3448 土坑	石鏃	サヌカイト(金山)	(2.00)	(1.47)	0.29	0.85			有	無茎平基式か 剥片素材か	
2583	5-4	50-1i	第5層		石鏃	サヌカイト	3.26	1.43	0.40	2.08		ネガ・単	無	無茎凸基式 素材不明	

表7 石器観察表(7)

番号	調査区	地区	遺構面 / 層位	遺構	器種	石材	法量				打面	背面	パティイナ	折損	備考
							長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)					
2584	5-4	5o-1h	第7c層		石鏃	サヌカイト (金山)	(2.59)	(1.63)	0.30	0.98	不明	自・単		無	無茎凹基式 剥片素材 基部折損 自然面 (古い剥離面か) あり
2585	5-3	5o-3f	第11層		剥片	サヌカイト	1.62	(2.10)	0.46	0.96	単	平・単		無	
2586	5-2	5o-10i	第12層		剥片	サヌカイト	5.10	2.63	1.30	13.64	単	平・自・複		無	
2587	4-2			西側溝南	有茎磨製中型 尖頭器	泥質片岩	10.4	2.90	1.00	36.19				無	身と茎で研磨に違いあり
2588	4-2			南側溝西	石核	サヌカイト	15.23	7.81	2.05	279.41	自	自・ネガ・単	D	無	素材不明 礫端片利用

※ パティイナの種類 A: 風化した青灰色の剥離面と更に新しい若干風化した灰黒色の剥離面を併せもつもの (二重パティイナ)

B: 二段階の風化した青灰色の剥離面をもつもの (二重パティイナ)

C: 灰白色に近い古い剥離面と更に新しい風化した青灰色の剥離面を併せもつもの (二重パティイナ)

D: 三段階の剥離面をもつもの (A+B+A+C) (三重パティイナ)

※ 法量の項目における () 付の数値は残存値である。

整理の段階で、以下の方々からご教示・ご協力を得た。末筆ではあるが、記して感謝の意を表します。

(敬称略・順不同 所属は2008年当時)

石神幸子((財)大阪府文化財センター) 上峯篤史(同志社大学大学院博士課程) 絹川一徳((財)大阪市文化財協会 真田陽平(関西学院大学)

菅榮太郎(学校法人 武庫川学院 経理部 研究活性化支援課) 安富匠彦(奈良大学) 小倉徹也((財)大阪市文化財協会) 川端清司(大阪市立自然史博物館)

[参考文献]

佐原真 1964 「石器」・「石製武器の発達」『紫雲出』詫間町教育委員会

森本六爾 1934 「石丁の諸形態と分布」『考古学評論』

(財)大阪府文化財センター編 1997 『池上遺跡 第3分冊の2 石器編』

竹岡俊樹 1989 『石器研究法』言叢社

絹川一徳 2005 「1章2節 最終氷期の頃の長原」『平野区誌』平野区誌刊行委員会

岡村道雄 1976 「ピエス・エスキューについて」『東北考古学の諸問題』葦栗社、pp.77-96

上峯篤史 2006 「両極打法による剥片剥離実験 - 異種剥離方法の同定を基礎とした資料体作成にむけて -」『旧石器考古学』68 旧石器文化談話会、pp.17-27

松田順一郎 1999 「鞍形両極石核の分割に関する実験 - 縄文時代晩期サヌカイト製打製石鏃製作技術の復元に向けて -」『光陰如矢』刊行会、pp.113-134

吉村駿吾 2006 「縄文時代における近畿地方の金山産サヌカイト - 滋賀県守山市千代北遺跡の資料を中心に -」『考古学に学ぶ (Ⅲ)』(同志社大学考古学シリーズIX)、同志社大学考古学シリーズ刊行会、pp.97-110

第Ⅵ章 08－1 調査の成果

08－1 調査は、平成17年より開始された05－1・05－2 調査の中で、諸条件によって未調査となっていた箇所について行ったものである。

なお、調査区は第1分冊に掲げた図2に示したように、東側から1区(575㎡)、2区(875㎡)、3区(35㎡)の3調査区に分かれており、工程上3区→1区→2区の順に調査を行った。現地調査は平成20年5月8日に着手し、途中、事業契約の変更を経て、同年9月22日に調査を完了した。

第1節 1区の成果

1. 基本層序(図477・478 図版143)

1区は、池内遺跡のほぼ中央部に位置する調査区であり、05－1－8区内に位置する。現地表面の標高は10m前後を測る。調査は現代耕作土層である第1層まで、バックホーによる掘削を行い、以下の地層については、人力によって1層ずつこれを除去し、遺構面の検出に努めた。遺構面については、調査区付近で行われている既往の調査成果に従い、第1面(第2層下面〔第3層上面〕)、第2面(第3層下面〔第4a層上面〕)を調査したほか、地層の遺存状態が良好であったことから、第3面(第4a層下面〔第4b層上面〕)、第4面(第4b層下面〔第5層上面〕)をこれに加え、合計4面の遺構面について平面調査を実施した。なお、05－1 調査で実施した第5面(第9層上面)は、遺構・遺物ともに僅少であったことから、今回は調査を行っていない。

以下に1区における堆積地層の概要を述べる。なお、地層の確認については、調査区の東・南壁面を用いて行い、図477・478にこれを掲げた。

第0層

現代盛土である。層厚は平均1m弱を測る。

第1層

現代耕作土層である。第0層以前に堆積したもので、層厚は平均約0.2mを測る。

第2層

耕作土層である。部分的にしか遺存しておらず、主に標高の低い西側を中心に0.05m程度残存するのみである。包含する遺物に備前摺鉢や肥前磁器を含むことから近世に形成された地層と考えられる。

第3層

耕作土層である。4層程度に細分できるが、調査時には一括して掘削を行った。層厚は0.3mを測る。最下部からは12～13世紀の瓦器椀が出土するほか、上部では14～15世紀の瓦質土器が出土することから、中世前期～中世後期にかけて形成された地層と考えられる。

第4層

第4a層・第4b層の2層に大別できる。

第4a層は攪拌を強く受けていないが、耕作土層と考えられ、層厚は0.1m強を測る。オリブ褐色の粘質シルトで、淘汰は極めて良い。調査区全体に残存している。平安時代末の黒色土器椀、6世紀前葉の須恵器を含むことから、平安時代に形成された地層と考えられる。

第4b層は第5層を母材として形成された土壌層である。暗オリブ褐色の砂質シルトで、淘汰はや

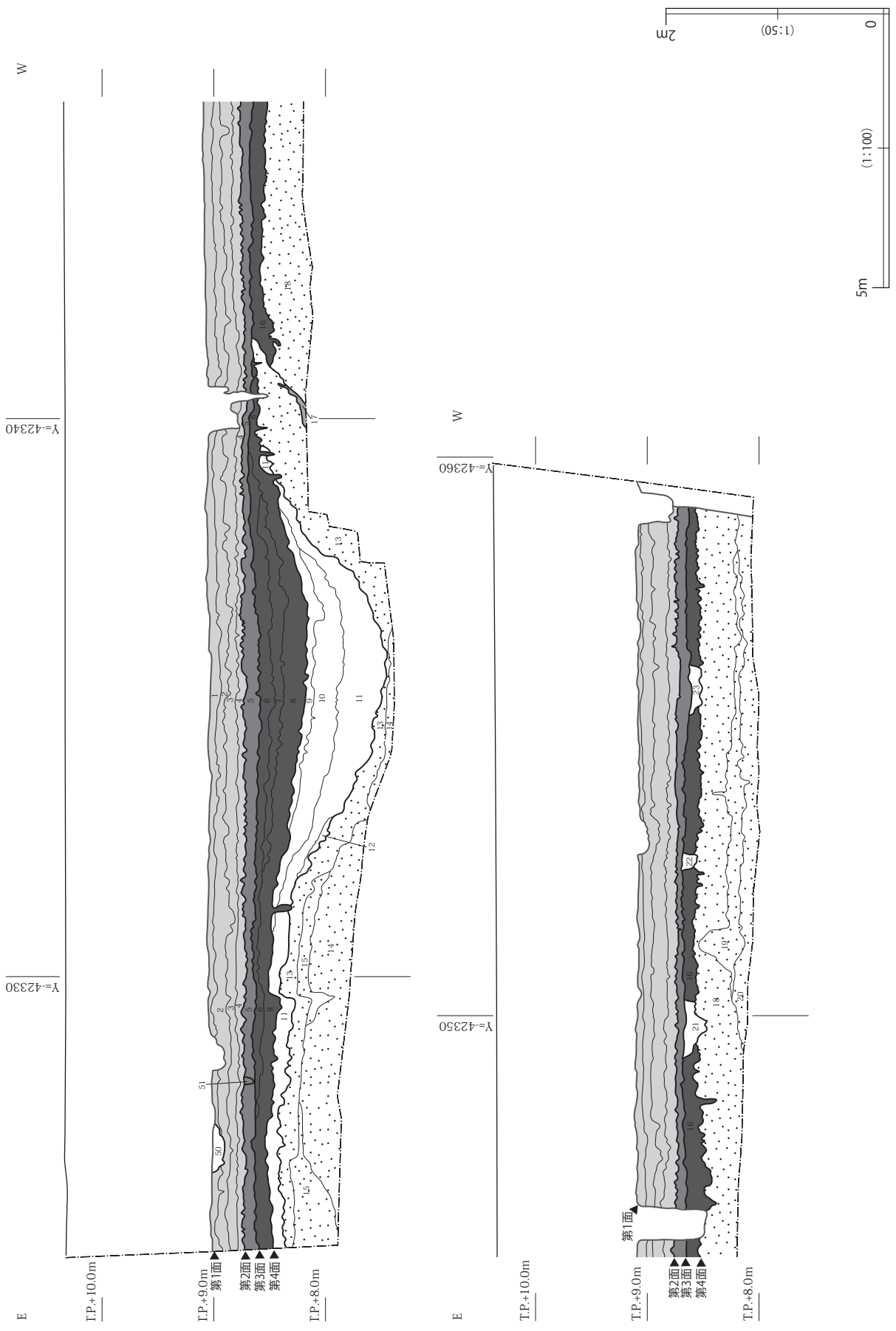
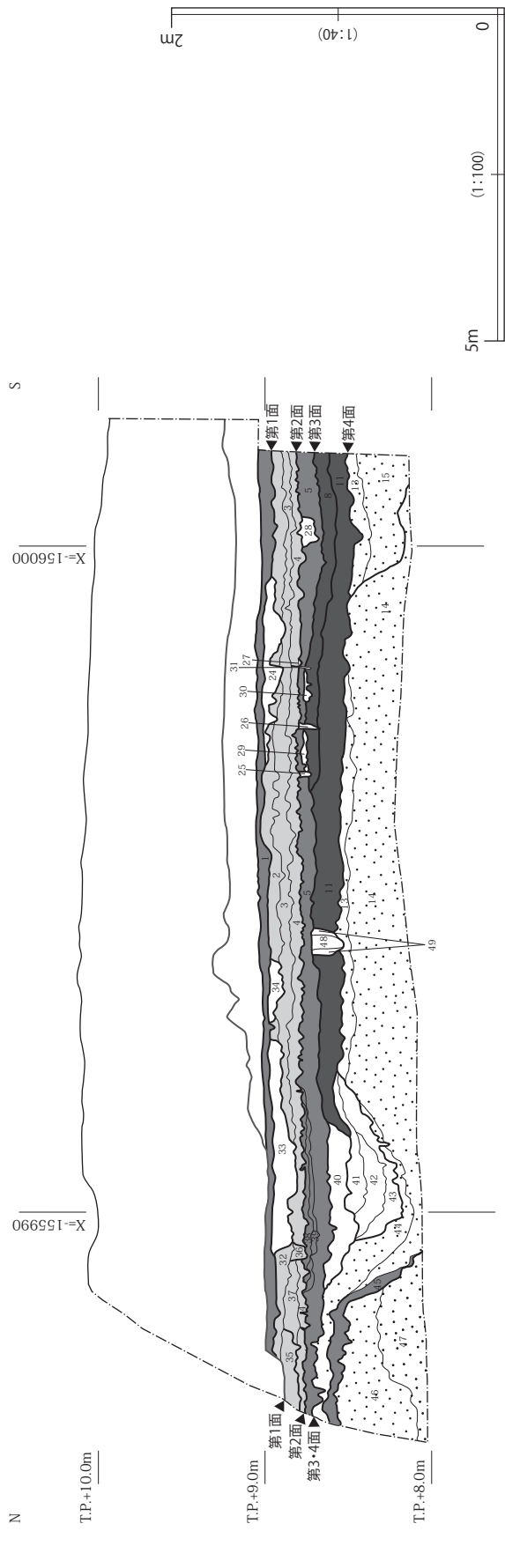


图477 1区南壁断面图



- 108-1-1区 壁面断面土色)
- 1 暗オリーブ 5Y4/3 極細砂 細砂を少量含む マンガン沈着 [第1層] (現代耕作土層)
 - 2 灰オリーブ 5Y4/2 砂質シルト 極粗砂を少量含む マンガン沈着 [第2層] (耕作土層)
 - 3 灰 5Y5/1 砂質シルト 中礫を少量含む 細礫を少量含む 2層上りも粘性強い、瓦器破片を含む [第2層] (耕作土層)
 - 4 黄灰 2.5Y5/1 粘質シルト 粗砂～極粗砂を少量含む マンガン沈着 [第2層] (耕作土層)
 - 5 オリーブ褐 2.5Y4/3 粘質シルト 海汰良い、下面は均質な平坦面を形成 攪拌を受ける [第4a層] (耕作土層)
 - 6 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 粘質シルト 細砂を少量含む [第4b層] (土壌層)
 - 7 黄灰 2.5Y4/1 砂質シルト～極細砂 細砂～中砂を少量含む 上位の6より粘性強い [第4b層] (土壌層)
 - 8 褐灰 10YR4/1 粘質シルト 海汰良い、乾燥により上位の7が縦筋に退入 [第4b層] (土壌層)
 - 9 灰黄褐 10YR4/2 粘質シルト～砂質シルト 8よりしまり悪い、植物遺体の薄層を多く含む [第4面検出遺構] [63周溝埋土 水成層]
 - 10 にぶい黄褐 10YR4/3 粘質シルト 最下部は第5層を多く含む [第4面検出遺構] [63周溝埋土 水成層]
 - 11 黒 10YR2/1 粘質シルト 固結 [第4面検出遺構] [63周溝埋土]
 - 12 土器片を少量含む 固結 [第4面検出遺構] [63周溝埋土]
 - 13 暗灰黄 2.5Y4/2 極細砂～細砂 部分的に11層の影響を受け、粘質シルトが混じる [第4面検出遺構] [63周溝埋土 加工時形成層]
 - 14 にぶい黄 2.5Y6/3 中砂 海汰良い [第5層] (水成層)
 - 15 にぶい黄 2.5Y6/4 中砂 海汰良い、生痕多く認められる [第5層] (水成層)
 - 16 暗灰黄 10YR4/2 砂質シルト 極粗砂を少量含む マンガン沈着 [第7層] (土壌層)
 - 17 粗灰 10YR6/1 砂質シルト 極粗砂を少量含む [第7層] (土壌層)
 - 18 暗灰 2.5Y7/2 砂質シルト～極細砂 上半中心にマンガン沈着 [第8層] (水成層)
 - 19 灰黄 2.5Y6/2 極細砂～細礫 海汰悪い [第8層] (水成層)
 - 20 灰白 2.5Y7/1 砂質シルト [第8層] (水成層)
 - 21 黄灰 2.5Y5/1 粘質シルト 炭化物粒を多く含む [第3面検出遺構] [30溝埋土]
 - 22 オリーブ褐 2.5Y4/3 粘質シルト 下半分に18層起源のブロックを多く含む [第3面検出遺構]
 - 23 暗灰黄 2.5Y5/2 砂質シルト 下半分に18層起源のブロックを多く含む [第3面検出遺構]
 - 24 灰オリーブ 5Y5/2 極細砂～細砂 極粗砂を少量含む 炭化物粒を多く含む [第1面検出遺構] (溝埋土)
 - 25 灰オリーブ 5Y4/2 粘質シルト マンガン沈着 [第2面検出遺構] (溝埋土)
 - 26 灰オリーブ 5Y4/2 粘質シルト マンガン沈着 [第2面検出遺構] (溝埋土)
 - 27 灰オリーブ 5Y4/2 粘質シルト マンガン沈着 [第2面検出遺構] (溝埋土)
 - 28 暗灰黄 2.5Y5/1 粘質シルト マンガン沈着 [第2面検出遺構] (溝埋土)
 - 29 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト 粗砂を少量含む [第3層母材] (水成層)
 - 30 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト 粗砂を少量含む [第3層母材] (水成層)
 - 31 灰 5Y6/1 細砂 [現代新遺跡]
 - 32 灰 5Y6/1 細砂 極細砂～細砂 細礫を少量含む
 - 33 灰オリーブ 7.5Y6/2 極細砂～中砂 極粗砂を多く含む
 - 34 灰 7.5Y6/1 細砂～中砂 極粗砂を多く含む [第2層中遺構溝] (耕作溝埋土)
 - 35 灰オリーブ 5Y6/2 極細砂～細砂 粗砂を少量含む
 - 36 灰オリーブ 5Y5/2 砂質シルト 瓦器破片を含む
 - 37 灰オリーブ 5Y5/2 極細砂～細砂 粗砂を少量含む
 - 38 褐 10YR4/4 粘質シルト [第3層] (耕作土層)
 - 39 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト 粗砂を少量含む [第3層母材] (水成層)
 - 40 黄灰 2.5Y5/1 粘質シルト 炭化物粒を多く含む [第3面検出遺構] [30溝埋土]
 - 41 暗灰黄 2.5Y4/2 粘質シルト [第3-4面検出遺構] [30溝埋土]
 - 42 黒 10YR3/2 粘質シルト 炭化物を少量含む 土器片を少量含む [第3-4面検出遺構] (30溝埋土)
 - 43 黒褐 10YR2/2 砂質シルト 中砂を多く含む 下部に第5層ブロックを多く含む
 - 44 灰白 2.5Y7/1 粘質シルト 加工時形成層
 - 45 黒褐 2.5Y7/1 粘質シルト 生痕多く認められる [第5層] (水成層)
 - 46 明黄褐 2.5Y6/6 粘質シルト 下部粘性強い [第6層] (土壌層)
 - 47 黒褐 2.5Y5/3 細砂～極粗砂 海汰悪い [第8層] (水成層)
 - 48 黒褐 10YR3/2 砂質シルト [第3面検出遺構] (土坑埋土)
 - 49 オリーブ褐 2.5Y4/3 粘質シルト [第3面検出遺構] (土坑埋土)
 - 50 緑灰 7.5GY5/1 極細砂 極粗砂を多く含む [第1面検出遺構] (溝埋土)
 - 51 灰オリーブ 5Y4/2 粘質シルト [第2面検出遺構] (溝埋土)

図478 1区 東壁 断面図

や悪い。層厚は部分的に厚くなり、約 0.2 m を測る。前後の地層の関係から、弥生時代中期～平安時代にかけて形成された地層と考えられる。

第 5 層

氾濫堆積による水成層である。0.1～0.5 m を測る。堆積が厚く認められる 1 区では上方細粒化しており、下半部は粗砂～中砂、上半部は極細砂～砂質シルトである。層内からは遺物を確認できていないが、後述するように本層上面において弥生時代前期の遺構を検出していることから、弥生時代前期以前に堆積した地層と考えられる。

第 6 層

耕作土層である。1 区では認められなかった。後述するように 2 区では本層上面で弥生時代前期中頃と考えられる水田畦畔を確認できていることから、弥生時代前期中頃以前に形成された層と考えられる。

第 7 層

褐灰色砂質シルトの土壌層である。層厚は 0.1～0.2 m を測る。上面では乾痕が顕著に認められ、締まりも極めて良い。本層の上面において縄文時代の打製石鏃が 1 点検出していることから、縄文時代～弥生時代にかけて形成された地層と考えられる。

第 8 層

灰黄色極粗砂～砂質シルトの水成層である。堆積が厚く、調査対象の深度よりも下位に存在するため層厚は不明である。既往の調査成果から縄文時代後～晩期にかけて形成された層と考えられる。

2. 第 1 面(第 2 層下面) (図479 図版144)

近世耕作土層である第 2 層を除去した遺構面と位置づけるが、実際は第 2 層がほとんど認められないことから、第 1 層及び第 3 層の最上部の一部を除去した面で遺構を検出している。

〔耕作溝群〕

調査区のほぼ全面において耕作に伴うと考えられる溝群を検出した。溝の埋土は第 2 層を起源とするものと、第 3 層を起源とするものが混在しており、複数時期の下面遺構を同時に検出したものと考えられる。

溝はいずれも 05-1-6 区で確認した溝と同じく東西方向を指向しており、その軸は E-2°-N を示す。溝は幅 2.5～3.2 m を測る広いものと、幅 0.2～0.3 m 程度を測る狭いものの 2 者に分けられ、溝の深度は検出面から概ね 0.05 m 前後を測る。

埋土内からは和泉Ⅲ-2 期以後と考えられる瓦器椀片のほか、瓦質土器などが出土しているが、いずれも細片で図示し得なかった。前者は 13 世紀前葉以後、後者は 15 世紀代にかけてのものと考えられる。

以上のことから、第 1 面は中世以降の耕作地としての景観のある段階を検出したものとして位置づけられる。

3. 第 2 面(第 3 層下面) (図480 図版144)

中世の耕作土層である第 3 層を除去した遺構面である。

遺構としては、耕作溝・轍痕・土坑を検出した。

〔耕作溝群〕

調査区の東半部を中心として、耕作に伴うと考えられる溝群を検出した。溝はいずれも幅 0.2～0.3 m を測る小規模なものばかりである。いずれの溝も平面形状はやや不定であり、断続的な検出状況を示す



X=155980

X=155990

X=156000

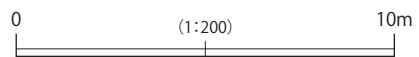
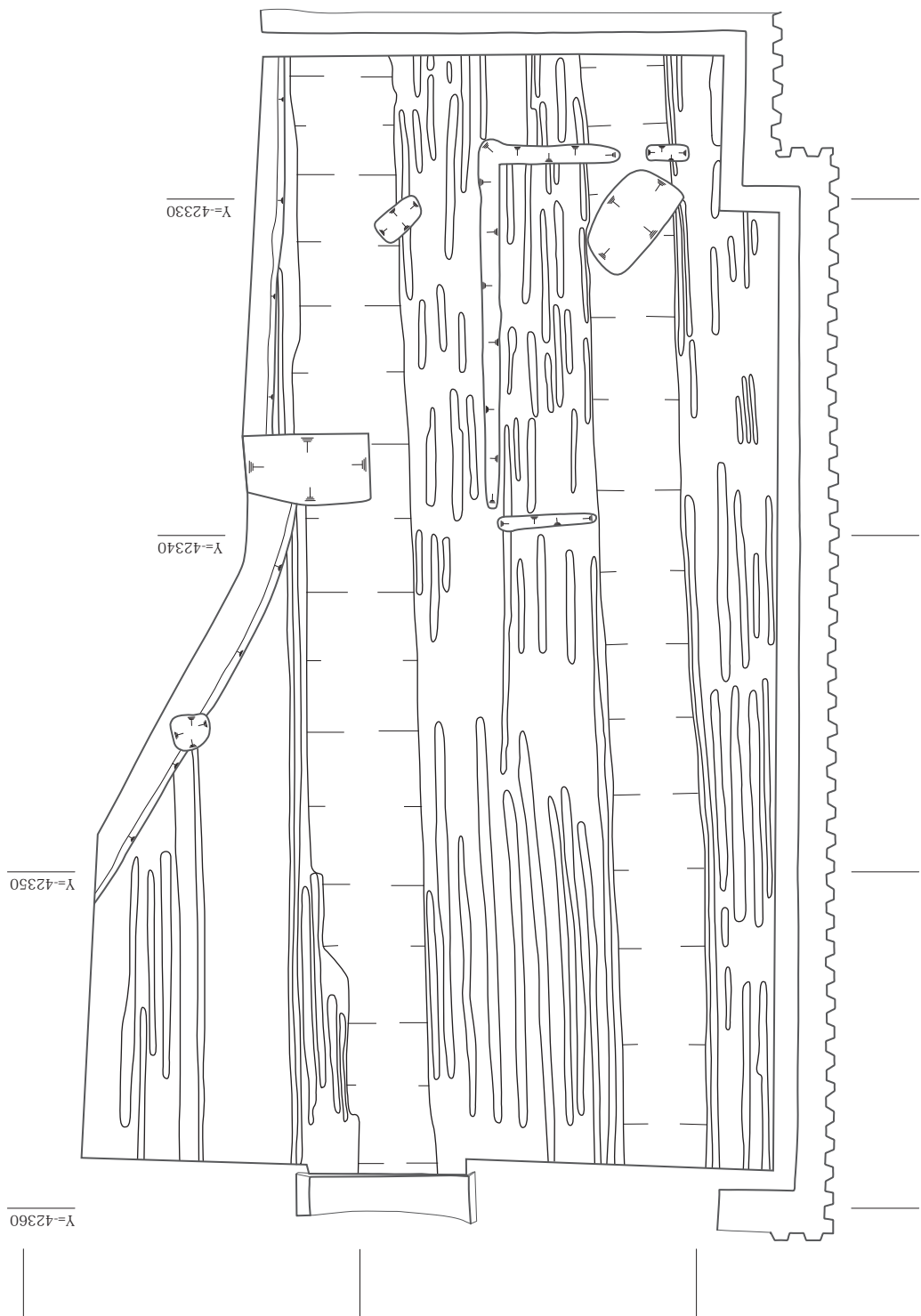


图479 1区 第1面 平面图



X=155980

X=155990

X=156000



図480 1区 第2面 平面図

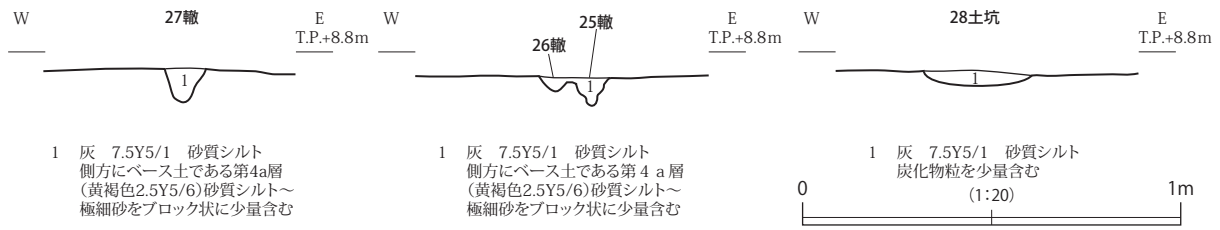


図481 1区 第2面 各遺構 平・断面図

など、耕作痕跡が部分的に及んだものを検出したものと考えられる。溝の埋土はいずれも第3層の最下部を起源とする黄灰色の粘質シルトである。先述した第1面遺構の耕作溝群同様、東西方向のものが大半を占めるが、南北方向のものも一部で認められることから、時期によって耕作の単位を違えていた可能性がある。溝の規模は0.2~0.3mのものばかりであり、溝の深さは検出面から0.05mを測る。

遺物はほとんど認められなかったが、21溝から瓦器碗の細片が出土している。細片であるため、図示はし得なかったが、和泉型のⅢ-2~Ⅳ-2期に相当するものとみることができ、13世紀代の所産と考えられる。

〔轍跡〕 (図481)

轍痕は2条1組で構成される幅0.1m弱の小溝であり、溝間距離は、概ね1.5mで統一されている。検出面からの深さは0.1mを測る。本調査区では高まり状に第5層が残る北東部を中心に認められ、北西-南東方向に3組を確認した。遺物は出土していないため、詳細な時期は不明である。

既往の調査区である05-1-6区でも同様の轍痕を検出しており、本轍跡はその延長に相当する。こうした遺構は他の調査区でも多数確認されており、溝の深度が0.1m以上と幅に対して深いこと、溝間距離が均質であること、埋土はいずれも第3層ではない埋土を基本としていること等から、第4a層形成後の地表面が不安定であったある時期に車が通った荷重痕跡として考えられる。

〔28土坑〕 (図481)

調査区の北東隅で検出した長軸0.7m、短軸0.6mの楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.1mを測り、埋土は上述した轍跡と同じ第3層以外の埋土である。埋土中に炭化物粒を少量含むが、遺物を含んでおらず、時期・性格は不明である。

以上のように本面で検出したこれらの遺構は、埋土の違いから2者に分けることが可能である。耕作溝は第3層最下部を起源とする埋土を有することから、第3層下面遺構として位置づけられ、中世前期の所産と考えられる。一方、轍痕・土坑は灰色シルトの埋土を有しており、周辺の既往の調査成果を加味すると9~10世紀代に帰属する可能性がある。

4. 第3面(第4a層下面) (図482 図版145)

平安時代の耕作土層である第4a層を除去した遺構面である。本来的には第4b層の上面となる遺構面であるが、第4a層の形成による削平を受けたことで、西半分は第7層が、北東部では第5層及び第7層が露出する。遺構としては、溝を1条(30溝)、土坑を1基(29土坑)検出した。

〔30溝〕 (図483 図版145)

南西-北東方向に蛇行する溝である。

幅0.8~1.4m、検出面からの深さ0.5mを測る。断面形状は緩やかな皿形を示しており、溝の底面には部分的に凹凸が認められる。この凹凸は図示はし得なかったが、直径0.05~0.1mの長楕円形ないしはレンズ状の平面形を示す不連続なもので、溝掘削時の加工痕跡である可能性が想定できる。



0866591-X

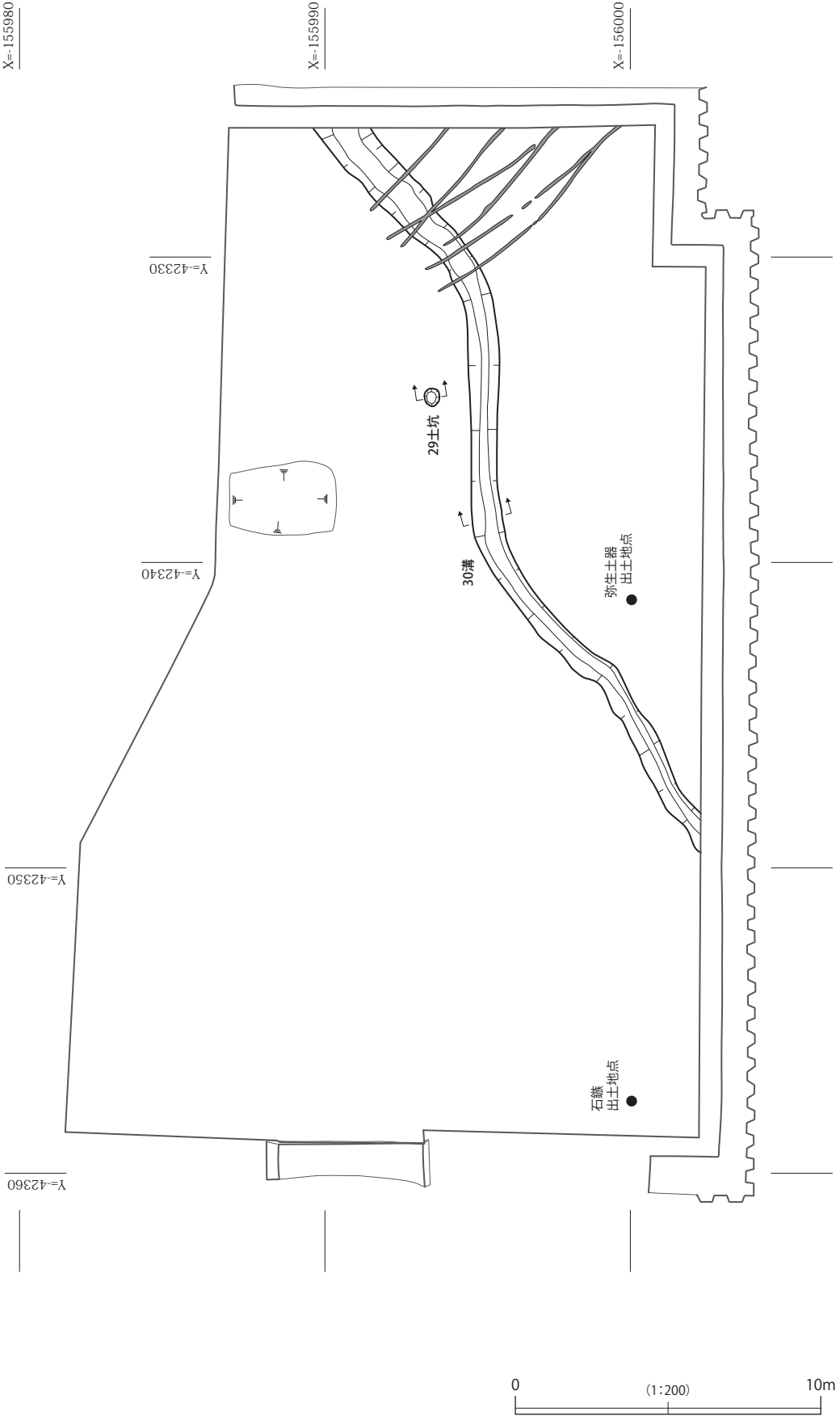


图482 1区 第3面 平面图

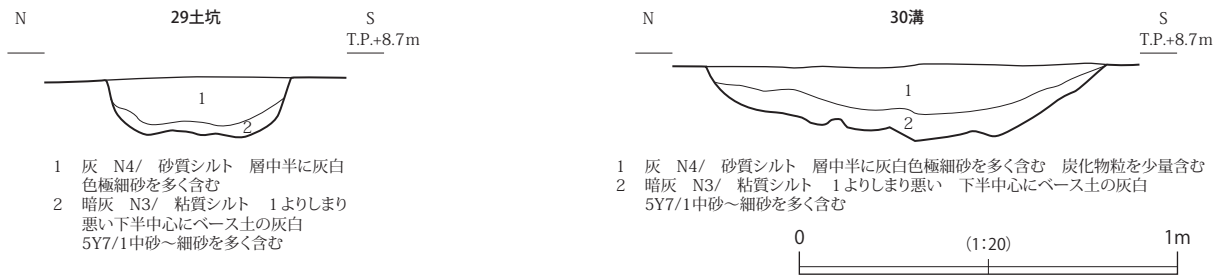


図483 1区 第3面 各遺構 平・断面図

埋土は上下2層に分かれ、上層は暗色味の強い灰色砂質シルトを基本とする。下層は淘汰の良い暗灰色粘質シルトで掘形に沿う形でベース土である第5層起源のブロック土を多く含むことから、加工時に形成された可能性が高いことが想定できる。

なお、この溝は後述する63周溝の位置とも重複することから、部分的に踏襲されたものと考えられるが、溝内からは遺物が出土していないため時期比定は成し得ない。先に述べたとおり、第4 a層による削平が強く及んでいた結果、下位の各層が露出していたことと、層序の関係からは、弥生時代中期以後古墳時代から平安時代のいずれかの時期に収まるものと考えられることができるが、詳細は不明である。なお、既往調査の05-1-7区西端では30溝に相当するものを確認できないことから、未調査部分で屈曲し、05-1-8区で検出した溝に繋がると考えられる。

〔29土坑〕(図483 図版145)

調査区中央部東寄りに位置する長軸1.6m、短軸1.3mを測る楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.4mを測り、断面形状は深い椀形を示す。埋土は上述した30溝同様、灰色の砂質シルトである。下層は暗灰色粘質シルトで、ベースの第5層ブロックを含むことから、加工時形成層と考えられる。

埋土中からは遺物は出土していないため、詳細な帰属時期は不明である。

以上のように本面で検出した遺構は埋土の上部に第4 a層を含まないことから、平安時代以前には埋没していたことが想定されるが、遺物を伴わないため、明確な時期比定は困難である。

5. 第4面(第4 b層下面)(図484 図版146)

弥生時代前期～平安時代にかけて形成されたと考えられる第4 b層を除去した遺構面である。

先述したように調査区の西半分及び北東部では、下位層である第5・7層が露出しているために、南東-北西方向の落ち込み部分に限定的に堆積していた層厚0.1m程度の第4 b層を除去し、第5層の上面で遺構を検出した。なお、調査区西半分では、第7層とした暗色味の強い土壌層が露出しており、遺構の検出漏れを回避するべく、第7層を掘削し、ベース面の第8層を検出している。

遺構としては、周溝(63周溝)を検出したほか、北側及び東側において溝・落ち込みを検出した。また、上述した調査区西側の第7層下面では、土坑・小穴・落ち込みを検出している。

〔63周溝〕(図485～487 図版146・164)

調査区の南東隅に位置し、第3面で検出した30溝の前身と考えられる溝や北西方向に延びる65落ち込みと接続する周溝である。平面形は不整な台形状を示し、周溝の中央部には不整な長方形の高まりが残存していた。高まり部はベースの第5層が高く残存したもので、やや不整な長方形を呈する。長径3.2m、短径2.2mを測る。周溝の規模は検出面の上端部を計測点として幅3.5～4.5m、検出面からの深さ0.3～0.9mを測る。周溝の掘形は2段落ちの形状を示し、周溝の深度の差異は2段目の落ち有無によって生じている。また、周溝は南西隅で浅くなっており、周溝底は同じ高さでは全周していない。



图485 1区 第4面 63周溝 遺物検出状況図

周溝の埋土は、大きく分けてやや暗色味の弱い粘質シルトを基調とする1・2層と暗色味の強い砂質シルトを基調とする3・4層の2層に分けることが可能である。このうち、下層の4層にはベースとなる第5層ブロックが溝底を中心として少数認められることから、加工時形成層と考えることができる。周溝の南西隅は部分的に深く落ち込んでおり、その地点を中心として遺物が出土した。

出土した遺物については、図示可能なものについては、すべてを掲載した(図486)。出土地点は周溝の南西部(図484アミフセ部・図485)に集中しているが、そのほかにながらかに北東部からも出土している。遺物は弥生時代前期の土器の細片が大半を占め、いずれも磨耗が著しい。甕の口縁部(2589)、甕の底部(2590・2591)が認められる。2589の甕は頸部の屈曲が緩やかである。河内I-3様式に相当する可能性もあるが、細片であり口径・傾きに若干の不安を残すため詳細は不明とせざるを得ない。石製品では、磨製石斧(2593)および磨石の破損品(2592)が出土している。このうち、前者については、大阪市立自然史博物館 地史研究室研究副主幹 川端清司氏に石材鑑定していただいた結果、石材はグリーンタフであることが判明している。

この周溝に関しては、平面形が不整であるものの、方形周溝墓の可能性も想定できた。そこで主体部の有無を確認するべく、現地調査時には度重なる精査を実施すると共に、高まり部の中央部に長軸に直交する形で確認トレンチを設定したが、それに類する痕跡は認められなかった。一方、北西方向に伸びる65流路が周溝に接していることなどから、自然の営力によって高まり部が形成された可能性も想定し得るが、埋土に65落ち込みと同様の砂が認められないこと等、積極的な根拠は無い上、わずかではあるものの、周溝の南西隅に土器・石器がややまとまって出土したことから、人的な営為が働いている可能性も否定しきれない。最終的な解釈は今後の調査の進展に委ねるが、ここでは、05-2調査で検出した弥生時代前期の集落を構成する墓域の一端を検出した可能性があることを指摘するに留めておく。

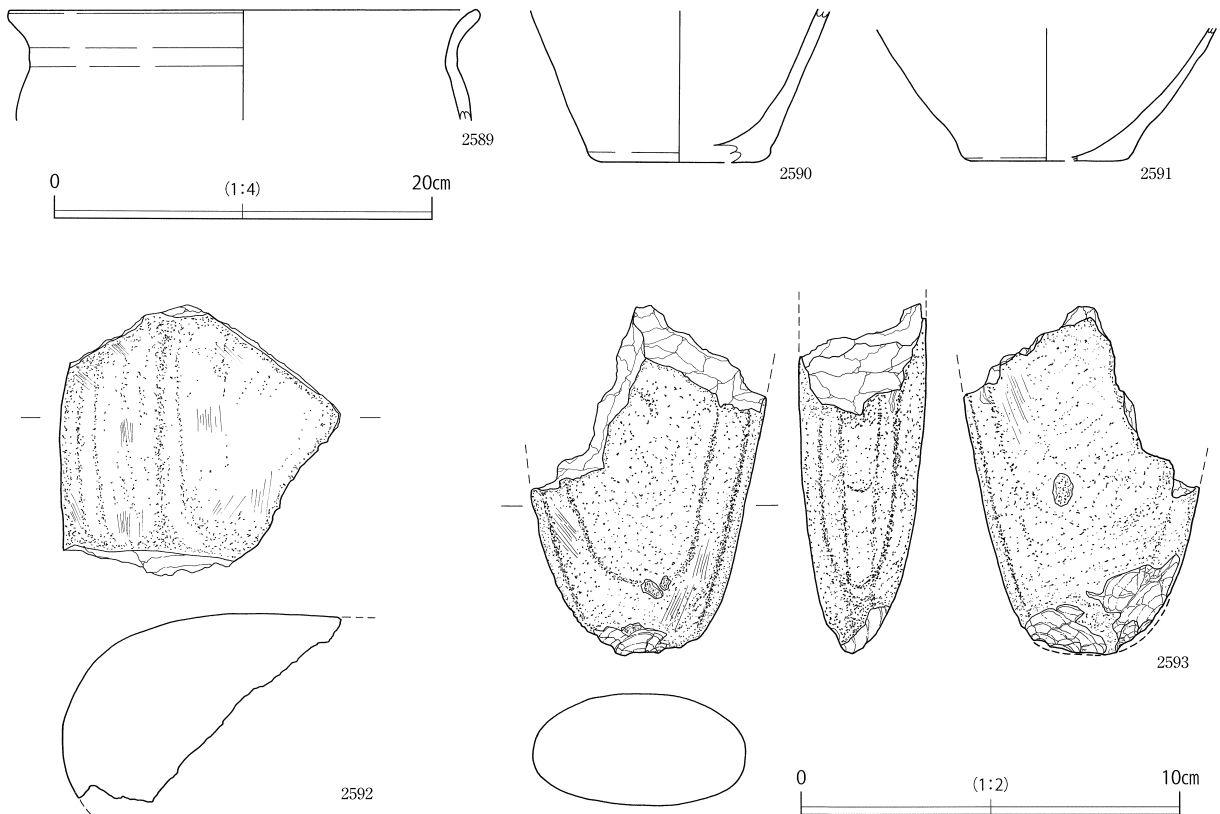


図486 1区 第4面 63周溝 出土遺物

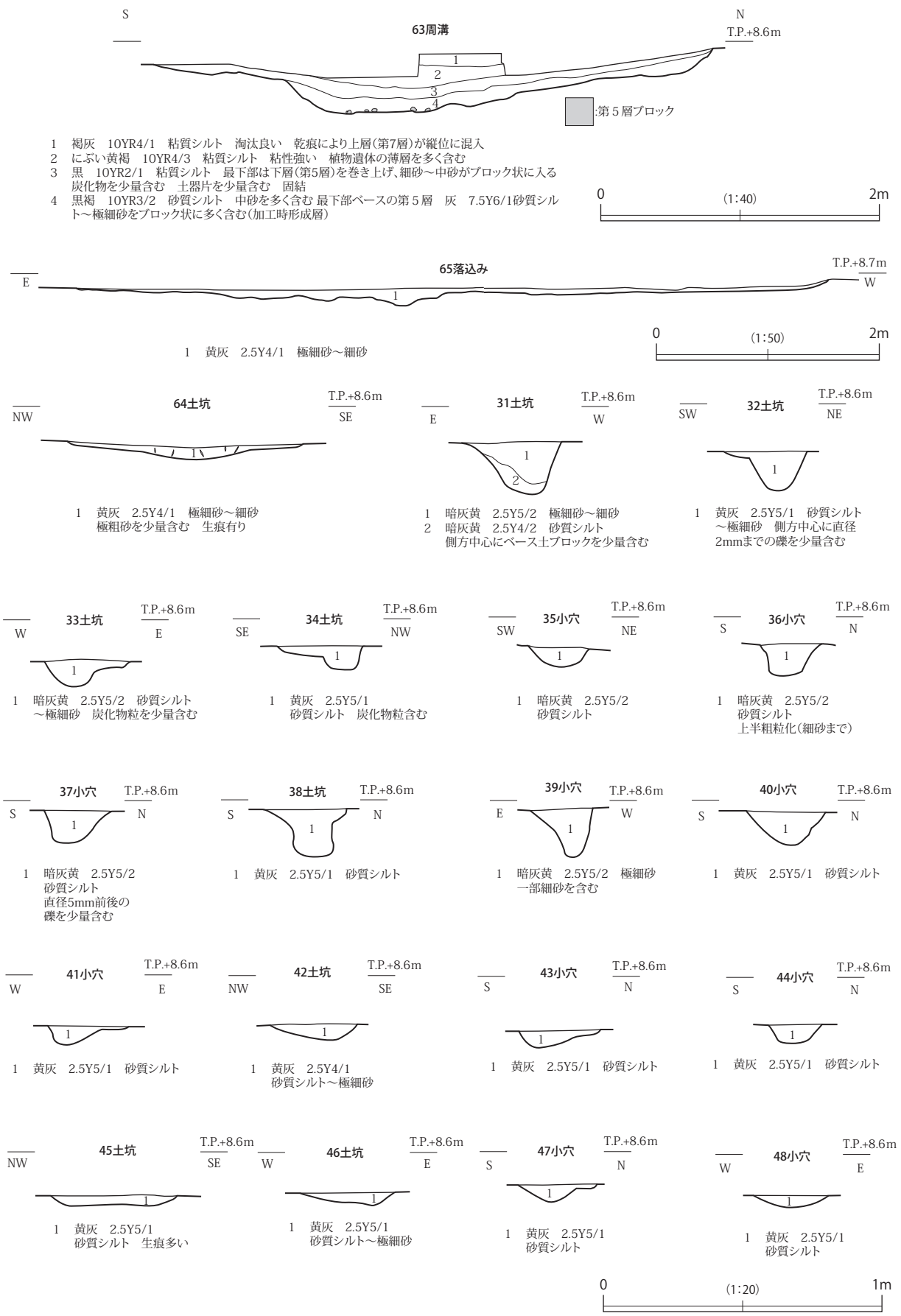


図487 1区 第4b層下面 各遺構 断面図(1)

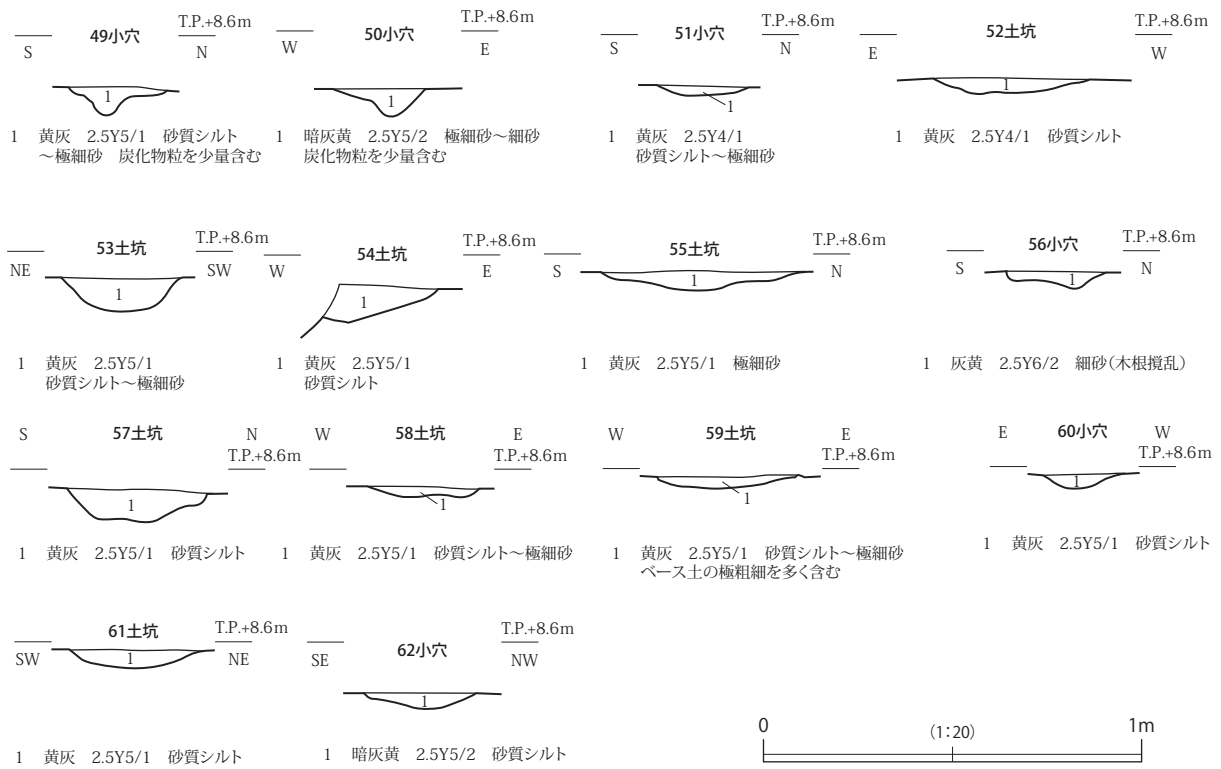


図488 1区 第4b層下面 各遺構 断面図(2)

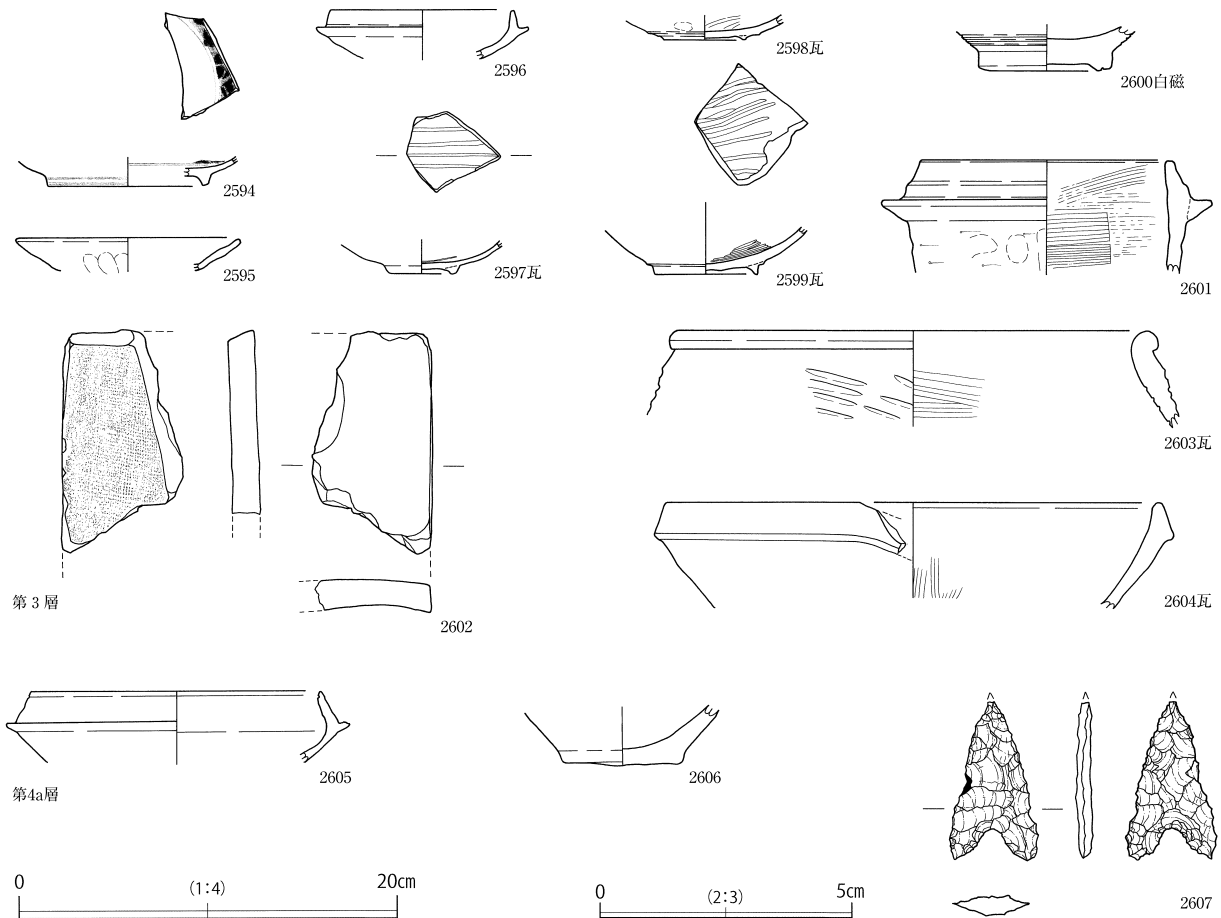


図489 1区 第3・4a層 出土遺物

〔65落ち込み〕（図487）

調査区のほぼ中央北半部に位置する落ち込みである。先述した63周溝の北西部に接続している。周溝との間に重複関係は認められなかった。落ち込みの北端は急激に深さを増し、0.7 m近く段をなしている。なお、本調査区の北側の05-1-8区では、この落ち込みの延長を検出している。埋土は黄灰色の極細砂～細砂を基調とする。遺物は出土しておらず、帰属時期は不明であるが、63周溝と重複関係に無いことから、弥生時代前期のものと考えられる。

〔64土坑〕（図487）

調査区の東端で検出した土坑である。平面形はやや不整な長楕円を示し、長径1.6 m、短径0.85 mを測る。検出面からの深さは0.05 mと浅い。埋土は、65溝とほぼ同じものである。遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明であるが、65落ち込みとほぼ同じく、弥生時代前期のものと考えられる。

〔第7層下面の遺構〕（図487・488）

先述したように、調査区の西側では第5層に相当する層準が認められなかったため、第7層とした土壌層が露出していた。この第7層は強く土壌化しているため、暗色味が強く、上面での遺構検出には困難を伴ったため、検出ミス無くすことを目的として第7層を掘削して、遺構の検出に努めた。

検出し得た遺構は全部で32基あり、これを図487に掲げた。これらの遺構の埋土は一部を除いていずれも単層で構成されており、埋土の様相も概ね類似していることから、個々に説明を加えることは避け、総体としての特徴を述べておくこととする。

検出した遺構はいずれも土坑もしくは小穴である。平面はいずれもやや不整な円形を呈する。平面規模は直径0.2～0.4 mに収まっているが、45・52・55土坑はやや突出して大きな規模を示し、0.8～1.0 mを測る。検出面からの深度は0.05～0.15 mと浅いものが大半を占める。埋土は上部に堆積していた第7層を起源とする土壌が主体を占める。

これらの土坑は埋土とベース面の層界も不明瞭で、遺物も含まないことや埋土の様相などから、生痕もしくはそれに類するものである可能性が高い。

〔各層出土遺物〕（図489 図版164）

以下に人力掘削時に各地層から出土した遺物について記述しておく。

2594～2604は第3層出土遺物である。2594は肥前系磁器の皿。2595は土師器皿で直線的に開く口縁部を有しており、下半部には指頭圧痕が顕著に残存する。平安京Ⅱ期新に相当すると考えられ、10世紀前葉の所産。2596は須恵器の杯身。TK43型式に相当すると考えられ、混入資料であろう。2597～2599は瓦器椀の底部片である。高台の断面形状はいずれも低平なカマボコ状を呈し、高台そのものの貼り付き方もやや不十分なものである。見込み部の暗文はいずれも平行線状のものである。2600は白磁碗の底部である。外面は露胎している。13世紀代の所産。2601は瓦質羽釜である。細片であるために、口径の復元にいささかの不安を残す。14世紀代の所産。2602は平瓦である。凹面は布目が残存する。2603は瓦質甕である。口縁端部は短く折り曲げられ、玉縁状とする。15世紀代に位置づけられる。2604は瓦質の片口鉢である。体部内面には播目が残存する。口縁端部の仕上げと体部の傾きから14世紀代の所産と考えられる。以上第3層から出土した遺物は13世紀中葉～15世紀までと考えられ、中世前期以後耕作地として連綿と利用が図られてきた様相を示している。

2605は第4 a層から出土した須恵器杯身で、MT15型式に相当する。2606は弥生土器の底部片である。時期は不明。2607は調査区南西端の第7層上面から出土したサヌカイト製の凹基無頸鉢である。

第2節 2区の成果

1. 基本層序(図490～492 図版147)

2区は、池内遺跡の中央部西寄りに位置する調査区であり、05-2-5区の南側に位置する。調査はオープンカットで実施し、南側の官民境界については、可能な限り調査区を確保する形で実施した。なお、調査区の中央部を南北方向に縦断するコンクリート水路の存在によって一部調査が実施できなかった箇所については、同様に可能な限り調査区を確保する形で調査を実施した。

調査区周辺の現地表面の標高は10m前後を測る。調査は現代耕作土層である第1層までバックホーによる掘削を行い、以下の地層については、人力によって1層ずつこれを除去し、遺構面の検出に努めた。遺構面は、既往の調査成果に従い、第1面(第3層下面〔第4a層上面〕)、第2面(第4a層下面〔第4b層上面〕)、第3面(第4b層下面〔第5層上面〕)、第4面(第6層上面〔第5層下面〕)の合計4面の遺構面について平面調査を実施した。なお、05-2調査で実施した第5面以下の遺構面については、遺構・遺物ともに密度が低いと予測されたため、今回は調査を行っていない。

以下に2区における堆積地層の概要を述べる。なお、地層の確認については、調査区の南壁面のほか、先に述べた調査区中央に位置する既設構造物の下部に残存した南北方向の壁面を用いて行い、図490～492にこれを掲げた。

第0層

現代盛土である。層厚は平均1m弱を測る。

第1層

現代耕作土層である。第0層以前に堆積したもので、層厚は平均約0.2mを測る。

第2層

耕作土層である。層厚は極薄く、0.05m程度残存するのみである。遺物はほとんど包含していなかったものの、わずかに得られた遺物から、近世に形成された地層と考えられる。

第3層

中世の耕作土層である。灰黄色の極細砂を基調とする。層厚は0.25～0.50mを測る。本層は大きく3層に区分できるが、いずれも耕作土層である。断面観察から、それぞれの層理面には、耕作溝を主体とする遺構が存在していたが、第3層として一括して掘削した。

層中出土遺物には、後に掲げる図533に掲載したもの以外に、和泉型瓦器椀・土師器皿・東播系の須恵器・巴文軒丸瓦・白磁などが認められる。いずれも細片で、詳細な時期比定には困難を伴うが、瓦器椀片には高台が退化し、断面カマボコ形を呈するものが認められたことや、口縁部片に体部上半～口縁部にかけて外面のヘラミガキが認められないものがあることから、和泉型Ⅲ-3期前後の様相を示すと判断できる。13世紀中葉までの所産と考えることができることから、本層の形成時期は13～14世紀にかけてと位置付けることができる。なお、極少量ではあるが炉壁も出土している。

第4層

第4a層・第4b層の2層に大別できる。

第4a層は攪拌を強く受けていないが、耕作土層と考えられ、層厚は0.1～0.15mを測る。褐灰色の粘質シルトで、淘汰は極めて良い。全体的に残存している。平安時代末の黒色土器椀、6世紀前葉の須恵器を含むことから、平安時代以後に形成された層と考えられる。

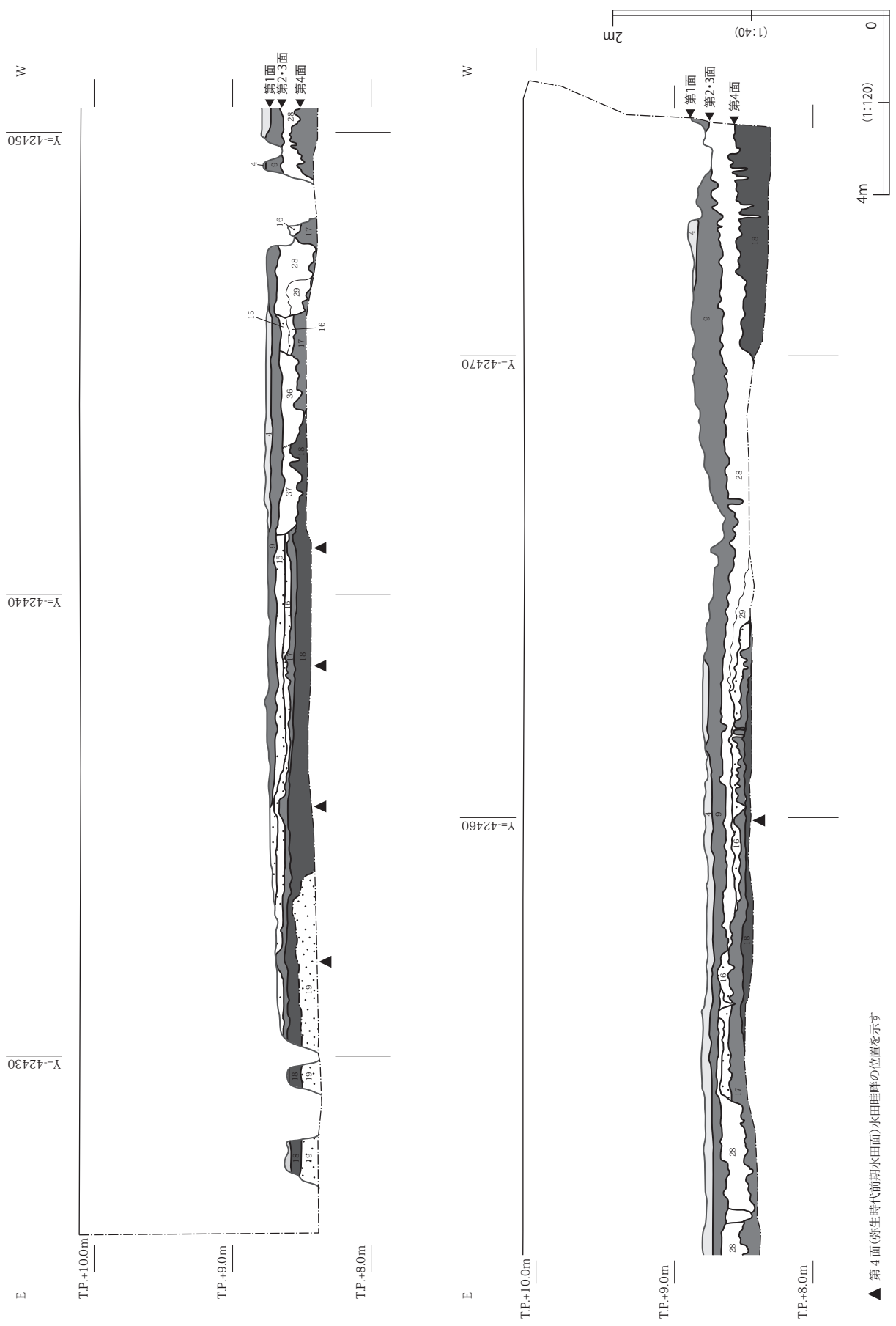


図490 2区 東半南壁 断面図

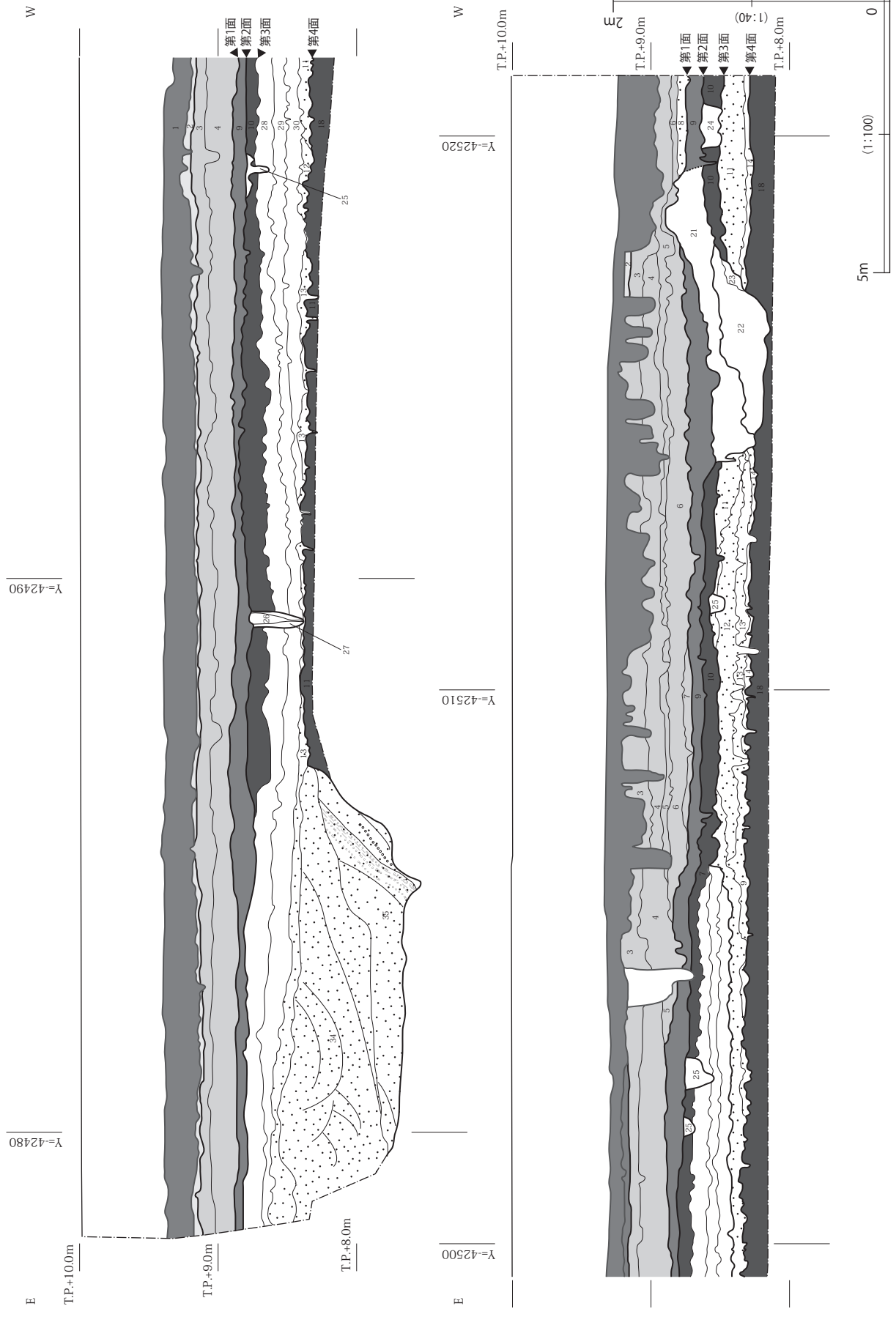
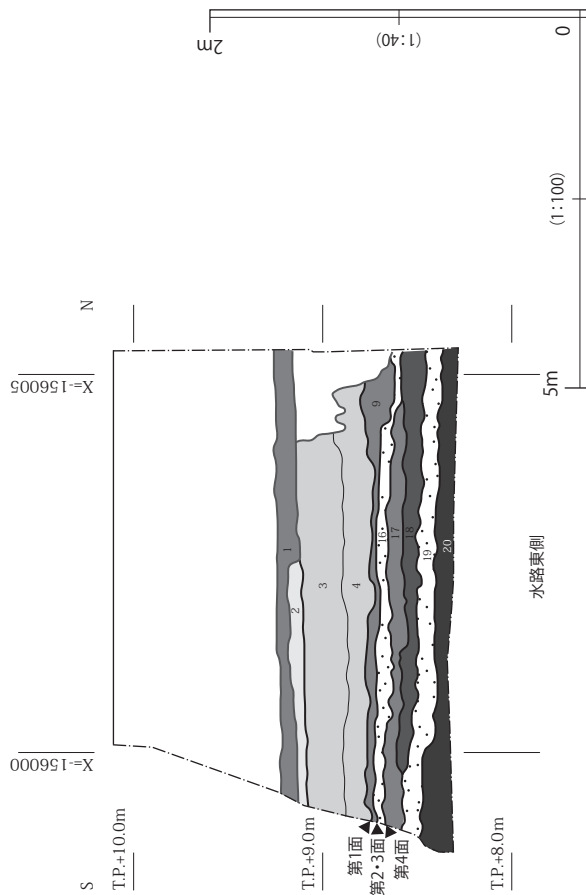
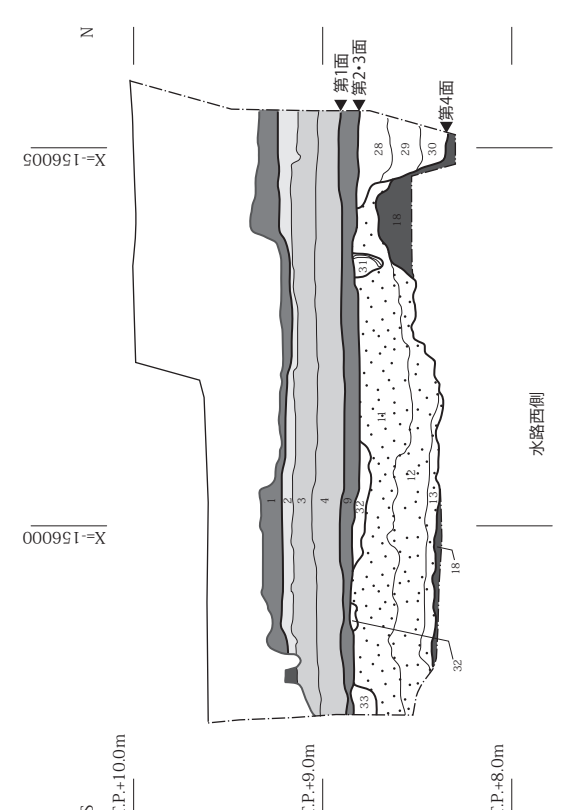


图491 2区 西半南壁 断面图



- 22 灰黄 5Y4/1 粘質シルト 淘汰良い、マンガン沈着 [第3面検出遺構] (薄埋土)
- 23 灰黄 2.5Y6/2 砂質シルト 極粗砂を少量含む、マンガン沈着 側方の10・11層が崩落 [第5面検出遺構] (薄埋土)
- 24 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト 粗砂を少量含む [第3面検出遺構] (薄埋土)
- 25 黄灰 2.5Y4/1 砂質シルト [第3面検出遺構] (溝・土坑埋土)
- 26 黒褐 2.5Y3/1 砂質シルト 粗砂を少量含む、炭化物を少量含む [第3面検出遺構] (柱穴埋土)
- 27 黄灰 2.5Y5/1 中砂 極粗砂を少量含む [第3面検出遺構] (柱穴埋土)
- 28 灰黄褐 10YR4/2 粘質シルト 粗砂〜極粗砂を多く含む、土師器・須恵器片を多く含む [第3面検出遺構] (165薄埋土上層)
- 29 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト 粗砂を少量含む 第5層ブロックを多く含む [第3面検出遺構] (165薄埋土中層)
- 30 暗灰黄 2.5Y4/2 砂質シルト 粗砂を少量含む 第5層ブロックを少量含む [第3面検出遺構] (165薄埋土下層)
- 31 灰 5Y6/1 砂質シルト 粗砂を少量含む 第5層ブロックを少量含む [第4面検出遺構] (371土坑埋土)
- 32 粗灰 10YR5/1 中砂 極粗砂を少量含む 第5層ブロックを少量含む、土師器片を含む [第5面検出遺構] (溝・土坑埋土)
- 33 粗灰 10YR6/1 中砂 極粗砂を少量含む [第5面検出遺構] (溝・土坑埋土)
- 34 暗灰黄 2.5Y5/2 極粗砂〜細砂 上方中砂まで細粒化 斜行ラミナ発達 最上部はラミナ不明瞭 [第4面検出遺構] (362流路)
- 35 黄灰 2.5Y6/1 粗砂〜極粗砂 側方中心に直径2m以上の大礫を含む 斜行ラミナ顕著 [第7層の礫層を少量含む、吹生土器片を少量含む [第4面検出遺構] (362流路)]
- 36 褐 7.5YR4/3 細砂 極粗砂を多く含む [第3面検出遺構] (184薄埋土)
- 37 粗灰 7.5YR4/1 極細砂 極粗砂を多く含む [第3面検出遺構] (185薄埋土)



- 1 [第1層] (現代耕作土層)
- 2 灰オリーブ 5Y6/2 極細砂〜細砂 極粗砂を少量含む [第2層] (耕作土層)
- 3 灰黄 2.5Y7/2 極細砂 粗砂を少量含む [第3層] (耕作土層)
- 4 灰黄 2.5Y6/2 中砂 粗砂を多く含む、極粗砂を少量含む [第3層] (耕作土層)
- 5 にぶい黄 2.5Y6/3 極細砂 極粗砂を少量含む [第3層] (耕作土層)
- 6 灰オリーブ 5Y6/2 粘質シルト マンガン沈着 [第3層] (耕作土層)
- 7 暗灰黄 2.5Y5/2 [第3層] (耕作土層)
- 8 灰黄 2.5Y6/2 粗砂〜極粗砂 上方細粒化 [第3層] (水成層)
- 9 粗灰 10YR5/1 砂質シルト 粗砂を少量含む [第4a層] (耕作土層)
- 10 灰黄褐 10YR4/2 砂質シルト 極粗砂を少量含む、炭化物粒を少量含む [第4b層] (土壌層)
- 11 灰 5Y6/1 粘質シルト [第5層] (水成層)
- 12 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト 淘汰悪い [第5層] (水成層)
- 13 黄灰 2.5Y6/1 粘質シルト 淘汰悪い [第5層] (水成層)
- 14 暗灰黄 2.5Y4/2 粘質シルト 淘汰良い [第5層] (水成層)
- 15 黄灰 2.5Y6/1 粘質シルト 淘汰良い、ラミナ不明瞭 [第5層] (水成層)
- 16 黒褐 2.5Y5/4 粘質シルト 淘汰良い [第5層] (水成層)
- 17 黄 2.5Y5/1 粘質シルト 粗砂を少量含む、攪拌を受ける [第6層] (水田耕作土層)
- 18 黒褐 10YR3/2 粘質シルト 下位層の層相によって極粗砂を多く含む箇所が認められる [第7層] (土壌層)
- 19 暗灰黄 2.5Y3/2 砂質シルト 粗砂を少量含む、しまり良い [第7層] (土壌層)
- 20 灰 5Y6/1 粘質シルト 淘汰良い、マンガン沈着 [第8層] (水成層)
- 21 暗灰黄 2.5Y5/2 極細砂〜中砂 極粗砂を多く含む、強く土壌化、炭化物を少量含む、マンガン沈着 [第2面検出遺構] (西側畦畔盛土)

図492 2区 中央部南北 断面図

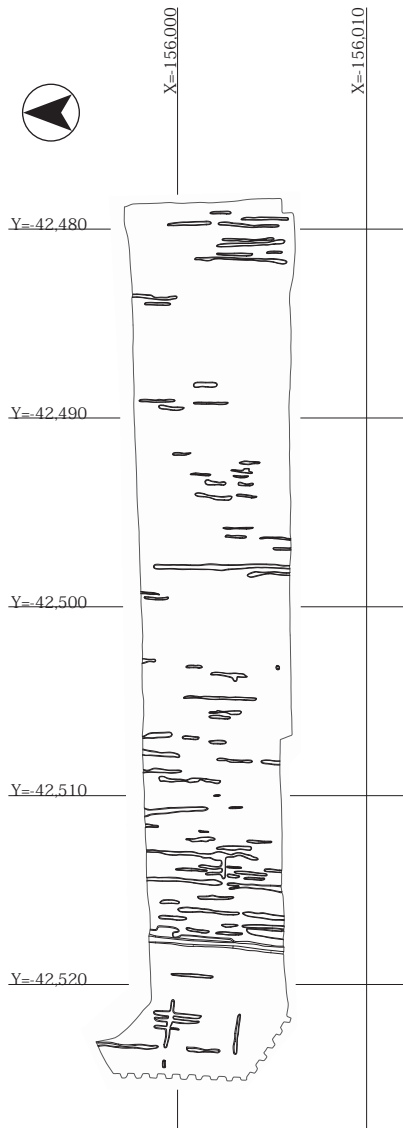
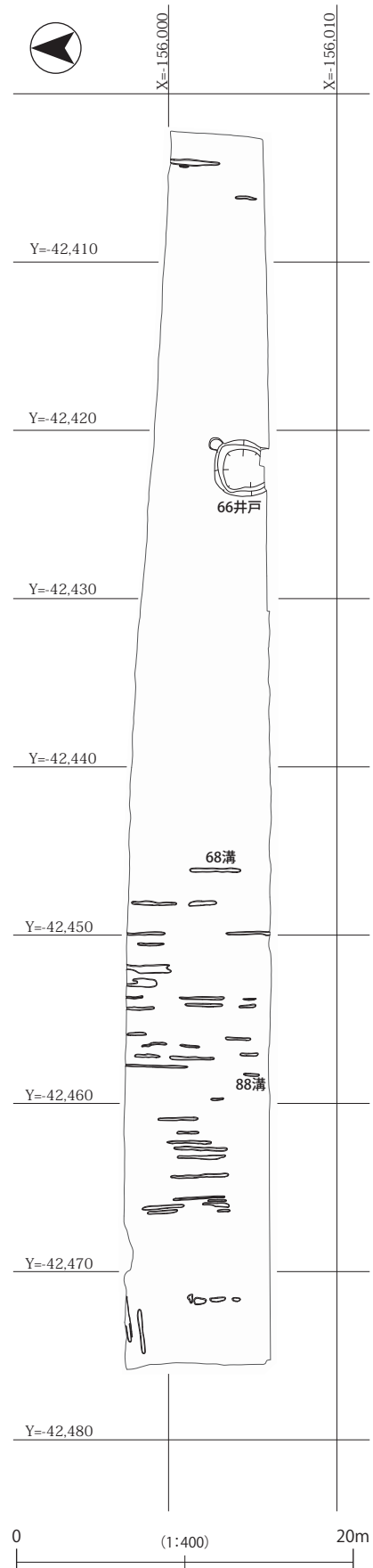
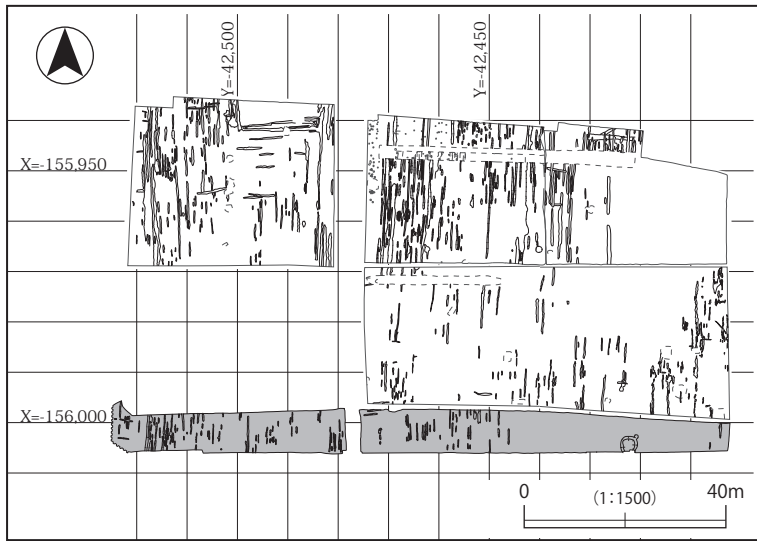


图493 2区 第1面 平面图

第4 b層は第5層を母材として形成された土壌層である。暗オリーブ褐色の砂質シルトで、淘汰はやや悪い。本調査区では中央部を除き概ね良好に遺存しており、層厚約0.1～0.2 mを測る。弥生時代前期から平安時代の土器を含むことから、弥生時代前期～平安時代にかけて形成された地層と考えられる。

第5層

氾濫堆積による水成層である。調査区毎に層厚は異なり、3区では0.2～0.3 m、1区では0.1～0.5 m以上を測る。上方細粒化しており、下半部は粗砂～中砂、上半部は極細砂～砂質シルトである。層内からは遺物を確認できていないが、後述するように本層上面において弥生時代前期の遺構を検出していることから、弥生時代前期以前に堆積した地層と考えられる。

第6層

耕作土層である。層厚0.1～0.2 mを測る。後述するように本層上面で弥生時代前期中頃と考えられる水田畦畔を確認できていることから、弥生時代前期中頃以前に形成された層と考えられる。

第7層

褐灰色砂質シルトの土壌層である。層厚は0.1～0.2 mを測る。上面では乾痕が顕著に認められ、締まりも極めて良い。遺物は出土していないものの、上下の地層の帰属年代から縄文時代～弥生時代にかけて形成された層と考えられる。

第8層

灰黄色極粗砂～砂質シルトの水成層である。堆積が厚く、調査対象の深度よりも下位に存在するため層厚は不明である。既往の調査成果から縄文時代後～晩期にかけて形成された層と考えられる。

2. 第1面(第3層下面) (図493 図版147)

中世の耕作土層である第3層を除去した遺構面である。ほぼ全域で第4 a層が露出している。遺構としては、井戸・耕作溝・土坑を検出した。

〔耕作溝〕 (図493・494 図版148)

耕作溝は大半が南北方向のものである。いずれも深度は浅いが、下面で検出される平安時代の屋敷境畦畔に隣接する箇所は幅・深さともにその他を凌ぐことから、坪境溝である可能性が高い。

遺物は、68溝と88溝から出土している。2608は口縁部に一段ナデを施すもので、京VII～VIII期の様相に近似する。2609の和泉型瓦器椀は和泉型Ⅲ-2～3と考えられる。これらの遺物から、この耕作溝の年代については、概ね12世紀末から13世紀後葉にかけての年代観が想定できる。

〔66井戸〕 (図493・494)

調査区の東側に位置する直径3.4 mの円形の素掘り井戸である。掘削に当たっては、井戸の中央にアゼを設けて堆積埋土の観察・図化を行おうとしたが、掘削途中から湧水が著しくなり、埋土も締まりの悪いブロック土の集合体で構成されていたため、詳細な観察・図化を行う前に崩壊してしまった。加えて、掘削深度も2.5 mを越え、掘削に伴う危険が生じたため、調査途上ではあったが、途中で掘削を中止した。掘形の形状は、ほぼ垂直である。

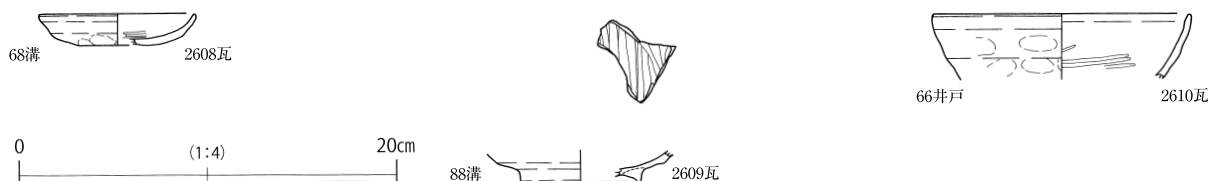


図494 2区 第1面 各遺構 出土遺物

井戸は直径0.1～0.2 mを測るブロック土で埋め戻されており、埋土中からは12世紀代のものと考えられる和泉型瓦器椀(2610)が出土している。和泉型Ⅲ-1～2期の所産と考えられることから、12世紀後葉前後に帰属する遺構と考えられる。

3. 第2・3面(第4 a層下面・第4 b層下面) (図495・496 図版149・151)

第2・3面については、実際の調査としては、第4 a層除去遺構面(第2面)と第4 b層除去遺構面(第3面)の2者が存在する。しかしながら、第4 b層の土壌化が著しく、上面での遺構検出を徹底しきれなかったこともあり、第4 a層除去後に検出し得た遺構と、第4 b層除去後に検出し得た遺構の間に若干の混乱も生じた。そこで本節では、第4 a層・第4 b層それぞれの下面遺構の中から、出土遺物や埋土の差異から時期を判別できたものについては、時代順に並べてこれを記載することとした。したがって、第2・3面は中世前期～弥生時代前期までの遺構がすべて収斂されて検出されることとなっている。なお、現地でのデータとして明らかなものはそれぞれに帰属面を明記した。

[区画溝] (図497～500 図版150・166・168)

平安時代の居住域を区画する施設と考えられる溝を一括して記述する。93・236・183～185・360の各溝がこれに相当し、約4分の3町四方を集落域と仮定すると、その西辺(92・235・236溝)、東辺(183・185溝)と南辺(165溝)に相当するものである。

特に西辺は、第4 a層の形成後も継続していたと考えられる畦が設けられており、さらにその両脇に溝(92溝)が設けられていた。この溝は第4 a層の形成以前にもほぼ同じ場所に溝が位置することから、掘削当初からかなりの長期にわたり地割表象として存在し、踏襲されていたことが想定できる。

一方、東側は第4 b層の堆積が薄く、畦畔の存在は確認できなかった。しかしながら、05-2調査同様、ほぼ183・185溝に挟まれた部分に幅3.6 mの空閑地が設けられており、本来はここに畦畔が設けられていた可能性が高い。なお、畦畔部分に相当するであろう箇所を南北方向に縦断している溝(184溝)は、粗砂～極粗砂等の粗粒の堆積物を多く含むなど、明らかにそのほかの溝とは埋土が異なっている。調査区の南端部分でほぼ直角に曲折していることを考えると、その他の区画溝とあながち無関係ではないともとれるが、起源となる極粗砂を主体とする水成層の存在が周辺に認められないことから、ここでは上面からの浸食痕と捉えておく。

各溝の規模はそれぞれで異なる。まず西辺の236溝は幅3.2 m、検出面からの深さは、最も深い箇所でも0.4 m近くを測る。235溝は幅2 m、検出面からの深さ0.15 mを測る。埋土はベース土の崩落とみられる層を除けば、灰色を基調とする粘質シルトで構成されている。次に東辺の各溝は、183溝が幅0.65 m、185溝が幅1.55 mをそれぞれ測る。検出面からの深さは、ともに0.15 mを測る。埋土は褐灰～灰黄褐色を基調とする砂質シルトに、やや粗粒の堆積物を含む下層と、粗粒の堆積物を含まない上層の2者に分けることができる。次に南辺の165溝は、調査区際でかろうじて検出を行えたことから、正確な幅・深度等は不明である。調査区の中央部では部分的に溝が北側に張り出すために、溝の両肩を検出することができた。ここを用いて代表させると、幅1.3 m、検出面から溝底までの深度は約0.5 mを測る。埋土は調査区の中央部では深く3層に区分できるが、大半はほぼ上層1層(図中5層)に収斂されている。埋土はいずれも粘質シルトを基調とする。特に上層から多くの遺物が出土した。

遺物は05-2-5区では東辺の溝から黒色土器をはじめとする9～10世紀までの遺物が多数出土したが、08-1調査では東辺に相当する183・185溝からの出土遺物は極少量であった。2611～2613は92溝の脇に位置する、盛土内から出土した遺物である。2611は弥生時代前期の蓋である。盛土直下に後述する

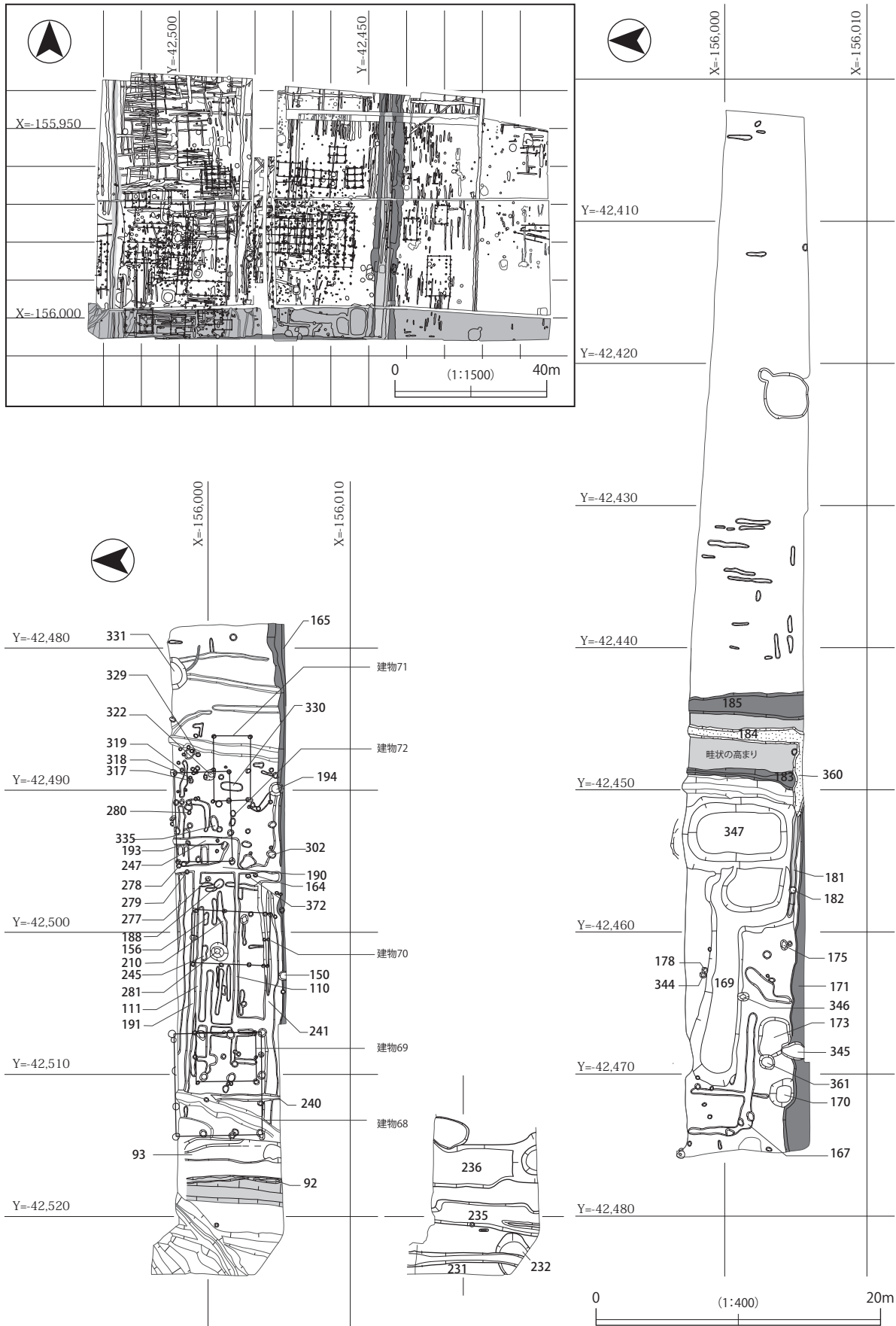


図495 2区 第2面 平面図

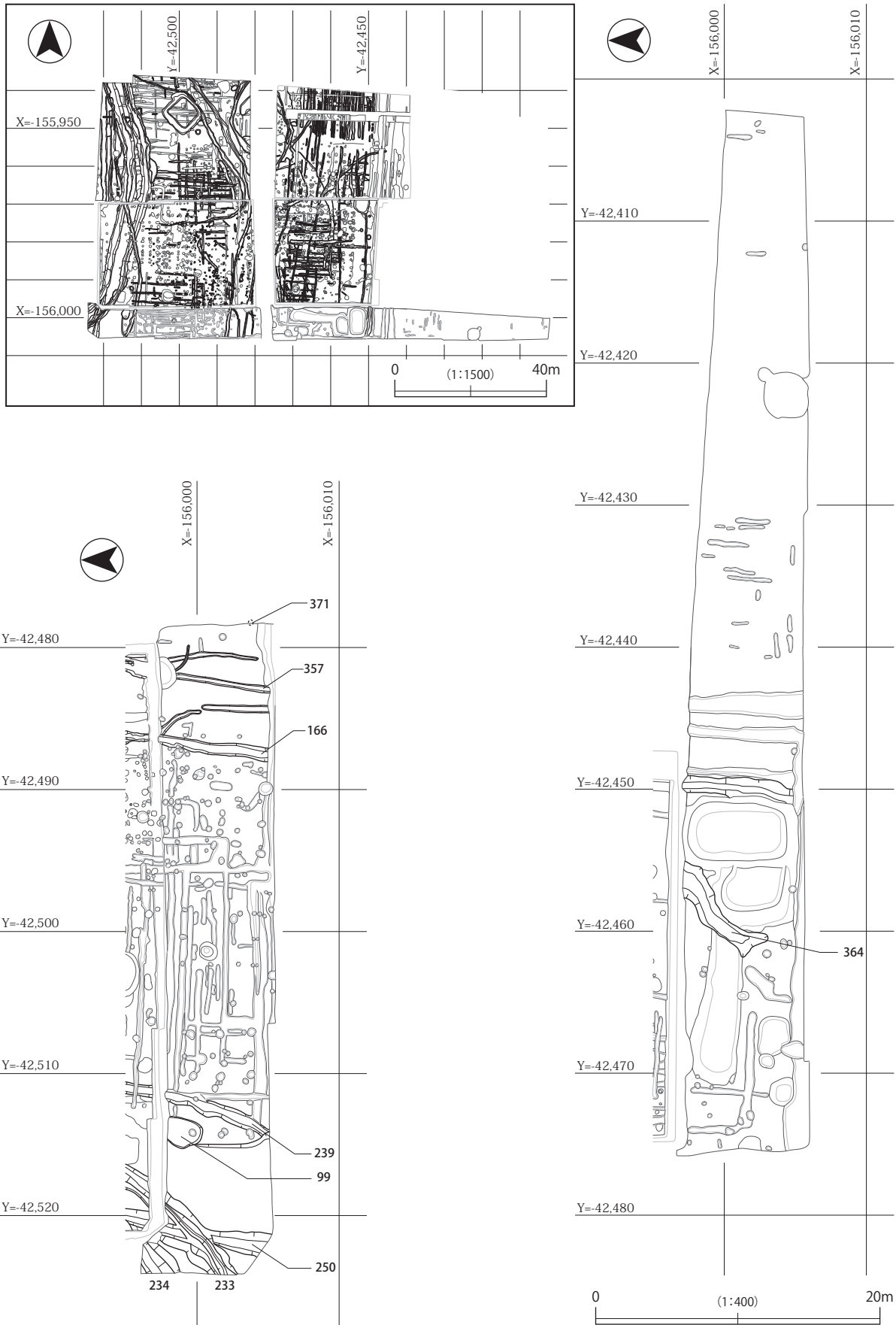
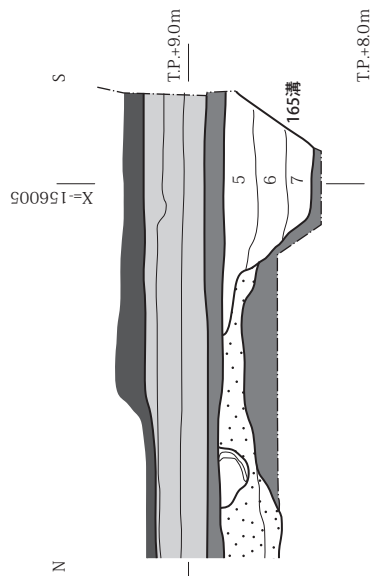
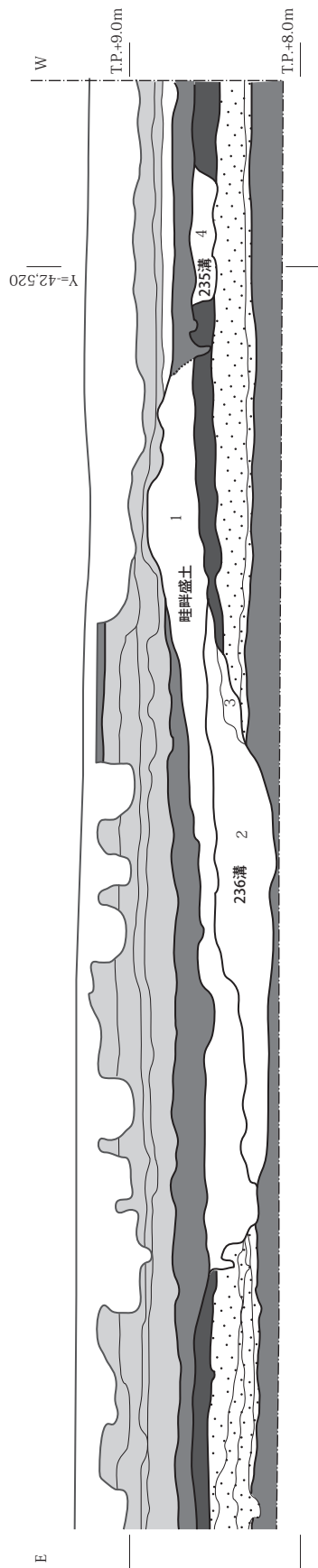


图496 2区 第3面 平面图



- 1 暗灰黄 2.5Y5/2 極細砂~中砂 極粗砂を多く含む 弱く土壌化 炭化物を少量含む (畦畔盛土)
- 2 灰 5Y4/1 粘質シルト 淘汰良い、マンガン沈着 (236溝埋土)
- 3 暗灰黄 2.5Y5/2 砂質シルト 極粗砂を少量含む マンガン沈着 側方の第5・7層が崩落 (236溝埋土)
- 4 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト 粗砂を少量含む (235溝埋土)
- 5 暗灰黄 10YR4/2 粘質シルト 粗砂~極粗砂を多く含む 土師器・須置器片を多く含む (165溝埋土)
- 6 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト 粗砂を少量含む 第5層ブロックを多く含む (165溝埋土)
- 7 暗灰黄 2.5Y4/2 砂質シルト 粗砂を少量含む 第5層ブロックを少量含む (165溝埋土)
- 8 褐灰 7.5YR4/1 極細砂 極粗砂を多く含む (185溝埋土)
- 9 灰黄褐 10YR4/2 砂質シルト 極粗砂を少量含む (185溝埋土)
- 10 褐 7.5YR4/3 細砂 極粗砂を多く含む (184溝埋土)
- 11 黒褐 7.5YR3/1 砂質シルト 粗砂を多く含む (184溝埋土)
- 12 灰黄褐 10YR4/2 砂質シルト 粗砂を少量含む (183溝埋土)
- 13 褐灰 7.5YR4/1 砂質シルト 極粗砂を少量含む (183溝埋土)
- 14 灰黄褐 10YR4/2 砂質シルト 粗砂を少量含む (弥生時代前期溝埋土)
- 15 黒褐 10YR3/2 砂質シルト 極粗砂を少量含む 土師器を少量含む (弥生時代前期溝埋土)
- 16 黒褐 7.5YR3/1 粘質シルト 中砂を微量含む 側方に第5層ブロックを少量含む (弥生時代前期溝埋土)
- 17 褐灰 7.5YR4/1 粘質シルト 淘汰良い (弥生時代前期溝埋土)
- 18 褐灰 10YR4/1 粘質シルト 淘汰良い 側方に第7層ブロックを少量含む (弥生時代前期溝埋土)

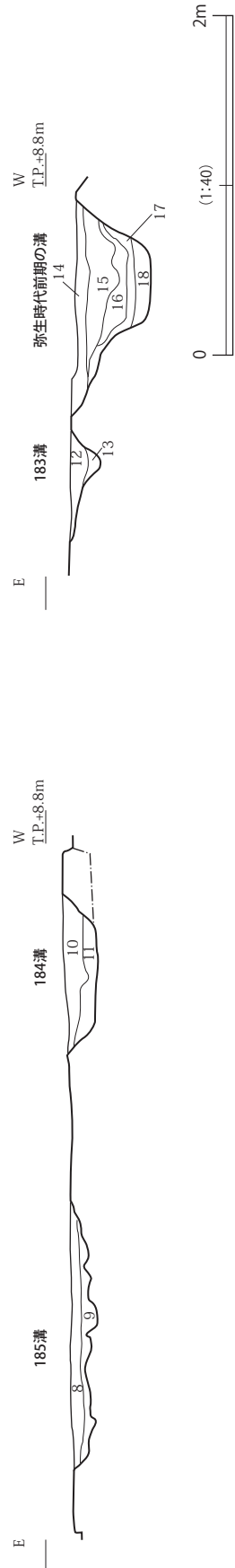


図497 2区 第2面 区画溝 断面図

弥生時代前期の溝が位置していることから、それらの遺構に含まれていた混入資料であろう。2613～2615は黒色土器内黒椀である。出土遺構はそれぞれ異なるが、概ね10世紀前半代の所産と考えられる。

2616～2619は東側区画溝から出土した遺物である。183溝はその他の溝と比較してやや新しい段階の遺物を含んでおり、2616は京Ⅴ期新段階に近似し、2618の瓦器椀は和泉型Ⅰ－2～3期に相当することから、11世紀後葉と位置づけることができる。

上述の183溝に近接する185溝からは「て」字状口縁土師皿(2617)黒色土器内黒椀(2619)が出土している。前者は平安京Ⅲ期中～新に位置づけることができ、10世紀後半の所産と考えられる。

一方、南辺に相当する165溝からは、上述した東西区画溝と比較して遺物が多くまとまって出土しており、図499・500にこれを図示した。

2623～2635は土師器皿、2636・2637は土師器杯・椀である。2623は底部を僅かに上げ底風に作りだし、高台付きの皿としたものである。2624は「て」字状口縁皿で、平安京Ⅱ期新～Ⅲ期古。

2625～2629は口縁端部内面に段を一段作り出すもので、口縁部はやや鋭角に立ち上がる。いずれも平安京Ⅰ期中～新と位置づけられ、9世紀前葉の所産であろう。2630～2637は杯。口縁部外面に強い横ナデを施し、短く屈曲させるもの(2630～2632・2634・2635)、緩やかに内湾して立ち上がるもの(2633・2637)、体部外面にヘラケズリを施し、直線的な立ち上がりを示すもの(2636)の三者が認められる。外面調整の手法からは、9～10世紀の中河内以南で散見される土師器椀同様、斜上方に連続する指頭圧痕を施すものと、横ナデを基調とするもの、ヘラケズリを施すものの三者がある。横ナデを施す杯の形態・分量から、平安京Ⅰ期中～新と位置づけられ、9世紀前葉の所産。

2638～2642は土師器の甕である。2638は直線的に斜上方へ延びる口縁部から直線的な体部へと続く甕Aで、口縁端部は鋭角な面を形成している。体部外面には縦位の粗いハケを施し、口縁部内面には横位の粗いハケを施している。2639～2641は大きく内湾する体部から頸部を経て斜上方に直線的に短く延びる口縁部を有する甕Bである。頸部内面は鋭く屈曲し、稜を成し、外面は強い横ナデによって頸部を作り出している。調整はいずれも指頭圧痕が残存し、これに2641は僅かに工具によるナデが認められる。2642は体部上半に把手を付加するもの。把手は基部で欠損しており、全容は明らかでない。

2643は灰釉陶器の椀である。小片であるため、口径・傾きにやや不安を覚える。

2644～2650は須恵器である。2644は高台を貼り付ける小型の壺。体部はやや直線的に張り、全体的に

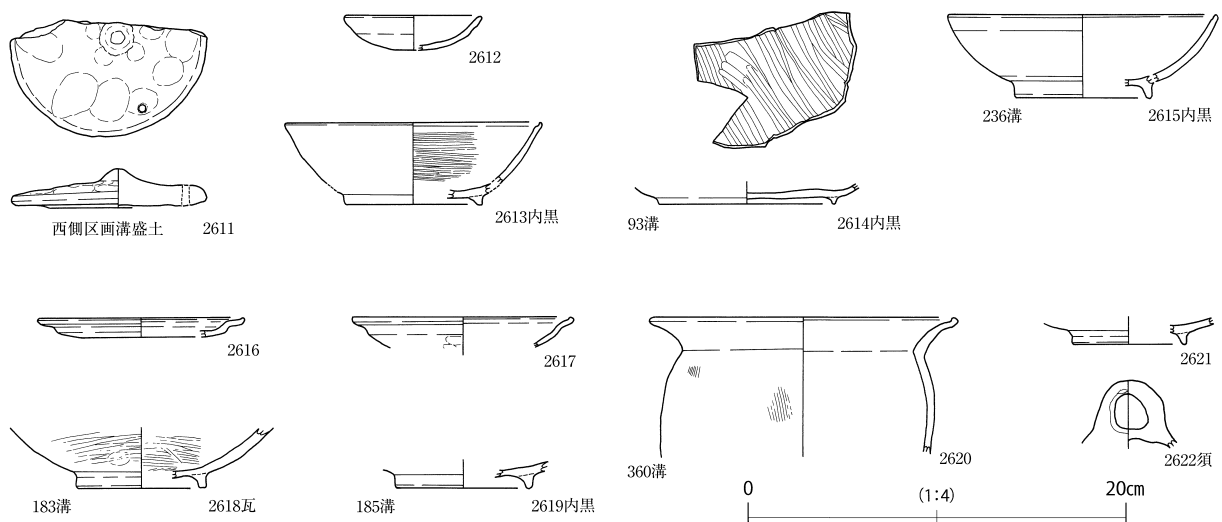


図498 2区 第2面 区画溝 出土遺物

鈍重な作りである。焼成はやや甘く、胎土も粗い。2645は小型の杯。全周せず、約3分の1を欠損する。外側へ強く張り出す高台を貼り付け、やや外反気味ではあるが斜上方に直線的に伸びて口縁部へと至る。内面には、図示範囲に漆と考えられる塗膜がわずかに残存していた。2646・2648は壺底部。2647は杯B。平安京Ⅱ中～新前後で、9世紀後葉の所産か。2649は鉢。同じく9世紀後葉の所産であろう。

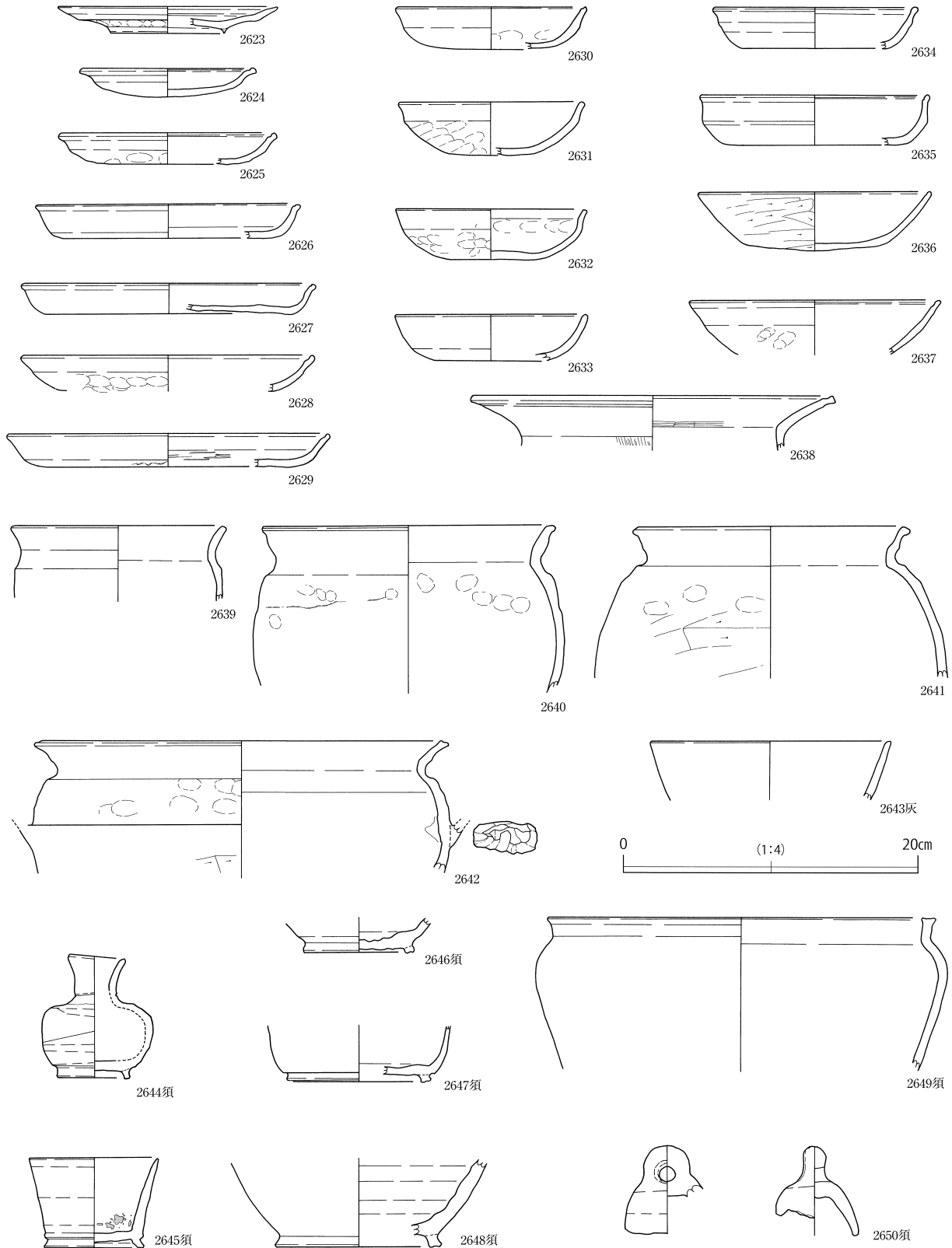


図499 2区 第2面 165溝 出土遺物(1)

2650は蛸壺。体部の中位以下を欠損し、破断面は磨耗が著しい。焼成は甘く、色調は灰白色を呈する。2651～2659は瓦である。端面を留めるもののみを抽出して掲載したが、2651以外はすべて平瓦で、凹面は布目痕を留める。いずれも須恵質焼成である。

以上の出土遺物の示す様相から、これらの区画溝は9～10世紀に位置づけることができる。05-2-5区の調査成果の示す時期も概ねこれと整合することから、本溝に関しては、9～10世紀にかけて継続した集落を区画する溝と考えて良いだろう。なお、本調査区では南辺を検出したことから、区画溝に囲われた屋敷地の規模を特定することとなった。また、この南辺の溝は、現在まで続いていた東西方向の条里に則る道路直下にあたり、条里の施行時期を考える上でも重要なものと考えられる。

〔掘立柱建物68〕（図501・504 図版152・166）

調査区の西端に位置する東西棟の掘立柱建物である。検出は第4 a層を除去した面で行っているの

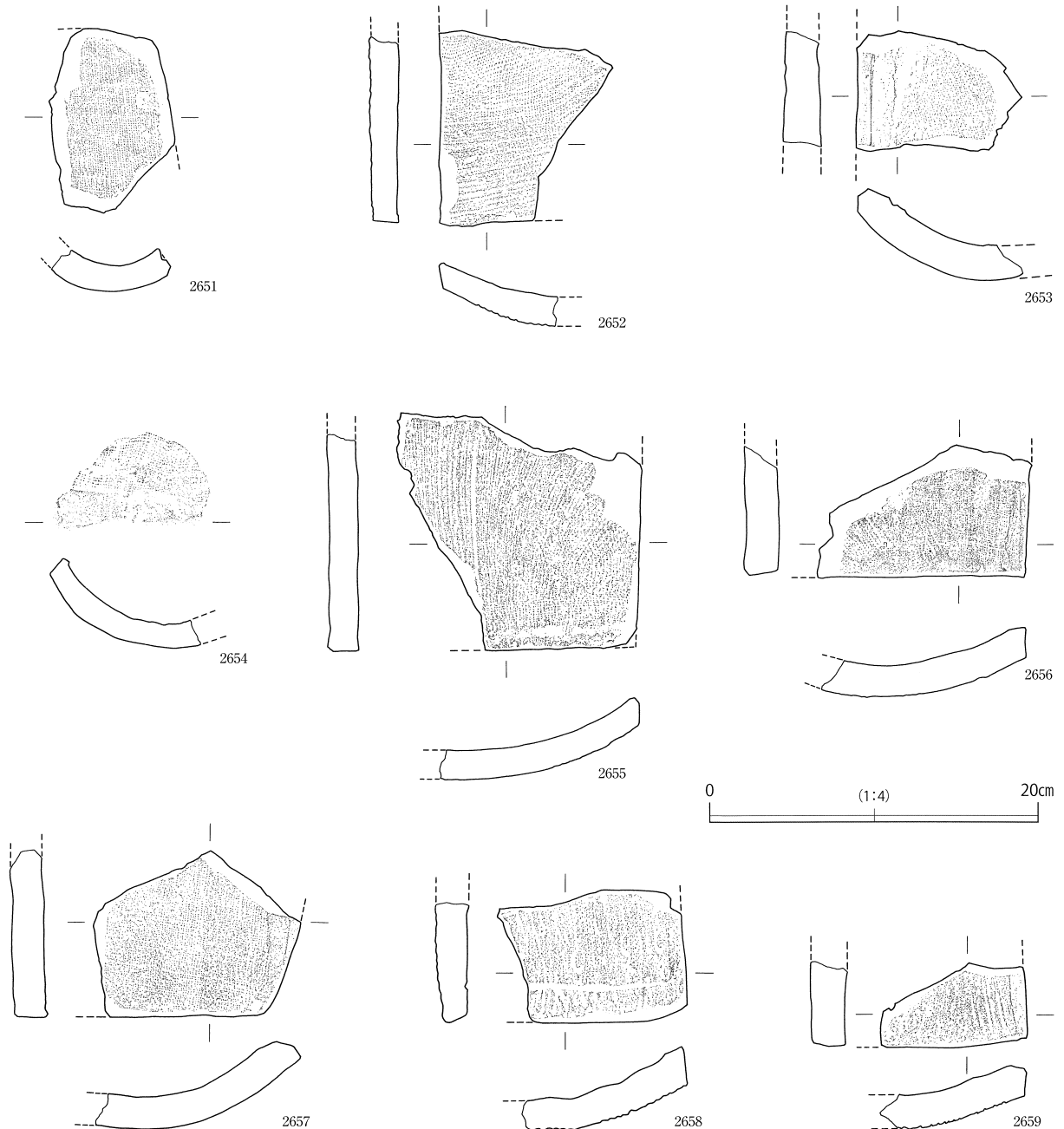


図500 2区 第2面 165溝 出土遺物(2)

で、第2面の建物と考えられる。建物は、柱通りの良い南側の桁で代表させると長軸をN-89.5°-E方向に置き、05-2-5区検出の柱穴を含む桁行3間、梁間3間の柱配置を採る。なお、ここでは05-2-5区の柱穴も含めて考えたが、検出時には135柱穴と269柱穴を隅柱として、141柱穴を介する3間×2間の建物を想定していた。05-2-5調査区の柱穴は、調査区南壁の法面の整形時に辛うじて検出したものであるため、遺構番号も付与されておらず、断面情報も得ることが出来ていない。したがって、これを建物の桁として用いるには、若干の不安が付きまとうが、これらの柱穴群の北側に建物が展開しないことから、掘立柱建物68を構成するものとして報告する。

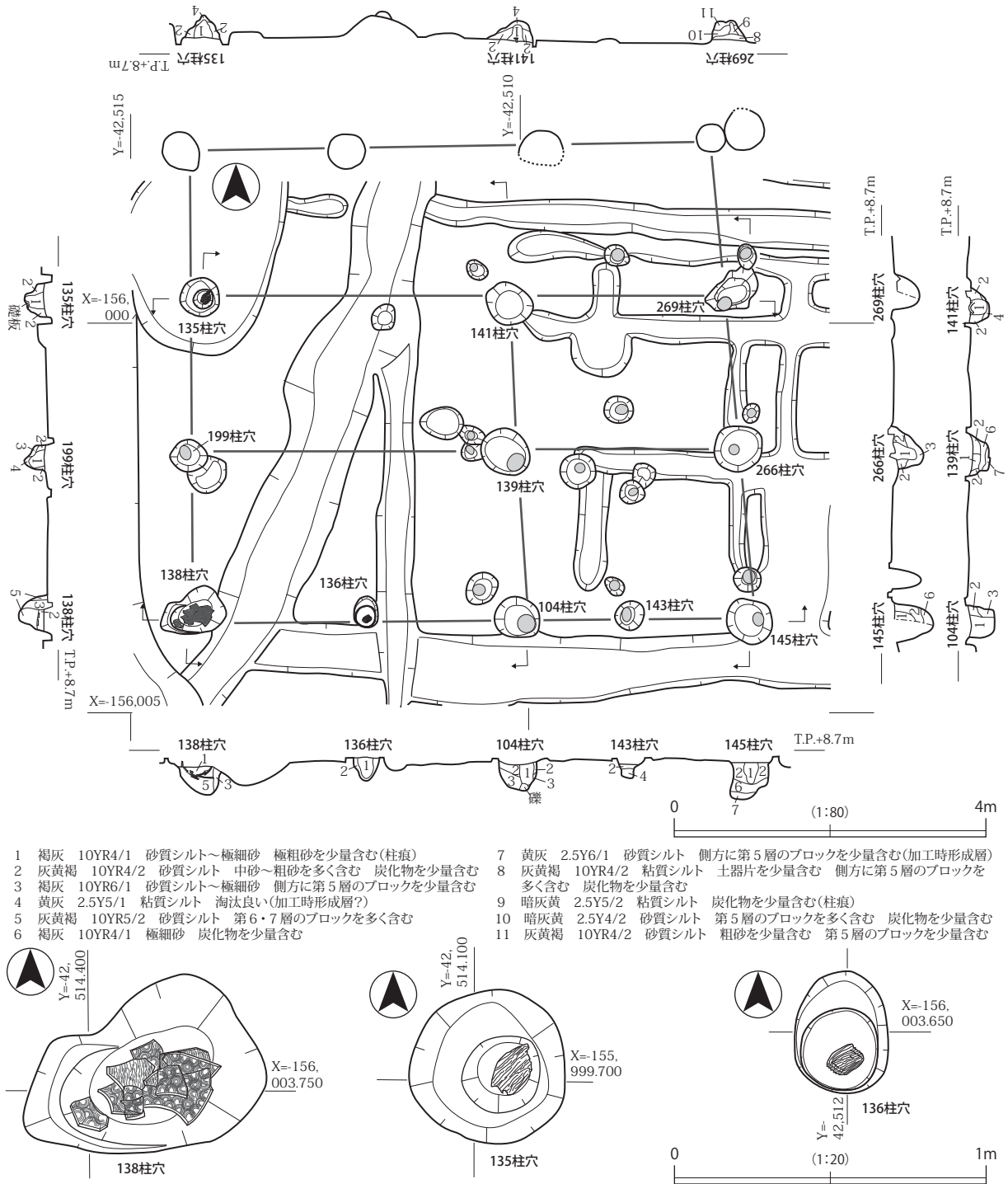


図501 2区 第2面 掘立柱建物68 平・断面図

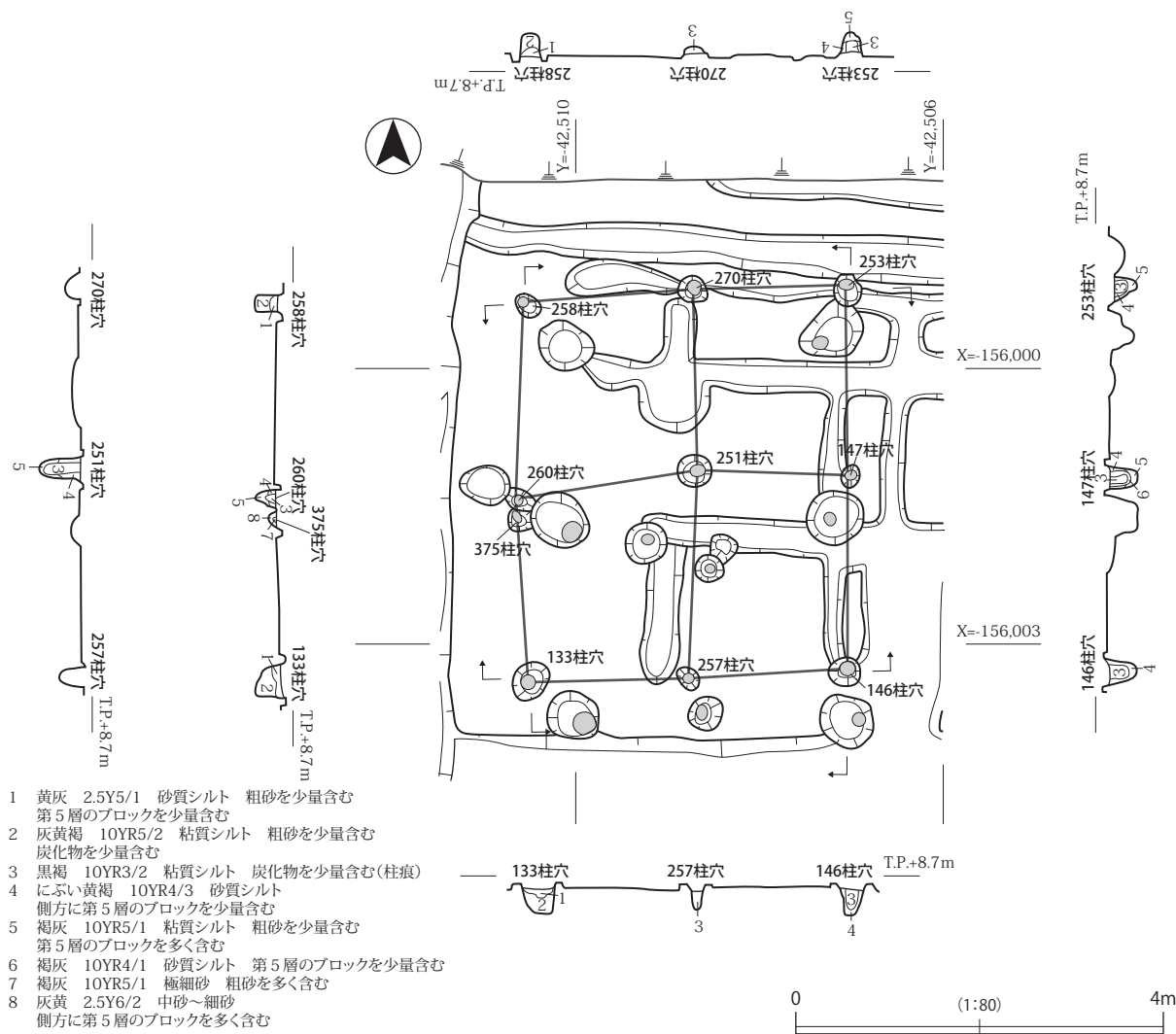


図502 2区 第2面 掘立柱建物69 平・断面図

桁行の長さは南側で7.25m、北側で6.65m、梁間は6.05mを測り、平面形は台形を呈している。柱芯間隔は、2～2.2mとほぼ一定であるが、104柱穴と145柱穴の柱間距離のみ3mと突出して広い。これらの柱穴の間には143柱穴が位置するため、これを介している可能性もあるが、柱穴の深度や埋土の様相からしても143柱穴を建物柱穴とするには根拠に乏しい。

次に建物を構成する各柱穴は、概ね径0.6m程度の不整な円形を示すものが多く、そのほかの建物と比較してやや大振りな深いものが多い点の特徴と言える。坑底の深さは、検出面から0.4～0.5mを測るものが大半を占め、それぞれの柱穴の深さに差異はほとんどない。柱穴埋土は均質であり、褐灰色の砂質シルトを主体とする柱痕と、その側方に堆積する灰黄褐色の砂質シルトで構成されている。

本建物の柱穴は、個々の柱穴内に柱材沈下防止のための措置として、礎を据えているものが多いことが特徴として認められる。特に138柱穴では、埋土上部に須恵器甕体部片が内面を上に向けて重ねた状態で据え置かれており、このほか、135柱穴や136柱穴では柱穴の掘形底部に全長0.1～0.2m、厚さ0.1m前後の木片が礎板として据え置かれていた。同様に104柱穴では柱痕に相当する箇所下部に礎を据えており、これも礎石としての機能を有していた可能性が高い。

なお、139柱穴からは焼土塊が多く認められた。焼土塊の中には、一点内黒の黒色土器が挟み込まれるようにして形成されたものもあり、付近で焼成行為がなされたことが想定できる。

建物の柱穴からは、104 柱穴から土師器皿(2660)が、141 柱穴から土師器甕(2661)が、199 柱穴からは両黒の黒色土器椀(2662)、199 柱穴から鉄釘(2663)、269 柱穴から土師器椀(2793)が出土している。2660の土師器皿は京Ⅳ期古～中段階に位置づけられる。2662の黒色土器椀は極めて精緻な作りで、内面には一定方向の幅の狭い平行ミガキの後に、圏線ミガキを密に施し、体部内面下半に連結輪状の暗文を施す。外面は器表面の摩滅により不確かではあるが、ヘラミガキが施されていた可能性が高い。高台裏面はヘラミガキが認められないが、やや丁寧なナデ調整を施し、平坦に仕上げられている。平安京Ⅲ期古に属することから、10世紀中葉の所産と考えられる。2663の釘は身部下半を欠損する。頭部は一定方向に曲折している可能性が高いが、詳細は不明。錆膨れは少ない。2793の土師器椀は佐藤編年の平安時代Ⅱ期古～中に帰属し、10世紀前葉～中葉の所産。なお、このほかに138柱穴から出土した須恵器体部片もあったが、接合が適わず図示するには至らなかった。

以上の出土遺物から、本建物の時期は10世紀中葉に求めることができる。

〔掘立柱建物69〕(図502 図版152)

調査区の西端に位置する南北棟の総柱掘立柱建物で、上述した掘立柱建物68内部の東側に位置する。検出は第4 a層を除去した面で行っているため、第2面の建物と考えられる。建物は、柱通りの良い東側の桁で代表させると長軸をほぼ座標北に置き、桁行2間、梁間2間の柱配置を採る。

桁行の長さは西側で4.16m、東側で4.18m、梁間は3.5 mを測る。東側の桁が整っているほかは柱穴配置がやや不規則で、平面形は不整な平行四辺形を呈している。

柱芯間隔は桁梁で間隔が異なり、桁行は2.05～2.1 mとほぼ一定の数値を測る。260 柱穴が若干南側に寄っているため258 柱穴と260 柱穴の柱間距離のみ2.15mと広い。梁間は、南側は1.73mで等間隔であるが、北側は258柱穴－270柱穴間が1.65～1.85mを測る。

次に、建物を構成する各柱穴は、概ね径0.25～0.4 m程度の正円ないしは不整な円形を示すものが多い。坑底の深さは、検出面から0.3～0.35mを測るものが大半を占め、梁方向の中央に位置する257・270柱穴が0.2～0.3 mとやや浅いことを除けば、それぞれの柱穴の深さに差異はない。柱穴埋土は均質であり、黒褐色の粘質シルトを主体とする柱痕と、その側方に堆積するにぶい黄褐色ないしは褐灰色の砂質シルトで構成され、側方の埋土には炭化物を含んでいる。

建物の柱穴からは土師器の甕や黒色土器内黒椀、器種不明の須恵器、土師器が出土したが、いずれも細片ばかりであり、図示することができなかった。時期比定も困難な細片であるため断定はし難いが、包含する黒色土器片から9世紀後葉～10世紀中葉の可能性があり、先述した掘立柱建物68よりも古い時期の建物である可能性がある。

〔掘立柱建物70〕(図503・504 図版153)

調査区の西端に位置する南北棟の掘立柱建物で、上述した掘立柱建物69の東側に位置する。検出は第4 a層を除去した面で行っているため、第3面の建物と考えられる。建物は、柱通りの良い東側の桁で代表させると長軸をN-0.5°-E方向に置き、桁行3間、梁間2間の主柱配置を採り、さらにその南面に庇を付加する片庇のものである。

桁行の長さは庇を含むと5.2 m、梁間は北側で3.7 m、南側で3.6 mを測り、平面形は南側にややすばまった逆台形を呈している。柱芯間隔は1～2 mとばらつきがあるが、それぞれの相対する柱芯間隔は概ね対応している。その長さは、桁行の北側で2 m、中央部で1.9 m、南側で1 mを測り、梁間は北側で1.9 m、南側で1.8 mを測る。庇の出は0.25mを測る。

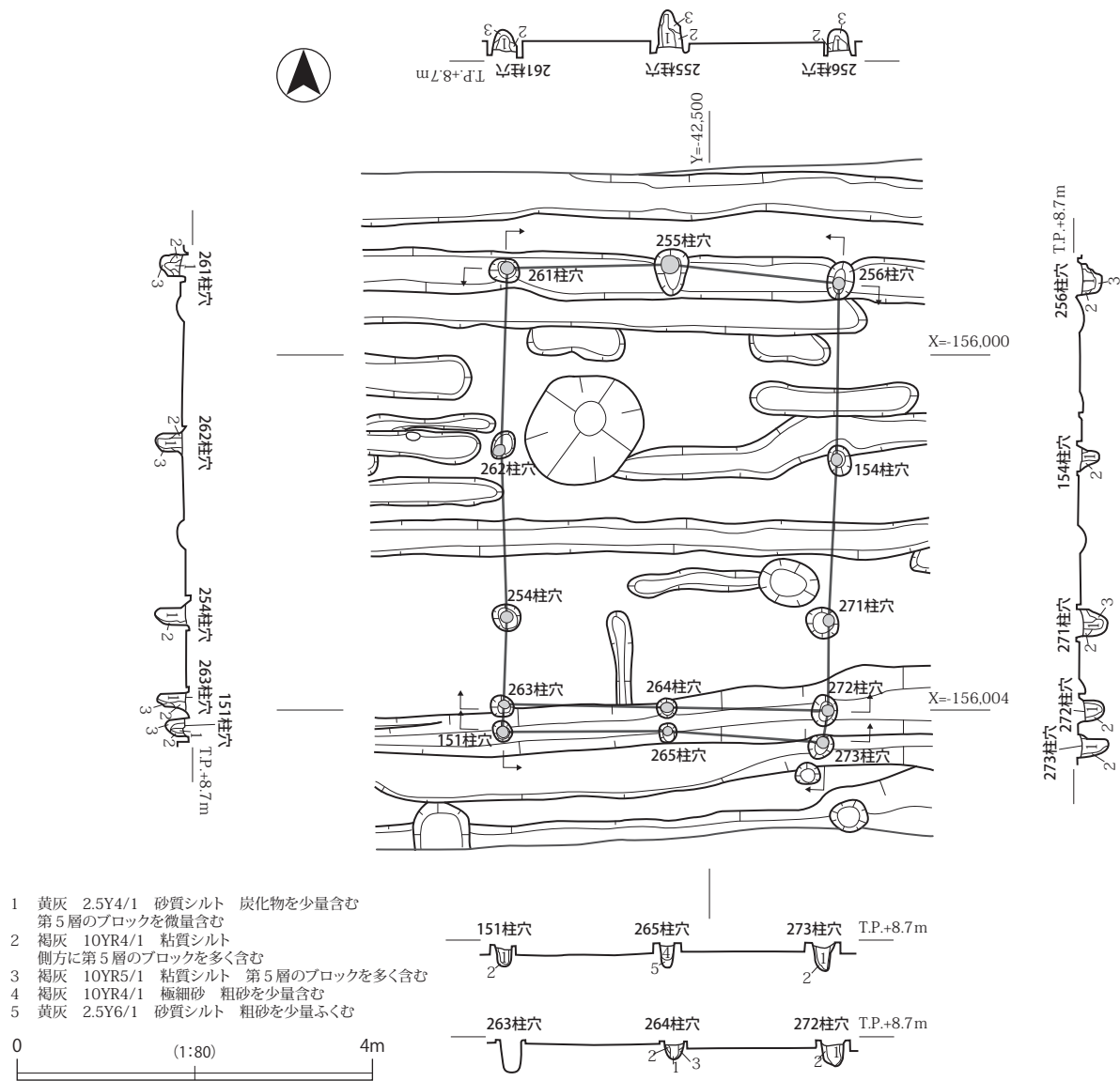


図503 2区 第2面 掘立柱建物70 平・断面図

次に、建物を構成する各柱穴は、北半を中心に概ね長径0.35m、短径0.25mを測る不整な長楕円形を示すものが多く、南半のものは0.25~0.35mを測る正円を示すもので占められる。坑底の深さは262・154柱穴を境界として南北で僅かに深さを違えており、梁間北側の中央に位置する255柱穴が0.5mと突出するほかは、検出面からの深度で南半が0.3m、北半が0.2mを測り、北半のほうがやや浅い傾向

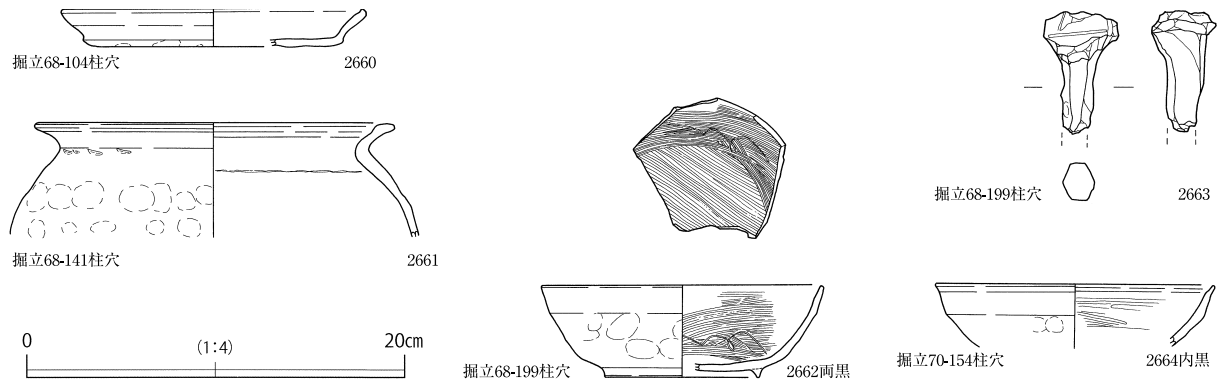


図504 2区 第2面 掘立柱建物68・70 出土遺物

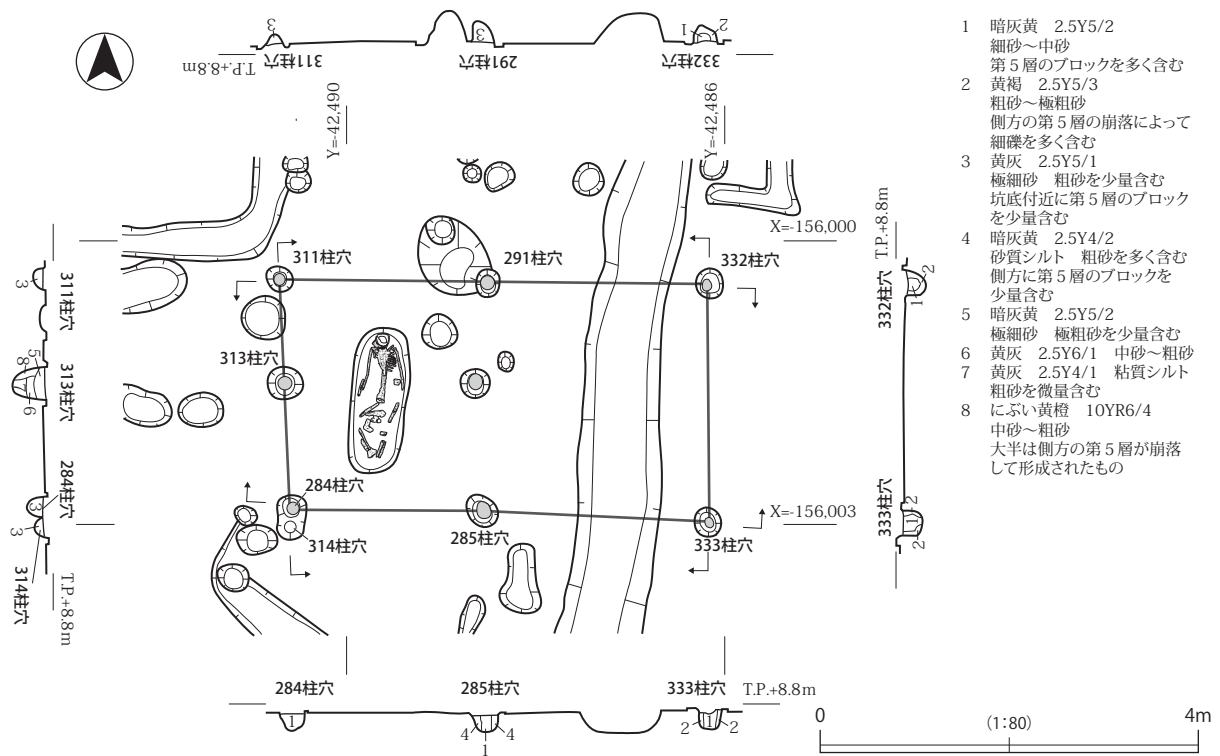


図505 2区 第2面 掘立柱建物71 平・断面図

にある。柱穴埋土は均質であり、黄灰色の砂質シルトを主体とする柱痕と、その側方に堆積する褐灰色の粘質シルトで構成されている。

建物の柱穴からは、黒色土器両黒・内黒椀片のほか、土師器甕・椀片が出土している。いずれも細片を主体とするが、154柱穴から出土した黒色土器内黒椀(2664)をかるうじて図化し得た。2664は口径15cmを測り、口縁部に強い横ナデを施し短く外反させるもので、口縁端部内面にはやや大振りな沈線を施す。内面にはやや幅の広いヘラミガキを圏線状に施し、外面は指頭圧痕が残存する。平安京Ⅲ期古～新段階と考えられることから、10世紀中葉～後葉の所産であろう。その他の出土遺物は細片ながら概ね異なる時期のものを含まないことから、本建物の帰属時期の上限を示すと見てよい。

〔掘立柱建物71〕(図505 図版154)

調査区の西端に位置する東西棟の掘立柱建物で、上述した掘立柱建物70の東側に位置する。検出は第4a層を除去した面で行っているため、第2面の建物と考えられる。建物は、柱通りの良い北側の桁で代表させると長軸をW-0.7°-N方向に置く。柱配置は桁行2間、梁間1間の柱配置を採る。

桁行の長さは南側で4.4m、北側で4.6m、梁間は2.5mを測り、平面形は僅かに南側がすばまった逆台形を呈している。柱芯間隔は、桁行は2.1~2.3mとほぼ一定である。

次に、建物を構成する各柱穴は、概ね長径0.35m、短径0.2m程度の楕円形を示すものが多い。坑底の深さは検出面から0.25mを測るものが大半を占め、313柱穴が0.35mを測るほかは、それぞれの柱穴の深さに差異はほとんどない。柱穴埋土は均質であり、暗灰黄色の細砂～中砂を主体とする柱痕と、その側方に堆積する黄褐色の粗砂～極粗砂までの粗粒の堆積物を主体とする埋土構成されている。なお、本建物の位置する地点では下位層の第5層が本調査区内でもっとも高く遺存していた箇所当たり、その内容は粗砂～細礫まで粗粒化したものから構成されていた。本建物の柱穴が、その他の建物の柱穴と比較して粗粒の堆積物を多く含むのはこのことに起因すると考えられる。

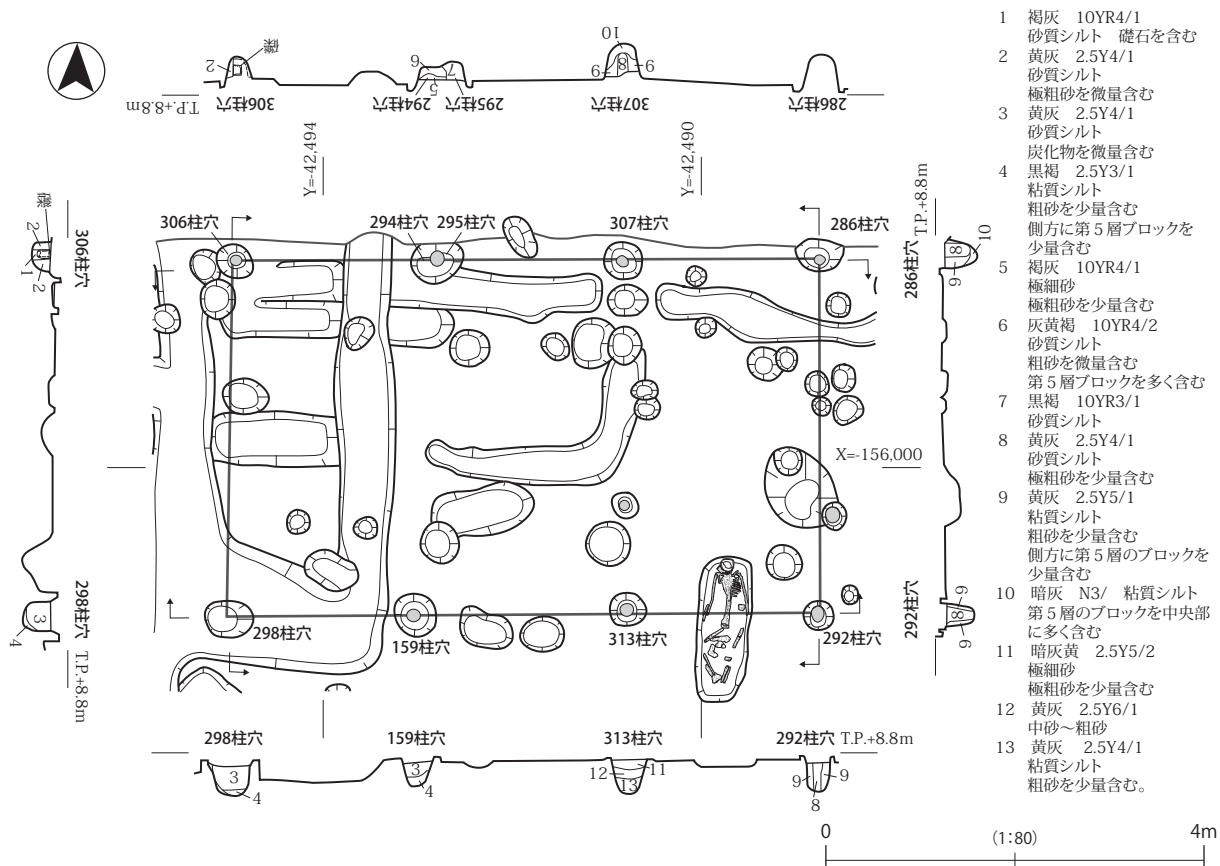


図506 2区 第2面 掘立柱建物72 平・断面図

遺物は極少量の土師器片を含んでいたが、いずれも土師器の細片ばかりであり、遺構の時期を比定する材料としては適切ではない。ただし本建物は、後述する掘立柱建物72及び330土坑墓と平面的な位置関係を共有していることから、すべてが同時並存することは想定し難い。土坑墓内から出土した遺物は、後述するように僅かな細片ながら11世紀前半代のものである可能性が高く、居住域の機能が完全に失われていない時期に埋葬されていることから、土坑墓の被葬者は集落と一定の有機的な関係にあった人物である公算が高い。土坑墓の上に建物を構築することは考えにくいことから、土坑墓よりは古い時期、すなわち10世紀後葉までに位置づけてもよいかも知れない。

〔掘立柱建物72〕（図506 図版155）

調査区の西端に位置する南北棟の掘立柱建物で、上述した掘立柱建物71の北西側に位置する。検出は第4 a層を除去した面で行っているため、第2面の建物と考えられる。建物は、柱通りの良い東側の桁で代表させると長軸をE-0.2°-N方向に置き、桁行3間、梁間1間の柱配置を採る。

建物の規模は、桁行の長さで6.28m、梁間で3.75mを測り、平面形は長方形を呈している。柱芯間隔は桁行で2.08mを基調として、柱穴の配置によって北側では306-294柱穴間、南側では159-313柱穴間で、それぞれ2.25mを測る。一方、梁間は精査を重ねたが、間で適切な柱穴を検出することが出来なかった。そのため、3.75mと広めの柱芯間隔とはなるが1間の建物を想定している。

次に、建物を構成する各柱穴は、概ね径0.3~0.45m程度の不整な円形ないしは楕円形を示すものが多い。坑底までの深さは、検出面から0.3~0.4mを測るものが大半を占め、概して隅柱に相当するものがやや深い傾向が認められる。柱穴埋土は概ね均質で、褐灰ないしは黄灰色の砂質シルトを主体とする柱痕と、砂質シルト~粘質シルトを主体に、ベース土ブロックを含む埋土から構成されている。なお、

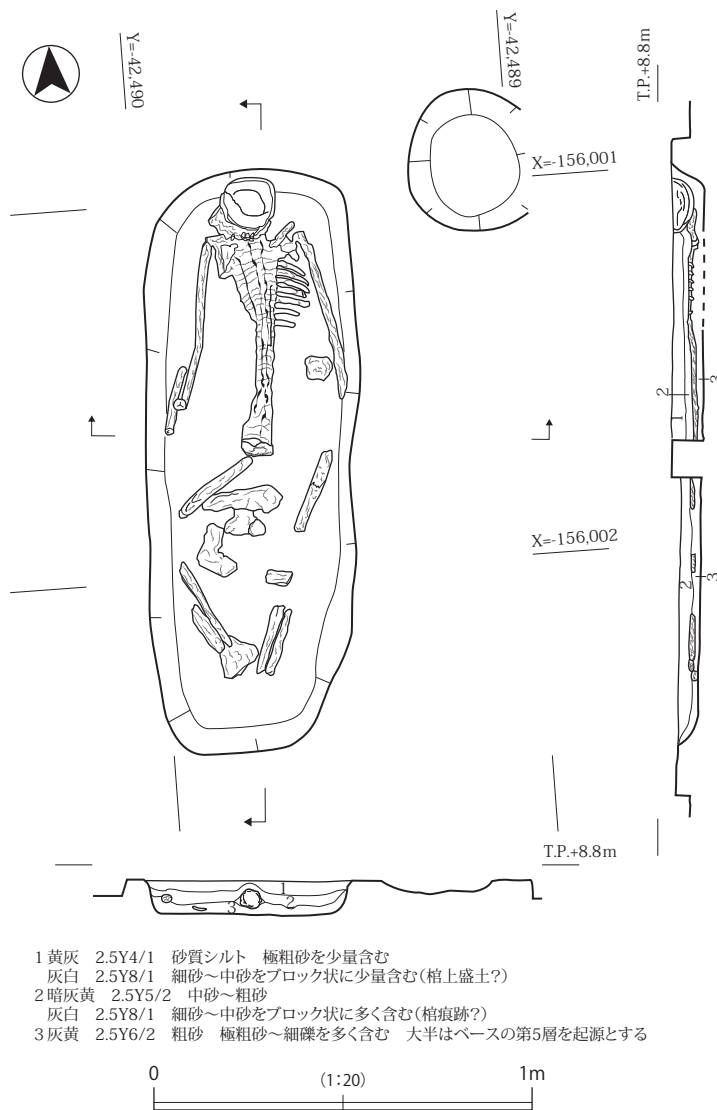


図507 2区 第2面 330土坑墓 平・断面図

層が厚く堆積している箇所相当しており、その影響も受け、付近では第4 b層の堆積がほとんど認められなかった。したがって本土坑墓は第4 a層を掘削した段階で検出しており、第2面の遺構として位置づけられる。

土坑の平面形状は不整な隅円の長方形を呈しており、特に南東部は形状の乱れが大きい。掘形の断面形状は皿形を呈する。土坑の規模は長軸長で1.55m、短軸長で0.57mを測る。

人骨は、遺存状況の善し悪しはさておき、ほぼその全身を確認出来ている。まず頭部は頭骨が土坑掘形の北端部にもたれかけられ、上半分を欠損している状況を確認した。下顎骨の遺存状態が極めて不良であったため、詳細は不明ながら、東西どちらかを向いていた形跡は認められなかった。次いで、胸部にかけては胸椎のほか、土圧による圧縮を受けた肋骨を西半分を中心に検出している。腕部は腐朽が激しく骨端部が不鮮明であったため、上腕骨以下の各骨の構成は不明と言わざるを得ない。手骨はほとんど確認できなかった。次に、腰部は特に腐朽が著しく腰椎の延長を確認したのみであり、仙骨及び寛骨は確認できなかった。脚部は、骨端部は遺存しないものの西側の遺存状態が比較的良好であり、大腿骨から脛骨が「く」の字を成している状況を確認した。ただし、東側の大腿骨はこれとは向きを違えており、寛骨との接続を示さない位置にある。足根骨以下は腐朽が著しく、確認できなかった。

306柱穴の柱痕部中位には、長辺12.8 cm、短辺 8 cm程度のやや不整な直方体の礎石が据えられていた。礎石は砂岩質である。

遺物は少量の黒色土器内黒椀・土師器・須恵器を含むがいずれも細片で図示は成し得なかった。唯一図示できたものに弥生時代後期の甕底部(2686)があるが、混入の可能性が高い。

本建物は、掘立柱建物71と同様 330土坑墓を通る建物プランとなるため、土坑墓よりは先行する建物と考えることができる。掘立柱建物68・70と適度な空間を設けて位置することや建物の規模からしても掘立柱建物68と近似した形状を示すことなど、共伴関係を示唆する要素もあり、10世紀中葉を上限として建てられた建物である可能性が高い。

〔330土坑墓〕(図507 図版157)

調査区西半の東寄り、掘立柱建物71の中に位置する。土坑内より人骨1体分を確認したことから、土坑墓と判断した。検出地点一帯は、下位層の第5

以上の検出状況から、本土坑墓に埋葬されていた人体の埋葬姿勢は仰臥屈葬で、顔は正位置に据え、後頭部を土坑の壁面にもたれかける姿勢をとっていた可能性が高い。人骨の遺存状況は思いのほか悪く、取り上げ時にもパラロイド等を適切に用いて慎重に取り上げを実施したが、大半が崩壊してしまった。加えて顎骨付近の風化も著しく、歯冠等の比較的遺存しやすい部位も確認できなかった。また、腰椎以下寛骨にかけての腰部に到っては埋土の僅かな差異でかろうじてその形状を検出し得たに過ぎなかった。加えて比較的残りの良い部位であった大腿骨についても骨端部は確認できていない。

土坑の深さは深いところで検出面から0.09mを測り、浅い箇所では0.05m程度であった。上述したとおり頭蓋骨が上半分を欠損していることから、本来的にはもっと上位から掘り込まれていた可能性が極めて高く、土坑の平面形状が不整であることもそのことに起因するのかもしれない。隣接する建物の柱穴が0.25m程度と深いことを勘案すると、建物との間には一定の時期差があったと想定できる。

土坑の埋土は、上中下の3層に分けることができる。上層(1層)は極粗砂を含む砂質シルトで、淘汰が悪い。中層(2層)は淘汰の良い中砂～粗砂のほぼ水成層とみられる厚さ0.02m程度の薄層で、人骨の直上を覆うようにして堆積していた。下層は人骨を含み、第5層である極粗砂～細礫を多数含んでいることから、土坑掘削時の壁面等の崩落を主因とする形成層と想定できる。削平が著しく堆積が薄かったこともあり、木棺痕跡の有無については確認できなかった。人骨を覆う淘汰の良い中層の存在から、人骨を覆うなんらかの施設があったことは想定に難くないが、詳細は明らかではない。

遺物は、ごく少量の黒色土器両黒椀・土師器が出土しているが、いずれも細片であり、図示し得なかった。したがって、帰属時期についても明らかにし難いが、黒色土器両黒椀片から10世紀後葉～11世紀にかけての所産である可能性がある。

〔耕作溝〕(図495・508 図版156)

2区の東端を除くほぼ全域で、地割に則った南北東西方向の耕作溝を検出した。これらの溝については、北側の05-2調査においても検出しており、耕作溝として評価している。本調査区でも多数検出しているが、ここではそのすべてを図に掲げず、主なものを抽出して掲げた。具体的には、図508に掲げた110・111・191・167・210・240・241・247の各溝を指している。それぞれの耕作溝は、規模・溝の軸・埋土の諸点においてほぼ近似しており、調査時に確認した限りにおいては重複関係もほとんど認められなかった。そのため、ここではそれら主要なものに関してのみ記述を進めることとする。なお、これらの溝は第4b層の除去後に検出したことから、第3面の遺構と位置づけられる。

東西方向を示す溝としては110溝・210溝・111溝・191溝・167溝・241溝が挙げられる。これらの東西方向の溝は最も長いもので全長約16mを測る。溝の幅は概ね0.3～0.45mを測り、検出面から溝底までの深さ0.06～0.1mを測る。掘形の形状は緩やかな皿状を呈し、埋土は灰黄色の極細砂を基調とし、ベースの第5層をブロック状に少量含んでいる。遺物は111溝から、土師器皿(2665)が1点出土している。このほかにも黒色土器両黒椀・土師器皿・土師器高杯が出土したがいずれも細片で図示し得なかった。土師器皿は平安京Ⅲ期中の可能性があるが、詳細は不明。黒色土器両黒椀片が出土していることも併せて考えると、10世紀代の所産か。このほか同様に東西方向を向く156溝から土師器皿(2666)が出土している。平安京Ⅰ期新～Ⅱ期古の所産。

南北方向を向く溝としては調査区の西端に位置する240溝が挙げられる。第4b層の除去後に検出したことから、第3面の遺構と位置づけられる。調査時の不手際により、弥生時代前期の239溝との重複関係を見落として同時に掘削を進めてしまったため、接続する溝のように見えているが、実際は本溝が

239溝に重複しているものと考えてよい。溝の軸はほぼ座標北を示し、幅は0.35m、検出面から溝底までの深度は0.1mを測る。埋土は砂質シルトの1層のみで構成され、溝底から半周程度が残存する土師器皿(2677)が1点出土した。やや直線的に鋭角に立ち上がる口縁部に端部内面を肥厚させ、一条の沈線を施す。体部外面は指オサエとナデによって仕上げられており、平安京I期新～II期古に位置することから9世紀前葉の所産と考えられる。なお、本溝は05-2調査でも検出したものと同様、南北東西方向の耕作に伴う溝と考えられる。これらの溝は第4b層の堆積が厚い地点では、その除去を行った地点で検出できることから、掘立柱建物群よりも古い段階に存在していた可能性が想定できたが、本溝から出土した2677の土師器皿の示す年代観も、概ねこのことを支持すると考えてよい。

以上、遺構の検出状況からは、これらの遺構の形成-埋没の過程が概ね近似していることが想定できた。加えて出土遺物からは概ね9世紀前葉～10世紀にかけてのものと考えることができ、先述した建物よりは先に形成されたものの可能性がある。

[166溝] (図496・508)

調査区西半東側に位置する南西-北東方向に走向する直線的な溝である。検出長は7.8mを測るが、

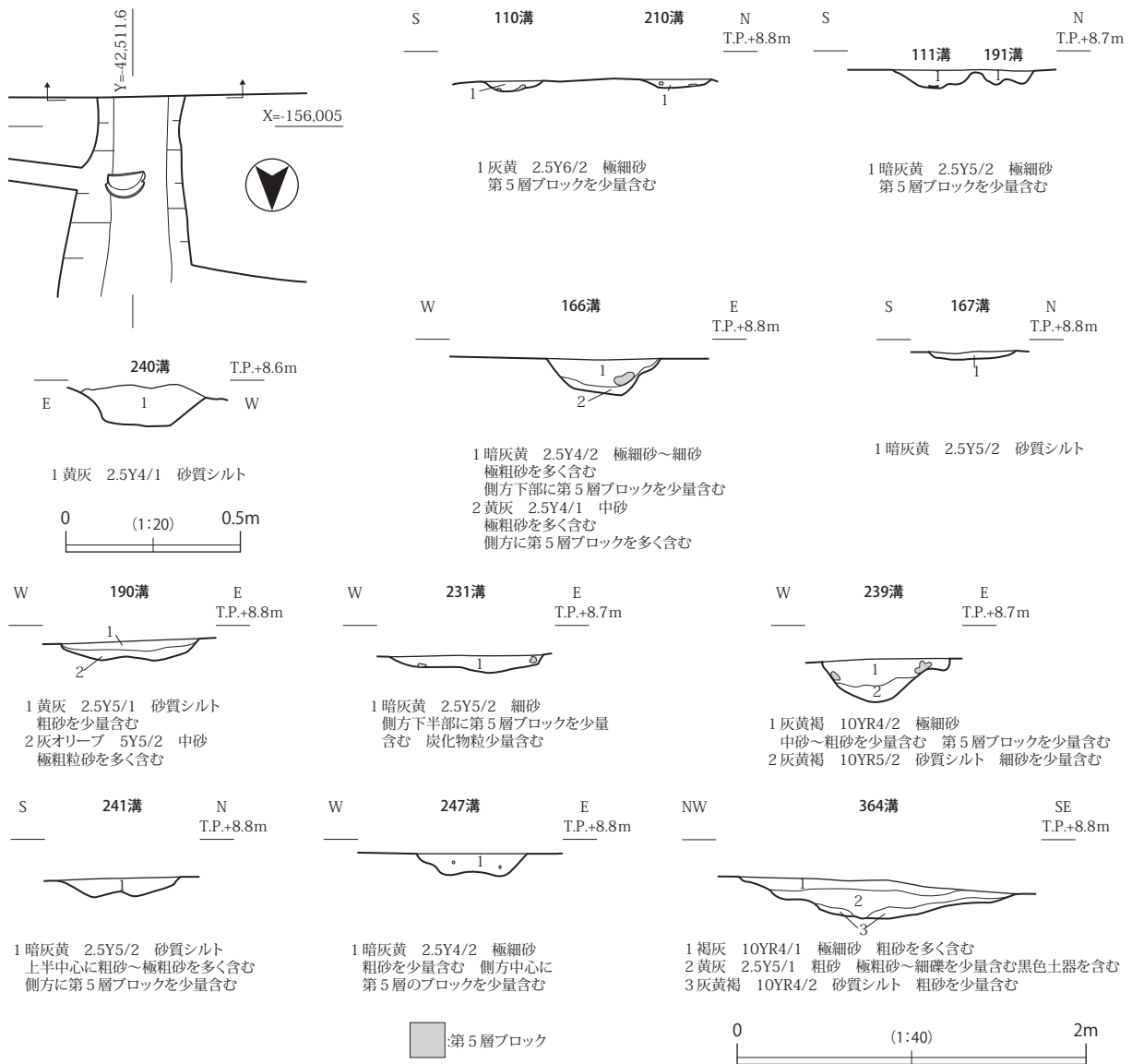


図508 2区 第2・3面 各遺構 断面図(1)

05-2 調査分を含めると緩やかな円弧を描きつつ延びる約34m以上の溝であることが分かる。溝の幅は0.6~1.0 m、検出面からの深さは0.22mを測る。埋土は黄灰色の極細砂~中砂で、上方に向かって細粒化する。遺物はわずかに土師器の細片を含んでいた。本溝は05-2 調査の成果によって弥生時代前期の遺構であることが判明しており、この土師器片については混入資料とみることができる。

[181溝] (図509)

調査区東半中央部南側に位置する東西方向の溝である。347 土坑に重複する。溝の位置と規模からL字状に曲折する184・360溝の延長の可能性もある。ここでは遺物のみを掲げた。2667・2668は黒色土器内黒椀、2669は同じく黒色土器で、口径に若干の不安を残すものの口縁端部の造作から考えて大型の鉢であろう。2670は灰釉陶器の壺底部である。胎土はやや粗い。

[190溝] (図508 図版169)

調査区西半の東寄りに位置する南北方向の溝である。周辺の耕作溝群との重複関係は視認できなかった。

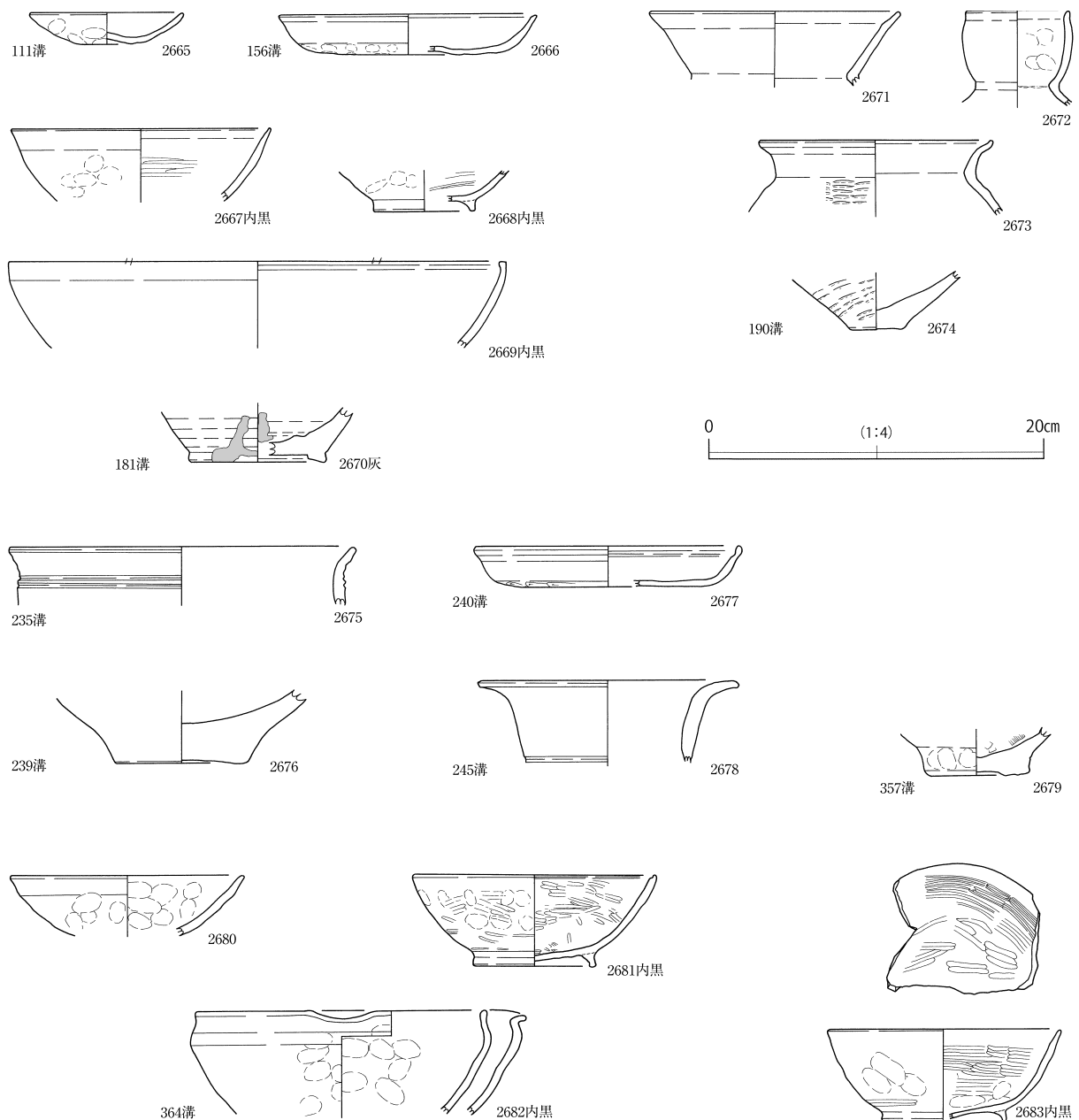


図509 2区 第2・3面 各遺構 出土遺物(1)

たためばほぼ同時期のものと考えられるが、出土した遺物はいずれも弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器であった。いずれも細片を中心とするため、混入の可能性も否定できないが、溝の中央部で平面形状が崩れている箇所があり、弥生時代後期末の遺構を調査時に誤認して同時に掘削した可能性もある。弥生時代後期末の遺構・遺物は数的に限定されるため、その分布と傾向を示すことも意義あることと考え、図示するに至った。広口壺(2671)・小型壺(2672)・甕(2673・2674)が出土している。2671は甕とするには口縁部の伸びが直線的で長いため、広口壺を想定した。2672は短頸直口壺の口縁部を大きく内湾させるもの。口縁端部は僅かに斜外方につまみ出す。胎土はやや粗い。2673・2674の甕は粗めの右肩上がりのタタキを施すV様式系甕で、底部はわずかに突出する平底、頸部内面の屈曲はやや鋭角で、口縁端部は短く摘み上げられ口縁端部は外反する。いずれも河内VI-2様式以後の様相を示す。

[231溝] (図508 図版150)

調査区西端に位置する南北方向の溝である。232土坑に重複し、溝の軸はほぼ座標北を向いている。溝の幅は0.85～1.2 m、検出面から溝底までの深さは0.1 mを測る。遺物は弥生土器を18点確認できたが、いずれも細片のため図示出来なかった。破片の様相から弥生時代前期の所産と想定できる。

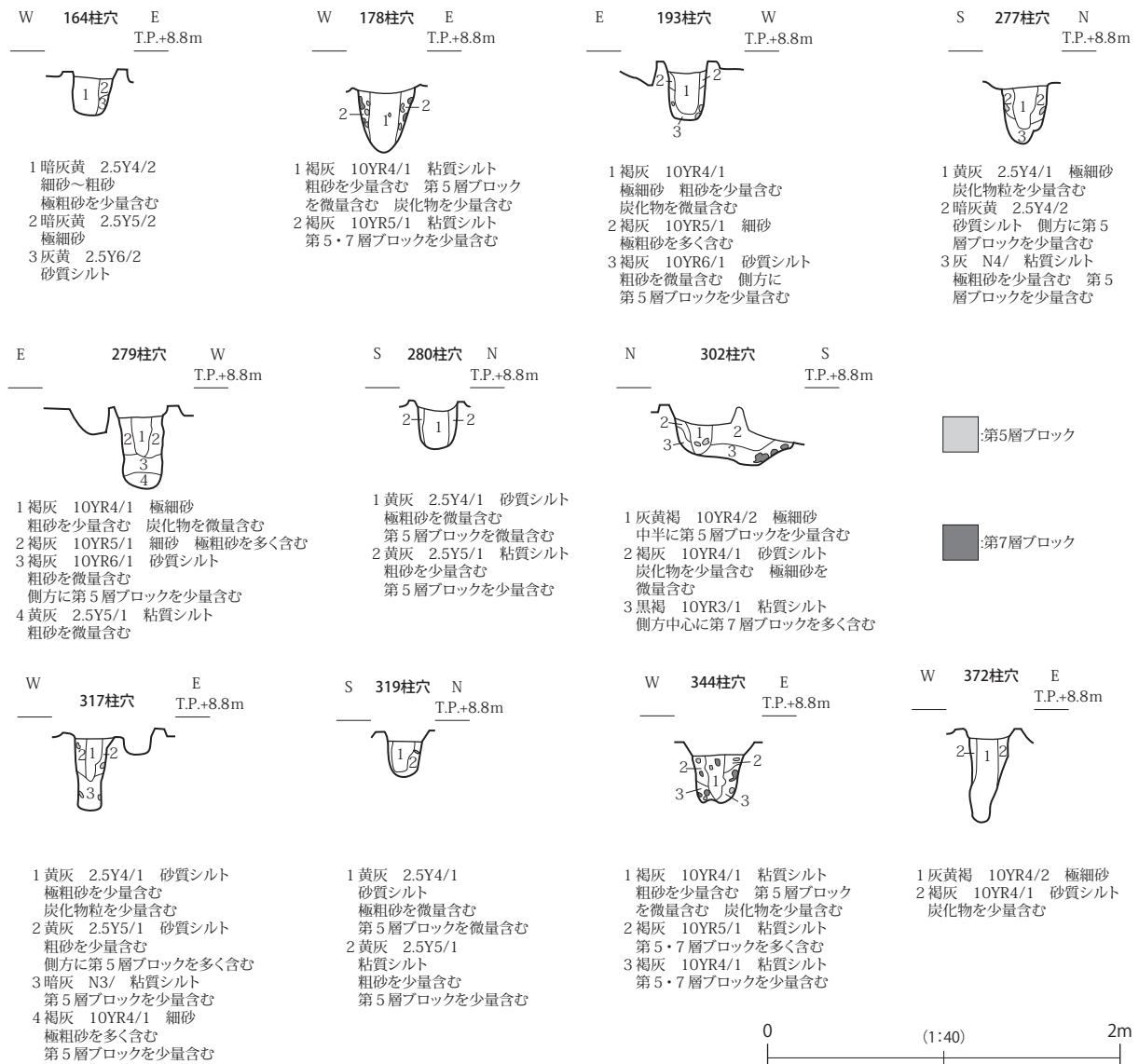


図510 2区 第2・3面 各遺構 断面図(2)

〔235溝〕（図版150）

調査区西端に位置する幅 1.6～2.2 mの溝である。遺物のみを掲げた。2675は弥生時代前期の甕で如意形口縁を付し、頸部に 2 条の沈線を施す。河内 I - 2 ～ 3 様式に属する。

〔239溝〕（図508・509）

調査区西半西寄りに位置する南西－北東方向の緩やかな円弧を描く溝である。第 4 b 層を除去した時点で検出したことから第 3 面の遺構と位置づけることができる。全長10.6mを測るが、05－2 調査分を含めると全長45m以上の溝となる。溝の幅は 0.8～1.05m、検出面からの深さは0.25mを測る。遺物は辛うじて 1 点の弥生土器壺底部片(2676)を図示し得た。弥生時代前期の所産。

〔245溝〕（図509）

調査区西半北寄りに位置する東西方向の溝である。耕作溝である 156 溝と規模・方向ともに同じものであることから、本来同一の溝であった可能性が高い。2678は広口壺である。頸部には沈線を施すが全容は明らかでない。河内 I - 3 ～ 4 様式に属するが先述の理由から混入資料の可能性が高い。

〔357溝〕

調査区西半西寄りに位置する南東－北東方向を向く幅 0.5 mの直線的な溝である。2679の弥生土器底部片が 1 点出土した。やや大きく突出する底部はドーナツ底状を呈する。詳細な時期は不明であるが、弥生時代前期の所産とみることができる。

〔364溝〕（図508・509 図版168）

調査区東半中央部北側に位置する南西－北東方向の不定形な溝である。169 土坑に重複されている。幅1.16～2.5 m、検出面から溝底までの深さ0.25mを測る。埋土は第 5 層と極めて近似したものであったため、当初はその存在に気づかず、実際には第 5 層の掘削中にその存在に気づいて調査を実施した。なお、本遺構周辺にはほとんど第 4 b 層の分布は認められない。土師器・黒色土器を中心に溝底付近から遺物が出土した。遺物は土師器椀(2680)・黒色土器内黒椀(2681・2683)・黒色土器内黒片口鉢(2682)が出土している。2680の土師器椀は長原編年の平安時代Ⅱ期中～新に、黒色土器内黒椀は平安京Ⅲ期古～中に帰属するとみることができ、10世紀中葉の所産と考えられる。

〔柱穴〕

調査区の各所で、掘立柱建物を構成するには至らなかった柱穴を検出している。南側に延びる建物の可能性もあることから、図 510 に掲げた。302 柱穴を除けばいずれも径 0.2～0.3 m程度のもので、柱痕跡を明瞭に留めている。検出は164・193・280・317・372の各柱穴が第 2 面で、そのほかはすべて第 3 面で検出している。

遺物は、153 柱穴から土師器皿が 1 点出土している。平安京Ⅲ期中～新のもので10世紀後葉の所産の可能性はある。

〔169土坑・347土坑〕（図512～517 図版156・167・168）

調査区東半西側に位置する大型の土坑である。遺構の規模が大きく、掘形の形状にも違いが認められ

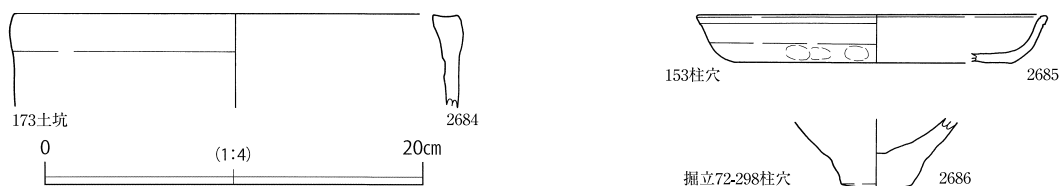


図511 2区 第2・3面 各遺構 出土遺物(2)

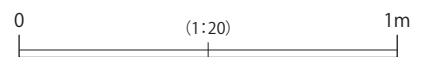
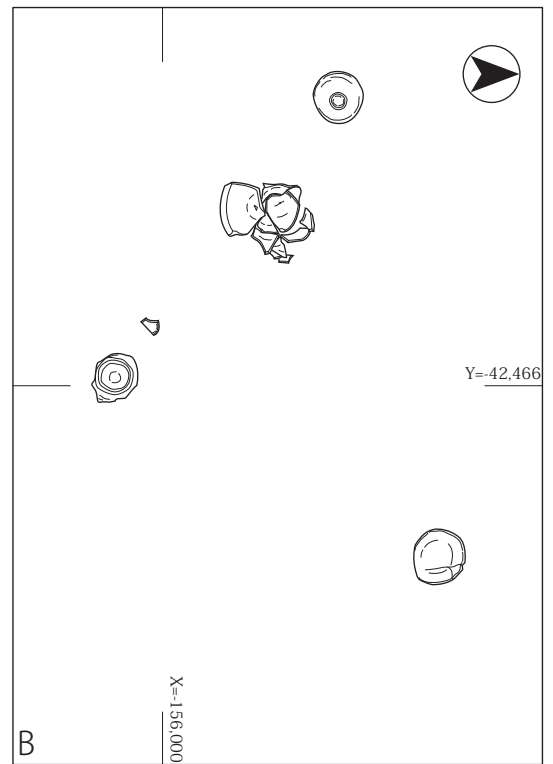
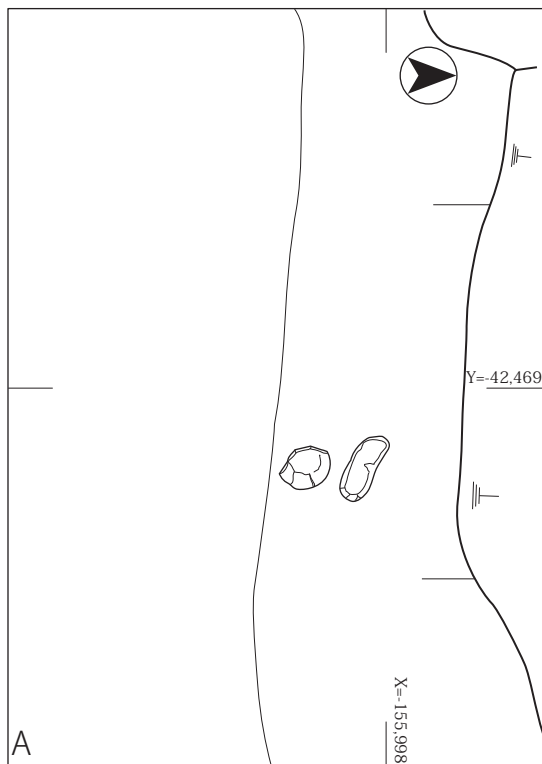
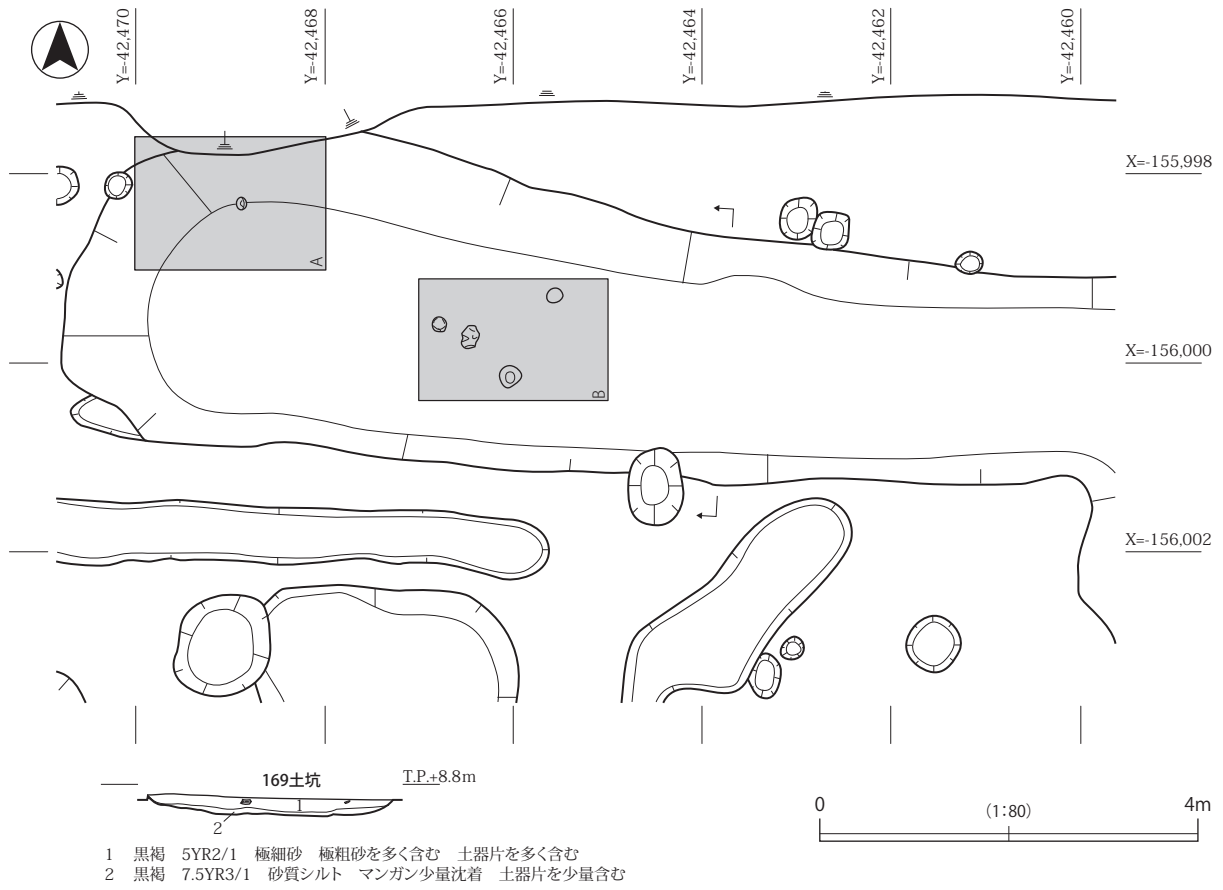


図512 2区 第2面 169土坑 平・断面図

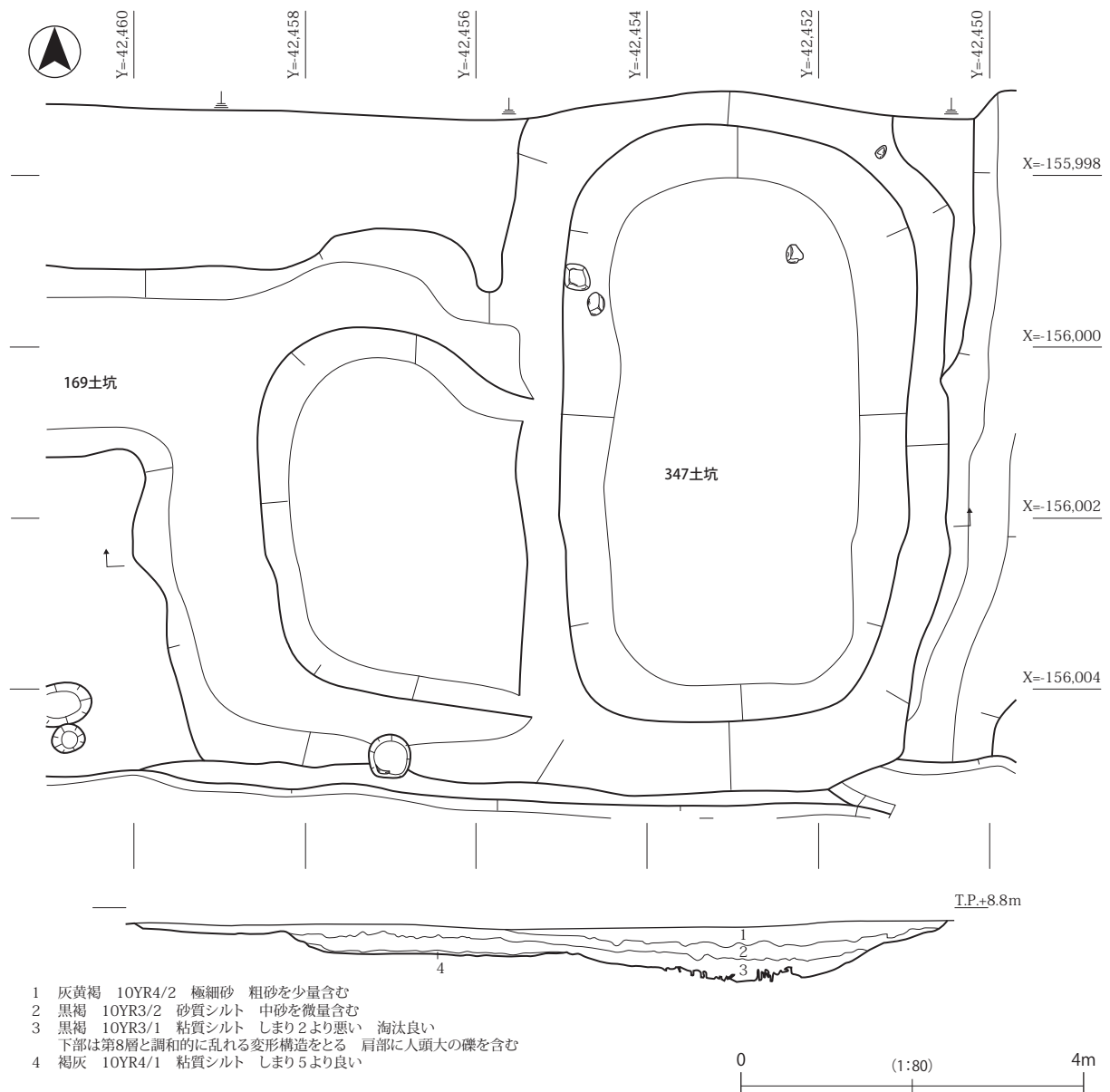


図513 2区 第2面 347土坑 平・断面図

たことから、西側の東西方向に伸びる溝状の落ち込みを169土坑、東側の隅円方形の南北方向の落ち込みを347土坑としたが、両者の間に明確な重複関係があるわけではない。なお、周辺には第4b層が分布していないため、いずれも第4a層を除去した段階で検出している。

土坑の規模は169土坑が幅2.25~3.35m、検出面からの深さ0.25mを測り、347土坑が幅5.2m、検出面からの深さが最も深い箇所0.68mを測る。土坑の掘形は169土坑が緩やかな皿状、347土坑が2~3段の段を有するすり鉢形を呈している。

埋土は黒褐色の淘汰の良い均質な細粒の堆積物を基調とし、ラミナは認められなかった。加えて347土坑の底面付近では埋土と加工面との境界に調和的な地層の乱れが認められた。なお、ベースとなる第5~8層の各層準は、すべて淘汰の良い砂質シルト~粘質シルトであった。水漬状態のまま地震動等の影響を受けたものとも想定できる。

遺物は両土坑から一定まとまった量が出土している。図514~516は169土坑から出土した遺物である。主に埋土の上層を中心として出土した。完形ないしは半完形に近い遺物を含む点で特徴的である。

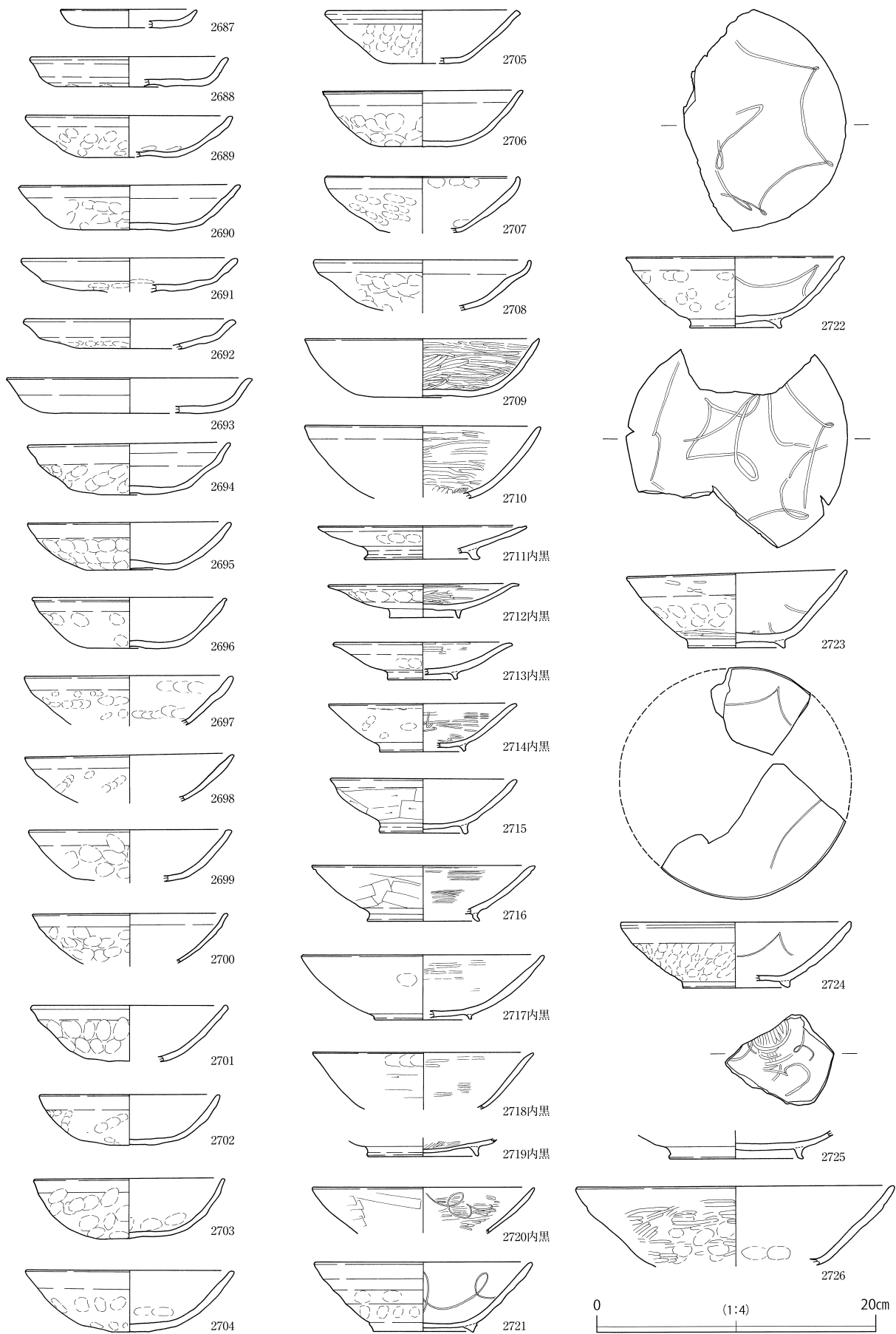


图514 2区 第2面 169土坑 出土遗物(1)

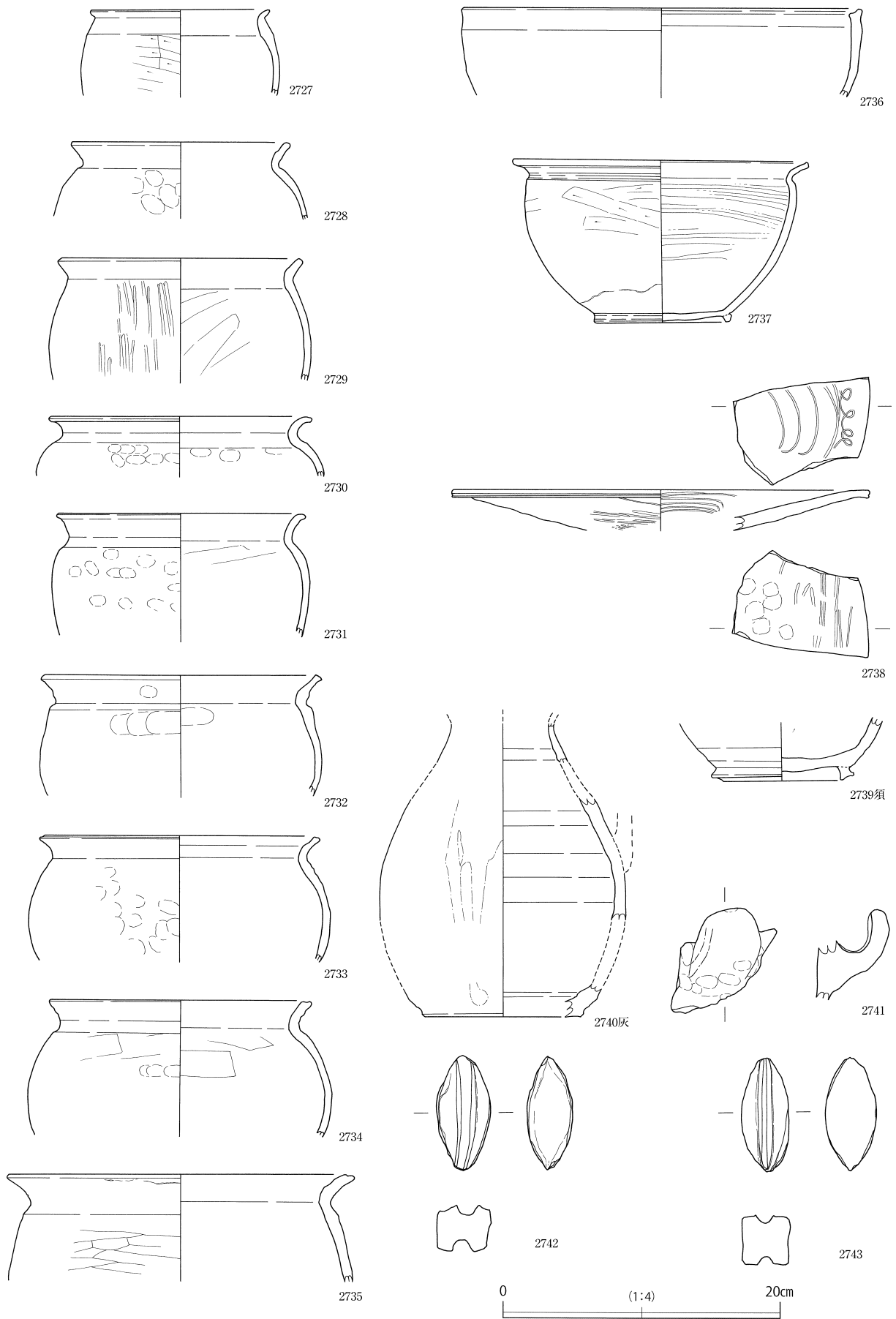


图515 2区 第2面 169土坑 出土遗物(2)

皿・椀類には、土師器皿(2687・2688・2691～2693)、高台を付加しない土師器椀(2689・2690・2694～2710)、高台を付加する土師器椀(2715・2716・2721～2726)、黒色土器内黒皿(2711～2714)、黒色土器内黒椀(2717～2720)がある。

土師器皿は口縁部の立ち上がりの形状から、鋭く屈曲させて直線的な口縁部を形成するもの(2687・2688・2693)と底部から緩やかに内湾しつつ立ち上がり、鈍く屈曲して立ち上がるものの二者がある。

土師器椀は高台の有無に付け加えて、口縁部を直線的に伸ばして端部を丸く収めるものと端部外面にナデを施して口縁部を短く外反させるもの、口縁端部内面を強く横ナデし、端部内面を内湾させ受け口状に仕上げるものの三者に分けられる。なお、体部外面の調整はすべて右肩上がりの幅の広い指頭圧痕を連続して2ないし3段に分けて連続的に施す。黒色土器内黒皿は高台を付加するもので、2711以外はいずれもやや内湾気味の体部から口縁端部を僅かに外方へ平行に引き出すもの。高台は小振りな断面三角形形状のものを垂直方向に貼り付ける。黒色土器内黒椀は器高がやや低平で立ち上がりも緩やかに内湾している。2726は大型の土師器椀。復元口径22.6cmと突出するほか、外面にはヘラミガキを施すなどその他の土師器椀とは異なる特徴を有する。その他の土師器椀は2724がやや口径が広く低平な印象を与える以外は、口径15.4cm器高5.4cmと概ね近似した傾向を示し、体部内面上半に6点程度に分割した波状暗文を施している。

2727～2736は土師器の甕である。2730以外は概ね近似した口縁部形態を示している。口縁部のみではあるが、2727と2735を除けば法量的にもほぼ一定しているようである。2736・2737は土師器鉢。2737は

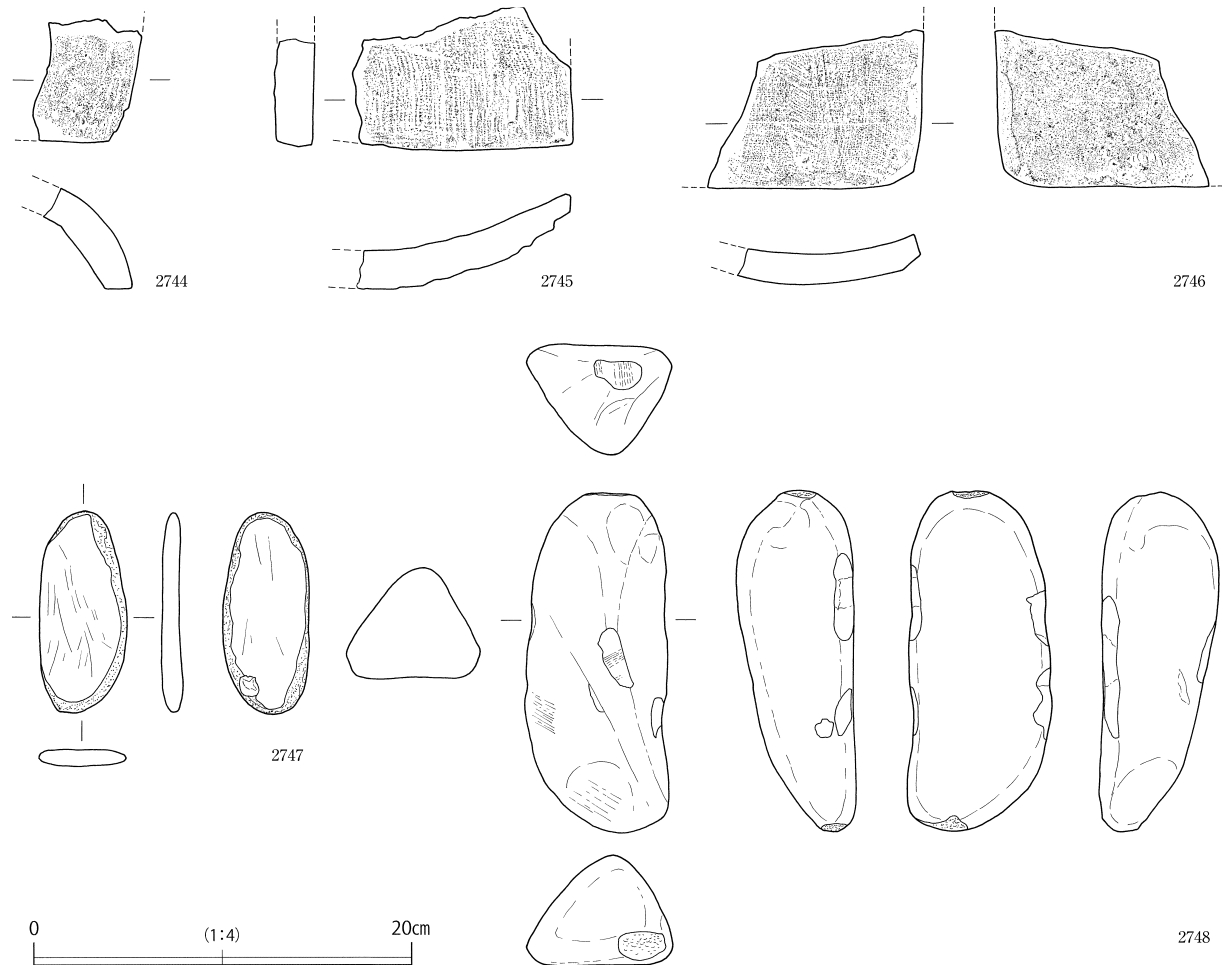


図516 2区 第2面 169土坑 出土遺物(3)

ほぼ完形である。2738は土師器高杯。体部から口縁部にかけて直線的に延び、口縁端部は外面に面を形成して沈線を一条施す。9世紀前葉の所産か。

2739は須恵器壺底部。2740は灰釉陶器の把手付瓶。残存状態が悪く、図上での復元となっているため、位置関係を含め若干心許ない点もある。把手は欠損の痕跡が認められ、体部最大径の直上に取り付いていたと想定できる。2741は土師器甕ないしは甑の把手。2742・2743は紡錘形の土錘である。土師質で断面形状は方形を呈する。2744～2746は須恵質の平瓦。凹面には布目痕が残存する。2747・2748は擦痕のある礫片である。

図517は347土坑から出土した遺物である。図示はしなかったが、埋土下層を中心に人頭大の礫が出土したほか、埋土中層以上で土師器・黒色土器を中心とした土器・土製品が出土している。

2749は土師器「て」字状口縁皿、2750～2753は土師器杯である。黒色土器は内黒(2754～2757・2759・2761・2762)、両黒(2758)がある。2766は高台付きの土師器鉢もしくは椀。2763・2764は土師器羽釜である。球形体部の上半部に短い鏢を取り付け、口縁端部は斜外方に面を成す。

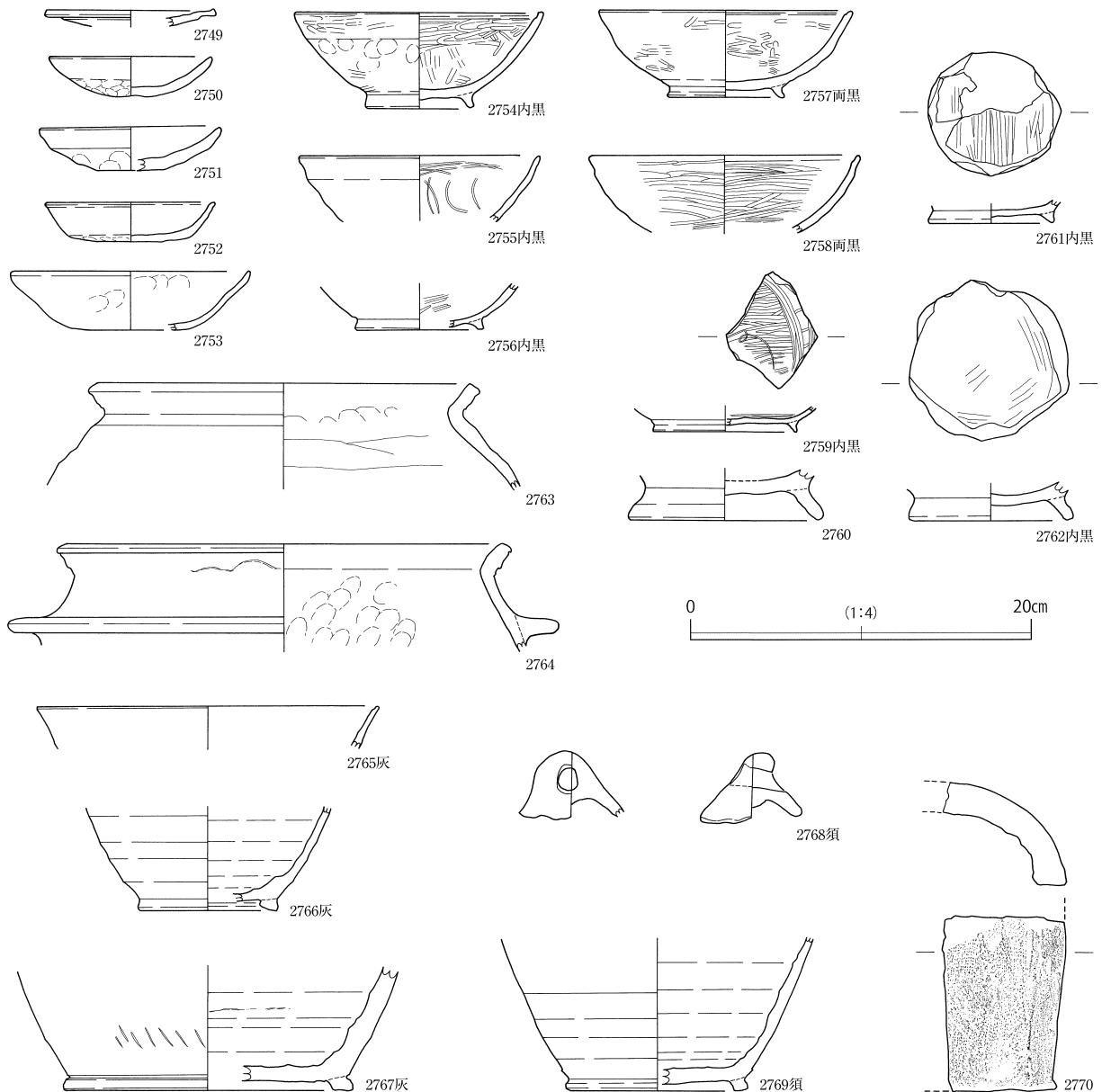


図517 2区 第2面 347土坑 出土遺物

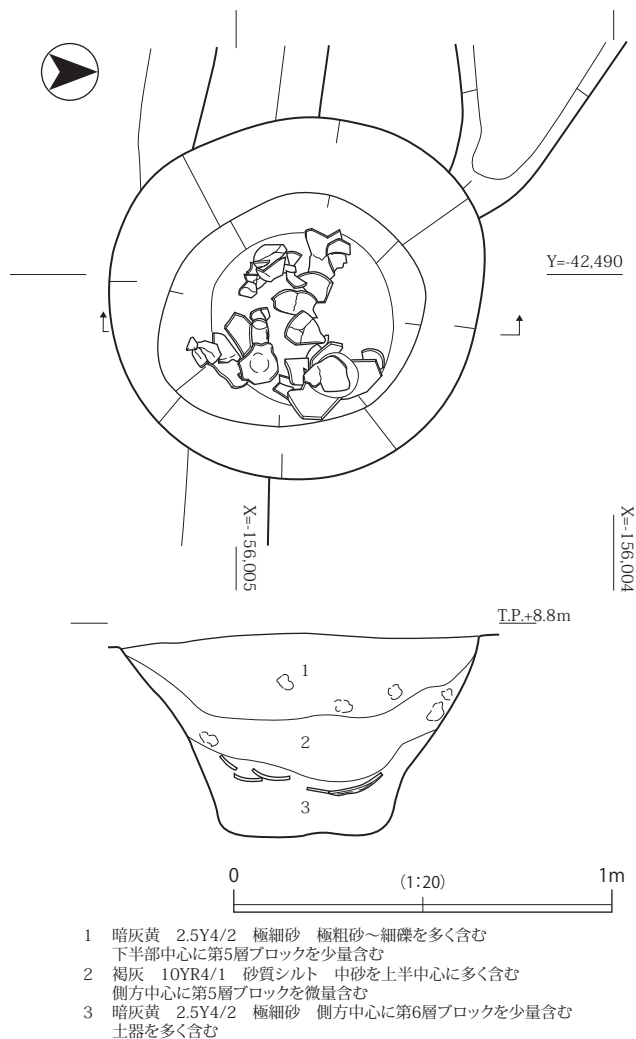


図518 2区 第3面 194土坑 平・断面図

として考えることができる。この池状遺構の性格は、雨水等の一時貯留水による周辺田地への給水を目的とした灌漑施設と推定されている(藤井寺市教育委員会1993)。また、豊中市北条遺跡では、流路に連結する井水遺構とも言うべき同種の遺構が検出されている(豊中市教育委員会2005)。

なお、本土坑は調査時においても常に帯水状態にあり、降雨の後などは、169土坑と347土坑の境界にある段付近まで水位が上昇し、人為的に排水をしない限り一定以上水位が下がることはなかった。参考として付記しておく。

[194土坑] (図518・519 図版156・169)

調査区西半の南側で検出した土坑で、平安時代の区画溝南辺である165溝に重複されている。径0.89mを測る円形の土坑で、検出面からの深さは0.55mを測る。掘形の形状は坑底が平坦なゆるやかな二段掘りの摺鉢状を呈する。埋土は大きく3層に分けることができ、極細砂～砂質シルトを主体としつつ、ベースの第5～6層ブロックを多く含む。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺物がまとまって出土し、主に下層上部から出土した。

遺物は可能な限り抽出し、図519に掲げた10点を図化することができた。2771～2777はV様式系の甕である。いずれも完形のもの認められなかったが、口径や頸部径から大小2者に分けることができる。体部外面には平行ないしは右肩上がりのやや粗いタタキを施し、2775は分割成形技法で成形されて

2765～2767は灰釉陶器である。2765の椀は細片のため、復元口径に若干不安を残す。2766・2767は壺底部で、2767は体部外面下半に斜行する工具痕跡を留める。2768は須恵器蛸壺。体部下半を欠損するが、破断面は摩滅が著しい。2769は須恵器壺。2770は須恵質の丸瓦である。

以上の遺物は、長原編年平安時代Ⅱ期新～Ⅲ期古10世紀後葉もしくは平安京Ⅱ期古～中～新9世紀中～10世紀前に位置づけることができ、やや幅をもつものの、10世紀後葉と位置づけることができる。居住域の廃絶とほぼ時期を一にしていた可能性が高い。

土坑の機能については確証は得られないが、浅く長い落ち込み(169土坑)から段を経て、深い落ち込み(347土坑)へと至ることや347土坑の底面が淘汰の良い粘質シルトで、最下部に堆積していた均質な埋土は水漬状態での堆積が想定できるなどの諸点から、雨水を貯留する等の井水関連の機能が想定できる。近接する遺構としては前述した区画溝があり、これと密接に関連していた可能性もある。時期が異なるものの、藤井寺市はざみ山遺跡で検出されたSG201は、規模・形状が近似している点で同様の事例

いる。頸部の屈曲はいずれもやや鈍い。2778は椀形高杯。口縁部及び脚部を欠損するため全容はあきらかでない。2779は脚付の鉢か。内外面には粗い指頭圧痕が残存する。2780は蛸壺である。手捏ねで成形されている。口縁部直下に0.9cm程度の円孔を1箇所穿つ。以上の遺物は、甕の様相から河内VI-2様式の様相を示しており、本土坑の時期を示すものと考えられる。

〔182土坑〕（図520・523 図版150・166）

調査区東半中央部南端に位置する土坑である。付近には第4 b層が分布しておらず、第4 a層を除去した際に検出した。土坑は、直径0.5 mを測る円形で、検出面からの深さは0.27mを測る。埋土は3層に区分でき、中層から遺物が出土した。遺物はほぼ完形の瓦器椀1点(2784)と破片1点(2785)を含んでおり、前者は図示したように土坑掘形の南東隅に斜位に据えられていた。瓦器椀を含む中層以上と下層とは埋土の様相が異なり、瓦器椀埋置前後に埋没環境の違いが認められる。

出土遺物は2点図化した。2784・2785はいずれも和泉型瓦器椀で、口径15.4cm、2784は器高5.9cmを測る。焼成は良好であるが、直径1～2 mm大の器表面の荒れがやや目立つ。内外面には密なヘラミガキを施すが、底部内面の暗文は器表面の摩滅もあってか不明である。和泉型瓦器椀I-2期と考えられ、11世紀後半の所産と考えられる。

〔150土坑〕（図520・523）

調査区西半中央部南端に位置する径0.7 mを測る円形土坑である。区画溝南辺の165溝に重複している。検出面からの深さは0.28mを測る。埋土は上下2層に分かれ、下層から黒色土器片(2782)が出土した。2782は黒色土器両黒椀である。やや丸みを帯びた外方に張り出す高台を有し、内外面には密なヘラミガキを施す。11世紀前～中葉の所産か。

〔170土坑〕（図520・523）

調査区東半西寄り南半に位置する長径2 m、短径1.64mを測る不整な円形を呈する土坑である。付近には第4 b層が遺存しておらず、第4 a層を除去した段階で検出した。検出面からの深さは0.54mを測

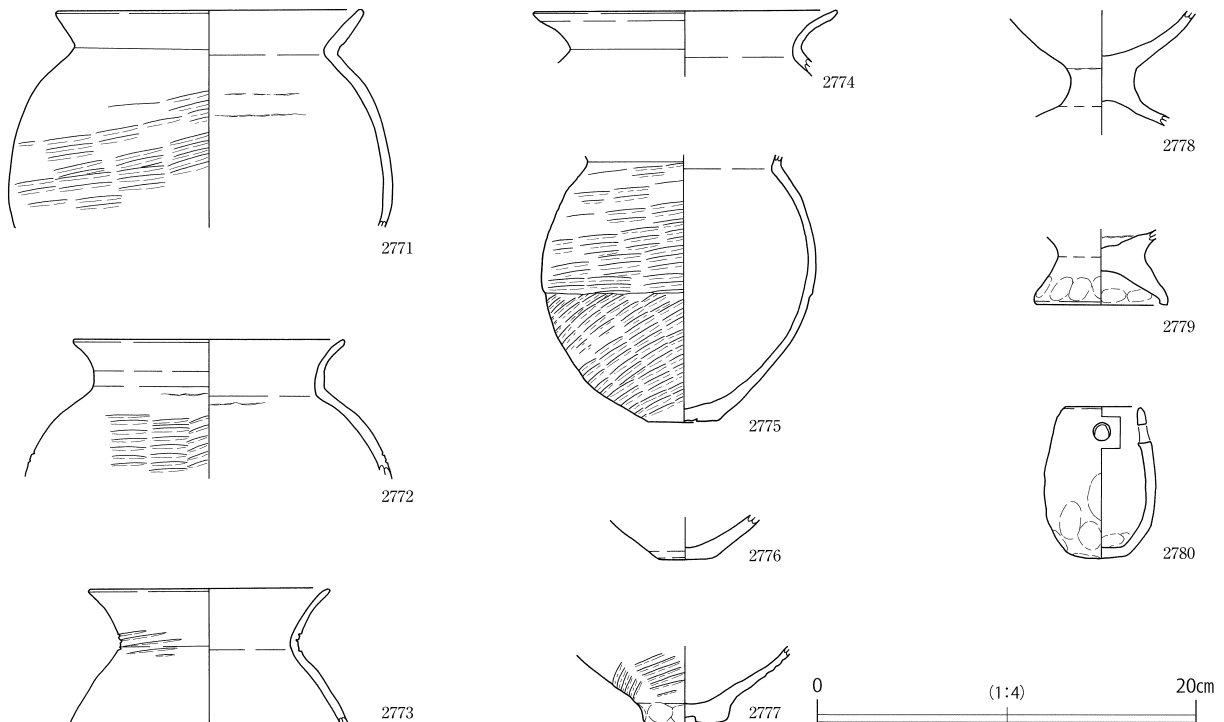


図519 2区 第3面 194土坑 出土遺物

り、掘形は緩やかな2段掘りを呈する。埋土は3層に区分でき、いずれも第5～7層のベース土ブロックを多く含む。遺物は土師器・須恵器の細片が出土したが、いずれも図示は成し得なかった。2781は須恵質の平瓦で、凸面に格子タタキを施す。時期は不明。

〔173土坑〕(図511・520)

調査区東半西寄りに位置する長径2.8m、短径2.2mを測る不整な円形の土坑である。345・361土坑に重複されている。掘形は浅い皿形を呈し、検出面からの深さは0.22mを測る。遺物は土師器の細片を中心に50点近くが出土したが、いずれも図示困難であり、辛うじて土師質の土製品(2684)を1点図示したに留まる。2684は移動式竈の釜穴部付近の形状に類似し、ほぼ垂直に立ち上がって口縁部へと至り、上端面に1.4cm程度の僅かに窪む平坦面を作り出す。胎土は、角閃石を多く含み暗茶褐色を呈する生駒西麓産のもの。時期は不明である。

〔175土坑〕(図520・523)

調査区東半西寄り南端部に位置する長径0.7m、短径0.4mの長楕円を呈する土坑である。検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は上下2層に分かれ、ベース土ブロックを多く含む。

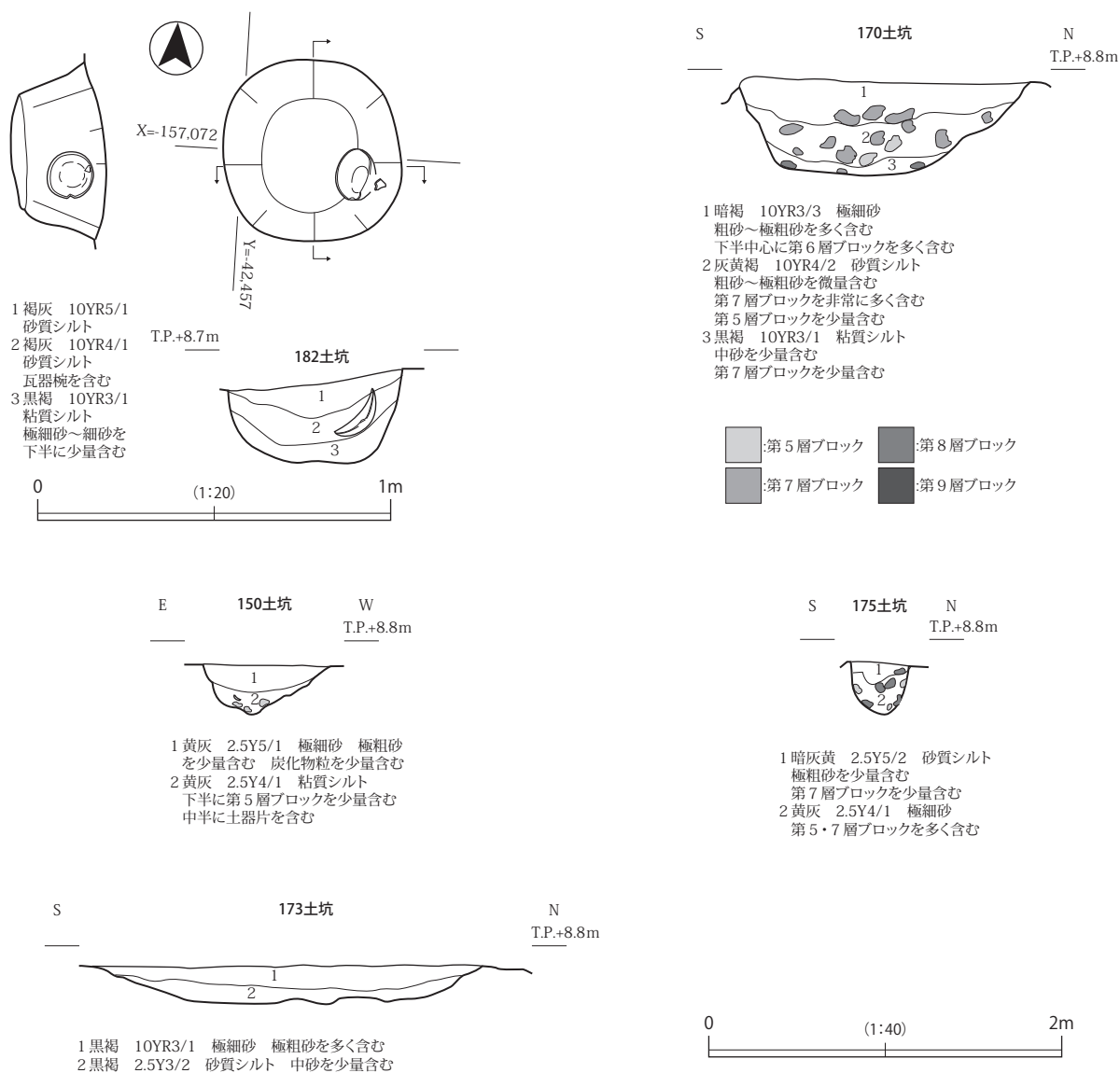


図520 2区 第2・3面 各遺構 断面図(3)

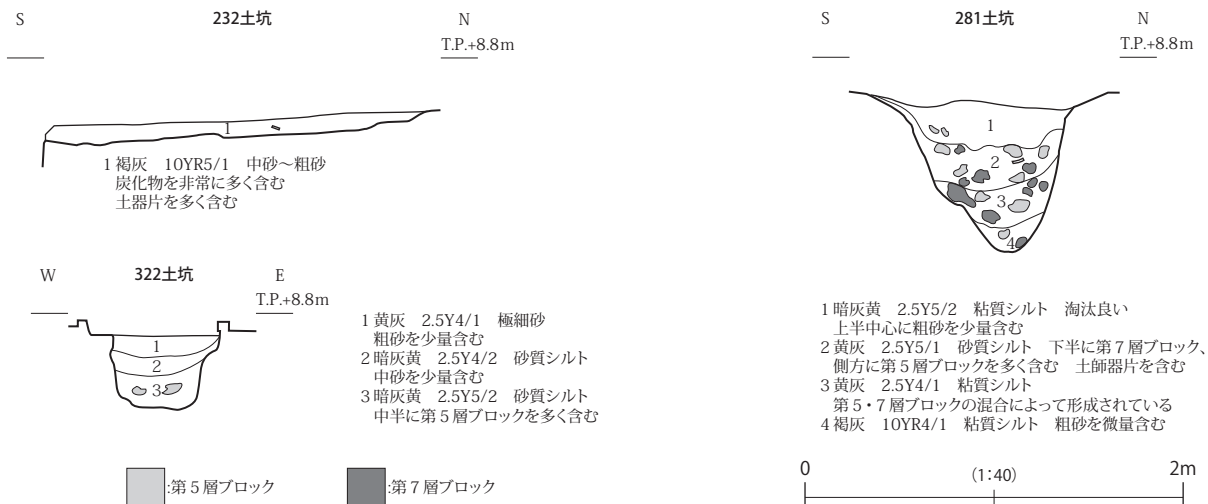


図521 2区 第2・3面 各遺構 断面図(4)

遺物は「て」字状口縁の土師器皿(2783)が出土した。胎土はやや褐色がかった乳白色の精良なものを
用い、焼成は堅緻である。復元口径10.2cmを測り、口縁端部は僅かに上方に摘み出す程度で収められて
いる。器厚は3.5mmとやや厚い。11世紀中葉の所産か。

[188土坑] (図523 図版156・166)

調査区西半中央部に位置する長径0.8m短径0.6mの楕円形を呈する土坑である。第4b層を除去し
た段階で検出した。降雨の影響により断面が崩壊したため、埋土の様相は不明となってしまった。

図示可能な遺物として、2786～2789を掲げた。2786・2787は土師器皿である。口縁端部内面に一条の
沈線を施す。胎土は精良で褐色を呈する。2788・2789は土師器甕。2789は同一個体と考えられる複数の
体部片が認められたが、図示した以上に接合関係が認められなかった。外面にはハケを施す。このほか
細片であるため図示し得なかったが、土師質羽釜の鏝部、黒色土器内黒椀片が出土している。土師器皿
の様相から平安京I期中～新とみることができ、8世紀末～9世紀初頭の所産であろう。

[232土坑] (図521・524)

調査区西半西端部で検出した幅2.48mの土坑である。第4b層の除去後に検出した。南西半は調査区
外へ延び、全容は伺い知れない。検出面からの深さは0.15mを測る。埋土中から弥生土器(2796・2797)
が出土した。

2796は広口壺の口縁部片、2797は壺底部片である。弥生時代前期中葉の所産。

[278土坑] (図523)

調査区西半中央部北寄りに位置する径0.12mの土坑である。遺物のみを掲げた。2790は土師器椀の底
部。体部は緩く内湾しており、やや直立気味に外方に張り出す高台を貼り付ける。詳細は不明だが、高
台の様相から11世紀後半代の所産か。

[281土坑] (図521)

調査区西半中央部に位置する楕円形の土坑で、第4b層の除去後に検出した。規模は長径1.4m、短
径1.2mを測り、検出面からの深さは0.84mを測る。埋土は4層に分けられ、いずれもベース土ブロ
ックの混合によって形成されており、埋め戻しが図られたものと想定できる。遺物は土師器の細片が出土
しているが、時期は不明である。

[322土坑] (図521)

調査区西半東寄り北側に位置する長径0.92m、短径0.55mを図る不整な楕円形の土坑である。第4 a層を除去した段階で検出したことから、第2面に帰属するとみることができる。検出面からの深さは0.46mを測る。埋土は3層からなり、最下層には第5層を起源とするベース土ブロックを含んでいる。遺物は出土していないため、時期は不明である。

[329土坑] (図522・523 図版156・168)

調査区西半東寄りに位置する径0.37mを測る円形の土坑である。付近にはほとんど第4 b層が分布しておらず、第4 a層を除去した段階で検出した。埋土はベース土である第5層の粗粒の砂を含む暗灰黄色の砂質シルトで構成されており、検出面からの深さは0.24mを測る。層の前半からは完形の土師器皿1点(2791)が逆位の状態で出土した。遺物付近での層理面は視認できなかった。

2791の土師器皿は口径8.8cm、器高1.1cmを測る。口縁部には横ナデを施し、強く外反させる。10世紀末～11世紀前葉の所産か。

[331土坑] (図522・523 図版150・166)

調査区西半の東端北端で検出した推定円形の土坑である。北半分は05-2-5-4区に延び、調査時に設けた側溝内に収まったためか、延長を確認できていない。土坑の規模は幅2.16mを測り、検出面か

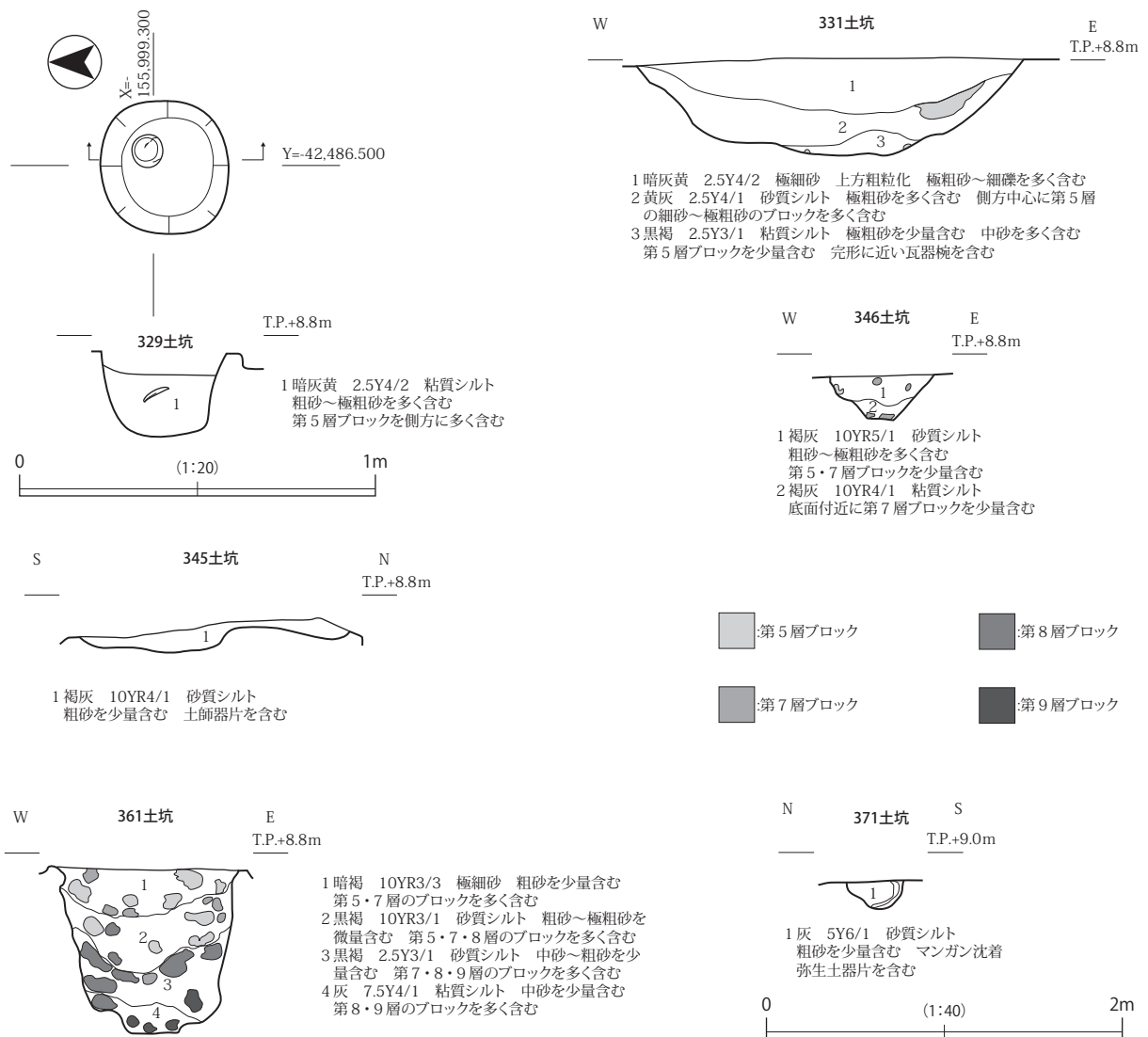


図522 2区 第2・3面 各遺構 断面図(5)

らの深さ0.56mを測る。埋土は3層に区分でき、中層まではベースの第5層ブロックを含み、上層は上方細粒化している。下層からほぼ完形の瓦器椀(2792)が1点出土した。

2792は和泉型瓦器椀である。口径15.4cm、器高5.5cmを測る。体部外面には5分割の分割ヘラミガキを施し、見込みには斜格子暗文を施す。和泉型Ⅱ-1期に位置づけることができ、12世紀前葉の所産と考えられる。

[345土坑] (図522)

調査区東半の西寄り南側に位置する土坑で、165溝に重複している。土坑の南端部が調査時に設定した側溝にかかったため全容は明らかでないが、幅1.26mを測る不整な楕円形を呈する土坑である。検出

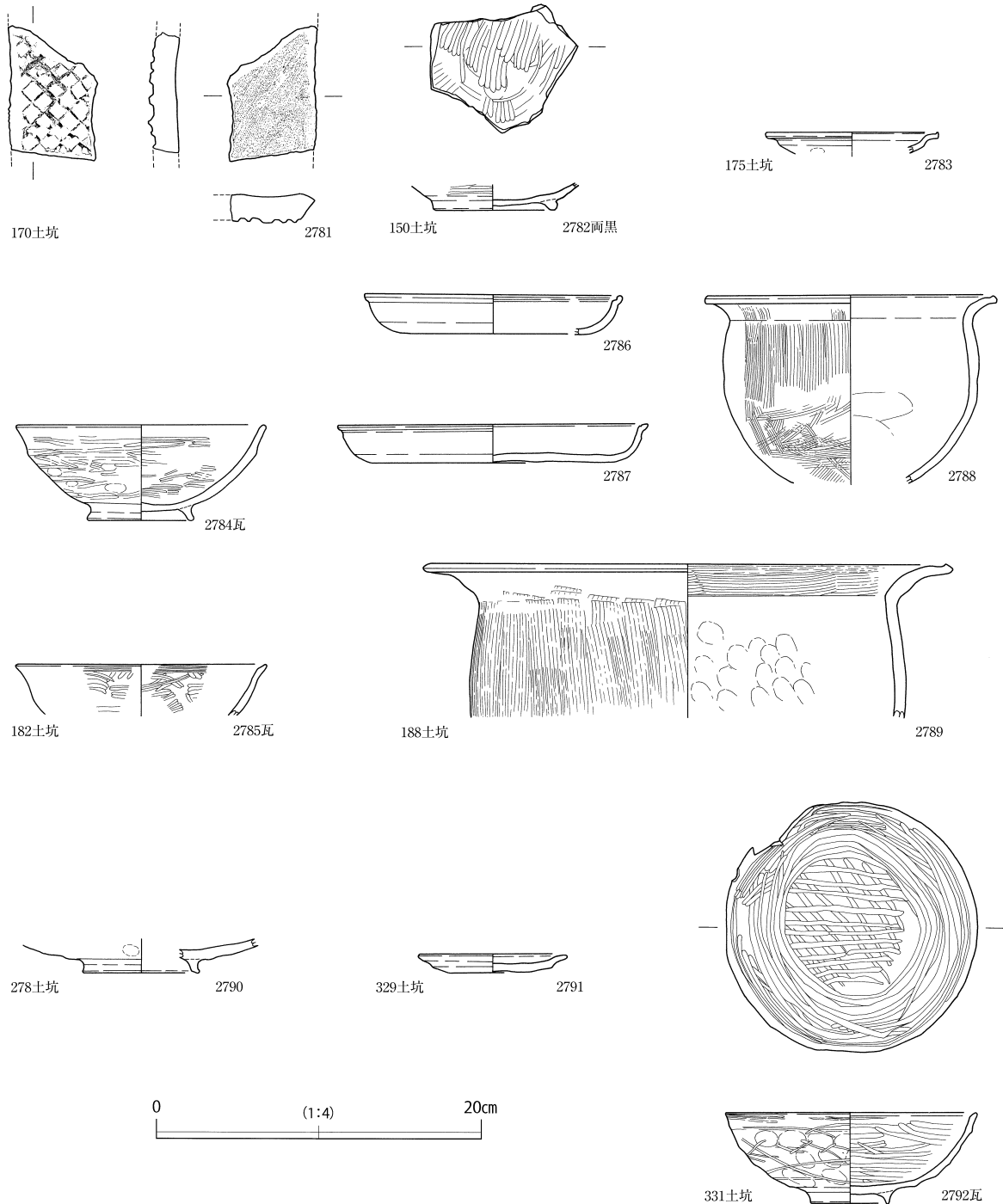


図523 2区 第2・3面 各遺構 出土遺物(3)

面からの深さは0.15mを測る。遺物は土師器の細片が少量出土したものの、時期を比定するには至らなかった。

〔346土坑〕（図522）

調査区東半の西寄り中央部に位置する楕円形の土坑で、169土坑に重複している。長径0.8m、短径0.58m、検出面からの深さは0.25mを測る。埋土は2層に区分でき、いずれもベースの第5・7層起源のブロック土を含んでいる。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

〔361土坑〕（図522）

調査区東半の西端南側に位置する不整な円形の土坑である。長径1.1m、短径0.98m、検出面からの深さは0.92mを測る。埋土は4層で構成され、いずれの層もベース土ブロックを非常に多く含むことから、人為の埋め戻しによるものと推定できる。遺物は出土しておらず、時期は不明。

〔99土坑〕（図524）

調査区西半西寄りに位置する不整形円形を呈する土坑である。遺物のみを掲げた。弥生土器の甕底部（2795）が出土している。弥生時代前期中葉の所産。

〔371土坑〕（図522・524 図版171）

調査区西半東端に位置する土坑で、既設農業用水路の保護用に残していた壁面で辛うじてその端部を検出した。調査上の制約により平面調査は実施し得なかったが、可能な範囲で断面調査と遺物の取り上げを行っている。付近には第4b層が分布しておらず、第4a層の除去時に検出できる遺構である。土坑は幅0.32m、検出面からの深さ0.16mを測る。埋土は灰色砂質シルト1層で構成され、土坑内には広口壺（2798）が横位に据えられていたことが断面観察から判明した。

2798は口縁部及び体部上半の約3分の1程度を欠損するが、遺存状態は良好である。頸部直下に2条、体部上半に3条の沈線文を施す。河内I-2様式に位置づけることができる。結果的に断面観察となってしまったものの、土器の検出状況からは土器棺墓であった可能性もあり、第4b層の除去時に検出できる弥生時代前期中葉の居住域や溝との関連を考えると極めて興味深い。

〔233・234溝〕（図525～528 図版158・170）

調査区西半の西端で検出した2条の併走する溝である。第4b層を除去した段階で検出したことから、第3面の遺構と位置づけることができる。これらの溝は、05-2-5-4区で検出した1765・1766

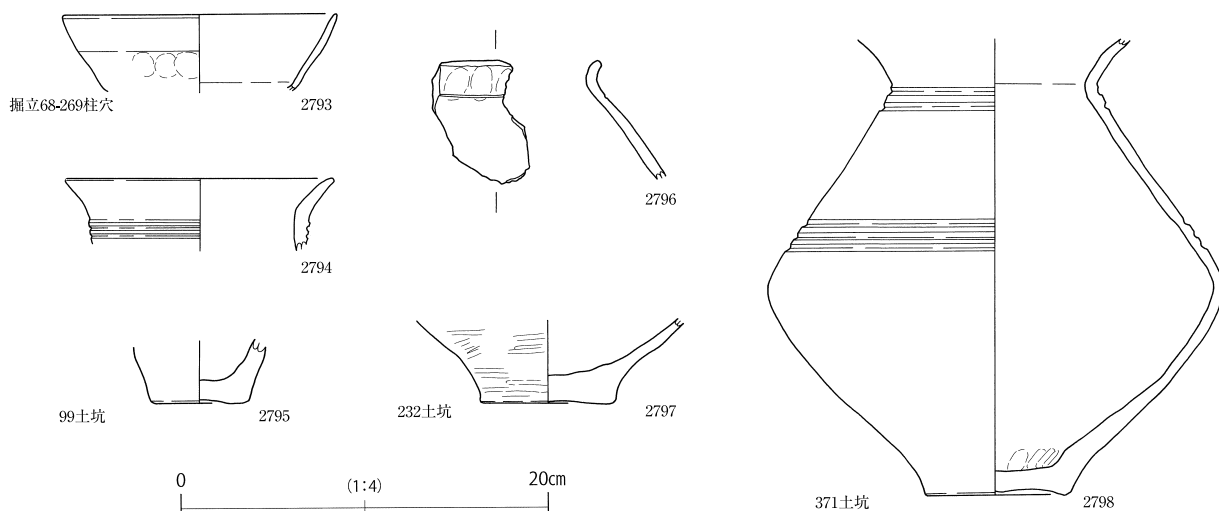


図524 2区 第2・3面 各遺構 出土遺物(4)

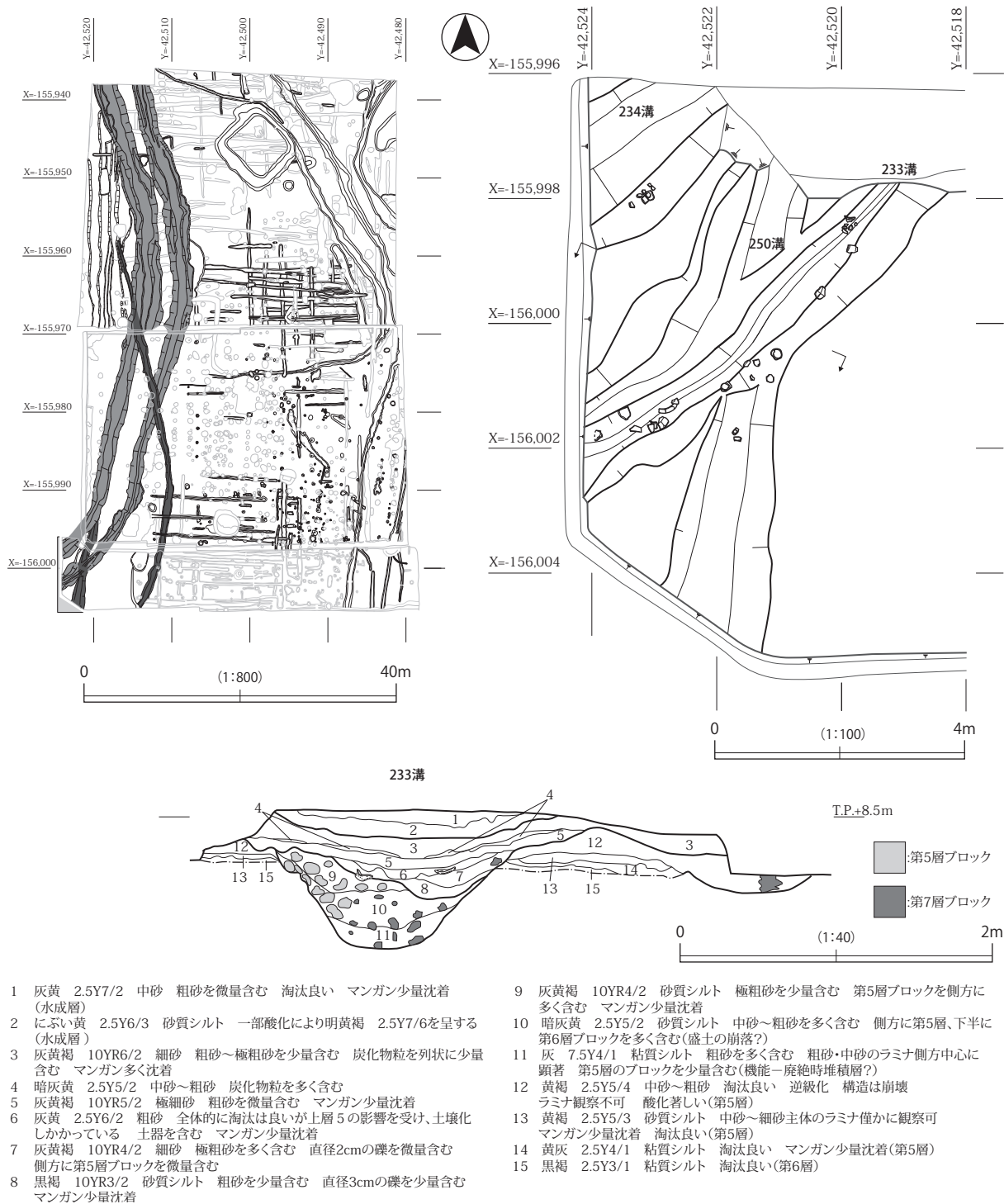


図255 2区 第3面 233・234溝 平面図

溝とそれぞれ同一のものであり、05-2調査検出分を含めると外側の233溝で総延長69m以上の溝となる。本溝の特徴は、ほぼ同じ向きと幅で2条の溝が併走することである。溝が併存することは、05-2調査で埋土の対比を行った結果、ほぼ明らかとなっている。なお、外側の233溝と250溝の関係については、調査時の誤認により相互の重複関係を平面で認識しきれずに同時に掘削を進めてしまったものの、交差点に設定したアゼの観察や遺物の出土状況から、233溝が250溝を重複しているという結論に至った。250溝は05-2調査でも同様に、内側の234溝によって重複されていることが明らかとなっており、溝の同時併存についても矛盾は無い。

溝の規模は、233 溝が幅 1.4~2.2 m、検出面からの深さ 0.74m を測り、234 溝が幅 2.1 m を測る。埋土は、大きく上層(1・2)、中層(3~8)、下層(9~11)の 3 層に区分できる。下層は、ベースの第 5 層ないしは第 7 層のブロックが東側方から崩落したような層相を呈している。盛土の存在を考慮すれば、その流失したものとの想定も可能であるが、詳細は不明。中層は、炭化物を多く含み、一定土壌化が進行したような層相を示す層(5・6)ものもあり、ある程度安定した埋没環境にあることが想定できる。上層は、淘汰の良い水成層である。遺物は主に下層の上位を中心に出土した。

遺物は図 527 に 233 溝のものを、図 528 に 234 溝及び、230 溝の出土遺物を掲げた。すべて非生駒山西麓産の胎土である。2799 は甕蓋。頂部は平坦で、上面に有軸のへら描き木葉文を施文する。頂部直下の体部外面にへら描きの重弧文が 2 条 1 単位で施される。器表面の剥離が著しい箇所が多く、5 組しか残存していないが、本来全周していたものと考えられる。2800・2801 は広口壺。2800 は口頸部界に削り出し突帯第 I 種を施し、頸胴部界には削り出し突帯第 II 種少条がめぐる。2801 は頸部内面に貼り付け突帯を付加する。外面は削り出しによる段第 I 種を形成する。2802~2806 は甕。2802・2803 は頸部に 3 条の、2804 は 2 条の沈線を施す。2803 は口縁端部に刻目を施す。2808 は広口壺。口頸部境上部に鈕孔を穿つ。2809 は小型壺。口縁部を欠く。2810 は甕。口縁端部に刻目を施す。2811 は甕頸部片。沈線 2 条を施す。2813 の甕底部は中央部に円孔を穿つ。2814~2819 は 230 溝から出土した遺物である。2814 は甕蓋。頂部は直立気味に突出する。2815 は広口壺。直立気味に立ち上がる頸部から緩く外反して口縁部へと至

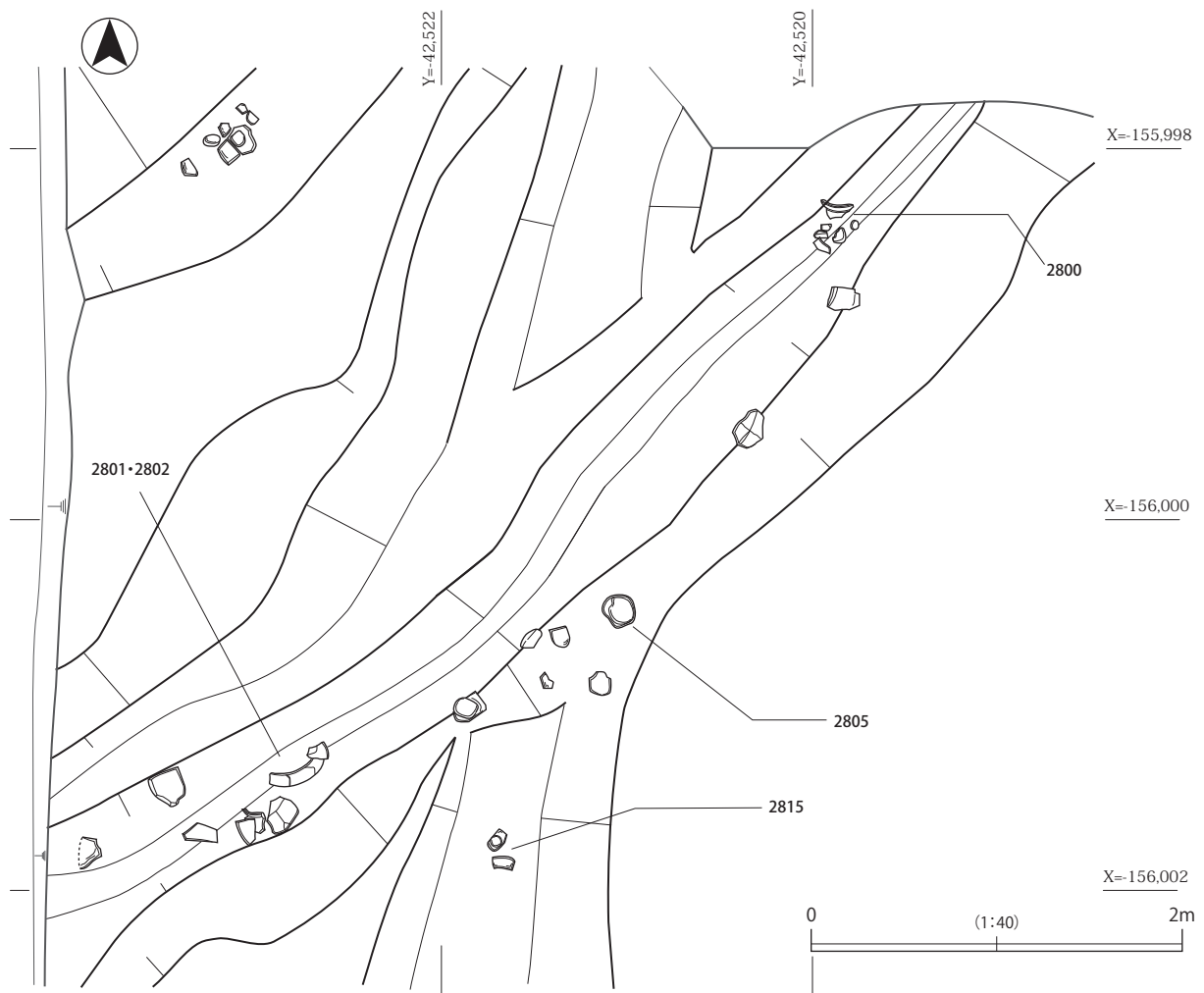


図526 2区 第3面 233・234溝 遺物検出状況平面図

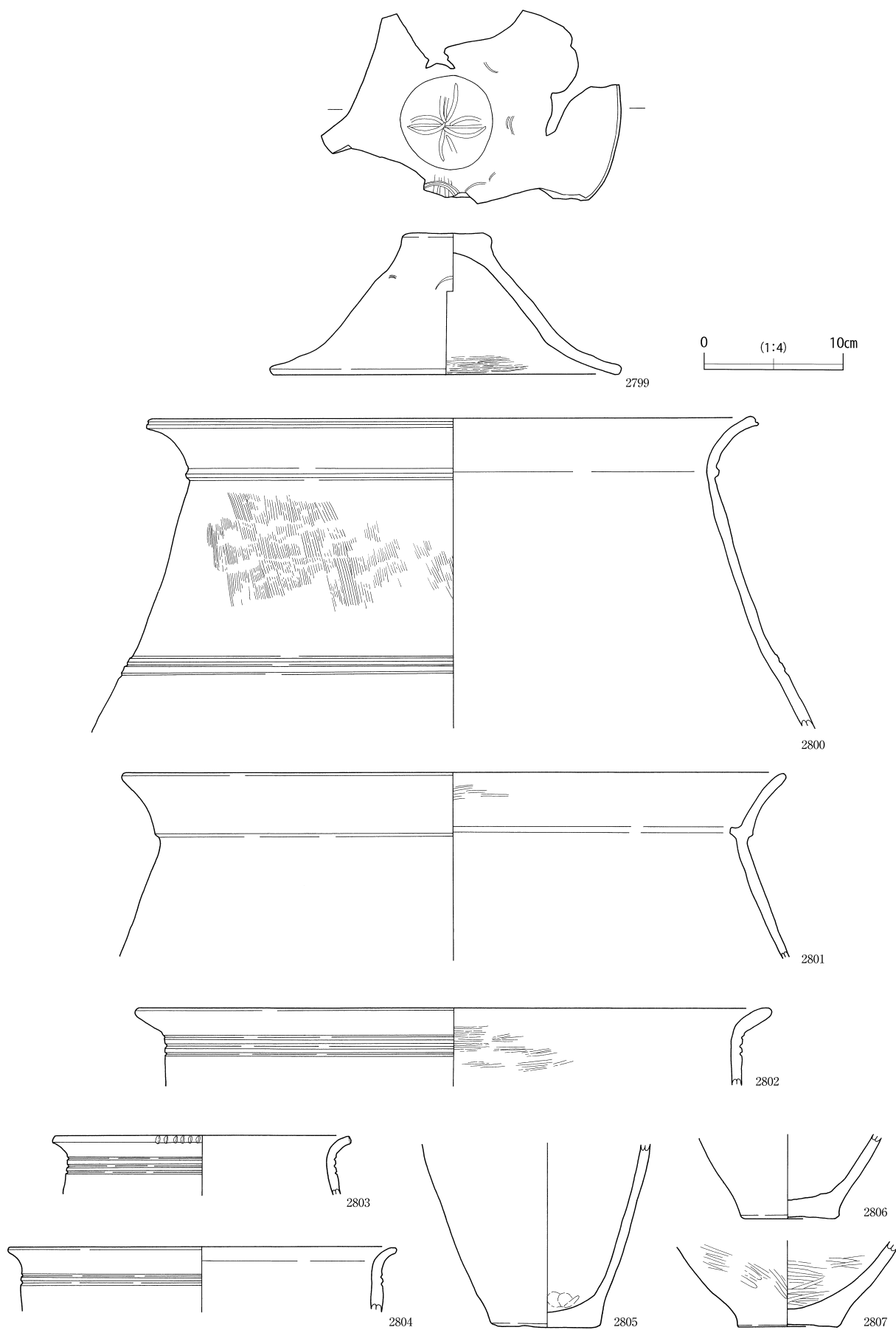


图527 2区 第3面 233沟 出土遗物

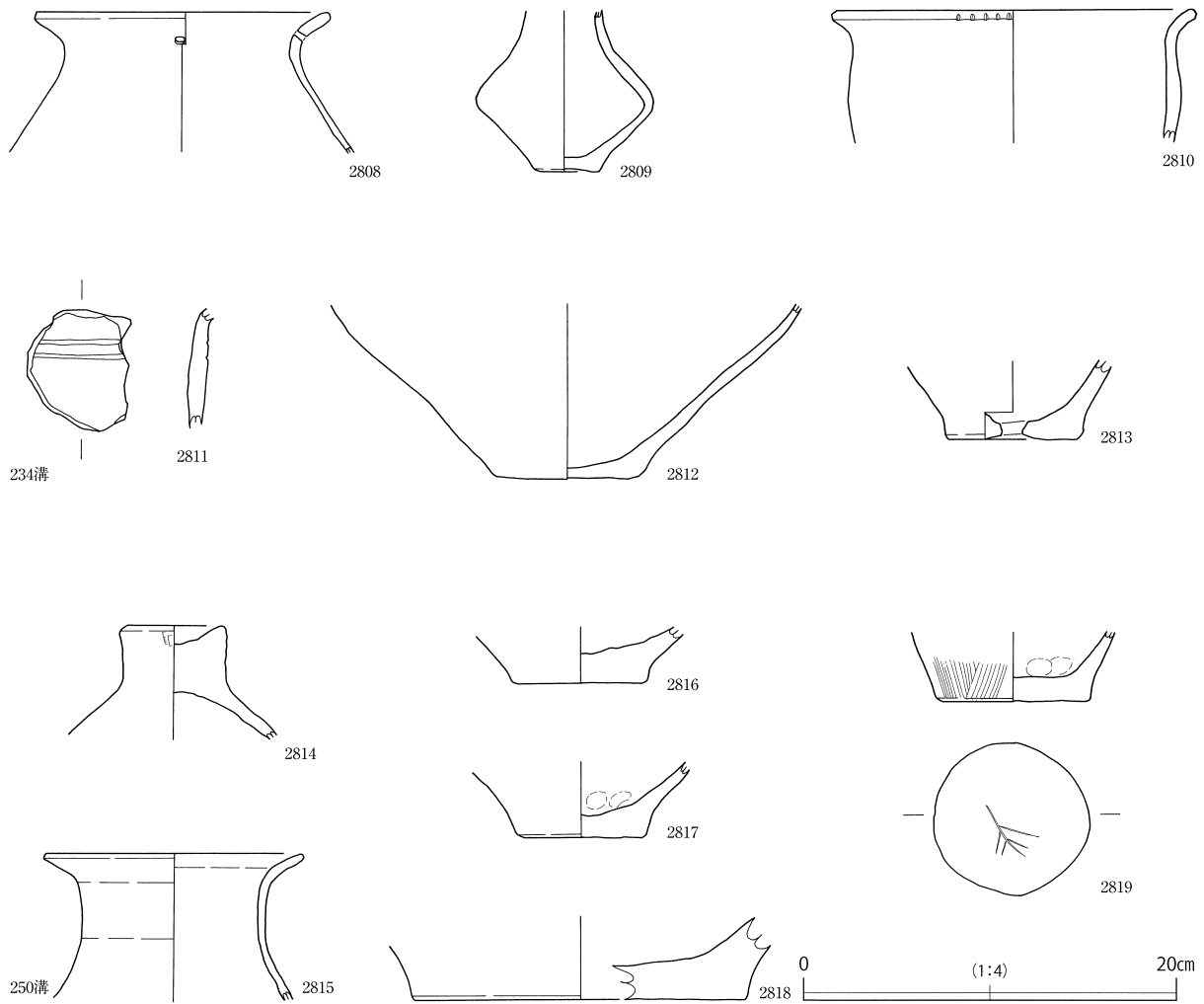


図528 2区 第3面 234・250溝 出土遺物

る。摩滅が著しく調整不明。以上の土器は、いずれも河内Ⅰ－Ⅱ様式に属するとみることができる。233溝と250溝は重複関係にあるが、出土土器の上ではあまり大差ない。いずれも弥生時代前期中葉の所産である。

4. 第4面(第6層上面) (図529 図版159)

第5層とした水成層を除去して検出できる遺構面である。旧地表面の遺存状態は良好で、調査区東半分のほぼ全域に第6層とした耕作土層が分布し、西半分では第7層とした土壌層が露出していた。遺構面の標高は、最も高い地点で南東隅のT.P.+8.6 m、最も低い地点で北西部のT.P.+8.2 mを測る。

〔小区画水田〕 (図529 図版160)

調査区東半のうち、東端を除くほぼ全域で水田畦畔を検出した。畦畔は、南東を最高点として北西方向に緩やかな傾斜を持つ地形に合わせて南東－北西方向の幹線畦畔を配し、その間を地形の傾斜に合わせて南西－北東方向の支線畦畔で区切ることによって平坦面を維持している。畦畔の高さは平均して約0.05m前後の極めて低平なものであり、幅も0.5 mと細い。例外的に、調査区東半西端で検出した高さ0.1 m、幅1.4 mを測る大振りなものがある(図上アミ伏せ部)。この畦畔は後述する流路に連結し、この畦畔を境界として畦畔の向きが異なり、等高線の乱れもこれに対応することから、地形の傾斜変換に対応するための措置と考えることが出来る。畦畔によって区画された一筆当たりの面積は24.5㎡前後を基調とするが、傾斜の急な地点では8.5㎡前後、傾斜の緩やかな地点では36.5㎡前後と幅がある。



图529 2区 第4面 平面图

[362流路] (図529・530 図版171)

調査区西半東端を南北方向に走向する流路である。幅約10m、深さ0.9mを測る。南壁面の断面では埋土は大きく斜行ラミナが顕著に発達する下層と、トラフ型ラミナが顕著に認められる中層、ラミナが不明瞭で上方細粒化する上層の3層に区分できる。遺物は下層を中心に土器が少量出土した。2820～2822・2826～2831は広口壺。頸部部界に段を形成し、その直下に沈線3～4条の沈線を施す。2823は壺蓋。頂部直下に3条の沈線を施し、頂部には直径3cmの円孔を穿孔する。2824・2825・2832・2833は甕。頸部に2条の沈線を施す。いずれも河内I-2～3様式の所産。

[366溝] (図531 図版160)

調査区西半中央部に位置する南東-北西方向の溝で、362流路、367土坑と重複関係無しに接続している。幅0.64m、検出面からの深さ0.06mを測る。灰黄褐色の水成層で充填されていた。遺物は出土し

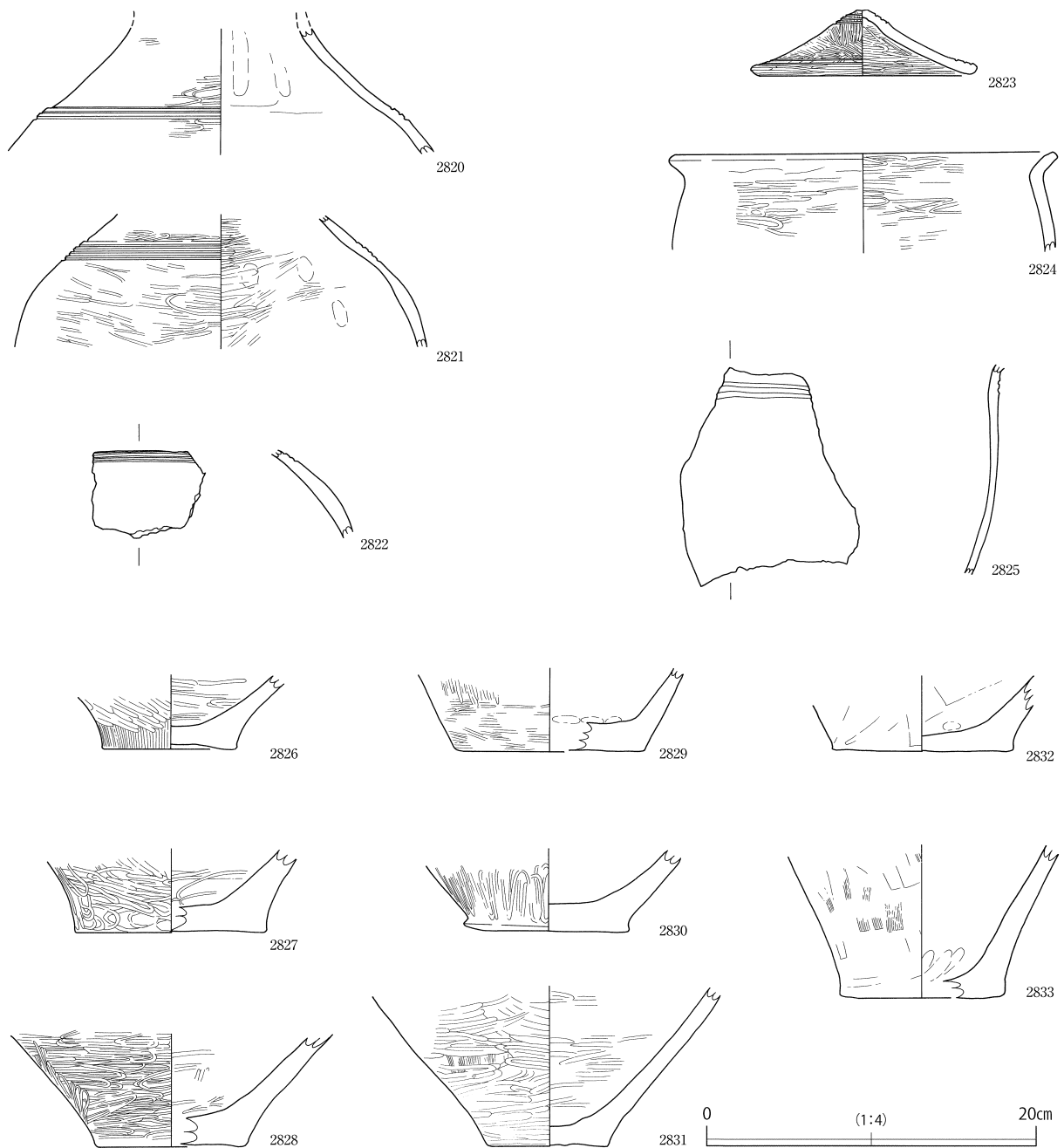


図530 2区 第4面 362流路 出土遺物

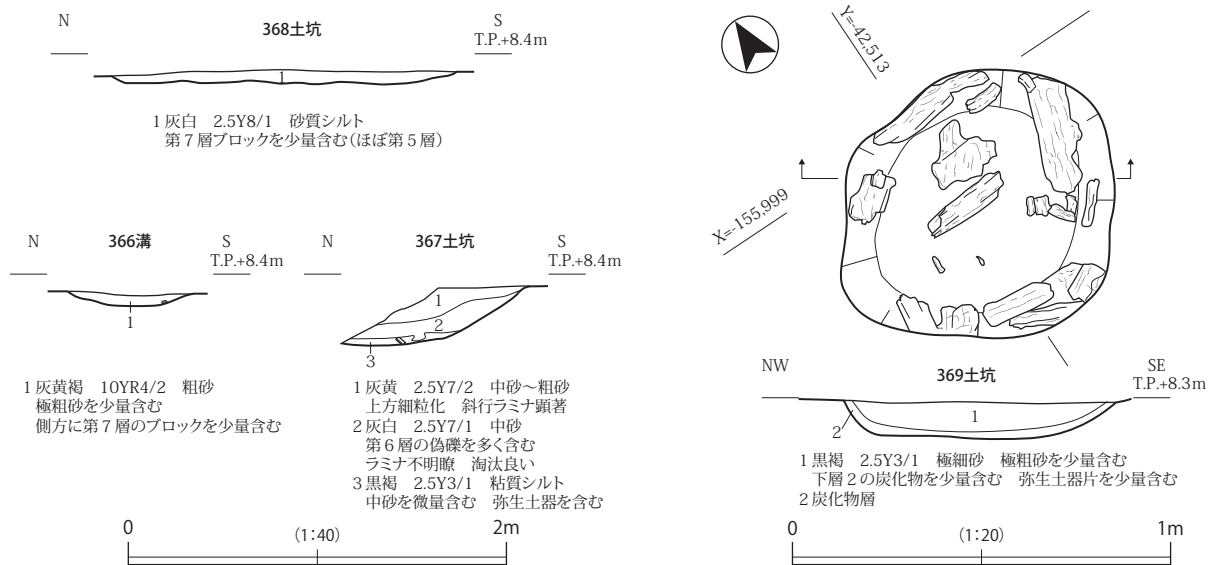


図531 2区 第4面 各遺構 断面図

ていない。

[367土坑] (図531・532)

調査区西半中央部北側に位置する土坑で、大半は05-2-5区内に収まり、本調査区ではその縁辺を検出したに留まる。すべて水成層で充填されており、接続する366溝との間に重複関係は認められなかった。広口壺(2834)が1点出土した。弥生時代前期中葉の所産。

[368土坑] (図531・532)

調査区西半中央部に位置する不定形な土坑である。長径2.6m、短径1.8m、深さ0.08mを測る。広口壺の底部(2835)が1点出土した。

[369土坑] (図531 図版160)

調査区西半西側で検出した径0.7mの不整形円形を呈する土坑である。深さ0.1mを測る。埋土は水成層の上層と、炭化物の集合体で形成される下層の2層から形成されている。上層からは弥生土器が出土したが、細片であるため詳細は不明である。

[各層出土遺物] (図533・534 図版165)

以下に、人力掘削時に各地層から出土した遺物について記述しておく。

2836~2840は第3層出土遺物である。瓦器小皿(2836)、瓦質羽釜三足(2837)、白磁椀(2840)、須恵器捏鉢(2838)、須恵器甕(2839)が出土した。第3層の下限を反映するものとしては、2836・2837があり、13世紀末~14世紀代の所産と考えられる。

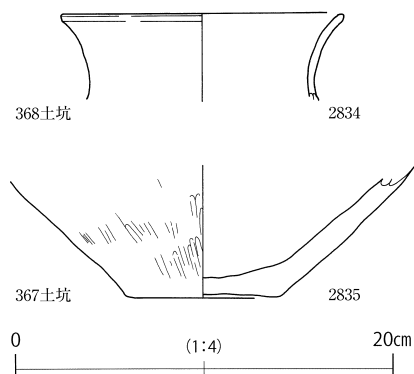


図532 2区 第4面 各遺構 出土遺物

2841~2865は第4a層出土遺物である。土師器皿(2841・2843~2845)、土師器椀(2846~2848)、土師器甕(2860)、土師器竈(2861)黒色土器内黒椀(2849~2851)、黒色土器内黒皿(2854)、瓦器小皿(2842)、瓦器椀(2852・2853)、灰釉陶器椀(2855・2859)、緑釉陶器椀ないし皿(2856)、須恵器杯(2857・2858)、須恵器鉢(2863)須恵器蛸壺(2864)、須恵器甕(2862)、平瓦(2865)が出土した。

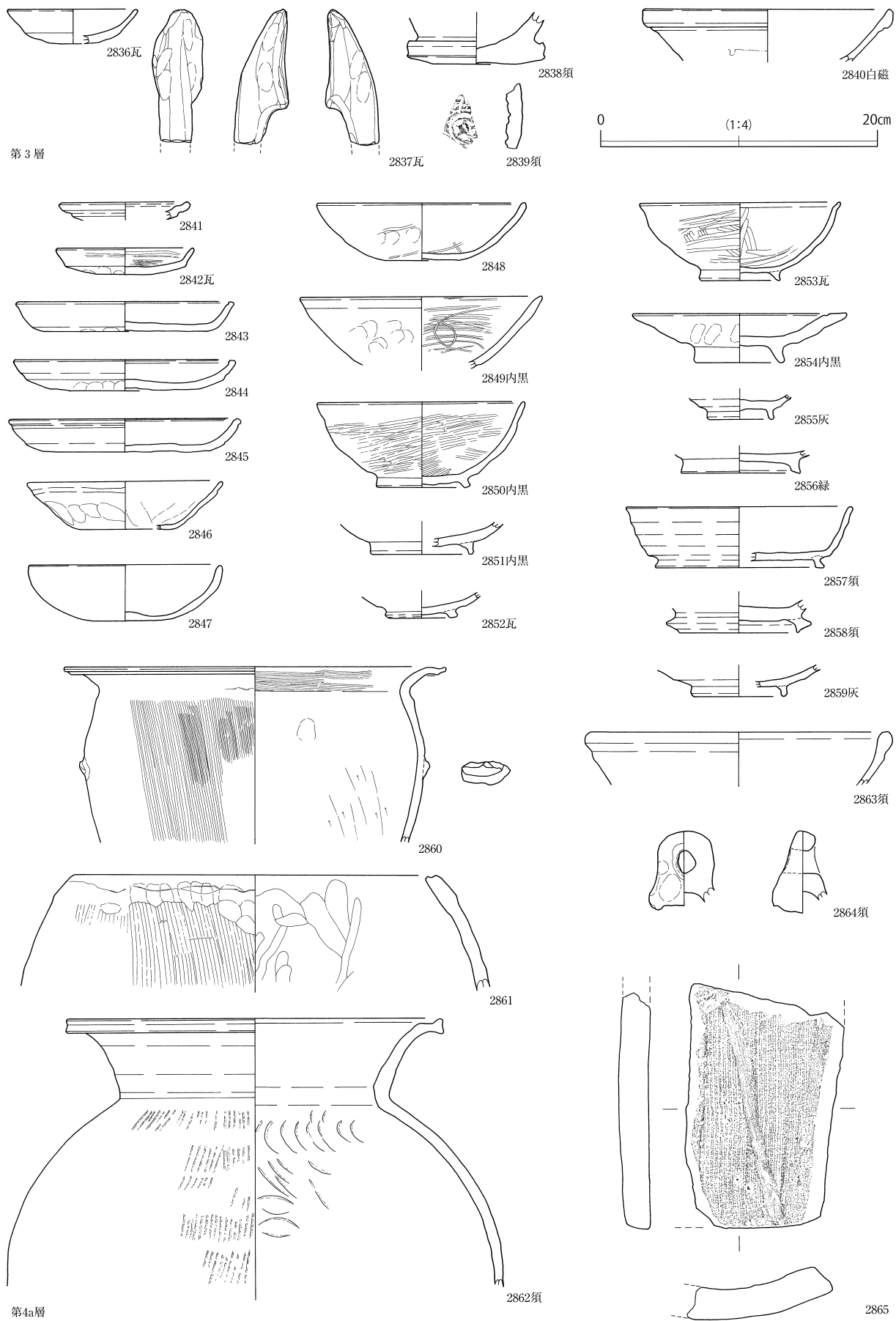


图533 2区 第3~4a層 出土遺物

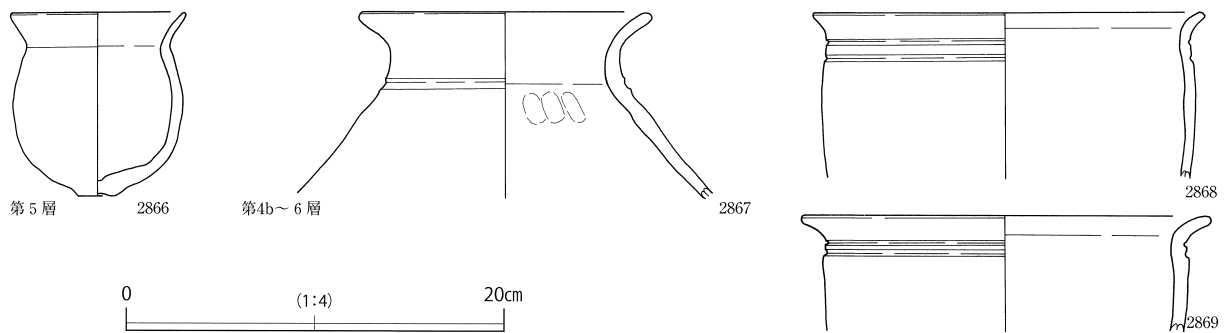


図534 2区 第4b～6層 出土遺物

2856の緑釉陶器は東濃産。図上では表現できていないが、糸切り底に有段貼り付け高台を付加する。胎土は灰褐色を呈する須恵質のもの。全面施釉されており、釉調は濃緑色で薄い。見込みには、トチンの目跡が認められる。

2863は篠窯の鉢。10世紀代の所産。

2860は欠損するものの、把手を取り付ける甕A。2861はやや粗いハケと指ナデが顕著に残存する竈で、釜穴部片と推定できる。その他の部位は認められなかった。

2864の蛸壺は、既に述べてきたその他のものと同様、身部を欠き、破断面は摩滅著しい。

第4 a層の下限を示す遺物としては、2850・2852の瓦器碗がある。和泉型I－3期～II期であることから、12世紀前葉の所産と考えられる。

図534には主に調査区の法面成形時に出土した遺物を掲げている。2866は第5層掘削中、2867～2869は第4b～6層掘削中に出土した。

2866は小型の鉢で、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の所産。第3面に属する遺構を同時に掘削してしまった可能性があるが、詳細は不明である。

2867～2869は第5層以下に帰属するものであろう。広口壺(2867)・甕(2868・2869)共に、頸部に沈線を施す。弥生時代前期中葉の所産。

第3節 3区の調査

3区は、池内遺跡の西側に位置する調査区であり、05-2-3区北端に位置する。既設構造物である電柱の撤去準備が整ったことから、これに先立って調査を実施した。

現地表面の標高は10mを測る。調査は現代耕作土層である第1層までバックホーによる掘削を行い、以下の地層については、人力によって1層ずつこれを除去し、遺構面の検出に努めた。

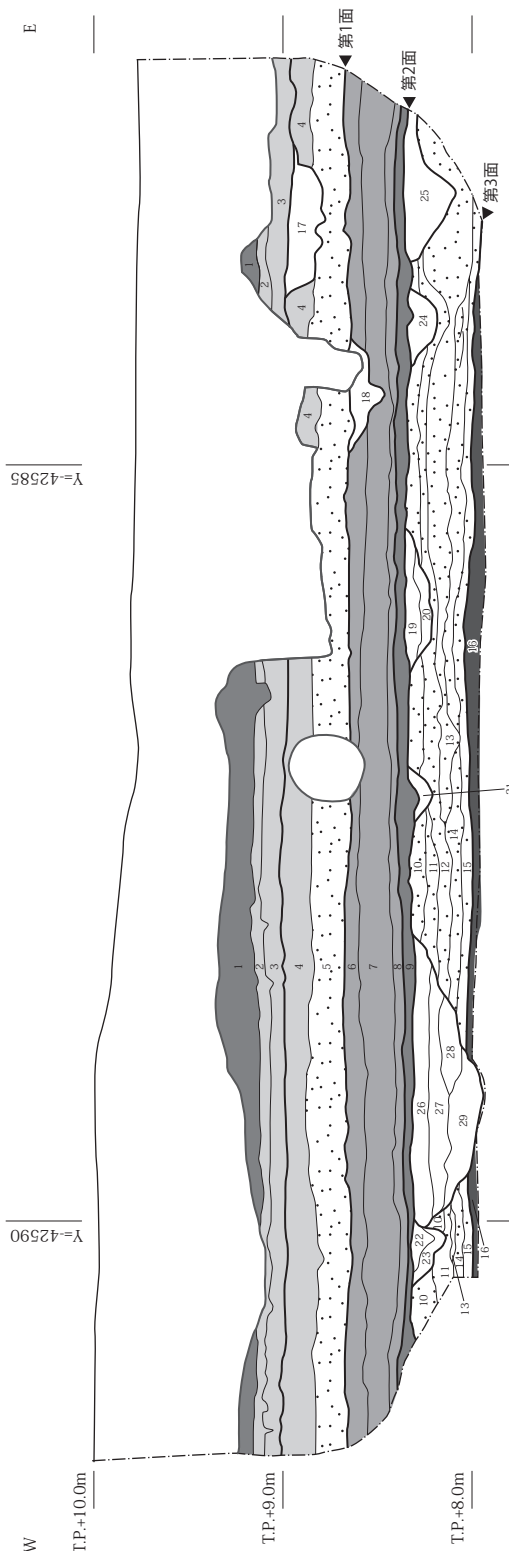
遺構面については、調査区付近で行われている既往の調査成果に従い、第1面(第3d層上面〔第3c層下面〕)、第2面(第4a層下面〔第5層上面〕)、第3面(第7層上面〔第5層下面〕)の合計3面の遺構面について平面調査を実施した。

以下に3区における堆積地層の概要を述べる。なお、地層の確認については、調査区の北壁面を用いて行い、図535にこれを掲げた。

1. 基本層序(図535 図版161)

第0層

現代盛土である。層厚は平均0.6 m弱を測る。



【08-1-3区 北側壁面断面 土色】

1 灰オリーブ	5Y4/2	細砂	粗砂を少量含む	(現代耕作土)
2 灰黄	2.5Y6/2	細砂	粗砂を少量含む	(耕作土層)
3 にぶい黄	2.5Y6/4	細砂～中砂	粗砂を少量含む 極粗砂を多く含む	(耕作土層)
4 灰オリーブ	5Y5/2	細砂～中砂	粗砂～極粗砂を少量含む	(耕作土層)
5 にぶい黄	2.5Y6/3	細砂～中砂	粗砂を少量含む 極粗砂を多く含む	(水成層)
6 灰黄	2.5Y7/2	極細砂	粗砂を少量含む	(耕作土層)
7 浅黄	2.5Y7/3	極細砂	極粗砂を少量含む	(耕作土層)
8 灰黄	2.5Y6/2	砂質シルト	極粗砂を少量含む	(耕作土層)
9 暗灰黄	2.5Y5/2	極細砂	粗砂を多く含む	(耕作土層)
10 黄灰	2.5Y6/1	中砂～粗砂	マンガン沈着 土器片を少量含む わずかに腐乱を受ける	(耕作土層)
11 褐灰	10YR6/1	中砂	粗砂を少量含む 土器片を少量含む	(水成層)
12 灰	5Y6/1	極細砂～細砂	炭化物を少量含む	(水成層)
13 にぶい黄	2.5Y6/4	粗砂～極粗砂	淘汰悪い	(水成層)
14 黄灰	2.5Y5/1	細砂～中砂		(水成層)
15 オリーブ灰	5GY6/1	砂質シルト	淘汰悪い	(土壌層)
16 オリーブ黒	5Y3/1	粘質シルト	粗砂を多く含む	(耕作溝埋土)
17 灰オリーブ	5Y6/2	極細砂	粗砂を少量含む 4層起源のブロック土を多く含む 炭化物粒少量含む	(耕作溝埋土)
18 灰オリーブ	7.5Y5/2	砂質シルト	5層起源のブロック土を多く含む	(耕作溝埋土)
19 褐灰	10YR5/1	細砂	粗砂～極粗砂を多く含む	(3溝埋土)
20 暗灰黄	2.5Y5/2	中砂	土器片を少量含む 炭化物粒を少量含む	(3溝埋土)
21 暗灰黄	2.5Y5/2	砂質シルト		(1溝埋土)
22 暗灰黄	2.5Y5/2	砂質シルト		(1溝埋土)
23 灰	5Y5/1	砂質シルト～極細砂		(6溝埋土)
24 黄灰	2.5Y4/1	極細砂	粗砂～極粗砂を多く含む 下半に12層起源のブロック土を多く含む 炭化物粒を多く含む	(土坑埋土)
25 黄灰	2.5Y4/1	極細砂	粗砂～極粗砂を多く含む 下半に12層起源のブロック土を多く含む 炭化物粒を多く含む	(土坑埋土)
26 暗灰黄	2.5Y5/2	砂質シルト	焼土塊・弥生土器片を多く含む 炭化物を多く含む	(10土坑埋土)
27 灰黄	2.5Y6/2	細砂	焼土塊・弥生土器片を多く含む 炭化物を多く含む	(10土坑埋土)
28 褐灰	10YR6/1	極細砂	粗砂～極粗砂を多く含む 弥生土器片を少量含む 炭化物を多く含む	(10土坑埋土)
29 灰	10Y4/1	粘質シルト	粗砂～極粗砂を多く含む 弥生土器片を少量含む 炭化物を多く含む	(10土坑埋土)

図535 3区 北壁 断面図

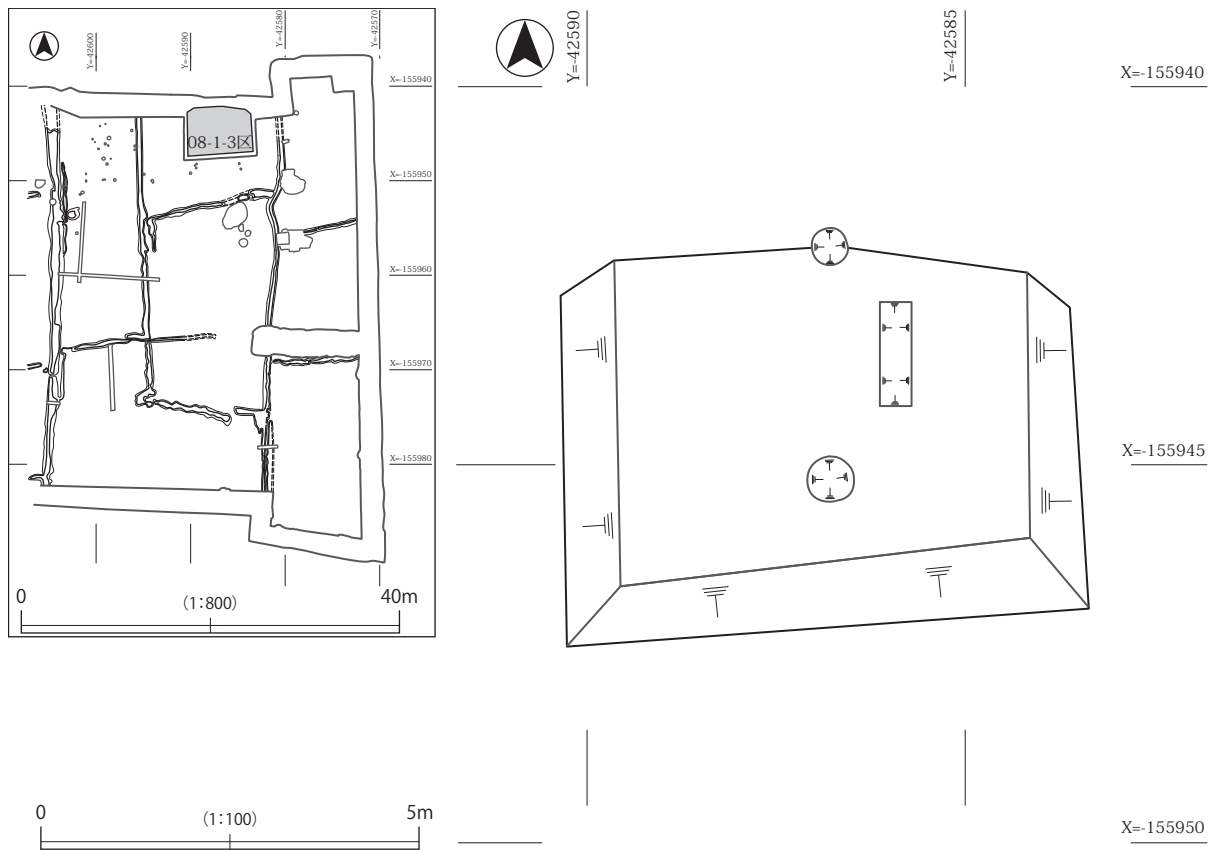


図536 3区 第1面 平面図

第1層

現代耕作土層である。第0層以前に堆積したもので、層厚は平均約0.2 mを測る。

第2層

近世の耕作土層である。本調査区では認められなかった。

第3層

耕作土層である。淘汰の悪い細砂から中砂を主体とする。層厚は0.8 mを測る。大きく4層に区分でき、3層目の水成層である第3c層の存在を目安に2回に分割して掘削を行い、水成層の除去後に表れる面で平面調査を実施した。最下部の第3d層としたシルト層からは12～13世紀の瓦器椀が出土するほか、第3c層以上の上部では14～15世紀の瓦質土器が出土することから、中世前期～中世後期にかけて形成された地層と考えられる。

第4層

第4a層・第4b層の2層に大別できるが、本調査区では第4b層は残存していなかった。

第4a層は僅かに攪拌を受けており、耕作土層と考えることができる。層厚は0.1 m強を測る。オリーブ褐色の粘質シルトで、淘汰は良い。出土遺物は少なく、下位遺構面に属するとみられる弥生時代前期の土器を少量巻き上げているに過ぎない。周辺の調査成果から、弥生時代中期～平安時代にかけて形成された層と考えられる。

第5層

氾濫堆積による水成層である。3区では0.2～0.3 mを測る。後述するように本層上面で弥生時代前期の遺構を検出していることから、弥生時代前期以前に堆積した地層と考えられる。

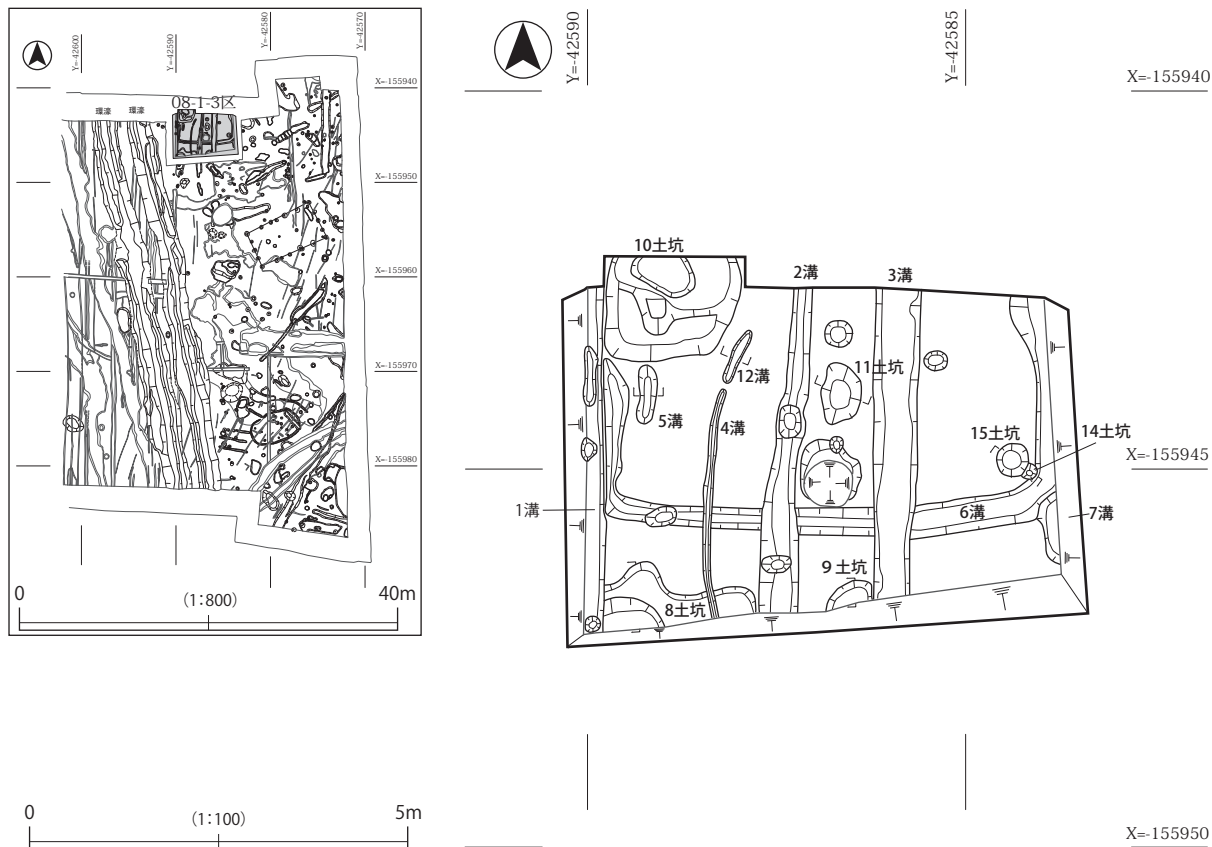


図537 3区 第2面 平面図

第6層

弥生時代前期の耕作土層である。本調査区では認められなかった。

第7層

褐灰色砂質シルトの土壌層である。層厚は0.1～0.2 mを測る。上面では乾痕が顕著に認められ、締まりも極めて良い。縄文時代～弥生時代にかけて形成された層と考えられる。

2. 第1面(第3d層上面) (図536 図版161)

先に述べたように、本調査区では第3層が厚く堆積しており、中位には淘汰の良い水成層(第3c層)が介在している。その水成層を除去した面を第1面として調査を行った。本面では、05-2-3区の成果から、中世前期～後期の水田畦畔が検出できる遺構面として位置づけられる。

今回の調査では、調査区全体が水田区画内に収まったため畦畔は確認できなかったが、全域において本面を覆う第3c層が入り込む径0.05m程度の不定形な踏み込み痕を確認している。

3. 第2面(第4a層下面) (図537 図版162)

平安時代の耕作土層である第4a層を除去した遺構面である。本来は第4a層の上面でも調査を実施すべきところではあったが、遺構が認められなかったことから、本面を第2面として調査を実施した。本面は水成層である第5層をベースとした下面遺構面であるため、本来遺構の確認は容易であるはずだが、上位の第4a層の汚染が部分的に多く残存していたため、やや強めに精査を行った。結果として、一部の遺構は消失してしまった可能性がある。

遺構としては、第4a層が落ち込む下面遺構として捉えられる南北方向の耕作溝のほか、弥生時代前期の土器を含む土器廃棄土坑・土坑・周溝・溝を検出している。

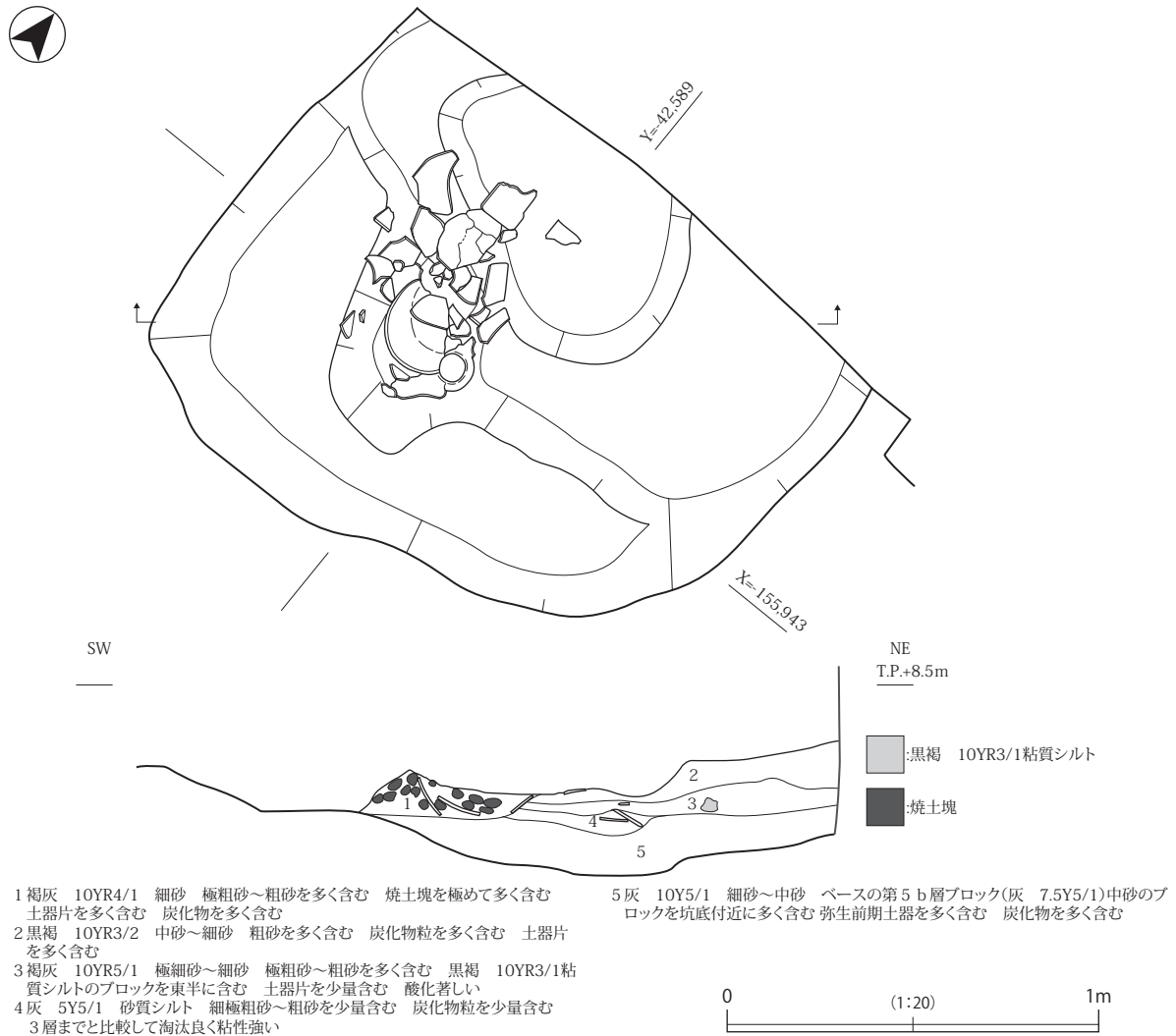


図538 3区 第2面 10土坑 平・断面図

[10土坑] (図538・539 図版163・172)

調査区の北西隅で検出した土坑である。北側は民有地との境界にかかっており、本体工事の施工上、支障の無い範囲まで法面部分を拡幅して調査を実施したが、残念ながら全容を把握することはできなかった。検出部分では幅1.65mの不整な長方形を呈する。掘形の形状は3段程度の不定形な掘込みを有しており、最も深い箇所、検出面からの深さは0.29mを測る。

埋土は、大きく暗灰黄～灰黄色を呈する砂質シルトを主体とする上層と、やや粗粒の砂を含む灰色を基調とする粘質シルトを主体とする下層の上下2層に区分でき、すべてにわたって炭化物を多く含んでいた。なお、遺物の大半は上位層から出土した。

極めて多くの焼土塊・炭化物を含み、とりわけ図示した範囲では、弥生土器の壺・甕の破片が多数出土した。特に坑底に被熱面等は観察できなかったが、焼土塊と土器片は互いに固く接着して容易には離れず、いくつかのもの土器片では焼土塊に取り込まれるようになったものも見受けられたことから、別の場所で被熱した後に廃棄されたものと想定できる。なお、土器はいずれも破片であり、完形になるものは認められない。

図539には埋土の上部から出土した遺物のうち、図示可能なものを可能な限り掲げた。

2870～2872は広口壺。頸体部に3条の沈線をめぐらす。2873～2876は甕。口縁端部に小振りな刻目を

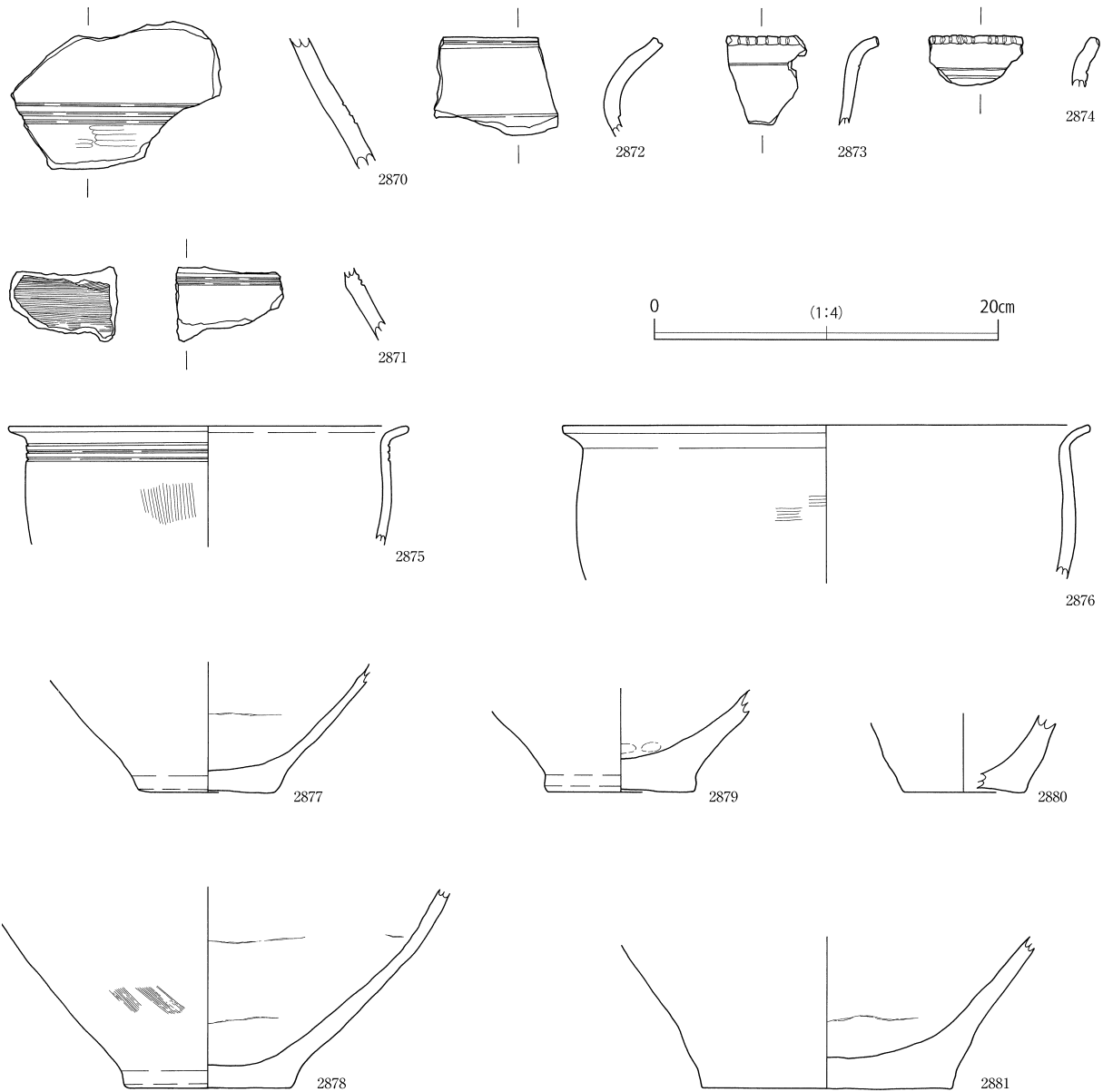


図539 3区 第2面 10土坑 出土遺物

施すもの(2873・2874)口頸部の境界に沈線をめぐらすもの(2874・2875)がある。2876は無文で、外面ハケ調整、体部上半の張りはやや強い。2877～2881は壺底部。いずれも胎土は非生駒山西麓産のものである。河内I-2～3様式に属する。

〔5溝〕(図540)

調査区北西部に位置する南北方向の溝である。2・3溝と同様に南北方向の溝で、耕作に伴っていたものと考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明。しかしながら溝の方向がほぼ南北方向を向くことや規模が類似することから、2区で検出した耕作溝群と同様に平安時代に形成された耕作溝の可能性はある。

〔6溝〕(図540 図版163)

調査区内を「コ」字形にめぐる溝である。北側では調査区外に延びている。一連の埋土で充填されており、2・3溝に重複されている。幅0.2m、検出面からの深さは0.02～0.05mを測る。北西部分では部分的に途切れているが、平面プランが方形を呈するなどやや特異なものである。北半が調査区外と

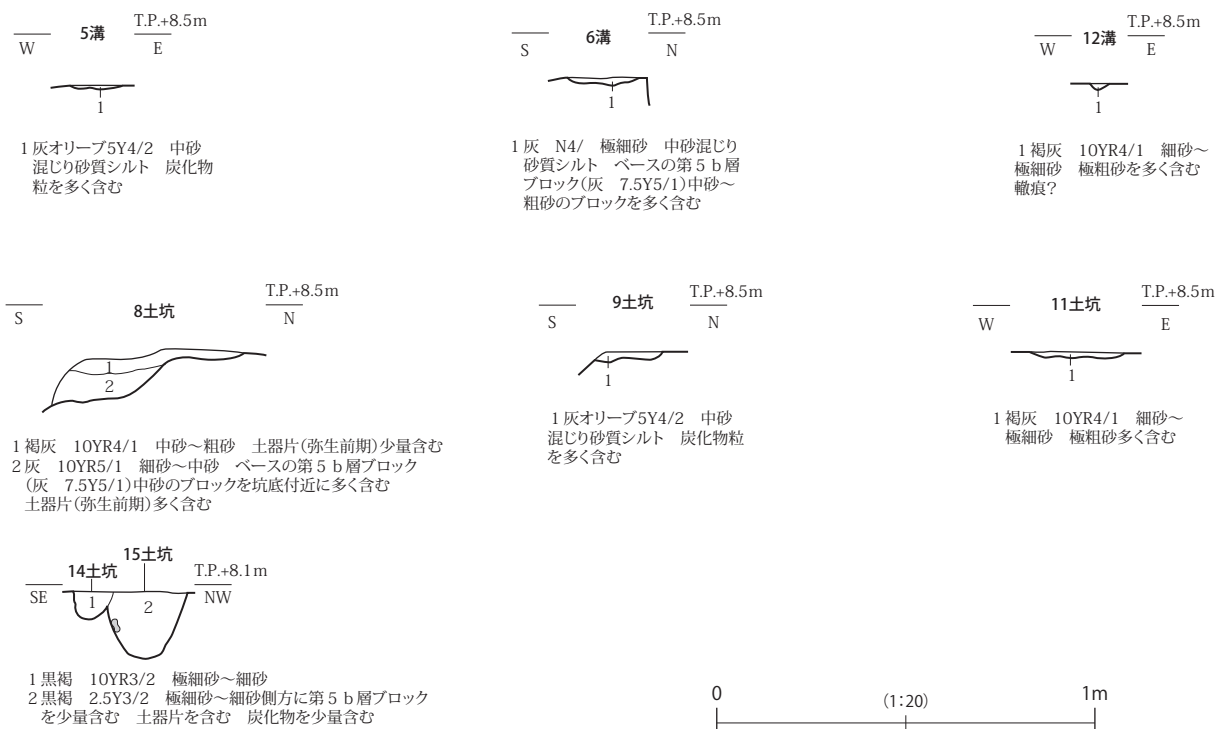


図540 3区 第2面 各遺構 断面図

なったため詳細は不明であるが、建物等の付随施設であった可能性もある。重複関係にある遺構にはいずれも重複されていることから、検出遺構の中でも古相を示すものと想定できるが、遺物は出土していないため帰属時期は不明とせざるを得ない。

〔4・12溝〕 (図540)

調査区西半部に位置する溝で、幅0.04m、深さ0.02mを測る。05-2-3区で検出した轍跡群と規模・方向を近似させることから、本来もう1条の溝と1.5m程度の間隔を設けつつ、対を成して轍跡を形成していたものと推定できる。

〔8土坑〕 (図540 図版163・172)

調査区南西隅に位置する土坑で、北東部の一隅を検出したに過ぎない。05-2-3区検出土坑の延長と考えられる。検出面からの深さは0.15mを測る。埋土は灰色を基調とする細砂～中砂で構成されており、埋土中から、細片を中心に少量の遺物が出土した。遺物はいずれも弥生土器で、図示可能なものとして2882・2883の甕がある。2882は頸部直下に3状の沈線をめぐらす。河内I-2様式に位置づけることができる。

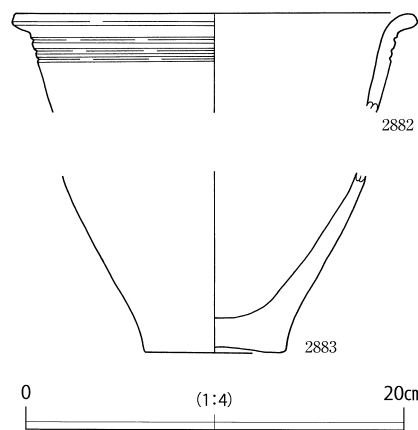


図541 3区 第2面 8土坑 出土遺物

〔9土坑〕 (図540)

調査区中央南端に位置する土坑で、南半は05-2-3区で検出している。幅0.6m、深さ0.03mを測る。埋土は灰色を基調とする砂質シルトで、炭化物を含む。遺物は出土していない。埋土の様相から弥生時代前期の遺構の可能性はある。

〔11土坑〕 (図540)

調査区中央部北側に位置する不整長楕円形の土坑である。長径0.8m、短径0.55m、深さ0.02mを測る。

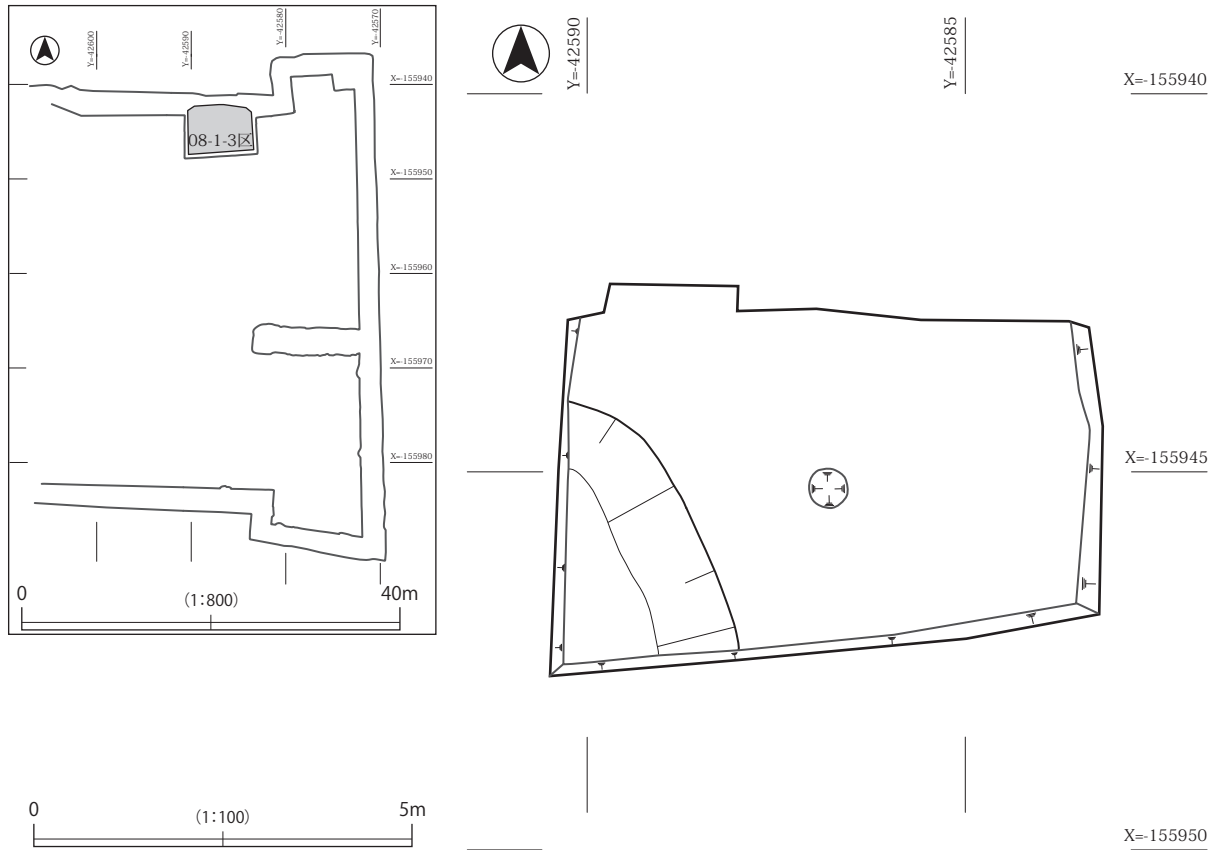


図542 3区 第3面 平面図

〔14・15土坑〕

調査区東側中央に位置する土坑である。重複関係にあり、14土坑が15土坑に重複している。14土坑は径0.1m、深さ0.08mを測り、15土坑は径0.22m、深さ0.18mを測る。重複関係にはあるが、共に黒褐色を基調とする極細砂～細砂を埋土としており、その他の遺構とは層相をやや違える。15土坑から土器の破片が出土したが、細片のため、時期比定は成し得なかった。

4. 第3面(第7層上面) (図542 図版162)

周辺での成果にあわせ、第5層を除去して検出できる第7層の上面を第3面として調査した。

遺構面は起伏に富んでおり、大まかに東から西に向かって傾斜する形状を採る。もっとも標高が高い地点は、東端中央部で、T.P.+8.06m、もっとも低い地点は南西端でT.P.+7.91mを測る。特に南西部ではやや大きめの傾斜がついており、その比高差は0.07mを測る。

本面では遺構は認められず、遺物も出土していない。周辺の調査成果と上位層である第5層に含まれる遺物から、縄文時代～弥生時代前期の遺構面と考えることができる。

〔各地層出土遺物〕 (図543 図版172)

以下に、人力掘削時に各地層から出土した遺物について記述しておく。

2884は第3層の上部から出土した瓦器小皿である。13～14世紀の所産。2885は第3層の下部である第3d層から出土した土師器皿である。9世紀の所産か。2886～2888は第4a層の出土遺物である。広口壺(2886～2888)が出土した。河内I-3様式。2889～2893は第5層の出土遺物である。すべて壺で、2890は頸体部境に沈線をめぐらす。2891は口縁端部直下に鈕孔を穿孔する。河内I-2～3様式の所産。

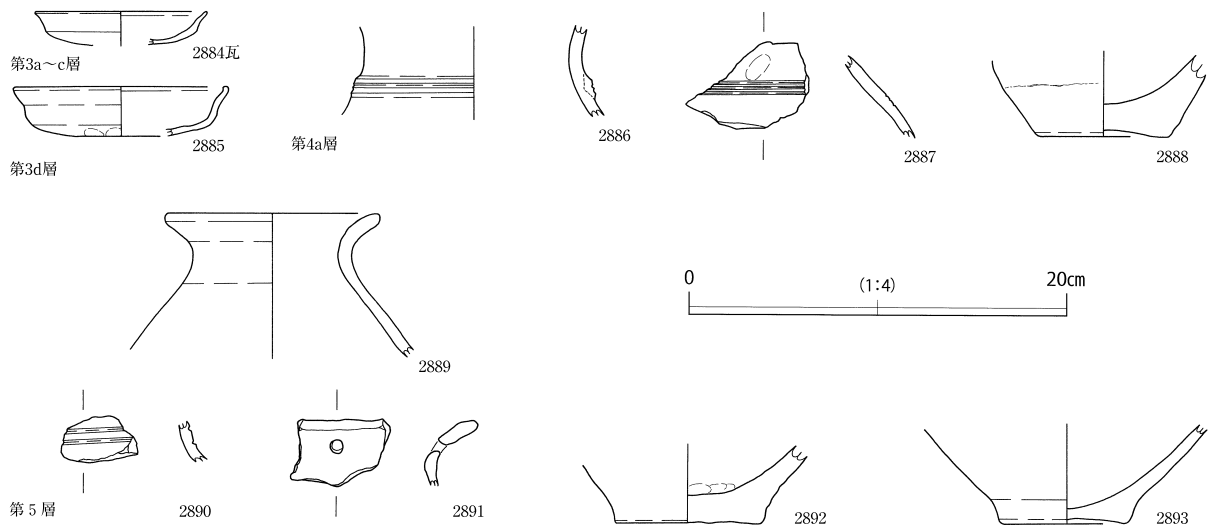


図543 3区 各層 出土遺物

第4節 小結

本節では、本章で述べてきた08-1調査で実施した各調査区の調査成果を簡単にまとめておく。

1区では中世～近世にかけて営まれた耕作に伴う溝群、平安時代の轍跡、弥生時代前期の溝・周溝を検出した。周溝の性格については、調査区南側の様相が不明であるため断定は成し得ないが、弥生時代前期の周溝墓を構成していた可能性もあり、西側で検出した集落との関係を考えるにあたり、重要な成果を挙げることができたと言える。

2区では中世～近世にかけて営まれた耕作に伴う溝群・井戸を検出した。また、05-2調査の成果から、その存在が明らかとなっていた平安時代の掘立柱建物群・耕作域の延長を確認した。特に調査区南端では、屋敷境と想定できる東西方向の溝を検出することができたことから、平安時代の建物群の南限を確認しえたものと考えてよいだろう。また、今回の調査ではこれに加えて人骨一体を埋葬する土坑墓を確認している。建物群に僅かに後出するものと位置づけられるが、平安時代の集落の動態を考える上で重要な成果を挙げることができた。また、同様に05-2調査で確認していた弥生時代前期の集落・耕作域が展開していることを確認できている。

3区では中世前期～後期の水田面を確認し、弥生時代前期の集落内において土器と焼土塊を多数含む土坑のほか、周溝状の遺構を検出した。本調査区は、05-2調査で確認した2重の溝に囲まれる弥生時代前期集落の居住域内に位置することから、集落内部の様相を明らかにする上で重要な成果と言える。

いずれも05-1調査と05-2調査の成果を追認する結果となったが、平安時代の集落跡内に営まれた土坑墓や方形周溝墓や土器棺墓の可能性のあるものなど、新しい成果も盛り込む結果となった。集落の全体像を把握するためには重要な成果といえる。

(正岡)

〔参考文献〕

藤井寺市教育委員会1993『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅷ 藤井寺市文化財報告第9集』

豊中市教育委員会2005「付論 摂津国豊島郡 垂水西牧坂郷西部における中世的集落の動態」

『大阪府指定史跡 春日大社南郷目代 今西氏屋敷』

第Ⅶ章 自然科学的分析

第1節 分析の目的と概要

本章では、今回の発掘調査で実施した自然科学分析についてその結果を報告するが、本節ではその目的と概要を記述しておく。

第2節では、大和川下流域における遺跡形成過程の総合調査と題して、池内遺跡の発掘調査で得ることのできた、各種データの総合的な解析を行った結果について報告を行う。

今回の発掘調査対象となった大和川左岸の松原市域部分は、近隣での発掘調査事例が少ないこともあり、周辺の古環境を復元するに足るデータの蓄積が成されていなかったのが現状であった。結果的に、河内平野の埋没段丘上に形成された沖積平野に対して、東西方向の大きなトレンチを開けることとなった本発掘調査は、面積・深度ともに周辺では例のない大規模な発掘調査であったことから、こうしたデータを取得するには、またとない機会であるとともに、ここで得られるデータは、今後、周辺域での古環境と人間活動の関係を考究するうえで、貴重な資料となることが予測された。そこで、既刊の報告書である三宅西遺跡(大文セ2009)を含む大和川線建設に伴う発掘調査では、調査開始当初から周辺古環境の復元に資するべきデータの採取に留意し、それらのデータの解析を実施するにあたって、近隣での成果を挙げている財団法人 大阪市文化財協会の全面的な協力を得て、遺跡が形成される過程を総合的に把握するための検討を行った。

この総合調査では、具体的にはまず、複雑に累重する遺跡を構成する堆積地層について地質学的な見地から検討を加え、本遺跡における堆積相の把握を行うための基礎的な検討を行った。ここでは、調査区の各地点に設けた下層確認トレンチの観察結果と、調査区域の全延長で採取した壁面断面の観察記録を元に堆積相の総合的な解析することで、各地層の形成年代を明らかにし、主として大阪市域に所在する周辺域の調査成果との比定を行うことで、地層の年代比定を行っている。

続いて、遺跡を形成する堆積物に含まれる微化石(花粉・珪藻・プラント=オパール)の抽出・同定を実施し、各時期における周辺古植生や埋没時の環境を把握した。

さらに、地層中に包含される降下火山灰の抽出・同定を行い、その降下年代から、堆積地層の年代決定を行った結果も報告している。これにより、埋没段丘の存在を明らかにするとともに、遺構・遺物の認められない地層についてもその形成年代を想定することが可能となっている。

第3節では、05-2-5区で検出した3504・3505溝及び3448・3449土坑を充填する堆積物中に含まれている微化石(花粉・珪藻)の抽出・同定を行った結果を報告する。

3504・3505溝は、西側に弧を描きつつ同規模・同方向で併走する弥生時代前期の溝で、埋土中には比較的多くの弥生時代前期の土器が出土している。また、溝の描く弧の内側からは、弥生時代前期の土器を含む土坑や平地建物・掘立柱建物を検出しており、05-2-3区で検出した溝との関係からは、水成堆積物の上に形成された弥生時代前期中葉の集落を囲堯ないしは区画する機能も想定できるものであった。溝の埋土はいずれも水成堆積物から構成されるが、本溝の埋没環境を復元することで、その性格についての解釈を進めるにあたり、有効なデータを取得することができると想定できたことから、資料の採取と分析を行った。

(正岡)

第2節 大和川下流域における遺跡形成過程の総合調査(池内遺跡)

財団法人 大阪市文化財協会

1. はじめに

本報告は、財団法人大阪府文化財センターが都市計画道路大和川線及び都市計画道路堺松原線(一般府道住吉八尾線)建設に伴い2006年度に実施した発掘調査の一環として、現大和川下流域における遺跡形成過程を明らかにするために、松原市天美北1丁目・天見東3～5丁目に所在する池内遺跡において財団法人大阪市文化財協会が受託して実施した総合調査業務の報告書である。

現大和川の下流は、石川との合流点付近から北～北西に流れていた本流(長瀬川・玉串川)を、1704(宝永元)年に西の大阪湾岸の堺浦まで付け替えた人工の河川である。付け替えルートは洪積台地と沖積平野にまたがっていたために、河内平野に南から北へ張り出す河内台地・瓜破台地・上町台地を横切って開削されている。流域には、八尾市船橋遺跡や大阪市瓜破遺跡をはじめとして考古学史上の著名な遺跡がいくつかあり、その一部は現大和川河床に露出していたことが知られている(大阪市文化財協会2003)。

現大和川の下流と並行するように計画された都市計画道路大和川線建設予定ルートは、東側から、中位段丘～上位低位段丘である瓜破台地、河内低地の南東部にあたる沖積段丘ないし西除川の氾濫平野と自然堤防、中位段丘～上位低位段丘である上町台地・泉北台地、難波砂堆・堺砂堆、泉州低地、大阪埋立地に跨って設定されており比較的平坦な中にも複雑な微地形を呈している(建設省国土地理院1965)。また、その中には、瓜破遺跡と隣接する弥生時代を中心とする三宅西遺跡、弥生時代～古代にまたがる池内遺跡、原始より大和川の付け替えまで存続した依網池跡、難波大道をはじめとして古墳時代から中世に至る複合遺跡である大和川今池遺跡、さらに旧石器時代にまで遡る複合遺跡である山之内・遠里小野遺跡など、立地や繁栄時期が異なる遺跡が立地している。

これらの遺跡特有の性格は、地形の成り立ちと密接に関係していると考えられる。殊にこのルートは台地や西除川をはじめとする古い河川の伸張方向とほぼ直交しているため、地層の堆積過程や遺跡の古地理の変化を把握しやすい条件を備えている。

そこで、この調査では、池内遺跡及びこれと隣接する三宅西遺跡における考古学的古生態地理とその変遷を総合的に解明する手がかりを得ることを目的として、踏査と火山灰分析により基本層序を把握し、周辺地域との地層の対比を行うとともに、試料を採取して堆積環境、古環境を明らかにするために、粒度分析、花粉分析等を実施したので報告する。

本業務で実施した踏査日数と分析試料数は下記の通りである。

踏査日数		延べ10人日
火山灰分析	池内遺跡(その1)3-1区	12点
	池内遺跡(その1)8-1区	9点
	池内遺跡(その2)5-3区西	12点
粒度分析	池内遺跡(その1)8-1区	9点
	池内遺跡(その1)3-1区	29点
	池内遺跡(その2)5-3区西	35点

花粉分析※ 池内遺跡(その2)5-3区西 20点

※ 微粒炭の概査を含む。

なお、解析に当たっては、総合的な観点から、データの採取年度に関わらず、補足分析を実施し、再検討の資料に加えている。また、池内・三宅西遺跡を含めた調査ルート全域を対象とした総合的な検討は、本報告の最後に行う。

2. 地形と地質

(1) 瓜破台地の地形と地質の概要

上町台地とともに大阪の中位段丘に区分される瓜破台地の地形と地質について、趙(2001)と図544の瓜破台地西部の東西地質断面図に基づいて概観する。

泉北丘陵と羽曳野丘陵の間を南から河内平野南部に突き出た瓜破台地は、周囲の沖積平野とは数m程度の比高がある。海拔高度は、大和川の北側、台地先端部が沖積平野に埋没する長居公園通付近で約10m、大和川の南側、松原ジャンクションから三宅西・池内両遺跡を通る台地中央部では、中高野街道付近が最も高く、約17mである(図544)。

瓜破台地をつくる中位段丘構成層は、上町累層と呼ばれ、台地の先端で層厚が約15mあり、泥層と一部指交する下部の砂礫層が約2m、およそ12万年前の堆積と推定される中部の海成粘土～砂層(Ma12海成層)が約5m、上部の砂がち砂泥互層が8m前後の層厚で重なっている。この上部の基底付近には、泥炭～泥炭質粘土層が層厚1m前後で挟まれている。少なくとも4面の堆積の休止期を示す層理面があり、それらの層理面を上面とする地層は、木の株が根をはった泥炭質の泥層であったり、上面から乾痕が発達し、分級が不良の砂質泥層であったりする。それぞれの上面は河成の砂層・砂礫層が覆い、上方細粒化している。台地中央部での層厚は最大で約24mあり、台地先端部に比較して全般に粗粒である。礫層主体の下部は1～5mと比較的厚いが、中部の海成層は礫・砂・泥からなり、層厚は1～2mと薄い。上部の砂泥互層が最大で層厚17mと厚い。

瓜破台地の東縁では西側が落ちる顕著な北北東-南南西方向の撓曲軸を持つ撓曲構造が認められ、台地北端部の中位段丘構成層の基底では10m前後の落差があり、台地中央部のそれでは17m程度の落差がある。これに対して、台地先端部・中央部とも東側はなだらかな斜面になっている。

中位段丘構成層の上部には、2層の火山灰層や火山灰濃集層準が挟まれている。下位の北花田火山灰層は鬼界葛原火山灰と対比され、堆積年代は9.1万年前と推定されている。また上位の吾彦火山灰層は阿蘇4火山灰と対比され、堆積年代は8.6万年前と推定されている(吉川ほか1991)。

中位段丘構成層を部分不整合で覆う低位段丘構成層は、台地の表層付近に広く分布する。下部が層厚1～4mの砂礫層から上方で層厚1～2mの粘土層へ細粒化する河成～沼沢湿地性の地層であり、低位段丘構成層の主体を成す。低位段丘構成層の上部から最上部は、下部の堆積後に開析された小規模の流路および凹地に堆積した地層、および古土壌である。分布は断続的であり、層厚は薄く、せいぜい数10cmである。水成層が分布しない低位段丘構成層の上面には、乾痕が著しく発達している。最上部には始良Tn火山灰と対比される平安神宮火山灰層(約2.5万年前：吉川ほか1986、較正年代は約2.8万年前)を挟在する。中位段丘構成層との部分不整合が堆積環境の急激な変化によってもたらされたと考えられること、下部の上半部の泥層が長い時間を要して堆積したと考えられること、最上部の暗色帯の形成は、著しい乾痕や泥炭層の存在から低位段丘成立後であると考えられること、などから、趙(1994)は低位段丘層の主体である下部層の堆積年代は、最終氷期の比較的早い時期であったと推定している。酸素



図 544 瓜破台地西部の東西地質断面図

同位体ステージ4と考えられる。

低位段丘構成層を最終氷期極寒期(酸素同位体ステージ2)の不整合で覆う沖積層は、晩氷期以降の地層であり、難波累層と呼ばれる。多数の暗色帯を挟在して、台地周囲の氾濫平野に広く分布している。

(2)池内遺跡の基本層序

池内遺跡の東西約0.9 kmのルート of 層序断面図を図545に示す。調査地に沿う道路地盤の標高はT.P. 10m前後であり、旧西除川の自然堤防に近い遺跡西端では10mを超え、徐々に高くなる。当該地域の氾濫平野を構成する難波累層の層厚は1.5~3.0 mである。現地での観察および大阪府文化財センターから提供を受けた調査データに基づき、当該地の地層は下記のとおり区分できる。

なお、図545には詳しく地層を観察した地点は黒太線や黒丸で示した。また、基本層序の地層名は、地層番号の前に遺跡名である「池内」を付けて、例えば「池内1層」のように表記することにし、図表などでは「IK1」のように表記することがある。また、池内遺跡(その1)の調査範囲および池内遺跡(その2)の調査範囲の標記については、煩雑さを避けるためそれぞれIK(1)区およびIK(2)区と記すことにする。

1)沖積層(難波累層)

池内0層は現代の盛土層および攪乱層である。

池内1層は近代~現代の作土層をいい、層厚は約25cm以下である。

池内2層は主として近世の作土層で、層厚は20~30cmである。

池内3層は中世(~近世)の作土層および河川氾濫堆積層で、遺跡のほぼ全域に分布する。層厚は西部で約120cm、で約10cmで、西部のIK(2)区では3a~3d層に細分できる。

池内3a層および3b層は主として作土層を主体とし、さらにIK(2)区西部では各層内および下半部に薄い砂層を挟む。

池内3c層は、顕著なトラフ型斜交ラミナが見られる河川の氾濫堆積層で、層厚は西側で厚く約120cm、東側に薄くなる。特にIK(2)区西部でのトラフの伸長方向は北北東-南南西方向であった。

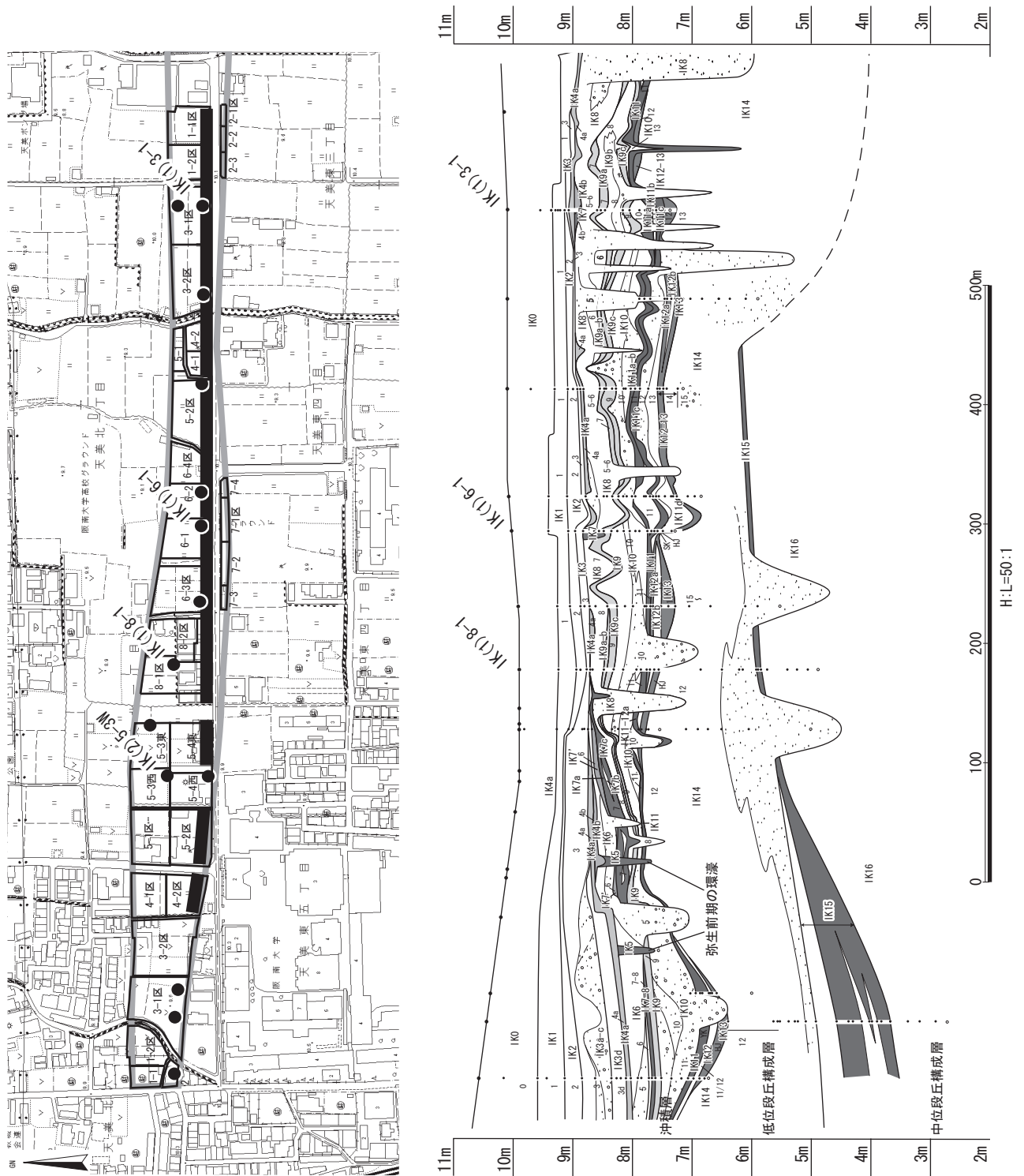
池内3d層はオリーブ灰色砂混りシルト~シルト質砂からなる作土層で、層厚は20~40cmである。上面では水田址やヒトの足跡、ウシなどの偶蹄類の足跡、下面で耕作痕跡が検出されている。瓦器・土師器などが包含される。

池内4層は4a層と4b層に区分される。

池内4a層は、灰褐色砂質シルトないしシルト質砂からなる平安時代の作土層で、層厚10~20cmである。本層は遺跡のほぼ全域に分布するが、上位の池内3層によって本来の上面は削剥されている。上面において溝や土壇、轍、下面で耕作痕跡が検出されている。平安時代の土師器が含まれる。

池内4b層は灰褐色シルト混り砂からなる。平安時代の遺物を包含する古土壌で、主としてIK(2)区の中央部に分布する。IK(2)区西部およびIK(1)区では、上位の池内4a層によって大部分が削剥されているため、深い遺構内にもみ分布する。IK(2)区の中央部では、層厚は約40cmで、さらに細分が可能である。IK(2)区では、上面で平安時代の建物や坪境溝、屋敷跡をはじめとする遺構群が検出されている。また、下面あるいは地層内で耕作痕跡、弥生時代中期の土壇、溝、古墳時代の方形周溝墓や土壇、井戸などが検出されている。

池内5層は、黒褐色シルト~シルト質砂を主体とする弥生時代前期の溝埋土である。層厚は溝内で約100cmである。弥生時代前期中段階の土器を含む。



断面図中の「IK (数字)」は池内遺跡の基本層序番号、小さな数字は調査時の各現場ごとの層序番号を示す。

図 545 調査区東西地質断面図

池内6層はシルト～砂礫からなる河川の氾濫堆積層で、層厚は平均約50cm、最大で約150cmである。IK(2)区中央部から西部にのみ分布する。上面で弥生時代前期の溝が検出されている。弥生時代前期中段階の土器を含む。

池内7層は主としてIK(2)区側に分布する後背湿地堆積層、古土壌および河川の氾濫堆積層、作土

層からなる。IK(2)区での層厚は20~40cmで、池内7'層および池内7a層~7c層に細分できる。IK(1)区では遺構内の埋土にのみ分布する。弥生時代前期中段階の土器を含む。

池内7'層は暗灰色砂混りシルトからなる作土層で、層厚は10cm以下である。IK(2)区中央部にのみ分布し、弥生時代前期の小区画水田が検出されている。

池内7a層~7c層は黒褐色ないし黄褐色のシルト~シルト質砂からなる暗色帯構成層で、にぶい黄褐色ないし暗褐色の砂質シルト~砂礫からなる河川氾濫堆積層である池内7b層を挟む。

池内8層は粘土質シルト~砂礫からなる氾濫原堆積層で、遺跡の全域に分布する。IK(1)区では約80cmと厚く堆積し西部に層厚が薄くなり、IK(2)区西端では上位の池内7層に収斂して区別できない。

池内9層は後背湿地の細粒堆積層、古土壌および河川の氾濫堆積層からなり、遺跡全域に分布する。層厚は東部で約60cm、西部で約40cmである。IK(1)区東部およびIK(2)区中央部で9a層~9c層に細分される。

池内9a層は黒褐色ないし褐灰色粘土質シルト~シルト質砂からなる後背湿地の堆積層および古土壌である。上面で乾痕が観察される。IK(2)区西部で、上面あるいは層内で倒木痕跡が検出されている。

池内9b層は灰黄褐色ないし灰色シルト~砂からなる河川の氾濫堆積層である。

池内9c層は灰黄褐色粘土質シルト~シルト質砂からなる古土壌および後背湿地の堆積層である。上面では乾痕が観察される。IK(1)6-1区で下限付近から縄文時代後期に多い基部に抉りのある凹基式石鏃が出土している。

池内10層は上部が灰褐色ないし緑灰色の砂・礫からなる河川の氾濫堆積層、下部が緑灰色シルト~粘土からなる湿地の堆積層である。遺跡の全域に分布し、層厚は東部で約80cm、西部で約70cmである。

池内11層は、後背湿地の細粒堆積層、古土壌および河川の氾濫堆積層からなり、遺跡の全域に分布する。層厚は東部で約70cm、西部で約40cmである。IK(2)3区東部では上面で縄文土器(船元Ⅲ式?)やサヌカイト剥片が出土している。IK(2)区およびIK(1)区の西部では収斂しているが、IK(1)区東部では池内11a層~11c層に細分できる。

池内11a層は黒灰色粘土質シルトからなる暗色帯構成層である。

池内11b層は灰色砂・礫、および緑灰色シルト~粘土からなる河川の氾濫堆積層である。

池内11c層は黒褐色砂質シルトからなる古土壌および沼沢湿地の堆積層である。上面で乾痕が観察される。横大路火山灰層(鬼界アカホヤ火山灰: K-Ah)の降灰層準である。

池内11d層は上部が褐灰色砂・礫からなる河川の氾濫堆積層、下部が灰色ないし緑灰色からなるシルト質砂~砂質シルトからなる湿地の堆積層である。下部層の上面に乾痕が観察された。

池内12層は池内12a層および池内12b層に細分される。層厚は全10cm以下である。

池内12a層は暗灰色粘土質シルトからなる古土壌および沼沢湿地の堆積層で、池内12b層は灰色ないし灰黄色粘土質シルト~砂質シルトからなる。乾痕による攪乱が顕著である。本層の上面から下位の池内13層にかけて乾痕が顕著に観察される。阪手火山灰層(Skt)の降灰層準である。

2) 低位段丘構成層

池内13層はオリーブ灰色シルト混り砂からなる暗色帯構成層で、層厚は25cm以下である。無色透明の扁平型火山ガラスに富む平安神宮火山灰層(始良 Tn火山灰: AT)がレンズ状に挟まれている。

池内14層は下半部が緑灰色砂礫からなる河成層で、上方細粒化して緑灰色粘土質シルトへ移化する。層厚は最大で260cmで、広域に分布する。

3) 中位段丘構成層(上町累層)

池内15層および池内16層は、IK(1)区西端部およびIK(2)区西部における坪掘り調査で確認した地層である。

池内15層は上部が緑灰色シルト薄層と砂薄層からなる河成層で、層厚は約140cmである。下部が褐灰色泥炭質シルト～粘土質シルトからなる沼沢湿地の堆積層で、細粒砂薄層を挟む。IK(1)区西端部では上部が削剥されており、下部のみが観察された。下部の泥炭質シルト層からは北花田火山灰層(鬼界葛原火山灰：K-Tz)に由来するとみられる高温型石英が確認されている。

池内16層は緑灰色粘土質シルト～砂からなる河成層で、層厚は100cm以上である。分級が良く、上方細粒化が認められる。

4) 地層の年代

遺構・遺物および火山灰層、地層の累積状況から、各地層の堆積年代は次のように推定できる。

池内0層：現代	池内1層：近代～現代
池内2層：近世	池内3層：中世(～近世)
池内4a層：平安時代(後半)	池内4b層：弥生時代中期～平安時代(前半)
池内5層：弥生時代前期	池内6層：弥生時代前期
池内7層：弥生時代前期	池内9c層：縄文時代後期
池内11a層：縄文時代中期	池内11b層：縄文時代中期
池内11c層：縄文時代早期(後半)～中期	池内11d層：(縄文時代草創期～早期)
池内12層：後期旧石器時代後半～縄文時代草創期、晩氷期	
池内13層：後期旧石器時代、最終氷期、上限は最終氷期極寒期(酸素同位体ステージ3～2)	
池内14層：中期旧石器時代、最終氷期寒冷期(酸素同位体ステージ4～3)	
池内15層：中期旧石器時代、最終間氷期終盤(酸素同位体ステージ5)	
池内16層：中期旧石器時代、最終間氷期後半(酸素同位体ステージ5)	

3. 自然科学分析

(1) 試料

試料の採取にあたっては、層理面や岩相の差異に留意し、薄層も区別して採取した。各分析に用いた試料は、分析結果を比較検討しやすいように、原則として同一の試料を分割して用いたり、近接した同層準の試料を用いている。池内(その1)3-1区から採取した池内1～12層(現場層序の1～13層)の試料の中から粒度分析に29試料、火山灰分析に12試料、池内(その1)8-1区から採取した池内14層～16層(現場層序の15層～16層・11～13層)の試料の中から粒度分析に9点、火山灰分析に9試料、池内(その2)5-3区西から採取した池内2層～14層(現場層序の2層～12層)の試料の中から粒度分析に35試料、火山灰分析に12試料、花粉分析に20試料である。その他、2005年度に実施した池内(その1)6-1区の試料に関しても、池内10層～14層(現場層序の10層～13層)の中の2試料について火山灰の追加分析を行った(図546～549)。

なお、各試料採取地点の呼称は、例えば池内(その2)5-3区西地点をIK(2)5-3Wのように略記する場合がある。また、試料番号は他の採取地点の試料との混同を避けるために、IK(1)3-1地点の試料はtiという符号付し、IKtiL39、IK(1)6-1地点の試料はsiという符号を付しIKsi1-2、IK(1)8-1地点の試料はtoという符号を付しIKto01、IK(2)5-3Wの試料はtaという符号を付しIKtaLL4

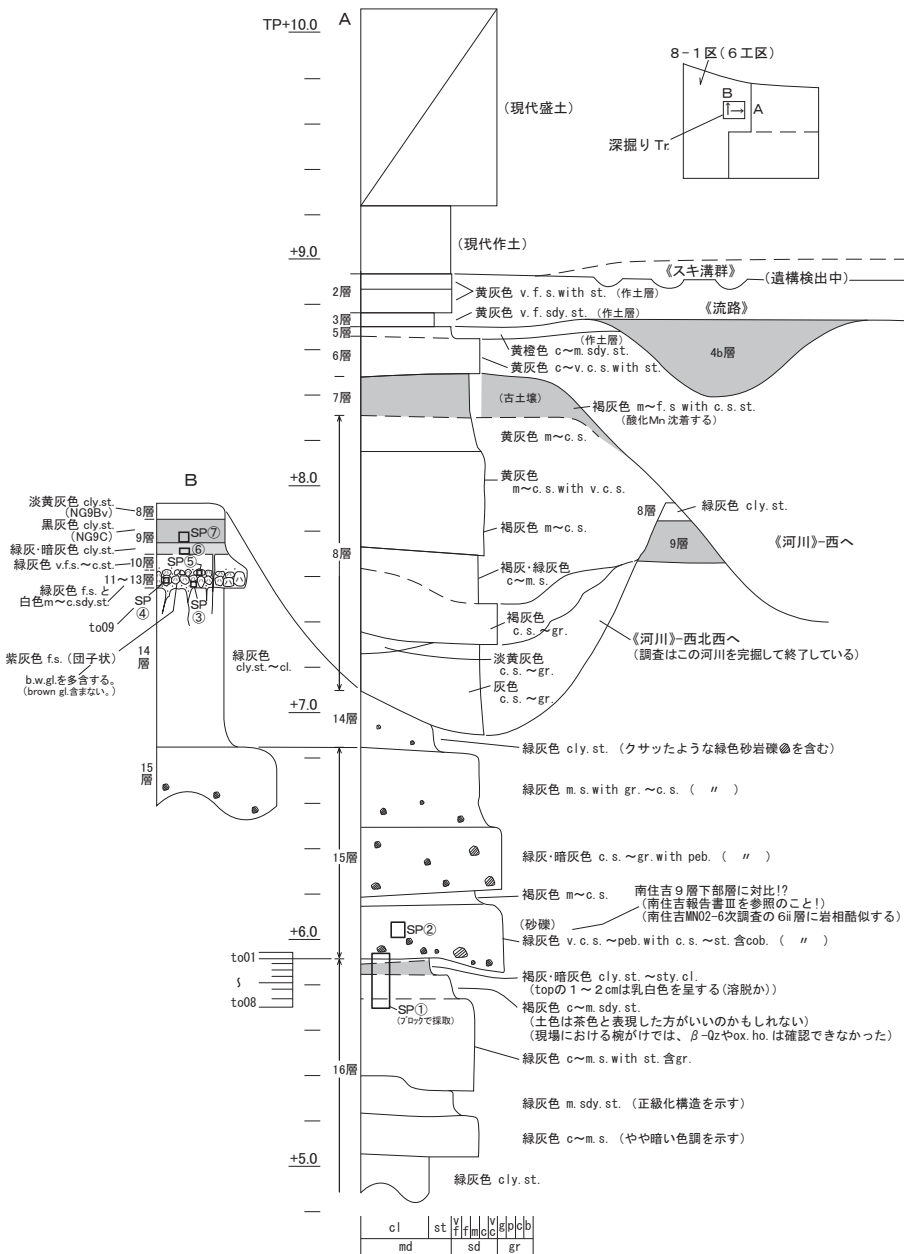


図547 池内遺跡(その1) 8-1区(IK(1)8-1) 試料柱状図

波洗浄を行い、中粒シルト以下の泥を除去し、恒温乾燥器内で再度 100 °C 1 日間以上乾燥させた。秤量後、標準篩を 0.5 φ 単位で重ね、ロータップ式篩振蕩機を用いて30分間篩い、篩ごとに秤量した。

泥用試料は70ccマヨネーズ瓶を用いて、約 120 分の湯煎により、10%過酸化水素水による有機物の分離と上澄み中の植物片の除去後、さらに 0.4 mm 以上の礫・砂を除去した。ヘキサメタリン酸ナトリウム 0.1 mol を分散剤として10cc加えた試料は、適量を分取しレーザー回折式粒度分布測定装置で測定した。

礫砂用試料の秤量値と泥用試料の測定値を礫・砂・泥の割合を基に0.5 φ 単位の累積値を換算して、平均粒径、中央粒径、分級度、歪度、尖度について粒度分布の評価を行うとともに、ヒストグラムヒストグラムと累計曲線を作成した(図 550)。

2) 分析結果

i. IK(1)3-1 (符号ti)

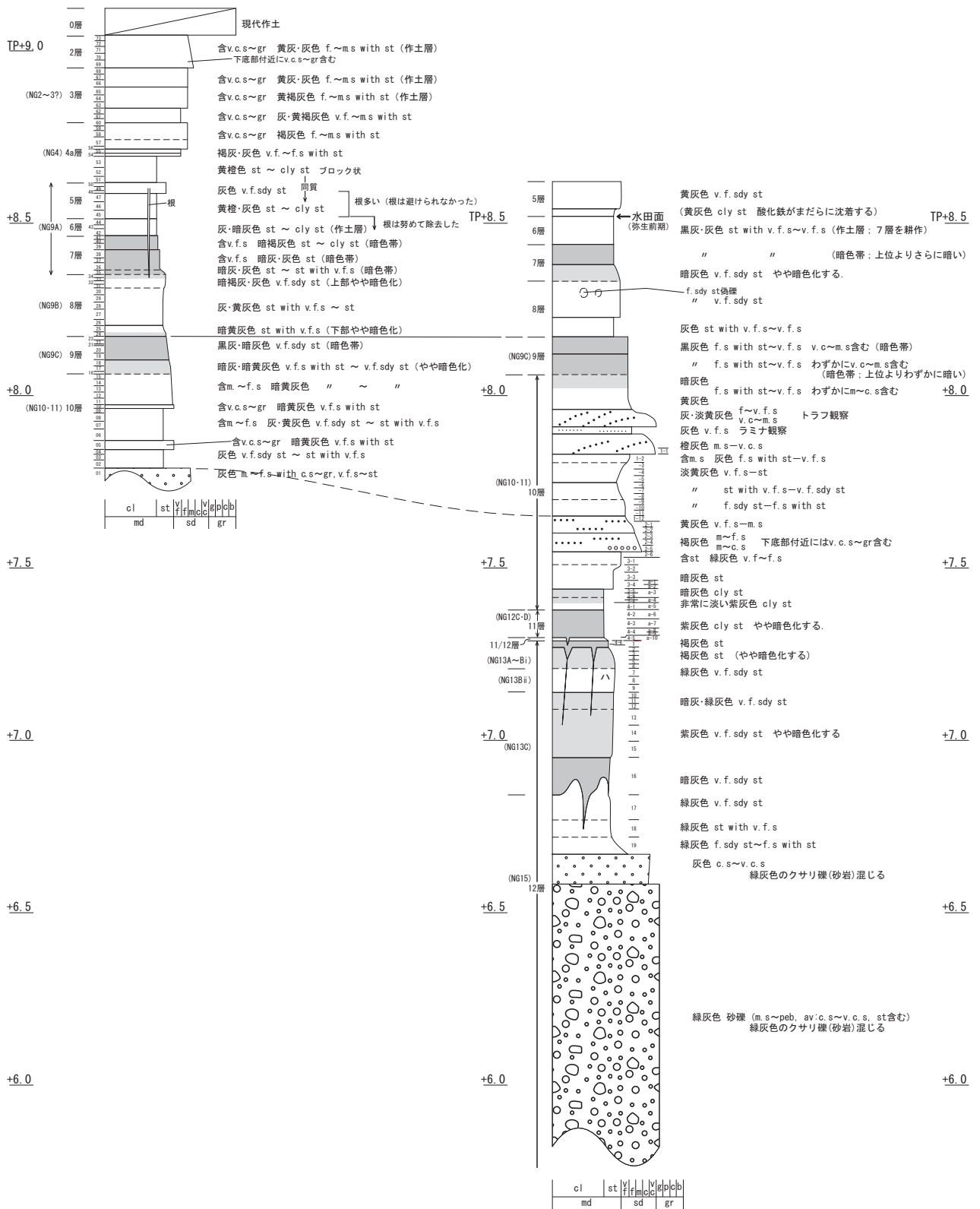


図548 池内遺跡(その2) 5-3区西 (IK(2)5-3W) 試料柱状図

各採取試料の砂・礫・泥の割合を図551 aに、平均粒径・中央粒径・分級度・歪度・尖度などの粒度分布の評価を図551 bに、粒度分布のヒストグラム・累積曲線を図552に、並びに分析データを表1・2に示す。

砂と泥を比較すると、試料tiL44~27は全般的に泥が主体であり、tiL27~12に向かって上方粗粒化す

る。暗色帯である tiL 12~04はやや上方細粒化の傾向があるものの砂勝ちである。tiU 28-3 ~ tiU 41-3はやや上方粗粒化の傾向があるものの全般的に泥勝ちであるが、氾濫性の粗粒堆積層の試料 tiU 27-1では砂勝ちである。古土壌と作土である tiU 41-7 ~ 30は泥が40%以上の砂勝ちである。礫は砂が30%以上占める試料で砂の1割程度の比率を占める。平均粒径や中央粒径も、礫・砂・泥の割合を反映している。畝間堆積物の粗粒部分を分析した試料 tiU 40-2の平均粒径は3.7 φで上下の試料が5 φ前後であるのに比べて突出して粗い。しかし、中央粒径は上下の試料と比べて大差なく、河川の氾濫による堆積層の試料とは、明瞭に異なっている。一般に、暗色帯は相対的に泥勝ちである傾向があるが、試料 tiL 12~04、tiU 41-7 ~ 40-2は粗粒である。

粒度分布のヒストグラムを見ると、tiL 44~tiL 27は、下部では8.0 φ付近にモードがあり、5.0 φと4.0 φのモードが徐々に顕著になる。その上位ではtiL 12まで5.0 φのモードが僅かに残るが、4.0 φ ~ 2.0 φ・0.0 φへ優位なモードが顕在する。tiL 07・04では下位の2.0 φ・0.0 φのモードを引き継ぐ1.5 φのモードに加えて、5.0 φのモードがしだいに顕著になり、tiU 28-3では5 φの単峯性モードとなる。tiU 27-1では2.0 φと4.5 φの双峯性モードとなる。tiU 27-3からtiU 10では、4.5 φから7.0 φへ徐々に細粒化するが、tiU 09より上位では、粗粒堆積物が増え、tiU 04より上位では4.5 φにモードが移り、さらにU 471-7では最上位のtiU 30まで3 φにモードがある。

5層準の暗色帯の層準に注目すると tiL 07・04では双峯性が顕著であり、U 41-7 ~ 40-2では分級度がやや悪い特徴がある。また、これらの層準と tiU 39-3以上の試料では分級が悪く、尖り度には顕著に現れていないもののヒストグラムからは扁平な印象を与える。なお、多くの試料に認められる10.0 φ

付近のモードは測定機器のゴースト癖の可能性が高いため分析の対象とはしない(以下、同様である)。

ii. IK (6) 6-1 (符号si)

各採取試料の砂・礫・泥の割合を図553 aに、平均粒径・中央粒径・分級度・歪度・尖度などの粒度分布の評価を図553 bに、粒度分布のヒストグラム・累積曲線を図554に示す。

礫砂泥の割合を見ると、分析試料は相対的に泥が多く、砂が少なく、礫はsi 11-8 ~ 10-4の試料に約3%含まれるだけで、ほとんど含まれない。粗粒堆積物の比較的多いsi 11-8 ~ 10-2にばらつきはあるが、si 9-3以上では全般に上方細粒化している。この傾向は、平均粒径と中央粒径でも見られ、6.0 φから7.0 φへと徐々に移り変わる。分級度はほとんどが非常に悪く、特にsi 11-8・11-2で顕著であ

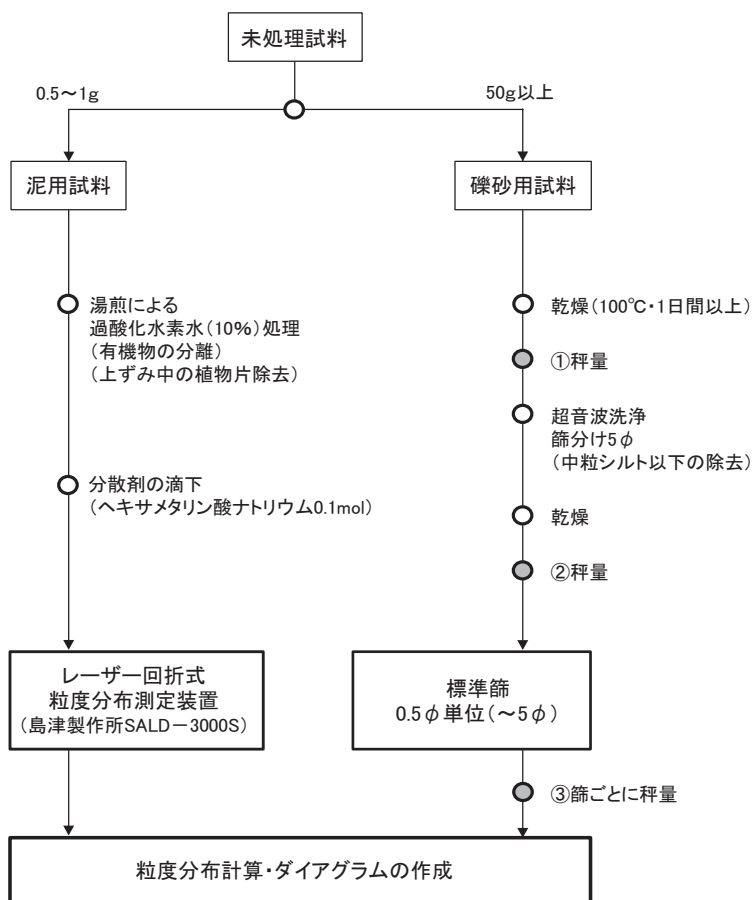


図549 粒度分析の手順

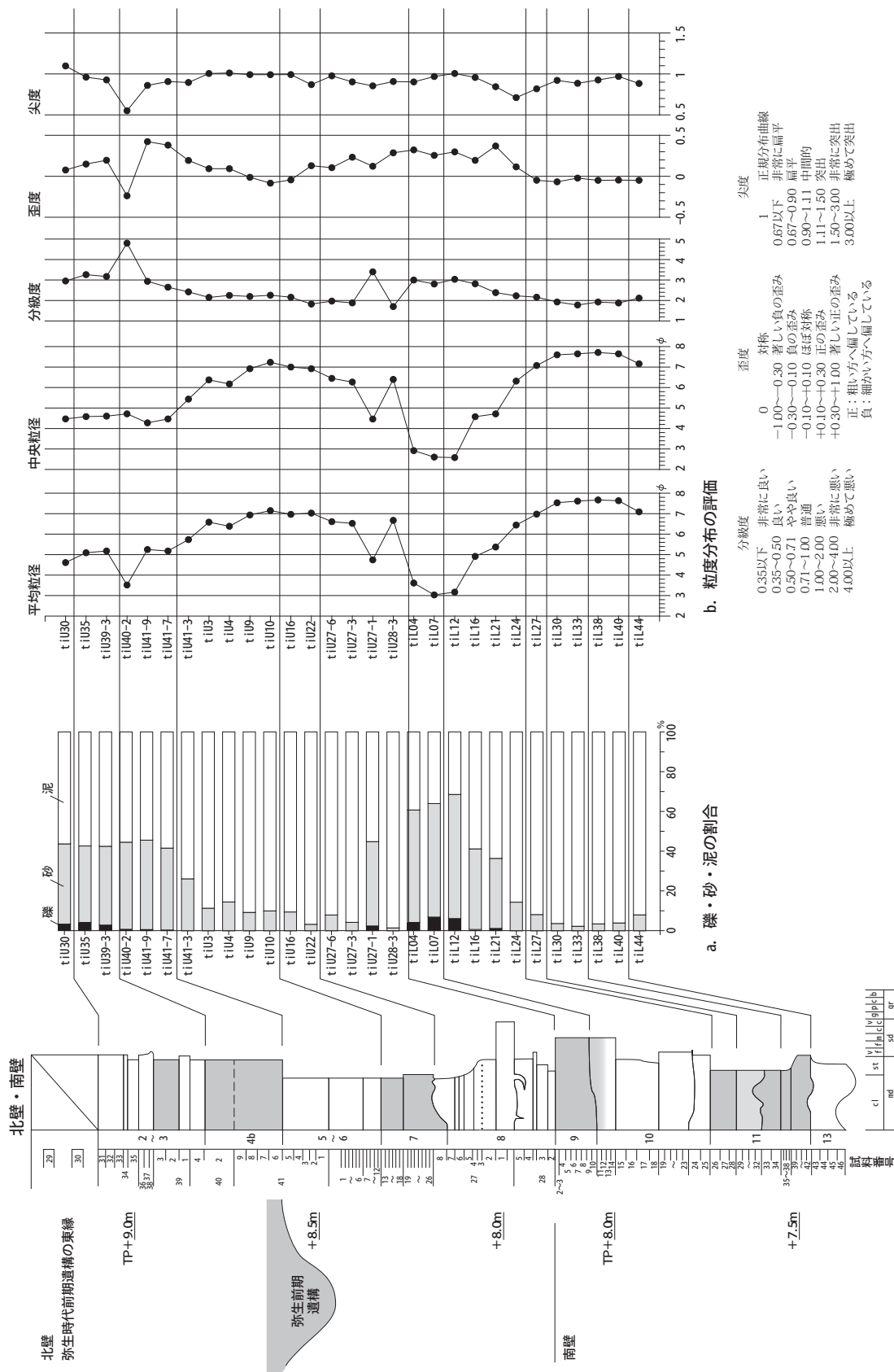


図550 I K (1) 3-1 礫砂泥の割合・粒度分布の評価

る。歪度はsi11-8~10-4が負の歪みを示すほかは概ねほぼ対称か、正の歪みである。尖度ではsi11-8が突出している以外は、中間的~扁平である。

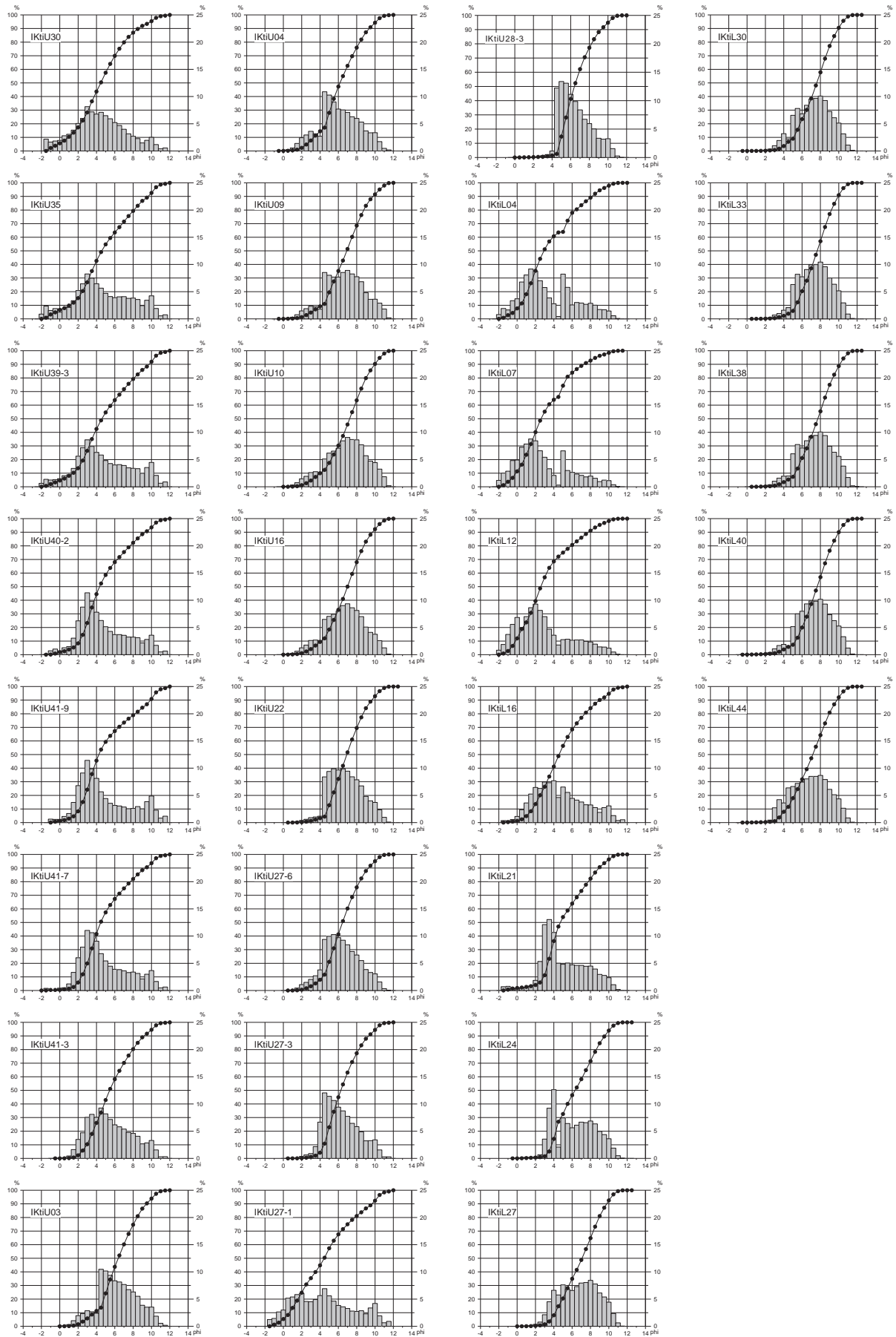


図551 IK(1)3-1 粒度分布のヒストグラム・累計曲線

東壁南東端

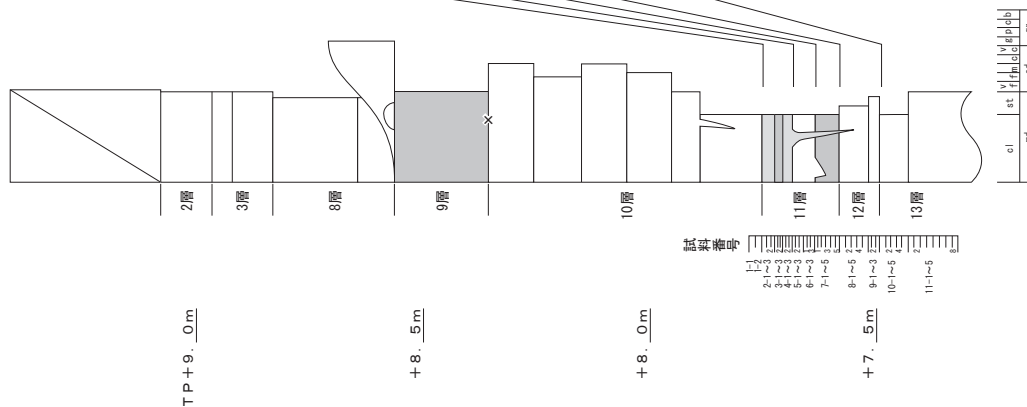
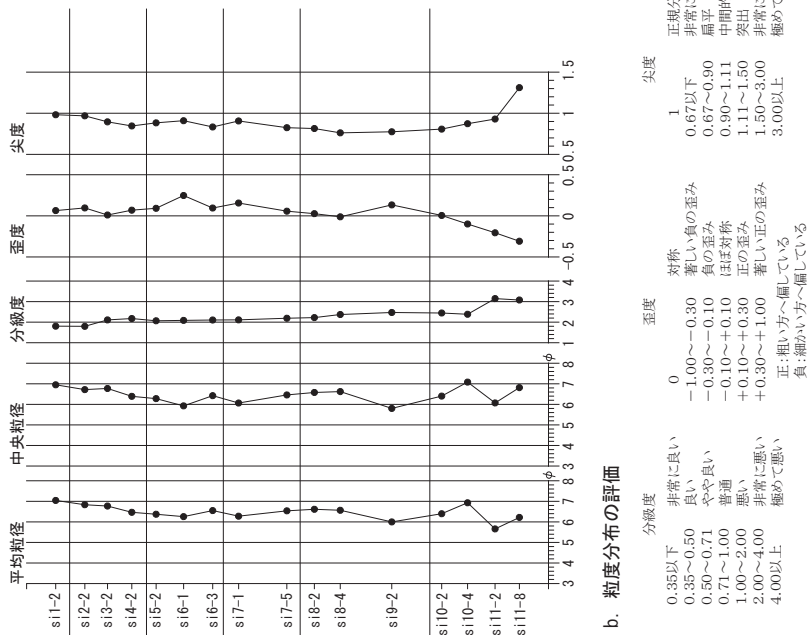


図552 IK(1) 6-1 礫砂泥の割合・粒度分布の評価

粒度分布のヒストグラムを見ると、si11-8・11-2では7.0φにモードがあるが、その上位のsi10-4~8-2では8.0φに移るとともに、4.0~5.0φに微弱なモードが生じ、上方へ徐々に顕著なモードになり、si10-2で8.0φのモードと置き換わっている。si10-2・9-2では3.0φのモードも加わり、扁平なヒストグラムとなる。si8-4と8-2では6.5~8.0φの曖昧なモードに4.0~4.5φのモードが重なり、si7-5から上位では4.5φのモードを引き継いだ4.5~5.0φのモードが顕著で、si



b. 粒度分布の評価

分級度
 0.35以下 非常に良い
 0.35~0.50 良い
 0.50~0.71 やや良い
 0.71~1.00 普通
 1.00~2.00 悪い
 2.00~4.00 非常に悪い
 4.00以上 極めて悪い

歪度
 対称
 著しい負の歪み
 負の歪み
 ほぼ対称
 正の歪み
 著しい正の歪み
 正:細かい方へ偏している
 負:細かい方へ偏していない

尖度
 1
 0.67以下 正規分布曲線
 0.67~0.90 非常に扁平
 0.90~1.11 扁平
 1.11~1.50 中間的
 1.50~3.00 突出
 3.00以上 非常に突出
 極めて突出

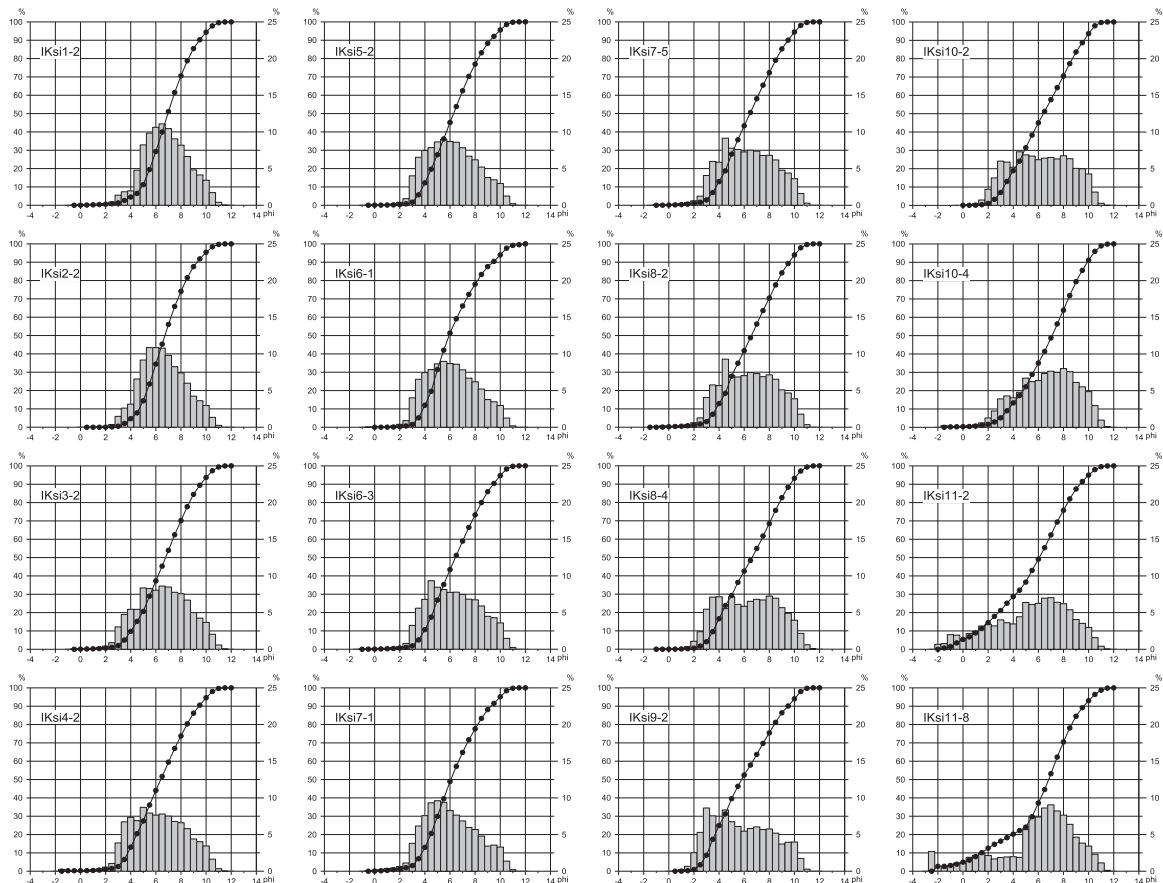


図553 IK(1) 6-1 粒度分布のヒストグラム・累計曲線

5-2以上では5.0~6.5 φへとモードはやや細粒部へ移行する。

iii. IK(1) 8-1 (符号to)

各採取試料の砂・礫・泥の割合を図555 aに、平均粒径・中央粒径・分級度・歪度・尖度などの粒度分布の評価を図555 bに、粒度分布のヒストグラム・累積曲線を図556に示す。

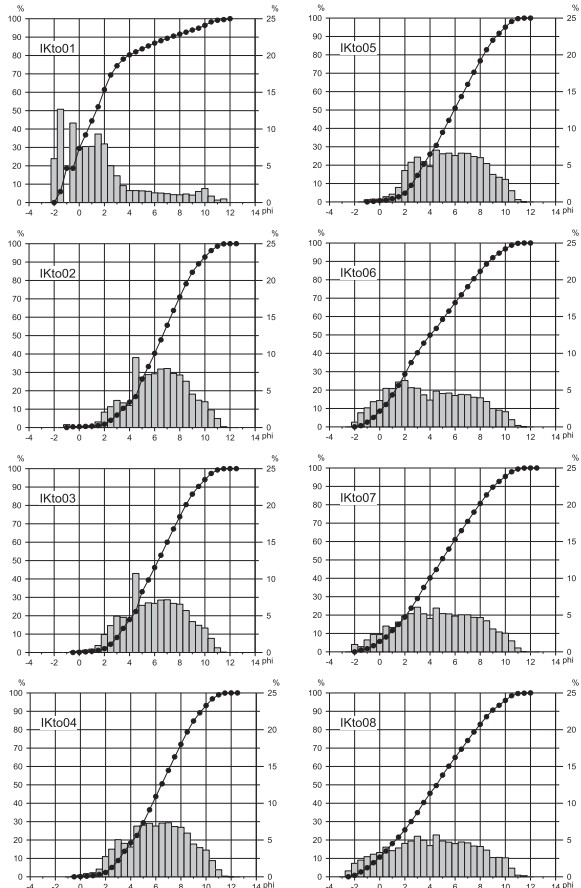
礫・砂・泥の割合を見ると、試料to08~06は礫と砂を合わせた割合が40%以上あるのに対して、to05~02は礫・砂が少なくなり、上方細粒化の傾向が認められる。この傾向は平均粒径と中央粒径にも認められ、to08~06の平均粒径・中央粒径とも4~5 φの中にあり、to05~02のそれらは5.9~7 φの中にある。試料to01は礫・砂が80%超え、平均粒径・中央粒径ともに1~2 φの中にある。

粒度分布のヒストグラムを見ると、to08~06は顕著なモードが無く、2.0~4.5 φに分布幅の広い扁平なモードが認められる程度である。to05~02は7.0 φと4.5~5.5 φのモードがある双峯性モードであり、下位に比べれば尖度は扁平~中間的で正規分布に近づく。試料to01には-1.5に著しい正の歪みのモードがあり、下位の試料とは様相が異なっている。

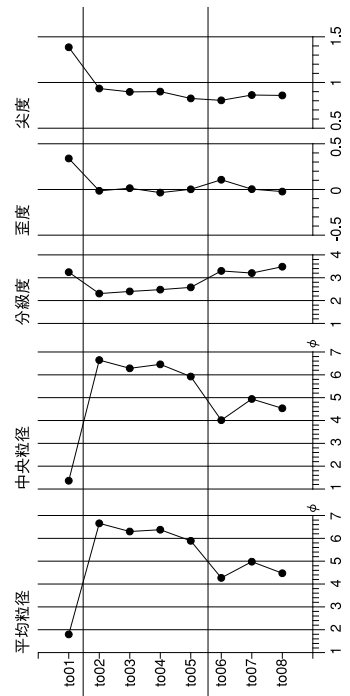
iv. IK(2) 5-3 W (符号ta)

各採取試料の砂・礫・泥の割合を図555 aに、平均粒径・中央粒径・分級度・歪度・尖度などの粒度分布の評価を図555 bに、粒度分布のヒストグラム・累積曲線を図13に示す。

礫・砂と泥を比較すると、試料taL L 19は下位の砂礫から上方細粒化する途中の部分であり、砂が30%程度を占め、taL L 16が上方細粒化の最上位を占めるとみられる。その上位は全般に細粒であるが、taL L 14からtaL 4-6までと、taL 4-4 LからtaL 3-3までが小さいながらも上方細粒化の傾向

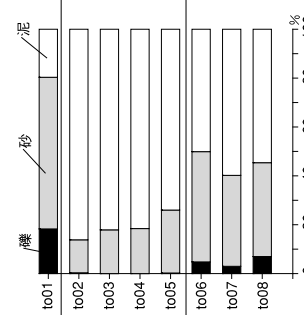


ヒストグラムは右目盛り、累積曲線は左目盛り



b. 粒度分布の評価

分級度		歪度		尖度	
0.35以下	非常に良い	0	対称	1	正規分布曲線
0.35~0.50	良い	-1.00~-0.30	著しい負の歪み	0.67以下	非常に扁平
0.50~0.71	やや良い	-0.30~-0.10	負の歪み	0.67~0.90	扁平
0.71~1.00	普通	+0.10~+0.10	ほぼ好称	0.90~1.11	中間的
1.00~2.00	悪い	+0.10~+0.30	正の歪み	1.11~1.50	突出
2.00~4.00	非常に悪い	+0.30~+1.00	著しい正の歪み	1.50~3.00	非常に突出
4.00以上	極めて悪い		正：細かい方へ偏している 負：細かい方へ偏していない	3.00以上	極めて突出



a. 礫・砂・泥の割合

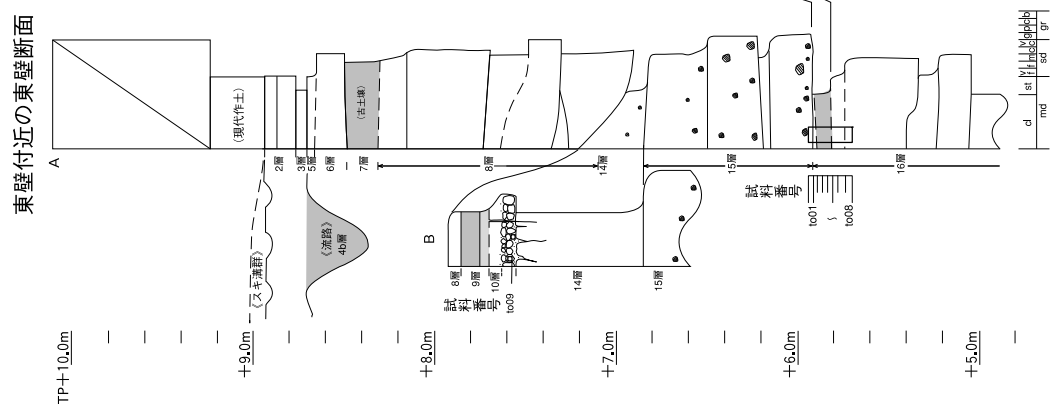


図554 IK(1) 8-1 礫砂泥の割合・粒度分布の評価 粒度分布のヒストグラム・累計曲線

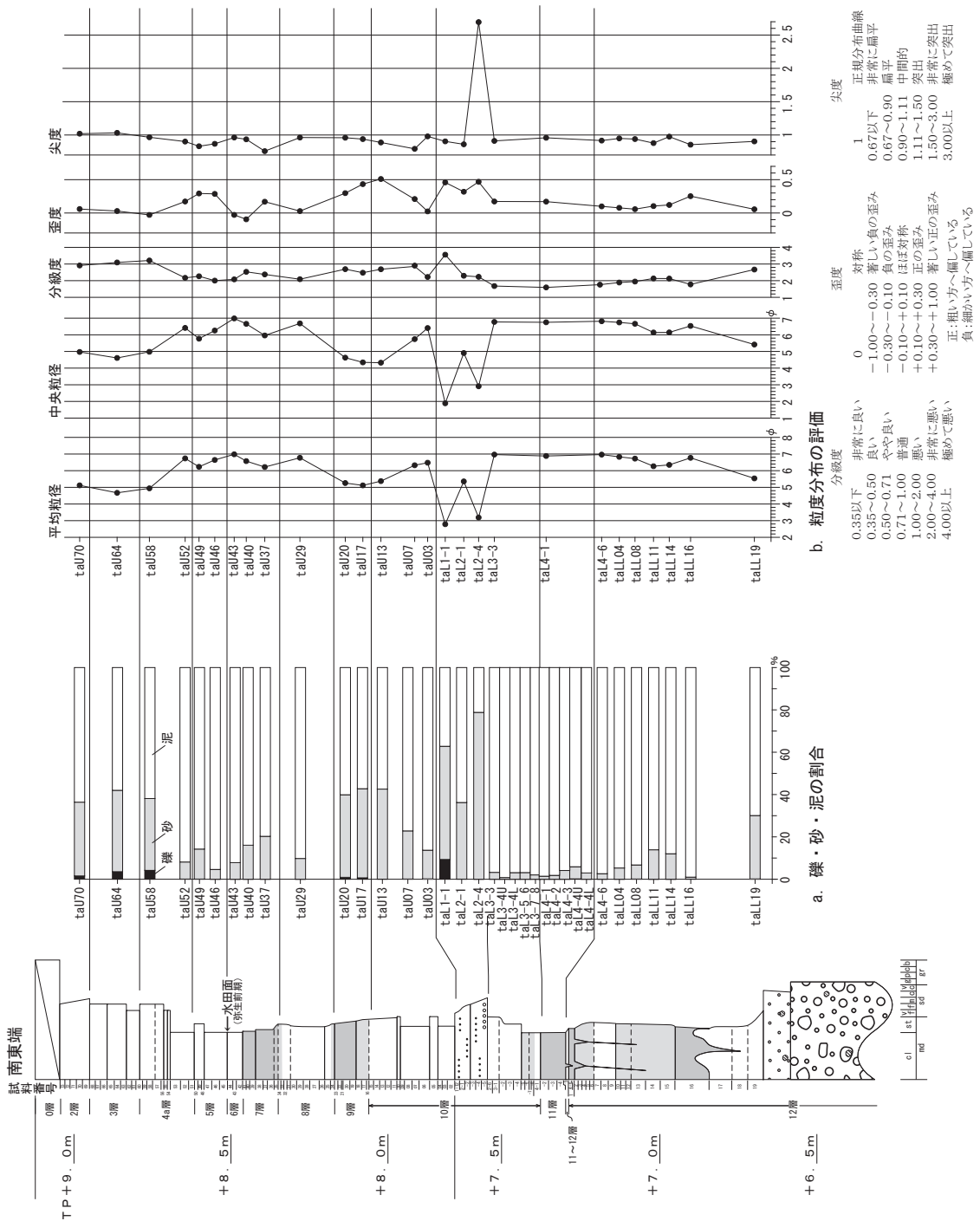


図555 IK(1) 5-3W 礫砂泥の割合・粒度分布の評価

が認められる。taL 2-4から上位では、暗色帯を挟むもののtaU52まで大局的には上方細粒化を示している。作土であるtaU58~U70は、少量の礫と砂を30%以上含む泥からなる。平均粒径を見ると、taL 2-4・1-1が砂に平均値があり、他はシルトである。taL L19とtaU13~20、taU58~70が6φよりφ値が小さく平均粒径が比較的大きい試料である。分級度は全般に悪いか、非常に悪く、特に粒径の大きな試料にその傾向がある。taU40・43・58が細粒側に偏る負の歪度であるのに対して、それ以外の試料は正の歪度を示す。尖度はtaL 2-4が非常に突出しているが、それ以外の試料は中間的か扁平である。

粒度分布のヒストグラムを見ると、taL L19・16は4.5φに正の歪みをもつモードがあり、taL L16

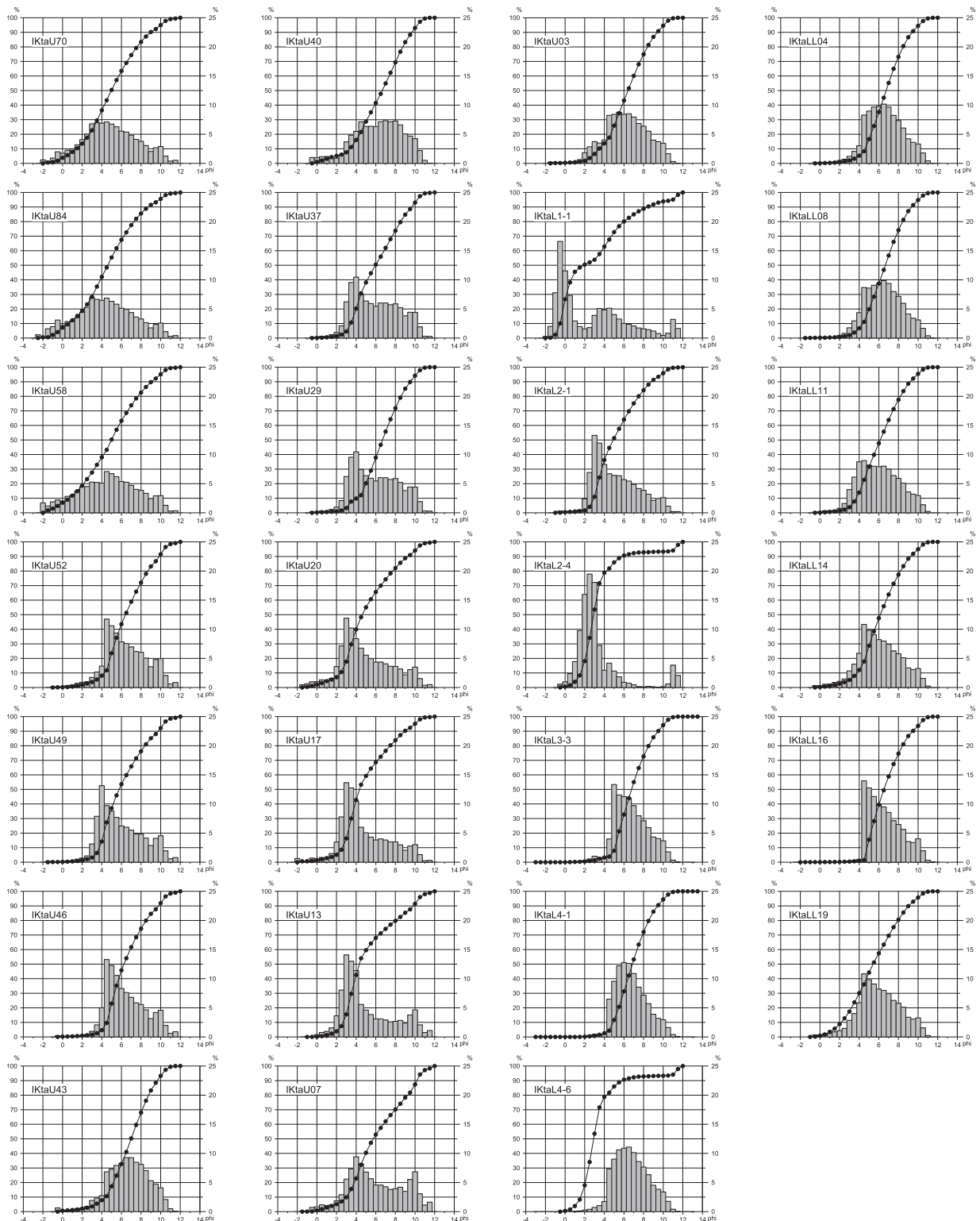


図556 IK(1) 5-3W 粒度分布のヒストグラム・累計曲線

では5φ以下のφ値の粒子が抜けたように偏っている。taL L14からtaL 4-6へは4.5φから6.5φへモードが移り変わり、上方細粒化する。taL 4-1・taL 3-3は6φ～5φにモードがあるが、taL 2-4から上位でモードは5.0φ～0.5φでばらつきがあり、taL 1-1では双峯性のモードとなる。taU17からtaU40で、3φ～4.5φへと移り変わるとともに、8～7φ付近に微弱なモードが生じ、taU43で7φのモードになる。taU46・49・52では4.0～4.5φにモードがある。taU52から上位では、比

較的正規分布に近い幅広いモードが 3.0~4.5 ϕ にある。

(3) 火山灰分析

1) 分析方法

試料は粒度分析に使用し丁寧に回収した 3.0 ϕ ~ 3.5 ϕ の極細粒砂サイズの試料を用いた。80°C で加熱したホットプレート上で、摂氏約 80 度に温めておいたスライドガラス上に数 mm 1 滴下したマウント剤 (ペトロポキシ 154) に、砂粒試料を極少量落し、よく混ぜ、カバーガラスで封入してプレパラートを作成した。プレパラートを偏光顕微鏡 (ニコン XPL) により 100 倍率で観察し、メカニカルステージによりプレパラートを移動し、視野内の鉱物等の粒子を通常 200 粒以上同定して計数を行い、新鮮な鉱物について火山ガラス・長石・石英・重鉱物の鉱物組成を求めるとともに、新鮮な鉱物と風化変質した鉱物・岩片の割合をダイアグラムに作成した。火山ガラスは無色透明・褐色透明を区別し、重鉱物は角閃石類・斜方輝石・単斜輝石・黒雲母・ジルコン・アパタイト・磁鉄鉱などの不透明鉱物等を同定した上で合算して示した。ダイアグラムの検討で火山灰そのものや火山ガラス等の火砕物が濃集している可能性がある試料では、ガラスの形態、及び角閃石・斜方輝石・単斜輝石・黒雲母・ジルコン・アパタイト・磁鉄鉱などの不透明鉱物等を、新鮮・風化を区別しながら通常 200 粒以上計測し、重鉱物組成を作成した。また、火山ガラスの屈折率を通常 20 粒以上測定した。

火山ガラスの形態分類に当たっては、吉川 (1976) の分類に従って行った。また、火山ガラスの屈折率は吉川ほか (1986) の位相差偏光顕微鏡下で標準ガラスを用いた分散法により行った。粒子の新鮮・風化の判定のうち、角閃石類・斜方輝石などの有色鉱物の判定にあたっては、自形・半自形はもとより、他形でも結晶面が判定できる鉱物は新鮮と判定し、劈開面すら判定できないものを風化とした。また、長石などの無色鉱物はオープンニコル・クロスニコルの両顕微鏡観察において気泡やくすみが無いか極少ないものを新鮮と判定し、そうでないものを風化に分類した。

2) 分析結果

i. IK (1) 3-1 (符号 ti)

鉱物組成を図 557 a に、火山ガラスの形態分類組成を図 557 b に、重鉱物組成を図 557 c に、火山ガラスの屈折率を図 557 d に、並びに分析データを表 3 に、顕微鏡写真を図版 1・2 に示す。

新鮮な粒子と風化した粒子の割合は、ti L 44~38 で新鮮な粒子が高く 70~80% あり、その上位で漸減して、ti L 21 以上では数% になる。火山ガラスは ti L 38 が高く 60% 近あり、その上下で漸減する。新鮮な長石は ti L 44 で高く 35% あり、その上位で急減する。重鉱物は ti L 40 で 17%、ti L 44 で 14% と比較的高いが、他は 5% に満たない。

火山ガラスの形態分類は試料 ti L 44・40・38 で実施した。いずれも扁平型火山ガラスが多いが、ti L 44 では中間型火山ガラスが 40% 近くを占める。また、3 試料には褐色透明の火山ガラスが少なからず含まれた。

同じ 3 試料で重鉱物組成を比較したところ、新鮮緑色角閃石が圧倒的に多数を占める。

火山ガラスの屈折率は ti L 44・38 で実施した。ti L 44 では 1.495~1.510 に分散するが、1.499 に顕著なモードがある。一方、ti L 38 では 1.497~1.511 に分散してモードは認められなかったが、1.503 以上がやや多い。

ii. IK (1) 6-1 (符号 si)

鉱物組成を図 558 a に、火山ガラスの形態分類組成を図 558 b に、重鉱物組成を図 558 c に、火山ガ

池内（その1）8-1区
東壁付近の東壁断面

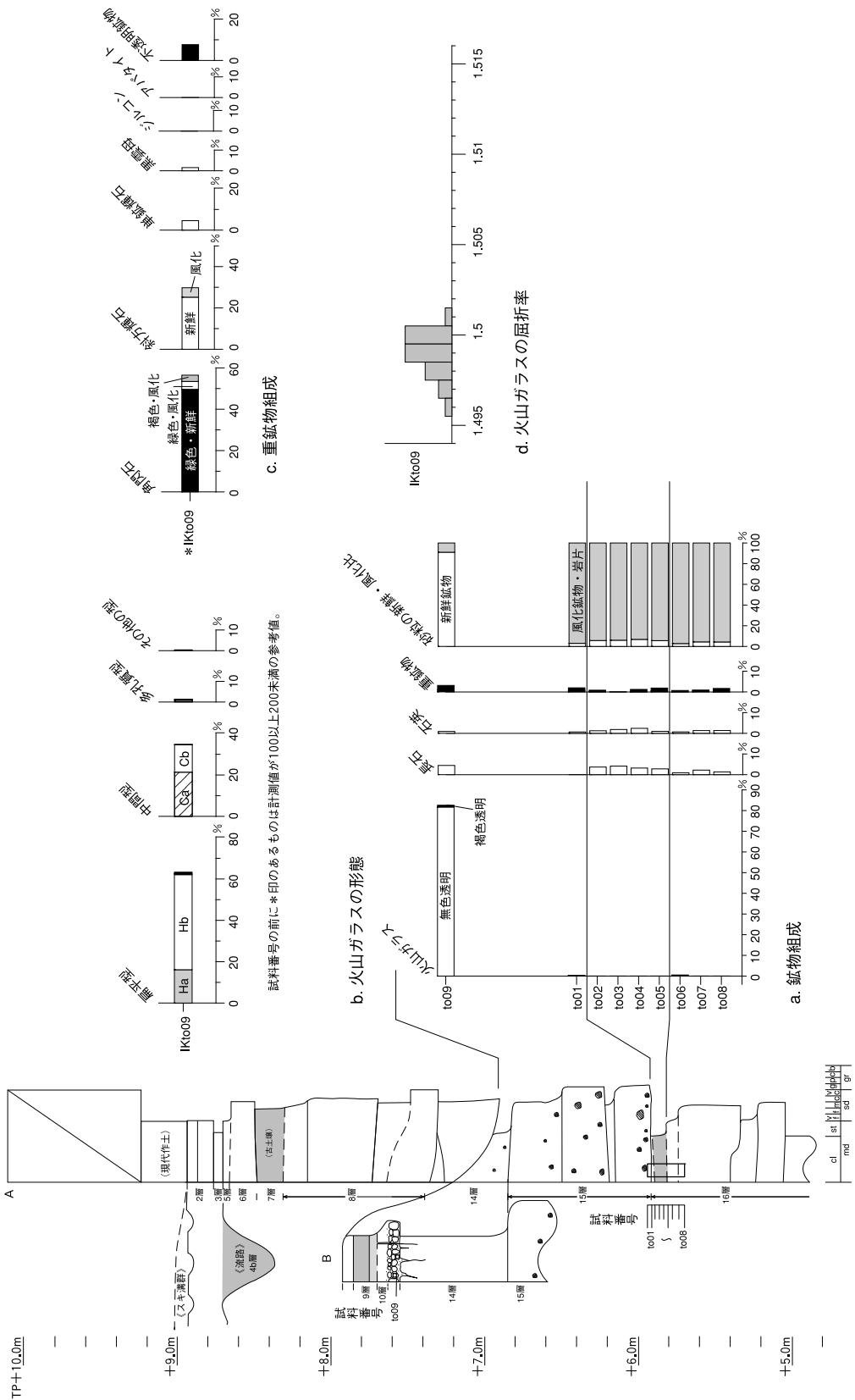


図559 IK(1) 8-1 鉱物組成・火山ガラスの形態・重鉱物組成・火山ガラスの屈折率

~8-4では90%以上を占める。新鮮な鉱物は火山ガラスが主体を占めるため、火山ガラスの比率もほぼ同様の傾向を示す。新鮮な長石はsi10-4で微増し、si8-4~si6-3でやや多く、si8-2では20%を占める。重鉱物はsi8-4~si7-1でやや多い。

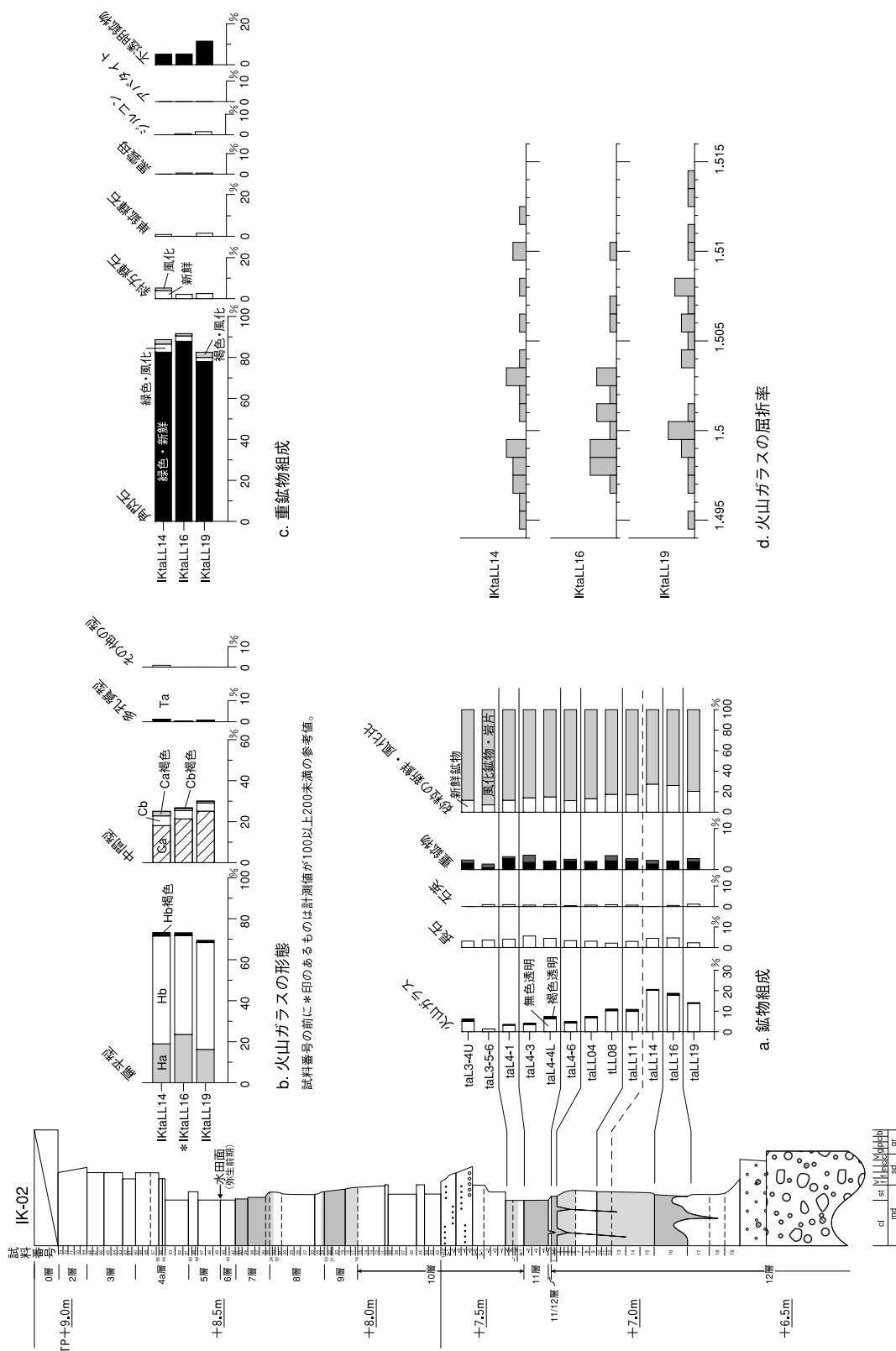


図560 IK(2) 5-3W 鉱物組成・火山ガラスの形態・重鉱物組成・火山ガラスの屈折率

火山ガラスの形態分類はsi10-2・9-3・8-2・7-3・3-2で実施した。いずれも扁平型火山ガラスが多いが、si10-2は中間型火山ガラスが40%近くある。また、褐色透明ガラスが少量ながらすべての試料に含まれる。

重鉱物組成をsi10-2・9-3・8-2・7-3と比較すると、多くは角閃石であるが、si10-2と

si 9-3 に斜方輝石が比較的多く含まれる。

火山ガラスの屈折率は、si10-2 で $n = 1.497 \sim 1.500$ 、モード1.499であり、少量の1.511のガラスが含まれる。si 9-3 では $n = 1.495 \sim 1.500$ となり、si 5-2 以上では $n = 1.497 \sim 1.514$ までばらつきがあるが、その中では si 7-3 で1.511のモードが比較的顕著になる。

iii. IK (1) 8-1 (符号to)

鉱物組成を図 559 a に、火山ガラスの形態分類組成を図 559 b に、重鉱物組成を図 559 c に、火山ガラスの屈折率を図 559 d に、並びに顕微鏡写真を写真 2 に示す。

新鮮な鉱物と風化した鉱物・岩片の割合は、to01~08 で圧倒的に風化・岩片が多く、火山ガラス、新鮮長石、石英、重鉱物とも微量含まれるにすぎない。ただし、to05~02の石英には極微量ではあるが高温型石英が含まれる。to09は団子状の火山灰の試料であり、新鮮鉱物が90%以上、鉱物組成では無色透明火山ガラスが82%で褐色透明の火山ガラスが1%未満である。

to09の火山ガラスの形態は、扁平型火山ガラスが63%、中間型火山ガラスが35%、多孔質型火山ガラスが極微量である。

to09の火山ガラスの屈折率は 1.496~1.501 で、モードは1.499-1.500 である。

iv. IK (2) 5-3 W (符号ta)

鉱物組成を図 560 a に、火山ガラスの形態分類組成を図 560 b に、重鉱物組成を図 560 c に、火山ガラスの屈折率を図 560 d に、並びに分析データを表 3 に、顕微鏡写真を図版 2 に示す。

全粒子に占める新鮮な鉱物の割合は、ta L L 14で高く27%、次いで ta L L 16で26%であり、上下へ漸減する。新鮮な鉱物は火山ガラスが主体を占めるため、火山ガラスの比率も同様の傾向を示す。新鮮な長石・石英・重鉱物は極少量である。

火山ガラスの形態は ta L L 19・16・14で比較したところ、いずれも扁平型火山ガラスが70%前後を占め、中間型が20~30%である。

重鉱物組成は ta L L 19・16・14の3試料とも新鮮な緑色角閃石が圧倒的多数を占め、次いで少量の不透明鉱物、微量の斜方輝石となる。

ガラスの屈折率は ta L L 19・16・14の3試料とも顕著なモードはなく、1.495~1.514の範囲の中に分散している。

(4) 花粉分析

1) 試料の処理と分析方法

i. 原理

粘土層などの堆積物や遺跡の土壌には、動物性もしくは植物性の微小な化石(=微化石)が含まれており、それらを物理・化学的処理によって抽出し、顕微鏡で化石の種類や数を検定し、種々の目的にそった調査を行う方法が微化石分析であって、花粉分析はそのひとつである。

堆積物に含まれる花粉化石は、その堆積当時陸上に生育した樹木や草が生産した花粉が、水系や大気系を経由して堆積物粒子とともに埋積したものである。陸上に生育する樹木や草は気候の変化や時代とともに変化し、その変化が堆積物中の花粉化石の構成や量の変化として反映する。

従って、花粉構成や消長データは、地層の識別や対比、古植生の復元に利用することができる。

ii. 分析処理法

a 分析試料

表8 池内遺跡の火砕物組成

	No.	Gl	BrownGl	Fl	Qt	Am	Others	Fresh	Weathered	total	PlantOpal	Charcoal	SoilGrain
IK(1)3-1	tiL04	2.7	0.8	2.3	0.0	0.8	0.8	7.3	92.7	100.0	0.0	0.8	0.0
	tiL07	3.0	0.4	1.9	0.0	2.6	1.1	9.0	91.0	100.0	0.0	1.5	0.0
	tiL12	2.0	0.0	2.4	0.0	1.0	0.0	5.4	94.6	100.0	0.5	0.0	0.0
	tiL16	2.4	0.3	3.1	0.7	0.7	1.0	8.2	91.8	100.0	0.0	0.0	0.0
	tiL21	3.7	0.3	1.3	0.0	0.7	0.0	6.0	94.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	tiL24	7.0	0.6	4.2	0.8	1.7	0.6	14.8	85.2	100.0	0.0	0.0	0.0
	tiL27	8.5	0.5	4.2	1.4	0.5	1.9	16.9	83.1	100.0	0.0	0.9	0.0
	tiL30	16.7	1.7	5.8	1.3	3.3	2.5	31.3	68.8	100.0	0.0	3.8	0.0
	tiL33	32.1	5.7	8.7	0.0	3.0	1.5	50.9	49.1	100.0	0.8	1.1	0.0
	tiL38	51.8	6.6	10.4	1.0	4.0	2.3	76.0	24.0	100.0	0.0	1.3	0.0
	tiL40	35.0	3.1	12.3	0.0	17.2	2.6	70.3	29.7	100.0	0.0	0.0	0.0
	tiL44	24.2	0.0	34.9	0.8	13.9	1.6	75.4	24.6	100.0	2.4	0.8	72.6
	IK(1)6-1	si1-2	2.5	1.4	2.5	0.0	0.7	0.0	7.0	93.0	100.0	0.0	0.0
si2-2		4.7	0.9	4.3	0.0	1.7	0.9	12.3	87.7	100.0	1.3	0.0	0.0
si3-2		4.5	1.7	4.5	0.0	3.1	0.7	14.5	85.5	100.0	5.9	0.7	0.0
si4-2		7.3	1.3	5.1	0.0	2.1	1.3	17.1	82.9	100.0	2.6	0.0	0.0
si5-2		11.4	0.4	3.0	0.0	2.6	0.4	17.7	82.3	100.0	4.8	0.0	0.0
si6-1		18.7	0.6	2.5	0.0	2.5	0.8	25.1	74.9	100.0	0.6	0.0	0.0
si6-3		48.7	0.0	9.7	0.8	2.9	0.0	62.2	37.8	100.0	0.0	0.0	0.0
si7-1		50.2	1.8	8.2	0.0	7.1	1.1	68.3	31.7	100.0	0.7	0.0	0.0
si7-3		63.5	0.5	10.8	0.0	5.0	1.4	81.1	18.9	100.0	0.0	0.0	0.0
si7-5		68.6	0.6	11.0	0.0	5.7	0.9	86.8	13.2	100.0	2.5	0.0	0.0
si8-2		58.6	1.3	20.1	1.0	5.7	1.3	87.9	12.1	100.0	0.0	0.0	0.0
si8-4		79.4	0.5	8.7	0.0	4.6	1.4	94.5	5.5	100.0	0.5	0.0	0.0
si9-1		86.9	1.3	5.1	0.4	0.4	0.0	94.1	5.9	100.0	0.0	0.0	0.0
si9-2		84.1	0.0	6.9	0.0	1.5	1.2	93.7	6.3	100.0	0.0	0.0	0.0
si9-3		87.0	0.4	4.0	0.0	1.4	1.1	93.9	6.1	100.0	0.0	0.0	0.0
si10-2		81.1	0.6	4.4	0.9	1.2	1.2	89.4	10.6	100.0	0.0	0.0	0.0
si10-4	67.1	0.0	5.8	0.0	0.9	0.9	74.8	25.2	100.0	0.6	0.0	0.0	
si11-2	17.8	0.4	1.9	0.0	0.7	2.2	23.0	77.0	100.0	0.0	0.0	0.0	
IK(1)8-1	to01	0.3	0.0	0.0	0.7	0.7	1.3	2.9	97.1	100.0	0.0	0.0	0.0
	to02	0.0	0.0	3.7	1.2	0.0	0.8	5.7	94.3	100.0	0.0	0.0	0.0
	to03	0.0	0.0	4.1	1.8	0.0	0.0	6.0	94.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	to04	0.0	0.0	3.2	2.4	0.0	1.2	6.8	93.2	100.0	0.0	0.0	0.0
	to05	0.0	0.0	2.8	0.9	0.5	1.4	5.6	94.4	100.0	0.0	0.0	0.0
	to06	0.5	0.0	0.9	0.7	0.0	0.7	2.8	97.2	100.0	0.0	0.0	0.0
	to07	0.0	0.0	2.2	1.3	0.4	0.4	4.4	95.6	100.0	0.0	0.0	0.0
	to08	0.0	0.0	1.3	1.3	0.0	1.7	4.3	95.7	100.0	0.0	0.0	0.0
	to09	81.7	0.9	4.5	0.9	0.9	2.2	91.1	8.9	100.0	0.0	0.0	0.0
	IK(2)3-5W	taL3-4U	5.0	1.2	3.1	0.0	1.6	0.8	11.6	88.4	100.0	0.0	0.0
taL3-5 6		1.3	0.0	3.6	0.9	0.4	0.9	7.1	92.9	100.0	0.0	0.0	0.0
taL4-1		3.1	0.4	4.0	0.9	2.7	0.4	11.7	88.3	100.0	0.0	0.0	0.4
taL4-3		3.5	0.7	5.6	0.7	1.7	1.7	14.0	86.0	100.0	0.0	0.0	0.0
taL4-4L		6.3	1.2	4.5	0.9	1.8	0.3	14.9	85.1	100.0	0.0	0.0	0.0
taL4-6		4.2	0.8	3.3	0.4	2.1	0.4	11.3	88.7	100.0	0.0	0.0	0.0
taLL04		6.8	0.7	3.1	0.7	1.7	0.3	13.2	86.8	100.0	0.0	0.0	0.0
taLL08		10.2	0.9	2.1	0.9	2.1	1.3	17.4	82.6	100.0	0.0	0.0	4.3
taLL11		9.9	1.0	3.0	0.7	2.0	0.7	17.2	82.8	100.0	0.0	0.0	0.7
taLL14		20.2	0.4	4.5	0.0	1.3	0.9	27.4	72.6	100.0	0.0	0.0	0.0
taLL16		17.7	1.0	4.7	0.5	2.1	0.0	26.0	74.0	100.0	0.0	0.0	1.3
taLL19		13.8	0.4	2.3	1.1	1.9	0.8	20.3	79.7	100.0	0.0	0.0	0.0

Area	No.	Ha	Brown H	Hb	Brown H	Ca	Brown C	Cb	Brown C	Ta	Brown T	Tb	Brown T	Other	Brown O	Total
IK(1)3-1	tiL38	16	1	49	8	16	4	3	2	0	0	0	0	0	0	100
	tiL40	25	1	41	7	16	4	3	0	0	0	0	0	2	0	100
	tiL44	16	0	43	1	33	0	6	0	1	0	0	0	1	0	100
IK(1)6-1	si3-2	16	0	53	5	14	9	2	0	0	0	0	0	0	0	100
	si7-3	29	1	50	3	14	1	1	1	0	0	0	0	0	0	100
	si8-2	28	0	50	1	13	0	6	0	1	0	0	0	0	0	100
	si9-3	26	0	40	0	26	0	7	0	1	0	0	0	0	0	100
	si10-2	17	4	38	0	31	0	7	1	0	0	0	0	0	0	100
IK(1)8-1	to09	16	0	46	1	21	0	13	0	0	0	1	0	0	0	100
IK(2)5-3W	taLL14	19	0	53	2	18	2	5	0	1	0	0	0	1	0	100
	taLL16	24	0	48	1	21	1	4	0	0	0	0	0	0	0	100
	taLL19	16	0	52	1	25	1	4	0	0	0	0	0	0	0	100

単位%

Area	No.	Am	Weth Am	Br. Ho	Ox.Ho	Opx	Weth.Opx	Cpx	Bi	Zr	Ap	OPQ	Total
IK(1)3-1	tiL38	80.1	1.4	2.3	0.0	4.6	0.0	2.3	0.0	0.0	0.0	9.3	100.0
	tiL40	82.0	0.3	0.6	0.0	2.0	0.0	0.6	0.3	0.3	0.0	14.0	100.0
	tiL44	86.0	5.7	0.8	0.0	2.8	0.5	0.0	0.0	0.3	0.0	3.9	100.0
IK(1)6-1	si7-3	79.2	4.7	3.9	0.0	4.7	1.0	0.4	0.0	0.1	0.0	6.0	100.0
	si8-2	80.5	6.2	3.1	0.0	4.8	1.4	0.2	0.2	0.2	0.0	3.6	100.0
	si9-3	58.0	12.2	3.2	0.0	11.9	7.0	0.9	0.3	0.3	0.0	6.4	100.0
	si10-2	66.8	3.4	3.7	0.0	14.3	2.1	1.6	0.3	0.0	0.0	7.7	100.0
IK(1)8-1	to09	49.6	3.8	3.1	0.0	25.2	4.6	4.6	1.5	0.0	0.0	7.6	100.0
IK(2)5-3W	taLL14	82.6	3.9	2.2	0.0	3.9	1.3	0.9	0.0	0.0	0.0	5.2	100.0
	taLL16	87.9	2.6	1.1	0.0	2.1	0.0	0.0	0.5	0.5	0.0	5.3	100.0
	taLL19	78.0	2.0	2.5	0.0	2.5	0.0	1.5	0.5	1.5	0.0	11.5	100.0

単位%

分析に供する試料は、シルト又は粘土で、その量は10~200 g (湿潤重量)である。試料は花粉化石の形状を保持するため湿潤状態のまま使用する。

b 分析処理

分析処理の手順は図 561 に示す分析フローのとおりである。1 ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。

分析処理に要する薬品・器具設備の概要は以下のとおりである。

- ① 処理薬品 : 水酸化カリウム、硫酸、弗化水素、塩化亜鉛 他
- ② 処理器具、設備: 遠心分離機、振動マイクロフィルター、他一般分析器具

c 顕微鏡による検定・計数

抽出した花粉化石はグリセリンゼリーと混合してスライドガラス上に滴下し、カバーガラスをかけて封入してプレパラートとする。各試料につき2~3枚のプレパラートを作成する。プレパラートを顕微鏡(バノックスA H B L B 1 万能顕微鏡)により400~1000倍率で観察し、メカニカルステージによる帯分析で、通常、木本花粉で100~250個の検定、計数を行い、同時に出現する草本花粉の検定、計数も行う。

iii. 解析法

a 花粉分析結果の解析の手順

- ① 各花粉種類の出現率(パーセント表示)計算と花粉ダイアグラムの作成
- ② 各地点における花粉消長パターンの読みとりと花粉帯分帯
- ③ 地層対比や古植生・古気候の復元

の順で進める。

b 花粉ダイアグラムの表示について

花粉ダイアグラムでは、計数した各々の木本花粉、草本花粉について木本花粉総数を基数にした百分率を算出し、木本花粉は黒のスペクトルで、草本花粉を白抜き色のスペクトルで表した。また検出数の少ない試料は、検出できた種類を「*」で示している。

花粉ダイアグラム右側に、「針葉樹花粉」、「広葉樹花粉」、「草本花粉」に「孢子」を加えた総合ダイアグラムを示している。総合ダイアグラムでは、計数値の合計を基数にそれぞれの百分率を算出し、累積百分率で示してある。

c イネ科の細分について

イネ科花粉を粒径から、40ミクロン以上と40ミクロン未満に区分する。

稲作が行われるより前の自然堆積物では、イネ科(40ミクロン未満)花粉が高率となることはあるが、イネ科(40ミクロン以上)花粉が高率となることはほとんどない。これに対し、稲作が広範に行われたと考えられる弥生時代以降においては、自然堆積物でもイネ科(40ミクロン以上)花粉が高率となることが多くなる。さらに稲作遺構での分析結果では、ほとんどの場合イネ科(40ミクロン以上)花粉が高率で検出される。

一方、図562に示すように、イネ科(40ミクロン以上)花粉はイネ属(*Oryza*)を含んでいるが、すべてがイネ属であるわけではない。

これらの状況から、弥生時代以降に高率で検出されるイネ科(40ミクロン以上)花粉は、そのすべてがイネ属に由来するわけではないが、多くはイネ属に由来すると推測される。

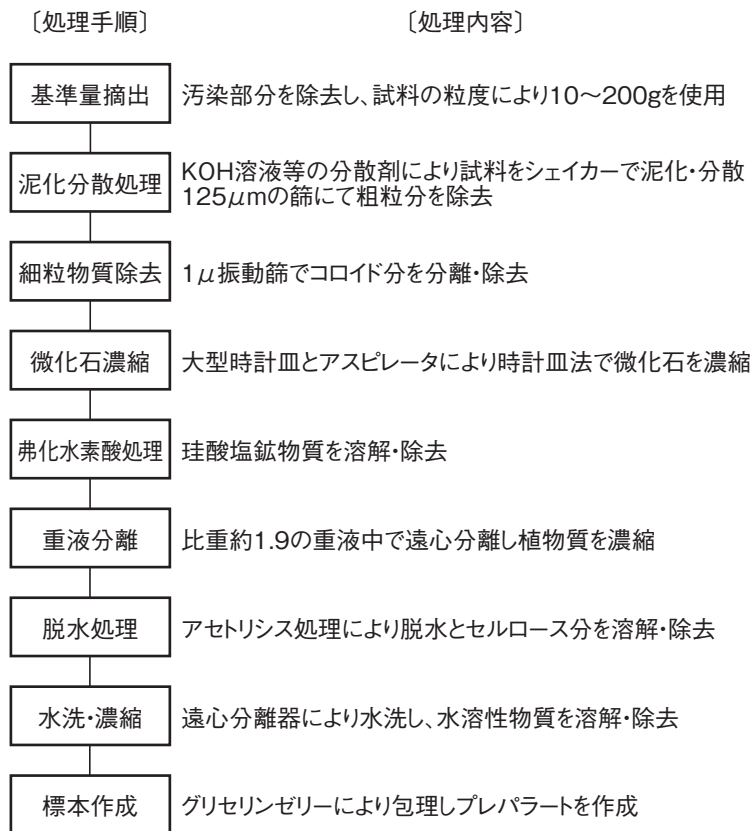


図561 花粉分析処理フロー

2) 分析結果

i. IK (1) 3-1

a 花粉化石の含有状況

16試料の花粉分析を行った結果、すべての試料から花粉化石が検出された。しかし、多くの試料で花粉化石の含有量が少ないために、統計処理上十分な量の花粉化石が検出できなかった。

b 検出された花粉化石の種類

表5に示す46種類の花粉化石のほか、12種類の孢子化石が検出された。

これらのうち、全試料を通じて花粉組成を特徴づける種類は、以下に示すようなものであった。

- ① 卓越木本花粉
コウヤマキ属、アカガシ亜属、コナラ亜属
- ② 検出数は少ないが、出現傾向に特徴のある木本花粉
モミ属、ツガ属、スギ属
- ③ 卓越草本花粉(栽培種と推定される種類を除く)
イネ科(40ミクロン未満)、ヨモギ属
- ④ 栽培種花粉(栽培の可能性のあるものを含む)

イネ科(40ミクロン以上)、ソバ属、キク亜科(ベニバナ属型)

(3) 花粉組成の特徴

花粉分析の結果をの花粉ダイアグラム(図563)と花粉化石組成表(表4)に示し、花粉組成を下位から上位に向かって記す。

試料L40、L38では、コウヤマキ属、アカガシ亜属が30%程度と卓越するほか、スギ属3%・13%、ツガ属が11%・9%、コナラ亜属が11%・17%の出現率を示す。草本花粉の割合はやや低く孢子の割合が高い。

試料L30では、コウヤマキ属が65%と卓越するほか、アカガシ亜属が16%、ツガ属が6%、コナラ亜属が3%の出現率を示す。草本花粉の割合は低く、孢子の割合が高い。

試料L16~U28-3では、コウヤマキ属が43~2%と激減する。これに対しアカガシ亜属が33~74%と急増する。また、コナラ亜属は、15~4%と減少する。このほかモミ属、ツガ属が数%、スギ属がL

16、U28-3で3%の出現率を示す。広葉樹花粉の増加に伴い、胞子の割合は急減する。草本花粉の割合はL7でやや高いが、相対的にやや低い。

試料U22~U41-3では、コウヤマキ属が最大55%、最低16%の逆ピークを成す。一方、アカガシ亜属が最大69%、最低23%のピークを成す。このほか、ツガ属、コナラ亜属が数%の出現率を示す。

また、モミ属はU22~U9で数%の出現率を示すが、U41-3では検出されない。さらに、スギ属は検出されなかった。草本花粉の割合は低く、胞子の割合が高い。

試料U40-2では、アカガシ亜属が56%、コウヤマキ属が21%と卓越する。このほか、マツ属(複維管束亜属)、ツガ属、スギ属が数%、コナラ亜属が9%の出現率を示す。草本花粉の割合は依然低く、胞子の割合が高い。

ii. IK(2)5-3W

a 花粉化石の含有状況

20試料の花粉分析を行った結果、すべての試料から花粉化石が検出された。しかし、幾つかの試料では花粉化石の含有量が少ないために、統計処理上十分な量の花粉化石が検出できなかった。

b 検出された花粉化石の種類

表4に示す39種類の花粉化石のほか、11種類の胞子化石が検出された。これらのうち、全試料を通じて花粉組成を特徴づける種類は、以下に示すようなものであった。

① 卓越木本花粉

コウヤマキ属、スギ属、アカガシ亜属、コナラ亜属

② 検出数は少ないが、出現傾向に特徴のある木本花粉

モミ属、ツガ属

③ 卓越草本花粉(栽培種と推定される種類を除く)

イネ科(40ミクロン未満)、ヨモギ属

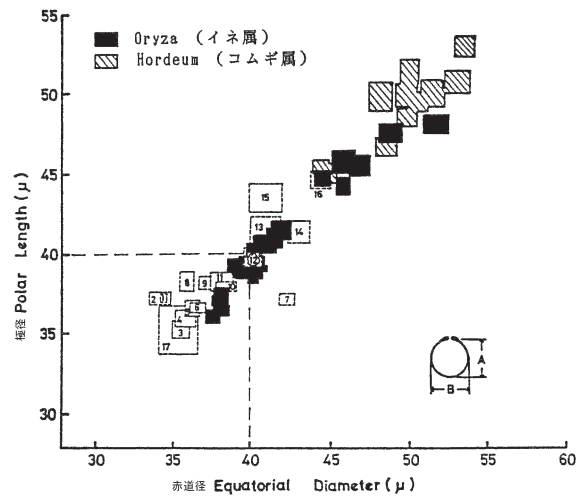
④ 栽培種花粉(栽培の可能性のあるものを含む)

イネ科(40ミクロン以上)、ソバ属

c 花粉組成の特徴

花粉分析の結果を、花粉ダイアグラム(図564)と花粉化石組成表(表5)に示し、花粉組成を下位から上位に向かって記す。

試料L8~L4-6では、コウヤマキ属が卓越するが73~36%と減少する。この外モミ属、ツガ属、アカガシ亜属、コナラ属が数~20%程度の出現率を示す。草本花粉の割合は極めて低く、胞子の割合が



[図中のイネ・コムギ以外のイネ科]

1. Zizania latifolia (マコモ)
2. Iperata cylindrica var. koenigii (チガヤ)
3. Trisetum bifidum (カネツリグサ)
4. Arthraxon hispidus (コブナグサ)
5. Digitalia adscendens (メヒシバ)
6. Echinochloa crusgalli subsp. edulis
7. Polypogon monspeliensis (ヒエガエリ)
8. Phalaris arundinacea (クサヨシ)
9. Beckmannia syzigachne (カズノコグサ)
10. Echinochloa crusgalli var. longiseta
11. Alopecurus aequalis var. aurensis (スズメノテッポウ)
12. Echinochloa crusgalli
13. Paspalum thunbergii
14. Alopecurus japonicus
15. Echinochloa crusgalli var. oryzicola
16. Agropyron ciliare var. minus (アオカモジグサ)
17. Phragmites communis (アシ)

図562 イネ科花粉の粒径比較図(中村1979による)

高い。

試料L 4-1～U03では、コウヤマキ属が8～57%、アカガシ亜属が19～68%と、変動が激しいものの、卓越する傾向にある。この外、コナラ亜属が15%程度の出現率を示す。また、低率ではあるがモミ属、ツガ属が連続的に検出される。草本花粉の割合は極めて低く、胞子の割合が高い。

試料U 17～U 29では、コウヤマキ属が32～80%と卓越し、アカガシ亜属が数～30%程度、ツガ属、コナラ亜属が数～20%程度、スギ属が数%の出現率を示す。胞子の割合が高く草本花粉の割合は低いが、ヨモギ属が20～40%の出現率を示す。

試料U 37、U 40では、コウヤマキ属が33、47%と増加し、アカガシ亜属が32、16%と減少する。このほか、ツガ属、コナラ亜属が10～15%程度、マツ属(複維管束亜属)、スギ属が数%の出現率を示す。胞子の割合が高く、草本花粉の割合は低いが、ヨモギ属が20～40%程度の出現率を示す。

試料U 43・U 49では、アカガシ亜属が44%・52%と卓越し、コウヤマキ属が16%・24%、ツガ属、コナラ亜属が10%程度の出現率を示す。試料U 43では草本花粉の割合がやや高く、イネ科(40ミクロン以上)が48%の高率を示す。U 49では草本花粉の割合が低いが、栽培種であるソバ属がわずかに検出される。

3. 微粒炭の概査

花粉用プレパラートを用いて、微粒炭の含有量を概査した。微粒炭は、顕微鏡レベルで観察できる炭で、山火事や草原の野火によって生産されると考えられており、花粉粒の量や保存状況との比較から古環境を推定するひとつの指標となる。

a. IK (1) 3-1

十分な数量が検出できた試料：L 40・38・30・27 少ないが検出できた試料：L 33・16

非常に少ない試料：なし

極めて稀に検出できた試料：U 28-3～39-3

検出できなかった試料：なし

b. IK (2) 3-5

十分な数量が検出できた試料：なし

少ないが検出できた試料：なし

非常に少ない試料：L 16・14・U 17

極めて稀に検出できた試料：L 11～U 13・U 20～49

検出できなかった試料：なし

4. 考察

(1). 火山灰層準の認定

1) 火山碎屑物の降灰量

近畿地方中央部に分布する上部更新統～完新統には少なくとも5層の火山灰層が分布し、地層の堆積年代を指標する鍵層として活用されている。下位から、約2.5万年前の平安神宮火山灰層、約2万年前の鬼虎川火山灰層、1万数千年前の阪手火山灰層、約9600年前の港火山灰層、約6300年前の横大路火山灰層、約3000年前の難波累層最上位火山灰層である。平安神宮火山灰層は広域火山灰層である始良T n火山灰と、港火山灰層は麓陵隠岐火山灰と、横大路火山灰層は鬼界アカホヤ火山灰と対比されている(吉川1991)。

火山灰の岩石記載的性質は、火山活動の規模や性質とともに、降灰時の風向・風速、後背地の堆積条件などの降灰地の条件によって変化することが知られている(吉川、1976)。そのため、ある地域で発見された火山灰を対比するには、既知の火山灰層の近接地域のものと比較検討するのが有効である。そ

表9 池内遺跡05-1-3-1区 花粉化石組成表

試料番号		U39-3	U40-2	U41-9	U41-7	U41-3	U9	U16	U22	U28-3	U7	U16	U27	U30	U33	U38	U40
8 Abies	モミ属							2	2	6	15	2	1				
12 Picea	トウヒ属						1%	1%	2%	3%	4%	1%	5%				
13 Pinus (Pinus sp.)	マツ属: 複雑管束亜属	1	4	3	1	2	5	4	2	0	2		1	1			2
23 Tsuga	ツガ属	10%	3%	18%	6%	5%	2%	1%	1%	1%	4%		5%	3%			5%
24 Scladopitys	コウヤマキ属	1	5			2	6	12	22	10	2	3		2	1	2	4
26 Cryptomeria	スギ属	10%	4%			5%	3%	4%	9%	2%	4%	4%		6%	6%	9%	11%
27 Cupressaceae	ヒノキ科	2	25	4	7	22	100	42	100	9	13	34	14	20	10	7	13
28 Podocarpus	マキ属	20%	21%	24%	39%	55%	43%	16%	39%	2%	29%	43%	64%	65%	63%	30%	34%
44 Myrica	ヤマモモ属		2		11%					16		2		1		3	1
46 Juglans-Pterocarya	クルミ属-サワグルミ属						1			3		1					3%
50 Alnus	ハンノキ属						0%	0%	0%	0%	4%						
51 Betula	カバノキ属						1			1		3					4%
53 Cupressus-Ostrya	クマシデ属-アサダ属	1				1%	0%	0%	1%	0%	1%						1
54 Corylus	ハシバミ属	1%	1%		6%	1	5	2	10	2	10		1%				3%
58 Castanopsis-Panania	シノキ属-マテバシイ属	1%	2			7	5	1	2	5	1			3%			
59 Fagus	ブナ属	2%		1	6%	3%	2%	0%	0%	2	0%	2					
61 Cyclobalanopsis	アカガシ亜属					3		2	3	2	0%	3					
62 Quercus	コナラ亜属	4	67	5	5	9	89	185	97	435	14	26	6	5	2	6	13
65 Aphananthe-Celtis	ムクノキ属-エノキ属	40%	56%	29%	28%	23%	38%	69%	38%	74%	31%	33%	27%	16%	13%	26%	34%
66 Ulmus-Zelkova	ニレ属-ケヤキ属	2	11	4	2	3	11	6	12	24	7	12		1	3	4	4
88 Tilia	シナノキ属	20%	9%	24%	11%	8%	5%	2%	5%	4%	16%	15%		3%	19%	17%	11%
100 Ilex	モチノキ属		1			1	1	1	13	1		2%					
103 Oleaceae	モクセイ科					3%	0%	0%	2	13		2%					
109 Araliaceae	ウコギ科					1	1	1	1	1		1					
127 Ericaceae	ツツジ科					0%	0%	1	3	0%	1	0%					
130 Symphoricarpos	ハイノキ属					1	1	1	1	1		1					
202 Alnus	サシオモダカ属							0%	0%	1							
203 Sagittaria	オモダカ属		1							0%							
207 Typha	ガマ属		1%							1							
230 Cyperaceae	カヤツリグサ科									0%							
232 Gramineae (<40)	イネ科: 4.0 ミクロン未満	1								1		1					
233 Gramineae (>40)	イネ科: 4.0 ミクロン以上	10%	37	3	4	1	8	9	29	16	21	8		4	1	5	4
255 Ranunculaceae	キンポウゲ科	60%	31%	18%	22%	3%	3%	11%	3%	47%	10%			13%	6%	22%	11%
263 Cruciferae	アブラナ科	1	11	2	4	4	6	4	3	7	5	3					
269 Caryophyllaceae	ナデシコ科	10%	9%	12%	22%	10%	3%	1%	1%	1%	11%	4%					
270 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		1				1%		1	1		1					
276 Fagopyrum	ソバ属		1	2	1												
279 Echinocaulon-Persicaria	ウナギツカミ属-サナエタデ属	10%	1%	12%	6%			3	1	7	1	4					
282 Rumex	ギシギシ属						1%	0%	3%	0%	5%						
289 Fabaceae	マメ科								1	1	2	1					
298 Umbelliferae	セリ科			1					0%	4%	1%						
327 Tracheospermum	テイカカズラ属			6%						1							
347 Carduoidae	キク亜科		1		9	1	5		6	1	1	4		2	2		3
349 Artemisia	ヨモギ属	10%	16		50%	3%	2%	2%	0%	2%	5%	6%		6%	13%		8%
350 Carthamus, Type	ベニバナ属型	1	17	2	2	4	13	8	31	16	14	34	1	6		5	6
360 Cichorioideae	タンポポ亜科	10%	14%	12%	11%	10%	6%	3%	12%	3%	31%	43%	5%	19%		22%	16%
402 MONOLATE-TYPE-SPORE	単条孔胞子	5	40	1	15	4	6	6	23	11	9	16	14	15	12	31	42
403 TRILATE-TYPE-SPORE	三条孔胞子	50%	34%	6%	83%	10%	3%	2%	9%	2%	20%	20%	64%	48%	75%	135%	111%
408 Urostachys	トウゲシバ亜属	37	87	29	16	156	253	68	136	28	25	64	26	57	80	94	77
410 Urosta, cr. Type	スギラン型	370%	73%	171%	89%	390%	109%	25%	53%	5%	56%	80%	118%	184%	500%	409%	203%
411 Urosta, si. Type	ヒモラン型									1							
412 Lycopodium (Urostachys), Type	トウゲシバ亜属型		4			1	1			0%							
420 Ophioglossum	ハナヤスリ属		3%			3%	0%										
430 Sceptilium	フェノハナワラビ亜属		1			7	3	3	2	6		2	25	45	16	5	22
460 Davallia	シノブ属		1%			3%	1%	1%	0%	13%	3%	114%	145%	100%	22%	58%	
463 Family Pteridaceae	イノモトソウ科		8	46	22	11	93	167	26	56	3	8	21	8	17	15	7
465 Aspid.-Asple.	オシダ科-チャセンシダ科	80%	39%	129%	61%	233%	72%	10%	22%	1%	18%	26%	36%	55%	94%	30%	37%
470 Polypodiaceae	ウラボシ科	2	75	11	21	10	37	24	80	44	44	57	1	12	3	12	13
木本花粉総数		20%	75	11	21	10	37	24	80	44	44	57	1	12	3	12	13
草本花粉総数		13	158	116	346	1255	715	108	224	62	6	147	20	99	50	11	15
孢子総数		130%	133%	682%	1922%	3138%	307%	40%	87%	11%	13%	184%	91%	319%	313%	48%	39%
		1	4	1	1	5	28	8	22	3	4	11	3	2	5	2	
		10%	3%	6%		13%	12%	3%	9%	1%	9%	14%	1%	6%	31%	9%	
		10	119	17	18	40	233	268	257	584	45	80	22	31	16	23	38
		11%	22%	9%	4%	3%	16%	51%	31%	79%	30%	20%	18%	11%	8%	12%	17%
		12	75	11	21	10	37	24	80	44	44	57	1	12	3	12	13
		14%	14%	6%	5%	1%	3%	5%	10%	6%	30%	14%	1%	4%	2%	6%	6%
		66	341	171	396	1521	1208	229	488	115	60	269	102	269	180	150	172
		75%	64%	86%	91%	97%	82%	44%	59%	15%	40%	66%	82%	85%	90%	81%	77%

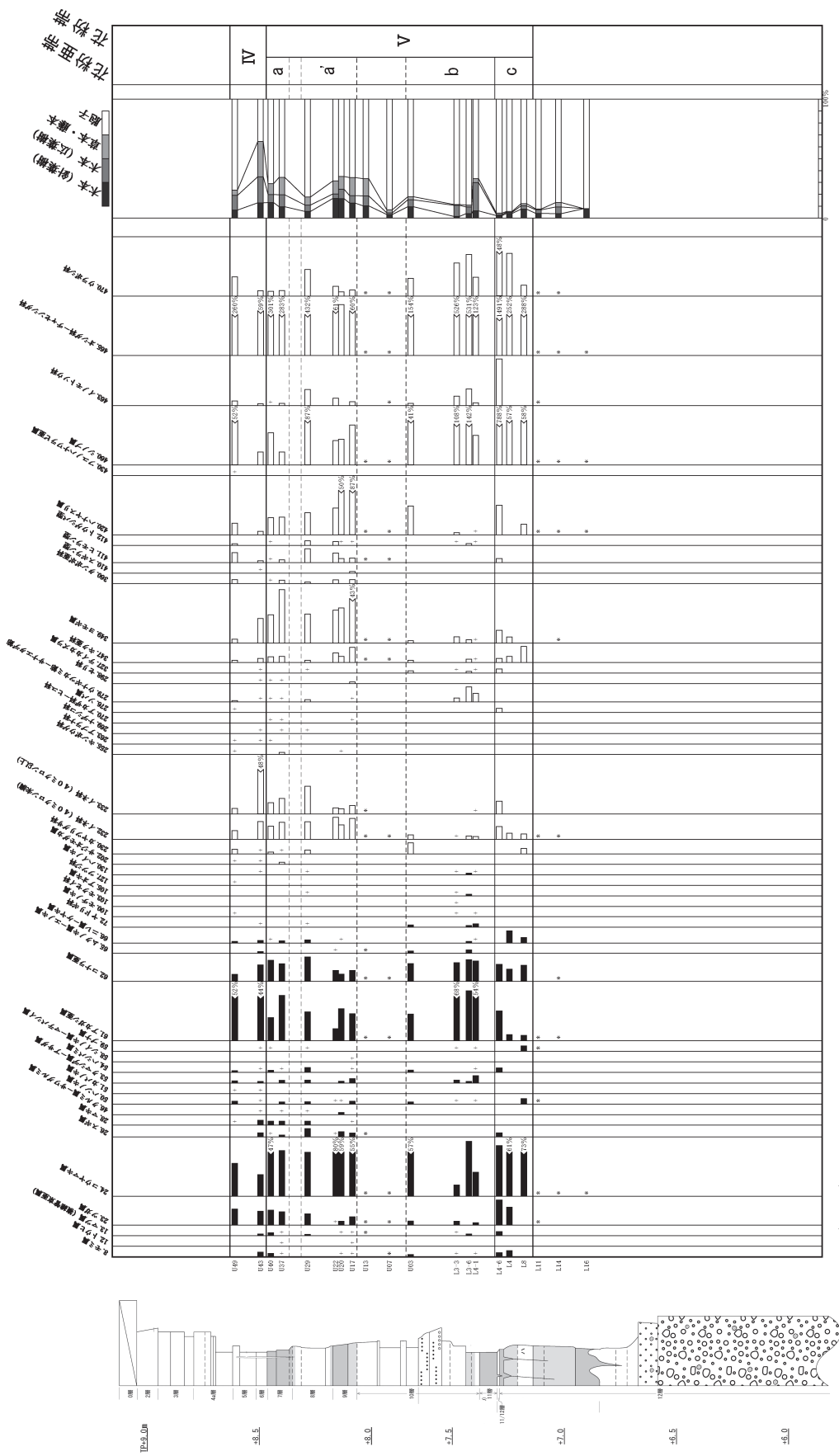


図564 IK(2) 5-3W 花粉ダイアグラム

表10 池内遺跡05-2-5-3区 花粉化石組成表

群分類	科名	U9	U3	U10	U7	U29	U22	U20	U17	U13	U7	U3	U3-3	U3-6	U3-1	U4-6	U4	U8	U11	U14	U16
8Abies	モミ属		3	2	0			1	1												
12Picea	トウヒ属		3	2	0			1	1												
13Pinus(Diphyxyl)	ツガ属: 複雑管束亜属		3	5	2			1	1												
23Tsuga	ツガ属	21	24	23	20	15	1	4	11	1	2	2	1	1	1	4	3			2	
24Schidopitys	コウヤマキ属	12	10	11	10	8	1	3	6	4	13	3	3	3	2	2	18	13		2	5
26Cryptomeria	スギ属	43	37	100	68	58	92	80	101	11	7	36	11	33	36	12	14	19	22	3	100
28Podocarpus	マキ属	24	16	47	33	32	80	59	41	47	57	8	39	17	1	1	3	3	3	40	
46Juglans-Pterocarya	クルミ属-サワグルミ属		1	1	1			1	1												
50Alnus	ハンノキ属		0	0	1	1		1	1												
51Betula	カバノキ属		2	0	1	2	1	1	2												
53Carpinus-Ostrya	クマシデ属-アサダ属		1	0	4	4		2	6												
54Corylus	ハシバミ属		2	2	3	2	2	6	1												
58Castanopsis-Panania	シイノキ属-マテバシ属		1	1	1	1	3		1												
59Fagus	ブナ属		2	1	1																
61Cyclobalanopsis	アカガシ亜属	9	10	35	67	38	10	31	35	8	4	12	1	1	0	1	1	1	1	2	
62Quercus	コナラ亜属	52	44	16	32	21	9	23	19	30	27	19	6	5	5	11	21	4	2	2	4
65Aphananthe-Celtis	ムクノキ属-エノキ属	9	28	32	26	32	9	7	14	3	1	8	18	13	30	4	2	4	2	1	1
66Ulmus-Zelkova	ニレ属-ケヤキ属	5	12	15	13	17	8	5	8	11	7	13	13	15	14	12	9	12			
72Viscaceae	ヤドリギ科		3	1	1			1	1												
100Ilex	モチノキ属		2	4	1	3	4	1	1												
103Oleaceae	モクセイ科		1	0																	
105Aucuba	アオキ属		1			1															
127Ericaceae	ツツジ科		1			1															
130Symphoricarpos	ハイノキ属		0	1		1															
202Alisma	サシユモダガ属		1	1	3																
230Cyperaceae	カヤツリグサ科		1	0	1	5															
232Gramineae(<40)	イネ科: 40ミクロン未満		3	1	0	3															
233Gramineae(>40)	イネ科: 40ミクロン以上		11	30	25	23	18	14	27	1	3	2	1	2	4	3	1	4	1	1	1
255Ranunculaceae	キンポウゲ科	6	13	9	12	13	16	10	15	4	20	3	1	2	2	9	4	4	11	20	
263Cruciferae	アブラナ科	7	11	17	22	36	9	7	14	3	1	8	18	13	30	4	2	4	2	1	1
269Caryophyllaceae	ナデシコ科	4	48	8	11	20	4	4	6	19											
270Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		1	1	1			1													
276Fagopyrum	ソバ属		1	0	1				1												
279Echinocaulon-Persicaria	ウナギツカミ節-サナエタ節		2	1	2	3			1												
298Umbelliferae	セリ科		1	1	0	2			1												
327Trachebsepnum	テイカカズラ属		0	0	1																
347Carduioideae	キク亜科		3	7	9	3	8	6	20	4	5	1	2	1	1	1	1	3			
349Artemisia	ヨモギ属	2	3	4	4	2	7	4	11	15	33	2	2	1	3	4	12				
360Cichorioideae	タンポポ亜科	5	42	43	73	38	27	34	78	11	1	6	2	1	3	1	4				
402MONOLATE-TYPE-SPORE	単条孔胞子	3	18	20	1	2	3	3	3												
403TRILATE-TYPE-SPORE	三条孔胞子	20	10	4	6	32	61	60	3	13	8	31	17	8	17	4	12	5	1	2	
410UrostachyType	スギラン型	11	18	24	34	27	19	152	230	30	98	183	197	188	122	213	362	119	63	33	35
411UrostachyType	ヒモラン型	43	21	16	21	152	166	113	126	111	65	290	145	224	59	66	157	45	72	66	70
412UrostachyType	トウゲシバ型		0	1	4	18	8	4	6	5	1										
420Phingibssum	ハナナスリ属	7	1	0	2	10	7	3	3	19	7										
430Sceptridium	フユノハナワラビ亜属	15	6	26	29	22	68	15	20	11	13	2	2	7	2	7	2	4	4	10	
460Davia	シノ属	8	3	12	13	16	19	50	87	74	73	21	1	1	1	21	8	44	80	200	
463FamilyPteridaceae	イノモトソ科	1	9	23	19	15	20	25	52	19	100	26	147	119	44	260	13	15	5	5	8
465Aspid.-Asple.	オンシタ科-チャセンシダ科	52	9	23	9	87	17	19	29	70	667	41	108	142	21	788	57	58	56	100	160
470Polypodiaceae	ウラボシ科	6	3	1	3	21	6		5	1	1	9	10	4	11	1					
木本花粉総数		182	238	213	201	183	113	133	183	27	143	63	130	34	20	32	23	28	3	5	4
草本花粉総数		199	35	20	11	20	24	19	19	4	15	11	9	30	3	5	10	7	9	8	
孢子総数		43	203	99	15	112	61	145	21	9	10	12	16	22	12	3	5	1	2	0	
		58	309	98	13	78	113	113	143	38	28	18	28	38	18	18	28	18	4	0	
		727	243	765	695	1363	383	363	633	97	317	336	1133	806	463	1022	44	222	114	47	58
		769	363	719	663	829	689	653	663	679	93	829	883	899	679	963	949	889	929	879	929

ここで、吉川ほか(1986)に基づいて当該地を含む大阪平野中央部～奈良盆地の上部更新統～完新統における主要な5火山灰層の岩石記載的性質をまとめたのが図565である。一般に、火山灰の鉱物組成やガラスの形態分類、重鉱物組成は、図565の上段に示したように百分率で示されることが多い。百分率の表記は純粋な火山灰の岩石記載的性質を比較する際に有効である。しかし、堆積後に再移動・再堆積した火山灰や生物擾乱をはじめとする攪乱作用を被った地層の中に火山灰層準を認定する際には、実際の降灰量を考慮しなければならない。図565の中段に示すように、大阪平野中央部では、平安神宮火山灰層と横大路火山灰層の火山ガラスが後期更新世～完新世に降灰した火山ガラスの大半を占めることが分かる。同様に、この間に供給された長石や角閃石の大半が阪手火山灰層のものであり、中間型ガラスの大半が平安神宮火山灰層のものであると言える。したがって、これらが再堆積したり攪乱作用を被ったり

した場合には、百分率表示とは異なった組成を示す可能性があることを考慮しなければならない。

2). IK (1) 3-1の火山灰層準

試料ti38は火山ガラスが60%近くで分析した試料の中では最も多く、扁平型が主体、褐色透明ガラスが目立つことから、この付近が横大路火山灰層の降灰層準である可能性がある。ガラスの屈折率はばらつきが大きい1.503~1.511がやや多いことは、横大路火山灰層の火山ガラスが主体であることを反映していると考えられる。

試料ti44は新鮮な長石が多いこと、角閃石が圧倒的に多いことから、この付近が阪手火山灰層の降灰層準に近い可能性がある。ただし、火山ガラスが扁平型が多いことや中間型が多いこと、ガラスの屈折率が1.499にモードがあることなどは、平安神宮火山灰の特徴を示しており、平安神宮火山灰層の降灰層準も、極近接していると推定される。

したがって、現場層序の13層(池内12層)最上部の堆積時期は、平安神宮火山灰層~阪手火山灰が降灰した後期更新世であり、後期旧石器時代後半と考えられる。また、現場層序の11層下部(池内11c層)の堆積時期は、横大路火山灰が降灰した縄文時代早期末の年代前後と考えられる(図557・表3)。

3). IK (1) 6-1の火山灰層準

新鮮鉱物と火山ガラスがsi 9-3~9-1で90%以上と高率であり、ガラスの形態(扁平型)や重鉱物組成(角閃石、斜方輝石、不透明鉱物)、ガラス屈折率(1.495~1.500; モード1.499)を考慮すると、si 9-3付近が平安神宮火山灰層の層準であると考えられる。si 9-3の直下にあるsi10-2はガラスの含有率はやや低いとは言え80%以上あり、かつ、新鮮な角閃石や斜方輝石が多い、中間型ガラスがやや多い、ガラスの屈折率の集中度が高いなど、平安神宮火山灰の諸特徴を多く備えている。したがって、無機・有機の擾乱による平安神宮火山灰の下位層への混入とみられる。

si 8-4から上位でガラスが減少し、長石と角閃石が高い含有率を占める。特に、長石はsi 8-2で最も高くなる。したがって、中間型ガラスが多くないという問題はあるが、si 8-4~8-2付近が阪手火山灰の降灰層準であったと考えられる。また、si 7-5でガラスが増加し、褐色透明ガラスが増加、ガラスの屈折率 $n = 1.508 \sim 1.504$ (モード1.511)にまとまりがあること、などから、si 7-5~3付近が横大路火山灰の降灰層準近いと考えられる。

これらの対比に関しては、粒度分析の結果からも後押しできる。すなわち、si10-4~8-2で4~5φに微弱なモードが生じ、si 7-5から上位で顕著になること、9-2では3φの小モードも付随することは、5~3φに多い降下火砕物が供給されたことを示唆している。

以上のことから、現場層序の第12層下部(池内13層)の堆積時期は、平安神宮火山灰が降下した後期更新世の最終氷期極寒期の少し前であり、後期旧石器時代中ごろと考えられる。また、現場層序の第12層上部(池内12層)の堆積時期は、阪手火山灰が降下した後期更新世の最終氷期極寒期の少し後であり、後期旧石器時代後半と考えられる。さらに、現場層序の11層下部(池内11c層)の堆積時期は、横大路火山灰が降下した縄文時代早期末と推定できる(図558・表3)。

4). IK (1) 8-1の火山灰層準

試料to09は、新鮮鉱物と無色透明火山ガラスの含有量が極めて高率であり、ガラスの形態は扁平型主体で中間型が多く、重鉱物組成は角閃石、斜方輝石が多く、不透明鉱物が少量含まれること、ガラスの屈折率が1.496~1.501でモードが1.499~1.500など、平安神宮火山灰層の諸特徴を多く備えている。したがって、to09の火砕物は平安神宮火山灰と考えられ、to09を含む現場層序の第13層(池内13層)の堆積

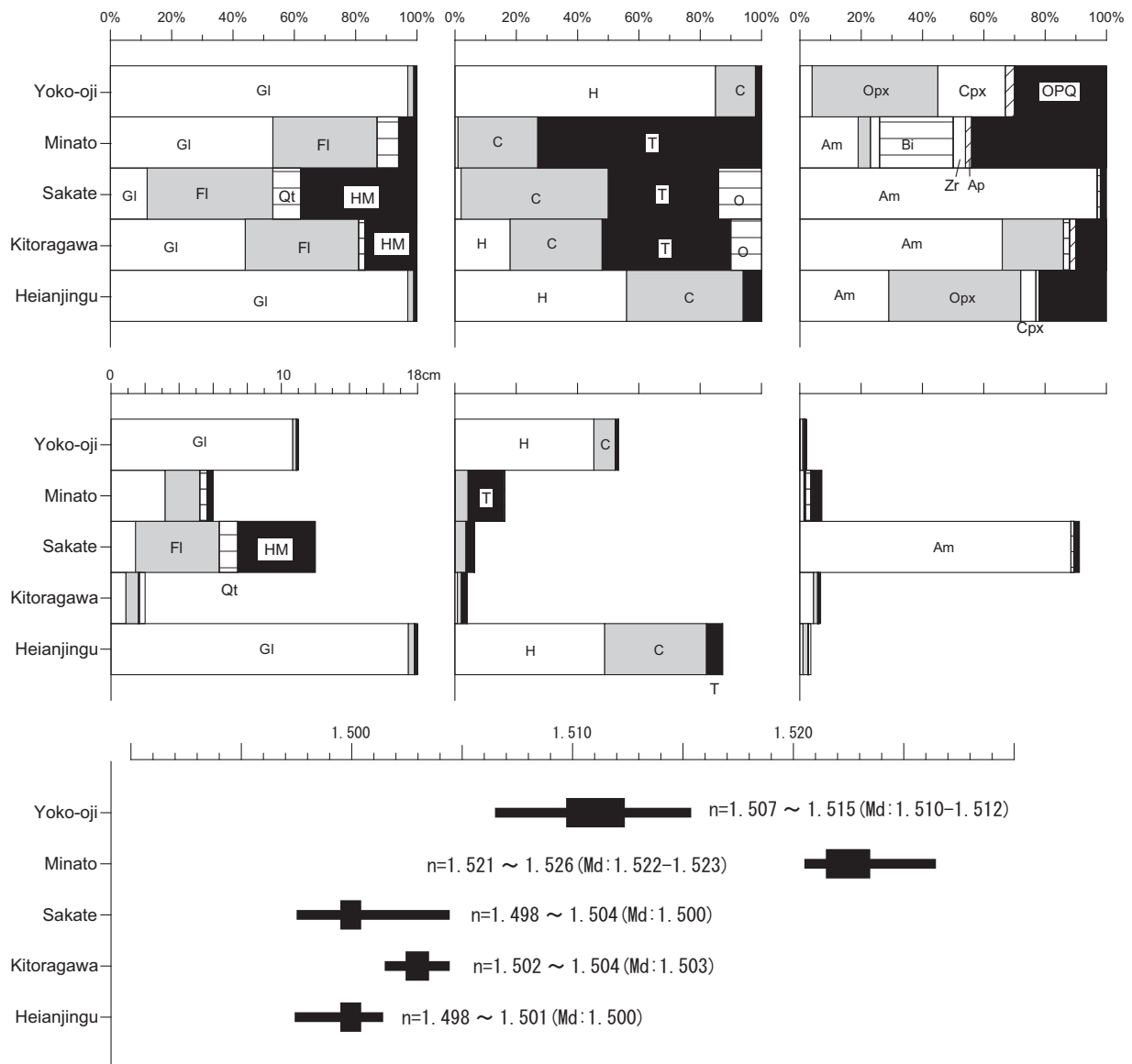


図565 大阪平野中央部の上部更新統～完新統における主要5火山灰層の標準的な岩石記載的性質

吉川ほか(1986)をもとに作成。上段:百分率表示、中段:層厚比に基づく降灰量に近似な相対比、下段:ガラスの屈折率、Yoko-oji:横大路火山灰、Minato:港火山灰、Sakate:阪手火山灰、Kitoragawa:鬼虎川火山灰、Heianjingu:平安神宮火山灰、Gl:火山ガラス、Fl:長石、Qt:石英、Hm:重鉱物、H:扁平型、C:中間型、T:多孔質型、Am:角閃石類、Opx:斜方輝石

時期は、平安神宮火山灰が降灰した後期更新世の最終氷期極寒期の少し前で、後期旧石器時代中ごろと推定される。

試料to09～08はの新鮮鉱物の割合は極めて低く、火山灰層の認定は困難である。しかし、極微量ではあるが、to06～02には、火山ガラスや高温型石英が含まれており、火山灰の降灰層準に近いと推定される。池内遺跡近隣の大阪市長原遺跡や山之内遺跡では、中位段丘構成層の上部に挟まれる砂泥互層中に阿蘇4火山灰と対比される吾彦火山灰層や、鬼界蔦原火山灰と対比される北花田火山灰層の火砕物が含まれる層準のあることが明らかとなっている(長橋1998、趙2001)。吾彦火山灰層は淡褐色透明扁平型の火山ガラスを特徴的に含有し、北花田火山灰層は高温型石英を特徴的に含有する。長原・山之内の両遺跡では、吾彦火山灰層や北花田火山灰層の火砕物は、平安神宮火山灰層の2～3m下位にあって、泥炭質シルト層の中に散在しており、to05～02の層序関係と岩相と類似する。したがって、高温型石英を

含むto05-02の現場層序の16層最上部(池内15層)が、北花田火山灰の降灰層準と推定され、堆積時期は後期更新世の最終間氷期終盤と考えられる(図559・表3)。

5). IK(2)5-3Wの火山灰層準

試料taL L 16・14の新鮮鉱物と火山ガラスは多く、火砕物の降灰層準に近いと推定できる。ガラスの形態は扁平型主体で、ガラスの屈折率は1.495~1.512と幅があり、複数の火山灰が混在していると考えられる。ガラスの屈折率、褐色ガラスを少量含んでいること、重鉱物は角閃石が圧倒的に多いことからみて、平安神宮火山灰から横大路火山灰までの火山灰が混在していると考えられる。したがって、taL L 16・14を含む現場層序の12層中部(池内11c層~12-13層)の堆積時期は、平安神宮火山灰~横大路火山灰が降下した後期更新世最終氷期極寒期の少し前から、縄文時代早期の長い期間と推定される。なお、下位の現場層序の第12層下部(池内14層)のtaL L 19でも上位層準のtaL L 16・14とよく似た組成を示すが、地層の連続性から見て擾乱による混入と考えられる(図560・表3)。

(2). 粒度組成のいくつかの特徴

粒度分析を行った地点の泥質な暗色帯の多くに上方細粒化が認められる。すなわち、IK(1)3-1の9c層、IK(1)6-1の池内11a層、IK(1)8-1の池内15層、IK(2)5-3Wの池内11a層・9層・7層は上方細粒化している。これらは土壌生成が未熟なものや沼沢地性の暗色層であり、堆積時の粒度組成を残していると考えられる。

作土層の粒度分析はIK(1)3-1の池内3層~2層、IK(2)5-3Wの池内4a層~2層で実施したところ、砂が相当多い礫混じり砂質泥であり、それぞれの地点の重なり合った作土どうしは非常に似かよった粒度組成を示した。耕起による人為的な攪拌が類似した粒度組成を生み出しているものと考えられる。

また、IK(1)3-1の池内3層~2層は、礫を除けば、下位の古土壌であるIK(1)3-1の池内7層~4b層と、類似した組成を示している。池内3層の形成前に、礫が供給されるような氾濫により、この地点が水没した経験があると推定される。

一方、IK(2)5-3Wの弥生時代前期中段階の作土層である池内7'層は、下位の池内7層からの上方細粒化を引き継いだ粒度組成を示している。7'層は7層の表層部が耕起されて形成されたと考えられることから、7'層が水田として機能していた期間には、顕著な氾濫がなかったと考えられる。

(3)地域花粉帯の設定

2005年度実施したMY(2)11ENとIK(1)3-1で実施した花粉分析は、縄文時代まで遡る花粉分析としては当地域ではじめてのものである。これらの結果と、今年度の分析結果を合わせて検討し、今回新たにI~VI帯の地域花粉帯を設定し、さらにV帯をc~a亜帯に細分することが妥当である見通しが得られた。そこで、今年度の池内遺跡においてもこの分帯をもとに検討することとする。以下に各地点で認められた各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を追って下位から上位に向けて記載する(図563・564、表4・5)。

a. IK(1)3-1の花粉分帯

この地点では、他地点に比べ、花粉化石の検出量が少ない試料が多かった。そのため、他地点でV帯「a'」とした花粉化石群集の識別ができていない。

1)VI帯(試料L40、L38:IK11c層下部)

コウヤマキ属、アカガシ亜属が卓越し、ツガ属、スギ属、コナラ属を伴う。草本花粉の割合はやや低

く、孢子の割合が高い。

2) V帯(試料L30~U41-3:IK11c層上部~8層)

コウヤマキ属、アカガシ亜属が卓越し、ツガ属、コナラ亜属を伴う。草本花粉の割合は低く、孢子の割合が高い。モミ属、ツガ属、スギ属の出現傾向からさらにc~a亜帯に細分できる。

c 亜帯(試料L30:IK11b層):モミ属が検出されないものの、ツガ属、スギ属が検出される。MY(2)11EN地点では、c 亜帯下部でモミ属の出現率が低くスギ属が検出されることから、c 亜帯下部ととらえることもできる。一方で上位のL27ではモミ属が検出できることから、花粉化石の検出量そのものが少ないために、本来含まれていたモミ属が検出できなかったとも考えられる。

b 亜帯(試料L16~U28-3:IK10~9b層):モミ属、ツガ属、スギ属が数%の出現率を示す。一方、コウヤマキ属は急激な減少を、アカガシ亜属が急激な増加を示す。この傾向は、MY(3)15・16・17E地点でも認められる。

a 亜帯(試料U22~U41-3:IK9a層~8層):モミ属がわずかに検出され、ツガ属は数%の出現率を示す。また、スギ属が検出されない。一方でコウヤマキ属が急激な減増の逆ピークを、アカガシ亜属が急激な増減のピークを成す。この傾向は他地点では認められていない。全体がモミ属、ツガ属、スギ属の出現傾向から、全体が前述のa'亜帯に相当する可能性もある。

3)IV帯(試料U40-2:IK4b層)

アカガシ亜属が卓越し、コウヤマキ属を伴う。このほか、マツ属(複維管束亜属)やツガ属、スギ属、コナラ亜属を伴う。他地点では、草本花粉が増加する傾向にあるが、ここでは認められなかった。

b. IK(2)5-3Wの花粉分帯

1) V帯(試料L8~U40:IK11b層~7層)

コウヤマキ属が卓越し、ツガ属、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。草本花粉の割合は低く、孢子の割合が高い。モミ属、ツガ属、スギ属の出現傾向からさらにc~a亜帯に細分できる。

c 亜帯(試料L8~L4-6:IK11b層):木本花粉の検出量が少ないものの、モミ属、ツガ属が上部の2試料で連続して出現する。また、ツガ属の出現率は上位のb 亜帯に比べ高率を示す。

b 亜帯(試料L4-1~U03:IK11a~10層):モミ属、ツガ属が下位のc 亜帯に比べて低率で、ほぼ連続して出現する。

a 亜帯(試料U17~U40:IK10層~7層):下部の数試料ではモミ属が検出されないか、わずかに検出される程度である。一方上部ではモミ属、ツガ属の出現率ややが高くなる。また、スギ属は連続して出現する。a 亜帯がさらに上部(a 亜帯:IK7層)と下部(a' 亜帯:IK10層~8層)に細分できる可能性がある。

2) IV帯(試料U43、U49:IK7'層~6層)

アカガシ亜属が卓越し、コウヤマキ属を伴う。このほかツガ属、コナラ亜属が特徴的に出現する。試料U43ではイネ科(40ミクロン以上)が48%の高率を示し、試料U49では栽培種であるソバ属がわずかに出現する。

(4)古植生変遷について

池内遺跡の2地点において明らかとなった花粉帯の花粉組成から推定される古植生変遷は以下のとおりである。

a. IK(1)3-1

1) VI帯(IK11c層堆積期:縄文時代早期~中期頃)

胞子の割合が高く、草本の割合が低い。ただし、他の3地点に比べ草本の割合は高く、イネ科(40ミクロン未満)、ヨモギ属が特徴的に検出される。近隣にはシダ植物、ススキ類(あるいはアシ?)やヨモギ類の生育する荒地が広がっていたと考えられる。一方で、コウヤマキ、ツガ、スギなどの温帯針葉樹を主とした、あるいはこれらに、カシ類やナラ類を混淆する林が遺跡近辺に迫っていたと考えられる。

2) V帯 (IK11 b層～7層堆積期：縄文時代中期～弥生時代前期頃)

b 亜帯上部 (IK 9 c 層～9 b 層下部堆積期：縄文時代後期頃) から a 亜帯 (IK 9 b 層上部～7層下部堆積期：縄文時代後期～弥生時代前期頃) にかけては、他の試料に比べ胞子の割合が低くなる。これらの試料ではアカガシ亜属の出現率が高い傾向にある。また、アカガシ亜属が高率になる傾向は、IK(2)5-3W地点でも認められる。さらに、草本の割合はb 亜帯で比較的高く、イネ科(40ミクロン未満)、ヨモギ属が特徴的に検出される。

遺跡近辺のコウヤマキ主体の林で、カシ類が局所的に優勢になり、この地点へ迫ったと考えられる。伴って、近隣に広がっていたシダ植物、ススキ類(あるいはアシ?)やヨモギ類の生育する荒地が徐々に縮小したと考えられる。

c 亜帯 (IK11 b 層～11 a 層堆積期：縄文時代中期頃) から a 亜帯への変化は、遺跡近辺の林内での、温帯針葉樹全体の増加から、さらにスギが選別的に増加する様相を示していると考えられる。ただし、より広域的な現象である可能性がある。

3) IV帯 (IK 7層上部～4 b層堆積期：弥生時代前期～平安時代前半頃)

胞子の割合が高く、草本の割合も低い。他地点で認められるイネ科(40 μ m以上)の増加もほとんど認められないなど、この地点近辺のみはいまだ開墾されず、荒地が広がっていたと考えられる。木本ではアカガシ亜属が卓越しコウヤマキ属を伴うことから、遺跡近辺にはコウヤマキ属主体の林が残っていたと考えられる。

b. IK (2) 5-3 W

1) V帯 (IK11 b層～7層下部堆積期：縄文時代中期～弥生時代前期頃)

胞子の割合が高く、草本の割合が低いなど、近隣にはシダ植物の生育する荒地が広がっていたと考えられる。コウヤマキ属が卓越することから、遺跡近辺の林は、コウヤマキが主体で、スギ、モミ、ツガ、カシ類、ナラ類を混淆していたと考えられる。一方で、b 亜帯下部 (IK10層下部堆積期：縄文時代後期頃) ではアカガシ亜属が高率を示す。IK(1)3-1地点でもb 亜帯でアカガシ亜属が高率を示しており、池内遺跡を中心とした地域でカシ類が特に優勢になったと考えられる。

c 亜帯 (IK11 a 層～11 b 層堆積期：縄文時代中期頃) から a 亜帯 (IK 9 層～7層下部堆積期：縄文時代後期～弥生時代前期) への変化は、遺跡近辺の林内での温帯針葉樹全体の増加から、さらにスギが選別的に増加する様相を示していると考えられる。ただし、より広域的な現象である可能性がある。

2) IV帯 (IK 7' 層～6層堆積期：弥生時代中期中段階)

下部では草本の割合が増加し、胞子の割合が減る。特にイネ科(40ミクロン以上)の増加が顕著であるうえ、いわゆる水田雑草が含まれるサジオモダカ属、セリ科などが検出されることから、荒地が開墾され水田耕作が行われていたと推定される。ただし、上部では草本の割合が減少し胞子の割合が増加するなど、一時的な現象であったであろう。木本ではコウヤマキ属が減少しスギ属、アカガシ亜属が増加することから、遺跡近辺の林は伐採され、背後の丘陵や金剛・葛城山系に分布する照葉樹林やスギ林の

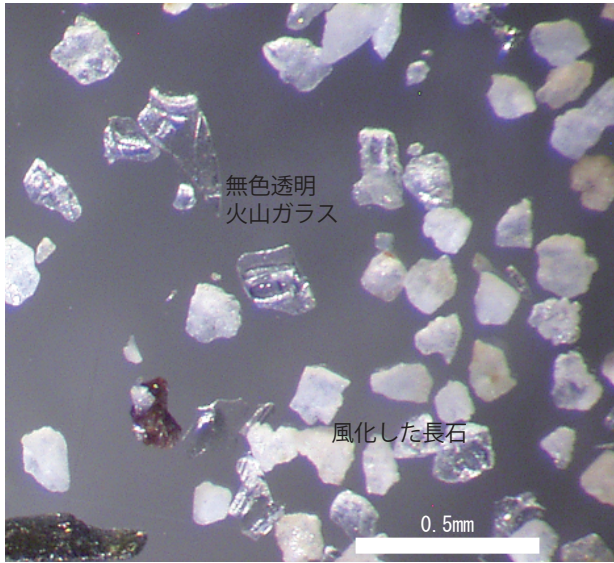
影響が強くなり、二次林へと変化したと考えられる。

(趙・小倉・渡辺)

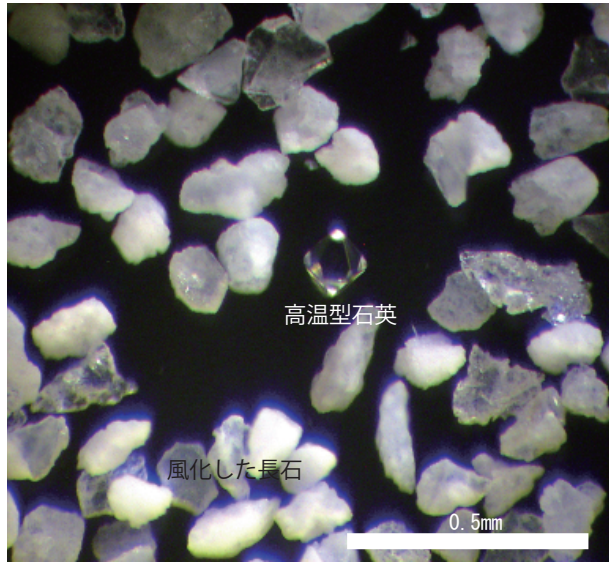
引用参考文献

- 今村峯雄 2004 「科学的年代測定法はどこまで進んだか」. 科学が解き明かす古代の歴史、88-99.
- 大阪市文化財協会 1983 『瓜破遺跡』. 81p s .
- 大阪市文化財協会 2001 「長原遺跡の地層」. 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』 XVI、7-28.
- 大阪市文化財協会 2002 『大阪市平野区瓜破遺跡発掘調査報告』 II . 136p s
- 大阪市文化財協会 2003 『大阪市平野区瓜破遺跡発掘調査報告』 III . 70p s
- 大阪市文化財協会 2005 『大阪市平野区瓜破遺跡発掘調査報告』 IV . 37p s
- 大阪市文化財協会 2006 『大阪市平野区瓜破北遺跡発掘調査報告』 III . 118p s
- 大阪市文化財協会 2007 『大阪市平野区瓜破遺跡発掘調査報告』 V . 76p s
- 小倉博之・吉川周作 1998 「火山灰分析」. 『大阪市住吉区山之内遺跡発掘調査報告』、III-115.
- 建設省国土地理院 1965 『土地条件調査報告書(大阪平野)』. 179p s .
- 建設省国土地理院 2000 『1:25,000 都市圏活断層図 VIII 近畿圏中央地区』.
- 島地謙・須藤彰司・原田浩 1985 『木材の組織』. 291p s . 森北出版.
- 趙哲済 2001 「瓜破台地東北部の段丘について」. 大阪市文化財協会研究紀要、4、7-16.
- 長橋良隆 1998 「火山灰分析」. 『大阪市住吉区山之内遺跡発掘調査報告』、145-157.
- 中村純 1974 イネ科花粉について、とくにイネを中心として. 第四紀研究、13、187-197.
- 古谷正和 1979 大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷. 第四紀研究、18、121-141.
- 吉川周作 1976 「大阪層群の火山灰層について」. 地質学雑誌、82-8、497-515.
- 吉川周作 1981 「堆積物中の火山ガラスの研究—大阪平野の更新～完新統について—」. 第四紀研究、20-2、75-87.
- 吉川周作・井内美郎 1991 「琵琶湖高島沖ボーリングコアの火山灰層序」. 地球科学、45-2、81-100.
- 吉川周作・那須考悌・樽野博幸・古谷正和 1986 「近畿地方中部に分布する後期更新世～完新世の火山灰層について」. 地球科学、40-1、18-38.
- 渡辺正巳 2000 大和川今池遺跡(その1～4)発掘調査に係る微化石分析. 大和川今池遺跡(その1・その2)、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書. 第53集、295-317.

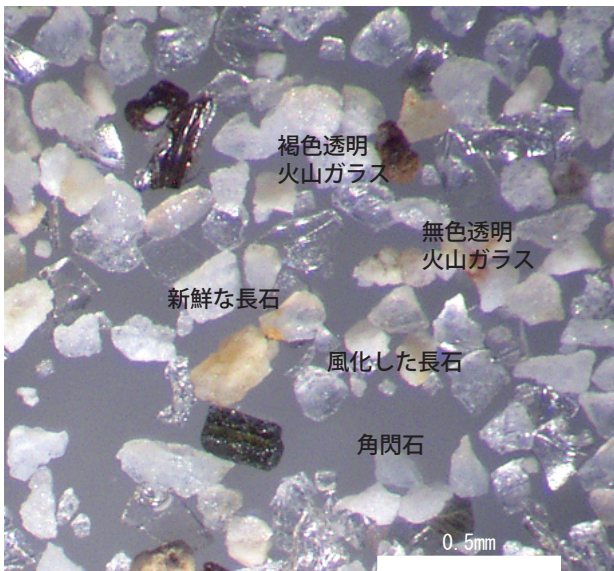
写真1 碎屑物・火山碎屑物の実体顕微鏡写真・偏光顕微鏡写真



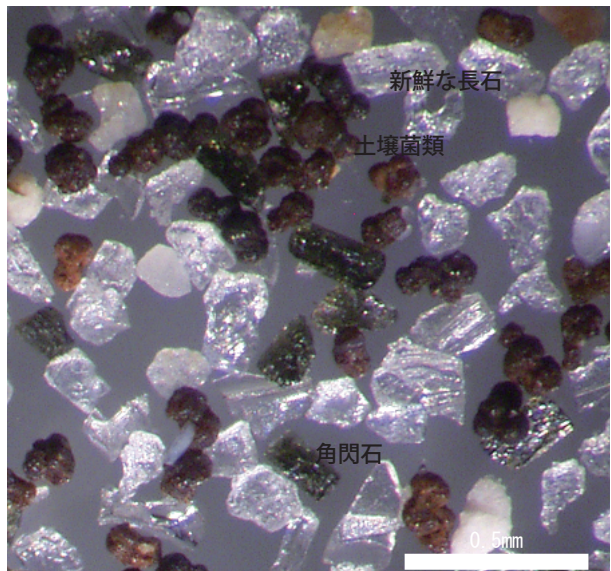
試料IK(2)5-3W_LL16



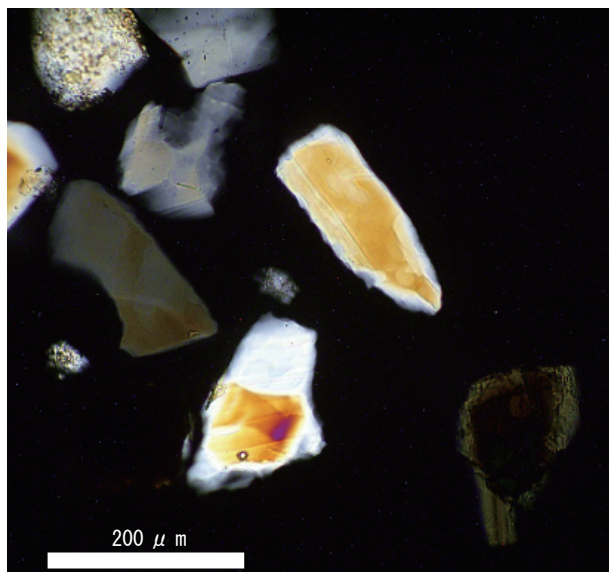
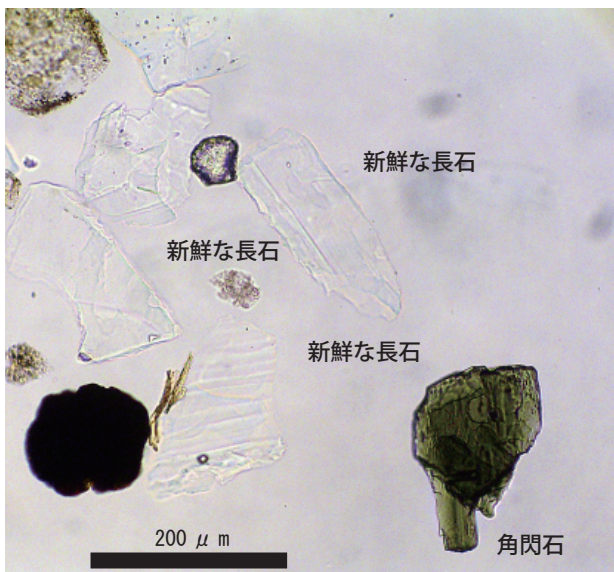
試料IK(1)8-1_05



試料IK(2)5-3W_LL16

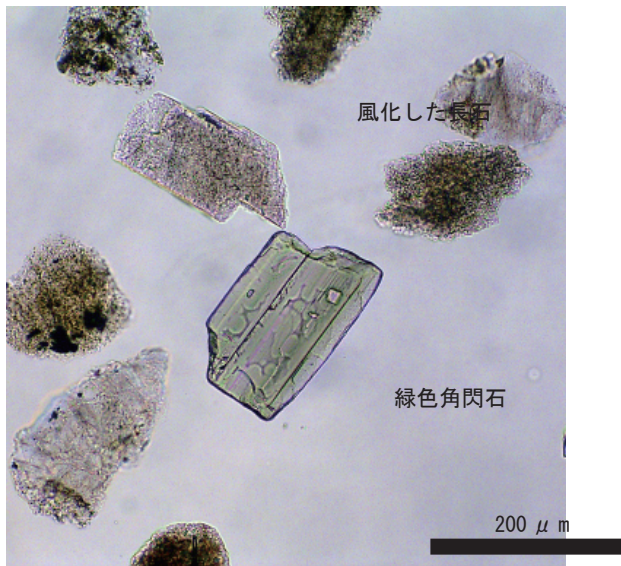


試料IK(1)3-1_L44

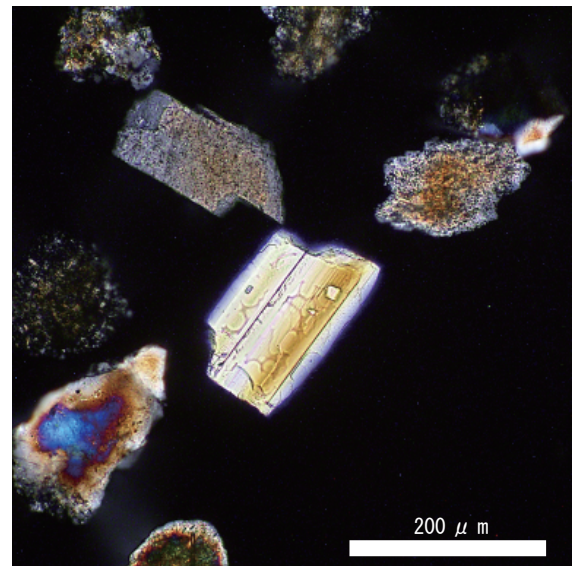


試料IK(1)3-1_L44 左:オープンニコル、右:クロスニコル

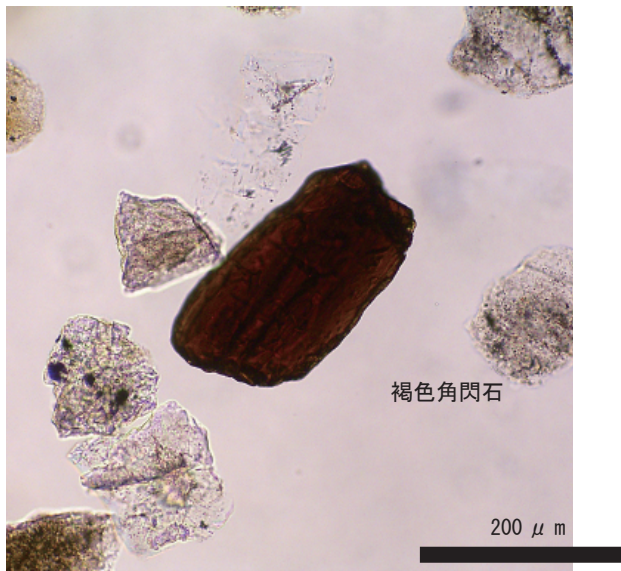
写真2 火山砕屑物の偏光顕微鏡写真



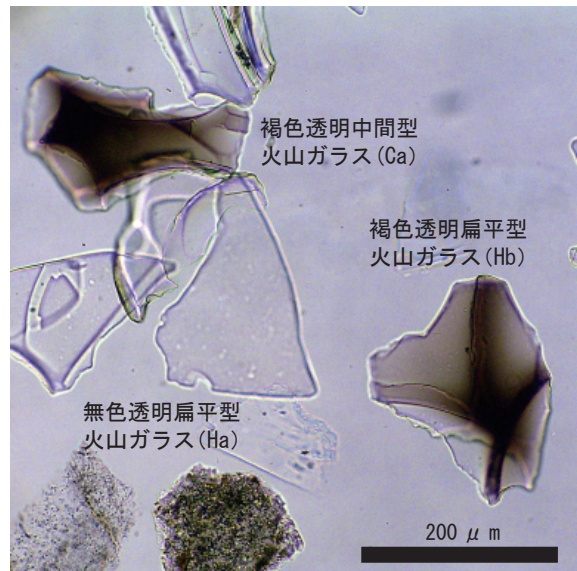
試料IK(2)5-3W_LL19 オープンニコル



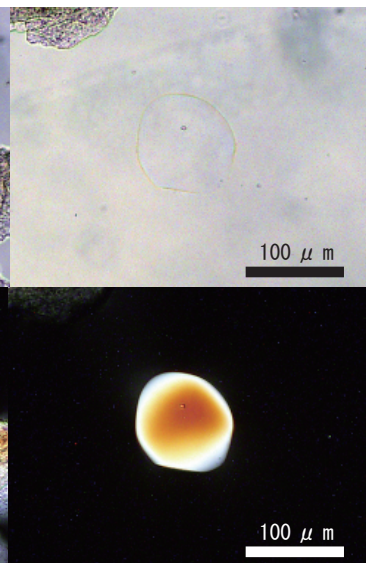
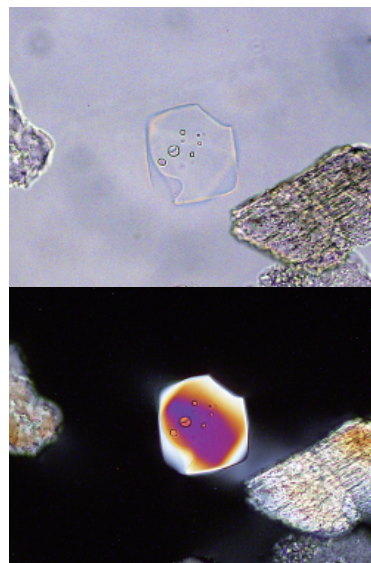
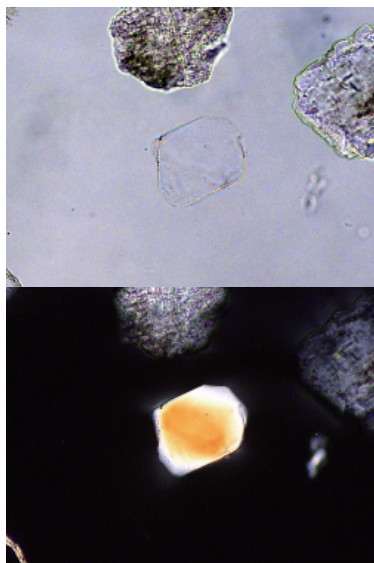
試料IK(2)5-3W_LL19 クロスニコル



試料IK(2)5-3W_LL19 オープンニコル

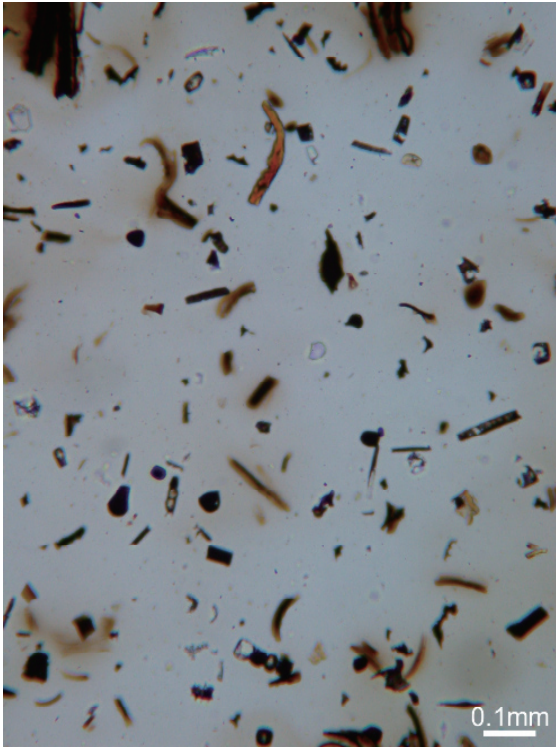


試料IK(1)3-1_L38 オープンニコル

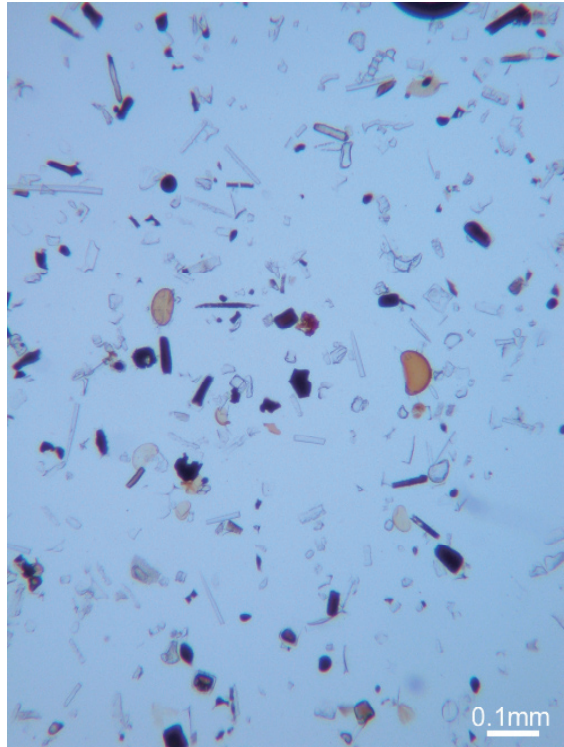


試料IK(1)8-1の高温型石英

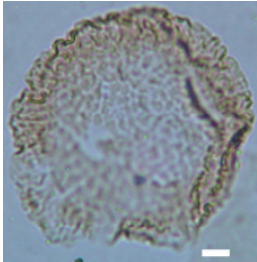
左から試料05・03・02、上：オープンニコル、下クロスニコル。すべて同じスケール。



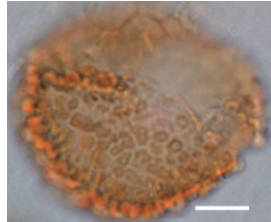
花粉化石含有状況：IK(1)3-1 No. U39-3



花粉化石含有状況：IK(2)5-3W 試料No. L3-6



ツガ属



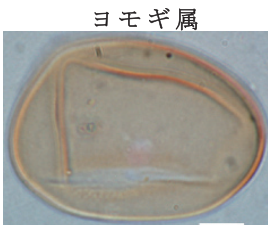
コウヤマキ属



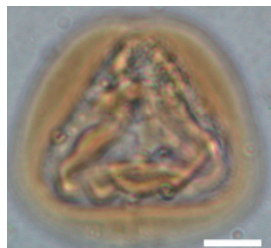
マツ属(複維管束亜属)



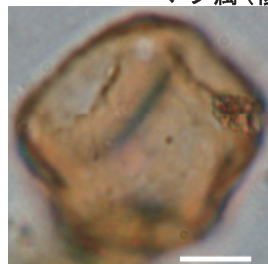
スギ属



ヨモギ属



イノモトソウ属

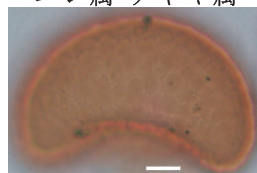


ニレ属-ケヤキ属



アカガシ亜属

オシダ科-チャセンシダ科



シノブ属

スケールバーは0.01mm

第3節 池内(その2)発掘調査に伴う花粉・珪藻・植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

今回の分析調査では、弥生時代前期中頃の古環境復元および遺構の性格に関する情報を得ることを目的として、第6層上面の土坑群埋土と第5層上面の溝埋土について、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

2. 試料

表 11 分析試料表

遺構名	層位	地点名	試料番号	層名	層相	分析項目			
						珪藻	花粉	植物珪酸体	
3449土坑	第6層上面		sp. 2	試料番号 2	17層	黄灰色砂質粘土	○	○	○
			sp. 3	試料番号 2	8層	オリーブ黒色砂礫混じり粘土質砂	○	○	○
			sp. 5	試料番号 2	24層	オリーブ黒色砂質粘土	○	○	○
3448土坑	第6層上面		sp. 1	試料番号 2	9層	褐灰色シルト質粘土	○	○	○
			sp. 2	試料番号 2	9層下部	暗灰黄色粘土	○	○	○
3504溝	第5層上面	埋土		試料番号 1	43層	黄灰色粘土	○	○	○
				試料番号 2	44層下部	黄灰色粘土	○	○	○
				試料番号 3	53層	黒褐色砂混じり粘土	○	○	○
				試料番号 4	51層	黒褐色砂混じり粘土	○	○	○
				試料番号 5	52層	黒色砂質シルト	○	○	○
3505溝	第5層上面	埋土		試料番号 1	21層上部	暗灰黄色シルト質砂	○	○	○
				試料番号 2	21層下部	暗灰黄色シルト質粘土	○	○	○
				試料番号 3	24層上部	黄灰色シルト質粘土	○	○	○
				試料番号 5	25層	黒褐色砂礫混じりシルト質砂	○	○	○

珪藻・花粉・植物珪酸体分析は表1に示す14点の試料について実施する。

3. 分析方法

(1)珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に、物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではないが、1プレパラートあたり50個体以上の試料については2枚検鏡する)。

種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lan)e-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、渡辺ほか(2005)、小林ほか(2006)、Witkowski et al. (2000)などを参照し、分類体系はRound, Crawford & Mann (1990)に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢(2000)に従う。

同定結果は、中心類(Centric diatoms;広義のコアミケイソウ綱Coscinodiscophyceae)と羽状類(Pennate diatoms)に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類(Araphid pennate diatoms: 広義のオビケイソウ綱Frilariophyceae)と有縦溝羽状珪藻類(Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱Bacillariophyceae)に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については、Vos & de Wolf (1993)を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe (1974)に従い、真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に類別する。ま

た、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率3.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、真塩性種～中塩性種については小杉(1988)、貧塩性種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性についてはAsai & Watanabe (1995)、渡辺(2005)の環境指標種を参考とする。珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表2に示す。

(2)花粉分析

試料約10gについて、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛, 比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリン

表12 珪藻化石の生態性区分と環境指標種群

塩分濃度に対する区分 Lowe (1974)による	
海水生種	強塩性種 塩分濃度40.0%以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種(海水生種) 塩分濃度40.0~30.0%に生育する種
汽水生種	中塩性種(汽水生種) 塩分濃度30.0~0.5%に生育する種
淡水生種	貧塩性種(淡水生種) 塩分濃度0.5%以下に生育する種
	淡水生種の生態性区分
塩分	貧塩好塩性種 少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種 少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種 少量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種 淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH	真酸性種 pH7.0以下に生育し、特にpH5.5以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種 pH7.0付近に生育し、pH7.0以下の水域で最も良く生育する種
	pH不定性種 pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種 pH7.0付近に生育し、pH7.0以上の水域で最も良く生育する種
Hustedt (1937-38)による	真アルカリ性種 pH7.0以上に生育し、特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
流水	真止水性種 止水域にのみ生育する種
	好止水性種 止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種 止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種 流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
Hustedt (1937-38)による	真流水性種 流水域にのみ生育する種

主に海水域での指標種群(小杉,1988による)	
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35‰の外洋水中で浮遊生活するもの
内湾指標種群(B)	塩分濃度35~26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35~12‰の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12~4‰の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35~26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26~5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水泥質干潟指標種群(E1)	30~12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12~2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水底生種群(F)	2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊生種群(G)	塩分濃度2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊生種群(H)	塩分濃度20~2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群
主に淡水域での指標種群(安藤,1990による)	
上流性河川指標種群(J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中-下流性河川指標種群(K)	河川中-下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流性河川指標種群(L)	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢湿地指標種群(N)	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢湿地付着生種群(O)	沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
高層湿原指標種群(P)	ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群(Q)	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域での指標種群(伊藤・堀内,1991による)	
陸生珪藻A群(RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生珪藻B群(RB)	陸生珪藻A群に随伴し、陸域にも水中にも生育する種群
未区分陸生珪藻(RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明なもの

で封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1)あたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作や古植生について検討するために、植物珪酸体含量を図示する。

4. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表3、図566に示す。また、珪藻化石の産出頻度は3505溝の試料番号5が少なかった他は堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出する。完形殻の出現率は、3504溝が70%前後と化石の保存状態が良いが、それ以外の地点では30%前後と保存が悪い。産出分類群数は、合計で52属206分類群である。地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

・3449土坑

sp. 2の試料番号2の珪藻化石群集は、産出種を塩分濃度に対するカテゴリで類別すると、淡水域に生育する水生珪藻(以下、水生珪藻と言う)が約50%、汽水生種が約30%、海水～汽水生種が約20%産出する。主要種は、汽水浮遊性の*Actinocyclus normanii* var. *subsalsa*が25%と優占し、浮遊性で内湾指標種の*Cyclotella striata*—*C. stylorum*、止水性で湖沼浮遊性種の*Aulacoseira*) *ranulata*、*Stephanodiscus pseudosuzukii*、湖沼沼沢湿地指標種の*Aulacoseira ambi*) *ua*、それに耐乾性の高い陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*を伴う。

sp. 3の試料番号2の珪藻化石群集は、海水～汽水生種、汽水生種、淡水生種、陸生珪藻が混在して産出する。特徴は、*Actinocyclus normanii* var. *subsalsa*が減少するものの、前試料と同様な種類が産出する。

sp. 5の試料番号2は、汽水生種や海水～汽水生種が減少し、陸生珪藻A群が約30%と増加する。水生珪藻は、前試料と同様に約55%産出する。主要種は、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*が25%と多産し、湖沼沼沢湿地指標種の*Aulacoseira ambi*) *ua*、湖沼浮遊性種の*Aulacoseira*) *ranulata*、

*Stephanodiscus pseudosuzukii*等を伴う。

・ 3448土坑

sp. 1 の試料番号 2、sp. 2 の試料番号 2 の 2 試料とも珪藻化石群集が近似し、海水～汽水生種、汽水生種、淡水生種が混在している。主要種は、汽水浮遊性の *Actinocyclus normanii* var. *subsalsa*、浮遊性で内湾指標種の *Cyclotella striata*—*C. stylorum*、*Cyclotella stylorum* が産出する。水生珪藻では、止水性で湖沼浮遊性種の *Aulacoseira*) *ranulata*、*Stephanodiscus pseudosuzukii*、湖沼沼沢湿地指標種の *Aulacoseira ambi*) *ua* 等が産出する。

・ 3504溝

本溝埋土は、試料番号 5、4、試料番号 3、試料番号 2、1 で珪藻化石群集に違いが見られる。

下位の試料番号 5、4 は、水生珪藻が約 75% と優占し、これに付随して水域にも陸域にも生育する陸生珪藻 B 群が約 15% 産出する。淡水性種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能)の特徴は、貧塩不定性種と貧塩嫌塩性種、真+好酸性種と pH 不定性種、流水不定性種と真+好止水性種が優占あるいは多産する。主要種は、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor*、陸生珪藻 B 群であり沼沢湿地付着生種である *Eunotia praerupta* var. *bidens* がそれぞれ 10~25% と多産し、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Cymbopleura naviculiformis*、*Eunotia implicata*、*Eunotia incisa* 等を伴う。

試料番号 3 になると、貧塩嫌塩性種、真+好酸性種が減少し、真+好流水性種が増加する。主要種は、とくに多産するものはなく、流水性で中～下流性河川指標種の *Navicula rostellata*、好流水性の *Placoneis el*) *inensis* var. *ne*) *lecta*、流水不定性の *omphonema parvulum*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Cymbopleura naviculiformis*、*Eunotia minor* 等が産出する。

試料番号 2、1 は、水生珪藻が約 50% に減少し、陸生珪藻が 40~50% と増加することを特徴とする。主要種は、陸生珪藻 A 群の *Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys* がそれぞれ 10~25% と多産する。また、試料番号 2 は、電気伝導度の高い富栄養水域や塩類の豊富な水域に多産する *Navicula veneta* が約 10%、試料番号 1 では好汚濁性種の *Craticula cuspidata* が約 20% と多産する。

・ 3505溝

本溝埋土は、試料番号 3、試料番号 2、試料番号 1 で珪藻化石群集に違いが見られる。

下位の試料番号 3 は、水生珪藻が 60~80% と優占し、これに付随して陸生珪藻が 15~30% 産出する。主要種は、とくに多産するものはなく、汽水浮遊性の *Actinocyclus normanii* var. *subsalsa*、流水不定性の *Ulnaria ulna*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Pinnularia*) *ibba*、止水性で沼沢湿地付着生種の *omphonema acuminatum*、それに陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* 等が産出する。

試料番号 2 は、流水不定性で好汚濁性種の *Craticula cuspidata* が約 20% と多産し、流水不定性の *Stauroneis nobilis*、沼沢湿地付着生種の *Pinnularia*) *ibba*、止水性で沼沢湿地付着生種の *Stauroneis phoenicenteron*、それに陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* 等が産出する。

試料番号 1 は、流水不定性で好汚濁性種の *Craticula cuspidata* が約 70% と優占し、流水不定性の *Ulnaria ulna* 等を伴う。

(2)花粉分析

結果を表 4、図 567 に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が 100 個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。以下、地点ごとに述べる。

・3449土坑

分析したSP. 2の試料番号2、SP. 3の試料番号2、SP. 5の試料番号2のいずれの試料においても、花粉化石の産出状況・保存状態が悪く、定量解析を行うことが出来なかった。検出された種類をみると、木本花粉ではマキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属等が、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、キク亜科等が検出される。

・3448土坑

SP. 1の試料番号2からは、花粉化石が豊富に産出し、木本花粉とシダ類胞子が多産する。木本花粉ではモミ属、マツ属、アカガシ亜属が多く産出し、マキ属、ツガ属、スギ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属等を伴う。草本花粉の割合は少なく、イネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属等が検出される。なお、SP. 2の試料番号2からは、花粉化石は1個体も検出されなかった。

・3504溝

試料番号5～3は群集組成が類似しており、木本花粉が多産する。木本花粉ではモミ属が最も多く産出し、マキ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属等を伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科等が認められる。

試料番号2は定量解析を行えるだけの個体数を得ることが出来なかったが、試料番号5～3で多産した花粉が検出される。

試料番号1では、下位層と異なり草本花粉の割合が高くなる。木本花粉ではアカガシ亜属が最も多く産出し、マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ亜属、シイノキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が優占し、ヨモギ属、オナモミ属等が多く検出される。わずかではあるが、ガマ属、ミズアオイ属等の水生植物も認められる。

・3505溝

木本花粉をみると、試料番号5、3～1で花粉化石群集に大きな変化はみられない。モミ属、ツガ属、アカガシ亜属が多く産出し、マキ属、マツ属、スギ属、クマシデ属ーアサダ属、ブナ属、コナラ亜属、シイノキ属、ニレ属ーケヤキ属、エノキ属ームクノキ属等を伴う。

これに対し、草本花粉をみると、試料番号5、3、1ではイネ科が多産し、サナエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属、オナモミ属、キク亜科等を伴う。試料番号2をみると、同様の種類が検出されるものの、ヨモギ属とオナモミ属の産出が顕著に認められる。

(3)植物珪酸体分析

結果を表5、図568に示す。

各試料からは植物珪酸体が産出するものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められるものが多い。以下に、各遺構の産状を述べる。

・3449土坑

調査地点のうち、SP. 2の試料番号1、SP. 3の試料番号2で栽培植物のイネ属が検出され、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められる。その含量は少なく、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体でそれぞれ100～200個/程度である。

また各試料での産状は同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、コブナグサ属やスキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

・3448土坑

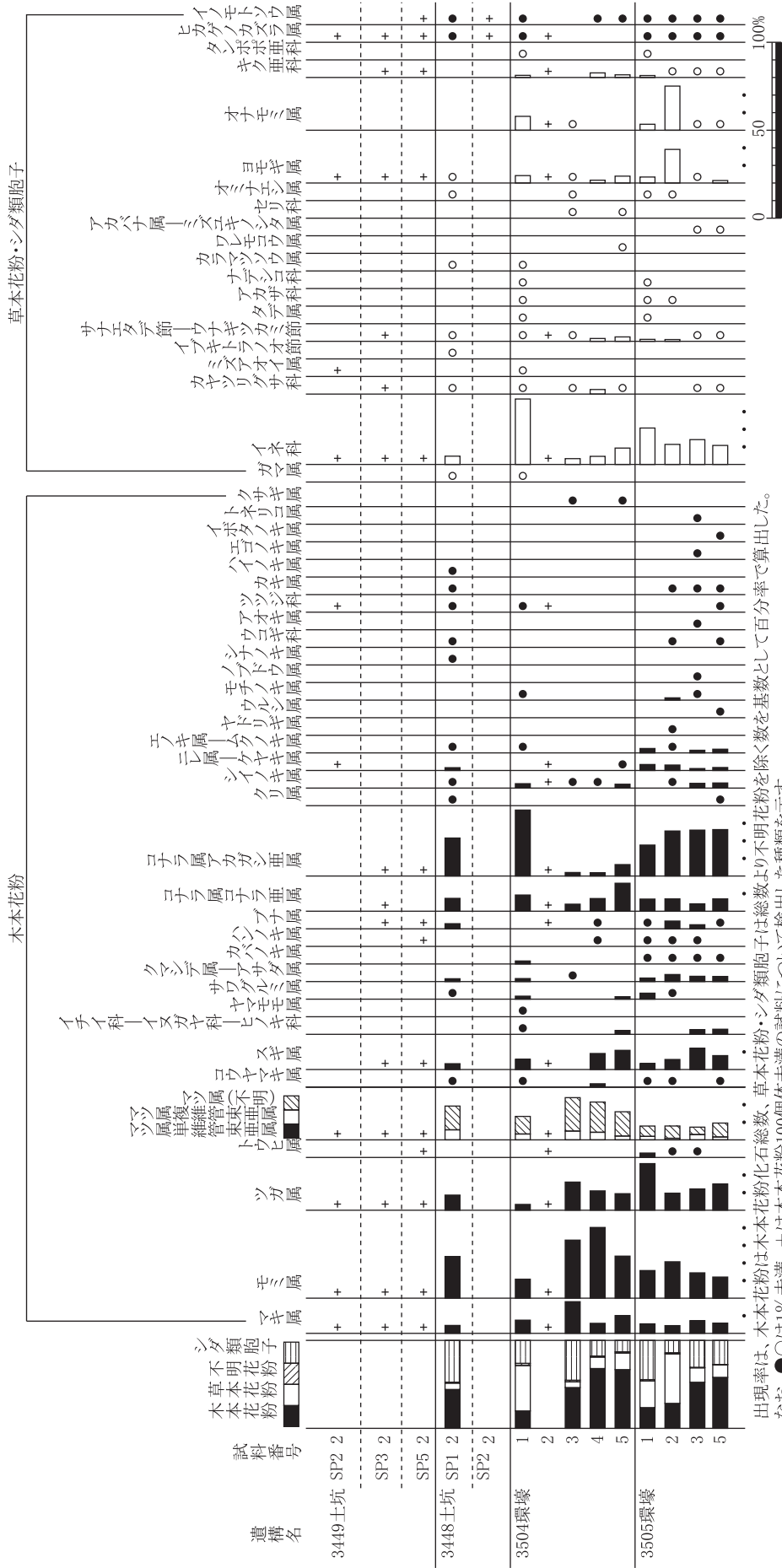


図 567 花粉化石群集の層位分布

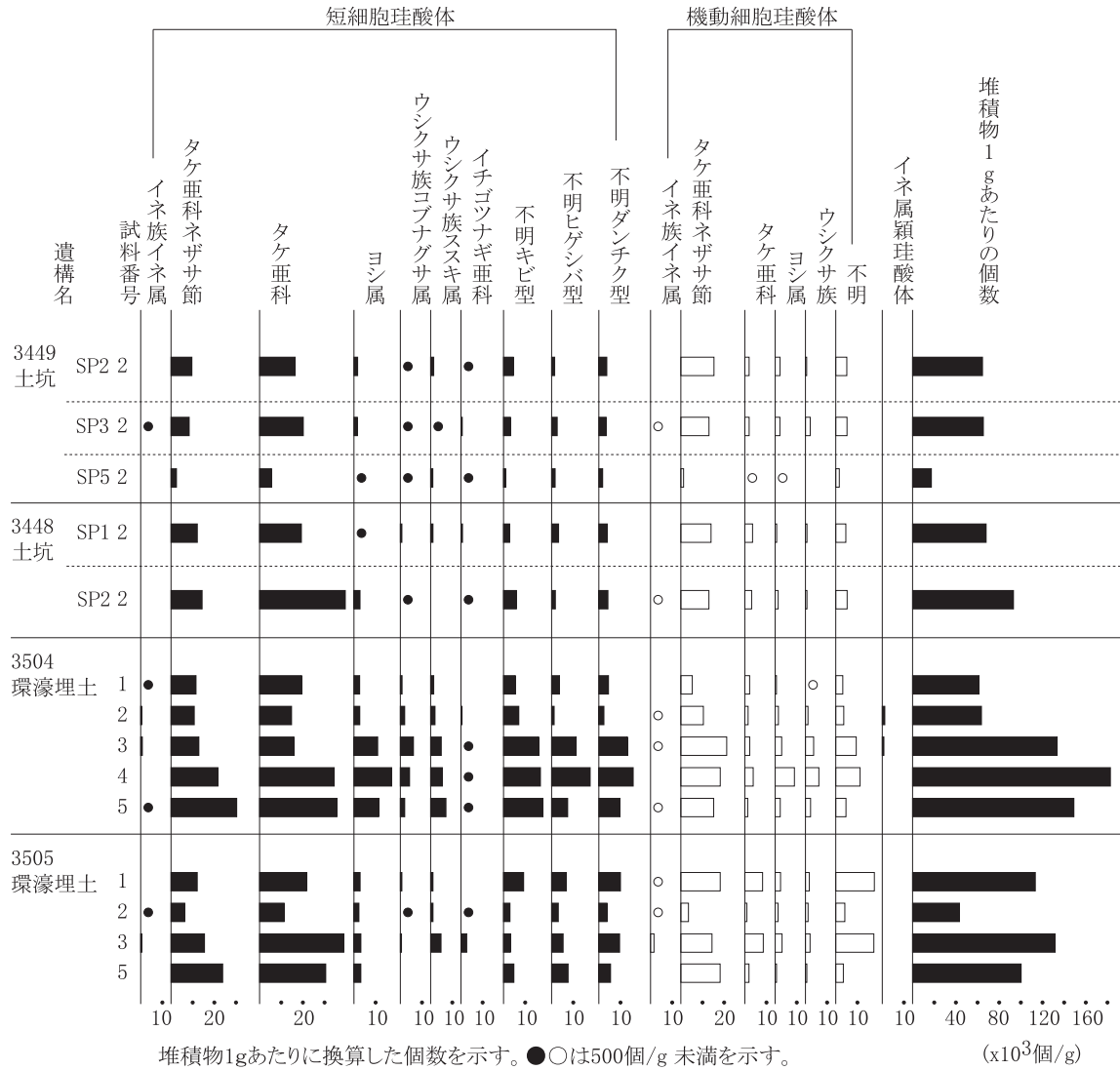


図 568 植物珪酸体含量の層的变化

イネ属は、SP. 2 の試料番号 2 で機動細胞珪酸体が検出される。その含量は少なく、約 400 個/) である。また各試料での産状は同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

・ 3504溝

イネ属は、試料番号 4 を除いた全試料から検出され、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められる。その含量は、土坑試料よりもやや多い。短細胞珪酸体が300~800個/)程度、機動細胞珪酸体が300~400個/)程度である。また各試料での産状は同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

・ 3505溝

イネ属は試料番号 3 ~ 1 で検出され、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められる。その含量は、試料番号 3 の機動細胞珪酸体で多く、約1,600個/)である。他は、短細胞珪酸体が300~500個/)程度、機動細胞珪酸体が100~400個/)程度である。また各試料での産状は同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

5. 考察

(1) 各遺構の堆積環境

1) 第6層上面の土坑群

調査を行った3449土坑と3448土坑埋土の層相はいずれも類似し、下位より細礫混じり黒褐色腐植質砂質泥からなる集合体ないし偽礫、擾乱されている褐色灰色泥、上方粗粒化する褐灰色シルト～砂が累重する。このうち、下位の黒褐色腐植質砂質泥における珪藻化石の産状は類似し、いずれの地点も保存状態が悪く、生育環境の異なる種群からなという特徴を示した。産出種群は、汽水・浮遊性種の *Actinocyclus normanii* var. *subsalsa*、海水～汽水生の浮遊性で内湾指標種の *Cyclotella striata* - *C. stylorum*、止水性で湖沼浮遊性種の *Aulacoseira* (*ranulata*, *Stephanodiscus pseudosuzukii*、湖沼沼沢湿地指標種の *Aulacoseira ambi*) *ua*、それに耐乾性の高い陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* などである。これらの種群のうち、海水～汽水生種は調査区の立地環境を踏まえると、本調査区後背の大阪層群の海成粘土層に由来する再堆積した珪藻化石と判断される。また、止水性種も水深 1.5 m 以上の水深のある静水域に生育する種群であることから、大阪層群の淡水粘土層由来の再堆積した珪藻化石と判断される。今回と同様な珪藻化石群集は、大阪層群のイエロー火山灰層準における珪藻群集(中西・中川・横山,1969)や、本遺跡の南西方向の泉北台地に位置する小阪遺跡(パリノ・サーヴェイ,1992)でも確認されている。このように土坑埋土の珪藻化石群集には、時期の異なる再堆積した珪藻化石を多く含んでいることになるが、各種群の保存状態を比較すると、陸生珪藻の種群が他の種群に比べて保存がよく、遺構埋積時に生育していた現地性種の可能性がある。

以上の層相および珪藻化石群集の特徴から、3449土坑および3448土坑埋土下部の黒褐色腐植質泥形成期は、好气的環境が卓越する状況で形成されたことが推定される。本層準では花粉化石の保存状態が悪かったが、これは好气的環境下における風化作用の影響により分解・消失していることを示しているものと思われる。ただし、花粉化石や植物珪酸体には、低率ながらヨシ属やガマ属・ミズオアイ属といった水生植物の種類が確認される。このことは黒褐色腐植質砂質泥形成期の遺構内が常に乾燥している状態にあったのではなく、湿地のような状況になる時期も存在したことが示唆される。また、3448土坑は3449土坑に比較して陸生珪藻が少なく、比較的湿潤であった可能性もある。このように腐植質泥層形成期は好气的環境が卓越する状況であったが、その上位に累重する堆積層の層相変化から、基準面上昇に伴う水位の上昇が起り、その後、氾濫堆積物に覆われたことが推定される。

2) 第5層上面の溝の堆積環境

3504溝埋土と3505溝埋土とでは、珪藻化石の層位的産状や保存状態が異なっており、溝の埋積状況が異なっていたことが窺える。

3504溝埋土では、化石の保存がよく現地性種が多く含まれると考えられる。溝埋土下部の腐植質泥からなる52層(試料番号5)と51層(試料番号4)は、沼沢湿地付着生種が多産し、当時の溝内が弱酸性を呈した沼沢湿地のような湿潤な状況にあったことが推定される。ところが、埋土中部の44層下部(試料番号2)や埋土上部の43層(試料番号1)では、下部で多産していた種群が減少し、耐乾性の高い陸生珪藻 A 群が多産するようになり、溝内は好气的環境へと変化したことが推定される。また、埋土中下部の53層(試料番号3)からは、沼沢湿地付着生種を含む流水不定性種が多産する他に、中～下流性河川指標種も比較的多く産出することから、溝内に水が流入する時期が存在したことも推定される。

一方、3505溝は、珪藻化石の保存状態が全般に悪く、統計的に扱える珪藻化石が産出するようになるのは埋土中部から上位層準であった。埋土下部の25層(試料番号5)は黒褐色腐植質砂質泥の偽礫ないし集合体からなる層相を示し、加工時に崩落した土壌ないし当時の溝内が土壌発達するような状況におかれていたことが推定される。珪藻化石が少なかった理由も、このような層相から推定される堆積環境と同調的であり、風化作用により分解消失している可能性が高い。埋土中部から上部の21層下部(試料番号2)にかけては、珪藻化石群集において多産する種群がなく、先述したように明らかに再堆積したとみられる汽水生種のほか、沼沢湿地付着生種を含む流水不定性種、湖沼浮遊性種を含む止水性種、それに好気的環境に生育する陸生珪藻など相反する生育環境を指標する種群が混在していた。このような群集組成は混合群集と呼ばれ、河川の氾濫堆積物や人為的擾乱が及んだ耕作土などで特徴的に認められることが確認されている(堀内・高橋・橋本,1996)。したがって、埋土中部から上部にかけての溝内は、氾濫堆積物とともに周囲の土壌などが流入する時期を挟在する堆積環境で形成されたことが推定される。最上部の21層上部(試料番号1)では、有機汚濁の進んだ腐水域に多産する好汚濁性種の*Craticula cuspidata*が特徴的に多産した。本種は、湖沼、河川、水田などに出現する汎布種とされ、電解質が中程度の淡水～汽水域までの高栄養塩水域で多産する種である。化石の保存状態が悪かったことから、二次堆積の可能性も否めないが、最上部形成期には水質が変化した可能性がある。

以上のことから、第5層上面で検出された2条の溝は、異なる埋没過程を経ていることが確認された。この点については、発掘調査成果を踏まえた評価が必要と考える。なお、溝埋土はいずれも著しく変形しており、その変形構造の上限は溝埋土を覆う氾濫堆積物下部層準である。この変形構造は、Matsuda (1999)により定義されている地震動による変形構造に類似するものである。今回の変形構造が地震動によるものだとすると、1回の地震イベントにより形成されたものであり、地震イベントの年代が変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まる(Matsuda,1999)ことから、氾濫堆積物の形成時期ということになる。

(2)古植生

3448土坑埋土からは花粉が多産する試料が認められるものの、花粉外膜が破損しているものが多く、シダ類胞子も多産する。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。花粉が常に酸化状態に置かれている場所では、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている。花粉化石の保存状態を考慮すると、検出された花粉・シダ類胞子化石は、堆積時に取り込まれた花粉が、その後の経年変化により分解・消失し、分解に強い花粉が選択的に残された可能性がある。

これらのことを考慮しながら3448土坑のSP. 1の9層(試料番号2)をみると、木本類ではモミ属、マツ属、コナラ属アカガシ亜属が多く産出し、マキ属、ツガ属、スギ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属等を伴う。よって、モミ属、ツガ属等の針葉樹、アカガシ亜属等の常緑広葉樹、コナラ亜属等の落葉広葉樹が、当時の調査区周辺に生育していたことが窺える。また、植物珪酸体では、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立った。調査区の立地を考慮すれば、周辺の微高地など乾いた場所にタケ・ササ類が生育していた可能性が考えられる。なお、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており(近藤,1982;杉山・藤原,1986)、他の種類よりも残留しやすいことが知られている。そのため、今回の産状はネザサ節などのタケ亜科が残留しやすい状態に

あったことを反映しており、産状に見られる程には繁茂していなかったのかもしれない。また、湿潤な場所に生育するヨシ属も見られ、土坑内とその周辺に湿潤な場所が存在した可能性がある。

一方、3504・3505溝の試料をみると、どちらの地点も下部は木本類が多産する。地点により優占する種類は異なるものの、いずれの地点においても、モミ属、ツガ属、マツ属、アカガシ亜属が多産し、マキ属、スギ属、コナラ亜属、シイノキ属等を伴う。このうちアカガシ亜属は、シイノキ属等とともに暖温帯性常緑広葉樹林を構成する要素であり、モミ属、マキ属、ツガ属、スギ属などの温帯性針葉樹も混生する場合がある。このことから、当該期の本遺跡周辺には、アカガシ亜属を主体とする常緑広葉樹林が存在しており、部分的にモミ属、ツガ属等の温帯性針葉樹が分布していたと推測される。また、冷温帯性落葉広葉樹林の構成要素であるブナ属も認められることから、後背山地部等の標高の高い部分に、これらの落葉広葉樹が生育していたと考えられる。二次林の代表的な樹種であるマツ属復維管束亜属が比較的多産することから、自然攪乱ないし人為的攪乱が及んでいた可能性もある。

草本類ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科等が認められる。これらは開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であることから、溝周辺の草地に生育していたと思われる。

3504・3505溝の上部をみると、いずれも草本群集の割合が増加する。木本類では多産する種類に変化は認められないことから、基本的には同様の森林植生が続いていたと推測される。草本類をみると、イネ科、ヨモギ属、オナモミ属の産出が顕著に認められる。いずれも人里植物に含まれる分類群であることから、溝周辺において開けた空間が増加した可能性が指摘される。なお、3504溝の43層(試料番号1)ではガマ属、ミズアオイ属等の水湿地生植物も、わずかながら検出される。よって、溝内あるいは周囲に水湿地的環境が存在したと推測される。

(3)栽培植物の産状について

弥生時代前期中頃の大型土坑群3449土坑・3448土坑埋土からは、含量密度が低いものの、栽培種のイネ属の植物珪酸体が産出した。土坑群の東側では弥生時代前期中頃の水田が確認されていることから、イネ属の産出は調和的な結果といえる。土坑内のイネ属の含量密度は、数百個/程度と低かったが、大阪湾岸地域の考古遺跡における弥生時代前期の水田跡の植物珪酸体含量密度が、いずれも数百個/程度であることを踏まえると、土坑内での生育を完全に否定するものではない。先述したように土坑埋土下部の層相は人為的擾乱を示唆するものであり、3448土坑では畦状の高まりが確認されていることを踏まえると、むしろ土坑内での生育を示している可能性がある。そうだとすると大型土坑群が苗田のような水田の付帯施設として利用されていた可能性を考える必要がある。この点については水田耕作土における植物珪酸体含量密度を明らかにした上で再評価する必要があると考える。

第5層上面の3504・3505溝埋土からも栽培植物のイネ属の植物珪酸体が産出した。その含量密度は、上記した土坑埋土よりも高かった。先述の溝の堆積環境を踏まえると、周囲から堆積物とともに流入したイネ属と判断される。したがって、当該期にも集落周辺においてイネ属が生育し、耕作が行われていた可能性が考えられる。

6. まとめ

上述してきた第6層上面と第5層上面の弥生時代前期中頃の遺構埋土の分析結果から、以下の事項が明らかとなった。

1)第6層上面の大型土坑の機能期は、湿潤な状況にあった可能性もあるが、基本的には好気的環境が卓越する状態にあった。

2)第5層上面で検出された2条の溝の埋没過程は異なっていた。3504溝は、構築当初は沼沢湿地のような状況であったが、埋積の進行に伴い好氣的環境へ変化した。一方、3505溝は構築当初は乾燥しており、その後氾濫堆積物や周辺から土砂の流入によって埋没した。両溝における湿地性のヨシ属の植物珪酸体の産状は堆積環境と同調的であった。

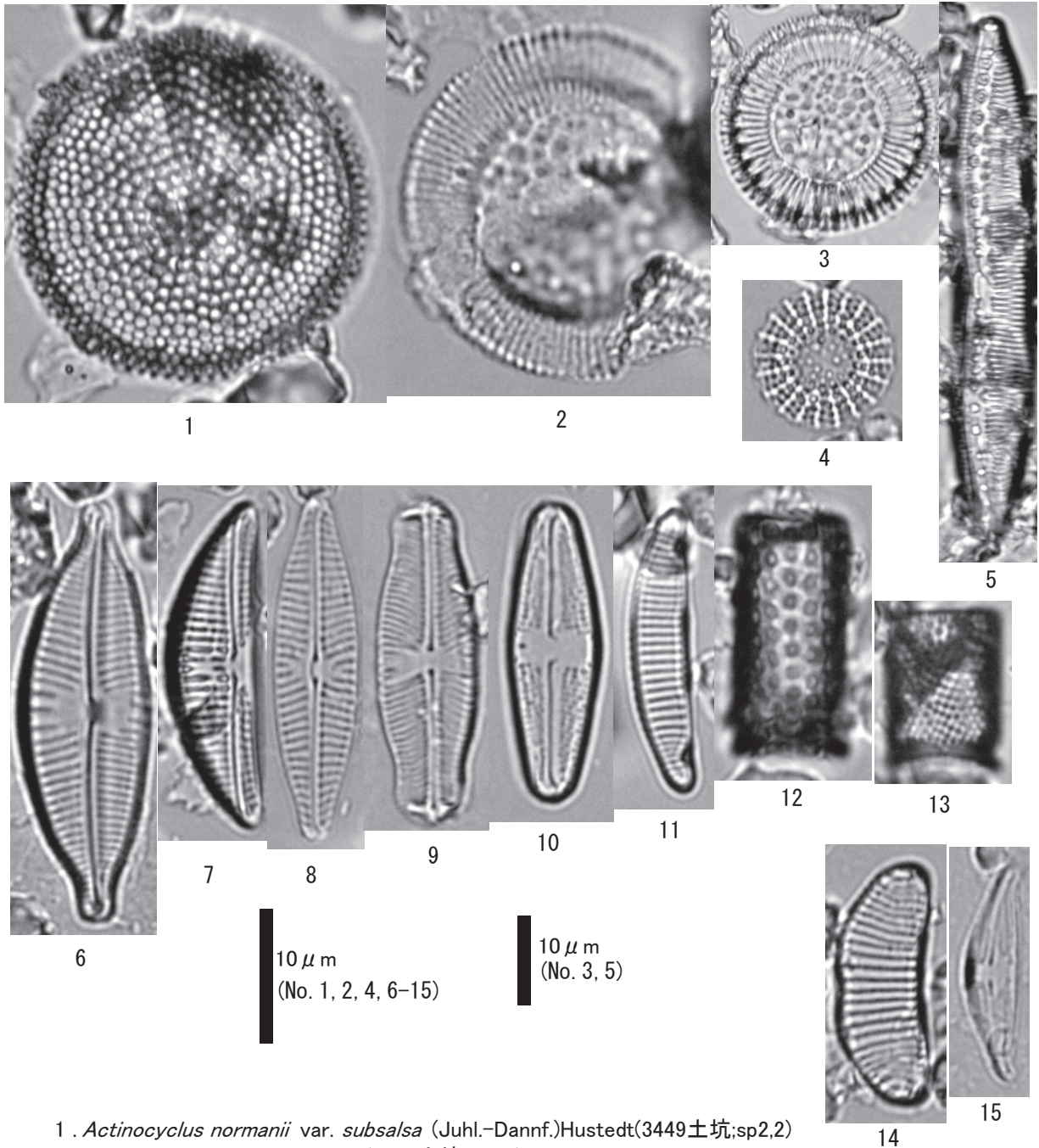
3)栽培植物のイネ属が含量密度が低かったものの、土坑群および溝埋土からの産出が確認された。

4)弥生時代前期中頃の調査区周辺には、アカガシ亜属を主体とする常緑広葉樹林が存在し、部分的にモミ属、ツガ属等の温帯性針葉樹が分布していた。また、二次林域の存在も示唆された。

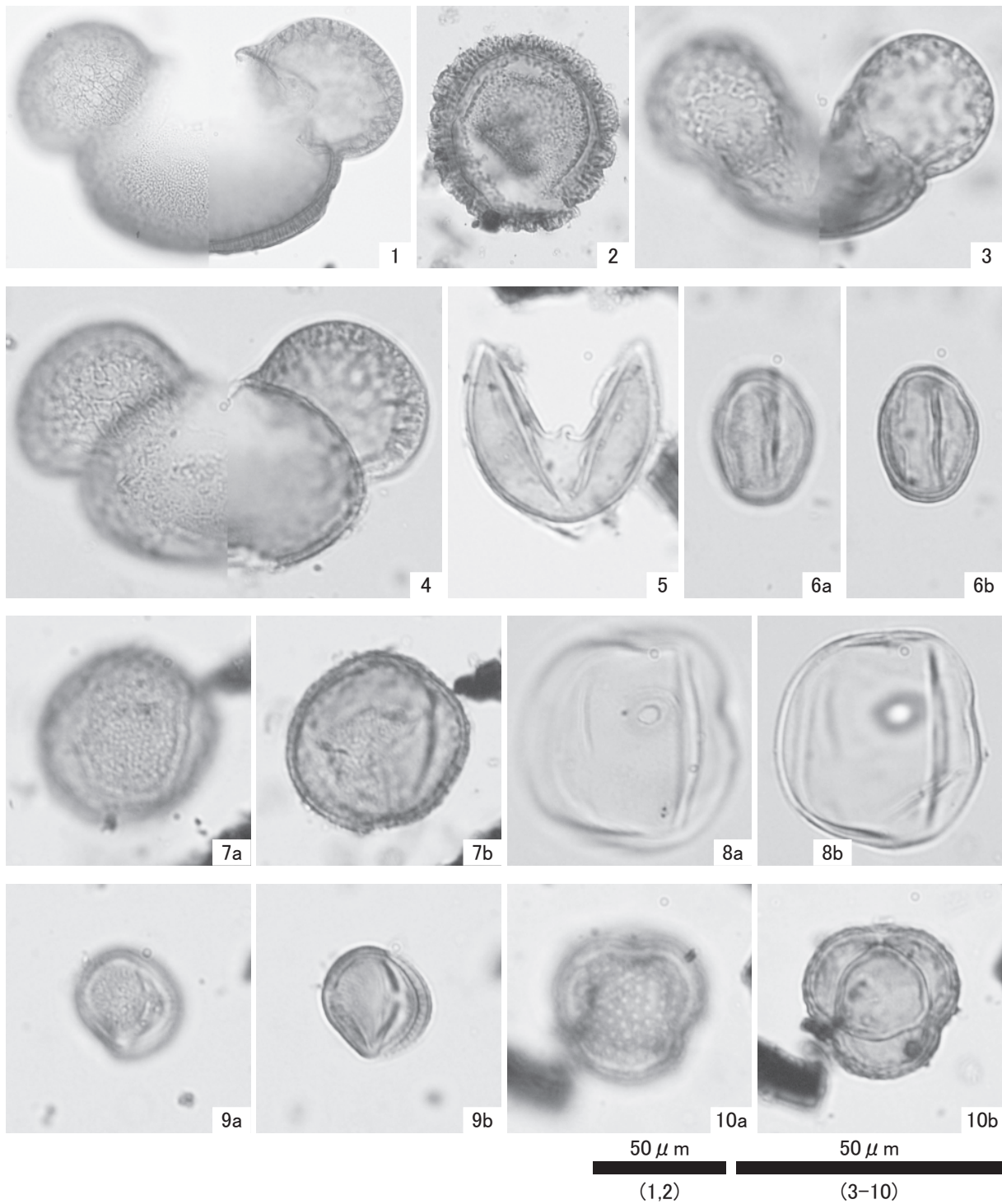
引用文献

- 安藤 一男 1990 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological groups related to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.
- 古谷 正和 1979 大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷. 第四紀研究,18,121-141.
- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘 1998 埼玉の藻類 珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
- Hustedt, F.,1937-1939,Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen—Flora von Java, Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie, Supplement,15:131-177,15:187-295,15:393-506,15:638-790, 16:1-155,16:274-394.
- 伊藤 良永・堀内 誠示 1991 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.
- 近藤 鍊三 2004 植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
- 小杉 正人 1988 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27, 1-20.
- 小林弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五 2006 小林弘珪藻図鑑.第1巻.(株)内田老鶴圃,531p.
- Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p. Mittel-europa.Band2/1.)ustav Fischer Verla) ,876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2.)ustav Fischer Verla) ,536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fra)ilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3.)ustav Fischer Verla) ,230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnantheaceae,Kritische Er)enzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4.)ustav Fischer Verla) ,248p.
- Lowe, R.L.,1974,Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Series EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 前田 保夫 1984 花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積(更新)世後期以降の植生変遷.宮脇 昭(編著),日本植生誌 近畿,至文堂,87-99.
- Matsuda,J.-I 2000,Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain,Osaka,japan,Sedimentary Geology,135,99-116.
- 那須 孝悌 1989 活動の舞台:概論.永井 昌文・那須 孝悌・金 関恕・佐原 真(編著),弥生文化の研究1 弥生人とその環境,雄山閣出版,119-130.
- 中西 昭弘・中川 要之助・横山 卓雄 1969 大阪層群のイエロー火山灰層準における海成相とケイソウ群集.第四紀研究, 8, 4, 131-136.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D.) .1990,The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- Vos, P.C. & H. de Wolf,1993,Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects.Hydrobiologia,269/270,285-296.
- 渡辺仁治・浅井 一視・大塚 泰介・辻 彰洋・伯耆 晶子 2005 淡水珪藻生態図鑑.内田老鶴圃,666p.
- 柳沢 幸夫 2000 II-1-3-2-(5)計数・同定.化石の研究法—採集から最新の解析法まで—,化石研究会,共立出版株式会社,49-50.

写真4 珪藻化石

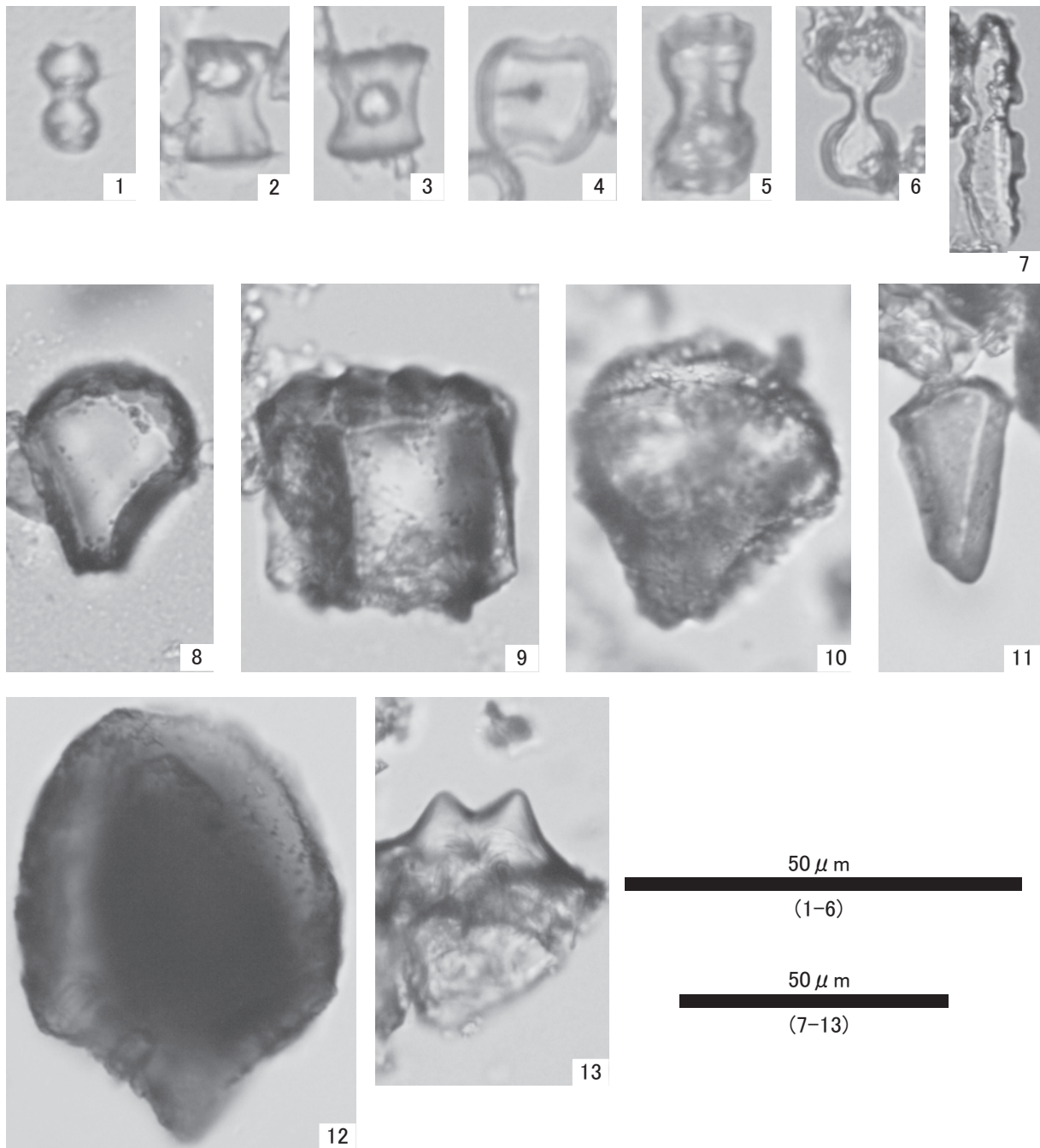


1. *Actinocyclus normanii* var. *subsalsa* (Juhl.-Dannf.)Hustedt(3449土坑;sp2,2)
2. *Cyclotella striata*-*C. stylorum* (3449土坑;sp3,2)
3. *Cyclotella stylorum* Brightwell(3504環濠;2)
4. *Stephanodiscus* cf. *pseudosuzukii* Tuji et Kociolek(3449土坑;sp3,2)
5. *Hantzschia amphioxys* (Ehren.)Grunow(3449土坑;sp5,2)
6. *Cymbopleura naviculiformis* (Auerswald)Krammer(3504環濠;5)
7. *Amphora copulata* (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald(3504環濠;2)
8. *Navicula veneta* Kuetzing(3504環濠;2)
9. *Sellaphora pupula* (Kuetz.)Mereschkowsky (3504環濠;2)
10. *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann(3449土坑;sp5,2)
11. *Eunotia incisa* W.Smith ex Gregory(3504環濠;2)
12. *Aulacoseira granulata* (Ehr.)Simonsen (3449土坑;sp2,2)
13. *Aulacoseira ambigua* (Grun.)Simonsen(3449土坑;sp3,2)
14. *Eunotia praeurpta* var. *bidens* (Ehren.)Grunow(3504環濠;4)
15. *Amphora montana* Krasske(3504環濠;1)



- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. モミ属(3448土坑;SP1 2) | 2. ツガ属(3448土坑;SP2 2) |
| 3. マキ属(3505環壕;5) | 4. マツ属(3448土坑;SP2 2) |
| 5. スギ属(3449土坑;SP5 2) | 6. コナラ属アカガシ亜属(3448土坑;SP1 2) |
| 7. コナラ属コナラ亜属(3448土坑;SP2 2) | 8. イネ科(3505環壕;1) |
| 9. ヨモギ属(3448土坑;SP1 2) | 10. オナモミ属(3505環壕;2) |

写真6 植物珪酸体



- | | |
|---------------------------------|------------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(3503環濠;埋土 1) | 2. ネザサ節短細胞珪酸体(3448土坑;SP1 2) |
| 3. ネザサ節短細胞珪酸体(3504環濠;埋土 5) | 4. ヨシ属短細胞珪酸体(3448土坑;SP2 2) |
| 5. コブナグサ属短細胞珪酸体(3503環濠;埋土 1) | 6. ススキ属短細胞珪酸体(3448土坑;SP1 2) |
| 7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(3448土坑;SP2 2) | 8. イネ属機動細胞珪酸体(3503環濠;埋土 1) |
| 9. ネザサ節機動細胞珪酸体(3448土坑;SP1 2) | 10. ネザサ節機動細胞珪酸体(3504環濠;埋土 5) |
| 11. ウシクサ族機動細胞珪酸体(3449土坑;SP3 2) | 12. ヨシ属機動細胞珪酸体(3448土坑;SP2 2) |
| 13. イネ属穎珪酸体(3503環濠;埋土 1) | |

第Ⅷ章 総括

今回の発掘調査では、大きく2つの成果を挙げることができた。1つは平安時代後期の集落を検出したことで、もう1つは弥生時代前期の集落を検出したことである。本章では、発掘調査によって得られたこれらの成果を基に、遺跡の内容を各時代を通じて総括し、本書のまとめとしたい。

第1節 遺跡の構造変遷

本遺跡は、沖積作用による地層の累重によって形成されている。地層の堆積状況は、基本的に大きな相違はないものの、各調査区ごとにわずかに様相を違えており、これに伴い遺構面の面数も異なる。第Ⅶ章第2節では、池内遺跡全体の堆積地層の解析と総合的な地層の把握を行ったが、ここでは、調査時の遺構面・地層の認識に基づいて、再度整理したものを表13に掲げた。以後、本章中では、表中左端に掲げた池内第～層／池内第～面とした名称を用いることとする。

〔縄文時代後期〕

池内第8～10面が相当する。主な検出遺構としては、流路・土坑・倒木痕状の落ち込み等がある。当該時期は、3遺構面にわたって検出できることに示されるように、順次その河道域を違えており、自然流路が南東―北西方向へ向けて流れ、氾濫堆積と安定を繰り返していた景観が想定できる。これらの流

表13 各調査区遺構面对応表

遺構面／層名	第Ⅶ章 第2節	地層の性格	05-1 調査					05-2 調査				08-1 調査				
			8区	6・7区	4・5区	3区	1・2区	5区	4区	3区	1・2区	1区	2区	3区		
池内第0層	IK0	現代盛土層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	
池内第1層	IK1	現代耕作土層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	
池内第2層	IK2	近世作土層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	
池内第1面			第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	—	—	—	—	第1面	—	—		
池内第3a層	IK3a	中世～近世作土層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3a層	第3a層	第3a層	第3a層	第3層	第3層	第3層	第3a・b層	
池内第3b層	IK3b							第3b層	第3b層	第3b層	第3b層					
池内第3c層	IK3c	中世水成層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3c層	第3c層	第3c層	第3c層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3c層
池内第2面								第1面	第1面	第1面	第1面					
池内第3d層	IK3d	中世作土層	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	第3d層	第3d層	第3d層	第3d層	第2面	第1面	第2面	第1面	第2面
池内第3面								第2・3面	第2面	第2面	第2面					
池内第4a層	IK4a	平安～中世作土・土壌層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層
池内第4面			—	—	第3面	第4面	—	第3面	—	—	—	第3面	第2面	第3面	—	
池内第4b層	IK4b	弥生中期～平安土壌層	—	第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	—	—	—	第4b層	第4b層	—	—	
	IK5	弥生前期溝内水成層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
池内第5面			第3面	第3面	第4面	第5面	第3面	第4面	第4面	第4面	第4面	第4面	第3面	—	—	
池内第5層	IK6	弥生前期水成層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	
池内第6面			第4面	—	—	—	第4面	第5面	—	—	—	—	第4面	—	—	
池内第6層	IK7	弥生前期作土層	—	—	—	—	—	第6層	—	—	—	—	第6層	—	—	
池内第7面			—	—	—	第6面	—	—	第6面	第6面	第6面	第5面	—	第5面	—	
池内第7a層	IK7a	縄文 or 弥生前期土壌層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	
池内第7b層	IK7b	縄文 or 弥生前期水成層														
池内第7c層	IK7c	縄文 or 弥生前期土壌層														
池内第8面			第5面	—	—	—	—	第7面	第7面	—	—	—	—	—	—	
池内第8層	IK8	縄文後期～水成層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	—	第8層	第8層	第8層	
池内第9面			—	第4面	—	—	—	第8面	第8面	—	—	—	—	—	—	
池内第9a層	IK9a	縄文後期～土壌層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	
池内第10面			—	—	—	—	—	第9面	第9面	第9面	第9面	—	—	—	—	
池内第9b層	IK9b	縄文後期～水成層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	
池内第9c層	IK9c	縄文後期土壌層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	
池内第10層	IK10	水成層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	—	—	—	
池内第11面			—	第5面	第5面	—	第5面	第10面	—	第10面	—	—	—	—	—	
池内第11a層	IK11a	縄文中期土壌層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	
池内第12面			—	—	—	—	—	第11面	第11面	第11面	—	—	—	—	—	
池内第11b層	IK11b	縄文中期水成層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	—	—	—	

路によって運搬された水成堆積物は、以後の基本的な地形を形成している。遺構・遺物ともに顕著に認められなかったことから調査は限定的なものとなったが、以後の地形形成の要因となる概ねの傾向を把握し得た点で、成果を挙げることができた。

〔弥生時代前期〕（図 569）

池内第5～7面が相当する。このうち、池内第6・7面はほぼ同時期のものと考えられるため、大きくは耕作土層・土壌層の上面（池内第6・7面）と、それを覆う水成堆積物の上面（池内第5面）の2つの遺構面が該当すると考えて良い。

遺構・遺物の分布は限定的で、調査地の西半05-2-3～5区、08-1-2・3区にピークを持つ。池内第5面では弥生時代前期中葉の居住域を、池内第6・7面では弥生時代前期中葉以前の生産域をそれぞれ確認した。

まず、池内第6・7面では、05-2-5区、08-1-2区にまたがって小区画水田と流路・土坑・溝を検出した。小区画水田は、調査区を南北に縦断する流路の東側に展開しており、地形の傾斜に沿って南東-北西方向に幹線となる畦畔を配し、その間を支線畦畔で区切ることによって平坦面を維持している。水田に伴う排水施設としては、流路に接続する溝がある。なお、流路は北側に堰を設けており、堰の北東側には、北東方向に延びる溝が接続していることから、さらに北側に耕作域が展開していた可能性が高い。遺物は、この流路内から弥生時代前期中葉の土器壺・甕・鉢・蓋が出土している。一方、流路の西側には、7～16m規模の大型の土坑が分布する。土坑は重複関係を有さない溝が接続しており、性格は不明ながら、意図して掘削されたものの可能性がある。

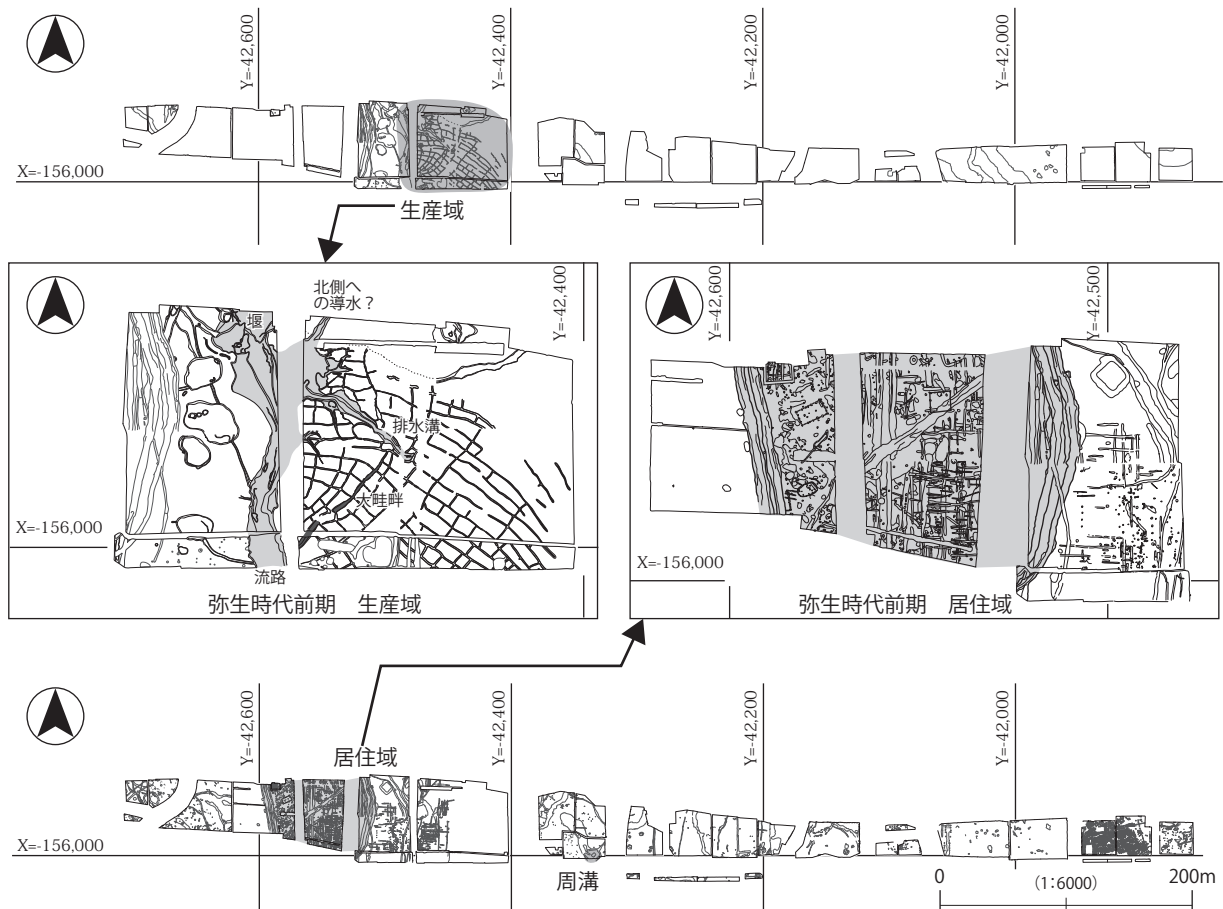


図 569 縄文時代～弥生時代前期の池内遺跡（下段：池内第5面 上段：池内第6面）

次に、池内第5面では3区の東端から5区の西端にかけて、居住域とその外周を巡る2条1対の溝を確認した。溝間の距離は、東西で約70mを測り、その内側の区域で平地建物ないしは竪穴建物1棟、掘立柱建物2棟、炭化物と土器を多く含む土坑等を検出している。これらの諸遺構は削平が著しいため、総じて遺存状況が不良であり、建物を構成しない単独で位置する柱穴も認められたことから、本来はこれ以上に建物が存在していた可能性があり、これらの建物によって居住域が形成されていた。

居住域の外周を巡る溝は、埋土に弥生時代前期中葉の土器を多く含み、延長70m以上の長距離にわたるものである。埋土の検討から、両者は併存していた可能性が高く、2条1対のものと考えられる。溝の内外で明らかに当該時期の遺構・遺物の分布が異なる点は、本溝の特徴の1つであり、微地形を無視して走向することから、人為的に掘削された可能性が高い。以上の諸点から、この溝は居住域を区画する、いわゆる「環濠」としての機能も想定できる。本文中で「環濠」という用語を用いていないのは、西側の溝が東側のものと比較して直線的であること、両者の接続関係を確認できていないこと、居住域とするには、建物の棟数が少ないことなどから、慎重を期したものであるが、これらの溝が居住域を区画する性格を有していたという点については、上述した諸点からほぼ明らかと言えよう。

遺構・遺物の密度からすると、若干見劣りがする点も否めないが、近畿地域における同時期の「環濠集落」の占有面積やその形状と本遺跡の居住域を比較すると、幅約70mという規模はその規模を大きく逸脱するものではないと言える(図574)。区画内の建物が少なく見えることは、削平によって復元可能な建物が減少したか、居住域の営まれた時期が短期間であったためと想定できるが、後者の場合、この見かけ上の少なさが、弥生時代前期中葉に区画を伴う居住域を形成し得る集団の内実を示すものであるとすれば、極めて興味深い。

なお、本面ではこのほかに08-1-1区で検出した63周溝を検出している。この周溝は、幅・深さともに不定形ながらも溝が全周しており、当該期の墓域の一端を担っていた可能性も想定できる。周辺域の調査の進展が望まれる。

以上のことから、弥生時代前期には、前期中葉に段丘縁辺部の沖積地の耕地化を図った後に、氾濫による土砂が供給され、ほとんど時期を隔つことなく、居住域を形成→放棄という過程を経た景観の変遷が想定できる。なお、後続する時期の遺構・遺物は、次に述べる弥生時代後期末まで認められない。直接的な関連は不明であるが、本遺跡の東側に展開する三宅西遺跡の発掘調査では弥生時代前期～中期前葉にかけての居住域・墓域を確認している(大文セ2009 a)。

〔弥生時代後期末～古墳時代前期〕(図570)

池内第5面が相当する。遺構・遺物の分布密度は低く、各調査区で散発的に確認できるのみである。確実な検出遺構としては、方形周溝墓・土坑がある。

周溝墓は8.7×9.0mの方形を呈するもので、削平を受けているため主体部は確認できていない。また、溝内からの出土遺物は極めて少なく、甕・鉢の細片をわずかに確認したに過ぎない。この方形周溝墓周辺に当該時期の遺構は確認できておらず、北側にさらなる墓域が展開していた可能性もあるが、詳細は明らかでない。今後の周辺域の調査事例の蓄積が俟たれる。

このほかに、土器を一括投機したような井戸・土坑が散在する状況を呈している。

〔古墳時代～奈良時代〕(図570)

池内第5面が相当する。わずかに井戸や土坑が散発的に存在するものの、いずれも主体を成すものではない。

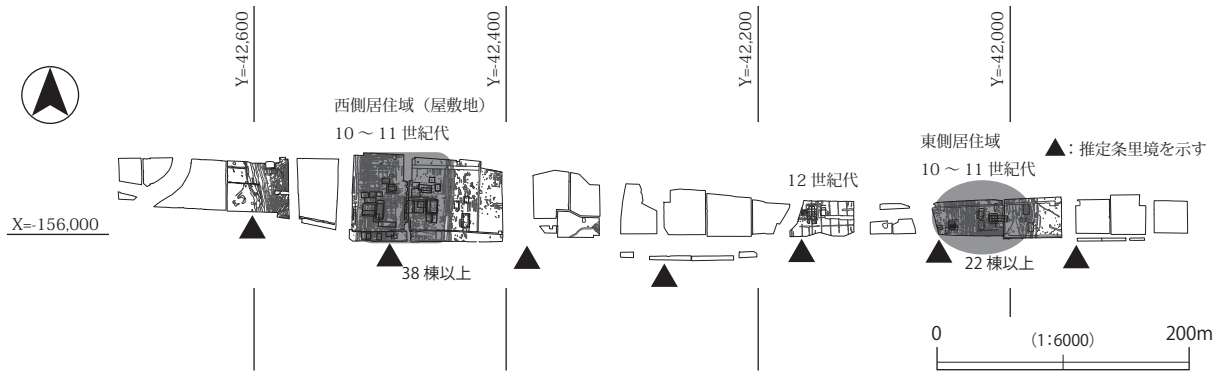


図 570 平安時代前期の池内遺跡 (池内第 4・5 面)

〔奈良時代～平安時代前期〕 (図 570)

池内第 5 面が相当する。05-1-1 区では、南東-北西方向を向き、併走する不定形な溝群が認められた。溝内堆積物の様相と規模・断面形状から、畝間溝等の耕作に伴う溝と考えられる。耕作地であることを反映してか、遺物をほとんど伴わないため、詳細な時期は明らかでないが、前後の地層の形成時期と埋土の様相から、この時期に属する可能性がある。

このほかに、05-1-3 区の池内第 5 面で検出した 677 溝は、溝幅も 2.5 m 前後と広く、主軸も座標北と整合するなど、条里地割を強く意識した溝であると考えられる。調査地の西側に位置する大和川今池遺跡 (大文セ 2009 b) 内で検出した難波大道の路芯と、周辺の遺跡調査結果に認められる区画施設を検討した積山洋氏の検討によると、この 677 溝は、路芯から東方向へ 1751 m 離れており、1 町を 109 m とすると 16.0642 町、同じく 1 町を 110 m とすると 15.9182 町を測ることから、ほぼ 16 町東側に位置することが指摘されている (積山 2009)。

この 677 溝は、後述する 10 世紀代の掘立柱建物によって重複されることから、10 世紀以前に開削されたと考えられ、本地域における土地開発が行われた後に、これを無視した建物群が展開したことを示唆する。後述する平安時代中期の建物群に先行する耕作溝の存在を支持するものと考えられよう。

〔平安時代中期～後期〕 (図 570)

池内第 4・5 面が相当する。池内第 4 b 層が遺存している箇所では、遺構・遺物の分布も極めて密である。検出した主な遺構には、掘立柱建物・区画溝・土坑墓・耕作溝・溝・井戸・土坑・落ち込みがある。このうち掘立柱建物は、建て替えを含めると総計 60 棟を超える。

掘立柱建物が構成する居住域は、調査区の東西 2 箇所に分かれて位置しており、東側は 05-1 調査の 3～5 区に、西側は 05-2-5 区と 08-1-2 区にかけてそれぞれ分布している。建物の分布は、東側が 22 棟以上、西側が 38 棟以上と西側居住域が優位である。建物配置の様相も東側の居住域が散在的な様相を示すのに対し、西側の居住域は一定の配置プランが看取できるほか、78㎡を測る大型建物とそれに伴う小型の建物群の存在など、整然としたものである点で、東側居住域とは異なる様相を示し、屋敷地と呼ぶにふさわしい内容を備えている。

個々の建物の帰属時期を明示する具体的な資料は少なく、建物相互の重複関係も直接的な重複関係にあるものが少ないため、建物の先後関係は判然としないものが大半を占める。しかし、わずかながら得られた柱穴内や周辺遺構の出土遺物から、建物群の帰属時期は、近隣に所在する長原遺跡で行われた土器編年 (佐藤 1992) より、平安時代Ⅱ期古から平安時代Ⅲ期新にかけてと捉えることができ、9 世紀後葉を初現として 11 世紀中葉には、ほぼ廃絶すると考えられる。

以下、特に成果の多かった西側の屋敷地内を中心に概観していく（図 572）。西側居住域を特徴付ける遺構の一つに、区画溝の存在が挙げられる。この区画溝は、東・西・南側の各辺を検出しており、居住域を約80mで区画することを確認している。特に東側の区画溝は、現存条里の坪境（現道路及び水路を指す図 570 調査区と調査区間の空白部分）をほぼ2分する位置にあり、条里地割と一定の関連を有していたことが窺われる。この溝内からは、土師器・黒色土器・須恵器をはじめとする当該時期の土器が多数出土した。ほぼ完形の土器が多く認められることを特徴とするが、いずれも日常雑器であることから、屋敷地内で用いられたものと考えられる。完形の椀・皿類が多数出土したことは、屋敷地内で何らかの行事が執り行われた際に廃棄されたものの可能性があるが、詳細は明らかでない。

屋敷地内の土地利用は、大きく東西2群に細分することができる。具体的には柱列6の西側に展開する空閑地を境界とし、東西に大型の建物を主として周辺に付随するように展開する小型の建物群及び総柱建物を配置する。このことから、屋敷地内の建物群は倉庫と簡易な側柱建物、主屋と目される建物などが同時並存する構成をとる可能性が高い。それぞれの建物群には井戸が付随する。

なお、屋敷地の中央部西寄り南端では、人骨一体を埋葬した土坑墓を検出した。出土遺物が細片のみであったため時期比定に困難を伴うが、建物群とほぼ軸を揃えることから、一定の有機的な関連を有していた可能性が高い。

また、屋敷地の南東側では、建物群の分布が認められない代わりに大型の土坑を検出した。本文中でも想定したように、水利に関連する遺構の可能性もあるが、屋敷地内に位置することや溝と接続していないことなど、不確定な要素が多く、土坑の性格について詳細は明らかでない。

遺物の上では、銚帯の出土が注目される。このほか、越州窯青磁・白色土器・緑釉陶器・灰釉陶器等をはじめとする搬入遺物の存在は、屋敷地の性格を示すものとして重要である。その出土傾向は、図 573 に示したように大型建物周辺及び、東側の区画溝内から出土しているものが大半を占めるなど、一定の傾向を示し得た。この中で、越州窯青磁の出土分布が屋敷地内西側居住域に偏位していることは空閑地を隔てて位置する建物群相互の関係を考える上で興味深い事例と言える。

本遺跡の周辺では、条里地割が良好に遺存しており、条里制の形態や成立起源を考える上で、重要な資料として古くから知られていた。今回の発掘調査で確認した屋敷地の住人は、屋敷地内の建物群の規

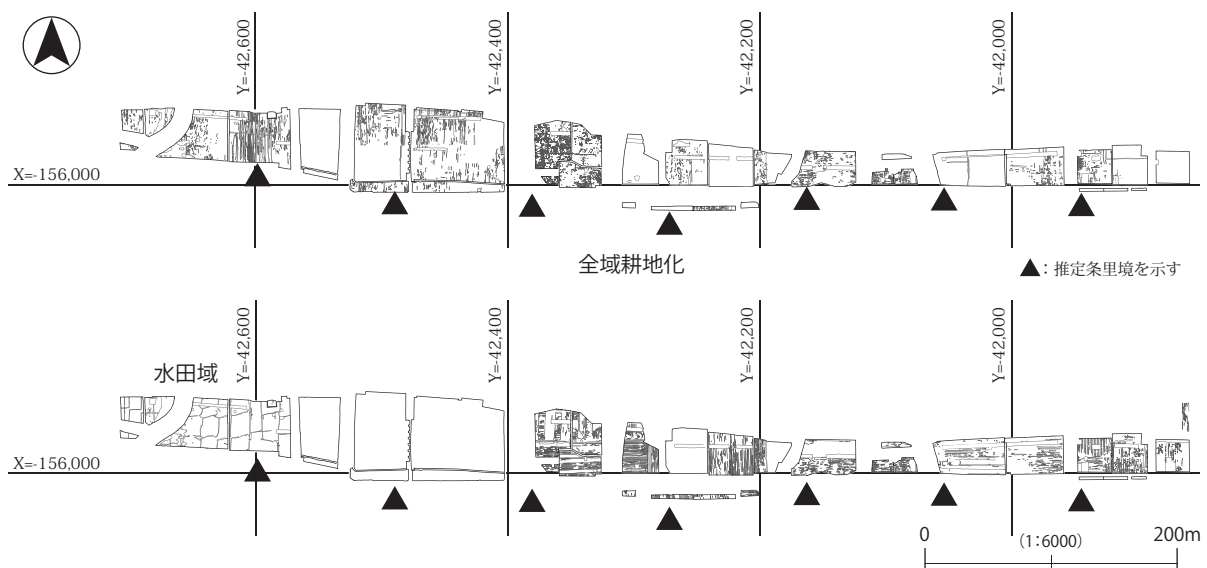
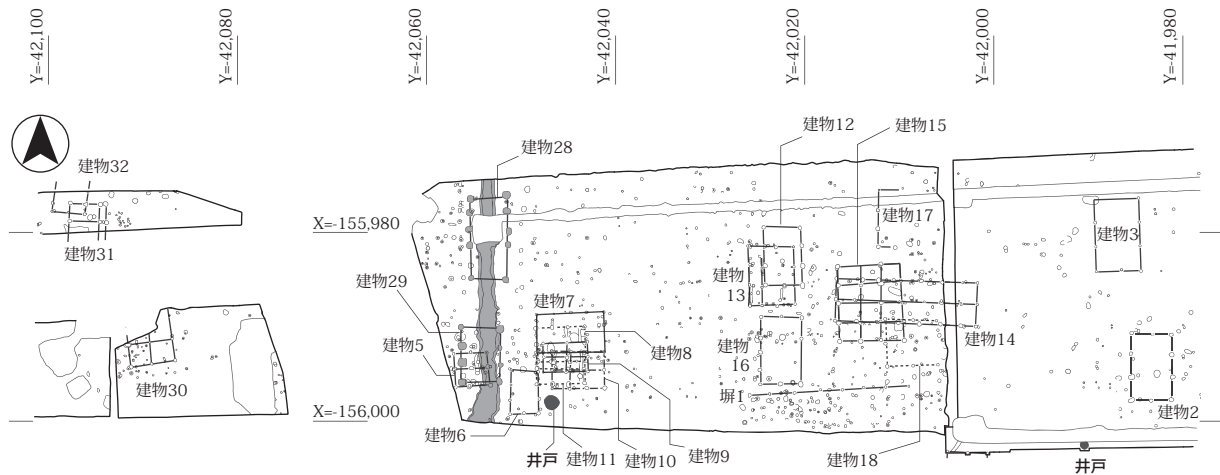
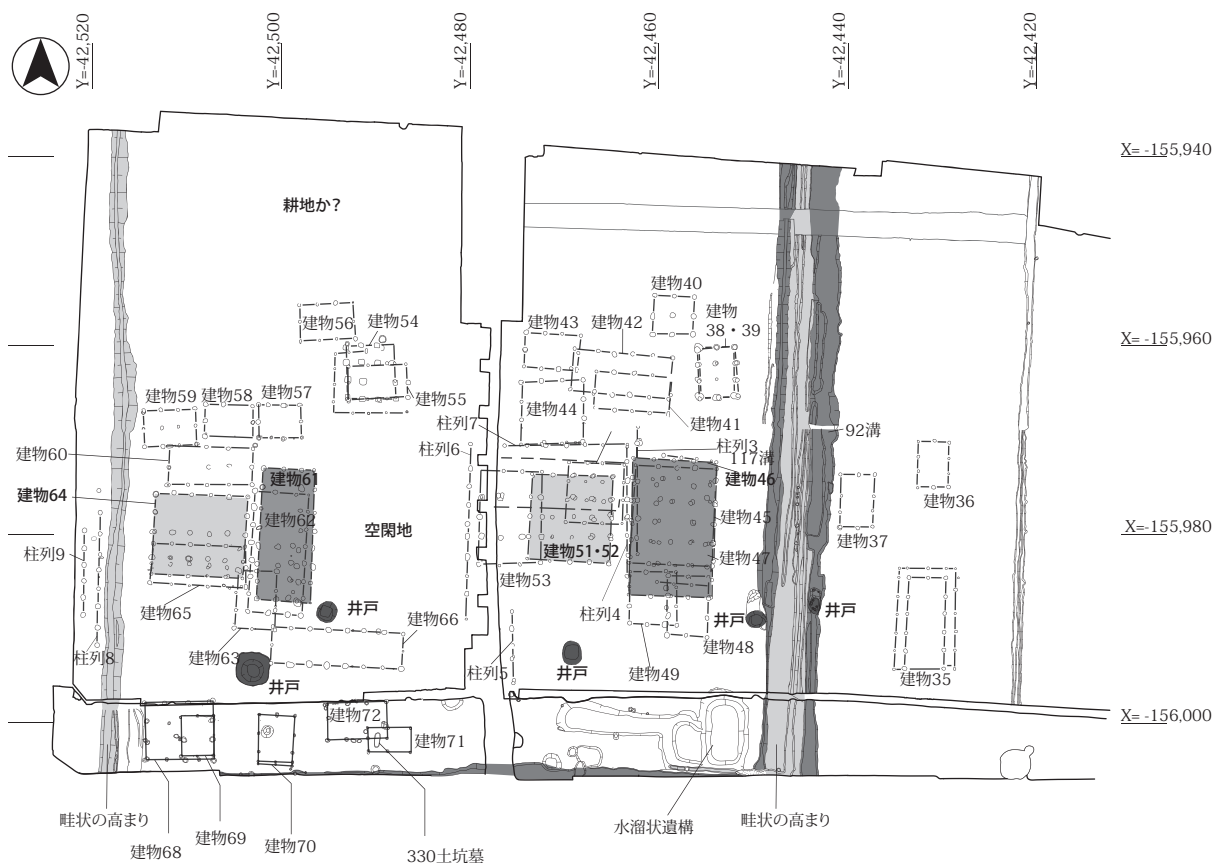


図 571 中～近世の池内遺跡（上段：池内第3面 下段：池内第1・2面）



東側居住域 (05-1-3・4・5区)

■ 下位遺構面検出遺構を示す。



西側居住域 (05-2-5区・08-1-2区)

*いずれの居住域も、構成を把握しやすくするため、明らかに居住域を構成する諸遺構を抽出して示している。

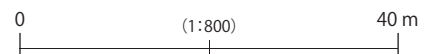
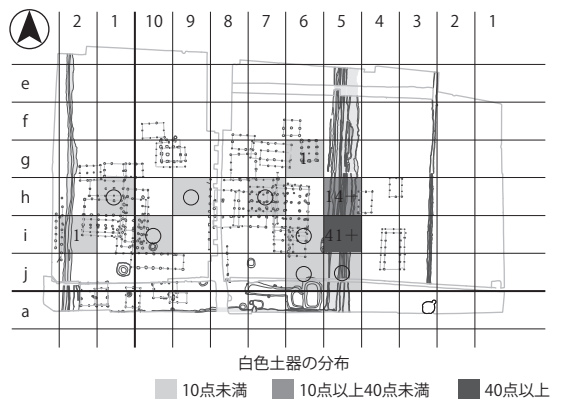
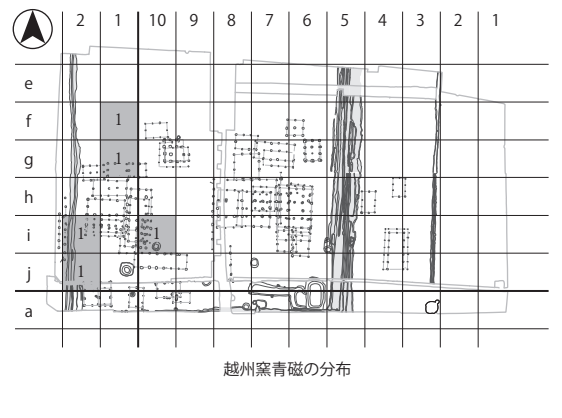
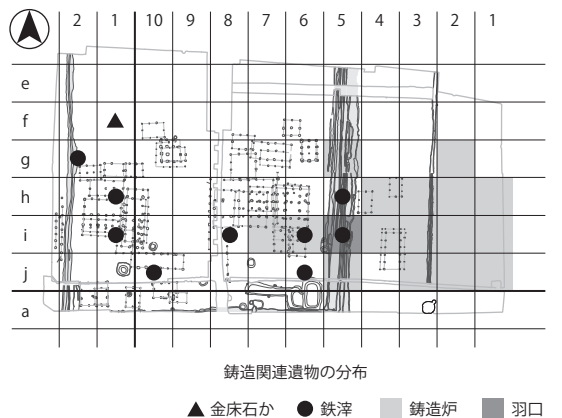
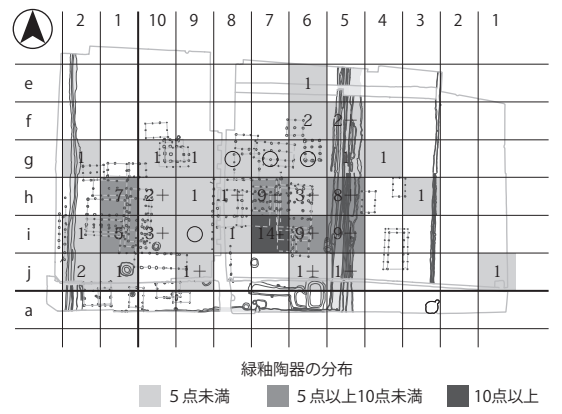
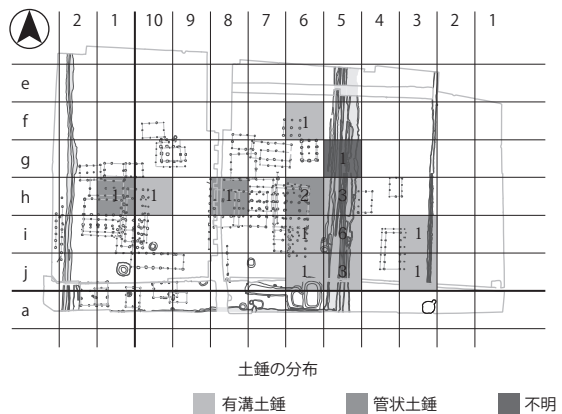
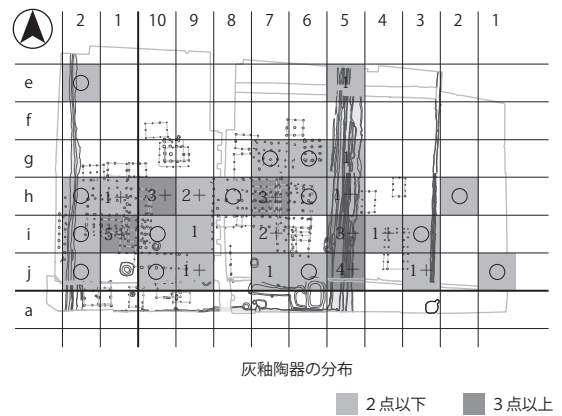
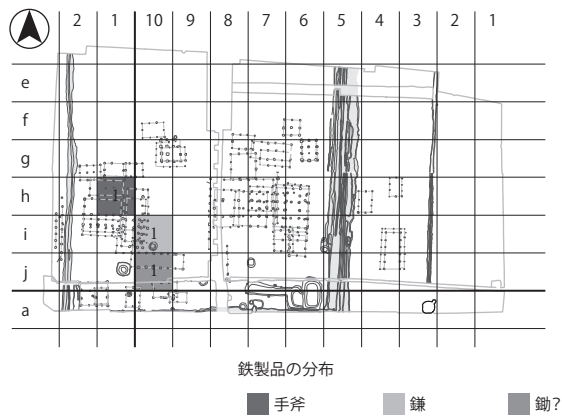


図 572 平安時代屋敷地の構成

表 14 平安時代掘立柱建物一覧表（アミフセは西側居住域を示す）

建物 番号	調査	調査区	遺構面	主軸方向		建物形態	桁行 (m)	梁間 (m)	面積 (㎡)	庇を含 む面積 (㎡)
2	05-1	3区	池内第4面	南北	N-1° -W	側柱建物3間×2間	7.00	4.26	29.82	—
3	05-1	3区	池内第4面	南北	N-2° -W	側柱建物3間×1間	7.75	4.75	36.81	—
4	05-1	3区	池内第4面	—	N-87° -W	全容不明 南側に続く	—	—	—	—
5	05-1	3区	池内第4面	南北	N-0.5° -E	総柱建物2間×2間	3.58	3.55	12.71	—
6	05-1	3区	池内第4面	南北	N-0° -E	側柱建物3間×2間（北側1間）	4.50	3.00	13.50	—
7	05-1	3区	池内第4面	東西	N-0° -E	側柱建物？4間×2間 （南半確認できず）	4.23	7.15	30.24	—
8	05-1	3区	池内第4面	東西	N-2° -W	側柱建物3間×2間	5.10	3.60	18.36	—
9	05-1	3区	池内第4面	南北	N-2° -W	総柱建物2間×2間	4.80	3.10	14.88	—
10	05-1	3区	池内第4面	東西	N-0° -E	側柱建物3間×2間 西側束柱？	5.50	3.90	21.45	—
11	05-1	3区	池内第4面	東西	N-1° -W	総柱建物3間×2間 東側束柱？	5.13	3.27	16.78	—
12	05-1	3区	池内第4面	南北	N-2° -W	側柱建物3間×2間（北側1間）	6.20	3.96	24.55	—
13	05-1	3区	池内第4面	南北	N-2° -W	側柱建物3間×3間？ 西側庇？	6.24	4.82	30.08	—
14	05-1	3区	池内第4面	東西	N-3° -E	側柱建物7間×2間（東西2棟）	15.00	4.60	69.00	—
15	05-1	3区	池内第4面	東西	N-3° -W	総柱建物3間×3間 北側1面庇	6.80	6.00	40.80	50.20
16	05-1	3区	池内第4面	南北	N-0° -E	側柱建物4間×2間（東側欠落）	7.10	4.27	30.32	—
17	05-1	3区	池内第4面	—	N-0° -E	全容不明 東側に続く	—	—	—	—
18	05-1	3区	池内第4面	東西	N-1.5° -W	側柱建物2間×2間（以上？）	5.40	5.00	27.00	—
28	05-1	3-2区	池内第5面	南北	N-0° -E	側柱建物4間×1間（中間欠く？）	8.50	4.00	34.00	—
29	05-1	3-2区	池内第5面	南北	N-0° -E	側柱建物3間×1間	5.80	4.00	23.20	—
30	05-1	4-1区	池内第4面	南北	N-8° -W	総柱建物2間以上×2間（北側に続く）	—	—	—	—
31	05-1	5-1区	池内第4面	南北	N-2° -E	側柱建物2間以上×1間 東側1面庇 （南に続く）	—	—	—	—
32	05-1	5-1区	池内第4面	南北	N-8° -E	側柱建物2間×2間以上 （全容不明 北側に続く）	—	—	—	—
35	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-2° -E	側柱建物5間×2間 3面庇	9.55	4.00	38.20	65.80
36	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-2° -E	側柱建物3間×2間	4.85	3.20	15.50	—
37	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-2° -E	側柱建物3間×2間	5.55	3.40	19.00	—
38	05-2	5-3区	池内第4面	南北	N-0° -E	側柱建物3間×2間	5.20	3.80	19.75	—
39	05-2	5-3区	池内第4面	南北	N-4° -W	側柱建物3間×2間 束柱	4.00	5.25	21.00	—
40	05-2	5-3区	池内第4面	南北	N-3° -E	総柱建物2間×2間	4.20	4.05	16.90	—
41	05-2	5-3区	池内第4面	東西	N-4° -E	総柱建物4間×2間	7.85	3.80	29.80	—
42	05-2	5-3区	池内第4面	東西	N-5° -E	側柱建物5間×2間	10.40	4.35	45.20	—
43	05-2	5-3区	池内第4面	東西	N-4° -E	側柱建物3間×2間	5.75	3.70	21.35	—
44	05-2	5-3・4区	池内第4面	南北	N-2° -W	側柱建物3間×3間	6.65	6.80	43.00	—
45	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-3° -E	側柱建物5間×2間 2面庇	10.30	3.80	39.10	89.60
46	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-2° -E	側柱建物7間×2間 2面庇	14.40	4.05	58.30	125.30
47	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-2° -E	側柱建物4間×3間 2面庇	8.95	5.20	46.50	69.40
48	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-1° -E	側柱建物3間×2間	6.20	4.30	26.70	—
49	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-0° -E	側柱建物3間×2間 1面庇	5.45	3.80	20.70	26.70
50	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-2.5° -E	総柱建物3間×3間	6.30	5.85	36.85	—
51	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-2.5° -E	総柱建物4間×3間	8.95	6.30	56.40	—
52	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-2° -W	総柱建物4間×3間	9.10	8.55	77.80	—
53	05-2	5-4区	池内第4面	南北	N-0° -E	側柱建物3間×2間 2面庇	6.30	4.20	26.50	54.80
54	05-2	5-1区	池内第4面	南北	N-3° -W	総柱建物3間×3間	6.20	5.30	32.85	—
55	05-2	5-1区	池内第4面	南北	N-4° -W	側柱建物2間×2間 3面庇	8.95	6.10	21.65	48.50
56	05-2	5-1区	池内第4面	東西	N-4° -W	側柱建物3間×2間	9.10	5.75	21.60	—
57	05-2	5-1区	池内第4面	東西	N-1° -W	側柱建物3間×2間	4.55	4.20	16.15	—
58	05-2	5-1区	池内第4面	東西	N-1° -E	側柱建物3間×2間	5.00	3.35	16.75	—
59	05-2	5-1・2区	池内第4面	東西	N-3° -W	総柱建物3間×2間	5.45	3.90	21.30	—
60	05-2	5-2区	池内第4面	東西	N-0° -E	側柱建物4間×2間 束柱	8.75	4.10	35.90	—
61	05-2	5-2区	池内第4面	南北	N-3° -E	側柱建物7間×2間 1面庇	13.95	4.40	61.40	81.60
62	05-2	5-2区	池内第4面	南北	N-4° -E	側柱建物7間×2間 1面庇	12.70	4.35	55.30	88.90
63	05-2	5-2区	池内第4面	南北	N-3° -E	側柱建物3間×2間	6.10	4.20	25.60	—
64	05-2	5-2区	池内第4面	東西	N-3° -E	側柱建物5間×3間 1面庇	9.70	6.75	65.50	82.45
65	05-2	5-2区	池内第4面	東西	N-3° -E	総柱建物5間×2間	9.60	4.20	40.30	—
66	05-2	5-2区	池内第4面	東西	N-2° -E	側柱建物7間×2間	15.30	3.75	57.40	—
67	05-2	5-2区	池内第5面	南北	N-1° -E	側柱建物2間×2間	4.10	4.10	16.81	—
68	08-1	2区	池内第4面	東西	N-89.5° -E	側柱建物3間×3間 束柱？	7.25	6.05	42.04	—
69	08-1	2区	池内第4面	南北	N-0° -E	総柱建物2間×2間	4.18	3.50	14.60	—
70	08-1	2区	池内第4面	南北	N-0.5° -E	側柱建物3間×2間 1面庇	4.96	3.70	18.35	19.24
71	08-1	2区	池内第4面	東西	W-0.7° -N	側柱建物2間×1間	4.60	2.50	11.50	—
72	08-1	2区	池内第4面	東西	E-0.2° -N	側柱建物3間×1間	6.28	3.75	23.55	—



* 掲載可能な程度の遺物について、計測を行った。

** 数値は破片点数を示す。分布傾向を把握するため、接合遺物についても、破片を1点として換算した。

*** 図中○は詳細な点数のカウントが出来なかったものを示す。数字右側に+を付したものは、計測点数にこれを付加したものとする。

0 (1:2000) 100m

図 573 屋敷地内特殊遺物の分布

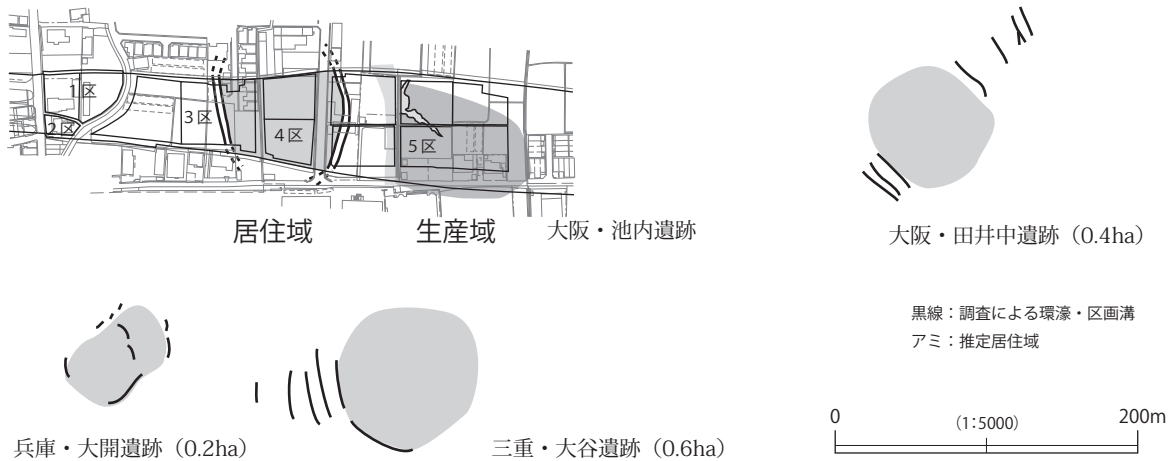


図 574 近隣検出弥生前期環濠集落との規模比較 (森井2001、平田・永田2007を基に作図)

模や出土遺物から、以後の耕作地開発に一定の役割を果たした在地領主層であることが想定できる。こうした問題を考えるにあたって、西側居住域と東側居住域の相互の関係は、当該期の集落形成のあり方を考える上で、極めて示唆に富む内容といえる。両者の間には、約 400 m の空間が広がっており、相互の建物群がどのような関係にあったかについては不明ながら、本文中でみてきたように、ほぼ時期を同じくして展開したであろうことが想定できる。こうした一定の距離を介して近接する同時期の集落がどのような関係にあるのかという点については、類例の増加と文献史学の成果も踏まえた総合的な検討が必要である。

なお、屋敷地内外で検出した東西南北に走る耕作溝については、帰属遺構面から、建物群に先行するものであることが判明している。このことから、耕地化以後の屋敷地の形成という過程が復元できる。

〔平安時代後期末～鎌倉時代〕(図 571)

池内第 4 面が相当する。分布の中心は 05-1-5 区にあり、その他の地点では、少数の土坑・小穴が散在する。5 区で 6 棟前後の掘立柱建物を確認しており、11 世紀に廃絶した居住域に後続する内容を有する。それに伴い幅の狭い耕作溝が多数認められ、周辺域の耕地化が顕著となる。

〔鎌倉時代以後〕(図 571)

池内第 3 面より上位の各遺構面が相当する。ほぼ全域で耕作溝を確認でき、耕作地としての景観が復元できる。05-2-3 区では池内第 3 c 層の水成層に覆われた水田畦畔が良好に遺存していた。

以上のように、池内遺跡の調査成果から、遺構・遺物の分布を整理し、遺跡の形成過程を概観した。今回の調査成果は、発掘調査件数が少なく、従来様相が明らかでなかった本地域において、多くの資料を蓄積することができたという点でも極めて意義深い内容であった。主要な成果に対して積み残した事柄も多いが、今後の検討課題としたい。 (正岡)

〔参考文献〕

- 積山洋 2009 「難波大道と難波京」『シンポジウム 畿内の都城と大道—難波大道の発掘は何を語るか—資料』(財)大阪府文化財協会 (財)大阪府文化財センター 大阪歴史博物館
 平田洋司 2006 「池内遺跡の調査成果」『大阪府埋蔵文化財研究会 (第53回) 資料』(財)大阪府文化財センター
 平田洋司・永田由香 2007 「大阪府松原市 池内遺跡」『考古学研究54-2』考古学研究会
 平田洋司 2007 「大阪府池内遺跡の弥生時代前期水田と環濠集落」『近畿弥生の会設立 10 周年記念大会 近畿の弥生時代は底を打ったか?—最古相を考える—発表要旨集』
 森井貞雄 2001 「近畿地方の環濠集落」『弥生時代の集落』大阪府立弥生文化博物館編 学生社
 若林邦彦 2008 「②集落と集団 2—近畿—」『弥生時代の考古学 8 集落からよむ弥生社会』同成社
 (財)大阪府文化財センター 2009 a 『三宅西遺跡』
 (財)大阪府文化財センター 2009 b 『大和川今池遺跡 I—難波大道の調査—』

付編 三宅西遺跡08－1・09－1 調査の成果

第1節 調査の経緯と経過

本調査は、本書で述べてきた大和川線の道路建設に伴って発生した、今井戸川付け替え工事に伴う発掘調査である。

今井戸川は工事着手前は国道309号線の西側を北上して西に曲折し、池内遺跡と三宅西遺跡を分かつ地点を北上していた河川である。この北上するラインは大和川線の建設計画、アンダーパスへ移行する地点を縦断しており、道路建設に大きな支障をきたしていた。そこで、その縦断位置を東側へセットバックすることで、これを回避することとしたものである。付け替え工事は、既存の開渠としての護岸壁を撤去し、代わりにコンクリートボックスを据え付ける計画となっており、これに伴って遺跡の破壊が免れない範囲については、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、(財)大阪府文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

なお、これらの調査については、個々の対象面積が狭く、本体工事の工程と密接に関連することから発掘調査に伴う工事として当センターからの発注形態は採らず、本体工事業者が担当する方法を採っており、航空測量のみセンターからの発注業務として委託し、発掘調査を実施した。

この工事では大きく4箇所調査を実施する必要が生じたが、本編で報告するのは、関連事業のうち、南北方向の付け替え部分となる三宅西08－1調査(以後08－1調査と略)(図575)と、池内遺跡と三宅西遺跡の隣接地点の両側護岸壁部分及びコンクリートボックス設置部分を対象とする池内09－1調査・三宅西09－1調査(以後、両者を総称する際は単純に09－1調査と略)(図576)の2箇所である。

それぞれの事業に要した調査期間は、三宅西08－1調査が平成20年12月17日～1月8日・平成21年3月18日～5月19日、09－1調査が平成21年5月19日～7月7日である。

以上の発掘調査では、コンテナに換算して約20箱に及ぶ遺物が出土し、それぞれの発掘調査が終了した段階で南部調査事務所(平成21年度からは本部事務所内南部調査事務所)にて平成21年12月まで報告書作成に向けた出土遺物の整理作業を行い、本書の刊行を以って事業契約を完了した。

第2節 三宅西08－1 調査の成果

1. 基本層序(図577・578 図版173)

08－1調査は既刊の三宅西遺跡(大文セ2009)の15・16・17区の西端に位置する調査区(図575)で、本体工事の工程に合わせて調査区を5区に分割して調査を実施した。このうち、1・2区は今井戸川の付け替え工事に先行する水道管の敷設工事を調査原因とする。なお、08－1－4区は全面に深い攪乱が及んでおり、調査対象となる地層が残存していなかった。したがって範囲は図示したが、その詳細は図示していない。

現地表面の標高はT.P.+10mを測る。調査は現代耕作土層である第1層までをバックホーによる機械掘削の対象とし、それ以下の地層については、人力によって1層ずつこれを除去し、遺構面の検出に努めた。遺構面については、これまでに調査区周辺で行われている既往の調査成果に従い、第1面(第2層下面〔第7a層上面〕)、第2面(第7e層下面〔第8層上面〕)、第3面(第9層上面〔第8層下面〕)の合計3面の遺構面について平面調査を実施した。

以下に08-1 調査における堆積地層の概要を述べる。地層の確認については、降雨の影響を受け、上半の大部分が崩落してしまったものの、調査区の西壁面のほか、2 区の南壁断面を用いて記録を行い、図577・578にこれを掲げた。なお、層準の呼称については、先述した既刊の調査成果に準じている。このため、本調査区では必ずしもすべての地層が確認できるわけではない点を断っておく。なお、各地層の形成時期についても、概ねこの成果に準ずるものであったため、これを援用している。

〔第1層〕

現代耕作土である。図示は成し得なかったが、層厚は約0.15mを測る。

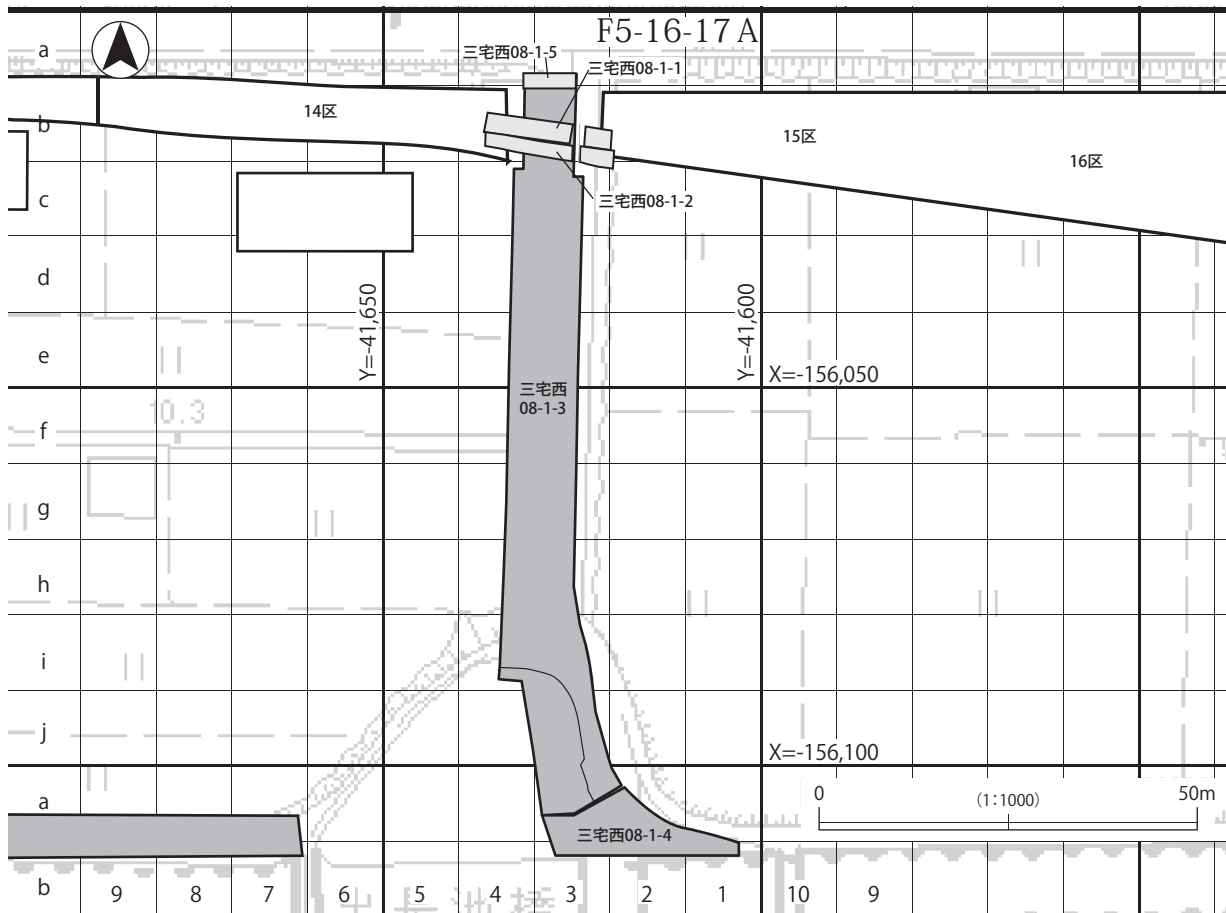


図575 三宅西遺跡08-1 遺物取り上げ区画

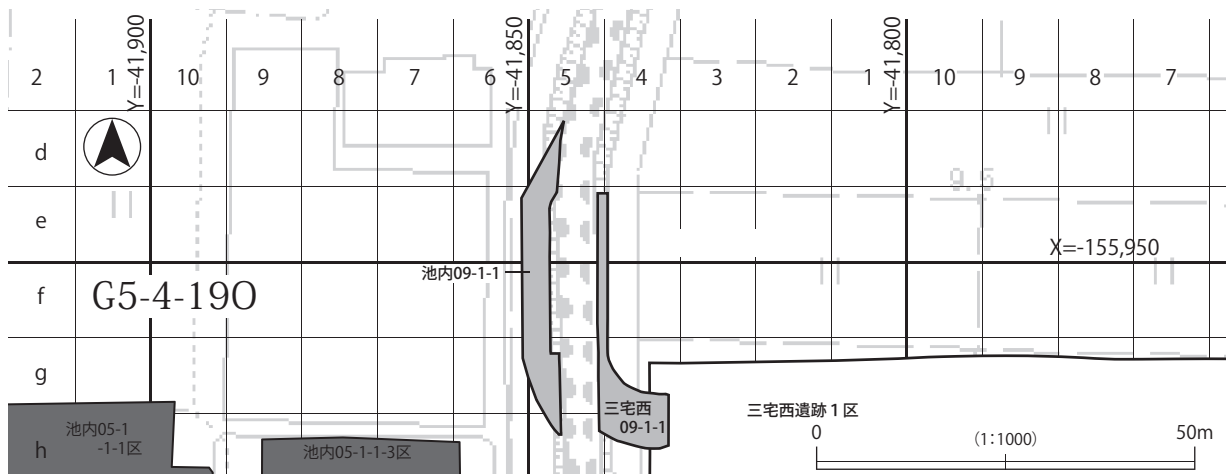


図576 池内遺跡09-1・三宅西遺跡09-1 遺物取り上げ区画

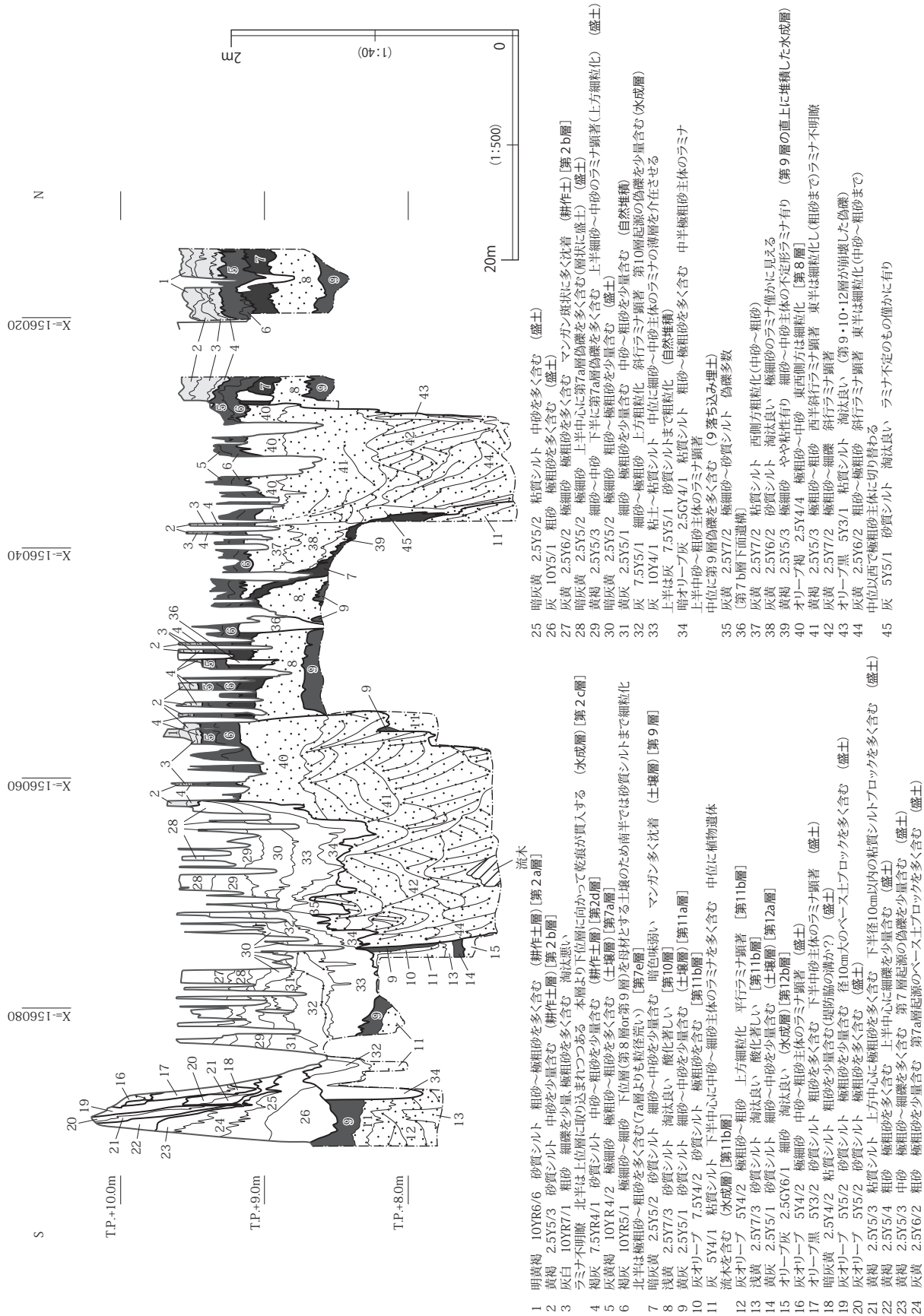
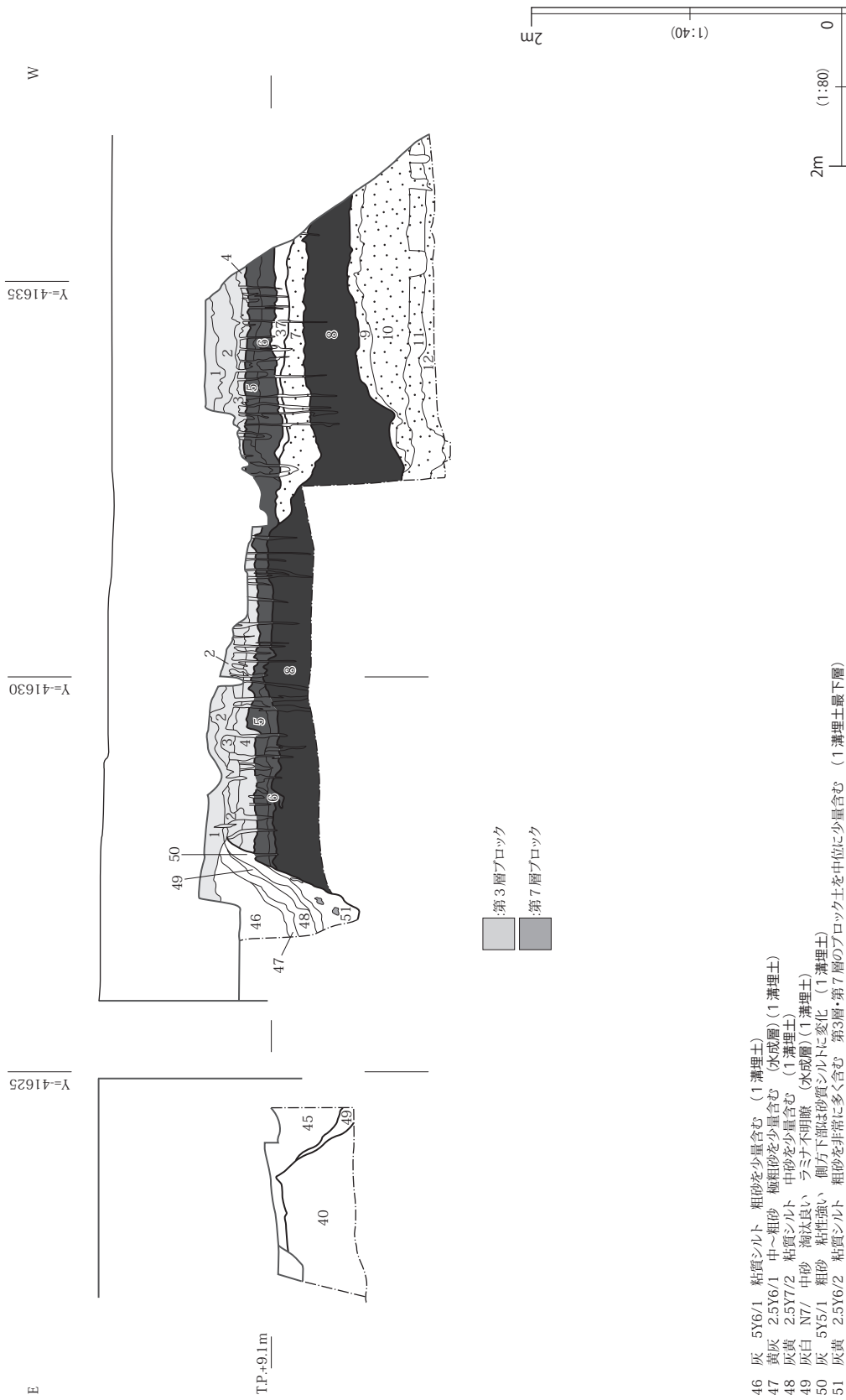


図577 西壁 断面図



- 46 灰 5Y6/1 粘質シルト 粗砂を少量含む (1 溝埋土)
- 47 黄灰 2.5Y6/1 中〜粗砂 極粗砂を少量含む (水成層) (1 溝埋土)
- 48 灰黄 2.5Y7/2 粘質シルト 中砂を少量含む (1 溝埋土)
- 49 灰白 N7/ 中砂 淘洗良い ラミナ不明瞭 (水成層) (1 溝埋土)
- 50 灰 5Y5/1 粗砂 粘性強い 側方下部は砂質シルトに変化 (1 溝埋土)
- 51 灰黄 2.5Y6/2 粘質シルト 粗砂を非常に多く含む 第3層・第7層のブロック土を中位に少量含む (1 溝埋土最下層)

図578 南壁 断面図

〔第2層〕

近世の耕作土層である。黄褐色系の中砂～粗砂を主体とし、淘汰は悪い。層厚は0.3 mを測る。大きく4層程度に細分できるが、調査時には一括して掘削した。中間に粗砂を主体とする水成層が介在する。上部を中心に近世陶磁器を含む。本層準を上端として縦位に延びる生痕が多数認められる。

〔第3層〕

中世～近世の耕作土層と位置づけられる。部分的にしか残存しておらず、図上では表現できていない。

〔第4層〕

周辺の成果から、中世の耕作土層と位置づけられるが、本調査区では確認できなかった。

〔第5層〕

周辺の成果から、中世の水成層と位置づけられるが、本調査区では確認できなかった。

〔第6層〕

周辺の成果から、平安時代の水成層と位置づけられるが、本調査区では確認できなかった。

〔第7層〕

第7 a層と第7 e層の2層に大別できる。

第7 a層は弥生時代後期～平安時代にかけて形成された土壌層である。灰黄褐色の極細砂を主体とし、淘汰は悪い。層厚約0.1 mを測る。

第7 e層は弥生時代前期～後期にかけて形成された土壌層である。第8層を母材とするため、地点によって粒径は異なるが、概ね褐灰色の極細砂～細砂を主体とする。調査区南半では細粒化、北半では粗粒化している。層厚約0.1 mを測る。

〔第8層〕 縄文時代後期以後に堆積した水成層である。後述する46流路を充填する水成層も本層と位置づけることができるが、46流路から外れた箇所では、北半に層厚0.05m前後認められたものの、南半部では第7 e層によって取り込まれており、ほとんど残存していなかった。

〔第9層〕 縄文時代後期に形成された土壌層である。暗色味は弱く、暗灰黄色の砂質シルトを主体とし、淘汰は良い。層厚0.15mを測る。

〔第10層〕 縄文時代中期に堆積した水成層である。浅黄色の砂質シルトを主体とする淘汰の良い水成層で、層厚約0.3 mを測る。

〔第11層〕 第11a層と第11b層の2層に大別できる。

第11 a層は縄文時代前期以後の土壌層である。黄灰色の砂質シルトを主体とし、層厚約0.2mを測る。

第11 b層は縄文時代前期の水成層である。

〔第12層〕 第12 a層と第12 b層の2層に大別できる。

第12 a層は土壌層である。後期旧石器時代～縄文時代草創期に形成されたと考えられる。

第12 b層は水成層である。後期旧石器時代と考えられる。

2. 第1面(第2層下面) (図579 図版174)

第2層の耕作土を除去した遺構面を第1面として調査した。遺構面の標高は相対的に南が高く、北が低い。耕作土の下面遺構面であることを反映し、古墳時代前期～中世後期にかけての複数時期の遺構を検出した。主な検出遺構としては、水路・溝・井戸・土坑・小穴がある。

〔出長池〕 (図577・579)

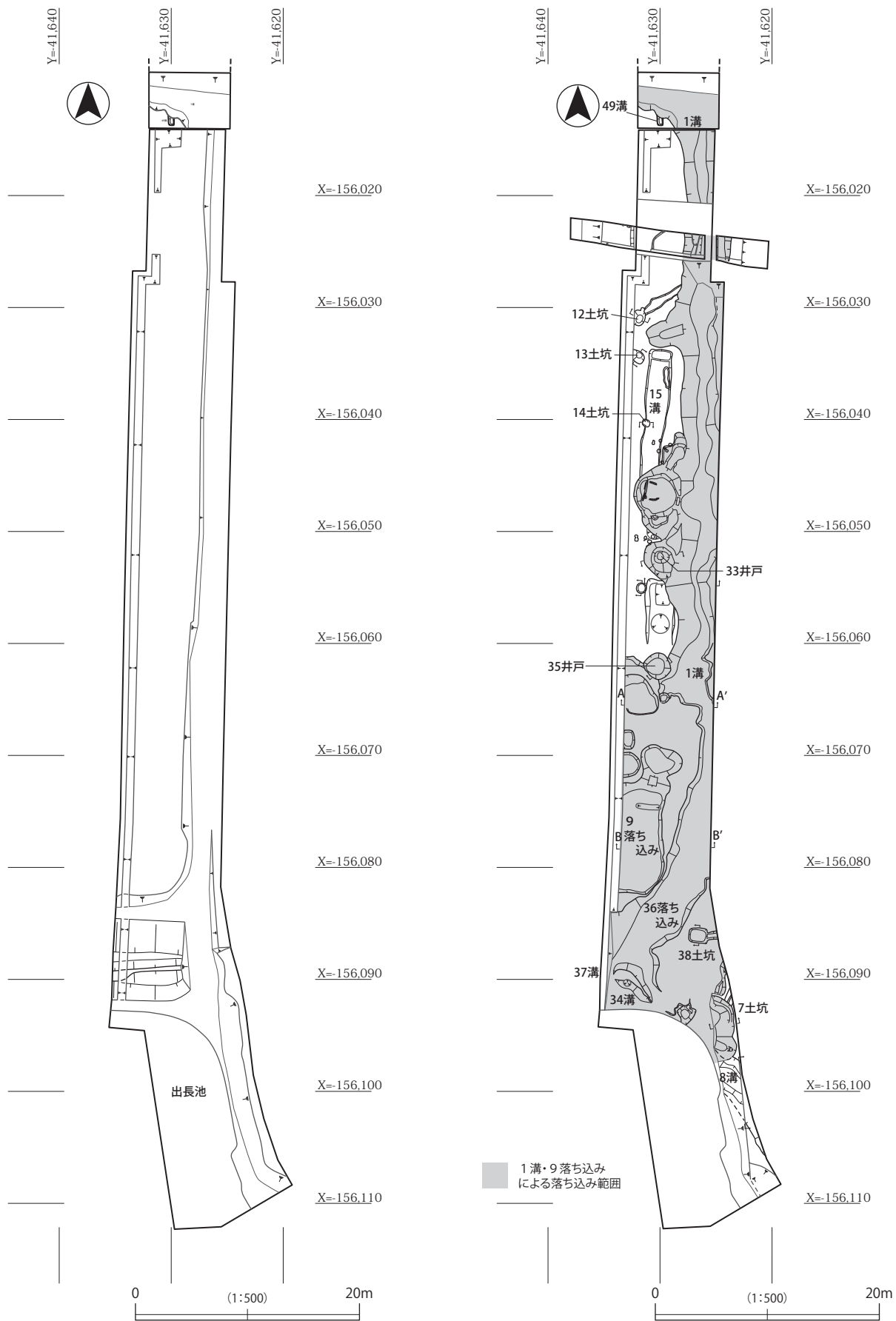


図579 第1面 平面図

第1面の成果を述べる前に、第1層の直下で検出した出長池について記述しておく。出長池は、調査区の南端に存在していた池であり、平成3年に区画整備事業に伴って埋め戻しが図られ、その一部は今井戸川として利用されていた経緯を持つ溜池である。池の起源は、近世段階の字図にはその姿が確認できることから、少なくとも近世には存在したと考えられ、その後は、後述する南北方向の1溝の上層部分と有機的に関連しつつ、近現代まで存在していたことが明らかとなっている。今回の調査でも、盛土及び埋め戻し土を機械掘削によって除去した際に、調査区南西端においてその存在を確認した。確認した堤防は、盛土内に含まれる遺物を検出することができれば、池の成立年代を知る手掛かりになると考え、盛土以下を人力掘削対象として調査を行った。

堤防は、後述する中世後期に形成された池状の落ち込み埋土の直上に形成されており、直径0.15～0.25m程度の各地層のブロック土を起源とする盛土によって構成されていた。盛土は、堤防表法面側から順に盛り上げる構造をとり、単位は大きく3層程度に分けることができる。堤防の規模は、根置の幅7.2m、天端の幅2.6m、高さ1.65mを測る。法面の傾斜は、堤防表法が約45°とやや急で、一方の堤防裏法は約15°と緩やかである。なお、堤防裏面には南北方向の近代以後の水路と関連する可能性のある攪乱が東西方向に入っていた。

盛土内からは遺物が出土せず、池の築造時期を直接的に窺い知る資料は得られなかった。しかしながら堤の盛土は、後述する9落ち込みの埋土の下位層準の上に盛られており、9落ち込みの包含遺物から14～15世紀以降に帰属すると考えることができる。

〔1溝・9落ち込み〕(図580 図版175・182)

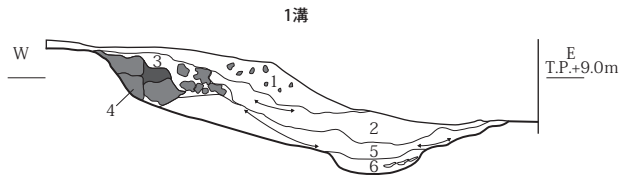
調査区の東半部及び南半部で検出した複数の溝・落ち込みから構成されている遺構である。便宜上、それぞれに別々の遺構番号を付与して調査を行ったが、実際は重複関係にもないことから、ほぼ一連の遺構として捉えることができる。この遺構は、大きくは出長池から北側へ直線的に延び、調査区の北端で西側へ曲折する1溝・36落ち込みと、 $X = -156,062\text{m}$ 付近でこれに接続する9落ち込みの2者から構成され、この大きな遺構内に38土坑のようないくつかの遺構を含んでいる。以後、本遺構の記述を進めるにあたり、部位を指定する場合には、1溝と9落ち込みを用いて代表させることとし、関連する遺構については、後述することとする。

遺構の規模は、調査区が南北方向に細長いこともあり全容を把握できなかった部分が多い。1溝は、幅4m、検出面からの深さ1.5～1.75mを測る。9落ち込みは、全長31.5m以上を測り、検出面からの最大深度1.6mを測る。

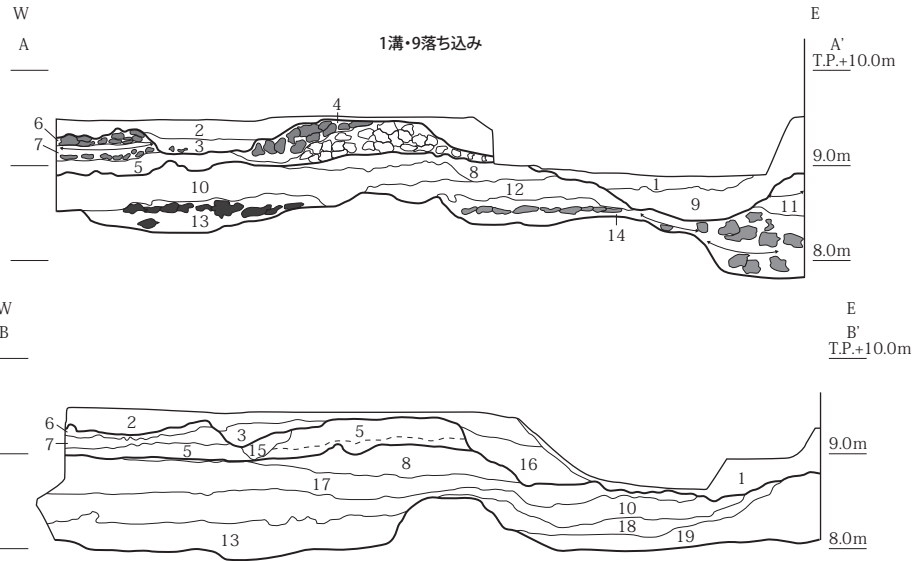
1溝と9落ち込みが重複する地点では、これを横断する地層断面確認用のアゼを設け(図580)、その把握に努めたが、先述したように両者に重複関係は認められなかった。断面観察からは、1溝・9落ち込みともにほぼ近似したブロック土を薄層状に含む水成層によって充填(13・14・18・19層)され、その後、西側は盛土によって嵩上げ(4～8・10・12・17層)が施され、耕作域としての利用がなされる(2・3・15層)とともに、1溝の上層部分の形成(1・9・11層)という過程が想定できる。

9落ち込みから1溝が分岐する地点は、現存する地割に概ね合致することから、調査区の北端を東西方向に通る道路を基準とすると、概ね半町程度の位置に掘削された落ち込みと捉えることができる。第2層による削平の影響を受けたことに起因するためか、堤等の構造物を確認できておらず、確証は得られていないが、その位置関係から、出長池の前身的な役割を果たしていた可能性も想定できる。

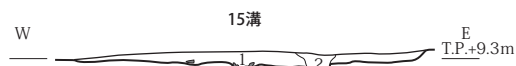
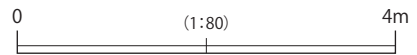
遺物は、1溝・36落ち込み及び9落ち込み下層を中心に出土した。2894～2905は1溝から、2906は9



- 1 灰黄褐 10YR6/2 中砂～細砂 粗砂～極粗砂を多く含む 第3・第7a層の偽礫を多く含む (近世陶磁出土)〔第2層系埋土〕〔上層〕
- 2 灰オリーブ 5Y4/2 粘質シルト 粗砂を多く含む 層中半に部分的に極粗砂～細礫を含む 肩部付近では上半に細砂～中砂のラミナ有り(近世陶磁器出土)〔上層〕
- 3 灰黄 2.5Y6/2 極細砂 粗砂を多く含む 肩部付近は極粗砂～細礫の粗粒堆積物を多く含む 第7a・第8層偽礫を多く含む〔上層〕
- 4 黒 2.5Y2/1 細砂 粗砂～中砂を多く含む 大半が第7a・第7b層偽礫によって形成される〔下層〕
- 5 暗灰黄 2.5Y4/2 中砂～粗砂 層中半は極粗砂～細礫まで粗粒化 側方ラミナ顕著 東肩部周辺は部分的に砂質シルトまで細粒化〔下層〕
- 6 灰オリーブ 5Y6/2 中砂～粗砂 上方粗粒化(細礫まで) 中に砂質シルトの偽礫が層理状に並ぶ(須恵器片出土)〔下層〕



- 1 灰 7.5Y4/1 粘質シルト 細礫を少量含む(1溝最上層)〔最上層〕
- 2 灰黄 2.5Y6/2 極細砂 極粗砂を多く含む マンガン斑状に多く沈着〔耕作土〕〔第2層〕
- 3 暗灰黄 2.5Y5/2 極細砂 粗砂を少量含む 第7a層の偽礫を少量含む マンガン斑状に沈着〔耕作溝〕
- 4 灰 5Y4/1 粘質シルト 粗砂を少量含む 起源不明偽礫を多く含む 底辺中砂～細砂主体のラミナ顕著 マンガン斑状に沈着〔盛土〕
- 5 暗灰黄 2.5Y5/2 極細砂 粗砂～極粗砂を少量含む〔盛土〕
- 6 暗灰黄 2.5Y5/2 極細砂 上半中心に第7a層偽礫を多く含む〔盛土〕
- 7 黄褐 2.5Y5/3 細砂～中砂 下半に第7a層偽礫を多く含む 上半細砂～中砂のラミナ顕著 上方粗粒化〔盛土〕
- 8 黄灰 2.5Y5/1 細砂 極粗砂を少量含む 中砂～粗砂を少量含む〔水成層〕
- 9 灰 7.5Y4/1 粘質シルト 極粗砂を少量含む(1溝上層)
- 10 灰 10Y4/1 粘土～粘質シルト 中に細砂～中砂主体のラミナの薄層を介在させる 上半は灰 7.5Y5/1 砂質シルトまで粗粒化〔水成層〕
- 11 暗灰黄 2.5Y4/2 砂質シルト 中砂を少量含む 上方粗粒化(中砂まで)〔1溝下層〕
- 12 灰 5Y5/1 砂質シルト 極粗砂を少量含む 最下部粗砂～中砂主体のラミナ顕著 上半中砂～細砂のラミナ顕著〔水成層〕
- 13 暗オリーブ灰 2.5GY4/1 粘質シルト 粗砂～極粗砂を多く含む ラミナ顕著 上方粗粒化 中に第9層の偽礫を多く含む(9落ち込み埋土)
- 14 灰オリーブ 5Y5/3 粗砂～極粗砂 中に灰黄 2.5Y6/2 粘質シルトの偽礫を多く含む 細礫のラミナ顕著(1溝下層)
- 15 黄灰 2.5Y6/1 極細砂 粗砂～中砂を多く含む(5層の動いたものか?)〔盛土〕
- 16 灰 5Y6/1 極細砂～砂質シルト 側方5・8層起源の偽礫を多く含む(盛土の崩壊?)
- 17 灰 7.5Y5/1 細砂～極粗砂 上方粗粒化 斜行ラミナ顕著 第10b層起源の偽礫を少量含む〔水成層〕
- 18 暗灰黄 2.5Y4/2 極粗砂～粗砂 細礫を多く含む 西側方は細粒化し、中砂～粗砂のラミナ顕著 東側方は細粒の細礫～中粒の細礫のラミナ状(1溝下層)
- 19 黒褐 2.5Y3/2 極粗砂～細礫 西側方は中砂～粗砂主体の斜行ラミナ顕著 東側方粗粒化 細粒の細礫～中粒の細礫の斜行ラミナ顕著(1溝下層)



- 1 黄褐 2.5Y5/3 細砂 極粗砂を多く含む
最下部に第7b層起源の偽礫を少量含む〔第2層系埋土〕
- 2 灰黄 2.5Y6/2 細砂～中砂〔上面からの耕作溝埋土〕

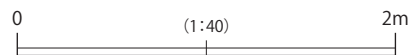
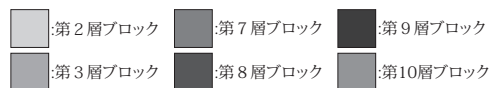


図580 第1面 1溝 断面図

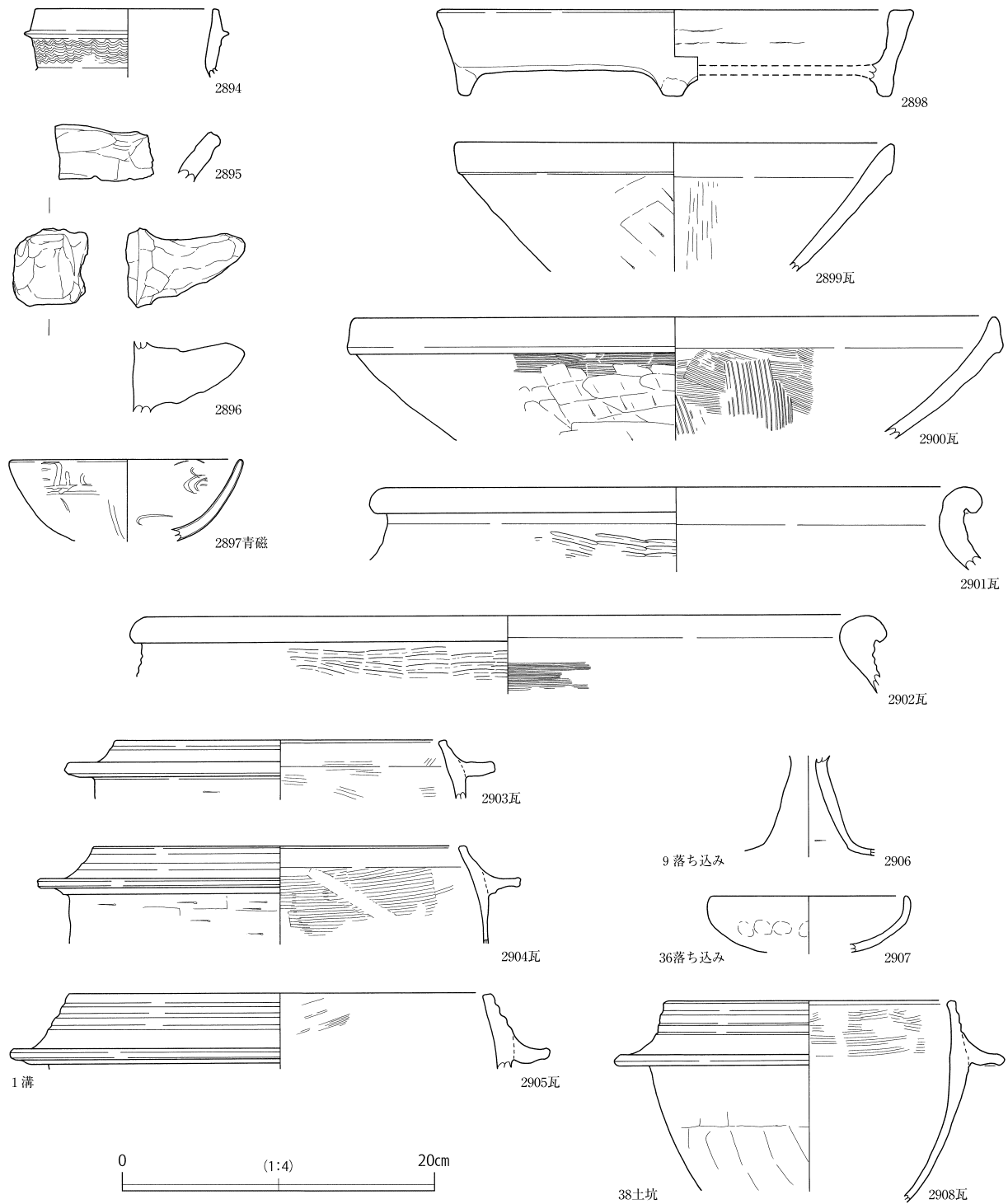


図581 3区 第1面 1溝 出土遺物

落ち込みから、2907は1溝と同じ36落ち込みから、2908は38土坑からそれぞれ出土した。

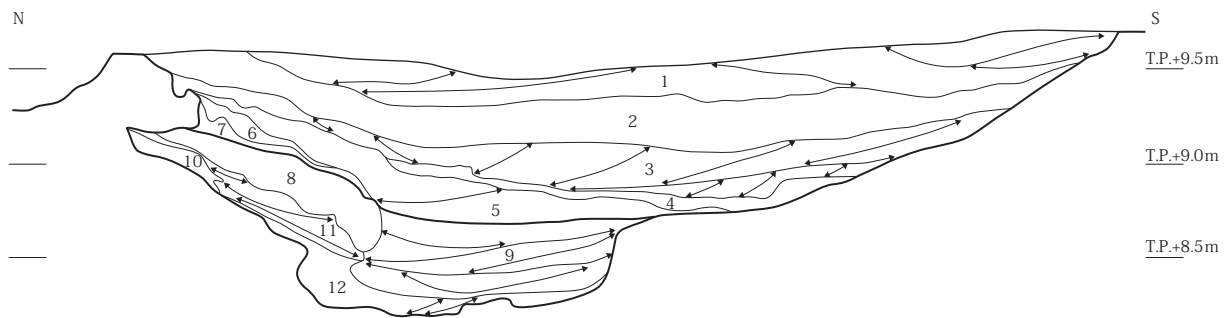
2894～2896・2906・2907は混入資料とみられる。2894は須恵器高杯。下半を欠くため全容は明らかでないが、口縁部直下に一条の突帯を巡らし、その下部に波状文を施す。TK216～208の所産か。2895は鉢。2896は土師器把手。古墳時代中期の所産。2897は龍泉窯系青磁Ⅰ類碗。内面に劃花文を施す。12世紀中葉の所産。2898は土師質の焙烙。2899・2900は瓦質摺鉢。口縁部形態から14～15世紀の所産と考えられる。2901・2902は瓦質甕。口縁部の形態から14～15世紀の所産と考えられる。2903～2905は瓦質羽釜。14～15世紀の所産。2906は土師器高杯。2907は土師器高杯の杯部。いずれも古墳時代中期の所産か。

〔15溝〕 (図580)

調査区の西側に位置する南北方向の溝である。溝の規模は幅 2.2 m 前後、検出面からの深さ 0.08 m を測る。埋土は黄褐色の淘汰の悪い細砂を主体とする第 2 層に近似したもので、第 2 層の下面遺構と捉えられる。位置関係と埋土の様相から、9 落ち込みの上部で確認した耕作溝と同種のものであろう。

〔8溝〕 (図582～585 図版173・183・184)

調査区南東端で検出した南東―北西方向の溝である。大半を出長池による攪乱を受けており、部分的にしか検出し得なかった。1 溝・9 落ち込みによる攪乱の影響により埋土もほとんど遺存しておらず、遺物も出土しなかったため、確証は得られていないが、34 溝も同じ溝と考えることができ、南東―北西方向に直線的に延びる遺構であったと考えられる。溝の規模は幅 3.75 m 前後、検出面からの深さ 1.35 m を測る。溝の埋土は大きく上層(1～7層)、下層(8～12)の 2 層に分けることができる。上層・下層ともに、粒径の粗い水成層で構成され、トラフ型の斜行ラミナが顕著に認められる。



- 1 浅黄 2.5Y7/4 粗砂～極粗砂 細礫を少量含む 斜行ラミナ顕著 南側方は細粒化し、中砂～粗砂が主となる 酸化著しい(上層)
- 2 浅黄 2.5Y7/3 粗砂～極粗砂 細礫を多く含む 斜行ラミナ顕著 側方は共に細粒化 細砂～中砂が主となる 酸化著しい 3層との層界に土師器を含む(上層)
- 3 灰黄 2.5Y6/2 極粗砂～細礫 側方～下部は細粒化 細砂～中砂主体の薄層が部分的に遺存する 土師器片を少量含む 斜行ラミナ顕著(上層)
- 4 黒褐 2.5Y3/1 極細砂 粗砂～極粗砂を少量含む 淘汰悪い(上層)
- 5 にぶい黄 2.5Y6/3 粗砂 極粗砂を多く含む 側方に第10b層起源の偽礫を少量含む 土師器を多く含む 層中に 黒褐 2.5Y3/1 極細砂の薄層を挟む(上層)
- 6 黄褐 2.5Y5/3 中砂～粗砂 極粗砂を少量含む(上層)
- 7 暗灰黄 2.5Y4/2 極細砂 粗砂～極粗砂を多く含む 側方細粒化(上層)[第7b層]
- 8 黒 2.5Y2/1 砂質シルト 極粗砂を含む 淘汰悪い(下層)
- 9 黄褐 2.5Y5/3 粗砂～中砂 上方粗粒化(極粗砂まで) 斜行ラミナ顕著(下層)
- 10 黒褐 2.5Y3/1 砂質シルト 極粗砂を多く含む(下層)
- 11 灰 N4/0 砂質シルト 中砂～粗砂のラミナが上方中心に介入 下半中心に細砂主体のラミナ有り(下層)
- 12 オリーブ黒 5Y3/1 砂質シルト 極粗砂を多く含む 南方(溝底)付近は極粗砂～粗砂主体の斜行ラミナ有り(下層)

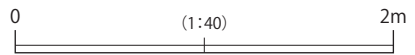


図582 3区 第1面 8溝 断面図



図583 3区 第1面 8溝 遺物出土状況図

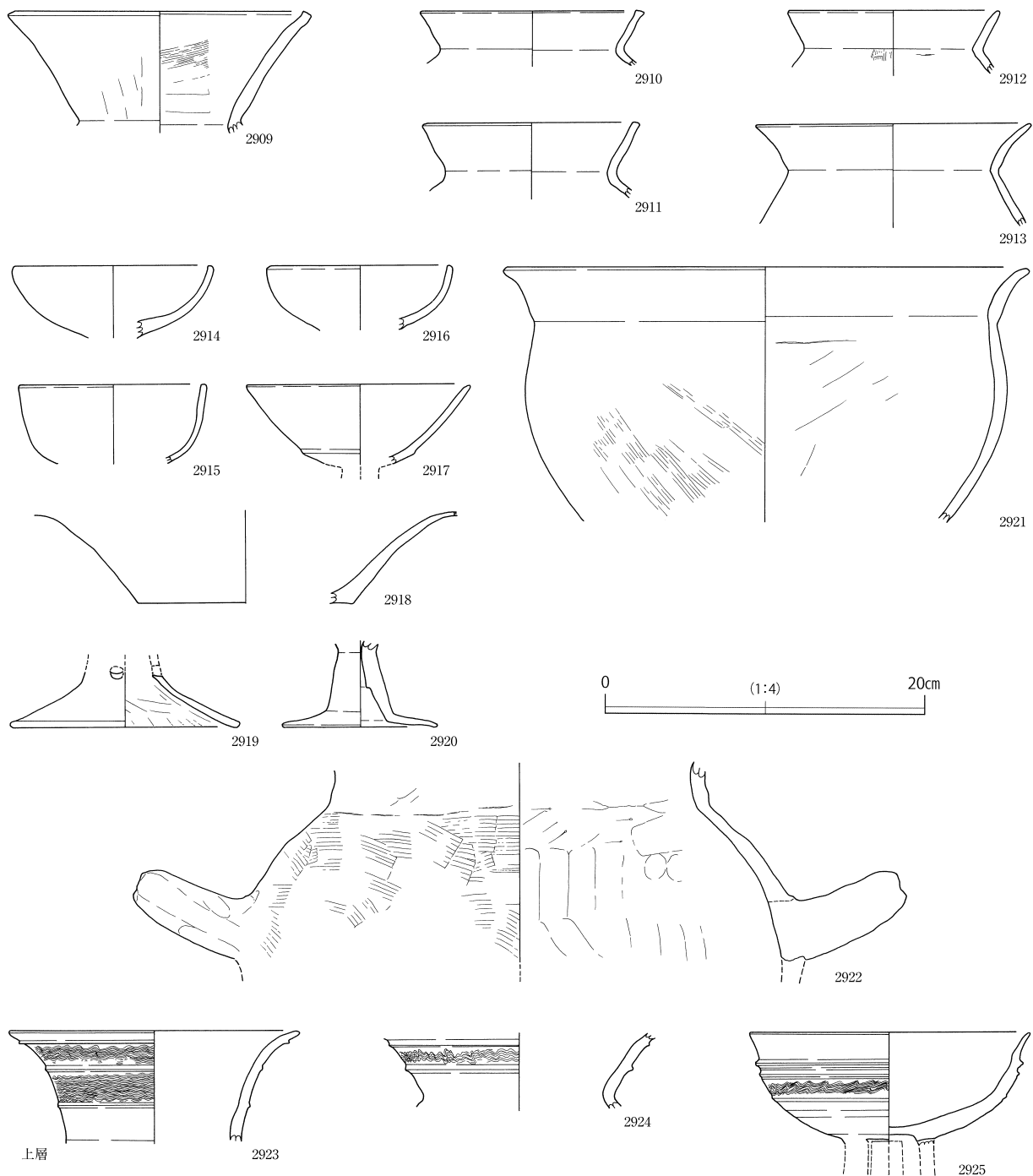


図584 3区 第1面 8溝 出土遺物(1)

遺物は上層・下層ともに一定量が出土しており、図 583 には下層中からの出土状況を掲げた。検出状況からは、一定まとめて投棄された状況が看取される。出土した遺物のうち、図 584 には上層から出土した遺物、図 585 には下層から出土した遺物を図示した。

上層出土遺物のうち、2909～2922は土師器、2923～2925は須恵器である。2909は広口壺。2910～2913は甕。2914～2920は高杯。2921は鉢。2922は把手付埴。2922の把手は挿入付加法による結合方法をとっている。2923・2924は甕。2925は無蓋高杯である。いずれもTK216～208型式の所産か。

下層出土遺物はすべて土師器である。2926～2928は小型丸底壺。口縁部の発達が著しく、外面には横位のヘラミガキを施す。2929は広口壺の口縁部で、口縁部には3条の沈線の上に2組1対と考えられる

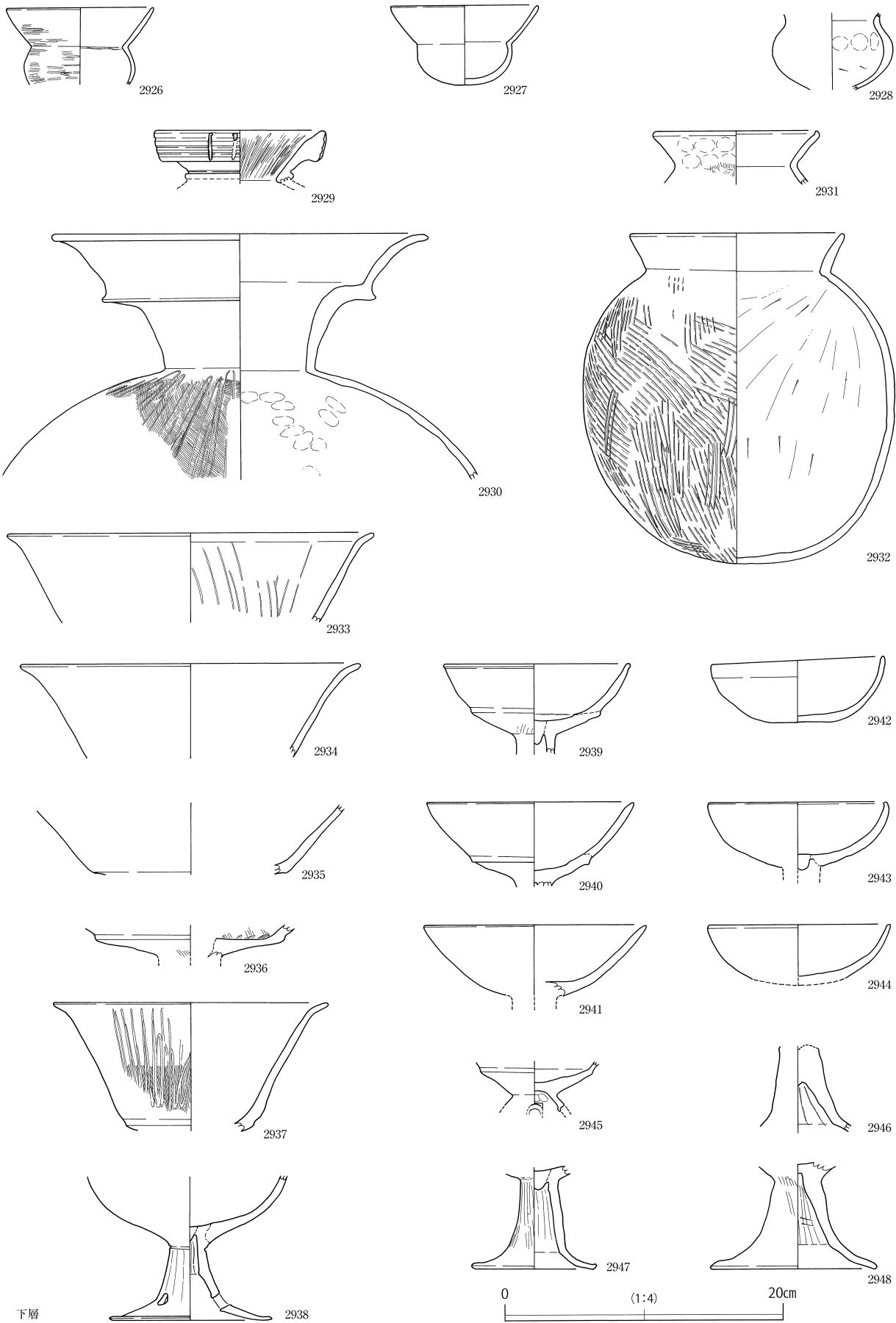


图585 3区 第1面 8沟 出土遗物(2)

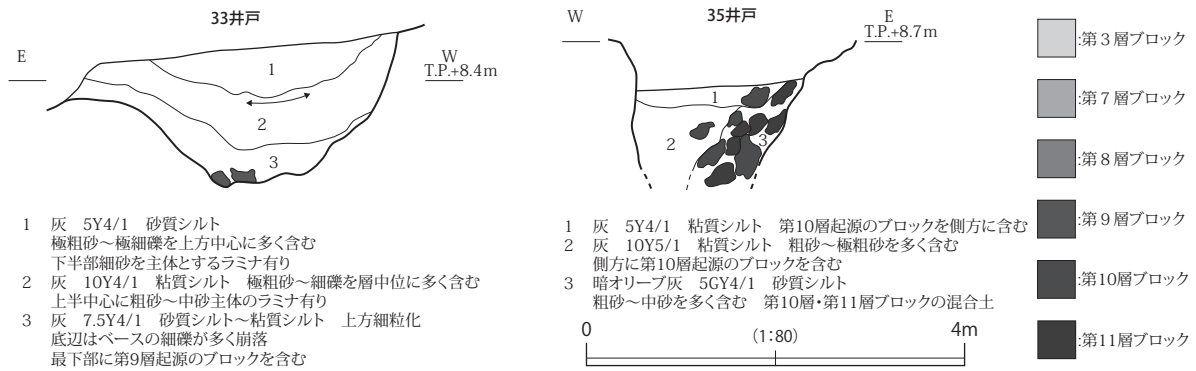


図586 3区 第1面 各遺構 断面図(1)

縦位の浮文を付す。2930は二重口縁壺。頸部から口縁部にかけての形状から、いわゆる伊勢型の二重口縁壺と推定できるが、胎土は角閃石を多く含み、暗褐色を呈する生駒山西麓産の胎土に近似する。2931・2932は甕。2932は口縁端部の肥厚は顕著に認められない。2933～2941・2943～2948は高杯。有段高杯(2933～2937・2939・2940・2945)と椀形高杯(2938・2941・2943)の2者がある。2942は椀形の杯。甕と有段高杯の示す様相から、米田編年布留式Ⅲ～Ⅴ期の所産か。

以上の出土遺物から、本溝の帰属時期はやや古相を示す土器を含みつつ、布留式Ⅲ～Ⅳ期を主体とする傾向が認められる。溝の示す方向と包含する遺物から、既刊の成果(大文セ2009)に掲げた1区3009溝と同一の溝である可能性もあるが、詳細は明らかでない。

[33井戸] (図586)

調査区のほぼ中央で検出した素掘りの井戸である。東側は1溝に重複されており、正確な規模は不明だが、長径3.52m、短径2.75m、検出面からの深さ1.6mを測る。埋土は灰色を主体とするやや淘汰の悪いシルトである。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[35井戸] (図586)

調査区の中央やや南寄りで検出した不整形の素掘りの井戸である。南側を9落ち込みによって重複される。規模は径2.4mを測る。掘削限界に達したため、深度は不明である。埋土は灰色を主体とする淘汰の悪いシルトで、側方にはベース土のブロックを多く含む。遺物は出土しておらず、時期は不明。

[12土坑] (図587)

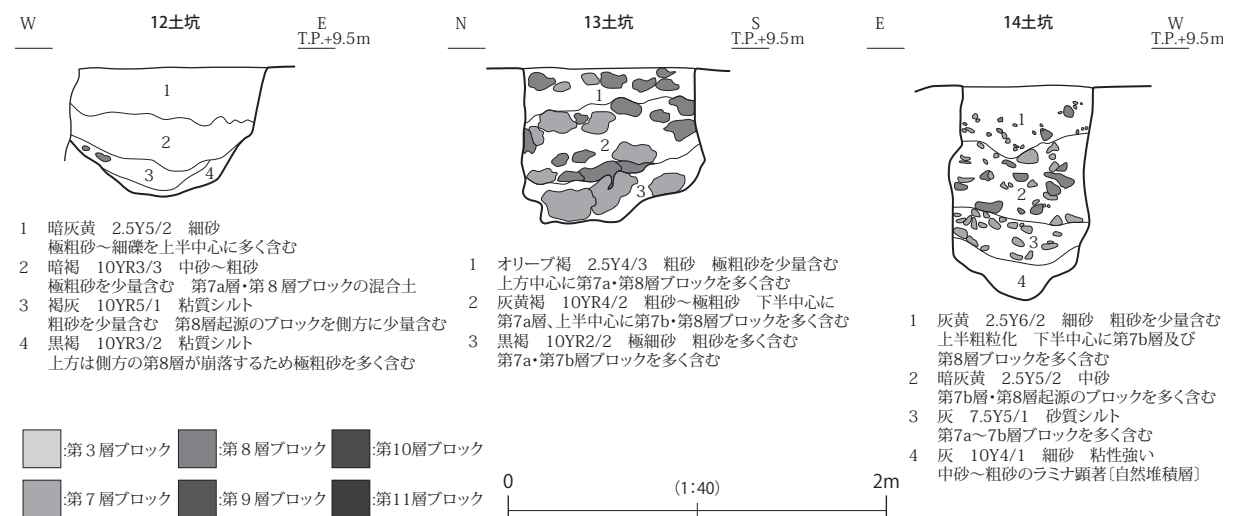


図587 3区 第1面 各遺構 断面図(2)

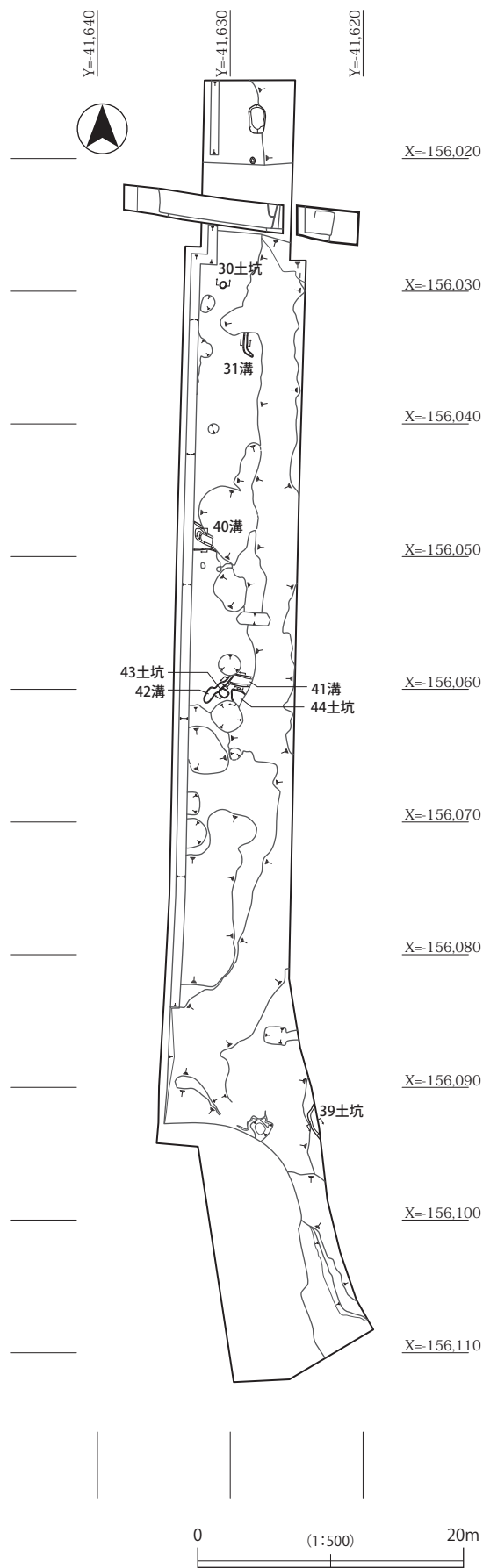


図588 3区 第2面 平面図

調査区の北側西端で検出した楕円形の土坑である。西側が側溝に重複したために、全容を欠いてしまった。規模は長径 1.6 m、短径 1 m 以上、検出面からの深さ 0.68 m を測る。埋土は最下層を除き、周辺のベース土を起源とするブロック土によって形成されている。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

〔13土坑〕 (図587)

調査区の北側西端で検出した楕円形の土坑である。12土坑と同様、西側を側溝によって欠いている。規模は長径 1.6 m 以上、短径 0.9 m、検出面からの深さ 0.8 m を測る。埋土は、12土坑同様周辺のベース土を起源とするブロック土によって形成されている。規模・埋土ともに12土坑と近似することから、ほぼ同時期に埋め戻されたものと考えられる。

〔14土坑〕 (図587)

調査区の中央北寄りで検出した円形の土坑である。15溝に重複されていた。規模は径 0.68 m、検出面からの深さ 1.12 m を測る。埋土は、ラミナが顕著に認められる水成層の最下層を除き、周辺のベース土を起源とするブロック土によって形成されている。上述した土坑と比較してブロックの粒径はやや小さい。遺物は出土しておらず、帰属時期は不明。

3. 第2面(第7 e層下面) (図588 図版176)

第7 e層の土壌層を除去した遺構面を第2面として調査した。なお、実際の調査では、第7 a層と第7 e層の境界でも遺構の検出に努めたが、検出には至らなかったため、本面を第2面とした。

遺構面の標高は第1面同様、相対的に南が高く、北が低い。T.P.+ 9.2~9.1 mを測る。

主な検出遺構としては、溝・土坑がある。遺構の埋土は一部のものを除き、大半が上位に形成されている第7 b層が入り込むものであり、掘形と埋土の境界は漸移的で不鮮明なものが大半を占めていた。このことから、その多くが風倒木痕跡もしくは植物痕跡である可能性を想定できる。

〔31溝〕 (図589)

調査区の北側で検出した南北方向の溝で、南側で短

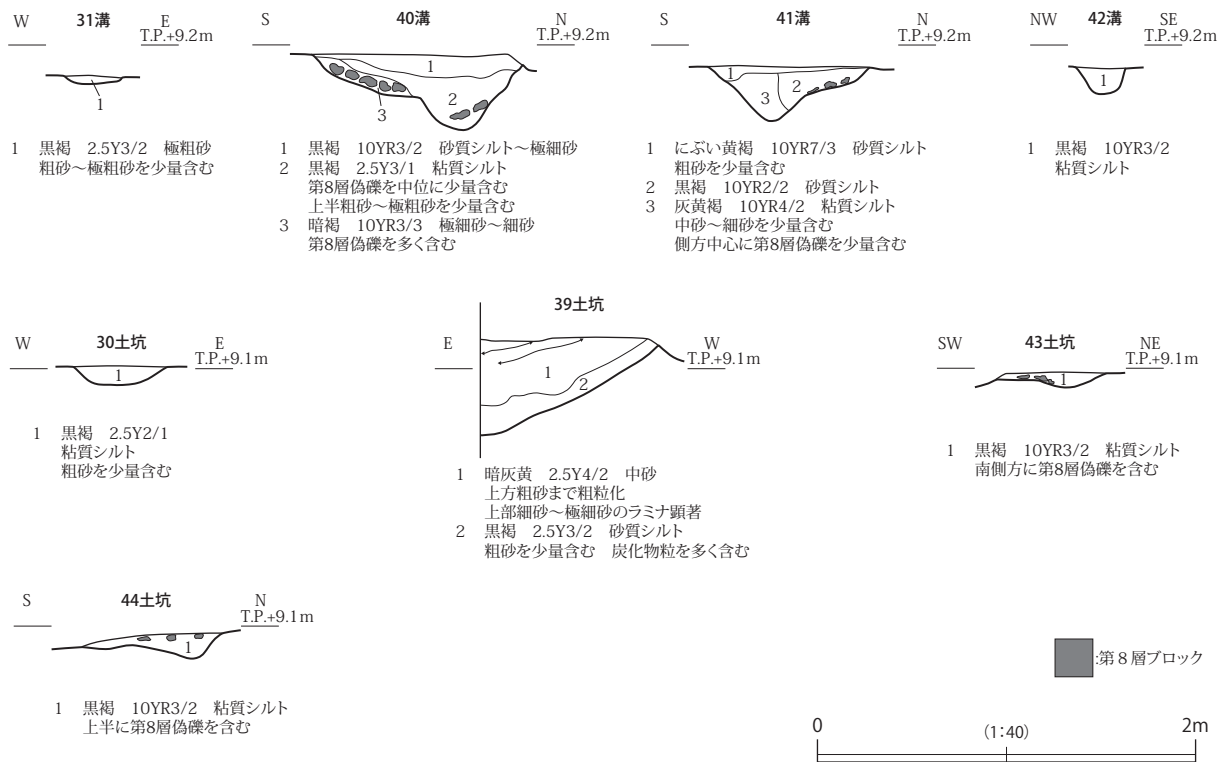


図589 3区 第2面 各遺構 断面図

く東側に曲折する。規模は幅0.28m、検出面からの深さ0.04mを測る。埋土は黒褐色の淘汰の悪い極粗砂で、上位の第7 b層が落ち込んだものである。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[40溝] (図589)

調査区の中央北寄り西側で検出した南東－北西方向の溝である。規模は幅 1.1 m、検出面からの深さ 0.4 mを測る。掘形と埋土の境界は漸移的で、埋土は黒褐色のシルトを主体とする上位の第7 b層が落ち込んだものである。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[41溝] (図589)

調査区の中央で検出した東西方向の溝で、42溝に重複されている。規模は幅 0.8 m、検出面からの深さ 0.3 mを測る。埋土は黒褐色の淘汰の良いシルトで、上位の第7 b層が落ち込んだものと判断できる。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[42溝] (図589)

調査区の中央で検出した溝である。規模は幅0.25～0.7 m、検出面からの深さ0.14mを測る。埋土は黒褐色の淘汰の良い粘質シルトで、上位の第7 b層が落ち込んだものと判断できる。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[30土坑] (図589)

調査区の北側西寄りで検出した円形の土坑である。規模は径0.45m、検出面からの深さ 0.1 mを測る。埋土は淘汰の良い黒褐色のシルトで、上位の第7 b層が落ち込んだものと判断できる。その他の遺構とは異なり、掘形と埋土の境界は鮮明であった。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[39土坑] (図589)

調査区の南東端で検出した土坑である。東半分は調査区外へと至るため、全容は窺い知れない。検出幅は0.25m、検出面からの深さ0.45mを測る。埋土は粗粒の堆積物を主体とする水成層の上層と、炭化

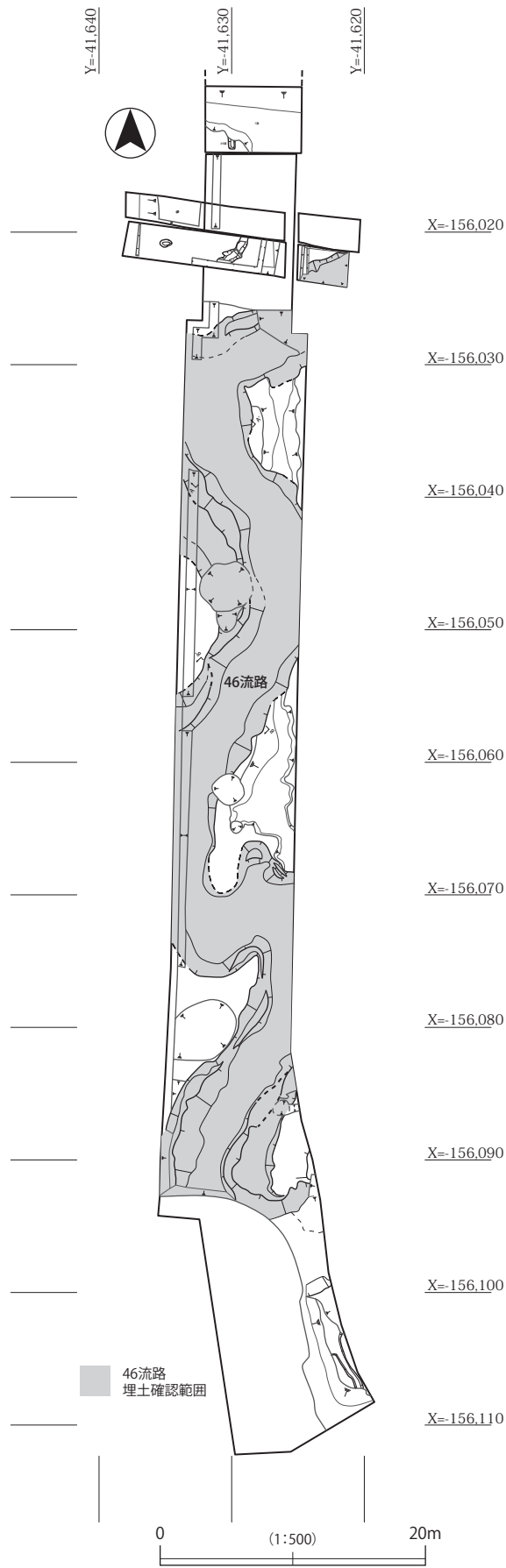


図590 3区 第3面 平面図

物を多く含む、淘汰の良いシルトの下層の2層に分けることができる。その他の遺構とは異なり、掘形と埋土の境界は鮮明である。遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。

〔43土坑〕 (図589)

X=156.020 調査区の中央部で検出した隅円方形の土坑である。規模は一辺0.6m、検出面からの深さ0.08mを測る。埋土は黒褐色を主体とするシルトで、上位の第7b層が落ち込んだものと判断できる。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

〔44土坑〕 (図589)

X=156.040 調査区の中央部で検出した不整形な土坑である。東半分を1溝によって欠いている。径0.7m、検出面からの深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色を主体とするシルトで、上位の第7b層が落ち込んだものと判断できる。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

4. 第3面(第9層上面) (図590 図版177)

第8層とした水成層を除去した遺構面を第3面として調査した。

X=156.070 調査区のほぼ全域を後述する46流路が蛇行しているため、遺構面本来の様相は明らかでない。調査区中央部西側及び北端でわずかに本来の遺構面が残存しており、T.P.+9.1mを測る。

X=156.080 検出した遺構は流路のほかに、調査区の南端で溝を1条検出した。

〔46流路〕 (図591・592 図版177・178・184)

X=156.090 調査区のほぼ全域で検出した。蛇行して北流する流路である。調査原因である埋設管の設置面よりも深度が深く、掘削限界を超えたため、完掘できていない。

X=156.100 規模は先述のように本来の遺構面がほとんど遺存していないため詳細は明らかではないものの、幅6.2~10m、検出面からの深さ1.75m以上を測る。断面形状は、蛇行しているために攻撃面(外側)とその裏面(内側)とで異なっており、攻撃面側は急な傾斜を形成し、内側は緩やかな傾斜を形成する。

X=156.110 流路を充填する水成堆積物は、斜行ラミナが顕著

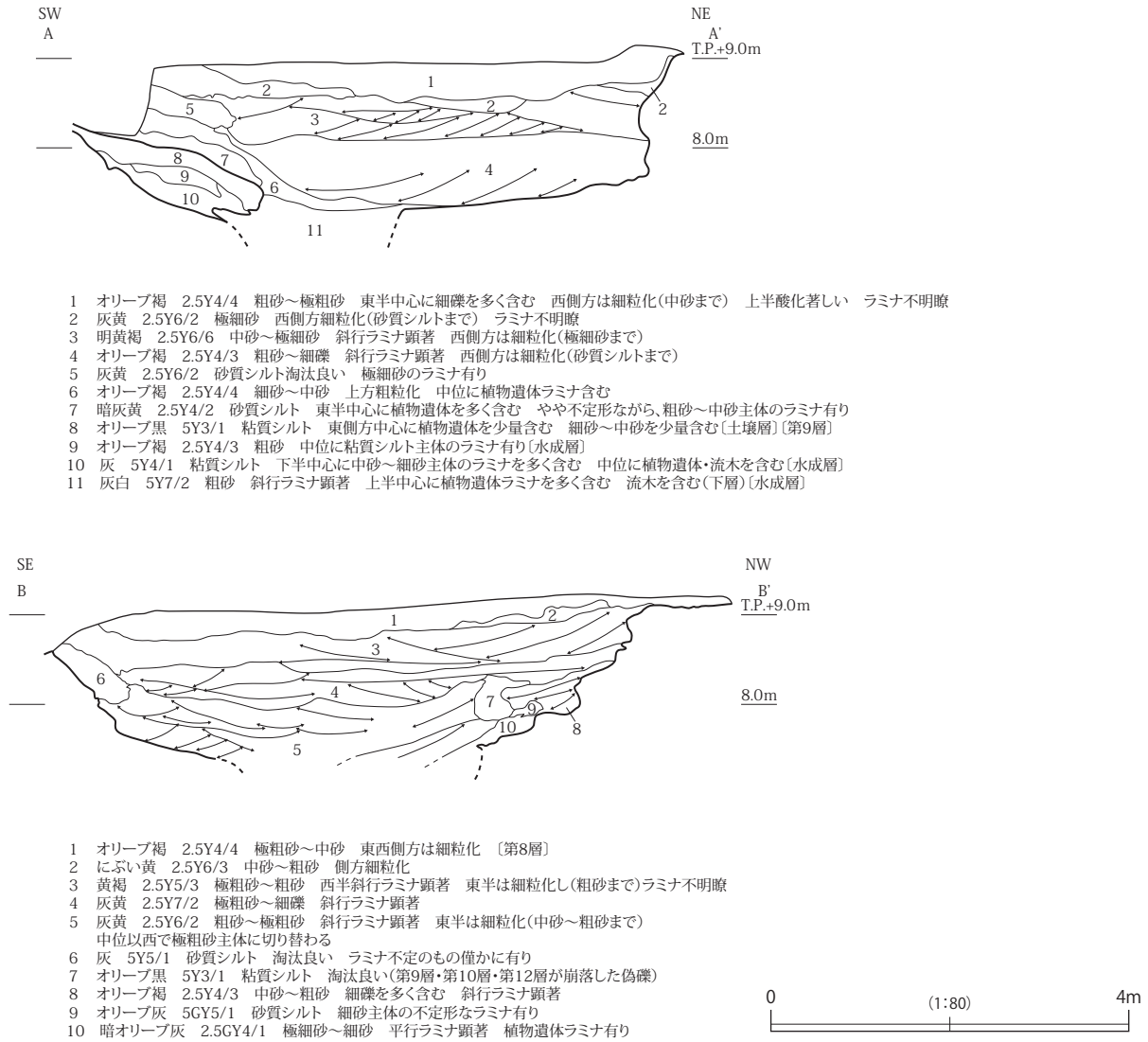


図591 3区 第3面 46流路 断面図

に認められる淘汰の良いものを主体とするが、上方及び側方は部分的に細粒化して淘汰が悪くなり、構造が崩壊している。埋土に明瞭な堆積環境の変化は認められず、比較的短期間で埋没したことが想定できる。掘形付近では側方のベース土を起源とする崩落土が多く認められた。

遺物は、調査区の南端の埋土最下部で縄文土器を2点(2949・2950)検出した。土器はいずれも摩滅が少なく、炭化物の付着が顕著に認められる。既往の調査(大文セ2009)の3128流路内から出土した縄文土器も同様の特徴を示している。

2949・2950は深鉢である。2949は小型の波状口縁深鉢で、頸胴部にくびれを有し、口縁部は弱く外反する。胴部上半及び、口縁部に沈線を施す。北白川上層3式に位置づけられようか。

なお、埋土の下部では、木質遺物が複数地点で認められたが、いずれも加工痕は認められなかった。流木と考えられる。

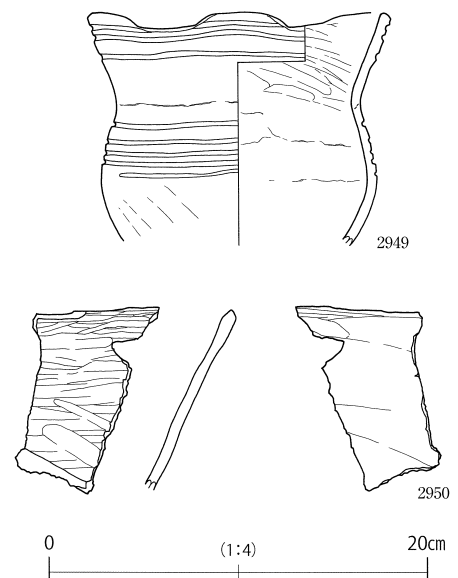


図592 3区 第3面 46流路 出土遺物

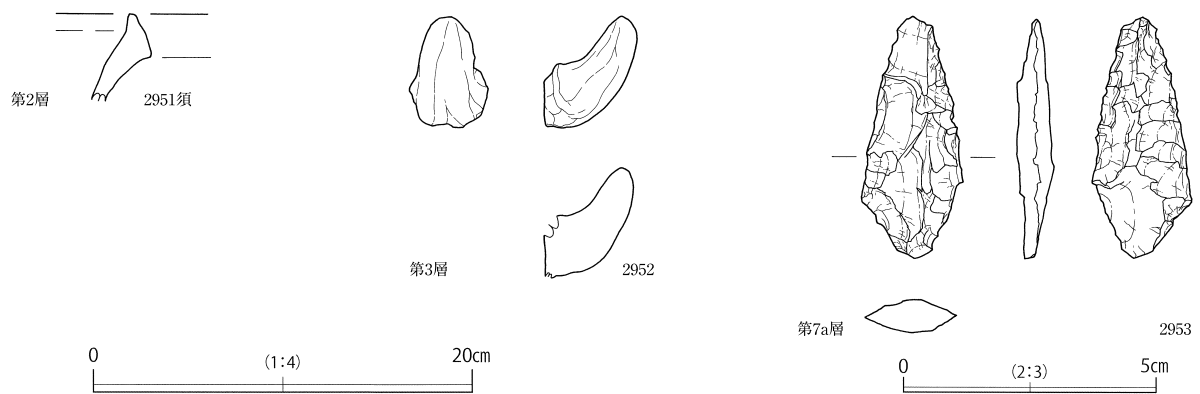


図593 3区 第3面 各層 出土遺物

〔各地層出土遺物〕 (図593 図版184)

本調査区では一部の遺構を除いて、総じて遺物が少なく、且つ細片ばかりであったため、時期比定に困難なものが多かった。各地層に包含される遺物も概ねこの傾向を踏襲しており、細片を中心とする少数の遺物を確認したに過ぎない。

2951は第2層から出土した東播系の摺鉢で、口縁部の形状から14世紀前半代の所産と考えられる。2952は第3層から出土した把手。2953は第7 a層中から出土したサヌカイト製石鏃である。剥片素材を用いており、調整剥離は全面には及ばない。

第3節 池内・三宅西09-1調査の成果

09-1調査は池内遺跡と三宅西遺跡の境界部分に位置しており、既存の河川を挟んで両側の護岸壁撤去部分及びコンクリートボックス据え付け部分を調査範囲として実施したものである。

1. 基本層序(図594 図版179・180)

08-1調査は既刊の三宅西遺跡(大文セ2009)の1区の西に位置する調査区(図576)で、本体工事の工程に合わせて調査区を2区に分割して調査を実施した。調査時の呼称に倣い、以後、池内遺跡側を1区、三宅西遺跡側を2区として呼称する。

現地表面の標高はT.P.+10mを測る。調査は現代耕作土層である第1層までをバックホーによる機械掘削の対象とし、それ以下の地層については、人力によって1層ずつこれを除去し、遺構面の検出に努めた。遺構面については、これまでに調査区周辺で行われている既往の調査成果に従い、第1面(第3層下面〔第7 a層上面〕)、第2面(第7 a層下面〔第7 e層上面〕)、第3面(第7 e層下面〔第8層上面〕)、第4面(第9層上面〔第8層下面〕)の合計4面の遺構面について平面調査を実施した。

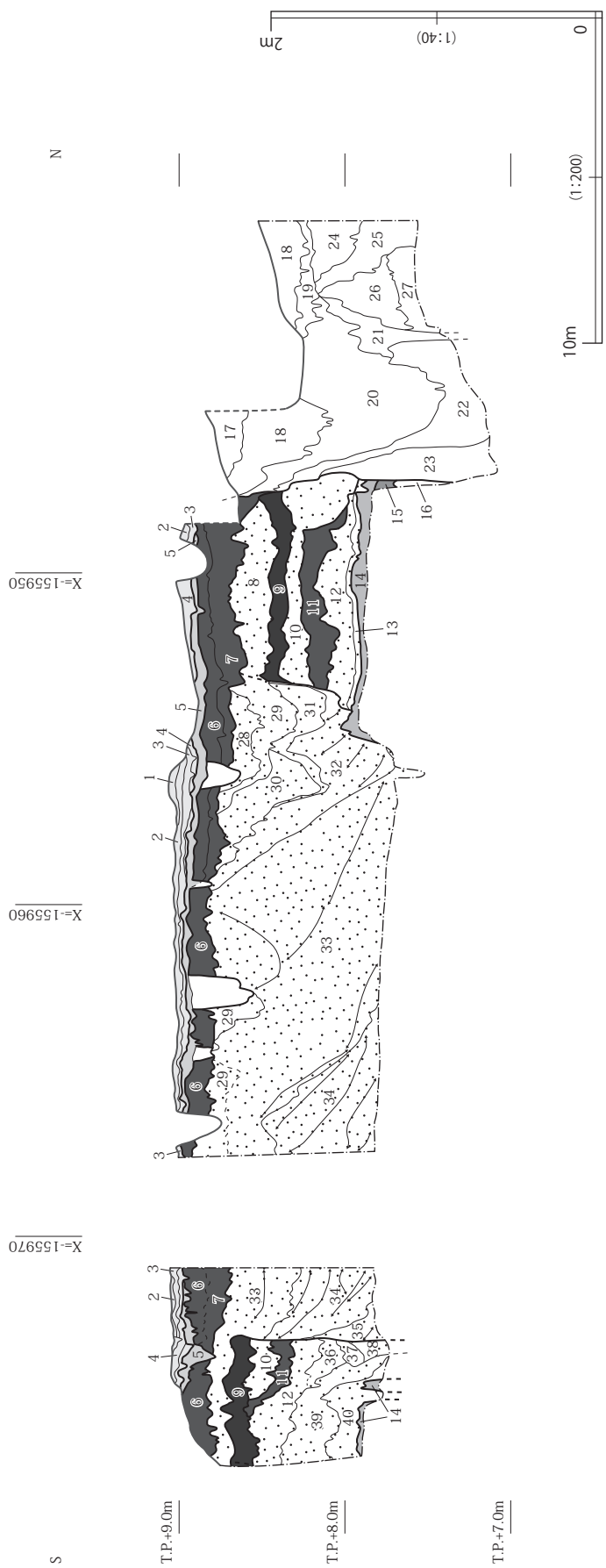
以下に09-1調査における堆積地層の概要を述べる。地層の確認については、1区の西壁面を用いて記録を行い、図594にこれを掲げた。なお、層準の呼称については、前節と同様、既刊の調査成果に準じている。このため、本調査区では必ずしもすべての地層が確認できるわけではない点を断っておく。なお、各地層の形成時期についても、概ねこの成果に準ずるものであったため、これを援用している。

〔第1層〕

現代耕作土である。図示は成し得なかったが、層厚は約0.15mを測る。

〔第2層〕

近世の耕作土層である。黄褐色系の中砂～粗砂を主体とし、淘汰は悪い。層厚は0.15mを測る。



- 1 灰黄 2.5Y7/2 極細砂 粗砂を少量含む (作土層) [第2a層]
 2 明黄褐 10YR6/6 細砂 粗砂を多く含む マンガン多く沈着 (作土層) [第2b層]
 3 灰白 2.5Y8/1 極細砂~細砂 粗砂を多く含む (作土層) [第2c層]
 4 灰黄褐 10YR6/2 砂質シルト 中砂を少量含む (作土層) [第2d層]
 5 暗灰黄 2.5Y5/2 極細砂 マンガン多く沈着 (作土層) [第3層]
 6 暗褐 10YR3/3 細砂~極細砂 極粗砂を多く含む マンガン多く沈着 (土壌層) [第7a層]
 7 黄褐 2.5Y5/3 砂質シルト 北半は下位層の影響により極粗砂を多く含む (土壌層) [第7e層]
 8 暗灰黄 2.5Y6/3 中砂 上方細粒化(~砂質シルトまで)するが極粗砂を多く含む (水成層) [第8層]
 9 暗灰黄 2.5Y6/2 細砂~極細砂 やや粘性強い 弱く暗色化 (土壌層) [第9a層]
 10 灰黄 2.5Y6/2 砂質シルト 海法良い 酸化著しい (水成層) [第9b層]
 11 黄灰 2.5Y6/1 粘質シルト 海法良い マンガン少量沈着 酸化著しい (土壌層) [第9c層]
 12 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂~極粗砂 平行ラミナ有 (水成層) [第10層]
 13 暗灰黄 2.5Y4/2 粘質シルト 植物遺体を多く含む 海法良い (水成層) [第10層]
 14 黒 10YR2/1 粘質シルト 粗砂~極粗砂を多く含む (土壌層) [第11a層]
 15 褐灰 10YR4/1 粗砂 極粗砂を多く含む (土壌層) [第12a層]
 16 緑灰 7.5GY5/1 極細砂 粗砂を少量含む (水成層) [第12b層]
 17 にふい黄 2.5Y6/3 細砂 極粗砂を少量含む (作土)
 18 灰黄 2.5Y6/2 細砂~中砂 粗砂を多く含む (作土)
 19 灰黄 2.5Y7/2 中砂~粗砂 極粗砂を少量含む (作土)
 20 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂~粗砂 極粗砂~細砂を多く含む 第13層以下の偽礫を多く含む
- 21 灰 10Y5/1 砂質シルト 極粗砂~細砂を多く含む
 22 灰 5Y5/1 砂質シルト 粗砂~極粗砂を多く含む 淘汰悪い
 23 黄褐 2.5Y5/3 粗砂 第13層の偽礫を多く含む
 24 灰黄 2.5Y7/2 中砂 粗砂を多く含む
 25 灰オリーブ 5Y6/2 中砂 第10層の偽礫を少量含む
 26 にふい黄 2.5Y6/3 粗砂~極粗砂 平行ラミナ顯著 (百済土器 流路埋土?)
 27 灰 10Y4/1 砂質シルト 第13層(14)の偽礫を多く含む(百済土器 流路埋土?)
 28 灰黄 2.5Y6/2 粗砂~極粗砂 淘汰悪い (水成層) (27流路埋土)
 29 黄灰 2.5Y6/1 砂質シルト 粗砂を少量含む 下部土壌化か進行 暗色化(暗灰黄 2.5Y4/2) (土壌~水成層) (27流路埋土)
 30 黄灰 2.5Y6/1 砂質シルト 粗砂を多く含む 南半極粗砂~粗砂を多く含む 斜行ラミナ有 (水成層) (27流路埋土)
 31 灰黄 2.5Y7/2 極細砂 細砂を多く含む 上方細粒化(~砂質シルトまで) 生草多数 (水成層) (27流路埋土)
 32 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂~極粗砂 斜行ラミナ顯著 南側方中砂まで細粒化(ラミナ不明瞭に交差) (水成層) (27流路埋土)
 33 にふい黄 2.5Y6/4 極粗砂~粗砂 細砂を少量含む 斜行ラミナ顯著 (水成層) (27流路埋土)
 34 灰黄 2.5Y7/3 中砂 粗砂~極粗砂主体の斜行ラミナ有 第10層・第13層の偽礫を多く含む (水成層) (27流路埋土)
 35 灰黄 2.5Y6/2 中砂 下部粗砂~極粗砂 上方細粒化 斜行ラミナ顯著
 36 黄褐 2.5Y5/3 砂質シルト 中砂を多く含む
 37 暗灰黄 2.5Y6/2 中砂~細砂
 38 暗灰黄 2.5Y5/2 砂質シルト 中砂~粗砂を多く含む
 39 灰黄 2.5Y6/2 砂質シルト 中砂~粗砂を多く含む
 40 黄褐 2.5Y5/3 粗砂 極粗砂を多く含む

図594 西壁断面図

〔第3層〕

中世～近世の耕作土層である。淘汰の良い暗灰黄色の極細砂で、層厚0.05mを測る。

〔第4層〕

周辺の成果から、中世の耕作土層と位置づけられるが、本調査区では確認できなかった。

〔第5層〕

周辺の成果から、中世の水成層と位置づけられるが、本調査区では確認できなかった。

〔第6層〕

周辺の成果から、平安時代の水成層と位置づけられるが、本調査区では確認できなかった。

〔第7層〕

第7 a層と第7 e層の2層に大別できる。

第7 a層は弥生時代後期～平安時代にかけて形成された土壌層である。暗褐色の極細砂を主体とし、淘汰は悪い。層厚0.05～0.15mを測る。

第7 e層は弥生時代前期～後期にかけて形成された土壌層である。第8層を母材とするため、地点によって粒径は異なるが、概ね黄灰色の砂質シルトを主体とする。層厚0.05～0.15mを測る。

〔第8層〕

縄文時代後期以後に堆積した水成層である。後述する39流路埋土も本層と位置づけることができる。層厚0.2 mを測る。

〔第9層〕

縄文時代後期に形成された土壌層である。本調査区では、間に第9 b層とした水成層を挟在させる。暗灰黄色の砂質シルトを主体とし、淘汰は良い。層厚0.15mを測る。

〔第10層〕

縄文時代中期に堆積した水成層である。暗灰黄色の砂質シルトの水成層で、層厚約0.2 mを測る。

〔第11層〕

第11層は縄文時代前期以後の土壌層である。淘汰の良い黒色の粘質シルトで、層厚約0.1 mを測る。

〔第12層〕

第12 a層と第12 b層の2層に大別できる。

第12 a層は土壌層である。後期旧石器時代～縄文時代草創期に形成されたと考えられる。層厚0.15mを測る。

第12 b層は水成層である。後期旧石器時代と考えられる。

2. 第1面(第3層下面) (図595 図版179・181)

第3層の耕作土層を除去した遺構面を第1面として調査した。遺構面の標高は概ね平坦ではあるが、わずかに北へ傾斜を有する。なお、1区の北端は今井戸川の護岸工事による攪乱が及んでいたため、本面に帰属する遺構は検出できていない。主な検出遺構としては、水路・溝・井戸・土坑・小穴がある。

〔1溝〕 (図596)

1区の北側で検出した南東―北西方向の溝である。規模は幅0.5 m、検出面からの深さ0.15mを測る。遺物は土師器が出土したが、細片であるため、詳細な時期は不明である。

〔13溝〕 (図596)

1区南側で検出した南東―北西方向の溝である。規模は0.3～0.6 m、検出面からの深さ0.08mを測

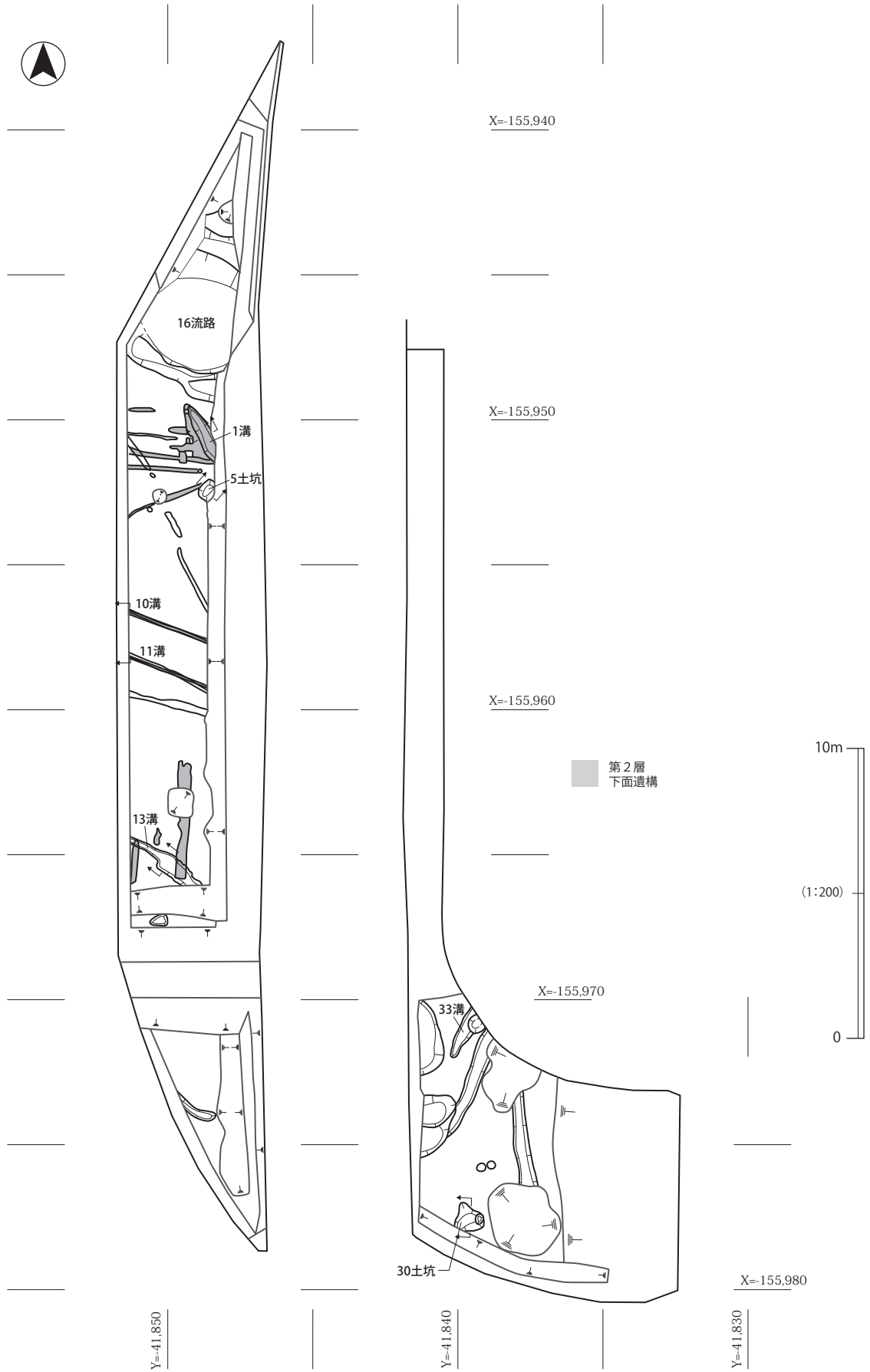


图595 第1面 平面图

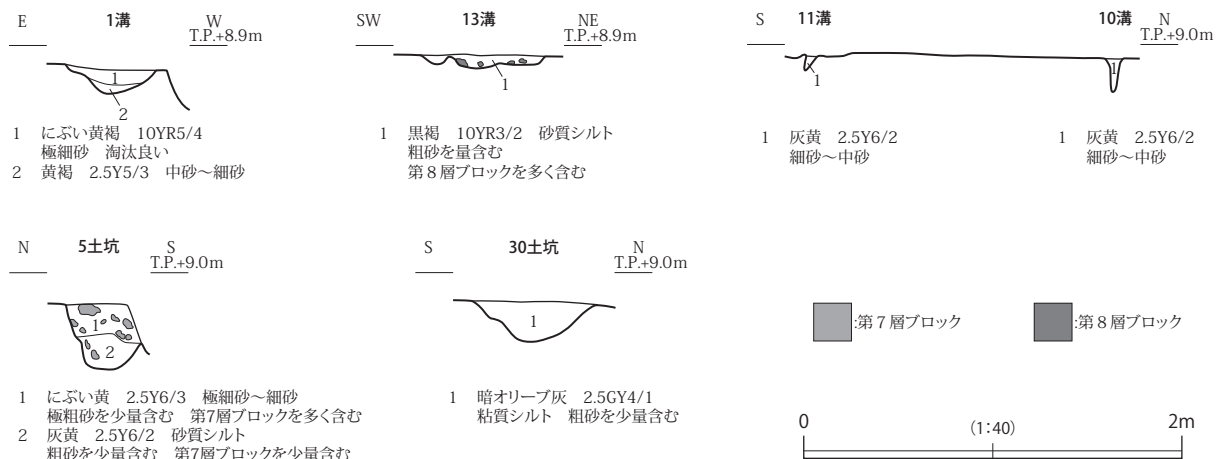


図596 第1面 各遺構 断面図

る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[10・11溝] (図596)

1区の中央部で検出した南東－北西方向の溝である。規模は幅0.05m、検出面からの深度0.08～0.18mを測る。埋土とともに灰黄色の細砂～中砂の均質なものである。溝間距離は1.6mを測り、等間隔で同方向へ延びることや埋土を同じくすることから、轍跡と想定できる。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[33溝] (図601)

2区の北側で検出した南西－北東方向の溝である。幅0.1m、深さ0.05mを測る。

溝底から須恵器礎(2957)が1点出土した。

[5土坑] (図596)

1区の中央北寄りで検出した推定楕円形の土坑である。東側を護岸壁の攪乱によって欠くため、全容は明らかでない。規模は長径0.7m、短径0.4m、検出面からの深さ0.34mを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[30土坑] (図596)

2区の南端で検出した不定形な土坑である。南端は側溝内に位置するため、全容は窺い知れない。規模は径0.65m、検出面からの深さ0.2mを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[16流路] (図594・597)

1区の北端で検出した流路状の落ち込みである。前項で述べた攪乱土を除去した段階で、埋土の上部が露出しており、埋土の様相から本面に帰属するものと判断して調査を行った。調査区の形状に規制されており、全容を窺い知ることができない。流路と呼称しているが、実際は部分的に掘り残された箇所を持つ大きな落ち込みの可能性もある。

遺物は、近世の陶磁器・瓦の細片を主として少量が出土した。2956は陶器碗である。外面は露胎する。

3. 第2面(第7a層下面) (図597 図版179・181)

第7a層の土壤層を除去した遺構面を第2面として調査した。遺構面の標高は相対的に南が高く、北が低い。主な検出遺構としては、溝・土坑がある。埋土の様相から大半が古墳時代に帰属する。

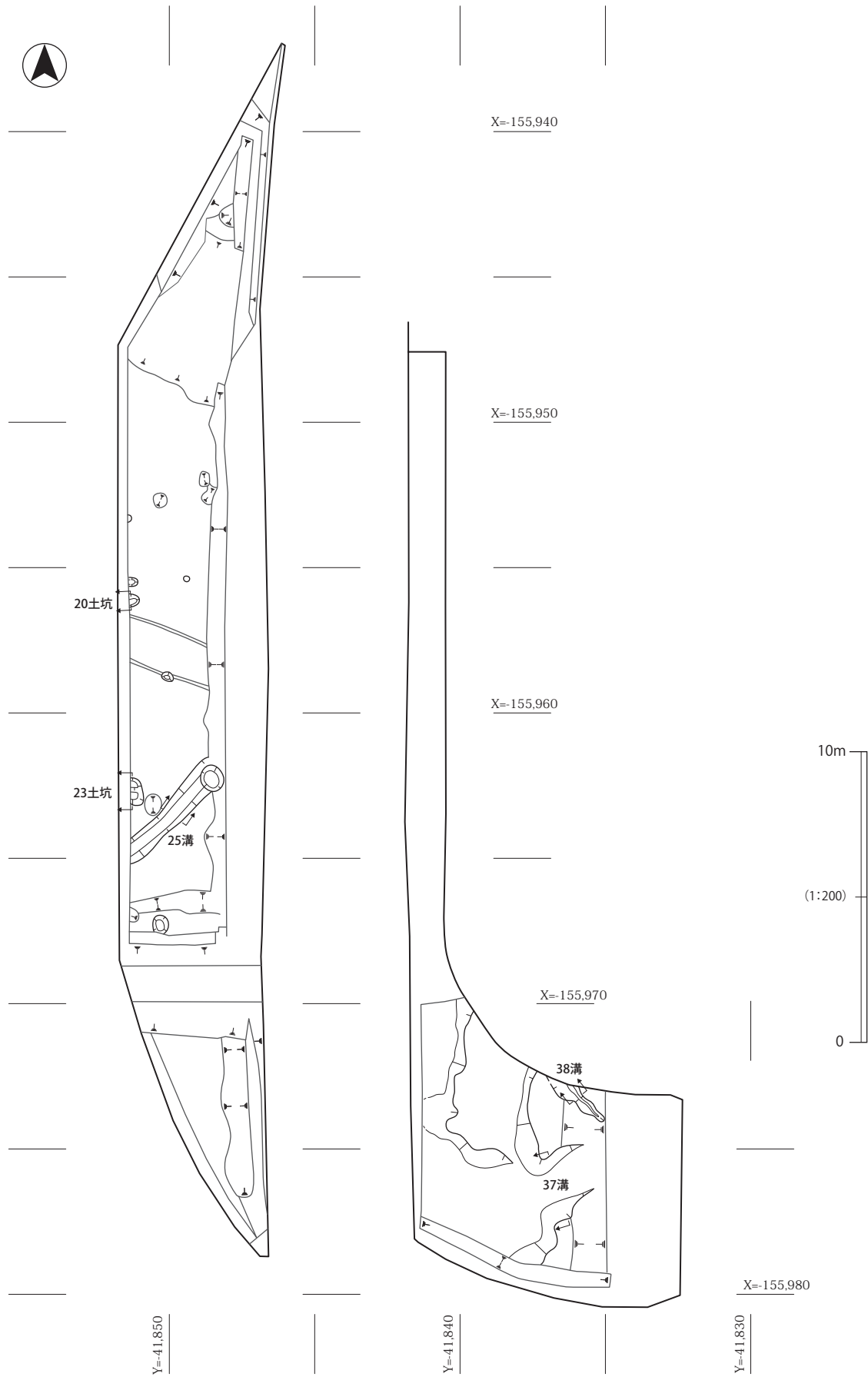


图597 第2面 平面图

[25溝] (図598)

1 区の南側で検出した南西—北東方向の溝である。幅0.85m、深さ0.18mを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[37溝] (図598・601)

2 区のほぼ全域を占める幅広の溝である。幅 1.8~4.4 m、深さ0.35mを測る。埋土はシルトを主体とし、上層は暗色味が強くやや粗粒化し、下層はやや細粒のもので構成される。場所によって掘形の形状が異なり、幅広となる西側及び北側では、緩やかな二段掘りを成す。

遺物は土師器を中心に少量が出土した。2958・2959は鉢、2960~2962は高杯である。いずれも古墳時代前期の所産。

[38溝] (図598)

2 区の北東端で検出した南東—北西方向の溝である。幅 0.3 m、0.2 mを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[20土坑] (図598)

1 区の中央西端で検出した、推定円形の土坑である。西半は調査区外へ延びており、全容は窺い知れない。径 0.8 m、検出面からの深さ0.22mを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

[23土坑] (図598)

1 区の中央やや南より西端で検出した推定楕円形のものである。西半は調査区外へ延びるため、全容は伺い知れない。径0.95m、検出面からの深さ0.52mを測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

4. 第3面(第9層上面) (図599 図版180・181)

第7 a層の土壤層を除去した遺構面を第2面として調査した。遺構面の標高は第1面同様、相対的に南が高く、北が低い。検出し得た遺構は少ない。主な検出遺構としては、流路がある。

[27・39流路] (図600 図版180)

1・2区にまたがる南東—北西方向の流路である。規模は幅19.2m、0.8 m以上を測る。埋土は淘汰の良い粗粒の堆積物で、斜行ラミナが顕著である。周辺の成果から縄文時代後期の流路と想定できる。

遺物は、甕ないしは鉢の底部片(2963)が出土しているが、細片のため、詳細は不明である。

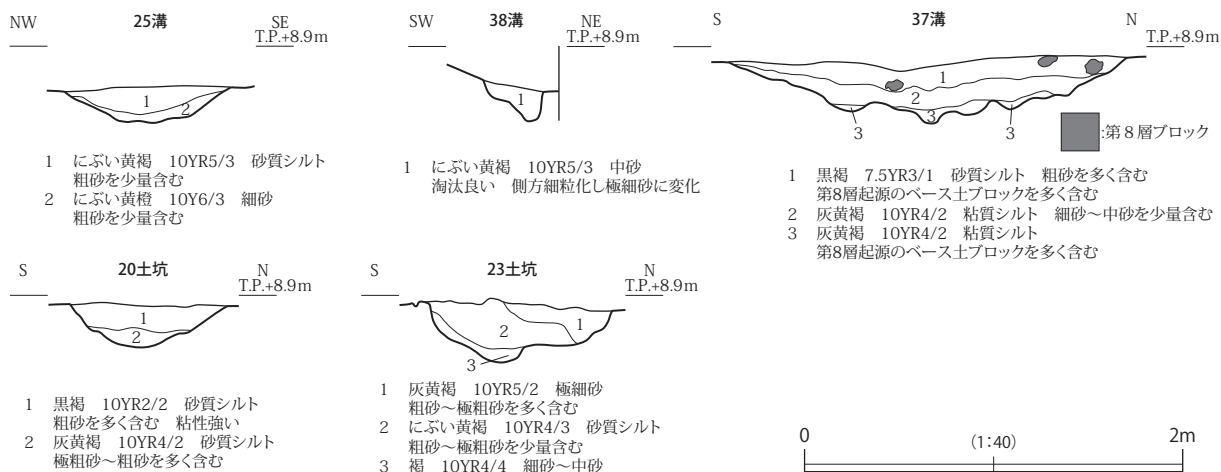


図598 第2面 各遺構 断面図

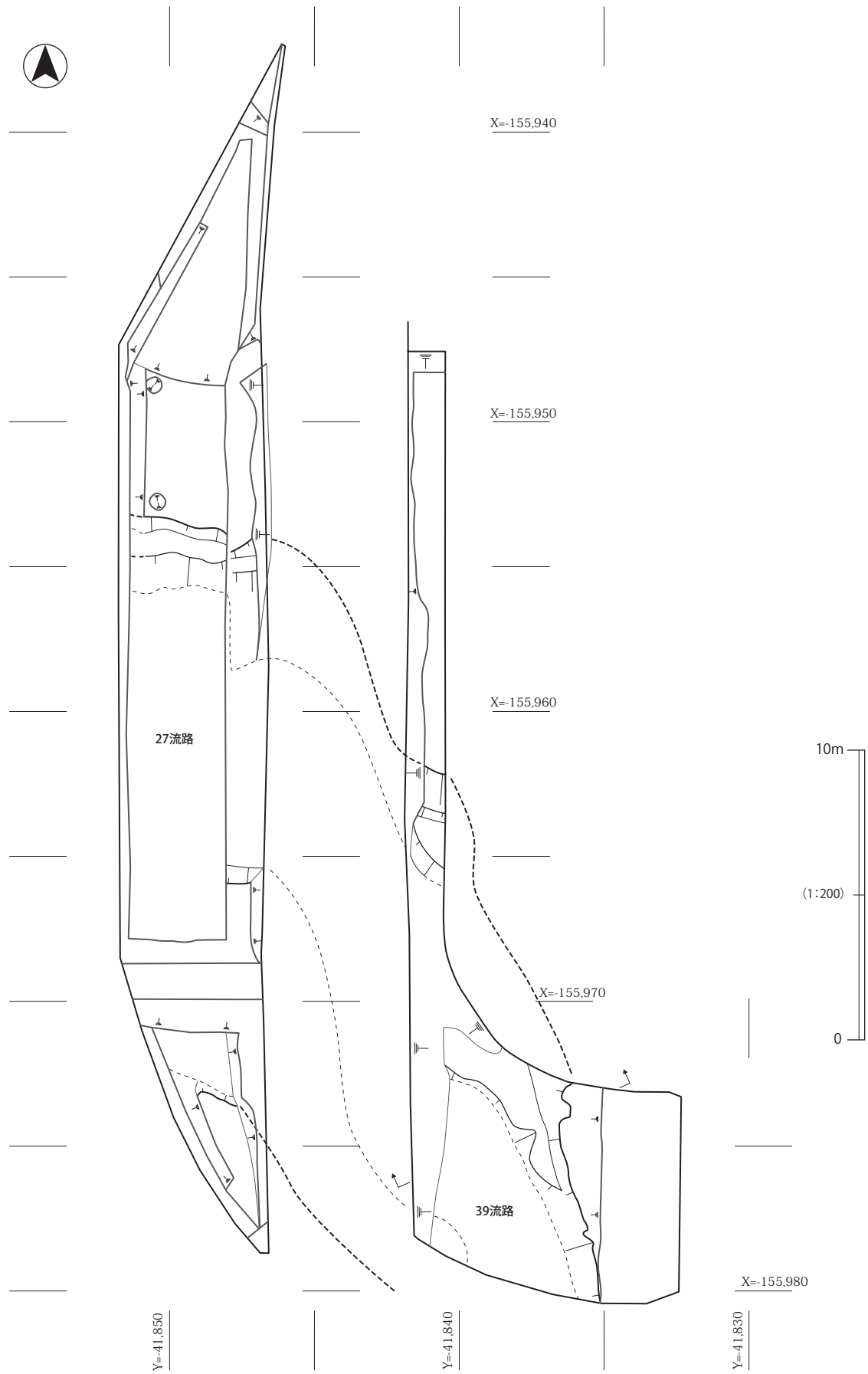


图599 第3面 平面图

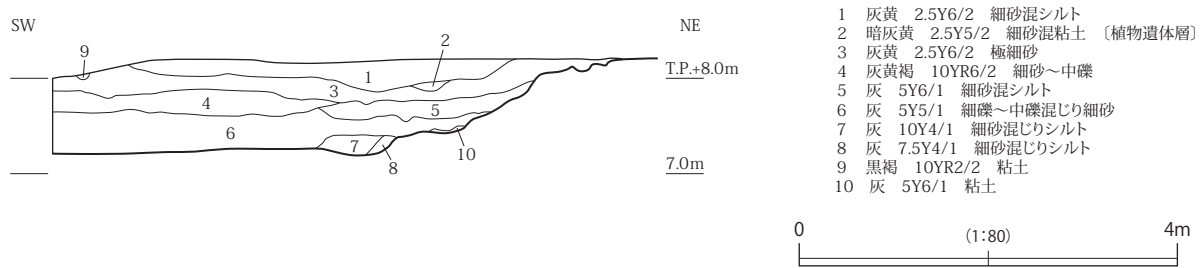


図600 第3面 39流路 断面図

〔第2層出土遺物〕 (図601)

地層から出土した遺物は少なく、わずかに第2層から2点を図示し得たに過ぎない。2954は龍泉窯系青磁碗 I 類椀である。外面に片彫り蓮弁文を施す。13世紀代の所産。2955は土師器高杯脚部。

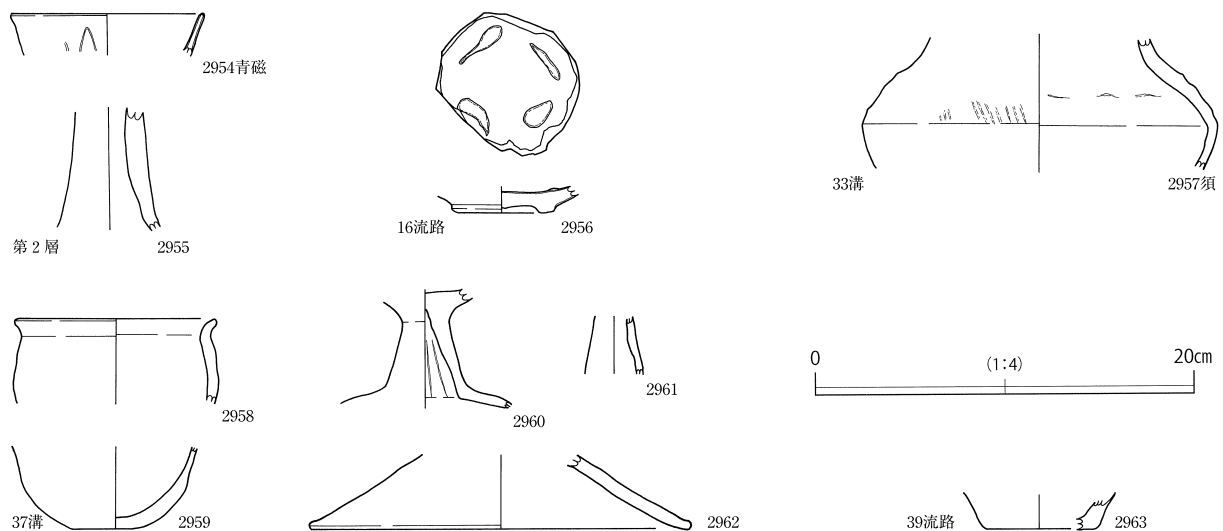


図601 各層・遺構 出土遺物

第4節 総括

今回の調査は、既存河川の付け替えという性格上、細長い調査区の連続であったことから、遺構の全容を把握することが困難な場合が多かった。そうした中で、08-1 調査では、縄文後期中葉の土器を包含する流路をほぼ全域にわたって検出し得たほか、古墳時代前期の土器を多く含む溝を検出するなど、一定の成果を得ることができた。本調査区は、遺跡範囲の南端に相当するが、遺構・遺物の分布が引き続いて顕著に認められることを確認したことは、大きな成果と言える。

09-1 調査では、遺物の出土が少なく、明確な帰属時期を明らかにすることができなかった遺構が多い。しかしながら近隣の成果に基づき、埋土の様相から中世前期・古墳時代前期～中期・縄文時代後期～晩期に帰属すると想定できる遺構を確認することができた。なお、三宅西遺跡で検出した百濟系の陶質土器を含む南東-北西方向の直線的な溝(1区3009溝)については、本調査の北端で検出できると予想していたが、確認できなかった。周辺の調査の蓄積に委ねたい。(正岡)

〔参考文献〕

(財)大阪府文化財センター2009『三宅西遺跡』

報告書抄録

ふりがな	いけうちいせき						
書名	池内遺跡						
副書名	都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第198集						
編著者名	森屋美佐子 入江正則 平田洋司 新海正博 正岡大実 永田由香						
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791						
発行年月日	2010年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
いけうちいせき 池内遺跡	おおさかふまつばらし 大阪府松原市 あまみきた 天美北1・6 あまみひがし 天美東3・5	27217	18	北緯 34° 59' 30" 東経 135° 53' 90"	(05-1調査) 2005.09.26～2007.01.09	11,000㎡	都市計画道路 大和川線外建設 (阪神高速道路 大和川線)
					(05-2調査) 2005.10.05～2007.02.20	12,500㎡	
					(07-1調査) 2007.07.03～2007.10.14	792㎡	
					(08-1調査) 2008.05.08～2008.09.22	1,518㎡	
					(09-1調査) 2009.05.19～2009.06.09	195㎡	
みやけにしいせき 三宅西遺跡	おおさかふまつばらし 大阪府松原市 みやけにし 三宅西5～7 みやけなか 三宅中7	27217	26	北緯 34° 59' 26" 東経 135° 54' 62"	(08-1調査) 2009.03.18～2009.05.19	986㎡	
					(09-1調査) 2009.06.28～2009.07.07	75㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
池内遺跡	集落・ 生産	中世～近世	水路・水田畦畔・溝・耕作溝・土坑・小穴		瓦器・瓦質土器・土師器・陶磁器	地割に則った耕作溝を全域で確認。水田畦畔を検出。	
		平安時代後期	掘立柱建物・柱列・溝・耕作溝・土坑・小穴		瓦器・土師器・須恵器・陶磁器	調査区の中央部分で居住域を検出。	
		平安時代前期	掘立柱建物・柱列・土坑墓・溝・区画溝・耕作溝・井戸・土坑・小穴・落ち込み		土師器・須恵器・墨書土器・黒色土器・白色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯青磁・白磁・土製品・木製品・銭貨・鈿帯	東西2つの地点で掘立柱建物からなる居住域を確認。人骨1体を埋葬した土坑墓を検出。	
		弥生時代後期末～古墳時代前期初頭	方形周溝墓・溝・土坑・小穴		弥生土器・土師器	方形周溝墓を1基検出。	
		弥生時代前期中葉	平地建物・掘立柱建物・溝・土坑・水田畦畔・流路		弥生土器・石製品	2重の溝に囲まれた領域内から平地建物・掘立柱建物からなる居住域を検出。居住域の成立する以前に洪水砂によって埋没した小区画水田を検出。	
縄文時代	落ち込み・流路		縄文土器				
三宅西遺跡	集落・ 生産	中世～近世	水路・溝・耕作溝・土坑・落ち込み		瓦器・瓦質土器・土師器・陶磁器	坪境の水路に接続する落ち込みを検出。	
		古墳時代中期	溝		土師器・須恵器		
		弥生～古墳時代	溝・土坑・小穴・落ち込み		弥生土器・		
		縄文時代後期	流路		縄文土器	縄文時代後期中葉の土器が出土。	
要約	<p>池内遺跡では2005年から実施した発掘調査で、縄文時代～中世にかけて連綿と続く遺構面を検出した。中でも、平安時代後期の集落や弥生時代前期中葉の集落と水田域を検出したことは、大きな成果である。</p> <p>平安時代後期の集落は、大きく2地点で検出しており、そのうち西側の居住域は4分の3町四方で居住域を囲む区画溝を備えていた。居住域は掘立柱建物群から構成されており、総計60棟以上の大規模なものであることも判明した。人骨を埋葬した土坑墓も検出している。越州窯青磁・国産陶器や白色土器などの希少遺物が出土しているほか、硯・墨書土器・鈿帯など、居住域を形成した集団の性格を検討する上で、重要な資料が得られている。</p> <p>弥生時代前期中葉の集落は水成堆積物の上に形成されており、2重の併走する溝に囲まれた地点から、平地建物と掘立柱建物からなる居住域を確認したほか、土器の破片や焼土塊を含む多数の落ち込み状の土坑を検出した。加えて、水成堆積物を除去した下位の遺構面からは小区画水田を確認しており、前期中葉の居住域より古相を示す水田として注目できる。</p> <p>調査時には、古環境の復元に供するべきデータも蓄積することができ、河内平野南部における遺跡の形成過程を考える上で、重要な資料を得ることができた。</p>						

(財)大阪府文化財センター発掘調査報告書 第198集

池 内 遺 跡

(第2分冊)

都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2010年 3月31日発行

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号